まんじ

No.119

2011.2.1

まんじ第百十九号　目次

古い物・遠い夢　茶会の風景……忠内正之…4
誠忠の茶園（七）……太田精一…15
関東管領始末記②　傀儡将軍の貴公子たち……千坂精一…31
走る不動産（最終回）……三戸岡道夫…40
化粧のルーツを訪ねて（一五）……鈴木守…45
河童の初恋（三）……鍋屋次郎…56
短歌　三十首……曽根竣作…66
河野裕子の日常性を惜む……曽根竣作…70
短歌　行雲流水（三十）……石黒修身…72
短歌……金澤智佐美…77
俳句　酷暑……勝山道子…79
漢詩　潮騒録（六四）《漢詩の流れ53、清その二》呉偉業……鯨游海…83
二八に帰るすべもなし（四）……伊治哲…88
こころみ学園……吉田忠雄…94
八つ当たり語録（二）……新井宏…96
（司馬雑感二十六）司馬遼太郎の描いた「長州」……山田嘉久…104
目耕録（その三）……山本鎭雄…111
陰翳の美学（その五）……外山知…119
口紅（その一）……山本勉…138
透明な時間（四）……宅見勝弘…152
還暦からの考古学（二十三）……中山喬央…156
鏡（その15）……中山喬央…166
追伸　―サウダージーより―　その三……松下壽男…176
日本近代文学点描　その四……松下壽男…177
編集後記……編集子…181
表紙……田寺怜葦

古い物・遠い夢

忠内正之

茶会の風景

はじめに

茶会とは何ぞや？故事来歴を辿って理屈を求めていくと途方もない難題になりかねない。そこで極めて単純に「茶会とは茶と会席が伴ったもの」であると割り切りたい。

仕来りは出来るだけ守らねばならないが、亭主が大切にするおもてなしの精神を中心にして、一座建立、和やかで楽しい集まりにすることが私の茶会の趣旨である。

省みると平成十九年秋に結婚五十年と私の喜寿を記念しての「金風茶会」を夫婦共同で開いた。時の経つのは早いものであれからもう三年になる。

世の中の移り変りは予想以上に激しいものがある。交友関係も疎遠になりつつある。かく申す私共の存在も今日あって明日は不確かな儚いものに過ぎない。

なるべく早い時期にもう一度妻と共同で茶会を開きたい。そして残る想い出を更に豊かにしておきたい。こんな気持に駆られて茶会を開くことに定めた。

平成二十二年の今年、私は馬齢を重ねて八十才になる。午歳生れなのでまさに馬齢である。傘寿という記念の年になっているが現在の長寿の世界では珍らしくない。とは言え元気でいられるのは有難い。妻も明年正月には喜寿を迎える。このあたりが大きな節目である。妻と二人での茶会はぼつぼつ納め時で今を逃しては機会がない。

我楽多を集めて四十年、玉石混合ではあるが押入れははち切れんばかり満杯となった。この自侭勝手を許してくれた妻や家族に対して「骨董集め打ち止め」の実を示さねばならない。

夫婦揃っての茶会はこれをもって終了としたい。今後は妻ひとりで出来る茶会ならば参加するのも良かろう。お友達からしばしば茶会の亭主としてのお誘いがある。

今年の夏も終わりに近づいた頃、茶会の具体的な計画を定めた。

日時は十一月七日（日）、紅葉の盛りの時期である。

場所は前回と同じ新宿の「京懐石柿伝」にする。こちらは設備、サービス共に満点で、又料理は特段においしいと定評がある。何と言っても新宿駅から徒歩0分と近いのが便利である。

招待客は略七十名が限度である。妻の茶道の恩師をはじめ社中の方々、茶道の友人方、私の同人誌やカルチャーセンターの友達の方々などが対象で定員一杯となる見込である。しかし三年間で前回の招待客と顔ぶれが大分変りそうである。時の移ろいを感ぜざるを得ない。

今回は思い切って会費制にして招待状にその旨を表示した。失礼だとは思ったが定額にしておけば初心の方も安心して参加してもらえる。現に祝儀袋なしで会費を下さった方もあった様で、時勢に合っていたと思われる。

私の傘寿の記念と共に嬉しいことがもう一つ重なった。それは大学二年生の孫娘が先般漸やく妻に弟子入りして、今回初見参することになり皆さんにお披露目が出来ることである。妻の後継者が出来る、ひいては私等の宝物も守ってくれるものと思う。

予想した通り定員を上廻る申込があって調整に苦労する程の前評判となった。

九時キッカリに始まった会も濃茶、薄茶、点心を含めて三時頃までに無事完了してホッとした。幸い心配された雨に降られることもなく助かった。

実際に働らいて下さった妻のお弟子さん方の献身振りには唯々感謝あるのみである。自分たちの日頃の研鑽の成果の見せ処とは言え、二十名の方々が一糸乱れぬ団結ぶりで、会のスムーズな進行を図ってくれた。何と言っても受入側の明るくて気持の良い対応ぶりが茶会の成否をきめる。

今回の会場である柿伝のキチンとしたサービス振りも申分なかった。殊においしい料理は期待通りでお客様から「酒が進んだよ」との満足の声が聞こえた。

私は濃茶の亭主を担当した。例によってお手前はペテランのお弟子さんにお願いした。妻に弟子入りして作法を習えば良いのだが、何となく妻に頭を下げるのが照れ臭くて遂に傍観者となってしまっている。

妻は薄茶席の亭主を勤めた。三ヵ月程前に痛めた膝の故障を庇っての出動であったがお弟子さんに助けられ、

替　黒楽　銘「一笑」　一入造
替　絵唐津　紅心宗慶歌銘「秋の野」
菓子鉢　伊万里　荒磯文

薄茶席　　主　忠内宗正
床　勝海舟筆　「濯秀（たくしゅう）」
脇　沈香壺　薩摩焼　苗代川
花入　青磁　算木手　鍋島焼
香合　結び文　古清水
釜　芦屋写亀甲紋　忠三郎造
水指　古高取
薄器　六瓢　坐忘斉家元在判　甫斉造
替　古染付
茶杓　覚々斉共筒銘「紅葉狩」　不白箱
茶碗　古信楽　小堀宗実極
替　海老絵　珉平焼
火入　織部

茶会での馳走、口から味うものは茶であり菓子でありまた料理である。料理のことを茶道では点心と言う。簡単な食事の意味らしい。しかし最も大きな馳走は茶会に供される道具類であり、見たり触れたり使ったりして具体的に鑑賞するチャンスに恵まれる。
それ故に亭主は全精力を打ち込んで、工夫、心意気、

また孫娘の初陣が間にあった。

茶会記

「会記は茶会の演出台本である」と物の本に書かれている。確かに茶会の興趣は会記に盛られた道具類によるところが多い。
私共の今回の会記内容は長年に亘って集めた茶道具を通じた茶道への自己表現である。数は多くても内容の乏しい格納庫（押入れ）を探って組立に苦労をした。
茶会の主な道具は次の通りである。

濃茶席　　主　忠内正之
寄付
床　淡々斉筆　「宝珠」
本席
床　玉室宗珀筆　「庭前柏樹子」　清厳添書
花入　胡銅　尊形
香合　古高取　紅葉形　小堀宗実極
釜　伊勢芦屋　岩牡丹
水指　古伊賀　砂金袋
茶入　瀬戸　紅心宗慶歌銘「名取川」
茶杓　道安作　文叔宗守筒　如心斉箱
茶碗　古井戸

心配りを示すのである。
今回の茶会終了後皆さんからお褒めの言葉を戴いた。かなりお世辞もあろうかと思うが一応やり遂げたとの自己満足をしている。
なお使用した道具類についてのご質問もあったので憚りながら集めた時の苦心談も加えて説明したい。多分かなり自慢話とひとりよがりの展開となると思うがお許し願いたい。

会記の説明

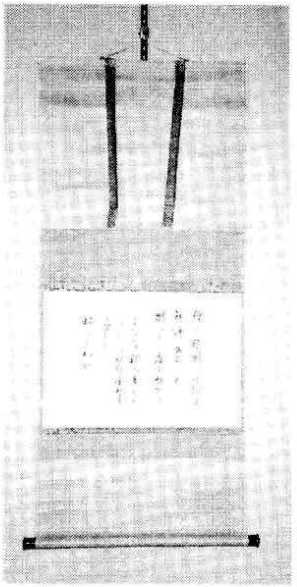
本来茶会の感想とか批評とかは招待客にお願いするのが筋であるが、何人かの方々からご質問やコメントを戴いている。
そこで私の方からまとめて自己説明することで特別にお許し願いたい。

濃茶席

掛物　「庭前柏樹子」　玉宝筆　清厳添書
本文
僧問趙州、如何是
祖師西来意
州答云、庭前柏樹子、
直指心源禅師眞迹也。
清厳宗渭依他之需加筆
以證焉矣。
好事不似無
清厳　宗渭

「趙州とは唐代の禅僧である。祖師西来の意とは、祖師即ち達磨大師が西方インドから中国にやって来た意図ということで達磨の禅の眞髄を問うている。之に対し趙州が庭前の柏樹子と応えた肚は、実際に参禅しなければ分からない」という内容でこれは禅問答の定番の一つである。
禅問答には含蓄のある言葉が多く解り難い点もあるが、茶禅一味、茶と禅は切って切れない間柄、有難く受けとめたい。
「玉宝宗珀」（一五七二―一六四一）は大徳寺一四七世の住持。清厳宗渭（一、五八八―一、六六一）は玉宝の弟子筋で大徳寺一七〇世住持である。両者共江戸期の高僧で二人の遺墨は茶掛けとして珍重されている。
当時の老師たちはユーモアも好きだったらしく「好事不似無」の清厳の終わりの言葉は「添書など無用だった」との諧謔であって面白い。
この茶掛けは平成十三年に妻の茶道の恩師である金指先生が、現役から引退されるのを機に譲って戴いた貴重

な我家第一の宝物である。茶会に出席して戴いた先生とは久方ぶりのご対面となった。



玉室宗珀「庭前柏樹子」

花入　胡銅　尊形

本席の掛物と茶碗にふさわしい花入は何が良いか？迷った。先輩は胡銅の花入に限るとのアドバイスを得たが適当な品は簡単に見当らない。

そこで我家に古くから伝わっている品から見出したのがこの胡銅の花入れである。

我が家は微禄ながら駿河以来の旗本であった。奇しくも家屋敷は入谷乾山の釜跡近くに所在した。関東大震災や戦災を経て僅かに残っていた備品のなかに少しましな道具があったと言うべきであろうか？箱も伝来も無い裸同然の姿であったが、飾って見ると貫禄がある。皆さんからもかなり賞めて戴いた。

江戸中期ごろの出来であろうか？思いがけず出番があって先祖も喜んでくれたのではないかと嬉しく思った。

香合　古高取　紅葉形

高取焼の一葉香合である。時代を経てはいるが上り(あが)が良くて美しい。この手は以前では唐津焼に分類されていた。

相国寺美術館に殆んど同種同形の香合が収蔵されていると聞く。高取焼は小堀遠州と縁が深い。茶会に際して当代遠州流小堀宗実家元の書付を戴いた。

釜　伊勢芦屋　岩牡丹

全く無冠の釜であるが、岩に牡丹が咲いて蝶々が飛んでいる。裾は尾垂れており既に底は何度か変っている大型の時代釜であり、炉に合って貫禄がある。松風は意外にさわやかな響である。骨董集めの初期段階で求めたもので地肌の文様等から勝手に伊勢芦屋を名乗らせている。

水指　古伊賀　砂金袋

水指は茶碗をひき立てる名脇役だと言われる。今回の茶碗に恥ずかしくない水指と言うことでこの水指の出番となった。

伝来は無いが実に見事な出来栄えである。山道や削げも桃山から江戸初期の意匠で、所どころビードロ釉が美しい。珍らしくピッタリした共蓋があり焦げも揃っている。

重要文化財である「伊賀破れ袋」の水指と同時代の出来であろう。中には「こちらの方がずっと好きだわ」と言って下さる方もあって意を強くした次第である。

茶入　瀬戸　紅心宗慶歌銘「名取川」
茂右衛門造（畳付に、十の窯印あり）

二十年程以前のことになる。この茶入の渋い美しさにひかれて求めた。あまり高くなかった様に思う。

当初は後窯(のちがま)瀬戸六作の茂右衛門造とは全く知らずにいたが後日妻が鈴木皓詞先生の講議を聴いて判った。幸運だったと思う。その後宗慶宗匠の歌銘まで戴いた。今回が初の出番である。紅葉が流れを彩る名取川の銘は晩秋の茶会にふさわしい。

茶杓　道安作　文叔宗守筒　如心斉箱
堀田家伝来

道安は利休の先妻の子供で利休に茶を学び技量は高く評価されたが、千家二代目を弟少庵に譲った。少庵の柔・静に対して道安は剛・動の茶と対称されている。

前回の茶会に続いて再度の出番なので詳細は略すが、玉室宗珀の掛物と共に妻の茶道の恩師から譲って戴いた大切な宝物である。

私共一代の収集では到底手が届かない品であって大変有難く感謝している。

茶碗　古井戸
替　黒楽　銘一笑　一入造　如心斉箱
替　絵唐津　紅心宗慶歌銘「秋の野」

「一井戸二楽三唐津」とは、使われる茶碗の好みについて古来何時とはなしに定着した茶人の言い慣わしである。和物だけで「一楽二萩三唐津」とする言い方もあるがこれは井戸を別格と考えるからであろう。

唐物、美濃を除いて高麗物及び高麗の系譜にある和物に傾倒していったのは利休以降の茶道の流れでもあろうが、それ等がもつ感覚が侘び寂びの茶の心にピッタリ合ったからであろう。

茶道具に関心をもつからには茶碗に強い執着心を抱くのは当然である。茶碗は茶道における立役者である。

私も長年に亘る収集歴の間に玉石混合ながら数だけは

茶碗左より「一井戸二楽三唐津」

かなりの量となった。

しかし茶碗の玉座にある井戸茶碗を持つことは大変難しかった。理由としては、

第一に出廻りが少なく出合いがない。第二に値段が途方もなく高い第三に大井戸等の一級品は数が少なく、美術館ほか、治まるところに落ちついている。等があげられ憧れてはいたものの諦めていた。

しかし最近古井戸茶碗（小井戸とも言う）と縁が生じて、幸にして我が家の道具の仲間入りすることになった。取得の経緯については省略するが、茶道への執念が実を結んだ結果で譲って下さった方の協力を感謝している。

井戸茶碗については製産地である朝鮮でも未精査な点が多い。我国では極めて珍重されているが当の朝鮮では、焼かれた窯も不分明且つ如何なる用途に使われたかも正確でないという神秘的な茶碗である。これを機に自分なりに井戸茶碗に関する勉強を始める所存でありいずれ成果を発表したい。

さて大井戸と古井戸は違うと言う人も居るが形状は確かに違うものの出来た時代と窯と本質は殆んど変らないと思われる。そして私共ごとき未熟な者等が使うのには古井戸茶碗が適当、否もったいないくらいであると思われる。

この茶碗をよく観察すると、さびた枇杷色、五つある目跡（高台にもある）、ロクロ目、竹の節高台、カイラ

ギ（梅花皮と書く、釉が粒状に残ったもので本来は欠陥となるべきところ茶人は雅味として評価）等約束事が具備していて満足させられる。

姿も優美できれい寂びの心に適っている。小堀遠州が晩年に最も多く使用したという中興名物古井戸茶碗「忘水」とよく似通っている。恐らく同時代に同じ釜で焼成されたものではないだろうか？そんな大それた想像をたくましくさせる茶碗である。

黒楽茶碗一入作は表千家七代の如心斉が「一笑」と命名した朱釉の美しい楽茶碗である。

"一笑すれば千山青し"という禅語がある。如心斉宗匠もこの茶碗の出色の出来栄えを認め心楽しく「一笑」と命名したものと信じたい。

絵唐津の茶碗は遠州流の宗慶宗匠から歌銘「秋の野」をいただいた。唐津茶碗の最高峰と言われる奥高麗と同形のたっぷりした出来で芒の様な鉄絵がある。皮鯨とか口紅とか言われる口縁部の鉄釉が茶色となっている。

以上井戸、楽、唐津の夫々略同時代の三碗を持つ幸運を得たことは無上の喜びとする処であり、今回の茶会を開催する動機ともなった。

伊万里の萌黄金襴手菓子鉢は古伊万里の染錦鉢の定番である「荒磯文」の写しである。

写しと言っても本歌に負けない程の上作である。出廻る数も少ないと聞く。寿の字もありお祝いの席にふさわしいので出番となった。

薄茶席

薄茶席の目玉は床に飾った勝海舟の掛物と脇床に置いた薩摩焼の沈香壷である。

丁度坂本竜馬のドラマが評判となっている折でもあり、勝海舟の掛物と、時期は幕末の出来と思われる薩摩焼の色絵沈香壷を飾ったところ果然話題を集めることとなった。

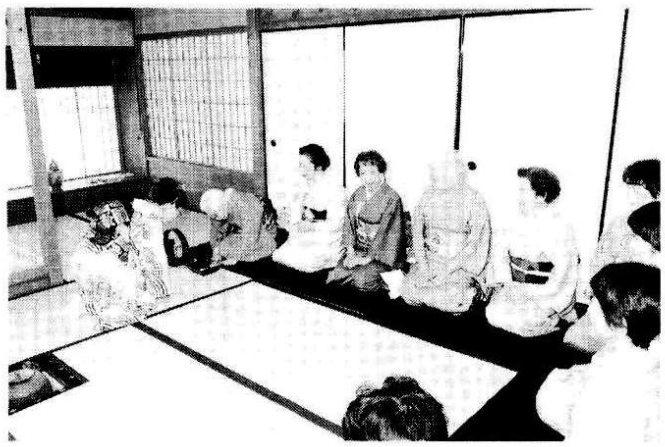
畏友、漢詩人である鯨游海氏は次の様な七言絶句を即興で作詩しプレゼントして下さった。

忠山人茶会即事

幕薩恩讐幾度還　ばくさつのおんしゅういくたびめぐりしか
不圖相對尺餘間　はからずもあいたいすしゃくよのかん
沈香壷與海舟軸　じんこうのつぼとかいしゅうのじく
方丈唯聽茶筅閑　ほうじょうにただきくちゃせんののどかなるを

鯨氏は点心席で酒を少々きこしめし乍ら、須臾にして右の様な立派な詩を作られたと言う。氏の素晴らしい詩才に改めて敬意を表すると共に場を盛り上げて戴いた事を唯々感謝申し上げる次第である。なお「忠山人」とは

小生の事だそうである。
海舟の掛物は絹本に書かれており表装も本格的である。しかし書かれている「濯秀」の熟語は調べても意味不明である。海舟は漢学に秀れており造語の名人でもあった様なので禅語同様に意訳して読む外に手立はない。ひき続きの研究課題である。
薩摩焼の沈香壷　沈香壷とは沈香を入れて飾ったのでその名称となった様だが、古伊万里焼に多い有蓋壷の一種で薩摩焼では珍らしい。幕末時代に薩摩の苗代川窯で焼かれたものと思われる。完成度の高い、きれいな色絵の壷である。今回の茶会のため探し出した。
花入　前回にも使用した鍋島焼の青磁算木手である。厳格な藩窯の出来で美しい。鍋島焼には平たい皿の様なものは多いが形のものは少ないと言う。特に大切に扱っている。
香合　結び文は古清水焼で仁清の系統のものと思われる。可愛くて美しい。夫婦のなれそめの文通は之に託したのかと問われ妻は照れ臭かったと言う。今回が初出である。
水指　高取焼の桶型水指で黒釉の地肌の上に白釉がなだれて前押せで留まり美しい。


薄茶席風景

以前なら朝鮮唐津と分類されたであろう。東皿山の藩窯の出来であると思われる。今回が初出である。
薄器　坐忘斉家元在判、甫斉造　今回の茶会のため新調した。六瓢を無病になぞらえた縁起の良い棗である。

出来上りも良い。
替　古染付小壷は長い間しまわれて来たが今回初の出番となった。「共蓋付きの可愛い小壷」と意外に好評を得て面目を施した。
茶杓　覚々斉共筒銘「紅葉狩」で季節にピッタリ合っている。不白の追箱になっているので不白流の方から喜ばれた。
茶碗　古信楽　半筒形　小堀宗実家元極
この茶碗は茶会に備えて準備して来たもので、自分の所有になると直ちに遠州流宗家である小堀宗慶宗匠に書付をお願いしていた。信楽焼は流祖と縁が深かったのである。ところがお眼鏡に叶ったものの健康上の理由で延引となっていた。茶会の直前に親子のひき継ぎで書付を戴いた記念の茶碗である。
窯口で長時間焼かれたものか？自然釉の流れが美しい。かりっと軽く焼き上っており手取も良好である。古くてきれいな私の好みを満足させてくれるお宝である。
桃山時代から江戸初期の作と思われる。
替　所蔵する茶碗を総動員して賄った。
代表するのはめでたい珉平焼の海老絵茶碗である。裏千家鵬雲斉大宗匠の箱書がある。
火入　織部筒　「火入れ」とは煙盆の中に入れる火種入のことである。茶会にどの様な変った焼物が使われるか、大変な興味を呼ぶところである。
今回は織部の向付を火入に見立てた。変った織部模様で鉄釉の地に緑釉も混って特に見所が多い。皆さんの関心も集まった。珍品だと思う。
以上で主な諸道具の説明は終わる。

結びとして

八十才を記念した三年振りの夫婦による茶会であった。多少心配や苦労もあったが、明るく和やかなムードでお開きにすることが出来たものと満足している。
金指先生のご指導をはじめとして皆さん方の応援、お弟子さん達の協力等々多くの方々の支えがあってこそ成り立った会であったと心から感謝している。
孫娘のデビューも誠に喜ばしいことであった。しっかり勉強してくれるものと期待したい。
空白であった三年間で道具類も新顔がふえて話題となる茶会のテーマを演出することが出来た。
夫婦共同の茶会もこのあたりで打ち止めかと思うと寂しい。迷いも生じそうである。しかし趣味に生きることは力強い、活力が生まれる。今後も古い物から離れることは無いであろう。

集めた道具類は先輩からの預り物だと考えている。之等を次代の後輩に無事にひき継ぐ責務があると思う。古い物こそ大切にすべきであると言う精神を添えて。

その様な偉ぶった気持を抱きながらこれからも一層精進したい。

誠忠の茶園（七）

太田精一

十三　牧之原の土に生きる

（一）初収穫茶、徳川家に献上

中條景昭、大草高重の二人は、明治六年五月十五日早朝、牧之原を発った。初めて収穫した茶を徳川家ゆかりの人たちに献上するためである。

まず、静岡の紺屋町に住む慶喜邸を訪れた。

二人は、壺に入った香り高い最高級品茶を慶喜に差し出した。

「牧之原のご領地をお下げ渡し頂き、三年有余開墾方として荒地を切り拓いて、茶園を造り、やっとこのような茶が出来ました。真っ先に慶喜様にご賞味いただきたく持参仕りました」

「有難く頂戴いたす。牧之原に入植した後のそちたちの苦労は、大久保や勝から聞いている。もはや徳川家の当主でない予には、何も出来なかったが、陰ながらそちたちの成功を祈っていた。そちたちの帰農によって予の恭順の誠が天下に認められ、徳川家と多くの家臣を救ったことは紛れのない事実である。その上、このような立派な茶を世に出すことが出来、牧之原の将来に大きな希望を与えてくれた。誠に喜ばしい限りである。とくと味わいながら喫することにしよう」

慶喜の言葉を聞いて、江戸城明け渡しから牧之原開墾にいたる苦闘の日々が、二人の脳裏を掠めた。

慶喜邸を後にした二人は、風呂敷に献上の茶筒を包み、それを背負って清水湊まで歩いた。

五月とはいえ、すでに夏の日差しである。その日差しを受けてキラキラと輝く梢の間を爽やかな風が吹き抜けている。

清水から船に乗り横浜港で下船した。景昭と高重は、横浜から開通したばかりの鉄道に乗り、新橋に出て近くの旅籠に宿を取った。

江戸から東京へと町の様子は大きく変っている。特に、新橋の汐留付近は、鉄道が敷かれて以来一変した。洋風の新しい建物がどんどん新築されている。

江戸が、新しい時代の風を受け、遠くなって行く。二人は、故郷の変貌振りにただ驚くばかりであった。

翌日、千駄ヶ谷の徳川家達邸を訪ねた。家達は、すでに十歳になっていた。

客間に通され、しばらく控えていると、家達とともに天璋院が現れた。

天璋院は、薩摩島津家の分家、今和泉島津家の島津忠剛(ただたけ)の姫として薩摩に生まれ、篤姫と称した。藩主島津斉彬の養女となり、後に近衛忠熙(ただひろ)の養女として十三代将軍徳川家定の御台所となった。家定死後、天璋院の称号が与えられている。

江戸城明け渡し後、家達が静岡から東京駒込の屋敷に移り住んだ頃から、母代わりとして家達と同居していた。牧之原で収穫した初めての茶を献上するとあって、天璋院も興味を示し、同席することになったのである。

「徳川家からお下げ渡し頂いた牧之原の土地で育ったお茶でございます。種を播いてから三年余り、今年になって初めて出荷出来るようになりました。家達様にご賞味頂きたく持参しました」

「わざわざお届け頂き、有難く思います。開墾方の人たちにも家達が、お茶の収穫を喜んでいたとお伝えくださ

い」

少年とは思えぬほどの配慮の行き届いた言葉であった。

「開墾地は、まだほんの一部しか手を着けておりません。家臣一同力を合わせて彼の地を大茶園とする所存ですので、今後も温かくお見守り頂きたく、願い奉ります」

二人は、すくすくと育っている家達のねぎらいの言葉に感激し、ひたすら徳川家の安泰と繁栄を祈った。

「お二方とも牧之原では、大変ご苦労されていると勝さんから聞いております。丹精込めて作ったお茶、有難く頂戴いたします。これから開墾が進めば、もっと多くのお茶が出来、庶民も手軽に牧之原のお茶を飲める時代が来ることになりましょう。どうぞこれからも美味しいお茶をたくさん作って、牧之原のお茶を世間に広めてください」

天璋院からも温かい言葉を頂き、二人は、これまでの苦労が報われた気がした。

景昭と高重は、千駄ヶ谷の家達邸を辞去し、その足で勝海舟の屋敷に向かった。

勝は、明治五年六月、静岡を引揚げ、赤坂氷川町四番地の元旗本千七百石柴田氏の屋敷を手に入れ住んでいる。

攘夷論を唱えた景昭と高重は、勝とは立場は違ってい

た。だが、徳川家の存続を願う気持ちは同じであった。大政奉還後は、お互いに力を合わせ、幕臣たちの不満を抑え、慶喜の恭順を支える環境を整えて来たのである。

勝は、景昭、高重の精鋭隊が、慶喜の身の安全を確保し、政治的に利用されることのないよう努めて来た功績を高く評価した。

その功臣たちが、牧之原に入植するのである。出来る限りの協力をするつもりであったに違いない。事実、土地の下げ渡し、徳川家からの給付金、廃藩置県にともなう政府交付金など、開墾を成功させるための最大限の努力を払って開墾方を支援して来た。

また、彼等に、茶を栽培するよう勧めたのも勝である。勝は、直接牧之原に入植して鍬を振るうことはなかったが、いつも牧之原開墾方の味方であり、その発展に重大な関心を寄せていたのである。

景昭と高重は、勝邸の玄関前に立ち、大声で取次ぎを頼んだ。すると勝自ら玄関に出て来て、客間に案内した。

景昭の差し出した新茶を手に取ると早速その葉を眺め、香りをかぎ、味を確かめた。

「これが牧之原最初の茶かね。わざわざ届けてくれて有難う。色、香り、味とも良く出来ている。これなら国内だけでなくアメリカ、イギリスにも大手を振って輸出出来る。ご両人とも元気そうで安心した。お祝いに一杯やりましょう」

そう言って勝は、気さくに酒と盃を棚から取り出し、二人に勧めた。海軍大輔の勝もこの時ばかりは羽目を外した。旧幕臣の仲間同士、心置きなく盃を酌み交わしたのである。

勝宅に一泊した二人は、翌日山岡鉄舟宅を訪問した。鉄舟も久し振りで会う景昭、高重の二人を迎えるため、役所を午後から休んで待機していたのである。

鉄舟も政府高官に迎え入れられ、正六位宮内少丞に任じられている。

二人は、鉄舟にも大変世話になった。静岡藩時代、鉄舟の助言は、徳川家重臣たちを動かし、開墾方創設へと導く大きな役割を果たしている。

屋敷は、古風で質素であった。いかにも鉄舟に相応しい。彼は幕府講武所時代を懐かしんで、二人を歓待した。新茶を手にした鉄舟は、感激に目を輝かせ、満面笑みを浮かべて言った。

「よくやった。中條さん、大草さん。こんなに早く牧之原の茶が飲めることになろうとは思わなかった。貴公たちを始め精鋭隊の努力のお陰である。同じ徳川の家臣として誇りに思う。愉快だ。実に愉快だ。今日はとことん飲み明かそうではないか」

鉄舟は、旧幕臣に戻って景昭、高重とともに心置きなく酒を酌み交わした。

翌朝二人は、鉄舟に見送られ、新橋駅を発った。途中

横浜では、賑わう港の積荷作業を見学して牧之原に帰った。

翌年の明治七年、新政府は、家禄没収による士族の不満を抑えるため「家禄奉環金」制度を設けた。これまでの武士の家禄の代りに禄高に応じて一時金を支給するというもので、俸禄を離れる武士のいわば手切れ金のようなものであった。

一生遊んで暮らせるような大金ではないが、新政府にとっては、大きな財政負担である。この金は、新政府から各藩を通じて支給された。だが、支給日は各藩に任せられていた。

静岡藩は、明治八年禄高に応じて支給されている。牧之原では、一人千円以上支給を受けた者もいて、全体では相当な金額になったものと推定される。

困窮する武士にとっては、干天の慈雨のようなものであった。だが、それも一時凌ぎに過ぎなかった。俸禄を失った武士たちの不満は、全国に高まり、その後、各地で新政府に対する反乱が起るのである。

(二) 栄達を望まず

満開の桜も散り始めた明治八年の春、山岡鉄舟は、牧之原の中條景昭屋敷を訪ねた。景昭が鉄舟と会うのは、明治六年、牧之原で初めて収穫した茶を鉄舟宅に持参して以来であった。

鉄舟は、洋服を着こなし、すっかり新政府の役人が板についている。景昭は、木綿の紋付、袴を身に纏い、新番組の頭として牧之原に入植した当時のままの姿である。

二人は、身なりこそ異なっているが千葉道場では、景昭が鉄舟の兄弟子に当り、幕府講武所では、お互いに剣術師範を務めた仲である。

景昭は、鉄舟に酒を勧めながら言った。

「貴公や勝さんのお陰でこの牧之原もやっと茶園として世に認められるようになって来た。だが、茶園と野菜作りの仕事だけで暮らせる家族はほとんどない。開墾した土地はまだほんの僅かで、折角拝領した土地を手放す者、借金を抱えてどうにもならず、逃げ出す者も跡を絶たない始末だ」

「なるほど。この谷口原も中條さんと初めて来た時とはずいぶん変って、見事な茶園になっている。そればかり感心していたが、これまでになるには、大変な苦労の積み重ねがあったのであろう。」

鉄舟のその言葉には、感慨がこもっていた。

しばらく酒を酌み交わし、懐旧談から開墾の苦労話が続いた後、景昭が鉄舟に来訪の目的を聞いた。

「ところで、貴公、今日は何か拙者に用事があって遠路はるばる東京からやってきたのではないか」

鉄舟は、やっと用件を切り出した。

「中條さんや大草さんがこの牧之原に入植した時は、この土地に骨を埋める覚悟であったと推察している。その気持ちは今でも変わらないか聞きたいと思って来たのだ。実は、中條さんには、もう一度中央に出て、活躍して貰いたいと考えている。これは、それがしだけの意見ではない。勝さんも同じだ。神奈川県令の座について頂き、貴殿の指導力を行政に役立てて貰いたいのだ。神奈川は、東京に近いし、牧之原とも縁が深い。茶の輸出にとっても重要な横浜港を抱えている。どうだろうか。承知してくれないか」

中條は、腕を組んで考え込んだ。

(再び世に出るためには、またとないチャンスである。もうこのような機会は巡って来ないかもしれない。このままこの地で埋もれるには惜しい気がする。鉄舟もこれまで苦楽を共にしてきた友人としてこのわしの処遇を考えてくれている。精鋭隊仲間の関口も新政府の役人となった。幕臣のうち、その能力を買われて新政府の要職に着いたものも少なくない)

景昭は迷った。しばらく沈黙が続いている。鉄舟は、目を閉じて春風に運ばれて来る小鳥の囀りをじっと聞いている。

「山岡さん。貴公の厚意は誠に有難い。だが、この話はお断りしたい。先ほど話した通り、牧之原は、やっと光が見えて来たところだ。今、拙者がこの牧之原を捨てれば、折角ここまで来た開墾の仕事が挫折しかねない。拙者は、開墾方の仲間と共にこの地で果てることを誓った。その誓いを、まだこれからという時に破るわけには行かないのだ。この地を立派な茶園に育てる。それが拙者に与えられた徳川家への最後のご奉公であると思っている」

鉄舟は、景昭の目をじっと見て頷いた。景昭の決心が固いことが分かり、これ以上説得しても無駄だと覚ったのである。徳川家から頂いた牧之原を守り育てることが忠誠心の証であるとする景昭の心情が痛いほど分かった。

「分かり申した。この話は、これでやめましょう。中條さんの牧之原に賭ける思いを聞いただけでも今日来た甲斐がありました」

「そう言われては、かえって恐縮です。ただ、今も話した通りここに入植した仲間の生活は、依然として苦しい。廃藩置県後徳川家からの俸禄も絶えた。いつまでもというつもりはないが、何とか新政府の援助を取り付けて貰えないだろうか」

景昭は、鉄舟に頼んだ。

「ご意向しかと承りました。勝さんとも相談して、微力ながら努力してみましょう。ところで、中條さんは、今でも竹刀を握っておられますか。隣の道場から元気な掛け声が聞こえて来ますな。一手ご指南頂きたいと言いた

いところですが、これから大草さんの家にも参りますので時間がありません。またの機会とします」
「久し振りに貴公の腕の冴えを見たいと思いましたが、それは残念です」
景昭は、そう言って鉄舟を高重の家に案内するよう使用人に命じた。
しばらく後、鉄舟は、高重の屋敷に着いた。前方には、新芽の出掛った茶園が広がっている。
高重は、鉄舟を客間に案内するとすぐに酒の支度に取りかかった。鉄舟の酒好きを十分心得てのことである。
しばらく盃を酌み交わすうちに、鉄舟は、高重に新政府への出仕を促した。
「大草さん。山梨県令の職が近く空くので、その席に座ってくれないか。明治になってから八年になる。新政府も人材を広く求めているのだ」
「残念だが今更、薩長の支配する政府の役人になるつもりはない。山岡さんも勝さんもご存知の通り、牧之原の開墾事業が成功するかどうか、今が正念場だ。それを見捨てて去るわけにはいかん。それがしは、開墾方を仰せつかったその時から、この土地に骨を埋めることに決めたのだ。武士の志をもって、この地を見事開墾し、直参旗本の意地を貫き通したいのだ」
高重は、そう言いながら、苦労を重ねて開墾したこの土地への愛着が湧き上がって来る自分を愛しくさえ感じていたのである。
翌日、鉄舟は、牧之原を発った。景昭、高重とも栄達の道を捨て、牧之原の土と共に生きる道を選んだのだ。
鉄舟は、説得が通じなかったことに悔いはなかった。むしろすがすがしくさえ思えたのである。
大井川に下る道の前方に富士が輝いている。雲雀が晴れた空高く舞い上がり鳴いていた。

(二) 東照宮造営に向けて

栄達の道を自ら断った景昭と高重は、改めて牧之原の未開墾地の開拓に心血を注ぐ決心をした。それには、過酷な労働に耐える強い精神力と入植者同士のさらなる団結が必要である。
ところが、入植後六年経った明治八年も暮れになると、労働に疲れ、怠惰に流れる者も出て来て、開墾作業が滞りがちとなった。つい最近の九月にも中村次吉が、開墾地五反余りを高重に買い上げて貰い、離農して浜松に移ったばかりである。
高重を慕って精鋭隊に参画、一緒に牧之原に入植した加藤則元も去った。
それだけではない。
この頃には、付近の村人とのいざこざを起す者、島田の町に出て夜遊びをする者など開墾にも意欲の低下が見られた。加えて、茶の生産量も相場も当初の計算を下回っている。
高重は、正月も近い暮れの二十八日、景昭の屋敷を訪ねた。開墾の立て直しを図るための方策を相談するためである。
景昭は、高重の顔を見るなり訪問の意図を察し、すぐさま日頃考えていたことを話し始めた。
「明治ご維新となって世の中は、大きく変わった。だが、拙者は、徳川譜代の旗本であったことを忘れたことはない。百姓を生業とすることになったが、心まで武士を捨てたわけではない。開墾方の中には、地味で過酷な農作業に嫌気がさして、この牧之原を出て行く者もいるが、それは止むを得ないことだ。誰も押しとどめることは出来ない。それでも、残った者は、直参旗本であった誇りを後世に伝え生きて行くことが大切である。それには、皆がまとまるような旗印が必要だ。そこで考えたのは、今、久能山にある家康公の木像を遷座し、神君家康公を祀る神社をこの牧之原に建てることである。大草さんはどう思うかね」
景昭の提案に高重は、膝を叩いて賛同した。
「それは、名案です。今、ここで皆の心が一つになるためには、信仰の対象となるようなものが必要でしょう。それには、神社が相応しい。早速その計画を進めましょう。問題は、資金をどうやって集めるかです」
景昭は、じっと天井を仰いでしばらく考え込んでいたが、突然思い付いたように高重の顔を見た。
「そうじゃ。今井信郎と服部一徳が、その資金集めに、向いているかもしれない」
今井は、後に坂本竜馬を斬った男として世間の評判となった。
彼は、天保十二年（一八四一）江戸本郷湯島天神下で生まれた。直心陰流榊原健吉の門下に十八歳で入門。二十一歳の時、下谷東坂の道場で免許皆伝。後に、幕府講武所の師範となった。
その後今井は、佐々木唯三郎に乞われて副隊長格で、京都見廻組に入っている。慶応三年（一八六三）十一月十五日、京都河原町醤油屋近江屋で坂本龍馬、中岡慎太郎を斬った七人の刺客の一人であったという。
江戸城明け渡し後、戊辰戦争に参加し、各地を転戦、箱館で政府軍に捕らえられ、東京の監獄に収監された。明治三年九月の判決で静岡藩に引き渡されている。明治五年一月に赦免され、家族の転居先、浜松の三方原にしばらくいたが、この時には、静岡県の役人として出仕していた。
服部一徳は、禄高百五十俵の小普請役の家に生まれたが、高重の誘いで精鋭隊に入り、彼と共に三十一歳で牧之原に入植している。一徳は漢学の素養が深く、筆も立ったことから牧之原士族入植の事情や入植後の記録を残

している。また、高重の実子和田勝重に娘を嫁がせ、高重とは縁戚関係を結んでいる。

勝重は、大草高重の長男である。が、和田家から大草家の養子となった高重は、実家の和田家を継がせるため、長男の勝重を和田家の継嗣とした。

今井、服部の名前を聞いた高重は、諸手を挙げて賛成した。高重も二人の誠実な人柄と実行力を高く評価していたからである。

東照宮遷座の資金集めを任された今井と服部は、早速上京した。だが、思うように資金は、集まらない。

二人は、大久保一翁や勝海舟に相談した。しかし、色よい返事は貰えなかった。

逆に、牧之原の地元では、建設の気運が盛り上がるばかりであった。これを機会に結束を強め、幕臣としての誇りを取り戻そうとしているのである。江戸での資金集めは、思うように進まなかったが、こうした地元での建設気運の盛り上がりを、看過するわけには行かない。景昭と高重は、自己資金の提供を決断した。こうして、牧之原東照宮が、旧幕臣開墾方の氏神として建設され、明治十年九月二十七日に、ご神体として神君家康公の木像を勧請したのである。

この木像は、もともと江戸城内の紅葉山にあった。ところが、城明け渡しの際に上野寛永寺に移されている。上野が戦場となる直前、山岡鉄舟が、小石川の酒井安房守邸に運んだ。それを旧幕臣たちが明治三年に久能山に遷座し、以来久能山に安置されていた。

その木像を牧之原に移したのである。

牧之原に入植した幕臣たちの熱意が如何に大きかったかをこの一事を見ても類推することが出来る。

明治二十六年四月に行われた勧請十五周年記念式典には、当初造営には、乗り気でなかった勝海舟も榎本武揚と共に自筆の幟を奉納している。その幟は、今も大草家に保存されているという。

しかし、このご神体となった家康公の木像は、その後、徳川家から、「新築した千駄ヶ谷の屋敷内に、東照宮の社殿を建てて祀りたいから返して欲しい」との要求がなされ、大正七年四月徳川家に返還した。

ご神体返還後の牧之原東照宮は、開墾方子孫の牧之原在住者が少なくなったこともあって、維持が困難となった。そのため、岡田原の八幡神社に一時的に合祀されたが、それも廃絶となり、現在は、大草家の所管する大草神社に合祀されている。

一四. 分裂の危機を乗越えて

(一) 明治天皇に謁見

山岡鉄舟から高重に一通の手紙が届いた。明治十年の

年の瀬も近い頃である。内容は、明治天皇が北陸巡幸の帰路、静岡の行在所で旧幕臣幹部を召し、併せて牧之原開墾の功をご嘉賞するというものである。

明治十一年十月三十日、明治天皇は、北陸ご巡幸を済ませ、愛知県の豊橋にご到着された。その目的は、中央集権国家としての統治者である天皇及び新政府の威光を日本国中に示すことにあった。総勢八百人を超える大巡幸団である。

宮内省の侍従となった山岡鉄舟が、天皇のすぐ後ろに「御用係」として供奉し、巡幸の総指揮をとった。

西南戦争が終結したばかりで殺伐とした空気が日本国中を覆っている。それだけに警護にも、ひときわ注意を払わなければならない。人選の結果、剣の達人で、胆力、統率力に優れ、天皇にも政府にも信頼の厚い鉄舟に白羽の矢が立ったのである。

天皇誕生日の十一月三日午前十時、明治天皇は、藤枝を出発、十一時五十五分静岡の伝馬町に設けられたご在所にご到着された。

謁見は、翌日の四日である。

景昭と高重は、宮内省の正式出張辞令を県庁から受けていたため、前日に牧之原を発ち、その日の夕方には伝馬町の旅籠に投宿し、待機していた。

四日は、あいにく雨であった。午前八時の拝謁に備えて二人とも早朝から紋付、袴に威儀を正し、緊張した面持ちで、謁見を待っている。鉄舟が二人を御座所に案内した。景昭は、まだ丁髷を結っている。

「面(おもて)を上げるように」

岩倉具視が平伏している景昭と高重に声をかけた。岩倉が天皇の御前で、奉書を読み上げる。その奉書が、岩倉から鉄舟を通じて二人に渡され、儀式は終わった。鉄舟に導かれて御座所を下がると、そこに大迫県令が控えていて二人に祝いの言葉を述べた。

奉書には、「牧之原の未開墾地を同志と共に開墾に励んでいる功績を称え、千円下賜する」と岩倉右大臣名で記されている。

謁見を終え二人が、伝馬町の宿でくつろいでいるその時、鉄舟が宿を訪れた。

「本日の謁見は、つつがなく終了した。これで牧之原の幕臣たちも、これまでの苦労が報われることになろう」

「誠にかたじけない。貴公と勝さんには一方ならぬお世話になった。牧之原にいる旧幕臣たちにも早速報告し、この喜びを分かち合いたい」

景昭は、そう言って鉄舟と高重の手を固く握り締めた。三人はお互いに手を取り合って感涙に咽び、しばらく言葉を発することが出来なかった。

天朝に弓引くものとしての汚名は完全に消え、剣を鍬に代えて荒地を開墾したその功績が、正式に認められたのである。よほど嬉しかったに違いない。

宿の外では、鈴虫の声が一段と高くなった。その声も二人には祝い歌のように心地よく聞こえた。

明治天皇との謁見の感激を少しでも早く牧之原の同志に伝えようと、景昭と高重は、道を急いだ。大井川を越え、牧之原台地に差し掛かった。台地を見上げると、高重は、熱い思いがこみ上げて来て、そっと目頭を押さえた。

入植したばかりの頃、付近の百姓を雇って鍬の使い方を習った。一人の武士が地面に鍬を打ち込んだ。鍬が抜けない。力任せに鍬を引き抜いたその武士は、鍬を持ったまま尻餅をついて仰向けに倒れた。武士の顔は、屈辱を隠そうとする苦笑いでゆがんでいた。

冬、綿入れの着物が買えないで寒さに震えて過ごした入植者もいた。

紋付に袴をつけ、その袴の腿立ちを取って荒地に入る者、稽古着に袴をつけて鍬を振う者、陣笠を被って小刀を腰に差したまま開墾する者、さまざまな風体の武士たちが汗を流した。

一方、家にいる妻女たちは、慣れない生活に戸惑うばかりであった。

始めての茶摘みに振袖姿で茶園に出た女性もいた。

余談ではあるが、手甲、脚半、襷、前掛けが茶摘みの時に用いられるようになったのは、この時の衣装から着想を得たものである。近所の茶農家の着衣を真似て、入植士族の妻女たちが体裁よく改良を加えた。今日では、茶摘み女の制服のように、何処の茶畑でもそのあでやかな姿が見られる。

開墾も茶の栽培も開墾方士族が手掛けた。だが、それだけでは開墾は進まない。近所の百姓を賃雇いして製茶場で働かせたり、開墾を請け負わせたりした。

（よくここまで耐えて来た。道半ばで脱落した者もいた。さぞかし口惜しかったであろう）

高重は、牧之原を去って行った家族を思い浮かべた。

開墾当初、家族併せて千人近い武士たちが、この牧之原に入植した。だが、廃藩置県が行われてからは、藩からの給付金もなくなり、この土地を出て行く者も少なくなかった。給付金のなくなった開墾方士族たちの多くは、現金支出を抑えるため、陸稲、大豆、小豆、ソバ、甘藷、大根などを茶木の間に植え、食糧を確保した。なかには茶畑を売り、牧之原台地の下の水田を買って米の自給を図った入植者もいた。高重の家でも一部の土地を売り水田を購入している。

明治二年に入植当時、二百四十戸あった開墾方家族が、明治十一年のこの年には、二百十四戸に減っている。この間途中で相当の入れ替えがあり、開墾当初から一貫してこの土地に残った開墾方士族は、百戸程度になってしまった。

そんな中にあって、高重の入植した岡田原は、団結が固く、退去した家族は少なかった。二十三戸の入植者のうち離脱した家族は、わずか一割にしか過ぎない。

ちなみに、景昭以下、谷口原に入植した組は、二十一家族のうち、三割近くが牧之原を離れている。

自分の土地を近所の百姓に委託開拓させる開墾方士族もいた。下賜された開拓地を百姓に拓かせ、七年程度、無償でその百姓に貸与する。以後は、小作料を徴収し、その百姓に耕作させる。労働力不足に対するこうした苦肉の策もとられていたのである。

明治十五年を過ぎると茶の価格が低下し、開墾方士族の生活が苦しく、さらに離農が相次いでいる。明治三十年には、六十余戸、昭和五年には十六戸と減少している。さらに、高度経済成長の名のもとに都会化が進んだ昭和三十三年には、十戸、昭和四十八年には、農業を続ける家は、七戸に減少してしまった。

開拓方士族の家族は減少した。だが、牧之原全体の家族が、減少したわけではない。明治から大正にかけて士族の土地を購入して移り住む者も多く、全体の生産力が向上し、平成の今日、牧之原は、日本で一、二を争う茶の生産量を誇っているのである。

（二）分裂の危機

廃藩置県によって家禄を失った士族たちへの救済措置として、明治六年頃から、全国の士族に対して、家禄奉還金が支給されることになった。

明治八年、この待望の奉環金が牧之原士族にも支給された。

景昭は、その金の使い道について、開墾方士族全員に諮った。その結果、開墾方士族への家禄奉還金は、開拓資金として一括管理し、必要に応じて貸し出すということが決まった。

また、その資金の運用も検討され、運用機関の設立も決まった。苟美館（こうみかん）と名付けられ、いわば信用金庫のような機関を立ち上げたのである。

十二人の運営委員、頭取及び二名の取締りが選任された。事務責任者には、牧之原士族の中から中山忠敬、森川義仲。助勤に成瀬春久が選ばれた。

運営次第でうまく行くはずであった。

ところが、貸し倒れが出る。使い込みが発覚するといった不祥事が続出した。明治十一年八月の時点で、資本金五万七千七百円の内一万七、八千円が消失してしまったのである。

この金を直接運用していたのは、中條景昭の関係する谷口原の入植者たちであったため、大草高重ゆかりの岡田原の入植者たちは黙っていない。

「会計が杜撰ではないか。経理を明らかにして、残り資

金をそれぞれに分配せよ」と景昭を非難する声が高まって来た。

景昭は、剣の達人ではあるが、経理には疎い。事務取扱の連中を全面的に信用し、任せていたため、不祥事に気付かなかった。

入植者たちは、折角下賜された奉環金をうやむやにされてはたまらない。特に岡田原の入植者は、何も知らされないうちに、自分たちの拠出した奉環金が目減りしたことに納得が行かなかった。

高重は、これまでの景昭との信頼関係もあって、岡田原の強硬派の意見を宥めにかかった。

その矢先、直接金銭出納に携わっていた人物が、妻を連れて二千円持ち逃げしてしまった。それを知った跡取りの倅夫婦が、責任を感じて首を括り、死んでしまったのである。両親の罪を一身に背負って命を断ってしまったのだ。

遺書には、両親の不祥事を詫び、自分の土地は、牧之原全体のものとして使って欲しいとあった。

この倅夫婦は、景昭が目を掛けていた人物であったので、問題がこじれた。高重が、慰撫するだけでは収まりがつかなくなり、責任が景昭のところに集中したのである。

そんな時、救いの神が現れた。伊佐新次郎である。景昭に代わって、高重への弁明を買って出たのだ。

伊佐は、最初の茶の収穫の祝いの席に、景昭が連れて来た人物で、そのまま牧之原に居を構え、書や漢学を教えていた。

伊佐は、高重のもとを訪れた。手土産に酒樽を運ばせている。高重を始めとする岡田原の面々と腹を割って話しをするつもりで来たのである。

高重は、景昭とは友情を超えた信頼関係で結ばれている。彼は、牧之原の開墾士族にとって、最も団結の必要な時に、このような金銭上の問題で、亀裂の入るのを避けたかった。伊佐の来訪は、その意味で正に渡りに舟であったのだ。

高重は、伊佐が来訪したことを知らせ、岡田原の入植者のうち、有力者たちを自宅に集めた。六十八歳になっていた伊佐は、洒脱で常識に富み、牧之原の相談役のような存在となっている。入植者たちのギクシャクした関係を解きほぐすにはうってつけの人物であった。

「岡田原のご一同、今宵は、中條さんの真意を伝えに参った。中條さんに私心はまったくない。ましてや家禄奉還金を着服しようなどという気持ちは、毛頭なかったのだ。ただ、荷美館の経営に事務方を信頼し過ぎ、任せきりにしてしまったのは、失敗であった。また、公金持ち逃げ事件についても対応が遅れてしまったことを中條さんは、深く反省している。どうか精鋭隊以来の功績と牧之原に来てからの指導力を評価し、責任論は後回しにし

て善後策を話し合って欲しい」

伊佐は、景昭を弁明し、岡田原の入植者に荷美館の今後について率直な意見を求めた。

その結果、解散し、残金は出資に応じて割り戻すという意向が示されたのである。伊佐も高重も止むを得ないと判断し、景昭にその旨進言した。

景昭は、勝海舟と山岡鉄舟にこの事件の顛末を知らせ、牧之原の実情を東京の二人に説明するよう伊佐に頼んだ。

伊佐の話を聞いた勝と鉄舟は、放置しておけば深刻な事態に陥ると察知し、早速対策を講じている。牧之原の開墾事業は旧幕臣たちの意地と心意気を示す大事業である。それが内部崩壊のため、挫折するようなことにでもなれば、それを推進した徳川家重臣たちの威信にも関わりかねない。勝も鉄舟も推進派の一人として大きな責任を感じた。

二人は、内務卿の大久保利通に相談した。大久保の力を借りて資金を調達しようとしたのである。

大久保は、天皇の御内帑金（おないどきん）の中から二万円下賜されるよう取り計らった。

景昭は、胸を撫で下ろした。二万円のうち、静岡県庁への借金一万円を返済し、残りの一万円を荷美館の残金と合わせ、全員に分配することにしたのである。

勝と鉄舟は、さらに牧之原への「産業奨励金」として、三千円政府から拠出させた。この拠出金は、茶の事業だけでは、経営が成り立たない場合の他の事業への投資資金である。「この金を使って他の産業を興す努力をされたい」との意向を示す勝からの添書があった。

こうして、荷美館事件は、御内帑金によって大事にいたらずに決着を見たのである。

だが、入植者たちの生活は一向に楽にならなかった。世界の飲料の趣向が、大きく変わったのだ。米国や欧州は、コーヒー。英国、カナダ、豪州など英連邦は、紅茶へと変化して行くのである。

緑茶の輸出は、激減した。茶の輸出に限界を感じた勝は、牧之原の士族に、さらに新しい事業を興す資金にと千円を拠出し、離散を防ごうと努力している。折しも石油開発の夢が膨らもうとしている時であった。

(三) 石油に賭ける夢

牧之原に石油の鉱脈があるとの報せが、勝海舟より開墾士族にもたらされた。明治十二年二月のことである。

高重は、早速谷口原の景昭を訪ね、その開発について相談した。

「この牧之原のすぐ南の相良から臭水（くそうず）が出ている。牧之原一帯でも出るのではなかろうか。勝さんも有望であると報せてきている。お茶もこのところ売れ行きがよくない。勝さんの勧めに従って臭水を取り出す事業を興して

みたいがどうだろうか」

「それもよかろう。牧之原は、苟美館のことで入植者の心が離れかけている。生活も苦しい。臭水の事業で生活が楽になり、人心を取り戻すことが出来れば結構なことである。やってみよう」

景昭は、高重の発案に賛同した。苟美館事件の失敗を取り戻し、この事業の成功によって、人心の掌握を図りたいと考えたのである。

海舟からの情報によって、相良（現在は牧之原市の一部）のすぐ隣にある牧之原からも石油が出ると期待した高重は、同志から資金を集め、試掘してみた。牧之原の坂部村、舟木村、坂本村も掘って見たが、思惑通りには行かなかった。

資金が枯渇し、三千円の当初拠出金にも、手を付けてしまった。

谷口原の試掘の際に出た臭水を集め、高重は、勝を訪ねた。同席した榎本武揚を交え相談した結果、これ以上資金を投入し、失敗すれば茶の事業にも悪影響をもたらすとの結論に達し、中止となった。

もともと、相良での石油を発見したのは、旧幕臣村上正局（まさちか）である。

村上は、明治五年海老江村（相良町大江）の戸長富田伝吾郎の家に奇寓していた。その時、近郷で臭水が出ると聞いた。その現場に行って火を付けたところ一面が臭気と黒煙に包まれた。その結果を浜松県に報告し、調査官の派遣を依頼した。明治五年当時は、静岡県とは別に浜松県があり、相良は浜松県の一部であった。

ところが、現場に来た調査官は、松根油と判断したのである。

その判断に満足しなかった村上は、その液体を酒徳利に入れて静岡県庁を訪ねた。当時静岡県庁には、クラークという技師がいた。彼は、米国の石油と同質のものだと判断した。

村上は、早速地主から借地許可を受け、掘削に取りかかった。その情報を聞きつけて石坂周造が相良にやって来たのである。

「臭水に間違いない。これは職のない幕臣たちの救済事業となる」

村上は、当初、自分たちだけで事業を興そうとした。だが、資金がない。

「機械を入れて、大規模な掘削をしない限り、発展は望めない」

石坂の説得に応じ、共同で採掘事業を興すことに同意し、明治六年十月、日本で最初の機械堀の井戸が完成した。

石坂周造は、天保三年信濃の国水内郡桑名川村（現長野県飯山市）に生まれ、幼名を渡辺源蔵と言った。源蔵

は、江戸に出て、町医者立川宗達の弟子となる。その後、立川の師である幕府医師石坂宗哲の養子となり、名前を石坂周造と改めた。周造は、町医者をしていたが、石坂家に長男宗之助が生まれると養子である彼は、医師を辞め、心機一転、動乱の時代に身を投じ、尊攘運動にのめりこんだ。そこで清河八郎、山岡鉄舟、高橋泥舟などと知り合った。幾度か入退牢を繰り返すうちに、幕府は倒壊し、明治の世となっていた。

明治三年、周造は、山岡鉄舟の妻英子の妹桂子と結婚している。英子、桂子とも高橋泥舟の実妹であることから勝、高橋と義兄弟の関係となった。

周造は、後に長男の宗之助を山岡家の入り婿とし、山岡家との繋がりが、より深まっている。

石油との出会いは、偶然のことであった。

捕鯨事業に目つけていたある日、長野から石炭油が持ち込まれた。この石炭油は、将来日本にとってきわめて重要であることを友人の宣教師タムソンから聞いた周造は、明治四年、長野石炭油会社を設立して、同地で開発の準備を始めた。

しかし、翌年の明治五年、相良での石油発見のニュースを聞きつけ、相良にも関心を持った。米国から三台の採堀機を購入した周造は、明治六年九月、長野で試掘を試みたが、失敗に終わっている。だが、彼は、諦めなかった。かねて目をつけていた相良に機械を移動し、試掘したところ、一日に三石（五百四十リットル）の原油が湧き出たのだ。

こうして相良は、国内初の機械堀による石油の生産が行われることになったのである。この年、周造は、長男の宗之助を米国に留学させ、本格的な石油事業に乗り出そうとした。ところが、経営は火の車である。

明治七年から八年にかけて周造は、経営の建て直しを図るべく、米国に出張して、さらに採掘機二台を購入した。だが、その機械が威力を発揮する前に経営が悪化し、油田も人手に渡ってしまった。

周造は、帰国後、事業の再開を図ったが、明治十年には、長野製油所が焼失するという不幸な事件が起こった。このため、社長を辞任する破目になり、失意のどん底にあった。

そんな時一人の救世主が現れた。時の右大臣岩倉具視である。岩倉は、周造に三万円の資金を提供した。周造は、この資金をもとに東京を引き払い、相良に移住。長野石炭油会社の共同経営者である村上正局たちの協力の下に人手に渡った油田を取り戻し、石油事業に邁進した。

米国から輸入していた採堀機を菅ヶ谷に据付けた。その工事には清水次郎長も一役買っているという。

明治十四年五月、山岡鉄舟と高橋泥舟が、相良に来て一ヵ月周造と共に過ごした。その頃、周造の事業は、全盛期を迎えていた。

周造は、明治二十五年相良を去っている。経営不振による責任を取ったのだ。すでに彼は、六十一歳になっていた。盟友村上正局と長男宗之助をこの地で喪った周造は、その碑を残して失意のうちに相良を後にしたのである。

周造の事業にかける情熱は、相良を去った後も残っていた。新潟県の西山油田の開発に当ったのである。最後の人生を賭けた努力の甲斐あって、明治三十三年鎌田三号井が湧出して大成功を収めた。

だが、彼は、すでに六十八歳となっていた。周造は、その権利を地元の人たちに分け与え、石油業から手を引き穏やかな晩年を過ごしている。明治三十六年五月下谷西黒門町（台東区上野一丁目）の自宅で、七二年の波乱に富んだ人生の幕を閉じた。正七位を贈られ谷中全生庵に、義兄で盟友の山岡鉄舟の墓と共に眠っている。

勝海舟や大草高重が注目した明治十二年、相良には、二百四十余の手掘り井戸があり、油井小屋が林立していた。勝や高重が近隣の牧之原でも石油の鉱脈があると考えたのも無理からぬことであった。

遠州相良の地は、石油産地として全国にも知られ、町内には芸妓二十人余を数え、鉱山関係者で大繁盛を極めたと伝えられている。

明治十一年には、大隈重信も相良を視察し、増産を奨励している。明治十七年頃が最盛期で年間七百二百二十一、六キロリットルの生産量を誇っていた。

だが、昭和三十年に石油は枯渇した。

相良の油田は、その役割を終え、静かに眠っている。石坂周造、石坂の長男宗之助、村上正局の三人の碑が仲良く山裾に並んで、記憶のかなたに消え去ろうとする繁栄の跡をじっと見詰めて立っている。

（つづく）

関東管領始末記②

傀儡将軍の貴公子たち

千坂精一

一

鎌倉幕府の将軍候補として鎌倉入りした藤原道家の四男三寅は、七年後の嘉禄二年（一二二六）一月二十三日名を頼経と改めて僅か九歳で四代将軍に就任した。

ここに二代執権北條義時が要望した補佐役執権の意の儘になる傀儡将軍が実現して、執権政治が確立した。

三代執権北條泰時は、四年後の寛喜二年（一二三〇）十二月九日、十三歳になった将軍頼経に二代将軍源頼家の娘で二十八歳にもなっている竹御所を娶せた。

だが、執権職に重宝な幼将軍も成人すると自我が芽生えて判断力、批判力が備わり邪魔な存在になってくる。

二十七歳になった操り人形頼経に自分の意志で手足を動かす気配が出てきたので、泰時の孫四代執権経時は頼経の嫡男で六歳の頼嗣に将軍職を交代させた。

執権の勝手で廃立させられた頼経は憤懣遣るかたなく、出家すると〈大殿〉と称ばせて鎌倉に居坐った。

それが騒動の火種になった。

二年後の寛元四年（一二四六）三月二十三日に経時は病に倒れたので二十歳の弟時頼に執権職を譲った。

その一箇月後に経時は二十三歳の若さで世を去った。

すると、若輩時頼を侮った一門の有力者名越光時が不平不満の蟠る大殿頼経を擁して執権職奪取を謀った。

名越家の不穏な行動はかねてから燻りつづけていた。

というのは三代執権泰時が仁治二年（一二四一）六十歳で身罷ったとき、嫡男時氏はすでに十二年まえに二十八歳で死去していたので、十九歳の孫経時が継承した。

このとき、泰時の弟朝時は分家して名越家を興し北條

一門の最右翼だったので執権就任の好機だったのだが、二代義時の法号をとって〈得宗家〉と称する嫡流家が厳然として揺るぎなかったので無念の出家をしていた。

光時は、父朝時の悲願成就を謀ったのであった。

執権時頼はこの名越光時の謀叛を僅か二箇月で鎮圧すると、光時の伊豆配流をはじめ加担した千葉秀胤、三善康時らを追放して、不穏分子を幕府内から一掃した。

その後、大殿を自称する頼経は担がれたのではなく、光時と気脈を通じて〈得宗家打倒〉に積極的だったことが判ったので、執権時頼は頼経を京へ送還した。

累は頼経の父九條道家、兄摂政一條實經ら一族に及んだのだが、頼経の嫡男頼嗣だけは不問に付した。

頼嗣の妻が亡兄經時の娘檜皮姫だったので時頼が遠慮したというより、突然の暴挙だったので次の将軍候補がまだ念頭になく、やむなく執行猶予にしたのだった。

その翌年、つまり寛治元年（一二四七）六月に執権時頼は名越騒動の延長戦ともいうべきか、評定衆三浦光村と大殿頼経との密約説を口実にして三浦一族を挑発した。

乗せられた三浦光村は一族郎党を鎌倉に集結させた。

このとき、執権時頼は光村の兄泰村だけは討伐しないと約束したのだが、三浦一族と不仲の外戚安達景盛、義景父子らが断わりもなく泰村を襲ってしまった。

三浦泰村らは頼朝の墓所法華堂に籠もって防戦したが衆寡敵せず、一族近親ら五百余人は自刃して果てた。

執権北條一族と肩を並べるこの三浦一族を最後にして、有力御家人のすべてを抹殺した時頼は、ここに北條得宗家による鎌倉幕府の安定政権を樹立したのである。

二

それから四年の歳月が経過した。

建長三年（一二五一）の暮れも押し迫った十二月二十六日、思い掛けない風説が時頼の耳に入った。

将軍頼嗣が僧了行らと時頼排除を企んでいるという。

時頼はただちに密偵を放って不穏分子らの密会場所を突き止めさせると不意を衝いて将軍頼嗣、僧了行をはじめその場に居合わせた佐々木氏信、武藤景頼、矢作左衛門尉らを一網打尽にして陰謀の経緯を吟味させた。

その結果、僧了行らに支持されて将軍頼嗣自身が執権時頼排除の急先鋒であったことが歴然としたので、時頼は即座に頼嗣から将軍職を剥奪した。

そして翌年二月二十日、十四歳の頼嗣を京へ強制送還することにきめると、朝廷に対して、

「九條家との関係を絶つ」

ことを正式に申し入れた。

後深草帝の勘気に触れた九條道家は蟄居させられ、関東申次は西園寺實氏に、摂政は近衛兼經に代えられたの

で、失意した道家は体調を崩し六十歳で世を去った。

時頼は、執権就任当初から曽祖父二代義時が希んで果たせなかった皇族将軍のことを気にかけていたので、このたびの将軍の失態は朝廷側にあるこの機会に攻勢をかけて曽祖父義時の遺志を実現させようと思い立った。

そこで時頼は、さっそく執権補佐役の大叔父（祖父泰時の弟）連署極楽寺重時の加判をもって重時の嫡男六波羅探題赤橋長時から後嵯峨院に奏請させた。

時頼が、後嵯峨院を選んだのには理由があった。

それは、病床にあった祖父泰時から聴いた話である。

仁治三年（一二四二）正月九日四條帝が事故で崩御された。まだ十二歳の少年だったので皇子がなかった。

慌ただしく皇継問題が取り沙汰され、四條帝の外戚にあたる九條道家は順徳帝の皇子岩倉宮忠成王を推して西園寺公經ら有力公卿たちの賛同を得たので、親幕派であるところから執権北條泰時に経緯を急報で伝えた。

事態を知った泰時は、重大事だと深刻に受け止めた。

幕府にとって承久の乱の主謀者である後鳥羽院、順徳院の系統は断じて敬遠しなければならないのだった。

泰時は、あのとき討幕に与せず中立の立場を堅持した土御門院の系統から選ぶべきだと考えて、安達義景を使者に立てて上洛させると、忠成王擁立を制止して、

「これは鶴岡八幡宮の神意である」

ことを強調する高圧的な態度に出て、幕府は土御門院の皇子邦仁親王を推す意志を強硬に貫いた。

この泰時の強引な介入を先例にして、以後幕府は天皇の廃立にかならず干渉するようになってゆくのである。

遺恨の流れを断って安堵した泰時は四月に發病すると五月に出家したが、六月十五日に六十歳で世を去った。

つづいて順徳院が九月十二日に崩御されたので皇位継承を争った当事者がいなくなり、火種は消えていった。

このときの邦仁親王が、いまの後嵯峨院なのである。

後嵯峨院は、即位して天皇になれたことで幕府に深く感謝して、なににつけても好意的な態度をとった。時頼はそこに付け入って皇族将軍を要求したのであった。

打てば響く後嵯峨院の反応は早かった。

六波羅探題赤橋長時からの報告によると、後嵯峨院はわが子の将軍就任を承諾すると、二人の皇子の名を挙げていずれにするか決めよとの御下問があったという。

執権時頼は、年長のほうの皇子を迎えることにした。

これが鎌倉幕府初の皇族将軍になる宗尊親王である。

三

宗尊親王は仁治三年（一二四二）十一月二十二日、その年一月二十日に践祚し三月十六日に即位したばかりの後嵯峨帝の第一皇子として生まれ中書王と命名された。

生母は、藏人木工頭平棟基の娘棟子である。

中書王は、曽祖父後鳥羽院の寵愛深かった曽祖母承明門院の許で養育された。承明門院は内大臣源通親の娘で在子といい、祖父土御門院の生母であった。

中書王は、寛元二年正月、三歳のときに親王宣旨を下されて、以後〈宗尊〉と称されることになった。

その二年後の正月、父後嵯峨帝は宗尊親王の弟君第二皇子久仁親王に譲位して上皇となり、院政を布いた。

宗尊親王は第一皇子であるにもかかわらずなぜ皇位継承できなかったのか、疑問に思われる向きもあろう。

当時はおなじ父親の子でも生母の出自によって較差がつくといういまでは理解できない時代だったのである。

宗尊親王の生母は平棟基の娘であるが、久仁親王の生母は太政大臣西園寺（藤原）實氏の娘姞子だったのだ。

公卿の社会では、

「藤原にあらざれば人にあらず」

とまで一族が権勢を誇っていた名門なのである。

皇位継承できなかった宗尊親王は、翌年六歳のときに御高倉院の第一皇女式乾門院利子の猶子になった。

式乾門院は、丹波國何鹿郡八田郷（京都府綾部市）周辺に広大な荘園を所有していて死後は猶子である宗尊親王にすべてを譲与するというのだから、これなら皇位継承できずとも裕福で安穏な生涯を送れるはずであった。

余談だが、〈何鹿〉という地名について述べておく。

〈いかるが〉といえば現在法隆寺のある奈良県生駒郡斑鳩町のことで、むかしそこに聖徳太子が造営した斑鳩宮があったことからそれが地名になったときいていた。

ところが、奈良から遠く離れているこの綾部市周辺がなぜおなじ〈いかるが〉なのか不審に思って古書を調べてみたら、丹波地方に伝わる『丹波志』のなかに、

「この郡に斑鳩ことに多し。ゆえにこの名起これるならんと論じたり」

と記述されているという。

つまり、綾部市のほうはたまたまそこに斑鳩が群居していたことからおなじ地名になったようである。

話をもどす。

宗尊親王が猶子になって四年後の建長三年正月二日、式乾門院が身罷った。五十五歳の生涯であった。

翌年正月二十日、宗尊親王は十一歳で元服したので、やがては広大な荘園を相続することが確実になった。

そのころ、鎌倉幕府の使者として六波羅探題赤橋長時が、後嵯峨院に皇族将軍を奏請してきたのである。

三月十七日に仙洞御所に呼び出された宗尊親王は、父後嵯峨院から、

「関東下向」

を申し渡された。

宗尊親王が皇位継承できなかったことに同情していた公家たちは、鎌倉幕府将軍に乞われたことを悦んで、

「天皇になり給わずばこれより優ること何事かあらん」

たがいにそう言い合って、心から祝福したという。

宗尊親王は、荘園管理全般を取り仕切っている藏人の藤原修理大夫重房に側役として同行するよう命じた。

重房は、このとき宗尊親王から食邑（領地）として与えられた八田郷上杉荘の荘名をとって上杉左衛門尉重房と名告り、嫡男大膳大夫頼重にも宗尊親王が式乾門院の猶子になるまで養育されていた承明門院の藏人を辞任して同行できるようにとりはからってもらった。

上杉荘は、京都駅から山陰本線で綾部駅まで行って舞鶴線に乗り換え、渕上駅のつぎの梅迫駅で下車して北へ向かったあたりで、現在綾部市上杉町として残っている。

十九日早朝、宗尊親王は輿で仙洞御所を出立すると六波羅に入り、探題赤橋長時の先導で鎌倉へ向かった。

足柄峠を越えて関東へ入った一行は四月朔日鎌倉に下着すると、宗尊親王はひとまず執權時頼邸に落ち着いた。

その三日後、前将軍頼嗣が京へ強制送還されて行った。

四

宗尊親王が鎌倉へ下着してから五日後の四月五日、追っ掛け朔日付で征夷大将軍に任ずる旨の宣旨が届いた。

執權得宗家にとって念願の皇族将軍誕生である。

時頼は、曽祖父義時のたっての希いがここにようやく実を結んだことをよろこび、肩の荷をおろした。

これで幕府の権威は高まると同時に、公卿とも円滑にことが運ぶようになるだろうから一石二鳥であった。

それから四年後の建長八年（一二五六）、二代つづいた公卿の前将軍が相次いで身罷った。八月十一日に父藤原頼經が三十九歳で、つづいて九月二十五日には嫡男頼嗣が僅か十八歳で病歿したのである。

この年、執權時頼は赤班病（麻疹）や赤痢といった重病に罹って気弱になったのか、十月五日に改元された康元元年十二月二十二日に執權職を六波羅探題赤橋長時に譲ると、これまで寺領や堂塔を寄進した信仰あつい松田山中の最明寺（現足柄上郡大井町）に入り、道隆禪師の戒師によって出家し、最明寺入道と号した。

正元二年（一二六〇）三月十八日、十九歳に成人した宗尊親王は、北条時頼が手許において猶子にしていた前摂政関白近衛兼經の娘宰子を娶せられた。

これまでの単調な生活に色取りが添えられて身辺が賑々しくなり、新鮮な日々を送れるようになっていった。

側役の上杉重房は、鎌倉の生活に慣れて幕府の内情にも通ずるようになると、執權の意の儘にならぬ将軍は排除されることがわかり宗尊親王の安泰に苦慮した。

重房は政治的野心のまったくないことが保身の最善策と悟り、宗尊親王が暗君になりきることを考えた。

そこで重房は、宗尊親王に歌道、管弦、蹴鞠などを教えて文弱に流れるように仕向けた。公家社会出身の重房

はどれも嗜んでいたので自分自身もともに娯しんだ。
文学は政治に無害だからと文人将軍に育てていった。
その結果、實朝とまではいかぬが和歌将軍になった。
新年の歌会をはじめ、御所での和歌会、時宗邸での一日千首の続き歌会などが盛大に行なわれた。
宗尊親王は歌会での阿や迎合に飽き足らず、三百六十首を選んで京の冷泉爲家に送り、批評を請うところまでのめり込んでいった。こうなると趣味の殿様芸の域を脱して正真正銘の歌人だといってもけっして過言ではない。
こののめり込みは、上杉重房のほかには誰にも心を許せない孤独感のあらわれであったかも知れないのだ。
宗尊親王がそんな傀儡将軍の生活を送っているうちに歳月は過ぎ去ってゆき、弘長三年（一二六三）十一月二十二日に北条時頼が三十七歳で病死すると翌文永元年八月二十一日には赤橋長時も三十五歳で歿してしまった。
自分を皇族将軍に選んでくれた当時執権だった時頼と、六波羅探題で鎌倉まで先導してくれた長時の二人が世を去ってしまうと、支えを失った宗尊親王は躰の中を風が吹き抜けて行くような虚しさと不安におそわれた。
そんな落ち込んだ日々を送っていた宗尊親王だったが、昨年四月に誕生した若宮惟康親王が生育してゆくにつれてようやく心が晴れてきて、二十三歳で親になった自覚とともに徐々に不安な状態から立ち直っていった。

赤橋長時亡きあとの執権には叔父政村が、執権を補佐する連署には時頼の二男時宗が就いて新体制になった。
このとき政村は六十一歳、時宗は十五歳であった。
政村は、時宗の曽祖父三代泰時の弟にあたる。
政村の年齢からすれば隠退してもおかしくないのだが、執権を得宗家に戻すには時宗が若すぎたのである。
幕府首脳の顔触れが変わって宗尊親王の身にも変化が起こるかと思ったが、なにごとも起こらずにすんだ。
翌年の九月に姫宮掄子が誕生して賑々しくなった。
平穏裡に二十五歳を迎えた文久三年（一二六六）、突如として宗尊親王の身辺を揺るがす大騒動が起こった。

五

乳母日傘で大事に育てられた宗尊親王は、生来から虚弱体質だったようで、『吾妻鏡』のなかにもたびたび、
「御悩」
「御温気退散」
の記述が出てくる。
この年（文久三年）、正月十七日の鶴岡八幡宮参詣も体調が思わしくなく三十日に延引してしまった。
そして、その後も恢復が思わしくなかったらしく、
「御悩」
「御温気退散」

を繰り返し、四月にはついに病床に臥してしまった。
宗尊親王はこれまで医師を呼ぶことなく、もっぱら護持僧松殿僧正良基だけを侍らせて加持祈禱させていた。
それが誤解を招き、始祖朝時以来野心を抱く名越一族が宗尊親王を利用し、たびたび病気を装わせて良基に、
〈時宗呪詛、調伏の祈禱〉
をさせているとの風評が立った。
六月二十日、執権政村邸に連署の時宗、評定衆の金澤實時、安達泰盛の三人がひそかに集められた。
緊急招集の内容は、
〈宗尊将軍排除〉
の相談であった。
宗尊親王は、これまで文事遊芸好みの将軍で執権専制政治には無害だったが、成人してくると将軍を利用しようとする者が出てきて、危険な存在になってくる。
〈名越との不穏な風説〉
がその現われであった。
政村は六十三歳の老齢、時宗は十六歳の少年。宗尊親王と名越一族が結託して政村から時宗に執権を譲るまでのこの不安定期を狙われたら危険このうえなかった。
「禍の芽は早いうちに摘みとることだ」
政村、時宗、實時、泰盛四者の合意ははやかった。
この日、たまたま僧良基が高野山へ向かったのをさいわいそれを恰好の理由にして〈逃亡〉と極め付け、風説をまことしやかにでっち上げる行動に移った。
『吾妻鏡』はこのときのことを、
「廿三日　甲申　晴る。酉の剋、御息所ならびに姫宮にはかにもって山内殿に入御し、若宮相州の亭に入御す。よって人々多くもってかの所に馳せ参ず。およそ鎌倉中騒動す。その故を知らずと云々」
と変事の様子を記述している。
つまり、二十三日午後六時、御息所宰子と二歳の姫宮掄子は山内の別邸に、三歳の若宮惟康親王は時宗邸に移されて、宗尊親王の御所は厳重に包囲された。
ただならぬ出来事をききつけた近国の武士たちは、
「すわ、一大事」
と駆けつけてきて鎌倉は人馬で埋まり騒然となった。
『吾妻鏡』は、
「廿六日　丁亥　天晴る。近国の御家人蜂のごとく競ひ集まり、屋に餘り巷に滿つと云々」
と伝えている。
七月四日、将軍職を剝奪された宗尊親王は執権邸に移され、さらに越後入道勝圓（時盛）の佐介邸へ移された。
このとき側役の上杉重房は、宗尊親王から若宮惟康親王の傅役を命ぜられて、鎌倉に留めさせられた。
八日、宗尊親王は京へ送還されることになった。

その帰洛の輿はひそかに大倉幕府の北門から出た。
ひそかにといっても供は北條一門数名を含む武士十九名、雑兵四百余人という厳重な警護態勢であった。
鶴岡八幡宮の赤橋まできたとき、宗尊親王は輿を停めて若宮の方に向けさせるとしばらく祈念したあと、鎌倉を去るに当たりその想いを和歌に託した。

帰り来てまた見んことも固瀬川
　濁れる水のすまぬ世なれば

めぐり逢う秋はたのまず七夕の
　同じ別れに袖はしぼれど

詠みおえた宗尊親王は、輿を上げさせた。
行列は、窟堂のあるいわや小路から武蔵大路を経て西へ向かっていった。
宗尊親王の脳裡に十四年まえ鎌倉へ下着したとき入れ替わりに京へ送還されていった前将軍藤原頼嗣のすがたが浮かび上がった。あの轍を踏まされた思いであった。
傀儡将軍は幼少年期までで、成人すると個性が出て操り人形ではなくなるから、野心家が近づく危険が生じてくる。そこで執権は禍の芽を摘みとるべく謀叛の嫌疑をかけて抹殺する。それが傀儡将軍の辿る道であった。
宗尊親王も二十五歳の青年に育ったから幕府にとっては危険な範疇に入ってきたわけだ。そうでなくても次期執権になるはずの時宗より九歳も年長なのであるから、遅かれ早かれ廃される運命にあったのである。

六

『吾妻鏡』は、
「七月廿日　庚戌　天晴る。戌の刻、前将軍家御入洛、左近大夫将監時茂朝臣の六波羅の亭に着御す」
で終わってしまっていて、その後の宗尊親王がどうなったのか気掛かりだったので、あれこれしらべてみた。
その結果、わかったことはこうである。
七月二十日、宗尊親王は十四年ぶりに帰洛したが密かに六波羅探題北條時茂邸に入ったまま拘束されていた。
後嵯峨院は傷心の皇子が帰ってきたというのに、鎌倉から〈宗尊親王謀叛〉の報を受けていたので幕府と北條得宗家を憚ってか父子の対面を許さなかった。
宗尊親王は、二十四日に探題北條時茂から若宮惟康親王が征夷大将軍になったことを知らされたが、父とおなじ運命を辿るに違いないと思うと不憫でならなかった。
やがて幕府の拘束が解けた宗尊親王は、十月九日にいまは亡き承明門院の萬里小路邸に移って隠棲した。
育ての親承明門院は九年まえ八十七歳で歿していた。
幕府は余程後味が悪かったらしく、後嵯峨院に義絶を解くよう奏請すると、宗尊親王に領地を贈った。
つまり、賠償金を払ったのであろう。
宗尊親王は、後嵯峨院に対面を許されてようやく平穏

な生活が戻ってきたのだが、翻弄されただけで終わってしまった二十五年の歳月を思うと虚しさだけが残った。
失意のうちに詠んだ和歌がある。

猶たのむ北野の雪の朝ぼらけ
　跡なき事に埋もるる身は

誰かまた神のちかひを頼むべき
　われ無き名にてしづみ果てなば

この哀調を帯びた和歌が癒えぬ傷痕を現わしている。
それから二年後の文永五年（一二六八）正月二十四日に、後嵯峨院の長寿を祝う舞楽会が執り行われた。
宗尊親王は院の御所冷泉殿での会に参列して、圓滿院圓助法親王、高雄門跡性助法親王、聖護院覺助法親王、梶井門跡最助法親王、青蓮院慈助法親王らの弟君や妹君の綜子内親王らと邂逅できてひとときをたのしんだ。
その直後の二月七日、幕府から蒙古古世祖の国書を奏上してきた。
その内容は、
「大蒙古皇帝、書を日本国王に奉る」
ではじまり、高麗が蒙古に朝貢するにいたった事情を述べたあとで、
「問を通じ好を結び、以て相親睦せん」
と修好を要求し、
「兵を用うるに至りては、それ孰か好むところぞ」
そう軍事行動があり得ることを示唆して結んでいた。
後嵯峨院は連日評議を重ね、さらに伊勢皇大神宮に勅使を派遣して奉幣のうえ、返牒しないことに決した。
三月五日、幕府では突然時頼の二男で十八歳の時宗が執権になり、六十四歳の政村は連署に下がった。
翌年も朝廷は蒙古に返牒せず、三年後に返牒を作成したが、幕府はあえて送らずに握り潰してしまった。
外寇問題で国情騒然とするなか、文永九年（一二七二）二月十七日に後嵯峨院が五十三歳で崩御されたので、宗尊親王はその年の暮れに出家して院の菩提を弔った。
法号は覺恵と称した。
その二年後の文永十一年（一二七四）八月一日、宗尊親王は死出の旅に発った。三十三歳であった。
蒙古軍が壹岐、對馬を侵し、筑前（福岡県）に上陸してくる〈文永の役〉の二箇月まえのことである。
宗尊親王が猶子になった式乾門院の広大な遺産は、いったん姪の後堀河帝の皇女室町院曦子に引き継がれ、曦子の死後宗尊親王に返すという遺言をされたのだが、その室町院より宗尊親王のほうが先に死歿してしまった。
結局将軍職もまっとうできず、荘園主にもなれずにただときの権力者の都合に振り回されて中途半端で終わってしまった宗尊親王は、なんとも気の毒な人であった。
（了）

走る不動産（最終回）

三戸岡道夫

第十三章　バブル

月日は流れた。

『おごる平家は久しからず』というけれども、

（おごるバブルも久しからず）

で、あれほど燃え上ったバブル景気も、その膨脹の頂点ではじけると、あれよ、あれよというまに、景気は下降しはじめた。土地の値段も下がり出し、不動産業界にも暗雲が漂いはじめた。

不動産業者はあわてた。

しかしそれ以上にあわてたのは、不動産業者に金を貸している銀行であった。いや、銀行だけではない。住宅金融専門会社、抵等証券会社、リース会社など、ノンバンクを含めた金融機関があわてた。

バブル時代の不動産会社に対する融資のほとんどは、その会社の信用に対して貸すというよりも、不動産の担保価値を頼りに貸したものだったからである。返せないときは、担保の不動産を売ればいいという考え方の融資である。だから不動産の値段がたえず上りつづけているのが、絶対条件である。

ところがバブルが急にはじけて、不動産の値段が下ると、担保不動産の価格もみるみる下っていった。担保の目減りがはじまったのである。こうなると担保の不動産を売っても、銀行は貸出金を全額回収できないことになる。

こうして、銀行をはじめとしてあらゆる金融機関に、不動産業者に対する不良債権が山積しはじめたのである。

天山銀行日比谷支店とても例外ではなかった。貸付係の国友信彦は、バブルの最盛期には大口の不動産融資をぽんぽんやって、成績を挙げたが、バブルがはじけてからは、不良貸出をかかえて頭が痛かった。

今夜も銀行の仕事が終わると、国友信彦は渉外係の神川昇と一緒に、行きつけのスナックで、

「まったく、まいったよ」

と、やけ酒をあおっていた。神川もそれに調子を合せて飲んでいたが、

「国友さん。大願不動産もだめでしょうかねえ」

と救いを求めるようにそう言った。天山銀行の大願不動産への貸出は二百五十億円以上にもなっており、その中には国友が扱ったものも、神川が扱ったものもある。いわば二人とも責任があった。

「僕が大願不動産なんかを、神川さんに紹介しなければよかったんですよ」

国友は酔った顔を前後に振って、後悔するようにそう言った。

「いいえ、そんなことはありません。大願不動産のおかげで僕も成績を挙げたし、不動産金融というものを勉強させてもらいました。紹介してもらったことを、今でもありがたいと思っています」

神川はそこまで言うと、息をちょっとつめるようにして考えていたが、

「僕は大願不動産だけは、なんだか大丈夫だというような気がするんですがねえ」

「大願不動産だって担保の不動産が値下がりしているのは、他の会社と同じですよ」

「それはそうですが、大願不動産の八溝社長はしっかりしていますからねえ。まじめですよ。経営に誠意があります」

「まじめや誠意だけでは、金は返せないよ」

「それはそうですが……」

「神川さんは貸出金の怖さを知らないから、そんなことが言えるんですよ」

「考え方が甘いのかも知れません。でも…」

「…でも？」

「はっきりした根拠があるわけではありませんが……。でも、他の不動産会社は貸出金の分割返済が滞って、不良債権化しているのに、大願不動産だけは金利もちゃんと払っているし、返済も延滞していません。だから、なんとなく、うまくいくのかな…、と思ったのです」

「無理して払っているんですよ。そのうち正体が現れるよ」

「でも、大願不動産には含み資産がたくさんありますからね。最近の成り上がり不動産会社とはちがって、底力があります」

そう言われると国友も、

「うん、そう言われればそうだな」

と、いつか八溝社長の自宅を訪れたとき、応接室の壁に貼られた、大願不動産が所有しているビル群の写真を頭に思い浮かべた。

（ひょっとすると、大願不動産だけは不良債権にならずにすむかもしれないな）

と国友の中にも少し希望が湧いてきた。

翌日、天山銀行日比谷支店では、不良債権対策の緊急打合会が行われた。

その席上で寺島支店長から

「昨日、本部から、不良債権の現状と見通しを報告するようにとの指示があった」

と、日比谷支店の不動産貸出のリストアップと、その不良債権対策が言い渡され、

「極力、不良債権化の防止と、その回収促進をはかるように」

との強い指示があった。その中に大願不動産も入っていたのはもちろんだった。

その日のうちに一応のリストアップが出来上ると、もう翌日から、担当者はその回収交渉に貸出先へ出掛けていった。大口の貸出先へは支店長もいっしょに訪問するという、力の入れようであった。

大願不動産はその中でも、大口中の大口である。寺島支店長が先頭に立ち、貸付係長、国友信彦、神川昇がそれに従った。

四人がぞろぞろと、ミラーガラスで覆われたニュー日比谷ビルディングの六階にある大願不動産を訪れると、八溝社長の方から、

「やあ、支店長さん、ようこそお越しくださいました。実はわたしの方も近いうちに、ご相談に上がろうと思っていたところです」

と挨拶であった。寺島支店長は、

「…で、どんな相談を…？」

と一瞬、不安そうな表情を浮かべた。

「支店長さん、わたしは天山銀行さんとの取引を不良債権にしたくないのですよ」

その言葉を聞いたとき、寺島支店長の顔はぱっと明るくなり、

「ありがとうございます。それはわたしも同感です」

と二人で大声で笑いあった。

「まあ、どうぞお掛けください」

一同が応接セットに座ると、八溝社長の方から話を切り出した。

「ご承知のようにバブルがはじけて、不動産の値段が下りました。わたしが天山銀行さんへ差し入れている担保不動産も、計算し直しましたところ四十パーセントも下っており、担保不足でご迷惑をおかけしております。世間では、この担保不足をすぐ不良債権と称して、返済不能のように騒いでおりますが、支店長さん、ご安心ください。わたくしはお借りしたお金は絶対お返しいたします」

八溝社長はきっぱり言い切った。

「ありがとうございます。八溝社長さんの立派な経営哲学は、日頃よく拝聴いたしております。敬服いたします」

「そのように言われると困るのですが。…、ついてはそのための条件を二つほどご相談したいのです」

「ええ、なんなりと…」

「担保不足については、別の不動産を追加担保として差し入れます。わたくしのところには昔からのビルが沢山ありますから、それを差し入れます」

「それはありがとうございます」

そう答えると、寺島支店長は、

（最近は不良債権のどさくさにまぎれて、不動産を別会社に移して隠す会社もあるというのに、見上げた心掛けだ）

と感服した。

八溝社長は更につづけて、

「次に、借入金の返済期限を少し延長し、毎月の分割返済額が少し減るように、返済条件の変更をお願いしたいのです。バブルがはじけて、ビルの空室が増えてきました。その上、家賃も値下がり気味ですので、従来の返済条件ではきついのです。その点だけご配慮下されば、わたくしは責任もって借入金を返済いたします」

「わかりました。そういたしましょう」

「ありがとうございます」

「具体的にどのような金額にするかは、後日、貸付担当者の方とご相談なさってください」

二人のやりとりを側で聞いていた国友信彦と神川昇は、安堵感で全身の力が抜けていくようであった。

その日の夕方、国友信彦は大願不動産の折原一夫のところへ電話を入れた。

「今日は本当にありがとうございました。陰で折原さんが骨折ってくれたのでしょう。お礼を言います」

「いやあ、わたしなどの出る幕ではありません。すべて八溝社長の考えです」

「どうです、今夜一杯やりませんか。神川も一緒にうかがいます」

「いいですね」

「じゃ、味幸で待っています」

味幸は、いつか折原一夫がヒョットコ踊りを見せた小料理屋である。国友と神川は、仕事の後片付けもそこそこに、味幸の二階へ駆けつけた。

やがて折原一夫が現れると、

「では、乾杯！」

三人は冷えたビールを一気に飲んだ。

飲むほどに、酔うほどに、やがて国友信友は上衣のポケットをごそごそやって、

「折原さん、これ覚えているでしょう」
と手拭いを取り出した。
「あっ、ヒョットコの手拭いですね」
「いつか折原さんからもらった手拭です」
「まだ持っていたんですか」
「今日は僕がヒョットコ踊りを踊ります」
そう言って国友信彦はヒョットコが描かれた手拭いを顔にかぶると、身ぶり手ぶりおかしく踊り出した。

はあー、おどり踊るなら
チョイト　バブルで踊ろ　ヨイヨイ
泡とバブルは　泡とバブルは　もうないよ
土地が値下(さが)れば　ヨイヨイヨイ
土地が値下って　困ったね

（終）

化粧のルーツを訪ねて（一五）

第十一話　化粧品と化粧のルーツ

鈴木守

先報において、化粧が推定されている最も古い資料として三五万年前頃のテラアマータ原人の赤土使用が登場したが、更に古くは一五〇万年前頃に日焼け止めの化粧が行われていた可能性も窺われた。また、サルの時代に化粧行為に必要な形質を既に獲得していたことも述べた。

今回は、二〇世紀後半から今日に至る間に発見された化石人類の情報を加えて、化粧品と化粧のルーツについて言及し、次いで早期人類の化粧文化の変遷を考察して『化粧ルーツ探訪記』の幕を閉じることにする。

第一節　化粧品ルーツ論二題

一九八七年、著者は『化粧品技術者会研究討論会』において『化粧品ルーツ』の仮説を発表したが、それに先立って、コードウェル女史が一九八三年に『化粧の心理学シンポジウム』で化粧品ルーツ論を提出した。

ところが、一九八四年に発見され一九八八年に発掘が完了した前出のツルカナボーイの出現で両説とも過去のものとなったが、初期人類の化粧を知るうえで貴重な情報を提供してくれるので、両説の論旨を紹介する。

一　コードウェル説の要旨

コードウェルは、「約一五〇万年前頃の原人が赤土の創傷治癒効果を偶然発見し、赤土を塗り始めたのが人類初の化粧品であったと思われる」と説き、更に初期人類における体毛の退化と汗腺の発達を述べ、「狩猟採取の生活をしていた裸の猿は、草木による切傷、動物による

掻傷と咬傷、石器による打撲、あるいはサンバーンを受けるので、赤土や黒色マンガンを創傷治療薬やデオドラントとして使用したのが化粧品のルーツである」と論述した。なお、サンバーンは赤くなる日焼けで、黒くなる日焼けをサンタンという。

二　自説の概要

著者は化粧品技術者の立場から、ヒト皮膚に及ぼす紫外線の影響を基盤におき、体毛の退化、光防御の手段を論じたうえで、「われわれの先祖が"毛物"でなくなったとき、光などの侵襲的な環境から皮膚を保護する目的で泥土を塗布したのが化粧品の始まりである」と主張したのである。

三　両論の検証

コードウェル説と自説の是非について検証すると、先ずコードウェル女史は一五〇万年前頃のガダブ遺跡で発見された赤土を根拠に「ヒト皮膚に対する赤土の創傷治癒効果の発見により、化粧品の最初の使用が始まった」と述べている。一方、自説では「日焼けから皮膚を保護する目的で泥土を塗布したのが化粧品の始まり」とした。他人の主張を論うようになるが、創傷治癒効果よりも日焼け防止効果の方が発見し易いことは明白であり、そのうえ、赤土よりも泥土の方が広く分布するので、接触の頻度が多いなどの理由により、泥化粧が先行し、その結果として、赤土による創傷治癒効果を発見したと考える方が自然である。なお、創傷治癒効果発見の経緯については第三節で触れる。

次に自説では、泥土による光防御の発見を「われわれの先祖が毛物でなくなったとき」としているので、体毛退化の時期について検討すると、前出のツルカナボーイが現代人的な無毛性を獲得していたと推察されているので、遅くてもボーイが生存していた一五三万年前頃には泥土による日焼け止めが始まっていた可能性が高い。

第二節　化粧のルーツ仮説

第一節で述べたコードウェル説と自説は一九八〇年代に提出された仮説である。その後、現在までのほぼ三〇年間に化石人類に関する資料が幾つか発見されているので、それらの資料を含めて、『化粧ルーツ探訪記』の主題である『原初の化粧品』と『化粧の発祥』について論述する。

一　原初の化粧品

第一節にて、化粧料の歴史は一五三万年前頃まで遡ったが、前述したように化粧行動で最も重要な塗布行為を導く形質はサルの時代に既に成立していたので、塗布行為を惹起させる契機について検討し、化粧品誕生の時期に迫ることにする。

最初のホモ属といわれている二五〇万年前頃の原人は既に肉食を始めていた。彼らは手や体に獣脂や血糊がへばり付くのも構わず屍肉を貪ったであろう。そして、原野を跋渉していると、獣脂が付着した部分に泥がくっついたに違いない。そのような体験を積み重ねて、泥が付着した皮膚は日焼けし難いことに気付き、それが契機となって、体中に獣脂と泥を塗ることによって日焼けを防ぐようになったと思われる。

結論的にいえば、「二五〇万年前頃の原人が光遮断剤の泥と付着剤の脂による泥膏をサン・スクリーン剤として用いたのが人類初の化粧料となった」と推測したのである。

二　化粧の発祥

以前、ガリヴァ旅行記の映画を見た。スイフトの原著には書かれていなかったように思うが、映画ではガリヴァが言葉を話す馬の国フウイヌムに辿り着くと、未開人のようなヤフーの女たちに襲われた。彼女たちは泥沼から飛び出してきたのである。それとは別に、現代ハイチのブドゥー教の信者は泥沼に浸ってトランス状態になり、神と交信している。このようなシーンを見るにつけ、前項の泥化粧と水浴を関連付けて考えてしまう。泥化粧と水浴の結び付きはさておいて、化粧料抜きの化粧行為・水浴について論及する。

水浴に関する最も古い知見は、古代インダス文明・モヘンジョダロの浴場跡であった。しかし、ニホンザルの水浴については既述の通りである。石器時代の水浴の証拠はないが、サルの水浴から想像して、早期人類も契機さえあれば水浴したはずである。したがって、水浴を導く動機を探ってみよう。

ヒトの定義は『直立二足歩行』であり、二足歩行はエネルギー多消費型の運動である。故に、エネルギー消費に基づく体温上昇を抑制するのに、例えば、エンジンを冷やすラジエーターのように、ヒトは全身に汗腺を発達させ、発汗によって体温調節をするようになった。ところで、手掌と足底の汗腺はサルの時代から備わっていたが、樹から地上に降り立った当時の猿人が、全身に汗腺を備えていたとは思えない。だが、一五三万年前頃のツルカナボーイが発汗による体温調節機能を有していたと推定されているので、初期原人の時代には汗腺が全身に発達していたであろうが、猿人の時代は汗腺の発達段階で、まだ未完成の状態だったに違いない。

汗腺の発達が不十分だった猿人たちは、それでも二足歩行を完成させ（二足歩行の完成が汗腺の発達を促したかも知れないが）、河辺林を伝って草原に進出し、水辺を生活拠点にしたといわれているので、恐らく彼らは足

を水に浸して川を渉ったはずである。その時の足に残る冷い感触が記憶され、草原を跋渉して火照った体を水浴によって冷やしたに違いない。発汗システム未整備の彼らにとって過熱した体温調節は生理的な欲求であったと思われるが、水に浸れば清涼感を味わえ、浴後には乾燥した肌を潤すことができたので、機会さえあれば水浴に励んだことであろう。

化粧行為について補足する。化粧というのは、美の演出とか実用などの目的を持って、人類特有の肉体的表相を後天的、人為的あるいは意図的に変改する風習である。このような定義でみると、前述の生理的欲求に基づく水浴は人為的あるいは意図的という要件に欠けるので、化粧行為とすることに躊躇(ためら)いを覚える。だが、生理的なものであっても、肌に清涼感や潤いを与えるため、意図的に水浴を継続すれば化粧行為と見做し得る。

横道に逸れるが、本能的行為をみると、例えば、食本能では食事により充足感あるいは満足感及至は安堵感が、性本能では特有の恍惚感が得られる。このような感覚はそれぞれの本能を刺激・促進させ、生物独自の自己保存と種属維持を保っているのである。このような見方からすると、発汗機能が未完成の猿人にとっては、水浴行為は自己保存上の必須の行為であり、清涼感は水浴をアクセルレートさせる役割を担っていたといえる。したがって、猿人たちは水浴せざるを得なかったと確信する次第であり、この水浴が人類最初の化粧であったと推定するに至った。

水浴の初まった時代についてである。猿人の時代は極めて長く、人類の歴史の半分以上は猿人の時代であるから、いつ頃の猿人が端緒を開いたのだろうか。この鍵を握るのは、エネルギー多消費型の直立二足歩行の完成ではなかろうか。現在知られている最も古い七〇〇万～六〇〇万年前頃のサヘラントロプスまで遡るとは思えない。二足歩行を実証する証拠が一九七八年にタンザニアのラエトリで発見された。この証拠は三五〇万年前頃のアファール猿人が、未だ固まり切らない熔岩の上を歩いた足跡の化石である。この化石の歩行状態から、現代人的な二足歩行をしていたと想定されているので、この時代の猿人はサバンナの原野を跋渉できたはずであるから、火照った体を水浴によって冷やし初めたとしても不思議ではない。かくして、化粧のルーツについて、「三五〇万年前頃のアファール猿人が行なった体温調節のための生理的な水浴が契機となって、皮膚の清涼感と潤いを目的とした水浴が、人類初の化粧として登場した」という仮説を設定することができた。

第三節　化粧文化発展の歩み

前節にて化粧と化粧料のルーツについて述べた。本節では、原初の化粧と化粧料がどのように発展したかを示すことによって、自説の妥当性を強調することにしたい。

最初に、原初の化粧と化粧料から石器時代を経て古代社会に至る過程で、どのように進化したか自論を述べ、次いで具体例として、あくまでも推論であるが、原初の化粧として推定した水浴および化粧料の泥膏から、現代化粧の中心になっているメークアップ化粧ならびにスキンケアの基礎化粧と清浄化粧に向かう様子について想像を巡らすことにする。

一　化粧の発祥と進化・その概要

化粧品技術者だった著者の経験と勘でいうと、化粧や化粧料の発祥というのは、あまりにも高度な使用目的とか複雑な処方で初まるはずがない。極めて単純かつ素朴な行為を想定すべきである。例えば、本能的あるいは生理的な現象として自然発生するか、または、日常的に発生する反応の抑制を経験的に感知した場合のように思える。したがって、「原初の化粧目的は、本能的もしくは生理的な行為が契機になるか、あるいは極めて単純な実用目的でなければならない」と、そのように考えているのである。したがって、このような考え方に基づいて、原初の化粧発生の契機として、生理的な意味の水浴を考え、人類初の化粧料として実用的な日焼け止めの泥膏を推定したのである。

原初の化粧や化粧料がスタートした後、資料的には暗黒の石器時代を経て古代社会に入ると、前稿で述べたように、本能的あるいは生理的、実用的な化粧目的以外に、表示、美の演出、または宗教的（呪術的）な目的で化粧が行われており、化粧種には、清浄と基礎化粧のスキンケア、顔面と全身の彩色、ポイント化粧などのメークアップ料のほかにも、毛、爪、歯の化粧、更に香り化粧、入墨等々があった。化粧用の素材も、鹸化剤のナトロン、石鹸を始め、各種の着色顔料、動物脂、植物油、香料などが使われ、剃刀や櫛、カール鏝(こて)のような化粧用具、垢擦りや楊子などの洗浄具も使われていた。

このように多種多様な化粧、化粧料あるいは化粧用素材、化粧用具が生じた背景には、思考能力の発達や美意識、宗教心の発生、言語能力の確保など、初期人類の形質進化が基盤となって、それぞれの地域の生活環境（気候や地勢的な自然環境および風俗・習慣のような人文的環境）は元より、政治や流通、人種の混淆(こんこう)などの諸条件の影響を受けながら、長い歴史の中で化粧目的を分化させたり、新規素材を利用したりして、経験的に進歩発展させ、現代風な化粧の素地を作り上げてきたことは疑いのない事実である。

二　赤化粧への進化とその後

二五〇万年前頃の初期原人が、日焼け止めに泥と獣脂

から成る泥膏を使い始めたのが原初の化粧料であり、この泥化粧から赤化粧が分化したことは既に述べた通りである。この項では、赤化粧の分化の過程と赤化粧の発展について話を進める。

泥土の一種に赤土がある。初期原人たちは赤い泥を塗ることもあったはずである。その結果、赤土を使うと普通の泥よりも日焼け後の火照り（ヒリヒリ感）が軽いことに気付いたに相違ない。赤土の主成分赤酸化鉄（ベンガラ）は、現在でも日焼け後の火照り鎮静剤としてカラミン・ローションに使われている。かくして、赤土が珍重されるようになり、一五〇万年前頃に至ると、コードウエルがいう赤土の創傷治癒効果を体験したのであろう。赤土の傷を癒す効果は鉄イオンの収斂性や静菌作用に基づくのであろう。

話は飛ぶが、「人類は本質的に抽象能力や宗教意識を持っており、人類は出現すると直ちに宗教的行動や神聖な領域を意識するようになった」といわれているので、原人の時代には魔界の存在も感じ始めたと考えざるを得ない。彼らは目に見えざるもの、認識し得ざるもので身体に害を与えるものを魔物と考えたに違いない。したがって、紫外線や病原菌の存在を知らなかった彼らにとって、紫外線や病原菌は魔物そのものだったであろう。

魔物という概念を抱けば、日焼けを防ぎ、傷を癒す赤土を魔除けの護符に位置付け、更に、日、火、血の色である赤に霊力を感じたとしても不思議ではない。それ故、一五〇万年前頃のガデブ遺跡の赤土も魔除けの護符だったに相違ない。

魔除けの赤い呪符を得た原人たちの一部が赤い泥膏で身を守ってアフリカを北上し、一〇〇万年前頃には第一次出アフリカを果たしてユーラシア大陸へ進出した。

南欧に居を定めた原人たちは、七三万年前頃のイタリア・イゼルニア遺跡に赤土を施した石組みを残し、三五万年前頃のテラアマータ原人は赤化粧を施した。恐らく、イゼルニア原人は魔物の侵入を防ぐために住居の出入り口に赤い石を配したに違いない。また、テラアマータの赤土は鉛筆の芯のような塊といわれているので、全身彩色ではなく、目、鼻、口を赤く彩って除災招福の呪符とし、猟の安全や豊猟を祈願したのであろう。

このような赤の霊力を信じた原人の呪術は旧人型サピエンスを経て、第二次出アフリカを達成した新人型サピエンスに伝承したと推察される。その証拠として、後期旧石器時代のアルタミラ洞窟やビレンドルフの石のビーナスに呪術的な赤化粧の形跡が残されており、東アジアに拡散したグループは、一万八千年前頃の中国周口店上洞や縄文遺跡三内丸山で遺骸の周りに赤い粉を撒いていた。石器時代以降のわが国には、弥生時代の吉野ヶ里、三世紀の卑弥呼、古墳時代の埴輪などにシャーマンの赤化粧が認められているので、アフリカの初期原人が開発

した日焼け防止の泥化粧が呪術的な護符として赤化粧を分化させ、日本の古墳時代まで連綿と続けられていたと推論したのである。

呪術的な赤化粧とは別に、日焼け止めの赤い泥膏から美的目的の赤化粧が分化した可能性もある。既に述べたように、前期旧石器時代晩期には美意識の萌芽が窺われ、中期旧石器時代のブロンボス洞窟には、身体彩色用の赤土の塊と貝殻のビーズがあった。装身具を纏い赤土で彩色したのであるから、この赤化粧は美の演出のために行ったと考えざるを得ない。この可能性を支持する証拠として、後期旧石器時代五万年前頃のケニアの遺跡からダチョウの卵殻で作ったビーズが出土しているので、アフリカに止まった祖先たちは七万年前以前には美的な化粧を施していたと推測しても許されるのではないか。

第八話で紹介した古代エジプトの顔料リストには赤色顔料以外の顔料も見られ、また、人種混淆による皮膚色の変動が彩色の動向にも影響を与えていたので、古代社会では、それぞれの地域固有の彩色化粧が行われ、恐らく、クレオパトラの頃までには、現代メークアップ化粧の基礎ができ上がっていたのではなかろうか。

三　獣脂→香膏→クリームへの道

第八話で古代エジプト人が使った化粧品原料をリストアップしたが、その中から基礎化粧品に使ったと思われる素材を取り挙げると、アンテロープ、牛、ガゼル、カバ、鴨、猫、羊、豚、蛇、ライオン、鰐などの動物脂、ならびにアーモンド、亜麻、オリーブ、胡麻、大根、紅花、ヒマ、椰子、レタスなどの種子油のほかに、人乳、テレピン油、ナトロン、蜂蜜、蜜蝋、ロバの乳などがあった。

また、後期旧石器時代の洞窟壁画には狩猟や蜂蜜採取の様子が描かれているので、古代社会で使われた原料成分のかなりのものが石器時代から利用されていたと考えるべきであろう。ましてや、チンパンジーが油ヤシの実を石で叩き割っている映像を見るにつけ、その思いを強くする。

したがって、泥と獣脂を混ぜた泥膏を原初の化粧料と推定したので、この泥膏を起点にして、基礎化粧料、主としてクリーム誕生までの経緯を類推すると、二五〇万年前に泥膏を使い始めた初期原人たちは、この泥膏を使っているうちに経験的に獣脂の肌荒れ防止効果に気付いたはずである。獣脂の肌荒れ防止効果を知った原人たちは、屍肉漁りから狩猟採取の生活に入ると、恐らく泥膏とは別に、狩りで得た動物脂や採取した種子油を肌荒れ防止に利用し始めたことであろうし、後期旧石器時代には蜂蜜を塗ったかも知れない。また、旧石器時代から新石器時代までの長い歴史の中で培った石器進歩の跡を眺めると、古代社会に向けて化粧料素材の枠を徐々に広げ

て行ったことを思わざるを得ない。言い換えれば、古代社会において化粧文化が一気に開花したとは考え難いのである。

古代に至ると、動物脂や植者油に香りを添えて香膏や香油を作るようになったことは確実であり、第八話で考察したように、古代エジプトではナトロン水を加えて乳化型の香膏や香油を開発したと推測される。その後、二世紀にはガレノスがコールドクリーム製作に初めて成功したことは前出の通りである。彼のコールドクリームを想像すると、蜜蝋については先のリストにあり、ホウ砂の歴史も古く、且つイタリアのトスカナで産出しているので、蜜蝋とホウ砂でクリームを作った可能性が高い。

古代を過ぎ、中世から近世を経て、自然科学が勃興した近代においても、化粧用素材の進歩に関する情報は乏しかった。その例を挙げると、著者が駆け出しの頃、昭和三〇年前後の時代には、古来から続けられてきた蜜蝋とホウ砂のコールドクリーム、ステアリン酸と水酸化カリウムによるバニシングクリームが主流であった。

その後の進歩を著者の印象で記すと、「昭和三〇年代以降に合成化学が充実すると、新規な乳化剤や合成油剤が入手可能になり、加えて製造技術や品質評価技術の長足な進歩もあって、著者の定年前の頃には、わが国のスキンケア化粧品は品質的にみても、欧米の化粧大国を凌駕する水準になったといっても過言ではない」と断言できる。

四　水浴と清浄化粧

水浴と清浄化粧に関する直接証拠としては、古代社会に至ってモヘンジョダロの公衆浴場が登場するが、それ以前の石器時代には、浴場跡は見当たらず、ラスコーやアルタミラの洞窟などの壁画にも水浴の光景は描かれていなかった。加えて世界大百科事典（平凡社、一九七二）の中で江上波夫は「中期旧石器時代人は、原始人の常として清潔の観念がなかった」と著わしていたため、古い時代の先祖には水浴の風習とか清浄化粧の習慣は不在であると長い間決め込んできた。

ところが、二項で述べたように、七万年前以前の美的な化粧が示唆されたので、美意識成立と相前後して清潔の観念も生じたはずであると考え、「人類初の化粧としてアファール猿人の水浴」を想定したのである。この項では、猿人の水浴を化粧行為の発祥と設定し、後世の清浄化粧へ進化する過程を考察することによって、化粧ルーツに関する自説の正否を検証することにしたい。

先ず、古代社会の水浴を振り返ると、エジプト婦人の水浴、モヘンジョダロの公衆浴場があり、史実とはいえないが、神話伝説では、黄泉から帰ったイザナギが禊の水浴をし、殷朝の契誕生の件に母簡狄の川遊びが語られ、ギリシャ神話は出産の守護女神アルテミスの沐浴を物語

っている。因みに、遊泳に関する最古の記録は約三千年前のアッシリアのレリーフであり、空気を満たした革袋にすがって手足を動かしている兵士の姿が彫られているという。

石器時代の水浴を示す直接証拠はなかったが、神話に石器時代の水浴を想像させる物語があった。ヘブライの神話に現れるエデンの園である。この神話では「ノアの子孫はシナル（シュメール）の地に平野を得て…」と語っているので、創世記のアダムとイブは石器時代人でなければならない。ミケランジェロの『蛇の誘惑』やティツィアーノの『人間の堕落』には裸身のアダムとイブが描かれている。彼らの絵をみていると、「エデンの泉で水浴びし、禁断の木の実を楽しむアダムとイブ」を想像してしまう。この想像を手繰り寄せると、ヘブライ人の元祖は裸身で過ごす熱帯あるいは亜熱帯地域で出生し、水浴の習慣を身につけていたという推論が導かれる。

この推論は兎も角、早期人類の水浴について考察しよう。直立二足歩行を始めた猿人が、生理現象として体温調節のために水浴を行ったのを契機として、肌の清涼感と潤いを求めて水浴したのが原初の化粧であると推定され、初期原人の頃になると、全身に汗腺が発達し、生理的な体温調節と肌の潤いについての意義は薄れたと思われるが、清涼感享受に基づく水浴が続けられ、水浴によって身綺麗になることも感じ始めたであろう。原人から旧人型サピエンスに至る頃に、美意識とともに清潔の概念も育まれ、水浴が清浄化粧へ進化したと推察される。

その後、アフリカで誕生した新人型サピエンスは前時代からの伝統を守り、古代のエジプト人、ヘブライ人、シュメール人の祖に引継ぎ、先述のような神話伝説を残した。古代社会なおいては、モヘンジョダロやローマに公衆浴場を設営し、エジプトやローマでは、美容やスキンケアの第一歩は水浴であるとしていた。その証拠に方解石末や籾殻粉のような研磨剤を配合したクレンザーとか、油脂と石灰で作ったクレンジングクリームを塗り、肌掻きを使って垢を落としていたので、古代地中海地域の人たちは、清浄目的の水浴を美容やスキンケアの目的にまで範囲を広めたのである。

古代インドでは他の地域よりも水浴が盛んに行われ、マウルヤ朝以降、庶民階級の人たちでも内湯や水槽、井戸、川で沐浴し、鰐の歯や布に賦香した籾殻粉や粘土を付けて体を洗っていた。クシャン朝前後の頃には歯を磨き、呼気に香りを与え、グプタ朝の頃には、ヒンズー教徒の沐浴風習が始まった。

高温多湿のインドでは、生理的に水浴を求めたかも知れないが、この気象条件は細菌の繁殖に好適であり、水浴は衛生を目的に発達したと思われる。このように洗浄行為に浄化の思想が加えられると、宗教的な意味を持った斎戒沐浴が行われるようになった。この傾向はエジプ

トのファラオと神官、ならびにキリスト教の洗礼にも認められ、日本でも神頼みの人たちは、斎戒沐浴と称して水垢離をしている。

これまでは冷浴を主体に述べたが、水浴には温浴もみられた。例えば、ローマのカラカラ浴場、『長恨歌』に詠まれた楊貴后の温浴、『日本書紀』に記載されている有馬、道後などの温泉である。ということは、冷浴は熱帯・亜熱帯地域が主体であり、温浴の風習は主として温帯圏で発展した水浴方法であると思われるので、気温に基づく地域差に注目せざるを得ない。したがって、今一つの気候環境である寒冷地の水浴に興味が持たれる。

これまで、古代以前の化粧文化について縷々述べてきたが、寒冷地の化粧について全く触れてこなかった。だが、「中世ヨーロッパ人は水浴しなかった」という記載を屢々目にするので、その理由について考察する。中には「清潔の観念を持たない野蛮なゲルマン人の風習」と解説する人もいるが、ゲルマン人の故地の気象環境を考慮することなく、"野蛮"と言ってしまえば、「はい、それまで」で終わってしまう。

ゲルマン人の祖国はバルト海沿岸であり、寒冷地で過ごしたゲルマン人は、水浴によって体を冷やす必要がなくなり、生理的な水浴習慣が退化してしまい、その上、寒冷地における細菌の繁殖も少ないので、衛生目的の水浴についても彼らの思考の対象外だっただろう。その他の要因もあろうが、このような理由で、ゲルマン人が支配した、特にアルプス以北のヨーロッパでは水浴風習が衰微し、清潔の観念も育たなかったに違いない。

また、本項冒頭で「中期旧石器時代人には、原始人の常として清潔の観念がなかった」と述べたが、中期旧石器時代の後半は間氷期から氷期へ向かい、ヨーロッパでは寒冷化が進んでいたので、中世のヨーロッパ人と同様の理由で、清潔の観念が育たなかったのではないか。

かように、気象環境が各地域の水浴や清潔の観念の醸成に強い影響を与えることが推認できたので、この現象を中心に清浄化粧の進化の歴史を顧みると、「猿人の時代に生理的な体温調節の水浴を契機として、肌の清涼感と潤いを求めた水浴が誕生し、原人の時代には清潔の観念を萌芽させて清浄目的の水浴に進化させた。ホモサピエンスの時代に入ると、高温多湿の環境では衛生上の水浴が盛んになり、温帯圏の住人は冷浴を温浴に変え、文化的環境が高まるとともに、清浄化粧を美容やスキンケアの第一歩として活用するようになり、今日風の清浄化粧へと進めてきた。しかし、寒冷な環境下では、生理的な水浴や衛生的な清浄の必要性が少ないため、熱帯圏の先人が確立した水浴風習を退化させ、またヨーロッパの中世社会では、北方民族の侵出により水浴習慣の一時的停滞を招いた」と、このような図式を思い描いたのである。

後記

化粧品ルーツ探訪に先立って、数冊の化粧史の書を繙いてみたが、その多くは古代オリエント以降の化粧に触れるのみで、化粧文化が古代オリエントで一気に開花した印象しか与えなかった。しかし、化粧は"塗る"という極めて単純な動作で達成できるので、古代エジプト化粧のような高度な化粧文化が、その時代にいきなり発祥したとは考え難かった。そんな思いを抱いていたその当時、樋口清之が『化粧文化一号、一九七九』にアルタミラの赤化粧を取り上げて、「これは現在最古の化粧であるが、化粧発祥の証拠ではない」と述べていたので、古代以前の化粧や原初の化粧に挑戦する意義を再認識し、"化粧品のルーツ"について化粧品技術者会で発表したが、その仮説を更に進めて、"化粧のルーツ"を定年後の研究課題にしようとして、資料集めに専心してきた。

かように著者本来の課題は、資料的に未開の時代の化粧、就中、化粧のルーツを追い求めることにあった。そのためには、化粧史を過去に向けて外挿したうえで、人類進化の過程をホモサピエンスへ向かって内挿し、両者の交点付近に原初の化粧あるいは化粧料の姿が浮かび上がるのではないかと予測して化粧ルーツ探索の旅を続けた。その結果、原初の化粧料は"二五〇万年前頃の原人が使った光防御の泥膏"であり、"三五〇万年前頃のアファール猿人が行った水浴"が化粧の創始であるという仮説に辿り着いたのである。

稿を閉じるに当たって思うことは、戦中戦後に教育を受け、真っ当な歴史を学んでいないにも拘らず、"盲蛇に怖じず"を地で行く、化粧史探索の旅に出立したのである。幸いなことに『化粧文化』の編集長だった故村沢博人君が『化粧史文献資料年表』やコーソン著の『メークアップの歴史』の翻訳書など数多くの参考資料を残しておいてくれたので、初志を貫くことができた。ここに、村沢君の御冥福を祈るとともに感謝の意を捧げる次第である。

参考文献

鈴木守、化粧品技術者のみた化粧品のルーツ（仮説）、日本化粧品技術者会雑誌二二巻二号、一九八八

コードウェル著、早川律子監修、古代化粧と現代的変化、化粧の心理学、週刊粧業、一九八八

ファッキーニ著、片山一道監訳、人類の起源、同明舎出版、一九九三

河合信和、ネアンデルタール人と現代人、文春新書、一九九九

諏訪元、アフリカ文明の曙、新書アフリカ史、講談社現代新書、一九九七

［完］

河童の初恋（三）

鍋屋次郎

ジュニア将棋大会で二年連続優勝して、プロ六段をも破った、小学校五年生の少女宮川ちずこが、人間でなく六歳の河童であることを知った将棋連盟は、緊急役員会を開催して対応を協議した。結論は

「将棋連盟としては、正体の分からない動物との将棋は一切行うべきでない」

と決定した。

しかし、連盟所属のプロ棋士の中には、今迄の宮川ちずこの新手戦法を評価して将棋の新手研究のために対局しても差し支えない、というよりも積極的に対局すべきである、という意見もあった。

しかし将棋連盟は、連盟所属のプロ棋士の河童との直接対局はもとより、パソコン対局も禁止した。

伸一のパソコンへのメールは、新聞社、雑誌社、日本各地の河童伝説のある地域の河童友好会、その他数え切れない多くの受信があり、反響の大きさを物語っていた。

それを見ていたチーは、自分のことを「動物」としか扱っていない反響に悔しさと腹立たしさを感じていたが、同時に人間と将棋が出来なくなることから、伸一と自分とのこれからに不安を抱いた。

週刊誌は一斉に「人間界からの河童社会への探訪と、河童社会に開放を求める」論議が幾日も交わされ、週刊誌各社の「河童探索チーム」が結成された。このような興味本位で議論が沸騰している情勢に憂慮した静岡日報と全国紙ニッポン・タイムスは、それぞれ一面トップに両社の従来の係わりと探索を試みた結果、その上での北森村長、北遠高校北森分校、宮川家などの対応とコメントを発表し、来年二月か三月に宮川伸一が戻ってくるまで静かに待つことを提案した。

しかし、このコメントを「生ぬるい」として独自にヘリコプターや電波探知機などを準備して、北森村を中心に南アルプス一帯の清流沿いを探索した雑誌社もあったが、何の成果も得ることが出来なかった。ただ、伸一のパソコンから発信されている電波が、人間界で使用されている電波とは、その強度が微妙に異なっていることから、河童社会独自の電源を利用して発信されている電波であることが判明した。しかし電波の発信位置を把握することは出来なかった。

河童の所在が分からないまま日は過ぎていった。静岡日報、ニッポン・タイムス社以外の新聞社や雑誌社は、河童世界の探索情報窓口として、パソコンや手紙で伸一の協力を依頼してきた。新聞社などは伸一自身、彼がいる場所が分かっていないことを信じようとしていないから、無理難題を言ってくる。例えば「住んでいる場所で上空から見通せる場所に旗を立てろ」などにはオンバの了解のもとに旗を立てたが、ヘリコプターからは探し当てられなかった。それを「南アルプスから静岡県側の北遠一帯に渡って、清流沿いの全てを調べたが旗は見つからなかった。伸一は本当に旗を立てたのか」などと言ってくる。

次の手段として郵便の授受確認も行われた。一旦宮川家のポストに投函された郵便物が消えてなくなるところまで確認した後、伸一に

「宮川家の郵便受を郵便物の出し口を南京錠で施錠できる金属製に替えて、それでも郵便物が消えてなくなるかどうか実験したいが良いか」

と問い合わせがあり、オンバに相談してＯＫの回答をした。

新聞社や雑誌社は従来の郵便受を金属製の郵便受に替え、郵便局の配達員が郵便受に入れるときに目立つような、ピンクの大きめの郵便を発送した。

翌日、いつもの配達時間にそのピンクの封筒が配達されたことを確認した新聞社の人たちが、配達直後に郵便受を開けて見ると、ピンクの大きめの封筒は消えていた。

全員

「……？」

今配達されたばかりの郵便物が、出口のない郵便受から消えている。

この不思議をどのように考えるか。

その日の夕方、新聞社本社から宮川伸一にパソコンでその郵便物を受け取っているかどうかを確認したところ

「少し前に受け取っている」

との返事があった。どのような経路で受け取っているのか全員全く理解が出来なかった。
その場に立ち会っていない本社の社員は、それを聞いて
「そんな馬鹿な」
と一笑に付す者もいた。

新聞社や雑誌社はこの不可解な現象を詳細に紙面で報告し、文末に北森村長からの言葉
「宮川伸一君にとっての人間社会との郵便物授受は、彼にとっても、村にとっても大事にしなければならない大切な機能であり、支障が出る可能性のある調査は中止して欲しい」
を紹介し、この不可解な、信じられない現象の調査は残念ながら一旦中止する、と報じていた。

宮川伸一はオンバと相談して、新聞社等必要なメールにしか返事をしなかったので、好奇心からの探索隊派遣運動などは下火になってきた。
しかし、学者グループの霊長類研究者団体からの「河童生息実体の調査」などの学術的問い合わせもあり、伸一には回答が難しいものがあった。

ある日、オンバが呼ぶので行ってみると、何時の間に書いたのか一枚の紙を渡され、これを静岡日報とニッポン・タイムスに送信するように依頼された。書かれている内容は伸一も初めて知らされることばかりであった。
要約すると
「人間が存在する三次元空間の中に、人間には見ることの出来ない異次元空間があり、我々はそこに住んでいます。例えば人間社会空間に存在すると言われている霊界を考えて頂きたい。生きている人間には見ることも行くことも出来ない世界であるが、霊は人間界に出没している。人間の五感は絶対的万能の能力ではなく、一定の限界能力に過ぎない。霊界と対話の出来る人間がいる。それは霊界から特定の人間にその対話能力を与えているので霊界を見、対話もすることが出来る。与えられていない人間には出来ないのです。
三次元以上の異次元間の交流は、高次元の世界から低次元の世界には入れるがその逆は出来ない。だから、人間が河童社会を覗くことは、河童から覗く許可を得た人間しか出来ません。
私たち河童は人間社会と同じ太陽の下、月の下で暮らしています。しかし、人間からは見ることが出来ません。
私が河童全員の能力を高めると、人間社会と必ず争いになると思います。河童が持つ能力で人間にないものは、河童の移動には時間が不要なことでしょう。行きたいところへ瞬時に移動できます。宮川伸一さんとちずこが将

棋の会場に神出鬼没であったことはこれによります。
河童社会では、全員が仲良く毎日を過ごすことのみを期待し、今回は宮川伸一さんに、団体生活上のルール、それを守ることがどのように大切なことかを将棋を通して教えて貰い、また、食料や必要品の保管・管理面で必要な算数の九九を教えて貰いました。
そのように、河童社会は原始的な平凡な生活を営んでいます。河童社会の平和を乱すような探索をすることはお止め下さい。それよりもむしろ、我々河童の生態について何なりと質問して戴き、相互理解の上に次元は異なる世界であっても、同じ地上での共生を目指して進もうではありませんか。

最後に、宮川伸一さんは来年二月末までに、お父様の所にお返しします。河童一同は、宮川伸一さんのこれから歩まれる人生の上に、全面的に応援させて頂きます。約二年間拉致したお詫びを、本人と関係する皆様へ何らかの方法でお返しをさせて頂きたいと思っています。

自己紹介が遅れましたが、私は河童の指導者で「オンバ」と呼ばれています。日本語ではどのような字を当てればいいのか分かりません。年齢は百才を超えて、次元と時空を超越した瞬時の行動能力を持ち、日本語の会話や読み書きには不自由なく、必要なときは人間社会を飛び歩いて必要な用事を満たしています。
私にも生命の限界はありますので、後継者は養成中です。」

この記事は翌日の静岡日報と全国紙ニッポン・タイムスに紹介され、人間の理解し得ない異次元世界について学者間での議論が白熱化し、東京の私立大学内に「異次元河童研究室」が設置され、異次元世界での河童の生態についてオンバとの質疑応答が始められた。週刊誌等の興味本位の記事は時の経過と共に薄れていった。

伸一が人間社会からの質問対応に、オンバの指示を受けながら忙しく過ごしている間、チーはそれを横から眺めているだけで、彼女にとっては全くつまらない日々の連続だった。
伸一は小屋へ戻ってからは塾のテスト回答に忙しく、外が白みはじめて横になる日が多かった。
オンバの目が光っていて、チーの夜中の行動は制限され伸一の小屋に忍んでゆくことは出来なかった。

伸一は河童のゴンザを捕手にしての投球練習の中で、河童の投球方法に目を光らせた。
ゴンザの伸一への返球を速球で返すときと、緩い球で返すときの投球スタイルに全く区別が付かないことであ

った。投げ終わったときの足の位置も同じだった。伸一は返球に速い球、緩い球と注文を付けて観察したが、速い球のときと、緩い球のときの投球フォームの違いが分からない。全く同じに見える。

内心、これを会得すれば、マウンド上で打者の目を眩ますことが出来る。剛速球が来ると身構えている打者に、緩い球で空振りや見逃しストライクをとることができる。また、その逆もできる。

ゴンザに目の前で何度もやってみて貰ったが分からない。会話が不十分なため、チーを呼び通訳して貰って漸く分かった。それは、河童が肩の力を抜き、腕の肘と手首のスナップの力だけで投げているのだ。投球フォームは剛速球フォームそのものであるが、肘から先だけの力で手首のスナップを利かせて投げていることが分かった。

しかし、やってみてもなかなか出来ない。河童と人間の骨や筋力の構造が異なるから出来ないのか、と半ば諦めていたとき、チーの一言で光が差してきた。投げ下ろす途中に、フォームも体のスピードもそのままで肩の力を抜くことにあった。ゴンザを相手に一週間練習して、ゴンザほどではないが、同じフォームから緩急の球を投げることが出来るようになった。投球フォームが打者から見分けられないことが最も大切で、ゴンザの評価では「まだまだ」の評価だった。

その後毎日三時間程度その投球方法の練習をして、我ながら「これなら打者に見抜かされない」と思う程度に上達した。その投球方法を自分で「かっぱ」と名付けて楽しんでいた。

二月の二十七日、河童全員が盛大な送別会を開いてくれた。挨拶にたったオンバは最初に、伸一を河童世界に拉致してきたことを詫びてから次のように語った

「将棋と九九の計算で、河童も学べば人間以上の能力が発揮できることを証明してくれた。また、将棋のルールを通して、遊びでも団体生活でも、お互いにルールを守ることの必要性とその意義を学ぶことも出来た。これらのことは今後の河童社会にとって大変重要なことです。これから後、この河童社会がどのように人間社会と交わってゆけばいいのか分からないが、明日人間社会に戻る伸一さんが道標(みちしるべ)を作ってくれるものと思う。

伸一さんは人間社会で大いに羽ばたく力を持っています。我々河童全員は、伸一さんが生きている限りいかなる応援をも惜しまないことを約束しましょう」

そして 皆を代表してチーが色とりどりの花を乾燥させて作ったレイを伸一の首に掛け、ゴンザが乾杯の音頭をとったあと歓談が始まった。

皆、順番にキュウリを片手に持って、伸一の所に挨拶にきて将棋や九九のお礼を言った。

気が付くと、チーの姿が見えない。チーと双子のマーがやってきて伸一の耳元で

「チーは辛くてここに居られないと言って、伸一さんの小屋に行っている。今晩はオンバの暗黙の了解を得ているらしい」

と言いにきた。

マーの夫キューの閉会挨拶で送別会は終わり、オンバも自分の部屋に戻っていった。

伸一が小屋に戻ると、暗闇の中にチーが座っている。伸一の姿を見ると暗闇の中で抱きついてきた。電気を付けて伸一が座ると、その胡座の中にスッポリとお尻を入れて甘えている。

チーはオンバが伸一との交信用に準備してくれたパソコンを、伸一に教えて貰うために持ってきている。操作の概要は既に知っているので、教えると言ってもチーの質問に答える程度で時間は掛からなかった。

チーは話が途切れるのがいやで、しゃべり続けていたが、外が白んできて伸一もチーも漸く横になったが、短時間で目覚めたチーは全てに満たされた表情をしていた。

伸一のパソコン始め教科書や参考書、塾の答案など一切の持ち物を一つの籠に詰め終わって人間社会に戻る準備が完了した。

オンバが小屋にやってきて

「伸一さん、有り難う。貴方の人生の約二年、ここに縛っていたことをお詫びします。チーが時々、河童の姿のまま訪ねますが宜しく御願いします。事前にパソコンで打ち合わせてください。私も終生貴方を応援します。ではお元気で。行く先は自宅の貴方の部屋で良いですね」

と言った。

瞬間、伸一の姿とまとめた荷物の姿はそこから消えていた。

放心したようなチーの肩を抱くようにしてオンバは洞窟に戻って行った。

伸一は自宅の部屋が懐かしかった。台所に行くと、昼食の準備をしていた母親が驚いて

「伸一、何時帰ってきた?」

と言いながら近寄ってきて伸一の顔や肩を両手で撫でた。溢れる涙を拭おうともしないで伸一を見つめている。帰ってきた父親と三人で昼食をとり、伸一は北遠高校北森分校に行った。既に連絡がしてあったので、校長と木口先生、北森村長が集まっていた。

積もる話は山ほどあったが、校長から

「長期に学校を休んでいたが、県の教育委員会も承認しているので明日から登校し、三月二十日で二年生を終了、四月一日から三年に進学を認める」
との話があり、同席している村長から
「伸一君、河童の世界で、挫けることなくよく頑張ったな。勉強も運動も。河童の世界のこと、そこでの君の生活などはみんな知りたがっている。マスコミなどに巻き込まれると君の時間がなくなってしまう。村長である私が、マスコミを含めて聞きたい人全てを対象とした報告会の場を設けるから、マスコミにはそのとき来てください、と言って、後は相手にしないように」
との忠告があった。

春休み、三月中旬に北遠高校本校から分校に対し、夏の甲子園大会を前にした野球チーム作りの話が持ち込まれ、本校と分校が合体して一チームになるか、別々のチームで出場するかを決めるために、本校と分校の野球試合をしてみようと言うことになった。
分校から新三年生と二年生合計十人が本校チームと戦った。伸一の球速に本校チームはノーヒット、分校は相手投手の乱れから押し出しで得点し分校が勝った。
結果、分校チームの意気は上がり、別々のチームで県予選に出場することとした。
分校の野球部部長を村長にお願いした。教職ではないが教職員の少ない分校事情を勘案して県の高野連で認められた。
村長は投手としての伸一の実力は全国レベルと考えているので、問題はチームの打撃力の向上と考え自費でピッチング・マシンを購入してグランドに設置して、野球部員の速球対応打撃力の養成に力を入れた。

七月、県予選が始まり、分校は伸一の完封で三回戦ベスト十六まで進み、次が私大付属のシード校と当ったが、伸一が完封、四球で出塁したランナーがその後の相手校のエラーと投手のボークで生還、その一点で勝利を収めた。
ついに決勝戦、相手は歴史を誇る名門公立校であり、球場はそこのOBで埋まっていた。新聞は無名の新人宮川伸一の健闘を讃えているが、決勝戦の行方は決まっているような記事であった。分校戦力については伸一の五日連投とチームの貧弱な打線を懸念していた。
相手は打撃を誇るチームであったが試合は投手戦となり、園長十四回まで両チームとも無得点。十五回表に無死で三塁打を打たれたが、後続を緩急の球を投げ分けて連続三振で討ち取り、十五回裏、北森分校が無得点であれば明日の再試合となる。北森村長は、疲れてきた相手投手と内野陣の状態を見て、バンド作戦を指示。これが的中して二死ながらランナー二塁のチャンスを掴んだ。

ここで打順は伸一。今日ノーヒットの伸一であったため相手バッテリーには全く警戒心はなく、今迄三振をとって来たインコース低めのストライクゾーンに速球を投げてきた。投球コースを見越していた伸一は、右足を少し後ろに引き、インコースに来るボールを打ちやすいスタンスで立っていたので待っていたとばかりフルスイング。打球は一塁線ギリギリのヘヤーゾーンに飛び、右翼手が後方フェンスにあたって返って来る球を捕球している間に二塁走者が生還。
静岡球場は悲鳴の後静まりかえった。やがて校旗掲揚の時になって、ホームベース前に整列して校歌を高らかに歌いはじめた北遠高校北森分校十名の野球部員に対し、全会衆は立ち上がって割れるばかりの拍手を贈り、しばし鳴り止まなかった。

翌日の新聞は、北遠高校北森分校十名の野球部員の健斗を讃えると共に宮川伸一の投球方法を詳細に分析、コントロールの良さに加えて、同じ投球フォームから緩急自在に投げ分けることにより、打者を翻弄しながら自分の力をセーブする投球技術を高く評価していた。
帰宅してパソコンを開けると、チーからのメールが入っていて
「優勝おめでとう。いよいよ甲子園だね。私のパソコンに人間社会のテレビ、どのチャンネルでも映るようにして貰ったの。オンバと一緒に応援していたよ。河童世界からの応援、信じていてね」
と書かれていた。

それから三十年あまり経過したある日、静岡県庁宮川副知事室の電話が鳴った。電話は二本あり、一方は秘書が出るが、他の一方は宮川副知事のみがでることにしていた。
電話はチーからで
「オンバが百三十才で昨日亡くなった。オンバの遺言で私が河童族を率いて行くことになった。必要な五次元霊力は引き継いだ。今日これから私のオンバ職最初の応援をします。二日後の八月二十五日、午後三時半頃、北遠一帯に震度七程度の大地震が発生します。北森村など地盤が固い所の被害は少ないが、南遠北部一帯は家屋の倒壊が多いでしょう」
続いて
「貴方が東京大学時代、下宿に泊まりに行った楽しさは忘れていません。今でも行きたいけど、貴方の家庭と地位を汚すことは出来ません。そうそう、貴方が自治省にキャリア組として採用され独身寮にいたとき、独身寮に何か得体の知れない動物がいる、と大騒ぎになったことがありましたね。それから、貴方の奥様の北森珠美さん、

当時の村長のお嬢さんに見つかりそうになったことも。いま、楽しく思い出しています。何年か後には静岡県知事ですね。

では、地震情報をお大切に」

と言って電話は切れた。

伸一は、河童社会がキャッチした未来情報の正確さは熟知している。しかし、地震予知機関でもない県が、証拠もなく地震警報を発することも出来ない。

そこで、独断で該当地域の市町村長に対して

「南遠北部、北遠南部地域市町村は、明後八月二十五日午後二時三十分、東南海大地震に備えて緊急避難訓練を行って下さい。災害に備えての自衛隊、提携病院などへの連絡体制も確認の上、連絡担当者の配備も行うこと。浜松駐屯自衛隊は、この市町村からの救援要請があった場合に備えて出動体制をとってください」

「なお、同日、副知事が各市町村の緊急避難態勢を視察に行きます」

と指令を出した。

翌日の各新聞は、副知事の独断指令を大きく批判し、気象庁、地震予知連絡会に問い合わせても、

「大地震警戒予報は出していない」

の回答に各市町村は混乱した。

しかし、副知事室は指令通り行動を始めた。各市町村長は副知事が視察に来るというので、嫌々ながら訓練体制を取り始めた。突然の副知事指令で他の予定があるなどの理由で全く従わない市町村もあった。

八月二十五日、午後二時半、避難訓練開始。訓練通り避難したところへ、轟音と共に縦横の大揺れ。一説には震度八の史上最大の大地震などとも言われたが、気象庁は遠州灘沖を震源地とした地震で震度七と発表した。南遠北部では住宅の倒壊数知れず。火災も発生。

浜松駐屯自衛隊の救援出動は、静岡県知事の自衛隊への救援要請より早く災害発生直後から行動し、道路は陥没や事故車輌の放置で走れないので浜松自衛隊ヘリコプターも総出動して病人の搬送から、火災現場への空からの消化剤撒布など大活躍した。

宮川副知事は、災害現場から被害状況を把握した上で県庁や関係機関に物的救援や医療救援などを指示したので、その的確性も地震・火災被害を最小限に食い止め、避難現場への医療・食料・水などの供給も速やかに行われた。

翌日の新聞やテレビは、被害状況を報告すると共に、宮川副知事の避難訓練実施指示がなかったら、数倍の死者、ケガ人が発生したものと思う。また、宮川副知事の災害現場からの的確な救援指令が、被害者にとって最も有り難かった、と報じていた。

地元静岡新聞は

「宮川副知事の不思議。どうして大地震の二日前に、地震が起きた地域のみに、それも地震発生三十分前に緊急避難訓練をさせる指示を出して、地震発生時には避難完了の状態を作り上げたか。八月二十五日午後三時の大地震発生を知っていなかったら出せない指示である。」

と論じていた。

翌月の静岡県議会では

「過日の北遠・南遠の大地震では、宮川副知事の適切な指導により被害を最小限度に抑えることが出来た」

と議長から特別に感謝の言葉があり、逆に組織を通さない独断専行の指示は誰も問題にする議員はいなかった。

副知事室のパソコンメールには

「伸一さん、情報、助かったでしょ。今度発生する大地震で、天竜川の東側堤防が百メートルくらいの長さで陥没して、そこから流れ出る川水で大洪水が発生するから、そのタイミングが分かり次第連絡するね。永遠の恋人　チー」

と入っていた。

完

短歌　三十首

曽根竣作

渡りの群れ

蛍火のすういと走る夕つかたときに無頼の風吹けと知る

つぎつぎと山百合光るつづら折みさきの果に月落ちんとし

椿いちりん地に近く咲きふるへをり風なき午後の点景として

誰か言ふきみの不真面目何だらうあぢさゐ雨に色を変へつつ

惑星のまろきかがやきテーブルに秋夜しづもるしらもも一顆

骰子（さゐ）いまだわが手にありて投げられずこよひ風趣の遊びせんかや

南アまでサッカーの応援狂気なりショービニズムを肯へずゐる

桔梗（きちかう）のむらさき冴えてひたみちの茶房へとつづくユトリロの秋

さざ波は海のみならず秋天を渡りの群れのはたはたと過ぐ

秋の庭の闇ふかかりき繙（ひもと）けば「ろこうきょう」にて銃声いっぱつ

GIブルース

西風（にし）吹きてとほしほざゐの幽（かす）かなる丘の傾（なだ）りに梔子（くちなし）にほふ

ざわめける夾竹桃の砂防林ここ過ぎてよりかの夏が来る

黒ずみしかもめのつばさすれすれに腰越あたり魚（いを）の干されて

うら年と言ふも寂しきこの夏は庭の加母酢（かぼす）の一つだになし

枯れ枝の高きに贄（にえ）の干からびて鵙のひとこゑするどく圧す

白き巨船(ふね)いかりを巻けば音低く汽笛ひびかふ未知の波間へ

炎帝のかなたに去りて水仙のむらさき冴ゆるあかときに逢ふ

白南風(しらはえ)のかすかに吹きて漁(すなど)れる昆布いっぱいゆらし帰船す

晩学のゆくへは知らず秋の灯にぽつりぽつりと広辞苑引く

“GI”とふ呼名もはるかブルースに〈佐々木功〉の低音ひびく

吾亦紅

時計台を掠めてつばめいそがしき南へ帰る日の迫り来て

まどろみを控へて月下美人あり芳香たえず四囲をめぐりて

昏れはやき図書室に厚き原書読む初老ひとりを残して帰る

BCゼロ年貴人のあとか副葬品びっしり抱えミイラ現る

はなすぢの高き木乃伊(ミイラ)の生前をまなうらにして廊を下り来

いわし雲はるか流れて思ひ出づひとたび悲願のわが抑留記

鼻をつく敵意の香水ただよひ来まどぎはに茶髪の女が佇(た)ちて

虫の音の草生(くさを)にしげし持て余すアンビバレンスを嗤ふ月の夜

風に揺れひともと立ちて吾亦紅(われもこう)ここにかそけき沈黙ぞある

平成も二十余年をながらへて凌霄花(りょうぜうくわ)あかく垣に下がりつ

河野裕子（かわのゆうこ）の日常性を惜む

曽根竣作

（一）

一九六九年（昭和四十五年）に、角川短歌賞を受賞したとき河野は二十三歳であった。決して早い受賞とは言えないが、以後、現在に至るまで戦後生まれの女性歌人のトップを走り続けて来たが、去る八月惜しむらくは乳癌の再発により、六十四歳の生涯を閉じることとなった。

河野の詠む青春、出産、子育ての日々は特別のドラマ性や悲劇性をもった世界ではない。夫君は、大学教授であり、子供さん二人も歌人であると聞いている。平和な時代に生まれ、何不自由なく妻であり母である一人の女性の生の軌跡を淡々と詠んでいる。だが、感覚と身体を総動員して生の実感を表す河野の歌は、これまでの歌人には見られなかった豊かさと濃密な個性を備えている。

十四冊の歌集を上梓しているが、その中より秀歌と目され、夫々心に残ったものを抽出してみよう。

●たとへば君　ガサッと落葉すくふやうに私をさらって行ってはくれぬか　（森のやうに獣のやうに　昭47）

●まがなしくいのち二つとなりし身を泉のごとき夜の湯に浸す　（ひるがほ　昭51）

●一首目、単的な青春歌、二首目、二つになった命をしづかに夜の湯槽に浸す、「まがなしく」である。

●たっぷりと真水を抱きてしづもれる昏き器を近江と言へり　（桜森　昭55）

著名歌である。河野と言えばこの歌と言はれる位、琵琶湖を詠んで巧みである。

●良妻であること何で悪かろか日向の赤まま扱きて歩む　（紅　平5）

●第二のコースと呼ばれ立ちあがる紺の水着のなかの浜

木綿（ゆう）

二首目、はまゆふは直感的にそう言ふ具合に感じたと読みたい。　（体力　平9）

（二）

●今死ねば今が晩年　あごの無き鵙（もず）のよこがほ西日に並ぶ　（家　平12）

ここには風景を眺めている作者のたたずまいだけが浮かんでくる。「あごの無き」が不在感を暗示している。棒立ちにならざるを得ないこころが晒されているような印象を与えるし、ある覚悟のような気配が感じられる。

●雨のむかうに透けて見えるその町は何とさびしく雨が降りゐる　（家　平12）

●さびしさよこの世のほかの世を知らず夜の駅舎に雪を見てをり　（歩く　平13）

街と自分、己と駅舎の雪、その瞬間を巧みに捉えた一首。何か深い寂寥感を感ずる。

●さうなのか癌だったのかエコー見れば全摘ならむリンパ節の転移　（日付のある歌　平15）

●阿保らしくかなしいことなり形よき左の乳房を切ることになる　（日付のある歌　平15）

めげることなく、つぎつぎに自分を晒した作品を発表し、鬼気せまる迫力がある。

●遺すのは子らと歌のみ蜩のこゑひとすぢに夕日に鳴けり　（母系　平20）

●病むまへの身体が欲しい　雨あがりの土の匂ひしてゐた女のからだ　（母系　平20）

馬場あき子氏は、「口語の導入が最大の功績」と指摘。「本音を宿すことのできる口語の力が最晩年を支えたことでしょう。文語の美質を持つ、河野さんの口語は大きな遺産、私たちにはなかなか追いつけない魅力」と語って居る。

（三）

昭和五十二年『ひるがほ』により現代歌人協会賞受賞、平成元年『桜森』で現代短歌女流賞、十年『体力』で河野愛子賞、十四年『歩く』で若山牧水賞・紫式部文学賞、二十二年『母系』で斉藤茂吉短歌文学賞、迢空賞受賞。しばらく宮中歌会始の選者も務められたことも著名である。

没後の新刊『シリーズ牧水賞の歌人たち　河野裕子』（青磁社）には、今わの際の口述筆記で遺した一首。

●手をのべてあなたとあなたに触れたきに息が足りないこの世の息が

など絶筆十四首と共に収録されている。

短歌

行雲流水（三十）

石黒修身

近詠三十首

スカイツリー

首挙(こうべあ)げ仰ぐ目線は人々のスカイツリーに託す希望か

日本一高くなるのか童心に還りて仰ぐスカイツリーを

下町の古き名所が甦るスカイツリーが見える効果で

下町の復権目指すと商店街スカイツリーに期待を寄せる

中二なる男孫の背われを越えし秋スカイツリーも天を指し伸ぶ

茶席

恐らくはこれで終りと書き添えし案内届く先達の茶会

愛蔵の道具揃えてもてなすは道をきわめし茶人の夫妻

躙(にじ)り口「お気を付けて」の声よそにやはりぶつける吾は粗忽か

不馴れなる茶席終れば点心で一盞の酒(さき)にくつろぎにけり

喧噪の新宿界隈一角に茶会の席は静謐のあわい

ノーベル賞

同郷で同窓なりし鈴木氏のノーベル受賞を悦びており

鈴木氏は年次が近くキャンパスで共に過せし幾年かあり

直接の知遇なけれど朋友と関わりありて共に言祝ぐ

キャスターは戸惑いながら図式説く「化学賞」伝うニュース番組

「むかわ」なる地名懐かし鈴木氏の古里産のシシャモを食めり

歌会

晩年に短歌詠み始め二十年市井の歌人でありて楽しき

新奇なる手法もネットも縁のない普通の短歌詠む歌会楽しむ

見識のさぞ高からん歌友らの詠む短歌素朴で心安らぐ

吾が短歌に入れし票数やゝ増えて心軽やか歌会後にす

合評の会が終れば酒徒集う神田界隈常連の店

時事

戦争の放棄を宣べしこの国の領土を犯す隣国を怖る

故郷の涯の島々はるかなり北方領土に残る恨みは

外交の機密を世界に暴露する「ウィキリークス」正義か悪か

動乱の余燼くすぶる半島の危うさ思う半世紀経て

金星の軌道に遂に乗らざりし「あかつき」に託す再起の夢を

日常

闘病の友の便りは確りと状況捉え嘆き種(ぐさ)なし

ポックリを祈願し寺を巡るとは老人たちの余裕か悲哀か

凡凡の日常なれど相寄りて新年を祝ぎ平安に謝す

「孤舟」とう小説読みて描かれし世代を回想(おも)う喜寿過ぎし吾

敦煌ゆ求め帰りし夜光杯葡萄酒酌みて詩篇を誦す

短歌

金澤　智佐美

遠くより金木犀の匂いきて誘わるるまま捜し歩けり

秋桜は風と戯れ首を振り暖かな陽に包まれ踊る

それぞれの葉は重なりて集団で黄色に染まる大イチョウの木

感嘆符つけて綺麗と叫びたいもみじ銀杏の煌めく中で

紅葉狩り箱根路すでに散りおれど親子三人ドライブ嬉し

採りたてで栄養ありと夫を誉め紫がかるブロッコリー茹で

大丈夫虫に食われし白菜は皆安全と知ると励ます

二階まで届く高さの花の名は皇帝ダリアと友に聞きおり

寒き中ピンクの菊は誰を待つ風に吹かれてブルッと震えて

オニギリと紅茶にシートおしゃべりと公園散歩リフレッシュの日

飛び込みて羽根をふくらませ水浴びに霧中のカラス可愛いさ覚ゆ

香を買い前来た店と違うねと仲良き友と小町通りを

人混みを上手く交わせる歩き方少し慣れきて胸張り急ぐ

六十路過ぎ父母想うこと多くなり心温もり愛反すうす

有る物は石ころでさえ感謝した母の心にいつか届くや

俳句

酷暑

勝山道子

年新らた一筆（ひとふで）で書くだるま軸

台湾の書家無盡臧と筆洗う

新年は余生余白を句でうずめ

新雪は千両赤をめだたゝせ

飾り終え雛のまなこに光るもの

曼珠沙華咲いて浄土を知る思ひ

十和田湖の乙女の像や寒の空

われを置き友は逝きたり霜の朝

この庭を狭しと桜散りしきる

白蝶や我をさかすか庭を舞い

颱風の行先母の故郷へ

新茶来て先ず一杯は御佛に

幻想の光を放つ螢かな

広大なシカゴ空港星月夜

散り切れず小枝にさがる桜花

大切りの西瓜の種の黒さかな

五目飯盛りだくさんや敬老日

丹精の菊を競いた文化の日

夢多き友は逝きたりケニヤ母

散り初めし紅葉（もみじ）は庭を染めて行き

紅葉（コウヨウ）を一人占した山の小屋

さつまさえつる丈食べた敗戦日

敗戦は子に伝えねば九条を

全山を黄色くそめたから松や

酷暑すぎ肌にやわらぐ返り風

散り果し紅葉（もみじ）の枝の細さかな

颱風の行先母の郷里へ

秋茄子が色よく漬かる朝食かな

酷暑なり地球に心とらわれて

八十路のわれ届くや赤きカーネショ

漢詩

潮騒録（六四）

鯨游海

「ふるさと」は、大正三年世に出た。作詞は高野辰之、作曲は岡野貞一。素晴らしい詩なので記してみる。

一　うさぎおいし　かのやま
　　こぶなつりし　かのかわ
　　ゆめはいまも　めぐりて
　　わすれがたき　ふるさと

二　いかにいます　ちちはは
　　つつがなしや　ともがき
　　あめにかぜに　つけても
　　おもいいずる　ふるさと

三　こころざしを　はたして
　　いつのひにか　かえらん
　　やまはあおき　ふるさと
　　みずはきよき　ふるさと

七五調と異る六四調の珍らしい歌詞。北原白秋、西条八十、野口雨情、三木露風らの活躍はもう少し後の事。

賀辛卯春

平成廿三年元旦

追兎山兮釣鮒川
磐梯蜻蝶鶴城蟬
欲吟故里費三歳
不及淵明一酌篇

押韻・川蟬篇

〈辛卯の春を賀す〉

兎追ひし山　鮒釣りし川
磐梯の蜻蝶　鶴城の蝉
故里吟まんと欲し　三歳を費すも
及ばず渕明の　一酌の篇に

〔注　解〕

卯の年を詠もうと考える中、兎の童謡「ふるさと」が心に浮かび、自然私の故郷である会津の山川を想起した。蜻はとんぼ。篇は詩を数える単位。淵明は陶潜の字。

〔口語訳〕

兎を追いかけた彼の山々、小鮒を釣った彼の小川ぎ。
磐梯山に群れ飛ぶ蜻蛉や蝶々、会津鶴ヶ城の蝉たち。
故里を漢詩に吟もうとして、あれこれ推敲を重ねるうちに、何と三年も費やしてしまった。然もその出来栄えといったら、
あの六朝時代の田園詩人で故里を詠んで右に出る者の居ない陶淵明が、酒をひと酌みする間―ほんの数秒間のうちに詠むであろう名吟には遥かに及ばない。

故郷といえば田園、田園といえば田園詩人と尊称される陶淵明。晋末宋初の大詩人。代表作「帰去来の辞」。
下級官吏の生活が身に染まず、政争に嫌や気がさして故郷に帰り、自から鍬を持ち、一杯の濁酒を楽しんで悠々自適の生涯を送った。死生を達観した世捨人の如くにみえながら、内に烈々たる憂世の情を秘めてもいた。
「質にして実は綺、痩せていて実は腴か」と蘇東坡が激賞したという。「帰りなん、いざ。胡んぞ帰らざる」は後世官を辞す人が必らずといってよい程に引用した。
自分に対する挽歌、死を想定して詠んだ詩もある。

千秋萬歳後　千秋万歳ののち
誰知榮與辱　誰か知らん　栄と辱とを
但恨在世時　ただ恨むらくは　世に在りし時
飲酒不得足　酒を飲むこと　足るを得ざりしを

忠山人茶會卽事　　平成廿二年十一月

幕薩恩讎幾度還
不圖相對尺餘間
沈香壺與海舟軸
方丈唯聽茶筅閑

押韻・還　間　閑

〈忠山人の茶会にて即事〉

幕薩の恩讎　幾度還りしか
図らずも相対す　尺余の間
沈香の壺と　海舟の軸
方丈に唯だ聴く　茶筅の閑かなるを

〔注　解〕

忠山人＝亭主忠内正之先生。過日東京新宿「柿伝」にて盛大な茶会が催され、私も招かれ末席を汚した時の作。
恩讎＝情けと怨み。ここでは幕府と薩摩の離合集散の歴史をいう。なお讎は正字で讐は俗字。尺餘＝一尺余の至近距離。茶室では図らずも幕府と薩摩が近接対峙した。
沈香壺＝薩摩陶きの華麗な蓋付き中型壺（本誌118号）。
海舟軸＝勝海舟が揮毫した「濯秀」の横広巾の軸。
方丈＝一丈四方の簡素な部屋。ここでは茶室を指す。

☆恩讎の彼方にまみえなに懐ふ　　沈香の壺海舟の軸

山中與花問答　　平成廿二年七月

何意孤高咲碧山
笑應別有非花間
綠風無限蝶群舞
白雨一過鶯更關

押韻・山問關

〈山中にて花と問答す〉

何の意あってか孤高に　碧山に咲くや
笑って応ふ　「別に花間に非ざる有り
緑風は無限にして　蝶は群舞し
白雨が一過すれば　鶯さらに関々たり」と

〔注　解〕

李白に「山中問答」という詩がある。山中隠棲の楽しみを述べた異色の作である。

山中問答・李白

問余何意栖碧山　余に問う何の意あってか碧山に栖むと
笑而不答心自閑　笑って答えず　心自ずから閑なり
桃花流水窅然去　桃花　流水　窅然と去り
別有天地非人間　別に天地の人間に非ざる有り

拙詩はこの詩に発想を得て詠んだもの。人間に人間が有る如く、花にも「花間」があるだろうとの発想である。

花を擬人化し、仙人の住む碧山で、人に見られることなく発き朽ちていく花を憐れもうとした詩人は、逆に花に慰められたのである。

關々とは、鳥がやわらぎ啼く声。

詩経・關雎「關々たる雎鳩（和名みさご）は河の州に在り。窈窕たる淑女は君子の好き逑い（配偶者）」

これは詩経の巻頭第一番目に掲げられた詩、即ち詩経の代表作である。

白雨は夕立ち、にわか雨。

〔口語訳〕

花よ！　貴女は一体何を意ってこんな誰も居ない深山幽谷の仙境の碧山に、孤高にも咲いているのか。

（私の問いかけに）花は笑って応えた。「貴方がた人間にはお判りにならないでしょうが、花の世界にも『歌間』があり、然も『花間』に非ざる全く別の世界が有るのです。それがここ碧山なのです。

ここでは終日緑風が穏やかに吹き、蝶々は群れて舞い、白雨―にわか雨が一たび過ぎると、鶯が更に一声、関々と嬉し気に啼く、まさに別天地。詩経にも歌われた桃源境が有るのです。だから私は独りここで咲いているのです」

☆あかあかと大輪一華山深く
　花にもあらん別のあめつち

《漢詩の流れ53・清その二》　呉偉業①

呉偉業（一六〇九～一六七一）、字は駿公、号は梅村。明代の進士。明亡んで南京に独立した福王の政府に一時仕えた為、売国奴という汚名を蒙った。

一時帰郷していたが四十五歳で清朝に強制され北京で国子祭酒（大学学長）を務めた。学者、書家として高名。母の死により再び故郷に帰り隠棲したが、二朝に仕えたことを生涯悔い、恥として余生を送った。六十三歳歿。

詠史の妙手。明末清初の歴史を長篇の詩にうたい上げた。これは危険極まりないことで、命を懸けたのである。

死に際し、自分の墓には官歴を一切禁じ、唯だ「詩人呉梅村之墓」とだけ書けと遺言したという。

自歎（自ら嘆ず）

誤盡平生是一官　平生を誤り尽くすは是れ一官、
棄家容易變名難　家を棄つるは易く名を変ゆるは難し。
松筠敢厭風霜苦　松筠敢えて風霜の苦しみを厭わんや、
魚鳥猶思天地寬　魚鳥なお天地の寛きを思う。
鼓枻有心逃甫里　枻を鼓して甫里に逃るる心有りしに、
推車何事出長干　車を推して何事ぞ長干を出でし。
旁人休笑陶弘景　旁人笑うを休めよ陶弘景が、
神武當年早挂冠　神武に当年早く冠を掛けしを。

（注）一官＝国子祭酒になったこと。棄家＝出家すること（弁髪を免れる手段）。筠＝竹。鼓枻＝舟を漕ぎ出すこと。甫里＝陸亀蒙の隠棲地。長干＝南京の地名。掛冠＝辞職。

二八に帰るすべもなし（四）

―愛する北国のひとに寄せて―

伊治哲

彩

――今から思い返すと、修平が予想もしない幸運に巡り合うことになったのは、まさにこの一瞬であった――

修平が玄関の戸に手をかけた時、それを押しとどめるように女主人が再び声をかけた。

「舘さん・・・？　『舘さん』とおっしゃったわね。お節介のようだけど・・・今晩お休みになるところはおありになるの？」

女主人の口調が急に近しい人の言葉づかいに変ったように思われた。

「いや・・・、そのお・・・、まだ当てがありません」

修平自身、迂闊にもそんなことさえ頭になかったことに気がついて、あわてて返事を返した。

「あら、そうなの？　どうするおつもり？・・・・・・、困ったわねえ」・・・・・

女主人との間に沈黙の時が流れた。

「立ったままでは・・・なんだから・・・、とにかくそこにお座りになって・・・」

と修平に促した。そう言われて修平は所在なく上がり口の端に腰を下ろした。

「誰か、泊めてもらえるようなお知り合いの方はいらっしゃらないの・・・？」

「いえ、ここしばらく学友の下宿に泊り込んでいたのですが・・・、やはり互いに気まずい思いをしまして・・・」

真実はそうではなかったのに、ついつい虚言を吐いてしまったことを悔いて、修平に身の縮む思いが走った。

「でも、他の友だちもいますから・・・」

と慌てて言いつくろったが・・・

「それは困ったわねえ・・・」

女主人はまるでわがことのように眉をひそめて黙りこくった。

暫く考え込んでいたが、やや間をおいたあと、思い切ったように口を開いた。

「仕方がないわねえ。・・・あなたさえよければ、今晩ひと晩、わたしのところに泊めてあげてもいいわよ。・・・ただし、今晩ひと晩だけですよ。あしたまたいいおうちを探すことにして・・・」

女主人は修平の顔を覗き込むようにして、間をあけながらそう言った。

「えっ？　そんなこと・・・よろしいんでしょうか？　突然飛び込んできましたのに・・・」

「だって、暗くなったし、冷えてきたし・・・お気の毒ですもの・・・」

修平は思いがけない女主人の言葉に、自分の耳を疑った。

「・・・でも・・・本当に・・・よろしいんでしょうか？」

半信半疑の修平に、女主人はニッコリと笑顔で頷いた。

修平の方がうろたえた。そして、目の前が急に明るくなる一方で、あまりの事の成り行きに次の言葉を失った。しばらくおいて

「ありがとうございます。申しわけありません。ご迷惑をおかけしますが、今日ひと晩、お言葉に甘えさせてください」

修平は体ごと小さくなって、つぶやくように言った。

そして思い余って深々と頭を下げた。

女主人の顔を見上げると、ふくよかなうりざね顔、色の白い北国の美人が目の前にあった。

「さ、そうとなったら、早くお上がりなさい」

うながされるままに、ズボンの裾を払い、靴を脱いで絨毯の隅に上がった。家全体にえもいわれぬ香気が漂っている。脂粉の匂いか、それとも香を焚く馨りか？　修平にはかつて嗅いだことのない匂いだ。

「じゃあ、舘さん、とりあえず今夜はあなたの持ち物を納戸に預かりますからね」

身のおきどころにとまどっている修平をよそ目に、女主人はお手伝いさんに言いつけて、門の外のリヤカーごと物置に運び込ませた。

というより、修平の持ち物、着るものなにもかもが薄汚れているので、一ヶ所にまとめさせてしまったのである。それどころではない。せきたてられるように風呂に入ったが、上がってみると下着まで真新しいものが用意してあった。明日のうちには、すべてきれいに洗濯をし、破れたものは繕いもしておくと、女主人はつけ加えた。もちろん布団も家にあるものを使うという。

その手際のよさと母親のような気遣いに、修平はすっかり恐縮してしまった。しかしそのおかげで寮生活以来の染みついた垢を洗い流したように、清々しい気分になった。修平の気持もようやく落ち着いてきた。

それとなく様子を窺うと、母親と娘が二人、それにお手伝いさんの四人暮らしのようだ。全くの女世帯だ。最初に玄関口で邪険な口をきいたのは妹のようだ。思いもかけず窮地を救われたものの、これはえらいところへ入り込んだものだ。それにしても、男物の下着はいったい誰のためのものなのだろう。修平はそう思いながら、女主人の言われるままにおとなしく身を委ねた。

当然であるかのように修平のための夕食が用意された。家族の食事は既に終っているという。焼魚、卵焼きにおひたし、味噌汁に香の物、そして真っ白に炊き上がった銀メシ。修平にとっては、もう何年も口にしたことのない豪華な夕食であった。

「お腹が空いたでしょ。突然のことだから、ありあわせのものしかないけど我慢してね。さあ、遠慮しないで召し上がれ」

女主人はそう言いながら、卓袱台のかたわらの火鉢を挟んで修平と向き合って座った。

さっきから怪訝な顔をして修平を見詰めていた二人の娘は、いつの間にか姿がみえない。突然上がりこんできた無遠慮な闖入者を警戒して、自分たちの部屋に隠れてしまったのであろうか。

察するところ、相当裕福な家庭のようだ。食べものにさえ事欠く今の時勢でも、こんな豊かな生活があったのだ。なにを職業としている家庭なのであろうか。修平には見るもの聞くものすべてが珍しかった。卓袱台も火鉢も鮮やかな木目が入った逸品らしい。

修平は女主人に促されて箸をとった。

「どう？　おいしい？」

「ハア、お腹が空いていました。おいしいです」

修平は無遠慮に上がりこんでしまい、食事までご馳走になる自分に気がとがめて、ついぶっきらぼうに答えてしまった。どうもこういう年嵩の女性、しかも良家の婦人への対し方がぎこちない。

「舘さん、そんなにかしこまらなくていいのよ。あなたとは、たったさっき会ったばかりだけど・・・わたしそんなに気にしていないから・・・」

修平の気持をほぐそうと、女主人はことさらに明るい声でそう言った。話のいとぐちを探しているようにもみえた。

修平も話の切り出しかたがわからない。しかも本当なら今ごろ空腹を抱えて暗い夜道をさ迷っているはずの自分が、一瞬の出会いが転じて、今ここにこうして良家の食客となっている、この天地逆転のような急展開が、修平には未だ腑に落ちないでいる。

しばらく、二人の間に沈黙が続いた。

修平が食事を終えるのを待つように、女主人が口を開いた。

「わたしのところはね、四人家族なの。父さん・・・いや、主人は、病院勤めの医者。金沢から少し離れた羽咋という町の市民病院に勤めているのよ」

自分に言い聞かせるような口調で、しばらく間をおきながら話を続けた。

「だから、土曜、日曜しか家に帰ってこないの。その間はわたしと娘二人、親子三人だけ。お手伝いさんがいるけど通いで来てもらっているから。そんな訳で、本当は男の人は家に入れたくないのよ」

修平には、最後の方に特に力を込めて言ったように聞こえた。

女主人とばかり思っていたが、やはりれっきとしたお医者さんの奥さまなのだ。どおりで、家の中の調度も、母娘が身に着けているものも、普通の家庭とはちょっと違う。とりわけ家族の立居振舞いが垢抜けている。さっき風呂上りに用意してくれた男物の浴衣や下着もご主人のためのものだったのだ。少しづつ謎が解けていくように思えた。

一夜の宿とはいえ、修平の境遇とはあまりにも懸け離れた世界に迷いこんでしまった。そのうえ、女ばかりの所帯であるとは・・・・。

これは少し困ったな、と思う一方で、修平はなんとなく甘ったるい心地に浸っている自分に気がついた。

「舘さん、舘さんはどちらのお生まれ？　四高にはいつお入りになったの？」

話はいよいよ核心に迫ってきた。修平はちょっと身構えた。そして

「わたしは、京都府、丹波の綾部という町で生まれ育ちました。父母と祖母、私が長男で兄弟六人の九人家族です。父は小学校の先生でした。わたしは郷里の中学を卒業して、昨年の四月に四高にはいりました。現在二年生です。金沢には縁者がいないので一年余り寮生活をしましたが、そろそろ本気で勉強もしなければ、と思い、下宿を探し始めたのです。今日一日歩き回りましたが、どこも断られてとうとうここちらまで来てしまいました。」

と、少し苦笑いを見せながらそう言ってひと息ついた。

「この辺りは、どちらも立派なお家ばかりなので、余程引き返そうと思ったのですが、紹介だけでもしてもらえないかと思って不躾に門を叩きました・・・。ひと晩でも泊めてもらえるなんて思いもしなかったので・・・、なんと言っていいか・・・、本当に嬉しいです。ご迷惑をかけて申しわけありません」

言葉につまりながら、改めてお詫びとお礼を言った。

「そうなの。郷里でご両親が心配なさっているわよ。なんとかいい下宿屋さんが見つかるといいわねえ・・・。あら、お話に夢中になってご免なさい。ご飯はもういいの？　お替りしなさいよ」

修平は

「たくさんいただきました。ご馳走さまでした」

と言って、手を合わせた。

柱にかかっている洒落た時計が、もう九時をかなり回っている。

女主人、いや奥さまはニッコリと笑みをこぼしながら、

「一日中歩いていたのでしょう。疲れたでしょう。明日があるから、まだちょっと早いけど今日はゆっくり休みなさい。二階の奥の部屋が空けてありますから。お布団も敷かせてありますから、そこでおやすみなさい」

と言って、階段を上がり修平を二階の部屋に導いた。

「ではお先に休ませていただきます。今日は本当にありがとうございました」

修平は同じことを繰り返しながら、そしてちょっとどぎまぎしながら後について部屋に入った。

部屋は八畳の間、一人で休むには広すぎる。磨き上げられた床の間に山水画の掛け軸、傍らに艶やかな日本人形が飾ってある。紫檀の小机の上には、水差しまで用意してある。布団の上には真新しい寝衣が整えられていた。

学生寮はいわずもがな、生まれ育った我が家でさえも、この家に比べれば陋屋に等しい。見るもの、触れるものすべてが、修平にはもの珍しく、まるで竜宮城に招かれた浦島太郎になったような気分だ。

しばらく部屋の様子に気をとられていたが、夢のような気持を落ち着かせてかさ高い布団に足を踏み入れた。体ごと沈みこんでしまいそうな、柔らかで肌触りのよい布団。なんという生地で作ってあるのかも知らない。

修平がリヤカーで引っ張ってきた木綿のセンベイ布団など、気恥ずかしいような代物だ。いや、それでも故郷の祖母が、遊学の祝いにと修平のために丹精こめて縫ってくれたものなのだ。ありがたいと思わなければ、と瞼を閉じながら、ふと郷里のことを思い浮かべた。今日の出来事を知らせてやったら、父母や祖母たちはどんなに驚くだろうか。

ふと気がつくと、隣の部屋からひそひそと話し声が洩れてくる。きっと先に部屋に入っていった二人の姉妹が、修平の噂を囁き合っているのかもしれない。

しばらくの間、今日の奇跡のような出来事を思い浮かべていたが、昼間の疲れが修平の回想を途切れとぎれに押し流していった。

修平は今までみたことのない彩り豊かな夢の世界へ沈んでいった。

——つづく

祝出版

どうして国を守らなければいけないの？

瀧澤　中著

経　済　界　　800円

自分の家ぐらい、守ろう

こころみ学園

吉田忠雄
平成22年7月17日

私の手元にココ・ファーム・ワイナリー「千年会員証」千年会員No.0001足利短期大学学長吉田忠雄と記されたプラスチック・カードがあります。これは2000年にココ・ファーム・ワイナリーが千年会員を募集したときに早速応募していただいた会員証です。

私は川田昇さんが創立したこころみ学園とココ・ファーム・ワイナリーに賛同し、この事業に敬意を払っていたので、すぐに応募した次第です。こころみ学園は、川田昇先生が昭和44年に足利市田島町に創設した知的障害者や自閉症の人たちのための施設です。

平均斜度38度の斜面にぶどう畑を作り、約90名の利用者がブドウやシイタケを栽培しています。創設当時、知恵おくれと呼ばれていた少年たちは、ぶどうの木の剪定、剪定後の枝拾い、堆肥の運び揚げ、ひと房ひと房の摘み取り、そしてかごを抱えての収穫など、自然の中での労働を通して力を付け、自然の恵みをそだててきました。彼らは自分に合った仕事を行い、それぞれの貢献をしています。

彼らの生活を支えるために、川田先生は昭和55年にココ・ファーム・ワイナリーを開設しました。醸造は米国人の専門家に任せて、それ以外のぶどうの運搬や破砕、びん詰めやラベルはり、タンクの清掃など多くの作業はこころみ学園の生徒たちが行っています。学園の開設当時19歳であった生徒さんの平均年齢は現在50歳になっているそうです。

約10年前に私はこころみ学園を初めて訪れました。80歳近い川田先生はぶどう畑を案内してくれました。38度の斜面をすたすたと登っていきます。10歳若い私は息を切らせながらついて行きました。川田先生はぶどう畑の一番高いところでこころみ学園を見渡しながら色々説明してくれました。それからぶどう畑を下り、ワイナリーを案内してくれました。できたてのシャンパンをすくってグラスについで二人で飲みました。時と場所を得て素晴らしく美味しいシャンパンでした。川田先生もお酒は好きのようでした。

平成12年の「九州・沖縄サミット」の晩さん会では乾杯用にココ・ファーム・ワイナリーのワインが採用されました。これは、この晩さん会の準備にあたった当時の小渕恵三首相が「乾杯には日本のワインを」と発案し、目隠しをしてのテイスティングで選ばれたといわれています。

秋になると収穫祭がおこなわれ、大勢の観光客がこころみ学園とココ・ファーム・ワイナリーを訪れます。園生たちはうれしそうにそれぞれの仕事をしています。今は有名になり客の数が多くなりすぎて少し困っているようです。近所に住む有志の人々も手伝っています。

こころみ学園は、その社会的貢献により第26回放送文化基金賞や第9回日本生活文化大賞を受賞しています。このような施設とその創設者が足利に存在することは、足利出身の私にとって誇りです。

八つ当たり語録（二）

新井　宏

人は、己れをつゞまやかにし、奢りを退けて、財を持たず、世を貪らざらんぞ、いみじかるべき。昔より、賢き人の富めるは稀なり（徒然草）。

いくら稼いでも良いが、まだ使えるものを捨てたり、人の座るべき場所に居座ったり、人の食い扶持まで奪う奴があるか。質素な生活をしていれば、いずれ残った金は国がちゃんと税金で回収してくれる。

年金制度が破綻するのは当事者にとって常識であった。年金の支払いを少しでも減らしたい。申請を忘れてくれたら儲けもん。それが潜在意識であり、国民だってそう思っていた。しかし、いまや「正義のため」今後も二万人で四年間かけて、何やらを照合するのだという。予算は四千億円ほどか。これだけ騒いだのだから、大口はもうほとんど判明している。

何も文句を言っていない者に対して、再三にわたって確認のための書類が郵送されてくると全く腹立たしい。

円高に苦しんでいる。

本来なら、毎日毎日、円高を喜ばなければなるまい。日本人の資産がドル評価すればどんどん増えているのだから。しかし、貧しくとも、誰にとっても働く場があり、見合った収入が保証されている世界が健全である。

日本の場合、円高が進めば進ほど働く場が海外に逃げ出してしまう。だから、インフレを起こし、円安に誘導し、日本全体を貧しくした方が良い。そうすれば、自動的に政府の債務問題も解決される。損するのは資産家や老人たちである。

リーマンショックを起した米国のドルが暴落したのなら良くわかる。結果は全く逆で、世界中の通貨がドルに対して十から三十パーセントも暴落した。理由は簡単。信用不安の解消にはドルを抱え込むしかなかったからである。例外は三十パーセントも円高になった日本のみ。

使えないドル（米国債）なら腐るほど持っているのだから無理もない。

何だって？、遠慮なく使えば良いじゃないかって？。使えば、ますます円高になり、一兆ドルも米国債を持つ日本は大損する。全体としては、国富が著しく増大してうれしいはずなのに忌み嫌われる円高。

北朝鮮に頼んで、偽円を大量に発行してもらうしか手立てはないのか。

ただ働きというと損をした感じだが、ただ遊びと言えば得をした感じだ。いずれにせよ、これからは、ただ働きやただ遊びが高尚な世界になる。

するとどうなるか。国民総生産はどんどん減少する。サービス産業がセルフサービス化するからだ。何しろ国民総生産に占めるサービス産業の割合は九十パーセントを超えているのだから。

そして思う。売春が禁止されている中で、世には結婚せずに過ごす男女がますます増えている。事情がゆるせば、性を互いに無償で提供する「ただ働き」、いや「ただ遊び」が極めて合理的な仕組みになるのではないか。

貧困を断罪する人びとの寄るべき根拠とされたマルクス主義が体制を掌握するやいなや、人びとを抑圧する思想に転化したということこそ、人類が二十世紀に見た悲劇であった。その反面、資本主義には自由があったので、社会主義から学ぶことが出来て得をした。社会主義は資本主義から学ぶ自由を持たなかった。そして滅びた。

社会主義が駄目になり、資本主義が安心して牙をむき始めた。これからは弱肉強食時代、貧富の差がますます拡大する。もう一度社会主義に学ばないと全てが崩壊する。

政治の要諦とは、国家間、地域間、老若間、貧富間、労使間、男女間、職業間、などの利害の調整にある。それなのに選挙に勝ったからと言って、一方的な政策を進めようとする愚かさ。

左が政権を採ったら、右を如何に取り込むかが、右が政権を取ったら左を如何に取り込むかが政治力学。右の中でも最も右の安部晋三が、母体よりも右の政策を取って自滅。左の中でも左よりの盧武鉉や鳩山由起夫が母体よりも左の政策をとって自滅した。

本心を如何に隠すかの知恵がなさ過ぎる。与党をぶったおすと叫んだ小泉純一郎のような演技が必要なのである。政権を取ったら、母体からの支持などどうでも良い。かれらは支持するしかないのだから。

もっとも、党内派閥闘争こそが政治という現実がその前に横たわっているが。

外交は国の利害を取引する場。そこに国内の論理を持ち出せば先にカードを切ることになり必ず損をする。だから国内政治家に外交をまかせてはならない。

実効支配している島を自国（韓国）の領土だと叫ぶ馬鹿がどこにあるか。相手が何を言っても知らん振りしていれば良いのに。おかげで、国際社会からは竹島問題ありと見られ、日本政府はほくそ笑んでいる。

米国は北朝鮮をテロ国家には再指定しないという。天安艦への魚雷攻撃は「戦争」であり「テロ」ではないとの解釈だ。そういえば、朝鮮半島は休戦状態で戦争中なんだっけ。

「科研費」の研究終了から二年過ぎても報告書が未提出の場合がたくさんある。これを怠慢と言っているが、大部分はできもしない夢物語を作文して、申請を通過させたことが原因。できもしないことを作文する「詐欺行為」は民主党のマニフェストばかりではない。

飯が食えないことを覚悟した者だけが、格好の良い仕事を捜し求めても良い。格好の良い仕事では、金銭以外の満足感があるのだから、金銭的な収入は少なくとも良いというのが、バランス感覚。

しかし、格好の良い仕事ほど高収入であるとの「誤解」に毒されている。大部分の小説家や画家、作曲家などは、手弁当で努力しているではないか。

最先端のバイオ分野の研究者が一番生活に困っているのを知らないのか。

世界中の人が、日本人並みの生活をすることは、資源と環境問題から不可能だ。貧富の差が固定すれば、地域間の紛争が必然的に起こる。知恵とは生活水準を如何に切下げるかである。

びっくりしたニュース。都の教育委員会は「進学指導重点校」の選定に当たって、「東大、京大、一橋大、東京工大の現役合格十五人以上」という基準を導入することを決めたというのである。

東京都教育長の小尾伸雄が進めていた都立高校の学校群化、すなわち平準化政策はどこにいったのか。そのお陰で、わが母校小山台高校は普通の高校になった。そんなことはどうでも良い。菅直人も小山台高校出身であるが、ちっとも嬉しくない。

個性的なタレント出身の地方首長が活躍している。では日本の総理大臣にどうか。

地方首長などは、いくら気が強く偏っていてもいざとなればすぐ簡単に取り替えが効く。だから消耗品でも良い。しかし一国の総理は、先の先まで見通して慎重に動かなければならない。だから、何もしない佐藤栄作のような総理が理想的なのである。アメリカも何もしない大統領を選ぶべきである。

リビアのカダヒィーは国際サッカー連盟がマフィアだという。豊かな国が貧しい国から優秀な選手を人身売買でつれてきているからだという。なるほど、なるほど。

民族浄化のヒットラーはＤＮＡ鑑定によるとユダヤ系だった。なるほど、なるほど。

盧前大統領が二〇〇三年の三・一独立記念日で「過去の真実を糾明し、心から謝罪し、賠償するものがあれば賠償し、和解しなければならない」と拳を振り上げた。

外交としては甚だ非礼なものであったが、そこまではまだ良かった。しかし小泉前首相が「国内向け発言でしょう」と軽くいなすと、激怒してしまった。

人でも国でも、劣等感を刺激されると激怒する。問題は劣等感が鋭敏過ぎると、往々にして想像や誤解からも怒りだすことである。

そして、誤解であることを指摘すると、更に火に油を注ぐ結果になる。

韓国にはポシンタンという犬肉の料理がある。それを報ずる外信でもあると大騒ぎする。馬鹿にされた訳ではないのに、馬鹿にされたと感じてしまうからである。

始末に負えない「論文」というのがある。

過去の研究を参照することなく、誤った情報や理屈に合わない自分勝手な約束事を寄せ集めて導きだした主張である。いわば激しい「思い込み」であるだけに、部分的に誤りを指摘しても、著者をいきり立たせるだけである。だから最良の方法は無視すること。しかし、それを反論が無かった証拠とするのだからますます始末に負えないが。

始末に負えない主張というものがある。

漢字もマンガも柔道も韓国が発祥の地であり、孔子も韓国人だというのである。これほど率直に劣等感を口にする民族もないだろう。中国の東北三省ばかりでなく、山東省や華北までも朝鮮領土だったと主張する連中もいるのだから、対馬を自国領土と言っても不思議でない。

ましてや、竹島(独島)をや。

誰もほめてくれないと自分で自分をほめる。これを劣等感という。弱い犬ほどキャンキャン吠える。ハリネズミは全身の針を逆立てて外敵を威嚇する。劣等感のなせる技である。

どこの国でも歴史には恥ずかしさを持っている。それをムキになって否定すれば、ますます相手はいきり立つ。一国の総理が「慰安婦強制連行に国家が関与した事実は見つかっていない」などというのが、最低最悪。こんな言葉は、下っ端の官僚の言うことである。

今や、韓国においても「反日」は崩壊しつつある。その反日の砦として従軍慰安婦問題を蒸し返しているのである。慰安婦問題を語れば語るほど、恥ずかしく惨めになる韓国人も多くいるのである。

狭い地球上に百億の人が住むには、ハリネズミになって、居場所を確保するか、受ける抵抗が小さくなるように身を小さくして接し合うかのふたつの道がある。より多くの人が住めるのは後者である。

いまを生き延びるための哲学。話題のマイケル・サンデルの『正義』は確かに面白い。

米環境保護局は大気汚染の被害評価にあたって、ひとの命を三百七十万ドルとしたが、七十歳以上の高齢者は二百三十万ドルに割り引いた。しかし反発が多くすぐに取り消した。

カントは嘘をつく行為に非常に厳しかった。しかし、嘘なしにこの世が成立つはずがない。「嘘も方便」を認めぬカントも「真実ではあるが誤解を招く表現」なら良いとしている。

山本夏彦は言った。汚職は国を滅ぼさないが、正義は国を滅ぼすと。

前の世代の犯した過ちを償う道徳的な責任があるか。前の世代と言っても、ジンギスカンの時代もあるし、アメリカインディアンやオーストラリア原住民の時代もある。アヘン戦争の時代もあるし、日韓併合時代もある。犯罪にも時効があるように、歴史にも時効がある。

大きすぎて潰せない。手足や胃・肝臓なら切除できても、心臓は取り外せない。ただし、今や、他人の心臓を移植できる。現代の資本主義もそこまで行かなければ本物ではない。

一流企業のCEOの年収は、米が一三三〇万ドル、欧が六六〇万ドル、日本が一五〇万ドルだと言う。

金正日の体制が早く崩壊して欲しいと願っている人が多いかもしれない。しかし、中国はもとより韓国も金正日政権の崩壊を心の底から恐れている。一人当りの所得が千ドルにも満たない最貧国から難民があふれ出たら、全く対応できない。

その上、混乱の中、ソウルが砲撃されるかも知れないし、核が奪われてテロ示威が起きるかも知れない。そうなれば、中国東北部も韓国も経済的な打撃だけでは済まない。

耳を貴び目を卑しむ。耳で聞くことは尊重するが、目で見ることは軽んじる意。遠くのことをありがたく思い、近くのことは馬鹿にする。また古い時代のことを重く見て、今を軽く見る。自分の目で見たことより、人から聞いたことを重く考える。逆遠近法である。

若さとは、初心者になれることだ。歳をとるとビリになることなどプライドが許さない。しかし初心者ほど早く進歩するものはない。その楽しさを知るべきだ。

知っていることや懐かしい音楽を聴くのは心地よい。その極まりは、自分のことが話題にされる時である。誰でも自分のことは一番良く知っている。その自分のことが、話題になれば、脳細胞が刺激される。だから、話題が途切れて、間が持たない時には、相手のことを語るに限る。これが話術の要諦である。

考古学も、科学と同じように美しい理論が醜い事実によって壊される分野である。異なるのは美しい理論に安住していても学者として致命的な痛手にはならない点だ。

プロの考古学者はしばしばアマチュアに負ける。「ご破算で願いまして」ができないからだ。

私は想う。研究はロマンに満ちた高尚な遊びだと。人類の長い歴史で、研究というノーブルな行為が職業化したのは、つい最近のことに過ぎない。研究するということは、小説家や画家、作曲家が売れない作品を書き続けるのに似て、最初から報酬を約束された世界ではない。だから職業的な研究者は自戒すべきだ。本来は高尚な遊びなのだから、研究費も自弁すべきものなのに、給与さえ貰っていると。それがアマチュアの研究に遅れをとったり、アマチュアから痛烈に批判されるとは何事か。

歴史や考古学分野においては、第一次資料を提出した

研究者に、その解釈を委ねるという風習がある。特に、分析などの科学的な知識を必要とする分野では、分析を担当した研究者が、その産地や製法の推定にまで深く関わるのが普通である。いわば一般の考古学者は「他人の持ち歌は歌わない」のである。

あらゆる学問分野の中で、考古学ほどアマチュア参加の多いものもないであろう。

このような在野研究者の活躍は、時によっては、職業としての専門学者からの妬みをさそい、意図的な無視や低評価や、業績の横取りを生むことにもなる。

そうなると、むきになるのが人間の性であり、アマチュア研究者は、更に学説を先鋭化させ、強引な論理や主張、無理な証拠を求めて走り出す。そしてその無理が綻びを生み、専門学者からの反撃にあって、また無視や冷笑に晒される循環を生む。

旧石器捏造事件を最初に告発した角張淳一は、十年を経て『旧石器捏造事件の研究』を著し、事件が単なる「発掘捏造」ではなく、「考古学研究の捏造」であったことを明らかにした。

すなわち、この事件は「考古学の学説」の捏造であり、その捏造の方法は「解釈」を捏造したのではなく、「事実」を捏造しているのが特徴だという。

自分の学説や世界観だけで先史時代をつくり上げようとし、国民や国を騙すために、発掘事実を捏造したという「非常に凶悪で、恐ろしい事件」であったというのである。

池田清彦は『科学はどこまでいくのか』の中で言う。

個別の専門学会というのは、ある意味では極めて閉鎖的な組織である。多くの学会は、基本的には会費さえ払えばだれでも入会できるようになっており、一見開放的に見える。しかし、学会誌に投稿した論文の掲載にあたっては、レフェリーがこれを審査して、学会のパラダイムに抵触する論文はすべて掲載拒否をしてしまう、ある意味では極めて保守的で頑迷な組織でもある。

昔は進学したくとも経済的な理由で進学できない者が多かった。しかし学ぶ機会を奪われた者の中には、悔しい思いで独力で学び一流を目指し成功する例も多かった。各職場には、大卒など及びもつかぬ実力者がいて、それが社会を支えていた。

また、たとえ彼らが社会的な成功を得ることができなくとも「経済的な理由」という言い訳を準備しておいてくれた。今は、社会的な評価が「個人の能力」によって決まり、社会に対して、言い訳が出来ない。それは、はるかに冷酷な世界である。

東大出は不幸だ。昇進を続けないと家族からも同僚からも冷たく見られる。ましてや、能力以上に先を走らさせられた秀才ほど不幸だ。鈍才にも次々に抜かれる。

競輪では前を走ると風圧で体力を消耗する。だから皆、後を走りたがる。こんな奇妙なレースはない。そもそも、マラソンで実力以上に飛び出せばつぶれるのはあきらか。世の教育ママはすこしは学んだら如何か。

タレントが続々政治家に転身している。タレントで飯がくえなくなったからか。それにしても政治が食い物として魅力的だというのが問題だ。

議員が多いほど官僚をコントロールできるとでも思っているのか。議員が少なければ、官僚はかれらを怖がるにきまっている。首相は一人いれば十分だ。ふたりもいたら政治はできない。

マスコミは毎日のように、○○本部が△△議員に提出した資料によれば、「海軍の誘導ミサイル発射二十三発の内五発は命中しなかった」とか「陸軍士官学校出身者の将軍進出率は七十七パーセント」とか「外交通産部の採用者六九八名の内、縁故採用が四四〇名」などと報道している。学ぶべし。

韓国では、ひとりひとりの国会議員に国政監査権が与えているらしい。

公明党が予想通り、民主党にすり寄り始めた。中間政党にキャスティングボードを握らせてはならない。

長い論理は危うい。短い論理は深みに達しない。

少数意見が反映されない。それは独裁政治ばかりでなく、民主主義の原理でもある。

君は龍馬が維新を起こしたとでも思っているのか。

博愛主義は素晴らしい。しかし、家族愛・郷土愛・祖国愛が固まった後で、最後に博愛や人類愛が来るのである。順番を逆に教えてもうまく行くはずがない。

人みな生をたのしまざるは、死を恐れざる故なり。死を恐れざるにはあらず、死の近き事をわするゝなり（徒然草）。

（司馬雑感　二十六）

司馬遼太郎の描いた「長州」

山田嘉久

一　長州人とは

司馬遼太郎の長州に対する思い入れは人一倍濃い。彼の後半生のライフワークともいうべき「街道をゆく」シリーズでも第一巻（昭和四十六年）で早くも「長州路」として登場している。

戦国時代の毛利氏は安芸国広島を根拠地に山陽山陰十一国を領地とした百二十万石の大大名だったが、関が原の戦いで西軍に組したため、徳川期には長門と周防の二国三十六万九千石のみに閉じ込められ、しかも日本海側の僻地萩に城を置くことを強制された長州の歴史を、まず司馬は書いている。

そして「長州人とはなにか」に話を及ぶ。

〈長州人はどういう行動を起すにしても、その前後に理屈づけをする。そのうえ自分の劇的行動なり劇的境涯なりを詩にする。〉

また〈長州藩の尊王攘夷運動は薩摩のように「人格」として存在せず、あくまで理想と思想として存在した。いわば、書生のあつまりであった。後輩との関係はせいぜい兄貴分に過ぎず、親分になることは互いに許さない〉と長州人を規定している。

そして長州人の特色として①思想的仁者、②怜悧、③都会的の三つを挙げている。

幕末の長州人はたしかに猪突猛進の観があったが、長州人に対しては例えば水戸ツポ、土佐ッポ、薩摩ッポというように長州ッポと言わないのは「怜悧さ」という他の集団に見られないふしぎな属性が長州人にあったからだろうと司馬は推察している。

司馬がその前々年の昭和四十四年に「文芸春秋」に一年間にわたって連載された「歴史を紀行する」は後の「街道をゆく」の前駆的役割を果たす好著（同年の読者賞受賞）だが、ここでも司馬は「維新の起爆力、長州の遺恨」の一章を設けているが、幕府に対する積年の恨みから

よく知られていることだが、司馬は幕末の人物像を三種類に分類した。

まず第一は維新初動期に現れる人物。詩人的な預言者で自分の思想を結晶化しようとして、それに忠実であろうとするあまり、人生そのものを失ってしまうことになる。刑死または非業の死を遂げる。吉田松陰がその代表で、佐久間象山などもこれに当たる。歴史家松本健一は彼らを「革命的ロマン主義者」と名づけた。

第二のタイプは卓抜な行動で社会を動かす人物。「乱世の雄」だが、乱刀のなかで闘争するものの、これも結局は非業に斃れる。高杉晋作や坂本竜馬が代表格で、合理主義的精神を持った直観力に優れた人物といえる。

第三のパターンはこれら先駆者の理想を一部捨てて、処理可能な形で新体制を作り上げた人物。理想よりも実務を重んじる有能な処理家タイプ。伊藤博文、山形有朋などで維新後、新しい権力社会を作り上げるが、その社会を守るために極端な保守的な政治家に変身してしまう。

二　「世に棲む日日」と「花神」

前記、維新時の三タイプの人物のうち、司馬が好んだのは勿論、一または二のタイプ。従って彼の数多くの幕末小説の主人公はすべてこれらの人物で、第三のタイプを取り上げることはまずなかった。

長州を舞台にした小説も多く書いたが、その代表作というべき「世に棲む日日」は前記第一のタイプの吉田松陰と第二のタイプで松陰の弟子高杉晋作が主人公となっている。

また、これとは別に完全なテクノクラート（技術者）も司馬好みだった。

医者の出ながら近代的兵制を樹立した長州人大村益次郎（村田蔵六）を主人公とした「花神」はこれに当たる。（蔵六と同じ長州鋳銭司村出身の天童晋介を主人公とした初期作品「十一番目の志士」も長州を舞台としているが、天童は司馬の創作上の人物である。）

ここでは「世に棲む日日」を追ってみたい。

〈長州の人間のことを、書きたいと思う〉

師と弟子の関係を行動と思想の両面から追及したこの長編の第一行を司馬はこう書き出している。そしてまず萩近郊にある松陰の墓参りの場面からこの小説はスタートする。

この地は松陰の生誕の地で、松陰ゆかりの吉田家、玉木家、杉家それに弟子の久坂玄瑞の墓地でもあったよう

だ。

松蔭吉田寅次郎は二十六石という微禄の長州藩士杉百合助の次男坊である。吉田家は子だくさん家族であったが、松蔭だけが吉田姓であった。父の弟大助が吉田家を継ぎ、松蔭は幼児の頃から吉田家の養継子になっていたからである。

しかし松蔭の遺骨は此処には眠っていない。

東京人形町の繁華な通りを少し入ると十思公園がある。このあたりに松蔭など幕末の志士達が入牢されていた伝馬町牢屋敷があった。公園の片隅に松蔭終焉の地碑と

「身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも留置かまし大和魂」

の歌碑がある。この詩は戦前の皇国史観でもてはやされ、軍国少年だった私なども何度となく暗誦させられたものだった。

世田谷若林に「松蔭神社」があるが、此処が松蔭が改葬された場所である。多分、高杉晋作が小塚原に無残に葬られた松蔭の遺体を掘り起こして世田谷にあった毛利別邸に運び移したものだろう。

ところで、司馬にとって松蔭の名は小学校時代から聞かされていたが、その印象は〈ひどく荘厳で重苦しい存在〉だった。更に〈国家が変になって〉くると〈いよいよ利用〉されてきたと感じていた。そんな松蔭の戦前のイメージから司馬も当初は食わず嫌いで松蔭を好きでなかったようだ。

それが調べてゆくうちに非業の死を遂げたこの若者が司馬好みの極めて楽天的な性格の持ち主であることに気づいて次第に魅かれてゆく。この本でも〈ふしぎな若者〉と松蔭のことを語っている。

政治犯として江戸に送られた松蔭だが、この頃でも彼自身は全く悲観していない。裁きの場を幕府に対して尊皇攘夷の主張を説く絶好の機会と考えていた。しかし幕府には通じなかった。ますます危険人物とみなされ、遂に死刑を言い渡されるのである。

松蔭の魅力についてはそれ以前に萩の野山獄に入れられている時代、獄中のならず者全員を心服させてしまうことにも表れている。この獄中で謎の女と知り合う。この小説で（母親を除いては）唯一の女性の登場シーンだがお互いに異性としての感情を持っていたと司馬は書く。

松蔭が先に出獄したときの彼女の送別の句

「鴫立ってあと寂しさの夜明けかな」。

彼女は明治まで生きて、つねに松蔭のことを語っていたという。

若い頃の（といっても死ぬ時も三十歳に満たなかったが）松蔭はまず旅行者として造形されていく。移動が制約されていた封建制度下でよくもこれだけの旅行ができたものと感心させられるが、我が辺境の房総の地にも足を運んでいるほどである。

松蔭の旅行記も有名だが、司馬は松蔭の文体を絶賛して、正岡子規のそれと生き写しだとも書いている。（このあたり多少、「贔屓倒し」の感、無きにしも非ず）

なお伊豆の下田蓮台寺に「吉田松陰寄寓の跡」がある。ペルー来航時に密航を企て下田を訪れた際に八日あまりを過ごした家だという。松蔭が使った浴室や二階の隠れ部屋がそのまま残され、松蔭使用の机や硯などが展示されていた。

密航に失敗した松蔭はここから萩に護送され謹慎を命じられる。松蔭の実家である杉家で、今も「松蔭幽囚旧宅」として保存されている。その隣が有名な松下村塾。松蔭の叔父玉木文之進が開いた私塾で、松蔭はここで二年半、国史や地理、兵学そして時事問題まで講義した。物置小屋に毛の生えたほどの狭い家だが一時は八十人ほどの子弟が集まったという。このなかから晋作をはじめ久坂玄瑞、木戸孝允、伊藤博文、山形有朋、前原一誠など幕末の英傑が育っていくのである。これら革命期の英傑らを司馬が三種類のタイプに分類しているのは前述の通りであるが、私は萩に泊まった旅館の近くにこれら志士の旧宅が散在するのを知って、さながら維新史を見るような思いだった。

松蔭が教えた二年半という短い間にかくも奇跡が起きたのはなんだろうか。

司馬は松下村塾を〈世界史的な例からみても稀なこと〉として、先ず松蔭の人の長所を見抜く才能を挙げている。例えば何の取り得のもなさそうな伊藤博文にも〈周旋の才あり〉と評価している。（尤も伊藤自身はこれを不満として終生、松下門下であることを秘したといわれているが。）

松蔭の遺筆を展示した資料館もあった。死罪を覚悟した松蔭が両親に宛てた遺書。

「親思うこころにまさる親こころ　けさの音ずれ何ときくらん」はなんとなく胸にせまるものを感じた。

松蔭が幼年時代から叩き込まれた「公」と「私」の区別。本を読んでいる松蔭が顔に止まったハエを手で叩くのを見た叔父玉木は松蔭を死ぬほど折檻した。

本を読むのは「公」のためでありハエを叩くのは「私」であると。「公」のあいだに「私」を決して挟んではならないというこの逸話を何度、司馬の文章から読んだことだろう。この逸話を聞くたびに私などは一種の「狂気」を感じるが、この「狂」こそが松蔭の信奉した陽明学でいう「知行合一」の理想主義への情熱だと司馬は云うのである。

（松蔭の人の長所を見抜く才能に注目する司馬だが、別のエッセイで司馬自身の体験を語っている。小学校時代

から劣等生だったと卑下する司馬だが、一回だけ褒められたことがあったというのである。それは作文の時間、教室中がざわついているなかで司馬だけ静かに教室の外に目をやっていた。ただぼんやり外眺めているだけだったが、それを見た先生が「福田（司馬の本名）を見習え、作文の前にはどう書こうか考えるものだ」と。これが将来、もの書きになる動機の一つになったかもしれないと書いている。）

松蔭が松下村塾で奇才と見た人物が二人いた。

思想家の久坂玄瑞と現実派の高杉晋作である。晋作は塾生の中では珍しく百五十石の上士の子である。上海で港を森林のごとく覆う黒船を目にして「幕府などは屁のようなものかもしれぬ」と思う。

帰国後、脱藩した晋作は身分を問わぬ軍隊奇兵隊を創設する。そして英国から帰った井上聞多、伊藤俊輔らとともに開国主義を藩に迫るが認められない。ついに晋作は長州にクーデターを起こし成功するが、このころ既に晋作は病に冒されていた。病床で「おもしろき　こともなき世を　おもしろく」と書いたところで筆が手から落ちたところで、この長編は終わっている。

三「逃げの小五郎」

司馬の「世に棲む日日」や「花神」、また長編「翔ぶが如く」でも長州を代表する維新の元勲桂小五郎（木戸孝允）はたびたび登場するが、他の元勲（西郷や大久保）ほど強烈には描かれていない。

「世に棲む日日」には、松蔭と桂の関係をこう書いている。

〈吉田松蔭は「桂というのは、どうも自分とは違う」と思い続けていた。吉田は思想的体質者だった。桂は天性の政治家で、吉田の苦手なタイプだった。（中略）吉田は思想を純度高く突き詰めていけば、その行動は狂人にならざるをえない。桂は現実家で狂人にはならない。吉田はそのことを感じていた。〉

ここに司馬の人物の好みがよくあらわれている。

彼が強く興味をひくのは前にも書いたように松蔭、高杉、西郷、あるいは江藤新平などある程度狂信的な人物、理想主義に過ぎたる人物であり、戦国期で云えば「国盗り物語」の斉藤道三や明智光秀がこれに当たるであろう。逆にあまり興味をひかない人物といえば桂をはじめ伊藤、山県など現実感覚に優れ、権力を握るタイプの人物で戦国期では徳川家康にも距離を置いている。

そんな影の薄い？桂について唯一、主人公とした短編が「逃げの小五郎」（昭和三十八年）である。

「禁門の変」（一八六四年）の後、幕府の長州人狩りが

激しくなるが、桂がそれを逃れて但馬出石藩（兵庫県出石町）に潜んでいた日々を描いている。

兵庫県北部の出石町は仙石三万石の城下町だが、この短編は藩の槍術師範役堀田半左衛門が出石の昌念寺に潜んでいる小五郎を見かける場面から始る。二人は碁盤を囲む仲となるが、用心深い小五郎はなかなか打ち解けない。ようやく桂の正体を見破った堀田だが、そんな桂を励まし桂は無事長州へ帰ることができたというストリーである。

またこの小説では桂の逃亡を手伝う人物として甚助、直蔵の兄弟が登場する。

〈物好きというか、義侠としか云いようがない〉と書く司馬だが、この藩全体が長州藩の相次ぐ悲運に同情的であったのは、この藩が幕府に対して外様であったためだろうと司馬は説明している。

また題名の「逃げの一」も日頃の桂の態度を表現しているのではないか。桂は江戸の斉藤道場で塾頭まで務めたほどの腕前だが、どんな刺客からもひたすら逃げることを身上としていたというのである。（新撰組の連中がやたらに殺人を繰り返すことと対照的に桂は一人も斬っていない。このことは千葉道場の塾頭だった坂本竜馬も同じ。なお「竜馬がゆく」では竜馬と桂が試合をする場面があるが、これが史実であるかどうか私は知らない。）

また「司馬遼太郎が考えたこと④」（出石の兄弟）では〈木戸というひとは、その行跡を丹念にたどってみると、性格はきわめて女性的な（うらみつらみが多いたちという点で）ところがあり、晩年などはあきらかに鬱病的性格がみられる〉と分析している。

四　「無名の長州人」

「街道をゆく」④（洛北諸道）に「無名の長州人」なる一章がある。その名を「河内山半吾」といい、どういう来歴の人物か、明治後はどうなったか分からない人物だが、司馬によると実在の人物らしい。

そのような「無名の長州人」を通して、司馬は幕末の長州の苦悩を語っている。

幕末の長州が大挙、京都に乱入したものの、幕府側に大敗したのは元治元年（一八六四）の夏だった。所謂「蛤御門ノ変」だが当初、高杉晋作や桂小五郎などは反対したらしいが、長州の大勢には抗しがたかった。案の定、以後、長州藩は絶体絶命の窮地に陥る。

この元治元年ノ変のあと、長州人はことごとく幕府の犯罪者になった。そのため、かれらは京、大阪に近寄れなかった。

新撰組の主任務が京都に潜入する長州人を捕えたり斬ったりするようになったのはこの時期である。

三条大橋の袂には「長州人をかくまってはならない」の高札も立てられた。

長州人河内山半吾も元治元年ノ変の後、京を逃れ洛北の山国郷や南丹波の村々に出没して京都情勢を探るために活躍する。そして「官軍山国隊」を組織する。

更に身の危険を感じた半吾は虚無僧にまで身を落す。丹波の馬路村にある長来寺の小寺重勝院に住み込み、活動を続けるのである。

潜伏すること三年余。慶応四年（明治元年）正月、鳥羽伏見ノ戦いが始る。京にいる薩長軍はそれに数倍する徳川軍を迎え撃つが、当初、謀主の西郷隆盛は必ずしも勝利の自信はなかった。万一、負けたときには年少の明治帝に女装させ、山陰方面に脱出させる用意までさせていたという。

そのためには山陰方面への沿道の掃討だけはしておく必要があった。その方面への大将として選ばれたのが若干二十歳になったばかりの西園寺公望であったが、兵力わずかに二百人で、沿道の諸藩の動向も分からない。

そのとき「馬路村を最初の陣屋にしてもらいたい」と名乗りでたのが河内村半吾だった。そして彼の組織する「官軍山国隊」が強力な援軍となるわけである。

五　「殉死」

同じ長州人の乃木希典を主人公にした作品が「殉死」である。この作品は「要塞」と「腹を切ること」の二部から成っているが、その年、早速「毎日芸術賞」を受賞している。

乃木は松蔭とは相弟子の姻戚関係にあり、共に陽明学徒であったが、松蔭が「孟子」の革命思想に同化することにより革命家になったのに反して、乃木は山鹿素行の「中朝事実」の忠君思想に同化することによって絶対君主としての天皇に殉じてゆく忠臣となったと解釈したのは歴史家松本健一であった。（三島由紀夫と司馬遼太郎）その「中朝事実」について司馬は「殉死」の中で学習院院長であった乃木が、お人払いをしたうえで昭和天皇（当時裕仁皇太子）と弟君たち三皇子に「中朝事実」の講義をした事実を披露している。

講義を聞いた十二歳の皇太子は不審げに乃木に質問した。「あなたは、どっかへ、行ってしまうのか」。乃木はあわてて否定したという。殉死の二日前のことである。

司馬は乃木と明治天皇の関係を「中世的な主従―鎌倉武士と郎党」と的確な比喩で語っているのである。

なお「殉死」は私の最も好きな司馬作品であるが、詳細は既に「まんじ（百八号）で取り上げたので今回は割愛したい。

目耕録（その三）

山本鎭雄

杉浦明平著『農の情景―菊とメロンの岬から―』を読む（岩波新書、一九八八年）

目耕：目で紙田を耕す。読書することを譬えて言う（世説新語）。

アマチュアの野菜作り

愛知県豊橋市に住む旧友に徳冨健次郎の『みみずのたはこと』（一九一三年）について書いた本誌『まんじ』第一一七号（二〇一〇年八月）を謹呈した。「これから農村をテーマにした作品を読んで行きたい、そのような作家・評論家に心当たりはないだろうか」と相談した。彼は「渥美半島の杉浦明平はどうかな」と、応じてくれた。そう言えば、三十数年前に彼のクルマで豊橋から渥美半島の先端にある観光地の伊良湖岬（いらごみさき）まで案内して貰ったことを思い出した。

周知のように、伊良湖岬は辺鄙な地だったが、『万葉集』に歌われ、平安末期に歌僧の西行も訪れ、江戸前期の俳人の松尾芭蕉も訪れたように、風光明媚な景勝の地として知られていた。今日はおそらく島崎藤村の「遠い島より流れ寄る椰子の実一つ」と言う『椰子の実』の詩歌で有名だろう。

若き柳田國男は静養をかねて伊良湖岬に滞在し、浜辺で南の島から漂着した椰子の実を発見した。藤村は、帰京した柳田からそのことを聞き、のちに新体詩『椰子の実』を作詩した。もっとも、漂流した椰子の実のモチーフは、柳田の晩年の著作『海上の道』（一九六一年）に結実し、日本民族の起源の一つを解明した。私は伊良湖岬を見物したとき、そのことを記した記念碑と詩碑があったと記憶している。

私は退職を契機に、妻の実家のある山梨県東部の桂川沿いの河岸段丘の僅かな平坦地の一角で野菜作りを始めて、近く四年目が終わる。今年の春夏野菜は「寒い春」のために、総じて不作だった。夏は酷暑と水不足のために葉菜類は害虫に食害され、残念な結果に終わった。

私は炎天下の畑で軽い熱中症にかかったらしい。ペットボトルの水をがぶ飲みし、たっぷり汗をかいた。次第に疲れ易くなり、休みながら、野良仕事を続けたところ、めまいがしたあと、吐き気がした。早速、水を飲んだが、汗は出ず、尿意を催した。

丸椅子に座り、木陰で涼んだ。「これは、あのことだったのか」と、在職中に出版したジュニア用の社会学のテキストの一節を思い出した。アメリカの社会学者タルコット・パーソンズはシステムという概念によって「社会」を総合的に把握した。

彼はアメリカの生理学者のW．B．キャノンのホメオスタシスという概念、気温や湿度の変化、体位や運動の変化に応じて、生体には一定の標準状態を保持する恒常性維持のメカニズムが働く。パーソンズは生体の独自なメカニズムを借用して、「社会」というシステムはそれ自体の安定性を維持・存続するというのである。

気温が上昇すれば、生体は皮膚から放熱や発汗して一定の体温を維持させる。ところが、酷暑のため体温が異常に高くなり、生体に機能的に破綻（逸脱）が起こる。熱中症の軽い症状だったのであろう。その夜、足が痙攣して、何度か目を覚ました。昼過ぎまで身体がだるくて起き上がることが出来なかった。「年寄りの冷や水」とはこのことかと実感した。

昨年の晩秋に空豆の種子を蒔いた。ホットキャップをかぶせて、冬を越す。毎年、経験したことだが、春になって生長した空豆の様子を見たら、花と莢に相性のよいアブラムシが真っ黒にこびりつき、恐ろしくなって、古新聞にくるんで燃やした。今春は「寒い春」だったので、アブラムシの攻撃を免れ、実入りは悪かったが、なんとか貧弱な空豆を収穫することが出来た。

今夏の酷暑と日照りのため、新米の品質の低下と収量の減少が報道されている。たしかに、貰った今年の新米はぼそぼそして不味かった。私の見聞では豆類の収穫も不振だ。インゲン豆は蔓ぼけして実つきが悪い。手前味噌を作るため、近くの農家に購入を予約した大豆もまったく不作だった。小豆もまた同じ。

杉浦明平の渥美

作家・評論家の杉浦明平は、著述に専念し、アマチュアの百姓に徹し、ナス、大根、レタス、ブロッコリー、白菜、キャベツなど、自給用の少量多品種の野菜作りに励んだ。耕地の規模や立地、平坦地と山間地、温暖地と寒冷地という決定的な違いがあるが、素人の野菜作りというスタイルは、明平には失礼だが、同じである。そして、彼は生来の病弱で、私は週一回の畑仕事というハンデがあって、草取りに往生している点でも同じだった。

杉浦明平は愛知県渥美郡福江町折立（現在、田原市折立町）の地主兼雑貨商の家に生れた（一九一三―二〇〇一年）。彼は東京の第一高等学校を卒業し、東京帝大国文科に在学中に短歌雑誌『アララギ』に投稿し、さらに同人誌に短編小説を発表した文学青年である。

明平はアジア太平洋戦争の末期に結婚し、郷里の福江に戻り、戦後は『新日本文学』を中心に作品を発表した。渥美湾の養殖海苔の売買で暗躍するブローカーを法廷で告発したルポルタージュ『ノリソダ騒動記』（一九五二―五三年）を『近代文学』に連載した。その後、福江町教育委員を務め、渥美町町会議員として二期八年を務めた。さらに町会議員に在職中、『村の選挙』（柏林書房）、『台風十三号始末記』（岩波新書）、『町会議員一年生』（光文社）などを出版した。

その他、明平は渥美半島の歳時記『海の見える村の一年』（岩波新書）、エッセー集『渥美だより』、『渥美の四季』（家の光協会）、『農の情景』（岩波新書）を上梓した。明平は幕末の蘭学者で三河田原藩の家老について『小説渡辺崋山』（朝日新聞社）を出版し、毎日出版文化賞（一九七一年）、さらに『ミケランジェロの手紙』の翻訳で日本翻訳出版文化賞の特別功労賞（一九九五年）を受賞した。

私が明平の多種多様な作品群のなかで、とくに関心があるのは、一連の渥美半島の歳時記、農漁村で生きる人々の生活を描いたルポルタージュである。ここでは主として晩年のエッセー集『農の情景』（一九八八年）をとり上げたい。大患後の明平が散歩がてらに自宅周辺の田や畑を見聞した歳時記である。

『渥美の四季』の「あとがき」で触れているが、渥美はかつて「奥郡（おくごおり）」と言われたように、長い間、辺境の地だった。そのため、住民は古い精神構造を有ちながら、農業は急速に超近代化し、田原湾を埋め立て、工場団地が造成され、自動車工場が新設され、さらに伊良湖岬を中心に観光産業も盛んになった。明平が愛してやまないのは、住民の精神構造の「古さ」と最先端の農・工・サービス業と住民の生活様式の「新しさ」の「ちぐはぐ」な情景である。

専業農家の観察と記録

渥美半島は天竜川より豊川に分水し、先端の伊良湖岬まで貫流する豊川用水の通水による灌漑と、土地改良事業（耕地整理と交換分合）が行われた。それ以来、ガラス張りの温室（渥美町は日本一の温室密度）やビニールハウスの栽培によって、換金性の高い作物の電照菊、その裏作のメロン、トマト、花卉の施設園芸、さらに秋冬

野菜のキャベツの露地栽培によって、大規模専業農家は高収入を上げ、農水省から「日本農政のショーウインドー」といわれ、外国からも見物者が絶えず、また外国人の農業研修生を積極的に受け入れている。

ところが、生産農家はそれぞれの品目について、温暖か寒冷かという自然条件、さらに需要と供給の卸売市場の相場に左右され、出荷価格は暴騰したかと思えば、暴落する。渥美は投機的な専業農家である。ちなみに、キャベツが全国各地で豊作が伝えられ、相場が暴落し、回復する見込みがないと、大型トラクターで踏みつぶし、早出しのスイートコーンや露地メロンの種撒きにとりかかる。ところが、キャベツの相場が暴騰して大儲けすると、温室を増設したり、高級車を購入したりする。

一般に、高度経済成長期に「跡取りオート（バイ）に、嫁取り耕耘機」と言われたが、渥美では跡取り息子に高級車と大型トレーラーを買い与え、娘には自動車教習所に通わせて運転免許証を取らせ、嫁には原動機付き耕耘機の運転講習会を受講させた。

豊橋市に在住の知人によれば、フォード製の大型トラクターを購入し、実習授業で稼働させたのが、渥美農業高校だそうである。この超大型のトラクターは農地を深く耕し、野菜作りの手間を大幅に軽減させる。しかも、車好きの生徒を大いに魅了させたであろう。

彼らは農家を継ぐと、親にねだって超大型トラクターを購入した。明平によれば、国道でこのトラクターを走らせると、運転手は「のろのろ走るクルマを追い抜くときの心地よさは何ともいえない」そうだ。

フォード製の大型トラクターはアメリカの大規模農場のために開発された。渥美では一戸当たり多くて二町歩を耕作する大型トラクターは、明平には「一年に四日か五日あれば十分で」、「実用よりも、高価なおもちゃ」に見えたのである。

私が野菜作りを始めた当初、「蒔かぬ種は生えぬ」と考え、栽培カレンダーを見て、種蒔きに精を出した。その後、野菜作りは種蒔きよりも、「土作り」と「草取り」が重要だと理解した。

私の場合、種を蒔く二週間前に酸性土壌を中和させるために苦土石灰を撒き、小型耕耘機で耕し、さらに一週間前に有機肥料を撒き、再び耕耘機で耕す。さらに中耕で耕耘機を稼働させる。さらに畑に雑草が生えれば、耕耘機を稼働させる。夏場の草取りほど、難儀なことはない。

小型耕耘機とは異なり、大型トラクターは広くかつ深く耕せるので、それほど頻繁に稼働させる必要はないかも知れない。ところが、耕地が散在している場合、トラクターを稼働させる回数は増えるだろう。小型耕耘機も使わず、もっぱら鍬と鎌を使用し、二反五畝の畑の雑草ジャングルに四苦八苦している明平には、多少のひがみ

根性からフォード製の大型トラクターは「実用よりも、高価なおもちゃ」に見えたのであろう。

裏作メロンの温室栽培

明平の『海の見える村の一年』（一九六一年）によれば、渥美町の温室で電照菊の栽培が行われていた。生産農家は温室の稼働率を高めるために、電照菊の裏作として換金性の高いメロンの栽培を試行した。ところが、生産農家は熱心に工夫も研究もしなかったため、渥美メロンは不味く、下級品という評価が市場で定着した。そこで生産農家は重い腰を上げた農協の指導を受け、糖分十五度の甘いメロンの栽培に成功した。

明平の『渥美だより』（一九七四年）によれば、最初はマクワウリ型のプリンスメロンを栽培した。その後、糖度と相場の高いネット型のメロン作りが主流となった。農協はメロンの品質を厳重に検査し、合格品には検査証を張って出荷した。その結果、検査証のついた渥美メロンは卸売り市場で高値で売買されるようになった。

私の経験では、熟したもぎたての野菜は最高に旨い。水分補給のため、畑できゅうりやミニトマトをもぎ、塩を付けて食べると、甘味と香りがあって苦労が報われたように思えた。

私は畑で水分補給のために熟したスイカを丸ごとかぶりついた。最高に旨かった。そこで、同じ熟したスイカを自宅に郵送したところ、スイカは潰れ、濡れたダンボール箱が配達されたことがある。

ところで、商品として出荷する渥美メロンは、かなり早めに採って市場に出す。四、五日は追熟させないと、甘みと香りは出ない。本当に旨いメロンは自然に熟したメロンだが、長持ちせず、二、三日で腐ってしまう。生産者は自家で食べ切れないメロンを近くの八百屋にばらで安値で売る。渥美の住民はこの旨くて安いメロンを好んで食べるそうだが、そういう機会は滅多にないそうである。消費者にとって野菜類は地産地消が最大のご馳走なのだ。

専業農家の世代交替

一般に、親の跡を継いで家業を子に譲る一世代はほぼ三十年と言われてきた。戦前の農家では、親・子・孫と続く世代の交替は実に緩慢だった。夜明けから黄昏まで鍬、鎌、犂で耕作し、経験と技術のたけた一家の主（あるじ）は、家業を急いで跡取りの息子や娘に譲る必要はなく、一家の財布を握り、家長の権威を振りまくことが出来た。

ところが、明平の『農の情景』によれば、渥美の専業農家は一九六〇年を境に、耕作の手間を省くためにハンドティラー（小型耕耘機）を導入した。それから二、三年後には大型耕耘機を導入し、犂耕用の役牛は牛小屋から姿を消した。どの農家もマイカーを購入するようにな

ると、明治生れの世代を営農の主役からオミットし、家長の権威を喪失させてしまった。

その後、一九七〇年代以降、大規模化した温室にコンピューターを設置し、温室内部と地中の温度・湿度、通風、施肥、灌水（スプリンクラー）、農薬散布などを自動的に管理させた。大正生れの世代は大型トラクターを稼働させることは出来ても、コンピューターには手も足も出せず、営農の主役からオミットさせた。

ところが、「元気じるし」の「じいちゃん、ばあちゃん」が所在なく、ぽつんと居間に取り残されてはたまらない。これまでの習慣どおりに野良に出て、露地の片隅で自給用の野菜を作ったり、「ばあちゃん」は仏壇やお墓に供える四季折々の草花を栽培した。彼らにとって畑の雑草は不倶戴天の大敵で、取り残しは世間体が悪いのだ。

一九八〇年代には世代交替が急速に進行し、昭和前半生れの世代は施設園芸では「足手まとい」になった。ところが、彼らは年金を受給し、普及したゲートボールに興じたり、大衆化したゴルフに熱中したり、さらに自宅に家庭用カラオケ機材を購入し、老後の暮らしを楽しんでいると言う。

「元気じるし」の年寄りは、早朝から始まり、数時間つづくゲートボールと、夕食後に集まり、夜半までつづくカラオケの両方に興じるには、体力と時間が許さない。そこで、彼らはどちらか一方を選択する。ところが、大正生れの明平はゲートボールやカラオケには興味がないが、その見聞を諧謔に記述することに興じ、歳時記を残した。

山村は蕪れなんとす

私が通う山狭村は、渥美の大規模専業農家とは大いに異なる。畑では七十代前後の年金生活者が野菜作りに励んでいる。ところが、近くの農協の直売所に出荷するのはごく少数だ。なかには、家に居ると、酒ばかり飲んでしまうので、日焼けで真っ黒な顔―酒やけではなさそうだ―をして野菜作りをしている。彼は凍みた白菜を塩漬にするが、食べ切れないので捨ててしまうと聞いたことがある。この地で最大の田畑の所有者で、家にいると尻がむずむずしてくるので、天気が良いと、必ず野良に出る。ところが、野菜の収穫は二義的なようで、大型耕耘機を稼働させて、除草に精を出しているようにしか見えない。

隣の畑の跡取りは、兼業農家と言えば、聞こえが良いが、少額の転作奨励金のほかに、農業収入はおそらく皆無だろう。彼は東京郊外に出勤するサラリーマンで、職場で時間とエネルギーを取られているのかも知れない。畑の雑草は背丈ほどに伸び、刈り払い機で雑草をなぎ倒している。彼は畑仕事をすると、爪に土が入り、手が汚れるから嫌いだと言っていた。彼は広い畑の一部を他人に貸すのも嫌らしい。

この山狭村でもゲートボールが盛んだ。今は廃校した中学校の広々とした旧校庭の一角を占拠して、常連のメンバーだけがゲートボールに興じている。ゲートボールは身体以上に、チームワークや駆け引きが重視され、頭の体操になるそうだ。

この山狭村は東京近郊の通勤圏である。かつては土・日か、非番の日に跡取りが野良仕事をしていたが、今は七十歳前後の年金生活者が野良仕事をしていて、畑もまったく高齢者の世界だ。「農業」離れはますます深刻化し、おそらく順調な世代交替は不可能だろう。

二年以上も耕作を放棄したら、雑草ははびこり、その土地を再び耕地に戻すことは容易ではない。農家の跡取りだからと言って、跡取りが必ず耕作する必要はなかろう。この山狭村では広い耕地の一部を畑を持たない近隣の複数の住民に貸し、彼らは自給用の野菜を作っている。

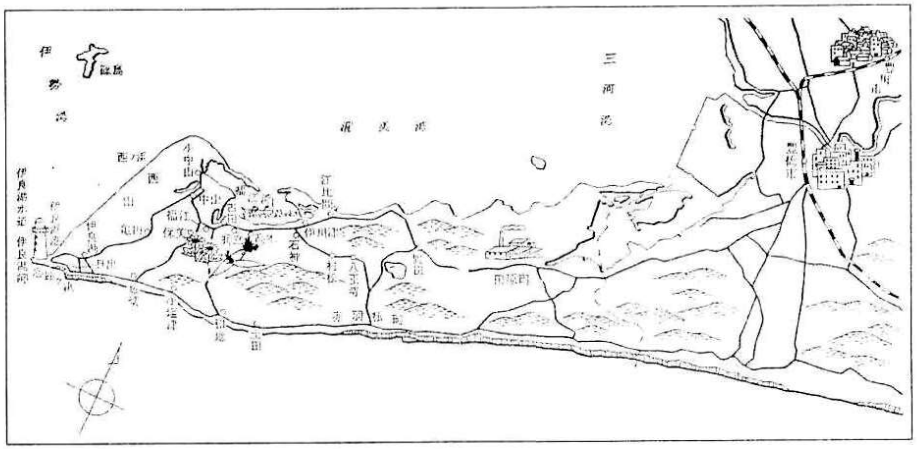
たしかに、耕地の貸借は、都市とはまったく異なり、口答による相対の約束である。個人が市民農園として整備し、書面で貸借契約を結ぶのは難しい。この山狭村で自治体か農協が耕作放棄地や不作付地について農作業の受託や農地の管理代行などの対応策を講じているという話しは聞いたことがない。

すでに中学校は廃校になり、補正予算がつくと、さっさと校舎も体育館もプールも解体し、在校生や卒業生が親しんだ染井吉野の老木を生木を裂くように倒木してしまった。近く小学校も廃校となる。農協は支所を閉鎖し、診療所もなければ、コンビニもない。ただあるのは酒屋と煙草やと理髪店と郵便局だけになった。

この山狭村は丹沢山地の最北端、秩父山地の最南端に位置し、二つの山地の間に桂川の深い渓谷がある。私は野良仕事で疲れると、丸椅子に座り、四季折々の悠然とした山々の景観を満喫する。夕暮れには野良からの帰り、桂川の浅瀬のせせらぎの音を聞き、満天の月と星を仰ぎ、疲労を癒されたように思う。

ところが、国道がこの村が貫通しているため、爆走する自動車の騒音によって、閑静なはずの村の夜間は安眠を妨害されるだけではなく、トラックの疾走のために蒲団ごと遊泳しているかのような錯覚を覚える。私は旧中学校の校庭の一角を年寄りのゲートボールのコートに利用するだけではなく、「道の駅」に活用し、村起こしの拠点にすれば良いと考えるが、それはしょせん余所者のごまめの歯軋りに過ぎない。

活気のない、澱んだ村の情景を観察すると、私は早くて十年後、せいぜい二十年後には「田園将に蕪れなんとす」という情景を推測せざるを得ない。ただ、私には陶淵明のように、世俗との交遊を絶ち、この山狭村を郷里と考え、「帰りなんいざ」という心境にはなれないし、老いた私が何時まで農の情景を観察出来るか定かではない。



出典　杉浦明平『海の見える村の一年』（岩波新書, 1961 年）

陰翳の美学（その五）

外山知

第三章　美を構成する要素

五、美的象徴

4、美的対象と主観

美的意識が、美の鑑賞と創作を生み出すのである。私が美と向かい合う時に、美もまた私を意識する。すなわち、主体世界が客体世界に美意識を感ずるのである。主体が客体の持つ美を呼び覚す所に、美が発生するのである。

自然世界であれ、人間世界であれ、客体世界は主体世界の意識を受け入れるのである。

私が、主観世界の中で価値意識を如何に誘い、素材と構成に結びつけて行くか、起点に立たされる。

また私の脳内で、主観的判断力を増す作用が、たえず思考の対象となって跳ね返ってくる。

以上の点を茶道（茶の湯）の観点から考察してみることにする。まず茶道の中心である点前を、取り上げて見たい。

茶道の作法は室町末期から、亭主が客人を招来する作法として発達してきた。

茶道には大きく分けて、狭い茶室で催される草庵式と、客人が多人数に及ぶ書院式の二通りがあるが、それぞれ茶事の趣は異なってくる。

また茶事には、いくつかの方式がある。それによって点前も、自ずと変ってくる。

ちなみに茶事には、暁（夜込）、朝茶（朝会）、正午（昼会）、飯後（菓子茶）、夜咄（夜会）、跡見、不時（臨時）と、茶事七式がある。

またそれ以外にも、口切り、大福、初釜、初風炉、名残、前茶、一客一亭（独客）などがある。

亭主はそれぞれの方式に従って事前に、客組、日取り、刻限の約束を取り決める。また草庵式か、書院式かによって、準備も異ってくる。

そして前記の中で正式なのは、「昼会の茶事」である ことは論をまたない。亭主は事前に茶事の主題となる、道具類すなわち茶道具、懐石家具、掛軸などの細かな準備が必要である。

これらは季節によって、その取合せに配慮しなければならないのは勿論である。茶会の風態によって、すなわち、祝事、仏事、開炉、名残などに従って、それぞれの調和が保たれなければならない。

客人の案内に当っては、事前の連絡によって、所定の時刻に遅れないように、客人の中の主だった人に、連絡する。

客がやってきて、門口に打ち水などしてあれば、既に用意が整っているものと推察して門を入り、袴付待合へと通じていく。

くぐり戸を少し切ってあるので、作法に従って待合所へと進む。客はこゝで入席待となるのである。

そして、ここで男子は外出用の足袋を脱いで、新しい足袋へとはきかえ、羽織を脱ぎ、袴を着用する。

婦人の場合も羽織を脱ぎ、懐紙、袱紗、扇子の小物を用意して、亭主からの入室案内を待つのである。

やがて半東（亭主の補佐役）によって、外待合の腰掛へと案内される。亭主は茶室をとゝのえ、露地に降り、手水鉢の水を改めてから、中門まで客を迎えに出る。

客は正客から、順次、露地に降りて中門近くの客石まで歩き、亭主の出迎えを受ける。亭主は客人に対して黙礼し、客人も黙礼を返す。

この挨拶を「迎えつけ」の儀と呼ぶ。

亭主が席に戻るのを客人は見送り、いったん待合所に戻る。そして円座を壁に立て、整頓する。

やがて返客から順次中門へ入る。そして蹲踞（そんきょ）の手水鉢の手水を使い、躙口から順次入席する。

そして床間の掛軸を拝見し、道具畳に釜道具、炉中を拝見し、仮座につく。

末客が履物を整え、躙口の戸を音を立ててしめる。音を聞いて、亭主は手水鉢に水を加え、清めてもとに戻る。

そして亭主は客が落ち着いた頃合いを見て、茶道口から入って、主客に挨拶する。これらの一連の諸動作は、作法として決められ、それぞれ心得ていることなので、主人と客の動作は、阿吽の呼吸としてぴったり合っている。

こゝで水屋から炭斗、灰器を持ち出して初炭をおこなう。まもなく懐石菓子が出される。

そしてこゝで休息の為、中立となって、ひとまず客は外部待合へ出る。その間亭主は掛物を巻き、釜のふたをしめ座掃きをする。花を入れ、水指、茶入れをして釜のふたを切る。

後席の用意が出来ると、後入りの合図を、銅羅七点か喚鐘五点かで行う。そしてこの後、濃茶（こいちゃ）、（抹茶をたてる時、一定量の湯に上質な抹茶を多くし、練るようにしてたてる。その時、泡をたてないもの）、後炭（のちずみ）、薄茶（うすちゃ）の順で点前が行なわれる。

薄茶が終了すると、亭主は水屋に下がって待つ。そして客が退席すると、席に戻って客が、躙口から帰るのを見送る。

客が去った後も亭主は席に止まり、今日の茶の湯を思い、客人をしのび、その余韻にひたるのである。後片付はその後に行なう。

翌日、主客人は亭主家に足を運び、後礼を行うのが常道である。以上茶事の基本作法を考察してみたが、一見何んでもない心得が作法の表裏に出て、さび、幽玄を創造している。

茶事の中でも、昼会の茶事が基本的な茶事であるが、時刻、季節によって、その風雅さを愛でるやり方に変化があり、趣も異なってくるのは当然である。

会の催しの種類によって、繊細な手法が、その都度行われるのは当然のことである。

その茶事の精神が、「わび」、「さび」という中世以来の幽玄的手法によって貫ぬかれていることは、言うまでもない。

茶事の点前は、本来濃茶の点前が主流であり、これには古く茶道に荘重さが求められるからであった。

濃茶に対するのは薄茶の点前で、これは軽ろやかな味のもので、濃茶に添えられるものである。従ってあまり格式ばった厳さはない。

主客の間は、和やかに閑談されるのが常である。しかし、形はくずさないのが立前である。その為薄茶の点前を真とし、濃茶の点前を草とする説さえある。

江戸期に成立したと言う七事式（花月、回座、一二三、茶かぶき、廻り炭、廻り花、数茶）などは、茶道を心得た者の、遊びであったと言われたが、本来は修練の為に行ったものである。

茶道にはいろいろな流派があるが、点前の作法も流派によって異なる。亭主の一挙手一動作が、呼吸と共に作法の中に生かされている。

また亭主と客とが、茶席で相対する姿は、主客合一の美的素材でもある。

このように茶の湯の点前に接するとき、たしかに茶を立てる主人の主体的動作と、それを戴く客の客体的動作のハーモニーの中に、美的感動を感ずることができる。

かゝる美的感動は、たとえそれが外観的拝観者であれ、美の世界に包まれ臨場感に接し得る。

そして、私達は茶道という芸術を通して、一つの美的な感性に浸ることが出来る。

また私達は、美を心内に追体験することが可能である。美的素材を如何に取らえ、私達の主観にあるものを追体験するならば、その素材はもはや芸術的な作法となって、より深さを求める。

このように、茶道の諸流派が台頭するのは、茶道の芸術を介して、より高い美的なものを追求するからである。古来から幾多の先人達が美的感動にふれ、それを追体験することで、より高度な意識を自分の中に育くんだ。また新しい美の創造へ、ステップとして生成してきた。流派から分派を生み、飛躍発展への足掛として、新しい主観を育くんできたと思う。

踏越え難い英知と体験を通して、現してきたことに、限りない愛着を感ずる。

同時に主観的な意識を大切に保存し、素材を生かせる後継者を育成しなければならない。

すなわち人間国宝と呼ばれる指導者達を中心に、後輩の人材発掘に意を注ぐことが、不可欠である。

こうして輝く茶道は流転の中で、陰翳を保ちながら、永遠に時を刻んで行くのである。

そして美の健在化は、さらなる美の新生をはかるのが、この道に生きる者の責務と思う。

茶道の道は深い。茶道各流派の発展は、茶道の奥義を今日的なものにし、東洋的な美学を西欧に向けて、発進させている。その理由が、こゝにあるといえよう。これが、

「いつどんな時も主人と客人とは生涯に一度しか出会のないものとして、悔のないように、持て成せ」

と、利休の弟子、宗二（一五四四―一五九〇）が「山上宗二記」で説いている、「一期一会」の心髄である。

まさに、これこそ汲めども尽きない茶道の形而上学的世界観と見てよいであろう。

5、美と空間

私は美を構成する要素について、その都度ふれて来た。

かつてヘーゲルが、精神現象論で内容としての根本的考え方と、感覚的な形式とを構成にして、弁証法的手法で美の体系と歴史に迫ったことは広く知ることである。

それは芸術の実際を大まかな意味内容で割り切ることが出来ずに、一面的な取らえ方でしかなかった。

すなわちヘーゲルでさえ、美の構造、構成に迫り得なかったと言える。後のウティッツは、それについて総合的な基礎的分野の必要なことを解いた。

さらにウティッツは美的なものと芸術的なものを区別して、芸術形式の客観的な条件を分析に生かした。

またウティッツは、何が芸術存在を一般に可能にするかを、論議の対象とした。

したがって形成活動には必然的に、色彩、音律、言語

などの中立するものが素材決定をなした。そこから芸術の種類によって、構成する根本にあるきまりが生れた。

例えば文芸、音楽、絵画、彫塑などに分類分けられた。ある物は時間芸術をきざみ、またあるものは空間芸術、そして並列、継起の芸術と、いわゆるウティッツ流の区分も可能視された。

私は今、ウティッツ流の空間芸術の彫塑、絵画を、静止と並列の二面から解して見たい。

およそ、空間芸術と単純な美とは何か、という受け取り方が、前程のように異なる。

空間芸術の構成素材の一つ一つの美は、それ自体の積重ねが素因となって、感情の体験と結びつく。

すなわち、感情生活に寄り添う。心（Psycke）が支配的になる。そこに作成態度が、表現の仕方を決定する。

例えば作品の底を流れる、私達の喜怒哀楽の感情が、そのまゝ作品の性格と結合する。したがって単に美的な情趣として扱われるのではない。

作品の性格は、表現価値となって、作品内容の決定要素を現す。

素材内容は、形而上的な価値すなわち美的な表現価値として芸術空間を作るもので、構成要素の一つでもある。

美と空間の織なす綾は、ギリシア語のプシケ（人間の魂）の支配下に、その空間を色どることになる。

すなわち、この形而上学的空間こそ、芸術空間として

一枚のキャンバスをうるおす。ためらうことなく形成されて行く。

この空間の働きが、いわゆる、美的な感覚を呼びさます不朽の業績ともなろう。

すなわち、換言すれば、この美術的空間に見る、たぐいまれな陰翳の美こそが、芸術的作品の構成要因となり得る。それ故に形而上的プシケの存在と、深く認識する必要に迫られる。

かゝる論理の間にあって、この空間の占める位置付けは、それが壁面を飾る大画にせよ、また一葉のキャンバスにもなり得る。

私達は、従って立体構図の基礎要素を作る。下絵のポイントも配置し、場合によっては幾何学的素材も、下絵を生かす基礎の素材として組まれる。

立体構成に空間が如何に支配するか、それによって全体的構図もまた変化し、逆に調和を保つことにもなる。

絵画史の領域は焦点からはずし、空間の持つ美意識を積極的に導入した過程に、その姿形が変ることを見出した。

空間もまた作り作られる関係を置いて、立証し得ないことを、認識の対象とする。同時に感情の導入と共に、構成に組み立てゝ行くことを、意に解さなくてはならない。

かつての具体的な作品例を見て、空間の立体化の構成

が、如何に構図構成に大きな役割をになっているか、今レオナルド・ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」に構図の配置を見たい。

一点透視遠近法という、空間的な構成の示める構図法を使用している。

すなわち、聖書の最後の晩餐の際、イエスが「あなたがたの中の一人で、私と一緒に食事をしている者が、私を裏切ろうとしている。」

と、キリストの発言に十二使徒たちの驚愕の一瞬、その焦点をイエスの顔面に結ばせながら、みごとに表現している。

この構図は立体化、空間的構図を美と調和させている。また、その場の奮囲気に交よわせている。典型的なものと言ってよい。

かゝる美的空間が占める構成美は、この最後の晩餐を描かしめた。

レオナルド・ダ・ヴィンチの芸術構造、構成美が、一点透視遠近法に芸術的効果をもたらし、制作に当らしめた。構造の様式が、うかがえるのではないか。

これを機に美と空間の織りなす要素が、様々な角度からルネッサンス期以後の画布に現われたことも、当然と言えよう。

単一的な図法が、空間構成によって、より陰翳の美学を介して、実像に迫ったことも、事実と言えよう。

かゝる手法はバロック、ゴシックからロココと十七、八世紀の美術を色どったばかりでない。建築様式にも少なからず影響を与えたことは、言うまでもない。

美と空間について、ヘーゲル流の弁証法的構造・構成にとゞまらず、ウティッツ流の手法はこの様に、製作内容への感情の導入によって、より芸術的深みを現すことは前述の通りである。すなわち形而上学的な論理を臭わすことにもなろう。

ただ作品の感性にうったえる物は、空間の内容が陰翳の美をより深いものにする、重要なものと言わざるをえない。

このように美と空間は、相互に関係しあう働きをなして、二極間の関係をさらに昂める効果をもつ対象としてきた。

私は翳の論理を他の箇所でも投げかけてきた。その可能性は、単純な平面的図法から立体的な画法へと構造面での変革をなした。

物象のとらえ方を、基本構成としてそれを一つのステップとし、多技的な細部への姿、形の変化を見て来た。

要点をまとめるとルネッサンス式では、比例と調和を重んじた手法に焦点が集められた。バロック式で「ゆがんだ真珠」の意を、ロココ式で人造石や貝殻装飾を意味した。

「ロカイユ」(小石)を語源として、やがて十八世紀末

に古典主義へと、古代ギリシアを語意とし均整を重んずる手法は、その意味するものの輝が、粋をなした。

十七、八世紀を象徴した絶対主義時代のヨーロッパ、殊に十七世紀、国王の権力を背景に華麗で豪華なバロック様式が目を引いた。

十八世紀の絶対主義の衰退とともに、繊細で優美なロココ様式が仏を中心に流行し、精妙な曲線からなる家具や室内装飾が好まれた華やかな貴族文化を形成して行った。

ロココの語は、やがて十八世紀後半の貴族文化そのものを意味するようになっていった。

音楽の領域も、ドイツを中心に華麗豪華なバロック音楽、バッハの「マタイ受難曲」、ヘンデルの「水上の音楽」、古典派音楽ベートーヴェン第九交響曲。モーツァルト「フィガロの結婚」などその典奏は陰翳に富み、時代背景を荷う輝きを示めした。

かく論挙に、いとまない存在として、時間芸術を現し得たといってさしつかえなかろう。

ともあれ美と空間のなす芸術的間(ma)は、種々な所の論理を作り出したことは言うまでもない。

絵画、音楽だけでなく、立体的空間を構成する建築、彫塑の空間芸術にあっても、その場所を占める構成、構造の空間の姿が造形芸術の素材をなした。

巧みの技を造形と結びつけて行った。これはごく素朴な段階に於いても人類生存を確保する第一条件であった。

たとえ未発達な状態であっても、それが、美的構成、構築でないにしても存在し得た。長年の経験、体験の積重ねと、美的なものを欲求する意欲が、生活の中に芽ばえ始める。

それによって改革の手だてがなされ、空間を生活の中に引き入れるきっかけをなした。生活の改善策も行じられ美的感覚が導入された。

モダンアートの建築で彫塑を育くむきっかけを作りなしてきた。ほんのちょっとした感覚導入が、二十一世紀に輝くことになった。人類の英知を讃美してよいと思う。

美と空間の作る論理は、限りなく芸術を、生み、またそこから新芸術を育くんだ。これは人類の英知で人間が、この世に生きる限り繰り返し行なわれる物としての論理である。

この未知な物を輝く物象に磨き上げて行く過程こそ、美の論理、美学の道であろう。すなわち解析し思考する事の基礎、素材が、大きく進展継続して行く経緯こそが、人類の文化遺産である。

それを進展させるアイデアが、人間には残されている。その構図はたとえ、それが微細なものであれ、微小なものも協同研究によって、たえず新鮮な物を生む。

その一象一物の積み上げ過程に温故知新の論理が介入

する。また新鮮さを育くんで来るのは必定である。

今後もその一翼をにない得るものが、洋の東西を問わず、実証され得ることを信じてやまない。

6、IT革命の持つ意義

かつて私達は、IT革命の叫ばれた頃、小さな電算機に一喜一憂したものであった。

今日の厖大な情報量を生み出す技術を、誰が想像し得たであろう。

IT (information・Technology) 情報技術は情報工学面だけでなく、その社会的応用に関する分野へとふくれ上がった。電気工学から電子工学へと、すなわち工学上に於ける電気の理論、応用工学の研究から、電子（素粒子の一つ）また分子の構成要素の一つである。

真空放電中に初めて、実証的に確認された。その足跡を追って考察して見たい。

I期、情報工学の基礎的分野のコンピューターは電算機、自動計算機など、一九五〇―五八年頃まで真空管を使用した。

II期、六五年頃まで、いわゆるトランジスター時代であった。

III期。使用者が自分のターミナルから、直接計算機を使用出来る。タイム、シアリング、システムと大量のデーターを記憶させた。

計算処理装置に必要なデーターを、直ちに供給し得た。またファイル代わりに貯蔵したりする記憶装置の開発であった。

さらに計算結果をすみやかに報告書、請求書形式に印刷する出力装置。

グラフや図面で取り出すディスプレー装置。

窓口から直接計算機にデータを入れる為の端末機械、そのデータを計算機に運び込むデータ伝送回路など情報処理の各種機器の開発にあった。

進歩に一喜一憂し、ハードウェア、ソフトウェアなど、論争している間にやゝ遅れて、一九六五年頃から同じく米国でバケットの概念を、Paul BaranやDonald W. Daviesなどが提案した。

いわゆるコンピュータ技術と同様にインターネット発展にたゆみない研究がなされた。

一九六九―八九年にかけARPAネットの実験と実用で、行なわれるようになった。

一九八一―IBM社がパソコン販売開始し、そしてパソコン時代へ。

一九八六―九五年、NSFネット（学術用、基幹インターネット）がスタートした。

一九八八　interop 展示会　スタート。

一九九〇―九二　WWWをTim Berners Leoが発展。

一九九二　Internet Society (ISOC) 発足。マルチキヤストを音声で試みる。

一九九三　Inter NIC（現在はARIN）で、アドレスを割当て開始する。NII（国家情報基盤）をゴアが提案、Mosaicブラウザを、NCSAが配布。

一九九四　ネットスケープ社をMaTC Aadreessenらが設立し、Netscapeブラウザが爆発的に普及した。

一九九五　ブラクイン (Real Audio) 等出初める。

一九九六　ブッシュ型情報配信初まる。ポイントキャスト社やマリンパ社、IEブラウザをマイクロソフト社が配布する。

インターネット発展史の中で注目を集めるのは、一まとまりの情報を小さな断片に区切って送る。

一九六八年　パケットの概念を見事に発展させた。また一本の回線を大勢で共同利用が可能になった。すなわちARPAネットが、今日のインターネットの原型となったが、限られた研究機関であった。

後に七九年から八〇年にかけてCSネットやVSEネットによって開発され、一九七〇年初にARPAネットが、電子メールのやりとりと急速に進展するに及んだ。

一九七四からTCP／IPのプロトコル（通信規約）が八三年にアメリカ国防総省に正式認定され、国家規模化するに及んだ。

そして今日のインターネットの重要な技術基盤となって来た。このIP方式でパソコンを職場のネットワークにつないで利用するに至った。

そして九〇年代に入ってWW方式の発展と九三以降のブラウザの普及を見た。これによってユーザー数が急増した。

インターネットの爆発的発展をたどることになった。しかしこのブラウザ（拾い読み）データ、ファイルの中身に目を通し加工は、出来ない。一方他機種と共通に使える問題であつれきを生じた。

すなわちネットスケープ社のナビケータ（進行役）とマイクロソフト社のインターネット・エクスプローラで戦争状態に九三年頃から数年間にも及んだ。

この間両者の機能面での研究が、各種ベンチャー（冒険）企業を中心に進められた。

いわゆる小規模プログラム・ソフトウェアとして再生の面や、表示の面でインターネットによるラジオ放送、ビデオ放送に画期的な効果を持つに至った。

これに先き立ちカラー写真や、オーデオ情報（音声、音楽）が、受信するそばから、元の形で復元、スピーカーから再生された。

表示の面でも文書表示、仮想現実表示など次々に電話、会議、ニュース、ビデオファイル会などの表示も可能に

なった。これは特筆すべきであろう。

九六年、プッシュ型情報の配信がはじまった。

インターネット電話が、合衆国の電気通信会社の注目を集め、この技術使用禁止の議会請願など起った。

同時に世界のインターネット利用に関する規制もなされた。

九七年　メイリングリスト名録である。Liszt に71,618のメイリングリストが登録された。

九八年　Us Postal Service が Web ページと連体し、郵便サービスを開始する。

E-Commerce ネークション・ポータルサイトを開発した。

九九年　ネット利用に限定された銀行が、設立された。技術は E-Trade on line Baaking Mp3

二〇〇〇　Dos (Perial of seor Vice) アタックが広範囲に行われた。Web ページの総数（ファイル数）が10億ページを越えた。技術は、Asp, Nepster, Wireless devices IPv6.である。

二〇〇一　EC (European Council) がインターネット上の犯罪防止協定を締結する。ウィルスが各地の Web サーバーに感染し猛威を奮っている。

○我国に於けるインターネットの利用、普及状況

一九八〇年代初、大学学術用、基幹インターネットが、スタートを見た。たゞ一部の特殊部門のことであった。

その後展示会などと相待って急速な歩みを継けたことは、通信白書12年刊によっても理解出来る。開発研究の面で各企業間での競争が効を奏した。

一九九五年、平成七年には、一一、七％（企業）。

八年度、五〇、四％（事業所、郵便、通信業を除く従業員が五人以上、五、八％世帯普及率二、三％が

一九九九年、十一年度、企業八八、六％、世帯一九、一％、事業所三一、八％と飛躍的なのびを示めしている。

さらに一九九九、二月ウエブ携帯電話、NTTドコモサービスを開始する。売り上げ一・五年もたゝないうちに一〇〇〇万台に達成した。

インターネットの接続が可能なもの二五〇〇万台となる。DHSを含めた携帯電話の総数六〇〇万台以上になって行った。

平成12、13、14と中高生の爆発的人気をよんで、通学途上などに電車の中まで、携電を楽しんで夜昼も身から離せない。他人の迷惑などかまわない風情は、異常としか言えない。

この加熱ブームに乗って多機種が開発された。従来のアナログ信号から、デジタル信号によるメールに送信者の画像なども入力され、魅力は魅力を呼んで離せない物になった。

さらにCD-ROMドライブで音楽用のCDによって音楽を聴ける。またホームページを作る時に絵や写真の素材をCD-ROMから拝借して、ホームページに貼りつけることも可能で、よく使われた。

一九九五年から発売され始めた。デジタルカメラで六四〇×四八〇ドット以上のフルカラーの写真が圧縮された形で、内部メモリーに格納が可能になった。

パソコンカメラの端末機となり、カメラのメモリーからパソコンのハード、ディスクにディジタル写真が送られる。

写真一枚が一つのファイルになっている。転送方法で他の光通信機能をもつパソコンによっては、ワイヤレス写真も可能となった。

またフラッシュメモリーカードになる方法で、小型カードを使用挿入し写真をためこむ。後でカードをカメラから引き抜いて、ノート型パソコンに挿入する。

かくて写真のデータを読みこむ形も、現実的には可能になった。このように、デジタルカメラが、DVDと共に普及化することになった。

こうして情趣研究の変換も、いながらにし海外の情報研究、図書文献などを手に入れることが出来るようになった。

急速な情報通信技術の進展を受け、二〇〇〇年、平成十二年十一月二十九日に、高度情報通信ネットワーク社会形式基本法（IT基本法）を成立させた。

世界最高水準の通信ネットワークの環境整備がなされた。電子商取引の促進や、行政の情報化など、ネット社会の安全性確保や形成にのり出した。

政府は「IT戦略本部」「IT戦略会議」を設置して、検討を重ね基本法施行後は新しい戦略本部のもと、IT革命の強力推進に当って来た。

平成十三年インターネット博覧会（インターネット上を仮想会場に、政府機関、地方自治体、民間企業が様々なテーマに基ずいて、パビリオン（ホームページ）を出展した。

さらにインターネットを利用した諸行事を展開して、十四年、十五年と各新聞紙上へ、

初級のパソコン、携帯電話の機能向け（ITの基本操作）。

中級携帯メール講座（出先に転送チェック）

エクセル使用（計算抜き名簿、家計簿作りに自動計算を楽に利用出来た）。

上級の海外でメールを読もう。（滞在先の地元につなぐ）外国語の読み書きに挑戦（英語以外もすらすらと）行いたい。この間各県自治体などを通じてIT講習会。（機器による基本操作）

端末など、またランキングッズ「ノートパソコン」「DVDプレーヤー」の紹介、企業団体、自治体の講習

会もあって普及、活用化はe-Japan戦略
Ⅰ、二〇〇五年、十七年までに世界最先端のＩＴ国家への構想実現に向け主動しだした。十五年（二〇〇三）e-Japan戦略
Ⅱ、「ＩＴ実感社会の実現」先導七分野。
一、医療　二、食、三、生活、四、中小企業金融、五、知、六、就労、労働、七、行政サービス
十六年（二〇〇四）e-Japan戦略
Ⅲ、加速化パッケージ「重点施策の明確化」。
A、国際戦略（アジア等）B、セキュリティ政策、C、コンテンツ政策、D、ＩＴ規制改革　E、評価、F、電子政府、電子自治体とインフラ、生活人材電子政府、電子商取引。
各方面にまたがって身近な所で構造改革が進んでいる。すなわち世界最先端のＩＴ国家が見えて来たと言ってよい。
これには飛躍化する光ファイバー導入が本格化することによって、加速され革命推進に寄与して来た。
二〇一〇年代に回線網の主役を演ずるであろうＩＰ電話が、目下発展途上にある。
すなわち、音声が映像とデジタルデータに変換して、インターネットで使われている。通信手順で効率的に相手先に送る電話、ＩＴの開発に当って、もちろん多額の研究費用を必要とする。

それには触れずにきたが、自治体導入の例もあって千葉県我孫子市で、本庁、図書館他三五施設にＩＰ化による、月八〇万円の節約も可能となった。
なぜか高価な電話交換機が不要になる。すなわち、従来の固定電話と異なり通話ごとに回線を専有しない為、料金は格安となる。
さらに距離に比例して課金した従来の固定電話と違い料金の遠近格差もない。従来の電話機にアダプターを付けたり、パソコンに電話機を付けたりして使用する。
経費面では低コストで行ける。すなわち内線で結ばれた三五施設間の通話が無料、導入前毎月約一九〇万円かかっていた通信費を、約八〇万円節約できた。
他に七～八年毎に更新していた、構内交換機（一千万円前後）も不要になった実例もある。地方自治体の例は珍しいが、家庭や企業では、こゝ一、二年急速な普及を始めている。
企業六社、家庭では七名、ＩＰ化している調査事例がある。かくてＩＴ革命は勿論、今や地球規模で交信が可能になってきている。
すなわち前記の美の空間を考察し得た。芸術の翳の美もＩＴ革命の開発史で、その発展構造を取らえて来た。
さらに文献資料も求め活用出来ることが可能になってきた。思えば文明の類いまれな事として享受することが出来る、恩恵に浴することをしみじみと味わいたい。

今まで不可能だった事を、可能な世界へ導入してくれた技術文明に敬意を表したい。

7、美の極限と認識作用

美の極限について様々な角度から、芸術世界に求めてきた。およそ美の極限状況をいずれに求め、美の存在現象は論じえても、その極限状況までは解し難いのが、美の深淵かも知れない。
これを今さらのように思い、その思惟が、美の極限に近いものかと、覚醒し得たと思う。
A、およそ美の極限とは如何なるものか。またそれが現実に、如何に存するか。様々な状態が美の極限を作っているのか。
そしてまた時として美の極限状況を示すものなのか。種々な思惟が交錯する中で、窮極なる美が世に存在するのか。
確かに芸術の種々の分野で人間国宝と謳われる人の芸道は魂をゆさぶられる。その極限状況が、はたして美の窮極の世界なのか。
つまりは人間の問題に、帰着することになるのか。今、事例をもって判断の対象を見極めて見たい。
AがBを究極のものとする。それにはAは限りなくBに接近し、Bの数値に限りなく近ずくある数値の場合、その値をさす。
先の人間国宝が美の要素を中にふくみ持ち、この領域に接近した時をさす。これは至難の領域で、同じ人間国宝であっても同一の仕業を二度と再現することは極めて稀である。
たゞそれに近い領域までは芸の領域で達し得るが、完全に一致の域は何度試みても、さぐり当て得ない。
これが本来の領域であって、人間の巧みの問題でもあろう。すなわち人知の試みざる領域かも知れない。
ただ限りなく究極の美へ誘うことは可能であっても、今の論理に帰着することはあり得ない。その領域こそ我々の求めてやまない、美の究極と解してよい。
たゞ完全なものでなく、より完全に近い存在を持って、美的判断をなさなければならない。
これ以上の物は無に等しいにしても、完全な美の領域までは、遠く及ばないのが、はかない人間の存在である。
かつてギリシアのソロモン王が如何に栄華の粋を盡しても、なお及ばなかったのは、人間には限界があり有限の世界にはなしえない。
それ故に奥深く神秘の世界が笑えんでいるかの如きを思う。それが美の境地かも知れない。
人知の遠く及ばない所と思う。ただその領域に限りなく近ずいていることは、およそ人間国宝ならば察知するのかも知れない。

いや人間国宝と呼ばれるような人知の探究は、限りなく続く、遠く及ばない世界であると、自分の無知を自覚するのかも知れない。

我々凡人とは意識の上でも研鑽過程においても、多くの隔たりを持つのが、現実ではなかろうか。

たゞ長い年月、倦まずたゆまずの努力の結果、たどりついた境地で、誰にでも真似の出来るものではない。

しかし先陣に当る人材のなし得た境地を体得して、その道険しく長きにまたがっても、永続する気迫さえ、失なう事がなかったら、かゝる境涯に達する事が、皆無とは言えない。

二世、三世後の後継者は必ずある。その領域をつかみ取るべく努力に邁進することが、不可欠なことと思う。

「言は安く行うは難し」急ぐことなく焦らず、丹精を込めて精進に勢を傾けたならば、貫徹もためらわない。

その道険しくとも意志ある所、成就可能である。怯むことなく永続することが、肝要と思われる。

窮極の美は心の美、心的領域に於いて美を取えることだ。形而上的世界であるが、科学のテクノロジーについては、前節に解き及んだ。

ＩＴの世界も探究の一助となることを信じてやまない。美それは永遠の憧れであり、求めてやまないのが、人間愛と言えるかも知れない。

人間が人間として生きる目標に真善美の追究がある。

古代ギリシアの昔から叫ばれ自己開発の指針として叫ばれた。

実践の分野にまた芸術に、より深いものを作り上げて行くことが関係する。美や芸術の生命に満ちた高潮の瞬間に創造作用が見られる。

この究極が人間の美的理念でもあり、求めてもなお求め得られない、人間の果てしない愛 Eros が感覚世界に蘇がえってくる。

この未知な美を求めて生きるのが、人間生活と言える。美の究極なもの、それは美の探究過程に深まる奥義かも知れない。

それを探究する姿勢これは、先程も述べたように、人間国宝を求めてやまない真摯な態度と言えよう。

およそ認識作用は物事をはっきり知り、その意義を正しく理解、弁別して得た知識をいう。

知覚、記憶、知能の要素は脳細胞による連結の状況また、神経細胞の活動状況によって細かに分析機能を発揮する。

それは認識作用をともなっての主観―客観の相互作用として、認識の仕組みや起源をめぐって、感覚論、概念論、唯物論など、認識の成立条件を考察対象とした。

認識（知る作用と成果の両者）の中に内在するものを、フランシス・ベーコンは経験論の流れの中で解いた。

またジョン・ロックの理論を集大成したのが、体系的

なカントの「純粋理性批判」で、経験を認識の発生と成立の根拠として認めながら、学問的認識の普遍妥当を求めた。

後に両者の総合をめざして物自体を提唱した。認識論の立場はカント以後、再び形而上学が主流となった。

現象学派以降、諸学派によって現代哲学の動向示唆に、その方向性を示している。認識作用も哲学的理法から導入された。

感覚論的な認識も、知覚作用もカントの「判断力批判」で前述の通り美学認識に貢献することになった。

美の窮極は認識作用の極限状況であることを、今後の論理に生かしたい。今を時めく翳の美学に如何に作用するかは、有限な人間が無限に対処して行く折に、美の窮極を知る。

それをつかみ得たと思う瞬間に、さらに奥深い窮極の世界が待ち受けていることを痛感する。

限りない追求過程の連続が翳の美学に内在することを思うが故に、人は生きるのだ。目指す方向付けは美を美とする根幹でもある。

およそ生あるものは、それが如何に美しく時めき栄えても、必ずや枯れ衰ろえ、やがて移ろうものである事を、生のサイクルから、ひもとくことが出来る。

今の領域でさぐり得る美的極限状況を把握することが、私達にかせられた最大の課題といってよい。

私達は四季折々の世界に、美を認識し感じもする。そしてはかなく散ったその世界に、美を感じ得た喜びは、人間味の豊かさでもあったであろう。

枯れ飛散した木の葉にも、それだけ時めいた瞬間があり満ちたりた快感もあったに違いない。

冷たい小雨にうたれ、やがて土に化して行く所には、はや次の生への育くみがある。四季の循環が、また新しい美、陰翳の美学を構成する。

そして連続の認識作用を、生の論理の中にとらえ得る。かざりなく変化流動の中で、美を美たらしめる認識作用を意識する所に、美学の奥深さを現し得るのではなかろうか。

私達は常に生きる証として、美をこよなく愛し現し続けるのが、人生であり窮極の存在でもあろう。

一片のキャンバスに、また、ろくろに全精魂をかたむけ、作品に魂を吹き込むことによって、美の窮極を知る出発ともなろう。

けわしくてよじ登ること難しと言われるが、志堅ければ、この道も極めることが可能と思う。

「寸鉄岩壁をも貫く」不屈の意志力あって、美の極致を窮め得ようと思われる。

六、美の諸形態

1、美と綾

「綾なす美」など古来から言われる。美の本来のありさまは、綾なす彩美があってこそ美が美の純粋美を形成する。

綾錦、錦繍など美的感覚が蘇がえってくる季節となって、いつもながら朝夕の冷え込みで水滴をあび、その色彩の変幻もまた格別に私達を取らえて離さない。

これは、この季の潜在的な要素の一つと解してもよい。水気を含んだ紅葉に一陣の虹の橋、まさに美の極致へと誘う形態といってもよい。

自然美を彩どる美的価値もさることながら、人間が創造する芸術美の一端として、今、能楽（室生流）の居合、立ち居振舞を鑑賞会を通して、いわゆる人間国宝の起居動作に迫って見たい。

能楽流派の発生過程などは歴史的流と相俟って既に記述した。今回は室生の美と綾を追って、芸を磨き上げる風情を求め見たい。

六百年以上の伝統を受け継ぎ、その伝統の中に余韻条々として流れる不可思議な空間を造る能の世界は、同時に茶道にも簡素な小宇宙を作り味うことの出来る領域である。

これはまさに感性表現美の現といってよい。哲学の分野、すなわち形而上的価値の占める分野が、この小宇宙構築に大きく関わっている。

すなわち能の持つ力のなせる技といってよかろう。かゝる世界の構成は個々の小道具の、表現美の技の組立てられた、居会によって総合芸術となる。

小宇宙形成をなして演目に流れ込む。能と演じる主体は能面をつけるシテ方、（ワキ方、囃子方―笛方、小鼓方、大鼓方、太鼓方―狂言方）の七専門に分かれ、演技担当のシテ方、狂言方を「立方」と呼ぶ。

囃方を総称して「四拍子」とも呼んでいる。中でもシテ方は能面を付けて、仕舞、能のデッサン、クセ、キリなどの一段を、地謡だけで紋服のまゝ舞う、言ば序破急の序の舞である。

三間四方の空間に、面の表す喜怒哀楽の表現効果を、その時の作法、角度などによってその表情を現わし、決して音声は出さない。

いわゆる、ウケによって悲しそうな（クモル）顔（シオル）や、嬉しそうな顔（テル）になるように製作してある。

こんな細部にも意をよせる能面師の心が、演者の動作にも現われる。例えば怒りなど強い意志を表す時は、顔を強く対象物に向ける。

「面（おもて）ヲ切ル」など演者の微妙な動作が、面を通して不思議な世界を形成する。

能は踊りではなく舞で、しかも直線運動でなく大きな

円運動の中で行なわれる。能楽の詞章は多く韻文を主流に七五調を基調とする。

雅文調の場合は散文も加味され、会話に用いられる。修辞（掛詞、縁語、序詞、枕詞、引歌など）耳に訴える美感を中心にイメージの連鎖をねらった、いわゆる「つづれの錦」などと言われた。

シテ役の舞の効果を高揚させるのも詞章で、四拍子に負う所が大きい。気韻生動となってそのリズムが大きなテーマの表現につながっている。

親、男、女、狂鬼いわゆる、合戦物、（修羅物）羽衣（かきつばた、藤屋など）狂物（現在物）母が子をさがす物語など、鬼物（土蜘蛛）などと舞れる。

例えば高砂（住吉明神）相生の松、敦盛キリの部（敦盛の霊）、班女クセ、吉田の少女、天鼓、天鼓の霊（中国の話）が披露される。

さすが日頃の稽古が芸術となって蘇がえってくる。そして狂言、能の幽玄味を持ったものに対して笑劇、笑い、おかしみを伴う技が主体となる。

シテ方として太郎冠者の演技が見せ場となる。いわゆる、間狂言といって能一曲を演ずる場合、狂言方が受け持つ部分をさし、観客の笑いを誘発させる。

堅苦しさから、しばし解放させる芸を用いる。声高が、また軽快妙味でしゃれている感を漂わす切っ掛けとなろう。

寝音曲「前夜、自宅前を通った際に謡声を聞きつけた。主人に謡うように命じられた。

太郎冠者は今後たびたび謡わされては迷惑と「酒を飲まなければ」「妻の膝枕でなければ」とうそをつき何とか逃げようとします。」

和泉流、重要無形文化財、総合指定の野村又五郎師の妙技は、やはり見応えがある。演技に綾なす美を感じさせる。

その翳に血のにじむ修練の美を、そこはかとなく感じさせる。

休憩をはさんでの能、室生流の船弁慶、兄頼朝の追討となった源義経（子方）は武蔵坊弁慶（ワキ）以下、わずかの家来を伴って、九州へ船で落ちのびようとする。摂津国の大物の浦へ行く。静御前（前シテ）も義経につき添って来たが、弁慶は世間の口を考えて都へ帰すよう義経に進言する。

帰れの命令を弁慶の計略と考えた静は、義経に面会し確かめるが、やはり帰るように告げられる。

泣く泣く別れの舞を舞い、悲しみに暮れ烏帽子を脱ぎ捨てて都へと帰る。そしていよいよ船出した所、突如天候悪変、大しけとなる。

滅びしはずの平家の亡霊、平知盛（後シテ）が長刀を振るって、義経を目掛け斬りかゝるが、弁慶の懸命な祈により、波の中に消えて行く。

解説を挿むと、これは歌舞伎の「宅ヶ関の弁慶の勧進帖」の場面に相応した能舞台の詞章として有名である。

この能のシテ、ワキ役の呼吸は舞台の小空間を構成して迫力がある。

演技は子方（義経）を踏まえて、四拍子、地謡の綾なす美が、能の幽玄さを伴った陰翳の美学構成に大きく貢献している。

此は前の演舞を通して各役割の持つ、綾なす芸術によって、現されたと思う。喜びは伝統を持つこの世界が、美学の領域の一翼をになっていることを象徴していると見てよい。

四拍子の呼吸地謡の持つ迫力、それに共なうシテ舞、ワキ舞の演舞は千変万化する。

この能楽の世界を総合芸術化する各役割の阿吽の呼吸こそ、小宇宙構成の要素をなすものとして、深く探究される。

言う中能面の役割は微妙な働きが、その仮面に現れ、能面師の打つ翁、神、男、女、鬼面に魂が入る。

入魂の技はよく、夜叉王、（毘沙門天の従者として諸天の守護神となり、北方を守る）にたとえられる。

打っては壊す壊しては打つが、源頼家の面には死相が現われる。

そして間もなく暗殺される。運命を打つ面に予感したとか、確かに入魂の響をもつ能面を付けての舞、微妙な表現は角度によっても仕草の構成によって、千変万化する装いが展開される。

まさに超人的（人の手によって）打たれた仮面が、能面師の手を離れることによって、高調の高い精神面の世界を現す。

これは人智を離れ精神面の世界を織なす、領域をよそおうことで、最高の芸術性を演出することを得る。

まさに美を作る綾を織る芸術性によって、国宝とまで讃えられる、所以を解し得よう。

たゞ無我にして打つ能面にかゝる魂が宿るとは、人間技を越えた神技、これは我が打つ能面は、面にして面にあらず。

既に尋常の面の域をはなれて精神、形而上的な領域にまで達している仕業、打つ本人さえ無にして有の存在なるもの、自己否定の肯定の世界で、哲学的弁証法の論理の織なせる技である。

まさに人間国宝の高度の域が、我が打つ面に現れることは尊いことだと思う。

この面を戴いて舞う姿は一人の能楽師を離れて、その仕草に精神的なもの、すなわち、魂の入る技になっている。

動作、表情、所作のなせるものが、舞を舞しめる表情の微妙な変化をもたらす。これこそ観客を幽玄の世界に誘うものである。

美の織り出す至芸といってよい。伝統の持つこの世界にも人が構成した、うたい、はやし、まい三要素も、人間の域を越え超人的世界観が観客と一体となって、幽玄の世界を演出する。

登場人物の性格表現をも能面は規定し作り出す。まさに神技といってよい。人形浄瑠璃の文楽も人形をあやつる黒人師の技が、人形に生き写しに反映する。

喜怒哀楽の表情は人形に感性が乗り移り、生きた人間情緒を現わす。小宇宙の限りない芸道にまで、高められ魅了される。

黒人の持つ翳の美技は、文楽の世界で光り輝く人形に、言わば魂を吹き込む働きを形成する。役割をになうに似た芸道として、高く評価される。

陰翳の美学はこの表象によって、はっきりと捕えられる。

およそ芸道の世界は、かくの如き伝統の美を通して、燦然と輝いている。これに畏敬の念さえ感ぜざるを得ない。

つづく

社　告（内規）

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同士の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二一

加入者名　まんじ

口紅（その一）

池莉　原作
山本勉　訳

〈原作者　池莉について〉

池莉は一九五七年（昭和三十二年）、中国湖北省仙桃市生まれ、一九九〇年、武漢市文聯にて専業作家となり、同時に武漢市作家協会副主席も兼ねる。一九九七年には中国作家協会全委会委員となり、その後二〇〇〇年の武漢市第八次文代会にて、武漢市文聯主席となる。

池莉は、武漢在住の女流作家で、中国現代文学界では、極めて知名度が高い。その代表「来来往往」、「口紅」、「小姐你早」等の作品がテレビドラマ化されている。池莉はその後も多くの作品を発表し続け、現在まで第一線で活躍している。「口紅」は、二〇〇〇年、江蘇文芸出版より刊行されている。

〈登場人物〉

趙家の人々
- 趙耀根（小説の主人公、江暁歌と結婚）
- 趙耀虎（趙耀根の弟）
- 趙耀珍（趙耀根の妹）
- 趙家の母親

江家の人々
- 江暁歌（小説の主人公、趙耀根と結婚）
- 江暁鴎（江暁歌の弟）

趙耀根と江暁歌の友人
- 寧岸

第一章　新居

（一）

武漢、この町は息づいている。

時は流れる水の如く過ぎ去っていく。

ふと振り返ってみると、人間の足もとで、二十年前に起こった出来事が、意外にも、今日のすべての結果の原因であることに気づく。なぜ、人生はいつもこうなんだろう。人間に与えられるものは、結果であるが、私たちは、自分の運命の原因をコントロールすることはできないのだろうか。

二十年前の早春のよく晴れた日、数台の自転車が、川沿いの広い道に沿って、ベルの音を軽快に鳴らしながら、走りすぎていった。

彼らは、勝手気ままに、一陣の風のように広々とした大通りをかすめていった。趙耀虎と江暁鴎は楽しげに先頭を進む。二人の後ろに続いているのは、彼らのリーダーで、たくましく、見識を持った趙耀根（男性、本編の主人公）だ。趙耀根の後ろには彼の妹の趙耀珍と、彼の友人の寧岸がいる。

彼らは、労働者階級の一員である。労働者階級は、当時、社会で最も幸運に恵まれた指導者階級だった。だから、青年達の顔には、誇りに満ちた輝きが現れていて、当時流行の最先端だった藍色のズック（注1）の仕事着を着ていた。人々は、羨ましい眼差しで、彼らを見ていた。

（注1　綿や麻を用いた厚地の平織り布）

ただ、寧岸だけは例外だった。寧岸は、中等専科学校の教師である。彼は、他の仲間と違って、メガネをかけ中山服を着て、革靴を履き、教養があり、立ち振る舞いが上品であることが、その出で立ちに現れている。

紡績工場で働いている色黒で太った少女の趙耀珍（趙耀根の妹）は、その寧岸に機嫌をとりながら肩を並べて自転車を漕いだ。彼女は、意味ありげに、寧岸をチラッと見た。彼女は、寧岸の憂いをひめた表情と風貌が好きだった。彼女は、チャンスを見つけて、寧岸と話をしたかったが、何を話して良いかわからなかった。

江暁鴎（江暁歌の弟）は両手を自転車のハンドルから放して大笑いした。趙耀虎（趙耀根の弟）も、江暁鴎が、両手を放すのを見ながら大笑いしている。みんな興奮して笑っている。彼らは、ある秘密の場所に向かって急いでいるのだった。

趙耀根と江暁歌は結婚することになっていた。秘密の場所とは二人がこれから住む予定になっている家であった。

しかし、趙耀根達は、江暁歌を驚かせてやろうと思い、今日の自転車の仲間にはあえて彼女を誘わなかった。

（二）

長江は、彼らの傍らでとうとうと流れている。

長江の夕日は、水面に、赤みがかった蜜柑色の水の清らかな光を波打たせている。

数羽のアジサシが、ゆっくり航行している大型の汽船を追いかけて、旋回している。汽笛が、突然長く鳴り響き、その音は、天地を満たし、両江三鎮（注2）にこだまし、人々の心を奮い立たせた。

（注2《「鎮」は中心都市の意》長江流域の武昌・漢口・漢陽三市の総称。武昌は政治、漢口は商業、漢陽は工業の要衝地。現在は合併して武漢市を構成している》

彼らは、大通りから離れると、堤防の外側に一本の小道に曲がって入って行った。

堤防の外側には、長江に面して建てられた民家がある。地形は、窪んでいて、家屋は古くてボロボロ、道は、狭くてぬかるんでいる。

江暁鴎はあらためてハンドルを握り直さなければならなかったが、道路の状態が悪いので、自転車を減速することができなくて、上下に揺れながら、前方に突進していった。みんなも彼と共に前に向かって突き進んでいき、興奮して指笛を鳴らした。

趙耀珍は自転車を不安定に揺れ動かしながら、無意識のうちに、

「寧岸さん、寧岸さん」

と甲高い声で叫んでいた。

寧岸は、大急ぎで、彼女の自転車を助け起こした。

寧岸は、生まれつき人を、なおさら、女の子を助けることに喜びを感じていた。

趙耀珍は、寧岸にきまり悪そうに、にっこり笑い、

「ありがとう」

とそっと言った。

一同は、ついに小屋の前に止まって、めいめいが、自分の自転車をそこにとめた。

小屋の壁や塀には、雑草が生い茂っていて、木製の戸の枠は、すでに腐っていた。門には、さびついた南京錠がぶら下がっていて、ひどく破壊されていた。この小屋は、彼らが想像したものとはイメージがひどくずれていたので、思わず、顔色が曇り、意欲もいささか衰えた。この小屋は、趙耀根と江暁歌のために四方八方手を尽くして借りた家だった。寧岸の学校の生徒も、

「家があまり良くないので、長い間人が住んでいなかったんじゃないか」

と言っていた。

しかし、寧岸は、こんなにひどいとは思ってもみなかった。寧岸は、趙耀根に申し訳なさそうに言った。

「あまりにもひどすぎるよ。毎年ここは、夏になると、洪水で水浸しになり、壊れたんだ。僕が、他によいところを考えるよ」

ところが、趙耀根は、喜んで家の鍵を上に放り投げ、空中で回転して落ちてくるのを見ながら、軽快にそれをつかんで、しっかり受け取った。

「ほかの家を借りるには、及ばないよ。この家は、生まれて初めて見たきれいな家だ。僕の新居だ。僕はここが気に入った」

趙耀根はこの青年達の中で、最も年上で、彼は今年の暮れで、満三十歳を迎える。彼は、就職して既に十数年になる。彼は、最下層の港湾運搬工から身を起こして、中国共産党青年団委員会書記になったので、理解できないものはなにもなかった。今までずいぶんと辛酸をなめてきたのである。

趙耀根は、この家を手に入れるのが、生やさしいことでないことは、わかっていた。階級闘争の激しい社会の中で、誰が、やすやすと家を人に貸すだろうか。誰が、他人を悪人でないと保障することができようか。誰が巻き添えを食うことを恐れないだろうか。誰もが恐れているのだ。

ただ、寧岸だけは、例外であった。彼は、趙耀根のために一肌も二肌も脱ぐにちがいない。趙耀根が親友であるからこそ、進んで危険を冒すだろう。品行方正な寧岸であるからこそ、他人の全幅の信頼を勝ち得たのである。だから家を借りることができたのだ。

家は、趙耀根のために借りたものだ。趙耀根が喜んでいるのを見て、みんなも自然と嬉しくなった。寧岸の不安は、杞憂に終わった。

趙耀根は、鍵を突き刺し、錠前を開けて、ドアを開いた。みんな、ワーと家に押し合いへし合いなだれ込んだ。

寧岸は、豊富な経験から、まず、厨房に入ってみた。厨房は、とても小さかったが、何もかもそろっていて、鍋やかまど、皿やお碗など、ひと通りの食器もある。ひと山の練炭もあった。流しの水道は、すでにさび付いていたが、寧岸が手を伸ばして、ひとひねりすると、水が、勢いよく流れ出てきた。

寧岸が、電灯のスイッチを引っ張った。電灯は、すぐに、オレンジ色の明るい光を放った。

趙耀珍（趙耀根の妹）が

「電気も通っているよ」

と言った。寧岸は

「水も来ているし、電気も通っている。生活するには困らないな。でも、家がボロボロすぎて、新居を構える趙耀根と江暁歌にやりきれない思いをさせるなあ」

と言った。趙耀根は、

「全然問題ないよ　新居を構える家がある。この家は、僕と、暁歌の幸福の証さ」

と言った。趙耀珍は、

「そうよ。水も出るし、電気も来ているわ。新婚生活

を過ごすんなら、条件は、随分いいわよ。江暁歌は、お嫁に来るのだから、いずれは、私たち同じ屋根の下に住まなくてはならないわ」

と言った。江暁鴎（江暁歌の弟）も、

「姉さんも心得ているはずさ。それだけ愛の力は、すごいってことさ」

と言った。趙耀珍は、

「そうよ、暁歌姉さんは、兄が流浪して乞食をすることも恐れないと手紙で言っていたのよ」

と言った。

趙耀根は妹のお下げをちょっと引っ張った。

「人の手紙を盗み読みするのは、法律違反だぞ」

みんなどっと笑った。

この家は、古くてボロボロだったが、若者の活気と楽しそうな笑い声が家中に満ちあふれていた。

秘密の結婚は、特別なセレモニーだ。みんな、この秘密に関わることができ、特別の誇りと責任を感じている。誰もが、このぼろ屋をきれいな新居に変えることができたら素敵だと、我先に片付けに取りかかった。寧岸が総指揮を執り、みんな一斉に片付けはじめ、あっと言う間に、このぼろ屋をきれいに片付けてしまった。

趙耀根は、

「よし、この家は、新婚夫婦の新居らしくなったと思う」

と手を袖に入れて、あたりをしげしげと見回した。

寧岸は、

「きれいにしただけじゃダメだ。だいたい片付いたが、統一感のある装飾が必要だ。飾り付けをすることは、絶対必要だよ。深紅の「喜」という字を耀珍に切らせて、適当な場所に貼らなくちゃいけない。お前と江暁歌の記念写真も掛けなくちゃな。それに、対聯（注3）も必要だ。僕は、出来合いのものを買いたくないんだ。僕が、君たちのために、自分で、一対の対聯を書くよ」

と言った。

（注3　対句を書いた掛け物。紙や布に書いたりタケや木の皮に刻んだりして、主として掛け軸として鑑賞するものをさす。）

趙耀根は、

「わかったよ」

と寧岸の話を遮った。

「だが、粗末なものでも、利用できるものは、利用しよう」

「ダメだ。お前と江暁歌は、大変な思いをして、やっと結婚までこぎつけたんだから、しっかりとやらないと、お前も彼女に申し訳ないじゃないか。僕がやるから、お前は、何も気にしないで、新郎としてひな壇に座っていりゃいいのさ」

趙耀虎は、

「全部お膳立てをしてくれた寧岸兄貴がまるで結婚したようだよ」

と言った。江暁鴎（江暁歌の弟）は

「これこそが、互いに胸襟を開いて、心を打ち明け、深く交わるというもんさ」

と言った。

（二）

寧岸は、江暁鴎の言った言葉のとおり自発的に江暁歌に対する恋情をおさえ、彼らに、私心のない援助を与えた。

『仁義』、これは、他でもなく寧岸の真人間としての定理鉄則であった。寧岸の読書量は、膨大だ。忠義と節度を重んじる原則が、深く彼の世界観に染み通っていった。中国の伝統文化は、しばしば、政治運動の猛烈な批判を受けたが、寧岸は、自分の見方をしっかり持っていた。彼は、中国の伝統文化は、絶対にダメだと言うことはなく、必ず、多くの成果をもたらすということを終始信じていた。毛主席は「昔のものを現在に役立たせる」と言ったではないか。寧岸は、昔のものを現在に役立たせている一人である。彼は、自分の良き友人の趙耀根に、『義』の字で応えなければならなかった。

趙耀根と結婚することになっている江暁歌は、実はかつて寧岸の初恋の人で、お互いに気持ちを敏感に感じ取っていた。江暁歌が、決して寧岸を嫌っていないこともわかる。寧岸はかつて、このプラトニックな恋愛ゲームに夢中だった。彼は彼女が好きで、彼女も彼が好きだ。しかし、彼らは、わかっていながらも心に秘め、口に出さなかった。彼らは、つかず離れず、気持ちが通じ合っていた。それは、冷ややかな悲しみを帯び、また同時に、甘い愛を帯びていた。この感情は、美しく純粋だった。透明で、非常に清潔で、ちりひとつない。寧岸は、これこそ真の愛情であると思っていた。江暁歌は、比類なく大切にされてきた。彼にとって、江暁歌は、永遠に純潔な少女である。この少女は、勿論、彼のものである。寧岸は、ずっと辛抱強く、物事が自然に順調に運ぶその日を待っていた。なぜなら、彼らは、まだ、若かったからだった。

だから、趙耀根が横取りするなどとは思ってもみなかった。趙耀根の江暁歌への求愛の仕方は、寧岸を唖然とさせるものだった。

ある日、趙耀根が江暁歌を知ったとき、趙耀根は、その日のうちに彼女に愛を宣言し、しかも、雷鳴の如く江暁歌に攻め込んできたのである。

寧岸は、趙耀根が魅力があることを認めざるをえなかった。趙耀根の魅力は彼の荒々しくてさっぱりしたところや、やりたいようにやり、話したいように話すところ

にあった。女性にとっては、彼のがっちりした体躯も頼もしく感じられたに違いない。

趙耀根は、ほんの短期間に、江暁歌にしつこく攻め込んで、彼女を射止め、寧岸のコツコツと地道に努力してきたことを無駄にしてしまった。寧岸は、趙耀根が心の底から彼女を好きになったことがわかると、自分に「譲歩しなければならない」と言い聞かせた。

江暁歌を含めて、寧岸の心中がどれほど苦しいかを、わかっている人はいない。しかし、寧岸の自尊心と苦悩は同居していて、寧岸は、自分が真の男であると思っていた。ほんとうの男だからこそ、色恋のために、軽々と友人を傷つけるようなことをしてはいけないと思った。

(四)

趙耀珍は、

「寧岸さん、お茶をどうぞ」

と言って、一杯の白湯を寧岸の目の前に差し出した。彼女は、彼に対する自分の気持ちを隠そうとはしなかった。

寧岸は、あれこれとりとめのないことを思いめぐらし、湯飲みを受け取った。彼は、趙耀珍が、自分に対して、あふれるばかりの恋心を抱いているのを知りながら、わざと注意を払わなかった。趙耀珍は、趙耀根の妹であり、もともと自分の妹のように思っていたので、趙耀珍に対する恋心など寧岸のなかに生まれるはずがなかった。

(寧岸さん、私の心は、どうして、いつもびくびくしているのかしら)

趙耀珍は

「兄さんは、結婚するって言ったでしょ。ほんとうに大丈夫かしら」

と寧岸に聞いてみた。

「大丈夫さ、結婚すると思うよ。両家の両親は、この結婚に反対だけど、さすがに時代が変わって、新しい社会になったから、法律は、婚姻を当事者自身で決めることをうたっているし、恋愛も自由さ」

寧岸はそう答えたが、しかし趙耀根に向かっては、

「でも、君たちが結婚する前に、根気よく、お母さんを説得する必要があるな。君の家の対応が、一番重要さ。君の家が嫁をもらうんだから当たり前だよ」

とまじめに言った。すると、趙耀根は、

「僕と江暁歌は恋愛して五年になる。僕は、まもなく三十歳だ。江暁歌ももうすぐ二十五歳になるから、我々は、晩婚の模範だよ。この数年来お袋に口を酸っぱくして言ってきた。山を動かすのは、たやすいけど、お袋の気持ちを動かすのは、大変さ。お袋は、根っから、江暁歌を嫁として受け入れることができないんだ。お袋は、テキパキ仕事ができる主婦が好きなんだ。寧岸、君は、

労働者階級の僕が、上品で、才女でうるわしい妻をめとることができないとでも言うのかい。僕は、ほんとうの事を君に話すよ。いちるの望みがあれば、僕は、結婚をひた隠しにするような下策は採らないよ。やはり、手順を踏んでやるんだ。僕は、外部に対して秘密を守るが、結婚したという既成事実は、どうすることもできないから、暁歌と夫婦そろって、プレゼントを持って、両家のお年寄りに会いに行くんだ。僕自ら、江家に行って、江暁歌の両親に謝り、自分のお袋にもぬかずき謝るよ。一人前の男っていうのは、逆境にも順境にも順応し、やるべき事はやるのさ。両親達の気持ちは、穏やかじゃないだろう。でも、時が解決してくれるさ。そうでなければ、僕と江暁歌は永遠に結婚することはできないよ」

と言った。趙耀根は何時いかなる時でもしっかりした見識を持っていた。

趙耀根を含めて、寧岸が状況を分析するのを聞くのは、みんな好きだった。しかし、結局、趙耀根によって、最後の決定は下される。

趙耀根はきちんときれいに片付いている部屋の中で、何度か歩き回り、五四青年節(注4)の日に結婚するとみんなに言った。

(注4　五四運動が青年学生を中心とする運動であったことから、五月四日を"青年節"と定めた。五四運動：一九一九年五月四日、北京で起こった反帝国主義運動。第一次大戦後のパリ講和会議で、山東半島の利権返還などの中国の要求が通らず、また日本の対華二十一箇条要求に対する反発から、学生デモを契機として全国的規模に発展、中華民国政府はベルサイユ条約調印を拒否せざるをえなくなった)

賢い江暁鴎(江暁歌の弟)はすぐに日数を計算し、驚いて叫んだ。

「五四青年節って、あと十二日しかないな」

みんな興奮の渦につつまれた。寧岸は、

「君と暁歌は、相談したのか」

と言った。趙耀根は、

「彼女は僕たちが結婚する日を知らないし、この家の存在だって知らないんだ。彼女の驚く顔を見たいんだ」

とことありげにこたえた。江暁鴎は、

「なんてロマンチックなんだろう。暁歌姉さんは、こんな思いつきが大好きなんだ」

と言った。寧岸は

「今ここでの約束事は、みんなが絶対に事前の秘密を守ることにあるんだ。婚礼の品は、隠密に運んでこなければならない。とりわけ、趙耀珍(趙耀根の妹)はどんなことがあっても、気持ちを落ち着かせて、母親の前でしっぽを出さないことだ」

と言った。

「わかったわ、寧岸先生のいうとおりにするわ」

と趙耀珍は闘志で胸を膨らませて言った。
若者達はお互い会心の笑みを浮かべ、もうすぐそこまで差し迫っている結婚式をうずうずして待っていた。

（五）

五四運動記念日は、日、一日と近づいてきた。他の仲間は、落ち着いていられたが、小娘の趙耀珍（趙耀根の妹）だけは、感情が高ぶってたまらなかった。彼女は、ほとんど毎日口実を設けて外出して、店をぶらつき、婚礼用品を、人の目を盗んで持ち帰った。
しかし、彼女は、とても単純な失態を引き起こし、母親の疑いを招いた。ある日、母親は、娘の枕カバーの中から、繻子（注5）の布団表などの衣類や、嫁入り道具をひっくり返して見つけた。

（注5　繻子織りにした織物。帯地・半襟・洋服地などに用いられる。サテン）

母親は、泥棒を捕まえたように、戦利品をテーブルの上に置いて、娘が仕事から帰ってくるやいきなり怒鳴った。
「これはいったいどういうことなの」
趙耀珍は、驚きうろたえて、言葉を濁した。
「何でもないわ」
涙が母親の顔から流れ出し、趙耀珍を呆然とさせた。

えているんじゃないのかね。どんな男といい仲になったのかね」
趙耀珍は、焦って応えた。
「お母さん、無実の罪を、私に着せないで。これは、私のものじゃなくて、兄さんが、婚礼の時に使うものなのよ」
母親は、あまりのことに立腹し、口をつぐんでしまった。息を切らせ、白目をむいてしまったので、あわてて母親の背中をさすり、母親が、ほんとうに窒息して、命を落とすことを恐れた。しかし、これで趙耀根が婚礼を秘密にしていたことも、これ以上、隠す必要もなくなった。

（六）

こうして、母親が、趙耀根の隠し事を知った頃、趙耀根は江暁歌に、あの家のことを知らせようと考えていた。
大橋服装工場の退勤時間である。江暁歌は、人の流れにまかせて、工場の正門を出た。青年労働者の群れの中に、スリムで美しい、上品な江暁歌が、ひときわ目立って現れた。
江暁歌は、自転車を持った趙耀根を遠くから見た。人は人を待つときに、いつも間の抜けた顔つきをするものである。素晴らしく頭の良い趙耀根も、例外ではなかった。彼のあの間の抜けた様子を見て、江暁歌は、楽しそうに笑った。彼女は、仕事帰りの人の流れにまかせて、趙耀根の前まで歩いてくると、あたりをきょろきょろしている彼に声を掛けた。
趙耀根は、
「びっくりしたなあ。君は、どこから来たんだ。突然、地面から出てきたんじゃないのか」
と言った。
「私は、地面から出てきたんじゃないわ。私は、まっすぐ、あなたの前まで来たのよ」
「それじゃ、どうして、君が見えなかったのかなあ」
「私たちの工場には、綺麗な子が多いから、適当に見ていたんじゃないの」
「君たちの工場には、綺麗な子はたしかに多いよ。でも、僕が引きつけられるのは、ここにいる君だけだよ」
「お世辞はやめて」
「僕は、お世辞は言わないよ。これは、事実さ。乗れよ」
と趙耀根は自転車をたたいた。
江暁歌は、急に、恋愛をしていることを意識した。あわてて振り返ってみると、同僚達が、彼らを見てひそひそ話をして、こっそり笑っているような気がした。彼女は、すこし恥ずかしくなり、大急ぎで、小走りに走り、彼女は、
「お母さん、お母さん」
と続けざまに叫んで泣きついた。母親は、
「お前達、ひとり一人を、一人前の大人に育てた。でも、お母さんは、かばいきれなくなったよ。いつか、お母さんも、お前のお父さんのように、両目を閉じて、くたばって死ぬよ。そうすりゃ、私にとっても、お前達にとっても好都合さ」
趙耀珍の涙も、とうとうと流れ落ちた。
「お母さん、そんなこと言わないで」
「耀珍や、お前は知っているかい。お母さんの掌中の珠なんだよ。お母さんには、二人の息子がいるけど、あの子達はどうだっていいんだよ。息子は、将来嫁をめとれば、母親のことは、忘れちまう。私が頼りにしているのは、お前だけだよ。お前だけが、私の一番身近な存在なんだ。それなのに、この嫁入り道具は、いったいどういうことなのか教えておくれ。どうしておまえの枕カバーの中にしまってあったのか。もしお前が、言い出さないのなら、私は、お前の目の前で死ぬよ」
趙耀珍は
「私には言えないわ」
と言って、泣き出した。母親は、一計を講じ、娘を信用しないふりをして言った。
「お前はまだ若いのに、もう、何かおませなことを考

そっと自転車の荷台に飛び乗った。
趙耀根はわざと彼の運転技術を見せびらかし、自転車を仕事帰りの人混みの中で、蛇行させ、飛ぶように運転した。江暁歌は、気を張りつめながら、自転車の座席をつかまえていたが、心の中では、笑いをこらえきれず叫びたかった。彼らは、すぐに雑踏を抜けて、通行人が少ない広々とした大通りまできた。すると、趙耀根は、自転車のスピードをゆるめた。江暁歌も緊張状態から解かれた。
江暁歌は、自然と腕を伸ばし、さっと趙耀根の腰に回し、顔を趙耀根の広くがっちりした背中にピッタリくっつけた。
江暁歌が、最も気持ちが落ち着くと感じた瞬間だ。
春物の薄手のシャツを通して、趙耀根の筋肉が彼女の腕の中に柔らかに滑り、彼女が心持ち力を入れると、しなやかな筋肉がぴんと張られ、鋼鉄のような内側の硬い筋肉質が現れた。彼女は、趙耀根の鼓動を聞いた。強靭な心臓が、ドキドキと脈打っていた。そして、彼の少し甘酸っぱくて渋い、濃厚な酒のような体臭が彼女を酔わせた。彼女は、ほろ酔い加減で、二人の世界にひたった。話もしたくなく、自転車も降りたくなく、こうして、彼らの生命のわき出る道に沿って、このまま、ずっと、永遠に自転車をこいで行けるとひそかに思った。
デコボコの小道でからだが上下に揺れると、江暁歌は、彼に返り、趙耀根が、彼女を見知らぬ土地に連れてきたことに気づいた。
彼女は、今日まで、自分の住んでいる町に、意外にも、こんなところがあろうとは知らなかった。この土地のすべてのものに、湿っぽい空気がしみ込んでいた。
江暁歌は、
「私たち、いったい何処に行くの」
と尋ねた。趙耀根は、ものも言わずに、ただ、ひたすら力を入れて自転車をこいでいる。
「わかったわ。あなた、私を、また、もったいぶってじらしているのね。あなたが言わないのなら、私、自転車を降りるわよ」
趙耀根は、やはり、答えなかった。彼は、江暁歌が、絶対に自転車を降りるはずがないことがわかっていた。江暁歌に、懸念を起こさせていたが、この懸念を最後の僅かな時間まで、維持しなければならなかった。
趙耀根は、
「降りよう」
と言って、自転車のブレーキを掛けた。
「ここは何処?」
江暁歌は、しなやかに自転車を飛び降りた。
趙耀根はあふれんばかりの自信を押さえ切れずに言った。
「ここは、僕らの家さ」

彼は、「僕ら」という二文字を特に強くかみしめて言った。

(七)

江暁歌は、その家の中に立つと、かすかに震えだした。ここは、清潔で、何もかもそろっている。暖かな愛すべき家だ。いや、ここは、完全に彼らの新居になっていた。
趙耀根は、
「雰囲気はどう?」
と尋ねた。
「素晴らしいわ」
江暁歌は、振り返って趙耀根を見ながら、
「あなたは、なぜ、もっと早くここがあることを知らせてくれなかったの」
と言った。
「そりゃそうさ、君の『素晴らしい』という言葉を聞きたかったからさ」
「ここはどうしたの?」
「どうやって手に入れたかなんて、そんなことさほど重要じゃないよ。大切なのは、君が、ほんとうに気に入ったかどうかさ」
「私は、気に入ったわ。本当に気に入ったのよ」
「お粗末すぎて、君には、少し、釣り合わないかな」
「そんなことないわ、こんな大きな家に私たち二人で住むには、贅沢で豪華すぎるわ」
江暁歌は、思わず、趙耀根の胸の中に飛び込んで行った。
趙耀根は太くて大きな腕で、強く江暁歌を抱きしめ、顔を彼女の首筋にうずめて、彼女の体臭の香しい匂いをかいだ。彼らは長い間抱き合ったので、江暁歌は、窒息しそうになったが、やっと、彼の腕は、ゆっくりとゆるめられた。
趙耀根は江暁歌を連れて、家の中を案内した。小さな客間の正面の壁には、趙耀珍が切った「双喜字」(注6)が貼ってあり、寧岸直筆の「喜聯」(注7)が掛けてあった。

(注6 "喜"という字を二つ横に並べ一字としたもの。装飾に用いる"囍"。)
(注7 婚礼の時に掛ける対聯(ついれん))

別の部屋には、引き延ばした彼らの写真が掛けてある。テーブルには、友人がプレゼントしてくれた色鮮やかな贈りものが置いてあり、ポット、新品の鍋、新しいお椀、枕カバー、枕かけのタオル、玩具の人形など、日用品は、何でも揃っていた。
趙耀珍は、
「これから、ここが僕たちの帰る家なんだ」

と言った。

江暁歌は、尊敬の眼差しで、彼を見ていた。初めて、趙耀根に会ってから彼女は、彼に対して、崇拝と恐れを抱いていた。背が高く、からだもがっちりしていて、勇猛果敢な人、凛然として犯しがたい人、武に通じ力強い人、卓越した一頭地を抜く人、それが趙耀根だった。

二人は何度となく結婚について話し合い、一歩また一歩と彼に近づけたことが江暁歌は嬉しかった。そして、こらえきれずに涙を流したくなった。彼女は、大通りで、彼と肩を並べて歩くのが好きだった。通りすぎる女の子達のうらやむ視線に向かって、彼女は、頭を高くもたげるだろうし、心中には限りない誇りがにじみ出ていた。彼女は、ずっと、自分が夢を見ていると思っていた。この世の中で、どうして、このような男が、自分のものになったのだろうか。彼女は、突然夢から醒め、自分が実際には何も手にしていないことに気づくことを、ずっと恐れていた。しかし、この男は、すべてを彼女に捧げた。

江暁歌は、幸せすぎて、少し、不安になって言った。

「私、こわいわ」

趙耀根は、

「何が、怖いって言うんだ。怖くなんかあるものか」

と胸を張って、力強く声高らかに言った。

「私は、お母さんのことを心配しているのよ。まだ何もお母さんに話していないわ。年老いた親が、怒って、それが原因で、病気になったらどうしようと心配しているの。人目を盗んだこんな結婚、人があれこれと取りざたすることを私は、怖れているの。私たちが、何か人に顔向けできない大それたことをしているんじゃないかと思うと恐ろしいの。あなたの将来に影を落とすことを心配しているのよ」

趙耀根は、江暁歌を抱き寄せて、胸を張って答えた。

「バカだなあ。僕たちは、もうすぐ結婚するんだ。僕たちは、正しい。辛抱強く、了解を得る必要はないのさ。僕たちが、既成事実を作ってしまえば、彼らは、どうすることもできないんだから。もうすぐ八十年代だ。僕たちの中国では、もう既に変化が起きている。個人の幸せを追求することが、個人主義だと批判される時代は、もうすでに永遠に過去のものとなってしまったんだ。僕たちは、胸を張らなければならない。胸を張って、自分の夢と幸せを追い求めなければならないんだ。ほら、周りを見てごらん。みんな自分の幸せのために、生きている。毛主席は、言っているよ。『一万年は長すぎる。寸刻を惜しめ』とね。僕たちも寸刻もおろそかにしないで、この結婚を執りおこなわなければならないよ」

「耀根、あなたの言うことが、人民日報の社説のように立派なことってわかっているの。いつになったら、私は、あなたのように、大所高所からものを見ることができるのかしら。考えがあっても、勇気がもてるかしら」

趙耀根は、笑い出した。江暁歌の彼に対する称賛は、最高に彼を心地よくした。彼は、江暁歌の顔をすくい、力をこめて口づけをし始めた。ほとんど感覚もなく、江暁歌の服を荒々しく引き裂いた。

その行為は粗暴で、彼女は、一株のか弱い芦のように、暴風雨の中で、ブルブルと震えた。

しかし江暁歌は、その荒々しい行為に我を忘れて歓喜の声を上げ、懸命にもがき、すべてを忘れて、趙耀根をぎゅっと抱きしめ、彼が、自分を粉々に引き裂いてくれることを望んだ。

彼女は、粉々にはならず、突き刺す痛みだけが残った。最初の痛みは、直ぐに薄まり、自分が一艘の小舟のように大波が逆巻く河に沈んだり、浮かんだり、また、軽い綿のように、風にひるがえり、空にまっすぐ立ち上ったのを感じただけだった。彼女は、狂気じみてまどい溺れていき、自分を含めた全てのものを忘れた。

理性は、数時間後にやっと、回復していった。ほとばしる感情もだんだんなくなり、魂は元に戻った。江暁歌は、急に恥ずかしくなり、いたたまれなくなった。彼女は、自分の顔を、しばらく、掛け布団で覆い隠し、部屋の中を裸で行ったり来たりしている趙耀根を再び見る勇気がなかった。

そして、今しがた、彼らが、全てのものを顧みないでおこなった行為が、何を意味していたのか考える勇気がなかった。

ベットから起き上がると、自分の恥部に、ある種の塩漬けしたような痛みを覚えた。しわくちゃになったシーツの上には、こすられた暗赤色の血痕が見えた。彼女は、ぐったりした躯をこらえながら、シーツを引っ張り、気づかれないように、自分でシーツの汚れを洗い落として、乾かした。

この時、江暁歌は、両親に、趙耀根と結婚したことを隠さなければならないと、心に誓った。

（つづく）

参考〈原文第一章（一）一部掲載〉

人們生活著・日子如水一般不知不覺地過去・有時候驀然回首　發現歷史就在我們的腳下二十年發現的事情　居然就是今天所有結果的原因・爲什麼生活總是這樣　給予我們的是結果　而我們卻不能駕馭自己命運的原因呢？

透明な時間（四）

宅見勝弘

【前号までのあらすじ】

（一）東西銀行赤坂支店の金庫室の中で竹森は目覚めた。竹森は何者かに殴打され、気絶していたのであった。隣に熊本支店長の撲殺死体が横たわっていた。金庫室は格子扉と耐火扉で外から施錠されていた。格子扉と耐火扉と支店通用口のシリンダー錠の鍵は、死体の手の中に握られていた。

（二）東西銀行は、東城銀行と西都銀行が合併して誕生した銀行である。東城銀行は『草食系銀行』と西都銀行は『肉食系銀行』と呼ばれ、合併後の行内の融和が進まなかった。

（三）火災報知器が鳴っていることで、沢木雅子・草津史郎・鹿田係長の三名が支店の通用口を開錠して、赤坂支店に入った。鳥居副支店長を含む四名が金庫室を開錠して開けると、竹森の体が飛び出してきた。四名は金庫室内に支店長の撲殺死体を発見した。

二（続き）

竹森は後頭部を床に打ち付けた状態で、意識を失ったまま倒れていた。衝撃で後頭部の傷口が開いて出血した。雅子は竹森の出血を押えようと両手で頭を抱えた。

鹿田係長が熊本支店長の死体に駆け寄ろうとしたが、頭蓋骨が砕かれ、脳漿と血液を流している無残な姿を見て足踏みした。

「警察と救急車を呼んできます」

地下で携帯電話が通じないので、草津が一階に繋がる階段へ登ろうとした。

「待て。問題は出来るだけ内部で処理しろ。警察沙汰になったら、私の支店長の内定が取消になる」

鳥居副支店長は夢遊病者のように呟いた。

「こんな奴の言う事は無視して、早く通報して」

沢木雅子が叫んで立ち上がったとき、鳥居の顎に雅子の膝がぶつかった。鳥居は白目を剥いて倒れた。

草津を追う様に鹿田係長も一階への階段を登った。一階から鹿田係長の声が地下の金庫室前まで聞こえてきた。

「防犯カメラのデッキが盗まれているぞ」

階段口に有る給湯室から叫んだようであった。給湯室には防犯カメラの映像を録画しているハードディスクDVDレコーダが設置されている。

ディスプレイは元のままであったが、ハードディスクDVDレコーダが持ち去られていたのだった。

赤坂支店には防犯カメラが店内に十六台が設置されていた。通常はディスプレイに九分割で表示されている。一ヶ所を全面表示することも、四・九・十六の分割表示をすることができる。

映像データについては、ディスプレイ表示に関係なく十六ヶ所のデータがハードディスクに記録されている。ディスプレイ表示で別の場所の映像であっても、録画した映像の再生中であっても、十六ヶ所の録画は全て残っている。ハードディスクの情報は一週間に一回の割合でDVDに複製されていた。

事件当時の映像は未だDVDに複製されていないが、レコーダ内臓のハードディスクに残っている筈であった。

十六台の防犯カメラの一つは金庫室の前に設置されていた。ちょうど耐火扉が前面に映る配置であった。扉が開いていれば、金庫室内の映像、つまり、犯行時の犯人の姿も残っている筈であった。

犯人は防犯カメラの存在を知り、レコーダが給湯室にあることを知っていたと考えられた。

鹿田係長は防犯カメラの疑問を口にしたが、そのことを考える場合で無く直ぐに警察へ通報した。

草津が一一九番へ通報して、地下に戻ってきた。

「これ、どうしようか」

泡を吹いて失神している鳥居副支店長の頭を革靴の爪先で草津は蹴飛ばした。

「生ゴミとして捨てたら」

雅子は竹森のことが心配の様子で、鳥居に関心なさそうに言った。

草津が通報してから一分も経たない内に消防隊員が駆け付けてきた。火災報知器で現場に待機していた消防隊員であった。

竹森は救急車でなく消防車で病院に運ばれた。後頭部から出血跡があったので、緊急入院し、精密検査をした。脳波に異常は無く、手術をする必要は無かった。入院して三日目に退院することになった。

救出の際にも後頭部を打ちつけたが、耐火扉は重くてゆっくりと開いたのが幸いだったようで、その時の衝撃は小さかった。

無限の時間のように感じたが、実際に竹森が金庫室内

に閉じ込められた時間は意外と短いものであった。
土日の二日間も閉じ込められると思い込み、酸素が無くなる等の恐怖のため時間が永遠に感じられたようだった。
竹森は病院で意識を取り戻したときに、見舞いに来た雅子から発見された状況の説明を受けた。
格子扉は竹森自身が開けたが、耐火扉はダイアル錠とシリンダー錠の両方が施錠されていた。通用口は数字錠だけでなく、シリンダー錠も施錠されていたと言われた。
(犯行現場は三重の密室だったのだ)
竹森は金庫室で漠然と不安に思っていたことが的中していた。犯行現場は三重の密室で五つの鍵が掛けられていた事実が意味することを考えた。
入院中のこともあり、警察の事情聴取も特にされなかったが、竹森は容疑者として取調べを受けるのでないかと不安に感じていた。
竹森が外から鍵を架けることは不可能であるので、竹森自身が犯人であることが不可能と証明していると主張することが出来るかもしれない。
しかし、金庫室の中に閉じ込められた状態で二人の内一人が殺されていれば、生き残った一人が犯人と警察に疑われるだろうと竹森は考えた、
防犯カメラのレコーダが盗まれていたと聞いて、竹森は一時的に自分が容疑者から外れると思った。しかし、

支店長と竹森を金庫室に閉じ込め、レコーダを盗んだ犯人が別に居ることを証明しても、竹森が支店長殺しの犯人の容疑者の疑いを晴らすことは出来ない。
謎は密室だけに留まらず、凶器や犯行自体も謎であった。凶器が金庫室内の踏み台であったが、何度も頭蓋骨に叩き付けたので、死に至ったのである。しかし、踏み台を使って、計画的に殺人を犯すことに矛盾がある。
密室を構成するくらいの犯人であれば、撲殺という手段で無く、刺殺や絞殺などの確実に死に至る方法を選ぶように考えられた。
何よりも被害者の支店長は身長が百八十センチを越え、体重も百キロ近くも有る。一緒に居た竹森は身長が百七十センチにも満たず、体重は六十キロに達していない。ブルドーザーと言われた支店長の体格は赤坂支店の行員の中でも最も優っていた。
事件当日に居合わせた鳥居副支店長・鹿田係長・草津の三名も草食系銀行員と言われる旧東城銀行らしく筋肉質でない体格をしている。沢木雅子のような女性では踏み台を持ち上げることすら難しそうであった。
警察では赤坂支店の内部の犯行と考えたようであった。
「支店長に殺意を持っている人ですか…赤坂支店の行員全員じゃないですか」
警察署員が赤坂支店行員に事情聴取をしている際に鳥居副支店長は平然と答えた。

その鳥居が最も容疑者として嫌疑を懸けられたようであった。鳥居は事件のあった金庫室の管理責任者が自分であることが出世に影響すると考え、前日の金曜日付で管理責任者を自分から為替課長に交代したことにして鍵管理簿を偽造していた。責任転嫁のスペシャリストと呼ばれるだけあって、姑息な手段であった。
その行為をしているところを警察に咎められ、証拠隠滅を図ったのでないかと疑われたのである。
耐火扉のシリンダー錠の鍵を持っていたこと、ダイアル錠を自ら開錠したこと、事件当時に赤坂支店に居たこと等の理由でも、警察から容疑者として疑われたようであった。
しかし、死体発見時に失禁して失神していた事実から犯人らしくないとの心証を持たれたようであった。
鳥居に嫌疑がかけられた数日間は、竹森に容疑が向けられず、病室で事情聴取されることは無かった。

鍵の管理者

格子扉のシリンダー錠
<正鍵>融資課長
<副鍵>預金主任 → 支店長

耐火扉のシリンダー錠
<正鍵>副支店長
<副鍵>預金課長 → 支店長

通用口のシリンダー錠（輪番制）
<正鍵>鍵当番(役付)(取引先係長)
<副鍵>鍵当番(非役付) → 支店長

四

事件から三日後に支店長の葬式が行われた。竹森は退院した日が葬式の当日であった。竹森は赤坂支店に寄らずに自宅で喪服に着替えて、葬式に行った。
葬式は由緒ある寺で盛大に行われていたが、参列者が異常に少なかった。赤坂支店の行員が殆ど出席していなかった。現職の支店長の葬式なので、支店の行員が受付をしているかと思ったが、誰も居なかった。
後になって竹森が行員に質問したが、赤坂支店で殺人事件が発生したので対応に追われて誰も葬式に行けなかったという理由であった。
しかし、殺害された当の本人の葬式を欠席する理由にはならない。葬式に行かない理由を無理に言っているのは明白であった。飼い猫に餌を与えるためという理由で出席を断った女性行員も居た。
喪主は支店長夫人であったが、夫人は椅子に腰掛けて顔を伏せていた。別の人物が喪主の代行をしていた。竹森は代行をしている人物に心当たりがあった。
(元建設大臣だ。なぜ彼が支店長の葬式の喪主代りを務めているのか)
その人物は衆議院議員の波戸田耕造であった。波戸田は衆議院議員を五期勤めていて、建設大臣の経験も有った。波戸田は長年所属していた与党を離脱して、前回の衆議院選挙には無所属で当選していた。

還暦からの考古学（二十三）

桜井茶臼山・壱与・磐余（いわれ）王朝（その4）

中山喬央（たかひろ）

まえおき

今回は北九州・博多湾岸地域で発生した鏡の一括大量埋葬が、どうして畿内に移ったのか、その背景につき考察します。

それは次の三点に整理することが出来ます。

① 鮮卑・檀石槐の来寇（182年頃）
② 住吉大社、博多から摂津に本宮移転（211年）
③ 呉孫権を撃退（230年）

①鮮卑・檀石槐の来寇

鮮卑とは

鮮卑は古代アジアのモンゴル系（トルコ系とも言われる）に属する遊牧民族で、中国戦国時代から興安嶺の東部地方を拠点として活動しました。

二世紀の中葉、遼東から内外モンゴルを含んで鮮卑を大統一した人物が、ここで採り上げる檀石槐です。

三国時代に入りますと慕容・宇文・拓跋などの部族集団に分裂し、晋代には前燕・後燕・南燕・西秦・南涼の国を建て、拓跋氏は南北朝時代に北魏を建国します。

漢時代の鮮卑

鮮卑は漢の始め匈奴の冒頓（ぼくとつ）単于（ぜんう）に敗れて遼東の砦の外の地に逃げ込み、烏丸（うがん）とだけ交流をしていました。

ところが光武帝の時代（25～57年）、南と北の匈奴が争いその勢力が減退しますと、再び勢力を盛り返し、建武30年（54）、鮮卑の大人於仇賁（おきゅうほん）は部族民をつれて都にのぼり朝貢して王に封じられます。

その後も鮮卑は反乱と服従を繰り返しますが、順帝の時代（126～144）再び長城の内部に侵入し、代郡太守を

殺します。そこで漢の朝廷では五営の弩隊の指導者達を現地に派遣し、南単于の歩兵・騎兵と共に、鮮卑を追い払います。更に烏丸校尉（烏丸軍の指揮官）の耿曄（こうよう）は、長城を出て鮮卑を攻撃し首領格の者達を大勢殺害しましたので、鮮卑の三万余落は、遼東郡に降伏します。一方北単于に所属していた匈奴十余万落も遼東郡で生活していましたので、彼等は混住するようになります。

檀石槐の父といっても実父ではないのですが、桓帝の時代（147～167）に入る少し前、その投鹿侯（とうろくこう）が匈奴の軍に入って三年間遠征をしていた留守に彼は生まれました。

当然おかしいということで、投鹿侯は殺そうとしますが、当時は夫人の力が強かったのでしょう。妻は「あるとき日中に外を歩いていると、雷鳴が聞え、天を見上げると雹が私の口に入りました。そのまま呑み込んだところ身重になり、十ヶ月でこの子が生まれました。きっと非凡な力を持つに違いありませんから、しばらく育ててください」といい、もとより投鹿侯は信じませんでしたが、妻が実家で育てることにはあえて反対しませんでした。

この子は檀石槐と名乗り、成長するや勇敢で人並み優れた智謀を持つ人物になりました。

彼が十四～十五位の時、別の部落の大人が母の実家の牛や羊を略奪した際、一人で馬をかって後から襲い掛かり全ての牛羊を取り返しました。この事があってから、あたりに住む部族民達は皆彼に畏服し、彼の出す命令・禁令・裁決に従うようになります。

やがて彼は人々に推されて大人となります。

檀石槐は大人の位につきますと、高柳の北三百余里にある、弾汗山、啜仇水（せっきゅうすい）のほとりに本拠を構え、帰服してきた東や西の大人達と共に、南は漢の国境地帯で略奪を働き、北ではバイカル湖周辺の丁令の勢力を阻み、東は松花江下流域の夫余を撃退し、西では玉門関のはるか西北方にある烏孫を攻撃して東西一万二千余里、南北七千余里にわたる山川水沢や塩地を全て手中に収めます。

これは最強時代の匈奴の再現ですから、漢の朝廷は憂慮し、桓帝の時代に匈奴中郎将の張奐（ちょうかん）を派遣して討伐しますが、勝つ事ができませんでした。そこで懐柔策に転じます。しかし檀石槐は拒絶します。そして侵入略奪行動を激化します。

このようにして支配地を一層拡大した檀石槐は、領有する土地を次の様に三分割します。

①東部

今の天津あたりに位置した右北平（ゆうほくへい）から、東方は遼東の夫余や朝鮮半島東海岸の濊貊（わいはく）と接するあたりまで。

二十余の邑（中心になる集落）で構成。

大人―弥加・闕機・素利・槐頭。

② 中部

右北平から幽州の北西に位置する上谷まで。

十余の邑で構成。

大人（何れも、大帥、軍隊の総司令官？）

―珂最・闕居・慕容。

③ 西部

上谷から敦煌の西の烏孫と接するところまで。

二十余の邑で構成。

大人（何れも大帥）

―置鞬落羅・日律推演・宴荼游。

次の霊帝の時代（168～188）に入りますと、更に幽州と、へい州の二州で毎年のように略奪を盛んに行います。

熹平六年（177）護烏丸校尉の夏育等が南単于の率いる軍勢と共に、雁門塞から長城の外に出て、二千余里にわたる遠征を行いますが、檀石槐は配下の部族を指揮して邀撃し、無事に帰還できた兵馬は十分の一に過ぎませんでした。

この様にして檀石槐は支配下に入る人民の数が増え、それまでの農耕牧畜と狩猟だけでは食べさせていくことが出来なくなりました。其の為食糧供給の役に立つ土地を求めて烏侯秦水（遼河？）のほとりまで参りました。水はじっとして流れず、魚が沢山いるのですが捕まえることが出来ませんでした。

その時聞いたのが魚取りに巧みな汙人（倭人）の事です。そこで彼は東方（南方）に軍を出して倭国を撃ち、千余家（五千人）を捕まえて烏侯秦水のほとりに住まわせ漁労に従事させて食糧不足を補わせました。

現在でも（『三国志・魏書Ⅳ』が書かれた時代、陳寿―233～297）烏侯秦水の辺には倭人数百戸が住んでいます。

檀石槐が四十五歳で亡くなりますと、息子の和連が代わって大人となります。しかし彼は統率者としての能力に欠け霊帝の末年、黄河上流域の北地郡を攻めた際、弩で狙撃されて、落命します。しかしその後も大人の位は世襲されていきます。これは檀石槐がいかに傑出した人物であったのかを物語っています。

檀石槐、博多湾沿岸来寇のあらまし

では檀石槐は何時博多湾沿岸に来寇したのでしょうか。あるいはどうして来寇の場所を博多湾沿岸と考察できたのでしょうか。

先ず来寇の日時を考えてみます。『魏書』には、先に述べました様に、熹平六年（177）漢と匈奴の連合軍を敗退させたので、支配下の人口が増え、従来の農耕牧畜

と狩猟だけでは食糧を十分に供給することが出来なくなった。そこで良い土地を求めて遼河の流域に来た所が、大きな魚が沢山いることに気がつき、漁労に巧みな住民の拉致を思いつき、倭国に来寇したとあります。

それが成功した後、檀石槐は四十五歳で亡くなり、息子の和連が後を継ぐのですが、霊帝（168～188）の末年、北地郡を攻めていた時に和連は弩で死んだ、とあります。

すなわち事が起こったのは一七七年から一八八年の間ということになります。

そこで先ず考えなければならない事は、鮮卑は遊牧民族、即ち騎馬民族ですから、水軍は持っていなかったということです。そこで水軍を編成し、外洋の航海に耐え、一艘に五十人程度の兵員と武器・食糧及び多数の捕獲した住民を乗せる事のできる船を最低でも参百艘位建造するには、恐らくは四百艘程度用意され、渡来する途中で更に、水先案内人を求めながら遠征軍の増強を図り来寇したのでしょうが、それは一七七年から五年後の一八二年頃が最も可能性が高い時期といえます。

次に何故博多湾沿岸が襲われたと考えたかといいますと、『まんじ117、118』に記述した通り、この地域が東洋のトロイアとして、日本列島と朝鮮半島・中国大陸交易の中継により大いに繁栄していたからだと思います。

それは渤海湾岸諸国でも周知の事実でした。そこを圧倒的な軍事力で襲えば、蓄積してある貴重な交易物品、日本列島からの、漆・水銀・翡翠等玉製品、塩・南西諸島の貝製品等、或いは大陸・半島からの高価な金属製品、絹織物等の収奪ができますし、奴国には、その後の『魏志倭人伝』に二万戸・十万人の人口が集中していたと書かれているほど、博多湾沿岸地域は当時人口密集地域でもあり、対馬・壱岐をも含めたこの地域は、侵略者にとっては見返りが極めて多い、よだれが出るようなところだったと思います。

加えて当時の朝鮮半島情勢は高句麗が既に建国されてはおりましたが、未だ西海岸域には進出しておらず、百済・新羅・伽耶は何れも大きな外部勢力を阻止できる力は持っておりませんでした。またこの頃は韓・濊の力が強く、楽浪郡の民が多くが東海岸の韓・濊に流入した時代でもありました。

その一方で、日本列島の方も、倭国大乱終末期で外部からの侵攻に対する備えが十分ではありませんでした。

其の為、檀石槐の率いる水軍は、容易に朝鮮半島西海岸にそって南下しながら、勢力を増強し、最終的には釜山のあたりから南下して、対馬・壱岐・博多湾沿岸の順序で来寇し、初期の目的、すなわち物品の収奪と漁労民の拉致に成功したのだと思います。

これはそれまで繁栄を誇っていた博多湾沿岸諸国にとっては、壊滅的な被害を受けた事を意味します。

千余家約5千人の拉致に成功したと言う事は、それと同数以上の人が殺害されたことを考えなければならず、更に負傷した人の数はその数倍に達し、多数の交易用船舶も悉く捕獲若しくは破壊され、それまで博多湾沿岸諸国が保有していた、朝鮮半島・中国大陸への制海権の消滅をも考えなければなりません。その事態を放置すれば大陸・半島と列島各地との交易の停止に繋がるばかりでなく、北九州一帯は、大陸・半島勢力進出の脅威にさらされる事となります。

②住吉大社、博多から摂津に本宮移転

住吉大社神代記からの考察

この時、大和王権がとった行動としては博多湾沿岸進出による所謂、神功皇后の三韓征伐と、博多の住吉神宮を難波の住吉大社へ本宮を鎮座させた動きがあります。

この住吉大社が保有している『住吉大社神代記』には『日本書紀』『古事記』と相似する記載もありますが、また極めて重要な事柄につき、独自の見解も述べておりま

す。

この書籍の内容は、日本列島の歴史、特に大和王権の盛衰を考察する上で、必須の資料を含んでいると考え、これを神武天皇の東征の記事とか、鏡の一括埋葬地域畿内移転等とあわせて考えてみます。

先ず「住吉大社」は、筑前の国一の宮「住吉神社」が前身で、神功皇后摂政十一年（211）摂津の国一の宮に移ったことが人口に膾炙されています。従いまして二〇一一年が鎮座一八〇〇年祭にあたります。

この二一一年鎮座の意味が大きいと考えました。

皆様ご高承の通り、住吉大社は海上交通の守り神として全国に2129社ある、住吉宮の最高の存在であります。祭神は『日本書紀』『古事記』神代の巻に出てくる、表筒男・中筒男・底筒男で、この三神の記事は天照大神の記事の前に掲載されています。

そして共に祀られるようになった神功皇后は、ご本人のご意志でそうなったのだと説明されています。

しかし『住吉大社神代記』を読んで驚いた事には、そこには秘話が隠されておりました。

それは応神天皇の実父は仲哀天皇ではなく、住吉大神であると言う事です。そして神功皇后は、「氣息長足姫天皇。諱は神功。天皇第十五代。初め橿日宮に居ます。後に磐余の稚桜宮、大和国十市郡磐余里に在り。」と実際は天皇であったことと、治世を司った場所として最初は博多湾沿岸、後に磐余が登場してきます。

また神武東征に関係すると筆者が考えた記事に、仲哀天皇が大中姫に産ませた二皇子、かご坂王、忍熊王との戦いがあります。その概略を説明します。

新羅征伐に成功して、神功天皇が瀬戸内海を大和に向っている時でした。

天皇が西を撃ち、新に皇子が生まれたと言う事であるが群臣が皆従っている。必ず皆は後継者として幼主（すなわち後の応神天皇）を立てるであろう。我々は兄としてそれを認める訳にはいかない、ということで、かご坂王と忍熊王は戦の準備を進めます。そして美濃以東の軍勢を集めることに成功します。

その結果、神功天皇はそのまま難波に進むことが出来なくなり、摂津国・武庫郡の港に止まらざるを得ませんでした。

その時、制海権を持っていた住吉大神のバックアップにより海を渡り、無事難波に上陸することができましたので、忍熊王達は、軍を引き、山城国宇治郡に布陣しま

す。一方神功天皇数万の軍勢は武内宿禰、和珥臣の祖、武振熊等が率いて山城国宇治に至り、河の北岸に対峙します。

この時武内宿禰は謀を用います。すなわち全軍に指示して髪を集めて頂きで結ばせ、その中に弦を隠させます。更に木の刀を佩かせ、忍熊王を欺き敵意のないように見せかける為に、悉く弦を切り、刀を川の中に投げ入れます。

そして「吾、天下をむさぼらず。唯幼き王を抱きて君主に従います。共に弦を切り、武器を捨てて仲良くしましょう。天下はあなた方のものです」と言います。

だまされた忍熊王達が、同じように弦を切り、武器を川の中に投じた所で、武内宿禰は全軍に指示して、弦を張り、真刀を佩いて一斉に攻めかかります。そして山城と近江の境にある逢坂で忍熊王達の軍を大いに破ります。

このようにして忍熊王は敗死し、天下は神功天皇、応神天皇のものになります。

この結果住吉大社は難波に本宮を移転し、神功天皇は以後、日本列島西半分の力を結集して、檀石槐の来寇により奪われた制海権の回復に努めます。

最近半世紀振りに金関恕さんが報告書を刊行したとして有名な東大寺古墳出土の「中平」（184～189）の金象

眼の紀年銘のある鉄剣は、当時の大和王権が、逸早く楽浪郡までの交易権を回復した証としてもたらされた可能性が高いものとして、神功皇后の朝鮮半島報復攻撃との関係を考えております。

更に新羅国王の言った「吾聞く、東に神の国あり、「やまと」という。また聖王あり、天皇という～」というくだりは我国を神国といった初めてのものであり、これは神功皇后、応神天皇、崇神天皇、神武天皇しか神という名前が付けられていないことと合わせて、『日本書紀』編纂上の謎をとく有力な鍵の一つになると考えています。

と言いますのは、書紀の編纂者は歴史を六百年古くする事を、当時の権力者から求められていた事が考えられ、それと手持ちの資料をどのようにドッキングさせたかと言う事です。少なくとも神と言う名の付いた天皇は、重要人物であることは間違いなく、その意味でも神功天皇・応神天皇の二代連続での神の名称は、とても重いものが感じられます。そして後世とは言っても七六九年、この応神天皇をお祭してある宇佐神宮を巡って、皇位継承に関する神託を仰ぎにいくという有名な事件が発生します。之も16代応神天皇の偉大さを表明するものだと考えています。

ここで歴代の天皇の在位年数と崩御年齢を調べてみますと、正常になるのは33代推古天皇からです。その推古天皇が即位したのが592年ですが、推古天皇以前の32代の天皇の治世期間を計る一つの目安として、推古天皇以後の32代の天皇の治世期間を調べてみました。すると64代円融天皇の治世が969年～984年で、984年から592年を差し引きますと392年になります。すなわち32代で392年間の治世ということになります。これを逆に推古天皇の即位された592年から差し引きますと、200年ということになり、若し前後の即位状況の変化がなければ、これは三世紀初頭、丁度『住吉大社神代記』に記された応神天皇が誕生した年に当たります。

この年代は、大和に天皇の前身となる世襲制の支配体制が出来上がったのではないかと考察されている考古学的な遺物・遺構の出土状況と整合性があります。

これは又、住吉大社本宮移転の211年、神功天皇即位の201年とも符合します。というのは神武天皇・崇神天皇と応神天皇は、同一人物を三人に分け、要のポストに貼り付けて、年代を六百年遡らせたとすれば良いからです。

また同様な考えは、住吉大神にも当てはまります。表筒男・中筒男・底筒男は三人の神を表わすのではなく、同一人物を朝の神、昼の神、夜の神として表現したものと考え、当然のことですが、住吉大社には夜の神である底筒男の隣に神功皇后が祀られています。又天照大

神の前に登場する住吉大神が、15代神功天皇と結ばれる事の矛盾も解消します。

更に『魏志倭人伝』に出てくる卑弥呼が、神功天皇に相当するのです。この場合、神功天皇は青年期までで、卑弥呼は熟年期の呼び方と考えると一層符合します。

この他、応神天皇出生の秘密を述べているものとしては、応神天皇縁の著明神社文書があります。

宇佐託宣集によりますと、所引の住吉縁起に「即夜住吉大明神現形為夫婦」とあり、延喜21年6月1日（921）筥崎神託に「香椎宮波我母堂、住吉宮波我親父也」と見えていますので、住吉大神と神功天皇との間に御夫婦の契りがあり、八幡大神即ち応神天皇はその御子であるという所伝が早くから存在していた事が分ります。

このことは、更に石清水文書を初め諸社根元記等にも記載されています。

ここで関係している神社につき簡単に説明します。

宇佐神宮

豊前国一の宮、全国四万六三八社の八幡神社の総本宮です。

大元山の古代自然信仰から、その神が比売大神となり、それに宗像三女神が重なり、神武天皇東征や景行天皇の神縁、また神功皇后が宇佐で軍船を造られた伝説などから宇佐氏の勢力加担が考えられ、神功皇后の廟が祭祀された後、宇佐国造に八幡大神が現れ、応神天皇の神霊が祀られたのです。

そして769年には、大宰府の詞官習宜阿曽麻呂が道鏡を皇位にと、宇佐の神託を奏上し、この真偽をただす和気清麻呂の神託により道鏡が追放される程、宇佐の神は朝廷に重んじられる力を持っていました。

筥崎宮

筑前国一の宮。主祭神は応神天皇。神功皇后と海神の娘で神武天皇の生母となった玉依姫命が配祀されています。

香椎宮

福岡市・東区（元糟屋郡）。神功皇后に仲哀天皇を合祀。

③呉孫権を撃退

呉・孫権の来冠

陳寿の『三国志』6呉書1には

黄龍二年（230）～将軍の衛温と諸葛直とを派遣し、

武装兵一万を率いて海を渡り、夷洲と亶洲とを捜させた。亶洲は大海の中に在って老人達が言い伝えるところでは、秦の始皇帝が方士の徐福を遣わし、童子と童女を含む数千人を引き連れて海を渡り、蓬莱の神山とそこにある仙薬を捜させた。徐福たちはこの島に留まって帰ってこなかった。その子孫が代々伝わって数万戸にもなり、その洲に住む者がときどき会稽にやってきて布を商っていったり、一方で会稽郡東部の諸県に住む者が、大風に遭って漂流し、亶洲につく場合もあるという。しかしこの洲は遥かな遠方にあって、衛温達は結局捜し当てる事ができず、ただ夷洲から数千人の住民をつれ帰っただけであった。

黄龍三年～

衛温と諸葛直は、詔にそむいて成果を挙げなかったとして、二人とも獄に下され誅殺された。

この記事で最も問題になるのは夷洲は台湾で見解が一致しておりますが、亶洲がどこなのかということです。

済州島であるとか、種子島であるとか色々な説がありました。

しかし筆者はそれは九州しかも博多湾沿岸だと考えています。以下それを説明します。

①州という字の使用されている先です。

これは大きな島だけに使われています。因みに済州島のことは「州胡」と表現しています。

②種子島のことは「多尼」と表現し、沖縄本島は「流求」です。

③今度は呉と中国東北地方公孫氏との交流です。

黄龍元年（229）5月、これは来寇前年ですが、孫権は校尉の張剛と管篤を使者として遼東に派遣します。強大な魏を遼東太守公孫氏と共に、双方から挟み撃ちにする計画を立てようとした事が容易に覗われます。そこで四十有余年前の鮮卑・檀石槐による博多湾沿岸略奪成功の詳細な情報をキャッチしたと思われます。その当時の航海技術は、かなりのもので沿岸航行とはいえ、魏が支配している広大な地域を避けながら、はるばる長江河口域から遼東に往復できたのですから、水先案内人を立てれば、正確に博多湾沿岸域に到達できた筈です。しかも失敗に終れば斬首の刑に処せられることは分っていた筈ですから、「探し当てられなく已む無く」という呉書の記載内容には不自然さを感じます。

これはやはり博多湾沿岸地域を正確に呉の水軍は目指したが、既に制海権を復活していた強力な倭の水軍に阻まれて逃走したというのが本当ではないかと思います。

これは『住吉大社神代記』の記事にある、大宮を新羅と中国大陸に設置したという記事からも考えることが出来ます。

次回は鏡の一括大量埋葬が始まった畿内の様子及び、その一括埋葬の内容が変化していく事等について考えて見たいと思います。

参考文献

石原道博『魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝』岩波書店、2009年。
石原道博『旧唐書倭国日本伝・宋史日本伝・元史日本伝』岩波書店、2010年。
入江孝一郎『諸国一の宮』移動教室出版事務局、2001年。
韓国教員大学歴史教育科、吉田光男訳『韓国歴史地図』平凡社、2006年。
倉野憲司『古事記』岩波書店、2006年。
田中卓『住吉大社神代記の研究』図書刊行会、1985年。
薗田稔『全国一の宮めぐり』学習研究社、2004年。
陳寿、今鷹真・小南一郎訳『三国志』4魏書Ⅳ筑摩書房、2005年。
陳寿、小南一郎訳『三国志』6呉書Ⅰ筑摩書房、2005年。
長澤規矩也『北史』汲古書院、1971年。

鏡（その15）

魔法の鏡

中山喬央（たかひろ）

あらまし

今回は魔法に関係すると思われる鏡について、六通りの考えを述べた後で纏めをしてみようと思います。

① 幻視の鏡と、希望する故人を見ることのできる鏡
② 魔女達の鏡
③ 占いの鏡
④ 水鏡の働き
⑤ 悪魔の鏡
⑥ 水晶と悪魔
⑦ むすび

① 幻視の鏡と、希望する故人を見ることのできる鏡

イタリアのルネサンス期の画家・建築家・彫刻家として人口に膾炙されているレオナルド・ダ・ビンチ（1452～1519）は、「もし君が多くのしみで汚れた壁を眺めるなら、そこに風景に似たものを見出すだろう。君はそこにまた戦闘だの、活発な身振りや奇妙な顔をした人物だの、無数の事物だのを見て、それらを鮮明な形態へとイメージすることができるだろう」といいました（レオナルド・ダ・ビンチ（『絵画論』A・シャステル編、パリ、1960年、205頁）。

このようにレオナルド・ダ・ビンチの汚れた壁は、亀裂が入り鉛で曇った魔法の鏡のように、物の輪郭がぼやけた後、新たな形をとりました。

この流れを汲んだのでしょうか？

1791年、ベルリンでヴィークレープは『あらゆる種類の楽しくするためになる技芸による自然魔術』を刊行します。

これは真ん中に穴が開けられ、蓋の上で火が燃えている長方形の箱の内部に、固定された凹面鏡が配置されている手品器械です。

まず男女の別を、次に顔の髪、額、眼、鼻等八つの部分を、四つに分かれているものの中から指定し、それぞれを、象牙色に塗られた板で表現したものを合わせて顔を形作り、それを凹面鏡で外部に映写するものです。

簡単に説明しますと次のようになります。

男だったかな、女だったかな？
髪の毛は赤色だったかな？黒色だったかな？灰色だったかな？白色だったかな？
鼻は低かったかな？大きかったかな？長かったかな？鉤鼻だったかな？
口は小さかったかな？大きかったかな？部厚かったかな？薄かったかな？

と死者に遭いたがって人にまず問い掛けます。尋ね終わった後で火中に香を投じますと、立ち上る濃い煙の中に故人の肖像が現れるのです。

② 魔女達の鏡

ドイツの作家ゲーテ（1749～1832）の大作『ファウスト』では、知識欲旺盛で行動力が極めて活発なファウストですが、その100～104頁でエカルトシャウセンが造った銅と鉛の合金製で、円錐形の切り込みの入った楕円形の姿見を紹介します。

それは次の様な仕組です。

人が視線をその姿見の中心に固定しますと、心理生理学的な作用が働き、暫くしてから様々なイメージが浮かびます。というのは周りの世界を破壊し、それを別の世界で置き換えるということです。くすんだ金属の不明瞭な映像、窪みのなかで逆さまになった諸形象が、混沌状態の宇宙を、影の渦巻きのなかで爆発し分解するように、蘇らせるのです。

言葉をかえますと

宇宙にあるものはどんなものでも必ず人が何か考えるものに似ています。だから定かでない形態も記憶によって明確な輪郭と対象に行き着き、高揚した想像力が、どのような混乱からでも鮮明なイメージを引き出し、一方で疲労した視線が、それに現実的な存在を与えることになるという内容です。

次に望み通りに、亡くなった人を見ることの出来る鏡の装置について説明します。

これもエカルトシャウセンが作ったものとされています。

これは真ん中に穴が開けられ、蓋の上で火が燃えてい

トが世界を遍歴するのですが、彼はまず庶民の娘グレートヒェンとの恋愛悲劇を経験、次の封建時代末期の宮廷では、古典美・神話などの世界を学び、最後は理想の国土の建設を目指し、死後、彼の魂は悪魔のものにならず天国に上ります。

1840年、パリで刊行されたブラズの『ゲーテのファウスト』222頁「魔女の厨」の場面にも、前出のヴィークレーブの手品の場面と良く似たシーンがあります。その場所は壁と天井が奇妙な器具で覆われ、鍋が煮え立っていて、それを雌猿が見守っています。また一枚の鏡があって、ファウストが近づいたり、遠ざかったりしながらそれを見つめつぶやいています。

おれはなにを見ているのだろう。この魔法の鏡のなかには、なんと妙なる姿が映し出されているのだろう。女性の最も完璧な姿だ。こうも美しい女性がいるとは。

ジョルジョーネやティツィアーノのヴィーナスを髣髴とさせるその光景は、やがて霧に包まれたように薄れてしまいます。

またその『ファウスト』の中には次のような記述もあります。

鏡をじっと眺めると
そこに私の愛する人の
穢れ無き姿と顔が見えたのだった。

18世紀半ばから19世紀初頭のイギリスで流行した、中世の古城などゴシック建築物を舞台にした恐怖・怪奇を主題とするゴシック小説の物語にも魔女の鏡が登場します。

場所は小部屋だった。……彼女（アントニァ）は風呂に入ろうと服を脱いでいるところだった。三つ編にした長い髪がすでに解かれて波打っていた。修道士は夢中になって彼女のからだの素晴らしい輪郭や見事に均斉の取れた様子をとっくりと眺めることができた。彼女はメディチのヴィーナス像のような姿勢のまま浴槽のふちでぐずぐずしていた。このとき飼いならした小さなカナリアが彼女のほうに飛んで行き、乳房の間に首をうずめ、くちばしと羽で胸をくすぐった。アンブロシオはこの光景をしばらく見つめていたが、やがて欲望が狂わんばかりにたぎりたって我慢できなくなり、思わず鏡を落した。「降参だ、マチルダ」と彼は叫んだ。「おまえの言うとおりにする。好きなようにしてくれ」

ヴェロニカが魔女から受け取ったのは「良く磨かれた金属製の円い鏡」だったが、彼女はアンゼルムスを探し出すためにそれに話かけます。

「あのおばあさんの贈物だわ」と彼女は元気良く叫んだ。すると鏡の中から眩しい光が発して、それが胸の奥までしみとおり、やさしく快く暖めてくれるような気がして、なんともいいようにない幸せな満ち足りた気持になった。おのずとまたアンゼルムスのことに思いが行き、彼について一心に考えていると、突然まさにそのアンゼルムスがミニチュアの肖像のように鏡のなかから彼女に微笑みかけているのだった。だがそのうち自分の見ているのが肖像ではなくて、大学生アンゼルムスその人自身であるような気がしてきた。

それでは愛の魔法の起源はどこまで遡るのでしょうか？それは1404年のジャン・フロワサールにも見出すことができます。

これは騎士が遠くにいる愛人に再会するために、彼女が三年の間自分の姿を映し見ていた鏡を枕もとに置く事によって、それを果たす事ができたというものです。

こうして部屋にいるあいだに
その場所に来てなかを覗き、

ここには不吉な情念と、美しい恋人、愛する男、ヴィーナスの姿を見せてくれる魔女の鏡という何時もながらの図式が繰り広げられています。

これと関連する次の様な物語もあります。

「この御守のお蔭で、私は一時も貴方を見失わずにいることができました」こういいながら彼女は法衣の下から鋼を磨いて作った鏡を取り出した。鏡の縁には、色々奇妙な未知の文字がついていた。マチルダは続けた。「この鏡は、悲しみに耐えさせてくれました。……これを見つめながら、ある言葉をつぶやくと、思いをかけた人の姿が見えるのです。だからどんなに貴方から離れていても、アンブロシオ、貴方は何時も私の目の前にいたのです」

信じられぬ思いで不審を抱いたアンブロシオは、その御守（鏡）を奪い取ります。

魔女マチルダが呪文を唱えます。すぐに縁を飾った文字から濃い煙が立ち昇り、鏡の表面を覆いました。煙が徐々に消えますと色彩と像の入り混じったものが現れ、それが少しずつ近づいてきて、やがて修道士アンブロシオの目に小さなアントニアが見えます。

これは魔女達によるファウストの誘惑が、中世期に開花した古い伝統と結びついて、M・Gルイス著『修道士』ロンドン、1796年に登場したものです。

修練尼に変装した魔女マチルダに誘惑されたドミニコ会修道士アンブロシオが、もう一人の女アントニアのために魔女マチルダを見捨てましたが、マチルダが長い別離の後戻ってきて魔法の鋼鉄製鏡を取り出して彼アンブロシオと会話した場面です。

③占いの鏡

シェークスピアの四大悲劇の一つとして、皆様ご高承のマクベスは、スコットランドの武将マクベスが三人の妖婆の予言で野心を抱き、ダンカン王を弑逆、将軍バンクォーを暗殺しますが、後で王の長子らによって討ち取られる物語です。この中で占いの鏡が登場します。

ここでも全ては魔女達の洞窟の中で、事態が進行するのですが、魔女達はマクベスに彼が王になることと、そしてバンクォーには彼の子孫がいつか王になることを預言します。

その有様を具体的に説明しますと、マクベスが自分の仲間だった男を殺害させたあと一人で洞窟にやってきます。そこでスコットランドの王達の亡霊の行列をみます。眼前をすでに七人までが通りすぎました。

マクベス……まだ八番目が出てくる。鏡を手にしているな。まだ次々と映っているぞ。宝珠を二つ。笏を三本持っている奴がいる。恐ろしい光景だ！いまはっきりわかった。間違いない。傷ついた頭のバンクォーが俺に笑いかけながら、みんな自分の子孫だと指差している。……

第一の魔女　はい、御覧の通りになりましょう。（図1参照）

演劇にとって最も偉大な書き物の一つであるこの戯曲の構成において、鏡は一つは大罪の恐怖、もう一つは罰の残忍さを示すものと用いられています。

S・グラールがケルンで1614年刊行した『驚嘆瞠目現代史宝典』Ⅳ438頁では、王妃カトリーヌ・ド・メディシスも、鏡の中にブルボン家の将来を見ることが出来たとして次の様に述べられています。

誰かがド・レ元帥夫人にこう話しているのが聞こえた。カトリーヌ・ド・メデイシス王妃は、自分の子供達がどんな風に成長し、誰が自分の後を継ぐのか知りたがった。それを請合おうとした者が、鏡を彼女に示した。鏡には部屋が映っていたが、そこでは子供達が丁度統治するはずの年数と同じ回数だけ回転していて、国王アンリ三世もしかるべき数の回転をしていたところ、ギーズ公が稲妻のように横切った。それからナヴァール王子が現れて二十二回回転し、そして消え去った。……

こうした考え方には1000年にわたる伝統があります。四世紀、スパルティアヌスは『ローマ皇帝列伝』の中で次の様に書き、ローマに向って進んできた敵軍に対してトリウス・クリスピヌスが始めた戦いの結末を、皇帝はあらかじめ知っていたのだとしています。

ローマ皇帝ディディウス・ユリアヌス（193）もまた鏡に基く啓示に訴えたといわれるが、一般に信ぜられているところによれば、目を眩まされ頭を惑わされた子供達が鏡の中に、これから起きることを見るというのである。ある子供はこうしてローマ皇帝セヴェルス（193～211）の登場とユリアヌスの敗走をみたのだという。

④水鏡の働き

博学の哲学者ヴァロ（前116～前27）は、彼の著作の中で、トラレスで一人の子供にミトリダテス戦争（ミトリダテス七世、前93～前90）の結末について、魔術的手段によって伺いを立てたところ、この子供は水の中にメルクリウスの像を見て、なにが起るか、百六十詩行の預言を述べたということです。

鏡と水はともに優れた夢幻的装置でした。

ギリシャの地理学者パウサニアスは二世紀に、パトラスのケレース神殿の泉にある鏡と、リュキアにある泉のことを次の様に指摘しています。

このパトラスの泉は決して間違えることのない神託を下すといわれる。伺いはあらゆる種類の事柄についてではなく、ただ病人の状態についてだけである。紐の端に鏡をくくりつけて、それが僅かに水に触れるように持つ。それから女神に祈りをささげ、女神を称えて香をたくと、すぐに鏡を覗く。そこには病人が回復するか死に至るかが見えるのである。

また彼は、リュキアのキュアネーにも広い事柄にわたるアポロン・テュルセウスの神託所があり、この神に捧げられた泉を覗き込むと、知りたい事が映し出されると述べています。

水の啓示もまた夢の鏡占いのなかに自らの場所を確保します。

その徳と奇蹟によって高名な修道士ヒラリオンは、あ

るキリスト教徒の、彼の悩みの原因を水鏡に映し出します。馬を用いるサーカスの曲芸に成功しなかったのが原因だとわかりました。というのは彼キリスト教徒が水面を覗き込んだところ、そこに馬、馬車、足枷を嵌められた人間を見たからです。呪いは十字架のしるしによって取り払われました。

ヒラリオンのそれと良く似た道具はすでに多くの記念作品として再現されています。紀元前五世紀後半に遡るヴルキの赤い人物像のついたベルリン美術館収蔵の壺が「盃のなかに読む神託」と題されて存在します。

そこにはアイゲウス王がテミスに伺いを立てているのが見られますが、彼女は若い女性の姿をして、デルポイの三脚台に腰をかけ、手にした広口の盃を覗いています。それが容器の形をした青銅鏡かどうかというのは今でも問題になっていますが、何れにしましても盃という字が使用されていることから、その中には聖水が入っていたことが考えられます。(図2参照)

⑤悪魔の鏡

十三世紀末葉から一五世紀末葉にかけて、先ずイタリアで起こり、次いでヨーロッパ全土に広がった芸術上、思想上の革新運動であるルネサンスの渦中では、顕在化しませんでしたが、初期キリスト教会最大の思想家アウグスティヌス(354～430)の悪魔学に再統合された異教的儀礼が中世半ばに(中世とは封建制を土台とする社会。西洋史では四世紀末ゲルマン民族移動から十五世紀半ばの百年戦争終結までの時期)最盛期を迎えます。

中世～近世の版画もしばしば鏡を悪魔の道具として表わしています。

1483年のウルムの版画は、地獄の業火に包まれた罪人達の前に鏡が掲げられているところを表現しています。(図3参照)。

また古い民間の諺を表わした様々な画面も残っています。

鏡は悪魔の本物の尻である。

アウグスブルクの版画(1498)では、鏡を覗いている女性は、しかめっ面をしながら、後ろ向きに身をよじっている小悪魔の尻尾と尻を見ています。この主題は民衆版画の中で何度も繰り返し採り上げられます。

マドリッド、プラド美術館所蔵のヒエロニムス・ボスの『悦楽の園』1500年頃では、鋼の鏡がサタン(魔王)の玉座の下を這う怪物達の臀部を覆い隠しています。その怪物の両足の中には、二つの乳房の間の上に蛙がいる、両腕を力なく垂らした全裸の女性がいて、彼女の顔が、ぼんやりとくだんの鋼鏡に映っています。

キリスト教会は、このように鏡が現実の事物や不可視の事物を映し出す力を持ち、それが超自然的で不吉な能力と結び付けられる事を、再三問題にし弾圧します。

教皇ヨハネス二十二世は、罪人達の告訴を要求して、1318年2月27日付けの手紙に

「彼等(偶像崇拝者)は魔術書を所有している。彼等は鏡と忌わしい儀式に従って聖別された人物をよく用いる」

と書き、リヨンの聖職者やローマ教皇庁のメンバーまで含んだ人々を偶像崇拝の迷妄者として告発します。

それでもこうした魔術はなくなりませんでした。

キリスト教の啓示に基づき、教義・歴史・信仰生活の倫理を組織的に研究する神学や、キリスト教会の教義を理性的に弁証するためのスコラ学によって弾劾を受けましたが、鏡による悪魔への伺いは、常にきらびやかな雰囲気に包まれていたのです。

⑥水晶と悪魔

サタンを水晶の中に閉じ込めるには、北に五つの悪霊の名の入った丸い円を描き、同じ名の刻まれた五振りの剣を南に向け、それらが全て一つの大きな円に取り囲まれるようにして、その中に水晶を手にした一人の魔術師が立つようにしなければならない。(図4参照)

このようにレジナルド・スコットは、彼が1584年ロンドンで刊行した『妖術の発見』で述べております。

一方、水晶を使用した占いは、悪魔が入りこんで戯れている固い滑らかな水晶が用いられます。というのは、多くの場合、悪魔は小さな姿となって、時には別の物体になって隠れ潜んでいると考えられたからです。

それを人の知りたがっている未来の出来事を表わす、何等かの描かれた印や図柄として察知した魔術師が、予知を行うというものです。

J・ボダン・アンジュヴァンは、パリで1580年『妖術師の悪魔学について』を刊行しますが、その56～60頁に、

ヨアヒム・ド・カンプレはニュールンベルグの一市民に出会ったが、この人は、ある少年から自分が望むもの全てを見る事のできる水晶の指輪を買ったが、それ以来悪魔に唆されるようになり、この指輪を壊してしまった。

という話を掲載しました。
この様に水晶は悪魔と密接な繋がりがあったようです。

⑦むすび

この章を閉じるにあたって、日本の魔法の鏡について紹介します。

この記事はJ・プリンセンが1832年、カルカッタで刊行された『ベンガル・アジア協会誌』1、「日本の魔法の鏡についてのノート」に収録されているのですが、その内容はスペイン北東部サラゴサ産の十五～十六世紀の魔法の鏡と共通点がありました。

すなわち

降霊が、暗い部屋のなかで光線によって行われ、水の入った器に明るい凸面を通して光線を投射することによって、子供の眼には呪いをかけたい者達が見える。

というものです。

水の反射装置を導入することで、滑らかな面のかすかな窪みが裏面の諸形象を再生する鏡のトリック、すなわち視覚では捉えられないが、窪みのよって映像が遠くまで送られるこのシステム、それが表面のごく僅かな変化によって裏面に作られた像や記号を投影した日本の魔法の鏡と比べられていたのです。

日本に近代ガラスの製法が伝わったのは1570年ですが、このことは、鎖国時代といわれた江戸時代の日本で、ヨーロッパ各国との交流が活発に行われていたことを物語っています。

フェラーラのユダヤ人、ラファエル・ミラーミは1582年『鏡の科学』で、エニャーティオ・ダンティが1573年述べた、魔女のペテンを見破るエウクレイデスの鏡を紹介し、偶像崇拝が栄え、あらゆる種類の魔術が存在したその中で、鏡とその像を基本とする鏡占いが行われた過去には、迷妄があったと述べていますが、それは未知なるものを認識しようという人間の不安に端を発する、反射物体の超自然的な働きへの、古くからの庶民信仰があったからでした。

参考文献

ユルギス・バルトルシャイティス著、谷川渥訳『バルトルシャイティス著作集』4「鏡」、国書刊行会、一九九四年。

図1、マクベスの前に現れたバンクォーの子孫たち（シェイクスピア、1606年）J・Hフュースリ、1773年、チューリッヒ。

図2、盃のなかに読む神託、ヴルキの壺、
紀元前五世紀後半、ベルリン美術館。

図3、地獄の鏡、ゼレン・ウルクスガルト、ウルム、1483年。

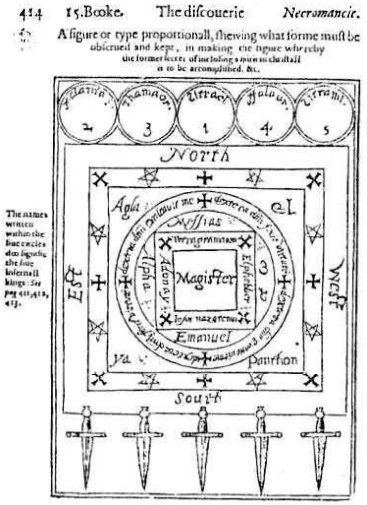


図4、悪魔を水晶のなかに閉じ込める為の儀礼書、
レジナルド・スコット、1584年。

追伸 ―サウダージ― より その三

松下壽男

あなたの立場

二つの文化のはざまにも
あなたの立場はきちんと在って
異国と接する水際に
いとも軽やかに立っていた

私には立場も泳ぐ力もありゃしない
交流の波間で揉まれるままに
まばゆいあなたに助けを求めた
頼れるものはあなただけ

あなたの机に積まれた辞書は頑丈な防波堤
私の机にさりげなく置かれる資料は
海原に投げかけられるブイのよう

でも、あなたが頑なにこだわりだした立場とは
人生の荒波から自分一人を守るための
ちっぽけな砦だったのかもしれません

日本近代文学点描 その四

松下壽男

農民文学「土」の登場

♡櫟や楢や其他の雑木は蛙が鳴けば鳴く程

さうしてそれが鳴き止む季節までは幾らでも繁茂することを繼續しようとする。其處には毛蟲や其の他の淺猿しい損害が或は有るにしても、しと〳〵と屋根を打つ雨が蒼さを移したかと思ふやうに力強い緑が地上を掩うて爽かな涼しい陰を作るのである。

鬼怒川の西岸一部の地にも恁うして春は來り且推移した。憂ひあるものも無いものも等しく耒耜を執って各其の處に就いた。勘次も其の一人である。

この文章の前の蛙の描写は、名文として国定教科書に掲載され、日本全国の生徒によって口々に口誦されていたそうです。

「冬季の間は土と平行することを好んで居た人も鐵の針が磁石に吸はれる如く土に直立して各自に手に農具を執る。紺の股引を藁で括って皆田を耕し始める。水が欲しいと人が思ふ時蛙は一齊に裂けるかと思ふ程喉の袋を膨張させて身を撼がしながら殊更に鳴き立てる。白い絲絲のやうな雨は水が田に滿つるまでは注いで又注ぐ。鳴くべき時に鳴く爲にのみ生まれて來た蛙は苅株を引つ返し〳〵働いて居る人々の周圍から足下から逼つて敏捷に其手を動かせ〳〵と促して止まぬ」

「土」は、富国強兵を農民が支えていた農業国日本の近代が心の底で待ちわびていた、文学―すなわち文化の自覚―だったのかもしれません。

長塚節は、茨城県の片田舎の豪農の長男に生まれ、正岡子規の門人となり、万葉調の写生歌人として世に出た

後に、明治四三年に東京朝日新聞に長編小説「土」を連載します。

新聞社に節の連載を推薦したのは、夏目漱石でした。子規との友情を思い起こせば、漱石の推挙も頷けますが、節と漱石とは、書き振りに相容れないものがあります。そのことは、明治四五年に出版された土の単行本の序文に、漱石が率直にこう書いています。

「長塚君は余の「朝日」に書いた「滿韓ところ〴〵」といふものをSの所で一回讀んで、漱石といふ男は人を馬鹿にして居るといつて大いに憤慨したさうである。漱石に限らず一體「朝日」新聞の記者の書き振りは皆人を馬鹿にして居ると云つて罵つたさうである」

水戸中学校中退の三〇才の節が、東京帝国大学の教師を務めた四二才の大文学者漱石に対して、今で言うマスコミ批判をしたのです。

「成程真面目に老成した、殆んど嚴肅といふ文字を以て形容して然るべき「土」を書いた、長塚君としては尤もの事である。……長塚君はたまたま「滿韓ところ〴〵」の一回を見て余の浮薄を憤ったのだらうが、同じ余の手になった外のものに偶然眼を觸れたら、或は反對の感を起すかも知れない」

この漱石の回答には、新聞記者としてではない、一作家夏目漱石の真面目さが込められており、しかも驚くべきことに漱石は、「土」の側から自分自身の創作活動を振り返っているのです。

思えば、当時、文明開化の進んだ東京を住みにくいと感じる個人の行き場の無さを、則天去私の悟りで乗り越えようとしていた漱石は、文学よりも、文明よりもさらに広く深く、文化の深層へと思索を深めていたことでしょう。そこで出会った「土」なのでした。

「「土」の中に出て來る人物は、最も貧しい百姓である。教育もなければ品格もなければ、たゞ土の上に生み付けられて、土と共に成長した蛆同様に憐れな百姓の生活である。… 彼等の下卑で、淺薄で、迷信が強くて、無邪気で、狡猾で、無欲で、強欲で、殆ど余等（今の文壇の作家を悉く含む）の想像にさへ上りがたい所を、ありく〳〵と眼に映るやうに描寫したのが「土」である。さうして「土」は、長塚君以外に何人も手を著けられ得ない、苦しい百姓生活の、最も獸類に接近した部分を、精細に直敍したものであるから、誰も及ばないと云ふのである」

「一から十迄誠實に」描いたからとはいえ、「帝都を去る程遠からぬ田舎」すなわち日本のありふれた農村を舞台にした「土」が当時の文壇作家に与えた衝撃は、単なるルポルタージュによるものだったとは思われません。むしろそれはカルチャーショックに似た出来事だったと言えるのではないでしょうか。

「苦しい百姓生活の、最も獸類に接近した部分を、精細に直敍した」その作品全体を通して読者が足を踏み入

れる領域は、自然の推移と時々の慣習に則るなかで、私というものが絶えず置き去りにされていながらもいつのまにか取り込まれていく、土のように多様で豊饒で揺るぎない農耕文化そのものでしょう。

漱石は、同じ序文で、「我々は『土』などを讀む義務はない」と言ったある文士を憤っていますが、その憤りの底には日本の文化の自覚のために「土」を読めという思いがあったからでしょう。さらには、自身の文学の理想とする則天去私の一つの姿を、その作品に見出したからではないでしょうか。

さて、「土」は、「日本の農民文学の最もすぐれた長編小説」（小田切進）として近代文学史の頂点の一つとして考えられながら、文学思潮のなかの位置づけが難しい作品だそうです。その書き振りは自然主義の平面描写のようですが、冷徹な客観視ではなく、蛙を擬人化して農夫と対峙させもするのです。蛙をも構成員とするような土の文化。その描写は文化の内側から白文化を描写する、自覚作業ともいえるような執拗な眼差しによっているのです。

私は、「土」を、教養小説の一つと考えます。教養小説とは、ある辞書では、「主人公のさまざまな体験による自己形成の過程を描いた小説。ドイツ文学の伝統の一。ゲーテの『ウィルヘルム＝マイスター』など。発展小説。ドイツ語の Bildungsroman」とあります。そして、日本の代表的な教養小説として、漱石の「三四郎」と鷗外の「青年」が上げられています。私は、Bildungsroman を訳すのに、文明開化の時代には「教養小説」は適訳だったと思いますが、「生成小説」と訳すことも可能だっただろうと考えています。

「三四郎」の作者が「教育もなければ品格も……」とおよそ教養とは正反対の価値付けをする生き方を描いた「土」を、私が敢えて教養小説と考えるのは、母親の見様見まねでままごとをしていた、幼女「おつぎ」が、母親の死後、幼い弟や、盗癖のある父親、孤独な祖父を支えながら、村のしきたりに従って小作の娘として瑞々しく成長していく姿を柱として描いているからです。それは、当時の文壇の作家には想像すらできなかった、日本の基層文化における教養小説ではないでしょうか。

「余の娘が年頃になって、音樂會がどうだの、帝國座がどうだのと云ひ募る時分になったら、余は、是非此「土」を讀ましたいと思っている。‥何も考へずに暖かく成長した若い女（男でも同じである）の起す菩提心や宗教心は、皆此暗い影の奥から射して來るのだと余は固く信じて居るからである」

この序文の漱石の言葉から、彼もまた「土」を、もう一つの教養小説としてとらえていたのだと、私は確信します。しかも宗教心につながるような自己形成とは、音楽会や劇場でできるような浅薄なものではなく、暗い影

の奥を見つめることから始まるものだと語っているのではないでしょうか。

その暗い影の奥とは、階級的貧困でしょうか、それとも日本の文化の基層でしょうか。私は、少なくとも作者長塚節の眼差しは、後者に注がれていたのだと考えているのです。

私は、「土」は、神話の要素を持っているのではないかとも感じています。それは、この文章を書くために文学史年表を眺めながら、長塚節と宮沢賢治の奇妙な対応に気付いたことからの着想です。

明治末の節も大正末の賢治も文学史上の孤高の頂です。二人は、質屋も営む家庭の長男として生まれ、詩歌を詠み物語を作りました。裕福でありながら農業人としても生き、共に三十路半ば過ぎで病死しています。

このようによく似た二人ならば、長塚節も、宮沢賢治の文学世界のように、一つの宇宙を描いてはいないでしょうか。

「烈しい西風が目に見えぬ大きな塊をごうつと打ちつけて皆痩こけた落葉木の林を一日苛め通した。木の枝は時々ひう〳〵と悲痛の響きを立てゝ泣いた。短い冬の日はもう落ちかけて黄色な光を放射しつゝ目叩いた。さうして西風はどうかするとばつたり止んで終つたかと思ふ程靜かになつた。泥を拗切つて投げたやうな雲が不規則に林の上に凝然とひつついて居て空はまだ騒しいことを示して居る。それで時々は思ひ出したやうに木の枝がざわ〳〵と鳴る。世間が俄に心ぼそくなつた」

「土」は、おつぎの母親の品（しな）が、こっそりと堕胎をして行商を続け、その帰りの、激しい西風がごうっと打ちつける夕べに、胎児を埋めた雑木の下に立ち寄る描写から始まっています。

その品は、堕胎の傷が元で破傷風になり、悶え苦しみながら死んでいくのです。彼女も、生前は、優しく美しい、働き者の女性であり、おつぎは、その性質をそのまま受け継いでいくのです。

「父母の根源は天地の令命にあり」とは、当時の北関東ではよく知られていた報徳訓の冒頭です。堕胎は、明らかに天令に反する行いです。したがって、品の苦痛と死は、当然の報いです。そう考えると、写生と思われる自然描写さえも、その報いの前兆のように感じられてくるのです。

土とは、農民の貧しい糧を生み出す土壌であると同時に、神々や怨霊が息づく領域に広がる「つち」なのです。当然土は、神話に語られる黄泉の国へも通じているのです。

明治文学の「土」は、読む者を暗い影の奥の万葉集や古事記の世界の闇へと引きずり込んで行くのです。それはまさしく「文化力」と言えるでしょう。

編集後記

さまざまな結びつき

文系から見ると、理系とは、実在するものを演算の記号で結びつけた数式に還元して、その良い所だけを根元とした数値だけを取り上げて是非を判断している、真相を見極めようとせず、表面だけで判断を下す、浅薄な学問と考えているのに対し、理系の方から文系を考えると、文系には詳しく細かく突っ込むという理念がなく、あまりにも普遍性のない考え方に固執し、同じ状態を再現することの出来ない、とても学問とは言えない代物だといえるのでしょう。

ところで1964年にゲル＝マン博士が発見した、ハドロンの構成要素である「クォーク」の名前の由来をご存知ですか？三層から成る、その素粒子は、ジェイムズ・ジョイスの実験小説『フィネガンズ・ウェイク』の船出の場面で、鳥が三度鳴いた時の鳴き声である「クォーク」から来たものなのです。このように超一流の理系学者は超一流の文系学者であり、双方の調和の取れた人物のみが大事を成し遂げる事ができると考えています。

話は変りますが、触媒という魔法の薬を使って炭素同士の結合を可能にし、新素材を創り出して、ノーベル化学賞を受章された根岸さんは、「ノーベル章を受ける確率は、過去の受賞者と人口から計算して、一千万分の一。途方もないようでも、十人中一位を七回繰り返せば到達する数字」と報徳仕法の積小為大を説き、一方鈴木さんは「偶然の発見は誰にでも平等に巡ってくる。でも、それをチャンスに出来るかどうかは、ひらめきだけでなく日頃の努力がものを言うと思います」と結び、これも二宮尊徳の報徳一日一訓・10「毎日よく勤めよ。これ我が身に徳を積むなり」がぴったり符合します。多種多様な和合の実現があって、将来を切り開きます。

（T・N）

まんじ第119号

平成23年2月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　中　山　喬　央（なかやま　たかひろ）
事務局長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）

（事務局）〒223-0056　横浜市港北区新吉田東五丁目76-35　太田善朗方
TEL・FAX 045（544）5947
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　日東印刷株式会社
〒142-0054　東京都品川区西中延2-15-16

表紙の絵について
「豊饒の地は心の中にあり」　　田寺（たでら）怜葦（れい）画

まんじ

No.120

2011.5.1

まんじ第百二十号　目次

義士と忠僕……千坂精一…4
桐の花影―吉良側の忠臣蔵余話―『桂川籠花入』……忠内正之…19
老而不死（おいてもしせず）……森下征二…28
鳳鴻の志―北条早雲―……島津隆子…38
花心……月岡兎平…50
北朝鮮の金王朝と李氏朝鮮……新井宏…67
回想のベルリン―ドイツ再統一後の再訪―……山本鎭雄…77
出版社再生……宅見勝弘…87
魔鏡……鍋屋次郎…101
歌人「齋藤史」私論……曽根竣作…116
韓国花冠文化勲章に輝く歌人　孫戸妍を偲ぶ……勝山道子…124
はるかなる祖国―海外日系人の短歌―……石黒修身…129
短歌……金澤智佐美…141
日本の歌―童謡と唱歌―……伊治哲…143
聖徳銀行秘書室―名曲に潜む「秘められた詩情」―……鯨游海…156
バター・フィンガーズ……亜木陽一…172
口紅（その二）……山本勉…173
陰翳の美学（物象の二面性）……外山知…184
有朋の詩……太田精一…193
県民健康福祉村……吉田忠雄…208
化粧品の安全性……鈴木守…215
房総東往還道を歩く……山田嘉久…231
ノンキャリで首が長持ちする方法　スタート編……中山喬央…242
文化勲章に輝く赤堀四郎博士の練成期……松下魏三…255
負薪読書像のルーツの研究……堀内永人…271
固有の善……松下壽男…282
徳川慶喜の実像……三戸岡道夫…301
編集後記……編集子…316
表紙……田寺怜葦…316

義士と忠僕

千坂精一

一

年があらたまって正月気分も抜けた二月なかばのある日、使いに出た呉服屋の丁稚が急ぎ帰ってきて、

「火事だ」

と告げたことから大騒ぎになった。

当時の消火は火元周辺の家を毀して類焼を防ぐといった消極法であったから、全財産が灰になってしまう火事がもっとも恐れられていた。

それだけに火事に敏感な住民たちは、

「火事」

ときいて一斉に家を飛び出し、不安の眼で周辺を見回しおろおろしていたが、いちはやく火の見櫓に上った鳶の若い衆がおりてきて、

「火元は遠いし、風向きがこっちじゃねえから大丈夫だ」

そう太鼓判を押したので、みんなは吻と胸を撫でおろした。

このときの大火は四谷の大宗寺が火元で、おりからの北風に煽られた紅蓮の炎は青山、麻布から遠く品川までその舌先きを伸ばして焼き尽くした。

火事騒ぎがおさまったここ鉄砲洲は、火元の遙か東方隅田川の東岸に位置しているので風向きからも延焼の心配はなかったのである。

余計なことだが、鉄砲洲というのは寛永のころ幕臣井上・稲富両家の鉄砲方が大筒（大砲）の試射をしたことからそう名づけられた俗称で、正式町名は本湊町、船松町、十軒町、明石町あたり（現在の湊、明石町）なのだが誰もそうは言わず、鉄砲洲の名で馴染んでいるのだった。

隅田川を挟んで佃島、石川島と相対する位置にあって、印刷工場が目立つところである。

現在の地名は中央区湊一丁目付近であるが、稲荷神社と公園に鉄砲洲の名が残っている。

翌日、昨日の火事が大火になったことを知った元助は、そのとき、

（早々に縁起でもない。今年もなにか災難がふりかかる前兆か）

そう思って嫌な予感がした。

元助は、尾張浪人吉田勝兵衛に雇われてこの鉄砲洲に住んでいた。

主人の吉田勝兵衛というのは世を忍ぶ仮りの名で、実は播磨赤穂浪人片岡源五右衛門高房なのである。

三万五千石浅野内匠頭長矩に仕えて、内証用人兼児小姓頭をつとめていた。

生来の美少年で内匠頭の寵を受け、三百五十石どりの江戸詰であった。

いっぽうの元助は、上野碓氷郡秋間村下秋間字館の百姓三右衛門の長男に生まれた。

三右衛門は田畑を持たぬ貧しい小作人で、畑作のかたわら日雇いに出たりしてどうやら生計を立てていた。

母はひ弱な人で一粒種の元助をこよなく可愛がってくれていたのだが、元助がようやく少年に育ったころに長年の無理が祟って病死してしまった。

名主の援助があって質素ながらも弔いを終えたあとも、三右衛門は元助に家事を手伝わせながら農作業に打ち込んだ。

だが、まだ子供の元助の家事手伝いは、当然ながら満足というわけにはいかず、また、病弱で半人前だったとはいえ女房の手伝いがまったくなくなってしまった鍛奇せは三右衛門の肩に重く伸し掛かってきた。

その様子を見兼ねた名主が、三右衛門に後妻を世話してくれた。

この後妻という女の出現は、元助にとって生母でもなく親類縁者でもないおかしな存在だったので途惑ったが、三右衛門には家事と農作業の労働力を得たことで恩恵があった。

だから、三右衛門はこの後妻を労わって大事にあつかった。

そうされることにすっかり慣れてくると、後妻はだんだん自己主張が強くなり、我が儘になっていってとうとう温和な夫の三右衛門を軽んじて尻に敷くようになっていった。

こうなると後妻は、気に入らないことがあると傍若無人に振る舞って元助に当たり散らした。

元助に非がなくても言い掛かりをつけて責める苛めが多くなっていった。

父の三右衛門に訴えても無駄で、いつも宥められるだけであった。

元助は、後妻に口答えすると、当たり散らされる父が

可哀相で、耐えに耐えた。
そんな後妻の継子苛めが、いつか村中で評判になっていった。
やがて噂が名主の耳に入り、父の三右衛門が呼ばれて再三注意されたようだが、後妻を抑えることができず、ますます増長させるばかりであった。
そんなある日、元助は父の三右衛門から、
「名主さまが用事があるからおまえを寄越すように言っておられたから、なんのお申しつけかうかがってこい」
突然そう言われた。
(名主さんが直々おれに用事って何のことだろう)
不審に思いながら元助が恐る恐る名主の家へ行くと、名主は、
「まあ上がれ」
そうやさしく言って、土間ではなく居間のほうへ連れていかれた。
畳の部屋に坐らされた元助は、なんとも落ち着かなかった。
名主は、元助にやさしく語りかけて、子供の元助ではわからない元助の家の内情をいろいろと話してくれたあとで、
「おまえのためにならぬから、おまえはあの家を出たほうがいい」
突然そう言われた。

元助は、考えてもみなかったことなので、唖然として名主の顔を見上げた。
名主は、
「わしの代参ということにして、おまえをお伊勢まいりに行かせることにする」
そう切り出しておいて、
「路銀と食い扶持と、道中手形をあげるから、伊勢まいりの代参ということにしてここを出なさい」
元助は、なにがなんだか頭のなかが混乱してしまった。
「そういうことにして旅立っておいて、あとはどうしようとおまえの勝手にするがいい」
「どこへでも行ってよいとおっしゃいますか」
「そうだ。つまりはやい話が親許を離れてどこででもいいから生きていきなさいということだ」
名主さんが継母との地獄の生活から救ってくれるということだったのだ。
父の三右衛門も涙を流してよろこんでいたという。
元助は、名主をはじめ村中の人たちから同情されていたのだった。
元助は、眼のまえの名主が救いの神のように見えて、現在の地獄から救出してもらえてあたらしい世界がひらけることに、暗い窟の中から一筋の光明を見た思いであった。
さっそく脱出が実行されることになり、元助はその場

で名主の家にあった古着に着替え、銭と関所手形をいただくとその夜は名主宅の納屋ですごし、明朝早立ちすることにきまった。
その夜、父の三右衛門がやってきて、己れの不甲斐なさを詫びて別れを惜しんでくれた。
翌朝、まだ暗いうちに名主宅を出た元助は、秋間川を渡って安中三万石板倉重同の城下町を目指しながら、
(さて、どこへ行こうか)
迷いながら歩いた。
(お伊勢まいりは遠いようだし、富士山も見てみたいが――)
あれこれ思案したすえに、
(そうだ、将軍さまのいる江戸にしようか)
江戸なら中山道を南へ南へと行けばいいときいたことがある。
元助は、将軍さまのお膝元の江戸を見てみたい衝動に駆られた。
中山道は上野に七宿ある。
江戸へ向かっては、坂本、松井田、安中、板鼻、高崎、倉賀野、新町である。
余談だが、江戸から京へ行くには東海道とこの中山道の二道があるが、季節によって通行量が極端にちがっていた。
東海道は夏暑く河川が増水して川止めになることがあるが、冬は暖かく川の水も減って通行止めになることがない。
いっぽう中山道のほうは、夏涼しく川の上流地帯なので増水による川止めもないが、冬は寒く降雪も多い。
つまり、東海道は冬型幹線道であり、中山道は夏型幹線道ということで、両道を使い分けて活用されているのだ。
だから中山道は、農繁期に通行量が増加するので農民は伝馬に駆り出されて農作業に支障をきたし、迷惑しているのだった。
元助が秋間を脱出して江戸へ向かったのは農繁期がすぎたあとなので、道中はすいていた。
なにしろ、はじめて秋間から広い世間へ出てきたので、景色も宿場町も見るものすべて物珍しく、足を止めては眺めていたので、なかなかさきへすすまなかった。
それでもなんにちかかったかはわからないが、とにかく大きな川を渡って板橋宿というところにたどり着いた。ここからが江戸であった。
とにかく宿に入って旅の疲れを癒した。
翌日は、宿できいた浅草というところへいってみた。
その賑やかなことに驚嘆した。流石は江戸だと感じ入った。
面白さについ浮かれて遊び歩いているうちに、いつか名主が持たせてくれた銭を使い果たしてしまった。

これからはどこか住み込みで奉公しなければ生きていけなくなった。

元助は、口入れ屋を回って奉公先を探し歩いたが、徳川の天下になって平和の世が百年つづき、そのあいだ右肩上がりの好景気で、仕事と消費を賄う人と物がどっと流入してきて人は贅を尽くして浮かれ、物は巷に溢れてどちらも過剰になって行き詰まり、景気が萎みはじめ出したので、どこの商店も投げ売りと人減らしがはじまっていて、元助の探す奉公先は容易にみつからなかった。

一文無しになってしまった元助は、橋の下や寺の回廊や縁の下に潜り込んで雨露を凌いだが、食事は無一文ではどうにもならず、空腹を抱えて二進も三進もいかなくなった。

元助はやむなく旅の恥は掻き捨てとばかりに、人の情を当てにして浅草の路地に坐っての物乞いをはじめた。

景気が翳りはじめたといってもまだ大不況に落ち込んだわけではないので、奇特な人たちが銭を投げ入れてくれた。

おかげで元助は、どうやら細々ながらも飢えを凌ぐことができた。

物乞いは三日やったらやめられないというが、元助は座したままで稼げる横着な生きざまにいつしか慣れっこになっていった。

しかし、人はどんな立場にあっても欲心は際限がないもので、あるとき、ふと稼ぎのいい場所があることを耳にして心が動いた。

ところが、好事魔多しで、稼ぎ場所を変えたその日に、縄張り荒らしと極めつけられて付近の乞食たちに殴る蹴るの暴行を受けてしまった。

頭を抱え躰を丸くして必死に防ぎながら暴力に耐えているうちに、いつか気が遠くなりかけてきた。死ぬかと思った。

そのとき、どこからか叱声がきこえたかと思うと、それまでの殴打がぴたりとやんでいっせいに走り去る足音がした。

「大丈夫か」

そう声をかけられて、元助は痛む躰を起こして声の主をみた。

眼のまえに美形の侍が立っていた。

元助は、促されて侍のあとについていった。

歩きながら元助は、侍が市中取り締まりの役人で番所へ連れていかれるのかと思った。

牢に入れられても雨露は凌げるし、粥ぐらいは出るだろうから、いまとさして変わりはなかった。

そんなことを漠然と考えているうちに、いつか裏通りを歩いていった侍は小体な店のまえで立ち止まると暖簾を分けて入っていった。

侍は、その店で元助に鰻腹飯を食べさせてくれた。

湯気の立つ白い飯は、庄屋からもらった銭で食べて以来久しぶりであった。

夢中で食べながら、元助は感極まって涙が込み上げてきた。

満腹になって落ち着いたところで元助は、侍から問われるままにぽつぽつと身の上話をはじめた。

すっかり事情を聴いた侍は、元助に同情したらしくしばらく腕を組んで瞑目していたが、やがて意を決したかのように眼をあけて腕組みを解くと、

「よく話してくれた。子供の頃から苦労のし通しだったんだな。だがな、この江戸は生き馬の目を抜くといってとてもおまえのような世間知らずには生きていけないところだ。そこでどうじゃ、突然だがわしのところで働いてくれんか」

元助は耳を疑った。集団暴行から救ってくれたうえに食事まで振る舞われ、さらには口入れ屋を通さずに直接傭ってくださるという。

元助は、地獄で仏にめぐりあった思いで唖然となり、すぐには言葉が出なかった。

「いきなりのうまい話で信じられないか」

元助は、とんでもないと言わんばかりに首を振った。

「そうか。まだわしの身分を明かしておらなかったな。どこの誰とも判らぬ者のところでいきなり奉公してくれといわれても返事ができんのう」

そういって、侍は自己紹介してくれた。

それによると、元助を救ってくれたその恩人は、

「播磨赤穂三万五千石淺野内匠頭長矩の家中で、江戸詰め三百五十石取りの片岡源五右衛門高房」

と名告った。

元助の故郷上野碓氷郡秋間村の領主は、上野安中三万石の板倉重同であるから、片岡の仕える播磨赤穂とだいたいおなじ規模であった。

われにかえった元助は、片岡の親切に甘えることにして、その場で下僕として奉公させてもらうことを承諾した。

片岡に勧められたから承諾するかたちになったが、内心では願ってもない住み込みの奉公話に平伏して縋りつきたい思いであった。

片岡は主君の参覲に供奉して江戸へきているのではなく、江戸詰の側用人だったので単身赴任であり、妻と男子二人、女子二人の家族は赤穂にいるという。

元助がきくともなく聴かされた話によると、片岡は尾張徳川家の臣熊井重次郎重忠の妾腹の子で、幼名を新六といったという。

八歳のとき、伯父の赤穂淺野家臣片岡六右衛門の養子になったことから伯父の跡目を継いで百石取り江戸詰の近習になった。

その後、主君内匠頭の気に入られて百石ずつ二度も加

増されて側用人にまで取り立てられたのだが、一代限りの家臣で江戸詰の近習上がりだったために、国許の家臣たちとは折り合いがつかずに疎んじられているのだと愚痴を零していた。

元助は、武家と農家とはまったく違うが、それでも養子に出されて養母に気遣ってきた源五右衛門と、生母に死なれて継母の顔色を窺ってきた自分とは、寂しい少年時代をおくったことについては共通しているから相通ずるものがあるだろうと、源五右衛門に親近感をいだいた。

それはさておき、元助は希望のない暗鬱状態から救い出してくれた源五右衛門を人生の恩人と崇めて、のんびり気の休まる私宅づくりに専念し、日常生活になに不自由なきよう細心の注意をはらって粉骨砕身努力した。

元助が新しい仕事に慣れて行き、歳月の経過とともに源五右衛門が満足そうに振る舞ってきてくれていることが、なによりの張り合いであった。

二

昨年は、春早々に淺野内匠頭長矩が勅使柳原前権大納言資廉と高野前権中納言保春の〈御馳走人〉を命ぜられて出府したので、江戸詰の家臣たちは大童わになった。

ついでながら、このとき院使清閑寺前権大納言熙定の〈御馳走人〉は伊豫吉田三万石の伊達左京亮村豊であった。

三月十一日、勅使・院使は龍ノ口の伝奏屋敷に到着した。

この勅使・院使下向は、将軍家の使者が年始御祝儀に上洛した答礼である。

御馳走人の淺野内匠頭と伊達左京亮両名がこれを迎えた。

淺野家の鉄砲洲上屋敷は現在の聖路加国際病院（中央区明石町）にあって、幕府迎賓館の龍ノ口伝奏屋敷は現在の新丸の内ビルと道路を挟んだ向かいの日本工業倶楽部（千代田区丸の内）にあったからさして遠い距離ではないが、御馳走人は役目が終わるまで伝奏屋敷に宿泊していなければならないので、淺野内匠頭は側用人片岡源五右衛門と磯貝十郎左衛門を供に連れて伝奏屋敷に移り、勅使を玄関口まで出迎えた。

翌十二日、勅使・院使綱吉将軍に御対面。

十三日、勅使・院使を能楽などで饗応。

そして十四日、将軍より主上へ奉答があって勅使・院使が帰洛する当日、淺野内匠頭の殿中松の廊下での刃傷事件が起こった。

大手の供侍詰所にひかえていた片岡源五右衛門は、目付から内匠頭刃傷の報らせを受けると、鉄砲洲の上屋敷へ走って事件を報らせた。

江戸家老藤井又左衛門と安井彦右衛門はおどろいてただちに事態収拾にあたった。

元助も下僕仲間から異変をきいて吃驚仰天した。まさに晴天の霹靂であった。

どう対応していいかわからず、右往左往するだけであったが、結局源五右衛門が帰宅しての指示を待つより仕方ないという思いに落ち着いた。

勅使御馳走人は急拠下総佐倉五万七千石戸田能登守忠眞に代わり、淺野内匠頭は即刻陸奥一関三万石田村右京大夫建顯預けとなり、迎えの駕籠に乗せられ青網をかぶせられて愛宕下大名小路（港区新橋四丁目）の上屋敷に護送された。

鉄砲洲の上屋敷に戻った源五右衛門は、元助に、

「心配いたすな。留守を頼む」

急き込んでそれだけ言うと、また慌ただしく出掛けていった。

元助は、こんな大変事になにごとが起こるかわからないから、しっかり留守宅をまもろうと覚悟した。

源五右衛門は、江戸城へもどったところで主君が田村邸へ移されたことを知ると、愛宕下へ駆けつけた。

田村家では、

「当分預ける」

下知だったので、夜具一式や生活用品を調えたという。

それが、追っつけ、

「即日切腹」

の通告が届いたので大騒ぎになった。

内匠頭は弟大學長廣、広島の淺野本家、室阿久利の実家三次淺野家に累が及ぶことを気にしていた。

そして、内匠頭は、

「家中の者に手紙を遣わしたい」

旨を申し出たが、

「公儀より固く禁じられている」

ことを理由に断わられてしまった。

なんとしてもこのたびの趣意を家臣に伝えたい思いの内匠頭は、

「ならば、片岡源五右衛門と磯貝十郎左衛門の両名をお呼び出しいただき、口上をもって申し伝えたいが、これではいかが」

なんとしてもと意気込む内匠頭の熱意に絆された田村家では、口上を書き取って片岡なり磯貝なりに手渡す方法でその場は承知しておいて、幕府目付が諒承すればという条件をつけた。

書き遺しておいてもらえれば一縷の希みが持てると判断した内匠頭は承諾した。

さっそく硯と筆と巻紙が用意され、書き役が選ばれて筆を執ると、内匠頭に一礼した。

その口上はよく知られている内容であるが、あらためて要点を記すと、

○此の段、予て知らせ申すべく候得共、今日止むを得ざる事に候故、知らせ申さず候。このこと不審に存

ずべく候。
○決して一時の腹立ちにてはこれなく、武士として忍び難きを忍び候得共、堪忍なし難きに及び、一刀に斬らんとして果たさず、内匠頭末期の無念の心底ここに一筆書き遺し置き申すべく候。

そう述べて、最後に

片岡源五右衛門
磯貝十郎左衛門へ

内匠頭長矩

と結んだ。

つまり、内匠頭は片岡、磯貝の二人だけに遺言を託したということになる。

七ツ（午後四時）すぎに幕府の検使三人が田村邸に到着した。

正使庄田下總守、副使大久保權左衛門、多門傳八郎である。

庄田は、田村家が準備した上書院の仕置場を見て、

「厳罰者を上書院で仕置させるとはなにごとじゃ。庭上でさせい」

そう怒鳴って変えさせた。

播磨赤穂三万五千石浅野内匠頭長矩の処刑切腹の刻限が近づいてきた。

そのとき、片岡源五右衛門が田村邸へ駆けつけてきて、内匠頭への目通りを願い出た。

田村家では一存で取り計らえずに拒絶したので、源五右衛門は、

「ご承引あるまで御容赦を」

そう言うや否や玄関先の砂利の上に坐り込み、涙を流した。

田村家の家臣は片岡の主君を想う一途な態度に同情して、副使多門傳八郎に取り次いだ。

多門が許可しようとするのを正使の庄田が留めた。

「その赤穂侍が主君の切腹姿を見て逆上いたし、奪還せんと仕置場へ乱入いたさばなんとなさる」

「片岡なる侍を無刀にいたし、周囲を田村の家臣どもで囲みますれば動けませぬ」

そうまでいわれては、庄田も許さぬわけにはいかなくなった。

こうして、多門傳八郎の特別の計らいで片岡は、主君内匠頭が仕置場へ向かう渡殿のまえの庭で別離の目礼を送ることを許された。

ここのところは、克明に描写すれば感動で胸が詰まって涙する場面なのだが、残念ながら紙幅の都合でさきを急がなければならない。

その夜源五右衛門は、自分とおなじ三十五歳で無念の死を遂げた主君内匠頭の遺骸引き取りを命ぜられた。

磯貝、田中貞四郎、中村清右衛門、糟谷勘左衛門、建部喜六の六人である。

片岡らは田村邸へ罷り越して内匠頭の遺骸を受け取ると、不浄駕籠に乗せて芝高輪にある浅野家の菩提寺曹洞宗泉岳寺に届けた。

泉岳寺では、その夜おそくから翌朝にかけて埋葬が行われた。

その新しい墓前で、片岡、磯貝、中村、田中の四人はそろって髻を切り殉死の形式をとると、あらためて復仇を誓い合った。

四人が鉄砲洲へ戻ると、屋敷内は大騒ぎの最中であった。

幕府から三日以内に上屋敷を明け渡すよう通告してきたのだという。

源五右衛門は、私宅のほうの片付けは元助にまかせておいて、公邸のほうの身辺整理にとりかかった。

源五右衛門は、自分は一代限りの臣でありしかも江戸詰の近習上がりなので国許の動静についてはまったく見当がつかなかった。

二

この十月に本所三ツ目林町の平野十左衛門裏店から鉄砲洲北端の南八丁堀湊町へ移って半月経ち、今日もまた朝食後に出掛けていった主人片岡源五右衛門、いやいまは尾張浪人吉田勝兵衛だった人を送り出して、食事の後片付と洗濯を終えてひとやすみしようと日溜まりの濡れ縁に腰を下ろした元助は、つらつら来し方行く末に思いを馳せていた。

いのちの恩人片岡源五右衛門に仕えて長年平穏な歳月をおくってきたのに、ここへきてなんでこんな災禍が降りかかってきたのだろう。

去年三月勅使・院使下向のおりに、主人片岡源五右衛門の主君浅野内匠頭長矩が遺恨晴らしに江戸城内松の廊下において高家筆頭吉良上野介に刃傷におよび、即日切腹、お家断絶、領地没収、鉄砲洲上屋敷明け渡しとつづいてあっというまに家臣全員俸祿をうしない浪人になるという奈落へ突き落とされたが、今年は春早々の四谷大宗寺の失火が大火になってなにかまた身辺に凶事が起こる前兆かと構えて恐る恐る日を送ってきたが、夏・秋となにごともなくあとふた月で終わるところまで無事だったので、このままで除夜の鐘をききたいものと祈るような気持であった。

そんなある日、夜鍋で賃仕事をしていたところを源五右衛門によばれた。

すぐ居間に行くと、源五右衛門が神妙な顔をして坐っていた。

「折り入っての話がある。そこへ坐れ」

いつになく固い源五右衛門の表情に、元助はなにごとかと緊張した。

「元助、突然のことでさぞ愕くであろうが、長い浪々の

身にようやく運がひらけてきそうなのじゃ」
「それはよろしゅうございました」
「いったん親戚宅に移って仕官の仕度をすることになったので、長年世話に相成ったがこれにて暇をとらす」
「えっ」
元助は、耳を疑った。
「これはわしの形身じゃ。受取ってくれ」
源五右衛門は、着古しだが洗い張りして仕立直した羽織を元助のまえにおくと、
「それから、これは当座の凌ぎじゃ」
そういって袱紗に包んだ金子を添えた。
相談ではなく、一方的な解雇通告であった。
「お気に入らぬところはお叱りいただき、どうぞいつまでもお側において下さりませ」
「それがそうはまいらんのじゃ。居候の身が供づれとはまいらんじゃろう」
「ならば元助は、ご仕官の決まるまでどこぞで雨露を凌いでお待ちいたしまする」
「明日に迫っていることじゃ。いつまでも愚図愚図申すな」
「では、ふたたびお会いすることはかないませぬのですか」
「そうじゃ。会おうにも会うことはかなわぬのじゃ」
「そんな遠いところでございますか」
「遠方も遠方、途轍もなく遠いところじゃ」
元助は、源五右衛門に捨てられるのだと思った。
まだ二十三歳の若さで、持て余されるいわれはなかった。
元助は悲歎に暮れて、この大恩人が持て余して捨てるというなら、死ぬほかはないと思った。
「元助は、旦那さまに捨てられてしまってはもう生きる甲斐がありませんから、大川に飛び込んで死にまする」
「物騒なことを考えるではない」
「あのとき、浅草で旦那さまにおたすけいただかなかったならば野垂れ死にするところでした。生かしておいて下さった旦那さまに捨てられては死ぬよりほか仕方ありません。お形見もお情けの金子もあの世では活かすことができませんからご辞退申し上げます」
農民ながら天晴れ二君に仕えぬ覚悟の元助に感じ入った源五右衛門は、ことの次第を打ち明けて納得させるより仕方がなくなり、ついに元助に明晩同志と本所松坂町の吉良邸に討ち入って主君の仇を討つことを知らせた。
元助は、吃驚仰天して、
「元助もお供いたします」
急き込んでそう言ったが、許されるはずもなかった。
その夜、元助は一睡もできずに夜を明かした。
明くれば十二月十四日、曇天の空から雪が降り出した。
午後、その雪のなかを源五右衛門は出掛けて行った。

死出の旅への出立であった。
見送る元助の眼に留め処なく涙が溢れた。
大恩人片岡源五右衛門高房との今生の別れであった。
今夜おそく、そっと吉良邸へ様子を見に行こうという思いに馳られたが、仇討ちの邪魔になってはいけないと考え直して、夜が明けてから、芝高輪の泉岳寺へ駆け付けることにした。
朝から降りつづいていた雪は夕刻になって止み、夜は月が皓々と冴え渡った。
芝居やテレビ、映画では雪の降り頻るなかを討ち入っているが、あれは効果を上げるための演出で、上杉家に遺る古文書『忠臣蔵實祿・本所敵討』には、
「天気能月冴寒夜也」
と書かれているし、俳人寶井其角もその文中に、
「――十四日年忘れの一興御催有出席の折、（中略）庭中の松杉雪をいただき、雲間の月は晴間を照し、風興今は捨難くして――」
と記している。
つまり、赤穂浪士たちが吉良邸に討ち入ったころは、雪が止み、空が晴れて、月が輝いていたということだ。
夜明けを待って木戸が開くと同時に鉄砲洲の長屋を飛び出した元助が、高輪の泉岳寺に駆けつけたときには、すでに片岡たちは主君内匠頭の墓前に吉良上野介の首級を供えて無事に敵を討ったことを報告し、焼香をすませたあとで、香煙朦々としていて浪士たちの姿はなかった。
酬山長恩住持に導かれて本堂に入り、謹慎して幕府の沙汰を待っているという。
元助は物見高い群集に混じって源五右衛門の無事を見届けようと凝っと待ちつづけた。
夜になっても立ち去らぬ元助を見咎めた酬山和尚に、身分を明かして源五右衛門に会わせて欲しいと懇願したが、
「法を犯した叛逆人ゆえ面会させるわけにはゆかぬのじゃ」
そう優しく諭された。
酬山和尚に懇々といいきかされても元助はその場を去らず、ひたすら源五右衛門の無事のすがたを一目見ようと待ちつづけた。
その甲斐あって、大石ら全員が江戸見坂下の大目付仙石伯耆守久尚邸に出頭して行くときに会えた。
源五右衛門は元助を認めて愕ろいた様子であったが、微笑して近づき、
「無事本懐を遂げたぞ、元助達者で暮らせよ」
そういいおいて、篝火の明かりの届かぬ闇の中へ消えていった。
その夜のうちに浪士四十六人は四大名家へ分けられ、源五右衛門は大石内蔵助とともに肥後熊本五十四万石細川越中守綱利邸に預けられたときいた。

元助は、毎日淺野内匠頭の墓前に額ずいてひたすら浪士たちの滅刑を祈った。

その仏法に縋る熱意に絆された酬山和尚は、元助を寺男にしてくれて墓前での勤行を許し、朝夕只管打座しての坐禅修行を命じた。

元助は、仏道にのめり込んでいった。

だが、元助の祈願も虚しく、翌年二月四日全員切腹を命ぜられ、遺骸はその夜のうちに四家からそれぞれ泉岳寺へ運び込まれた。

酬山和尚は、集められた白棺のまえに立って読経を終えると、松明を手にとって、

「古徳剣刃上」

と静寂を破る大声で引導を渡した。

全員の諡に〈刃〉と〈剣〉の二字が入っているのは、この引導にもとづくものである。

因に片岡源五右衛門高房の諡は、

〈刃勘要剣信士〉

で、全員この共通した二字のあいだに異なる二文字が入っている。

このあと、僧侶や寺男を総動員して四つ（午後十時）すぎから八つ半（午前三時）すぎまで五時間かかって浪士全員の土葬を終えた。

七七日忌の法要、年が明けて一周忌の法要をすませたあとで、元助は酬山長恩師から曹洞宗僧侶に認定されて法名浅間西坊となり、故郷の上野碓氷郡秋間村へ帰った。

だが、江戸へ行っていた十数年のあいだに鬼の継母の許から逃がしてくれた名主も、その継母や父親もみな死歿してしまい、懐しの故郷もすっかり様変わりしてしまっていて知らぬ他国へきたようであった。

住居を提供してくれる人もなく、困ってしまった元助はやむなく東上秋間久保の観音堂に仮寓すると、道中でずっと考えつづけてきた源五右衛門らの冥福を祈りその壮挙を後世に伝えるための具体策に思いを馳せた。

そして、主君淺野内匠頭夫妻と四十七人の石像を彫ることを考えついた。

それにはまず安置場所を決めねばならなかった。

土地勘のある元助は、あまり山深くない里山のなかを選ぶことにした。

たまたま観音堂の背後にある岩戸山という里山のなかを歩いているとき、森林のなかの細い道を十分ほど歩いたところにそこだけ山肌が抉りとられたようになっている空間をみつけた。

ここなら抉りとられた上部が廂のようになっていて、石像を横一列に並べて安置しても雨露を凌げる恰好の霊地であった。

元助は、偶然ここに出会えたことは源五右衛門はじめ諸霊の引き合わせのように思えた。

元助は、さっそく行動を開始した。

六部になって赤穂浪士の石像をつくる趣旨を述べ、なにぶんの喜捨を請いに近隣諸国を勢力的にまわり歩いた。

赤穂浪士の霊を祀る石像ときいて積極的に喜捨する人が多く、資金は容易に集まった。

元助は観音堂に籠もり、昼夜を分かたず懸命に石像つくりに没頭した。

そんな元助の姿勢に打たれて、村人たちが石材を運んだり食事や暖をとる薪、行灯の蝋燭などを差し入れて協力してくれた。

二十五歳で秋間村へもどってから二十余年の歳月をかけて四十九体の石像が完成し、岩戸山の霊地に祀られた。

元助は安置した石像のまえに供養塔を建立して浪士たちの壮挙を讃え、冥福を祈った。

私が地元の友人に話を聴いて案内してもらったときは、登り口もわからぬ草深いところを分け入ってようやく石像群のまえに辿り着けたのだが、二年まえに訪ねたときには小径が整備されていて、容易に辿り着けた。

四十九体の石像は三百年の風雪に耐えて、いまもなお当時のままで祀られている。

むすび

岩戸山中の霊地に淺野内匠頭長矩夫妻とその家臣たち四十七人の石像を祀りおえた元助は、法名を向西坊とあらためて秋間村を出ると、片岡源五右衛門らの眠る江戸高輪の泉岳寺を目指した。

だが、二十余年の歳月はあまりにもながく、師と仰ぐ酬山和尚はすでに亡く、ともに結跏趺坐して禅の修行に励んだ僧侶たちもほとんど寺を離れてしまっていた。

元助は、しばらく泉岳寺に滞在して回向をつづけたあと、源五右衛門とともに暮らした鉄砲洲のあたりを散策し、両國橋を渡って回向院まえの吉良邸跡を見て回って、もはやなすべきことはすべて終わった思いを抱いた。

元助はそのまま南下して下總を通り、さらに上總を経て安房に入った。

山中の高所を歩いていると、ときおり遙か彼方に海が見えかくれしてきた。

海のない国に育った元助は、美しく光る海に見惚れた。

源五右衛門が話してくれた播磨赤穂の海もこうであろうかと往時に思いを馳せた。

その海に引き寄せられるようにして里へ降りると、そこは和田というところであった。

和田は海沿いにひらけた漁村の背後が農地になっていて、そこに花園という地域があるという。

その天国を彷彿させる地名に惹かれて、元助はそこへあしを向けた。

花園川を上流に向かって歩いてゆくと、行手を崖に阻まれて薄暗くなった不動谷に滝が落ちていた。

元助は、滝壺まで行ってみた。
五丈余り（約十五メートル）あるというその黒瀧は、黒い岩の崖に沿って白い飛沫をあげて落下している美しい滝であった。
元助は、この和田に足を止めることにして、村うちの長香寺に仮寓すると、村人たちに仏法を説き、迷いから解放して悟りをひらかせることにつとめた。
そのかたわらで元助は、おのれの人生の終焉の地をこの不動谷と定めて、黒瀧不動の傍らに岩窟を穿とうと思いつき、少しずつ岩を砕いて掘りすすめていった。
長年の石像づくりで岩石を扱う要領は自分なりに習得していた。
享保十七年（一七三二）秋に岩窟は完成した。
元助は、
「予を念ずれば火難諸災を除き、家内安全、五福寿を増長せしむ」
と遺言して米、麦、粟、黍、大豆の五穀を絶ち、蕎麦、稗、小豆、芋、木の実の木食五行をおこなったあと、洞に入って入口を石蓋で掩い、十穀絶ちの断食行に入って水だけを飲み、洞のなかでだんだん餓死状態になっていき、ついに元助は主人片岡五右衛門高房のあとを追って三十年後に入定した。
ときに九月三十日、享年五十三歳であった。
断食をすることによって、腸内の汚物は一掃され、骨と皮だけに痩せこけてその肉体は自然に木乃伊化し、即身仏になるのだという。
古書には、この黒瀧のことを、
「花園村不動谷にあり、花園川大横根岳より発し、此に至て直下す。高五丈二尺、濶二丈余、降雨に会うすれば瀑勢暴漲、其観殊に壮なり」
と記述している。
向西坊入定窟のまえに立つと、滝と風の音以外はなにも聴こえず、幽界に踏み入ったような幻覚にとらわれる。
（了）

◎この物語は『和田町史』及び岩戸山、黒滝両所の『案内板』を参考にしました。

桐の花影
——吉良側の忠臣蔵余話——

忠内正之

『桂川籠花入』

（一）はじめに

先に「吉良側の忠臣蔵」と言う題目で雑文を書かせて戴いたが、更に余話「桂川籠花入」を追加させて戴く。
「桂川籠花入」（縮めて桂籠と言う）は、それが持つ特に秀れた姿形と伝来を有することにより名物と呼ばれる茶道具の一つである。
茶席に使われる茶道具は極めて多種多様である。それらの中で最も重要視されるものは先づ高僧などの墨蹟による、床の間の掛物である。
その掛物をひき立てるのは、花及び花入（花生とも言う）である。花入の種類には、金物、陶磁器、木工竹がある。
木工竹の花入の中で籠花入は唐物が本命で最も格調が高いとされている。
桂籠の花入は之に対して和物の出自ではあるがわび茶の心にかなった親しみのもてる名品と言える。
わび茶を更に指向し完成させ續けた利休の考案によって見立てられた簡素美の極致である。
桂籠は現在神戸市にある香雪美術館に収蔵されている。以下先づ同美術館の解説を紹介しよう。

千利休（一五二二—九一）が桂川辺でたまたま漁夫の腰にひき下げられた魚籠に興趣を感じて貰い受け、環をつけて花入に仕立てたのである。
その後千家二代少庵、三代宗旦と伝えられ、更に宗旦から愛弟子宗徧がこれを譲り受けた。宗徧は受筒を

つくり、箱書きをして愛蔵したが、話題はこのあとに起った。即ち、折しも赤穂義士の討ち入りが起こり、この花入が吉良上野介の首級の代役を勤めたと言うのである。つまり本物の首はひそかに舟で品川へ送られ、泉岳寺に届けられた。代わりにこの籠が布に包まれて槍にさされ、一行は意気揚々と引き揚げたと言う訳で、底部正面に槍疵のあることがこれを実証している。

利休は少し変形のある特徴に目を付けた訳であるが、更に話題を加えたものであると、坂本周齋（同時代の茶人、宗徧の弟子）は自著「千家中興名物記」に記載している。

桂川籠花入（高さ21cm、口径8.5cm）
香雪美術館蔵
利休名物　桃山時代　16世紀
附属受筒（山田宗徧）

以上が香雪美術館の説明である。桂籠は常設展示ではなくまた同館は春秋二季の開館であるため、拝観する機会が少ない。

吉良上野介の首級代わりとされた云々という件は巷間の伝説となっており吉良側に立つ筆者としてまた茶道に関心を寄せる人間として到底等閑に出来ない問題である。

（二）千宗旦

日本における茶道の歴史は、建久二年（一、一九一）中国から「栄西禅師」と言う臨済宗の僧が抹茶をもたらしたのが始まりといわれている。

その後、室町時代には足利将軍の「書院のお茶」があり、「村田珠光」が「わび茶」を創り、次いで「武野紹鷗」が継ぎ、「千利休」が完成した。

室町時代の書院のお茶が装飾的・儀式的なものだったのに対し、戦国の世に利休が確立したのが、精神性を重んじ、余分な要素を徹底的に削ぎ落したわび茶であった。ただし利休の精神性は極めて哲学的で頗る難解でもあった。

そのわび茶にさらに興味深い多くの要素を加え発展させたのが「古田織部」、「小堀遠州」であった。

また利休の挫折後沈滞していた千家も二代「少庵」、三代宗旦の時期には徳川幕府の庇護によって復活し茶道

界の中心となった。

一方で幕藩体制の安定と経済の発展につれて町家、商人の台頭も目覚ましく茶道への積極的な参加があって大衆化が進んだ。利休の指向する茶道とはやや違った方向であったかも知れないが大きく発展した。

茶人の師から弟子へ、またその弟子へと系譜はひろがりを見せ、茶道は職業の階層を越えて多くの人達に親しまれていった。

発展する茶道界の中心となったのは矢張り千家である。殊にこの時期千家を復興する原動力となったのは宗旦である。

千宗旦（一五七八―一六五八）は利休の孫で二代目少庵の長男として生まれる。一説に道安の子とも。

十才で大徳寺に入り「春屋宗園」の許で修業した。帰家して父少庵と共に不審庵を再建し、「千家」の復興を果した。しかし祖父千利休の末期を考えて自らは一生仕官をしなかった。

このため清貧に甘んじ、わび茶に徹した茶風を確立した。茶禅一味を提唱し「乞食宗旦」の異名をとりながらその茶名は揺るがぬものとなった。余談になるが同時代の大名茶人「金森宗和」はその上品だが華やかな茶風から宗旦に対比して「姫宗和」と呼ばれた。

宗旦は我子三人を夫々「表千家」、「裏千家」、「武者小路千家」と独立、仕官させ千家茶の湯の安泰を計った。

指導した弟子たちも数多く育った。中でも「山田宗徧」、「三宅亡羊」、「松尾宗二」、「藤村庸軒」、「杉木普斉」等は後世に名を残す茶人となった。

「吉良上野介義央」もまた宗旦に弟子入りして茶人としての素養を身につけていたのである。寛文二年父「義冬」と共に初めて上洛した。その頃宗旦に入門して事後上洛の都度教えを乞うた。従って宗徧とはその頃からの相弟子である。

さて、次に宗徧に移ろう。

（三）山田宗徧

宗旦のすぐれた門人の中でも、最もよく宗旦の偉業を世に伝えたのが「山田宗徧」（一、六二七―一、七〇八）である。宗徧流「不審庵山田家」は現在「幽々斉宗徧」が十一代を継ぎ盛んである。

初代宗徧の八十年余の永い生涯はこれを三つの時代に区分することが出来る。

第一は、その生誕から京都在住の時代。即ち、京都二本松、眞宗東本願寺派の長徳寺に生まれ、若くして千宗旦の門に入り、茶匠として独立してから宗旦の推薦で三

州吉田（現在の豊橋市）の小笠原家に仕官するまでの時代。この間二十九年。

第二は、小笠原家の茶頭として仕えた三州吉田の時代。この間四十二年。

第三は、江戸において円熟した茶風を広めた時代。この間十一年。

小笠原家に仕官するまでの京都二十九年間は日々勉学にいそしんだ研鑽の時期である。始め小堀遠州に師事したと言われるが、のち師宗旦のもとで真摯に仕えた十余年間は宗徧にとって最も価値のある修業の時期であった。

明暦元年（一、六五五）宗徧は三州吉田に赴任して小笠原家の茶頭となり三十石五人扶持、百石格としての待遇を与えられた。（なお小笠原流礼式の始祖は当家の本家筋にあたる）。

宗徧は「常によく藩侯の意を体して、茶道の弊風を矯め、眞の和敬清寂の大風流を唱えた」と言われ、また「非常な傑人」として藩内の尊敬を集めた。

元禄十年（一、六九七）、小笠原長重侯が幕府老中に任ぜられ、武州岩槻への国替えとなった。時に宗徧は七十一才、これを転機として官を辞し、自由な身となり江戸へ下向することになった。

宗徧が江戸へ下ってからも、東海道の各地は三州吉田をはじめとして武家社会、町人社会に宗徧流の茶は続き、今日もその流れは済々として生きていると言う。

宗徧は小笠原家茶頭の役職を二世「留学宗引」に譲って江戸に出た。

七十一才の高齢ではあったが心身共に壮健であった宗徧は、元禄文化が絢爛と花開いた大江戸の市井の中にあって茶境の完成を遂げたのである。

余談となるが、当時流行しつつあった歌舞伎狂言に渋い味わいを添えたのが河東節浄瑠璃であった。

その江戸で“歌は河東に茶は宗徧……”と言うはやり言葉があった。宗徧の茶は評判が高く江戸市中に流行したのである。

河東節は「十寸見河東」と言う人が始めた江戸浄瑠璃で、蔵前の札差しの旦那衆らが、こぞって宗徧の茶とともに競って嗜んだものである。

宗徧は隅田川のほとりの本所二つ目の地に庵を結んだ。そこは両国橋が近く、橋の手前の右側には回向院、左側には深川八幡の広場があり、薬師、長福寺、稲荷神社などが並んでいた。

吉良上野介は刃傷事件以後お役御免を願い出て呉服橋の邸を返上して本所に替地を命ぜられ、元禄十四年八月に移住した。本所松坂町の吉良邸は宗徧の庵の近くだった。

既に述べた通り、上野介は若い頃京洛に上って、千宗旦に茶の教えを受けていた。したがって相弟子の宗徧とは親しかった。更に上野介の領地三州吉良と宗徧が仕官した小笠原家の領地三州吉田（豊橋）とが近接していたこともあって、両者は壮年のころから縁故が深かった。

それ故江戸に出てからも宗徧はしばしば吉良家の茶事の相談に応じていた。

（四）討入日の事情

元禄十五年の末頃に近づくと、赤穂浪士の面々は、上野介が屋敷に在宅する日時さえはっきりすればいつなりとも討入りが出来る態勢が整っていた。

否、さにあらず、江戸滞在費の窮乏や、相次ぐ脱落者の出現等があってモラールダウンの恐れから、最早討入り決行以外ないと言う切羽詰まった状態になっていたのである。

元禄十五年十二月十四日、本所の吉良屋敷では年納めの茶会が開かれることになった。

茶会ならば亭主の上野介は必らず在宅する筈であり絶好のチャンスであった。

年納めの茶会と言うが、茶人にとって茶会は大層な行事である。詳細は不明ではあるが、正客は宗徧の旧主小笠原侯だったと言われる。但し侯は身内に不幸があり急に欠席となった様である。

招待客の中心は上野介の旧同僚であった品川豊前、他高家衆の面々であった。

また、名物桂籠の花入まで飾っての茶会は恐らく上野介にとって江戸での最後の催しと考えたのではなかろうか？

当時としては上野介の六十一才は高齢である。養子義周も任官を許されたことでもあり、暇を願って騒がしい江戸を離れて田舎に隠遁する頃合をはかって、お別れの節目となる茶会と考えたのではなかろうか。

吉良屋敷では当日予定通り茶会が開かれ夜間に及ぶ饗宴も終わり、みな疲れきって寝静まったころ、大名火消を装った四十七人の武装集団が人気のない江戸の街を疾駆していた。結果は知られる通りであるが、キッカケとなった茶会開催日の貴重な情報はどの様にして大石側にもたらされたのであろうか。

当時、宗徧の門人に「中島五郎作」と言う江戸京橋三十間堀に店を構える豪商がいた。大石内蔵助はかねてこの人物と昵懇であった。大石は五郎作が吉良家に出入りのある事を知り、上野介の動静について五郎作から何らかの手がかりを得たいと望んでいた。正確な情報の把握は討入り挙行の必須条件であった。

ある日偶然大石はこの五郎作の家で、旧知の京都伏見稲荷の社家「羽倉斎」にめぐり逢った。それは五郎作が自分の家作で羽倉の面倒を見ていたからである。

羽倉斎は、のちに国学の四大人に数えられる「荷田春満」である。

斎は「霊元天皇」の皇子「妙法院宮」に歌道・国学の師として仕え、勅使「大炊御門大納言」に従って江戸へ下向したままにとどまっていたのである。大炊御門家は吉良氏の旧来からの極く近い親類でもあった。

五郎作は時として宗偏に従って吉良邸での茶会に招かれていたし、斎も吉良家に出入して、「義周」や家老の「松原多仲」等に歌や国学の講義など行っていたので二人はともに上野介の身辺には通じていた。

しかし大石はこの二人に自分の本意を打明けることも出来ず、上野介の動静をつかむことは容易ではなかった。大石は一計を案じて、同志のうちで風流人であり言動も機敏な「大高源吾」を選び、京の呉服屋、「脇屋新兵衛」と触れ込み、五郎作の斡旋によって宗偏に入門させることに成功した。そして十二月初の茶会は正客の都合により延引されたが、結局十四日に決まったということが判明したのである。一方で用心深い大石は一族の「大石三平」を通じて中島五郎作からも情報を得て確信するに至った。五郎作の知らせは斎からもたらされたものである。

十四日の昼時分、新兵衛（源吾）はもう一度宗偏の庵居を訪ねたが、すでに宗偏は準備のため吉良邸へ出向いたあとであった。

念のため源吾は同志の者に吉良邸の門前で見張りをさせ、宗偏が門内に入るのを確認したとも言われている。

かくして、その十四日の深夜、雪中での討入りが決行され、世に謂う"元祿の快挙"（？）が遂げられた。

本懐を果たした義士たちは、あげた上野介の首級を舟で品川泉岳寺へ送り、引上げの道中は吉良邸の水屋（茶室の台所）にあった桂籠を源吾が持ち出し、血汐をにじませた白布に包んで槍に刺しかざして、上野介の首級に擬したと伝えられる。上杉家の追討を配慮しての措置であった。

この桂籠が、本稿のテーマとなる花入である。かねて宗旦から宗偏に贈られた利休所持銘"桂川"の名品で、上野介のたっての求めに応じて宗偏が調え、当夜の茶会に使用したものと言われている。

ここで筆者はかねてより持つ疑問を呈したい。それは如何なる点かと言うと、本来籠製の花入は一般的には夏中心の道具である筈である。どの様な名品と雖も眞冬の旧歴十二月に使用されるとは疑わしいと思う。

茶道では季節感を特に重要視するからである。しかし

名品なるが故に格別に希望があって当日の目玉として拝観にのみ供したとすれば理解は出来る。

この点につき数人の識者に尋ねて見たが、明快な解答は得られなかった。ただ「当時は籠製の花入についてはあまり季節にこだわらず使用された様だ」とのアドバイスもあり、一応納得した。

名品流転の例に洩れず、桂籠はその後宗偏の高弟「坂本周斎」（一、六六六―一、七四九）の手に亘り、廻り廻って昭和初年に朝日新聞社主「村山玄庵」、号香雪の所有する処となった。

昭和四十八年香雪美術館が設立され収蔵品となった。以降時折り展示される由である。筆者はまだ実物は拝観出来ていないが、もし許されるならば籠に附着しているであろう血液を現代の技術で分析して見たら面白いだろうと言いたいところであるが、「無風流な奴」と蔑まれるのがオチであろう。

（四）追録

大高源吾は石高二十石五人扶持の軽輩ながら赤穂義士中の逸材であり、また俳人「子葉」として多くの名句を残している。

討入り後の泉岳寺では"山をさく力も折れて松の雪"と書いている。山田宗偏家には、子葉作「無節の茶杓」に"人切れば己れも死なねばならぬなり"と筒書きしたものが残されていると言う。

吉良家の家老職をつとめていた「小林平八郎」は、剣の達人であったが宗偏に茶を学んだ風流の士でもあった。浅野家断絶について、ひそかに同情を寄せ常々上野介に幕府の職を辞して謹慎するよう諫言もし、宗偏とは気心が通じ合っていた。十四日の討入りの夜は奇襲され、さしもの剣豪も不覚をとって早々と討たれてしまった。ある作家によると、かねてより浪士等に対し戦意を持たず、日頃自身の刀の刃を消していたと書いているが穿ち過ぎであろう。

この小林平八郎が愛蔵した歌銘「山桜」の茶入が山田家に現存されている。この茶入は古瀬戸金華山窯の広沢手肩衝で、本歌の中興名物"広沢"と同形のものである。茶入は小堀遠州が挽家（ケースのこと）に山桜と書き、遠州はさらに小色紙に次の和歌を書いて茶入の美しさをたたえた。

"もろともにあわれと思へ山桜
花よりほかに知る人もなし"

歌は「行尊」（一、〇五五―一、一三五）が大和大峰に入山したときの述懐であるが、小林平八郎の心境にも深く通じている。

両者ともに宗偏の同門の士でありながら、運命のいたずらで、敵と味方に分かれ、ついに“もろともにあわれ”をとどめた、源吾と平八郎の二人であった。

吉良家の茶頭「牧野春斎」も宗偏の門人であった。宗偏の推薦で吉良家に奉公していた。茶人であったが討入の夜赤穂浪士と奮戦し主君を守って十七才の命を散らした。

春斎はなかなかの茶人で手造りの香合や蓋置きが現存している。

宗偏流三代目「宗円」が写した（写し造ること）「桂籠」、源吾の「無節の茶杓」、平八郎の「山桜茶入」、春斎手造りの「香合」等は平成二〇年十月に開催された、「江戸・東京の茶の湯展」に展観された。筆者は具に拝見する機会を得たが、往時の彼等の心情を慮って感慨深いものがあった。

討ち入りから明けて元禄十六年正月、弔問客もまばらな上杉家の白金屋敷の富子のもとを山田宗偏が訪れた。大名と旗本という家の格差があるにも拘わらず、義央と富子を結びつけた月下氷人は実は宗偏であった。

宗偏への信頼度は極めて厚かった。宗偏は長年吉良家のみならず上杉家にも茶頭として出入していたのである。

宗偏は不用意に茶会の情報を洩らしてしまった事を率直に詫びた。富子は今となっては悪意の無かった宗偏を許す気持になっていた。しかし吉良の様子を探ろうとする大石の意図を承知の上で斎が茶会の情報を教えたのは許せなかった。

斎は上杉・吉良両家の庇護のお陰で江戸での名声をあげるキッカケを得たと言っても過言ではなかった。

いつの頃から始まったのか不明であるが、毎年討ち入りの日に茶道宗偏流では、義士茶会をお祭り的に盛大に催していると聞く。これは後に湧いて来た義士等の人気に迎合しての悪乗りの感を否めない。

形式上の遊びの茶事なら別であるが、宗旦にすべてを許された程の大茶人宗偏と、達人義央の交りには心の底まで理解し許し合える深い友情のきずながあった筈である。

非業の最後を遂げた茶祖利休ゆかりの名物花入を前にしての茶会は来るべき事態を予測したかの如き緊迫感があったのではなかろうか。討ち入り後の宗偏の苦衷は如何ばかりだったかと察せられる。

現在の宗偏流の面々は流祖宗偏が抱いた深い苦悩を改めて思い起こすべきだと考える。

羽倉斎について次の様な秘話が伝えられている。（城戸千楯「紙魚室雑記」より）

彼が江戸にあった頃、大石内蔵助とはいたって懇意だったが、また吉良上野介もみずからの門人であった。そこで大石らの忠心に感じ入った斎は、その討ち入りを援助するため、吉良邸の詳細な図面を彼等に与えたという。斎は平生この話を口にすることはなく、これは彼が末期に及んでの述懐だった。

斎が死ぬ寸前まで口外しなかったのは、心に咎めるところが多々あったからに相違ないと推察される。

宗偏が富子を訪ねた翌年の一七〇四年の宝永元年八月富子は世を去った。彼女の人生の前半はしあわせそのものであったが、後半は不幸と失意の連続であった。その遺骸は渋谷の東北寺に葬られた。後に富子の墓は分骨されて米沢の法泉寺にも建てられた。

富子の遺骸が改められた時、上野介の白い髷が添えられていたという。二人は固い愛情で結ばれていたのである。

宗偏は富子没後四年の宝永五年四月、八十二才で天寿を全うしている。浅草本願寺寺中の願竜寺に葬られたが遺言により墓石の代りに石灯籠を据え、その傍らに遺愛の紅梅一株が移植された。関東大震災に遭って石灯籠は大破したため、墓石に代えたが紅梅はよみがえって春ごとに見事な花をほころばせ、芳しい香りを放って遺徳を偲ぶよすがとなったが、ついにこの梅樹も齢が尽きて枯死した。

同寺の住持、鷹桐了順翁はその残根の一片をとって山田家に贈った。

宗家ではこれを珍重して花入を作り“老竜”と銘した。

老竜の名はこの梅樹の根が老竜のうずくまる姿に似通っていたからと言う。

老而不死（おいてもしせず）

森下征二

（一）

「論語」の中に原壌と言う人物が登場する。しかし、原壌と言っても首を傾げる人が多いと思う。有名な思想家でもなければ、立派な経歴もないからだ。「論語」に記載された内容も実に冴えない。訪ねてきた孔子から出迎え方を咎められ、一方的に罵られたあげく、杖で叩かれても、一言も反論していないのである。

しかし、考えてみれば不思議ではないか。たったこれだけのことが何故、孔子の弟子の間で語り継がれ、「論語」の中に収録されたのだろうか？

何はともあれ、「論語・憲問篇」の記載を読んでみよう。

原壌　夷して俟つ。子曰く。幼にして遜弟ならず、長じて述ぶること無く、老いても死せず。是を賊と為す。杖を以て其の脛を叩く。

原壌が無礼にも、夷して（足を前へ投げ出したまま坐って）孔子を待っていた。それ見た孔子は、「お前は幼い時から遜弟でなく（年長者に対してへりくだりもせず）、成長しても述ぶる程のこと（誉めてやれるような善行）をしなかった。

それだけではない。老いて（七十歳を過ぎて）も、さっさと死のうともしないではないか。お前のような奴を、徳をそこなう賊と言うのだ」と罵り、手にした杖で原壌の脛を叩いた。

漢字で僅かに二十八字、非常に短い記事である。それでも私は、思わず自分の目を疑った。聖人たるべき孔子の言葉がきつ過ぎるように感じるのだ。老而不死（お前のような年寄りなんか、さっさと死んでしまえ）……だと？　これが、本当に孔子の言葉だろうか？　品がない上に、余りにもヒステリックだ。

もともと、儒家は老人を敬い尊んだはずではなかったか？　「礼記」の記事を見るが良い。六十歳には肉を与えろ、七十歳では絹服を着せよ、八十歳には人間の体温で暖めてやれ……等々、きめ細かく定めているのだ。それなのに何故、孔子は原壌を老而不死と罵ったのだろうか？

それに、原壌は……と言えば、足を投げ出して孔子を出迎えただけなのだ。失礼には違いないが、だからと言って「老而不死」とか「徳の賊」だと決め付けられ、杖で脛を叩かれなければならない程の非礼だとは思えない。孔子ともあろうものが、何故これしきのことで激高したのだろうか？

しかし、最も不可解なのは、孔子から一方的に責められた原壌の反応が、「論語」に全く記載されなかったことである。

彼が一端の男であれば、一方的に侮辱されて黙って引っ込むとも思えない。彼はその時、孔子に抗議したのか謝ったのか、或いは、孔子の行為を非難したのか甘受したのか、何らかの意思を示したはずである。しかし「論語」は、それを一切明らかにしなかった。これは一体何故だろうか？

考えれば考えるほど原壌への疑問は募る。そもそも、ここに登場した原壌とは、一体何者だろうか？　彼と孔子はどんな関係があったのか？　孔子は何故原壌をわざわざ訪ねたのか？　原壌は彼を、何故足を投げ出して待ったのか？　数えあげれば限がないが、この不可解な事件を解く鍵は、原壌自身が握っている可能性が高い。そこで、私は彼の足跡を求め、「論語」の他の資料を探すことにした。

（二）

手掛かりは、意外に簡単に見つかった。「礼記」の中に、原壌の母親が亡くなった時の、次のような逸話があったのである。

孔子の故人を原壌と曰う。その母死す。夫子　之を助けて椁をおさむ。原壌　木に登りて曰く、久しきかな、予の音に託せざるやと。歌いて曰く、貍首の斑然たる、女手の巻然たるを執ると。夫子　聞かざる者の為をして之を過ぐ。

従者曰く、子　未だ以て已む可からざるかと。夫子曰く、丘　之を聞く。親しき者には、その親たるを失うなかれ。故き者には、その故たるを失うなかれと。

孔子の古い友人に原壌と言う者がいた。その母が亡くなった時、先生（孔子）も葬儀を手伝うことになり（と、言うよりも、礼に詳しい孔子のことだから、葬儀を仕切

った可能性が高い）、椁（棺）材の調達に当たった。

ところが、孔子が椁材を職人に引き渡そうとした時である。何を思ったのか原壌は、いきなり棺材の上へ攀じ登り「母が亡くなってから、何と久しく音楽から遠ざかっていたことよ」と呟いた後、貍首の班然たる、女手の巻然たるを執る……と、戯れ歌を歌いだした。

母の葬儀に不敬といえば不敬、孔子に対し非礼と言えば、これほど非礼なことはない。聞こえない振りをして聞き流す孔子に向かって、憤慨した従者たちが、「先生、これでもまだ、あの人との交際をやめられませんか」と訴えると、孔子は次のように答えた。

「私はね、このように聞いているのだ。骨肉の親類とは関係を断ってはならないし、古い友人とは友情を断ってはならないとね」と。

これからわかることは、原壌が孔子の古い友人であり、親戚だったという事実である。「**孔子の故人を原壌と曰う**」**の故人とは古い友人であり、**「**親しき者には、その親たるを失うなかれ**」**の親しきものとは、親戚のことであるからだ。孔子が原壌の行状を、**「**幼にして遜弟ならず、長じて述ぶること無く、老いても死せず**」とあげつらったのも当然である。

それはともかく、この中で最も注目すべきは、「論語」の中で一言も語らなかった原壌が、初めて口を開いたことだ。「**久しきかな、予の音に託せざるや**」とあるからには、彼はそれまで頻繁に、自分の思いを歌に託して世の中へ陳べてきたのではないか？　そうだとすれば、彼は一端の思想家だった可能性が高い。

問題は、原壌が歌った「**貍首の班然たる、女手の巻然たるを執る**」の意味である。

諸種の注釈書を見ると、「狸の頭の毛の斑模様のように美しい木目、女の人の手のようにすべっこい木の肌」と直訳したものや、「木目は狸の頭のように美しい、執る手は女のように柔らかい」として、棺材を調える孔子が、女のような柔らかい手で斧を振るったことを風刺したとする解釈もあるようだ。しかし孔子の弟子たちが、余りにも不謹慎だと憤慨したことを考えると、何れも少し物足らない気がする。

そこで、私はこれを「こうして狸の頭の毛の斑のように美しい木目を見ながら、すべすべした木の肌に触っていると、美しい女の人の艶やかで柔らかい手を思い出す。何とか、その手を握りたいものだ」と読みたい。彼は孔子が調えてくれた亡母の棺材の木目に触りながら、女人の肌を連想したのである。原壌は母の死を、礼に則った葬儀で悼む積もりがないことを、歌に託して示したのではないか？

次に、最大の謎が残る。孔子は晩年、原壌が足を投げ出して出迎えた非礼を糾弾し、老而不死と罵った。その

同じ孔子が、葬儀を手伝った好意を蔑ろにされながら、何故、原壌を怒らなかったのだろうか？

彼は言う。「**親しき者には、その親たるを失うなかれ。故き者には、その故たるを失うなかれ**」とあるからだ……と。

しかし、孔子が挙げた、原壌が故人であるとか親戚であるといった理由は言い訳に過ぎない。それは「論語・憲問篇」に記載された事実、故人であり親戚である原壌を叱りつけた事実を思い起こせば明らかである。

ならば、孔子が原壌を怒らなかった真の理由は何か？私は更に、他の資料に当たることにした。

（二）

しかし、原壌は「論語」に登場すると言っても、殆んど無名の人物である。既に掲げた「礼記」の記事の他には、彼の資料は全く見つからなかった。困惑した私は調査の手がかりを求め、彼の行為をもう一度振り返ることにした。

「礼記」の記事は、原壌が母の葬儀で戯れ歌を歌ったと記している。礼に基づく葬儀の準備を仕切る孔子に、冷や水を浴びせた訳である。そうだとすれば、原壌は孔子の親戚でありながら、孔門の人ではなかったことになる。

然らば、彼は一体何者か？　礼を無視し、軽蔑し、敢えて礼の枠外で生きようとした彼の行為を判断すると、おそらく、老子に代表される春秋末期の隠士（老子学派）だった可能性が強い。

もしもそうなら、原壌を理解するための必要な資料が、老子や荘子の逸話の中にあるかもしれない。

果たして私は、「荘子・至楽篇」の中に、次に記す荘子の妻が死亡した時の記事を見つけることができた。

荘子の妻死す。恵子之を弔う。荘子則ち方に箕踞し、盆を鼓して歌う。恵子曰く、人と與に居て、子を長じ身を老せり。死して哭せざるは、亦足れり。又盆を鼓して歌うは、亦甚だしからずや、と。

荘子曰く、然らず。是れ其の始死するや、我独り何ぞ能く概然たること無からんや。其の始を察するに、本生無し。徒に生無きのみに非ずして、本気無し。芒忽の間に雑わり、変じて気あり。気変じて形あり。形変じて生あり。今又変じて死に之く。是れ相與に春秋冬夏四時の行を為せるなり。

人且つ偃然として巨室に寝ぬ。而して我嗷嗷然として、随いて之を哭せば、自ら以為えらく、命に通ぜずと。故に止むるなり、と。

荘子の妻が死んだと聞いた恵子が弔問に行った。すると、荘子は箕踞して（足を投げ出して坐り）、盆を叩きながら歌っていた。

それを見た恵子が「君は夫人と一緒に暮らし、無事子供を育て上げ、仲良く年老いた仲ではないか。その夫人が亡くなったのに、君は哀哭しないばかりか盆を叩いて歌っている。余りではないか」と荘子を責めた時、荘子は次のように答えた。

「それは違う。妻が死んだ当初は、私だって嘆き悲しまずにおられなかった。しかし考えてみると、生まれる前には生命なんか無かったはずだ。勿論、肉体も無かった。そうだとすれば、肉体を形づくる「気」も存在しなかったと言うことだ。

もともと、茫漠としたものの中に雑じっていた何かが、次第に陰と陽の「気」になり、その「気」が変化して肉体となる。そして、肉体もまた変化を繰り返し、終には生命を生んだのだ。そしてそれが、今また変化して、死んで行くことになる。

もしもそうなら、これは春夏秋冬、四季を繰り返すのと全く同じ理屈ではないか。これが自然さ。自然の運行そのものだよ。私の妻は今、天地と言う大きな部屋で安らかに眠っているはずなのだ。

それをどうして、私が哭さなければならないのかね？そんなことをすれば、私は天命を弁えない男に成り下がる。私はそれがわかったから、哭さないことにした。哭するのを止め、歌っていると言う訳だ」

この話の妻を母に置き換えると、妻を喪った荘子が箕踞し、盆を叩いて歌ったことは、母を喪った原壌が孔子の調えた棺材の上に攀じ登り、戯れ歌を歌った事実と全く重なるようである。

もしもそうなら、妻を喪った荘子は、母を亡くした原壌を代弁したことにならないか？　原壌の行為は荘子と同じく、死生を一つと見ることにより、葬儀の場で哀哭する積もりがないことを示したものだと考えられる。

そうだとすれば、弟子を引き連れた孔子が、礼に則って母の葬儀の準備を始めたことは、原壌にとって迷惑極まりないことだろう。

それでも原壌は我慢した。年齢こそ大差はないが、孔子が族兄であったからだと思う（「論語」で、孔子が原壌に「幼にして遜弟ならず」と詰った事実を想起して頂きたい）。

しかし、原壌は誇り高き隠士として、そしてまた荘子と同じく天道を知る者として、そのまま引っ込んではいなかった。彼は自分の思想を歌で表わす。原壌が歌った「貍首の班然たる、女手の巻然たるを執る」という歌は、儒家の礼に基づく葬儀を否定し、死生を一つとする立場を明確にしながら、孔子への抗議の意思を明らかにするものであった。

おそらく、孔子も原壌の思想を知っていた。彼の葬儀の考え方にも気がついていたと思う。

それなのに何故、彼は原壌の母の葬儀を儒家の礼に則って行おうとしたのか？

それは多分、儒家の総帥として、身内の葬儀は須らく礼に則ることを示す必要があったからではなかろうか？彼は原壌の非礼を怒らなかった。いや、怒ることができなかったのだと思う。

(四)

このように、原壌は孔子の親戚でありながら儒家ではなく、老子に代表される隠士の一人であった。彼らが活躍した春秋末期の中国は、内乱と戦乱に明け暮れ、醜い権力闘争が繰り返されていた。まさに下克上の世の中である。

数多くの賢人が乱世に絶望し、政治の舞台から逃れて隠士となった。彼らは天道に則って、無為のまま過ごす生活を至上のものだと考えるようになって行く。こうした思想を纏め上げたのが老子である。

そこで次に、孔子と原壌の立場を明らかにするため、儒家と老子学派の思想を簡単に対比してみよう。

孔子が仁の徳の完成を、人生の究極の目的としたことは良く知られている。

然らば仁とは何か？　仁とは、社会的生活を送る人間が、誰でも持っている他人に対する親愛の情であり、道徳の根源である。そして、この仁が社会秩序として、人として履むべき道（規範、或いはルールとでも言うか）に客観化されたものが礼なのだ。

礼を具体化するに当たり、孔子はそれを周王朝の功臣である周公が定めた礼に求めた。彼は周公の礼を復興し、それにより、乱れた社会秩序を立て直そうと試みる。それだけではない。政治は須らく礼によるべきだと考え、政治に参画することにより、礼を実現しようとしたのである。

これに対し、老子は人間世界の真相を形而上的な道と見る。社会の本質を形のない道（天道）と看做し、人間は、その道に歩調を合わせながら時と共に推移し、対象に即して変化しながら、自然のまま生きて行くことが重要だと説く。

更に言えば、政治の秘訣は人民に干渉せず、自然に任せるべきだと主張した。

このように、老子は礼を人間の桎梏（枷）だと考える。政治に参画して、礼を実現することなど、もっての外だと言うのである。そうだとすれば二人の思想に接点はない。孔子と老子……、この二人の偉大な思想家について、「史記」の中に面白い逸話が載っている。私なりの意訳だけを示す。

孔子が周に行った時のことだ。老子に会見した孔子が礼について教えを乞うた時、老子は次のように答えたと

言う。

「ほう、礼じゃとのう？　ところで聞くが、その礼を定めた人は、今どうしているのだ？　え？　とっくに死んで骨まで腐っておるじゃろう。残っているのは、何の意味もない言葉だけじゃないか。そんなものに拘ってどうするのかね？

こうして見ると、お前さんは高慢ちきで、欲の皮が突っ張っとるようじゃのう。

その勿体ぶった態度を改めなさい。その志とやらも捨てるのじゃ。そんなものは、お前さんの為にはならぬぞ。何の足しにもならぬじゃろうて。わしが言うことは、それだけじゃ」

これで見る限り、孔子は老子に軽くあしらわれているように見える。

しかし孔子は、無為を是とする老子の思想を受け入れた訳ではない。賛同しないが、老子の思想は尊重したのだ。そのことは、孔子が弟子に語った「吾、今日老子を見たり。猶、それ龍のごときか」の言葉の中に表わされていると思う。

この時期の孔子は、自分と異なる思想を尊重することができた。他人を仁と遇し、独立の人格と認める仁の精神に基づき、異なる思想を徒に攻撃するようなことはなかったのだ。

原壌の母の葬儀も、おそらくこの時期だったのではないか？　だから、彼は原壌の行為を咎めなかったのだと思う。

（十五）

しかし、孔子の晩年、特に、五十六歳から六十九歳までの十三年間の、魯国を出奔して天下を広く流浪する時期になると、孔子と老子学派の軋轢が次第に目立つようになってくる。その経緯は、「論語」の中の「微子篇」に詳しい。

先ず、楚国の接輿に係わる話である。自ら楚狂（楚国の狂人）と名乗った彼は、輿に乗った孔子の傍を通り過ぎながら歌う。

鳳さん、鳳さん、落ち込んでも仕方がない。これから頑張れば良いではないか。今の政治は危険だぞ……と。

これを聞いた孔子は、輿を止めて論争しようとしたが、接輿は孔子を振り切って走り去る。

また、こんな話もある。孔子が船の渡し場を探していると、長沮と桀溺の二人が畑を耕している。弟子の子路を遣わして渡し場の所在を聞かせると、主人が孔子であることを知った長沮は、孔子なら渡し場を知っているはずだと言って取り合わない。

次に子路が桀溺に聞くと、孔子に仕えるより、いっそ我々と一緒に世の中から隠れたらどうかと勧誘し、やはり教えようともしなかった。

これを聞いた孔子は憮然として言う。人間が鳥獣と組んで改革できる訳がない。組む相手は、同じ人間しかいないのだ。我々は今、世の中に道理がないから改革しようとしている。道理があるなら、誰が好んで改革なんか志すものか……と。

まだある。孔子に逸れた子路が、偶々出会った杖人（杖を引く人＝老人）に夫子（孔子）の行方を尋ねた。すると彼は、孔子と言う方は身体を使って働かないし、五穀の見分けもつかない。どうして、そんな人が先生なのかと逆襲してきた。

子路がそれを孔子に伝えると、孔子は再び子路を遣わして、次のように言付けさせた。

あなた方は世間から隠れ、役人として仕えようともされないが、人間の道理は認めておられるようだ。ならば、君臣の道も捨て去ることはできないはずではないか。あなた方は一身の清潔を保つことばかりに熱心で、却って人倫の大義を乱しておられる。今の社会で道を行うことは難しいが、我々が仕官を望むのは、それを直そうとするからなのだ……と。

これらのやり取りの中で、嘗ては老子の前から黙って引き下がった孔子が、今度は明確に非難の矛先を隠士へ向ける。それと共に、政治に参加することにより、周公の礼を実現しようとする儒家の立場を積極的に主張するのである。

彼は自分の行動を風刺した接輿の後を追ったばかりか、長沮・桀溺の行為を一笑に付した。更には、彼ら隠士の一身を潔くする隠遁の思想を、却って人倫の大義を乱すものだと糾弾し、政治に参加して礼を実現する、自己の立場の正当性を力説したのである。

やがて、孔子は十三年間の外遊を終えて魯国へ帰る。孔子は時に六十九歳、原壌の母親の葬儀から数十年の後に当たる。その間、何人もの隠士（老子学派）と交流し、自己の思想を深めると共に政治的な主張を明確にしてきたのではないか？

帰国した孔子は弟子の教育に専念する。孔門の弟子三千人、そのうち奥義を究めたもの七十二人、多くの弟子を抱えた彼は着々と、儒家の総帥としての地位を固めてゆく。

（十六）

それでは、再び「論語」の「憲問篇」に戻ろう。帰国して数年後、既に七十歳を過ぎていた孔子が、大勢の取り巻きを従えて原壌の家を訪ねた。彼は七十三歳で死んだのだから、最晩年の時期だと言っても良いだろう。彼が原壌を訪ねたのは、おそらく、その原壌と決着をつけるためではなかったか？

原壌は孔子の親戚でありながら、孔門に帰することな

く、隠士としての生き方を貫いている。しかも、同じ魯国に住んでいるのだ。儒家の総帥として、放って置くことができなかったのは当然だろう。

それだけではなかった。原壌は当時、隠士として名を馳せていた可能性が極めて強い。何故なら、彼は荘子より二百年以上も前に、死生を一つと考えて葬礼に反対していた。後世、それが確りと、荘子に受け継がれた事実を考えると、原壌の思想が老子学派の間で高く評価されていたと考える方が自然である。そうだとすれば、孔子もまた相当な意気込みを持って、原壌との対決に臨んだのではないか？

他方、原壌もまた孔子の来訪の意図に気がついていたと思われる。

彼は別に畏まることなく、夷して（坐ったまま足を投げ出して）孔子を俟ち受けた。妻の葬儀で、荘子が足を投げ出して歌った事実を思いだして頂きたい。隠士が容を改めないのは、それが、隠士が自己主張をする時のお決まりの姿勢だったからではないか？　原壌は自分の旗幟を態度で示し、孔子の出鼻を挫いたのだ。

それを見た孔子の眉間に縦皺が寄る。彼もまた原壌が夷して俟つことを計算していたのではないか？　しかし、現実に非礼な態度を目にすると、彼のプライドは大きく傷ついたに違いない。彼は持っていた杖を握り直し、原壌の投げ出した足を引っ込めよと言わんばかりに、こつこつと脛を叩きながら怒りを込めて言った。

幼にして遜弟ならず、長じて述ぶること無く、老いても死せず。是を賊と為す……と。

勿論、孔子の口調は厳しいものだった。親戚でありながら事毎に自分に逆らい、これ見よがしに礼に背く原壌に向かって、孔子が怒りを爆発させたとしても不思議ではない。

彼は次第に激昂しながら原壌を罵った。乱れた世の中を直そうともせず、社会に背を向けるばかりか、一身の清潔だけを望んで却って大倫を乱そうとする。お前なんか徳を害う賊ではないか。さっさと死んでしまえ……と。

これに対し、原壌はどんな反応を示しただろうか？　恐れ入りましたと謝ったのだろうか？　或いは強く抗議したのか？　否！　原壌は黙ったまま冷ややかな目で孔子を見つめただけだと思う。それが無為を是とする原壌に、最も相応しい姿だからである。

彼は無言の中に、自分の主張を表わしたのだ。決して畏れ入った訳ではない。

孔子は……と言えば、彼も激昂しながら、言うべきことは言い切った。言うべきこととは何か？　それは一見品がなく、ヒステリックにも見える老而不死の四文字である。

「礼記」によれば、「老」とは七十代を言い、職務を返上すべき年齢に当たる。

辞職が許されなければ君公から杖を賜り、出張の際には婦人が付き添うなど、国を挙げて大切にされる年齢なのだ。それが儒教の建前だ。

しかし、孔子がここで老而不死と宣ったことで、大事にすべき「老」に条件を付けたのである。

たとえ「老（七十代の人）」であっても、「礼」を身に付けていない者は、徳を害なう賊だと極め付けたのだ。そんな輩（原壌始め隠士なんか）は、さっさと死んでしまえ……と、引導を渡したのである。

勿論、原壌にも異存はなかった。「礼」に縛られるより、天道に則り気ままに生きる「賊」で結構だ、と居直ったのだ。それが、原壌の無言が語る意味だったのではなかろうか？

そうだとすれば、原壌は、「論語」の中に登場する隠士の、いわばトリを勤めるべき人物ではなかったか？

本来、彼は「憲問篇」に収録される人物ではなく、「微子篇」に登場すべき人物であった。接輿・長沮・桀溺・丈人と続いた流れが、原壌へ至って完結する。私には原壌が、こうした流れの最後を締めくくる人物だったと思われてならない。

老而不死、徳の賊……、孔子の言葉は極めて激しい。その厳しい言葉こそが、原壌が孔子と対立した隠士の大立者であった事実を、雄弁に物語っているような気がする。彼は孔子と同じ時期を生き抜いた、老子学派を代表する隠士だったのではなかろうか？

しかし孔子の死後、残された弟子たちには、他ならぬ師の親戚が孔門の人でないばかりか、老子学派を代表すべき人であることは都合が悪かったに違いない。

そこで、彼らは原壌を接輿ら四人から切り離し、「憲問篇」の中に入れることにした。しかも、隠士としての事跡を消し去り、単なる横着者に貶めたのである。二千数百年の年月が過ぎ去り、彼らの企みは見事に成功したように見える。

しかし、原壌は誇り高い隠士だった。彼は自分の足跡が歴史の闇に埋もれたことを、却って喜んだのではなかろうか？

孔子が「陽」の人であったのに対し、彼はあくまでも「陰」の人だったからである。

（おわり）

鳳鴻の志——北条早雲——

島津隆子

戦国時代、いな日本の全史を通じて、草莽の臣、いわゆる全く無名の一匹夫から身を起し、一朝風雲に乗って空拳崛起し、関八洲を従えて、北条五代の礎を築き、戦国群雄の中にあって天下に覇を唱えたのは、早雲をもって始まるといわれる。

頼朝にしろ尊氏にしろ名だたる門閥家であり、信長、家康にしても生まれながらの地方大名の子であった。敢えて言うなら秀吉が似ているが、秀吉には竹中半兵衛、黒田官兵衛という智恵袋がいた。

それに反し早雲には基盤となる門地も、智恵袋もいなかった。今流に言うと、どこの馬の骨だかわからない者が、わずかな金力をも持たずに、巨大な財閥を築いたようなものである。

では、家柄も下賤で、有力な主君にも恵まれづ、名参謀もいない早雲が、いかにして天下の覇業を成したのか見てみよう。

出生の謎

未だ申し入れ候わづと雖ども、次の令を以って啓候。すなわち関右馬允事名字我ら一体に候、伊勢国関と申す所により国に在りては関名のり候。

私は伊勢の国の関に生れた一族である。と言うのだが、北条早雲の出身、その素姓に関してはわかっていない。はじめ早雲は伊勢長氏といい、後に出家して早雲と号した。北条という名は子氏綱のとき名乗ったもので、それは鎌倉幕府の北条氏にあやかったものに過ぎない。まさに、

草莽の徴臣にして単身空拳崛起したるは早雲に始まり…

と、『日本外史』に言う通りである。

時は、応仁の大乱の真最中であった。

伊勢の片隅で七人の男が額を集めて何事かを話し合っていた。いづれも野心に燃える男たちである。主人はすべて京都の戦場へ出かけてしまっている。早雲を除いては、三百貫の郷士を筆頭に、男たちはいくらかの土地を持っていた。

早雲の眼は異様に輝いている。

「京で大乱が起きている。であれば地方は全くのスキだらけというもの。その中でも将来性から言って関東はすばらしい土地ぞ。広大な関東こそ、これからの時代の舞台となり中心となろう。人も馬も精強、やがて、きっと天下人の住む所となる。兵火に焼かれている京都には見切りをつける時ぞ」

と力説した。そして、男たちの持っている土地を売り払い、旅の費用を作った。

次に早雲がしたことは、縁故を頼って妹が愛妾となっている駿河の今川義忠の許に身を寄せたのだ。これは転がり込んだというべきで、ここを足がかりにして、しばらく様子を伺い、機に応じて打って出る心算であった。

当時の関東地方の情勢はどうであったか。

関東管領足利持氏の自刃後は、臣下であった上杉家が有力となった。だが、これに従わない豪族も多く、持氏の遺子成氏を古河に擁して上杉に反抗した。これを古河公方という。

そこで上杉家は京都から将軍義政の弟政知を伊豆の堀越に迎えて擁立した。これを堀越公方という。

しかし、政知は爪の垢ほどの実力もなかったので、上杉家内部でも山内上杉と扇谷上杉に分れて勢力を削り合う有様であった。京都の命令など何程のこともなかった。早雲が眼をつけた関東は、このような状態にあったのだ。

だが、不思議なことに早雲は、今川の膝元から一歩も動こうとしない。実に八年もの間、ただ妹の主人の許に寄遇している、いわば食客である。そして「大器は晩成である」などとうそぶいているばかりだ。

土地を売り払ってついてきた六人の男たちは、この歎かわしさに堪えず、

「附近の小城でもいいから夜討をかけて奪おうぞ」

としきりと早雲に迫るのだ。そして、

「小さくとも一国一城の主になって欲しい」

と懇願するが、「まあ、まあ」と、一向に動く気配をみせない早雲であった。たまりかねた男たちはとうとう、

豎子何事をか成し得よう

と、早雲に見切りをつけはじめた。それでも早雲は敢えて意に介さず、暇さえあれば狩などをして遊んでばかりいた。早雲の眼にはただ功名の念ばかりにかられて、機会が充分に熟してくるのを待てない六人の男たちが、

さぞかし愚か者に映っていたことだろう。

人の人たる功の業成ると成ぬとは只此の円熟したる機会にこそ捉へると否とにあり

とは、実に早雲の胸奥の独白である。

時に早雲四十五歳。

未だ何事も成さず、ただ一介の食客の身に甘んじていた。このような早雲を見限る人間がいたとしても別に不思議はない。ただ待つ忍耐があるか否かが問題なだけだ。やがて、早雲の待っていた機会は確実にやって来た。しかも向こうから転げるようにして。

好機倒来

文明七年（一四七五）今川氏の領土である遠江国に反乱が起こり、義忠は兵を率いて鎮圧した。だが、その帰途、遠州汐見坂で土民の待ち伏せに遭い、あっけなく討死してしまった。

義忠の子氏親はまだ幼かったので、今川の家臣たちは二派に分かれて権力争いを始めた。

「早雲起っべし」

と男たちは血相を変えて早雲をけしかけたが、

時未だ熟さず、十分なるを円熟といふ

と動き出す様子を見せない。

「いよいよもって、これは愚鈍なり」

と見定めてしまうのも人情というものだ。ただ人には凡俗と非凡の差があるだけだろうから。

氏親を擁する者をば義といはれ、之を擁せざるの者をば不義の徒といはる。両党何れも是を擁すべく相手はしむべし

との早雲の胸の内を読み取れる者は、側近はおろか、今川の家中にも一人としていなかった。

「このような場合、みだりに氏親をどちらか一方に擁しても、今川家を分裂させ、危うくする基であろう。幼ない氏親とその母北川殿に難が及ぶ危険があろうぞ」

という早雲の言葉は忠義の心として疑う余地がなかった。

こうして早雲は今川家の世継ぎである母と子を西山という所へ匿まうことに成功した。あとはただ二派に分れた今川の家臣どもを、飽きるまで喧嘩させておけばよいというものだ。世継ぎを取り上げられているのだから、盲人の喧嘩も同様、ただ的もなく叩き合い、勢力を擦り減らしてゆくばかりである。

一方この機会にこそ何がなんでも早雲を動かして、事を仕遂げようと、

「もう好機でありましょうに」

という者に向かって早雲は、依然として腰を上げる気配を示さなかった。

燕雀何ぞ鳳鴻の志を知らんや

燕や雀にどうして鳳鴻といわれるほどの大鳥の胸中を知ることができようか——とうそぶく早雲は一見呑気そうにみえるが、その深謀術策は誰にも見破ることができない。

ただ一人を除いては。

太田道灌の出現

このような内輪揉めには必らず他からの口出しやお節介が介在し、付け込もうとする輩がいることを、早雲は見透していた。

果たせるかな、関東の最有力者である上杉家が、この機に乗じてきた。山内上杉の代表として上杉政憲を、扇谷上杉の代表として太田道灌を派遣してきた。そして、今川両陣に赴き、

今川殿御討死の後、御息御幼少なるに乗じて、上を軽んじ、各私闘せらるるは何事ぞや。何方にてもあれ、今川家に逆心あらん方に向かい、一矢参らすべし、御返答如何に

と迫った。衰えたりとはいえ上杉家は関東の重鎮である。相方への睨みは十分にきく。とくに今川家の内乱に付け入って、これを捕ろうというのではない。領主が幼いから、その内乱を鎮めてやろうというのだ。幼君を挟んでの権力闘争で、幼君に対して反逆の意志はない。という上杉家の詰問に、今川二派の者たちは答えるべき言葉に窮した。

ここで乗り出した早雲は太田道灌、上杉政憲の両将に面会することになった。

斯様に家来の面々二つに分かれて相争ふこと、今川家滅亡の基なり。併しあらづして主家に意趣ありての事に御座無く、逆臣とて討つこと叶ふまじ（略）就きては二党共に御配慮を無にして、尚ほ此の上とも相争ふが如きこと御座あらば、某、京将軍家の御下知を承はり、堀越御所と申合せて、必ず一方を退治仕るで御座候、若し又御配慮に従ひ相和するに於ては直ちに氏親殿を御迎へ申すべく御座候

と早雲は言ってのけたのである。

これまで二派がいかに争うともほとんど傍観していた早雲が、関東の最有力者の使者に向い、今川両派の誰とも相談なしに、あたかも今川家の代表者のような顔をして、これだけのことを言ってのけたのだ。まさに怪物と

いわれる所以である。

上杉の両将は早雲の説くところ理の当然であるとして、ただちにこの会談の結果を、今川の両派に通達した。ただ道灌は早雲の胸中を見破っていた。

だが、道灌も何喰わぬ顔で早雲の申し出に快諾を与えた。道灌にはもっと大きな考えがあったのだ。

早雲はこれを機会に一兵も損することなく今川の内紛をまとめ上げ、その上、正義の名の下に完全に上杉家を支配下に置くことになった。また自分が上杉家の反目を収め、一気に関東東海に君臨する好機になるのだ。

早雲の胸中を看て取った道灌は、この得体の知れない早雲という男の野心を満足させながら、これを利用しようと考えていた。

しかし早雲もさるもので、道灌の腹の内を十分に読んで、計算しつくした上での合意だった。智と智、謀と謀、策と策、早雲道灌両雄の秘術をつくした駈け引きである。

一介の居候の分際に、あたかも今川家の代表者のような貌をされ、両上杉の名だたる武将を説き動かすなど、「生意気な奴め！」と癪の種ではあったが、ここで我を張って逆臣の汚名を被せられてはたまらない、という訳で、今川の両陣営も互いに陣を退いた。

浅間神社の前で神水を飲んで、和睦を誓わせられたのだ。

そうしておいて早雲は匿っていた氏親と母を西山から城内へ迎え入れた。

何を隠そう。この氏親こそ義忠と早雲自身の妹の子であり、母北川殿はまぎれもなく早雲の妹であった。早雲はただ安閑と八年もの間、妹の所に身を寄せていたのではない。

愛妾とはいっても正室でもない義忠のただの妾の身である。おそらく早雲は妹に、何事かをこんこんと言い含めたに相違ない。なぜなら義忠はあえて正室との間に子供をつくろうとしなかったから。

今や城中の者がどう騒ごうが、今川家内乱を平穏の内に収めたのは早雲の力に負うとして、道灌、政憲が厚く賞したのだから、どうすることもできない。とにかく結果的に今川家にとって良い結果をもたらした早雲の人となりを、敬服しないわけにはいかなかった。

こうして内乱鎮圧の功労者であり、氏親には伯父、母北川殿にとれば兄である早雲は、事実上二人の補佐役兼後見人となった。このことは勢い今川家後見の位置をも意味した。

「なるほどあの男はただ者ではなかったわい」

早雲に見切りをつけた男たちは自身の無能を恥じたにちがいない。

しかし早雲はいつまでも妹の縁にすがって今川家で立身出世をしようとは思わなかった。ただ早雲はこれによって他日の雄飛の便宜としたまでである。

今川家でも早雲の存在を不気味がって、富士郡下方圧十二郷を贈り、わずか二百人ばかりの小っぽけな興国寺城を与えた。早雲は喜こんで城主になった。とにかくこれで天下に覇を唱える端緒が開かれたのである。

時に早雲は四十代も半ばを過ぎていた。

興国寺城の城主に

こんな吹けば飛ぶような小城の主に収まって、早雲はどう天下の群雄と肩を並べようとするのだろうか。

しかし、他日天下に覇を唱える実力は着々と養われていった。

「今度の興国寺の城主は大変な人物である」

と噂が広まった。政令が改められ、税が軽減され、農耕が改良され、民の病苦を労るなど、早雲は領国の人々に限りない善政を行った。

しかし兵士の鍛錬だけは怠らなかった。反面、他国の者に対しては独特の術策を用いた。領民には無利子同然に金銭を貸し与えたが、他国民には高利で貸し付け、びしびしと取り立てたのだ。だから早雲の城下には他国から居を移す者が増え、久しからずしてさびれていた城下には、人家が密集して大いに繁昌した。

人々はその仁政に感謝するため、早雲をまつった吉原池の祠を建てたのもこの頃であるという。

凶作になれば領民に惜しげもなく城中のものを支給したので、早雲の領国は一致団結の堅塁を誇るようになった。有力な城主に成長した早雲の日常は狩りと読書の明け暮れであったというが、事実はどうだったのだろう。

道灌の慧眼と死

今川も上杉もこの早雲の姿を見て、一介の成り上り者が小城を得て、喜び勇んで領土の経営に励んでいるぐらいにしか思わなかった。

独り道灌だけが着々と蓄える早雲の力を危険視していた。早雲も自分に向けられている道灌の注視を知っていた。知りながら決してその注目の視線をはずさせようとはしなかった。否、注視されればされるほど早雲は早晩、事が自分に有利に動くであろうと計算し尽していた。それゆえ狩を装い自国の富強を誇示していたのだ。

これは明らかに自分というよりは、上杉に対する平和を装った挑戦であり、罠であることを道灌は見抜いていた。見抜いて熟知しながら、その罠に立ち向かわなければならない。そうしなければあの凡庸揃いの今川家も、この上杉家も、今に早雲に一呑みにされてしまうだろう。

道灌は得意の築城によって、江戸河越の二城などに大改修を加え、常に怠りないよう、防備の大切さを説いて廻った。そして山内上杉と扇谷上杉両家の反目が無益なことを提言して憚らなかった。だが一向に両上杉家の暗闘は止まない。

今川家における早雲の活躍の如く、領民に対する善政の如く、道灌に対して上杉家領民の信頼と威望は日に日に強まってゆくのだった。それにつれて早雲のひく罠も刻々と狭められてゆく。

老体の大切を以って当家再興度々に候歟、又今日に至るまで両国完全に御かかえ候は、道灌の功あらず候やとか、

扇谷上杉に一人の道灌あらば、関東の覇権を収むる難に非ず

と言って、道灌こそお家再興の功臣であり、扇谷上杉に道灌一人いるかぎり、きっと関八州の覇権を確立してみせるというのだ。

しかし、この傲慢とも思える道灌の言葉こそ、上杉家否関東の覇権を賭けたものだった。

果たせるかな、前言は日頃の彼の人望と共に扇谷上杉の主君定正を痛く刺激した。後の一言は山内上杉の顕定を恐れさせた。共に暗愚なでき損いの人物たちをである。顕定は定正へ讒言に及んだ。

道灌に異心あり

と。愚かにも定正はこれに乗った。

こうして一代の名君にして、上杉家にとれば至宝ともいうべき道灌を、浴槽の中で暗殺してしまったのだ。

「当家滅亡せり」これが道灌最後の言葉である。

早雲のしかけた罠に、上杉家全体がまんまとかかってしまったのだ。

時は文明八年（一四七六）、早雲興国寺城主となってから十五年の歳月が経っていた。

出家の身に

延徳三年（一四九一）を迎えた。時に早雲五十九歳である。もうこの年令では何の雄図があろうか。人間古来七十は稀れといわれるが余すところわずか十年。それに城中に生れた一子氏綱はようやく五歳になったばかりである。

も早、早雲の大志は捨て去られたものと、誰の目にも映った。"頭髪まさに雪と化す"年代であった。

この年、堀越公方の政知が逝去。後妻の子に公方家を継がせたので、先妻の子茶々丸がこれを憎み、後妻とその子、二人の老臣を殺してしまう騒動が起きた。それは堀越領民の怒りを買うことになる。これを城中で聞いた早雲は家臣たちに言った。

「わしは余命いくばくもない。今さら殺伐な戦いという柄でもない。頭を丸めて世を安穏に送りたいと思うばかりじゃ。ついては幼い氏綱を扶けて忠勤に励んでもらいたい」

早雲は剃髪し"早雲庵主宗瑞"と号した。

墨染の法衣を身にまとった早雲は、

「わしは湯治にゆく」

という言葉を残し、独り飄然と城を後にする。家臣たちは竹笠で面を隠した早雲の後姿をただ呆然と見送るばかりだった。

早雲は伊豆に入り、堀越公方の館のあたり、修善寺温泉の湯治客となった。そして、そこで知り合う農夫や樵夫などと面白可笑しく談笑しながら、伊豆四郡の地形や要害地、各地に分散する武士や豪族の名まで、細大洩らさず聴き取った。

「自分は老身のため人と話すのが何よりの楽しみでな」と言い、辺りを歩き廻る時は、

「霊地巡拝が老いの身の慰めでのう」

と言った。五十九歳の老いぼれ爺にどんな野心が秘められているかなど、伊豆の豪族たちには思いもよらなかった。

こうして病老の湯治客となって、悠々と幾十日を過し、早雲は興国寺に帰ってきたのだ。

早雲起つ

帰るやいなや早雲は法衣をかなぐり捨て、

今こそ時なれ、合戦の用意あるべし

と叫んだのである。城中の者は誰と合戦をするのか、皆目わからない。

早雲は陣頭に立つと、全軍を叱咤して、かねて熟知した道を長駆。伊豆に攻め入ったのだ。

そして驚くべし、音に聞こえた堀越公方の本城に襲いかかったのである。敵も驚いたが味方も驚かざるを得なかった。

火を城の四方に放つと、息もつかせず攻めに攻めた。不意の夜襲だったので、城兵も何が何やらわけがわからない。領民の心も離反していたから、城を死守する者など誰もいなかった。

城主茶々丸も命からがら城を脱出したものの、大守山の願成就院という所で自害して果てた。一夜にして伊豆の名門堀越公方はここに滅亡した。

伊勢の片田舎を数人の男たちと飛び出して二十三年。早雲はその八年を今川家の食客として、その十五年を興国寺の小城に身を伏せ、そして今、伊豆一国を疾風迅雷の早業で攻略した。

早雲の突然の出現に伊豆の領民は天狗のように恐れおののいた。だが、時が経つにつれ、少しずつ事情が変わっていった。

伊豆は古来から兵乱の多い土地である。関東から東海道への関門に当り、地形が天然の要塞を形成していた。関東で事を成そうとする者は、先ず伊豆に目をつけたから、領民こそいい迷惑であった。

その領民の心を看破した早雲は、ここでも興国寺城下で行ったと同じ善政を施したのだ。すなわち

仮令伊豆全て我が領有すると謂えども、堀越御所の旧領の外決して不取所無し。地頭始め総て土地所有旧態のままとす

と言うのであった。

韮山城に入った早雲はここを居城とした。

時に六十一歳。早雲は北条の姓を名乗ったといわれる。それは伊豆が北条氏発祥の地であり、北条氏の遺名遺徳は今なお関八州に深く浸透していたためだ。名前までも攻略の具に用いるなど、いかにも早雲らしい。

上杉家攻略

そして次に早雲が狙った獲物は何か。それは上杉家をおいて他にない。ぼんくらな二人の主君が未だ相争っているのである。

延徳三年（一四九一）は明応元年と年号が改まった。早雲は先ず一大の知恵袋大田道灌がいなくなった扇谷上杉の定正に接近してゆく。定正の忠実な味方であり家臣であるかのようにみせかけて、武蔵相模に侵入。山内上杉顕定の諸城を片端から攻め落としていった。

気をよくしたのは定正で、早雲を大いに頼りとした。

ここで一番重要な地点は小田原だ。小田原は定正の家臣大森氏頼が守備していたため、早雲は自由に通過できた。だが、文武両道に練達した名将大森氏頼は、早雲の野心に危惧を抱いた。それを定正に告げたが、早雲の手柄と力量に目がくらんでいた定正は聞く耳をもたなかった。それほどに定正に味方する早雲の戦さぶりは素晴らしかったのだ。

さすがの氏頼も早雲のその働きぶりには沈黙するより仕方がなかった。

明広三年（一四九四）十月、定正は軍勢を高見原に進め、顕定と荒川を隔てて対陣した。早雲も兵を率いて韮山を発し、これに加わった。定正は早雲の出現に勢を得て一挙に敵の本陣を衝こうと、川の流れを乱して進むうち、不様にも溺れ死んでしまったのだ。五十一歳であった。

その子朝良はどうしようもない不肖の人物で人望がなかったため次第に兵も離れた。こうして扇谷上杉家は一段と衰え出したのだ。そしてその年、定正の後を追うように小田原城の氏頼も死んだ。

その子藤頼が跡を継いだが、これまたすこぶる暗愚な

人物だったので、父が遠ざけていた早雲に自ら打ち解けていったのである。

明応四年（一四九五）、早雲は藤頼に使いを送る。

近頃当国の山にて鹿狩りを致せし所、狩遁れて皆箱根山に集まり申候。御領分踏み荒らせし事不礼の至りなれど、此方勢子貴国より箱根山に入れ鹿此方へ追い出したく存じ候。御許願下るなれば大幸御座候

と書面に認めた。

早雲の胸奥を知る由もない藤頼は、これに快諾を与えてしまったのだ。早雲は兵士数百名を鹿追の勢子に仕立て、夜陰に乗じて鹿狩りと見せかける。箱根山から一気に駈け下り、小田原城に乱入した。城兵の多くは両上杉の合戦に出向いて留守だったので、ひとたまりもなく落城してしまった。

これで早雲は相模半国を領土に加えたことになる。

ここに至りようやく両上杉家も早雲の恐ろしさに目覚め出し、互いに力を合わせるべきだと悟ったのだ。

だが、時すでに遅し。早雲の謀略の罠は両上杉の喉元を締め上げてゆく。

時に早雲六十三歳。年と共に早雲の運はますます隆盛となり、その智略の業も冴えてゆくのである。

永正四年（一五〇七）、越後の上杉氏の家臣長尾為景（謙信の父）が主家を滅ぼした。

そこで山内上杉の顕定が征伐のため越後に向ったが、あえなく敗北。もうこの頃になると運は転げるように早雲のもとにやって来た。

次いで早雲は武蔵経営の邪魔になる相模の三浦義同を攻め滅す。三浦氏は鎌倉時代からの豪族で、扇谷上杉に属していた。この戦は実に長く続き、永正十三年七月までかかった。

打つものも　打たるるものも土器よ
　砕けて後はもとの土くれ

という何とも無念極まりない辞世の一句を残して、三浦一族ことごとくが自害して果てたのだ。

時に早雲八十五歳であった。

三浦が滅んでいよいよ焦る江戸城主朝良は、自ら兵を率いて相模に入ろうとしたが、早雲は鎌倉までおびき寄せて迎え討ち、敗走させた。

こうして上杉氏を追いつめていったが、残るは関東の北にある堀越公方と並ぶ名門、上杉一族の古河公方である。

ここでも早雲は得意の権謀術策を用いるのだ。余り上

杉を追いつめずに、滅ぼさない程度に留めた。そして古河公方の政氏に使者を送って伝える。

「上杉は古河公方に異心を抱いている。これを滅ぼす機とみる。上杉はもう滅亡寸前で一捻りではないか。今こそ古河公方が取って代わるべきと存ずる」

と盛んにけしかけた。このような上手い話を持ちかけた場合、人間の心は二つに分かれることを早雲は計算していた。一つは一そう驚戒を強めようとする気持と、二つには誘惑に乗ってみたい気持とに。

果たせるかな、政氏は早雲を驚戒した。だが、その子高基はその言葉に乗った。もう後は簡単である。政氏にはますます驚戒させるように、高基にはよりいっそう味方になる事の利益を示してやればよい。やがて親子は不和になるだろう。行きつく処は兵を交えて、互いの勢力を減じ合うだけだ。

事実、その通りになり、政氏、高基親子は戦さを交えて内乱になった。あとはただ自滅を待つだけである。

名家の争いだけに、残る関東の諸族も次第に二派のどちらかについて、勢力をすり減してゆく。早雲にとってはまさに高みの見物だ。これほど面白く見事な戦さがまたとあろうか。わが身は一兵、一物だに損をしないのだから。

早雲逝く

永正十六年（一五一九）八月十四日、早雲は戦乱に明け暮れた長い一生を韮山城で閉じた。享年八十八歳であった。

子の氏綱もすでに三十五歳に達し、父の薫陶あってか深謀秘策に長けた立派な武将に成長していた。

もうこの頃になると、九州は島津貴久、中国は毛利元就、山陰の尼子久光、尾張の織田信長、東海の今川義元、三河の徳川家康、美濃の斉藤道三、甲斐の武田信玄、越後の上杉謙信、東北の伊達正宗など、名だたる戦国武将が輩出していた。その中にあっても氏綱は優るとも劣るものではなかった。

早雲は何の心残りもなく死んでゆける自分を幸に思ったことだろう。早雲の死後も関東の自滅の戦いはまだ続いていたが、当然、氏綱の勝利に終った。早雲に締め上げられた上杉氏は氏綱の代に自滅したのだ。そして、その子氏康の時にはもう関東からは影も形も消えていた。

消え果た関東のド真中には、「当家滅亡」と叫んだ太田道灌の築いた千代田城が今なお燦然と遺っているのは歴史の皮肉だろうか。

伊勢早雲は針をも倉に積むべき程の蓄へ仕り候ひつる。蹤然武辺につかふ事は玉をも砕くべう見えたる人にて候由、宗長常に語り候

早雲を語る場合、常に引き合いに出されるこの有名な言葉は『朝倉宗長話記』の中の一節だが、宗長は当時の連歌師で、早雲に親しく会っていた人であるから、適確に早雲像を言い当てているだろう。

平素は針ほどの小さなものでも決して無駄にせず、倹約蓄財を心がけ、いざ合戦になると、銭はおろか宝玉をも砕くことを惜しまなかった人である。

というのだ。

また蛇足ながら付け加えると、早雲の学芸好きは際立っていた。とりわけ『太平記』を愛読し研究した。今川本による「太平記」に永正二年の奥書があるが、それによると早雲は種々様々な異本を集めて自ら校合。なお是非を決するのに誤りがあってはいけないので、自身で校合した本を足利学校に送って批評させ、その是非を決定させたりしている。

東鑑の「北条本」は、小田原開城の際、黒田如水が得意の「調略の特技」である講話談判の労をとったとき、戦国大名の中でただ一人北条氏が頑強に抵抗したにもかかわらず、極めて戦後の罰が軽かった。それは如水に負う処が多かった謝礼として贈られた早雲の佩刀及び陣具を、徳川家康に献じたためでもあったろうか。

策士黒田如水に策士の元祖のような早雲遺愛の刀が贈られたというのも面白い。案外如水は早雲の戦術策略など、密かに学んでいたのかもしれない。そして先輩格としての早雲に免じて、その子孫の敗戦の処罰を軽くしてくれたのかもしれない。

完

花心

月岡兎平

1

信州の、ある夏の夜。薄暗い御殿の奥。

塩田藩七万石藩主・東藤輝信は、英邁と謳われた二十四歳の青年大名である。しかしその表情は曇っていた。

「余が直々に、土岐田村の代官所に目付を差し向けたが、その目付が斬殺された…」

「なんと」

輝信の前に控えていた家臣は、驚きの声を挙げた。

「公にしてはいなかったが、明日の評定で土岐田村の惨状を評議をいたそう。これまで判明せしこと、あらためて文書に起こしておいてくれるか」

「かしこまってござります」

その夜遅く、御殿医が塩田城に呼び出された。

御殿医は、卒倒しそうになった。

天井に向けて両眼を見開き、口から血を吐いて冷たくなっている東藤輝信の姿が、そこにはあった。

遺体はきれいに拭われ、死因の特定は行われなかった。毒殺となれば、幕府も見過ごさない。「政道不行き届き」ということでお取り潰しの絶好の口実になる。それゆえ、死因に不審を持つ者もいたが、声に出す者はいなかった。

東藤家の菩提寺　厳宗寺の本堂に読経が響き渡る。その読経が蝉しぐれに乗って、わずか十六歳で藩主にならねばならない少年の心に、無遠慮に入り込む。

（兄上は、あんなにお元気であられたのに…）

信州・塩田藩主、東藤壱岐守輝信の弟・輝幸は、まだあどけなさの残る容貌に汗を流しながら、茫然と兄・輝信の位牌を眺めていた。

（とんでもないことになった…）

兄に子はない。ということは、必然的に十六歳の輝幸が次期藩主になる。

（わたしが、藩主に？）

自信などあろうはずがない。しかも一部に今回は毒殺の噂がある。殺されるのも恐ろしいが、藩主となることの方がさらに重い。輝幸は先々のことを思うとただそれだけで、膝に置いた両の手がガタガタ震えてくる。こぶしを強く握っても、逆に震えが激しくなる。仕方なく、両こぶしを背中の方に隠した。

と。誰かが輝幸の震える手に、そっと触れた。

「ん？」

振り返ると、少女のような美しい女が、後ろから手をのばして、輝幸の震える手に自らの細く白い手を置いた。そして澄んだ瞳で輝幸を見つめていた。

「寿恵…」。輝幸は読経の最中に、思わず声を漏らしてしまった。

輝幸の正室・寿恵は、まだ十四歳。御牧藩主・松平善吾の二女で、二人はつい半年前に祝言を挙げたばかりである。輝幸の母が病に臥せっていたため、せめて仮祝言だけでもと、若い二人は一緒になった。

寿恵は、優しいまなざしで輝幸を見た。

（大丈夫、大丈夫です）

そう、寿恵の目が語っていた。

輝幸は寿恵と祝言を挙げて以来、時々不思議な感覚を覚えた。自分はまだ十六歳だが、寿恵はさらに若い十四歳。寿恵が十八になるまで褥は共にしないということになっているが、一応、夫婦である。

年上であり夫でもある輝幸が、どうしたものか寿恵と一緒にいると、まるで自分を可愛がってくれた乳母と共にいるような安らぎを覚える。いまも、震えていた両のこぶしは、寿恵の細く心地よい冷たさを持った手が触れただけで、落ちつきを取り戻した。

その様子を、本堂に居並ぶ藩士たちが見ていた。

葬儀のあと、幾人かの藩士が城に戻る道すがら、無駄口を叩きあった。

「見たか、輝幸さまと寿恵さまの、」

「おお、仲睦まじいのは結構だが、あれはどうもいかんなあ。ご藩主が葬儀で震えるというのは」

「無理もあるまい。立て続けに二人の兄君が亡くなられて、まさか三男の輝幸さまが藩主になるなど、ご本人すら思うてはおられなかったろう」

「だが亡くなられた輝信さまは、さすがであったのう」

「御三家水戸様が跡継ぎの無い時、『是非水戸徳川家の養子に』と、外様の東藤家に懇願されたのだからのう」

「して、輝幸さまはどうじゃ」

「…」

話が輝幸のことになって、みな口をつぐんだ。新しい藩主について論評することが怖かったのか。いや、そう

ではない。「良い方だそうだ」。一人が口にしたこの言葉がすべてだった。

男子三人兄弟の末っ子として生まれ、将来の藩主とは考えられず、そのため誰もほとんど輝幸に注目していなかった。ただ「本を読み釣りをし、まるで若隠居のようにお暮らしだそうな」という程度の話は知られている。

「だがまあ、伊庭さまがおいでなら、どなたが藩主でも藩政は変わるまい」

「それはそうじゃ」

「おっと、それまでにしておけ」

堀の横を駕籠が通りかかったのを潮時に、藩士たちは話をやめた。

2、

「伊庭兵部さまとは、どのようなお方ですの？」

夕餉の席で、寿恵が首席家老について輝幸に尋ねた。

「うむ。真面目な男だ」

「真面目？」

「顔がな、」

端正で、もし儒学者の顔を描けと言われれば、伊庭兵部の顔をもってくれば足りる、と輝幸は言った。

「父や兄たちは、たいそう頼りにしていたようだ」

輝幸の父・輝虎が、小姓であった伊庭兵部を重用し、微禄からたちまち普請奉行、目付、大目付、そして四〇歳で首席家老。トントン拍子に出世していった。理財に明るく、交渉事も得意というのが主な理由であった。裁きは公平で、困った者には何くれとなく援助をし、いわゆる実力者が持つアクの強さも持っている。厳しい財政の中で藩を維持していられるのは伊庭さまのお陰、というのが塩田藩の世論だった。

「兵部はまつりごとに詳しいのだ。たとえば、」

きょう表書院での出来事を寿恵に語った。

輝幸は毎日、首席家老の伊庭兵部から与えられた文書を読み、署名をし、昼餉を食べ、次席家老から報告を聞き、夕方御殿に戻るという日々を繰り返していた。

「殿。御退屈でありましょうな」

首席家老・伊庭兵部は、謹厳な顔のまま、署名をしている輝幸に語りかけた。輝幸は、

（こんな仕事、自分の名が書ければ五歳の子でもやれるではないか）

自分がただ言われた通りに仕事をしているだけで、優れた能力を発揮しているのでは無いことくらいわかる。そんな気持ちを伊庭兵部に見透かされた。

「いや、これもお勤め」

「そうお考え戴ければ幸いです。殿、兵部はこれから余計なことを申します。うるさいとお考えなら、すぐにご

制止を」

そう言うと兵部は姿勢を正し、謹厳な顔のまま、輝幸に語り始めた。

「まつりごととは、即ち領民の幸せを図ること。領民の幸せとは、富める者も貧しい者も、飢えずに暮らし続けることにござる。つまり、領民の最低限の暮らしを守ることが藩の役割。兵部はかように考えております」

伊庭兵部の、儒学者のような口ぶりを真似ながら輝幸が寿恵に語ると、寿恵はクスクス笑いながら、

「まあ、ご立派なことを仰せですね」

「うん。まあ、立派な男だ。ただなあ、」

「なんでございます？」

「寿恵。わたしは凡人だ。だから、藩の文書を一度読むだけではなかなか理解できぬ。そこでな、気になった文書は、兵部に内緒でもう一度持って来て、読んでいる」

それは寿恵も気づいていた。

藩主になってからの輝幸の生活は、それまでと大きく変わり、暁天の星が見えるころには起きて身仕度をし、書見をしてから勤めに出、御殿に帰ってからも書見を続けている。ほとんど休む間もないほど仕事に打ち込んでいるのだ。

「存じております。でも、ほどほどになさいませんと」

「わかっておる。それはよいのだが、文書の中でどうも合点がいかぬことがある」

「なんでございます？」

「寿恵。なぜ同じ領内で年貢の高が違うのだ？」

「さあ」

他藩出身で十四歳の寿恵には難しい質問だった。

「でも、輝幸さまが疑問に感じておられるのでしたら、伊庭さまにお尋ねなすってはいかがでしょう？」

「うん、そうだな。明日にでも聞いてみよう」

翌日、文書改めの前に、輝幸は伊庭兵部に尋ねた。

「兵部、尋ねたいことがある」

「何なりと」

「なぜ同じ領内で年貢の高が違うのだ？たとえば、坂場村では藩に四、民が六となっているが、市村では逆に藩に六、民が四としている。土岐田では、藩が七、民が三で、これはいかにもおかしいと思うのだが…」

伊庭兵部は少し意外な顔をした。

（文書の中身を読んでおられるのか？政治に興味など無く、意味を理解せずに署名をしているだけ、と思っていたが…。まあ、よい）

「殿。坂場の年貢が少ないのは、昨年の興津川氾濫でいまだ復興できず、藩として慈悲を以て決めました。土岐田は藩内でも有数の米どころ。年貢高は取れ高に相応のものとなっております。恵まれた者が、困窮した者を助

ける好例でございます。こうして不幸を食い止めます」
「うーん、そうか。よくわかった」
輝幸は、伊庭兵部の「不幸を食い止める」という一言が気に入って、それ以上は質問しなかった。

「と、いうことだそうだ」
輝幸はその夜、夕餉の席で寿恵に事の顛末を話した。
「そうですか。そういうこともあるのですね」
寿恵は答えながら、ちょっとわからないような顔をして、首をわずかに傾げた。寿恵は疑問が解けないと、いつもこういう仕種をする。
「何か思うことがあるのか？」
「いえ、なにも。それより輝幸さま、明日は、お墓参りでございますね」
「うん」
「もし宜しければ、坂場と、土岐田を見に参りませぬか？ご藩主におなりあそばしてから、ご一緒に出かける機会もございませんでしたので、ぜひ藩内を見て回りとうございます」
「おおそうか。わたしも仕事が続いて、気晴らしでもしようと思っていた。なにか面白い趣向でもあるのか？」
「寿恵が、ひとつ思いついてございます」
「なんじゃ？」
「お寺で装束を変えて、お忍びで坂場と土岐田に参りませぬか？」
寿恵はいたずらっぽくほほ笑んだ。

3

翌日のお昼を過ぎた頃。旅姿の若い侍二人と武家の娘らしき者が、厳宗寺から出て行った。若い侍の一人は輝幸、武家の娘は寿恵である。もう一人は。
「若様、早く戻りましょう」
寺を出て早々、早く帰ろうと言いだしたのは、供を仰せつかった宮野淳平であった。淳平は、勘定吟味役・宮野理平の息子で、幼い時から輝幸の遊び相手として一緒に育った。
「淳平、兵部にはわたしから謝るから勘弁せい」
「いえ、ご家老は怖くありませんが、父に知れればタダでは、」
「理平か。あれにはわたしもかなわん。はっはっは」
そんなやりとりを、寿恵は楽しそうに眺めている。
寿恵は、輝幸がどれほど無理をして藩主の務めを果たそうとしているのか、痛いほどわかる。
自分は藩主の器ではない、自分は父や兄のような異才の持ち主ではなく、平々凡々たる者である。だから人の倍も三倍も頑張らねば責務を果たせないのだと、辛さを絞り出すように寿恵にぶつけてきた。そんな輝幸の言葉

を聞くたびに、寿恵はまるで自分のことのように辛くなって、最後には泣きだしてしまったこともある。
それが、少しずつ時間がたつにつれ輝幸も藩政に慣れ、不安が減ったのだろう、愚痴も少なくなってきた。
凡人は凡人だと気が付いた瞬間から、賢人への道を歩み始める、と、寿恵は以前、僧から聞いたことがあった。
(輝幸さまは、その出発点にお立ちになっておられる)
決して、輝幸が名君になることが望みではない。輝幸がきょうのように笑顔を見せてくれる、それだけで寿恵は幸せな気分になるのだった。
一行は、坂場村に着いた。興津川が氾濫してちょうど一年になる。見たところ、被害らしい跡はどこにも見当たらない。
「ちとものを尋ねるが、」
畑仕事をしていた農夫に、淳平が声を掛けた。
「昨年、川の氾濫でずいぶん難儀したときくが」
「へえ。まあ大したことは。お侍は、お役人さんで？」
「いや、こちらはさる旗本のご兄妹だが、母方の親戚がご当地塩田藩のご藩士にて、訪ねて参った」
淳平は疑われないように作り話をした。
「ところで、年貢が軽くなったと聞いたが？」
「ああ、少しね」
「少し？少しとは無礼であろう！」
淳平が急に怒り出したので、農夫はびっくりした。塩田藩は基本的に六公四民。それが四公六民になるのは、大きな減税である。農夫はちょっと不服そうに、「怒ることはねえでしょ。だって、あんまり変わらねえんだから」そう言って、また畑仕事に戻ってしまった。
次に出会ったのは、身ぎれいな婦人だった。同じ質問をすると婦人は、「ええ、そりゃもうお陰さまで、ずいぶん楽になりましたよ」。最初に会った農夫以外、ほとんどの農民たちが感謝の言葉を語った。
輝幸一行は、時間がなくなったので土岐田には向かわず、寺へ戻った。
「淳平、坂場はよかったのう」
「はい。年貢が軽くなって、民も喜んでおりましたね」
「だがなあ、どうもなあ」
「何か？」
「何がどうとは言えないが、どうもなあ」
引っかかるものがあると、輝幸は言った。
「寿恵はどう思った？」
寿恵はまた首を少し斜めにして、
「はい、寿恵にはよくわかりませぬが、でも、」
「でも、なんじゃ」
「皆さん、本当の笑顔でいらしたとは思えません」
あ、と輝幸は思い当たった。そうだ、農夫たちの表情だ。最初の農夫にはウソがなかったが、あとの連中はどこかよそよそしい。それで自分も引っかかっていたのだ。

「しかし寿恵さま。表情がどうあれ、村は栄えていたように見えましたが」
「ええ、たしかに」
寿恵と淳平の問答を聞いて、「ならばヨシとすべきかもしれん」と、輝幸は坂場村の感想をひとまず終えた。
城に帰ってからも、なにか引っかかって仕方が無かった輝幸は翌日、淳平と淳平の父である宮野理平を呼んで昨日の出来事を語った。勘定吟味役としての意見を聞きたかったのである。
最初「寺を抜け出し、忍びで」と話を聞いて驚いた理平は、淳平を睨みつけたが、すぐに真剣な顔になった。
「殿、坂場に行かれたことは、藩内でどなたが御存知でありましょうや」
「そち以外、誰にも喋っておらぬ」
「どうか、ご他言なされますな」
「何かあるのか？」
理平は少し考えてから口を開いた。
「坂場と土岐田には、とかくの噂がござる。が、いまは何の確証もござりませぬ。とりあえずわたくしが土岐田を調べまする。お話はそれからということで」
「やってくれるか」
「はい。ご命令とあらば」
宮野理平は、本来なら家老になるべき手腕と忠誠心を持った人物だったが、世渡りのうまい人物ではない。そのため出世街道から外れて、記録所役という閑職に長年追いやられていた。それが、亡き輝信直々の指名によって、ついひと月前に勘定吟味役を仰せつかったのである。
堅物だが、たとえ上司でも藩主でも、間違っていることははっきり間違っていると言う男であった。
三日後。理平からもたらされた土岐田村の報告は、信じられないものであった。
理平は自ら土岐田に出向いた。藩内でも有数の米どころであったはずの土岐田は、文字通り荒れ放題。
「これは、どうしたことか…」
理平は人を探して訳を聞こうとした。
やっと見つけたのは、崩れかかった家屋に臥せった老女だった。否、聞けば三〇を少し過ぎたところだと言う。食事が満足にできないために、やせ細ってしまったのだ。
「一体何があったのだ」
理平の問いに、返ってきた答えは衝撃的だった。
「藩のお役人に、みんな殺された」
鈍器で殴られたような衝撃が、理平を襲った。
詳しく聞けば、こういうことだった。
ある日、代官所から通達がきて、八公二民の過酷な年貢取り立てを行うと言われた。ようやく収穫を終えた直後を狙ったお触れ。庄屋をはじめ、代表者が何度も代官所に足を運び、それでも取りあってくれなかったので、思いあまって殿さまに訴え出ようということになった。

当時の藩主は、亡くなった輝信である。
英邁な気質と言われていたから、きっと話をきいてもらえると強訴の準備をしていると、そのことが露見して代官所の役人に主だった者が捕まり、「足腰立たないほどの拷問を受けて帰されたのです」と、女は涙ながら理平に呻いた。強訴は死罪のはずだが、死罪にするためには藩主の許可がいる。だから生かして帰したのだ。しかし、本当の地獄はそこからだった。八公二民どころか、翌年に蒔くためにとってあった種もみまで召し上げられ、ほとんどの家が一家離散となった。
ここまでの話を理平がしたところで、
「まて理平！」
輝幸は思わず叫んでしまった。
訳がわからない。
「それは、誰の命令なのだ？」
「いま調べておりますが、代官所を動かせるのは、そう何人もおりません」
「しかしわからぬ。そんなことをして、一体何の得があるというのじゃ」
「それは…」
言い淀む理平を、輝幸は促した。
「理平、わたしはそちにとって頼もしい藩主ではない。だが真実を知れば、臆せぬ。だから、教えてくれ！」
理平は輝幸の真剣なまなざしに、重い口を開いた。
「今はわかりませぬ。しかし誰かが得をするためにやったこと。からくりは簡単。豊かな村の年貢を高く設定し、藩に納める。駄目な村はいくら年貢を上げても収穫は増えませんが、収穫の多い村は、工夫と努力を重ねて土から育てなおしております。そういう村は、年貢を上げるともっと努力をする。だから豊かな村から奪い取る。困ったことです。しかし、さらに問題なのは、」
理平は膝を前に進め、声を落とした。
「たとえば民には八公二民と称し、実際には七公三民とする。差し引き分を、誰かが懐に入れております」
「なんと…」
「しかも巧妙なのは、たとえば坂場村のように、水害の起きた村の年貢高は落とします。表面的には六公四民を四公六民に。で、実際には五公五民として、ここでも差し引き分を懐に入れる。これを考えた者が悪賢いのは、坂場では農夫が実際に六公四民から五公五民に負担が減っていることです。これなら文句は出ませぬ」
「しかし理平。土岐田のように、余分に高い年貢を取られるところは黙っておるまい」
「ですから、代官所をつかっておどかしたのでしょう」
「わからぬッ」
輝幸は、怒りと疑問で顔を真っ赤にした。
「そんなことをすれば、土岐田のように荒れ果てるだけではないか！」

「殿。おそらく、これはここ数年のことではござらぬ。我が藩が長年にわたってやって参ったことで、これまではそのさじ加減がうまくいっていたのでしょう。土岐田がこうなったのは、藩の財政窮乏の折から、どうしても年貢を増やす必要があり、それで強硬な手を使ったと考えられます」

輝幸は考え込んだ。

藩を運営するには、こうした差別的な年貢高は仕方ないのか？　無論、私腹を肥やすことは論外だが…。

「理平、そういうさじ加減は、必要なことなのか？」

「これはあくまで私の考えですが、土岐田の庄屋は、土、苗床、種、水、風、日当たり、作物のそだつ要因すべてを学びつくし、そして百姓どもが働き詰めでやっと今の豊かな村ができたのです。高い収穫高には、そういう努力と工夫がある。もし藩が、それを評価して豊かさを認めれば、他の村も必ず真似をしてご領内はすべからく豊かになりましょう。他方、もし藩が『お前は豊かだからもっと寄越せ』と、民の豊かさを奪い取れば、働く意欲も工夫する気力も失せてしまいます」

「そうか。私もよく考えてみる。理平は土岐田の件に絞って、誰が裏で糸を引いていたのか、しらべてくれ」

「承知仕りました」

4

翌日。

「宮野理平、切腹」

という知らを受けたのは、輝幸が朝餉をとっている最中だった。輝幸は、持っていた茶碗を落とした。

遺書は二通。藩主・東藤輝幸に宛てたものと、首席家老・伊庭兵部宛てのもの。ほぼ同じ文面だが、内容は、驚くべきものだった。

差別的な年貢高をかつて進言したのは自分である。土岐田への過剰な負担は自分の一存でやった。今回の騒ぎは宮野理平の過ちであり、輝幸さまには申し訳なく、死を以て謝罪するので、家名断絶だけは許してほしい、という内容だった。

輝幸は何が何だかまったくわからなかった。

理平は、藩の裏のからくりを調べていた。それが、犯人は自分であるという告白をして自害するなど…。

事情を詳しく知るために大目付を呼んだが、「責任をとって自害」ということ以外何もわからない。

息子の淳平を呼び出そうとしたが、詮議の最中につき、しばらくお待ち下さいと言われ、会えたのは夕方だった。

書院裏に連れてこられた淳平は、縄で縛りあげられ、髪はザンバラ、顔があれ上がり、別人のようだった。

「者ども、さがれ！」

輝幸は人払いをすると、淳平の縄を解いた。

「淳平…」

淳平は、目をそらして何も話さない。

「淳平、わたしが、わたしがいけなかったのだ…」

輝幸の懺悔に、淳平は「おぉ」と、血を吐くような辛吟をして、やっと輝幸と目を合わせた。

「淳平。わたしは理平の願いどおり、家名断絶にならぬよう、全力を尽くすぞ」

「いいえ、それはなりませぬ」

淳平は、かすれてはいたがしかし、はっきりとした口調で言い切った。

「若さま。仮に父が罪を犯したとすれば、家名断絶の赦しなど絶対に乞いません。父は自害などしておりません。嵌められたのです。私はどうなっても構いません。このまま切腹を仰せつかっても構いません。ですが、どうか、父の無念だけは晴らしてください」

「なにを言うか。わたしがそなたを見捨てるとでも思うてか」

「若さま、敵はすでに、次の手を考えております。藩の勘定吟味役を自害に見せかけ殺す連中です。家名存続を許されれば、敵は殿を責めます。そしてわたくしに手を差し伸べれば、それを理由におそれながらご自身の押込(監禁)もありえます。若さまは藩のただ一つの希望です。どうかわたくしのことは忘れて、二の矢を防ぎ、反撃の機会をお待ち下さい。どうか、どうか…」

そこまで言うと、宮野淳平は泣き崩れた。

輝幸は、淳平の肩をだくことしかできなかった。それでも目付に対して、「何らかの処分の前には、必ず自分に知らせるよう。自害など絶対にさせてはならぬ」と厳しく言い渡した。淳平が自分に迷惑をかけないために自害することは大いにあり得たし、また自害に見せかけて淳平が殺されることも考えられたからである。

その日の夜。夕餉の席で輝幸は、「自分が理平を殺したのだ」と言って、涙をぽろぽろこぼした。

「輝幸さま…」

見かねた寿恵は、「十八になるまで褥は別」という約束を自ら破り、輝幸の寝所に入った。

「かまいませぬ、思い切りお泣きなさいませ」

声を殺して泣きじゃくる輝幸を、寿恵は褥の中で優しく包み込んだ。

一晩中、何もしゃべらず、寿恵の胸に顔をうずめていた輝幸は、翌朝淳平の無事を確認すると、布団の上にあぐらをかいて、寿恵にむかって話し始めた。

「わたしは藩主の器ではないと、昔から言われていた」

「誰にでございます？」

「父や兄、それに家老どもも影ではそう囁いていた。私は聞いたのだ、この耳で」

「殿、その、『器』とは、何でございますか？」

「その方まで、わしを蔑むのか！」
「いいえ、寿恵は幼いゆえ、器の意味がわかりませぬ」
面倒になった輝幸は、「器とは、入れ物のことよ」と、あしらうつもりで寿恵に言った。
「ああ、なるほど。何かを入れるのですね。ではご藩主の器とは、何を入れる器でございましょうか」
「さて…。まあ、人の話や、人の悲しみや、人の喜びなどを、受け止めて入れるのであろうなあ…」
「それなら殿は、見事な器ではござりませぬか！」
「なぜそのようなことを言うのだ」
「殿は亡くなった宮野理平さまのために、一晩中泣いておいでした」
「あたりまえではないか。わたしが命じなければ、理平はこんなことに首を突っ込まず、殺されることもなかったのだ」
「でも普通の藩主は、家臣のために泣くことなど、ございますまい」
「それはな、寿恵。主君たるものは『私』の感情で動いてはならぬからだ」
「どうしてでございます？」
「そうしなければ、公平な判断ができまい」
「そうかしら。だって、親しい家臣が亡くなれば、悲しいでしょ？その死を悼んで泣くことは、悪い事ではないと思います」
「そなたは女だから、そういうことを言うのだ」
「悲しくて泣く理由に、男も女もございません」
頭の回転が早いというのは、うるさいものだと輝幸は思った。が、決して心地の悪いものではない。悲しみに打ちひしがれた胸に、寿恵の優しい声は、新鮮な空気のように入り込んできた。
「話を元に戻そう。お前はさっき、『普通の藩主は、家臣のために泣くことなどない』と言ったではないか。所詮わたしは、藩主の器ではないのだ」
「いいえ、そうではありませぬ。わたしが申し上げたのは、殿は『普通の藩主』などという小さな器ではなく、『立派な藩主』の器をお持ちだと、申し上げたかったのです」
家臣の為に泣く、自分に責任を感じて泣く、こんな誠実で勇気のある藩主がいるでしょうか、というのである。
「寿恵、もういい加減にせよ。お前がわたしのことを良く言ってくれるのはありがたいが、本当にわたしは藩主の器ではないのだ」
「輝幸さまに必要なのは、宮野理平どののような忠義の家臣と、自信ですね。わたくしの琴の師匠は『自信をもって必ず弾けると信じなさい。そうすればうまくなる』と言っておりました。もし輝幸さまが立派な藩主になる自信がおありでないのなら、自信を持たれるまで、わたくしが輝幸さまの自信になります。いいですか。きょうからわたくしが、輝幸さまの自信です。何があっても、わたくしがいる限り、自信を失うことはありませぬ」
「なぜ、そんなことが言えるのだ」
「わたくしが、輝幸さまを信じているからです」
寿恵は、まっすぐに輝幸を見つめて断言した。
「輝幸さまがご立派なご藩主だと、心の底から信じているからです。自信を無くされたら、わたくしをお呼びください。わたくしが自信を取り戻させてさしあげます」
この朝の寿恵との会話で、輝幸はほんの少しだけ、自信というものを持つことができた。
「さあ、輝幸さま。もし輝幸さまに自信がおありでしたら、いま、何をなさいますか」
これは寿恵に言われなくても、心に決めていた。
「淳平を助ける」
「はい、わたくしもそれが一番大切だと思います」
「そしてわたし自身の手で、理平の仇を討つ」
「それは、あわててはなりませぬ。悪事をはたらく者は、腐っております。腐った実はいずれ、落ちます。淳平さまをお助けして、あとは時を待ちましょう」

5

宮野淳平は結局、閉門蟄居ということになった。
宮野理平の死は、病死として片づけられたが、記録所にあった土岐田村の文書紛失の責任を取らせるということで、宮野家への処分となったのである。そう、土岐田村関連の文書が理平の死後、無くなっていたのである。
輝幸は淳平の助命だけ強硬に主張し、あとは伊庭兵部にすべてまかせた。
そしてまた、いつもと変わらぬ日常が始まったように見えたが、底流では、何かが変わろうとしていた。
今回、一連の騒動は秘密裏に処理されたが、しかし、勘定吟味役が土岐田に来たことも、その家が閉門中であることも、どこからともなく漏れていた。そして、硬骨漢・宮野理平を慕う下僚たちが、ひそかに動き始めていたのである。
そして、三月が経った。
「寿恵、きょうは、そちも評定に来ないか」
「どうか致しましたか？」
「うむ。きょうで、ひとつの区切りがつく」
いつにもまして凛々しい輝幸の顔に、寿恵は「はい」と素直に応えて仕度をした。
御広座敷には、伊庭兵部をはじめ重臣たちが居並んでいた。輝幸と寿恵が上座につくと定例の評定が始まった。
（御台所さまもご一緒とは…）
重臣たちは、いつもと違う空気を感じていた。
伊庭兵部から輝幸への挨拶を終えると、輝幸が口を開いた。

「きょうは、ある文を、みなに披露したい」
そう言うと、小姓から手紙のようなものを受け取った。
「これは、三月前に世を去った宮野理平が途中まで書いたものを、理平の部下たちが命がけでまとめたものである。ここに、土岐田に関することが書かれている」
一同、顔を見合わせた。
「土岐田村での出来事、年貢の上前をはねていたこと、その首謀者、すべてが書かれておる。残念ながら宮野理平はこの世にはおらぬが、その意思は、こうしてわたしの手元に残った。もし心当たりのある者は名乗り出よ」
「お待ち下さい」
伊庭兵部がすかさず輝幸を制した。
「微罪とはいえ処分を受け、しかもすでに死亡した者の関わった文書を、藩の公の評定の場でご披露されるというのは、如何かと存じます」
「兵部、あわてるでない。わたしはまだ何も読んではおらぬ。なぜ今まで公にせなんだか。それは、信じたくない事実が書かれていたからである。裏を取るまでは公に出来なかった」
あの、前藩主の葬儀の折に震えていた弱弱しい面影はみじんもない。
「わたしは、理平が亡くなってからずっと、二度とこのようなことを起こさぬためにはどうすればよいのか、考えた。それにはやはり、みなで話し合うのが一番と決めたのじゃ」
輝幸は続けた。
「解決せねばならぬことは、まず、年貢の上前をはねることである。たれか、かの者どもをこれへ」
輝幸が命ずると、八人ほどの藩士が御広座敷に入って来た。彼らはかつて勘定吟味役・宮野理平のもとで働いていた藩士で、今回の文書を命がけで調べまとめ上げた者たちだった。中に、閉門を解かれた淳平の姿もあった。
彼らの姿を見て、伊庭兵部が憎々しげにつぶやいた。
「もう、舞台はできておるということですな」
全員が驚いて伊庭兵部の方を見た。
「では申し上げます。たしかに拙者は、年貢からいくらかを取り上げました」
みな、その事実を薄々知ってはいたが、藩の暗部が公になって、困惑した。
「しかし、その金がどこに蓄えられ、どう遣われたかご存知でござろうや。すべての裏金は藩に蓄えられ、それらは幕閣や幕府の使者などに、必要に応じて渡して参ったのでござる。豊臣家恩顧のご当家が、幕府からの大きな普請命令を避けるためには、これしか手がござらんかった。もしそれをやらねば、無理難題を幕府から押しつけられて、土岐田だけではない、他の村も疲弊し、御家は財政的に滅亡でござったろう」
伊庭兵部の、儒学者のような真面目で端正な容姿から

発せられる、説得力のある言葉が広い座敷に響き渡る。
伊庭兵部が話し終えると、座敷はシン、と静まり返った。
(たれも反対できまい)
いや、一人、いた。
「わたしは、そうは思わぬ」
輝幸の言葉に迷いは無かった。
はじめて伊庭兵部に、真正面から鋭く矢のような一言を発したのである。
「兵部、お前は間違っておる。年貢は領民が血と汗を流して我らに預けるものにて、厳密には我らのものではない。領民は何を望んで年貢を差し出すのか。なるほど、幕府からの普請要求は苛烈である。はっきり言おう。幕府は間違っておる」
一同、また顔を見合わせた。伊庭兵部だけは、目をつむっていた。
「だが、間違った要求に間違った方法で応えるのは、正しいことなのか。間違った要求だからこそ、正しい方法で跳ね返す力と意思を我らは持たねば、土岐田の悲劇を再び繰り返すことになるではないか」
伊庭兵部が、口をはさんだ。
「殿、『正しい方法』とは何なのでしょうか。ご教示戴きたい」
輝幸は表情を変えずに言った。
「土岐田のような、真面目で工夫を行う豊かな米どころを増やすことである。なるほど、豊かな村なら、怠惰な村よりも年貢を取りやすかろう。しかし豊かな村は、豊かになる努力を惜しまず続けた村である。そこから奪えば、働く意欲も同時に奪う。働き者から多くを奪うような愚かな行為は、長い目で見れば我らの自殺行為であるとは思わぬか。兵部の方法は、富める者から奪い、領内すべてを貧しくする愚策である」
「ならば殿は、いずこも同じ年貢高にして、たとえ天災で困窮しようとも籾殻(もみがら)まで奪い取れ、と仰せか」
「さにあらず」
御広座敷の全員が、呆気にとられていた。あの凡庸で自分ではなにも決断のできない若殿が、藩きっての切れ者実力者と、互角、否、それ以上の戦いをしている…。
「なぜ土岐田は豊かになったのか。彼らに教えてもらえばよい。そして、その方法を藩内に広め、表高以上の収穫を得れば、年貢の上前をはねずとも、金はできる」
「百姓に教えを乞え、と言うのですか！」
「さよう。たとえ物乞いであろうとも、人の役に立つことを知っているのならば教えを受けるべきである」
「話にならんッ」
伊庭兵部は周囲を見渡して、「こんな暴論を認められるか？」と同意を求めたが、それまで媚びへつらってきた重臣たちは顔をそむけ、若い藩士たちは敵対の眼差しを伊庭兵部に向けた。

伊庭兵部は、苦虫を噛みつぶしたような顔になった。
輝幸は、兵部にはっきりと言った。
「これまでである。お役御免を言い渡す。そして、兄や宮野理平たちを弑した罪を問おうぞ！」
伊庭兵部の両こぶしがワナワナと震えていた。
一度、下を向いて、一呼吸ののち顔を上げると、
「おのれ、わしを満座の中でコケにしおってッ」
伊庭兵部は立ちあがると同時に脇差しを抜くと、輝幸目がけて斬りかかった。
「血迷うたかッ」
輝幸は小姓が捧げ持っていた太刀を手にしようとしたが、足を滑らせた。「あッ、」態勢を立て直そうとしたが間に合わない。伊庭兵部は、上から輝幸の額目がけて脇差しを振り下ろした。
その時、何かが輝幸に覆いかぶさった。と同時に「ズサッ」という肉を斬り裂く音。「うっ」という呻き声。
「寿恵！」
寿恵はとっさに輝幸をかばい、伊庭兵部の一振りを肩で受けたのだ。
「小癪なッ」伊庭兵部は、もう一度振りかぶった。
「痴れ者！父の仇！」
脱兎のごとく上座に走り寄った宮野淳平が、兵部の背後から父の形見の脇差しで一突。兵部は刀を落とし、
「ぐふッ」と口から血を吹いて前のめりに斃れた。
「淳平！」「若ッ」
淳平は父の仇を討ったが、寿恵を見て喜びは吹き飛んだ。寿恵は肩から大量に血を流して倒れたまま。輝幸は淳平と共に寿恵を抱き起した。
「寿恵ッ、寿恵ッ」「寿恵さまっ、御台さまッ」

6

あれから数カ月。
土岐田村は、ようやく復興の目途がついた。
領内は五公五民以上の年貢はとらず、しかし困窮している村には猶予を与えた。ただし、勘定方直轄の役人が仔細に状況を報告することが義務付けられた。
また米どころ・土岐田の農法は広く領内に伝えられ、少しずつだが多くの村々は貧しさから抜け出し、収穫が安定して、藩財政も再建のめどが立った。
塩田藩は、春を迎えていた。
復興が緒に就いた土岐田村のあぜ道では、咲いている桜の下で、農夫やその家族が花見をしている。
そこを、旅姿の武家一行が通りかかった。
「われらもこのあたりで、昼餉といたそうか」
大きな桜の老木の下に、四家族ほどが集っている。その端の方に莫蓙を広げて座った。すると農夫の女房らしき、愛想の良い小太りの女が、

「あれ、お侍さま。そんなとこにおらんで、もっとこっちの眺めの良いところにおいでなさいまし」
と、武家一行を誘った。
「あ、いやいや。ここはそなたたちの場所。我らは端を貸してもらえれば十分じゃ」
「そうですか？じゃあ、お酒とかありますで、良かったらもってってくんさいね」
「お侍さまが、どぶろくなんか召しあがるかい！失礼なことを言っちゃだめだぞ」
夫らしき男に叱られてしゅんとした女房を可哀想に思ったのか、武家一行の中にいた美しい娘が、
「よろしければ、いただきとう存じます」
そう言って、瓢箪の筒を持って酒をもらってきた。
「寿恵、呑めるのか？」
「ええ、大好き。輝幸さまは？」
「知ってのとおり、下戸だ」
フフフ、ハハハ、と、若い夫婦が愉しげにやりとりしているのを、供の侍もほほ笑んで眺めている。
「淳平、そちはいけるのであろう？」
「は。しかし御台さまほどでは」
「ま、無礼なことを。フフフ」
寿恵の肩の傷は幸い急所を外れていたが、ひと月は床を離れられなかった。輝幸は最初、ずっと付き添っているつもりだったが、「亡くなった理平どののためにも。まつりごとを、おろそかになさいますな」という寿恵の言葉で輝幸は仕事に復帰した。
宮野淳平は父親の跡を継いで、勘定吟味役となった。
輝幸は淳平を家老にしようとしたが、「その力はありません」と固辞し、勘定吟味役も固辞したが、こちらは説得に応じてくれた。
春になって、寿恵の傷も癒え、輝幸の日常も落ちついたので、まだ多忙だった淳平を無理に墓参に連れ出し、またしても寺を抜け出して、忍びで土岐田にやってきた。
「愉しいのう、寿恵」
「はい」
「しかし、兄が亡くなったときは、こんな日がくるとは思いもよらなんだぞ」
「あら、わたくしは、思っておりましてよ」
「お前はどうしてそう、物事を良い方に良い方に考えられるのじゃ」
「簡単ですわ。だって、お名前をお考えあそばせ」
「ん？」
「『幸』せが『輝』く、で輝幸さま。『寿』に『恵』まれる、で寿恵。ね？」
最近はようやく大人っぽくなってきたが、こういう会話をするときの寿恵はやはりまだ少女である。
淳平は、厠を借りに農家に行った。用を足して戻ろうとすると、輝幸と寿恵が農夫たちに誘われて、その輪の

中に入っていくのが見えた。
「お侍さま。酒は、いかがしょう?」
淳平に、少し酔った老人が、話しかけてきた。
「ご老人、かたじけない」
「なあに、自家の安酒でございます。それにしてもお侍さま、良いものですなあ」
老人は、桜の木の向こうで輝幸と寿恵が村人たちと談笑している姿を見ながら、言った。
「若い人が、愉しそうに、普段の仕事を忘れて、桜の下で憩いおうているというのは」
桜の花が、そより、と、老人の持っていた竹のお椀に入って、白いドブロクに薄紅色の花を咲かせた。
「お侍さま。失礼ですが、あのお二人は御夫婦で?」
「ええ、そうです」
「花心、というのを御存知ですかな」
「かしん?」
「花の中心。ほれ、このあたり」
老人は、ドブロクに咲いた桜の花をつまんで掌に乗せた。
「おしべとめしべが、並んでおりましょう?花の芯なので、本来なら草冠を付けるのですが、なぜか『花のこころ』と書くそうです。寺の住職に教わったのですが、おしべとめしべが仲好く並んだ花は、花びらが大きく美しく咲くそうです。人も、夫婦の仲が良ければ良いほど、周りを明るく愉しくさせる。ご覧ください、」
そう言って老人は、領民たちの輪の中にいる輝幸と寿恵の方を向いた。
「あのお二人の周りには、きっと明るく愉しいことがございますよ。ええ、きっとございます」
桜の花びらが舞い落ちる向こう側に、輝幸と寿恵が見える。まるで周りを囲む領民たちの花心のように、凛々しく、優しく、二人が寄り添っている。
淳平は、涙があふれて、止まらなかった。

北朝鮮の金王朝と李氏朝鮮

新井宏

為政者の評価などいつも時代と共に変わる。
足利尊氏は戦前の国定教科書で「天皇に弓を引いた逆臣」と書かれていた。それは朱子学名分論の影響を強く受けた水戸学が、正統な後醍醐天皇を放逐した逆賊として尊氏を位置付けたことによるが、実際は明治政府による「王政復古を正当化するため、建武中興で親政復活を果たした後醍醐天皇の功績を際立たせる必然的な評価」であった。
戦後になると、皇国史観が批判され、実証的な研究が進展したことにともない、いまでは尊氏を逆賊とする見解はほとんど見られず、一般には吉川英治の『私本太平記』の尊氏像が広く受け入れられている。
伊達騒動の伽臣原田甲斐は、山本周五郎の『樅ノ木は残った』によって忠臣に蘇った。
歴史評価などというものは、立場によっていくらでも変わるのは当然であるが、韓国でも、再評価が進んでいる王に光海君がいる。
李氏朝鮮の五一八年の歴史で二十七代の王が生まれたが、その内でふたりの王だけ、すなわち燕山君と光海君のみが、王名(廟名)を与えられずに、廃王・燕山君とか廃王・光海君と呼ばれている。かれらは、いずれも皇帝ネロのような暴政により、自らの意志に反して退位させられた王というのが従来の評価である。
ところで、いま北朝鮮の「金王朝」では金日成・金正日・金正恩の三代世襲が進んでいる。金正恩は三男であり、長男の金正男を差し置いて、王世子(世襲者)に至った過程を見ると、おどろくほど李朝の歴史と共通点がある。「金王朝」は宗主国・中国の勅許(誥命)を得るのに、四苦八苦していたのである。
一言で言って、李朝は王統継承をめぐる血の争いの歴

史である。嫡子と庶子、長男と次男の違いが厳格でその待遇は天と地ほどの差があった。光海君の父、宣祖は、側室の生んだ庶出の初めての王であり、そのため四十一年間もの長い政権を維持しながら、大きな制約を受け、劣等感に悩まされていた。

光海君も有能な政治家でありながら、庶子でしかも次男という身分の上に、強勢化しつつある女真族の後金(後の清)に対応するため、宗主国の明王朝の言うままにもなれず、中国王朝から王権継承の勅許(誥命)がなかなか得られなかった。

このような環境の中では、王位そのものが極めて不安定で、対抗勢力がいつ長兄である臨海君や嫡子である永昌大君を担ぎ出して王位に狙うかも知れない状況であった。そのため結局、兄の臨海君や、幼い弟の永昌大君を殺害する結果になったが、それは、今も進行中の北朝鮮における権力闘争の未来を予見させるものでもある。

暴君燕山君

確かに第十代燕山君は暴君であった。

コロンブスがアメリカ大陸を発見し、ポルトガルとスペインが、トリデシリャス条約を結んで、勝手に東洋の分界を決めていた一四九四年、日本では北条早雲が小田原に拠った頃、燕山君は十八歳で即位した。

即位するとまもなく、世子の頃の儒学の師を殺し、続いて士林派に押さえ込まれていた勲旧派や外戚派と組んで、名分と道義を諫言する儒学士林派を「戊午士禍」という事件を通して追放し、完全に朝廷を掌握した。その過程では、故人になった者にさえ遺体の首を切る「剖棺斬屍刑」を加えたり、多くの士林を処刑後に首・胴体・手足を切る「凌遅処斬」という極刑に処している。

李朝では、「四大士禍」と称される大事件が四回起きているが、「士禍」とは士林が粛清され禍を受けた事件との意味であり、燕山君の「戊午士禍」がその始まりであり、そこに示された残虐性は、暴君の手始めにすぎなかった。

その後も、妓生を集めて毎日饗宴を開き、伯母に当たる月山大君夫人を陵辱し自殺させるなどの事件を起こしているが、暴走がとまらなくなったのは、やはり、実母が政争の中で廃妃とされ、ついには死薬を与えられた一連の事件を知ったことであった。

燕山君の母、成宗の妃・尹氏は嫉妬深い性質で、成宗の寵愛を独り占めにしていたが王が後宮たちと夜を過ごすのが多くなると、彼女らを毒殺するために砒素を隠し持っていた。

これが発覚して、せっかく勝ち得た王妃の身分から再び嬪(側室)に降ろされそうになったが、何しろ次代の王の母であり、いったんは事が収まった。ところが、嫉妬

深い性格の彼女は、成宗の顔に爪で傷付ける事件を起し、ついに廃妃とされた上に、庶人の身分に落とされてしまった。

それを主導したのは成宗の母、仁粋大妃である。それは姑の嫁に対する妬みもあったであろうが、これに、韓明澮らの勲旧勢力も、名分を重んじる金宗直らの士林勢力も加勢した。金宗直らは、成宗が勲旧派や外戚を抑えるために登用した儒学者のグループで、士林派と称され、この頃から士林派は李朝の「政争」を担うことになる。

廃妃事件も廃妃のみに留まっていたならば大きな問題ではなかったが、なにしろ「政争の国」である。次代の王となるべき王世子の実母のことであり、これが勢力争いに利用された。次代の王に先行投資しようとして、廃妃・尹氏への同情論は日増しに強くなり、これに危機感を抱いた仁粋大妃は、実家に戻された尹氏が、まったく反省の気配を見せていないと虚偽の報告を上げて成宗にせまり、成宗はついに尹氏に死薬を与えてしまった。

燕山君は即位後も実母の廃妃事件のことを全く知らなかった。それは成宗が「百年間は廃妃問題を論じてはならない」と厳命していたからであるが、謀略渦巻く李朝のこと、燕山君がこのことを知るのに時間を要しなかった。これを機に権力を握ろうとする任士洪の密告により、事件の全貌を知り、その関係者を皆殺しにする大殺戮を行ったのが「甲子士禍」である。

まず、尹氏の廃妃に関与した成宗の後宮、厳貴人と鄭貴人を宮中の庭で、目の前で斬殺させ、鄭貴人から生まれた安陽君と鳳安君を配流として上で死薬を送った。それに反対意見をのべた者は僅かにいたが、殺害されるか配流されてしまった。

ましてや、尹氏廃妃の関係者に対しては、十余人が「凌遅処斬」の残酷な刑を受けた他、「剖棺斬屍刑」が加えられ、その他にも二十六人が残酷な刑に処せられ、彼らの家族、子供まで罪が及んだ。

その過程で、燕山君は実の祖母である仁粋大妃に頭突きを加えて、六十七歳で死亡させている。表面上は、祖母の叱責に耐えられずに行った行為とされているが、もちろん母の廃妃・尹氏を死に追いやった仁粋大妃への復讐であった。これは儒教世界において、もはや許し得ない犯罪であった。

さらには、全国に採青採紅使を派遣し、各地から美人を選抜して宮殿に集めて宴会を開くことなど狂態がますますエスカレートし、ついには国庫は破綻し、功臣に支給していた功臣田まで没収しようとした。

このような燕山君の狂的な行動は、もはや放置できる状況ではなかった。一五〇六年、燕山君によって陵辱され自殺した月山大君夫人の兄・朴元宗が、成宗時代の実

力者である成希顔と共に起ち、クーデターは成功し、燕山君は江華島に流され、二ヶ月後に三十歳で死んだ。このようなクーデターを韓国では「反正」と言う。

歴史はこのような燕山君に対しても、実録「燕山君日記」がクーデター派による一方的な史書であることから再評価を試みているが、どのような試みも未だに世論の支持は得ていない。

暴君といえば、どうしても皇帝ネロを思い浮かべるが、ネロの母、美貌のアグリッピーナは皇帝クラウディウスの後妻となり、連れ子のネロを皇帝に据えるため、ついには皇帝を毒殺した。でしゃばりで、権勢欲が人一倍強かった彼女は、ネロが皇帝になってコントロールが利かなくなると、息子のネロに肉体関係を迫ったとも伝えられ、母の権力欲に恐れをなしたネロは、ついに母親の殺害を実行した。

ネロの母アグリピーナと燕山君の母、廃妃・尹氏を重ねてみると、そこに「血」を感じ、燕山君を冷静に評価できないのかも知れない。

改革派の光海君

第十五代光海君は、文禄の役(壬辰倭乱)の最中に、王世子となり、戦乱の終わった一六〇八年に三十三歳で王位に就いた。光海君は庶子の出身であり、しかも次男という王位継承面では、極めて不安定な立場にあった。更に当時の国際情勢、すなわち、文禄・慶長の役(壬辰倭乱・丁酉再乱)は去ったものの、その復興の課題と、折から勃興中の女真族後金(後の清)の脅威に対処するため、「政争」が熾烈であった。光海君はまず王権を確立して、不安要因を取り除く必要があった。

そのため、対抗馬として擁立された兄の臨海君や、正室の嫡子で幼い弟の永昌大君を結局は殺害している。その他にも政争の最中、多くの犠牲者を生み出したのは事実であるが、李朝の政争の歴史をみれば、そのような類例は三十件ほどあり、光海君だけが極悪非道であったわけではない。

光海君の評価は、政権を奪った仁祖が、そのクーデターを「仁祖反正」として正当化し、光海君を徹底的に悪く描いたことによっているのは疑いない。

光海君が王世子となつたのは、壬辰倭乱の非常事態に際して、父の宣祖が北の義州まで落ちのび、咸鏡道に避難した光海君を分朝とせざるを得なくなったためである。その直前まで、李朝では王世子冊封問題で深刻な勢力争いを繰り広げていたが、非常事態に至り、やむなく採った処置であった。

そもそも、壬辰倭乱に対して、李朝が何の備えもしなかったのはこの王世子の冊封問題が大きく絡んでいる。

壬辰倭乱の直前の一五九〇年に、日本の実情と豊臣秀吉の底意を探るために送った通信使の報告が、西人派の正使の黄允吉と東人派の副使の金誠一で大きく異なっていた。西人派の黄允吉らは、日本が多くの兵船を準備しており、必ず侵略すると主張したのに、東人派の金誠一は、侵入する兆しもなく豊臣秀吉は恐れるほどの人物ではないと報告したからである。

通信使派遣の時までは、西人派の巨頭の鄭澈が左議政の座にあり、政治を主導していた。宣祖は既に四十を過ぎ、王妃は病に臥し、庶子の中から世継ぎを選ばなければならない状況であつた。それにもかかわらず王世子を決めかねている宣祖に対して、鄭澈は東人派にも根回して、光海君を王世子として立てることを奏請した。宣祖が世継ぎを決めかねていたのは、長男の臨海君のためではなく、四男の信城君を寵愛していたからである。

しかし、鄭澈の奏請は、東人派の陰謀に利用されて宣祖の怒りを呼び、通信使の帰国の頃には、西人派の勢力が大きく後退してしまっていた。その結果、東人派の金誠一の意見が通り、民心を混乱させる必要がないと秀吉への対応が先送りされてしまったのである。

一五九二年四月十三日に、二十万人の兵力を以て次々と釜山に上陸した日本軍は、二十日後には首都の漢陽(ソウル)を陥落させ、加藤清正は北の咸鏡道まで一気に制圧した。

その際に、咸鏡道に募兵に来ていた宣祖の長男の臨海君と第六子の順和君が、李朝へ反旗を翻した民衆によって捕らえられ、加藤清正に引き渡される。この時、四歳であった臨海君の子も捕虜となっているが、臨海君が釈放された時に、なぜか日本に残され、後に日蓮宗の寺院、白金台の最正山覚林寺と名古屋の妙行寺の開祖になったと伝えられている。

臨海君は光海君の同腹の長兄であるが、乱暴で激しやすい性格のため人望がなく、王世子には冊封されなかった。しかし目先の利く清正は、臨海君を丁重に扱い、親しい関係を築き、後に利用しようと考えたが、李朝における臨海君の立場は、それを許す状況ではなかつた。臨海君は、捕虜になった屈辱から酒に浸り、ことあるごとに問題を起こしてますます人望を失っていった。

一方、光海君はなかなか人望があり、壬辰倭乱の時は、直接戦場を行き来し、実質的に戦争を指揮し、義兵や民衆を励まし、戦後処理にもあたり、権威を築いて行く。それは父親の宣祖にとって、自分よりも民衆から信頼され、人気のある息子と映り、面白くない状況をもたらした。

このようにして、戦時下の非常事態とは言え、いったん王世子に決った光海君ではあったが、「義兵を集めて来い」と死地へ送り出されるなど、問題が一段落したわ

けではなかつた。世子に冊封するには明の朝廷に報告し、「誥命」を受ける必要があつたが、明は長男の臨海君がいるとの理由でこれを拒絶した。

その上、宣祖の正妃である懿仁王后が亡くなり、その後に正妃となった光海君よりも九歳年下の仁穆王后に永昌大君が生まれたため、光海君は王世子になったとは言え、その立場は不安定であった。

しかし、職責を着実に果たす光海君に対して、臣下の信頼は篤く、しかも宣祖が亡くなった時に、永昌大君はわずか二歳であり、王位継承の決定権を持つ母の仁穆王后さえも、現実性がないと諦めて、ここに光海君の即位が決定した。

ところが、世継ぎ問題は簡単には収まらなかった。光海君に従う大北派と永昌大君に従う小北派の政争が激化する。大北派と小北派は、元々は同じ少数過激派の北人であったが権力党争の中で分裂した党派である。この二派の争いは熾烈で親・兄弟の仲でも党派の違いから敵同士となる場合もあった。

その頃の派閥を概観すると、西人派を追い落とした東人派も、北人派と南人派に分かれ、更に北人派は大北派と小北派に分かれるという症状を示していた。西人派は政治基盤の強固な伝統保守派、東人派から分かれた南人派は西人派に近い穏健派、北人派は政治基盤の弱い革新過激派と言ったところ。いつの時代でも政治基盤の弱い勢力は過激化し、分裂するのが宿命であるが、光海君の政治は改革性に富んでいただけに、少数過激派の大北派に支持され、それが悲劇を生むことになった。

壬辰倭乱当時、直接全国を回り、戦争や民衆の生活を目の当たりにした光海君は、王位に就くと京畿道一円に大同法を施行する。それまで農民達は代貢収米法といって家ごとに一定の貢納物と進上物を治めなければならなかったが、大同法では保有する耕作地の広さに応じて課税し、農民だけでなく土地の所有者からも同じ基準で徴収して農民達の負担を軽減したのである。更には、焼失してしまった代々の王たちの宗廟や昌徳宮などを再建し、関係が断絶していた日本(徳川幕府)と国交回復の道を開き、後金とも友好関係を追求して平和外交に努めている。いわば善政であった。

ところが、明の王位継承に対する干渉から粛清の嵐が吹きはじめる。

明では、中国王朝の意向を無視し、長男の臨海君や嫡子の永昌大君を差し置いて、側室の子が王位を継承したことに異論が起こり、ついには真相調査団を派遣するという事態にまで発展した。すでに王位は継承されていたのであるから、明の態度は朝鮮と光海君を無視したものであった。

もちろん、明の調査団派遣には背景があった。光海君の王位継承に反対していた小北派が明に要請したことは明らかであった。光海君に付いて勢力拡大を図っていた大北派にとってはもはや猶予ができなかつた。当時、長兄の臨海君は自分が王位を継承すべきだったと公言し、露骨に光海君を誹謗していたからである。

大北派の中心人物たちは、臨海君が謀反を企んでいるとして死薬を送るように光海君に迫るが、実兄のことでもあり光海君は断固として拒絶する。しかし、大臣達が繰り返し強力に要求を続けると、結局、自身の意志を貫徹する事ができず、流配とせざるを得なかった。その後、臨海君は重臣たちの放った刺客により殺されている。

臨海君の死は、その後に続く粛清のほんの序幕に過ぎなかった。臨海君の他にも、大北派を脅かす存在としては、小北派が支持する永昌大君と四男の信城君の養子の綾昌君があり、その除去が焦眉の急であった。

その手始めが、一六一二年の「金直哉の獄事」である。大北派と光海君を追放する謀議を図ったとの理由で小北派の多くの人士が連座して処刑された。

かくして、小北派の追放に成功した大北派は、更に「七庶の獄」に絡めて、まだ幼いながら最も脅威的な存在である嫡子の永昌大君の除去を図る。

「七庶の獄」というのは、高級官僚のドラ息子たちが起こした単純な強盗事件であったが、その取り調べの過程で、資金を集めて幼い永昌大君を推戴し、母の仁穆王后に垂簾聴政を求めようとしていたとの自白を得る。

この事件の波紋によって、仁穆王后の父・金悌男は自決を命じられ、永昌大君は江華島に配流された上に、翌年には屋敷に火をつけられて幼い命が絶たれる。

もうひとりの有力な継嗣候補であった綾昌君も同様な手口で配流された上で殺害された。その上、大北派が政権を独占すると一六一八年には、再び古い事件を取り上げて、仁穆大妃を廃位させた後、西宮に幽閉してしまう。さすがに、これはやり過ぎであった。

このように、光海君による反対勢力の抹殺過程だけを見ていると、朝鮮特有の政争だけが誇張されてしまうが、もちろんその背後には、国際情勢の急変があった。

満州で女真族が勢力を拡大して後金(後の清)を建国すると、北方への備えは急務であり、壬辰倭乱からやっと立ち直りはじめたばかりの李朝にとっては深刻な負担であった。しかも壬辰倭乱によつて国力を弱めた明からは、後金との戦いに援軍の要請が相次ぎ、いわば後金と明の間で、綱渡り外交を繰りひろげざるを得なかった。

宗主国の明の庇護下に入って、後金と対抗するには、もはや明も李朝も力不足であった。しかし、李朝の伝統的な士林勢力は、理念ばかり先走り、現実面での対応ができなかった。いわば壬辰倭乱の二の舞であった。

その中で、光海君は徹底した現実路線をとる。明の援兵要請に応え、姜弘立に一万の兵を与えて、出兵させたが、明が不利になると、適当に応戦したふりをして後金に降り、抑留されながらも光海君へ密書を送り、後金との和議交渉に臨むという巧みな両面外交を推進したのである。

もちろん、姜弘立の投降は極秘の政策であったため、彼の家族を誅殺すべきとの意見が相次いだが、光海君はむしろ家族に物品を下賜して保護している。

これにより朝鮮は明との関係を断つこともなく、また後金から怨みを買うこともないまま後金の情報を得ることが出来た。この後、朝鮮と後金は互いに国書を交わすこととなり姜弘立ら十数名を除くすべての捕虜は釈放された。

この後も光海君は、引き続き明と後金の双方との外交関係を維持し実利を優先する外交政策を展開した。ところがこうした光海君の外交政策を批判する者が出て来る。現実主義者が憎まれるのは歴史の必然である。その声の主は伝統勢力の保守派西人たちであり、西人たちは明に対する徹底し事大主義路線を固守し、一六一八年の仁穆大妃の流配事件を機に大北派への反撃の準備を始めていたのであった。

そして、「仁祖反正」クーデターによって、宣祖の五男の定遠君の長男が仁祖として即位する。光海君は江華島に配流された後に済州島に移され、十八年間生きながらえた後、六十六歳で死去した。

士林が東人と西人に分かれた年に生まれ、大北派と小北派の権力闘争の中で王に即位したが、また北人と西人の争いの中で王の座を追われたのである。

金王朝の金正恩

北朝鮮では、金王朝の三代世襲、すなわち、金日成、金正日、金正恩の世襲が既成事実化されつつある。

最初は、金正日の長男の金正男が継ぐかと思われていたが、二〇一〇年六月、金正日は三男の金正恩を伴い中国に赴き、金正男も立会いの下で、正恩が後継者に決まったことを、胡錦濤国家主席に報告している。この報道は、いかにも中国が北朝鮮の盟主国であり、かってのように中国王朝が王位継承に勅許(誥命)を与えるかのごとき印象を与えるものであった。もっとも中国はこれを嫌って、このような金正恩と胡錦濤との直接会談はなかったと、躍起になって否定している。

中国はもともと三男の金正恩の世襲に強く反対していた。そもそも、共産主義国家で世襲が続くなど理念上あり得ないのに加えて、中国に近い長男の金正男を差し置いて、三男の正恩が継ぐことなど、父家長制が伝統の中国王朝としては認めがたかった。十五代の光海君の即位に反対したのと同じ理由である。

それにもかかわらず、金正日が中国を説き伏せたのは、中国にとって、北朝鮮の崩壊が如何に深刻な問題であるかを物語っている。政治体制が極めて強固に見える中国ではあるが、沿岸部と内陸部の経済格差の深刻化に加え、少数民族問題はいつ内部擾乱に発展してもおかしくない潜在力を秘めている。もし、北朝鮮が崩壊して、難民が中国に流入すれば、比較的にうまく行っている朝鮮族問題に火が付くのは避けられない。

貧困の独裁国・北朝鮮は、核や長距離ミサイルをちらつかせて、世界を威嚇しているが、いまや世界の大国である中国をも翻弄しているのである。

核実験の事前通報を僅かに二十分前に行った北朝鮮。それでも中国が耐えているのは、北朝鮮の崩壊がいかに大きな被害を中国にもたらすか、冷静に判断しているからである。

もともと、中国にとって御しやすいのは長男の金正男の方であつた。マカオや香港に活動基盤を持ち、北朝鮮の外貨調達を担当していた正男は、中国政府内にも北朝鮮内にも侮れない力を持っている。

その証拠が、二〇〇九年四月初め、北朝鮮の平壌中心街に位置する「特閣」に、北朝鮮情報機関である国家安全保衛部要員が乗りこんだ「ウアム閣襲撃事件」である。ここは金正男の平壌における根拠地だった。マカオや香港に主に滞在する正男が平壌へ来る度に滞在し、知人たちとパーティーなどを楽しむ場所である。

驚くべきことに保衛部要員たちを送ったのは異腹弟である三男の金正恩だった。父、金正日から後継者と最終的に指名された金正恩が、潜在的な脅威である金正男とその追従勢力を無力化させるために起こした襲撃事件だった。

同じ脈絡で見ると良く判るのが、二〇〇九年の年末に北朝鮮経済を崩壊直前まで追いやった貨幣改革である。これを仕組んだのが他でもない金正恩であったという米国専門家の見解が暴露サイトのウィクリークスに公開されたのである。

それは、貨幣改革の反対者に反正恩脈としてのレッテルを貼りつけ、正男派を一気に壊滅させる目的によるものであった。もちろん、貨幣改革反対の代表者はマカオにいて、国際金融に通じる金正男であった。そのことは、最大の被害者である北朝鮮の住民たちさえ今では認識していたと言う。

北朝鮮の貨幣改革の影響は尋常でなかった。二〇〇九年十一月三十日に電撃的に断行した後の二ヶ月間、大混乱が起こっている。最も著しい現象は物価高騰であった。建前としては、物価の安定が目的であったが、直後

から物価は天井知らずのうなぎのぼりで、米は1キロ当たり二十ウォンから六百ウォンと三十倍にも暴騰し、円滑な食糧供給が行われず、餓死者が発生した。

これらの大混乱が金正恩の権力確立のためであったとするなら、李朝の権力闘争の再現である。貨幣改革の責任者が公開処刑されたのは、金正恩が身を守るために、生贄としたのに違いない。

だから二〇一〇年三月に起きた韓国海軍哨戒艦「天安艦」の魚雷攻撃による沈没事件も、十月に南北境界水域に近い韓国の延坪島を砲撃した事件も、正恩の権力確立のためのゲームと見なされているのである。

八月末、マカオと北京を行き来している長男の金正男が父の宿舎を訪ね、「金正恩が無理に貨幣改革を推進して失敗し、これを挽回するために天安艦事件を起こした。なぜ黙認するのか」と抗議したと韓国のKBSは伝えている。

また、金正恩の世襲が公式に発表された後の日本のテレビ局による金正男の衝撃的なインタビューで、「個人的には三代世襲に反対」と述べた上に、彼の祖国について、正式な名称「共和国」を使わずに「北朝鮮」と呼び捨て、危険水位を超えた発言をしたのである。

これを見て、韓国メディアは早速「平壌版王子の乱」と報道した。李氏朝鮮五百年の歴史は、政争と政権交代に伴う粛清の明け暮れであったが、そこではしばしば「王子の乱」と称する兄弟間の殺戮が行われていた。最も有名なのは、三代太宗が兄弟三名を殺害する等によって王位簒奪した「第一次王子の乱」と「第二次王子の乱」であるが、燕山君の場合も、光海君の場合も、基本的には王子間の争いであった。

今回の王位継承も、李朝の歴史にしばしば現れた父家長制の伝統と先妃・後妃間の勢力争いの再現であり、正男の母・先妃の成恵琳と正恩の母・後妃の高英姫の闘争において、いったんは後妃側が勝利したことを意味している。しかし、金正日の病状によっては、正恩体制に不満を抱く北朝鮮国内勢力が正男を担ぎ出して、内乱に至る可能性も十分にある。

共産主義として既に六十年以上の歴史を持つ北朝鮮であるが、李朝と同じ歴史を繰り返すのは、何によっているのであろうか。さすがに、金正恩も中国にいる正男には手出しはできないであろうが、何が起こるかわからないのが、北朝鮮である。

本稿執筆にあたっては、その多くを朴永圭『朝鮮王朝実録』新潮社(一九九七)によっている。末筆ながら感謝したい。

回想のベルリン

—ドイツ再統一(一九九一年夏)後の再訪—

山本鎭雄

ベルリン生誕七五十年祭

一九八六年十月から一年間、勤務校から社会学研究のために二度目の西独(正式にはドイツ連邦共和国)に留学する機会が与えられ、「赤い海に浮ぶ陸の孤島」の西ベルリンで家族とともに暮らした。その翌年の四月末から六月にかけて、東と西のベルリンは都市生誕七百五十年を迎えた。「ベルリンの壁」に遮断されたベルリンでは、それぞれ市内各所で趣向を凝らした行事や展示が盛大に行われた。

ベルリンの生誕年には諸説があって、熱心に議論されたこともあったが、これら諸説を一切反故にして、ヒトラーが率いるナチス統治下の一九三七年に「帝都の新しい姿」を誇示するため、七百年祭が盛大に挙行された。その前年の三六年には「民族の祭典」と称して第三帝国の権力と秩序を世界に顕示する第十一回ベルリン・オリンピック大会が開催され、その同年にユダヤ人の国外退去が始まった。三八年にはナチスは「帝国水晶の夜」と称して、ドイツ全土でユダヤ人狩りとユダヤ教教会を破壊した。この事件を契機にナチスのユダヤ人虐待が本格化した。要するに、ベルリン・オリンピック大会、七百年祭、さらにユダヤ人虐待はナチスの異様な人種・民族政策の一環だったのである。

東と西ベルリンの七百五十年祭は五十年前の七百年祭とは全く異なった。メーデーの五月一日、西ベルリンから「ベルリンの壁」に付設された検問所を通って東ベルリンの見物に出かけた。カール・マルクス通り沿いに設置された特設のステージにホーネッカー評議会議長と数名の幹部が立っていた。その前をグループごとに気勢を

上げてプラカードを手にしたり、飾り物を担いでデモ行進した。ホーネッカーは彼らに愛嬌を振り撒き、盛んに手を振っていた。

デモ行進は東ベルリンのセンターとして再開発されたアレクサンダー広場で流れ解散した。とくに親子づれはそれぞれ、その先にある東欧最大の国営の「中央デパート」に殺到した。社会主義・東独のメーデーは国家と一体化した労働者の祝祭日という印象を受けた。しかし、その後のホーネッカーの退陣、東独国家の消滅という現実を考えると、東独の社会的矛盾は少しも見られなかった。所詮、国家的行事はそんなものなのだろう。

西ベルリンではナチス第三帝国の首都ベルリンの過去を想起させる試みもあった。例えば、ナチス・ゲレンデと称された一角は、それまで傾斜した野原の空き地だったが、その一帯を掘削・清掃して展示場とした。その一角は国会炎上事件の直後、ナチス私兵の突撃隊がドイツ共産党や社会民主党、さらに労働組合の幹部をゲシュタポ本部やナチス関係の事務所の地下室に不当に勾留し、強制的に尋問した場所だった。その他、ナチスがマルクス主義関係書など恣意的に指定した大量の「非ドイツ図書」を焼却した「焚書」事件を想起させるために、工夫が凝らされた象徴的なモニュメントもあった。

東・西ベルリンの招待外交の一端

両独政府は七百五十年祭の重要な行事としてそれぞれ独自に招待外交を展開した。東ベルリンにはソ連のゴルバチョフ書記長、中国の趙紫陽総書記、意外なことに中曽根康弘首相も来訪した。それに対して、西ベルリンにはフランスのミッテラン大統領、イギリスのエリザベス女王、アメリカのレーガン大統領が来訪した。

エリザベス女王は西ベルリンに駐留するイギリス軍の陸と空のパレードを観閲したあと、ヴィルヘルム皇帝記念教会に面したブタペスト通りで大勢の西ベルリン市民やツーリストに顔見せのために歩くというので、私は見物にでかけた。最前列の大柄の見物人のうしろで見物出来たのは、ただ淡いピンクのコートを優雅に身に着け、風格のある女王の後ろ姿だった。

レーガン大統領の来訪はその前日、「東・西の軍縮の実施」、「ヨーロッパのあらゆる中距離ロケットの即時撤去」などをスローガンにした西ベルリン市民の大規模な抗議デモで迎えられた。ゴルバチョフ書記長のヨーロッパに配備した中距離核ミサイル（ＩＮＦ）の廃止などの軍縮提案にたいして、レーガンの世界政策がヨーロッパの軍縮と緊張緩和のブレーキと見なされていた。さらにアナーキズム過激派による大規模な暴動、「ベルリンの壁」に接した遷移地帯クロイツベルクでは騒動、放火、投石、略奪、公務執行妨害が頻発した。

私はクーダムと称される大通りで過激派のデモを見物した。一様に黒い覆面をして黒い革ジャンバーを着た彼ら過激派の異様なデモ行進にたいして、金属製のヘルメットにプラスチックの面を着け、警棒と盾を手に武装した機動隊が囲み、さらにデパート・商店・銀行など前には女性を含む機動隊が警戒していた。デモの隊列からときに小石が投げられ、商店などのガラスが割れた。彼らデモ隊の横断幕には「この国家と国際的人民殺戮センターＵＳＡに火と炎を」と書かれていた。

レーガン大統領のベルリン演説とその反響

レーガン演説の当日、西ベルリンの中心部で市民の抗議集会が予定されていたが、西ベルリン行政裁判所は治安の攪乱と不穏な事態の発生を懸念し、集会禁止を命じた。主催者側も集会の中止を呼びかけ、メディアもそれを報道した。ところが、それを不満とする約二百名が都心の路上に座り込んだ。待機していた機動隊は直ちに彼らを包囲し、強制的に排除した。

レーガン大統領は東西冷戦の象徴のブランデンブルク門を背にした特設のステージで西ベルリン市民にたいして「ベルリンはすべてのヨーロッパに開放されている」と呼びかけ、さらにゴルバチョフ書記長にたいしては「ベルリン市民の心、ベルリン市民のユーモア、ベルリン市民の方言」を忘れていると語り、「あなたがもし平和を望むなら（中略）、この門を開放し、この壁を取り払え」と要求した。私はレーガン演説をテレビの実況放送で見た。当時の政治状況からすれば、それはソ連と東独の政府には空しい弁舌に過ぎなかったであろう。

レーガン演説の三年後、東西ドイツと米・英・仏・ソの四か国の外相による「ドイツ問題の最終解決に関する条約」が調印され、ドイツ再統一が国際的に合意された。その日、二期八年の任期を満了したレーガンは、撤去された「ベルリンの壁」を見て、「あの演説が実現するとは少しも思わなかった」と回顧している。世界の最高指導者でさえ、「ベルリンの壁」の崩壊を予測出来なかったのである。

ゴルバチョフ書記長は東独側からブランデンブルク門を見物し、階級の敵対者の陰謀から社会主義国家を守護する「ベルリンの壁」を監視する東独の国境警備兵にたいして「真のヒロイズム」と賞賛したと言う。ペレストロイカを提唱したゴルバチョフは、これまでの東西対立の冷戦という政策を転換し、東西の緊張緩和を大胆に進める「新思考」外交を志向し、「欧州共通の家」構想を提唱した。

ベルリン七百五十年祭では東ベルリンの群衆はソ連大使館に向かって「ゴルバチョフ、ゴルバチョフ」とシュプレヒコールを繰り返した。ところが、ソ連外務省は東ベルリン市民のシュプレヒコールに満足の意を表した

が、東独の指導者と全国民がソ連の政策転換を理解しているかどうかと懸念した。すでに東独とソ連の政府では緊張緩和政策にたいして齟齬をきたしていたのである。

「ベルリンの壁」

ヴィム・ヴェンダース監督の映画『ベルリン・天使の詩』の女主人公マリオンのせりふではないが、西ベルリンは「どこへ行っても壁の街」だった。「ベルリンの壁」は東独の領土内にコンクリート製の壁（西ベルリン側）と東ベルリンと国境の内側には金網が構築され、二つの壁の間にはサーチライト、警備用の舗装道路、監視塔などが構築され、二つの壁の間は立入禁止地帯とされ、監視する警備兵には逃亡者を射殺する命令が下されていた。

西ベルリンの都心から下宿先に帰ろうとして、乗り換えバスを間違えて乗車したことがある。薄暗いバス停留所の終点で降ろされたら、目前には冷然とコンクリートの壁が視界を遮断し、冷戦下の分割都市ベルリンの現実を強烈に痛感した。すぐ近くにパトカーが駐車し、帰り道を尋ねた二人の警官は「ベルリンの壁」の動静を監視しているようだった。深夜、数発の鋭い銃声で目を覚ましたことがある。翌日の新聞記事を見ると、西ベルリンへの逃亡者が立入禁止地帯で射殺されたようだった。

東西ドイツの国境や「ベルリンの壁」に沿って西ベルリンを歩くと、各所の壁ぎわに「注意！あなた方はいま西・ベルリンを去りつつある」という警告板、さらに慰霊碑と十字架の墓標を見た。墓標は西ベルリンへ逃亡しようとして、射殺された悲劇の犠牲者のそれだった。そこには氏名、誕生日、射殺された年月日が記載されていたが、なかには氏名不詳 Unbekant と書かれた墓標をも見た。立入禁止地帯で落命した犠牲者は一八〇名を超え、意外だったのは、それ以外の犠牲者には二四名の東独の人民軍兵士がいたと言う。

のちに述べるベルリン再訪で収集した資料では、ベルリンの検問所が開放される九ケ月前、最後の犠牲者は二十歳の東ベルリンの青年クリス・ギュフロイだった。八九年二月、彼は軍隊に召集されるのを嫌い、友人ガウディアンと壁を越え、西ベルリンに逃亡しようとしたが、立入禁止地帯で国境警備兵に発見され、銃弾に倒れて死亡した。友人も重傷を負ったが、一命を取りとめたと言う。

かつて東独政府は「ベルリンの壁」の構築を、ファシストの策動から平和と社会主義を防衛する反ファシズムの「守護の壁」と正当化したが、壁が崩壊されると、「守護」されたのは、東独市民からも拒否された「東独＝国家」にほかならなかった。

西ベルリンの野外ロック・コンサート

西ベルリンではベルリン七百五十年祭の三日間、「ベルリンの壁」に近い帝国議事堂前（旧ライヒスタータ）の共和国広場に設けられた特設ステージでロック・シンガーで、ベルリンを舞台にした映画「ジゴロ」で主演したデビット・ボウィーをはじめ、世界的なロック・スターの演奏する野外コンサートが六万人の観客を集めて行われた。この野外の大音響のロック・フェスティバルは非情な政治的イベントを誘発した。

東独の若者層は、西側のテレビやラジオの視聴で欲求不満を解消し、ロック音楽を愛好し、もはやアングラではなかった。アメリカ駐留軍が管理するリアス・ラジオ放送でロック・コンサートの開催を視聴した東ベルリンのロック・ファンが東側の「ベルリンの壁」近くの大通りウンター・デン・リンデン（菩提樹の下通り）に殺到した。

私はこのコンサートに出かけなかった。数紙の新聞記事によれば、東ベルリンの若者千人のファンは「ベルリンの壁」のすぐ近くでロック音楽を聞こうとして、東独の人民警察が設置した非常線を突破した。そのため、人民警察による逮捕者も出たが、群衆化したロック・ファンは西独の報道関係者のカメラに向かって「壁をどけろ」、「われわれに自由を与えよ」と叫んだと言う。さらにコンサートの最終日には、東独の警官は集まった群衆を金属製のこん棒で殴打した。群衆はシュプレヒコールで応酬し、ウンター・デン・リンデン沿いのソ連大使館に向かって、「ゴルバチョフ、ゴルバチョフ」と叫んだと言う。メーデーの日にホーネッカー評議会議長の前を整然と行進する民衆の対応とは、まったく異質な群衆化した民衆の叫びだった。

激動のベルリン

ベルリン留学時、私は東独が「社会主義の優等生」という評価を信じて疑わなかった。たしかに、東独は東欧諸国と比較すれば、経済的に豊かだった。ところが、同じドイツとして西独と比較すれば、はるかに経済的に劣っていた。しかも東独は思想と表現の自由、さらにソ連・東欧圏を越えた旅行や移動の自由も政治的に認められていなかった。

私はその後の四年間の急激な大変革を全く予測出来なかった。それは一年間の滞在者にすぎない私だけではなく、おそらく西独のほとんどの知識人、西独の東独研究者さえも予測出来なかっただろう。私が人民警察と対峙し、「ベルリンの壁」の近くで群衆化したロック・ファンの「壁をどけろ」という叫びにより敏感であったら、将来は「ベルリンの壁」が崩壊するだろうと予測し、東独社会を観察し、資料を収集していたであろう。

ソ連・東欧諸国の変革の一環として東独市民の大量出国と国内の民主化要求、東ベルリンの検問所の開放に続き「ベルリンの壁」の崩壊、東西ドイツ通貨の統一、急

足なドイツ再統一（実は、西独による東独の吸収合併。その結果、東独は東ベルリンはベルリン州に合併し、その他の地域はドイツの東部五州となった）、ドイツ連邦議会における西独のボンからベルリンへの首都復帰の決定など、世界を震撼させる歴史的大事件を経験した。

私は留学から帰国して四年後の一九九一年夏、三週間ほどベルリンを再訪した。以下では、これらのドイツの大事件直後の三週間、ベルリンで見聞したことを述べたい。

ベルリン再訪

留学時の夏、ポーランドにあるナチス・ドイツのアウシュヴィッツ強制収容所を見学するため、西ベルリンからバスで「ベルリンの壁」南部に付設された検問所を通過して東独のシェーネフェルト空港から飛び立ったことがある。私たち一行は検問所で長時間待たされた上、バスに乗り込んだ屈強な監視員からパスポートを粗雑に検閲され、入国のスタンプを押された。二、三の乗客はバスから降ろされ、事務所内で尋問されたらしい。私は冷戦下の東西ベルリンの厳しい現実を身をもって見聞した。

四年後の再訪ではモスクワ経由で旧東独のシェーネフェルト空港で降り、ベルリン入りをした。空港には、四年前に知り合ったギムナジウム（高等中学校）教師のケーニヒさんが出迎えてくれた。彼の車で旧東独の農村地帯を通って、ベルリン西部の住宅地帯の彼の自宅に着いた。その途中、ケーニヒさんから「ここにベルリンの壁があった」という説明がなかったら、まったく気付かずに通過しただろう。「ベルリンの壁」は跡かたもなく撤去され、私たちは自由に通過することが出来た。

二つの壁の内部につくられたコンクリートのかつての舗装道路は、すでに遊歩道となり、数名の子どもが嬉々として自転車に乗って遊んでいた。四年前には、まったく想像も出来なかった平和な光景だった。私の三週間の滞在中、首都ベルリンの最大のイベントはブランデンブルク門二百年祭（八月六日）と「ベルリンの壁」構築三十周年（八月十三日）の記念行事だった。

ブランデンブルク門二百年祭

新古典主義時代に建造されたベルリンのブランデンブルク門はパリの凱旋門とともに歴史的に著名である。ところが、ブランデンブルク門は第二次世界大戦後には東西冷戦下のシンボルとなり、とくに「ベルリンの壁」構築後は分断国家の東西ドイツの悲劇のシンボルとなった。そのため、この建造物は頻繁にメディアに登場した。

「ベルリンの壁」崩壊後、この巨大な市門は東西協調のメディアのスターとなり、来訪者は自由に往来することが出来た。私が再訪した時、観光客で賑わい、市門とパリ広場の周辺にはコンクリートの壁の破片、旧東独兵士のワッペンや軍服などの軍隊グッズをトルコ人が露台に並べて売っていた。ところが、クルマはこの市門の下を通過することが禁止され、その周辺を迂回するため、市門がネックとなり、交通は渋滞していた。

巨大な列柱門の上に設置されている古代ギリシャ式の四頭の馬が疾駆する二輪戦車（クヮドリーガ）とそれに乗るブロンズの女神像の建造物は、平和と戦争の紛れもない記念像だった。プロイセン領邦国家のフリードリヒ大王が命じて建築させ、今から二百年前に門扉が完成し、市民に開放された。女神像はギリシャ神話に由来する「平和の女神」エイレーネだった。

「勝利の女神」の破壊と復元

ナポレオンがヨーロッパを席巻した時代、フランス軍はベルリンに入城し、「平和の女神像」を戦利品としてパリに移送した。その後、プロイセンなどの同盟軍が解放戦争（一八一三―四年）で勝利し、パリから持ち帰った女神像を市門の上に設置した。女神は「平和の女神」エイレーネからプロイセン・ドイツのシンボル鉄十字勲章と鷹の紋章を掲げ、古代ローマの神話に由来する「戦勝の女神」ヴィクトリアと命名された。さらにブランデンブルク門は凱旋門に変わった。

第二次世界大戦の末期、ベルリン大空襲で焦土となり、この市門に直撃弾が命中し、「勝利の女神」は破壊され、ナチス第三帝国の常勝神話も徹底的に崩壊した。戦後、ドイツ東部のソ連占領地域に成立した東独政府は女神像を復元した。ところが、女神ヴィクトリアが持つ鉄十字の勲章と鷹の紋章はプロイセン軍国主義のシンボルだという理由で取りはずされ、東独の国旗――黒・赤・金色の三色旗の中央に、麦の穂に囲まれてハンマーとコンパスがデザインされている――を掲げた。

ドイツ再統一後、劣化したクワドリーガとブランデンブルク門は完全に修復され、ポスト冷戦のシンボルとなった。ベルリン放送交響楽団がモーツアルトの交響曲第四一番「ジュピター」などを演奏し、ブランデンブルグ門は一〇〇本の照明器で鮮やかにライトアップされ、盛大に花火を打ち上げ、建造二百周年を祝賀した。

ドイツ再統一直後のベルリン東部（旧東ベルリン）

一九八九年四月、東独（ドイツ民主共和国）は建国四十周年を迎えたが、皮肉にもほぼ一年後には西独（ドイツ連邦共和国）に吸収された。その三年後、ドイツ連邦議会は東独の首都ベルリンを、かつて「陸の孤島」の西ベルリン合併して首都ベルリンとなり、「政府機能の中核部分」を形成した。

東独政府は西側世界の失業を「資本主義病」として批判し、失業のない社会主義の経済政策を宣伝していた。

そのために、国営企業は労働生産性を無視して過剰労働力を抱えていた。さらに造船、化学、鉄鋼などの国営企業では生産施設は老朽化し、過剰債務を抱えていた。再統一後の社会的市場経済のもとでは市場競争力を欠いているため、国営企業は民営化が困難で、結局は閉鎖・倒産・売却という事態に直面した。

こうしてドイツ東部地域は旧国営企業のスクラップ化が急速に進行したため、失業者が急増して「資本主義の重病」に見まわれた。東独市民は西独市民のように、物質的豊かさ、精神と移動の自由を期待して、東独国家を平和裡に廃絶したが、ドイツ東部に到来した現実はかつてマルクスが資本主義経済について指摘した「失業」と「貧困」という二重の自由だった。

私はベルリン東部（旧東ベルリン）市民に「アレックス」と親しまれているアレクサンダー広場を散策した。第二次大戦以前、この広場は労働者の中心街だったが、ベルリン大空襲で完全に破壊された。戦後、東独政府はベルリンのセンターとして再開発し、豊富に商品を陳列する国営デパートを建てた。私はこの民営化された旧「中央デパート」を見物した。顧客本位のサービス、商品の陳列などベルリン西部（旧西ベルリン）のスーパーマーケット並みに変わっていた。夏季の季末大売り出しの期間だったが、留学時と比較して大きな違いは、買い物客が少なく、活気もなく、二級品を売るただのスーパーマーケットに変貌した。

アレキサンダー広場もかつてのような賑わいはなかった。広場の周辺の高層ビルにパナソニック、カシオ、フジフィルムの真新しい広告板を見かけた。ただ、留学時には広場で見かけなかったのだが、ユーゴスラビアの若者が胴元の闇賭博の光景、ベトナムの若者グループが免税煙草を安く売る闇取引の光景だった。東独時代に来た彼らはいずれも失職し、闇商売で糊口を凌いでいたのであろう。

ネオナチの台頭と対抗する動き

旧東独地域には失業と倒産といった経済の失速状態が現出し、その危機に乗じて、ネオナチの勢力がドイツ東部の二千から三千人の若者に浸透した。「民主化運動の首都」と言われた旧東独のドレスデンが、ネオナチの拠点となった。滞在中に読んだ新聞記事によれば、ドイツ最東南の都市ツィタウで、三十人のネオナチ特有のスタイルのスキン・ヘッドの若者がルーマニア出身の難民宿舎を襲い、窓ガラスを破壊し、発火物を投げ、壁にスプレーで「外国人、出てゆけ！」、ナチのシンボル・マーク「カギ十字」を落書きした。警察は、年齢十七歳から二十一歳の六名を逮捕したと書かれていた。

ベルリンを歩くと、建物、電車、公共施設の壁でしばしば見かけたのが、「外国人、出てゆけ！」、「カギ十字」の落書きだった。それに対抗して「ネオナチ、失せろ！」、「ファシストに死を！」という落書きも見た。これらの落書きから見えて来るのは、左右の過激派の角逐であろう。

八月四日はヒトラーの後継者ルドルフ・ヘスの命日だった。四年前に刑務所で病死し、バイロイトの近くの墓地に埋葬された。ネオナチはこの墓地で追悼集会を計画したが、連邦憲法裁判所は集会禁止を命じた。ところが、ドイツ各地から集まった千五百人の若いネオナチはバイロイトで集会とデモを強行した。集会に反対する左翼過激派も集結した。両者の間で小規模な小競り合いが頻発した。警察はこの騒動で百五十人を逮捕したと報告している。

心の壁と経済格差

路上で、電車の中で、そしてロカール（居酒屋）で、しばしば小耳にしたのが、ヴェッシー Wessi とオッシー Ossi という単語だった。早速、独和辞典を引いたが、該当する単語はなかった。その後、分かったことだが、ヴェッシーは西ドイツ人、オッシーは東ドイツ人を意味する。この単語はドイツが再統一し、同じドイツ国民となっても、なお経済的・精神的には相互に「異質な人間だ」という生活実感から生じた流行語だった。

私のベルリン滞在中の観察で言えば、彼らの身なりからして、「豊かな」ヴェッシーと「貧しい」オッシーを見分けることが出来た。それは決して「賢い」ヴェッシーと「愚かな」オッシーを意味しないのだが、そのことから一方に優越感が、もう一方に劣等感が生れ、「ベルリンの壁」が崩壊し、ドイツが再統一したにもかかわらず、新たに「心の壁」と経済格差が公然化したのであろう。

ドイツ再統一をヴェッシーもオッシーも「歓喜の歌」で歓迎した。オッシーはヴェッシーと同じレベルの豊かな生活と精神的自由を享受できると期待した。ところが、オッシーにとって、その現実は失業という「資本主義病」の蔓延であり、ドイツ西部に連動し、東部の消費者物価の上昇による賃金の実質的低下であり、家賃や公共料金の値上げだった。「嘆き」のオッシーが、ただいつまでも嘆いているならば、二流国民という劣等感と生活状況から解放されないであろう。

追記

昨年二〇一〇年十月、東西ドイツ再統一・二十周年を迎えた。今年六月にはドイツ連邦共和国の首都をベルリンに決定して二十周年を迎える。

その間、ベルリンの中心部では連邦議会の議事堂が改築され、連邦首相府が新築されて官庁街として整備された。旧東独地域は設備投資を中心に経済的に発展し、公

共投資により通信や交通網などのインフラも整備され、旧西独地域との所得格差も着実に縮小した。

私はまだ「ベルリンの壁」があった西ベルリンに留学した。その三年後、ドイツ再統一直後の夏、ベルリンを再訪した。その後は多忙と思わぬ疾病のために、急激に変貌する世界都市ベルリンを見聞する機会を逸した。

今や老境の身となり、残した記録と乏しい記憶をもとに今から二十余年前の拙い見聞を回想した。

出版社再生

宅見勝弘

一　倒産危機

宮家が入社した歴友出版社は、倒産直前であった。初出勤の十月一日の朝、宮家は豊岡社長から社長室に呼ばれ、その事実を告げられた。

「倒産は避けられないと思う。今期三月の決算は無理かもしれない」

豊岡社長は憔悴した表情で宮家に語った。

経営状況が悪化していることを承知した上で転職したので、宮家自身に後悔は無かった。しかし、会社の財務状態は宮家の予想以上に悪化している様子であった。

社長室の机の上に会社の決算書・納税申告書・資金繰表が置いていた。宮家は前年度三月期の決算書を見た。

決算内容は売上高五十一億円であるが、経常損失・当期損失は二億円を越えていた。資本金五億円より繰越損失が多く、負債が資産を上回る債務超過になっていた。

歴友出版は上場しておらず、財務内容は非公開である。出版社は上場基準を満たしていても上場しない会社が多い。

宮家は納税申告書の別表十一（二）を開いた。出版社の決算に特有の返品調整引当金の明細である。

引当金が計上不足であることを宮家は確認した。つまり、利益の水増しで粉飾をして、それでも赤字で債務超過の決算であることが分る。

資金繰り表の三月以降は収入部分が空白になっているが、支出欄には借入金返済三億円とあった。

「三月末の借入金の返済の目処はたっているのですか」

宮家が最も気になった点を質問した。

「大進銀行から融資の継続はできないと最後通牒を突きつけられた」

半年後の来年三月三十一日の一括返済の金額は三億円である。元々は五年前からの借入金で有り、当初の計画では毎月五百万円の定期預金を積立し、五年間で三億円

になるので、期日に相殺する計画であった。
しかし、その二年後に追加融資が決まらず、窮余の策で定期預金一億二千万円を解約した。
その後に定期を積み立てておらず、約定返済が履行されないと同じで、実質的に銀行にとって不良債権になっていた。
仮に三月に銀行が同額で融資を継続しても、追加融資が無ければ資金不足になる。
（このままでは来年の三月には倒産する。最悪の事態を避けるためには、早急に抜本的な対策を打たなければならない。果たして半年で可能だろうか）
この財務内容で銀行が追加融資をすると宮家にも考えられなかった。期日に同額継続しないというのは脅しでもなく事実に違いなかった。
「出版社の倒産形態は、破産が八割を占めます。破産では書籍が事実上の絶版になります」
出版社の破産は社会的な損失にもなると宮家は考えていた。
「倒産といっても、破産は避けたい。最悪の場合でも民事再生にしたい。出版を継続したい」
倒産は法律用語でなく、私的整理と法的整理のことを含めて一般に使われている。倒産を二つ分けると、破産などの事業を終了する清算型と民事再生などの事業を継続する再生型とがある。
社長は事業を継続できる民事再生を検討しているようであった。破産手続きの場合、歴友出版社から出ている千冊以上の書籍は事実上絶版となってしまう。しかし、民事再生なら販売を継続できるのである。
「民事再生を申立しても、現実には九割ほどの会社が破産に移行しています。民事再生でも企業が倒産したことで、信用を損ないますから、事業継続が困難になります。これは出版社に限らず全ての業種についての一般論ですが」
宮家は社長に対して厳しいと思いながら、率直な意見を述べた。
「そうすると、絶版を避けるための方法は何も無いのか」
豊岡は天井を見上げると、大きく息を吐き出した。
「破産でも民事再生でもない第三の方法が有ります。出版社の信用をできるだけ傷付けない形で、負債を合法的に削減する手法です。ただし、新社長が必要ですし、豊岡社長の保証債務は残ります」
「後継者として蔵永編集長を考えている。出版社が生き続けるのであれば、自分自身は何でもするつもりだ」
「分かりました。明日の朝までに簡単な資料を作成して、ご報告します。そのために私は転職したのですから」
宮家は銀行員時代に別の業種で担当した事例が参考になると考えた。

二　再生計画

歴友出版社は歴史書を主に出版する会社で、東京都新宿区に本社がある。歴友出版社は、宮家の祖父が歴史専門出版社として半世紀前に創業した。
創業者の長男で、宮家の叔父の豊岡が二十年ほど前に社長に就任してから出版点数を伸ばし、売上高が五十億円ほどの規模に成長させた。
学問的に価値の有る歴史書を多く保有していると定評を受けていた。しかし、専門的な歴史書が販売不振になり、全体的には赤字を計上していた。
専門的でなく一般向けに書かれた歴史書の売行きは好調であった。歴史新書シリーズは、図・写真など多く使用して読み易く、専門的知識を持つ編集者が作っているので他社が真似できないと評判であった。
歴史新書シリーズで毎月あるいは隔月で定期的に刊行している。新書版ということで、価格帯も七百円から千円未満であり、着実に購入者層を増やしていた。
新書シリーズは、都道府県の歴史・歴史事件・歴史人物・城・合戦など多く刊行されていた。
都道府県の歴史シリーズで、北海道から沖縄まで都道府県番号順に地方の歴史書を毎月刊行していた。現在は二十冊目の長野県までが発行されている。安定した部数が見込め、当社にとって確実な収益源となっている。
また、マルティメディア事業部はオーディオブックのCDやDVDなどの分野でも収益を上げていた。それでも専門書の赤字を埋めることができなかった。
宮家政典は大学を卒業して陽光銀行に勤めた。銀行には十四年間、勤務していたが、ほとんど融資係を担当していた。最後の六年間は不良債権処理を専門にしていた。陽光銀行が経営破綻し、成和銀行に救済合併されることになった。宮家は銀行の将来性に不安を抱いて退職をした。
銀行の不良債権処理経験から叔父の豊岡社長から助言を求められた。会社の再建に協力して欲しいと社長から言われ、宮家は歴友出版社に入社することになったのである。
宮家は再生プロジェクトチームに配属された。宮家の入社と同時に新設した部署で、専任は宮家一人だけである。社長の他に国江副社長と蔵永編集長が兼務で構成されていた。
二日目の朝、宮家は二枚の簡単な資料を作って、社長に見せながら説明した。
「破産でも民事再生でも有りません。第二会社方式で検討しました。これだと絶版を避け、出版社の名前を残して、出版を継続できると思います。六つの過程に分けて説明します」
二枚の資料の内、一枚は楕円が三つと矢印で構成された図である。

もう一枚は、六つ項目が書かれた資料である。

1. 第二会社設立
2. 資産査定
3. 資金調達
4. 事業譲渡
5. 社名変更
6. 特別清算

六項目にはそれぞれ三行程度の簡単な説明が付けられていた。

「まず、最初に第二会社を設立します。そして……」

宮家は社長に説明を始めた。質問を受けながらの説明が終わると、社長は大きく肯いた。

「その方法で現実に可能か具体的に進めてくれ」

宮家は弁護士の兼山に連絡した。兼山弁護士と宮家は大学のゼミで一緒に学んだ友人である。宮家と同じ三十七歳であったが、既に五件の破綻企業を再建した経験が有った。

弁護士百名を抱える弁護士法人に勤めており、弁護士法人も企業再建で実績が有った。

宮家は約束をして、三日目に社長と一緒に訪問し、兼山に自分の計画を説明した。

「私も御社の場合は第二会社方式が適切だと思います。それで進めましょう」

宮家は弁護士の意見を聞いて安心した。

三　第二会社設立

兼山弁護士と面会の翌日、宮家は社長と一緒に編集長の蔵永に計画の説明をした。

「第一に株式会社歴友出版という会社を設立します」

宮家が説明すると、蔵永は理解できない様子であった。

「会社設立といっても、現に歴友出版社は存在しているでしょう」

「株式会社歴友出版社でありません。社の字が無い株式会社歴友出版という名前の別の会社を設立します」

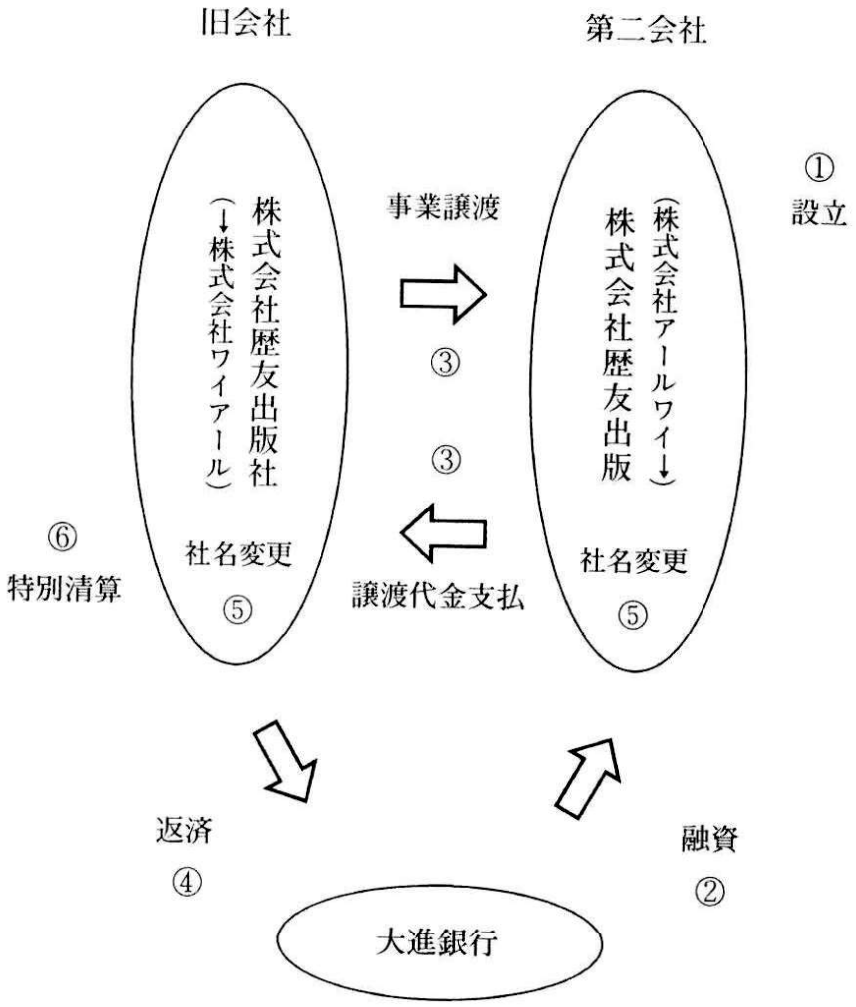
宮家の計画の第一段階は、現在の会社の名義を引き継ぐため、良く似た社名の株式会社歴友出版を設立することであった。株式会社歴友出版社から社の一文字を抜いただけだが、法律上は完全に別の会社になる。

「設立時は株式会社歴友出版の社名では都合が悪いので、別の社名で登記します。事業譲渡が終った時点で株式会社歴友出版に社名を変更する予定です」

会社が新設された情報は帝国データバンクなど調査会社が調べている。調査会社は毎月に新設会社情報を提供しており、銀行もその情報を買っている。

現時点では株式会社歴友出版という第二会社が設立されたことが広まらないようにしたかった。

株式会社アールワイという社名を仮称として宮家は考えていた。歴友出版社の発行する本の表紙には、もともと歴友出版の四文字が印字されていて、社の字は入って



なかった。ロゴマークは、漢字四文字の背景に、RとYの文字が入っている。

「同じ業種で良く似た名前の会社名では設立できないと聞いたことがありますが」

蔵永は未だ半信半疑の様子であった。

「以前は無理でしたが、今は類似した名前で設立することが可能です」

平成十八年の会社法施行前までは、商法で類似商号規制があった。同一市区町村内で同一事業目的である場合には商号登記を認めない規制である。

しかし、会社法の施行時の商法改正により、同じ東京都新宿区に同じ出版業で類似した商号の登記ができるようになっている。

「事業は一般書部門を中心に第二会社に譲渡する。その第二会社の社長に君が就任して欲しい。第二会社と旧会社と取締役が同じだと、利益相反行為で事業譲渡について支障が有る。旧会社の法的整理と同時に保証人の私も自己破産をする予定なので、責任を取って退陣したい」

以前は個人が破産すると取締役に就任できなかったが、会社法の施行により個人が破産しても取締役に就任できるように変更になった。しかし、利益相反の問題も有るので、豊岡社長は引責退任するのであった。

第二会社方式では新社長を引き受ける人物がいなければ、計画が成功しない。最初に宮家が社長に確認したのも、後継者の存在であった。

「分りました。新社長を引き受けます」

蔵永編集長は四十歳であるが、豊岡社長が前から次期社長として見込んでいた。収益源になっている歴史新書シリーズは蔵永編集長が企画したものであった。

第二会社でも億円単位の多額の借入が必要になる。非上場だから代表者の個人保証も求められる。その現実も理解した上で蔵永は決断している筈である。

「経営者としてだけでなく、株主として出資もします」

第二会社方式は法律上、旧会社の子会社であっても可能であるが、旧会社の出資は予定していなかった。豊岡社長自身も破産する予定で出資する資金は無い。

最終的に蔵永が一千万円で、蔵永の部下で第二会社の取締役になる予定の二人が残額を出資することに決まった。

大進銀行で資本金千五百万円の株式払い込みをした。大進銀行の担当者は子会社の設立と考えたようであった。電子書籍の別会社を設立する旨を宮家たちは担当者に伝えた。

この説明は別に嘘ではなく、電子書籍については定款にも明示している。仮に宮家の計画が失敗した場合の安全網として、歴史的価値のある書物を電子化して次世代に残す目的もある。

会社設立登記が終わり、宮家は会社謄本を大進銀行に届けに行った。今度は謄本の役員欄を見て、担当者は新

設の会社の取締役に旧会社の取締役が一人も居ないことに気付いたようであった。第二会社の取締役に旧会社の取締役が入ると、利益相反行為など発生する可能性があるので、兼任の取締役が居ないようにしたのである。

新会社は若手編集者を中心に運営すると宮家は説明した。大進銀行には計画の全容を説明する予定であるが、未だ話せる時期でなかった。

四　資産査定

譲渡価格の算定をM&Aネットという企業の合併・買収の仲介する会社に依頼した。銀行員時代の同期が勤めている会社であった。

デューデリジェンスと呼ばれる正式な資産査定を依頼したのである。客観的な評価額で取引をしないと、譲渡契約自体が債権者を妨害する行為として否認される懸念がある。

M&Aネットの社員が資産査定のため、一週間ほど会社の会議室に籠った。社内で公表する段階でないので、他の社員へは国税調査だと偽っていた。赤字会社なのに国税調査というのは苦しい言い訳だと宮家は感じた。

調査員への資料提出は、事情を話した財務部長と宮家を通していたので、他の社員は不信感を抱かなかったようであった。

二週間後にM&Aネットの担当者が会社に報告書を持ってきた。

「デューデリの結果が出ました」

担当者はデューデリジェンスを略して説明した。事業価値はEBITDA（イービットディーエー）に三～五の年数を乗じて算出した価格に純資産を足して決定する。EBITDAとは営業利益に減価償却費を加算したものと大体は等しくなる。

今回は最小の三年で算出したという説明であった。事業価値に営業権つまり暖簾（のれん）代を加算して譲渡金額を決める。担当者は専門用語で煙に巻くように語った。

「難しい理論は結構なので、肝心の事業価値を教えて下さい」

豊岡社長は専門用語の羅列に嫌気が差したようで、説明を促した。

「事業部門ごとに分けてデューデリを実施しています。専門書の東洋史と西洋史の部門ですが、二つともデューデリの結果は一円です」

「一円……。単位は一億円でも百万円でもなく、単に一円というのか」

豊岡社長は愕然とした様に呟いた。

「当然です。本来は事業価値がマイナスなのですが、ゼロ円では譲渡できないので、一円と評価しました」

担当者は機械的に言った。宮家は豊岡社長の心情を察した。

豊岡社長は一億円以上の個人資産を専門書部門へ投じていた。それが一円と評価されたのであった。経済的価値と学問的価値は別と割り切っても納得できない筈であった。

宮家自身は、評価額が少ない方が第二会社での債務負担が小さくなるので、成功する可能性が高くなると考えていた。

専門書の日本史部門が約一億円、一般書部門が約三億五千万円、マルティメディア部門が約五千万円の評価額が示された。

東洋史・西洋史の専門書部門は譲渡の対象外となった。この部門の書籍や版権は旧会社の法的整理後に買い取った方が安くなる。

五　資金調達

スポンサー企業については、業界大手の新川書房に依頼することにした。新川書房は社長が歴遊出版社に入社する前に勤務していた。

社長は転職後も新川書房とは良好な関係を築いていた。その良好な提携関係から、今回のスポンサーについても非公式で打診をしていた。

新川書房には一年前に出資を依頼していた。その時は歴友出版社の財務内容が悪いということで、出資が見送られた。今回は第二会社方式にすることで、新川書房も積極的に対応する方針となった。

第二会社方式の場合は、通常の出資や民事再生後の支援と比べてもスポンサー企業の負担は軽い。民事再生企業だと金額は削減されるが、負債を引き継ぐことになる。

しかし、第二会社だと旧会社の負債を引き継がないので、民事再生企業に対する支援よりもリスクが少なくなる。

第二会社方式による支援は新川書房内の決裁も迅速に進み、金額も当初の十億円から十五億円まで増額したのであった。但し、第二会社への銀行の融資が条件となった。

最大の関門は第二会社での銀行借入である。もし第二会社での融資が受けられなければ、第二会社による計画は根本的に見直しが必要になる。

豊岡社長・国江副社長・蔵永編集長・宮家の四名は大進銀行新宿支店に計画の概要を説明に行った。先方は融資課長・融資係だけでなく支店長も同席した。

宮家は第二会社設立から資産査定の話まで資料を見せながら説明した。

「第二会社が旧会社から事業譲渡を受ける際に支払う譲渡代金五億円の融資を検討して下さい。ご融資いただければ、五億円全額を旧会社の返済に充てます」

融資の条件として包括的譲渡担保という方法で、在庫を担保提供することも説明した。計画の説明が終ると、支店長は渋い表情をした。

「要するに、銀行が貸した金二十億円の内十五億円を踏み倒すために、新たに五億円を貸せという話でしょう。どう考えても、盗人に追い銭という計画です」

支店長は言い放つと、応接室から出て行った。気まずい雰囲気の中で、宮家たち四名は後日に出直すことで銀行の応接を出た。

「第二会社方式で銀行の支援を得るのは無理なのか」

社長が呟いて肩を落とした。

「経営悪化の原因の一つは、大進銀行の紹介で本社を購入したことでないか」

いつも温厚な国江は銀行の対応に怒った。

財務内容が悪化した原因の一つは、本社の購入の失敗である。大進銀行関連企業である大進不動産から十三年前に本社を購入した。十四億円の物件の購入資金の十億円を大進銀行から融資を受けていた。

五年前に売却したが、五億円もの固定資産売却損が発生していた。本社購入の損失は自己責任だと豊岡社長は言っていた。

「スポンサー企業の支援だけで実行できるよう計画を縮小しましょうか」

宮家は計画の変更が必要かと思い、社長に提案した。

銀行からの融資が不可能であれば、第二会社方式を成功させるとしても、スポンサー企業だけの資金の範囲内で事業譲渡するしかない。

「それでは意味が無い。新川書房に相談した上で、大進銀行の協力を得るように交渉をしよう」

大進銀行の次に成和銀行に行く予定であったが取り止めた。最後に新川書房に銀行の対応を伝える予定だったが、直ぐに訪問することにした。

新川書房の社長は大進銀行の対応を聞いて、厳しい表情をした。

「私達が提供する資金が旧会社に対する銀行の融資金の返済に回るようでは、支援することは出来ません。銀行が資産査定額の全額を融資しないのであれば、スポンサーを降りざるを得ません。弊社の資金が倒産する旧会社に回るということは、銀行に与えるようなもので、ドブに捨てると同じです」

銀行とスポンサー企業の間で板挟みになり、宮家たちは憂鬱な面持ちで会社に戻った。

翌日に宮家と社長が大進銀行に行き、新川書房の意向も伝えた。支店長は相変わらず拒絶的な姿勢を見せていた。その後も大進銀行と折衝したが、支店長は計画に対して三つの条件を突き付けた。

第一の条件は融資額が譲渡金額の五割以下であること、第二の条件は在庫以外に銀行が処分可能な担保を提供すること、第三の条件は成和銀行にも現在の融資残高に比例した金額の新規融資を受けること、であった。

銀行の主張も正論かもしれないが、実現不可能な条件

であった。具体的な進展の無い状態で十一月が終った。

大進銀行が九月末の半期決算で前年度を大幅に上回る黒字になるという報道を宮家は新聞で読んだ。この報道で計画が有利になるかもしれないと宮家は感じた。

銀行にとって旧会社のままで営業を続けていると貸倒処理ができない。大進銀行の今期決算が大幅に黒字決算になるのであれば、不良債権償却を積極的に進めるだろうと思った。旧会社が特別清算すれば、銀行は貸倒損失を計上できるので、その分の税金負担が軽減される。

十二月に入り、大進銀行新宿支店を宮家が訪問すると、十一月末日で支店長が退職したと説明を受けた。本部から新支店長が赴任していた。

新支店長は本部の不良債権処理の部署で、歴友出版社を担当しており、計画について事前に知っていた。

第二会社への融資金額の全額が旧会社の不良債権回収金額になり、銀行にとっても不良債権処理を進めることを強調して、宮家は新支店長に説明した。

「御社の再生計画は、銀行にとってもメリットが有ると思います。御社が今の状態で法的整理をした場合は、五億円も回収できる筈はありません。もし、御社の計画で対応できれば、銀行の損害も少なくて済みます」

黒字決算と支店長交代のためか、今迄の拒絶が嘘のように交渉が進んでいった。

大進銀行との交渉が進んだが、成和銀行には全く計画の説明をしていなかった。借入金は大進銀行の二十億円に対して、成和銀行が三億円である。

成和銀行には借入金の延長の手続きの際に宮家が資料を提出するが、成和銀行から一方的に返済の督促をされるだけであった。

「融資残高に比例して成和銀行にも融資を頼むようにと前の支店長に言われましたが」

成和銀行が赤字決算の見込みであることを宮家は懸念していた。成和銀行は破綻した陽光銀行を吸収合併したので、今期の決算は赤字になる筈である。損失が確定する計画に成和銀行が同意するか、大進銀行より判断基準が厳しくなると思っていた。

「融資額の按分はしないで、全て私共の銀行で融資させていただきたいと思います」

大進銀行の支店長は成和銀行を外して進めたい様子であった。最終的に成和銀行には全く計画を告げないことに社長が決断した。

旧会社には借入金と価値の無い資産だけしか残らない。特別清算をしても配当は一パーセント程度であった。大進銀行が再生計画に応じれば、貸倒率は七十五パーセント程度になる。一方、成和銀行の貸倒率は九十九パーセントになる。

事前に話した場合は、成和銀行の判断に時間がかかり、銀行間の調整が不調に終る危険もあった。計画に協力するか分らない以上は、情報漏れを防ぐためにも秘密にすることが得策のように思えた。

計画が実行された後に、成和銀行が第二会社設立の否認や詐害行為取消権の行使をする可能性があるが、その可能性は低いと判断した。大進銀行と成和銀行とでは借入の金額も七倍の差がある。

新支店長と話した一週間後には大進銀行から正式な回答が有り、第二会社で五億円の融資が決定した。

銀行の融資予定日は、事業譲渡の契約日である三月十日である。五億円の内、二億円は十年間で毎月返済の条件である。

第二会社に融資がされると即座に口座から引き出され、旧会社に振り込む。そして、即座に旧会社の口座から引き出され、そのまま融資返済に充当されるのである。

六　事業譲渡・社名変更

事業譲渡と社名変更については、既に株主総会での特別決議を行っている。また、取締役会の決議も済ませて、事務的に過失の無い様に注意した。

銀行手続きと同様に事業譲渡の契約も事前に準備しているので、当日に処理すべきことは特に何も無かった。

譲渡契約の翌日には第二会社の株式会社アールワイを株式会社歴友出版に、株式会社歴友出版社を株式会社ワイアールに社名を変更するため、法務局で登記手続きをした。

登記が完了すると、大進銀行に直ぐに二つの会社の社名変更の手続きを済ませた。事情を知らせていない成和銀行には変更の手続きは特別清算直前まで控えることにした。

「旧会社が倒産するという事実は隠しようがないか」

豊岡社長は特別清算による風評被害を懸念している様子であった。

「社名変更をしていても、倒産の報道は変更前の社名で報道されるでしょう。それでも公的な記録は変更後の社名でされるので、倒産の影響を抑える効果が有ると思います」

株式会社アールワイも株式会社ワイアールも当初は宮家が説明するための仮称であったが、そのまま使用することになった。

ロゴから採択したが、出来るだけ印象に残らない没個性的にアルファベット二文字にしたのである。アールで始まるとアイウエオ順で最初の方になるが、ワイだと最後の方になる場合が多いということも考慮した。

今回の計画では印刷会社や取次業者が従来と同条件で引き継ぐため、蔵永が中心に交渉を進めていた。

印刷会社については、基本的に旧会社の支払いは特別清算申立ての前に支払い終わり、第二会社では従来の支払条件で取引する。

日販・トーハン・大阪屋などの取次業者とは、第二会社での取引口座を社名変更以前から既に開設していた。事前に計画の全容を説明しなかったが、薄々は感じ取っている業者も居た。

「返本で混乱は発生しないでしょうか」

宮家は出版の現場に詳しくないので、蔵永に確認した。

「ＩＳＢＮコードで管理しているので、特に問題は無さそうです」

蔵永の言ったＩＳＢＮコードは、世界共通で図書（書籍）を特定するための番号である。この番号で取次業者は管理している。実際には書籍ＪＡＮコードと言って、対応するバーコードと共に、ＩＳＢＮ部分と分類コード・定価コード部分の二行にわたって印刷されている。

十三桁の五桁目から八桁目までの四つの数字が出版社を指しているので、同じ装丁の書籍でも第二会社と旧会社とで分けることは可能であった。

日本の出版物は、委託販売といって、一定の期間を定めて書店に委託して、その期間内に売れたものの代金を支払い、売れ残ったものは返品してもらう販売システムを採用している。

出版界の委託販売というのは、法律上は委託販売でなく、返品条件付き売買になる。つまり、書店に並んでいる本も売れなければ、事実上は出版社の在庫と同じに考える必要が有る。

出版社や取次から書店に本が売却され、本の返品条件を取り決める。売買行為であるから、本の所有権は書店に移っている。一定期間が過ぎても本が販売できなかった場合、書店は返品条件に従って本を取次・出版社に返品するが、これも売買である。旧会社発行分の返本も取次業者と第二会社との間の新たな売買となる。

書店からの旧会社発行の返本を第二会社で引き取ることに譲渡契約でも条件としている。旧会社の返本を第二会社が買い取ることで、取次業者とっても不良在庫が解消される。

「それに倉庫は旧会社と同じですから、取次業者が間違えても、何も支障が無いでしょう」

第二会社の倉庫は旧会社と同じ物件を賃借人の名義を替え利用することにした。蔵永の説明に宮家は再生計画の前段階で行った提案が奏功したと思った。

「旧会社の時に倉庫をリースバックしたのが、効果的でした」

宮家は旧会社所有の倉庫のリースバックの提案をしていた。リースバックとは自己所有の不動産を第三者に売却し、購入した第三者から賃借して従来とおり使用する手法である。この第三者として大進銀行の紹介で大進不動産が購入し賃貸している。

取次業者が仮に間違って旧会社に返本したつもりでも、問題なく第二会社に届くことになる。

七　特別清算

三月二十五日に宮家は兼山弁護士と豊岡社長と共に東京地方裁判所民事第八部の商事部非訟手続係に行き、特別清算の申立を行った。同時に豊岡社長の自己破産申立の手続きをした。

旧会社について破産でも手続きは可能であるが、特別清算の方が有利な点が多い。

特別清算は、破産よりも裁判所に納める予納金が安く、手続も簡素である。破産は債権者の平等が原則である。

特別清算の弁済計画には債権額三分の二以上の同意が必要とされるが、大進銀行の同意があれば問題ない。成和銀行は融資比率が十三パーセントであるので、反対しても特別清算は可能である。

破産の場合は、裁判所の選任する破産管財人が代わって資産処分や債務弁済を進めるのに対し、特別清算は、取締役を清算人にして処理を進めることができる。

代表取締役社長の豊岡が自己破産を申立するので、清算人になれなかった。取締役である国江副社長が清算人に就任することになった。

特別清算申立の翌日には新聞や調査会社の報告書で報道された。

『株式会社ワイアール（旧商号　株式会社歴友出版社）特別清算申立』

調査会社の倒産速報では、変更後の社名と共に括弧書きで変更前の社名が掲載された。

同じ日に倒産した会社二十社ほどの一覧がリリースされていたが、アイウエオ順で最後になっている。倒産記事は珍しくも無いので、新聞記事の扱いは小さかった。

大進銀行には全て事前に通知していたが、成和銀行には全く知らせていなかった。成和銀行は社名変更の手続きをした後、融資課長から会って話がしたいと連絡があった。しかし、面談は一週間後としていた。

成和銀行には裁判所から特別清算申立の通知が送られるが、通知より前に調査会社の情報が伝えられた様子あった。成和銀行は完全に不意打ちを受けた形になる。

「資産の譲渡については詐害行為として取消権を行使する方法もあります。場合によっては第二会社の法人格を否認することもできます」

成和銀行の担当課長から宮家に連絡が入った。事前に話が無かったことを不快に感じていることが宮家に伝わってきた。宮家は兼山弁護士に連絡した。

「詐害行為取消権の行使も法人格否認も無いでしょう。破産だと三十日前の譲渡は確かに否認の対象になりますが、今回は特別清算なので問題ありません。大進銀行だけで総債権額の三分の二以上有るので、否認は無理です。仮に成和銀行から訴えられても敗訴しないでしょう」

兼山弁護士は確信がある様に答えた。

旧会社の資産は現預金と売掛金と入居保証金ぐらいで

あるが、それも残っていない。本来は入居保証金と家賃とを借主の歴友出版社からは本来は相殺できない。

しかし、事務所の家主と豊岡社長が旧知の関係であったので、最後の六ヶ月の賃料を未払いにして家主側から相殺して貰う様に依頼した。相殺通知の内容証明郵便も宮家が作成していた。

印刷会社に通常の支払いよりも前に支払ったので、預金残高はほとんど残っていなかった。第二会社での印刷を引き継ぐためには旧会社での印刷代金は支払った上で整理した。

特別清算の配当は一パーセントを下回ることになった。成和銀行の貸出債権三億円は二百万円ほどになった。

『旧会社・歴友出版社の出版事業は、新設された第二会社・歴友出版で引き継がれており、一般読者に対する混乱は少ないものと思われる』

調査会社の倒産情報の続報には概ね好意的に書かれていた。当初の思惑通りに特別清算の情報も広がらなかった。

第二会社に移行して、一ヶ月が経過した。編集部と出版計画を綿密に打合せし、第二会社の移行が読者に分らないように配慮した。仮に読者が気付いてもシリーズの刊行が無くなる不安を抱かせないようにした。

宮家は仕事が終った後に会社の近くの大型書店によく立ち寄っていた。第二会社になってから出版した書籍も以前と同じ歴史書コーナーに並んでいる。

旧会社発行本も第二会社発行本も背表紙のロゴを初め装丁は全く同じである。違いは奥付の会社名や社長名と住所だけである。

都道府県の歴史シリーズは都道府県番号順で京都府まで旧会社の発行であったが、大阪府からは第二会社から発行されている。

他のシリーズも読者が連続して買いそうなテーマを旧会社の最後と第二会社の最初に選んでいる。例えば、近代戦史では日清戦争と日露戦争を、合戦では保元の乱と平治の乱を選んでいる。

(上巻と下巻が別々の会社で出版していると思わない筈だ)

幕末の歴史人物シリーズで坂本龍馬を扱ったが、シリーズで初めて上下巻本に分冊した。上巻が旧会社で、下巻が第二会社となっている。上と下の文字以外は完全に同じ装丁にしたため、上下巻の区別が分り難いほどであった。

取次業者や書店に混乱をさせたが、読者に倒産の事実を隠すのに非常に効果的であった。

(一般の読者は歴友出版社が既に倒産して消滅していると気付かないだろう。第二会社方式による再生計画が成功した)

書棚に並んだ背表紙を見て、宮家は成功を確信した。

魔鏡

鍋屋次郎

島原半島先端の口之津から外海地方を長崎に向かって歩くと北草と呼ぶ集落がある。どうしてその名前が付いたのかは分からない。天草の人たちが移住して、天草の北だから北草といつの間にかそうなったらしい。

この集落の山沿いに立つ寺、松瑞寺の境内には重苦しい空気が漲っていた。長崎奉行所から出張って来た役人山之内一馬が本堂を背にして床机に座り、口之津代官所の役人四名がその左右に二人ずつ立って、村人が「踏み絵」を踏む動作、と言うよりも踏み方に疑問がないかどうかを検証している。

「踏み絵」のすぐ近くに立つ口之津代官所の役人宋勝馬が

「北草村　和助、これへ」

と呼ぶと、野良着姿で、腰に手ぬぐいをぶら下げた四十過ぎの男が腰をかがめて「踏み絵」の前に来て、宋勝馬に一礼した。

北草村の十三才以上の男女で一人で歩くことが出来る者は全員「踏み絵」を命じられているので、境内の片隅にはまだ三十名以上の男女が自分の呼ばれるのを待ちながら、不安そうに眺めている。誰一人声を出す者はいない。境内は役人の声以外何も聞こえず、不気味なほど静かだ。

先ほどからぱらぱらと雨が落ちてきた。和助が「踏み絵」に足を出そうとしたとき、和助には「踏み絵」の「聖母マリア像」の目の上に落ちた一滴の雨が、聖母マリアの目に浮かんだ涙のように見え、踏む足が一瞬躊躇し、踏んだ足にも力がなかった。

突然
「和助！　汝はキリシタンであろう。白状いたせ」
というが早いか和助の顔面に鞭が飛んだ。
和助はその場に土下座して
「お役人さま。わっしはキリシタンではありません。その証拠にもう一度踏ませてください」
と懇願した。和助の左目の端から血が流れている。

境内の片隅でその様子を見ている村人達は、これからどうなるのか心配で誰も身動き一つしない。

宋勝馬は長崎奉行所役人の山之内一馬の意見を伺うように山之内を見た。その瞬間、山之内が大きく頷くのを見て
「和助、再度踏むことを許す」
と言って、和助を促した。
今度は力強く踏んだので、無事帰宅を許された。

妻のカメと十四歳になる娘のミツと三人で帰宅した和助は、踏み絵を汚れた足で踏まないように、足の指の所を長くした新しい藁草履を編んで履いていったが、その藁草履を石の上で燃やし、その灰を茶碗に入れ、水を差して飲みながら
「ゼスズキリストさま、「踏み絵」を踏んだことをお許しください」
と言って、クジラの鰭を糸状にほぐして作った紐状の束で自分の背中を鞭打ちながら詫びた。ゼスズキリストに対しての詫びの儀式「オテンペシャ」である。やがて妻も娘も同様にした。

翌日、北草村に許されている「入会山」から薪にする枯枝を取って自宅近くに来ると、裏の竹やぶに人がいるのが見えた。その人は和助が戻ってくる姿を見ると、竹やぶの奥のほうに向かって歩いて行った。その姿は宋勝馬であった。

翌朝、畑の手入れに行こうとして家を出ると、急ぎ足で去ってゆく宋の姿が目に入った。

和助は畑に行く途中、後ろを振り返って宋の姿が見えないことを確認しながら村長役の喜作の家を訪ね、過日の失態を詫びてから、口之津代官所役人の宋が自分を見張っていることを伝え、二人は相談のうえで、暫くの間村のキリシタン集会をしないようにすることとした。

あと二日で師走を迎える時期は、長崎の外海は波が高

い日が続いている。
夕暮どき和助はその波の遥か先の水平線に沈んでゆく赤い太陽を見ながら自分を見つめていた。
祖父の代からキリシタン信仰をしていて、祖父の信仰のことは詳しくは知らないが、和助の父親はリーダー役の一人として日繰役を務め、キリシタン暦を作成して北草村全戸に集会の案内をしていた。父からは
「ゼスズキリスト様は、本来お前たちが天の神様から罰せられる罪を全て被って十字架上で死んで天に昇られた。だから、生きている限り信仰を続け、教えを守っていれば死後パライソ（注　天国）に行くことができ、そこはこの世にあるような身分制度もなく、悲しみもない。そこでご先祖様にも会えるのだ。この信仰を守り続けないと永久にご先祖様に会えないし地獄に落ちる」
と教えられていた。

しかし、無住の松瑞寺でのキリシタン集会で、何も見えない、触ることもできない「ゼスズキリスト」様にオラショを唱えて信仰を続けているが、天国からもどこからも反応は一つもない。むしろ、この世では小さくなって、信仰をひた隠しに隠して、嘘をついて毎日オドオドして過ごしている。
死後に本当に天国はあるのか。確信が持てない。確信を持つためには、たとえ反応はなくても目に見えて、すがりつくものを欲しい。このままでは自分の信仰が怪しくなってしまう。

このような思いを自問自答していた。

キリシタン暦でキリストの誕生日集会を開く日が近づいた。最近は宋勝馬の姿は村では見かけなくなった。

大晦日まであと六日という日の夜、松瑞寺に北草村の全戸主が集まった。寺に安置している仏像に布を掛けて目隠しをし、喜作がキリスト降誕のオラショを唱え、全員がそれに続いた。そして元旦の「お水」行事の打ち合わせが行われ、喜作と和助が山奥の谷川にある湧水（聖水）を組みに行くことと、今年生まれた子ども三人に、その「聖水」で洗礼を授けることが決められた。洗礼は「お水役」が務めるので、喜作が行うことも確認された。

和助はキリシタン信仰の中で「目で見て確認できるもの」「縋り付いて行くことのできる何物か」をどうしても欲しかった。正月も過ぎてから、近郷近在でただ一人の医師松井良庵を訪ねた。北草村の山裾に屋敷を構えている。
門の前まで行くと、たまたま犬を連れた良庵にばった

りと出会した。
「これはこれは良庵先生」
と挨拶すると、良庵は
「和助か」
と言って暫く和助を見つめて何事か考えていたが
「昨年暮れ、海岸で和助を見たが何か困ったことでもあるのか。元気がなさそうだったような気がする。キリシタン信仰のことか」
とズバリ聞いてきた。和助は周囲を見渡し、口を開こうとすると、察した良庵は
「これは口が滑ったな。中に入れ」
と言って門の中に招き入れて門を閉め、庭伝いに居間の縁側に行くように指示した。

縁側に腰を下ろして良庵の来るのを待っていると、褞袍を着た良庵がやってきて、座布団に腰を下ろした。
「和助、ここならだれも聞いていない。悩みを話してみろ。お前の親父も若いころここで話をしたものだ」
と言って和助に話を促した。
「そうそう」
というが早いか手をたたいて女中を呼び、夫人にここへ来るように言った。

襖が開くと夫人が入ってきて良庵の横に座って
「何か御用ですか」
と尋ねると
「和助と大事な話をするから、下男も女中も誰もこちらには来ないようにしてくれ。それと、長崎から貰ったカステイラがあるだろう。一切れ和助に持ってきてあげなさい」
と命じた。

和助がキリシタン信仰への迷いというか、信仰の対象を見ることができず、縋り付くこともできず、何も反応がなく、むしろ信仰を続けることが、この世で自分も家族も小さくなって隠れて生きてゆかなければならないことを話した。

良庵は
「和助、よく話してくれたな。でもな、和助一人がこの北草村の人たちの中から逃げ出すことができるか。北草村の人たちは全員がキリシタン信仰を持っている。お前の悩みは分かる。少しこの良庵に考える時間をくれないか。考えてみよう」
と話した後、
「和助、これがオランダのカステイラという菓子だ。食べなさい」
と奨められて和助はカステイラを千切って口にした。

「どうだ？」
という良庵の問いに
「へい、こんなに美味いもんは食べたことがございません」
と言って、カステイラ一切れを食べ終わった。
良庵は暫く庭に目をやりながら考えていたが
「和助、この良庵に考えがある。一年かかるか二年掛かるか分からないが、希望を持って待っていなさい。お役人に分からない方法で、お前の言う物を作って進ぜよう」
と言った。

その夜、良庵は長崎出島から買ってきた二枚の銅鏡を手にして、出島で会った明国の商人、周銭民の言葉を思い出していた。
明には銅鏡に光を当てて反射させると、中に仕掛けたものが反射の光の中に浮き出てくる銅鏡があると言っていた。どうすればそれが出来るか。
理屈からすれば、銅鏡の表面から光が中に射し込み、射し込んだ光が中に組み込まれたものと一緒に反射することで、中に組み込まれたものが光の反射の中に映像として映るのではないか、と考えられる。
しかし、銅鏡の表面を光が通過するだけの薄さに削らなければならないと言う難問がある。

翌朝、気の早い良庵は診療を息子の鶴亮に任せて長崎のオランダ商館に行き、そこから出島のオランダ事務所にいる明商人に会いに行った。

銅鏡を光が通るくらいの薄さまでに削る研磨材は、金剛石よりも固いといわれる明国奥地の西安から敦煌を過ぎた山中から算出される「黒曜岩の一種」で、その岩で硯に墨を摺るように銅鏡を磨くことしかないと教えられ、その研磨材三個を六十両で購入する契約をした。半金三十両はその場で支払った。

三か月後、オランダ商館から品物が入ったとの知らせがあり、取りに行きながら再び出島に行くと、運よく周銭民に出会った。
彼は銅鏡の磨き方の教えを乞い、その夜は出島のオランダ屋敷に泊まり、翌日陸路でなく船で帰宅した。

良庵は教えられたとおり、銅鏡の鏡の表面裏側の中心点に印をつけ、そこから半径一寸の円を描きその円内から磨き始めた。最初の二日間は銅鏡も黒耀岩もどちらも磨り減った兆候はなかったが、三日目に入り磨いた跡を和紙で拭ってみると銅鏡表面裏側を削った粉末らしいものが和紙に付着した。

桜も散った四月、夜更けに喜作が和助を訪ねてきた。口之津から東に行った小さな漁村で、一軒の家の天井裏からロザリオ一個と、十字架を持った聖母マリア像一体が発見され、その家族は全員雲仙岳に連行され、熱湯の温泉の中に浸されて全身やけどでその場で絶命したとのこと。口之津代官所の役人宋勝馬が北草村を嗅ぎまわっていることでもあり、それら祭祀器具は油紙に包んで地中に埋めることとし、家で「ゼスズキリスト」に祈るときでも、地中に埋めた方向を向いて祈るようにすることを全戸に知らせることとした。

その折喜作は、松瑞寺でのキリシタン例会のとき、司会者が祈るオラショに唱和する声が小さくなって、元気がなくなって来たことを心配して和助に相談した。和助自身もその一人であることから

「喜作さん、皆は信仰で、目に見えて縋り付けるもの、触れるものを欲しがっている。松瑞寺での集会にはそのようなものが一つもない。何か考えないとと思っている」

というと

「そうなんだけど、危険は冒せない。次回の集会でその悩みに耐えるように話をしよう。それと、口之津代官の宋勝馬は狙った家に上り込んで家探しをする危険があるからそれも皆に言っておこう」

医師良庵は、北草村の人たちからは治療代、薬代は一切取らない。村人は畑で採れたもの、海で獲れたもの初物を必ず届けていた。

息子鶴亮は長崎でオランダ医学をおさめ、地元よりも長崎で名医の評判が高く、裕福な町人や役人から求められる往診が忙しく、北草村の自宅には殆ど居ない。

良庵は相変わらず銅鏡の表面裏側を磨き続け、中心部では、見た目は鏡であるが陽に当てると、幽かに陽が通るのを確認できるようになっていた。

和助が畑の野菜を持って訪ねると、良庵がその銅鏡を持ってきて見せてくれた。和助にはその銅鏡からキリシタンの崇める像が写し出されるなどということは思いもせず、考えてもいないので、良庵の目的が理解できないままひたすら苦労話を聞いていた。

それから三日後の午後、和助は妻と二人で畑の手入れをし、まだ仕事が残っている妻を残して自宅に戻った。入口に男物の草履があり、誰か来ているのかと部屋に上がると、床に敷いた莫蓙の上に男女が組み合っている。驚いてみると、娘のミツの農作業用の絣の着物の胸がはだけて乳房は露わになり、着物の帯はとられて両足をバタバタさせて抵抗している。押さえ込もうとしている男の下半身は丸出しで、今にも娘の上に覆い被さろうとしている。

男が気配を感じて頭を持ち上げて振り向こうとした瞬間、和助は戸締り用の樫の木で作った心張棒で男の後頭部を力任せに一撃した。血がほとばしり男は莫蓙の上に蹲って動かなくなった。ミツは起き上がり身づくろいして立ち上がった。

部屋の壁際には大小の刀が揃えて置いてあり、気を失って蹲った男を仰向けにして顔を見ると、なんと宋勝馬だ。

和助は風呂場に行き、昨夜の残り湯を桶に入れて戻ってきて、蹲っている宋勝馬の顔をその中に浸した。息を吹き返すのが恐ろしかった。気を失った体は一瞬ピクリとしたが、和助が頭を押さえているうちに全く動かなくなった。

夜更け、農作業用の台車に死体を乗せ、周りに野菜を入れる籠を並べ、上に莫蓙をかけて収穫した野菜を運ぶように見せかけ、外海に面した崖の上まで運び、そこに草履と刀の大小を揃えて置き自殺に見せかけて死体を崖から落とした。暗くて良くわからなかったが、どこか崖下の石にぶつかってから海の中に落ちたと思われる、あまり大きくない水音が聞こえた。

十五歳のミツは、野良着の袖から見えている腕や手先は白くふくよかで、腰回りも豊かで、時々家の周りを歩いている宋のいやらしい視線は感じていたという。

その日の出来事はこうだった。ミツが家にいるとき宋勝馬が入ってきて

「お家改めである。神妙にいたせ。和助はおるか」

と言うので

「父も母も畑に行っています」

と言うとミツをちらりと見てから押入れを開けた。

押入れ中の物を出して確かめるかと思っていると、振り向いてミツの前に立ち

「可愛がってやる。大人しく従え」

と言うが早いかミツの着ている着物の胸をはだけ、その場に押し倒して着物の前も広げた。もうだめか、と思ったとき和助が帰ってきて助かった。

和助は、心張棒に血痕が付着していないかどうかよく見て棒を水洗いし、部屋に敷いてある莫蓙に飛び散った血の跡も全てふき取った。

翌日夕方、喜作がやってきた。

「和助さん、聞いたか？　口之津代官所の宋勝馬が崖から飛び降り自殺したそうだ。刀も脇差も草履も揃えてあったそうだ。何が原因かよくわからないが、口之津で他所の女房に手を出してそれが表沙汰になったらしい、

それで、少し離れた北草村で飛び降り自殺したのではないかと、専らの評判だ」

和助は驚いた顔をして聞いていた。

その晩、家族が寝静まってから和助は「ゼスズキリスト」に許しを請う祈りを捧げた。

「ゼスズキリスト様、わっしは人を殺しました。「汝殺すなかれ」の教えに背きました。あの時それ以外の方法はありませんでした。宋勝馬は嫌がる女を強姦しても合意の上と言って、逆らう者は手打ちにしていました。あの場で見ないふりをした場合はミツが可哀そう過ぎます。殺さないでやめさせる方法はありませんでした。殺さなければわっしが殺されています。わっしはどのようにしたら良かったのでしょうか。キリシタン信仰者や身分の低いものが、このように虐げられる苦しみから救ってください。どうして救いの手を差し伸べて頂けないのでしょうか。苦しみに耐えながらパライソに入る日を待ち望んでいます。アーメン」

それから半年のち、医師の良庵から使いが来た。訪ねるとにこにこして、裏庭に回れという。

良庵は表と裏側の二つに分かれた銅鏡を持ち

「和助、今説明するからな。良く聞けよ。まずこの鏡のほうだ。このように表と裏を合わせれば鏡その物だろう。それでこのように陽に当てると光が入ってくる。ここまで凹凸がないように薄く削るのは大変だった」

銅鏡の表側を持って陽に当てている和助に、良庵はさらに続けて

「こっちの裏側を見てみろ。まだ完成ではないが裏側内面も削って全体を湾曲にして、真ん中に十文字を入れてみた。十字架だな。そこに部分的に墨を塗ってみた。そして蓋をしてこのように陽に当てる」

と言って、反射の光が座敷の襖に当たると、丸い反射の光の中に黒白斑の十字架が見える。和助が驚いていると、良庵は

「この十文字を縦長の十字架にして、そこに張り付けられて悲しい顔をして項垂れているキリストを出して見ようと思っている。そうすれば松瑞寺の庫裏の暗闇の中でも、和助たちが崇めて祈ることのできる対象が現れることになろう。教えてくれる人がいる訳でもなく、手探りでここまでやってきた。和助に言ってから既に一年は過ぎている。あと、どのくらい日数がかかるか分からないが待っていてくれ。これが出来れば、反射する光がなければ、だれが見てもタダの銅鏡。出来上がったらお前たちにあげよう」

と言いながら、既に下書きに書いた十字架上のキリストの絵を見せた。長崎に行ったときにオランダ商館にあったものを貰ってきて参考にしたと言っている。

和助はこのことを、まだ喜作にも誰にも言っていない。どこかからばれて良庵に迷惑のかかることを恐れていた。出来上がったら、喜作と二人だけの秘密にして集会のときに使いたいと考えている。

良庵も息子の鶴亮も、長崎によく出向くのでキリシタンのことはよく理解している。決して悪い教えではないが、ただ、今の為政者にとっては神社仏閣の否定などで受け入れられない宗教だと思っている。しかし北草村の住民の素朴で真面目で惜しみなく働く姿を通して隠れキリシタン達を理解し、陰の協力も惜しみなくやっている。その一端が村人の病に対し治療・薬代を一切取っていないし、老人の急病には往診もしている。まさに北草村に住む人たちにとっては神様のような存在だった。

八月、北草村の十三歳以上の男女は、今年も松瑞寺の境内に集められ、踏み絵をさせられている。

長崎奉行所からは昨年同様山之内一馬が出向いてきており、口之津代官所は宋勝馬の代わりに島原城内から若手の清水幸之進が登用され張り切っている。

今年の踏み絵では、和助はことなく過ぎたが、近くに住む彦治の一家の踏み方が怪しい、と言われ、踏み絵が終わるまで彦治、女房キネ、十八になる娘のハナの三人が留め置かれ、清水幸之進が「お家改め」と称して家宅捜索をすることとなった。

彦治の前に踏み絵が終わった人たちは帰ることを許されていたが、彦治の後に踏み絵をした人たちは全員留め置かれた。清水幸之進は、村人が先回りして、彦治の家の中からキリシタンの証拠品を隠してしまうことを懸念したものだった。

彦治一家は三人だけ清水幸之進の前を歩かされ、言葉を交わすことも禁じられた。ただ、ひたすら無言で歩くのみ。後ろを歩く村人達の会話も全くなかった。

彦治の家に着くと、清水幸之進は部屋ごとに押入れから棚の上、引き出しの中の物を全て出して部屋に広げ、天井板をずらして天井裏まで覗き込んだ。家の裏側に軒が出ていてそこには竈や風呂焚き用の枯枝が積んである。それも全て除けて縁の下まで確認した。和助は近くに住む者として「お家改め」の立ち合いを求められていた。

何も出てこないので、清水幸之進は女房キネと娘のハナの視線に注目し、視線の行く先を調べ始めた。それに気が付いた和助はキネとハナに声をかけて軒下に散乱し

ている枯枝を片付け始めた。
清水幸之進は、隠れキリシタンが偽装のために行っている、裏庭の井戸の神様などいろいろな神様のために御幣を飾ってある所は全く関心を持たず、調査しようとはしなかった。
年頃の娘に関心があるのか、ミツの持ち物は小物入れの袋の中まで開けさせて、自ら眺めていた。
結局何も出てこなかった。

九月に入ってから行われた松瑞寺での彼岸先祖供養の準備を口実にしたキリシタン集会には、清水幸之進がどこで情報を得たのか一人で庫裏に入ってきた。本堂の仏像に布が被せてあるのは何のためか、とか、これから相談する議題は何か、とか集会の目的について詳しく説明を求めている。辺りが暗くなっても帰ろうとしない。やがて喜作は万一のこととして、初めて彼岸を迎える家と死亡した名前を読み上げて、彼岸までに寺への寄進を命じてその日は散会したが、喜作と和助はもっと別のことで悩んでいた。

というのが、北草村の中の全戸主が今までは集まっていたが、五人が今日は来ていなかった。理由は、隠れキリシタン信仰が、祈る対象を全く見ることが出来ず、見たこともない対象に祈り、祈ってもそこからの反応は全くない。祈る対象の存在が信じられなくなってくる。反面、日常的には役人からはキリシタン信仰があるのではないかと詮議を受け、武士からは農民として搾取されるのみで将来に全く希望がない。「ゼスズキリスト」はこのような状態に何故黙っているのか。先祖から教えられているパライソと言うものが本当にあって、忍耐して地上の生涯を送れば、死後はそこに入ることができるのか、などなどの疑問から、集会出席を休む者が出てきた。
喜作と和助は、信仰を捨てた人達が、今まで村人全員で守ってきたキリシタン信仰を代官所や役人に告げることが怖かった。
だからと言って、休んだ人たちの所に表だって糾弾に行くわけにはいかない。
喜作と和助は、集会に来なかった人たちに会ったとき、その人たちを責めるのではなく、考えや話を聞くことにした。

その翌日、和助の所に医師の良庵から使いが来て、夜、暗くなってから自宅に来るように、との連絡があった。
その夜はよく晴れていたが月がなく、満天の星が美しかった。和助は星明りだけの中を通用門から入って裏庭に回ると、良庵が座敷に上がれという。

和助が良庵の書院ともいう医学書その他本が積まれた部屋に入ると、そこには蝋燭が一本灯っている。
良庵は和助を座らせて
「和助、この銅鏡が反射して映る光をよく眺めよ」
と言って、左側の蝋燭の光に反射して、右側の襖に映った光の中には、なんと十字架上のキリストの、苦しそうに顔をやや歪めて斜め下を向いている姿がはっきりと映っていた。
その瞬間、良庵は蝋燭の火を吹き消した。部屋は真っ暗闇。何も見えない。良庵が蝋燭を灯すと、そこにあるのは銅鏡のみ。
驚いた和助は声が出ない。これさえあれば、来なくなった五人はもとより、仲間全員が祈り求め、縋る対象が目に見えて、たとえ祈りの反応がなくても、信仰を持ち続けることが出来るだろうと確信した。
和助はその夜、良庵に頼んで何度も何度も反射光の中の十字架上のキリストを映してもらって眺めた。

夫人からお茶が出ると、若先生の鶴亮も部屋に入ってきて
「和助さん、父はこれを貴方と喜作さんに差し上げる、と言っているのですよ。貰ってくれますか」
との言葉に、和助はわが耳を疑った。声も出なかった。
それを見た良庵はからかうように
「和助、いやならしまおうか」
と笑顔でからかった。和助はとっさに畳にひれ伏し
「両先生、有り難うございます。明日にでも喜作さんを連れてご挨拶に伺います」

翌日の夜、和助と喜作は良庵を訪ね、思ってもいなかった頂き物に何度も何度もお礼を言って、その銅鏡を頂いて自宅に帰った。喜作は事前に和助から聞いてはいたが、実際に映しだされた「十字架上のキリスト像」を見たとき、暫く声もなかった。頂いた銅鏡を大切に抱えて良庵の屋敷を出てからも、喜びの興奮は覚めていなかった。

それから二日後、次の定例例会まで待っていることが出来ず、喜作と和助が、集落の全戸主に呼び出しを掛けた。例外的な突然の呼び出しに不安を持ちながらも全員が集まった。
喜作が
「皆よく聞いてくれ。ゼスズキリスト様の像をこれから集会ごとに掲げて、皆でともに祈り、ともに縋ってゆくことが出来る。このことを伝えたい」
とそこまで言うと、何人かが
「そのようなことをしたら、役人に証拠をつかまれて全員雲仙岳で温泉地獄に浸されてしまうのではないか」

と声が上がった。和助が
「これから見せるのでそれから物申してくれ」
と言って皆を黙らせた。

喜作が蝋燭を灯した。それを左に置き、銅鏡に斜めに光を当てると、右側の襖に映った反射光の中に十字架上のゼスズキリスト像が浮かび上がった。

いつの間にか庫裏の天井には紫色の雲が棚引き、その中から赤い一条の光がゆっくりと降りてきて中空で止まった。それまで右側の襖に映っていた反射光とその中の十字架上のキリストの像が、その赤い光の先端に移動している。

喜作も和助も、全員瞬き一つせず、驚きを持ってこの光景を見つめている。

すると、天井に浮かぶ紫雲の中から、妙なる響きとともに
「これは私が愛する子、みなこのキリストに従え」
という声が聞こえた。

そして次の瞬間にそれらは全て消え、庫裏の内は、元通りの蝋燭の灯りと、その反射光とその中の十字架上のキリストの像のみとなった。

庫裏の中はシーンとしている。誰も声を発しない。今見たものは何だったのか。喜作が立ちあがって

「皆、今の光景こそ、ゼスズキリストの神の現れだった。神は現在する。反応がないなどと疑ってはならない。お互い、更に一層信仰に励もう」
の言葉に参加者全員が
「おー」
と叫び、その声はやがて歓声に変わっていった。その日のオラショは先導者の声も、続いて唱和する声も何時になく力強く長かった。

オラショが終わると参加者全員から
「その銅鏡は、どこからどのようにして手に入れたのか」
との質問が続いたが、和助は
「長崎の明の商人から買ったものだ。たまたま、その人の子の命を救う助けが出来たので、安く分けてもらった。代金は喜作さんと自分が出した」
と説明すると、詳しく説明を求める声が出たので、今度は喜作が
「命を助けた、と言っても、その人の子が病気のとき、医師の伝手がなく困っている明の商人に鶴亮先生を紹介しただけだ」
と言って、良庵父子に迷惑がかかることを懸念して本当のことは話さなかった。

その三日後、喜作と和助は良庵の庭に面した奥座敷で、

良庵と鶴亮に、「松瑞寺の庫裏の天井に棚引いた紫雲、そこから一条の赤い光が降りてきて中空で止まり、その先端に銅鏡の反射光の輪とその中の十字架上のキリスト像が現れ、この世のものとも思えない妙なる響きの中で、『これは私の愛する子、みなこのキリストに従いなさい』の声が響いたことなどを報告した。

良庵、鶴亮と、お茶を持ってきて同席した良庵の妻セキの三人は我がことのように喜んだ。

やがて良庵は座り直して畏まり
「鶴亮、セキ、喜作、和助、聞いてくれ。儂がな、それを作っているときに、中に組み込んだ十字架が反射光の中に出てこない。いろいろと工夫してみたがダメ。いくら考えても妙案が浮かばない。そこで仕事が止まってしまった。

ある日、夜中に便所に行った。便所への廊下を歩いていると、坪庭の松の枝に銅鏡の反射光が吊るされていて、正面から見るとその反射光の中に十字架がくっきりと映っている。さらに歩いて行くとその反射光に銅鏡の厚みがあって中が見える、その厚みの中に十字架と銅鏡の裏側との組み合わせの構造が見えた。便所から出て、そのまま起きだして、今見たままの状態を再現した結果、十字架が反射光の中に映るようになった。その時ほど嬉しかったことはない」
と言って皆を見渡し

「本当にキリシタンの神の助けとしか思えない。だから先ほど喜作が話してくれた奇跡的なことも信ずることが出来る」

この後、夜更けまで歓談は続いていた。

翌月の例会は全員が集まった。全員待ち遠しく思っていた。

喜作が蝋燭をつけて和助が反射光で十字架上のキリストを写し出した瞬間、庫裏の入り口の開く音がした。とっさに喜作は蝋燭の火を吹き消した。入ってきたのは口之津代官所の清水幸之進だった。入ってくるなり
「今なぜ灯りを消した？　灯りをつけよ」
と大声を上げた。喜作が蝋燭を灯すと、和助が手にしている銅鏡が清水幸之進の目に入った。
「和助、それはなんだ」
との声に、和助は
「はい、過日長崎で頂いてきた銅鏡です」
と答えると、清水は
「これに見せろ」
と言って和助から銅鏡を取り上げて眺めた。見たところ何の変哲もない銅鏡だ。
「何故ここに持ってきたのか。どのような必要性があってのことか」

との問いに和助は
「たまたまいいものを頂いたので、皆に見せて自慢したかったのです」
と答えた。
清水幸之進は銅鏡を上にあげて眺めていると、反射光が壁や襖に当たる瞬間もあった。一同十字架上のキリストが映ってしまうのではないかと肝を冷やしていたが、どういうわけか反射光の中にキリスト像はなかった。
清水幸之進は喜作に今日の集会目的を聞き
「お寺掃除の月当番を決める会合です」
の答えを聞くと、そのまま帰って行った。

清水幸之進が帰って暫くして、もう戻ってこないと判断されたころを見計らって、一同がもう一度反射光を映すことを求めた。庫裏の戸が閉まっていることを確認して映し出した。見事に十字架上のキリストが映った。
そこに映っているキリストは、全ての人の罪を一身に背負って苦しみに耐えている姿で、ここに集まっている村人一人ひとりは、先月現れた紫雲と妙なる響きを思い描き、「キリストの愛」に心から感謝し、参加者の信仰は強く深まっていった。

和助も喜作も、清水幸之進が銅鏡を手にして襖に反射光が映ったとき、その中に十字架上のキリストが映らなかったことに感謝した。
再度オラショの唱和が始まった。喜作が終わりを宣言するまで、その夜は熱心なオラショの唱和が続いていた。

この後、反射光の中の十字架上のキリストを得た北草村の隠れキリシタン信仰は、明治六年キリスト教解禁まで続けられた。

完

著者注

この種の銅鏡は、現在神奈川県大磯町の「澤田美紀記念館」に収蔵されている。岩崎弥太郎の孫で、元国連大使澤田廉三氏夫人の澤田美喜氏が、大磯に「エリザベス・サンダースホーム」を設けて、第二次世界大戦後の我が国で混血児救済を行った。
同時に澤田美喜氏は我が国のキリシタン禁制時代に隠れキリシタンの人々が、家庭で役人に見つからないように信仰を守っていた祭祀用具を、明治六年キリスト教解禁後数多く収集し、現在「澤田美喜記念館」にそれらは収蔵され、同記念館では現在も訪れる人にはそれらの陳列を見せ説明している。
そこに収蔵されている銅鏡を光に反射させると、その反射光の中に十字架上のキリスト像が映り、その銅鏡は「魔鏡」と呼ばれている。澤田美喜氏が戦前長崎市内で入手されたものと伝えられ、レントゲンで内部構造は覗いてはいるが製法は不詳。

歌人「斎藤史」私論

曽根竣作

（一）

斎藤史は、昭和十五年モダニズムの影響を受けた第一歌集『魚歌』を発表し、歌壇にデビューした。既に昭和七・八年頃から、若山牧水のすすめにより作歌に志したようだが、この『魚歌』の中の「スケルツオ」一連は、比喩表現を柔らかく取り入れたモダニズム短歌の秀眉となったのである。

モダニズムとは、主として芸術の分野で伝統的な思想を否定して、近代的、個人的なものを主張する主義を言い、「スケルツオ」は軽快できまぐれな諧謔曲のことを言う。

それ以来、平成十四年九十四歳で亡くなるまで、第一級の女流歌人としてその名前を刻した。いま昭和十五年の『魚歌』に始まり、最晩年の歌集『風翩翻』の前後に至るまで、数十冊の歌集や著書に及ぶ作者の営為の軌跡を辿ってみよう。

斎藤史の父親は斎藤瀏、旧陸軍の高級将校である。そのため各地を転属せねばならず彼女もそれに従った訳であるが、その上例の二・二六事件に係わり、少壮尉官級の将校の出入りが絶えなかったと言う。二・二六事件で処刑された数名は、史の若い頃の知り合いであり、その関係もあり父は反乱幇助罪で一時拘置された程である。幸いにして予備役編入にとどまったのみで済んだようである。

第一歌集『魚歌』の「スケルツオ」一連から抽いてみよう。

●白い手紙とどいて明日は春となるうすいがらすも磨いて待たう

●夕霧は捲毛のやうにほぐれ来てえにしだの藪も馬もかなはぬ

●定住の家をもたねば朝に夜にシシリーの薔薇やマジョルカの花

やがて、前述のごとく直截に歌に表すことのできない二・二六事件という悲劇に遭遇し、史の斬新な比喩表現がいっそう磨かれていったと思われるのである。

●たふれたるけものの骨の朽ちる夜も呼吸づまるばかり花散りつづく

（二月二十六日事あり　友等、父、その事に関わる）

●濁流だ濁流だと叫び流れ行く末は泥土か夜明か知らぬ

●額の真中に弾丸をうけたるおもかげの起居に憑きて夏のおどろや

などなど、暗く美しい悲愁感は「スケルツオ」に見られなかった浪漫性を生んでいる。

更に同年『歴年』、昭和十八年『朱天』と相つぎ、終戦前は『朱天』の発刊で終っている。戦前の史の歌集については、後で触れてみるが、当時の文芸家が皆そうであったように戦争賛歌或は言挙げ主義に陥入っているのは当然である。

（二）

終戦後直ぐにいわゆる短歌第二芸術論が、小田切秀雄、桑原武夫、小野十三郎、臼井吉見等によって唱えられ、一言でその方向を言えば、国民の知性を改革するためには短歌と言うものは余り意味がないと言うのである。

いっとき、この騒ぎは短歌界を席巻する勢いであったが、彼女は黙々と歌を作りつづけ、昭和二十八年に『うたのゆくへ』を上梓した。しかし、それまでの史の作品には、どことなく「明星」ロマンチシズムの影がほのかにただよっていると思われる。

いわばそういう近代的発想の影をことごとく払拭し、大きく変貌を遂げたのは『うたのゆくへ』によってであった。戦争の末期信州に疎開したことが、彼女の文学的発想に大きな影響を及ぼしたのであろうか。飾らない率直な飲食の歌や生活の歌が加わって行く。

●白きうさぎ雪の山より出てて来て殺されたれば眼を開きをり

●未来の世も我に憑きくる生きものの信濃の夜半のこほろぎの声

●さまざまの観念が化粧する夕映えに風稚な笛はあれども吹かず

●夕花のこずゑ重たきかげあたり掛けてあるのはわが仮面なり

●水鳥の胸におされてひそやかにもり上がるとき水は耀ふ

第一首目は、何でもない歌のようだが先に述べた短歌第二芸術論（昭和二十五年にはもう下火になっていた）

に対する反語として受とめられないことはない。

生前、吉野山人と呼ばれ詩作と共に幾多の秀歌を残された前登志夫氏は、斎藤史のもつイメージを「不思議に遠い伝承の中の歌人の印象がある」と指摘している。その指摘は、史の作品の持つ説話的なひろがり、物事に対する発見の新鮮さなどの理解ができれば十分納得のゆくものである。さらに、史の作品のつねに変らぬ若々しさも注目に値する。その発想といい、その詩情といい、その表現スタイルといい、つねに新らしい。その新鮮さが読み手の側に或る種の衝撃を与えるのである。

その後の、『密閉部落』（昭34）や『風に燃す』（昭42）の世界は、『うたのゆくへ』によって開拓したものの展開とその成熟の姿であるとみてよい。日常的現実と虚構的現実との間に、新しい詩的空間を構築することを目指している。発想への意欲、表現手法開拓への意欲がつねに作品にみなぎっていると言えばよかろうか。

●人も馬も渡らぬときの橋の景まこと純粋に橋かかり居る
●ピペットに梅干色のわが血沈む　一揆にも反乱にも敗れたりき
●ぬばたまの黒羽蜻蛉は水の上母に見えねば告ぐることなし
●杉いっぽんの短剣となる丘の秀に刺されても敗者とならざる　茜

第三首目は、『風に燃す』の中の「老母像」の一連の（修那羅峠）

●麻痺の夫と目の見えぬ老母を左右に置きわが老年の秋に入りゆく
●ちりぬるをちりぬるを　とつぶやけば過ぎにしかげの顕ち揺ぐなり
●死の側より照明せばことにかがやきてひたくれなゐの生ならずやも
●つゆしぐれ信濃は秋の姥捨のわれを置きさり過ぎしものたち

史は、老年や病気や死をリアルに自然に作品化しようとしたものではない。息苦しいほど演劇的であり、モダニズムの姿勢を崩さず、老いの風景を表現しようとしている。言い換えれば、史は老いの悲哀や、病の苦しさを作品のなかに決してもちこまない。徹底的に、作品から嘆き節を排除し、表現として構築しようとする。つまり、情緒に逃げないのである。『渉りかゆかむ』（昭60）には次のような歌がある。

●夏草のみだりがはしき野を過ぎて渉りかゆかむ水の深藍
●ひらひらと峠越えしは鳥なりしや若さなりしや声うすみどり
●鬼と呼ばれ信濃に果てしものの裔もみぢの季過ぎてより言葉重し
●遠流無帰われと課ししにあらねどもこの山国に棲みなれにけり

なかの一首。史の母キクは昭和四十一年に失明している。以後、史は亡くなるまで付ききりの介護を続けたのである。老齢化社会にあって介護の歌として、一連はその先駆けともなった。だが、この歌は、そういう背景がわからなくてもいい。むしろ不明のままに鑑賞する方が、歌に深みを帯びてくるように思われる。いずれにしても「見える」作者と「見えない」母がいる。その彼岸と此岸のあわいを飛んでいる黒羽蜻蛉なのである。史は、見えない者に見える世界を告げようとしなかった。ふとそのままにしてしまった感情の揺れが、繊細で美しい。

（三）

斎藤史の歌業を歌壇の上で決定づけたのは昭和五十一年の『ひたくれなゐ』であり、また昭和六十年の『渉りかゆかむ』の二冊であろう。前者は「迢空賞」を受賞し、後者は「読売文学賞」を受賞している。『ひたくれなゐ』より心の琴線に触れたものを抽出してみよう。

●埴輪の眼ふたつ穴してわらへども母の見えざる眼は笑はざり
●鬼火よりさびしきいろに眼を燃せば夜のほどろにひらくゆふがほ
●かなしみの遠景に今も雪降るに鍔下げてゆくわが夏帽子
●山坂を髪乱しつつ来しからにわれは信濃の願人の姥

●恋のうた我には無くて〈短歌〉といふ艶なる衣まとひそめしが
●血紅の木の実踏まれて土に沁む　ちぬられし昭和また終るべし

（四）

前述の〈白い手紙がとどいて明日は春となるうすいがらすも磨いて待たう〉といった初期のモダニズム、〈死の側より照明せばことにかがやきてひたくれなゐの生ならずやも〉〈老いてなほ艶とよぶべきものありや　花は始めも終わりもよろし〉といった中期・後期の迫力、更にそれに劣らず、むしろ勝るという意見もあるにちがいない晩期の作品群を見ると、九十四歳で亡くなるまで、斎藤史は歌壇史に大きく刻印されると考えられる。

平成五年に、史は『秋天瑠璃』の歌集を出版し、これにより「斎藤茂吉短歌文学賞」を受賞した。続いて、平成十二年に『風翩翻』を上梓し、それより少し前すなはち平成九年に『斎藤史全歌集』により「現代短歌大賞」、翌年「紫式部文学賞」を受賞している。

●すでにしておのれ黄昏うすら氷の透けるいのちに差すや月光
●いはれなく街の向うまで見えて来る　さよならといふ語を言ふときに
●青く透くヒマラヤの芥子夢に来てあとの三日をこころ

染めたり

『風翩翻』（平成十二年）とそれ以後の作品を抽出してみよう。ここに歌われた老いの風景の凄まじさは、それ以前の『秋天瑠璃』になかったもので、これが九十歳を越えた人の作品とはどうしても考えられない衝撃があると言わねばならない。

●胸から腹へ断ちおろすごとジッパー下げ中身のわれを取り出し居り
●死は断じて鴻毛よりも重ければ　尊厳死　認む・認めず
●わが中の静止画像の一つにて若くすがしき挙手の礼ありき
●老てゆくものの作法を心得てひっそりと微かにありし老鶏
●点眼薬さして眺める（天晴）とまでは言へざる老の夏空
●携帯電話持たず終らむ死んでからまで便利に呼び出されてたまるか
●敗戦にまぎらして〈叛乱〉の語を消去せし国のなしたるごま化しも見き
●九十歳の先は幾歳でもいいやうなお天気の中花が咲くなり

この自分の見つめ方、抑制された表現は、逆に老いの持つエネルギーさえ感じさせる。おそらくここまで言い切れた作品は、近代短歌、現代短歌をふくめてなかなか見つけられないのではなかろうか。

（五）

ここまでは、斎藤史の余人とはちがう歌人としての卓越した点を列記して来たが、ここからは、戦中・戦後・及び晩年に至る史の足跡を辿ってみよう。

――戦犯　これが或る一部の人々（？）から言われる史の別の評価である。

昭和五十二年、敗戦後三十年以上が経過した時点で発行された『斎藤史全歌集』には、彼女の第一歌集『魚歌』から、第八歌集『ひたくれなゐ』までの歌集が収められている。そのなかには、昭和十八年に刊行された史の戦時歌集『朱天』も納められている。が、実は、この全歌集版の「朱天」は、オリジナル版『朱天』（昭18）とさまざまな点で異っているのである。

彼女は、『朱天』をこの全歌集に収めるにあたって、その冒頭に次の序歌を書き加えている。

●はづかしきわが歌なれど隠さはずおのれが過ぎし生き態なれば（昭52記）

この全歌集「朱天」はオリジナルの『朱天』そのものだ、ということを暗に主張しているといってよい。が、事実はそうではない。史は、いくつかの歌をオリジナル版『朱天』から削除しているのである。次の歌どもである。

●かすかなるみ民の末の女ながらあかき心におとりあらめやも

●現つ神在ます皇国を醜の翼つらね来るとも何かはせむや
●襲ふものまだ遂に無き神国の春のさかりや咲き充ちにけり

「み民」「あかき心」「現つ神」「神国」といった皇国史観の色濃いエキセントリックな名辞が並ぶ。昭和五十二年当時の斎藤史は、これらの歌を自分が戦争に加担した証しとして取り上げられるのを恐れたに違いない。恐れることはない。堂々と載せて然るべきではなかったろうか。

（六）

更に、全歌集版「朱天」とオリジナル版『朱天』の異同にこれにとどまらない。史は、『朱天』からいくつかの歌を削除した上で、さらにいくつかの歌を改竄してこの全歌集に掲載しているのである。

●言ひ得ざりし歌ひえざりし言葉いま高く叫ばむ撃ちてしやまむ
●言ひ得ざりし歌ひ得ざりし言葉いま高く叫ばむ清明く叫ばむ
　すぐる二・二六事件の友に
●亡き友よ今ぞ見ませと申すらく君が死も又今日の日のため
●亡き友よ今ぞ見ませと申すらく君が憂ひしとき至りたり
　夫々、二首目の……線が改竄した箇所である。言語表現の面から言えば、この改作は明らかに改悪だと言わざるを得ない。

二・二六事件で刑死した親友の青年将校・栗原安秀に捧げた二首目の改竄は更にひどいようだ。「君が死も又今日の日のため」の今日は大東亜戦争の開戦日を指していると思うと、この改作は正反対の意味になって了うからである。

史が、これらの削除や改竄によって、隠蔽しようとしたもの、それは日米開戦時に自分が感じた晴れやかな壮快感でなかったろうか。その壮快感はひとり史のみが感じたのではない。斎藤茂吉・土岐善麿・太田水穂・などなど数えあげれば十指に余る程であるが、この人々は戦後しばらくの間、沈黙を余儀なくさせられた有様である。

しかしながら、このような日本人一般の心情に加えて、史にはさらに鬱屈せざるを得ない個人的な事情があった。

（七）

●ああと言ふまにわれをよぎりてゆくものの速度を見つつすべなし　『魚歌』（昭14）
●空高くはばたきしもの恥にまみれ野を剥り居るは我か鳥か
●ここに死にたる我の姿のしづけさをたのむこころは侘しきに似る　『歴年』（昭15）

昭和十四年から十五年にかけての史の歌である。一方で、モダニズム横溢の秀歌を作る反面、どこかでなげやりの空漠感がただよっていると思われる。かつて華やかなモダニズムの歌を作っていた史の若々しい精神が互解しているかのような印象を受けるのである。

この時期、史は国家に対する鬱屈した思いを抱いていた。「昭和維新」の理想を抱いた純粋な青年将校たちを逆賊として処刑した昭和天皇に対する複雑な恨み、父である斎藤瀏の官位剥奪による屈辱・経済的な苦境、さらには夫・堯夫の招集……。これらの歌には、戦争に傾斜してゆくなかで、天皇や国家を少なからず恨む心情を自らのうちに内向させてゆく姿がほうふつと見えるのである。

ところが、この個人的な鬱屈感は大東亜戦争の開戦と同時に、すべて雲散霧消してしまう。『斎藤史全歌集』に掲載されて居ないオリジナル版の『朱天』には次のような歌が収められている。

●苦しかりし日の長かりきおほいなる行手展けて今朝のすがしさ　(昭16)

●現つ神わが大君があきらかに撃てとのらせる大みことのり

●かそかなるわが魂さへや滾りいで天つ御業に添ひまつりなむ　(昭17)

正に聖戦歌である。言い換えれば、民族的壮挙のなかの一体感が、彼女を包んでいるといってもよかろう。

(八)

『朱天』には、いわば「民族の悲歌」といえる聖戦歌が、次のように数多収録されているのである。

●濃みどりに透る南の海ふかくしづかに潜き帰りたまはず

●南の海涛の色恋ひ思へばいのちの底にかよふ蒼さか

●シユエ・タゴン・パゴダと呼べる塔を思ふ月夜は月に照らふそのさま

●珊瑚海に索むる敵と逢ひし時「よし」と言ひけむわが将兵は

●ますら夫は征きとどまらず勝ちさびて更に澄みゆくいのちと思ふ

●熱田島につめたき雨のすでに降りて守備する兵がぬれたまふなる

●戦意全く失せて坐りし敵兵に乏しき煙草を分くる兵あり

真珠湾に沈んだ特殊潜航艇の九軍神を詠んだ一首目、海のもくずと消えた兵の命を詩的想像力で描き出した二首目、或は将兵の戦う決意を簡潔に描き出した四首目、熱田島（アッツ島）を歌った六首目の歌、など述べた歌はまぎれもない史の嘆息が刻まれている。

これらの歌は、情報操作されたニュース映画の映像などをもとに作られたかも知れない。その意味で、これらの歌は戦争の現実に触れていないかも知れない。それにもかかわらずここに描かれた厳粛な民族的心情は、ニュースが事実であるか否かを超えて、歴史的な真実といわねばならず、歌としても充分に纏まっている。『朱天』におさめられた史の開戦歌には「戦争協力」「無思想」などといった戦後的な価値基準では裁断しきれない。森然とした厳粛な民族的感情が流れているのである。

斎藤史が隠蔽しようとたのは、実にこのような厳粛な民族的感情であった。

(九)

戦後三十年を経た昭和五十二年の時点においてさえ、このような民族的感情を公にするのを怖れていたのである。

何故か!!　斎藤史ともあろう大歌人が何をそんなにどたばたと怯えることがあろうか。逆にいえば、戦後的史観の圧力は史に戦時詠の改竄を迫るほど、そのときも強力だったということになる。

そう考えてくると、『斎藤史全歌集』における「朱天」の歌々改竄行為は、二重の点において犯罪的であったということになる。

戦争犯罪人とは、一体誰を指して言うのか。戦中において戦意昂揚の歌を作り、そして民族的感情の高ぶりをあおった程度ならば　史以外にも数え切れないくらいに存在する。ただ史の場合、ひとつは読者を欺いたという点、もうひとつは、「戦犯」という汚名を被く戦後の歴史観に屈して、自分の心に流露した民族的感情の真実を秘匿した点である。

『魚歌』から『朱天』までの斎藤史の歌の歩みを見つめなおすとき、彼女の生がなかば運命的にこの国の歩みに翻弄されていたことが分ってくる。

戦後、『ひたくれなゐ』と『渉りかゆかむ』の二冊の歌集によって、いよいよ円熟の境地に達した史であるが、戦中・戦後・昭和という時代全般を通じて受難者でありつづけた彼女は、時代というものの傷だらけの伴走者に他ならなかったと言えよう。

しかし乍ら、斎藤史が戦中の一時期に於て、戦争賛歌及び戦意昂揚の歌を作ったと言え、それがそのまま——戦犯的であると決めつけるのは酷であろう。『ひたくれなゐ』『渉りかゆかむ』の二冊をとって見ても、彼女の旺盛にして極立った作歌動機を知るに充分でなかろうか。

参考文献
現代名歌観賞事典（桜楓社）
現代百人一首（朝日文芸文庫）
現代の歌人140（新書館）
アララギの脊梁（青磁社）

「韓国花冠文化勲章」に輝く歌人孫戸妍を偲ぶ

勝山道子

故李方子さまは亡くなられて二十年になります　方子さまは李王家最後の皇太子英親王李垠の妃だったのです。方子さまが戦後韓国社会で国民に親しまれた背景には障害者福祉活動に献身され関係された障害者施設「明暉園慈恵学校」はいまもあります。方子さまは朝鮮から東京の　専門学校　女子大学に留学する良家の子女の為に十五人程入寮出来る鴻嬉寮を建てられました　孫戸妍はそこに入寮していたのです。

方子さまは鴻嬉寮に顧問として枡富安佐ヱ門（キリスト教精神で韓国の人材育成に務めた方）の夫人枡富照子夫人を迎え、夫人は毎週一回和歌や俳句を教へに通われました　ところが孫戸妍以外は誰も関心なく教え子は孫戸妍一人であった為に彼女は照子夫人の自宅へ通ふことになり熱心に短歌を勉強した　そして照子夫人の師事された佐々木信綱の門下生となりましたが朝鮮人としての門下生に対し佐々木信綱は「朝鮮人としての個性を生かし

早いもので歌人孫戸妍が亡って七年が過ぎた。日本風ならば七回忌になります　改めてここで尊敬と誇りの友を回向するものです。

私は両親の仕事の関係で、朝鮮で生まれ、十七才までいた。私にとっては同じ年で同郷の仲でもある

昭和十五年東京小石川大塚にあった帝国女子専門学校は

国文科三年　予科一年　家事科三年

家庭科二年　に分けられていた

在校生六五〇名　内　朝鮮　台湾　中国からの留学生が八十名　殊に朝鮮からの留学生が最も多かった　当時東京の女子専門学校　女子大の中で最も多かったと云われた　日本人在校生の殆どは地方からの生徒なので、学校の経営する寮を利用し　何人かは下宿　借り家を利用していた　学校の近くでもあり徒歩通学をしていた。

孫戸妍は　李方子さまの建てられた渋谷の国学院大学の傍にあった鴻嬉寮に入寮し電車通学で学校に通っていた

て欲しい、そして途中でやめず続けてほしい」と励まされたと云う

昭和十九年　二十一才の若さで朝鮮人として始めて「孫戸妍歌集」を出版した

この年　日本の文部省より京城舞鶴高等女学校教諭に任命された。然し日本の敗戦により昭和二十年八月に退職した

●先生と生徒の別れ惜しむ時最後とならむ
　サイレンは鳴る

悲しい別れとなった

昭和二十二年　李允模氏と結婚し一男四女　をもうけた

李氏は特許分野の発展のため貢献され　御自身の特許事務所を経営した。孫戸妍の内助の功も大きく五人の子供の内四人はアメリカに一人を日本に留学させる程　教育に熱心であった　又朝鮮戦争の折は京城から釜山まで避難され苦労された

その中でも短歌を書きあげ　照子夫人の　力添えで　昭和三十三年講談社より「無窮花」歌集を出版している

然し短歌に対する情熱は消えず照子夫人亡き後　短歌の師に断たれた後も向学心に燃え何としても日本で学びたいと　同じ帝国女専の同級生　濱口光恵さんに依頼した。

濱口さんは戦前哈爾浜女学校より孫戸妍と同時に帝国女専家事科に入学　三年学習の処　繰上げ卒業で昭和十七年九月に卒業し　再び哈爾浜に帰られた。終戦により昭和二十年　八月苦労されて　東京に戻られた方である。それ丈に　濱口さんの外地の人達の面倒を見る心の広さもあった　孫戸妍が帝専で同じ家事科であり　照子夫人に短歌を学んでいることも知っていた。学習のため昭和女子大学の聴講生として昭和五十三年孫戸妍入学しその後は成城大学　文学部大学院で万葉の研究　古典文学を　その中西教授に孫戸妍を紹介し、中西教授の力で日本に長期滞在することが入国管理局で許可され、晴れて成城大学大学院の中西ゼミの学生として孫戸妍の毎日が始まったのである。

昭和五十八年　夫の急逝に悲しみの中で

　軍政の怖れの中で標きて何も云へず
　　引取る遺体

右の様に歌いて十年近くも悲しみにくれた　然し孫戸妍の活動は晩年になって評価され　平成九年韓国人として始めて宮中での歌会始の陪聴者として招かれた

平成八年に日本の外務大臣から友好親善に寄与したと表彰された

夫の急逝の慟哭の歌集を「第四無窮花」として出版し、

これを国際観光振興会京城事務局長北出明氏が平成八年日韓経済協会の会報で紹介され、この一文に目をとめたのが当時小川原開発社長だった糠沢和夫氏「その後ハンガリ大使」だった　日本の地に歌碑を建てたいと云う孫戸妍の希望を青森の六ヶ所村と考へ当地の建設会社社長附田氏が協力を申出同村の尾駮沼の見える　高台に建った。高さ二メートルもある
刻まれた句は

君よわが愛の深さをためさんと
かりそめに目をとじたまいしや

これが韓国のマスコミに取り上げられ一躍有名になった
平成十二年十月
金大中大統領の誕生で日本文化に対しても大きな転機になった
孫戸妍の勲章証
「国民文化向上と国家発展に寄与した事を評価し大韓民国憲法の規定に基づき花冠文化勲章を授与する」大統領金大中
孫戸妍からこの授賞式に来て欲しいとの連絡を受けたが体調の関係で伺えず　後日京城に伺った折　「新しいコーナー」に様々の表彰状と共に、花冠文化勲章は飾られており改めて半世紀の苦労が実る　又その苦労をのりこえた丈に人間的に尊敬出来ると当時青森県の現商工政策課長は語る
後日産経新聞に　金大中が木浦の商業学校に在学している時日本人の教師から
石川啄木の歌

東海の小島の磯の白砂に
われ泣きぬれて蟹とたわむる

右の感想文を書く様に云われた時金大中が一番よかった」と伝へられた。やはり短歌に対しては深い理解をもたれたと思う　そして
日本伝統詩の和歌を通じて韓国民の感情を日本に　伝えたと評価された　孫戸妍は　孤独の中で書いていたら「愛国者になっていましたと語る

●国境と言葉の壁をのりこえて
吾が咲かせる無窮花の花を

中西教授「当時奈良県立美術館館長」　は孫戸妍は歌いたいことを眞すぐに歌って来た　視点かしっかりある人で歌で時代の歴史がきちんと再現されている」と云われる
宮中歌会の陪聴の同年富山県高岡市の万葉まつりに招か

れ薄紅色のチマチョゴリで登上した百済の後裔として自分を誇らしく感じた

●チマチョゴリ装いながら吾は嗅ぐ
百済時代のその残り香を

大変な好評であり高岡市から来年もとの誘ひに病におかされた孫戸妍はこれが最初で　最後であった
隅然と云うが孫戸妍の七回忌にあたる八月　帝専の京城支部長崔粉金が亡った
彼女達と同期の特に孫戸妍、崔粉金と親しくしていた浜口光恵さんは十一月早々日本流ならば彼岸にあたる日に崔粉金の遺族に会ひ　献花され　同窓会　有志の志を伝へた
そして孫戸妍御夫婦の墓まいりをして来られた報告があった
浜口さんは外地つまり台湾　朝鮮　満州からの留学生の卒業後　何十年にわたって交流を重ねておられ情の深さを感ずる　京城でまわりを小高い山にかこまれ墓所は高令の浜口さんは杖丈でなく抱えられる様にして　墓地「植楽村」に行かれた
孫戸妍の好物だった栗を持参してのおまいりだった　横書に彫られた立派な墓であった
墓碑

法学博士龍仁李公允模之墓
一九一八年六月二十日生
一九八三年十一月二十五日卒
君よわが愛の深さをためさんと
かりそめに目を閉じたまひしや
密陽孫氏戸妍詩人之墓
一九二三年十月十五日生
二〇〇三年十一月二十二日卒
逝きし後君は初めてうた詠みの
夫らしくなる野花に埋もれ
右の様な墓碑　長さつまり横二メートル高さ一メートルもある墓碑しかも短歌は何と韓国文字と日本の文字　まさに日韓友好のあかし孫戸妍の熱い想ひがこめられている
これから韓国へ旅する日本人がこの墓碑に何人まいるだろうか
浜口さんは写真で私に報告があった
その後孫戸妍の長女李承信は
「日韓文化交流基金賞」を受賞した　母親の孫戸妍の「無窮花」日本語を韓国語　英語に翻訳し　日本の文化理解に盡力した事が評価された
短歌詩人孫戸妍記念事業会を設立理事長として今後の運営にあたると云う
李承信は母親の葬儀の折短歌を四十種あまり朗読し参加

者の涙をさそった
最後の歌
　八十年の嫁でもいいですか
　君と会う日も遠からずして

短歌の師に恵まれ　友情に支えられた
孫戸妍　娘李承信の継承で「無窮花」は不滅に続く事を祈る

はるかなる祖国——海外日系人の短歌

石黒修身

(一)　海外移住について

日本人の海外移住の歴史は古い。明治二年(一八六九)ハワイへの出稼移住を契機とし、次いで米国に及び、その後明治から大正にかけて米国側の誘致と排斥の繰り返しを経ながらも移住は次第に増加していった。

南米については、明治三十二年(一八九九)第一回ペルー移民(一七〇人)が最初である。

ブラジルには、明治四十一年(一九〇八)第一回約八百人が、「笠戸丸」で神戸からサントスに着き入殖した。

その後、ブラジル政府の農業開発のための移民受入政策と日本政府の積極的移住支援により集団移民が続いた。

他の中南米の国にも派生的な移住はあったが、移住の大勢を占めるのは、米国とブラジルの二国であろう。

海外の日系人の数は約二五〇万人と称され、その国別分布は、平成十一年の統計では、米国一〇〇万人(内ハワイ二十四万人)、ブラジル一三〇万人、ペルー八万人、カナダ五万五千人、アルゼンチン三万二千人、他南米諸国に分布となっている。

(二)　短歌を詠む移民

本稿では日系人の移住の歴史を解説するのが主旨ではない。

筆者は予てからこのような日系人が、移住地において活潑に短歌を詠み、地域の歌誌や日系の新聞に投稿しており、その集成がいくつかの作品集として存在していることに興味を持っていた。

海外で暮しはじめて、その地に骨を埋めることになっ

た時点で日系人と呼ばれる訳だが、二世、三世ともなれば、日本語は第二外国語のような位置となるので、短歌のような文芸を嗜むことが出来るのは、一世や一世に連れられて子供の頃に移住した人々が中心となる。

短歌は、移民にとり単なる民族回帰、あるいは郷愁の営為なのか、いや、異人種に囲まれ、これという祖国の支援もない苦しい境遇の中で、彼らの情熱や自負が、短歌という形で発現したのではなかろうか。

あるいは、永住により次第に薄れゆく日本人としてのアイデンティティを短歌に託したのではなかろうか。

もはや戻れない家郷を想い、故郷の山河や年老いた両親を思う一方で、戦時下の収容所生活、二世たる息子らの彼の国への帰属等数々の苦悩を通して彼らの詠んだ短歌は、美しくも哀切極まりないものがある。

ただ、移民は貧しさ故に渡航を余儀なくされた人たちが殆んどであり、高度の学校教育を受けた人は少ない。

こういう人たちが短歌を詠むということ自体が驚異的なことであり、そこに短歌の不思議な生命力のようなものを感ずる。そして、彼らの短歌には技巧的な言葉わざはない。

「うまい短歌」ではなく「いい短歌」、「心をうつ短歌」なのである。情熱、情念、自分のやむにやまれぬ心を人に伝える短歌なのであろう。

筆者は、このような移住日系人の短歌に魅せられ、いまも感動を引きづっており、予てから温めていた構想をこの小論にまとめた次第である。以下に主な移住地である、米国とブラジルにつき、短歌の作られた背景と、象徴的と思われる個別の作品を紹介する。

夫々の作品については、作者名と掲載された歌誌、新聞と時期を出来る限り記した。

個々の作品につき筆者なりの感想はあるが、それを記すには紙幅が不足する。

(二) 米国移民の短歌

この地への本格的な移住は、昭和六年（一九三一）に始まった満州事変から昭和一六年（一九四一）の太平洋戦争に到るほゞ一五年間に行われた。

この時期は、日本を取りまく国際情勢は厳しさを増し、米国における排日運動、人種差別による失業問題も深刻であった。

次いで、太平洋戦争開始直後、彼らは特定の収容所に強制的に入れられ、その数は約十一万人と言われている。

また、この時期に既に成人していた二世の男子は徴兵され米軍兵士として欧州戦線に送られていた。

収容所では、人種差別の問題から何回か虐待や騒乱事件が起きたが、市民権を持つ日本人に対する差別は戦後まで深刻な問題を残した。

かゝる境遇のもと人々はつれづれに短歌を詠み、戦前は歌誌や日系新聞の短歌欄に投稿し、収容所ではサークルに寄り合い、文芸誌を発行し心の慰めとしていたのである。

昭和七年から一六年（太平洋戦争開戦）までの作品

●待ち待ちしオリンピックも早や過ぎて大き虚しさの羅府をおぼえり
竹下夢生　昭和七年　加州毎日新聞

●あめりかの古里びとはうれしもよ酢の匂ひする寿司をいただく
竹下夢生　昭和八年　加州毎日新聞

●日米の国交の危さ書き列ね叔父の便りは帰国うながす
森田田鶴子　昭和八年　加州毎日新聞

●同胞が寒さに耐えて作りたる野良に初日の射して明るし
中川無象　昭和九年　加州毎日新聞

●半生を棲み馴れながらアメリカをよろしと未だ吾が言い兼ねつ
唐津文夫　昭和十年　羅府新報

●片言の英語の世辞をいつしかに馴れしか白人笑はずなりぬ
南みどり　昭和十二年　加州毎日新聞

●ジャパンメール無しとは念えどひと度は足を運びつメールの函に
あかね草　昭和十二年　加州毎日新聞

●北支にて戦ふますらを思ほえば暑さ寒さを言ふ口は無し
柴田畔老　昭和十二年　加州毎日新聞

●ジャップと聞きとがめける吾が友に石投げつけぬチャイニーズの児等
紀伊幸代　昭和十三年　加州毎日新聞

●ピストルに実弾こめし移民官旅券を調べ仮借するなし
矢　天洋　昭和十三年　加州毎日新聞

●この上に排日法案をむしかえす醜の議員をも人間といふか
緒方喬　昭和十四年　加州毎日新聞

●あめりかの野末に住めどみ民われ祝ぎつつ洩るる無し皇紀二千六百年
広　亙全　昭和十五年　羅府新報

●大和魂にアメリカンスピリット織りそえて世界平和の道しるべせよ
馬場白川　昭和十五年　加州毎日新聞

●とつくにの民とし指紋押すここち国辱めらるる思ひにてありき
白井千曲　昭和十五年　新世界毎日新聞

●日米戦争無しときめつつ折に触れ有事の時をもひそかに想ふ
塚本星見草　昭和十六年　加州毎日新聞

●一家族で国籍二つに分れ居るえにしのなやみ身近かに迫れり
三保如水　昭和十六年　加州毎日新聞

●ますらをの春と言はむ我が子や米国軍人としてけふを召されぬ
塚本星見草　昭和十六年　加州毎日新聞

●凍結令布かれし日よりしみじみとこの身異国に住むと意識す
三保如水　昭和十六年　新世界朝日新聞

●新内閣如何に動くか民我固唾をのみて明日を待つなり
棚橋宗一　昭和十六年　加州毎日新聞

昭和十七年から二十年（太平洋戦争終結）までの作品

●日米戦争勃発せりとの時事ニュース唐突の余り吾が耳疑ふ
江頭桂舟　昭和十七年　如月短歌会

●刺のある針金もちて囲ひたる中に吾らや日々を生活す
永　勇　昭和十七年　格州（コロラド）時事

●番兵が櫓の上に銃持ちて吾等を見張る仰々しもよ
永　勇　昭和十七年　格州時事

●入所手続済みて入り来しバラックの粗床の上に涙おちたり
中村郁子　昭和十七年　格州時事

●野の花をわが乞ひしかば銃下ろし歩哨の兵の摘みて呉れたり
中村郁子　昭和十七年　格州時事

●憤りの底に藻掻きつせん術のなきぞ悲しき敵国人我れは
由起子　昭和十七年　格州時事

●背一ぱいに日の丸のシヤツ着せられて有頂天なりしが射殺の目じるし
中村雨情　昭和十七年　歌集「宣誓」

●わが子らを吾は捧げむ日米の国と国とのくさびとなして
飯野たか子　昭和十八年　格州時事

●邦字紙は読めぬ戦時の病院に闇にさまよふ思いにて居り
藤倉北總　昭和十九年　北米短歌

●戦はいつの日果てむつぎつぎと侘び住むままに老の死にゆく
深谷百合子　昭和十九年　北米短歌

●ニユヨークゆ吾子の持ち来し土産には戦時珍らしき羊羹も出ず
豊留たか　昭和十九年　北米短歌

●戦時今侘び住む同胞のそれぞれに行きて慰めよわが文芸誌
岩室吉秋　昭和十九年　北米短歌

●歌友の別れ散るべき月を想ふセンター閉鎖に歌会も閉じて
松尾寿郎　昭和二十年　北米短歌

昭和二十年（太平洋戦争終結）以降の作品

昭和二十年八月十五日、日本の無条件降伏により、収容所（センター）は閉鎖され、日系人たちも収容所を去った。

三年余の生活が彼らに残したものは何だったのか。戦後の彼らは無からの出発であった。

見通しのきかない生活環境の中でもなお辛かった生活の追憶と未来への希望を求め短歌を詠んだのである。

●柵上に狂いし友は射たれ逝くいとし子八人布哇（ハワイ）に残して
高橋紀峯　昭和二十一年　羅府新報

●黒船に目覚めし民が原子弾にまたも目ざめぬより眠る民か
升谷千代　昭和二十一年　羅府新報

●敗戦の祖国思へば為すべきこと多きにあわれ吾は老いつつ
泊良彦　昭和二十一年　羅府新報

●国たみの心読まむと日を凝らす戦後日本の文字薄き歌誌
高柳沙水　昭和二十二年　加州毎日新聞

●日本の歌誌のみうたのおほかたは戦禍に世相見せていたまし
阿野秋野　昭和二十二年　加州毎日新聞

（四）ブラジル移民の短歌

日露戦争後、米国で日本移民に対する排斥運動が高まり北米への移民は頓座した。これに対し中南米の諸国は、人種差別で移民を拒否することなく、日本からの移民を受入れた。

とくにブラジルは未開拓の土地が多く、農業開発のため大量の移民を受け入れた。

一九三十年代に入り、日本政府はブラジル移民に力を入れ移民船で集団的に送り出した。

笠戸丸による最初の移民からいまや四世目の世代になろうとしている。

ブラジルにおける日系人の作歌活動は積極的で、歌誌等への投稿も編集発行も盛んであった。

短歌誌「椰子樹（やしじゅ）」は、サンパウロ市内で一九三八年創刊された日系人による歌誌で、爾来五十八年間（太平洋

戦争による五年間の休刊あり）発行を続けている。

この編集者たちが中心となり、移住七十周年記念に「コロニアル万葉集」が編まれている。これには戦前戦後を併せ一三七八人、六六三四首が収められている。昭和五六年（一九八一）に発刊された。

更に移住百周年記念に合同歌集「祖国はるかに」が発刊されている。

最近のものとして、「ブラジル移住百人一首」が二〇〇八年日本の専問歌人により編纂されている。これは「コロニアル万葉集」ほか従前の歌誌などから百首を選出したものである。

次に概ね年代順に代表的な作品を挙げる

●井戸端に血を吹きし手を洗ふ移民の悲しさ言うこともなく
酒井繁一

●足元にとぐろを巻ける毒蛇を殺して今日も原始林を伐る
酒井繁一

●ブラジルの奥なす森に並び建てる吾がはらからの奥津城どころ
行方正治郎

●米作りやめてはるばるこの里にトマテ（マヽ）作ると来りけるかも
瀬崎涛声

●正月にふさはしからぬ此の国のこの蒸し暑さ雑煮食しをり
瀬崎涛声

•いついつと帰る日知らぬ故里の信濃の国の山川を恋う
岩波菊治

•もの言わぬ父もの言わぬ子が鍬を引く意見別れしその日の裏山
上野紅陽

•リオデジヤネイロなみうちぎわにおりたちて日本と砂に書きても見たり
富岡清治

•わが得たる孫の幾たり混血のみどり児汝もそのひとりなる
安部栄子

•アマゾンに来たりて一年の日はたちぬ密林の中に今日も暮れゆく
磯部勇

•故国まで続ける海ぞ足裏の痛くなるまで熱き砂踏む
河井美津子

•アマゾンの落日にもゆる夕茜郵便物もとどかぬところ
汲村ヨツノ

•声合わせ若き日の唄口ずさむ妻と二人の安らぎの夜に
山田鉄男

•祖国より我を咎める声を聞く帰化せんと旅券取り出せるとき
八幡与三

•胸ぬちを一瞬よぎるものはなに帰化する儀式に宣誓するいま
安良田済

•移住時に梅干し入れ来し小甕にて百年祭祝ぐ花を活けたり
青柳ます

•百周年吾の卒寿と重なりて生きんとぞ思う子等のブラジル
川上美枝

•この国のめぐる季節に身をゆだね生ききし日々を思う移民の日
多田邦治

•祖国までつづける海と思いつつ水掬いみる皺深き手に
古山孝子

•菊薫り桜の咲くを見ればもはや異郷というべくもなし
高橋勇三

（五）結び

これまで五十余首に及ぶ日系人の短歌を列挙的に紹介した。極めて単純な手法であるが、彼らの作品をそのまゝ挙げて、読者にその背景にあるもの、そして彼らの心の内側にあるものを感じとって欲しいとの思いからである。

彼らの短歌は、決して難解な技巧や語彙を使っていない。悲しいほど素朴で正直に心情を吐露している。

従って短歌そのものが、時局背景や境遇をリアルに写しとっていると言えるだろう。

その意味において、この小論の単純な構成を理解して頂ければ幸いである。

一世、二世の死亡、老令化により、本来の移民の短歌が途絶えるのも遠くないだろう。

こゝに筆者自身の心のモニュメントとしてこの拙作を書き留め得たことは望外の喜びである。

参考とした著作等

「海越えてなお」　小塩卓哉　本阿弥書店
「北米万葉集」　大岡信　集英社新書
「海外日本文芸祭作品集」
「季刊海外日系人」　海外日系人協会

短歌

金澤　智佐美

電車には人それぞれの世界ありメール打つ人本を読む人

習性か電車の中で座る場を端から占める人の多きは

ひさびさの江の電ガタゴト心地良く何故か懐かし幼き日あり

街中の真ん中走る江の電に若者達は声あげ楽しむ

街を抜け車窓は急に荒波とサーファー達の波乗り写す

譲りたる席より立ちて唇に感謝と笑顔残し行く人

地図を手に尋ね曲がりし道の先遠くの富士に暫したたずむ

氷上を跳び舞い上がりジャンプするフィギュアの精は笑顔で踊る

飽きもせずブライトマンの高き声部屋に響きて今日も始まる

木々の上かけ声高く合唱す鳥語で何と歌いおりしや

雄鳥の縄張りの声あると聞き飛び交う二羽の行方目で追う

指先に心の想い伝えたるショパンの言葉ピアノ語れり

フルートの音色に心身軽くなり感動語る病持つ姉

雨あがり陽を浴び木々は息を吐くわが息交じり円覚寺の朝

月や星自然が友と言いし人友の世界に旅立ちており

天の川銀河の隅にある地球太陽系の星に守られ

日本の歌

――童謡と唱歌――

伊治哲

二、三年ほど前であったか。三十人ちかいある会合で、みんなの気持を揃えるため、昔の歌を歌ってもらった。

「故郷（ふるさと）」と「荒城の月」である。誰でも知っている昔の「唱歌」のなかの名曲である。

・・・驚いた。それまでわいわいがやがやと騒いでいた烏合の衆が、急にしんと静まり返った。みんな、目を瞑ったり、はるか遠くを仰ぎ見たり、まるで夢でもみているようなうっとりとした表情で、しかし一生懸命心をこめて歌い始めたのだ。なかにはうっすらと涙を浮かべている人さえいる。

名曲とはいえ、ほとんどの人が終わりまで歌詞を覚えているのにも驚いた。もっとも、高齢の女性が大半であったからかもしれない。

歌い終わって一斉にこんな声が聞こえた。

「よかったわ！」・・・「久しぶりだわ！」・・・「なつかしいわ！」・・・「昔の歌はいいわ！」・・・「涙が出そうになったわ！」・・・「もっと歌いたいわ！」

私たちの幼いころ、昼下がりの田んぼ道で、学校帰りの子どもたちが、大きな声をそろえて、今日習ってきたばかりの唱歌を歌いながら道草をくっていたものだ。もはやどこへいっても見られなくなってしまった、そんな風景を思い出しながら、涙を滲ませていたのだろうか。

このときから、会合の都度、その折々の季節にあった昔の歌を、古い童謡や唱歌の本から抜き書きしてみんなに配り、全員で斉唱するのが恒例となった。別に歌うために集まる会ではないのだが、みんなで声を揃えて歌うことが大きな楽しみとなって、歌が終らないと会が終らないほどになった。それに、噂を聞いて一人、二人と集まりに参加する人が増えてくるようになった。

その上、今は同じ旋律を声を揃えて一斉に歌う「斉唱」だが、そのうちに二部、三部などの「合唱」や「輪唱」ができるよう勉強しようなどと、意欲的な意見さえでてくるようになった。

私たち世代の多くの人が、昔の「童謡」や「唱歌」を渇望していることがよく分った。

考えてみると、最近テレビなどで昔の童謡や唱歌を聞くことはほとんどなくなった。NHKテレビで、一年ほど前までは「みんなの歌」という番組で、ほんの数分間であるが、昔の童謡を聞くことがあった。それが今ではジャズやポップス調の歌に変ってしまった。

また、夏のお盆の頃や年の暮れになると、由紀さおりと安田祥子の姉妹歌手が、「夏は来ぬ」「お正月」などの古い唱歌や童謡を、テレビの画面で聞かせてくれた。気持がホッと癒される思いをしたものだ。今年はなにを歌ってくれるのかと心待ちにしていたが、八月も末になってやっと二人の声が流れてきた。

「海」・・"松原遠く消ゆるところ、白帆の影は浮かぶ・・・"
「ウミ」・・"ウミハヒロイナオオキイナ、ツキガノボルシ、ヒガシズム・・・"
「椰子の実」・・"名も知らぬ遠き島より、流れ寄る椰子の実一つ・・・"

この三曲の美しいメロディーであった。

かつて小学校や中学校の卒業式で定番であった「仰げば尊し」や「蛍の光」さえも姿を消して、「旅立ちの日に」や「最後のチャイム」などの新しいスクール・ソングにとって変ったそうである。「旅立ちの日に」は現役の中学校の先生が作った歌が歌い継がれて自然に全国に広がっていったと聞いた。それだけに、卒業していく子どもたち仲間同士の、未来へ旅立つ気持をうまくアレンジして、なかなか好感のもてる歌である。しかし、歌詞のなかに、自分たちを教え導いてくれた恩師に対する感謝、敬愛の念が歌い込まれていないのは、大変残念だ。私たちにとって、一番尊敬できるのは小学校の先生であった。「仰げば尊し、わが師の恩・・・」と口ずさむだけで胸が熱くなるのだ。

時代が大きく変ったのだから、メロディーもリズムも変るのが当然かもしれない。

しかし、日常の生活の中で親子がふと口ずさんだり、何人かの仲間が誰いうとなく声を合わせたり、世代を超えて共感、共鳴できる、そんな歌曲が身近にあってほしいと思う。手をとり、肩を組んで、人と人との繋がりを確かめ合える、そんな歌がほしいと思うのである。

考えてみればこの国にはそういう歌があるのだ。日本固有の純粋な叙情の世界で、ともに声を合わせることのできる歌曲、明治以来の「童謡」「唱歌」がそれである。

しかもつい昨日まで連綿と歌い継がれてきた歌曲なのだ。その場、その時、その雰囲気に応じて、そこにいる人たちが、巧まずに、一緒に声を合わせて歌うことのできる日本の歌だからである。残念ながらその童謡・唱歌が、いま、音色を消そうとしている。それをもういちど復活させて、多くの人たちの心を結ぶ絆にもなればと願い、童謡・唱歌の生い立ちを振り返ってみることにした。

ところで、日本には古来多くのジャンルの歌がある。

一般的なのは、古くから伝わる「民謡」である。その土地々々の歴史、風物、自然など、いわば"お国自慢"を唄った俗謡である。それには必ず"踊り"が振り付けられて、お盆やお祭りのおりに老若男女総出で歌と踊りに興じてきた。最近になってもこの風習は、都市農村をとわずますます盛んである。

他方、最も古い伝統をもつのは雅楽であろうか。さらに、能楽（謡曲）、狂言、浄瑠璃（義太夫節・清元節）、長唄、小唄、端唄、果ては浪曲（浪花節）に至るまで、三弦（三味線）、琴、尺八、笛、太鼓、鼓などの邦楽器をバックに、歌舞伎や日本舞踊と結びついて日本独特の庶民文化を形作ってきた。古くは室町時代に始まり、江戸時代に大きく花開いたといわれる。いわゆる邦楽の分野である。

これらの伝統歌曲に対して、童謡・唱歌は明治以降に生まれ、せいぜい150年弱の歴史しかもたない。前後して儀式歌、校歌、寮歌、応援歌、軍歌、あるいは宗教歌など多くの分野の歌曲が編まれたが、わが国で最初の洋楽系の音楽として国民に広く愛唱されてきたのは「唱歌」であり「童謡」であった。

まず、唱歌とか童謡なるものが、最初に世人の口の端にのぼったのはいつごろからだろう。

日本で最も古く五線譜に載った洋楽といえば、明治11年の「みがかずば」（昭憲皇太后作詞、同13年の「君が代」（原歌は古今集）であるが、これは儀式歌に属する。

最初の唱歌は、実は明治14年に発表された「蝶々」であった。誰でも思い出すこの歌である。

"ちょうちょう　ちょうちょう　菜の葉にとまれ
菜の葉に飽いたら　桜にとまれ
さくらの花の　さかゆる御世に（戦後"花からはなへ"に改められた）
とまれよ　遊べ　遊べよ　とまれ"

作詞は野村秋足（1819～1902。名古屋生まれの国学者で、愛知県師範学校で教鞭をとった）といわれるが、原曲はスペイン民謡から拝借したものなのである。

同じ明治14年に「見わたせば」を、柴田清熙（東京師範学校教員）が作詞したが、これも曲はフランスの思想

家ジャン・ジャック・ルソー（1712～1778。フランスの作家・啓蒙思想家。「人間不平等起源論」「民約論」などで民主主義理論を唱えた先駆者。自由主義教育を説いた「エミール」も著名）の作だと伝えられる。「見わたせば」に思い当たる人はいないが、後に〝結んで開いて、手をうって結んで・・・〟という遊戯に合わせて歌う童謡のメロディーになったといえば、親しみが湧くだろう。日本最初の歌、二曲が奇しくも童謡から始まったというのはいかにも明治にふさわしいというべきか。替え歌ではあるが、れっきとした文部省唱歌として戦後昭和22年の「一ねんせいのおんがく」にも載った。

次はあまりにも有名な「蛍の光」である。小学校や中学校の卒業式で、卒業生を送る歌としてこの歌を歌わなかった人はいない。明治14年の発表であるが、作詞者は未詳、曲はスコットランド民謡の旋律である。

もうひとつ、卒業式の歌として「仰げば尊し」が歌われなくなったことは先にふれた。

〝仰げば　尊し　わが師の恩　教えのにわにも　はや　幾年（いくとせ）
思えば　いと疾（と）し　この年月　今こそ別れめ　いざさらば・・・〟

敬愛してきた師や友への惜別の情が溢れて、歌詞、曲ともにこの上もなく優美である。明治17年に発表された。にもかかわらず、原曲はスコットランドという説と、作詞、作曲とも未詳という説に分かれている。しかし、二番三節の歌詞、「身を立て、名をあげ、やよ、はげめよ・・」に見られるように、文語体かつ教育調であり、また曲も日本独特の気高さと哀調を帯びている。そう思うと、やや欲目かもしれないが、当時の優れた日本人文学者、作曲家の苦心の作と考えてよいのではないだろうか。

その他、明治17年には

「庭の千草」

〝庭の千草も　虫の音も　枯れて　さびしく　なりにけり・・・〟

「才女」

〝書き流せる　筆のあやに　染めしむらさき　世々あせず・・・〟

が発表されているが、二曲ともに外国曲を原曲としている。

「庭の千草」はアイルランド民謡の「夏の最後のバラ」に里見義（ただし）（音楽取調掛の御用掛。詳細不詳）が詞をつけた。流麗なピアノ曲として親しまれているし、しばしばソプラノ声楽家の美しい歌声にものる名曲である。

「才女」はスコットランド民謡の「アンニイ・ローリイ」を借りたものであるが、作詞者未詳である。

見逃せないのは、明治21年の「箏曲集」に発表された「さくら」である。これだけは生粋の日本の古曲で、海外で日本曲といえば「さくら」と「荒城の月」といわれるくらい親しまれてきた。

〝さくら　さくら　弥生の空は　見わたすかぎり
霞か雲か　匂いぞ出ずる　いざや　いざや　見にゆかん〟

ところが、作詞者未詳、原曲は「近世箏曲」とだけ記されている。「箏曲集」は編集・文部省（音楽取調掛）、発行・東京音楽学校となっている。おそらく時の洋楽の推進者であった伊沢修二（後述）のもとで編集されたのであろう。

以上、最も古くて、最も身近な童謡、唱歌の主なものを挙げたが、「さくら」を除いて6曲すべてわが国最初の唱歌集「小学唱歌集」第一～三編（明治14～17年の間に発行）に採録されている。やや前後するが、当時を振り返ってみる。

明治維新を一大転機として、富国強兵、殖産興業を進め、欧米に追いつき、追い越すことが喫緊の課題とされたが、その前提としてまず国民の知的文化的水準の向上と均質化を図るべく教育制度の確立がなによりも重要であった。

文部省が創設されたのが明治4年、翌年には新しい学制が公布された。この中の小学校の教科に既に「唱歌」の名が挙がっている。

因みに、現在の小中学校の教科目の中で「音楽」のウエートは専門課程を除けばそれほど高くはない。それに比べれば明治政府の教育・文化、なかでも「唱歌」「音楽」への重要度は格段に高かったと推測され、「文明」に対すると同様、「文化」への希求が極めて強かったことが注目される。

しかし、当然のことながら、初めから唱歌教育が本格化したわけではない。全くの白紙からの出発であるから、暗中模索の期間が長かったことは想像に難くない。

おりしも先述の「伊沢修二」という音楽教育家が明治10年前後にアメリカに留学し、音楽教育の実情を見聞してきた。帰朝後、東京師範学校校長に任命されたが、唱歌教育が整備されていないことを指摘し、文部省に必要機関の設置を建言した。この結果、明治12年に文部省音楽取調掛が設置され、伊沢がその御用掛となった。この音楽取調掛が後に東京音楽学校となり、太平洋戦争後の新学制で東京藝術大学音楽学部へ発展していくことになる。「伊沢修二」と「文部省音楽取調掛」が日本の音楽の、そして童謡、唱歌の基礎を創ったといっても過言ではない。

＊伊沢修二（1851～1917）・明治時代の音楽教育の嚆矢となった人物の一人。信州高遠の生れで江戸に出て洋楽を修め、24歳で愛知師範学校の校長となる。明治8～11年の間アメリカに渡り、現地の師範学校の一生徒となって勉強した。帰国後東京師範学校校長をつとめ、12年から音楽取調掛の初代所長、21年から東京音楽学校の校長となり、また第一高等中学校（後の第一高等学校）の音楽の講師も勤めた。最後は貴族院議員にもなった。

余談になるが、童謡や唱歌の作詞・作曲の分野で、東京高等師範学校ならびに各府県に開設された師範学校の教授、教諭、およびその卒業生が果たした役割は非常に大きい。さらに唱歌だけにとどまらず、日本の初等、中等学校の基礎教育に果たした高師、師範の存在理由は極めて大きかった。教育をとおして健全な青少年を育成し、国家公共に奉仕するという情熱と矜持、そして使命感がいかに強かったかが想像される。今昔の感を禁じえない。

ところで、音楽取調掛は音楽教師の養成と唱歌教材の編集を目的としたが、洋楽についての手がかりを求めて、伊沢がアメリカ留学中師事したボストンの有名音楽教育家メーソン（1828～1896）を御雇教師に招聘し、唱歌集の編纂や音楽取調掛伝修生の教育に当らせた。

このようにして日本で初めて作られた唱歌教材集が、先にも触れた「小学唱歌集」である。しかし、教材として採択した歌曲の殆どは欧米の学校で歌われている有名な民謡をメーソンが選曲し、稲垣千穎（ちかい）（東京師範学校教員）、里美義（音楽取調掛御用掛）など当時の文学者が歌詞を作ったといわれる。先に挙げた「蝶々」以下「蛍の光」「庭の千草」などがそれである。

考えてみれば、ほんの十年ほど前までは、長唄や端唄、果ては浪曲などに慣れ親しんでいた日本人である。夜明け前ともいうべき明治の初期に、他に方法がなかったとはいえ、他民族のメロディーやリズムを、かくも容易に受け入れた日本人の柔軟な吸収力には驚嘆せざるをえない。

また、今になってみると、これらの歌が今日も当時のままに歌われ、それが日本本来の名曲とばかり思っていたものが、実は原曲は外国のものであったと知って、今さらながら驚くことが多い。

とはいえ、歌詞は日本の情緒を巧みに取り入れた〝作詞〟で、しかも原曲のメロディーを存分に活かしきっていることに、当時の文学者の秀逸ぶりが偲ばれる。詞、曲ともに日本人の体質にピッタリ溶け込んでいったといえる。

日本唱歌の原点ともいうべきこの「小学唱歌集」は、当時他に教材がなかったため、小学校の教材としてだけでなく、師範学校や中学校、女学校の生徒たちも、この本のなかの歌を好んで歌っていたようである。そして、その後一世紀以上にわたって国民唱歌として愛唱され、歌い継がれていく源流となった。

いずれにしても、この「小学唱歌集」こそ、まさに和魂洋樂〟の唱歌の原形であったといえる。

明治22年明治憲法制定、23年国会開設を経て、近代国家の体裁が徐々に整ってきた。

この時期、音楽取調掛が東京音楽学校に改称され（明治20年）、伊沢修二が初代校長に就いた。伊沢は東洋音楽と西洋音楽との折衷を理想としていたが、これが「言文一致唱歌」の主張に展開していった。美文型の文語体から実生活に即した口語体の唱歌への転換である。この言文一致唱歌の普及に最も貢献したのが、当時東京高等師範学校教授であった田村虎蔵（1873～1934。音楽教育家。鳥取県に生まれ、明治28年東京音楽学校を卒業、東京高等師範学校音楽科の教授となり、納所弁次郎・石原和三郎らと「幼年唱歌」「尋常小学唱歌」を編集、幼年音楽教育に大きな功績を遺した）である。

言文一致唱歌の普及により、童話を題材にした多くの「幼年唱歌」が生まれた。

「モモタロウ」・・（明治33年・「幼年唱歌」）
〝モモカラウマレタ　モモタロウ　キハヤサシクテチカラモチ・・・〟

「キンタロウ」・・（同右、）
〝マサカリカツイデ　キンタロウ　クマニマタガリ　オウマノケイコ・・・〟

「うらしまたろう」・・（同右）
〝むかしむかし　うらしまは　こどものなぶる　かめをみて・・・〟

「はなさかじじい」・・（明治34年・「幼年唱歌」）
〝うらのはたけで　ぽちがなく　しょうじきじいさん　ほったれば・・・〟

「おおえやま」・・（同右）
〝むかし丹波の　大江山　鬼どもおおく　籠りいて・・・〟

このうち「モモタロウ」（田辺友三郎詞、納所弁次郎曲）を除いて、すべて石原和三郎（1865～1928。作詞家。群馬県生まれ、群馬師範学校を出て小学校教諭の後、上京して田村と知り合ったといわれる）作詞、田村虎蔵作曲のコンビによる。

なお、上記「うらしまたろう」は、明治44年発行の「尋常小学唱歌」で、文部省唱歌「浦島太郎」として、詞・曲ともに改作された。「昔々浦島は　助けた亀に連れられて・・・」で、我々に馴染みが深い。

コンビといえば、東くめ（1877～1969。作詞家。東京音楽学校を卒業後、東京府立第一高女、東京女子高等師範学校教授を勤め、二年後輩の滝廉太郎と共同で幼稚園向けのやさしい唱歌の作詞に尽くした）が滝廉太郎（1879～1903。ピアニスト・作曲家。早世したが、日本の本格的作曲家の先駆けといわれる先覚者。大分県竹田に生まれ、明治31年東京音楽学校卒業、34年文部省留学生としてドイツに学ぶ。「花」「箱根八里」「荒城の月」などの名曲はつとに有名である）と組んで作詞、作曲をした「水あそび」「鳩ぽっぽ」「お正月」などが、幼い子ども達に親しまれてきた。

既にみられるように、言文一致唱歌の普及とも相まって、明治30年代になり、ようやく外国曲の翻案一辺倒か

ら脱し、日本人による日本人の童謡、唱歌が作詞、作曲されるようになった。

だが、言文一致によるやさしい童謡・唱歌に対して、高い品格を重視する対抗勢力の動きもあり、両者を吸収して国民の思想統一を図るため、改めて「文部省唱歌」の概念が導入された。

最初の文部省唱歌は明治43年発行の「尋常小学読本唱歌」であった。これを基にして各学年別の「尋常小学唱歌」も編集された。編集に携わったのは、その殆どが東京帝国大学、東京音楽学校の教授で占められている。順不同であるが、その一部を挙げてみる。

上真行（1851～1937。雅楽家。作曲家。東京音楽学校教授や宮内省雅楽長を務めた。「一月一日」を作曲）

小山作之助（1863～1927。音楽教育家、作曲家。明治20年音楽取調掛全科を卒業、東京師範学校・東京音楽学校教授。「夏は来ぬ」「四条畷」等を作曲）

巌谷小波（1870～1933。小説家・児童文学家。尾崎紅葉らの硯友社の同人として出発、日本の童話文学の嚆矢として知られる）

島崎赤太郎（1874～1933。音楽教育家、東京音楽学校教授。日本最高のオルガン奏者といわれ、《オルガン教則本》を著す）

岡野貞一（1878～1941。音楽教育家・作曲家、東京音楽学校教授。文部省唱歌のうち「春が来た」「朧月夜」「故郷」など、広く愛唱された唱歌を作曲した）

芳賀矢一（1867～1927。国文学者。明治二五年東京文科大学卒業、ドイツに留学後、東京帝国大学国文学科教授、国学院大学学長を務めた）

上田万年（1867～1937。言語学者・国語学者。東京帝国大学教授、神宮皇學館館長。国語政策に多くの提言をした）

高野辰之（1876～1948。国文学者。長野師範学校を卒業、中等教員検定試験に合格して学会に入る。東京音楽学校の教授をつとめ、東京帝国大学の講師として日本演劇史を講じた。「春が来た」「日の丸の旗」「春の小川」「朧月夜」「故郷」などを作詞）

佐佐木信綱（1872～1963。国文学者・歌人・詩人。明治21年東京帝国大学文学部を卒業、長く講師をつとめた。万葉集の学者として抜きんでる）

明治初年生まれのこれらの作詞・作曲家たちは、西洋音楽からその表現力を貪欲に吸収しつつ、いかに自らの手で日本的な音楽を創造しようとしたか、苦心のほどがうかがわれる。今に生きる日本の童謡・唱歌はその結実といえよう。

その結果、明治から大正にかけて、「尋常小学読本唱歌」を始めとする唱歌教科書が相継いで発行された。しかし、これらの文部省唱歌は、文部省に任命された編集委員によって作詞、作曲された故をもって、個々の歌曲の作詞者、作曲者の個人名は発表しなかった。このため

高野辰之と岡野貞一のような例外もあるが、正式には「文部省唱歌」としての表示だけで次代に遺されることになったといわれる。名曲のオリジナルの作詞者、作曲者の個人名が不分明なのは、後世の私たちからみると不満の残るところである。それをいくらかでも補うつもりで、上記のとおり名だたる編集委員の名前を長々と並べた所以である。これらの唱歌集に収録された唱歌からその一部の曲名を挙げてみる。

「春が来た」・・"春が来た　春が来た　どこに来た・・"（文部省唱歌・高野辰之詞・岡野貞一曲・明治43年・尋常小学読本唱歌）～（以下全て「文部省唱歌」と表示されている。作詞・作曲者名の明らかなもののみその名を表示した）

「虫の声」・・"あれ鈴虫が鳴いている・・"（同右）

「水師営の会見」・・"旅順開城約成りて・・"（佐佐木信綱詞・岡野貞一曲・同右）

「われは海の子」・・"我は海の子白波の・・・"（同右）

「ふじの山」・・"あたまを雲の上に出し・・"（巌谷小波詞・同右）

「日の丸の旗」・・"白地に赤く・・"（高野辰之詞・岡野貞一曲・明治44年・尋常小学唱歌）

「二宮金次郎」・・"柴刈り縄ない草鞋をつくり・・"（同右）

「案山子」・・"山田の中の一本足の案山子・・"（同右）

「雪」・・"雪やこんこ　霰やこんこ・・"（同右）

「茶摘」・・"夏も近づく八十八夜・・"（明治45年・尋常小学唱歌）

「村祭」・・"村の鎮守の神様の・・"（同右）

「冬の夜」・・"燈火ちかく衣縫う母は・・"（同右）

「春の小川」・・"春の小川はさらさら流る・・"（高野辰之詞・岡野貞一曲・大正1年・尋常小学唱歌）

「広瀬中佐」・・"轟く砲音飛来る弾丸・・"（同右）

「村の鍛冶屋」・・"しばしも休まず槌打つ響き・・"（同右）

「橘中佐」・・"かばねは積りて山を築き・・"（同右）

「鯉のぼり」・・"甍の波と雲の波・・"（同右）

「海」・・"松原遠く消ゆるところ・・"（大正2年・同右）

「冬景色」・・"さ霧消ゆる港江の・・"（同右）

「朧月夜」・・"菜の花畠に入日薄れ・・"（高野辰之詞・岡野貞一曲・大正3年・尋常小学唱歌）

「故郷」・・"兎追いしかの山・・"（高野辰之詞・岡野貞一曲・同右）

こうしてみると、明治の終わりから大正にかけての数年間は、まさに文部省唱歌の全盛期であった。これに呼応して、童謡の世界も一層その幅を広げ、新天地を開いた感がする。自由主義教育思潮の流れが、童謡、唱歌の頂点を極めたといってよいであろう。

すなわち、大正の半ば頃から、「こどもにはこどもらしいうたを」という新しい感覚の童話童謡雑誌が発刊され始めた。鈴木三重吉（1882～1936。作家、東京帝国大学英

文科出身で夏目漱石門下。叙情的作品が多く、「赤い鳥」を創刊して児童文学に貢献した）や北原白秋（1885～1942。九州柳川出身の詩人、歌人。早稲田大学英文科予科中退。詩集「邪宗門」、歌集「桐の花」などを出す。「城が島の雨」「からたちの花」「砂山」など著名曲が多い）らの手による「赤い鳥」が創刊され、野口雨情（1882～1945。早稲田大学中退。民謡・童謡作家。「波浮の港」「証城寺の狸囃子」などの作品がある）若山牧水（1885～1928。歌人。平易純情なロマン的作風で、旅と酒の歌が多い）らの「金の船」など、多くの童謡誌がそれに続いた。いかにも童謡というにふさわしい主な歌を挙げてみる。

「雨」・・“雨がふります　雨がふる・・・”（北原白秋詞・弘田竜太郎曲、大正7年・「赤い鳥」）

「靴が鳴る」・・“お手つないで　野道を行けば・・・”（清水かつら詞・弘田竜太郎曲、大正8年・「少女号」）

「背くらべ」・・“柱のきずはおととしの・・・”（海野厚詞・中山晋平曲、大正8年・「子供達の歌」）

「どんぐりころころ」・・“どんぐりころころ　ドンブリコ・・・”（青木存義詞・梁田貞曲、大正10年・「かわいい唱歌」）

「夕焼小焼」・・“夕焼小焼で日が暮れて・・・”（中村雨紅詩・草川信曲、大正12年・「あたらしい童謡」）

一方、大正初年発表の「新作唱歌」のなかで、見逃せない歌がある。吉丸一昌（1873～1916。国文学者・作詞家。東京帝国大学国文科卒業、東京音楽学校で国語を教えた。ドイツ民謡を訳した「故郷を離るる歌」がある）作詞、中田章（1886～1931。オルガン奏者。東京音楽学校卒業、同校教授をつとめた）作曲の「早春賦」である。“春は名のみの風の寒さや・・・”は、古くから女性が最も好んで歌ってきた名曲である。

昭和に入ってからの「文部省唱歌」の中から二、三あげてみる。

「電車ごっこ」・・“運転手は君だ　車掌は僕だ”（井上赳詞・信時潔曲・昭和7年・新訂尋常小学唱歌）

「一番星みつけた」・・“一番星みつけた　あれあの森の”（信時潔曲・同右）

「蛍」・・“蛍のやどは川ばた楊”（井上赳詞・下総皖一曲・同右）

「動物園」・・“動物園ののどかな午後は”（井上赳詞・信時潔曲・同右）

「牧場の朝」・・“ただ一面に立ちこめた”（船橋栄吉曲・同右）

昭和16年になり、小学校が国民学校に、尋常科が初等科に改められた。さらに教科書も文部省著作の国定教科書に統一された。初等科用「ウタノホン」が昭和16年に発行されたが、「文部省唱歌」と名づけた曲を挙げてみる。

「ウミ」・・“ウミハヒロイナ　オオキイナ・・・”（林柳波詞・井上武士曲）

「オウマ」・・“オウマノオヤコハ・・・・・”（林柳波詞・松島彝曲）

「花火」・・“どんとなった　花火だ・・・”（井上赳詞・下総皖一曲）

「たなばたさま」・・“ささの葉　さらさら・・・”権藤はなよ・林柳波詞・下総皖一曲）

昭和に入ると、文部省唱歌の表示にあわせて作詞・作曲者名を明示するようになった。

前後するが、昭和11年からNHKラジオ番組の「国民歌謡」が放送され始め、やや思想統制の色合いが強くなってきた。その中でごく僅かであるが、島崎藤村（1872～1943。詩人・小説家。長野県馬篭村に生まれ、明治学院卒業。明治女学校や東北学院の教師を務めた。詩集「若菜集」「落梅集」、小説「破戒」などで名をあげる）の詩集に題材をとった名曲がみられる。

「朝」・・“朝はふたたびここにあり・・・”（小田進吾曲・昭和11年）

「椰子の実」・・“名も知らぬ遠き島より　流れ寄る・・・”（大中寅二曲・同右）

これとは別に次のような曲も作られた。

「愛国の花」・・“真白き富士の気高さを　こころの強い楯として・・・”（福田正夫詞・古関裕而曲・昭和12年）

「隣組」・・“とんとんとんからりと　隣組・・・”（岡本一平詞・飯田信夫曲・昭和15年）

そろそろ雲行きが険しくなってきたことがうかがわれる。このあたりになると、「唱歌」というのは相応しくないのかもしれない。その後昭和20年の敗戦までは、軍歌や軍国歌謡一辺倒の風潮にかき消され、唱歌としてみるべきものは全くない。

太平洋戦争敗戦後、教育はもちろん、政治、経済、思想ともに極度の混乱に陥ったなかで、唱歌の世界でなんとか再起を図ろうとした二つの流れがあった。一つは「NHKラジオ歌謡」であり、もうひとつは「うたごえ運動」である。

まず「NHKラジオ歌謡」の中から、

「風はそよ風」・・“「お早うさん」とも言わないで　そっとわが家の軒先に・・・”（東辰三詞・明本京静曲・昭和21年5月・ラジオ歌謡の第一号となった）

「朝はどこから」・・“朝はどこからくるかしら　あの空越えて　雲超えて・・・”（森まさる詞・橋本国彦曲・昭和21年）

「山小舎の灯」・・“黄昏の灯は　ほのかに点りて・・・”（米山正夫詞・曲・昭和22年）

「夏の思い出」・・“夏がくれば思い出す　はるかな尾瀬遠い空・・・”（江間章子詞・中田喜直曲・昭和24年）

「雪のふるまちを」・・“雪の降るまちを　思い出だけが通りすぎて行く・・・”（内村直也詞・中田喜直曲・昭和28年）

また、関鑑子（1899～1973）声楽家、ソプラノ歌手。東京音楽学校卒業後、昭和23年中央合唱団を創立、「日本のうたごえ」運動をおこして全国に広め、合唱の楽しさを伝えた。30年スターリン賞を受賞）が主宰した「うたごえ運動」の歌集「青年歌集」から、

「カチューシャ」・・“リンゴの花ほころび・・・”（関鑑子・丘灯至夫共訳・ブランデル曲・昭和23年・もとはロシア民謡）

「どじょっこふなっこ」・・“はるになれば　しがこもとけて・・・”（東北民謡から、岡本敏明曲・昭和23年）

「トロイカ」・・“雪の白樺並木・・・”（音楽舞踊団カチューシャ詞・原曲ロシア民謡・昭和28年）

「灯（ともしび）」・・“夜霧のかなたに　別れを告げ・・・”（同右）

「おお牧場はみどり」・・“おお牧場はみどり　草の海風が吹く・・・”（中田羽後詞・ボヘミア民謡・昭和30年）

さて、今私の手許に合唱用の「童謡唱歌のほん」（平成9年出版）がある。もちろん代々歌い継がれた名曲の中から抜粋したもので、すべてを網羅したものではないが、仮にこの曲集から拾ってみる。全117曲収録のうち、発表の年代順に、明治・45曲、大正・43曲、昭和・29曲である。明治が国民教育の水準向上を目指して、外国曲の採用も含め積極的に多くの唱歌を生み出した。その一方で、大正がたった15年の間に明治に匹敵するだけの唱歌を生み出しているのは思いがけなかった。大正ロマンの充溢した時代の反映であるのだろう。“大正は影が薄い”とされるが、童謡、唱歌からみる限り日本人の情操の最も豊かな時代であったと思う。

他方、閉塞感と暗雲に覆われ始めた昭和初期以降、作詞家、作曲家とともに、心ならずも沈黙を余儀なくされたことは、日本独自の叙情歌曲継承にとって口惜しい限りであった。

昭和20年、太平洋戦争敗戦後は、戦後の混乱のなかで一世を風靡した上述の「うたごえ運動」や「NHKラジオ歌謡」が、日本人の心の空白を埋める役割を果たしはしたが、それ以上のものにはなりえなかったといわざるをえない。戦後65年経った今でも、心に残る歌といえば、やはり明治、大正の童謡、唱歌に代るものはないのだから。

人間として基礎的な情操を養うためには、いうまでもなく自由闊達で想像力・創造力ともに豊かな社会背景を必要とする。

にもかかわらず、敗戦後、悪しき個人中心主義がはびこり、人と人の絆が薄くなるどころか、至るところに「防犯カメラ」や「こども110番」の表示を張り巡らさざるをえない不自由で閉塞的な社会に陥ってしまった。

せめて子どもたちだけでも、大人たちの諸悪の災いから免れさせてやりたい。そのためにも、人や自然の美しさを愛してきた、日本情緒豊かな唱歌があることを伝え、口移しにでも歌い継いでいきたいと思うのである。

そして、齢を重ねたとはいえ、幸いにも、昔の童謡、唱歌を懐かしむ大人たちがいるのだから、彼らの口にもう一度唱歌や童謡を蘇えらせたいのである。

引用・参考図書

「童謡唱歌のほん」・・横山太郎・編・著　自由現代社　平成9年
「童謡のすべて」・・安田進・編　全音楽譜出版社
「樂典」・・石桁真礼生ほか5名共著　音楽の友社　昭和35年
「日本童謡集」・・与田準一・編　岩波書店　昭和32年
「日本唱歌集」・・堀内敬三・井上武士・編　岩波書店　昭和33年
「日本の唱歌」上・中・下・・金田一春彦・安西愛子・編　講談社　昭和52～57年

――二〇一〇年一一月一六日・記

追記

二〇一一年一月二五日の日経新聞が次のように伝えた。

「仰げば尊し」の原曲とみられる米国の歌の楽譜を、一橋大学の桜井雅人名誉教授が発見した。桜井さんによると、曲名は「SONG FOR CLOSE OF SCHOOL」で、米国で一八七一年に出版された音楽教材に楽譜が載っていたという。作詞はT.H.ブロスナン、作曲はH.N.D.と記されており、「学校の終わりのための歌」とでもいおうか、友人や教室との別れを歌った歌詞という。旋律も「仰げば尊し」と全く同じだが、作詞・作曲者の実像など不明な点も多く今後解明されればうれしい、と桜井さんは話しているそうである。

――二〇一一年一月二七日・記

聖徳銀行秘書室

―名曲に潜む「秘められた詩情」―

鯨游海

平成二十三年四月十八日（月）午前八時半

皇居を俯瞰する大手町に聳える高層ビルの24階に在る聖徳銀行秘書室に、聖徳太平頭取のだみ声が響いた。

「実に怪しからん。嘆かわしいことじゃ。わが国を代表する国立大学の人文系教授ともあろう人が、明治時代の小学校唱歌すら正しく読めんとは何たることじゃ。明治も遠くなったでは済まされん由々しき問題じゃ。ピン太郎秘書役！」

「ハイ、ハイ。只今……」

泉ピン太郎秘書役は弾かれたように席を立ち、頭取の机の前にこ趨りに駆けつけた。

「この本は京都大学の漢学者阿辻哲次博士が書かれた中々面白いエッセイじゃ。しかし一ヶ所致命的な誤りがある。

単なる誤植とは考えられん見過ごす訳にはいかん確信犯的な誤りじゃ」

「ははあ、左様で……」

「明治の文語文とはいえ、小学校唱歌であるからには当時の小学生にも十分理解出来たということじゃろう。文部省制定の教科書である以上これは正統な文語文じゃ。

これを間違って解釈するとは何たることじゃ。大学教授たる者がこの為体じゃから、今どきの若者は福沢諭吉の『学問のすすめ』も森鷗外の『舞姫』も、もう原文では読めんということになる。古文は民族の遺産なのにじゃ。

所で足下は、この文章のどこが間違っておるかが判るかね」

と言いながら、一冊の新書本にリボンの付いた栞を挟んでピン太郎に手渡した。

「ここには『仰げば尊し』について書かれた阿辻教授の論考が載っておる。足下にはどこが誤りか指摘して貰おう。

そうじゃ、ついでにこの歌詞には或る偉大な人物が詠み込まれておるのじゃが、それが誰であるのかも考えて貰うとしよう。

この二つが宿題じゃ」

それだけ言うと太平は

「パナソニー社に行ってくる」

と言い残し、足早に出かけようとした。

「行ってらっしゃいませ」

本を両手で恭々しく受け取ったピン太郎は、慌ててドアに趨り寄り深々と頭を下げて太平を送り出した。

自席に戻ったピン太郎は手渡された本を眺めてみた。

『漢字逍遥』と題された角川学芸出版社（ワンテーマ21）の新書本で、百の漢字に関するエッセイ集であった。

「あとがき」を読むと、これは東京新聞に連載したものを加筆修正し単行本としたもので、初版は平成二十二年一月十日となっていた。栞が挟まれた頁には次の文章があった。

「（近年卒業式で）『仰げば尊し』が歌われなくなった理由は、歌詞が難しいということもあるが、それよりも歌詞の内容が封建的・反動的との意見が強いから、それで抵抗があるらしい。

仰げば尊し　我が師の恩

のどこが反動的なのか、私にはまったく理解出来ない。

思えばいと疾し　この年月

今こそ別れ目　いざさらば

には、惜別の感情がなんとこまやかに表現されていることか！

しかし教育の荒廃が叫ばれて久しい今、仰ぐに足るだけの尊い師が少なくなっている現状では、この歌を歌ってもむなしく響くだけかもしれない。……」

ピン太郎は何回も読み返してみた。論旨には共感したものの、どこが間違っているのか一向に判らなかった。

ましてやこの歌詞に詠み込まれているという或る偉大な人物とは、一体誰のことなのかさっぱり判らなかった。

所で不思議なことにピン太郎はこの歌詞を憶えていた。本には省略されていた二句目がすらすらと口を衝いて出てきた。

教えの庭にも　はや幾年

ピン太郎は低い声で節を付けて口ずさんでみた。すると二番、三番の歌詞もすらすらと出てきたのには我れな

がら驚いた。
少年時の記憶力の凄さを改めて知った。何年間も歌ったことがないのに三番まで憶えていたとは！

互いに睦みし　日頃の恩
別るる後にも　やよ忘るな
身を立て名をあげ　やよ励めよ
今こそ別れめ　いざさらば

朝夕なれにし　学びの窓
螢のともしび　つむ白雪
忘るる間ぞなき　ゆく年月
今こそ別れめ　いざさらば

（この歌詞のどこが封建的・反動的なのだろう）とピン太郎も改めて考えてみた。〔身を立て名をあげ〕が、恐らく戦後の一時期の風潮では立身出世を煽り、平等の精神に反すると教育ママや日教組の先鋭分子が問題にしたのだろうが、大志を有する若者が〔身を立て名をあげ〕る為に、学問や生業に励むのは当り前のことではないかと思うのだった。
スローな曲に合せた八六調の名文で意味も難しくはない。〔いと〕は〔いとをかし〕のいとだろうし〔疾し〕は風林火山の〔疾きこと風の如し〕の終止形疾しで、〔やよ〕は呼びかけの発語〔やあ〕或は〔いよいよ〕であろう。
しかしこの歌詞に潜んでいるという偉大な人物については、皆目見当がつかなかった。
また頭取の言う「阿辻教授の誤り」についてもまったく判らず、糸口すら掴めなかった。
（やれやれ、幾ら考えても自分には判りっこない。ここは一つ沼田美紀女史に尋ねるしかあるまい）と思った。
多忙だった一日が終ろうとする午後五時過ぎ、朝から気にかかっていた頭取の宿題を果たそうと、ピン太郎は沼田美紀外為資金室長の番号を確かめダイアルした。
沼田美紀はピン太郎と同期入社で、大阪外語大中国文学科出身という銀行員としては異色の経歴を持つ才媛だが、ピン太郎とは妙にウマが合い良好な関係を保っていた。
「秘書室の泉です。お忙しい所申し訳ないが、どうしても貴女に教えて欲しいことがある。少々時間を割いてくれないか」
「いいわよ。私でお役に立てるのなら。いつがいいの。私ならこれからだってOKよ」
「それは有難い。では六時にパレスホテルのコーヒーラウンジでいかが」
「オーケー。ではのちほど」
ピン太郎は、こんなにスムーズにアポが取れると思ってなかったので嬉しくなった。
（持つべきは友人だ）と思いつつ残務の整理を始めた。
定刻の五分前にラウンジに行くと、美紀は既に来ていて手を挙げてピン太郎に合図を送ってくれた。（才女はやること為すことすべてテキパキしているわい）と感心した。
ピン太郎は、かいつまんで頭取から課された二つの宿題を述べ『漢字逍遥』のその頁を開いて美紀に差し示した。
美紀はしばし黙読していたが
「判ったわよ」
と言いながら笑顔を向けた。
「エエッ。もう判ったの」
「論語を碌に読んだことのなさそうな泉君には難しいだろうけれど、私には簡単だわ。
阿辻教授の間違いの方も古文の初歩的な常識の範囲内の易しい問題だわ。
だって明治時代の小学生は皆この歌詞を理解して歌っていたのでしょ」
「詳しく説明してくれよ」
「先ずコーヒーを戴いてからだわ」
運ばれてきたブルーマウンテンを美味しそうに啜りながら美紀は語り出した。
「先ず偉大な人物とは孔子さまだわ。
論語の子罕篇にこんな記述があるの。
〔これを仰げば弥高く、これを鑽れば弥堅し。これを瞻るに前に在れば忽焉として後に在り……〕。
これはね、孔子の高弟である顔回が師の孔子に感嘆してつくづく洩らした言葉だわ。〔仰げば尊し〕は〔仰げば高く〕をヒントにしたと思うの。唯この一句だけの類似だったら偶然ということもあるけれど、続く二句目に〔教えの庭〕とあるでしょ。もう問違いなく孔子の故事と断定出来るわ。
〔庭訓〕という熟語があるわね。これは孔子が息子の鯉に悟した有名な逸話よ。
論語の季氏篇に
〔鯉趨りて庭を過ぐ。曰く、詩を学びたりや。対えて曰く、未だし。曰く、詩を学ばずんば以て言うこと無し〕
つまり（詩経を読まなければ、人前で立派にものが言えないよ）と訓戒した故事を引用してるのよ。
ほら、一、二句とも論語に書かれた孔子の逸話でしょ」
「なる程。さすが北京大学文学博士はたいしたものだ」
沼田美紀は五年前、聖徳太平と共同執筆した論語の研究論文で、北京大学から文学博士号を得ていた。その時の縁もあり北京支店長を二年余務めた後に帰国、今のポストについた。北京大学文学博士は嘘ではなかった。
ピン太郎は美紀の説明に感嘆するばかりだった。
「宿題のもう一つ、阿辻教授の誤りはね、泉君も昔習

った筈よ。〔係結びの法則〕というのを聞いたことがあるでしょ。

凡そ文章は終止形で終るものだけど、主文の中に〔ぞ、なむ、や、か〕等の係助詞があれば述語は連体形で終り、〔こそ〕があれば已然形で終るという古文の大原則のこと。

強調や詠嘆、推量の表現としてよく使われるわ。

これは文語文の初歩で、今も高校一年生で誰もが習う法則よ。

この例では〔今こそ　別れめ〕で、めは未来の推量の助動詞む（ん）の已然形のめなの。

助動詞むは（〇、〇、む（ん）、む（ん）、め、〇）と活用するから。

口語訳すれば（いよいよ本当にお別れする時が間もなくやって来るのだ）となるわ。

阿辻教授の〔別れ目〕だと、凡庸な表現になってしまう。めと目との一字違いにしては月とスッポン程の差がついてしまう。助動詞のめなら、余韻嫋々として万感胸に迫る舒情が含まれるのに対し、目という形状の名詞だとそれなりに意味は通じるけれど平板で情緒がないわね。

原作者がめとしたことは明白だわ。

これじゃあ文人頭取が怒るのも当然よ。

白川静先生亡き後の、わが国漢文学界を背負って立つと自他共に許す碩学にしては、お粗末なミスだわ。さらに言えば、東京新聞や角川学芸出版の編集や校正に当った人たちが皆このミスに気づかなかったのだから、何とも情けない限りよね。明治時代の文章なのに馴染みが薄くなり、平成の私たちから遠くなってしまったということですもの。

尤も阿辻教授はめと書いたのに出版社の担当者が目と誤転換した可能性もなくはないけれど」

ピン太郎は茫然として、美紀の黒木瞳かとまごう美しい理智的な顔を凝視するばかりであった。

「有難う。お蔭さまで頭取から課された宿題が二つ共出来てしまった。

お礼を言うよ。

もしご都合が良ければ今夜ステーキでもご馳走しようか」

「たいした高給取りでもないくせに無理なさらなくていいわよ。

それに私少し用事を思い出したの。

じゃ、これで失礼するわ」

美紀は唖然とするピン太郎を残したままウィンクすると颯爽と帰って行った。

ピン太郎は

仰げば尊し　我が師の恩

教えの庭にも　はや幾年

の二句に、実は孔子の面影がかくも明瞭に現われているとはまったく考え及ばなかった。

この歌詞と論語とを結び付けた美紀の才能に改めて感服せざるを得なかった。

（彼女はおそらく論語512章を全部諳んじているに違いない）とさえ思った。

平成二十三年四月十九日（火）午前八時二十分

ピン太郎は太平頭取の出勤を今や遅しと待ちかまえていた。朝の早い太平が乗ってきた役員専用エレベータのドアが開いた。

「お早ようございます」

「うむ。お早よう。コーヒーを淹れてくれないか。足下も一緒にどうじゃ」

「畏れ入ります。只今早速……」

秘書嬢の坪池花怜は心得たもので、既に沸かしていた湯で素速くコーヒーを淹れて頭取室に運んでくれた。いい香りがあたり一面に漂った。

「早速ですが頭取！　昨日の宿題二つとも正解が判りました」

「ほう。足下には難問じゃと思うておったが早いじゃないか。答とやらを承わろうか」

「はい。『仰げば尊し』の歌詞に潜む偉大な人物とは孔子であります。

また阿辻教授の誤りは〔別れめ〕とすべき所を〔別れ目〕と、漢字で書いてしまったことではないでしょうか」

「ご名答。足下にしてはよく気がついた。『仰げば尊し』を作詞した人は、教師の理想像として孔子をイメージしておったのじゃろう。また明治の初期とはいっても、まさか授業を庭でやっておったのではあるまい。学校や授業の象徴として〔教えの庭〕と表現した。もとより〔庭訓〕の故事を踏まえてのことじゃ。

そもそもこの歌は、明治十七年制定の小学校唱歌じゃが、実は作詞者が誰なのか未だに判らんのじゃ。学校の制度もこの頃になると徐々に整い、卒業式で歌う歌が必要になった。

一方、西洋音楽に通じた作曲家は未だ育っておらず、あの瀧廉太郎もまだ十代で、東京音楽学校に入学したばかりの頃じゃった。

そこで文部官僚の伊澤修二という人が、とり敢えずスコットランド民謡の中から選んだ曲に相応しい歌詞を付けさせ、文部省制定の小学校唱歌として普及を図ったと思われる。

曲は外国の借り物としても、せめて歌詞だけはわが国伝統を踏まえた立派なものにしたいと、当時第一級の文人に依頼した。

依頼されたその文人は伊澤修二の意図を理解し、全智全能を傾むけて作詞に没頭した。

近代国家建設に邁進する日本民族の誇りや、整備されつつある学校文化をも明示しようとした。一番では儒教中興の祖、孔子を論語から引用したのに続いて二番も

身を立て名をあげ　やよ励めよ

と儒教の教典の孝経から引用した。

即ち〔身を立て道を行き、名を後世に揚げ、以て父母に顕かにするは、孝の終なり〕を典故としておるのじゃ。

更に三番も

螢のともしび　つむ白雪

と中国の正史である晋書から引用した。これが晋の宰相や大臣を務めた車胤と孫康の苦学した逸話〔螢雪の功〕じゃ。

このようにこの詞をよく吟味してみると、漢籍からの引用が随所にあるのに加え、日本古来の文章の精妙な表現を引き出す〔未来の推量の助動詞〕を駆使し、余韻嫋々、感情の濃まやかさを巧みな修辞で詠んでおる。

このことからも、作詞者は当代一級の文人だったことが判るというものじゃ」

太平はここ迄一気に語ると、やおら白磁のコーヒー碗を手に取り美味そうに啜った。

「封建的・反動的どころか、明治を代表する名曲と称していい傑作でございますね」

「その通りじゃ。学校唱歌を超越した明治文学の傑作じゃ。ところで足下はこの答えを独りで考えたのかね」

「畏れ入ります。実は幾ら考えても五里霧中でさっぱり判らず沼田美紀女史に相談した所、たちどころに明答を得た次第であります」

「ワッハッハ。正直で宜しい。実は私の宿題に答えられるのは、当行一万五千に垂とする行員は人材多しと雖も、これに関しては彼女以外おるまいと思うとったのじゃ。ワッハッハ。

やはり沼田君じゃったか。彼女に宜しく言っておいてくれ。

さて私は忠友物産に行ってくる」

ピン太郎は冷や汁をかきつつ太平をエレベータ迄見送り、最敬礼をして送り出した。

自席に戻ったピン太郎は、内線をダイアルして沼田美紀を呼び出し

「昨夜は有難う。貴女の答えを頭取に伝えた所、大変ご機嫌で『さすが沼田女史じゃ。宜しく言っておいてくれ』と伝言されたよ。

それにしても、貴女の博学多才には改めて感心したよ。

そのうちステーキをご馳走させてくれよ」

「そのうちね。これからも難問があったら遠慮なさらず相談して頂戴ね。但し横文字は駄目だけど……」

平成二十三年四月二十日（水）午前八時半

この日も平常通り聖徳太平頭取が出勤してきたが、ピン太郎の挨拶にもうわの空で、何故かいらいらと不機嫌な様子であった。

秘書嬢の坪池花怜が緑茶を淹れ、優雅な仕草で頭取の卓上に茶碗を置いて静かに引き退がった。いつもは出る冗談も今朝はなかった。

突如、太平のだみ声が朝の静寂を破った。

「実に怪しからん。歎かわしいことじゃ。わが国を代表する経済誌の記者たる者が、こんな言葉の間違った使い方をするとは実に情けない。ピン太郎秘書役！」

「ハイ、ハイ。只今……」

「これは日本を代表する経済誌じゃ。しかしこの記事の中に一ケ所、本来の意味から外れた使い方をしておる語がある。こんなミスを私は見過ごす訳にはいかんのじゃ」

と言いながら、一冊の経済誌の頁を開いてピン太郎に差し出した。

「足下にはそのミスを探して貰いたい。先ずはこれが宿題の一つじゃ。それから話しは別じゃが、足下は阿倍仲麻呂のことを知っておるかね」

「奈良時代に留学生として唐に渡り、生涯唐朝に仕えた立派な人物であること位しか知りませんが」

「うむ。彼はきわめて優秀じゃったので、外国人というハンディがありながら唐の高官に栄達した日本最初の国際人といえる人じゃった。

その彼も望郷の念押さえ難く、帰国を願い出るが、唐朝としても現職の高官を私事で日本に帰す訳にはいかんじゃろう。じゃが唐の官僚にも粋な図らいの出来る智恵者が居て、日本に出張させるという名目で実質帰国を認めたのじゃ。

その時仲麻呂が詠んだ和歌を足下も知ってるじゃろう。

天の原ふり放けみれば春日なる　三笠の山に出でし月かも

じゃ。さて仲麻呂は、遣唐使の帰国便に乗って日本に向かうのじゃが、嵐に遭って結局日本の土は踏めなかった。長安に戻った彼は再び唐朝に仕え七十三歳で生涯を終えた」

「仲麻呂の無念や想うべしですね」

「その通りじゃ。所で去る人が残していく詩を留別詩というが、仲麻呂が王維に残した留別詩がある。

命を銜みて国に還るの作・阿倍仲麻呂

命を銜みて将に国を辞せんとす　銜命将辞国
非才　侍臣を忝うす　非才忝侍臣
天中　明主を恋い　天中恋明主
海外　慈親を憶う　海外憶慈親
伏奏して金闕を違り　伏奏違金闕
騑驂　玉津を去る　騑驂去玉津
蓬萊　郷路遠く　蓬萊郷路遠
若木　故園の隣　若木故園隣
西望して恩を懐う日　西望懐恩日
東帰して義に感ずる辰　東帰感義辰
平生の一宝剣　平生一宝剣
留めて交わりを結びし人に贈らん　留贈結交人

これに対して、王維が仲麻呂に応酬した送別詩がある。送別詩とは残る人が去る人に贈る詩をいうのじゃが、これも次のような格調高い詩じゃ。

秘書晁監の日本国に還るを送る・王　維

積水　極む可からず　積水不可極
安んぞ知らん滄海の東　安知滄海東
九州　何れの処か遠き　九州何処遠
万里　空に乗ずるが若し　万里若乗空
国に向かいて唯だ日を看　向国唯看日
帰帆　但だ風に信す　帰帆但信風
鰲身　天に映じて黒く　鰲身映天黒
魚眼　波を射て紅なり　魚眼射波紅
郷樹　扶桑の外　郷樹扶桑外
主人　孤島の中　主人孤島中
別離　方に域を異にす　別離方異域
音信　若為通ぜん　音信若為通

この留別詩と送別詩は一対となってより深く感動が伝わる。数多い漢詩の応酬詩の中でも卓越したものじゃ。

さて、これに匹敵する優れた応酬詩の例が日本にも存在した。それが『仰げば尊し』の留別詩と『螢の光』の送別詩じゃ。

足下は『螢の光』の歌詞を憶えておるじゃろう」

ピン太郎は太平に促されて、低い声で『螢の光』を口ずさんでみた。

驚いたことに少年の頃記憶した歌詞が淀みなく口を衝いて出てきた。

螢の光　窓の雪
ふみ読む月日　重ねつつ
いつしか年も　すぎのとを
あけてぞ今朝は　別れゆく

「実にいい歌じゃ。

所でこの曲もスコットランド民謡で『仰げば尊し』と同じ頃小学校唱歌として制定され、卒業式ではセットとして歌われた。

つまり一対を為す姉妹曲じゃ。異なる点といえば『仰げば尊し』が八六調なのに対し、『螢の光』は七五調で詠まれておる。これは曲のテンポが違うからそうなったのじゃろう。

一方『螢の光』は作詞者が判っておる。稲垣千穎という東京師範学校の国史、国漢の教諭じゃった。

この人は、古今集を下敷きにして作られた国歌『君が代』の補作者でもあった。

つまりは、当時第一級の文化人且つ詩人じゃったと思われる。

所がじゃ。『螢の光』の歌詞を具にみてみると、本来漢字を使って意味を明確にすべき所に何故か仮名を使っておる。

この一番の歌詞の三句目〔すぎ〕は、どうして過ぎと漢字で書かんのじゃ。

日本語の書き言葉は、仮名だと意味が曖昧になる。

〔疾き〕もときでは時か朱鷺か秋なのか区別がつかん。疾きと漢字で書くから速くの意味が判然とする。

〔すぎ〕に続く〔のとを〕もよく判らん。ここは〔過ぎたるを〕とか〔過ぎけるを〕とか〔過ぎにしを〕ならよく判るのじゃが。

しかもとを戸と書いたテキストもある。これでは益々意味不明じゃ」

ピン太郎は太平に指摘されて始めて歌詞の意味も深く理解せず、お経を読むように歌っていた自分が恥ずかしくなった。

太平はなおも熱弁をふるった。

「二番の歌詞にも仮名の為意味不明のケ所がある。私も少し歌ってみよう。

とまるもゆくも　限りとて
かたみに思う　ちよろずの
心のはしを　ひとことに
さきくとばかり　歌うなり

一句目は〔留まる人も逝く人も〕つまり〔在校生も卒業生も、今日を限りとして〕の意味じゃろう。

二句目は形見であり千万じゃろう。

さて三句目がまた問題じゃ。〔心のはし〕とあるが、これが端なのか橋なのか。或は箸なのか嘴なのか、また別の字なのか判らん。

〔ひとこと　に〕も〔一言　に〕じゃとは思うが、もしそうなら、何故漢字で書かんのじゃ。

しかも仮に端が正しいとすれば、次に続く〔幸く〕と

しっくりせんのじゃ。

何故なら（私は心の端っぽで貴女の平穏無事を祈る）となり、可笑しな文章となってしまう。

この場合〔心の底〕とか〔心の裏〕、〔心の奥〕でならともかく〔心の端〕では、まったく誠実味に欠ける言葉使いとなる。

また謙遜して言うとするなら〔心の隅〕でじゃろう。

要するにじゃ、この歌詞は素晴らしい詩には違いないのじゃが、漢字と仮名の使い方が何としても腑に落ちんのじゃ。

さらにとを戸と表記した歌集が出廻っておるのも不可解で、私はある時国会図書館に行き当時の教科書に直接当ってみたことがあった。そこには戸と漢字で表記されているのを確認したのじゃ。

結論からいうと、何ケ所かを漢字で書けばいい所を態々仮名を使って意味を曖昧にしておる。

それが何故か、何か意図があるのかを足下に考えて貰いたいのじゃ。

先程の経済誌の誤りと、この『螢の光』の歌詞の要所に仮名を用いた理由、この二つが今日の宿題じゃ。さて私はこれから豊産自動車に行ってくる」

というなり、あたふたと出かけてしまった。

太平を見送り自席に戻ったピン太郎は、太平から手渡された経済誌を読んでみた。そこには次のような記事が載っていた。

「最近わが国の首相は、四代続けて一年余の短命に終った。阿倍晋三、福田康夫、麻生太郎、鳩山由紀夫とめまぐるしく交替した。

これには国民はもとより諸外国もあきれている。要は四人が四人とも宰相の器ではなかったといわざるを得ない。

しかし彼らとて若い頃は青雲の志を持ち、夫々名門の大学を螢雪の功成って卒業し、民間会社や海外留学を経たのち、政界入りを果たした。

四人が紆余曲折を経て首相のポストに迄登りつめたのには、それなりの苦労もあったろうしまた功績もあったには違いない。……」

ピン太郎は何度も読み返してみたが、どこが間違っているのか一向に判らなかった。

（やはり沼田美紀女史の智恵を借りるしかあるまい）と思いつつ彼女にダイアルした。

「外為資金室の沼田でございます」

「泉です。お早よう。実はまた頭取から難題を課されてしまった。助けてくれないか」

「いいわよ。お昼のお食事の後はどう」

「OK。では12時半に大食堂で待っている」

社員食堂は4階に大中小三ケ所に分散してあるのだが、大食堂の隈が却って空席が多く都合がいいのをピン

太郎は経験上知っていた。

「この記事中の或る語が、本来の意味から外れて使われていると頭取はおっしゃるのだが、皆目見当がつかない」

「どれどれ。ちょっと見せて頂戴」

美紀は素速く黙読した。

「判ったわよ。この螢雪の功よ。

この熟語は晋の正史である晋書に出てくる有名な逸話よ。

孫康は〔家貧しくて油無し。嘗つて雪を映して書を読む〕と猛勉強し、のち名宰相になった人。また車胤は〔夏、数十の螢火を練絹の袋に盛り、書を照らして読むこと夜を日に継ぐ〕と苦学し、のち善政を敷いて大臣になった人。

この二人に対して、この記事に登場する阿倍、福田、麻生、鳩山の四人共二世、三世議員だし、大金持ちのお坊ちゃんだわ。

学生時代からスポーツカーを乗り廻したり私費で英米の大学に留学したりした指折りの大資産家の息子たちばかりでしょ。

螢や雪の灯に頼らねばならなかった苦学生とは全然異なるわ。それに善政も敷いていない。

本来〔螢雪の功〕とは、学費はもとより生活費も自ら稼がねばならなかった苦学生を讃える言葉なのよ」

「なる程、よく判った。冷暖房の利いた個室でお金の心配なしに勉強出来た人に対して、幾らいい成績で卒業したとしても〔螢雪の功成って〕と褒めるのは、本来の意味からは間違っている。拡大解釈して使うにしても、この四人には無理だろう。苦学生でもなければ名宰相でもなかったのだから。

では次の問題『螢の光』の歌詞が一部漢字ではなく仮名で書かれていて、意味不明瞭になっていることを一体どう解釈すればいいのか。また〔すぎのとを〕とは、どういう意味なのか。〔心のはし〕のはしに該当する漢字は？」

と、ピン太郎はたたみかけて質問した。

美紀は美しい眉を顰め、しばらく思案に耽っていたが、やおらにっこり笑ってピン太郎に告げた。

「掛け詞よ。万葉集や源氏物語以来の伝統的修辞法だわ。

泉君は太田道灌に関する山吹の話しを知っているでしょ。簑を借りようとした道灌に対し、茅屋の女房が山吹の一枝を差し出した故事。

七重八重花は咲けども山吹の　みの一つだに無きぞ悲しき

これは簑と実のとを掛けた詞なの。だから漢字で書く

訳にいかなかった。仮名で書くから二つの意味を同時に表わせるのよ。つまり二つの意味を掛けるので〔掛け詞〕というの。

『螢の光』の歌詞で説明するわ。

〔いつしか年も過ぎ〕で一日切り、〔杉の戸を開けて〕と続き、更に〔明けてぞ今朝は　別れゆく〕と繋がるの。だから〔すぎ〕と〔あけて〕を仮名書きで、またとは戸と漢字としたのよ。

〔心のはし〕は〔心の緒〕と〔心の橋〕、〔ひとことに〕は〔一言に〕と〔人毎に〕を掛けた言葉だと思うわ。

口語訳してみると次のようになるかしら。

（私の心緒を一言で表わせば、お仕合せに！というだけで精一杯だし、友人ごとに架け渡した心の橋の繋りを友情の証とし、今はただご無事でね！と祈るのが精一杯で、幸く、幸くと繰り返し歌うだけ）」

「いやあ、お見事！　そう説明されるとこの私にもよく理解出来たよ。本当に有難う。感謝するよ」

大食堂の大時計が一時を指そうとしていた。

二人は大急ぎで夫々の職場に戻って行った。

平成二十三年四月二十一日（木）午前八時二十分

ピン太郎は太平頭取の出勤を今や遅しと待ちかまえていた。

役員専用エレベータのドアが開き、太平が威勢よく降りてきた。

「お早ようございます」

「うむ。お早よう。」

（ご機嫌は悪くないな）と感じつつピン太郎は昨日課された宿題の答えを一刻も速く太平に伝えたかった。

「早速ですが、昨日の宿題の正解が判りました」

「ほう。足下にしてはまたしても早いじゃないか。それとも沼田女史の手助けがあったのかな」

「ご名察。彼女に質問したところ快刀乱麻を断つ如く、見事な答えが得られました」

「それはよかった。さすが北京大学文学博士じゃ。そうじゃ、彼女を今ここへ呼んだらどうじゃ。久しぶりで黒木瞳の明眸にも逢ってみたいものじゃ」

「かしこまりました。ここへ来るよう電話してみましょう」

三分後、沼田美紀が颯爽と頭取室に表われた。一瞬、華やかな雰囲気が部屋を覆った。

「頭取、お早ようございます。お久しぶりでございます。何か美味しいコーヒーをご馳走して下さるとか……」

「そうじゃ。足下の活躍ぶりはいつも部長や常務から聞いておる。元気で何よりじゃ。またこの度は泉君に課した難題を、足下はたちどころに正解を出したそうじゃないか」

「畏れ入ります」

「答えは改めて聞かなくともいい。足下らが考えた通りじゃ。〔螢雪の功〕も〔すぎの戸を〕も〔心のはし〕も、漢籍の故事と掛け詞の修辞法を知っておれば簡単に正解に達するというものじゃ。

ところで、折角文学博士が来たのじゃからもう一つ難しい問題を出すとしよう。

ほかでもない

〔いつしか年も　すぎの戸を〕の戸についてじゃ。このくだりは、愈々卒業式の日が来て、学校を去る時が来た。

そこで戸を開けて出て行くのじゃが、詩としては戸より門の方がより相応しいと思わんかね。

つまりここは〔いつしか年も　すぎの門　あけてぞ今朝は　別れゆく〕と詠む方がベターと思うのじゃ。

そもそも門は学校のシンボルじゃ。名門という表現もある。入学時に最初にくぐる所だし、卒業時も最後に通る所じゃ。

校門は実際の建造物としても東大の赤門を始めとして立派に作ってある。少なくとも戸よりは詩として相応しいじゃろう」

「おっしゃる通り昔の学校には由緒あり気な立派な門があったように思います。それに名門とは言いますが名戸という表現はありません。どうして門と詠まなかったのでしょうか」

ピン太郎は母校である京都の鴨沂高校の門を想い浮かべた。ここは前身が府立第一高等女学校で、皇族の九條家の門を開校時に下賜されたと聞いたことがあった。校舎はその後鉄筋に建て替えられたが、門は昔のまま京都御所の東隣に今も風格ある姿で屹立している。

木造瓦屋根で建築されて以来三百年は経ていよう。府の重要文化財だとも聞いた。

沼田美紀も学生時代、友人を訪ねて奈良女子大学に行った時、杉材かどうかは判らないものの品格ある木造の門にしばし魅せられたことを想い出していた。京都、奈良は戦災を免がれた点が他の都市と違っていた。

（頭取のおっしゃる通り、戸より門の方がベターだわ。稲垣千穎さんは当時最高の文人、詩人といわれた人。その方が何故門と詠まず戸と詠まれたのかしら？）

しばし沈黙が続いた。意表を衝かれた質問に二人は答えに窮していた。

「お二人とも答えられないようじゃ。では宿題としておこう。

私はこれから銀行協会に行ってくる」

太平が足早やに出かけようとした。二人はエレベータ迄見送り、ドアが閉まると顔を見合せた。美紀はいつになく憂を含んだ表情を見せ、思案を巡らせているようであった。

平成二十三年四月二十二日（金）午前八時二十分

ピン太郎と美紀は頭取の出勤を今や遅しと待ち兼ねていた。

高層ビルの窓から見る皇居の緑がいっそう濃くなっていた。エレベータが着き太平が勢いよく降りてきた。

「お早ようございます」

「うむ。お早よう。今朝は二人お揃いでの出迎えか。いや、ご苦労ご苦労！

所で宿題は解けたかね」

「いえ、それがまったく判りません。さすがの沼田女史も今度ばかりはお手揚げのようです」

「では種を明かそう。うむ、先ず美味しいコーヒーを戴こうか。まあ入り給え」

といいつつ太平は、二人を頭取応接室に招じ入れ、やおら話し始めた。

「荘子に次の言葉がある。〔白駒　隙を過ぎる〕じゃ。隙とは戸板の隙間じゃ。

これは人生の短かさ、はかなさ、また時間の経過の速いことを嘆いた語じゃ。その速さを〔白い馬が、戸の隙間を駆け抜ける〕程のあっという瞬間に喩えて言った有名な句じゃ。

すなわち〔いつしか年も過ぎ、杉の戸を開けて、明けてぞ今朝は別れゆく〕と典故に準らえて歌うには、門では駄目なのじゃ。過ぎは戸にもかかる。

戸板の合せ目の僅かの隙間を早駆けの馬が過ぎるのは、門ではなく戸だったのじゃ」

美紀が大きな瞳を開いて太平を凝視した。

「よく判りました。門ではなく戸だったからこそ典故と結びつくのですね。まさに『名曲に潜む秘められた詩情』だわ。作詩者の稲垣千穎という方は大変な知識人で、漢籍をかくも詳細に読み尽くした文人、且つ詩人だったのですね」

「その通りじゃ。明治十年代といえば士族が没落させられた社会の混乱期じゃ。その頃これだけ漢籍に造詣深く、またわが国文学にも通じた文人がそう多くいたとは考えられん。そのうえ詩人となると更に限られてくる。

何度もいうが留別曲と送別曲とは一対を為す。では留別曲『仰げば尊し』の作詞者は誰か。

巷の説では、文部官僚で教育者でもあった伊澤修二説、大槻文彦説、更に里見義、加部巌夫合作説などがあるが、未だ文献上の確証は無い。

私は二つの歌詞の優れた内容や技法、豊富な漢籍の素養、忠実な文語文法の用法等から判断して、『仰げば尊し』の方もこの稲垣千穎が作詞したのではと考えておる。

この一対の詩には螢と雪が共通して詠まれておるのも暗示的じゃ。

私はこの仮説を裏付ける文献を探し出して証明しようと思うとる。

どうじゃね、沼田君。私を手伝ってはくれんかね。そして共同執筆の論文を京都大学に提出するのじゃ。ワッハッハ。

では経団連の会議に行ってくる」

というなりドアに向かって歩き出した。

二人は慌ててドアを開け太平を送り出した。

そして文人頭取の底知れぬ漢籍の知識や詩文の読解力の凄さに改めて感嘆し、しばし顔を見合せたまま沈黙するばかりであった。

突然美紀が長い髪をかき上げつつウィンクしながら叫んだ。

「私、絶対に探してみる。稲垣千穎さんが『仰げば尊し』の作詞者だったという動かぬ証拠となる文献を。

それには先ずスタミナを付けなきゃ。

スタミナ！スタミナ！　そうだ。

泉クン、今夜ステーキ食べに行こうか！」

（第六話　完）

バター・フィンガーズ

亜木陽一

わしは朝食にパンを二枚食べている。
いつものように朝食の食パンを二枚入れてオーブンレンジを付けた時、バターがなんと少量、一枚分しか残っていないことに気づいた。
婆さんが昨日バターを買って来るのを忘れた。
あわてたわしは、その小さなバターを半分に切って、パン一枚ずつに塗ろうと試みたが、大きいのと小さいのとの二つの不恰好なものになってしまった。
さらに小さい方のバターの一片が、食卓から落ちた。
ところが奇跡的に、落ちた小さいバターは、立ったまま床の上に無事着地した。
「婆さん！婆さん！」
「おじいさん、どうしたの？おじいさん！」
婆さんにバターが立ってるぞと教えると、
「不思議なこともあるねエ。わずか一ミリの厚さのバターが落ちたから、もうダメだと思ったのに、それが立っている」
驚いていた。
朝から茶柱が立つのは縁起がいいと言うが、朝からバターが立つのはどうだろう。
婆さんはあんなに細く切ったバターが立つのを見て、バターは粘着力があるからね、と言いながら、バターをよく観察して、
「床の上に立っているので、底の部分だけ切り取ればきたなくないから、安心して食べられるよ」
と言ったので、わしは大喜びで落ちたバターをパンに塗って食べた。

口紅（その二）

池莉　原作
山本勉　訳

〈登場人物〉
趙家の人々
・趙耀根（小説の主人公、江暁歌と結婚）
・趙耀虎（趙耀根の弟）
・趙耀珍（趙耀根の妹）
・趙耀根の母親
江家の人々
・江暁歌（小説の主人公、趙耀根と結婚）
・江暁鴎（江暁歌の弟）
・江暁暢（江暁歌の妹）
・沈鳳宜（江暁歌の母親）
趙耀根と江暁歌の友人
・寧岸

第二章　趙家と江家

（一）

沈鳳宜（江暁歌の母親）は蔑んだ目で、趙耀根の母親を眺めていた。二人は同じ世代だが、外見上の差は大きかった。
沈鳳宜はスカートを穿き、耳に揃え髪を短くカットしている。娘の江暁歌と一緒に町に出ると、きまって姉妹と間違えられる。しかし、趙耀根の母親の方は小太りで、動きが鈍く、白髪混じりで年寄りじみていた。
趙耀根の母親は口を開くと
「あんたは自分の娘にどういう躾をしているのかね。あの娘はいつも息子につきまとってる。その上、もうす

趙耀根の母親は、憎々しげに沈鳳宜の後ろ姿に唾を吐いた。彼女は絶対に、この女の娘が自分の息子の嫁になることなど許せなかった。

（二）

「趙耀根、私がお前を産み、三十年間育てた事を肝に銘じて、ここにお座りなさい」

趙耀根は、母親の前で片膝つくよりほかなかった。

「お母さん、一体どうしたんですか？」

「どうしたも何もお前が一番承知しているだろう。結婚するそうだね。お前の新居はもうすっかり片付いていると聞いたがね。お前の新居に、いつ招待してくれるんだい。婚礼の日取りは決まったのかね。お前のたった一人の母さんに知らせてくれないのかい？」

趙耀根は、秘密が漏れたことがわかり心中穏やかではなかった。

母親は怒りで声を震わせた。

「趙耀根、お前にとって母さんは、一体何なんだい」

くるりと背を向けると、今度は、趙耀虎（趙耀根の弟）のおでこを小突いて言った。

「まだ、ここに、もう一人いるよ。お前まで、親不孝者の一味になって、母さんをないがしろにして」

趙耀根は媚びるように、

ぐ結婚するって言うじゃないか」

と憎々しげに言った。

沈鳳宜は信じられず、気持ちを静めて言った。

「すぐっていつ？」

趙耀根の母親は、

「五四運動青年節だよ」

と言った。

沈鳳宜は驚いて、

「つまり、あと一週間ってことなの？何からかっているの。この縁談には賛成できないわ」

と言った。

「当たり前じゃない、うちもこの縁談に反対しているわ」

沈鳳宜はこの耳障りな話を一笑に付して、

「教えてくれて有り難いわ。私の娘に会って話をするわ。暁歌のような優秀な娘は、結婚相手を選ばなくてはならないってことをね」

「あんたの家の窓をしっかり閉めておいてちょうだい。男の尻を追いまわすような真似はさせないで」

と趙耀根の母親は言った。

沈鳳宜は、

「なんて失礼な。言葉は選んでほしいものだわ」

と言うと、趙耀根の母親一人を事務室に残して、出て行った。

「お母さん、気を静めて。どうか怒らないでください」

と言った。

「怒るに決まってるじゃないか。私は、死んだ方がましだよ。何故早々とあの世に逝っちまったんだいって。私一人を置き去りにして、本当に辛かったよ」

趙耀根の母親は、涙ながらに話した。

「三十五歳で後家になって十数年、お前達の食い扶持のためにどんな苦労も厭わなかったよ。大八車を引っ張り、廃品回収をし、靴磨きをし、アイスキャンディを売ったこともある。昼間は外で忙しくして、夕方帰ってくれば、紙の箱に糊付けしたり、ボタン穴をかがったり、刺繍したり・・・。何を好んでそうしてきたのか。お前達一人一人の成長は勿論、自分が少しでも向上することができれば、父さんにも顔向けできると思っていたからさ」

これには趙耀根も思わず悲しみが込み上げ、目頭が熱くなった。

母親の語気も、心持ち和らぎ始めた。

「趙耀根、お前は今年三十歳になったね。早く嫁をもらわなければいけない。母さんだって、早く孫をこの手に抱いてみたいよ。でも、お前は趙家の長男だよ。一人前の男として生まれ、聡明で能力があり、前途だってある。この家はお前を頼りにしているんだ。趙家のためにどんな嫁を探さなければならないのか、お前にもよくわかっているだろう」

趙耀根は、母との争いは無益であることがわかっていたので、うなだれて黙っているより仕方なかった。

「趙耀根、世の中の移り変わりは激しく、母さんもいろんな人を見てきた。あの江家は、れっきとした船長一家さ。私達趙家は祖先三代、埠頭の荷役労働者で、同じ階級じゃない。あの人達は、私達のことを町の乞食とでも思っているようだ。会ったって一瞥もしないよ。私達はまじめに、労働に頼って生活する労働者階級さ。何の理由があってあの人達に馬鹿にされなきゃいけないんだ。それに、江暁歌の母親はろくでもない女さ。娘の暁歌もしれたもんだよ。あいつらは私達を見下してる。だから私だって、絶対にそれ以上に奴らを見下してやるんだ。資産階級のいやらしい奴らをね」

趙耀根は押し黙ったままだ。

「これだけは言っておくよ。今日から五四運動青年節まで、仕事が終わったらすぐに家に帰ってくるんだ。お前がもし、時間通りに家に帰らなければ私は死んでやるよ。聞こえてるのかい？」

「わかったよ」

趙耀根は頭を上げて、母親をみたが、彼女の毅然とした態度に、調子をあわせるほかなかった。

（三）

江家の住まいは、景観が美しい外輪会社の宿舎だった。同じ頃、江家もまたひと揉めしていた。

沈鳳宜（江暁歌の母親）が食事を作ってテーブルに並べると、江暁暢（江暁歌の妹）は美味しそうに食べ出したが、沈鳳宜は、食べる気が起こらなかった。江暁暢は長いこと食べていたが、やっと母親の顔つきがおかしいことに気づき、箸をとめて訊いた。

「お母さん、どうしてご飯を食べないの」

沈鳳宜は暗い声で

「あの趙耀根の母親が大胆にも私の職場を訪ねて来て、ご丁寧に教えてくれたのよ。五四青年節に結婚するって」

と言った。

江暁暢は驚き興奮して、

「姉さんも思いきったわね。五四青年節に結婚するの？」

と言った。

沈鳳宜は、

「肝心な問題はまだそんなことじゃないの。もし暁歌が、趙耀根でなければ嫁に行かないと言うのなら、どうしようもないわ。愛情っていうのは、理屈じゃないからね」

江暁暢は、思わず母親を遮った。

「そうよ、そうよ。母さんの言う通りだと思うわ」

「横槍を入れないでちょうだい。私が話したいのは、とても重要なことなのよ。今肝心なのは、お父さんと相談できないことよ。お父さんが帰って来て、私を一生恨むことを恐れているのよ。何故か知ってる？お前に、重大な秘密を教えるわ。こんなに差し迫った状況の中で、私には相談できる人は誰もいないのよ。だから、お前にだけは打ち明けるわ」

「お母さん、早く言って。重大な秘密って何？」

母親とある秘密を共有できることがわかると、江暁暢は、興奮のあまり震えた。

沈鳳宜はしばらくためらっていたが、やっと口を開いた。

「暁歌は私の産んだ子じゃないのだよ」

江暁暢はあっけにとられて、しばらく口をきけなかった。江暁暢は、ようやく口を開いて、

「まさか。そんなはずないわ。それじゃ、私と弟は？」

「お前と弟は、私が産んだ子よ。暁歌は違う。彼女の生みの親は死んだのよ」

「死んだ？」

「暁歌の生みの親の死に方は、とても痛ましかったの。自殺よ。彼女は省の芸術学校の音楽家で一九五七年、右派というレッテルを貼られてしまったの。お前のお父さんは暁歌を引き取って、彼女と離婚したの。その後、彼

女は自殺したの」

「お父さんは、どうして、どうして、離婚なんてできたの。ひどすぎるわ」

「お前は軽はずみにどうしてお父さんを非難するの。あの時代の政治運動の残酷性がお前に理解できる？二人が離婚したのは、十分話し合ったことで、子供が一生家庭の政治の汚点を背負わないことを保証するためだったのよ。二人は暁歌を深く愛していたの。お父さんは、ずっと心を痛め続けてきたのよ。だからお前のお父さんと結婚する時、お父さんと約束したのよ。暁歌を、自分が産んだ他の子供と分け隔てせず、人一倍いたわることをね。さもなければ、彼は子供はいらないとまで、当時言ったのよ」

江暁暢は夢を見ているようだった。

「お母さん、まだ信じられないわ。これが本当の話だなんて思えないわ」

「暁歌の母親は遺書を残したの。お父さんに、暁歌の人生の重要な岐路には、とりわけ責任を持って遇して欲しいと託したの。特に、結婚に関しては、必ず彼女の外祖父と外祖母の許可を得なければならないの。だから、私は何をおいても、こんないい加減な結婚はやめさせなくてはならないの。すべては、お父さんが帰って来てからにしましょう」

「お父さんは遠くまで航海していて、直ぐに戻るのは難しいわ。暁歌姉さんの外祖父、外祖母に会いましょう」

「暁歌の外祖父と外祖母は、香港に定住していて、そんなに簡単に連絡を取り合うなんてできないのよ」

江暁暢は、居ても立ってもいられなくなり、

「どうしよう、お母さん」

と興奮して言った。

この秘密は、生まれつき、好奇心旺盛な彼女の心を十分刺激したのだった。

（四）

趙耀根は当然母親の言いなりにはならなかった。彼は江暁歌を愛していた。その上、彼らは事実上夫婦だった。江暁歌も心から望んでのことだった。このため、たとえどんなことになろうとも、趙耀根は江暁歌に対して責任を負わなければならなかった。

趙耀根は時間を見つけ、皆を引き連れ長江のほとりの新居に来ていた。結婚の日取りを繰り上げ、明日婚礼を行うことを決めた。

その最後の準備のために仲間の皆がせわしなく招待状を書いていると、母親がバタンとドアを蹴飛ばして入って来た。

趙耀虎（趙耀根の弟）はその顔も見ないで、

「ドアを開けるのに静かにできないのか。親の顔が見

たいもんだ」

と、怒鳴った。しかし、言い終わらないうちに、彼の後頭部はズシリと一発食らった。彼は、振り返って怒鳴ろうとしたが、目の前の母親を見て、とっさに息を呑み込んだ。そして、母親の背に隠れて苦笑いをしている妹の趙耀珍の姿が目に入った。

母親は寿衣（注8）を着て手には麻ヒモを持ち、暗い沈んだ顔をしていた。

（注8　死者に着せる着物）

「こん畜生ども」

と罵りながら、突き進み、婚礼道具をガラガラと地面に落とした。続けてベッドに上がり、念入りに仕立て上げた、刺繍を施した枕カバーと繻子の布団を思う存分踏みつけた。踏みつけながら、声を嗄らして叫んだ。

「耀根、出て来なさい。母さんの前に姿を見せなさい」

趙耀虎は仏頂面をして言った。

「兄さんは、いないよ。寧岸と買い物に行ったんだ」

丁度この時、趙耀根と寧岸がドアを押して入って来た。趙耀根は、目の前の光景を見て、絶望した。母親は、黙って、一本の麻紐を家の梁に掛けると輪を結び、自分の頭を突き出した。趙耀根はとっさに、やっとの思いで並んで買ったガラスの茶器を地面に投げ捨て、

「母さん！」

と一声叫んだ。

「動いちゃだめ」

と母親が怒鳴った。

「お前が来たら椅子を蹴飛ばすよ。私が死ぬところをお前に見せてやるよ」

寧岸は慌てて、趙耀虎と耀珍に向かって

「二人とも、何をしているんだ。お母さんがテーブルに上がっているのを黙って見てるなんて。何故、止めないんだ」

と叫んだ。

趙耀根は、地面一杯に散らばったガラスの破片の中にどすんと音を立てて跪いた。

「お母さん。何もそうまでしなくてもいいじゃないか」

母親は、

「耀根、お前の言い分も確かにわかるよ。だけど、私が腹を痛めて産んだ息子、苦労して、手塩に掛けて育て上げた息子が、こともあろうに、私に隠れてコソコソ結婚するだなんて、私に耐えられるとでも思っているのかい？私のために跪く必要はないよ。私に跪いた後、あの女ギツネに跪くに違いないさ。このろくでなし！母さんは、お前のためによかれ、趙家のためによかれとやってきた。そのことをお前は一体どれだけわかっているのかね」

と言った。

趙耀根は平伏して、哀願した。

「母さん、わかったから、まず降りて下さい」

「私は降りないよ。ここで死んでやる。きれいさっぱり死んでやる」

彼女は趙耀根を指して

「耀根、お前は母さんが『死ぬ』と脅しているとでも思っているだろう。そうじゃないよ。私は本当に死にたいんだ。お前があの女ギツネを嫁にしたら、母さんに死ねと言うのと同じことだ。母さんは、あの女ギツネのために苦労をしょいこむくらいなら、死んだ方がましさ」

と言った。

趙耀珍は、

「母さん、暁歌はとてもいい人よ。兄さんはもうすぐ三十歳になるのよ。みんな焦っているのよ」

と慌てて言った。

「ばかを言うんじゃないよ。焦ってるだって？だからって母さんを騙していいのかね。焦るとあの女ギツネを嫁にすることになるよ。隣近所にもいい子はいるよ。香香、漢華、五枡・・・、どの娘も汪暁歌よりよっぽどましだよ。どの娘もお前に取り入ろうとするよ。あの娘達は、毎日母さんの仕事を手伝いに来てくれるはずさ。おまるでさえ先を争ってしっかり洗うだろうよ。こんなに気立てのいい娘さんがうちに来てくれたら、こんな幸せなことはないよ。あの女ギツネときたら、挨拶もろくにしない、もったいぶって話もしない。あんな貧弱な身体じゃ、子供に恵まれるかどうか怪しいもんだね。こん畜生、お前達は母さんを死に追いやりたいんだ」

「わかったよ。僕が間違っていたよ。母さんが降りてくれたら、何でも相談するよ」

「相談？まだ何か相談することがあるのかい？今日、お前が返事さえしてくれればいいのさ。彼女を取るか、お母さんを取るかどっちかね？」

趙耀根はゆっくり立ち上がった。

「母さん、バカの一つ覚えはやめて下さい。耀虎と耀珍はここにいます。寧岸達もいます。彼らは皆、私の証人です。私、趙耀根は今日毛主席に向かって約束します。将来、私の妻は、必ず親孝行し、お年寄りの面倒を見て、弟妹を大切にします。もし、私の妻が徳もなく、孝行しないなら、私は自ら彼女を追い出します。しかし、私が誰を嫁にして、妻にするかは私自身の事であり、母さん、あなたが私に強要することは、できません」

寧岸は機に乗じて、母親をなだめた。

趙耀根の母親は唾を飛ばして、

「ばか言うんじゃない」

と言った。

すると、趙耀根は絶望して、くるりと向きを変えて厨房に入って行き、研ぎ澄まされた、切っ先が鋭利な包丁を手に持って戻って来た。彼は断固として言った。

「母さんが、それでも死ぬと言うのなら、今から僕は

血管を切って、母さんの目の前で死にます」
趙耀珍は、驚きのあまり泣き出した
趙耀虎は、緊張してどうしたらよいか判断がつかなかった。寧岸は前に出て、包丁を奪う機会を窺っていた。不意に趙耀根は包丁を引いた。一筋の鮮血が、彼の手首から流れた。
母親は、
「耀根」
と叫び、どすんとテーブルの上から転げ落ちた。

（五）

沈鳳宜は、門を閉めて、ドアをそっと閉じ、カーテンを引いた。そして、明かりをつけて、やっと一息入れ子供達と向かい合った。
母親の行動が、こんなにもったいつけているのは一体どういうことなのか。江暁鴎はいささかうんざりしていた。
「話があるならさっさと言ってくれよ」
沈鳳宜は、
「暁鴎（江暁歌の弟）、座りなさい。私は、大事な話があるのよ」
と言った。
母親の真剣さに圧倒され、いい加減な態度をしていた江暁鴎もかしこまって席に着いた。彼の視線が江暁歌と合うと、母親が言いたいことをお互いに悟った。
沈鳳宜は、暫く黙っていたが、言葉を選んで話を始めた。
「暁歌、暁鴎、暁暢、お前達に話があるの。これは、本来、お父さんと相談した上でお前達に言うべきことなの。本来は父親の口から言わなければならないこと。けれど、今から私が代わりに話をさせてもらうわ」
母親の口ぶりの慎重さと重々しさは、江暁歌の心の中を混乱させた。母親は、目を上げて江暁暢を見た。彼女も母親と目が合った。彼女は、すぐに、母親が何を言いたいのか推測できた。
「暁歌、お前は、五四運動青年節の日に、こっそり結婚するつもりだったの」
何だ、やっぱり母親はこのことを聞きたかったのだ。
江暁歌は、心中ホッとした。趙耀根は秘密を守ると言ったのではなかったかと心の中で呟いた。彼女が、江暁鴎をチラッと見ると、江暁鴎は敏感に感じ取って、手を横に振って言った。
「僕は関係ないよ。僕の口は堅いんだから」
江暁暢は、
「あなたが、もし口が堅いのなら、世界はとても平和だわ」
と皮肉った。

沈鳳宜は、
「このことは、家族が告げ口したんじゃないの。趙家で、噂を至る所に漏らしているのよ。趙耀根の母親が、私の勤めている役所に喚き立てに来たのよ。本当にじゃじゃ馬で、つまらない人だわ」
と冷ややかに言った。
江暁暢は、
「あの人は役所へ来て、お母さんの立場を悪くしたでしょう」
と言った。
江暁歌は、
「お母さんに悪影響を及ぼさないかしら」
と恐る恐る言った。
沈鳳宜は、
「別段たいしたこともないのよ。役所の同僚は、私のことをわかってくれているからね。ただ、このようなことは、二度とあってはならないわ。趙耀根に、もう二度とこのようなことを起こしてもらいたくないと言っておいて。実にくだらないことだわ。自分の子供のことだけを構っていればいいのに、役所まで来て何を騒ぎ立てるのかしら。うんざりだわ。暁歌、お前はまだ、私に報告していないね。お前達は、本当に、五四運動青年節に結婚するつもりなの。もう少し、考えたらどうなんだい」
と手を横に振って言った。
江暁歌は、頭を低くうまだれ、心も乱れていたので、とっさに返事ができなかった。
「私は、古いしきたりや考えを押しつけたくないのよ。でもね、趙耀根の母親の態度ときたら、これ以上我慢できないわ。典型的な小市民で、無骨で低俗、腹黒くて狡猾、文化も教養もあったもんじゃないわ。ほんとうにこんな家に嫁に行って、これから先、終わりのない苦労をしなければならないのよ。お前は、よく考えてから決めるんだね」
「そうよ、姉さん、趙耀根は、職場の共産主義青年団委員会の書記で、人物的には優れているけれど、あの人の家はひどすぎるわ。姉さんが嫁いで行けば、まるで、羊が、危険な場所に入るようなものだわ」
沈鳳宜は、
「趙耀根に何の教養があるって言うの。この親にしてこの子ありね。私には見識があるから、お前達がわからなくても、ちゃんと見分けられるのよ。趙耀根の腹には、埒頭のならず者の匂いが奥深く隠されているのよ。それは、彼が共産主義青年団委員会の書記になっても変えることはできないのよ。寧岸も趙耀根もお前達の友人だけれど、あの二人は随分と違うわ。寧岸の外見は端正で、読書家の気品や風格がにじみ出ているわ。それに、彼の日頃の話し方や仕事ぶりを見れば、知識分子の家庭出身であることがわかるわ。今、社会情勢には変化が起きて

いて、労働者階級はあまり歓迎されていないようよ。知識分子の地位が高まっているわ。新華書店では、有名な文学作品を買う人が列をなしているわ。趙耀根の育ちを考えると、お前の選択は検討すべきだと思うわ」

と言った。

江暁暢は、

「寧岸は、勿論趙耀根と違うわ」

と言った。

沈鳳宜は、ひたすら悲しみ、ため息をついて

「暁歌、お前と寧岸は随分と前から知り合いで、その上とても良い友達なのに、何故、最初から寧岸のことを考えなかったのかい」

と言った。

江暁歌は、これに答える術もなく、深々とうなだれた。

沈鳳宜は、黙って江暁歌を見ていた。彼女は、自分の娘の外見は楚々としているが、内面は頑なで、芯の強い性格であることをよくわかっていた。彼女は、暫く話をしていたが、やはり、本来なら暁歌の父親が言わなければならない話を口に出したくなかった。しかし、今、彼女はこのタイミングを逃すことはできないと思った。そうでもしなければ、江暁歌を、本当にあんな家庭に嫁がせることになってしまう。そんなことになれば、彼女はどうやって、海を隔てた遠いところにいる夫に、顔向けができるだろうか。

沈鳳宜は、

「暁歌」

と言って、慎重に話しかけた。

「今の時代は、自由に恋愛をすることを勧めている。結婚は、自分の意思で決められる。私には、お前達の結婚に反対する権利は何もないわ。ただ、私は、お前達がそんなに慌てて結婚しなくてもいいと思っているのよ。そうすれば、お前のお父さんの意見を聞くこともできるし、顔向けもできるのよ。そうでなければ、お父さんは、私を一生恨むわ。私には、これ以上お前に隠すことができない訳があるのよ」

江暁歌は、緊張し始めた。謎が、遂に解き明かされようとしていた。

江暁暢は、もう一度姉を見たが、彼女は顔色が蒼白く、緊張して興奮していた。彼女は、謎を知った後の姉の反応に興味津々だった。

江暁鴎は口元を歪め、母親が、世間を驚かす謎を隠し持っていることを信じようとしなかった。

彼は、母親がわざと訳のわからないことを言って、人を煙に巻くことに、強い反感を持っていた。

沈鳳宜は、

「暁歌」

と言った。

「私は、あなたの本当の母親じゃないのよ。暁暢と暁鴎は異母兄弟の妹と弟なのよ」

この話に、驚きのあまり、江暁歌は、あっけにとられてしまった。彼女は、二十数年、同じ屋根の下に暮らし、無償の愛を注いでくれた母親が、自分の生みの親ではないとは、思ってもみなかった。

彼女は、この事実にとっさに反応できず、ポカンとしてしまった。

江暁鴎は、驚きのあまり飛び上がった。

「お母さんは、姉さんが結婚するのを認めたくないために、話をでっち上げたんだ」

「愚か者、こんな話をどうしてでっち上げることができるのよ。できっこないじゃないの」

江暁暢は言った。

「暁鴎、あなたって本当に間抜けね。お母さんの話が、ウソだって言うの？姉さんと私達は、異母兄弟なのよ。姉さんには、私達の他に、おじいちゃんとおばあちゃんが香港にいるのよ。姉さんの生みの親は、遺書を残しているわ。お父さんに、姉さんの秘密を知ってしまったことを話しましょう。それに、姉さんの結婚のこともね。そして、おじいちゃんとおばあちゃんに良い方法を講じてもらうのよ。今、お父さんは遙か遠くまで航海しているから、私達は、自由に連絡を取ることもできないのよ。お母さんは、本当に困っているのよ」

沈鳳宜は、ハンカチで涙を拭った。

江暁鴎は口を大きく開けて、一言も話すことができなかった。

江暁歌は、突然、思わず甲高い声で叫んだ。

「みんな、お願いだから出て行って」

沈鳳宜はポカンとしたが、直ぐに理解して立ち上がり、外へ出て行った。江暁暢と江暁鴎も、母親の後に続いた。いかなる人でも、これが受け入れ難い話であることを理解していた。

江暁歌は、部屋のドアを閉めると、涙が怒濤の如く溢れ出てきた。

（つづく）

陰翳の美学（物象の二面性）

外山知

私たちの見る物象は、二面性をもつ。およそ現象世界にしても精神世界でも、光輝と陰翳の二面性をもって現れる。

すべて、この二面性が美学となって現れる時、私達の意識的世界に、かく有った、と言う現象的な物の光を見る。

自然世界に現れる陰翳の美は、印象絵画に見るように、刻々と変化の諸相を極めつくし、私たちの感情を潤してくれる。

美的生活の向上は、文化の基点にもなる。私たちの思惟的世界に写る美は、表面的には光り輝く分野である。

しかしそれを支える陰の存在があってこそ、美を美たらしめる深層心理に映えてくるのである。

自然に象徴される美に対して、対象的に人工美は人間の英知を育くむ。芸術の世界に陰翳を作る心象描写に端を発する。

例えば、華道の世界では、自然を人知によって加工し、オブジェの世界として印象派的世界を構築化してゆくが、そこに翳の部分を垣間見る。

私が今、陰翳の美学の全体像を眺め見る時に、かゝる基本的な思惟がすべてに先行することを、先ず以て考えなければならない。

それを基本に見ていくと、すべての事象に該当するように思われるのである。

私達の思惟的な内在世界にも、形而上的また形而下学分野にまたがっての文化にいどむことが、私の説く陰翳の美学の基幹と考えてよい。

従ってすべての物象世界に見る、光影の美学の端緒はそこにあると解すれば、他分野への広がりにも理解出来ると思う。

これは多方面的分野にまたがる事になると思われるが、基本的には、哲学者の言説を借りればこの「二面性の止揚」にあろうということに帰着するであろう。

物象の二面性は陰翳の美を引出す要因をもつ。また根本的理念もこゝにある。これを踏まえて次のような諸点から全体像にせまって見ようと思う。

日本人の美意識
美意識に見る陰翳（中世日本人の精神構造）
美を構成する要素
美と非美の論理
陰翳の美学
美的象徴
美の諸形態
美意識と美学の間に
作り作られるもの
磨くこと
美の連鎖
自然美
美の根源
人知と美意識
神経細胞にまつわるクオリア
流動の美

以上の諸点であるが、いずれも陰翳の美学と言うことになろう。美的理念の思惟を除いては、物の本質を生み出す、歴史的経緯にその背景を察知して、陰翳の美をさぐって見る手法を取った。

二面性を意識することに、その動機が介在する。視聴覚的な働き、つまり脳の作用によって意識の啓発となる。

物象に対するこの働きこそ形而上、下学の発想で、極小なものから極大へと、その分野は開けてくる。二、三の点について、諸感を記してみる。

一、自然美

自然美など、物象に向かって私達の視神経が作用する時、脳神経で意識を呼び起し、物象が何であるか、またどんな採光で、どんな二面性をもち、私達にせまり来るか、その往復回路が美の深淵に蘇って来る。

かぎりなく美的なものは、他面陰翳の美に調和して見事な調和美を顕現する。

よく引用するが、「ソロモンの栄華は、野に咲ける白百合にしかず。」まさに自然美を譬えるにためらいはなかろう。

その白百合も陰翳の美ありて、花にこの上ない美意識を燃やし得る。野の雑草の中に自分を強調するかのような響きが作用する。

これあってソロモン王の栄華にも負けない深みのある要素にもなり得る。自然に取材するからには、対自然と人のかゝわりを二、三考察して見る。

例えば木漏れ日の美学、雨後の自然世界、リアス式海岸と河岸段丘、砂丘の風紋、これらは「まんじ」の継続

投稿の中で論述予定である。

たゞいずれにしても自然世間に私達が如何に対処するかによって、陰翳の美を醸し出す、その場、その場所によって美を浮上させるエネルギーを持つ。

例示したものは、いずれも新鮮さの中に、目映いばかりの輝きを持つ。

またその場を取り持つ環境によって、その美が映え陰翳の深さが感じられる。

木漏れ日の美にしても、言いしれぬ環境的要素が持つ美を感じ得よう。雨後の自然世界、リアス式海岸と河岸段丘、砂丘の風紋にしても、それぞれの持つ情緒性によって顕現される。

すなわち、人の持つイメージ、心象表現が美を形成させる。

かくの如く陰翳の美は、私達の日常にあって、私達によって作り作られる。

砂丘の風紋などを思い起こせば、自然の風土性が環境を変え、私達の意識を変える。これも美の要因のつかみ所である。

私達は自然を愛し、憧れもする。限られた世界にその風土性を生かし、生活環境を整えて行く、そんな中に美を愛し美と共に生きる。

時には生活を浄化させ、生活環境を創造もする。

二、人知と美意識

およそ美的構成は二面性を持つと言っているが、二面性の発見は人知である。それは美意識を育くむ、人知の働きである。

人はなぜ美を感ずるか。こゝにも二面性があって非美の領域を意識する、非美ありて美を知る。

人知の意識は美か、非美か。意識過程としては美ありて非美か、いや同時作用か、私達は意識の世界があって感覚を誘発する。

美的感覚は意識する働きを通して美を認識する。すなわち認識 Erkenntnis (独) は、物事を知る働き、および、その内容両者を指す。

従って人知と言っても、単なる知りえた成果を指すにとどまらず、より深い知る作用と内容成果の二面性を美意識の顕現と考えたい。

私達は常に心的状況の中に、さきの意識を持つ。そこにまた一つの美意識が蘇える。私達は内なる心の働きにときめきを感ずる。

美的情緒は愛の心にも通ずる。Eros ギリシア神話の愛の神に由来するが、愛は欠けたものへの渇望が、その本質である。

プラトンは肉欲から始まり愛の上昇段階と説き、最高の純粋な愛は美のイデアに対するあこがれと説く。

またフロイトの精神分析では生の本能を指すとする。

従って美は愛でもあり、愛は美を育くむ。

私達が感覚を通して経験する心的現象、即ち、視聴覚、味、嗅覚、皮膚、運動感覚、平衡、内蔵感覚などの諸機能が働いて、外界の対象の性質、形態、関係の状態を美として捉える。

認識作用これは、私達の英知にほかならない。美意識のなせる技と言ってよい。従って美的形成は感覚的愛によって誘発される。

形而上学的な認識作用によって美意識がかもし出され、私の愛着をさそう。

たしかに形而下学の世界でも美を解し得ようが、少なくとも私達にふれる世界で、感性がよびさまされ、心の働きである感覚、知覚に対して、内面的な精神活動によって私のものとして美を愛(いと)をしむ。

たゞ人間的欲望は限りなく美の連鎖を意識し、より高次の美、愛をもとむる。極限の美はなく前進するのが、或は人間的美の探究かも知れない。

形而下学美もまた同様で、限りない連鎖の美は愛と共に意識界に迫まりくる。

論理に負の論理がある如く、限りない美の連鎖にも非美の世界が現れ、陰翳の美を存続させる。月に満ち欠けが生ずるが如く、美の連鎖もまたかくの如し。

三、人知と美意識

私達は自然環境に包まれた中に、如何に美を育くみ、生活に潤をもつか。これは人知の発達と共に美へのあこがれでもある。

私達の生活の中に美を取り入れる思惟、これから出発する意識の中で色の感覚に目覚め色調によって、類型を分類することも楽しみの一つとして取り行なわれる。

朝・夕の太陽を受けての生活の始め、夕方一日の祈りを終え家路に帰る。ごく自然な風情が見られ、物象の二面性が見られる。

これは一片の絵画を創造もする事が出来る。私達の生活中に顕現される、色彩美を導入することも可能だ。

そうした生活が四季に色どられ、その変転が、それぞれの生活を色どり美を添える。美の形成は生活向上化、文化吸収にもつらなる。

一つの美の発見は次々にその色を濃くし、美的生活、礼讃にも及ぶ。生活に役立つもの、思考、創造は芸術にも向上化する。

思えばその繰返によって積上げられたものは光をはなち、芸術にも発展しよう。単純なものを積み重ね、大きな成果を蓄積する。

生活の発展は芸、巧みの技を生む。古来から生活の発展に、芸術、文化を創造する。

考えて見れば、かゝる一連の繋がりから美を想起する。

たとえ、それが小さな美であっても私達にとって無二の存在かも知れない。

そのような卑近な物象が掛替えのないものとなって、私達の存在を時と共に変化させて行く、これも人間の英知の一端である。

多情豊かな感性に見まもられて、生活の中に潤いを持ち文化を慈しむ。これもまた形而上的、形而下学的美を思う。

たとえ小石のような素石でも、「細石の巌となりて」（万葉歌）とあるように、長い年月を閲するうちに、貴石を生みだす。

宝石も錬磨によって、「玉磨かざれば器をなさず」磨くことは美形成の一助とも言える。

例へば鍾乳石が石灰洞で、炭酸カルシウムを溶かして流れ滴り落ちる時に沈殿したもので、何万年、何億年の歳月がしづくとなって、積り重なり形成されたもので、自然のなす想像もつかないものである。

この天然の美、これも人間の手によって言い知れぬ輝ける宝石を生みだす。

悠久な歴史を閲する中で陰翳の美を形成する過程は、「小よく大をなす」奇蹟がある事を感ずる。

海底の珊瑚礁サンゴ虫の群体の石灰質骨格と石灰藻とが堆積して生じた岩礁で形状によって、裾礁、堡礁、環礁などあるとか言うが、これもまた陰翳の美のなせる形成と言ってよい。

私達は自然の作りなせる貴重な美を、大切に保存する所に感性の響を誘う。日常性の美化は、生活をよりよく育くんで行く過程に、潤を思考によって導入する。

そして英知を、たゆみない経験と試行錯誤の中で、自から磨き上げ作りなす技を体験していった。

その結果の効果と言ってよい。

四、陰翳の美学と現在

およそ物象は二面性からなると論攷し来たった。たしかに二面性を抱え持つが濃淡いずれかを所持して、芸道に花を咲きそめるか、日常性の美学を論評して来た。

そこから一歩出れば、やんごとなき世界も垣間見得よう。かって、はなやかだった貴族社会も、栄華の夢で、その廃墟の跡も今は草原となっている。

また昔廃墟だった所に、高層ビルが連立し、近代化を我が物顔にほこっている所もあろう。

時空間の占める広がりは、私達人知にも言えよう。時めき栄える、その背面には、陰翳のなす美が存在する。

それがまた限りなく美を引き立てる「栄枯盛衰は世の常」、大きな観点から見れば、これもまた陰翳の美か。歳月の流転と人との関係、四季の美は同時に私達にも蘇って来る。

環境に適応し、その中に美を育むことは、私達の感性であり英知でもある。たゞ時としてこのような構成作用に逆らって美はおろか文化まで壊滅させてしまう。

また殺戮はまことに遺憾である。かゝる反逆的行為を断ち切ることが、平和共存、美的繁栄に不可欠である。

古代ギリシアのアポロンの神殿の栄華も、今はむなしく国家存亡の危機的状況にある。世界経済の不況は地球をかけめぐっている。

経済の立直しを速やかにする時こそ、相互協調が必備であると思う。

地球浄化を叫びCO_2の削減計画を立案している時、気温の上昇で四十五度Cの熱風に多くの人間が死においやられている。

ミャンマーの風土性は目を被うものがある。かゝる危機的状況に手をさしのべる人的愛を、一刻も早く窮余の策としなければならない。

異常気象といって手を拱いている段階ではない。また二〇〇七年から続く、イスラエルのパレスチナ自治区（ガザ地区）の暴力封鎖。

八年末三週間続いた、イスラエルのガザ攻撃で、民間人を含む一四〇〇人以上のパレスチナ人が死亡している。

そして、こんどの暴力と流血の連鎖は、人道支援をするトルコ及び欧州の民間人、人権活動家九名死亡、その他多数の負傷者に、国連安保理の議長声明で、迅速に国際ルールを守り封鎖を解くよう要請している。

身近に韓国の哨戒艦問題で、日米韓を中心に北朝鮮を包囲する戦略をと、世界を驚愕させる方向性が核拡散につらなる恐怖に包まれている。

そんな中にも、美の交換、ボストン美術館展など、六本木に開催されていたことは頼もしい。

かゝる世界的危機状況の中にも陰翳の美を、育くむ過程を育てゝ行く、環境エネルギー構築に意欲を注ぐことは、平和共存にも大きく貢献することであろう。

たとえ小さな芽であろうと、それが場合によっては世界を支配することにもなる。

はるかな美、愛を夢みて、その一歩は尊い。現在が余りに危機的な状況下におかれ、一発触発の危機をはらんでいる中で、平和を呼ぶ陰翳の美学こそ掛替えのない物と思う。

平和への一石は、何ものにも変えがたい存在だ。輝やく美・愛の讃歌は世界的な危機をも救う力を持つことを、世界に向かって情報提供することが不可欠である。

五、美は感情の発露か

およそ、美は感情の誘発によって意識される。心的な情緒をともなって、知、情、意の情的過程全般に現れ、情動、気分、情操などが含まれる。

「快い」「美しい」「感じが悪い」など、主体が、状況

や対象に対する態度、価値づけなどの心的作用によって美を感じる。

よく感情が豊かとか言われるが、それは心的過程に感情を誘発する環境が豊かに作用するからと思う。

私達の感性にふれる様々な認識作用が形成されるには、対象する美的要素が身辺に散見されることもあろう。

美意識は、美を求め美を分析する力を持つ。それが適否を問わず、より美しさを求めて、心に響きあう物を求め感覚構成をする。

限りなく体験を通して結ばれる美は、前述にもなしたように非美なる世界も内に秘め、より深き美的心情にいざなう心情を形成するのが、私達の常といってよい。

勿論、前攷の美は愛を呼び、愛は美を相互作用の中により高い認識作用を礎いて行く。感性の響きあう形而上的世界に美意識もめざめ陰翳の美学を感じ得よう。

勿論、科学する自然世界を対象とする形而下学的認識世界で、美の世界を垣間見ることも出来よう。

今求めてやまない第二、第三の美的世界観も実験解析に磨をほどこすことによって、無限の美的物象を作り得よう。

ICの極小の世界美から始まった諸科学は、インターネット器械、ソフトウェアーの器械を内蔵するパソコン、携帯電話など、私達の日常生活に不可欠な美的器械の利用、これは形而下学的美と呼んでよい。

バイオテクノロジーのバイオ（bio）はギリシア語で生命の意で、ビオス（bios）から生物体、生体など、新しい微生物分野の美をさす。

さらに昨今の医療分野の内視鏡治療、CT、MRI、PET、陽電子放射線断層撮影など、また現代企業の基本となっている人間代行のロボット機器、ロボットによるオーケストラ音響世界へと、その広大化は果てを知らない。

現代科学の最先端を行く科学万能の世にあって、陰翳の美学の二面性は、こんな所にまで及んでいる。

一本の葦で、考える思惟の人間は、小惑星探査機「はやぶさ」を、二〇〇三年五月、鹿児島の内之浦から、太陽系の謎を解く使命を持ち打上げ、05年に世界未踏の小惑星へ到着。

「はやぶさ」（イトカワ）は、表面の砂を持ち帰る、月面調査などを、エンジン故障中、姿勢制御装置の不具合のコントロール調整等、悪戦苦闘を乗り越え奇跡の帰還燃焼をなした。

五ヶ月後、研究者達で隕石と同種の「かんらん石」の微粒子、約一五〇〇個をカプセルから採取し得たと、（二〇一〇、十一、十六）放送があった。

朝日東京版十一月十七日の、資料によると、カプセル内から発見された、多くを占めた「かんらん石」と輝石の成分だった。

最終的な決め手となったのは、微粒子の中に硫化鉄の一種が見つかったことである。

今後、さらに詳しい分析に入る。研究者達は、わずか0．01ミリほどの粒子を薄くスライスして結晶構造を顕微鏡で観察したり、兵庫にある大型放射光施設「スプリング8」で3次元構造を調べるそうだ。

宇宙線などによって結晶が変化する「宇宙風化」も見られ「イトカワ」は太陽の誕生したころに出来た姿をとどめている。いわば、「太陽の化石」のような存在と解している。

かゝる人間科学の美は感情の生み出した勝利と言って過言ではない。

六　陰翳の美学

およそ陰翳の美は、物象の二面相にふれ、その物の本性に滲み出る、うすぐらいかげで、平板でなく深みのある感情などの微細な差異による。

例えば色、音、調子、意味、感情などの、陰翳、濃淡の美が本来の性質、天性にはあって、物象の深さを作り得る。

私達を包む環境の中にも二面性が存在する。自然現象の中に、気温を包む感覚、寒暖の変化を身に受け、その調節を意識して、人間生存に供している。

例えば、朝日新聞、生活欄に「夏山の低体温症を防ぐには」の紹介があった。体温が三十五度C以下になると低体温症で、三十四度Cを下回ると、命に危険状況を及ぼすという。

たゞ体温と言っても脳や心臓、肺など体の重要な臓器が入る中心部分の温度を言う。

体の中心部は不断約三十七度を保つようになっている。体温が下がると全身の筋肉が縮んで震えを起こし、熱を生みだそうとする。

それでも追いつかない程、体が冷えすぎると低体温症になると、金田正樹医師は、昨年北海道大雪山系遭難事故を取り上げ解説している。

環境適応に対処する二面性を持って生活することが必要である。こゝにも陰翳の美を育くみ、その美的生活が如何に不可欠かを知り得る。

人間の英知はかゝる単純な感性を自からの経験によって生み出し、今日的領域まで進展してきた。素朴な一つ一つの経験の積重ねが、今の領域を開いていると言える。

夏山登山もさることながら、生活に余裕が出来ると対人的に、また如何にしたら、よりよい生活環境を育くむか、英知がほとばしる。

芸術世界は前攷に論述したが、その道に精魂をかたむけ、たゞひたすら道の為に精進を尽した芸術家に贈られる、人間国宝（重要無形文化財）。

現在、芸能・工芸技術定員各五十八人の一一六人で、

工芸技術の分野で、一年間に約五人死亡。今回その五人に新しく文化審答申がされる。

うすものなど、伝統的な織物技法「紋紗」を高度に体得した、岐阜県関市の土屋順紀(56)、岐阜県多治見市の漆黒の焼き物、「瀬戸黒」で加藤孝造(75)。

「友禅」の金沢市の二塚長生(63)、「蒔絵」の石川県野々市町の中野孝一(63)、金属を金づちなどで打って器をつくる「鍛金」の新潟県燕市の玉川宣夫(68)、の五人が対象となる。

その補欠者を、さらなる技の錬磨向上、伝承者養成に資するよう、文化審議会長西原鈴子会長から文部科学相に認定するよう答申した。

この道発展の為すばらしい事と思う。(二〇一〇、七、十六)

今後この五人の人間国宝の人々の活躍が、新たな技術を育くみ、より深みのある物象を形作って行く中に、連綿と続く文化芸術の伝承は新しい陰翳の美を生み、人類貢献に資するものと高く評価してよい。

その道に打込む姿勢は、絶ゆることなく炎を燃やし、益々冴を見い出すことを確信する。芸の道は長し、行く先々で挫折もあろう。

然し挫折感を乗り越えて、新たな道をさぐるAの道で駄目なら、B、Cの道を、さらに納得が得られなければ、最初に立返って方法を替えて挑戦する。

続けている中に何かしら新しいものを得る。それをヒントとして構築を考えて見る。意外な所に新しい角度が整い、これだと思う道が開けてくる。

紫綬褒章に輝やく世界は、容易に得られない。日々辛苦の連続の結果であろう。それでも自分に満足のゆく物を作る所までは、研鑽辛苦の過程、これぞ神技の技法への接近と言ってよい。

もちろん、人間は有限に生きる者、神技たるとは言え、所詮絶体なるものとは言いがたい。しかし、それに近い者に到達する。これを神技と言ってよい。

私達が生きとし生ける世界において、かゝる芸道は後世へと伝承されて行く。その意に於いて、今回五人の人間国宝の選進は尊いこと、言ってよい。

されど言行一致の功は得がたい。前に辛苦の連続があって、その道極め難いことが、現実となって顕現した。

私は陰翳の美学の全体像として、物象の二面性から解き陰翳の美を、垣間見ることに終始してきた。今あらためて美学とは、何か。

本来の性情は、este tique (仏) にある。中江兆民の日訳語は審美学で、自然、芸術に於ける美の本質や構造を解明する学で、美的現象一般を対象とする。

また美しさに関する、独特の価値観を持つ。例えば「引き際の美」とよく言われるが、こんな所にも陰翳の美学が情緒をよびさます。

有朋の詩

太田精一

(一)

みちのくにも春がすぐそこまで来ている。

伸一は、仙台に着くとすぐ長町にある東北大学有朋寮に向かった。昭和三十二年四月、入学式の一週間前である。有朋寮の寮名は、論語の「学而第一」言行録「朋あり、遠方より来る、また楽しからずや」から引用し、命名された。

東北大学の寮は、どれも完全自治寮である。先輩の寮生が、新入寮生を選び、入寮を許可する。選考基準は、困窮度の高い順に優先される。伸一の優先順位は高く、すぐ入寮が決まった。

伸一は、入寮した翌日からアルバイトを始めた。実家からの仕送りのない伸一は、まず生活資金を確保しなければならない。東一番町でのチラシ配り、サンドイッチマン、ダイレクトメールの宛名書き、時には売血も行った。

入学式は、四月十六日午前十時体育館で行われた。

「世界の日本としての自覚を持って、学習と研究に当ってほしい」

高橋学長の言葉は、伸一の多感な心に響き、その後の生き方に大きな影響をもたらした。

念願の入学を果たした伸一は、なけなしの金をはたいて角帽を買った。だが、入学式の日を除いて、被ることはなかった。昭和三十二年ともなると大学生の間には、社会のエリート的な存在を誇示するような角帽を被るという習慣は薄くなって来ていたのである。また、伸一にしても自分が、選ばれた人間であることをひけらかすようで、何となく面映かった。

教養課程の授業が始まった。三神峰の旧陸軍幼年学校の跡地の校舎を利用した教室で行われた。建物は、貧弱であったが、周りの環境は素晴らしい。満開の桜が、丘を埋め尽くしている。だが、伸一には、そんな素晴らし

い環境を楽しむ余裕はなかった。アルバイトに追われてほとんど学校に行く時間がないのである。

欠席が続いた後、桜も散りかけた頃、伸一は、久し振りに授業に出た。

昼休み、伸一は、学生食堂でかけそばを食べていた。すると隣の席に座った男が文庫本を鞄の中から取り出し読み始めた。ヘルマン・ヘッセのデーミヤンである。

見覚えのある顔であるが、思い出せない。学生服の襟章にはLとあるので文学部の学生であることは間違いない。背が低く、顔がやや角張っている。目は小さく、温和な眼差しをしている。

「僕は、文学部二組の木本です。確かあなたは、同じクラスの人だと思いますが、どなたでしたでしょうか」

たまにしか学校に顔を出さない伸一には、同じクラスの学生の顔さえ識別出来ない。

「高津敏夫といいます。一関の出身です。お宅と同じクラスです」

「そうでしたか。ここのところアルバイトに忙しくて、学校に出る時間がなく、まだクラスの人たちの顔や名前を十分覚えていませんので失礼しました」

話しているうちに、二人とも大学に入る前に働いていて、同じ年であることが分かった。

二人は、すぐに意気投合した。その後、高津は木本の紹介で、半年後に有明寮に入寮することになり、卒業後も長く交友関係が続いたのである。

伸一は、出席を取る教授の授業は、友人に代返を頼むことにし、試験の時には、友人からノートを借り、それを書き写して何とか必要な単位を取得するつもりであった。

だが、外国語はそうは行かない。授業に出てコツコツ勉強しない限り、取り残されてしまう。特に、大学で初めて学ぶフランス語やドイツ語などは、生半可な勉強では、ついていけない。試験前の一夜漬けで何とかなると甘く見ていたのである。彼は、英語を第一外国語、フランス語を第二外国語とした。英語は、受験科目であったので、履修経験があり、まずまずの成績を収めることが出来た。

ところが、初めて学ぶフランス語は違っていた。最初の文法の履修を疎かにすると前に進めない。文法の知識がないと、いくら辞書を引いてもさっぱり意味がつかめないのだ。

いよいよ文学書購読の授業が始まった。テキストはモーパッサンの「初雪」である。

フランス語購読は、履修人員も少なく、たまに授業に出ると必ず当てられる。その時のために伸一は、訳本を机の下に隠し持って授業に臨んだ。

「ほう、今日はまた珍しい人が出席していますね。木本君ここの箇所を訳してくれませんか」

伸一は、訳本を原文と照らし合わせながら、当てられた箇所を目で追い、わざとたどたどしく読んだ。

「なるほど、名訳ですね。ところで、この単語の意味は、それからこの箇所は、何故複合過去ではなく、半過去を使っているのでしょう」

答に窮した伸一は、額に脂汗を流しながらしどろもどろの状態である。

「君は、語学の天才ですね、単語も文法も分からずに、よくそれだけの名訳が出来ますね。きっと勘がいいのでしょう。でも、勘に頼るだけでは、正確な意味をとらえることは出来ません」

フランス語担任の小木助教授は、皮肉を込めて伸一の学習態度を諭した。

有朋寮は、入寮と同時に何らかのサークル入らなければならない。ワンダーフォーゲル、フォークダンス、歴史研究会、サロン・ド・ポリティクスなどさまざまなサークルがある。そのどれかに入ることによって部屋割りが決まる。

伸一は、セツルメントサークルに入った。

セツルメント活動は、十九世紀、産業革命後英国で起こった。ボランティアによる貧困者のための救済活動で、宿泊施設、託児所、医療施設などを設け、生活支援を行っていた。

日本では、大正期に始まり、第二次世界大戦後、運動が急速に広まった。

有朋寮での、セツルメント活動は、生活支援というような大げさなものではない。仙台市長町（現太白区長町）鹿野地区学童の学習の手伝や幼稚園児たちとの遊びを通じて、地域の人々との交流を深めることにあった。また、近くの保母専門学校の学生たちと合同で、学童たちの運動会や学芸会を開催したりして、活動を広めて行った。

こうしたセツルメント活動のかたわら、伸一は、有利なアルバイト先の確保、奨学金の増額など、経済的な安定を図るための努力をした。

まず、東北大学進学指導学生会のアルバイトを確保した。伸一は、全国珠算能力検定試験二級の資格を持っている。その高い計算能力を生かし、平均点、偏差値の計算から度数分布表の作成を行い、予想以上の収入を得ることが出来るようになった。ついで、特別奨学金の申請を行い、月額二千円から三千円に、奨学金の増額が認められた。

また、授業料は、減免申請により、年額九千円の授業料が四千五百円となった。

寮費は、月額百円、大学当局に支払うだけで済む。

食費は、寮生総会を開いて決定されるが、昭和三十二年当時は、朝食と夕食の二食で一日八十円足らずで済ん

だ。さらにこの食費も免除される方法があることを先輩から教えられた。それは、次期運営委員の改選時に三役以上の委員になることである。

有朋寮の委員長（寮長）は、寮生全員の選挙によって選出される。選出された委員長は、運営委員を選任する。委員長は、選任された委員で構成する運営委員会を主導し、寮則に従い寮の管理運営を行う。

運営委員は、委員長の他、副委員長一名、会計、炊事、庶務、文化一、文化二、風紀、生活、記録の各幹事が二名ずつ計十八名で構成されている。任期は四ヶ月間である。この運営委員とは別に懲罰委員が設けられていた。寮生が不祥事を起こした場合、懲罰委員が、懲罰委員会にかけ、処分を決める。

伸一は、九月の改選時に当選した今西委員長の会計幹事に志願した。同幹事は、委員長、副委員長、炊事幹事とともに三役といわれ、食費が免除される。三役は、それぞれ相当な時間を寮運営のために費やす。その代償として食費免除の優遇措置が講じられているのだ。

秋も深まったある日、大阪出身の文学部二年生の元委員長坂上弘蔵氏が伸一の部屋を訪れた。

坂上氏は、文学部の後輩の伸一に有朋寮に歴代伝わる余興〈くじらんこ〉を覚え、引継いで欲しいと頼みに来たのである。

「木本君、有朋寮の伝統芸〈くじらんこ〉を引継いでくれないか」

「何ですか、その〈くじらんこ〉というのは」

「捕鯨船による鯨取りの話を、東北弁で面白おかしく、身振り手振りを交えて語るのだ」

「駄目ですよ。僕は、東北出身ではないのだから、うまく出来ません」

「そこがいいのだ。流暢な東北弁では、かえって面白くない。下手な東北弁を使って、喋ることにより、東北出身の人からも笑いを誘いだすことができるのだ。僕だって関西出身で、東北弁など知らない。それでも何とか勤めてきた。頼むよ」

そこまで言われれば、引き下がるわけには行かない。頼まれればつい引き受けてしまう遠州人の気質が、伸一の中に流れている。それと、演劇や歌などの芸能には、子供の頃から興味があった。

「分かりました。やってみます」

「有難う。これで僕も安心した。僕のやる〈くじらんこ〉は、先輩から受け継いだとはいえ、あくまでも坂上流だから、一応覚えた上で木本流にアレンジしてやるといい」

そういわれて、伸一は、台本に、少し猥褻な身振り手振りを加え、彼なりに工夫した〈くじらんこ〉を演ずるようにした。

寮祭の日に、伸一は、仙台の東一番町に繰り出し、寮生のバックコーラスを交えた〈くじらんこ〉を演じ、沿

道の人々の注目を集めた。学生の少しばかりのいたずらや騒音が、許されたおおらかな時代であった。

生活の基盤が確保できた伸一は、授業にも出席出来るようになった。社会科学への関心が高まり、学友と共にマルクスの「資本論」、レーニンの「帝国主義論」を初め、シュンペーターの「資本主義・社会主義・民主主義」などの著作を読んで、夜遅くまで議論した。

ソ連の打ち上げた人工衛星スプートニックは、学生たちに刺激を与え、多くの学生が社会主義の優位性を説いている。伸一もその影響を受け、次第に左傾化して行った。

雪雲が、重く垂れ込める日が多くなった。太平洋岸の仙台は、豪雪に見舞われ雪に閉ざされることはまずない。だが、寒々とした雪雲が、上空を覆う日は、街もひっそりと息を潜めているように見える。

滅多に雪を見ることのなかった伸一には、天空から舞い降りる風花のような雪が、不思議な世界からの贈り物のような気がする。その花びらを両手で受け、冷たい感触を確かめてみた。手のひらに止まって消えるその風花は、伸一にみちのくの冬を感じさせてくれた。

（二）

大学二年目の秋を迎えた。

警察官職務執行法（警職法）改正審議で、衆議院が大混乱し、強行採決の結果、与野党の対立が激化している。この法律改正に反対する学生が、学内のあちこちで集会を開き、騒然としていた。

だが、その騒音をよそに仙台の街は、静かに秋の装いを深めていた。

伸一は、文学部の友人山崎満を青葉城址散策に誘い出した。黄金色に染まった木々の葉が、柔らかな日差しを受けてそよいでいる。

伊達政宗の立像の前に出た。（平成二十三年の今日では騎馬の銅像に変っている）

二人は、立像の脇に立ち、眼下に広がる仙台の街を眺めた。すぐ下には、広瀬川の清流が流れている。周りでは、大勢の人たちが写真を撮っていた。

「あの、済みませんが、シャッターを押して頂けませんか」

近くにいた若い二人組の女性の一人が、伸一にカメラを差し出した。彼女は、紺のスカートに白のブラウス、その上に桜色のスエターを着ている。鼻がやや低く、丸顔で親しみのある顔である。もう一人は、ベージュのスカートに紺のストライプの入った白いブラウスを着て、クリーム色のカーデガンを羽織っている。細面で切れ長な目をしていて、スリムな体つきである。

伸一は、二人が伊達政宗の立像の下に並ぶのを見定めて、シャッターを押した。カメラを返しながら、初めて

会った女性に、厚かましいと思ったが、思い切って頼んでみた。

「この友達と一緒にいるところを撮って貰えませんか」

伸一も山崎もこれまで女性には縁がない。二人とも一年半の寮生活で一度もお電話を受けたことがない。

有朋寮では、架かってくる電話を男性と女性に区別して伝えていた。男性からの電話は、ただ電話とだけ、女性からの電話は、お電話としていた。庶務部員が、電話口まで呼び出す時に、そのことをスピーカーで伝えるのである。

容貌にもスタイルにも自信がなく、金もない二人は、デートだと言って颯爽として出て行く友人を、羨望の目で眺めながら見送るばかりである。お電話の架からない寮生は、肩身が狭い。

(犬も歩けば棒に当る。俺たちにもお電話をくれる物好きな女性が現れるかもしれない。それには、寮にくすぶっていては駄目だ)

伸一は、女性との出会いを密かに期待し、山崎と共に青葉山に来たのだ。

「いいわ。撮ってあげます。出来た写真はどうすればいいのですか。お名前と住所と電話番号を教えてください。後で連絡しますから」

「有難う。よろしくお願いします。厚かましいお願いをして恐縮です」

二人は、寮の住所と電話番号を教えた。

「あの・・・」

伸一は、名前と住所を聞こうとした。が、思い直した。写真をネタに交際を迫るように受け取られたくなかったからである。

(写真を送ってくれるかどうか彼女たちの判断に任せよう。もし、その気があれば写真を送ってくれるはずだ)

伸一と山崎は、それからしばらく、彼女たちと青葉山を散策した。

寮生活や学校での出来事などを中心に会話が弾んだ。

「寮では、決まった食事以外に、何か自分が食べたいものがあれば、料理して食べることも出来るのですか」

「炊事室は、賄いの人たちしか使えない。そこで、腹の減った寮生は、洗面所にある電気ヒーターでご飯を炊く。まず洗面器に米を入れ、それを研いで水を張り、同じタイプの洗面器をふた代わりに被せ、そのふたの上に石を乗せる。ご飯が炊けたら、その中に納豆をかき混ぜて入れ、思い思いの食器に移して食べる」

「衛生上よくないわ。それで病気にはならないのかしら」

「腹が減っていると、病気のことなど構っておれない。まず空腹を満たすことが先にたつのです」

「その洗面器で、下着など洗ったりするのですか」

「ええ、そんなにたくさん洗面器を持っているわけではありませんので」

「まあ・・」

彼女たちは、笑い転げ、お互いに顔を見合わせた。伸一は、初めて会った女性に対する話題ではないことに気付き、そのデリカシーのなさを反省した。

ところが、伸一と山崎の飾らない会話は、女性たちの心を打ち解けさせるのに十分であった。

一ヵ月後に女性の一人から電話があった。

「木本君、お電話です」

胸を躍らせながら電話口に出た。

「もしもし、木本ですが・・」

「あの、佐伯久美子と申します。青葉山で写真を撮って頂いた・・」

「ああ、あの時の女性ですね」

「お二人の写真が出来ましたのでお知らせします。どこかでお会いしてお渡しできるといいのですが」

「有難うございます。山崎君と一緒にお会いしたいと思いますが、もう一人の女性もご一緒ですか」

「はい、つい言いそびれてしまいましたが、あれは妹です。今度の日曜日午後二時頃、ご都合いかがですか」

「僕は、日曜日ならいつでも構いませんが、山崎の都合を聞いてきますので、しばらくお待ちください」

伸一は、急いで山崎の都合を確かめた。

「彼もいいと言っています。何処にしましょうか」

「分かりやすいように東一番町の藤崎デパートの前では、いかがでしょう」

「承知しました。それではまたその時に・・」

伸一は、喜びのあまり、思わず電話口の前でニヤリとした。

「おい、木本いやに嬉しそうだな。さては今のお電話は、デートの誘いか」

「いや、そんな艶っぽい話ではない。まあ、俺と山崎にもお電話の一つや二つ架かって来るということだ」

約束の日が来た。晩秋の穏やかな日曜日である。

伸一と山崎は、二人を誘って近くの喫茶店「白鳥」に入った。店内は薄暗い。四人掛けボックス席を見つけて座った。チャイコフスキーの「白鳥の湖」が流れている。

四人は、やや固くなったまま、しばらく沈黙が続いた。

「あの、この前お会いした時に、言いそびれてしまいましたけれど、私は、佐伯久美子、この子は、妹の美代子で、私たちは姉妹です。始めて会った男の人に名前や住所を教えてはいけないと言われていたものですから、失礼しました。あまり良く撮れていませんが写真を差し上げます」

伸一は、その写真を、山崎に渡し、改めて二人の顔を見た。

「お二人は、姉妹とお聞きしましたが本当ですか」

「はい。あまり似ていませんでしょう。本当に姉妹なの

ってよく聞かれます」
妹の美代子が言った。
「姉さんは、色白で丸顔でしょ。私は、浅黒くて細長い顔ですもの。しいて共通点を挙げれば髪の色ね。二人とも同じように黒いでしょう」
屈託のない妹の話に四人は、すぐに打ち解けた。観光から映画の話まで話題が途切れることなく、二時間余りの時間が過ぎて行く。
伸一は、聞き上手な姉の久美子に魅かれた。
「今度、手紙を差し上げたいと思いますが、住所を教えて頂けませんか」
帰り際に、そっと紙片を差し出した。
久美子は、妹の顔を見て、ためらいながらその紙片に住所と名前を書いた。
(二人だけで会うことをあながち嫌ってはいない)
そう思った伸一は、寮に帰る道すがら、久美子をデートに誘うつもりであると山崎に断った。
「山崎、俺は、久美子さんと付き合いたいがいいか」
「俺は構わない。特別何とも思っていないさ。妹の久美子さんとも、特別付き合いたいと思っているわけではない。連絡があれば、二人だけで会うのにやぶさかではないがね。まあ、そんな心境かな」
「そうか、それなら有難い。これから別行動になるかもしれないがいいな」

「ああ、俺に構わず君の好きなようにしろよ。俺たちがまんざら女性に縁がないわけではないということが分かっただけでもよかったと思っている」
山崎は、大きな口を開けて豪快に笑い飛ばした。伸一の久美子への想いを心から祝福する笑いである。
この時から、伸一は、山崎をかけがえのない生涯の友と感じるようになった。

(二)

初雪が降った。冬の訪れも近い。街路樹もすっかり葉を落としている。十一月下旬の仙台は、冬支度を整え、裸木の立ち並ぶ青葉通りが、ひときわ広く見える。
佐伯姉妹と「白鳥」で会ってからすぐ、伸一は、久美子に宛てて手紙を書いた。一週間後に返事が来た。時々会って話を聞くのは楽しいと書いてある。
初めて二人だけで会ったのは、年の瀬も迫る日曜日であった。ジングルベルの鳴り響く東一番町通りを歩き疲れて、二人は、「白鳥」に落着いた。会話を重ねているうちに、久美子が、有朋寮を訪ねてみたいと言い出した。大学生の寮生活がどんなものであるか興味があるというのである。
その日が来た。一月十五日どんと焼きの日である。
仙台では、この日を女の正月と言い、女性の休日とされている。

雪が激しく降っている。有朋寮の周りは一面の銀世界となった。
伸一は、長町鹿野前のバス停で、久美子を迎えた。
バスが来た、降りしきる雪の中に降り立つ彼女の姿が儚げで、伸一は、思わず駆け寄って、手を差し伸べた。
厚手のベージュのコートを着て、桜色の毛糸のマフラーで首を覆い、赤い手袋をしている。髪にかかる雪を払うようにして、花柄の入った若草色の傘を広げた。
「雪の中をよく来てくれたね」
伸一は、そう言って久美子と並んで歩き始めた。バス停から寮までのわずかな間に、二人の着衣は、見る見る白くなって行く。
冬休みで多くの寮生が帰省し、有朋寮はひっそりとしていた。
部屋に入る前に、久美子を案内し、寮内を一巡した。寮は、木造モルタル二階建てで、三棟に分かれ、食堂、浴室が渡り廊下を隔てて付設されている。
雪が、渡り廊下にも吹き付けている。伸一は、久美子を部屋に入れた。同室の舟山は、帰省したまま戻っていない。
部屋は、二人一部屋で、ベッド(寝床)が、上下二段となっている。ベッドの広さは、一畳半ほどで、それぞれに畳が一畳敷いてある。木製板敷きの床の上に、机が二つ置かれている。その机に、床が占有され、空間はわずかしか残されていない。伸一は、下段ベッドを使っていた。
部屋には暖房がない。寒さが足許を襲って来た。二人は、伸一のベッドの脇にある小さな置炬燵に足を入れ、暖を取ることにした。彼女は、頭をかがめてベッドの脇の置炬燵に入った。
小説や映画の話に夢中になり、いつの間にか夕闇が迫っていた。
「もうこんな時間、そろそろ家に帰らなくては・・」
久美子は、窓に映る隣の棟の部屋の明かりを見て言った。部屋は、すでに薄暗くなっていた。
久美子がベッドから出ようとした時、伸一は、溢れ出る激情を抑えることができなかった。紅潮した顔を久美子に向け唇を探った。しばらく首を左右に振って顔を背けていた久美子も、感情の高ぶりを抑えることができない。観念したように目を閉じて、伸一の唇を受けとめた。
情熱の赴くまま、伸一は、久美子の体をまさぐり始めた。丸い形のいい乳房が覗いている。刺激された伸一は、夢中でその乳房を吸った。
スカートに手がかかった。すると、久美子は、思いがけないほどの強い力で、伸一の手を跳ね除け、哀願するような目で彼を見た。
「お願い、それだけは止めてください」
「僕が嫌いなの」

「いいえ、私は、木本さんが好きです。でも、それだけではどうにもならないの」

久美子は、目に涙を浮かべ、改めて伸一の手を取った。しばらくじっと握り締めていたその手を離して、乱れた着衣と髪を直し、置炬燵のあるベッドから抜け出た。

伸一は、久美子が、唇に紅を引く姿をただ黙って眺めている。満たされぬ思いと激情に自分を見失ってしまった悔悟の念が、伸一の心をかき乱していた。

「ごめんなさい。木本さんの愛に応えられなくて」

久美子は、木本のぬくもりを確かめるように、胸に手を当てた。その顔は、愛しさを包み込んだ憂いに満ちていた。

「雪がまだ降っている。バス停まで送って行こう」

「ええ、すみません。木本さんとこうしてお会いすることが出来て、本当によかった」

外は、すでにとっぷりと暮れている。外灯が舞い落ちる雪をぼんやりと映し出していた。

「今度いつ会える」

「また、電話します」

久美子は、俯いてじっとバスの来るまで、長靴の先の雪を見詰めていた。

バスが来た。重い足取りでステップを上がり、窓際の席に座った。曇りガラスを拭いて見せた久美子の瞳は、潤んでいる。無理に微笑んで手を振るその顔は、どこか淋しげであった。

「さようなら」

窓越しにそう言った。久美子の口の動きで、伸一には分かった。

チェーンを巻いたバスは、雪道を重い足取りで闇の中に消えて行った。

石原裕次郎主演の「嵐を呼ぶ男」が、日活系の封切館で上映されている。切符を買うのももどかしく、伸一は、その映画館に飛び込んだ。学期末試験の終わった二月の寒い日であった。

石原裕次郎は、「裕ちゃん」と呼ばれ、国民的アイドルとして日本国中の若者に人気がある。恰好がよく、昭和三十年代を代表する日活の大スターである。

伸一も裕次郎のデヴィユー当時からファンの一人で、彼の主演映画が上映されると欠かさず映画館に足を運ぶほどであった。

映画が終わり、ライトが灯った。

興奮の覚めやらぬ顔で伸一は、明るくなった館内を見渡した。すると、スクリーンに向かって左のブロックの三列目に久美子らしい女性が、男性と並んで座り、親しげに語り合っている。

一瞬目を疑った。近寄って声をかけようとしたが、足が動かない。人違いであればよいと願う気持が、確かめる勇気を奪っている。見てはいけないものを見てしまったような気がして、ただ、その場から逃れたかった。

寮に帰り、伸一は、その時のことを想い返してみた。すると、次第に錯覚ではないかと思えるのである。

(あの映画館で見た女性は、久美子ではない。彼女を思う気持ちが、幻影を生んだのではなかろうか。だが、あの雪の日から一ヵ月、久美子から何の音沙汰もないのはどうしたことか)

伸一は、不安になって、確かめずにいられなくなり、手紙を書いた。

「前略、どんど焼の日にお会いしてから一ヵ月経ちます。いかがお過ごしですか。当方期末試験も終わり、ほっとしているところです。さて、先日、日活映画〈嵐を呼ぶ男〉を観賞していた時に、映画館であなたを見かけたように思います。近くで確かめてみたわけではありませんのではっきりしたことは分かりませんが、男性とご一緒で、親しげに語り合っていたようにお見受けしました。もし、それが真実であり、その人と特別な関係があるようでしたら、この手紙に対するご返事をしたためる必要もなかろうかと思います。小生の見間違いであるか、または、その男性とは、ただのお知り合い程度のご関係であれば、ご返事を頂きたいと存じます。そうであることを心から念じております」

一週間待っても返事は来なかった。

これまで特定の女性との交際のなかった伸一には、肌に触れ、身近に感じた初めての女性である。愛しく、切なく、狂おしい。何処にいて、何をしても彼女の顔が脳裏に浮かんで離れない。

伸一が手紙を書いた十日後のことであった。

「木本、佐伯久美子さんのことで妹の美代子さんから電話があった。〈白鳥で〉会って話を聞いて来た」

久美子は、妹の美代子に、山崎を通して自分の気持ちを伸一に伝えるよう頼んでいたのである。

「どんな話だった。実は、先日、映画館で、久美子さんが男の人と親しげに話しているところを見たように思ったので、そのことを確かめるために手紙を書いたのだ」

「その話だった。映画館で木本の見たのは、やっぱり久美子さんに間違いないと言っていた。彼女は、君に気付かなかったらしい。その時、一緒にいた男性は、彼女の許婚だそうだ。許婚がありながら寮に行き、君の部屋に入った。その軽率な行為と許婚のことに触れなかったことを悔いている。木本さんには本当に申し訳ないと言っていたそうだ」

「やっぱりそうだったのか。俺の手紙に返事がないので、そうではないかと思っていた」

「美代子さんの話によると、彼女もずいぶん悩んだらしい。純粋で熱情的な学生が、未来に希望を持って溌剌とひたむきに生きる姿に魅かれて、乞われるままに交際す

るようになった。話題も豊富で、楽しく充実していた。そのことに舞い上がって、周りが見えなくなっていた。でも、将来のことを考えると不安になってくる。君と結婚出来るか分からないし、出来てもずっと先の話になろう。許婚を捨ててまで一緒になったとしても、いつか破局が来るのではないかと心配だ。両親からもこれ以上深く交際しないほうが良いと釘を刺された。彼女は、君と会えば、折角断ち切ろうとした思いが揺らいでしまう。そんなあいまいな気持ちで君と会うことは、結局君を傷つけることになるので、直接伝えることが出来なかったそうだ」

山崎の話を聞いた伸一は、久美子のことは、諦めざるを得ないと思った。

(彼女も苦しみ、悩んだに違いない)

「私は、木本さんが好き、でもそれだけではどうにもならないの」

抱きすくめた時の久美子の言葉が、伸一の脳裏にいつまでも焼きついている。

山崎と高津は、伸一を飲みに誘った。酒の弱い伸一は、普段はほとんど飲まない。だが、この時ばかりは違っていた。飲めない酒を流し込む伸一の耳元で、美空ひばりの歌う「哀愁波止場」が聞こえてくる。伸一には、それが、久美子の面影と重なって、いつまでも耳に残って離れなかった。

(四)

期末試験の結果が発表される。伸一は、フランス語の成績が気がかりであった。合格点に達しない場合は、留年しなければならない。実家の困窮度は増すばかりで、一日も早く就職し、家計を助けることが求められている。だから留年だけは避けたかった。

悪い予感が的中した。小山助教授から呼び出され、成績不良につき再試験ということになったのである。再試験は、口頭試問によると通知されている。

フランス語を履修した多くの寮生が、この再試験の対象となった。伸一は、再試験を有朋寮の同期生中西忠夫と一緒に受けることになった。

寮生の多くは、経済的に余裕がなく、アルバイトをしなければならない。また、共同生活をする上で、付き合いも大切である。だが、何よりも政治、社会、学問、人生、文学など友人との自由な語らいや寮祭などの寮行事に青春の喜びを感じ、学習時間を疎かにしてしまった。そのツケが廻ってきたのである。

伸一は、再試験に向けて猛勉強した。だが、一週間程度の勉強では、たかが知れている。

口頭試問は、小山助教授と一対一で行われた。一から百までフランス語で言えとか、動詞の変化、形容詞、前置詞、冠詞、代名詞など基礎的な文法の知識を問うものであった。

「君は、筆記試験の成績が五十一点。六十点に満たないから落そうと思いました。しかし、このまま黙って落としては、気の毒ですので一度だけチャンスを与えることにしました。今日の口頭試問では、努力の跡が見られますので六十点を上げます。ところで、専門課程では、何を専攻するつもりですか」

「社会学です」

「社会学ですか。社会学の学祖は、オーギュスト・コントでフランス人でしたね。フランス語の文献を読むつもりはないのですか」

「できれば読みたいです。これから勉強して楽に読めるようにしたいと思います」

「外国語をマスターするのは、容易ではありません。片平町の学部に進級しても、フランス語の勉強を続けてください」

散々油を絞られた結果、伸一は、やっと合格最低ラインをクリアーすることが出来た。

一緒に受けた中西も六十点の合格点を貰ってホッとしている。

「ところで、中西君は何を専攻するつもりですか」

「はあ、フランス文学をやりたいと思っています」

「えっ、フランス文学。信じられませんねえ。君の期末試験は、六十点にも満たなかったのですよ。それがフランス文学！卒論もフランス語で提出しなければなりませんよ」

「はい、分かっています。学部に行ったら一所懸命勉強するつもりです」

「学部の教授が、君を受け入れてくれるかどうか分かりませんが、もし入ったとしても相当勉強しなければなりませんね」

そう言われた中西も、フランス文学科に進み、無事卒業して出版社に就職した。

山崎もフランス語を履修し、フランス文学科への進学を希望していた。試験結果に自信があったわけではない。だが、不合格となった寮生は、すでに呼び出され、再試験を受けている。試験後十日経っても彼には呼び出しはなかった。

合格したものと思った彼は、帰省の準備を始めていた。ところが、彼の思惑とは事態が、まるっきり違う方向に進んでいた。突然フランス語の指導教官権藤助教授から電報が届いた。一種間後に、再試験の機会を与えるという通知である。

驚いた山崎は、再試験に備え、猛勉強して登校した。教室には、教養課程のフランス語の全教官が集まっている。

「山崎君、君は期末の試験が五十点にも満たないので、落第させようと思ったが、フランス語の教授会で、一回だけチャンスを与えることに決まった。それには、全教

官が立会う必要があるとのことだったので、こうして先生方に来て頂いたのだ」

権藤助教授は、厳しい表情で口頭試問を開始した。山崎は、脂汗を流しながら、質問に答え、何とか六十点を貰い、合格することができたのである。

「ところで、君は、学部で何を専攻するつもりかね」

教養部のフランス語の篠原主任教授が聞いた。

「は、フ、フー国文です」

山崎は、入学当初から仏文志望である。だが、フランス語の全教官を前にして、五十点以下では、とても仏文志望とは、言い出せなかった。そのため心ならずも国文と言ってしまったのである。

伸一は、念願の社会学科に入った。社会学科は、希望者が定員を超えていて、文学部の中では、人気が高い。社会科学の一分野であるが、社会を総合的に研究するか、特殊分野に限って研究するか学会でも議論が分かれていた。東北大学には、総合社会学者として高名な新明正道教授がいる。社会全体を総合的に捉え、社会を構成する要素、仕組み、成り立ちなど、社会の構造やその持つ本質に関する数多くの論文を発表している。

新明教授は、日本社会学会の会長でもあった。

それだけではない。教授は、人格者で学生からも尊敬され、慕われている。また、マスコミ、産業界でも社会学専攻の学生の需要が増え、就職率も良くなってきたことも人気の高い要因となっていた。

志望者が、定員を超えている学科は、教養課程の成績によって、篩にかけられる。

伸一は、定員枠に入るかどうか心配であった。だが、この年は、志望者が多かったためか定員二十人のところを二十三人に増やすことになった。お陰で彼は、辛うじて滑り込むことが出来たのである。

社会学の授業は、一般講義と特別講義に分かれ、それに演習（セミナー）が加わる。

伸一は、専門課程に進んでから、学問の面白さに目覚めた。大学への愛着が増し、政治への関心もさらに高まっている。

昭和三十三年の警察官職務執行法改正を巡る衆議院での大混乱に学生は、政治への不信感を高めて行った。それを契機として、学生運動が活発化し、学内は騒然として来た。

社会学の分野では、大衆社会論が、論壇を賑わせていた。ホワイトカラーを中心とする中間層が、マルクスのいう革命の担い手となる労働者階級とどのように向き合って行くか。活発な議論が、展開されていた。

伸一は、行きつけの喫茶店で、わずか一杯のコーヒーを啜りながら、長時間居座り続け、日本の将来や理想社会の実現について友人たちと熱く語り合うことが、日課

のようになっていた。

仙台は、学生の街と言われている。喫茶店の店主も学生には寛大で、長居をとがめられることはない。

学生の騒ぎとは別に、日本は、高度成長が続き、好景気に沸きかえっていた。生活が向上し、一般大衆は、政治的関心が薄れ、岩戸景気を謳歌している。

街には、フランク永井の歌う「有楽町で逢いましょう」の甘いメロディが流れていた。

有朋寮を退寮しなければならない時が来た。有朋寮の入寮期間は、教養課程の二年間に限られている。退寮後は、別の寮に移るか、下宿先を探さなければならない。

伸一は、もう少し有朋寮で過ごしたかった。半面、居心地の良さに溺れてしまう自分が恐ろしくもあった。

青春の思い出の詰まった有朋寮。その何もかもが懐かしく温かくかんじられる。食堂の片隅にある小さな売店、その売店の売り子お敬ちゃんの笑顔、朝夕の食事を用意してくれた賄いのオジンちゃんたち、食事時間を告げる大太鼓、浴室のタイル、部屋の壁の傷、いずれもが、さようならの言葉を告げているように伸一には思えた。

すぐ脇の田圃に土筆が出始めている。伸一は、冷たい風の中に、かすかに春を感じながら、有朋寮を後にした。

県民健康福祉村

吉田忠雄

平成22年12月29日

私は、昭和38年に日本化薬（株）から東大工学部へ転職し所帯を持つことになった折に草加市松原団地に転居した。それから縁あって越谷市の現在の住まいを手に入れ十数年そこに住んでいる。60歳で東大を定年退職し、その後8年間法政大工学部に勤務し、その後縁あって足利工業大学の学長を2期8年勤めた。昨年停年により足利工業大学の務めを終えると完全な自由の身となった。規則的な勤務から解放されるとなにをしてよいかわからず、途方に暮れた。習慣とは恐ろしいものであると思った。

これからの健康な生活を維持するためにどうしたらいいかを考えた。身体的な健康と精神的な健康である。客観的に考えると明らかに心身ともに衰えてきている。これからは、他人より立派なことをやろうという気持ちを持つことはできない。これからの衰えの速さを遅らせることしかできないと思った。昔から老境に入ったら花鳥風月に親しむことであるといわれてきた。また家に引き込まないで外に出ることであるとも言われてきた。この両方を満たす場所として、近所に県民健康福祉村があることを知った。

健康福祉村は私にとってふたつの意味がある。一つは健康維持のための施設であり、一つは季節折々の風物を楽しむための施設である。

健康福祉村は私の家から自転車で約20分の西方にある。途中は田や畑が多い。健康福祉村には全長1650メートルのジョギングコースとその外がわにサイクリングコースがある。内側には、野鳥の池、ソフトボール場、多目的運動場、多目的大芝生広場、冒険広場などがあり、

外側にはテニスコート、植物園、ハーブ園、ソフトボール場などがある。中心的施設としては、ときめき元気館があり、この中には屋内温水プール、自動マッサージ機械、血圧測定機、トレーニングジムやレストランがある。

私は健康維持のために、ジョギングコースと屋内プールを利用する。体調のいいときは、ジョギングコース一周1850メートルを歩き、温水プール100メートルを泳ぐ。不調の時は温水プール100メートルを泳ぐだけにする。それも、25メートル泳いで25メートル水中を歩くのを4回繰り返すだけである。それでも80歳の私には十分すぎる運動で、かなり疲れるが食事は美味しくなる。もうひとつ、自転車で往復するので、それも健康維持には寄与しているはずである。ときめき元気館の自動マッサージ機や血圧測定機も利用している。

健康福祉村への往復と村内での散歩は季節きせつに応じて草花が目を楽しませてくれる。最高の時期は4月から5月にかけてである。まず桜が咲きそろう。ジョギングコースはすべて桜並木となる。特に噴水の池の周りは、満開の桜並木が池の水に映えて有数の桜の名所となる。

季節が進むと桜以外の花々も次々に咲きだす。春の花々が咲くのは福祉村の内部に限らない。福祉村までの往復の道端にも色々な花が咲き乱れる。福祉村までの道端に何箇所か花を丹精している農家がある。あまりに見事な花が咲いている時には手入れをしている農家の人に声をかけることがある。喜んで応対してくださる。

満開の花の季節を過ぎ秋になるとさすがに咲く花の種類も限られてくる。それでも何種類かの花が咲く。特に可憐な黄色い菊の花が咲いて道端で迎えてくれる。

健康福祉村の草花

代表的な冬の花はロウバイと椿である。椿は今満開で健康福祉村の入り口まで数百メートルにわたって境界に沿って一本おきに植えられている。

3月の花は、サンシュ、沈丁花、花菜、シナレンギョウ、あせび（馬酔木）、アンズ（杏）、こぶし（辛夷）などである。

4月に咲く花は、ソメイヨシノ桜、白木蓮、ウワミズザクラ、キザゴケ、かりん、キクモモ、シロツメクサ、藤、ハナミズキ、ベニカナメモチ、チューリップ、ツツジ（躑躅）、ドウダンツツジ、ヤエヤマブキ、ワジュロなどである。

5月に咲く花は、エゴノキ、シャクナゲ、カルミア、シャリンバイ、センダン、ノイバラ、ユリノキ、サツキなどである。

6月に咲く花は、サラサウツギ、アジサイ（紫陽花）、アマチャ、ヒペリカムヒデコート、テイカカズラ、クスノキ、バイカウツギ、キツナシ、タイサンボク、ナンテン、ネムノキ、クリ、ケンポナシ、松葉菊、ビヨウヤナ

ギ、アベリアなど

9月に咲く花は、キクイモ、カクトラノオ、ナツズイセン、ミヤギノハギ、ヤブラン、ムクゲ、ヒガンバナなど。

ハーブ園の草花

3月に咲く花：クリスマスローズ、スイセン、ツルニチニチソウ

4月に咲く花：コンフリー、サラダバーネット、コリアンダー

5月に咲く花：ワイルドストロベリー、タチツボスミレ、コモンマロー、ジャーマンカシミール、コモンセージ

6月に咲く花：ベルガモット、チェリーセージ、メドセージ、ヤロー、ストエカスラベンダー、ニゲラ、ハコネウツギ、ローズゼラニウム

健康福祉村ジョギングコースの一周とソフトボール・テニスの思い出

健康福祉村ジョギングコースの一周は、ときめき元気館前から始まる。ときめき元気館を入口と反対側から出ると、ジョギングコースの出発点である。ジョギングコースは2面に分かれており、1面はオレンジ色のアンツーカ舗装であり、1面は黒色のクッション・アスファルト舗装である。どちらも足に衝撃のかからない柔らかさが保たれている。

ここを右に折れて歩きだす。掘割にかかったふれあい橋を渡る。左に休憩所がある。その先の左側は芝生の自由広場である。右側も芝生であるが、ここでは数人の中年の女性が三味線を持ち寄って練習したりすることがある。さらに進むと左側はあしの生い茂った野鳥の池になる。この葦叢には鳥が巣を作っているので、石などを投げないようにという立て札が立っている。

さらに進むと葦叢がなくなり池の水面が現れる。ここは噴水の池である。ときには多くの水鳥が水面に群れている。噴水の池を半周すると、ジョギングコースは池を離れて掘割をわたり、左側に多目的運動場が現れる。ここでは若い人たちがサッカーの練習をしていることが多い。

多目的運動場を過ぎると左側は多目的大芝生広場である。老人の私はここのベンチで一休みする。ここの広場ではお年寄りたちかグラウンドゴルフを楽しんでいる。私はグランドゴルフには興味がないので、唯ぼんやりと眺めている。

疲れが取れると、私はふたたびジョギングコースを歩きだす。左側に低い小山が現れる。ここは冒険広場と呼ばれる幼児たちの遊び場である。幼児たちが若い母親とともに遊んでいる。ここには普通の滑り台やローラー滑り台が設置されている。

ここを左に半周すると左側は再び多目的大芝生広場となり右側は専用ローラースケート場となる。ローラースケート場では若い人だけではなくかなりの年配者もローラースケートを楽しんでいる。お年寄りもかなり上手である。

ローラースケート場の向こうにはソフトボール場がある。私も若いころはソフトボールに打ち込んだことがある。私は15歳で太平洋戦争の終戦を迎えるとソフトボールが入ってきた。中学・高校時代は、私はそれにはまった。東大は野球が盛んであったので、大学時代は野球を楽しんだ。大学を卒業して日本化薬（株）に就職すると、再びソフトボールを楽しんだ。

私が就職したときの最初の勤務地は日本化薬（株）の山口県厚狭作業所であった。最初の職場はニトログリセリン製造工場であった。ニトログリセリンは危険すぎてやたらに手を出してはいけないことが分かった。2年目の職場はジニトロトルエン製造工場であった。この工場は、ニトログリセリン製造工場に比べて格段に危険性の低いことが分かった。良き上司、良き作業員に恵まれて、そこで研究と職場生活を楽しんだ。

この職場では、昼休みには職場前のグランドで毎日雨の日も風の日も天候のいかんにかかわらず、キャラメルひと箱をかけて20人の従業員が総出でソフトボールの試合をやった。そのためこの職場の従業員は全員がソフトボールが上手になり、この職場のソフトボールチームは、作業所内のソフトボール大会では常に優勝した。

そのうちにチーム内の世話役が色々調べてきて、社外のソフトボールチームと対外試合をするようになった。そして対外試合用のチームを結成した。チーム結成直後に対外試合をするとべた負けであった。対外試合で勝つためには所内で試合をしているだけではだめなことが分かった。それから、対外試合でも勝てるように社外チームと練習試合をするようになった。これを繰り返しているうちに日本化薬チームは実力をつけ、翌年には県民体育大会のソフトボール大会で準優勝するまでになった。昭和34年に山口県営球場で行われた県体のソフトボール大会では、小野田セメントチームと決勝戦で対戦し、1対0で惜敗して涙を飲んだ。

その後厚狭作業所では女子ソフトボールチームが結成され、私はそのチームの監督に選ばれた。そしてその後に厚狭作業所で行われた日本化薬の11事業所の女子ソフトボールチームの作業所対抗ソフトボール試合では、厚狭作業所女子ソフトボールチームが優勝し、私は優勝監督として胴上げをしてもらった。日本一幸せな男と題したその時の写真をしばらく持っていたがその内なくなってしまった。

ローラースケート場の次の左側は8面のテニスコートである。私も昔はテニスもやった。結局上手くなれなか

ったが体力の維持には貢献した。

テニスには副作用もあった。2年前に孫とテニスをやって、左足のふくらはぎの肉離れを起こしてしまった。私の足の肉離れには歴史がある。昔イギリスに1年間留学し、帰ってきた直後に東大の反応化学科のバレーボールに参加した。そしてサーブをしたときに左足のふくらはぎが肉離れを起こした。その時私は40歳代であった。私にとっては初めての肉離れである。東大病院で診てもらい添え木を当て包帯を巻いて数日を過ごした。

次に肉離れを起こしたのは、東大を定年退職し法政大学に勤務中の60歳代であった。法政大学の寮が信州白馬にあったので、毎年夏休みには学生とともに白馬寮に行った。白馬寮にはテニスコートがあった。学生たちはテニスを経験していないものが多かったので、最初のうちは私が優位に立てることが多かった。

ある日、わたしは学生たちとテニスの試合をした。ダブルスの試合でわたしたちのチームは決勝にまで進んだ。その試合中のことである。私のチームは優勝するかもしれないという局面を迎えた。本気になってプレーをした。すると左足にピリッと痛みが走った。肉離れの再発である。動けなくなり、それから東京に帰るまで白馬寮でゴロゴロして過ごした。

第3回目の肉離れが78歳の私を襲った。2008年の4月第一日曜日。この日は例年足利工業大学の風と光の広場で岡平理事長と学長の私の主宰の花見大会を開いてきた。その時は私の孫たちもこれに参加した。私も体は好調であったので、末娘の長男を誘って、風と光の広場の隣にある足利工業大学のテニスコートでテニスの打ち合いをした。始めるまではその孫より私のほうがレベルが上だと思っていた。しかし初めて見ると彼もかなりのレベルである。これは気を引き締めなくてはと真面目になった。そしてテニスの打ち合いを再開すると、その瞬間左足のすねにピリッと鋭い痛みが走った。肉離れの再発である。しばらくびっこをひいて過ごした。

テニスコートをすぎるとジョギングコースは終点でときめき元気館にもどる。

プール

ときめき元気館のプールは私の重要な健康維持施設である。このプールは長さ25m、深さ1.2mの温水プールである。プール使用料は一般700円、65歳以上350円である。自動販売機で350円のプール券を買い、利用カード（あらかじめ申し込んでもらっておく）とともに受付に出すとプール券にスタンプを押し、鍵のついた赤色のリストバンドを渡してくれる。

ロッカー室に行き、リストバンドに書かれた番号の書かれたロッカーを鍵で開ける。そして、着衣を脱ぎ、ロッカーに入れる。持参した、水泳パンツ、水泳キャップ、水中メガネ、タオル、石鹸、カミソリ、シャンプーなどの入った袋を持ってシャワー室に入る。シャワー室で、水泳パンツ、水泳キャップおよび水中メガネを装着する。石鹸、シャンプー、タオルなどの入った袋はシャワー室の棚に残す。

シャワー室の温水シャワーを浴び温水プールに入る。温水プールとはいえ、急に入るのには冷たすぎるので、ゆっくりと手で体に水をかけながら入る。最初はじっとしていると冷たいので、25mコースをまず1回泳ぐ。それで疲れて、体が温まり、冷たくはなくなる。しかし私の体力からして続けて往復泳ぐ気は起らないので、水中を歩いて25mもどる。そしてまた25mおよぐ。

普通の体調のときはこれを4回繰り返す。現在の私の体力ではこれが限度である。十分に疲れ、その後の食欲が増す。ふつうは昼時にプールに行き、プールに入る前後にときめき元気館の食堂で昼飯を食べる。老人の私は人並みの一人前の昼飯は食べられないので、ここでの昼飯はミニカレーとアイスコーヒーである。適量でなかなか美味しく気に入っている。

わたしは子供のころから泳ぐのは好きであった。夏になると家の近くの渡良瀬川でよく泳いだ。これが夏の楽しみであった。泳ぎ方は主として抜き手と平泳ぎであった。その後大学に入り、大学のプールで泳ぐようになったが、平泳ぎより早く泳げない。面白くないので、プールでは平泳ぎ専門で泳ぐようになった。

交友

県民健康福祉村に通いだして1年たって一人の友人に巡り合うことができた。このひとは佐久間さんというが、おそらくこの施設に通う人で佐久間さんを知らない人はいないはずである。私は佐久間さんと何回も顔を合せているうちに話をするようになった。

佐久間さんは毎日朝5時ころにこの施設に車でくる。そしてジョギングコースを速歩で何周もする。私が昼ごろプールに行って昼飯を食べるとき時々一緒になり、話をする。佐久間さんは、夏は黄色いパンツで上半身は裸で歩く。冬はパンツと半そでシャツで歩く。

佐久間さんの脚と上半身は、筋肉モリモリで、日に焼けている。この体は、毎日の速歩と空手の修練でできたもののようである。私の教え子の岳父は宇治田さんといい、和歌山市長を務め、空手でも有名な人であった。佐久間さんはこの人のことを知っていた。

一流人同士は互いに知っているようである。

佐久間さんの紹介で、20人くらいの越谷市の人たちの懇親会に出たことがある。佐久間さんはこのような会の

世話役もするらしい。聞くところによれば、佐久間さんのお兄さんは県会議員だそうである。この会で近くに座った神山さんから名刺をいただいた。親しみやすい方である。新年になったらまたこの会に出ましょうと佐久間さんから誘われている。

往復の楽しみ

私は他の用事の無い時は家から県民福祉村に自転車で通っている。片道約20分の道のりである。最初の約7分は直線道路で家並みと田んぼが交互に現れ、どちらかというと家並みが多い。交差する道路を超えると、家は少なくなり、両側は畑または田んぼとなる。この区間が家から健康福祉村までの距離の約三分の一である。春から夏にかけては道の両側は色々な花が咲き競う。途中に2か所菜園があるが、ここには種々の草花が栽培されており、折々に色々な花が咲く。5月から6月にかけて最も華やかになる。冬の今は最もさびしい時である。しかしよく見るとかなりの種類の花が咲いている。しかし冬に咲く花は一般に小さく、また咲く密度も小さいので、春夏のように華やかでない。

ここを過ぎると左側は、健康福祉村の境界の並木である。樫の木と椿の木が交互に植わっており冬でも椿の花がたのしめる。道にはドングリの実が落ちており、自転車で通るとドングリを踏みつぶす音がする。

さらに進むと健康福祉村の入り口に達する。左折して入り口を入り、取り付け道路を進むとときめき元気館にいたる。

化粧品の安全性

鈴木守

はじめに

在職中、安全性に関する業務を長い間勤めてきた。昭和三〇年に化粧品会社に入社、平成五年に退職するまでの期間、その殆どが安全性に拘る業務であった。昭和三三年に動物実験修得のため、京都大学医学部に出向して以来、昭和六二年品質研究部長退任までの期間である。

安全性試験を開始した昭和三〇年代には、未だ“安全性”という言葉は市民権を得ていなかった。昭和四〇年前後にヒ素ミルクやPCB油症などが問題となり、化粧品による皮膚障害も取り沙汰され始め、“安全性”の言葉が登場し始めたのである。

本稿では、初めに『安全性の歴史』を述べたうえで、私の体験を第二節から第五節に分けて紹介する。なお“安全性”の言葉が使われていなかった昭和三〇年代以前の話柄であっても、“安全性”の名称に統一する。

第一節　安全性の歴史

本誌に『化粧のルーツを訪ねて』を連載した。その中で断片的に安全性についても触れて来たが、温故知新の諺に従って“安全性の歴史”から話を始める。特に現在、『化粧品品質基準』によって配合が禁じられている鉛、水銀、ヒ素化合物使用の歴史を中心に述べる。

一　石器時代から古代へ

先の探訪記で述べたように、化粧あるいは化粧料の発祥は猿人から初期原人の頃と推定したが、石器時代の安全性に関する資料はなかった。

古代社会に入ると、エジプトでは、眉化粧に方鉛鉱

（硫化鉛）を使い、鉛白（塩基性炭酸鉛）の使用も認められた。中近東諸国では、アッシリアの女性は鉛白粉を塗り、新バビロニアでは、鉛白と辰砂（硫化水銀）を施していた。

ギリシャ盛期には鉛白が使われ、鉛とヒ素の脱毛剤があり、後には辰砂や鉛丹（四三酸化鉛）も用いるようになった。また、ローマでも鉛白と辰砂が登場した。

インドでは、インダスの遺跡に鉛白が残されており、グプタ朝の頃には額に鶏冠石（硫化ヒ素）を塗り、雄黄（三硫化ヒ素）による額のポイン化粧が認められた。

中国では楊貴妃など唐の婦人は鉛白粉や辰砂の口紅で化粧しており、鉛白粉と辰砂の使用はそれぞれ、四世紀頃と三世紀頃まで遡ることができた。

日本でも、『日本書紀持統六年の条』に、わが国初の鉛粉製作、ならびに『魏志倭人伝』には朱丹の使用が記され、魏王が卑弥呼に鉛丹を下賜したとされている。更に古くは、弥生時代中期の吉野ヶ里遺跡から顔面に朱が付着した遺体が出土している。ほかに朝日新聞の記事に「高松塚壁画女性の唇と頬から辰砂と思われる水銀と白粉用の鉛が検出された」と記されていた。

かように、現代の常識では、空恐ろしい水銀の化合物を始め、ヒ素や鉛の鉱石が顔料などに汎用されていたので、化粧による被害が頻発したはずであるが、古代の化粧資料には殆ど記載されておらず、以下のような記載を散見するのみであった。

古代ギリシャの医師・ガレノスは「美白剤に昇汞（塩化第二水銀）を塗っている女性は、水銀が体に貯留し、若いのに皺だらけになり、足元がふらつき身震いしている。ソマリンは顔の黒子やシミを消してくれるが、水銀より毒性が強く、皮膚がカサカサして萎縮する」と警告していた。

ほかに、古代ギリシャの女性は、化粧ノリがよい鉛白粉を使っていたが、この毒性を弁えていた知識階級の婦人は、普段は穀粉を使い、余所行きの化粧に鉛白粉を施したという。また、ローマ盛期の婦人たちは染毛剤・サポによるカブレを経験していた。このカブレは光過敏性の皮膚炎と思われる。

二　中世から現代に向けて

中世以降も鉛白や辰砂を使用していた。ルネッサンス期には、イタリアでヒ素配合の化粧水が売られ、死亡事故を起こしたショッキングな事件も知られている。

一六世紀後半には、近代化学の祖ラボアジェは「アルコールに溶けない色素は有毒であり、溶ける色素は無害である」とした。これは有機色素と無機顔料の鑑別法で、私の知る限り最初の安全性試験法である。当時のフランスでは鉛白の使用を禁止したが、鉛白の使用は亜鉛華（酸化亜鉛）の登場まで続けられ、幾多の女性の肉体を

蝕んできた。

わが国においても江戸時代には、顔から胸部まで白粉を塗っていた遊女の乳飲み子に鉛中毒と思われる死亡事故が多発したことが知られている。

近代に入って、明治二〇年に井上馨邸で天覧歌舞伎が催された際に、中村福助の足が突然震え出し止まらなくなった。天覧歌舞伎中の出来事だっただけに、大ニュースになった。その後、大正一四年に乳幼児の慢性脳膜炎が鉛中毒であることが解明され、役者の手足の麻痺も鉛によることが判明した。かくして、鉛白粉の製造販売は禁止され、昭和一〇年以降には鉛白粉の姿が市場から消え去った。

戦後、昭和三五年に至ると、『薬事法』が制定され、医薬品、医薬部外品および化粧品がその規制下におかれ、『化粧品品質基準』によって、水銀、鉛、ヒ素だけでなく、メタノールやホルマリンなどの使用が禁止された。また、成分ごとに配合濃度や使用部位の制限、成分表示などが法的に制定されて、今日に至っている。

アメリカでは、一九五九年（昭三四）に、『ドレイズ法』と呼ばれる安全性試験法がＦＤＡ（食品医薬品局）から交付され、一九八〇年代にはＯＥＣＤ（経済協同開発機構）のガイドラインも見られるようになった。

なお、わが国化粧品業界の安全性に対する取組みは第二節以降を参照されたい。

第二節　駆け出し時代の思い出

この節から私の体験談を述べる。最初に安全性研究を初めた『駆け出し時代の思い出』から始める。

一　夢に鼠が出てきた話

京都に赴任して間もない頃であった。当時は、河原町姉ヶ小路東入る朝日会館裏に止宿していた。京都の冬は寒い。下宿近く三条木屋町角の焼き鳥屋で一杯飲み、焼き鳥を食事変わりに済ませてから、宿に帰り布団の上に丹前を被せて寝た。

この日は、ラットに麻酔をかけてオペを施す実験であった。オペが終わり、ラットをケージに戻す時、麻酔が覚めたラットに指を噛まれてしまった。麻酔が深過ぎると死んでしまう。適度な麻酔について考えながら眠りに入った。真夜中、大きな鼠が現われ、馬乗りになって首を絞めるのである。恐らく魘されていたであろう。目が覚めると、全身汗びっしょりで、丹前の紐が首に巻きついていた。まんじりともせず一夜を過ごした。

後日、龍安寺の石庭を見ながら夢を思い出し、「通常の目線よりも高い位置から見よ。動物を犠牲にするには、無駄に殺すことなく、世のため、人のためになるような研究に心掛けることが大切である」と悟りを開いたような気分を味わった。

二　京の年末年始

研修も大詰めとなった。これまでの研究成果を学会で発表することになり、正月休み返上で京都に居残った。澪つくしの鐘が鳴る頃、実験が終えた。今日は大晦日だ。こんな機会は滅多にない。京の大晦日と除夜の鐘の雰囲気を味わいたいと思って、京極の街を散策し、三条大橋へ向かった。橋上に佇んでいると、東山の方角からゴーンと鳴り響いてきた。知恩院の鐘かなと思う暇なく、東山全山、洛北、続いて西の方向からも聞こえてきた。三六年の元旦である。

除夜の鐘の余韻を楽しみながら、行きつけの店の暖簾を潜った。「明けましておめでとうさんどす」の声に迎えられて、一杯ひっかけると、年越し蕎麦が出てきた。

元日もデーター整理のため大学へ行った。インスタントラーメン用の湯を沸かしていると、日頃親しく付き合っている用務員さんが実験室に入ってきて「ラーメンじゃ寂しいでしょ。うちで正月料理で一杯やりませんか」と誘われ、お言葉に甘えて越前蟹を鱈腹頂いた。彼は福井県出身である。明くる日は助教授のお宅で京風お節を堪能した。

おかげで、京の年末年始の雰囲気を存分に味わいながら論文の準備が捗った。この論文はアルコール類の皮膚局所作用についてであり、低分子アルコール類は溶剤や保湿剤として化粧品に汎用されている。この論文は昭和三六年二月に発表し、日本における安全性研究の草分けと言われている。

三　安全性試験事初め

徒弟生活が終わって会社に戻ると、動物実験室の設計から始めなければならなかった。研究所の敷地が手狭なため、工場敷地内に設けることになった。実験室が完成する間、男性用化粧水の開発に手掛けながら、今後の方針を考えた。悩みは、有効性の研究から始めるべきか、安全性研究を先行させるべきかであった。結局、有効性研究は特定の商品にしか利用できないが、安全性研究は全商品が対象となるので、安全性を優先させた。

建て前は別として、安全性を選んだ裏の理由があった。入社して間もない頃、美白物質ハイドロキノンモノベンジルエーテル配合の製品開発を行った。安全性のことなど念頭にないまま、ボランティアによる使用試験を試みたのである。試験開始数週後にボランティアに皮膚障害が発生し、この開発研究を中止した。その後、他社がこの美白剤配合クリームを発売し、皮膚障害が多発した。現在では、この成分の配合は禁止されている。この苦い経験が安全性試験の方向へ導いたに違いない。今だったら、「安全性を何故始めたか」と問われれば、「顧客に安心して使って戴くため」と答えるであろう。当時は、顧客という概念がないまま、実利的な理由で安全性を選んだのである。理由はともあれ、安全性研究事初めである。

四　実験担当者の心理的負担

夢の話の後日譚である。

動物実験を始めた当初は、既に述べたように工場の一角に実験室があった。工場内のことだから女工さんたちが大勢いた。彼女たちには動物実験は物珍らしく格好の話題になった。或る日、「ウサギを殺すなんて、私にゃ出来ないね」という会話が耳に入ってきた。私でさえ、ラットの夢に悩まされたのである。ましてや、うら若い女性のスタッフに、こんな声が届かないうちに対処しなければならないと思い、男性スタッフの意見を聞くと「仕事として割り切ってはいるが、動物を殺すことには潜在的な抵抗感があり、第三者が何気なく“かわいそう”と言うのを聞くと、なんだかこちらが人非人になったような感じになる」という。

このような精神衛生上の問題の一つは内面的な個々の心理であり、今一つ第三者の風聞が外的圧力になっているのである。この解決策を人事課長と相談し、一先ず、動物実験の必要性を社内報に書くことにした。

『夢と女医さんと石庭』と題したエッセイである。前出の夢と石庭の間に女医さんを挿入した。これは虚構だが、男性でも躊躇する動物実験を女性でも高所的観点に立って動物の命を絶つというストーリーを組立てた。この社内報が出ると、人事課の人たちが工場内に根回しして、彼女たちの雰囲気を改善してくれた。その後、「鰯の頭よりましだろう」と思って、研究員たちの心の癒しの一つとして動物供養祭を行い始め、今でも年中行事に組入れられている。

第三節　研究の現場から（一）

昭和三〇年代は会社の高度成長期だった。三九年に研究所が新設され、我々の研究室は新研究所内に設けられた。それに先立ち、三八年に組織変更があり、動物実験担当が薬理研究室に昇格、研究室長に任命された。当初は研究員五名の部屋だったが、四〇年前後の頃から、製品の安全性が新聞上を賑わすようになり、安全性試験の需用が増え、収容動物数が激増するだけでなく、研究員も増え、新たにラジオ・アイソトープ実験室も含めた研究棟を増設することになった。

一　皮膚刺激試験法の確立

安全性試験にも種々ある。これについては、後述するとして、化粧品障害で最も問題となるのが、化粧品カブレであるから、カブレの研究に焦点を絞った。

1　カブレとは

カブレは、皮膚に異物が触れて炎症反応を起こした状

態であり、接触皮膚炎という。接触皮膚炎には、大別すると異物が抗原となって生じるアレルギー性皮膚炎と異物の毒性作用によって生じる刺激性皮膚炎があり、この二つの反応も光が関与して発症する場合があり、光アレルギー性皮膚炎および光毒性皮膚炎と称している。

これらの皮膚炎は、それぞれ発症機序が異なるので、それぞれの実験法を準備しなければならない。しかし、限られた人数で全てをこなすことができないので、企業責任の軽重を考慮し、アレルギー反応は個人の体質に左右される反応だが、刺激反応は化粧品の性質に依存するものであることを理由に、刺激試験法の確立を目指した。

刺激反応に目を向けると、強刺激性の物質は一回塗っただけで反応を引き起こすが、弱刺激性の物質では何回か投与を続けて、初めて反応が現れる。前者を急性、後者を累積刺激反応といい、化粧品の場合は後者が多い。京都で実習したのは、急性刺激反応を検出する試験法だったので、累積皮膚刺激試験を確立する必要があった。

2　何故、ウサギを選んだか

刺激反応の強弱は動物の種類によって異なるが、実験動物としてウサギを選んだ理由について述べる。

動物実験でヒトに生じる反応を予測できるかという問題について、研究者たちは予知性の言葉で論議しており、反応の強弱を定量的に予知可能かについては定説はなかったので、予知性とは別な観点で動物種を選ぶ必要があった。そこで、数種類の動物で刺激に対する感受性の比較を試みた。

その結果を刺激感受性の強い順に並べると、ウサギ、モルモット、マウス、ラット、ヒト、ブタであった。この結果から、ヒトよりも刺激感受性の強い動物を選べば、ヒトに危険なものを残す確率が低いと考えて、高感受性のウサギを選んだ。この選択における短所はヒトに安全な物質を篩い落とすことである。そのため、市場規模の大きい市販化粧品を対照とした皮膚刺激試験法を設定した。

4　ヒトによる皮膚刺激試験

前出試験法設定以前、昭和四〇年頃の春、新製品発売直後、皮膚障害が多発する騒ぎがあった。〝草出る頃、湿疹多し〟の格言はあるが、真相が不明なため、これを契機に動物実験だけでなく、ヒトによる試験が必須であると判断し、ボランティアによるパッチテストと使用試験を行うことにした。

ヒトによる試験は人間をモルモット代わりにする〝人体実験という批判〟があるので、経済的合理性や研究者の論理性よりも、人間としての倫理を優先させることを基本に、

①　動物実験を先行させ、ヒトに使用しても問題が少ないことを確認した上で、ヒトによる試験を行う

②　被検者はボランティアである

③　試験は医師の管理下で実施し、実験結果の客観性を維持するため、反応の評価は医師に委ねることを定めて、ヒト試験を開始した。

三　誤飲誤食対策

皮膚障害とは別に、誤飲誤食は経口毒性の問題であり、悪くすれば死亡事故の可能性を考え無ければならない。したがって、自社商品全品の経口毒性をチェックし、容器容量単位で致死量に達する商品はなかった。しかし、誤飲誤食による問い合わせの電話は、日祭日、夜間を問わずかかってくるので、毒性試験結果と容器容量から、

◎全く安心のもの

○牛乳を飲ませればよい程度のもの

△先ず問題ないが、心配なら医者に連れていくもの

×直ちに医者に診て貰うもの

の四段階に別けた商品リストを作り、実際には×印の商品がなかったので、心配なく守衛所と宿直室に常備することができた。

四　基礎研究の開始

二項で述べた試験法に目途がついたので、将来に備えて、薬効薬理と組織化学の修得のため逐次、研究員を京大に派遣した。一方、研究室内では、化粧品原料の化学構造と皮膚刺激性間の相関性に関する研究を行わせた。

これらの研究成果を学術誌に年2回強のペースで論文を投稿し、また、四三年の国際化粧品技術者会総会で、私の学位論文となった『界面活性剤の刺激反応機序』を発表した。更に四四年の薬理学会総会で『諸種起炎物質の作用機構』のシンポジストに選ばれ、前出の『皮膚刺激感受性の種相違性の研究』を日本化粧品技術者会で部下たちに発表させ、最優秀論文賞を獲得した。これらの研究成果は同業他社より数歩先んじていたので、研究員の士気高揚に役立ち、自社のPRにも貢献したと自負している。

この当時の他社動向を見ると、資生堂は三〇年代中頃から安全性研究に力を入れ始め、四三年の皮膚科学会総会のシンポジストを勤めた。四〇年代半ば頃には、花王や鐘紡も安全性研究に力を注ぎ始めたと聞いている。

第三節　閑話休題

昭和四五年に学術室長に配置換えさせられたが、業務の一つに外部折衝があったので、安全性の仕事が絶えなかった。

一　ペンはペテンより汚し

学術室長の椅子に座ると、早速、好まざる客がやってきた。〝ペン害〟である。暴露本『化粧品の秘密』が出

版され、書中、「某社の研究者は『マウス、ウサギなどの実験動物を使って毒性テストを行い、安全性を高めるように気を配っています』と語っている。だがサル以外の実験動物には汗腺がない。皮膚に直接つける化粧品のテストを汗腺のない動物に試みる。これこそ、全くの茶番である。実験でも観察でもない。科学の冒涜に過ぎない」と書かれていた。この某社の研究者は私である。

著者平沢の来訪を受け、前述した安全性試験のプロセスを説明し、ウサギ選択の理由、ヒトによるパッチテスト、使用試験について紹介した。ところが、彼は汗腺のことを一言もいわずに、「メーカーが自社製品のテストをするのだから都合のいい結論しか出さない」と悪口雑言を書き連ねていたのである。彼の論理でいえば、会社で行う品質評価試験は全てでっち上げということになるので、こんな偏見は無視するしかない。

二　化粧品皮膚障害訴訟

訴訟の反論資料を作った体験を述べる。

原告弁護士は提訴すると、直ちにマスコミにレリースしたので、"やり方が卑怯だ、弁護士風情に負けるものか"と闘志を掻き立ててことに当った。

訴状をみると、冒頭に「安全性について十二分に配慮すべきである」と書かれていたので、「十二分とは何か。わが国は法治国家である。安全性については、薬事法を遵守し十分条件を満たしたうえ、法に定めがないにも関わらず、試験を行い安全性について十二分に配慮している」と反論したのを皮切りに、

①　「訴状には『A病院皮膚科でも、パッチテストの結果が陽性になったので、原告のカブレの原因は該化粧品である』と記載されているが、複数を示す助詞"も"とあるので、A病院以外の病院名を挙げよ。答えられないならば、訴状自体の信憑性を疑わざるを得ない。何故ならば、添付資料が示すように、一回のパッチテストだけで原因物質を特定できないからである。したがって、本件は訴点不在の訴訟であると主張した。

②　「訴状に『A病院皮膚科医が内科で内臓疾患を診て貰えと言ったので、内科を受診し『異常がない』と言われたとしているが、診断書には『内臓下垂症』と記載しているにも関わらず『異常がない』と言うのは虚言でしか有り得ない」と反駁した。

③　それとは別に、原告は、接触皮膚炎の診断書を添付して、『B医師が温泉治療を奨めたので、その際の費用も弁済…』と訴えているが、接触皮膚炎に温泉療法を奨めるはずがないので、B医師に確認すると『内臓下垂が疑われたので、内臓を治さなければ、皮膚炎が再発する可能性があるから温泉に入って元から治しなさいと指導した』と言っていた。温泉治療の目的は原告の体質改善であり、訴点の対象外である」なども指摘し、結論としては、原告の訴状取下げで幕が閉じた。

三　パッチテストの資料を追って

市場における皮膚障害の実態を知る一つの手段として、皮膚科医が行っているパッチテストのデータが参考になる。学術誌や皮膚科医から得た資料が集まってくると、化粧品用タール色素・黄色二〇四号と赤色二一九号の陽性率が高いこととハロベンゼン誘導体が光パッチテストで陽性になることに気付いた。光パッチテストは光アレルギーや光毒性反応を検出する試験法である。

折りしも、大阪大学皮膚科から、当社の頬紅でアレルギー性皮膚炎に罹った患者で原因成分を調べたいので協力して欲しいという連絡を受けた。この頬紅の成分を試験し、黄色二〇四号が陽性反応を呈したので、頬紅の処方変更を提案し、会社は頬紅を市場から引上げることにした。これらの対応が済んで間もなく、黄色二〇四号と赤色二一九号の配合禁止が通達された。

四　治療システムの整備

研究所の安全性対策が充実しても、皮膚障害"0"の製品開発は不可能であり、顧客に皮膚障害が生じた場合、一刻も早く疾患を除くことも安全性対策の一つであると考え、消費者部と連携して、皮膚科医による全国的な治療システムを整備することにした。治療システムは社内用語である。

システム設置に当って、基本的には

①　全国販社ごとに二名の相談医を置く
②　顧客の希望に基づき相談医を紹介
③　治療に要する諸経費は会社負担
④　極力、原因商品を確認し、自社品の場合は原因成分分解明に協力

を定め、システム整備に奔走した。

第五節　研究の現場から（二）

昭和五二年、安全性研究室長として研究現場に戻り、五八年に品質研究部長を勤め、安全性研究の総決算をすることになった。

一　新規成分配合製品の開発

化粧品製造には厚生大臣（現厚労相）の認可を必要とする。製造許可申請に当って安全性資料は不要だが、昭和五一年の薬事法改訂以降、新規成分配合化粧品では、薬事審議会審査用の安全性試験等の資料添付が義務付けられるようになった。

この時期、当社では新規成分配合製品が続けて開発された。五二年に牛血液成分ＢＢＣ、五四年にはヒアルロン酸であった。これらの新規成分について提出する必要

のある安全性試験の種類を羅列すると、

急性毒性、亜急性毒性、慢性毒性、生涯毒性、催奇形性、突然変異原性、抗原性、皮膚粘膜刺激性、癌原性、吸収性、体内分布、代謝、排泄など

であり、これらの試験を全て実施すると、普通、十年以上の研究期間を必要とする。

1　BBC開発

次期ドル箱商品にBBCをPRポイントにするべく研究が進んでいた。ところが、発売予定一年前に、審議会審査を必要とする新規物質であることが判明した。

BBCは消化性潰瘍治療薬として開発され、医薬品用の安全性成績は揃っていたが、皮膚の安全性に関する資料が欠けていた。これらの試験を普通に行えば、最低一年くらい要すると思われた。だが、申請書提出まで数か月しかなかったので、この期間内に所定の試験を全て実施できるか必死に考えた。

火事場の馬鹿力を発揮して、試験を省略せずに期間を短縮するには、一群の動物から複数の情報を得ることに思い至り、累積刺激、感作、光毒性、光感作および経皮的亜急性毒性に関する資料を同時に得られるプロトコール（実験計画書）ができ上った。

しかし、初めての試みである。実験が順調に進むのか、審議会を無事通過できるのか、不安は多々あったが、ドル箱商品の開発ということもあって、社長が兎に角やってくれ、駄目な時は改めて考えるからということで賭け勝負に出た。結論をいえば、審査が通り、製造も認可され、会社にとって万々歳であったが、私はこの間の過労が祟り、一か月間欠勤する羽目に陥った。犠牲にした数百匹のモルモットの怨念だったかも知れない。

2　ヒアルロン酸開発

現在では、ヒアルロン酸の名前を知らない人がいない程、広く使われているが、当時は未だ新規物質であり、使用に当ってはBBC同様、薬事審議会の審査を必要とした。

ヒアルロン酸については、安全性だけでなく、有効性についても検討することになったので、「ヒアルロン酸は皮膚表面に保湿性の塗膜を作り、乾燥皮膚の保護ならびに皺の伸張、言い換えれば老化皮膚を隠蔽する効果があるはずである」と予測して、プロトコールを作った。安全性については、BBC同様の資料に加えて、ヒアルロン酸の成膜性により皮脂腺や汗腺を閉塞して、ニキビ様あるいはアセモ様の皮疹発症に関し検討した。

ヒアルロン酸は愛い奴であった。研究が進むと、予測した物性や効果が次々と証明され、薬事審査も難なく突破でき、ライバル会社より先に製造許可を得ることができた。

二　黒皮症とハプテン

昭和四〇年代に女子顔面黒皮症患者の集団訴訟があり、業界にとって戦後最悪の事件であった。この疾患については、阪大皮膚科の人たちが、赤色二一九号の類縁物質を黒皮症患者にパッチテストし、この原因が二一九号中の不純物質1フェニル・アゾ・2ナフトール（スダンI）であることを解明した。これを契機に色素メーカーは色素を精製するようになり、黒皮症の患者が激減した。

それはそれとして、その当時の臨床的なパッチテストで陽性を呈した物質群をみると、化学構造が共通する二つの系統に分けることができた。当時は未だ、抗原と化学構造という見方が少なかったので、接触皮膚炎学会で『化粧品原料と皮膚反応』と題して講演することになり、接触原となる化粧品原料の化学構造との関連を紹介した。この項では、化粧品成分でハプテンとなる二つ物質群について述べる。なお、接触原は“接触皮膚炎の原因物質”のことである。

アレルギー性皮膚炎はハプテンと蛋白質が結合して完全抗原が生じるので、蛋白質との結合という観点で化学構造をみると、

①　金属配位による抗原形成仮説：スダンIや黄色二〇四号、紫外線吸収剤のチヌビンPなどは、金属を配位して安定なキレートを形成し、金属を介して蛋白質と結合し抗原となる物質群である。一方、スダンIの異性体1フェニル・アゾ・4ナフトールは金属配位し難い化学構造のため、パッチテスト陰性であった。

②　フリーラジカルによる抗原形成仮説：色素エオシンや殺菌剤ビチオノールなどのポリハロゲン化誘導体は、光パッチテストにより陽性反応を示す。ベンゼン核などに結合したハロゲンは光照射によってフリーラジカルになり易く、フリーラジカル形成に伴って蛋白質と結合し、光アレルギー反応を導く。強感作物質として知られるジニトロ塩化ベンゼンは光照射有無に関わらず、ニトロ基の電子吸引性によって塩素を離脱させ、ジニトロベンゼン・ラジカルを形成する。

第六節　安全性対策論

品質研究部長だった当時、それまでの経験を生かし、社内の品質保証システム構築に際して、その一環として『安全性対策論』を提出したが、その完成を見ずに定年退職したので、『化粧品対策論』を述べて総決算とする。

一　安全性対策の前提

どのような製品でも、製品品質の構築には安全性に限らず、消費者の立場に立って考えなければならない。消費者は商品を購入する際に、「有効であるから使用し、使用するからには安全でなければ困る」と考えているの

が基本であるから、安全性対策のためには、リスク・ベネフィット・バランスに配慮する必要があり、有効且つ安全な品質として有用性の概念が生まれた。

このようなことから、安全性対策の前提を素直にみれば、化粧品は“人が使用するもの”であり、その安全性とは“人が安全に使用できる化粧品の性質”であることはいうまでもない。しかし、“安全”は抽象語でしかないので、具象的に“人に好ましくない効果を発揮させない性質”といい換えて定義する必要がある。

この定義を大前提にすると、化粧品の安全性対策上、重要な前提は「化粧品は企業規模で量産され、かつ不特定多数の人が主として皮膚に長期間連続使用するものである」ということになる。それゆえに、安全性対策の背景として、

① 不特定多数の人の使用状況と
② 不特定多数の人の皮膚を知った上で
③ 化粧品の量産に基づいて、安全性に係わる何如なる社会現象が生じるかを考えなければならない。

二　安全性対策の背景

前項で指摘した化粧品の使用状況、皮膚の構造と機能ならびに量産と社会現象について説明する。

1　化粧品使用の状況

不特定多数の人による化粧品使用の状況をみると、健常人が主として、健常皮膚に長期連用するのが一般である。しかし、このような一般的使用のみであるとは限定されず、現実的には乱用とか、特殊条件下の使用にも心を配る必要がある。

乱用のケースとしては、沢山使用すればよくなるという心理などによって、品種あるいは使用量の点で過剰に用いるとか、本来の使用目的から外れた使い方をしたり、例えば、ヘアトニックを顔につけたりする誤用もある。そして誤用には、必然的なものと偶然的なもの、ならびに作為的（意図的）なものと非作為的（ケアレスミス的）なものがあると見なければならない。

特殊条件下での使用例としては、過剰な日光曝露下での使用、疾患部や損傷皮膚への使用、抗炎症剤との併用などがあり、そのほか保管の不備、例えば日当りのよい鏡台の上に、化粧品に蓋をしないまま放置してある場合も見受けられる。

2　皮膚の構造と機能

安全性の立場から、化粧品が長期間連続使用される不特定多数の人の皮膚について、その構造と機能を知っておく必要がある。

皮膚の構造と機能は、①遺伝によって固定された性、人種、家系、個人の別により多様であり、また、②年齢、栄養、内分泌、職業、風俗、自然環境などの影響による後天的なものによっても可変流動的になる。

したがって、不特定多数の人における皮膚の構造の多様性と可変流動性は、人によって、また場合によって、皮膚反応に抵抗的（反応が出にくい状態）であったり、あるいは皮膚疾患の準備状態（疾患が生じ易い状態）であったりする。たとえ前述の一般的使用のようにみえる状態であっても、安全性対策上、皮膚疾患を起こしやすい疾患準備性の皮膚に対する対応も重要である。

3　量産と社会現象

前項で述べた使用上の問題点、ならびに皮膚の多様性と可変流動性からみても、人に対する“好ましくない効果”を完全に阻止することは不可能なので、安全性に係わる社会的な現象にも目を向ける必要性が生まれる。

まず、使用の場（市場）では、人（消費者）は“美への願望”によって化粧品を使用するのが基本であるが、化粧品使用人口は極めて膨大な数にのぼり、好ましくない効果を完全に避けるのは不可能であるので、美を損なう現象が低頻度とはいえ発生する。この現象は、消費者の願望とは逆方向であり、そのような現象が生じれば、不満の形で現れる。

一方、当然なことながら企業は利潤を求めなければならないので、量産と供給拡大を図ることが宿命である。その結果の消費拡大は、率の上では一定だが皮膚障害件数の増加となり、不満をもつ者の数が増大する。したがって、消費拡大は個の不満を量の不満に変換させ、不満が社会性を帯びることになる。

また、わが国は終戦後、民主主義の国となるとともに、消費者主義が台頭し、社会性を獲得した被害者の結束を促すことになって、化粧品の安全性に関する問題が、社会運動にまで発展した歴史を持っている。その結果、企業に対しインパクトを与えたものとして、化粧品皮膚障害訴訟や薬事法の改定などの薬事行政的強化がみられるような経緯があった。このように安全性問題は、社会的現象を誘導し得る性質があることを銘記しておく必要がある。

三　安全性向上システム

以上に述べたような、消費者、企業、行政などを含めた様々な社会的要求を満たすには、全社が一丸となったトータルシステムを構築しなければならない。

1　トータルシステムの必要性

従来、化粧品の安全性対策は、化粧品の物質論、あるいは科学技術論的内容に目が向けられがちであった。それは市場において生じた問題のうち、物質論的手段によって証明され得る、より確実な論拠を有するものをもってすれば、その鉾先を鋭く企業側に向けることが可能なため、企業側にとって、反論の余地が少ないからにほかならない。

しかし、科学技術的な対策だけでは、自ずと限界があ

る。例えば、自動車は安全に使用すれば極めて有益な道具であるが、使用法を誤ったり、悪用したりすれば、自殺や殺人の凶器にもなり得る。前述の安全性対策の背景で明らかにしたように、化粧品においても、使用法などのソフトウェアも大切である。著者の経験では、科学技術論のみにその対策を委ねると、多くの技術者は、その責任の重さからヒト使用における安全性ではなく、毒物学のための安全性に流れがちになる性向を有しているようである。

2　社会システムとしての薬事法

化粧品の安全性対策上、社会システムの一環として薬事法を考えることが重要であり、また企業で考える安全性の第一歩は、薬事法の遵守である。薬事法では、安全性確保の目的で、①製造承認時の危険物使用拒否による未然防止、②成分表示と注意表示による用時の安全確保、③副作用報告、販売の一時停止ならびに承認の取消による副作用の再現あるいは拡大の防止を定めている。

3　市場品質の構築

安全性は品質の重要な要素であるが、社内的には市場品質構築フローの一環と位置付けられるので、市場品質構築のフローに触れる。商品購入という行為は、商品という物質を購入しているが、その本質は商品の性質である"品質を購入する行為"であり、品質のない単なる物質を購入することはあり得ない。したがって、商品開発は、物づくりではなく品質づくりであり、市場品質をいかに構築するかが重要になる。

このようなことから、化粧品の品質は、市場におけるユーザーとの係わり合いで考えるべきであり、商品価値は、人が使用することによって生じた様々な効果に基づいて評価されるものである。この人の使用によって生じた効果を市場品質とみなして、化粧品の品質構築を行うべきである。

市場品質の構築は、企画品質の設定に始まる。企画品質は、市場ニーズを反映した概念的効果からなる。この概念的効果を具体的な現象に置換し、現象に対する期待値を設定する（設計品質目標）。この期待値に向かって設計研究が行われ、評価試験によって期待値への到達の程度を把握する。しかし、期待値への到達の程度は多様であり、その上、目標品質に設定されなかった効果をもたらすこともある。それゆえ、試験によって評価された効果を設計品質として設定する。それは企画品質と基本的には一致するものでなければならないが、企画品質とは異なった品質設定となることもあり得る。

次に、設計処方を基に、製品が量産され、設計品質に幅を持たせた製品品質が設けられる。販売段階になると製品品質に加えて、名称、価格、使用法などの品質が負荷されて商品品質となる。商品は使用されるという現実を想定して設定されたものであるが、それは市場品質と

は似ていても非なるものである。すなわち、商品品質は、その構築過程で実験などの評価を受けたものであるが、あくまでも仮説に基づいた、あるいは設定された品質であり、市場品質は、使用という現実を通した結果の品質であることを弁えなければならない。設定と現実が完全に一致することは理想であるが、それは至難の業である。

したがって、化粧品の品質は、人の使用によって生じた効果であるから、市場を監視することにより市場に生じた効果の情報を集め、その解析を行い、市場品質と商品品質の類似性と相違性を適確に把握して、品質の維持向上に努力することが要求される。

4　社内における品質向上システム

市場品質構築のフローから見て、品質の維持向上システムは、品質管理論でいわれる、プラン（企画、設計）、ドゥ（製造、販売、使用）、チェック（監視、サービス、調査）、アクション（情報管理）の回路システムで運営することが望ましく、このような機能的サブシステムの役割を簡述する。

企画：市場情報の解析結果により、リスク・ベネフィット・バランスを総合的にみて、商品品質体系、および個々の企画品質を設定。

設計：①品質試験法の開発改良、②原料情報の確保、③設計品質目標の設定、④設計研究の実施、⑤設計処方の評価、ならびに⑥設計品質の設定。

製造：①危険物混入の阻止、②生産工程における品質変動要素（原料のロット変動、製造条件など）の把握、②製品品質の設定。

販売：①使用法などのソフトウェアの開発、②商品品質の設定、③顧客への品質情報の提供、④販売員の知識、教養、誠意など。

使用：企業内システムではないが、商品品質情報と個人特性を踏まえた正しい使用。

監視：①市場における効果の把握、②事故の場合は、事故の悪化、再発、拡大の防止。

サービス：①市場における使用法などの把握と教育、②特に事故の場合、事故内容の把握、治療、補償。

調査：市場品質情報の収集、調査、解析。

情報管理：①各サブシステムにおける情報の収集、整備、解析、②各システムの情報を企画にフィードバック。

これらの機能システムを職務分掌上どのようにするかは、それぞれの企業体の状況を勘案して適宜に処理すべきものである。

むすび

『化粧品の安全性』と題して、成功物語を綴ってきたが、安全性評価の研究を、裏返せば"毒性研究"であるから、決して楽な道ではなかった。苦労話を述べれば切り

がないので、愚痴はさておき、最近では、動物愛護を標榜して、動物実験に変えて“ヒト皮膚の培養組織”を用いる実験法が採用されるようになり、私たちが確立した安全性試験法は過去の産物となった。だが、動物実験を初め、安全性試験は極めてエクスペンシブなため、中小企業では実行が困難であったことが現実であった。この観点に立てば、安価な試験法が開発されたことは、化粧品の安全性を高めるうえで喜ばしいことである。だが同慶の気持とは別に、負け惜しみのようではあるが、「私たち同世代の研究者の努力なしに、新しい試験法は絶対開発されなかった」ことを主張して本稿を閉じる。

参考文献

鈴木守、化粧品のルーツを訪ねて、まんじ、一〇七～一一九号、二〇〇八～一一

飛鳥美人こだわりのメーク、朝日新聞日刊、二〇〇四・六・一二

鈴木守、化粧品の安全性対策における一考察、化学工業、三三巻五号、一九八二

鈴木守、化粧品における生物科学の進歩―安全性から有用性へ―、フレグランス・ジャーナル社、一九八七

鈴木守、化粧品の安全性、―安全性対策論と製品開発―、東京都薬剤師会雑誌、一一巻一二号、一九八九

鈴木守、コスメトロジーの実践、幸書房、一九九四

鈴木守、香粧品の安全性―香粧品原料による皮膚反応―、皮膚増刊九号、一九九〇

房総東往還道を歩く

山田嘉久

房総の街道

古来より房総三国（安房、上総、下総）は東海道に属していた。一方、江戸を中心とした武蔵国は律令国家が形成された八世期初頭には現在と違って、東山道に属していたので、当初の東海道は相模国の三浦半島から江戸湾を横切って房総の上総国（安房国は七五七年までは上総国に所属）に達していた。

当時の武蔵国と下総国の境の中川低地付近は全体が湿地帯で歩行が全くできず、船に頼るほかはなかったからである。

この結果、現在と逆に房総半島南部がより京に近いため「上総」、遠い北部が「下総」と命名されたことはつとに知られている。

近世になって、江戸から房総への道はいくつかあるが、公式の街道ともいうべき道は日光道中に付属する水戸佐倉道であった。房総の諸大名は参勤交代のとき原則としてこの街道の利用を義務付けられていた。

街道は日光道中千住宿で分岐して水戸道と佐倉道に分かれるが、佐倉道は小岩、市川関所を通って江戸川を越え、八幡、船橋、臼井を経て佐倉に達する。近世中期以降は成田参詣が盛んになったので、「成田道」（六十四キロ）といわれるようになった。

また、行徳船と呼ばれる川船により房総に達する方法もあったが、これも最終的には佐倉道と合流することになる。

特異な街道として「東金御成街道」がある。下総船橋から上総東金に達するほぼ直線の道（三十六キロ）である。この街道は慶長十九年（一六一四）に造成されたもので、その目的は徳川家康の好んだ鷹狩りのためと伝えられるが、実際には軍事道路だったようだ。

そのほか松戸―布佐間の「なま（鮮魚）街道」（二十八キロ）、行徳―木下間の「木下街道」（三十六キロ）、木下

―銚子間の「銚子街道」（八十キロ）はいずれも住民にとっての重要な生活道路であった。

南部を代表する街道に内房沿いを通る「房総往還道」がある。佐倉道の船橋から幕張、寒川、浜野、五井、姉ヶ崎を経て木更津に達する。さらに南下して北条、館山に至る街道をいう。全長百二十キロ。

江戸湾沿いの住民が江戸へ出るときにはこの街道を利用したが、それよりも多くは内房沿いの港から船を利用していたようである

元禄三年（一六九〇）、幕府は江戸に送る年貢米などの物資を積み出す河岸や湊を全国に指定した。房総でも十五湊が定められたが、その殆どが内房沿いだった。（下総では検見川湊、曽我野湊、上総では木更津河岸、勝山浦など）

一方、千葉市内の南部にある浜野から房総半島東回りで茂原、一宮、勝浦、安房小湊を経て、房総最南端の館山に至る古道が「房総東往還道」である。

太平洋沿いの住民にとっては、波荒い外洋を利用することが困難なため、「房総東往還道」が唯一の江戸に通じる道だった。

また、生実の森川出羽守や一宮の加納駿河守といった房総小大名の参勤交代の道でもあった。

私は平成二十一年三月から一年半をかけて、百五十四キロに及ぶこの古道を歩いた。（日程表末尾）

一　生実城址と小弓城址（千葉市中央区生実町）

千葉市の南部生実の地は、古来から房総西回り（房総往還道）と東回り（房総東往還道）の分岐点として交通の要衝地であった。

またこの地には室町時代、千葉氏の一族原氏によって築かれ本拠地となった生実城があった。

十六世紀の始め、此処を拠点に、房総に君臨し、古河公方に対抗したのが小弓公方足利義明である。

義明は古河公方足利政氏の次男だが、はじめは僧籍にあり鎌倉鶴岡八幡宮の別当職などをしていたが、そのうち父政氏と対立するようになり関東各地を転々としていた。

そして永正十五年（一五一八）に上総真理谷武田氏の招請に応えて生実に御座所を移した。

ところで義明を招請した真里谷武田氏とは甲斐武田氏の分族であり、その始祖は有名な信玄の五代前に当る武田信長であるといわれる。以後房総では武田氏は真里谷武田氏と長南武田氏に分かれたが、両武田氏でほぼ上総全域を制圧するに至る。

したがってその武田氏と古河公方の血筋という義明が結びつくことによって、房総全域を両者によって支配することを目論む。まさに「国盗り物語」房総版である。

上総を完全に支配下においた義明は、更に安房の里見氏に圧力をかけ、里見義堯を従わせることにも成功した。

その後、義明は自ら鎌倉に入って公方となり関東に号令したいという野望に燃えていたが、結局は相模小田原を拠点として関東進出を狙った後北条氏によって滅ぼされた。（国府台合戦）

勝ちに乗じた北条軍は国府台より南下し、生実城に入った。この合戦で義明に味方した里見氏（義堯）は敗れ、生実城にいた幼少の遺児たちを連れて安房（久留里城）にようやく逃げ帰った。

後北条氏から「里見水軍」として怖れられた里見氏もこの合戦以来、急速に弱体となってゆく。そして秀吉の小田原攻めに際して、房総諸大名のほとんどは後北条氏に従ったが、里見氏のみは秀吉に味方した。しかし遅参したという理由で秀吉の怒りを買ってしまうが、家康の仲介で秀吉の怒りは解けたものの、里見氏は上総国を没収され、領国は安房一国に削られてしまった。

その後、里見忠義の代に伯耆国倉吉に転封となり、忠義はその地で憤死、里見氏は滅びた。

このように、今から五百年ほど昔の戦国時代後半の千葉南部は房総の里見氏、武田氏と千葉氏、それに小田原の北条氏が覇権を争う舞台であった。

特に多くの歴史の舞台となった生実城（北小弓城）ではあるが、その南わずか一、二キロに同じ呼び名の小弓城址がある。当初は此方の方が本家と考えられていたが、最近の研究では生実城址説が有力であり、小弓城は生実城の出城であると考えられるようになったようだ。

生実城は北と南に谷津を配し、西は断崖で蘇我野を望む要害の地であるが、今、城址には大手口跡だけが残っているに過ぎない。当時は南北約八〇〇m、東西七〇〇mの規模であったという。

その生実城も江戸時代になると、城の一部が陣屋に改められ、寛永四年（一六二七）から幕末までの二四〇年間、幕府の要職についた森川家の城下町として、また房総往還を臨む交通の要衝として生実町は栄えた。

房総で江戸時代初期から明治の版籍奉還まで続いた大名は、僅かに生実藩一藩のみであった。

生実藩は寛永四年、森川重俊が一万石を与えられ、北生実村に陣屋を構えて成立する。重俊は関が原の戦いに参戦し、秀忠の将軍宣下に供奉する栄誉を受ける。しかし大久保忠隣事件に連座して失脚、のち許されて生実に入封した。

寛永五年、老中となり出羽守に叙任したが、同九年秀忠の死去に際して殉死した。

この重俊の菩提を弔うために二代藩主重政によって建立され、以後代々の菩提寺となったのが、陣屋の隣り合わせの重俊院である。森川氏は譜代大名には珍しく廃藩置県までこの地を領し、歴代藩主と一族の墓碑もこの寺にある。

仏殿奥の裏山には、いずれも舟形をした十三代にわたる累代の墓碑が並んでいた。

二　隠れ日蓮宗（不受不施派）と七里法華（千葉市、茂原市）

房総は日蓮の生まれ故郷であるため、半島一円に日蓮宗の寺院が夥しく多い。当初は他宗の寺院であったものが、後に日蓮宗に改宗した例も数知れない。（清澄寺や日運寺など）

日蓮は貞応元年（一二二二）、安房国東条片海（現鴨川市）の漁師の子として生まれた。幼名を善日麿といい十二歳までこの地で暮らした。

今、この地に建つ誕生寺（日蓮宗）は日蓮の弟子日家が、興津城主佐久間重貞の支援を得て、建治二年（一二七六）に創建されたのが、当山の始まりである。

その後、明応七年（一四九八）、元禄一六年（一七〇三）の二度の大地震、大津波の天災にあい、現在の地に移った。しかも宝暦三年（一七五八）の大火により仁王門を残し全山を焼失した。

その仁王門（県文化）は宝永三年（一七〇六）に建てられ県内で最大級のものである。

楼上にある般若の彫刻は左甚五郎の作と伝えられる。

さて、十二歳の日蓮は、標高三七〇mの清澄山にある清澄寺（現鴨川市清澄、天台宗）にのぼり一六歳で得度、題目をとなえ布教活動をはじめた。

清澄寺は宝亀二年（七七一）に創始し、慈覚大師円仁によって再興され、天台宗の寺としたという。戦国時代には里見氏の保護を受け、江戸時代には徳川家康も帰依して一時真言宗の寺として再興され、その後日蓮宗に改宗されたのは、比較的新しく戦後の昭和二四年（一九四九）のことである。

私が最初にこの寺を参拝したのは、戦前、近く出征する実兄とともに武運長久を祈った中学生のときだったが、その時は、真言宗の寺だったことになる。（なお、実兄はまもなく台湾沖で戦死した。）

境内には多数の文化財、天然記念物がある。

仁王門をくぐった正面には、根回り十四m、樹高四四mの「清澄の大スギ」（国天然）と呼ばれる全国でも有数の巨木がある。

日蓮は比叡山、高野山などで修業を重ね、法華宗こそが仏教の神髄であるとの信念を持ち、建長五年（一二五二）、故郷の清澄山の旭の森頂上で題目をとなえ、日蓮宗を開宗した。

その後、清澄寺を追放された日蓮は鎌倉に入り、文応元年（一二六〇）、有名な「立正安国論」を著した。（現、下総市川の中山法華経寺に伝わるものは、日蓮が鎌倉幕府に提出したものの控えで、日蓮の真筆とされる。千葉県では数少ない国宝）

文永五年（一二六八）に日蓮の予言とおり元からの国書が届くと、日蓮はその意を強くし、他宗をいっそう激しく攻撃した。

このため幕府から弾圧された日蓮は佐渡に流された。

三年後、流罪を解かれた日蓮は甲斐身延山（山梨県）にはいり、此処で弟子の指導に当たった。

弘安五年（一二八二）、病気療養のため常陸国（茨城県）へ向かう途中、武蔵国の池上宗仲の館（現、池上本門寺）で波乱の生涯を終えた。

誕生寺の近くにある妙蓮寺は日蓮の両親の廟所（墓所）である。前述のとおり、建長五年（一二五二）に立教開宗した日蓮は、まず第一に父母を教化し、父に「妙日」、母に「妙蓮」という法名を与えた後、自らを「日蓮」と名乗るようになった。

日蓮は入滅のとき、日照、日朗、日興、日向、日頂、日持の六僧を本弟子と定めたので、以後それぞれの弟子は分派し門流を作った。

中世の日蓮集団には「法華を信じない者からは経済的な支援を受けず、施さない」とする不受不施と「王侯貴族からの布施は特別であるから受ける」とする受不施の二つの立場が存在した。

文禄四年（一五九五）九月に豊臣秀吉が京都方広寺の大仏開眼で千僧供養を行うに際して、日蓮教団にも百人の出仕僧を命じてきた。このとき京都妙覚寺の日奥は「国主も人民も仏法の前には同一であるから、供養会に出席すべきでない」と主張した。

一方、参加する僧も多かった。秀吉は不参組を抑圧することはしなかったが、これを契機に教団内では対立が激化する。

家康の時代に入ると、幕府は日奥を対馬に流罪処分した。その後も幕府による不受不施派への弾圧は続き、寛文四年（一六六四）には「寛文の惣滅」と称して茂原騒動が流罪となった。

特に天保十一年（一八四〇）の弾圧は下総、上総二十六ヶ村、五十二寺、牢死した僧、信者三十一名、改宗を誓約させられた者百三十三名に及んだという。

このように、江戸時代を通じて、不受不施派はキリスト教と同じく「邪宗門」と位置つけられて、公認された明治時代まで弾圧を受けた。「隠れキリスタン」と同様、彼らは「隠れ日蓮宗」として抵抗を続けたのである。

彼らは村々の庵に隠れ部屋を作り、生垣の迷路や抜け道により、潜伏して信仰を守った。

五日堂（千葉市緑区誉田）の在る場所は幕府から弾圧された不受不施派の指導者日浄が、寛永十二年（一六三三）に磔、斬首された場所である。信者は日浄の供養のため、五輪塔を作ったが、幕府の目を恐れ土中に埋めた。

その後も日浄の教えは村の人々のよって密かに受け継がれた。

解禁後の明治十一年、五輪塔が掘り出され、日浄の命日をもって五日堂といわれた。現在、堂は傷んでしまったため、新たに公会堂を建ててある。

近くにある恕閑塚は日浄（号、恕閑）を葬った所。

上総、下総地域は備前国（岡山県）と並んで不受不施派が多く存在したことで知られるが、房総にはもう一つの不屈の宗派が存在していた。

通称「七里法華」といわれる宗派である。

七里法華とは、戦国時代初期の上総国土気城主酒井定隆が行ったとされる宗教政策をいう。当時下総国中野城（現、千葉市若葉区中野町）にいた定隆が武蔵国品川の妙蓮寺の住職日泰上人（一四三二―一五〇六）と同船した際、海が荒れたのを、日泰が修法により海を鎮めたことから、定隆は日泰に帰依し、「もし将来自分が一国一城の主となったら領内の民をみな法華宗に帰依させよう」と約束した。

その後、酒井は土気城主となるにおよび、領内（七里四方）に法華宗への改宗令を出したと伝えられる。

そのため現在でも、酒井氏の領地であった千葉市緑区、山武市、茂原市、市原市の一部などには、この派の寺院が多く残っている。

この地域には、元もと真言宗などの宗派からこの派になかば強制的に改宗させられた龍鑑寺（茂原市）、法光寺（東金市）、正法寺（大網白里町）などがある。

また茂原市内には上人塚、経塚などと名付けられた小字名が多いが、これは酒井氏の改宗命令に従わなかった僧侶が生き埋めにされた塚であるといわれている。

千葉市緑区蘇我にある本行寺は日泰創建の寺で、「上総七里法華」の根本道場となった。また近くの本満寺も日泰が開基したもので、京都の妙満寺の末寺で顕本法華宗に属する。第八世日清、十二世日宏等と数代にわたり、江戸幕府の禁ずる宗教活動に関わったため、幕府より弾圧された。

この派は不受不施派のような教団を組織せず、信者各自が表向きは幕府公認の宗派の寺請けしながら、ひそかに日経らの曼荼羅を自分の家の納戸等に掲げて崇拝するという方法をとった。それを内証題目講と称した。

不受不施派や内証題目講が信仰の自由を獲得したのは明治六年（一八七三）以降のことである。

三　房総における荻生徂徠―徂徠勉学の地（茂原市本納）

JR本納駅近くに「荻生徂徠勉学の地」（県史跡）がある。

徂徠は江戸時代中期に儒学の古文辞学派の祖となり、当時の思想に大きな影響を与えたが、此処本納の地は若き日の徂徠が逆境にあって勉学にいそしみ、後の大成を培った記念の地である。

彼自身、その著書「政談」のなかで、本納の生活が彼の人間形成上、重要な意味をもっていたことを自ら語っている。

また、徂徠は終生「上総訛り」が取れなかったという。

徂徠は寛文六年（一六六六）、江戸二番町に生まれたが、父方庵が時の将軍綱吉の咎をうけ、家族と共に母の実家である本納の地に移り住んだ。徂徠はここで林羅山の著「大学解」などの漢籍を学んだ。元禄三年（一六九〇）に赦免された父とともに江戸に帰った。

元禄九年（一六九六）、徂徠三一歳のとき、綱吉側近で側用人である柳沢吉保に抜擢され、十五人扶持を支給され彼に仕えたが、のち五百石取りに加増されて政治上の諮問に応えた。しかし宝永六年（一七〇九）、徂徠四十四才のとき、吉保の失脚にあって柳沢邸から日本橋茅場町に居を移し、私塾を開いた。

やがて享保七年（一七二二）以後は八代将軍吉宗の信任を得て、その諮問にあずかった。追放刑の不可を述べ、これに代えて自由刑とすることを述べた。豪胆で自ら恃むところ多く、中華趣味をもっており、中国語にも堪能だったという。

多くの門弟を育てて享保十三年（一七二八）に死去、享年六十三。

徂徠を有名にしたのは、赤穂浪士の討ち入りをめぐっての幕府内外の議論からである。林鳳岡は「復讐論」を著し、浪士たちを賛美した。また幕府儒官を勤めた室鳩巣は赤穂浪士の主君に対する忠誠心を強調し、「赤穂義人録」を書き、彼らの行為を義挙とした。

それに対して徂徠は「義は自分を律するための道であり、法は天下を正しく治めるための基準である。赤穂浪士の行為自体は義に叶うものであるが、私の論理に過ぎない。幕府の許可も得ずに騒動を起こしたのは法としては許せぬことである。」と私議切腹論を主張した。

切腹は武士にとっては名誉ある死であるため、彼らは公的には幕府に反した犯罪者であったにしても、実際には義士として処遇されたわけである。

龍教寺と徂徠母堂の墓

徂徠の母は綱吉の侍医荻生方庵に嫁ぎ四人の子女に恵まれた。長男春竹は本納に残って医業を営み、次男が徂徠、三男玄覧も有名な儒者、また春竹の子は徂徠の養子となりこれもまた儒者だった。（現在も長男の子孫が現存している）

徂徠の母は延宝八年（一六八〇）病で亡くなり、この地に葬られた。また春竹の墓も近くの龍教寺にある。

なお、徂徠自身の墓は東京芝の長松寺にある。（国重文）

（荻生徂徠については拙稿「まんじ」九十七号参照）

四　房総の旗本―遠山金四郎（いすみ市）

江戸時代、いすみ市岬町岩熊の地を知行地として領有していたのは有名な遠山家である。遠山家は徳川幕府の旗本として、初代景好から十代景福までこの地を領した。歴代領主のうち五代景晋は蝦夷地取締御用、長崎奉行、勘定奉行を歴任して遠山家の中興の祖といわれた。また六代景元（金四郎）は北町奉行、大目付、南町奉行として有名である。特に天保の改革では事跡を挙げた。

慶応年間、九代景之は幼い景福を伴い岩熊村に帰農して、慶応四年（一八六八）に、この地で亡くなっている。（房総の旗本）房総は幕府の置かれた江戸に近いという理由から日本一の「旗本多国」であった。その数は江戸末期には三千領に近く、上総国の約六割、下総国の約五割は旗本領であった。旗本の数は千家に達したといわれる。

そのうち有名な旗本は前記遠山景元（金四郎）のほか、もと久留里藩士で正徳の治を行った新井白石、幕張や九十九里浜に甘藷の栽培を始めた青木昆陽などがいる。

五　房総の文学者たち（一宮、大原、鵜原海岸など）

風光明媚で知られる大原の地（現いすみ市大原）には昔から多くの文学者が訪れ、多くの作品を残している。

竹下夢二が大原を訪れたのは、最初の夫人であった「たまき」と結婚間もない明治四〇年（一九〇七）の初夏。当時二四歳であった夢二は入社した読売新聞記者としてこの房総の地を旅行している。このとき書いた「涼しき土地」は一九回にわたって読売新聞に連載された。

森鷗外がこの地に「鷗荘」を建てたのは明治も終わりに近い四〇年（一九〇七）の夏で四五歳のときだった。このころの鷗外は一時中断していた文学活動を再開していたが、その前に日露戦争に出征して陣中で詠んだ「うた日記」などの作品を刊行している。

またこの年の一一月には軍医としては最高位の軍医総監（中将相当）となり、陸軍省医務局長にもついている。

家庭的には先妻と離婚して十一年あまり独身生活を送ったが三十五年にしげと再婚、翌年には長女茉莉が誕生した。孝心の厚かった鷗外は、このころ母峰子のために別荘を作ることになり、適当な土地を物色していたが、最終的に環境のよい大原日在海岸を選び、「鷗荘」と呼ぶ別荘を構えた。

山本有三が、昭和九年の夏、三ヶ月余り大原塩田川畔の翠松園に滞在して書いたのが「真実一路」である。

作中には美しい大原海岸が描かれ、小説の大きなヤマ場である母と子の思いがけない出会いは大原にある塩田川の橋の上である。

そのほか大原八幡岬には歌人の佐々木信綱や画家の黒田清輝なども訪れ、すぐれた作品を残したし、若山牧水、鈴木信太郎も此処に滞在し創作にふけった。

また、九十九里南端、一宮海岸の河口に位置する「芥川荘」は一宮館（旅館）の離れで、大正初めに芥川龍之介が滞在していたことから、この名がつけられた。（国文化財）

龍之介は一宮での出来事を「海のほとり」などの作品に綴っている。

大原海岸に続く風光明媚な海岸線は太平洋の荒波に浸食された典型的なリアス式海岸。大正時代に別荘地建設が計画され「鵜原理想郷」と呼ばれた。豊かな自然を有することから、此処にも、古くから多くの文人墨客が訪れ、数々の作品を残している。

与謝野晶子は昭和十一年春、友人画伯らと当地に滞在して、七十六首の歌を詠んでいる。

三島由紀夫の「岬にての物語」はここ外房鵜原海岸でのひと夏の思い出である。

守谷湾の西岸にある守谷洞窟は四回の隆起と三回の降下を繰り返して出来たもので、富山海岸の大境洞窟とともに貴重な資料を提供している。なおこの洞窟を最初に発見したのは大正十三年、当時旧制浦和高校生だった江上波夫氏だという。

六　「波の伊八」のこと（房総東海岸一帯）

「関東に行ったら波は彫るな」といわれた武志伊八郎信由（一七五一―一八二四）を初代とする彫工武志家は安房国長狭郡下打墨村（現鴨川市打墨）を本拠にとして、約二百年、五代にわたって東京、神奈川、千葉に名作を残し神社仏閣に江戸後期の装飾彫刻文化を現代に伝えている。

初代（武志伊八郎信由）はこの地で生まれたが、二一歳で江戸堀の内妙法寺で「向背の龍」を彫り一躍有名となった。

その後、房総南部を中心に、神社や寺院の欄間彫刻などに優れた作品を残した。特に外房の荒波を象徴するかのような「波」の浮き彫りが独特の作風とされ、「波の伊八」と称された。

とはいえ彼の作品には波のみならず龍の彫りも素晴らしい。「飯縄寺」（天台宗　いすみ市岬町）の欄間には彼の代表作「牛若丸と大天狗の図」がある。高さ一m、長さ四mのケヤキの一枚板の大彫刻である。若々しい牛若丸が鞍馬山で大きな翼を背にした大天狗から巻物を伝授される場面は、見るものに臨場感が迫って来る力作である。

この寺の本尊不動明王を安置している本堂（県文化）は現存する普請帳から寛政九年（一七九七）の建築であることが分かるが、初代伊八は本堂再建のため此処に約一〇年ほど滞在して、当時の金二百両で彫刻はもちろんその他総合的に関わったとされている。

この寺の天井絵「龍」は本堂の平成大修理の際に発見

されたが、三代目堤等琳の作といわれる。初代伊八と同時代に活躍した画家だが、葛飾北斎の師でもある。

おなじ「いすみ市」にある行元寺には伊八の「波に宝珠」（宝珠は願いが叶う玉）、「波に鶴」の名作がある。

ともに写実的、陰影法、遠近法といった近代手法が駆使されていて、波がまさに崩れんとするその一瞬をみごとに表現している。

行元寺には前記堤等琳の弟子である五楽院等隋の「土岐の鷹」の杉戸絵が現存している。等隋と北斎はともに等琳に絵を学んだ仲であり、北斎が伊八の彫った波に出会ったことが、かの名作「神奈川沖波裏図」が生まれた。これはやがてゴッホやクローデルの波に転生されたといわれる。

北斎が南総に旅立ったのは文化三年（一八〇六）とされるが、彼が伊八を訪問したときには、伊八の波図はまだ完成していなく、伊八は毎日のように住職の馬を駆って九十九里南端の大東岬の荒波の中に入って、崩れる横波を凝視し続けた。

伊八はこれまでの粉本にもない横波の波頭、荒波の腹部を下から覗き上から見下ろした。

これに刺激されて北斎も大東岬を訪れるようになる。彼も精細な波の観察に始終した。そしてかれ独特の新工夫を加えて、画期的な作品を生み出した。彼の名作「神奈川沖波裏図」も伊八の彫刻同様に低い視点から波を見上げていることがわかる。

伊八と北斎―ここに「南総里見八犬伝」の滝沢馬琴も登場するのも興味深い。若き馬琴は当時最大の人気作家山東京伝と弟の京山がともに夷隅郡神置村（現いすみ市神置）出身であることを知って酒一樽を下げて弟子入りを頼んでいる。

因みに馬琴の八犬伝の書き出しは、この行元寺から始っている。彼の「水滸伝」の挿絵は北斎が担当していたが、その後、両者はいさかいを生じ絶交状態に入ってゆく。いずれも此処行元寺が関係している。

（注）馬琴の「南総里見八犬伝」は前期里見氏がモデルとなっているが史実とは聊か異なる。里見一族は内紛が多く、特に天文二年（一五三四）に庶流の義堯（二ページ参照）が嫡流の義豊を滅ぼしてからは、みずからの正当性を主張するために前期里見氏（義豊までの里見氏）の歴史を改ざんしてしまった。そのため前期里見氏の系図に架空の人物が挿入されたり、年代上の大きな矛盾が見られる理由がこの結果だと言われている。

行元寺本堂欄間には「幻の名工」高松又八の「牡丹に錦鶏」の彫刻もある。絢爛たる桃山文化を継承した名鳥、名花の彫り物である。

彼は江戸城改修工事に彫り物棟梁として活躍、上野寛永寺の四代家綱、五代綱吉の廟、および芝増上寺の六代

家宣の霊廟に彫り物を遺したが、いずれも第二次大戦の戦災によって焼失してしまったので幻の名工といわれた。行元寺の彫刻のほかには彼の作品は確認されていないという貴重作である。（一説では左甚五郎と同一人物ではないかともいわれる。）

行元寺では市原淳田住職が親切に説明してくれた。

同寺は八四九年の創建とされ、関東地方の天台宗の中心的な寺として栄えた歴史を持つが、近年それらの文化財の損傷が激しいので、昨年からその修復に取り掛かっている。

同寺は県文化財や市文化財合わせて二十点を所蔵しており、辺鄙な房総地区での意外な文化の高さを見る思いがした。市原住職も「かってはこの地区は文化発信の地であった。」ことを力説していた。

また、房総の最南端和田町にある石堂寺（天台宗）の庫裏に展示されている一八面の彫刻はすべて初代の作とされ、貴重な「国重文」（戦前は国宝）である。

その他、今回は訪問しなかったが、茂原市に隣接する長南町千田にある称念寺本堂の欄間（三体竜）は初代晩年の傑作とされている。

藻原寺（現茂原市）にある「本堂唐門向拝彫刻」（向拝虹梁の上に横たわる龍や唐門破風に見られる鳳凰の彫刻）は二代目武志伊八郎信常（一七八六―一八五二）の作である。

信常は父信由のもとで若い頃から修業を積み、父にも優る名工となり初代波の伊八亡き後二代目を継いだ

三代　武志伊八郎信美（信秘）一八一六―一八八九）

上総国分寺（市原）「本堂欄間二十四孝二面」など

四代　武志信明（一八六二―一九〇二）

柴又帝釈天題経寺（東京）「内陣水屋の龍」など

五代　高石信月（一八九〇―一九五四）

鏡忍寺（鴨川市）「向拝の龍」など

にそれぞれ傑作を残したが、武志家は第二次大戦を境として、彫刻家五代目高石信月（武一郎）を以って絶えた。

一族の墓所はかっては鏡忍寺（現鴨川市広場）にあったが、平成後は旧居宅跡（現鴨川市打墨）に戻されている。

ノンキャリで首が長持ちする方法

スタート編

中山喬央（たかひろ）

はじめに

自分史を書く事については、今から五年前、『まんじ100号記年号』編集の大任を三戸岡さんから命じられ、その打ち合わせの為、栄光出版社の石澤社長を訪ねた際、同氏から勧められことがある。その時は、銀行員としての守秘義務もあり、即座にお断りしたのだが、今回は三戸岡さんから120号に、通常の人と異なる人生を歩んで来たのだから、自分をもっとアピールするうえからも本件に付き投稿したらどうかというお話をいただいた。

まもなく喜寿を迎える年齢に達しており、どういう人生を歩んできたか、そういう人生を送ることができた先祖を含む身内、友人、時代の背景とはどういうものであったかということを、率直に記しておく事も意味のあることかと考え直し、筆をとった次第である。

未だ書けない事も数多あるが、できるだけ実体に近づけようと、伏字を多用した。お許しいただきたい。

はじまり

なに！君の伯父さんはS醤油専務の多田さんなの！面接をしていたM支店長の声がはずんだ。

どういう関係なの。

私の父の姉が嫁いでおります。

保証人は河輪村農協の理事長さんか、其の人は私の母の兄です。

そうですか。

とM支店長は満足気にうなずいた。

とても入る事が出来ないと諦めていた都市銀行への就職が事実上決まった瞬間であった。

後で判ったことは、支店長の前任地が前橋で、それでS醤油とかチャンコナの事を良く知っていたのだった。

正に人生とは縁である。

都市銀行入行内定は両親、特におふくろが喜んだ。

ところが、其の勤務が並大抵のものではないことがわかった。

卒業式で「我が師の恩」も無事歌い終わり退席しようとして席を立った時だった。

近くにいた竹内靖君が急に近づいてきて、お前協和にいくんだってな、俺の親父も最近迄勤めてたんだよといった。

あれ？彼の父親は浜松信用金庫の審査部次長をやっていると聞いていたんだがな？と思いながら翌日から日給280円の見習行員として勤め始めた。最初の給料で買ったのは学生服と運動靴で、共に高校生時代のものではお客様の前に出れなかったからである。

四月一日がくると目出度く行員として採用され、本俸3380円の辞令を支店長より渡されノンキャリ都市銀行員生活は始まった。

しかし竹内君の話はずっと気にかかっており、半年ぐらい経った所で、親しくなった先輩行員に聞いてみたところ次のようなことがわかった。

計算係の本支店勘定を利用した使い込み事件があり、担当代理として伝票に眼暗判を押し、そのうえ横領した犯人から、代理もグルだといわれ、身の潔白を立証出来ず、退職せざるを得なくなったとのことである。

頭をぶんなぐられたような気がした。本人が悪い事をしていなくても、何時冤罪がふりかかってくるかわからない。高卒というものは、弁護士のいない被告のようなもので、自分の身は自分で護るしかないんだな。白であることを証明するには、自分自身の金銭管理をしっかりして、あらぬ疑いをかけられた時には、それをはねかえす資料を持たなければ駄目だ。尚且つ人一倍働いて常日頃から不時のアクシデントに備えておかないととても勤務を永続させることなんて出来ないんだということを、入行直後に頭にたたきこんだ。これは、結果として定年まで一度も肩を叩かれずに勤め上げることができたことの基礎部分に繋がったのであろう。

定期積金係

勤務することになった浜松支店は、昭和二年二月一日、内国貯金銀行浜松支店として開設され、浜松市民には田町の秋葉山鳥居の角にある銀行として親しまれてきたが、昭和二十年五月十五日、日本貯蓄銀行浜松支店となり、不動貯金銀行浜松支店を統合した。そのまま昭和二十三年七月十五日普通銀行に業務転換して協和銀行浜松支店となったものであるが、当時二三〇余の店舗を有する銀行全体のなかで、預貯金残高は五位前後を占める有力店舗であった。

しかし当時は未だ貯蓄銀行時代の外務員制度が残っており、其の人たちが集金してくる定期積金の残高が、総預金残高の三分の一以上を占めている状態であった。

入行後は先ずこの係となり、外務員の各種奨励金の算出とか、預金利息である給付補填備金の計算、あるいはこれに関わる様々な仕事を約三年間担当した。

自分の銀行員としての札勘、及び算盤の実務としての基礎は、この間に出来上がったような気がする。

ところで、定期積金係というのは、直接お客様を訪問して集金してくる外務員の管理及びそれに関する一切の事務をするのが仕事である。従って日々集金してきたお金を、二階にある外務員室で二十人前後の人から受け取り集計して、お金を取扱う出納係に渡さなければならない。私が受付を終了し「ごめい」ですというまで彼等は帰れないのである。最初の二三日でそれに気が付いたから札勘のスピードアップを図った。しかし現金というのはダイナマイトと同じで、取り扱いを間違えたら、間違えた本人の責任である。

ある時、真っ青になっているベテランの外務員がいた。毎月十万円を積み立てているS織物の社長夫人が一束くれたのだが、その場で内容を確認せず、確かにお預かりしました有難うございましたといって、入金手続きを済ませてしまったのである。ところが帰店後、入金しようとして其の札束を数えたら、九五枚しかない。恐らく奥様が必要なことがあって、五枚抜き取って使用し、それを忘れたまま十万円として預入されたのだろうということになった。とても今更足りませんでしたとはいえないし、そんなことで大事なお客様を失う事になっては大変だということになり、それでも5000円は大金だからということで外務員全員で分担してお見舞金をあげようという場面に遭遇した。これは自分にとってもとても良い教訓になった。その後、外部活動に従事するようになった時、帯封がしてあるものでも、ばらして数えることにしたのである。お客様も最初は手続きに時間がかかるので、不快感を示されたが、そのうちに金銭授受トラブル発生の防止に繋がるということを理解され、一段とスムースに集金事務がはかどった覚えがある。

この定期積金を担当していて事務上最も大変な事が、毎年二月末と八月末の仮決算事務における給付補填備金の計算である。この事務をしたお蔭で算盤が正確になった。コンピュータなど全くない時代であるから、何千枚もある元票を一枚一枚計算をして数字を積み上げていくのである。若し途中で間違えたら結果として良い数字が出ないから、全部やり直しとなる。これは事務行員の半数位が参加する行事であり、担当係として皆に迷惑をかけることは出来ないから必死となる。因みに定期積金の金利は二分三厘で普通預金並みの安さであるが、外務員に支払う諸手当が高額で、全体としてコスト高の要因となり、数年後に外務員制度は廃止されてしまうのである。

この他、定期積金係にはお客様のご自宅を訪問する仕事がある。それは実地調査といって、外務員が集金したお金を間違いなく入金しているかどうかの確認をする仕事である。勿論、集金した際は、専用の領収証を通帳に貼付して割り印することになっており、其の日、集金した件数と、領収証の使用枚数はチェックするのであるが、例えば百万円契約の定期積金の場合一回の掛け金は26,800円であるのに対し、一万円契約の場合268円であるから、実際には百万円契約の掛け金を集金しながら、一万円契約のものを集金したと虚偽の報告をすれば、少なくとも領収証の面からは不正が発覚せず、差額26,532円は着服横領ができるのである。

定期積金は三年契約であるから、普通は三年間通帳と元帳の突合せが行われず、これをそのまま放置する事は人事管理上非常にまずいことになるので、定期積金の内部事務担当者は、元帳で入金の様子が不自然なものを摘出しそれをチェックするというのが本来の外訪目的であった。しかし独自に大口取引先を内部行員としての自分が直接訪問する機会を持ったことにより、様々な生の情報を入手する機会につながり、その後自分が外部活動の仕事をする際、計り知れないプラスになった。

又外務員による不祥事発生事前防止の仕事は、その後部下の不祥事発見と全容解明による、お客様よりの不信感発生の防止に大きく役立つこととなった。どんな仕事でも、熱意を込めて行えば必ず将来自分の血となり肉となるものである。

しかし当時の外務員延べ二十有余人中、金銭にかかわる不祥事三件が相次いで起こり、人を信ずる事と、チェックすることを両立させることの難しさを思い知る事になる。

この当時良い教訓を得たことがあるので紹介する。

窓口応対をしていた時の話である。

市内南部で大きな商いをしていた乾物問屋の経営者の姉が来店され、大口の定期積金を解約して欲しいとの申し入れがあった。事情を聞いて見ると、今度集金を担当する事になった女性の外務員が気に入らないという理由である。それならば営業時間後、お宅の都合の良い時間に私が集金にお邪魔しますといったら、解約を中止して帰ってくれた。

早速上司に報告し、夕方担当外務員が帰ってきたので事情を説明、喜んで了解してくれたので、そのお客様を窓口扱いに変更し、先方が指定した夕方七時頃集金に訪問しはじめた。

ところが何回目かの集金の時、お金が合わないのである。一回の集金額が45,568円なのに、小銭まで入れると50,000円以上ある。これは何か勘違いをされたのではな

いかと思い、即座にご主人様をお呼びして、事情を説明し余分なお金はお返しした。

その店を出た処で気が付いたことは、試されたのだということであった。こと金銭を任せる時、相手の人間が信用できる人物かどうか、百戦錬磨の店主が、実地に銀行員である自分をテストしたのであると思い至った。

この商店主からはその後、満期になった百万円をそのまま定期預金としていただき、内部行員の定期預金獲得活動において抜群の成績を挙げることができた。

このように、一人の時どんなに多額の現金が目の前に置かれていようとも、それは大事な商品でありお金ではないのである。絶対に心を動かされるようなことがあってはならない。自分にとってのお金というのは、毎月のお給料でいただいた、ささやかに財布の中に入っているものである。この区別の心構えができない人は銀行員になるべきでない。

支店長席（内部行員の外部活動従事者のこと）

忘れもしない昭和三一年の八月十三日、こんどは、支店長席になった。要は外を回って預金を取ってくるのが、仕事になったわけである。

見ず知らずのお宅とかお店を訪問するのは勇気のいることであった。目標を定めた店の前を通り過ぎたら二度と入れなくなるので、とにかく店内に入らなければならない。なんでもないことのように思われるかも知れないがこれがなかなか大変なのである。

また話題も難しい。お天気とか景気の話だけではもたないのである。ただ取引してください、ただ預金をしてくださいでは到底継続訪問して成果をあげる事は無理である。

銀行入行直後から読み始めた日本経済新聞と東洋経済新報に代わることとなる。しかも大きな見出しではなく、ベタ記事で面白いことが書いてあると話題として採り上げる。しかも肝腎の取引とか、預金の話はあまりしない。このやり方は、その後、永年に亘る営業活動の根幹を占めるようになる。新規開拓のポイントは、自分を通じて協和という銀行を良く知ってもらうことから始まると思ったからである。

そして入行直後から、時々内部行員の定期預金獲得運動が行われており、日曜日にはよく父に連れられて、浜松市内及び近郊の商売上の知り合いのお宅を訪問していたのに加え、定期積金係りの時も外訪活動をしていたから、それは苦になるものではなかった。

訪問先は、それまで先輩が担当していた先は全て除外されるので、普通預金で大きな動きをしている先をリストアップして、見込み客として加えることにし訪問先数を増加させ一定の成果に結びつけるよう努めた。

為替係

しばらくして内部事務に担当がかわり、為替係となった。

初めの二三日は、他行から郵送されてくる、振込書の印鑑照合に時間をとられたが、そのうちに慣れて来ると、振込先とか金額とか被仕向け銀行等の特徴が判断できるようになり、事務処理はスピードアップした。

余裕が出来てくると、新たなコルレス先の設定なども行った。

この仕事は株式払い込み、配当支払い等の事務も兼務しており、それらの手数料収入があり、滞留資金は無利息で本支店勘定における金利収入もあるという、収益寄与面で見るべきものがあった仕事であった。更に実際の商いで動く資金の流れがわかり、資金トレースの把握という商業銀行の最も面白い分野であった。

丁度、日本楽器とヤマハ発動機の増資があり、たまたま定期積金の担当者だった時、訪問した先が双方の大株主で、尚且つ息子さんが最近協和に入行したことを知っていたので、本人の勤務店に電話し、お母さんに連絡して貰って、従来は地元静岡銀行で全てを取扱っていたものを、半分払い込んで貰う事に成功した。

快く仲介の労をとっていただいた行員は、高校の先輩でもあり、その時以来五十有余年、親しくお付き合いさせて頂いている。

貸付係

その次は貸付係を担当した。とはいっても最初は給付補填備金貸出といって、定期積金の長年のお取引先が資金入用の際、三年契約で、一年三ヶ月遅滞なく駆け込みを終了している先に、満期相当額を貸し付けるのと、前の定期積金が三年間遅滞無く駆け込みが終了して満期となった際、同額の定期積金を契約すれば、契約額の半分を貸し付けるというもので、金利は月利一分であった。

当時は銀行から一般商店が借り入れをするということが、とても難しい時代だったから、利用者はかなりあり、貸し出し稟議書を作るため様々な業種のお客様を訪問し、初歩的な質問を繰り返しながらだんだんと商売の実体を勉強した。

ところが途中で貸付のチーフが転勤し、新たに赴任したK大卒のO氏は、一般の貸し出し先も代理に話をつけ、担当させてくれた。

当時浜松の経済の中心は繊維産業で遠州1号というブランド品の綿布を中心に、別珍コール天などは、ほぼ独占商品として産出しており、それを巡って、伊藤忠、丸

紅を初めとする大手商社の浜松支店、それに続く、東京、名古屋の繊維商社の出先、及び産元問屋、大手紡織工場等が入り乱れて激しい商いが行われていた。

話は変わるが、繊維相場は、動きが激しく、バクチに似た所があり、繊維が盛んなところは、競輪、オートレース、競艇の売上額が多い所でもある。浜松にもその後、オートレースと競艇が出来たが、何れも業績は良好であった。

話を元に戻す。O氏は名古屋に本社を持つ「信友」という繊維商社を初めとして、幾つかの産元問屋を担当させてくれたのである。この「信友」の支店長は、浜松の繊維業界でやり手として通っていたので、そこへいって貸付係として相場の先行きの見通し、業界の近況を探ってこいという訳である。先方も若造がきて困ったであろう。ただ貸し付けの担当ということになると。無下に追い返すわけにもいかない。ただ仕事の修羅場の一端は垣間見ることができたということで、この体験はその後の人生において役立つこととなった。

又同氏は仕事帰り、独身ということもあり、良く酒を飲みに連れて行ってくれた。勿論割り勘であるが、社会の事を良く知っている優秀な先輩行員が対等の付き合いをしてくれ、なおかつ様々な事柄を語ってくれたことはその後の人生観の形成に大きく寄与する所となる。同氏はその後、中途退行され、起業され中堅企業のオーナーとなった。姫路出身の同氏にとって、浜松と浜名湖は良い思いでの地になったようで、上京された後も、浜松祭りには永年の間訪問されており、夕日を望む浜名湖北岸で一泊し、中田島砂丘での凧揚げと、夜の御殿廻し見物を楽しみにされていた。

再び外部活動

その後再び外部活動に従事することとなった。この時は、転勤していかれる先輩から、手持ちの優良なお得意様も譲られるようになっていたので、担当するお客様が質量ともに充実し、コンスタントに支店長の方針に従って実績を挙げる態勢が整いつつあった。

というのは金融引き締めの時は、純預金に重きを置き、金融緩和の時には、間違いのない融資先を開拓する事にウエイトをかけるようにすることが出来たのである。

この時入行後四人目のY支店長が赴任されてきた。またお世話になったK大出の先輩行員が秋葉原支店に転勤し、京都の七条支店からT大出身のMさんが着任した。

其の一方で銀行としての外務員制度が無くなったので、かって三分の一の資金量を持っていた定期積金の集金を一方的に廃止し、その積金残高を定期預金にスムースに振り替えてもらうということが、全国最大の外務員数を保有していた浜松支店にとっては、緊急な課題となった。その折衝担当としても経験のある自分が最高の実

績を挙げたのは当然の結果である。

この時外務員の方々は、同様の集金業務を取扱っていた第百生命に大半が移り、一部は内部行員となられた方もいたが、大幅な収入の減少と慣れない内部事務についていく事が出来ず、結果として全員が退職された。其の中には起業して成功し後日大口預金者になられた方もいる。

その時幸運にめぐり合った。たまたま見込み客として訪問を開始していたS学園の事務長から、僅かではあるが、手間のかかる従来の取引行では嫌がっていた集金を含む様々な小口取引を頼まれるようになったのである。それをきっかけに徐々に大口の取引もしてくれるようになった或る日、事務処理で依頼された通りの入金処理をしなかったチョンボを見過ごしてしまった。幾つかの小口に分けて通帳に記載しなければならないものを一括入金扱として記帳した通帳をそのまま事務長に返してしまったのである。学校には学校会計という独自の会計制度があり、公認会計士のチェックを受けているのであるから、それに備えての分割記帳である。これはしまったと即座に手土産を自腹で購入し、事務長の自宅に謝罪のため訪問した。その際マドンナに会ったのである。

帰店後、皆に本件に付き報告し、物凄い美人に会ったことも話をした。翌日恐る恐る学校に行き、事務長に昨日の不首尾のお詫びをしたところ、剣道の錬士である同氏の表情が、何故かなごんでいる。直感的に昨日のチョンボは許してもらえたと感じたが、其の次の事務長の質問にこちらが驚いた。

君の高校時代女子生徒にはどういう人がいたの。

思いもかけない質問だったが、昭和21年旧制中学最後の入学時は男子のみであり、新制高校になった昭和24年に女子生徒が五人入ってきましたといって気が付いた。昨日事務長の自宅訪問時にあった美人が、我々四回生全員がマドンナといってあこがれていた女性だったのである。そしてこちらは人妻となった彼女に気が付かなかったが、彼女の方で気が付いて舅にとりなししてくれたのである。

それから暫くして校舎建替え資金の融資ができるかどうか打診を受けた。当時は日本の国全体が貧乏で、業種別貸し出し審査を各金融機関は受けており、学校法人は丙種だったから、融資先として採択するには大変勇気がいる時代であった。しかし其の学校はセーラー服に赤い線の入る女学校として名の通っていた学校で、肝腎の生徒募集には何の懸念も無い学校であるから、早速Y支店長に相談した所、前向きの返事があり、その旨事務長に返事をしたところ、連日大口の通知預金の入金をして下さるようになった。

この様子を見ておられたY支店長は、学校を訪問、S

校長と会って全面的支援を表明され、その結果通知預金は全額定期預金に預替され文字通り一行取引となった。その預金残高は当時の浜松支店の3%に達し、外務員制度廃止による悪影響下、浜松銀行協会における預金シェアがアップするという快挙に繋がったのである。

その後、A事務長にはすっかり可愛がっていただき、それから浜松支店を去るまでの三年有余、毎日学校を訪問し、先生方の取引を含め、様々な御用を承る事となった。

これは学校法人のメインバンクになれば、教職員個人取引、修学旅行積立金、教育研究費口座開設等、それに伴った数多の口座が開設されることを、自分に教えてくれたのである。

その後、永年に亘る外訪活動の成果としての大口優良法人開拓成功例は三件であるが、そのうちの最初の例が本件で、トップ同士相互の信頼感が極め手となることは、その後の二件も同様であった。

しかし自分の将来を左右することにもなったS学園との取引成功の糸口となったのは、何と言ってもマドンナの支援があったればこそということで、ここでも不思議な縁に支えられたと思っている。

これと時を同じゅうして、外部訪問活動のチーフをされていたT大出身のMさんが、軽い交通事故に遭われ急遽、その担当先も訪問する事となった。鈴木自動車、日本楽器、ヤマハ発動機、遠州製作等、浜松を代表する企業群であり、支店経営の根幹を形成している先である。

この中でS社の経理課長とは親しくしていただき、様々な教訓を得る事ができたので、その一部を披露する。

丁度、日産自動車が最初のブルーバードを発表した時のことである。課長に言われた言葉をいまだに覚えている。

このブルーバードは傑作車ですよ。我々は新車が発表された時、エンジンの馬力と車の全重量を見るのです。この車は従来の水準を凌駕したものです。流石技術の日産ですね。

銀行員として漫然と新聞を読んでいたのでは駄目だ。見る視点を変えれば、そこから様々な事柄を勉強出来るものだと教えていただいたのである。

またこのように言われたことがあった。

お宅の支店は人材を揃えていますね。浜松市内の全ての都銀の支店、及び主要な地元金融機関とお取引させていただき、様々なポストの方々とお話させていただく機会を持たさせてもらっておりますが、あらゆるポストでお宅が一番質が高い。失礼ですが銀行全体としては、他行さんと変りがないでしょう。しかしお宅が良いと言う事は、浜松に力を入れているという事だと思います。ですから私としては事あるごとにお宅との取引を深めて行きたいと思っております。

これは凄い話で、以後、集団としての力を相手に認めさせなければ、優良企業との取引開拓、取引深耕などは果たせるものではないとの、良き教訓となった。

話は変わるが当時の次長は、大阪支店の融資課長から着任した辣腕のM氏であった。仁徳者であるY支店長の提案で、毎晩営業時間終了後、M次長も加わって勉強会が開かれた。私に与えられた課題は、当時エネルギーが石炭から石油へ転換される最中、就業人口40万人を数える、石炭産業はどうなるか。またそれに対して銀行はどう対応すべきかということであった。

始めて日本全体、いや世界中の産業動向と協和銀行との取引の親疎、将来性等について学んだのである。

また敏腕のM次長は、前任店で某紡績会社の借り入れ申込書に粉飾があることを見つけ出し、先方の社長も来店同席している場で、それを指摘し借り入れ申し込みを断ったという硬骨の人物であり、其の生々しい実話を聞いた事は、真剣勝負の凄さ、駄目だと思った場合の断ることの勇気、それができなければ銀行員失格だということを、心の奥深く刻み込まされた。粉飾を指摘され、それを釈明できなかった先方の経理課長は即刻、解雇されたとのことである。

このM次長から、中山お前は使いにくい奴だなといわれた事がある。一応彼はお前の出身校の者はといってはくれたが。要は銀行に入ってくる高卒は頭が良くてそつが無い者が多く、権力者の言う事に対しては無条件に合わせてくれるが、お前は、すべて自分の頭で判断し、時には反論してくるから誠に使い難いというわけである。

一言で言えば「小利口になれ」ということである。そう思ったから、そうですかと其の話は聞き流した。無視したのである。

以後、M次長は大阪の有力店の支店長に栄進された。そして其の個性豊なM次長の支援者になったのが、人格者であったY支店長であるから、それ以後もY支店長の会では何時も御目にかかってご指導をいただいた。

また当時裏金融に携わっていると思われる、人物と話をした事がある。世間では一流会社と思われているところが、いかに危ない資金繰りをしているのかについて、甘い考え方を厳しく指摘された。彼の持っていた雰囲気は異常で、これは裏社会特有のものだと感じた。

自分のルーツ認識

昭和三十三年十一月二十七日、宮内庁長官が皇室会議での皇太子明仁親王と正田美智子の婚約決定を発表し

た。其の日家に帰ると、父がいつになく改まった様子で、S家と中山家の繋がり、及び何故伯母がS醤油の専務のところに嫁いだのかを話してくれた。

中山の家から出た人物が「仙女香」という店を経営している家に養子で入り、大正時代、京橋三丁目の角に店を構えパラソルを販売して大成功した。それで祖父がS家のお嬢さんを嫁にということで実質的な仲人をした。S家の当主、文右衛門氏が大変喜び、中山の家は娘が多いから一人をS醤油の経営を任せている番頭にもらってやろうということで、父の姉がS醤油の専務となるTのところに嫁いだというものであった。

一方母の実家は、菊水の家紋を持つ家柄であり、両親揃って、最高の家柄を持つ人との間接的ではあるが、ご縁が生じたということには感激した。同時にこのことは他言すべきではないと思い現在まで封印してきたものである。

それから暫くして「仙女香」の跡地に建てられた京橋支店に赴任するということは、思いもしなかった。

ここで「仙女香」のことについて若干触れる。

先ず『まんじ』111号「化粧のルーツを訪ねて」（五）の105頁上段で、著者鈴木守は次のように述べている。

英泉の絵の寸景に描かれていた仙女香はあちこちで宣伝していた白粉だった。川柳は「何にでもよく面を出す仙女香」と揶揄していた。

次に昭和十二年刊行の『京橋区史』上巻405頁には

尚南傳馬町の仙女香は白粉を以って江戸に聞こえた店で、店主坂本は草双紙の検査役であったから、新発行の草紙類には、巻末に常に仙女香の広告がしてあった。種彦のものなど特に多かったと云う。

と記され、昭和十七年刊行の運びとなった『京橋区史』下巻598頁には、

仙女香は既に上巻に記述した如く薫香の白粉を以って名高かったが、慶応三年には早くも洋傘の製造販売をはじめて断然頭角を現わした。之と同時に欧米の流行品を直輸入してこの時代に活躍した。

と紹介されている。

この後京橋三丁目の角に、協和銀行京橋支店の前身となる第一相互貯蓄銀行本店が開業するのが大正十二年三月一日であるから、中山の家から養子に入った人物が南伝馬町から大正時代にここに店を構え、パラソルを東京の街に流行させたという話とは何ら矛盾が無い。

偶然ではあるが、自分が京橋支店赴任当時取引先係、貸付係として一貫して担当した、当時隣の片倉ビルに本社があった日本製粉の経理課長から、お前の店の場所は大正時代仙女香という店だったことを知っているかと聞かれ、即座に良く知っています。店の経営者は中山の家から養子に入った人物ですからと答え、相手を絶句させたことがあるが、これも裏付けの一つになる。縁は異なものである。

次に正田家のことについて触れる。

『日清製粉株式会社七十年史』436頁「正田貞一郎と正田家」には次の様に掲載されている。

日清製粉株式会社の創業者正田貞一郎は明治三年二月二十八日横浜に生まれた。父作次郎は館林の正田文右衛門（三代）の次男であって、横浜に出て、外国米の輸入を業としていた。～

徳川家の菩提所、群馬県新田郡世良田の長楽寺住職平泉恭順の調査によれば、「正田家の祖先は新田義重の老臣生田隼人である。新田義重は源義国の長男で、上野国新田の庄のうち得河（徳川）ほか五ヶ村を分ち与えられ、居を得河北の台に定めて永住の地とした。徳川家康の時、生田義豊が新田、徳川の郷土に関する由緒を上申し、家康の命で姓生田を正田に改めたという。後世、正田家の人が分家して、世良田上町に居住している。徳川時代、当家より館林に行き、一家を創建した人がおり、これが館林における正田家の始まりである云々」とあって、文右衛門を襲名して既に六代である。

これについて徳川宗家十八代当主、徳川恒孝（つねなり）は著書『江戸の遺伝子』87頁で、～一族の祖は源義家の孫・義重（新田義重）で、その末子義季（よしすえ）が上野国世良田庄徳川郷に住んで徳川義季と名乗り、南北朝の混乱の中に衰微して、義季の子孫の八代目親氏が流浪して松平郷に至って～と述べており、この事実を裏書している。

貞一郎の祖父文右衛門は米穀商を業とし、江戸に米穀を積送するに際し、利根、渡良瀬の両川に高瀬船十隻を浮かべて大量取引を便利にし、館林産の大麦に「本館麦」の名称をつけて、声価を博した。～かって親戚の人が蛎殻町で米相場に失敗したことがあったので、米穀商は子孫のためにやる商売ではないと、断然米穀業を廃業、野田の茂木房五郎から醸造の方法を教わって、明治六年醤油醸造業を始め、今日の正田醤油株式会社の基礎をつくった。～

この正田醤油の事を、入行試験を担当されたM支店長が知っていたのである。

今度は中山家について簡単に触れる。

中山の家は館林と足利の中間にある梁田という渡良瀬川に沿った集落の草分けの家で、代々渡良瀬川を利用した舟運業を営んできた。過去帖の冒頭には紀州中山大納言ノ系統と記され、最古のものは天正二年三月十一日（1574年）桃源院洞慶仲仙居士で俗名帯刀勝元、行年七五才とあり、之は墓碑からも確認できる。私の兄で十八代目となる家柄である。

一方母の実家の方は、楠木家の出身で、後醍醐天皇の皇子、宗良親王に従って遠州に南北朝の時代に来て、そのまま帰る所が無くなり土着した。浜松市大塚町の大塚が本家で、母の実家は其の分家であるが慶長年間徳川家康より天竜川河口域の新田開発を命じられた大塚長十郎が成功して、当主長十郎の名前をとって、長十郎新田と名付けられ、代々長十郎を襲名、庄屋をやっていた。浜松市に合併した時、同じく新田開発で出来た権右衛門新田と共に、長十郎新田の長と田を受継いで浜松市長田町と町名変更した。私の従兄弟で、こちらも十八代目となる。

先日久し振りに大塚家の菩提寺である浜松市西伝寺町の西伝寺を訪ねた。墓碑にはすべて菊水の紋があり、中央に大塚本家累代之墓、向って左が大塚家累代之墓、向って右側に大塚家先祖累代之墓と記された墓標があり、更に中央の大塚本家累代之墓の右横に「長十郎新田開祖之碑、天和三癸亥年（1683）六月二日」と記された墓碑があり、そこに「清源院殿直譽淨入」「大信院殿草譽妙清」と刻まれていた。院殿という戒名に当時の大塚家の社会的地位を知った。

そして農協の理事長をしていた伯父が保証人を引き受けてくれた事が、最終的に協和銀行採用の決め手となったのであった。

無いよりは有った方が良いものに家柄、学歴、お金がある。そのうち学歴とお金は本人の努力次第で動かす事が出来る。しかし家柄だけは本人だけではどうしようも無い事である。当時、学歴もお金もなかったが、家柄だけは都市銀行員として遜色のないものを持っていることに父の説明で気が付いた時、心の片隅にゆとりが生まれた。

このような経緯を辿りながら九年間に亘った浜松支店の勤務が漸く終わりを迎える時期が近づいていた。地元勤務というのは様々な縁故に支えられており、それが無くなった時が本人の真価が問われる時である。隔地転勤で縁の無いところに行った時、縁が新たに創れるかどうかということが人生を左右する。当時漠然とした不安に駆られていた。その時救いの手を差し伸べてくれた人がいる。其の人は前述のMさんだった。

スタート編の部、終了

文化勲章に輝く

赤堀四郎博士の練成期

松下魏三

一、結婚そして理学博士

四郎は東北帝大の大学院で醤油の香気成分であるメチオナールを発見し、その正体をつきとめ、学会でその名が知られるようになり、化学者としての自信をもつようになった。

その後大学院での五年間の研究業績は指導教授である眞島利行博士に認められ、昭和五年（一九三〇年）には、東北帝国大学理学部化学科の講師に任命され、酵素化学関係の講義を始めた。

いよいよ少壮の化学者として、国から給料をもらって研究生活ができる帝国大学の教官となったのである。

この頃、一人前の研究者となった四郎に早速、眞島先生から縁談が持ち込まれた。花嫁の候補は眞島先生の姪で、当時東京女子高等師範学校（現　お茶の水女子大学）の習字の教官をされていた岡田起作先生の九女で和子さんというお嬢さんであった。

結婚式は昭和五年（一九三〇年）の十一月東京で挙げた。媒酌人は四郎が錦城中学時代に化学を教えていただいた富永齊（ひとし）先生ご夫妻であった。

富永先生は旧制錦城中学の教師の後に旧制第一高等学校や東北帝国大学の教授になった。仙台市では住居も近く、四郎は時々富永先生のお宅にお邪魔して雑談をしたり、時にはドイツ語の指導をしていただいたことがある。

また岳父である岡田起作氏は東京女子高等師範学校の書道の教官で漢学者でもあり、また数学にも優れた才能

をもっており、さらにまたクラシック音楽の愛好家でもあった。

岡田起作氏は四郎の父に似て新しいものが好きで明治三十年代の後半に自宅にピアノを買い入れ、娘たちにはピアノを習わせていた。

当時自宅にピアノがあるのは裕福な家庭で、ドイツ製のスタインベルクやベヒシュタインという銘柄品が多かった。ところが岡田家のピアノは日本のヤマハ会社が最初に製造した頃の製品で、和子夫人は末子の余得で、このピアノを持って四郎のもとに嫁いだので、姉たちから大変うらやましがられた。このピアノはその後赤堀家で長い間愛用されてきたが、戦後になって新しいピアノに買い替えたといわれている。

赤堀家で愛用してきたピアノは浜松市の日本楽器が製造したもので製品番号が五号となっていた。明治三〇年（一八九七年）にヤマハ会社がピアノの第一号を売り出したので、岡田家から赤堀家へ伝わったピアノは第五号で名誉ある製品であった。

この時代にピアノを購入していた岡田起作先生の音楽に対する情熱は相当なものであった。したがって和子夫人も女学校を卒業してから東京音楽学校（現東京芸術大学）の選科に学んだピアニストであった。

結婚式が無事に終り、翌年の昭和六年（一九三一年）には大学院での「醤油の香気成分の研究」の次には「アミノ酸と糖の反応に関する研究」や「水素移動・脱水素法の研究」など学会では最先端をゆくこれら一連の研究である「イミダゾール誘導体に関する研究」により理学博士の学位を授与された。

これらの研究は、当時の学会では「独創的で珠玉のように美しい」と賞賛され、同門の後輩である久保田尚志博士は、これらの研究を「天馬空を行く感じであった」と激賞している。

また、この頃には長男の弘道が生れて二重の喜びとなった。以後、四郎を赤堀博士と呼ぶことにする。

（註）イミダゾール

分子式 $C_3H_4N_2$。環中に窒素原子二個を含む五員環複素環式化合物・芳香族化合物に似た性質をもつ。無色の結晶。弱塩基性。誘導体にヒスチジン・ヒスタミン・ピロカルビン（アルカロイドの一）など。1.3-ジアゾール。

二、単身・欧州へ留学

新婚早々の赤堀博士のお宅では長男が誕生し、翌年の昭和七年（一九三二年）には、創立予定の大阪帝国大学の教官要員に指名され、三年間の海外留学を命ぜられた。

昭和七年は上海事変が起った年で、同じ年代の若者の多くは赤紙の召集令状を受けて、中国大陸に転戦し、戦

火は次第に拡大していった。

赤堀博士が欧州に向けて出発する直前の二月には、上海戦で戦死した「爆弾三勇士」の記事が新聞に大きく連載されていた。

その後この戦争はさらに大きく広がり、昭和二十年（一九四五年）の八月の終戦まで続き、約五百万人ともいわれる日本人が尊い命を失っているので、赤堀博士はこの非常時に若干三十二歳の学徒が官費で海外に留学させていただくことは大変恵まれたことで、心から感謝したと回想している。

そしてこの年の桜の花も散り葉桜に変わる頃、単身で箱根丸に乗船し、ヨーロッパに向けて出航した。途中香港・シンガポールを経て、スエズ運河を経由し、三十五日間の長い航海の後に、マルセーユの港に着いた。

マルセーユで下船してからは汽車でパリーへ向った。そしてパリーを経由してドイツの首都ベルリンに到着した。

ベルリンでは、外国人向けの「ベルリッツ・スクール」で短期間のドイツ語会話の個人レッスンを受けた後、ベルリン大学の「外国人のためのドイツ語学校」の中級クラスで会話を学んだ。

この会話を学んでいる間はヘーゲル・ハウスという留学生のための寮に入って生活した。この寮ではドイツ人の寮長の奥さんからドイツで生活するために必要な暮らしの慣習やマナーをうるさいほど厳しく教えられた。その効果は後々まで役に立ったので、後日何時も煩わしいと思っていた過去のことを大変申し訳ないと深く深く感謝した。

また、キリスト教の信仰が徹底しているドイツでは日曜日は家族が揃って神に祈って暮らす安息日であるのに、赤堀博士は日曜日には〝一日も早くドイツ語に習熟し、有機化学を研究したい〟と思い、寮の一室で勉強していたところ、彼女は「シユレックリッヒ」とつぶやいた。この言葉の意味は「あきれた人」ぐらいの意味で、その時赤堀博士はなぜそう言われるのかわからなかった。

キリスト教の信仰がならわしとなっているこの国では日曜日は普段の仕事や勉強から離れて、教会での礼拝に出席し、心静かに神に祈って生活する日であるから、この日に働いたり、勉強したりするのは異教徒か神を信じない者であり、まともな人間としてあつかわれなかった。

また、クリスマスに酒に酔って騒ぐような者は狂人扱いで警察署に留置されるのである。

このように日曜日やクリスマスは聖なる安息日であるのに寮の一室で勉強している人は「あきれた人」になるのである。

このことに赤堀博士が気がついたのはしばらくしてからで、ちょっとしたカルチャーショックであったと語っ

ている。

(註) 召集令状
在郷軍人を召集する命令書。充員召集・臨時招集・国民兵召集には淡赤色の紙を用いたので、俗に赤紙という。

三、言葉の壁と美しいプラハ

秋になって十月の末にはベルリンからチェコスロバキヤの首都であるプラハに移った。

プラハはドイツ語ではプラークと言うが、プラハにはドイツ語のドイツ大学とチェコ語のチェコ大学の二つの大学が棟続きであり、古い伝統と歴史のある大学で元は一つの大学であったが、原住民である西スラブ系のチェコ人とドイツから移住してきたゲルマン人とドイツ生れのユダヤ人との間で人種的な対立が激しくなって、一八八二年には大学はチェコ大学とドイツ大学に分裂したのである。

したがってチェコ大学ではチェコ語で授業が行われ、ドイツ大学ではドイツ語で授業が行われていた。

このような言葉の壁の厚さと民族や宗教の違いが深刻な問題になっていることは日本人である赤堀博士には大きなショックであった。

しかし新しい生活の場となったプラハは、百塔の町とも呼ばれる古風で美しい建物が残り、中世の面影を色濃く残している町で交響詩のスメタナやドヴォルジャークが生れたところであり、また美術工芸では食卓の食器や天井のシャンデリアなどはボヘミアングラスが美しく輝く魅力的な町であった。

また、プラハは東欧の自由化の始まりとなった「プラハの春」で有名になったところで、文化・交通・工業等の中心地でもあった。

そして、"バロックの宝庫"とも言われる美しい街並みがある由緒ある都市で、この地の劇場は世界の音楽家の檜舞台であったのでヨーロッパ中でも一流の歌劇場として公演が行われていた。

当時、隣村（朝比奈村）（現御前崎市朝比奈）出身の三浦環（たまき）が世界のプリ・マドンナ三浦環としてオペラ「マダム・バタフライ」をプラハで公演することになり、赤堀博士は同胞であり、しかも同郷の人でもあるという懐かしさと素晴しい舞台を一目見たいという思いで、官費留学生であったのでささやかな小遣いを工面して、何回か、この歌劇を見たと語っている。

四、酵素化学の研究

プラハのドイツ大学では、ワールドシュミット・ライツ教授の指導によって酵素化学の研究に取り組むことになった。

当時のドイツは有機化学の研究では世界の先進国で、ビタミンB[1]の抽出に世界にさきがけて成功した鈴木梅太郎博士を指導したエミール・フィシャーやホフマイスター・ヴィルシュテッターなどタンパク質やアミノ酸の世界最高の学者がいた。

赤堀博士を指導したワールドシュミット・ライツ教授はヴィルシュテッターの弟子であったから鈴木梅太郎博士と同じ研究系列であった。このワールドシュミット・ライツ教授は酵素はタンパク質に似ているがタンパク質ではないと主張していた。

しかしアメリカでは、すでに赤堀博士が大学を卒業した翌年の大正十五年（一九二五年）にコーネル大学の医化学者であるサムナー博士は尿素を分解するウレアーゼという酵素の結晶化に成功し、昭和五年（一九三〇年）には、やはりアメリカのプリンストン大学のロックフェラー研究所のノースロップ博士がトリプシンというタンパク質消化酵素の結晶化に成功していた。

このサムナーとノースロップの両博士は後にノーベル賞を受賞している。

しかしドイツではアメリカで酵素の結晶化に成功したことを認めず、タンパク質の結晶の上に別の物質がついたものが酵素であって、結晶全体は酵素ではないと主張していた。また結晶したということで酵素と断定することはできない。

酵素の働きを詳細に測定して比較する試験を繰返して決定するので、この論争は容易に決着がつかなかった。

日本の学会は伝統的にドイツ系でドイツの学説に支配されていたので、赤堀博士はアメリカの学者の研究論文を読んで、この異なった論争を確かめることも留学の目的であった。

ワールドシュミット・ライツ教授の研究室では最初すい臓の酵素について一年間研究し、その後は教授の指導でニシン（鰊）の白子の中のタンパク質にプロリンというアミノ酸がどれくらいあるかを定量する実験をしていた時、ドイツの有名な製薬会社「カールバウム」の製品に不純物が混じっていることを発見した。

この研究はプロリンというアミノ酸がエールリッヒ試薬で赤い色が出るので、その色の濃淡の色合いをはかってプロリンの量を決めるのであるが、白子のなかのクルペィンに含まれているプロリンには赤い色が出ない。

そこでおかしいと思ってプロリンを含むはずのゼラチンを使ってエールリッヒ試薬を入れてみると色が出る。そして世界的に有名なドイツの製薬会社「カールバウム」の製品のプロリンも色が出た。しかし完全に純粋にしたプロリンで同様の実験をすると色が出なかった。

不思議に思い何回か試験した結果、赤色に反応するのはプロリンそのものではなく「オキシプロリン」である

ことを証明した。

オキシプロリンは(註)コラーゲン特有のタンパク質で酸化されると赤色のピロールという物質になるのである。ピロールは火の意味でもある。

したがってプロリンでは色が出ないことがわかった。

つまり、カールバウム社製のプロリンには不純物のオキシプロリンが混じていたことがわかったのである。

この発見は肝硬変と深いかかわりがあり、「赤堀の反応」として肝臓病の診断に利用されるようになった。

その後この発見はヨーロッパやアメリカでも評判が大きくなり、「ワールドシュミット・ライツ、アカホリの反応」として知られるようになり、現在も標準の試験方法になっている。

当時、鈴木梅太郎博士がドイツに留学中に指導を受けた有名なエミール・フィシャーの論文にはタンパク質にオキシプロリンが含まれていると報告されていたが、赤堀博士の研究によって、これはゼラチンのコラーゲンにしか含まれていない特殊なアミノ酸であることがわかり訂正された。

エミール・フィシャーの論文は学会で高く評価されていたが、このオキシプロリンだけは間違っていたことがわかり、高名なエミール・フィシャーの研究を訂正したことで赤堀博士は欧米や日本の学者から注目され、自身も鼻が高くなった気分だったと回想している。

この研究による発見は大学院時代の醤油の香気成分の研究と同じように赤堀博士が化学研究者としての天分を見事に発揮したものである。

凡俗の研究者であれば赤い色が現われなければ世界的に定評のあるカールバウム社の製品であるから、その純度を疑わないし、また実験が下手であったから失敗したと思い、追試さえも怠るようであれば、この発見はなかったのである。

赤堀博士が、いつも実験の結果について疑問を持って、その理由を検証していく研究態度を堅持していたことは研究者としての優れた天分をもっている者でなければ出来ないのである。

(註) コラーゲン
動物の皮革・腱・軟骨などを構成する硬蛋白質の一種・温水で処理すると溶けゼラチンとなる。

五、アメリカで生化学の研究

プラハでの研究生活は昭和九年（一九三四年）の夏に切り上げ、夏休みにはオーストリアのグラーツ大学で有機化合物の微量分析について研究に専念した。

ここで学んだ分析技術は後の研究で大変役に立ったと語っている。（赤堀四郎「わが青春」による）

その後ドイツ大学では「ハイル・ヒットラー」と叫ぶ学生が次第に増えていたので、ナチス支配のドイツから逃れて、新しい生化学の研究をするためにアメリカに渡った。

アメリカではプリンストン大学のロックフェラー医学研究所の支所で後にノーベル賞を受賞したノースロップ博士について四か月ほどタンパク質消化酵素のトリプシンとキモトリプシンの結晶化の方法について指導してもらった。

この時赤堀博士は、酵素があたかも生き物のように物を分解したり、合成したりする"力"を持っていることに強い感銘を受けた。しかし、それが無生物として結晶化することも驚きで、以後、赤堀博士の研究の重要な目標となったのである。

この研究に使用した原料は巨大な牛のすい臓で、インシュリン・トリプシン・リボヌクレアーゼなどの酵素が一杯つまっている宝庫で、その血生臭い臓物を処理してできた結晶した酵素がたしかにタンパク質であることを確認したのは感慨深い尊い経験であった。

当時のプリンストン大学のロックフェラー研究所はナチスの迫害を逃れてきたアインシュタインなどの亡命者を迎え入れて、多くのノーベル賞の受賞者があつまった学者集団となり、アメリカの科学を飛躍的に発展させたのである。

後に赤堀博士は学者たちの組織化を図り、科学行政にも敏腕を振い、柔軟で自由な発想で優れた研究業績をあげたので、ドイツ的というよりもむしろアメリカ的な学者の風格が強かったとも言われている。

六、タンパク質消化酵素の研究と帰国

海外留学の最後の国はアメリカで、昭和九年（一九三四年）の秋には新しい生化学の研究をするためにアメリカに渡った。

当時、酵素タンパク質を結晶化することに成功し、世界の学会で注目されていたプリンストン大学のロックフェラー医学研究所のJ・H・ノースロップ博士（一九四六年・ノーベル化学賞受賞）について昭和九年（一九三四年）の秋からタンパク質消化酵素であるトリプシン・キモトリプシンの分離精製と酵素の結晶化の方法について研究を続けた。

この時赤堀博士は酵素があたかも生き物のように物を分解したり、合成する力をもっていることに強い感銘を受けた。しかしそれが無生物として結晶化することも大きな驚きであった。また酵素はタンパク質であっても、ただのタンパク質ではなく、生き物のようにちょうど微生物が栄養をとって増殖するのと同じような現象を見せるので大変面白いと思った。

ここで研究したことはその後の赤堀博士の重要な研究目標となり、多大な業績をあげる契機になったのである。

そして翌年の昭和十年（一九三五年）の一月早々にはアメリカから秩父丸に乗船し、三年間の海外留学を終えて帰国することができた。

横浜港では久し振りに出迎えた笑顔の和子夫人と満三歳になった長男の弘道さんが「お父さま、お帰りなさい」と可愛い声で繰り返す言葉には感動の余りまぶたの裏が熱くなった。と語っている。

七、大阪帝国大学助教授に就任

海外留学から帰国して、兵庫県の芦屋市に住むことになり、芦屋市から当時大阪市の中之島にあった大阪帝国大学へ通勤することになった。そして理学部の助教授に任命され、有機化学の講座を担当するようになった。

この大学は江戸後期の蘭学者であった緒方洪庵が大阪で開いた蘭学の適塾の伝統を継いでいた大阪医科大学が昭和六年（一九三一年）に国立に移管され、同時に工学部と理学部を増設し、総合大学として大阪帝国大学が開学したのである。

大学は大阪市の中心になっていた中之島にあって、関西の財界が協力して創立した帝国大学であったので官学的な雰囲気は余り感じられなかった。

そして初代の総長は土星型の原子模型で世界的に知られた原子物理学者の長岡半太郎博士であり、初代の理学部長は赤堀博士が東北帝大理学部時代の恩師であった眞島利行博士で、実父は京都の医者で大阪の有名な緒方洪庵の塾に学んだ蘭学者である。

赤堀博士が大阪帝国大学に着任して最初に取り組んだのは高峰譲吉博士が発見した消化酵素のタカジアスターゼの中のでんぷんの消化酵素のタカアミラーゼの精製であった。

赤堀博士がこの酵素を研究しようと考えた理由は二つで、一つはこの酵素は日本人が発見したものであることもう一つは原料が得やすかったことである。

当初は微生物を培養し、そのなかから酵素を抽出しようと考えたが、その設備はなかったので手に入りやすい三共製薬のタカジアスターゼを利用することになった。

そして次の研究段階では消化酵素のタカジアスターゼの結晶化とその構造を決定することであった。この研究は戦後に再び開始し、昭和二十七年（一九五二年）には結晶化に成功し、タカアミラーゼAと名づけられた。

その後この研究は約三十年間におよび赤堀博士が生涯をかけた研究となった。

試料のタカジアスターゼは三共製薬から大量を買いとり試験を続けたが、なかなか思うように進展しないうちに戦争は激しくなり、三共製薬ではタカジアスターゼの製造を中止してしまったので、やむなく研究を中断しなければならなかった。

八、戦争が続くなかで

戦局は年ごとに悪化し、昭和十一（一九三六年）二月二十六日には青年将校が決起し、政府の要人を殺害したいわゆる二・二六事件が起り、翌年の昭和十二年には日中戦争が勃発し、戦時体制になっていった。

このような状況のなかで赤堀博士は昭和十四年（一九三九年）大阪帝国大学教授に昇格し、理学部化学科の第一講座を担当することになった。

大学の研究室では日増しに資材が不足し、研究活動は思うように進まず、日常生活も次第に戦時色に変わっていった。

このような情勢に対応するため、研究に関するすべてのことを再検討し、いろいろ工夫をしたが、やむをえず戦争に直接関係する研究をしなければならなかった。

まず最初に手掛けたのは毒ガスの一つである青酸[註1]を防御する青酸吸収剤をつくるために銅と生糸を原料にして、これらを軽石の小さな粒に混ぜてガスマスクに詰め、青酸の吸収効果を測定する研究であった。

測定するのは赤堀博士で、自ら試験してみなければならないので非常に危険でしかも怖い研究であった。

ガスマスクに吸収させるものは猛毒の青酸ガスであるから試験する赤堀博士は命懸けで怖くて仕方がなかった。と回想している。（赤堀四郎「わが青春」による）

また夜間でも青酸ガスを発見できる方法について研究し、青酸に反応して発光する物質を考えた。この研究は警察が血液の鑑識に使っているルミノール[註2]という色素と水酸化第二鉄と水酸化バリウムを混ぜたものが青酸と反応し発光するもので、この発光現象を利用した研究成果である。

このように本来の研究とは根本的に違い、希望のもてない研究をしなければならない状況のなかで、毎日の生活は食糧も衣料もすべて不足し、連日のように空襲[註3]があり暗い時代であった。

戦時中の日本全体は厳しい耐乏生活であったが、昭和十九年（一九四四年）の九月には博士が海外留学から帰国した年に生れた二男の弘次さんがジフテリアで亡くなった。

現在では予防接種が普及しているのでジフテリアにかかることはほとんどない。当時でもジフテリア血清があれば回復できたはずであるが、戦時中で医者の手元には抗血清[註4]がなく、取り返しのつかない誠に残念な結果となったのである。博士夫妻の落胆は察するに余りあるものがあった。

（註1）青酸
シアン化水素水溶液の俗称
（註2）ルミノール
有機化合物の一つ。白色の固体。これを水に溶かした液を過酸化水素で酸化させると、青白く発光する。血痕の検出に利用する。
（註3）空襲
航空機から機関砲・爆弾・焼夷弾・ミサイルなどで地上目標を襲撃すること
（註4）抗血清
抗原を動物に注射して得られる抗体を含む血清。実験または治療に用いる。

（参考資料）
赤堀四郎「わが青春」　静岡新聞一九九〇年一月六日―三月二〇日

九、敗戦・窮乏のなかで

アメリカ軍は昭和十九年（一九四四年）の秋から日本に対し空襲を開始し、翌年の昭和二十年三月にはB29爆撃機の編隊が東京の江東地区を空襲し、次いで大阪も空襲を受け、約十三万戸の家屋が焼失した。戦禍はさらに人口の多い順に全国の都市に拡大していった。

日本の各地では、このような大きな被害を受け、大阪帝国大学でも学生や教官など多くの人々は軍務についていたので、中之島にあった大学は電気もガスも使用できない状態で、建物は廃墟となり、大学では何も出来なくなったので、赤堀研究室は西宮の神戸女学院の料理教室を借りて細々と研究を続けていた。

そして昭和二十年の八月十五日には終戦となり、学生のなかには終戦の詔勅（註1）を聞いてすすり泣く者もあり、赤堀博士はこの悲惨な状況を見て、無念の涙がこぼれて仕方がなかったと語っている。

戦争は終ったが敗戦のショックは大きく、赤堀博士は不本意ではあったが、軍の要請で戦時の研究をやっていたことが自身の心に大きな負担になっており、これから何時の日か占領軍に呼び出されて絶え難い屈辱を受けるようなことがあったら、これを飲んで自らの生命を断つことを考え研究用の青化（註2）ソーダを小瓶に詰め、そっとかばんに入れて持ち歩いていた。と言っている。

赤堀博士が戦時中に研究したのは〝防御用〟のガスマスクの素材を開発しようとしたもので、直接的に人を殺傷するようなものではなかった。しかし解釈のしかたによっては敵を殺し、味方の危害を防ぐためであるとも解釈されるので赤堀博士の不安は続いたのである。

このような落ち着かない日々を送っていたところ、連合国軍総司令部（GHQ）は戦争犯罪者あるいは右翼国粋主義者を学校から追放する目的で教員適格審査委員会をつくり、皮肉にもその委員長に赤堀博士がなっていた。

赤堀博士は以前から親しい友人であった水島三一郎博士の義兄弟であり、日頃から尊敬している正田健次郎博士と相談し、同僚の教職員から一人でも戦争犯罪人が出れば自分自身も辞職しなければならないので、内心では一人でも戦犯を出してはいけないと固く心に決め、教授会だけで秘密会をつくり、皆に諮（はか）ったので、理学部からは一人も戦犯は出なかった。

正田健次郎博士は抽象代数学の世界的な権威として知られた学者で赤堀博士とは専門分野は異なっていたが、正確な判断力と優れた常識をもっている学者であり、いつも意気投合し合った先輩教授で、大阪大学の総長を二期勤められ、大学の発展に大きな功績を残された大学者である。

特に戦後は物心両面にわたり混乱が続き、戦時中よりも更に厳しい苦難の毎日であった。日本人の誰もが生きることに精一杯の努力をしている時、米軍が進駐してから二週間になると借りていた神戸女学院を視察することになったので、研究用の機材を中之島の大阪帝大に運搬することになった。

だが運搬する手段である貨物自動車は動けないので、近くの工場から牛車を借りて学生に手伝ってもらおうとしたが、食事も満足に食べていないので、大阪府庁に無理に頼んで「うどん」二十食分を提供してもらい、研究用の機材や荷物を大学に持ち帰ることができた。

当時は学生も教官も将来のために研究を続ける気力も体力もなく、郷里に帰って農業をやろうと真剣に考えていた。

昭和二十年の十月には満四十五歳の男盛りになっていた赤堀博士は将来に向って研究を続ける気力も衰えてきたので、郷里の千濱に帰り、隠とん生活をし、生きていくためには農業でもやろうかと真剣に考えた。

特に食糧不足が続き、明るい見通しもない都会生活の不安を考えると、幼少年時代に母とともに農作業を手伝った懐かしい思い出とふる里千浜の海や山さらには幼なじみなどの郷愁が重なり合って郷里に帰って百姓をやろうと考えたのであった。

敗戦後まもなく学生や陸海軍の技術将校になっていた卒業生が続々と復員してきて、大学の研究室に訪ねて来るようになった。

この人たちに会って話をしているとどの人も皆生きていくためには〝ヤミ屋になろうとか、ふる里に帰って百姓をやろうか〟などと考えており、自らの才能を生かしていく自信を失っていた。

このような〝やけ気味〟で生きていく自信すら見られな

い若者をこのままにしておけば優秀な才能を生かすことは出来なくなる恐れがあると思い、その時彼等を励ました言葉は「化学を専攻した者は今後どんな社会になろうとも、やはり化学で身を立てるより外に道はあるまい。とにかく毎日研究室に出てきて細々でも一緒に研究をやろう。」と言って、理学部の地下の定員十人くらいの狭い研究室に三十人近い人たちを入れ、できるだけ研究費のかからない研究テーマを探し、走りまわって資材と研究費を集め、生化学の研究実験を始めた。

ところが地下にある赤堀研究室は湿気が多く、ガスは出ないし、電力も不十分という劣悪の条件で、この部屋に三十名余りの研究生が入っていたので極めて狭く感じるし、厳しい環境であった。

科学の実験にはガスを使用することが多いので、研究らしいものはほとんど出来ない苦難の毎日であった。

やがてガスが出るようになり、なんとか研究らしい実験ができるようになったのは昭和二十五年（一九五〇年）頃からであった。

このような窮乏の毎日が続くなかで、研究の先頭に立って始めたのは弟子の成田耕造博士を中心とする絹のタンパク質の分析実験であった。

さて実験を始めるにあたり、研究用の材料を集めることは出来たが、絹のタンパク質は難物で他の学者も敬遠して、無茶な研究ではないかと思われていた。

当時は試験薬品をはじめ多くの物質が不足しているなかで進めた研究であったので、困難の連続であった。しかし、その困難を乗り越えて赤堀博士の指導のもとに成田博士らは日本の誇るタンパク質の化学構造や酵素タンパクの活性と構造等という大研究へと進んでいったのである。

（註1）詔勅
天皇が意思を表示する文書。詔書と勅書と勅語。

（註2）青化ソーダ
青酸加里のこと。シアン化カリウムの別称

（註3）水島三一郎
化学者。東京生れ。東大教授。双極子モーメント・ラマン効果・赤外吸収などにより分子内回転を研究。文化勲章（一八九九―一九八三）
回転異性体のゴーシュ形を発見し、構造化学に新境地を拓いた。

参考文献
蛋白質化学（1）編集 水島三一郎 赤堀四郎
蛋白質化学（2）編集 水島三一郎 赤堀四郎
酵素研究法（1）赤堀四郎編
酵素研究法（3）赤堀四郎編
化学者たちのセレンディピティ 吉原賢二著

十、生涯の恩人・眞島利行博士

赤堀博士が眞島利行博士と初めて出会ったのは大正十年（一九二一年）の夏、西島勇志智先生の助手として二か月間仙台の東北帝大・眞島研究室に内地留学したときであった。

この頃西島先生は有機化学を勉強し直そうとしたばかりの時で、当時東北帝大の眞島博士の研究室は日本の有機化学のメッカといわれ、眞島先生が心血を注いで築いた城と呼ばれていたので、赤堀助手を連れて眞島研究室に内地留学したのである。

この内地留学で眞島研究室の雰囲気に触れ、強烈な衝撃を受けて東京に帰ったが、帰京後も眞島研究室に対する憧れにとりつかれていた。

その後生涯の恩師となる眞島博士の人となりについて述べることにする。

眞島利行博士は京都の出身で町医者であった父眞島利民の長男として明治七年十一月十三日に生れた。父は大阪の有名な緒方洪庵の適塾に学ばれ、後に長崎に行き、英国人の医師から西洋医学を学んだといわれている。

眞島利行博士は後に大阪帝国大学の総長に就任されたが大阪帝大は適塾の流れを汲むといわれているので不思議な縁というべきである。

眞島利行少年はその後上京して第一高等中学校（後の旧制第一高校）から当時大学は東京に一つしかなかった帝国大学理科大学化学科に明治二十九年（一八九六年）に入学した。

眞島は大学で有機化学を勉強したかったが帝大では本格的に有機化学を教える先生がいなかった。そして明治三十二年（一八九九年）に帝大を卒業し、化学科の桜井錠二教授のもとで大学院生となり、さらに助手となったが、研究題目はないまま助教授となった。

当時の東大はまだ世界の化学の紹介や輸入機関のようなもので本格的な研究ができる体制ではなかった。

眞島は研究者となるために当時欧米の有名な有機化学の大家であったA・バイヤー（一九〇五年・ノーベル化学賞）やH・E・フィシャー（一九二〇年・ノーベル化学賞）の重要な研究論文を徹底的に読みこなし、研究の着想や研究途上の困難の突破口についての工夫などをほとんど独学で学んだのである。

このような努力の結果、物質の多様性や意外性などを知り、日本の伝統工芸である漆器の塗料である「うるし」

に心を惹かれて研究に着手した。

まず眞島は明治三十八年（一九〇五年）工業試験所で「うるし」の研究をしていた三山喜三郎氏を訪ねて、研究について協議し、応用方面のことは三山氏・基礎である成分の研究は眞島に任せてほしいと頼み承諾していただいた。

この頃から「うるし」の輪郭のようなものがようやくわかりかかった段階で「うるし」の構造を決定するまでには多大な困難があった。

東大では長俊一という学生が眞島助教授の指導を希望していたので学生の卒業研究として研究し、「うるし」の乾溜生成物として気体の炭化水素と液体の水に溶けるプレンツカテキン（カテコール誘導体）を得ることができた。この研究により「うるし」の研究がはじまり、明治四十年（一九〇七年）にドイツの学会誌と東京化学会誌に発表した。

さらにその年には新設の東北帝国大学理科大学の有機化学教官要員として文部省から海外留学を命ぜられ、ドイツ・スイス・イギリスで研究することになった。

留学の二年目の明治四十二年には、ドイツのキール大学のC・Dハリスの研究室で「うるし」の高度減圧蒸留によって「うるし」の成分であるウルシオールの研究をし、基本的なテクニックを学んだ。このテクニックは高度減圧蒸留とオゾン酸化であったが、ここに滞在した終りの頃には常圧接触還元法についても学んだ。

その年には再びチューリッヒに戻り、葉緑素の研究で有名なR・M・ウィルシュテッター（一九一五年・ノーベル化学賞）に師事して常温接触還元法を学び、ウィルシュテッターとともにキノン定量法を開発した。これはウィルシュテッター・眞島法として世界の学会で注目された。

その後眞島は英国に渡り、東大の学生時代、無機化学を教えていただいたダイバーズと再会し、米国を経由して明治四十四年（一九一一年）に帰国し、東北帝国大学で有機化学の研究を始めた。

東北帝国大学に赴任した眞島は、化学実験室を整備するために万全を期して高圧給水や実験用ガラス工作の技術者の養成も手がけ、かなりの年月をかけ、多くの人々の協力によって多くの仕事を完成していった。

特にウィルシュテッターのもとで学び、身につけた研究手段である常温接触還元法をウルシオールに適用し、六年間にわたり研究を続け、ウルシオールは不飽和側鎖をもつカテコール誘導体の混合物であることがわかった。

これらの研究により眞島は大正二年（一九一三年）に桜井褒賞、大正六年（一九一七年）には学士院賞を受賞した。その後昭和六年（一九三一年）に大阪帝国大学が新設され、その創設委員となり、設立後は理学部長として初代総長の長岡半太郎博士と協力し、理学部に新進の学者を集め、その充実発展に努めた。

その後昭和十八年（一九四三年）一月には大阪帝国大学総長に就任し、昭和二十一年に退官するまで昭和二十年の終戦を挟む苦難のなかで大学の運営に尽力した硬骨の学者であった。

終戦も間近い頃、大阪帝大の臨時評議会の席上で配属[訳1]将校の陸軍大佐が学生の軍事教練の時間を増やせと強硬に要求したとき、眞島はその大佐に向って「君は軍事訓練のことしか考えていないが、大学というところは軍事訓練だけをやるところではない。」と激しい言葉で拒否した。

当時陸軍大佐といえば平時なら兵士三千人を指揮する連隊[訳2]長で、中等学校以上の高専や大学には配属将校がいて、軍事教練や軍事についての講義をしていた。帝国大学となれば学生や教官のお目付役でもあった。

したがって、軍人は絶大な権力を握っていたので軍に反対することは大変危険であった。赤堀四郎博士も教授としてこの評議会に同席し、心の中では眞島先生の勇気に称賛の拍手を送っていたが、眞島先生の身を案じてハラハラし通しであった。幸い何事も起らなかったが、同席した赤堀四郎教授はじめ多くの教授は気の立った軍人の反応にハラハラしながら眞島博士の凛とした姿勢と勇気に驚いたといわれている。

当時の大阪帝大は医学部・理学部・工学部という理科系の学部で構成されており、それぞれの専門の科学知識を修得し、研究する最高学府であったが、戦局が悪化したために配属将校は竹槍で敵を刺殺する訓練を優先させよという衝動的な発言をしたのである。

その後昭和二十年八月には終戦となったが、戦後の社会の混乱と窮乏が続くなか昭和二十一年（一九四六年）には大阪帝大総長を辞任した。

眞島博士はこのような窮乏のなかでも戦争で痛手を受けた日本の科学は必ず復興する。しかも早いスピードで回復すると見ていた。これは眞島博士の天性ともいうべき明るさと芯の強さを示しているのである。

このように博士は常に「希望」という心の支えをもって日本の有機化学の開祖ともいわれる素晴しい研究業績を残すとともに多くの優秀な弟子を育て、教育文化の発展に尽し、産業界への橋渡しに貢献した大化学者であった。

このような多大な功績により昭和二十四年（一九四九年）には文化勲章を受賞した。そして昭和三十六年（一九六一年）に米寿を祝った翌年の八月十九日逝去されたのである。

赤堀四郎博士は冒頭に述べたように一九二一年の夏、西沢先生の研究助手として東北帝大の眞島研究室に内地留学をしてから後に、東北帝大に入学・大学院と眞島博

士の厳しい指導を受け、同大学の講師となり、さらに眞島博士の姪と結婚した。その後海外留学を命ぜられ、帰国後は大阪帝大の助教授・教授を経て、眞島博士が一九六二年に他界されるまで四十年余りにわたり厳しいなかにも温かい指導と薫陶を受けた。

眞島博士の真理に対する探究心は赤堀博士に受け継がれ、赤堀博士にとっては文字通り公私にわたる生涯の恩人であった。特に戦中戦後の激動の時代を学究一筋に生き抜いたたかけがいのない偉大な尊師でもあった。

（註1）配属将校
学校配属将校の略

（註2）連隊長
連隊の長で、連隊を統率する責任に任ずる者

（参考資料）
「わが青春」赤堀四郎
（静岡新聞・一九九四〇年一月六日～三月二〇日）
「化学者たちのセレンディピティー」
吉原賢二著（東北大学出版）

負薪読書像のルーツの研究

堀内永人

き出ずる向学心や知識欲で勉強した姿が、教育の本質を象徴している。

三、金次郎の労働と学問は同一論理（労働、学問一元論）にあるとの考え方が、今日の生涯学習の思想と一致している。

と説明している（大日本報徳社機関紙『報徳』平成十五年七月号、三頁）。

（一）負薪読書像とは

負薪読書像とは、薪を背負って歩きながら読書している金次郎少年像（次頁の図1）である。

負薪読書像は、二宮金次郎（尊徳）（一七八七―一八五六）が、少年時代に向学心に燃え、働きながら寸暇を惜しんで勉学したときの姿を顕わしたもので、日本全国で敬われ、愛され、親しまれた日本人なら誰でも知っている少年像である。

負薪読書像の多くは、昭和初期（一九三〇年代）に日本全国津々浦々の小学校に建てられたが、その建設の理由を社団法人大日本報徳社榛村純一社長は、

一、昭和初期の小学校の校長を始め、児童の父母が、「我が子もかくあれかし」と思って、負薪読書像を校門に飾った。

二、「農民の学問無用論」の時代に、金次郎の内から湧

（二）金次郎の生い立ち

二宮金次郎（尊徳）は、江戸時代末期の思想家、農政家、財政家、政治家である。

金次郎は、天明の飢饉（一七八二―一七八七）の最中の、天明七年（一七八七）七月二十三日に、相模国足柄上郡栢山村（現神奈川県小田原市栢山）の裕福な農家の長男として生まれた。

金次郎の生家は、彼が五歳のときに近くを流れる酒匂

図1：一般的な「負薪読書像」

絵：掛井ゆき美

川の大洪水で、所有の田畑（二町三反余＝二・三ヘクタール）が壊滅して没落。

そのため金次郎は、病身の父母に代って懸命に働き、家計を援けたのである。

現在、全国各地に建てられている負薪読書像は、その頃の金次郎の姿を想像して、造られたものと云われている。

金次郎は、十四歳のときに父と死別、さらに、十六歳で母と死別した。

そのため、幼い弟二人は母の実家へ預けられ、金次郎は伯父萬兵衛に引取られて成長するが、昼は農業を手伝い、日没後は、夜なべ仕事（夜間残業）で縄をない、藁草履を作るなどして、勤労と奉仕を心がけた。

夜なべが終わって家人が就寝すると、ただ独り、明かりを灯して、『大学』『中庸』などの中国の「四書」「五経」を学ぶ毎日であった。

ところが、深夜に読書するところを、伯父萬兵衛にとがめられ、

「農民に学問は不要だ、灯油がもったいない」

と、叱声された。この萬兵衛の叱声が、かえって金次郎を勉学少年に駆り立てる結果となった。

金次郎は、道理に合わない古い考え方を否定し、独自の思想に基づいて物事の核心を探求し、その真理を把握することにエネルギーを費やした。

この金次郎の実践に基づく合理的な考え方は、萬兵衛の抑圧で反発的に助長され、ここから報徳思想が生成されたのである（宮西一積著『報徳仕法史』、九頁）。

金次郎は、成人した後、さまざまな困難に遭遇するも、自身の才覚とたゆまぬ努力倹約により、二十四歳で一町四反歩（一・四ヘクタール）の田畑を取得して二宮家を再興。さらに三十一歳のときに、身分制度の厳しい封建社会において、奇跡とも云える三町八反歩（三・八ヘクタール）の田畑を所有する地主となったのである。

この間に、千二百石の小田原藩家老服部家の財政を再建し、さらに五常講貸付金制度（信用組合方式）を創設して、借財に苦しむ小田原藩士やその家族、町民を救済するなど、公私にわたって活躍した。

金次郎の日夜を分かたぬ創意工夫、勤倹力行が、小田原藩主大久保忠眞に認められ、藩主より、

勤労勤倹の姿はその身は勿論
村のために相成り候

として表彰された。

金次郎は、自分のためと思って「小を積んで大を為した」ところ、それが社会に貢献する結果になったことにより、社会貢献に尽くせば、すなわちそれが自分のためにもなることに気がつき、「利他」を悟ったのである。

利他とは、自分を犠牲にして、他人の利益、幸福を優先することである。

三十七歳のときに、小田原藩主より、分家の旗本宇津家四千石の財政再建を委託され、十年間でこれを成し遂げた。

金次郎は、五十六歳のときに、老中筆頭水野越前守忠邦の抜擢で、日光神領四千町歩（四千ヘクタール）の開発を始めたが、七十歳のときに志半ばで病死。その後を長男弥太郎と金次郎の門人がこれを継承したが、明治維新の政変で中止となる。

金次郎が七十年の生涯のうちに行った「救国済世」（各藩の借財返済と領民の貧困救済）の大事業は、「富国捷径」（富国への近道、早道）の仕法として、東北から近畿地方に及ぶ六百余ケ町村において実践されて、大きな成果を上げている。

金次郎は、その気になれば巨万の富を得ることも可能であったが、全財産を社会のために拠出し、七十歳で死んだときは、私有財産は皆無であった。

このように金次郎の真価は、利他の精神に基づく富国捷径の仕法によって発揮されたのであるが、ともすれば、勤勉な孝行少年の印象のみが先行し、

「手本は二宮金次郎」

の唱歌とともに、道徳面がクローズアップされて、後半生の偉大な業績が見失われがちであり、まことに残念である。

（三）負薪読書像の誕生

明治中期から、大正、昭和初期の道徳教育界をリードした負薪読書像は、どのような史実に基づいて作られたのだろうか、その点を考察することにする。

金次郎は、古代中国の儒教の書物や仏教典などを読んで、学問を身に付けたことはよく知られている。

しかし金次郎は、少年期に家庭が貧しくなったため、働くことに追われて書物を読む時間もなく、筆や紙などの筆記用具を買うこともできず、普通の家庭の少年のように、机に向かって勉強することができなかったのである。

働き者の少年金次郎は、農業の暇な日（農閑期）においても、昼は山林から柴（薪）を刈り、栢山村から小田原城下まで担いで運び、柴を売って日銭を稼ぎ、家計を援けたのである。

この頃は、農民に学問は不要といわれた時代であったが、金次郎は、農民にも学問は必要であるという想いが人一倍強かったので、栢山村から小田原城下までの往復十五キロメートルの道すがら、時々休憩をかねて道端に腰を下ろし、懐中から『大学』などの本を出して読み、これを歩きながら復唱して、暗記したと伝承されている。

歩きながら、大声を出して暗唱したので、村びとから「キ印の金さん」とニックネームを付けられた。

図2：とんがり棒で柴を担ぐ金次郎少年（想像画）

絵：掛井ゆき美

金次郎の生地では、「歩きながら暗唱した」という伝承はあるが、「歩きながら本を読んだ」という伝承はない。

さらにこの時代、相模地方（神奈川県西部）には負薪読書像のような「背負子」という背負い道具はなかったので、「歩きながら本を読む」ことはできなかったはずである。

したがって、「歩きながら本を読む姿」は、後世の創作である。

金次郎の少年時代の相模地方には、前頁の図2に示す「とんがり棒」を使用して、柴を運搬するのが、一般的であったといわれている。

元社団法人大日本報徳社副社長八木繁樹氏によれば、「金次郎の少年時代には、図2に示すように、長さ二メートルくらいの『とんがり棒』の両端に、柴の束を突き刺して担ぐ方法が普通であったので、金次郎少年も、その方法により柴を運んだと解するのが妥当である」と解説している（『報徳』昭和五十九年十一月号、十五頁）。

現実問題として、史実と同様に、「とんがり棒」で担いでいたのでは、歩きながら本を読むことは至難のことであり、現在の「薪を背負って歩きながら本を読む」スタイルの金次郎少年像は考えられない。

それにもかかわらず、薪を背負って歩きながら本を読む負薪読書像のスタイルが完成したのは、単にとんがり棒スタイルでは、絵になりにくいというだけではない。

前掲八木繁樹氏は、明治四十三年（一九一〇）に明治天皇がお買上げになった、高さ四十四糎の金次郎少年像（彫刻家山崎雷声〈本名知治〉）氏制作）が、現在の「背負子」スタイルであったため、それ以降、このスタイルが二宮金次郎銅像の原型となり、負薪読書像ができあがったと解説している（通説）。

（四）負薪読書像ができる経緯

それでは彫刻家山崎雷声氏は、どのような経緯をもって「背負子」スタイルの負薪読書像を作成したのか考察する。

次頁の図3は、明治二十四年（一八九一）に東京、日本橋の博文館が出版した少年文学シリーズ第七編、幸田露伴著『二宮尊徳翁』の口絵の二宮金次郎少年である。

この幸田露伴が著した二宮金次郎の伝記が出版されると、図3の「金次郎少年の絵」が、この伝記とともに、一般市民の好感を呼び、以後、このスタイルが定着したという説が一般的である（前掲、八木繁樹氏）。

したがって彫刻家山崎雷声氏も、図3の口絵を参考としたものと思われる。

図3：幸田露伴著『二宮尊徳翁』の口絵

模写：掛井ゆき美

（五）文部省の『小学読本』の挿絵

ところが、国立教育研究所名誉所員の板倉聖宣氏は、その著書『日本史再発見』（朝日新聞社、一九九三年）で、幸田露伴著『二宮尊徳翁』の口絵（図3）の負薪読書像にもモデルがあったと指摘している。

そのモデルとなったのが、次頁の挿絵（図4）である。

次頁の図4は、明治五年（一八七二）に文部省が刊行した師範学校編纂の学校教科書『小学読本』に掲載されている「牛を曳く牧場の少年」の挿絵である。

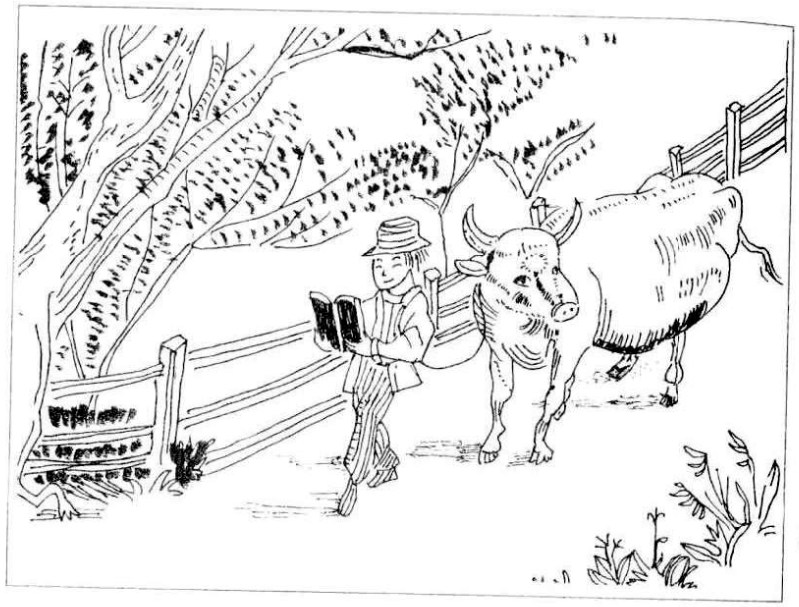
この「牛を曳く牧場の少年」の挿絵こそ、板倉聖宣氏が指摘する、①着物と洋服、②髷と帽子、③柴を縛った背負子の有無、④山道を歩く少年と牧場で牛を曳く少年の違いこそあれ、少年時代の二宮金次郎そのものである。

図4が掲載されている、師範学校編纂の『小学読本』一二六頁には、

《……この図の牛はおとなしい牛で、少年は牧場に牛を曳いて行くところです。この少年は、なぜ歩みながら本を読んでいるのでしょうか。

この少年は、生まれながらにして才知に優れ、学問が好きで、いつも勉強していますが、家が貧しいため学校に行くことができず、毎日牧場に行って働いています。しかし、向学心に燃え、道を歩いているときでも、牧場の休憩時間でも、本を読んでいます。

図4：小学読本『牛を曳く牧場の少年』



模写：掛井ゆき美

このような少年は、将来、かならず優れた立派な人になるでしょう。

それに対して、行いが悪く、怠け者の少年は、毎日学校に行っても、真面目に勉強せず、悪遊びばかりしているため、学力は劣り、社会から取り残されて、生涯貧しく、そして、人生の落伍者となって一生を終わるでしょう》（現代文訳筆者）

と、挿絵に関連して、道徳教育の記述がなされている。

この明治五年に文部省から刊行された師範学校編纂、『小学読本』の「牛を曳く牧場の少年」の話は、二宮金次郎の物語と類似しているのみならず、構図も幸田露伴著『二宮尊徳翁』の口絵の金次郎少年像とそっくりで、

「手本は二宮金次郎」

と謳われた二宮金次郎を髣髴させるものがある。

幸田露伴著『二宮尊徳翁』の挿絵（図3）の作者（画家の永楽）は、この「牛を曳く牧場の少年」（図4）が、道徳的な模範少年として描かれていることに着目し、二宮金次郎少年のイメージにぴったりであると思い、『小学読本』の少年に倣って描いたものと推察できる。

（六）負薪読書像のモデルは
アメリカの牛飼い少年

前掲の国立教育研究所名誉所員の板倉聖宣氏は、『二

宮金次郎の銅像の原型』と題して、

《薪を背負う代わりに牛を曳いていることは違っているが、話の筋立てはそっくり同じだと言っていいだろう。じつは、『小学読本』のこの話は、日本の編者の創案になるものではない。この読本は、アメリカ伝来の『アメリカのウイルソン第2リーダー』の教材文を、少し日本流に改めたものだからである》

と指摘している（前掲書『日本再発見』二一〇頁）。

図5は、アメリカのウイルソン第2リーダー（一八六一年刊行）第十二課「牛をひきながら」の挿絵である。前掲の板倉聖宣氏は、この「牛をひきながら」の文章を、次のように紹介している。

《（図5の絵を）ごらんなさい、これはおとなしい牛ではありませんか。この牛はその子を角でつついたり、引っぱり去ろうとはしていません。牛はその子につき従い、その子は紐を持って牛の前に歩いているだけです。

この子の名はジョン・ブラウンといい、学校へ行くところです。あなたは、前にジョン・ブラウンのことを読んだことがありますか。

図5：米国教科書「牛をひきながら」

模写：掛井ゆき美

しかし、ジョンは、どうして牛を連れているのでしょうか。

この子は、牛を学校に連れていこうとしているのでしょうか。

いや、そうではありません。この子は、学校の近くにある牧場に牛を連れていっているのです。

それなら、これはその日の何時ごろだと思いますか。それではジョンは、何を読んでいるのでしょうか。ジョンは自分の本を読んで、勉強しているのです。ジョンはいい子で、本を読むのが好きなのです。

ジョンは自分の杖をどうしていますか。それを手に持っていますか。何と言ったらいいか、画をよく見てごらんなさい。

ジョンは何かを背負っています。それは何だと思いますか。それはナップサックです。あなたはナップサックというのはどんなものか知っていますか。

それは小さな袋です。

私は、ジョンのお母さんがそれを作って、ジョンが自分の本を中に入れて背負うようにしたのだと思います》

このウイルソン・リーダーは、問答形式となっており、挿絵を見て、教師と生徒が話し合いながら、道徳的な教訓を理解させるようになっている。

このアメリカのウイルソン・リーダーの記述に対して、わが文部省の師範学校編纂『小学読本』の記述、「牛を曳く牧場の少年」の話（前項を参照）は、さらに道徳的色彩が濃厚である（前掲書『日本史再発見』二二一頁）。

以上を考察するに、明治五年（一八七二）に文部省が刊行した『小学読本』の「牛を曳く牧場の少年」（図4）は、アメリカのウイルソン第2リーダー（一八六一年刊行）第十二課の挿絵「牛をひきながら」を参考にして作成されたものといえよう。

（七）ウイルソン・リーダーについて

広島大学大学院教育学研究科の西本喜久子氏の研究によれば、アメリカ『ウイルソン・リーダー』の執筆者ウイルソン（Willson,Marcius 1813―1905）は、ニューヨーク州オンタリオ郡リッチモンドにある父親が経営する広大な農場で、少年期を過ごした。

ウイルソン・リーダーに登場する農場風景は、ウイルソンの少年時代の日常生活がモデルとなっている。また、教科書の道徳的な題材は、この時代の信仰が大きく影響している。

ウイルソンは、一八三一年にオンタリオ郡の名門、キャナンダイグァ・アカデミーで学んだ後、一八三六年に

ユニオン・カレッジを卒業。その後、大学教員を経て、弁護士となる。しかし、持病の喘息のために弁論ができず、弁護士を止めて一八四九年から一八五四年まで、母校のキャナンダイグァ・アカデミーの校長を務めた。

その後ウイルソンは、一八五三年にハーパー出版社と学校教科書執筆契約を締結、以後、執筆活動に専念、一八六〇年―一八六一年に『ウイルソン・リーダー』四冊を刊行した。

ウイルソンは、一九〇五年に九十一歳で死亡するまでの間に、学校教材用の読本（ウイルソン・リーダー）のほかに、歴史教科書、教育掛図、聖書解説書など多数の書物を執筆、アメリカ教育出版界に確固（かっこ）たる地位を築いた（この項は、『広島大学大学院教育学研究科紀要、第二部第五六号二〇〇七、一三一―一四』より）。

（八）むすび

明治新政府は、従来の寺子屋方式における読書き算盤の教育では、欧米先進諸国に追いつくことはできないと判断し、近代的な学校教育制度を創設し、明治四年（一八七一）に文部省を設置した。

翌五年（一八七二）に学制を公布して、男女平等に学ぶ義務教育制度を実施したのである。

次に、これらの事情を前提として『ウイルソン・リーダー』の「牛をひきながら」（図5）から「負薪読書像」（図1）までを時系列に並べてみる。

一、文久一年（一八六一）…ウイルソン・リーダーの「牛をひきながら」（図5）が刊行される。

二、明治五年（一八七二）…小学読本の「牛を曳く牧場の少年」（図4）が刊行される。

三、明治十六年（一八八三）…明治天皇が『報徳記』を宮内庁から刊行され、知事以上にご下賜される。

四、明治二十四年（一八九一）…幸田露伴著、『二宮尊徳翁』の口絵（図3）が国民の評判を得る。

五、明治三十七年（一九〇四）…修身教科書に初めて二宮金次郎が登場する。

六、明治四十三年（一九一〇）…彫刻家山崎雷声作の二宮金次郎少年像（図1）が展覧会に出品され、明治天皇がこの金次郎像をお買上げとなる。

これらの史実を考察すると、日本各地に建てられている負薪読書像（図1）のルーツは、幸田露伴著『二宮尊徳翁』の口絵（図3）よりさらに遡って、アメリカの『ウイルソン・リーダー』の「牛をひきながら」（図5）の絵にまで遡ることができる。

このことは、アメリカの影響を受けた明治新政府が、学校教育制度においてもアメリカ式教育を取り入れ、小学校で使用する教科書『小学読本』を作成するに当たって、ウイルソン・リーダーをモデルにしたことは想像に難くない。

さらに、二宮金次郎が、明治三十七年（一九〇四）に初めて修身教科書に登場して以来、二宮金次郎の少年像が、勉強熱心な孝行息子として、日本全国の小学生の手本となり、薪を背負って読書する姿（負薪読書像）が、日本国民の心の中に定着していったのである。

そして今、二宮金次郎（尊徳）といえば「報徳」であり、われわれの脳裏に浮かぶのは、薪を背負って歩きながら読書する少年像「負薪読書像」である。

二宮尊徳の道歌

孝行の歌：孝行は誰しらずともおのずから
四方の国ぐにみな服すらん

親子一体の歌：父母もその父母もわが身なり
われを愛せよ我を敬せよ

永安の歌：花の実をまいて幾代の末までも
ともに楽しむ人ぞ尊き

（現代版報徳全書⑩『解説二宮先生道歌選』より）

あとがき

『負薪読書像のルーツの研究』は、平成二十年十二月四日、学士会館（東京神田錦町）で開かれた「二宮金次郎研究会」の研修会で、新井宏会員（韓国国立慶尚大学招聘教授）から、前掲、板倉聖宣著『日本再発見』（朝日選書）第十八話「二宮尊徳と明治維新」に関する記事文を教えていただいたのが、執筆の切っ掛けである。

新井教授から、その後もお力添えをいただいた。

書き進むうち、この論文は、文字だけでは十分に意を尽くせないことが分かり、執筆を半ばあきらめていた。

そんなとき、静岡新聞社の知人から、静岡市清水区在住で、高校、大学時代に美術部で活躍され、最近、絵の本も著された掛井ゆき美さんを紹介していただいた。

早速、挿絵をお願いしたところ、快くご承諾いただき、ご多用のなか、筆者の注文通りの絵を描いて下さった。

おかげさまで、無事、本論文を『まんじ』一二〇号記念号で発表することができた。

新井宏教授と掛井ゆき美さんあってのこの論文である。

お二人に深く謝意を表します。

平成二十三年三月三日

堀内永人

固有の善

松下壽男

一

「金次郎さんはばくちの神様だっておらのじっちゃが言ってたべ。じっちゃがばくちに勝って、家まで建ててくれたんさ」

「んだ、んだ。したっけそん家がかわや御殿だっぺ」

子供らは腹を抱えて大笑いをした。

「こらこら、勤作に吾六。手習いの最中ではないか」

入門したばかりの与作の席に陣取って耳をそばだてていた高慶は、筆を手に、振り返りもせず二人を叱った。高慶の朱筆が、うらなりのなすびを転がしたような与作の字の上を緩急自在に走った。高慶の懐に抱かれて穂先を見つめていた与作が、

「ほう」

とため息をついた。叱られた二人も、墨でまだらになった指先で頭を掻き掻き机に向かった。子供の呆けたまげ頭が重箱のぼた餅のように並び八畳と十二畳の座敷には再び静寂が広がった。

奥州相馬藩士富田高慶が野州桜町近郷で、顔役の太助に勧められるまま寺子屋を構えて三か月が経っていた。

江戸の昌平坂学問所と言やあ、お侍様でもほんの一握りが選ばれて行く学校だっぺ。先生はまだお若いが、その昌平校で学ばれたんさあ、という太助のふれこみのお陰で、この商家の離れは、じきに寺子で一杯になった。

色白で鼻筋の通った高慶の顔立ちも婦女子の間で評判になっていた。にわかに雨が降り出せば、寺子屋の軒下は番傘を抱えた姉や母親、さらには妙に若作りをした祖母らでごったがえす有様であった。

高慶は太助に勧められるまでは自分がまさかこの地で先生と呼ばれようとは思わなかった。呼ばれるようになっても、高慶が苦労して学んできた学問は役に立つようなものではなかった。まして子供の頃藩公子の近侍として学んだ経験など村の寺子屋では通用するものではなかった。

正座やお辞儀すらもなっていない寺子らに、高慶は、礼儀作法を教えようと躍起になった。しかし教えても教えても長続きはしなかった。

お前たちは我慢というものを知らないのかと叱責もしたが、子供の頃の高慶のように発奮する気配は一向に感じられなかった。

(我慢させようと躍起になっていたその頃に比べると私の考え方も大きく変わったが、子供も今では見事に変わったものだ)

朱筆と、朱墨を入れた茶わんを手にした高慶は、どの子も落ち着いて伸び伸びと手習いに取り組む姿を眺めながら、三か月間の出来事を思い出すのであった。

それは谷田貝に寺子屋を開いて間もない梅雨の晴れ間の出来事であった。

休み時間に、高慶が算盤の飲み込めない二人を相手に教えていると、最年長の一蔵を先頭に年長の子供らが縁側から駆け上がってきた。

「まき割り場で転んで弥七の腹が真っ赤だべ」

それまでいつも聞き役だった呑気者の一蔵が真っ先に口を開いた。

(しまった)

と、高慶は思った。そこは斧や先の尖った木の枝でごった返していたのであった。

高慶が駆けつけると、弥七は同い年の勤作に付き添われ腹を押さえてうずくまっていた。指のすき間から絣の着物が赤黒く染まっているのがわかった。

「弥七、大丈夫か」

と高慶が抱きかかえると、弥七は、

「大丈夫だべ」

と、泣き出しそうな声で答えた。その腹の辺りから甘酸っぱい匂いが漂ってきた。

「弥七、言うべ。先生は怒らんべ」

と勤作が促した。弥七が、

「先生、赦してけろ」

と声を上げた時には、高慶の手は弥七の着物をはだけていた。腹部から赤黒い汁にまみれた桑の実がぼろぼろとこぼれ落ちた。胸を撫で下ろした高慶は、

「はっはっはっ」

と、大笑いをしてしまった。勤作が弥七に、

「ほら、笑ったべ」

とほほ笑んだ。一蔵ら年長者も、

「ははは、えがったの、先生」

グミの実のような舌べらに乳白色の大きな団子が載っていた。離れた席から仁平が佐吉の傍らにやって来た。
「先生、鳥もちだっぺ。せんから欲しい欲しい言うもんで朝おらがくれてやったんさあ」
「鳥もちかあ」
「いいのう」
子どもらの口から、羨望の声が漏れた。
仁平の家にはモチの大木があって、メジロ取りの季節が近づくと、彼は樹皮を削って叩いてつぶし、冷たい小川の水で晒してねばねばの鳥もちを作る。その鳥もちを紐のように延ばしながら枝切れにくるくると巻き付け、藪の小枝に仕掛けるのである。仕掛けのそばに、声の良いメジロを入れた鳥かごを吊るしておくと、声に魅かれたメジロがやって来て、ちょんと仕掛けに止まるのだ。
得意気に語る仁平の話に、子供らは頷きながら聞き入った。
「なるほど」
と、高慶もついつい感心しながら聞いてしまうのであった。
長い長い仁平の解説が終わると、佐吉は小さな目に涙を溜めて、鳥もちと唾でいっぱいの口の奥からアワアワとしきりに訴えた。
「佐吉、これへ吐き出せ」
高慶は懐紙を差し出した。佐吉がよだれと一緒に吐き出

と笑い合った。
「弥七、寺子屋に食いもんは持ってこんな」
と、一蔵が諭すと、弥七はとうとう泣き出した。
「ところで勤作、お前桑の実んことを知っとったっぺ。なんで黙っとった」
「先生に謝るのは弥七だべ。先生を呼びに行くのは一蔵だべ。おら年下だで譲ったべ。みんなそれでよかったべ」
「生意気こくでねえ」
と一蔵がコツンと頭を叩くと、勤作が、
「へへへ」
と肩をすくめた。一蔵らは何事もなかったように遊びの輪の中に戻って行った。
やり取りを聞いていた高慶は、幼い勤作の口から譲るという言葉が出てきたことに、そして呑気者と思っていた一蔵が実は普段は譲っていたことに感心させられた。それ以来、高慶は、寺子屋のきまりを一蔵ら年長者と一緒に考えて決めることにした。すると弥七ら年少者もそれを当たり前に守るようになってきた。一蔵らの目配り気配りのお陰であった。
梅雨明けの頃にはこんなこともあった。
高慶は、おしゃべりな佐吉が朝から静かなことに気がついた。奇妙に感じて、読本の最中に高慶は佐吉の顔をのぞき込んだ。間の抜けた二つの目玉が鼻の付け根の方に寄り集まると、佐吉の口がひとりでにポカンと開いた。

した鳥もちを高慶は佐吉の机の上に置いた。開け放された部屋の光の中で鳥もちがぬらぬらと輝いた。
「先生、仁平が精出してこしゃえた鳥もちだっぺ。うっちゃらんでけろ」
佐吉の訴えはようやく言葉になった。周囲の子供からも、
「もったいなかっぺ、先生」
と、声が上がった。
「しかし、寺子屋には学問にいらぬ物を持ってきてはならない。鳥もちが欲しければ家に帰ってから取りに行けばよいではないか」
「けんど、佐吉ん家と仁平ん家とは、あっちとそっちで、村も違うとって、寺子屋でしか会えねえべ」
「おらん村のわらしらは、鳥もちの作り方なんて知んねえし」
佐吉がしょぼんと呟いた。
「よし、わかった。捨てはせん。鳥もちは、帰りまで、机の上に置いておけ」
「へい」
と、この時ばかりは深々と頭を下げた佐吉と仁平であった。
ところが口が空っぽになると佐吉の持ち前のおしゃべりが始まった。しかも目の前には鳥もちがあった。
「先生、鳥もちが干てきたべ」
「先生、鳥もちが硬うなってしまうべ」
佐吉がひっきりなしに声を上げる。
「先生、佐吉がうるさくて本が読めんべ」
「先生、もう鳥もちを佐吉の口に詰め込んでくんせえ」
「それがええっぺ。鳥もちも喜ぶし佐吉も喜ぶしおれらも静かになって喜ぶべ」
そう言ったのは勤作だった。子供らはどっと笑った。高慶は、
「よし」
と手を打った。また勤作の言葉に感心させられたのだ。
「佐吉、鳥もちを口に入れろ。乾かさぬよう大事に家まで持って帰れ」
佐吉はにっこり笑った。目を細め、口をぱっくり開けて、鳥もちの団子を頬張った。
「佐吉、うまかっぺ」
周囲の冷やかしに佐吉が口をもぐもぐさせながら大きく頷いたので、子供らがまたどっと笑った。
「それから、明日、寺子屋で鳥もちを作るぞ。仁平、お前が皆に教えろ。モチの木の皮が取れる者は持ってこい。鳥もちは江戸では駄菓子屋でよい値で売られておる。作り方を学べば役に立つ」
寺子どもは、立ち上がり飛び上がって喜んだ。
「家に帰って、お父に話して、昼餉を喰らったらモチの木を探しに行くべえ」
「したっけまぐさ場ん林ん中は怒られるっぺ」

などど、口々に語りながら子供らは勇んで帰って行った。

成り行きで言ってしまったことではあるが、高慶は、悔やみはしなかった。三方皆喜ぶという勤作の言葉を思い返していた。子どもをしつけようと躍起になっていた高慶が、いつしか子供の言葉に感心させられるようになっていたのであった。

鳥もちも、声のよいメジロも、江戸ではれっきとした商品であった。だから鳥もち作りもメジロ取りもただの遊びではなく産業の学びでもあった。書物で教わる学問よりも、実利につながることを学び合う学び方を身に付けるほうがずっと役に立つにちがいない。そしてなにより高慶は、子供同士が互いに知恵を出し合って学び合う姿をじっくりと見てみたかった。高慶は、寺子屋で教えるようになって以来初めて自分の足で歩いているような愉快な気分になった。

翌朝は、モチの木の皮取りの出来事やこれから始まる鳥もち作りの話で持ち切りだった。

皮を剥きすぎてモチの木を傷めては元も子もあるめえと年寄りに諭された子供らは、遠慮しながら樹皮を剥がしてきたと語った。高慶は竿秤を取り出した。仁平らと少量ずつでも平等になるように取り分けて材料が皆に行き渡った。

「座敷を汚しちゃなんめえ」

と、仁平は、皆を引き連れて外へ出た。道端の石ころや、小川の水、そしてなにより仁平の懇切丁寧な示範と手取り足取りの教授のお陰で、皆の樹皮がべとべとした鳥もちに姿を変えていった。ほんの少しの量ではあっても自分の手で作った鳥もちには愛着があった。仁平はそれを、

「ええのう」

「もうちょっとだべ」

と、的確に品定めして回った。高慶も、これでもかと真っ白になるまで水の中でねばつく塊を揉み晒すのであった。

その日、子供の帰った後の寺子屋は、井戸のつるべや厠の扉の取っ手など思わぬところが鳥もちでべとついていた。

高慶は、もう礼儀作法を教えようなどとは考えなくなっていた。実のない礼儀のために我慢を強いることもしなくなった。百姓の小倅たちは、普段は譲っていてもいざという時は役割を果たす存在だった。聞く値打ちのあることは黙って聞くし、伝える必要があることは一人でもしゃべる存在であった。武士の高慶にもそれが彼らの天然自然だとわかってきた。そして子供らの格式にとらわれない正直な振る舞いを愉快に感じている自分に気がついたのであった。

教場では子供らが黙々と手習いを続けていた。

仁平は、文机の脚元に竿秤を置いていた。鳥もちの重さを測って以来、仁平は竿秤の虜になった。働いた前後

の物の重さを測っては帳面に記すのだ。手習いが終わったら墨の重さを測るつもりだろう。佐吉も寺子屋で学んだ鳥もちの作り方を村のわらしらに教えたので、年長者からも一目置かれるようになったという。

（おしゃべりだった佐吉も見違えるほど落ち着いてきたな）

子供らの一人一人を目を細めて見守る高慶であった。

二

富田高慶には藩主益胤公に対する大恩があった。高慶は若くして幼少の嫡子充胤の近侍に抜擢されたのであった。充胤より五才年上とはいえまだ少年の高慶に、益胤公は自らの取り組む藩政再興について詳しく語り聞かせたのであった。相馬藩の窮状を鑑みれば、再建の道半ばにして藩政を公子に託すことになるだろう。我が子の頼もしい相談相手になってほしいという藩主の願いがひしひしと高慶に伝わってきた。

高慶は、ひたすら学問に打ち込んだ。興国安民の方策を学び藩主の恩に報いなければならないと考えたからであった。江戸に出て高名な学者の門を次々と叩いた。昌平校の儒官の塾生ともなった。しかし学んでも学んでも進言をして藩の窮状を救えるような方策は見つからなかった。

疲れと焦りが重なって高慶は病に臥せった。苦学の末に得たものが病であった。自分にとって学問とは何だったのか。自由の利かない体で自問を重ねた。幸い医師磯野弘道は世話好きであった。しかも門人を介して広い世間に通じていた。富田高慶は医師弘道から二宮尊徳が仕法によって農村を次々に復興させている事実を教えられたのであった。

高慶はもはや寝てはいられなかった。気力が、そして体力が見る見る回復していった。尊徳の名は、どんな薬より効くようですなと、医師弘道も眼を見張った。

尊徳の陣屋がある野州桜町へ旅発つ前に高慶は弘道を訪れた。こうして学問に代わる道しるべを見出して旅発つことができるのも先生のお陰です。今では病になったことさえ感謝しなければなりませんと高慶は語った。

いやいや、と言いながら弘道は、桜町近郷の門人で尊徳とも顔見知りだという人物に書かせた紹介状を取り出した。これにはあなたが学問所で学んだ経歴も書いてある。学問は決して無駄にはならないはずだと弘道は語った。高慶の目に感謝の涙が溜まった。ご恩は忘れませんと伏したまま書状を受け取った高慶であった。

桜町に着くと、高慶は真っ先に陣屋を訪ねた。そこはまるで江戸の奉行所でもあるかのように人がひっきりなしに出入りしていた。しかし高い塀もなければ門番もいなかった。彼は人の間を縫うようにして門をくぐり陣屋

の玄関に立つことができた。するとすかさず野良着を着た下男風の男が現れて、用件を尋ねてきた。奥州相馬藩士富田高慶、是非とも二宮尊徳先生に入門仕りたいと、簡潔に用件を伝えて紹介状を手渡した。男は、しばらくお待ちをと言い残し、奥へ消えていった。

耳を澄ますと、奥から人声が漏れ聞こえてきた。話の中身までは聞き取れなかったが、ひときわ大きな声を響かせている人物が尊徳であろうと思った。高慶の身が自ずと引き締まった。やがて声が止んだ。尊徳が紹介状を読んでいるのだろうと高慶は思った。しばらくして男が出てきた。先生は忙しいので会えない、出直し給えと男は無表情に口上を述べた。高慶は、わかったと頭を下げて立ち去るほかはなかった。

高慶は、旅籠に逗留し、四日続けて陣屋を訪ねた。男の口上では、先生は多忙か留守中かのいずれかであった。その後に何とも無聊な時間が高慶を待っていた。

尊徳は本当に忙しいのであろうかと疑問を持って玄関を立ち去った高慶は、恐る恐る陣屋の裏手に回ってみた。咎められれば厠を探していたと誤魔化せばよいと考えた。しかし予想に反して、だれに見咎められることもなく座敷の軒下に立つことができた。しかもそこからは、障子一枚隔てて中の会話が筒抜けだったのだ。

座敷では小田原藩の財政再建について議論を交わしている最中であった。

分度とは天命の自然を探り至当の分限をもとめて初めて得られるものである。中正の分度が立たなければ仕法に取りかかれる訳がない。しかるに小田原藩は、分度を立てる前に、仕法の役所を建てようとしてわしの所に図面を持ってきた。それは桶に底を付けないうちに取っ手を細工するようなものであると、尊徳は飾らない絶妙な喩えを用いて分度と仕法の関係を語った。

なんと明快な議論であろうと高慶は思った。時の経つのも忘れ高慶は聴き入った。学者の中にも、これほど論の立つ師に出合ったことはなかった。自ずと心に染み込むようなその教えからは独学とはいえ、和漢の書籍の知識がにじみ出ていた。高慶は尊徳を学者の資質を備えた人物と見定めて師と仰ごうと心に決めた。高慶の学識がそう判断したのであった。

（しかもこうして外からいつでも先生の教えを学ぶことができようとは）

学問所の大講堂の末席から蚊の鳴くような講義を聴いて学び方を身に付けてきた高慶にとっては、そこはむしろ特等席のようであった。弘道の言葉の通り、学問は決して無駄にはならなかったのである。江戸で身の周りの品を売り払って工面した路銀は心細くなってはいたが、高慶はこれから毎日ここへ通おうと決心した。

数日経ったある日の午後、高慶がそこで仕法の講義を聴いていると、もしお侍様、と背中から声を掛ける者がいた。振り向くと着流し姿の小柄な初老の男がぺこりと頭を下げてきた。江戸で奉公したことでもあったのか男は垢抜けた丁寧な言葉遣いで話しかけてきた。

お勉強熱心でござんすね。何もご心配には及びません。金次郎さんもお若い頃にはこうして障子の外からお勉強をなさったそうでござんす。あっしも時々こうしてお話をうかがいに参りやす。男は太助と名乗った。

拙宅の下高田の寺子屋で師匠が旅に出る間の代講をお願いできないか、その後は谷田貝村で寺子屋を創るのでそちらで教えていただけないかと太助は何度も頭を下げた。どちらも陣屋から一里ほどしか離れていないことを知って高慶は即座に引き受けた。こうして高慶は午前中は寺子屋の教師をして生計を立て、午後は毎日陣屋の裏手から尊徳先生の仕法を学ぶことができるようになったのだった。

この土地に腰を落ち着かせて暮らし始めると、寺子屋で、陣屋や巷で、高慶は様々な人々に出会うことになった。彼らの口にする尊徳先生の評判が自ずと耳に入ってきたし、高慶もすすんでそれを聴こうとした。

ある百姓は金次郎さんは農業の先生だと言った。開墾の大将と言う者もあった。ある武士は治水の博士と呼んだ。ある浪人は尊徳は尊大な無礼者じゃと怒って陣屋の門を出て行った。陣屋の衆に茄子を食べてもらいたくて持ってきたという老婆は、金次郎さんは飢饉の神様じゃと言って手を合わせた。こつこつ働いて儲けを貯める積小為大の教えのお陰であっしもやってこれやした、尊徳先生は商いの神様でござんすと太助は語った。

（そう言えば勤作の祖父は、金次郎さんはばくちの神様だと言ってたそうだな）

尊徳先生がばくちを奨励するはずはなかったし、倹約を尊ぶ先生が賭けをして家を建ててやるという大盤振舞に及ぶなどおよそ考えられないことなので高慶は苦笑いをした。

ともあれこの土地に十六年も腰を据えて人々と共に荒地を起こし飢饉を乗り越えて豊かな町に育て上げた尊徳を、親しみを込めて金次郎さんと呼ぶことも、神様と崇めることも、どちらももっともなことであった。見る者によって尊徳が様々な姿を見せているのは、何より尊徳本人が身分や格式にとらわれずありのままに生きているからだろうと高慶は考えるようになっていた。

この陣屋の門を初めて叩いてから四か月の月日が流れていた。その間にまだ一面識もない尊徳先生は高慶にとって唯一無二の存在になっていた。秋が深くなったせいか思い出に浸ることが多くなったなと高慶は思った。これではいかんと思いっきり鼻をすすって、高慶は陣屋の裏手の特等席で耳をそばだてた。玄関で告げられた通り、尊徳は小田原に滞在中のようであった。

「これは見事な甘藷だっぺ」

「焼いて食うけえ、煮て食うべきけえ」
「お侍様、共食いじゃあなかっぺ。わしらあ芋さごてっしり喰らっても、芋百姓たあ呼ばれんべえ」
「ははは、けんど水飲百姓たあ呼ばれっぺ」
「芋と水では天と地ほどの差別ではないか。おぬしらの笑える話ではあるまいぞ」
座敷からは門弟が自由闊達に議論を交わす声が聞こえた。国なまりや百姓言葉、おまけに明るい笑い声までも響いてきた。
(まるで大人の寺子屋のようだな)
と、高慶は思った。
それを、いもこじということは、高慶も太助から教えられていた。芋がたらいの中でもみ合い自ずと汚れが洗われるように、思いを率直に語り合うことを通して素直な持論が明らかになっていくのだ。ならば、いもこじに学問はいらなかった。素直な持論や信念は、書籍に求めるものではなく自分自身に問うべきものであったのだ。学問はいもこじによって洗い流される汚れに過ぎないと高慶は感じた。せっかくの紹介状が入門の妨げになっているのかもしれないとさえ思った。とはいえそれは今となってはもうどうでもよいことであった。学問は江戸にうっちゃってきたのであった。そして仕法が学問にとって代わる確かな道しるべになりつつあった。それは高慶が学者と認める尊徳先生の、実地の教えであった。入門を許される許されないという形式を捨てて、今それを障子の外から学んでいる高慶であった。一心に学びたい自然で素直な高慶の真実の姿がそこにあった。だからこれが自分自身の分度なのだと高慶は気付いた。
陣屋の障子の向こう側でも、いつも真実の分度が問題になっていた。その村の、その国の、天命自然の力に基づかなければ復興事業が空回りする。その至当の分限を探るためだけに門人たちは即刻陣屋から旅立っていく。
そのことは国や村のまえにまず人について言えることなのかもしれない。高慶は寺子屋で素直な子供らが伸び伸びと力を発揮した時の素晴らしい成長を目の当たりにしていた。そして近郷近在で子供までもが素直な訳は、身分や格式にとらわれずありのままに生きている金次郎さんの気風があまねく行き渡っているからにちがいない。
(先生のお陰だったのですね。自分の寺子屋の子供たちが皆すくすくと伸びてゆくことも)
電光に打たれたような感動を高慶は覚えた。しかしその感動を何という言葉で表現したらよいかわからなかった。それは未だに面会も入門も許されない尊徳に対するものであった。とはいえ国元を離れて十年間ずっと抱き続けてきた旧藩主益胤公に対する感情と似たものであった。それはやはり恩であろうと高慶は思った。

三

雨がポツリと降ってきた。見上げると朝からの曇り空にもくもくと黒雲が立ちこめていた。高慶には傘がなかった。雨音が激しくなってきた。軒下からでも座敷の会話は聞き取れなくなっていた。
「先生、やっぱり」
と耳元に声がして、振り返ると女が一人立っていた。
それは勤作の祖母であった。普段の野良姿とは違い、髪を調え、よそ行きの着物を着、蛇の目傘を差した女はとても孫がいる年には見えなかった。
「この分じゃどしゃ降りになるべ。ここでは濡れてしまいますべ。お不動さんのお堂で雨宿りなさるといいべ」
と、傘を差しかけてきた。
二人は、陣屋から少し離れた不動尊の庇の奥の階段に腰を下ろした。二人のほかに人影はなかった。勤作の祖母は手ぬぐいで高慶の髪のしずくを払った。高慶は気恥ずかしさを隠せなかった。高慶は陣屋への用向きを尋ねてみた。見事なサツマイモが取れたのでお礼に金次郎さんのところへ持ってきたのだという。尊徳先生に会えたのかと聞くと、やはり留守であったが居ればたいてい会えるという。
「会やあ昔話に花が咲くんさあ」
と勤作の祖母は楽しそうに話すのであった。高慶は未だに面会も入門も許されなかった。母親に愚痴をこぼしでもするように高慶は自分の情けなさを訴えた。
高慶先生が入門を願って毎日陣屋を訪ねていることは金次郎さんもご存知だ。先生が学問だけのお方ではないことは孫の話を聞きゃよくわかる。先生の教え方は金次郎さんのやり方によく似ているっぺと、勤作の祖母はなだめすかすように語るのだった。そして、
「今度金次郎さんにお会いした時によくよくお話してあげますけ、がまんがまん」
とほほ笑んだ。口元に走った皺が整った顔立ちを一層際立たせ妙になまめかしさを感じた高慶であった。
高慶は勤作の話をした。幼いのに感心させられることを言う。それは祖母の血を引いたのだろうと話すと、女は嬉しそうに笑った。そして自分はずっと、金次郎さんだったらどう言い聞かすべえと考えながら孫を育ててきたんさと語った。高慶はなるほどと思った。ならば金次郎さんはばくちの神様だというのはどう言い聞かした話だろう。それを言った勤作のじっちゃとはこの女の亭主に違いない。高慶は、つかぬことを尋ねるがと前置きをして、亭主と尊徳先生のばくちとかわや御殿のことを尋ねてみた。
孫の勤作がそんなことをと、女は顔を紅らめて思い詰めた様子をしていたが、
「高慶先生だで本当のことを話すんさ」

と決心した。
雨はにわかに激しく降り出し、お堂の廂を滝のように流れ始めた。
勤作の祖母は金次郎さんから某の女房と呼ばれているという。それは尊徳が亭主に名を問うたとき亭主が名乗るほどの者ではないと答えたからであった。それ以来尊徳は亭主を某と呼び女をも親しみを込めて某の女房と呼ぶのであった。
「これからの話は勤作のばっちゃじゃなく某の女房の話として聞いてくんせえ……」
某の女房は桜町の物井村の自作農に遅れた授かった一人娘であった。美人と噂されて育ち、婿になりたいという男はたくさんいたが彼女は年上のばくち打ちを婿に選んだ。その頃は、村々は荒れに荒れていた。農家の次男三男は農業をせず酒を飲んでばくちばかり打っていた。
「回りはばくちを打つ男ばかりだったから、いっそばくちの一番強い男を選んだんさ」
と、女房は言った。
それに、と懐かしそうに女房はこう語った。
「あの人は、祭りの夜に鼈甲細工の簪をくれたんさ。これをお前にやりたい一心で賭け続け勝ち続けて手に入れた品だから、おれの想いと天の運気がこもっているべと髪に差してくれたんさ」
きっと心根のきれいな人に違いないと感じて、女房は荒縄の切れ端で一心に落としていると、そこへ野良着を着た大男がつかつかとやってきた。女房は娘を抱き寄せて身構えたが、満面に笑みを浮かべた男の顔を見ると気持ちがすっと楽になった。おぬしらよい心がけじゃのうと朗らかに響く声を聞くと女房はなんだか嬉しくなった。
「それが金次郎さんとの出会いだったんさ」
母子二人暮らしかと金次郎さんは尋ねた。女房は途方に暮れている経緯を金次郎さんに話して聞かせた。当面は日銭が必要であろう近々開墾を始めるのでそこへ行って働くがよい。自作の田畑は女手一つでは荒れるばかりであろうから今からでも小作に貸してしまえばよい。家屋敷も荒れておるようだが、まず厠から手を入れるとよい。百姓に厠がなくて一日も農業ができるものではないからなと金次郎さんは女房に言い聞かせた。女房は前途がひらけ光が注いでくるのを感じた。その光を背負って金次郎さんが立っていた。
金次郎さんに見抜かれた通り厠は廃屋同然だった。柱は腐って傾き、壁は落ちて、中の様子が丸見えであった。娘は怖がるし、女房も恥ずかしくて周囲に人のいないことを確かめて用を足すのであった。
帰ってきた亭主をつかまえて女房は金次郎さんの話をその通り伝えた。亭主に異存はなかった。日つきの悪い男がうろつくので壁の落ちた厠に入るのが恐ろしいと話

一緒になる決心をしたのだった。
二人の間には娘が授かった。それが勤作の母親である。その頃は亭主は父親と野良に出ることもあった。しかしじきにまた賭場に出入りするようになった。老いた両親は酒とばくちを種にして婿に意見がましいことばかり口にした。
「だども勝った時こそばくち仲間に振る舞いはしたけんど、あの人は負けて酒に溺れることはなかったさ」
女房は娘の世話をしながら老いた両親と野良で働き続けた。凶作の冬に父親が死んだ。後を追うようにして母親も死んだ。亭主は賭場に入り浸った。幼い娘を抱えて女一人が農業をしてもできることは知れていた。田も畑も家屋敷も見る見るうちに荒れ始めた。それでも亭主はばくちをやめなかった。ついてねえ、ついてねえが口癖になった。ひとの意見を一層聴かなくなった。そして女房に無心をするようになった。人相の悪い男が家の周りをうろつくようになった。女房は途方に暮れて寝込んでしまった。幼い娘が冷や飯と刻んだなすをお膳に盛って枕元に差し出した。女房は働かねばと思った。
「女にできることを励むしかねえと娘に教えられたんさ。そう気付いたら女は強いっぺ」
翌朝夏の太陽が昇る前に起き出した女房は、真っ先にかまどの灰をさらった。その頃は焚かない日もあるかまどだった。そして庭先で娘と一緒に釜の底に付いた煤をすると亭主はすまねえと言った。そしてその日は賭場のことも忘れて薮から竹を切り出してきた。それで倒れそうな柱を支え、こもを被せて壁の穴をふさいでくれた。女房は嬉しかった。亭主が家族のために精出して働く姿を見るのは久しぶりであった。
金次郎さんの言葉の通り、村外れの荒地で開墾が始まった。女房は娘を連れて早朝から働きに出た。娘は小さな手で枯れ枝を集め湯を沸かし人夫らに振る舞った。娘は褒められ可愛がられた。女房も一心に働いたので金次郎さんや門人に親しく声を掛けられた。下男とも気軽に話をするようになっていた。
ある日開墾の仕事も終わり、急いで家に戻って娘と夕餉の支度をしていると、金次郎さんの下男が通りかかって厠を貸してくれと言った。使いに出ている途中だが、急に腹を下して難儀をしているという。顔は青ざめ額に脂汗を溜めていた。女房は気をつけて使ってくだせえよと頷いた。恩に着るぜと礼もそこそこ下男は厠に入っていった。無事に用を足し終えた下男は立ち上ろうと脇の竹の支柱に手を掛けた。と同時に荒縄で縛りつけられていた腐った柱が厠の中に倒れてきた。下男が飛び出すが早いか厠は音を立てて崩れ落ちた。
下男が呆気にとられていたところへ女房がやって来た。気をつけてと言ったのはこのことだっぺ。壊れてしまったものは仕方ないべ。それより言いつけが大事だと

見送った。帰ってきたら亭主に何と説明しようかと女房は夕餉も上の空だった。

亭主が帰ってきたのは真夜中だった。来るなり亭主は寝ている女房の体に慌ただしくのしかかってきた。今夜も負けてきたなと女房は思った。女房の寝巻きの襟を掻き開き、すまねえ、すまねえようと呟きながら乳房にしゃぶりついてきた。日銭を貯めて作った貯えもこうして消えてしまうのかと女房は思った。亭主のへのこが女房の股を突き上げてきた。女房は自ら足を開いた。空しさをかき消すように腰を振り声を上げた。

そこまで話すと某の女房は上気した顔を上げ、高慶の顔を見やった。高慶はたじろいで視線を逸らせた。雨音が一層高鳴った。

目が覚めると裸の亭主が背中から抱きついたままいびきをかいていた。女房も裸であった。全身にじっとりと汗をかいていた。寝巻きに手を伸ばすと、亭主が目を覚まして引き止めた。女房はちょっとはばかりにと言って外に小薮のある勝手口の方へ向かった。厠は大戸の方だろうと亭主は訝った。仕方がないと覚った女房は亭主に昨日のことを話して聞かせた。

亭主はいきり立った。せっかくおれが女房や娘のために直してやった厠だったのに。目を覚ました娘が女房の背中に隠れた。ひとしきり騒いで怒りが静まると、亭主の目が輝き出した。そうか二宮の下男だな。ようしこれは大ばくちだべと独り言を言うと亭主はにやりと笑った。その下男を今すぐここに連れてこいと亭主は女房を陣屋に走らせた。日が昇ってまだ間もない早朝のことであった。

すでに下男は忙しく掃き掃除をしていた。これが済んだらそちらにお詫びに行くよう先生に言われておりやしたと下男は恐縮して女房と共に某の家に向かった。

下男が平身低頭謝るが早いか、貴様は二宮の下男だっぺ。それならなおさら勘弁ならねえ。人の厠をぶち壊すとは乱暴狼藉にもほどがあらあ。思い知れと、亭主は用意しておいた天秤棒を振り上げて下男めがけて打ち下ろそうとした。下男は驚いて、もと来た道を陣屋まで逃げ帰った。人の厠をぶち壊しよって逃がすものかと罵りながら、亭主は棒を振りかざしてこれ見よがしに追いかけた。家々から人が出て来て成り行きを見守った。

陣屋の玄関に着くと、おれの厠をぶち壊した狼藉者を出せと亭主が怒鳴った。大勢の門人や使用人が出てきて下男の過ちを詫びなだめた。亭主はますます憤った様子で相手構わず天秤棒を振り回した。少し遅れて陣屋に着いた女房は、やめてけろ厠を貸したのはおらだからおらのせいだっぺ、なぐるならおらをなぐってけろと亭主にしがみついた。

そこへ奥から出てきたのが二宮金次郎尊徳であった。わしが話を聞こう、連れてきなさい。そう告げると尊徳

は座敷へ進み縁側に端座した。亭主は庭に通された。尊徳の前で胡座をかくと亭主は渾身の怒気を込めて、おれの厠が、あんたの下男に壊されたんでえ。百姓に厠がなくて一日も農業ができるもんけえと訴えた。その通りと金次郎さんはほほ笑んで頷いた。亭主は面食らって静かになった。尊徳が口を開いた。

全くお前の言う通りだ。ではお前はなぜ百姓に厠がなくて一日も農業ができないと考えるか。

とっさのことなので亭主はそれは運だからだと答えた。旨いものを食えば臭い糞が出る。めごい女房の白い尻からでも糞は出るのだ。臭いから小便と一緒に一つ所に溜めて置くと、それが肥やしになる。肥やしをまけば今度は旨い野菜が取れるのだ。旨いものが臭いものになり臭いものが旨いものになる。元は同じでも旨いと言われるか臭いと言われるかは時の運だ。運気が来れば厠も肥やしの倉になるじゃろが。しかし、ばくちも農業もおれのように天道の運に見放されてはできるもんじゃねえ。亭主はばくち打ちの知恵を精一杯働かせてそう答えた。

尊徳は、目を見開いて頷きながら聞いていた。そして尋ねた。

お前の厠を壊したのは下男の不届きである。とはいえわざと壊したわけではない。もう倒れかけていた厠だからこそ、不注意で壊れてしまったのだろう。それは厠だけのことではなかろう。きっと母屋も壊れかけていると思うがどうだ。亭主が答えた。

めごい女房とこんめえ娘がせっせと掃除をしちゃいるが、母屋もひどく傷んでいるべ。修繕もしてやりたいが今は運が回ってこねえ。どこぞの御大尽がまず厠から直せと女房に知恵を授けたというから女子供が恥ずかしくないように直してみるとそれがそいつの下男に壊された。よほど運気に見放されていることが悔しいだ。

それを聞いた尊徳は、深々と頷いて、わしの下男がお前の厠を壊したのだから、それはすぐに普請してやろう。ついでに、母屋も新しくしてやろうと思うがどうだと言った。

亭主は愕然としてしばらく声も出なかった。

「あん時ゃわっちも雷さまに打たれたみたくびっくりしたさあ」

高慶を見上げた女房の声さえ今更ながらに上ずった。

やがて居ずまいを正すと、それじゃああんまりつき過ぎだ。運は上り詰めると後は下がる一方だでと亭主はそれを拒み返した。回りにいた者は成り行きに目を見張った。尊徳はこう答えた。

運気が上り詰めれば下がるのは天道としてどうしようもなかろう。しかし人は自らの力でそれをできる限り食い止めることができる。それを人道といい個々には仕法という。お前は今後は女房と共に運気を保って生きてい

け。今すぐ帰って、壊れかけた家を取り除き、配置や間取りを考えなさい。わしがすぐにも大工に言いつけて建ててやる。そうすれば下男にも恨みはないだろう。下男が壊したのが縁でこの運が巡って来たのだから下男も恩人だろうのうと言って笑った。

尊徳は奥に戻って行った。周囲の者も安堵して持ち場に戻った。しかし亭主は立ち上ることができなかった。下男も自分の粗相のために先生はそこまでと涙を流し、動くことができなかった。二人は互いに済まなかったと詫び合った。

抜けた腰が治まると、亭主はそぞろに歩いて家までたどり着いた。後ろを女房が心配そうに付いて来た。勝っただけえ負けただけえと亭主はうわごとのように繰り返していた。

家に着くなり亭主は女房を納戸に引っ張り込んだ。女房は留守番をしていた娘を外に遊びに出した。昼間っからなんだっぺとたしなめながらも女房は自ら帯を解いた。亭主は、おらあ勝ったさ、勝ったんさあとつぶやきながら女房の白い乳房にしゃぶりついた。女房は亭主の顔を抱きしめながら、お前さんは勝ったんよ。さすがわっちの見込んだ男さあ。ありがと、ありがとなと身をよじった。亭主の心根が負けを認めていることは抱かれる女房には判るのだった。

もうし、金次郎さんに言いつけられた大工の銀次だともと、戸口で声がした。家の外が慌ただしくなってきた。

それからの亭主は、厠を手始めに家屋の解体に精を出した。尊徳の手配で大木良材が届くと、亭主は大工と一緒にまず厠を建てた。時々尊徳がやって来て直接指図をした。それに従う亭主はまるで徒弟のようであった。長さ八間横三間の母屋が建ち小屋が建った。家ができるとばくちの借金はおれが返すからと亭主も開墾に精を出した。借金を返し終わると自ら荒地を求め、女房と力を合わせて土地を切り開き地所を広げていった。

ひとが変わったような某の働きぶりに某を見習えと尊徳も人々に説いて聞かせた。ばくちから手を引く者が後に続いて現れた。一人娘のところには働き者の婿が来て勤作が授かった。

「今思えばすべては金次郎さんのお陰だべ」

某の女房は、さいぜん高慶の雨粒を払った手ぬぐいで目頭の涙を拭った。亭主もさぞかし尊徳先生に恩を感じたことだろうと高慶が尋ねると、

「恩と言やあ恩だっぺ。でもお侍さんの言うような恩じゃなかんべな。」

と呟いた。百姓もばくち打ちもまず天の力に左右されるから、人の道を重んずるお侍さんが感じるようには、人に恩を感じているとは限らない。

亭主は最後の大ばくちの勝敗にこだわり続けた。亭主は厠の普請をねらって大ばくちを打ったのだった。相手

は村役人であるから負けて咎められれば大罪であった。ところが厠どころか母屋も小屋も新しくなった。彼は勝ちすぎたのであった。勝ちすぎた後は負けしかない。亭主はもうばくちに手を出せなくなっていた。

亭主の勝負の相手は尊徳だった。尊徳は亭主に大盤振る舞いをし大勝ちをさせることで亭主に二度とばくちを打てなくしたのであった。それが尊徳のねらいだとしたら尊徳こそ勝者であった。

亭主を勝たすことで尊徳が勝ったというなら尊徳は負け知らずであった。亭主は金次郎さんこそばくちの神様だと考えるようになった。

神様と呼ぶほどだからやはり亭主も自分と同じように尊徳先生に大恩を感じているに違いない、一度会って話ができないものかと高慶が尋ねると、女房は、

「去年の春に死んだんさ」

と言った。

腹にしこりができて亭主は見る見る痩せていった。しこりが脹らみ終いには痛くて眠ることもできない有様だった。しかし亭主は家族に当たることもなく、おれはばくちに勝ちすぎたから病は天の報いに違えねえと笑って死んで行ったんさと女房が語った。

金次郎さんが悔やみに来てくれたとき、結局亭主は最後までばくちのことを考えていたと女房が話すと、金次郎さんは、

「お前の亭主こそは根っからのばくち打ちだった。ばくち打ちはばくちのことを考えている時が一番素直なのだ。天道に逆らうことはなく、天の徳には心から報いようとするものなのだ」

と、女房に諭した。

「ならばあの人はばくち打ちながら善人だったに違いなかっぺ」

女房は黙って鼻をすすり上げるのだった。

「だども自分の若い頃の苦労を思うと、孫の勤作はばくち打ちだけにはしたくねえ。先生、勤作のことをよろしくお願いしますべ」

手を合わせるその顔は、もう某の女房ではなく勤作の祖母に戻っていた。

雨はすっかり止んでいた。木々や屋根からしたたり落ちる雨垂れの軽やかな音が不動堂の庇の奥まで響いてきたが、見上げる空は相変わらずどんよりと曇ったままであった。

四

その後しばらくして富田高慶は二宮金次郎尊徳から面会が許された。ひょっとするとその裏には某の女房の計らいがあったのかもしれない。やがて桜町の陣屋に引っ越すことになった高慶は、寺子屋を、近郷に住む浪人の

次男に譲ることにした。寺子や父兄の落胆は大きかったが、後任の青年も親身に教えたので、憂いはなかった。

百二十日もの間、寺子屋の教師をしながら入門を待ち続けた高慶であった。念願叶って門人となることを許された高慶は尊徳にこれまでにない恩を感じた。武士とか農民とかの身分格式はもうどうでもよいことであった。高慶にとって金次郎尊徳はすでに心から敬愛する人物になっていた。自分を弟子の一人として認めてくれた金次郎さんに自然な恩を感じた高慶であった。

陣屋に起居しながら尊徳の傍らで報徳仕法を学ぶ高慶は、師の言動を目の当たりにしてその思想を根本から理解しようと努めた。尊徳も山積する難題について高慶に問い掛けてみては、その意見を仕法に生かすようになった。学殖に裏付けられた判断力が買われて高慶は尊徳の片腕となっていった。

（益胤公の恩に報いるのは我が師尊徳の仕法を措いて他にはない）

高慶は尊徳の指導を仰いで相馬藩の復興を急ぐよう国元に訴えた。家老が動き若き藩主充胤が決断し、一国の分度が立った。我が貧村から是非にと私財を投げ出した郷士の誠意が尊徳の心を動かして、藩を挙げての仕法が始まることになった。高慶は尊徳自身の代理として、相馬に派遣されることになった。いよいよ高慶にも、主君二代の恩と師尊徳の恩との両方に報いるときがきたのであった。

それからの富田高慶の働きについては、彼の著書「報徳記」に相馬充胤が付した上書きや明治天皇の勅を受けて川田剛が著した序文に明らかである。

高慶は、仕法実行のかたわら藩内の各所に出向いて藩士らに尊徳の教えを説いて歩いた。そして尊徳が村人に恩沢を施して善導した実例として農夫某の話を語るのだった。

しかしそれを聞いた標葉郡の代官某は、

「二宮の道は、しょせん小道。とても大道と言えるものではない。博徒に家を建ててやるなどと悪人に恩沢を与えるようなことをしたら、勧善懲悪を行う道理を失うではないか。それゆえ仮に一人に対しては行えても、万人に行うことはできないやり方なのだ。古来聖賢の道とは、万人に対して行う大道でなくてはならない。だからそのような小手細工を用いるのは、しょせん二宮が聖人の道を知らないためである」

と批判をした。ある者もそれを聞いて、

「誠に高論である」

と膝を打った。高慶は即座に論駁することができなかった。確かに高論に違いなかったからである。高慶自身江戸で学んでいた当時は彼らと同じことを考えていたのであった。

しかし高慶は農夫某の一家や物井村、桜町、のみならず近郷一帯の隆盛ぶりを尊徳の傍らで目の当たりにしてきた。そして尊徳の言葉や仕草から生き生きと繰り出される仕法の実際に触れて、二宮金次郎尊徳を聖人と信じて疑えなくなっていた。

（真の大道は人の生きる実際の巷間にあるはずだ）

そう考えた高慶は、標葉から相馬へ帰る道中、寺子屋の教師として野州桜町近郷で過ごした日々を振り返ってみた。すると境遇の中で精一杯生きるあの顔この顔が浮かんできて、はからずも懐かしさが胸いっぱいに込み上げてくるのであった。そして「ばくち打ちは、ばくちをしている時が一番素直なのだ。天道に逆らうことはなく、天の徳には心から報いようとするのだ」という某の女房から聞かされた尊徳先生の教えが思い出されて、すべてが解きほぐされていくのを感じる高慶であった。

（なるほど先生の仕法は、固有の善に立ち帰らせるために、まず旧来の汚れを去らせるのだ）

武士には武士の、ばくち打ちにはばくち打ちの善がある。草にも木にも石にも水にも固有の善はある。固有の善は天賦であり千差万別なのだ。そして固有の善が千差万別であるようにその汚れの取り去り方も様々なのだ。

（悪を懲らすばかりが能ではない。時には大盤振舞が悪を払拭し固有の善を引き出すのだ。だから仕法は理論ではなく固有の実践なのだ。それに比べれば生きて働くことのない高論は寝言に過ぎない）

信念が固まると、仕法に取り組む足取りはさらに軽くなるのであった。

数年の後、件の代官の噂が高慶の耳にも入ってきた。代官某が博徒に五両の金を貸して行いを改めさせ、美名を取っているという。それが尊徳の仕法を真似たものであることは明らかだった。

（五両とは、それにしてもしみったれた猿真似ではないか）

高慶は、しばらく笑いが止まらなかった。

（先生の大盤振舞は、一村の民心を改めさせる力となったが、某代官の小手細工では博徒一人の改心というのも知れたものだろう）

代官は、表では喇りながらも裏では先生の行いを真似ているのだ。しかしそのことは、何とも融通のない発言をする代官ですら、裏で先生の行いを真似るほど藩内に報徳仕法が根付き実を上げている証拠でもあった。ひとしきり溜飲を下げた後、高慶は心から嬉しくなっていた。

一口に士農工商という身分格式の厳しい時代にあって、先生の姿こそまさしく固有の善の権化であった。

（出自を問えば農民に過ぎない先生が艱難辛苦の実践を通して極めた大道が、まさに我が国の藩政を教え導いてくださっている）

高慶は師尊徳に広く深い海のような恩を感じていた。その海に身も心も浸されると、働かねば報いなければと

いう思いがむくりむくりと湧き上がってくる高慶であった。

藩主の近侍を務め江戸に出て昌平坂学問所で学んだ武士富田高慶が、独学のにわか武士に過ぎない農民金次郎に海のような恩を抱くというのであるから、恩沢を感じ恩義を重んずる心は高慶の固有の善に違いないだろう。とはいえ「報徳記」にすらただただ恩の一字を用いて表現しているところを見ると、富田高慶の固有の善も、某の女房の呟きのように、人道に重きを置く武士の性であったのかもしれない。

徳川慶喜の実像

三戸岡道夫

(一) 実像と虚像

歴史上の人物は、実像と虚像とが入り混って語られるものである。歴史学者は、正しい人物像、真実の人物像に迫ろうとするために、資料、資料と固執するので、とかく人物像は、堅く、弾力性に乏しく、その根底に本当の実像が埋れていても、それが掘り起されていないうらみがある。逆に小説家が描く人物像は、面白くて活動性があるが、時に虚像化が行き過ぎて、リアリテイに欠ける場合がある。

しかし世界の歴史をよく見ると、歴史家による人物像も、小説家の虚像をも超越している巨大な人物が、稀にいるものである。

徳川幕府十五代将軍の徳川慶喜も、その一人であると思われる。

これまで一般的に語られている徳川慶喜の生涯をごく簡単に言えば、幕末の尊皇攘夷の世相の中で、慶喜は大政奉還して、二百五十年つづいた徳川幕府に幕を下してしまう。そしてひたすら謹慎をつづけ、謹慎の解けた後の三十年間は、静岡において趣味におぼれた生活を送る。その間、西郷隆盛、大久保利通などが中心になった薩長勢が中心になって新政府を作り、明治維新が成功する。徳川慶喜はそうした日本の近代国家夜明けの敗者である、というのが一般的に言われている慶喜の姿であろう。

しかしこの慶喜像は氷山の一角であって、その水面下にはもっと巨大な実像が隠れているのである。そしてその実像は、歴史家や小説家が作ったものではなく、慶喜自身が作り上げたものなのである。いや、作り上げたというよりも、慶喜自身が自分の意思で、意識的にそのような「敗者の人生」を生きたのだといってよい。世界の歴史の中でも、稀有な偉大な人物である。

すなわち慶喜はある目的のために、「敗者という虚像」

を自らわざと生きたのである。その目的とは何なのか。それは一口に言って、

（新生日本を確実に誕生させる）

ということであった。しかし慶喜の考えていた新生日本は、その頃の勤皇の志士たちが叫んでいた「新しい日本」というような、断片的、軽薄なものではなかった。その時点ではおそらく日本中の誰もが考えていなかった、巨視的に見通した日本の未来像の実現を、慶喜は生涯を堵けて実践したのであった。

この慶喜像の分野には、これまでどんな歴史家も、どんな小説家も足を踏み入れていないと思われるので、その真相に迫ってみようと思う。

（二）徳川慶喜の一生

まず、歴史に現われた慶喜の一生に、簡単に触れてみる。

慶喜は天保八年（一八三七）九月二十九日に、水戸藩主徳川斉昭の七男として、江戸小石川の水戸藩上屋敷に生れた。

弘化四年（一八四七）、十二代将軍家慶の意向によって、一橋家の養子となり、一橋家を相続した。そのとき将軍家慶の一字をいただいて、幼名を「慶喜」に変え、元服した。慶喜が十一歳のときである。

慶喜が十七歳になった嘉永六年（一八五三）に、ペリーが浦賀に来航した。そしてこの時を期して、日本国中に黒船来航という衝撃が拡っていった。

危機に見舞われた日本は、強力な政治リーダーを望む声が高くなった。が、時の将軍十三代家定は病弱で力がなく、また子供もなく、次の将軍として英明の誇れ高い慶喜への期待が高まっていった。

しかし十四代将軍には紀井家出身の徳川家茂が就任し、慶喜は文久二年（一八六二）に将軍後見役となった。将軍家茂は十七歳、慶喜が二十六歳のときであった。

将軍後見役となると慶喜は京都へ上り、尊攘運動の中で、朝廷幕府間の融和をはかるなど、重大な政争、事件には、ほとんど慶喜が関係し、処理し、その英明ぶりを発揮した。

元治元年（一八六四）、二十八歳のとき、後見職を辞任し、禁裏守衛総督に任命された。

慶応二年（一八六六）に将軍家茂が死去すると、慶喜が十五代将軍に就任した。慶喜が三十歳のときであった。そして翌年（慶応三年）十月に、大政奉還を行った。

次の年の慶応四年一月一日に、いわゆる戊辰戦争が始ったが、幕府軍は鳥羽伏見の戦に敗れた。そのため慶喜は船に乗り、江戸へ帰った。

江戸へ帰ると慶喜は恭順の意を示して、上野寛永寺に蟄居し、謹慎した。さらに江戸城が開城されると水戸へ移り、さらに慶応四年七月には静岡へ移って、引つづき謹慎した。慶喜が三十二歳のときであった。その年（慶応四年）七月に江戸は東京と改名され、また九月には年号が、慶応から「明治」へと変更になった。

翌年、すなわち明治二年に慶喜は謹慎を免除され、以来三十年間、静岡において、狩猟、謡曲、囲碁、写真など、多くの趣味の生活を送った。

明治三十年、六十一歳のとき、東京へ移転した。そして明治天皇、皇后に拝謁し、明治三十五年に公爵、明治四十一年（一九〇八）、七十二歳のとき、勲一等旭日大綬章の名誉に輝いた。

大正二年（一九一三）十一月二十二日、七十七歳にて、その波乱に満ちた生涯を閉じた。

（三）徳川慶喜の政治ビジョン

以上が慶喜の生涯の概略であるが、嘉永六年（一八五三）にペリーが浦賀へやってきた（慶喜が十七歳のとき）、そして三年後の安政三年（一八五六）にハリスが下田へやってきた、いわゆる黒船来航によって、日本国中は大騒ぎになった。徳川二百五十年の泰平の夢が破られたのである。

泰平の眠りをさます蒸気船
たった四杯で夜も眠れず

というわけである。これに対して日本国はどのように対処したらいいのであろうか。果してうまく対処出来るのであろうか。

世の中は騒然とし、いろいろな意見が飛びかい、いろいろな事件が起こったが、慶喜の考えを一口で言えば、

（今のままの日本では対処できない）

という考えで一貫していた。

それは何故か。理由はいろいろあるが、まずその一番目の理由は、

（朝廷から政権を任されている幕府がすでに制度疲労に陥っていて、この国難に対処する力がない）

からであった。制度疲労、すなわちサビついているのである。制度もサビついているし、人もサビついている。

その制度を見ると、徳川家康が江戸に幕府を開いて以来、将軍の下に老中、若年寄、そして勘定奉行、寺社奉行、町奉行というシステムが、徳川政権二百五十年の間、まったく変っていないのである。徳川幕府は無事に日本を治め、世界史上稀に見る二百五十年という戦争のない泰平の時代を実現し、その功績は大きい。しかしその間に、世界も日本も激変していた。そして国際化の波が日本にも押し寄せてきているのである。

（もはや徳川の世は終った。この国際化の波に、今の徳川幕府は対処する力がない）

慶喜はそう考え、

（もはや幕府は必要ない。そしてこれに代わる政治システムを作る必要がある）

では、必要のない幕府をいかにして失くすのか、別の政治体制はうまく出来るのか、出来ないのか。それはすぐには、わからない。しかし、やらなくてはならない。もちろん、このように考えていたのは慶喜だけではなく、他にも大勢いた。しかし慶喜の考えの特色は、

（他の人達の誰の考えよりも、そのスケールが大きく、深く、そして誰もが考え及ばない先見性、未来性を持っている）

ことであった。

しかし慶喜がこのような一貫した明確な考えを、ペリーが来た時点において、すでに持っていたというわけではなかろう。ペリーが来た時、まだ慶喜は十七歳である。いくら英明の誇り高くとも、そこまでの力はない。しかし、やがて将軍後見職につき、将軍となって実際の政治を動かしていく中で、それは明確な形と信念にかたまっていったのである。

制度疲労といえば驚いたことに慶喜は、

（それは幕府だけでなく、各大名家もすでに制度疲労に陥っている）

と考えていることであった。

戦国時代の末期に六百を超えていた大名も、次第に淘汰されて、幕末には二百数十家となっていたが、戦乱のなくなった世では、なすべき戦争はなく、家は代々世襲制で、能力に関係なくその子弟が家を継ぎ、そのため大名の唯一の仕事は、子孫を作ることであった。参勤交代のため、大名の家族は江戸に住み、藩主が一年置きに領国へ帰るだけなので、領国政治は次第に国許家老任せになった。経済は依然として農業の上に立っていたので、次第に藩財政は困難になっていった。米沢とか、岡山とか、熊本などの名君や、四賢候といわれる大名を除き、ほとんどの藩がこの頃には財政が破綻し、

（このような藩をかき集めてみても、とても黒船に打ち勝ち、日本の国際化を実現することは出来ない）

と慶喜は冷徹に考えていた。だから、

（幕府も不要であるが、大名も不要）

なのである。これは驚くべきことである。当時、そこまで考えていた者は、慶喜以外に誰もいなかったのではなかろうか。

（尊皇討幕が日本の夜明けだ）

などと口々に叫んでいる尊攘の徒も、大名の藩を基盤に叫んでいるのであり、誰も、

（討幕討藩）

などと言った者はいない。考えた者もいない。明治維新の雄、西郷隆盛、大久保利通、高杉晋作などにしても、また雄藩藩主の島津久光などにしても、そうであろう。彼等の討幕は、いわば藩が幕府に取って代ろうとする野

心なのであった（だが、実際は慶喜の巧妙な政治運営によって、大勢は次第に藩も不要の方向に動いていくのであるが…）。

薩長連合などと勢いこんでいても、慶喜の心の中では、

（その薩摩も長州も要らない）

のである。もちろん、薩摩も長州もそんな慶喜の胸の中は知らない。そのような人間が十五代将軍となったのである。この辺も、慶喜の水面下に隠れた氷山の、凄いところであろう。

さらに慶喜の頭の中には、もう一つ不要なものがあった。それは公卿であった。

日本の歴史において、朝廷と幕府とはセットになって、巧妙な政治が行われてきた。しかし黒船の来航に対抗する力が、幕府にも諸大名にもないとすれば、公卿にあるであろうか。それ以上に無いと言わざるをえない。

幕府も要らない。大名も要らない。公卿も要らない。必要なものとして残るのは「天皇」だけである。すなわち慶喜が頭の中に描いているのは、日本に、

（天皇を頂点とした、近代統一国家としての政治体制）

を作ることであった。そして、幕府、大名、公卿の代わりに、慶喜が考えている政治体制は、「二院制」であった。すなわちヨーロッパにおける議会制度である。ヨーロッパにおける二院制といっても、国によって、形や内容は異り、まだ慶喜の中にこれといって具体的な形が出来ているわけではなかったが、学識と情報網の広い慶喜は、はやくもヨーロッパ諸国の政治体制を知り、それに手本を求めているのだった。

ではさて、その日本の新しい二院制を誰にやらせるのか。それを慶喜は、幕府や各藩の下級武士、下級公卿にやらせたらいいと、考えていた。現に各藩でも、西郷隆盛、大久保利通、高杉晋作などの下級武士の方が、問題意識を持って大騒ぎしているし、実行力もある。また幕府の中にも、勝海舟などの人材もいる。

この点は公卿においても同様であって、上級公卿よりも、岩倉具視などの下級公卿の方が能力があり、大きな問題点を適格に掴み、国を動かそうとする熱意が高い。

これは武士も公卿も、下級になればなるほど、長い封建体制の下積み生活の中で苦労し、制度疲労に陥った幕藩体制をひっくり返そうとする意識が、強烈だったからである。現代の言葉で言うと、

（人材活用）

である。新しい近代国家を作るのである。上とか下とか、敵とか味方とか、言っている場合ではない。優秀な人材集団で、新しい政治体制を作らなくてはならない。それが慶喜の政治ビジョンなのであった。

ここでちょっと、慶喜の天皇制についての考え方に触

ら未来歴史学者のように（過去を見るだけの歴史学者ではない）、巨視的に、冷徹に、まるで日本の未来を巨大な「動物」を観察するように眺めていた、巨人だったのである。

最後にもう一つ重要な課題がある。黒船問題である。黒船が日本にやってきて以来、攘夷だ、開国だと、大騒ぎしているが、問題はそんな表面上のことではなくて、もっと基本的な点にある。すなわち日本が近代国家として、如何に自立するかということである。

勤皇の志士たちが、いくら攘夷、攘夷と大騒ぎしても、あの黒船相手に勝てるわけがない。そして黒船の各国は日本国の内乱をチャンスに、日本国への侵入を狙っているのである。もし幕府と薩長との間に大戦争でも起きれば、それをチャンスに、フランスは幕府を、イギリスは薩摩を応援するという理由で介入してきて、戦乱を大きくし、日本国を占領してしまうであろう。すでに欧米のアジア侵略が始っているのであり、インドや支那ではそれが実現し、日本が最後に狙われているのである。

（日本がそうなってはならない）

というのが慶喜の決意であった。そして、それをさせないために、慶喜は将軍の座についたのである。それは日本の国内に、大戦乱を起さないことである。そして外国に介入のチャンスを与えないことである。

れる必要がある。

以上のように慶喜の考え方は、天皇を頂点に置いた統一近代国家を作ることであったが、もちろんそれは慶喜が尊皇の人であったからである。慶喜は水戸家に生れた。水戸家は徳川光圀が「大日本史」を編纂した尊皇の家系であり、慶喜の父の斉昭も熱烈な尊皇の士であった。その血を引いている慶喜も、もちろん尊皇の士であり、天皇を崇敬していた。しかし慶喜が、天皇を頂点とした統一近代国家建設を考えていたのは、単にそれだけの理由ではなかった。もう一つの理由があった。それは、

（天皇制は世界で一番すぐれている政治システムである）

ということであった。慶喜の時点で、天皇制は一八五〇年の歴史を持っている。世界歴史の中で、一つの王朝がこれほど長く続いている国は、日本以外にどこにもない。政治の奇蹟といっていい。一つの王朝が千年以上も続いているのは、日本だけである。二番目がデンマークで約八百年、三番目がイギリスで、約六百年である。かかる観点から慶喜は、

（国を安定的に統治する世界で一番すぐれた政治システム）

として、天皇制を選んだのである。

慶喜は政治の荒海の中を泳ぎながら、たえずそのように、遠く、広く、日本という国を見つめていた。さながら大戦乱を起さないためには、時には幕府軍がわざと負けなくてはならない場合もあるであろう。新生日本誕生のためには、それも止むをえない。要は、戦争が起きても、それを最小限度に納めるように、コントロールすることである。

要は日本を一日も早く近代国家に生まれ代わらせることである。そのためには攘夷などと言っていないで、開国して西洋の科学文明を取り入れて、産業を振興し、軍備を充実して、富国強兵をはかり、日本がはやく近代国家へ転生することである。

（四）将軍就任

慶喜は以上のような政治ビジョンを持ちながら、と言うよりも、そうしたビジョンを次第に心の中に成熟させながら、将軍後見職をつとめていたが、英明きわまる慶喜の大きな特色は、

（権力欲がない）

ということであった。言いかえれば、無私の精神に徹しているのである。それも努力してそうしているのではなくて、生まれつきの性格といえようか。これは稀有の資質であり、政治家にとってもっとも重要な条件である。

だから慶喜は、はやく将軍になって権力を振いたいなどとは夢にも思わなかった。そのため慶応二年（一八六六）に十四代将軍家茂が死去しても、誰が何と言おうと、慶喜は将軍にならなかった。しかし権力欲がないといっても、

（権力の偉大さ）

というものは知っていた。権力は力である。何か事を成そうと思えば、権力を握る必要がある。権力を握れば、何でも出来る。将軍といえば、その最高のポストである。出来ないことは、何もない。

慶喜は前記したような、壮大な政治ビジョンを持っている。だからこのビジョンを実現するために、将軍という座が絶対有利であるということは、百も知っていた。

（将軍という権力を欲しくはないが、自分が日本を統一近代国家へ改造するためには、必要な権力なのだ）

こうして慶喜は、前将軍家茂が死去して六ヵ月も後に、十五代将軍になったのである。将軍になって権力を振いたくてなったのではなく、自分の考えた政治ビジョン実現に、必要だったからである。政治家としては理想的な姿である。

かくして慶喜は十五代将軍となり、その政治ビジョンを実現する段階に至ったわけである。しかし、物事には順序がある。順序を間違えると、混乱が起き、出来ることも出来なくなってしまう。

慶喜の政治ビジョンの第一号は「幕府不要論」である。

しかし就任したばかりの将軍が、突然、幕府不要論などを言い出せば、幕臣たちは誰も納得せず、「上さまは発狂されたか」と、将軍を交代させられてしまうのが、関の山である。そうした世間の空気を読むのも、慶喜は英明であった。そのため将軍になってから、いろいろな問題が起きたが、それらを現実的に処理するのにも巧みであった。

その頃の世論の流れは、公武合体であった。五年前の文久二年（一八六二）の皇女和宮の将軍家茂への降嫁に象徴される、朝廷と幕府が一体となって国難に当るという、政治態勢である。

しかし慶喜の本心は、公武合体ではない。幕府は不要だというのだから、公武解体である。しかし世の中の動きはプロセスが大切である。したがって、表面上慶喜が従っている公武合体は、プロセスとしての公武合体とでも言えばよかろうか。慶喜はこれまで将軍後見役を勤めながら、その動きの方向をじっと眺め、その動きを変えるチャンスを、ずっと狙っていたのである。

公武合体といっても、公（朝廷）の背後には、朝廷の力を借りて幕府に対抗しようという、薩長の力が動いている。しかしその薩長でも、従来は藩主の力が主であったのに、最近では下級武士が中心になって薩長同盟が出来るなど、その動きが変ってきた。すなわち藩での勢力が、上から下へと移っているのである。これは時勢が慶喜の期待している方向へ、動いてきているといっていい。

そんなある日、土佐藩の後藤象二郎の立案した大政奉還の建白書が、藩主山内容堂を通して上ってきた。

（チャンス到来！）

と、慶喜は慶応三年（一八六七）に、大政を奉還した。そして将軍の座を辞任した。

慶喜は、政治ビジョンの中で最も実現困難な「幕府不要論」を、かくして実現したのである。幕府のトップが自ら行ったのであるから、誰も反対できなかった。慶喜が将軍の座に居たればこそ、実現できたのである。

言うまでもなく、慶喜が大政奉還したのは、山内容堂の建白書に動かされて奉還したのではない。慶喜の考えはすでに決っていて、それを実行するタイミングを狙っていた。そこへ、たまたま建白書が上ってきたのにすぎなかったのである。そうした世の動きを受けてやった方がスムーズに行くと、建白書はうまくチャンスに使われたのである。そうした世論操作にも、慶喜は巧みだったのである。

もし慶喜が大政奉還に反対であれば、たとえ建白書が上ってきても、否決することぐらいは簡単であった。また、慶喜ほどの英明の人間が、一藩主から出された建白書などによって説得されて、大政奉還したなどということは、あり得ないであろう。

徳川歴代の将軍の中で、慶喜は家康と並ぶ二大将軍と

称せられる偉大な将軍であるが、かくして将軍の座には十カ月しかとどまらなかったのである。

（五）小御所会議

大政奉還から二カ月ほどたった慶応三年（一八六七）十二月九日に、小御所会議というのが開かれた。

明治天皇臨席の上、主要な公卿、主要な藩主、それに薩長を中心とした尊皇志士たちによる、日本政治の革命ともいえる会議で、大政奉還を待っていましたといわんばかりのタイミングであった。朝廷内の小御所で行われたので、小御所会議と呼ばれている。

その内容を一口で言えば、大政奉還の内容を具体的に推進する政策の決定であった。しかしその重大な決定に、慶喜が出席していないのだった。

この会議のいきさつや、内容は、複雑怪奇で、ちょっと簡単には書ききれないが、一口に要約すれば、

（王政復古）

の決定であった。そして政治の要職として、

（総裁、議定、参与）

の三職を置くことに決定した。これまで長く続いていた、摂政、関白、将軍、国事掛、議奏、守護職、所司代も、一挙に廃止してしまったのである。そして慶喜に対しては、

（辞官、納地をせよ）

ということであった。慶喜は大政奉還し、将軍を辞任しても、内大臣と、近衛大将という官位は残っていた。しかしそれも辞任し、かつ土地、人民をもすべて返上せよということである。慶喜のいない場所での、いわば欠席裁判といっていい。これまでの一般論からすれば、まさに暴論である。

これを主導したのは、下級公卿の岩倉具視と、西郷隆盛であり、この会議には即位したばかりの十六歳の明治天皇の御出席をいただいていたので、その場で即決してしまったのである。この旨は直ちに慶喜のところに報告され、慶喜は無言でうなづき、これを受諾した。

しかし、これほど重大な会議になぜ慶喜が出席しなかったのか。そしてなぜまた慶喜は一言の異議もなく、受諾したのであろうか。

これまでの歴史では、それは岩倉具視たちの謀略であり、また天皇御臨席の決議であるから、これに従わないのは勅命にそむくことであり、慶喜は従わざるをえなかった、というように解釈されている。しかし、これは表面上の解釈にすぎない。その下では、氷山の本体である慶喜の政治ビジョンが動いていたからであった。

小御所会議は一気にこれまでの日本の政治体制をひっくり返してしまったのであるが、これはすでに慶喜の政治ビジョンの中で計画されていたものなのである。すな

(六) 大坂より退出、戊辰戦争

小御所会議ではこのように決ったが、しかし慶喜の考えている大規模な政治ビジョンが、幕軍の末端や、薩長の武士達にまで浸透しているわけではない。

年が明けて慶応三年一月三日に、薩摩の軍と幕臣とが、鳥羽において衝突した。これがきっかけで鳥羽伏見の戦いが始まり、戊辰戦争へと拡っていったのである。

しかし最初の鳥羽の戦で、幕府軍は敗走した。これまでの歴史では、幕府の軍力はすでにそこまで衰退していたと書かれているのが普通であるが、実体はそうではなく、慶喜がきつく、

(戦に勝ってはならない)

と規制していたからであった。

敗走軍が続々と大坂城へ逃げ帰ってくると、慶喜も京都の二条城から大坂城へと戻る。幕臣たちは、慶喜が幕軍の体勢を立て直して、薩摩軍へ向っていくのかと期待したのに、期待に反して慶喜は、慶応三年一月七日の夜、ひそかに幕府の軍艦の開陽丸に乗って大坂港を発ち、江戸へ戻ってしまったのである。

幕軍を置き去りにして、自分だけ逃げ帰ってきた卑怯者、臆病者と、慶喜は言われたが、慶喜は意に介さなかった。平気であった。平気どころか、これは慶喜にしてみれば、自分の描いている政治ビジョンを押し進める、

わち、

(大政奉還の当然の方向)

なのである。慶喜は幕府を廃して、天皇を中心とした近代国家の建設を考えていたから、「王政復古」は当然である。また政治システムとしては「二院制」を考えていたから、これまでの旧い役職名は廃止されて当然である。すべて慶喜の考えている方向と同じなのである。

しかし、このようなことを慶喜のいる場で決定することはやりにくい。そこで慶喜は小御所会議を外されたというよりも、自分から出席を断ったものと考えられる。

いや、更に突きつめて考えると、この小御所会議の内容は、慶喜と岩倉具視と西郷隆盛の三人によって事前に計画されたものではないかと思うのである。

前記したように、慶喜は政治ビジョンの実現を、下級公卿や下級武士に期待している。したがって慶喜はその代表である岩倉具視や西郷隆盛などと、これまでに何回も会って、意見を交えていたにちがいない。慶喜は将軍後見職になって以来、ずっと京都や大坂に居つづけていたから、そのチャンスは十分あったはずである。現に小御所会議の前日あたりにも、岩倉具視と西郷隆盛はひそかに二条城を訪れて、慶喜と密談をしたものと思われる。慶喜は小御所会議からオミットされたというよりも、出席しない慶喜によって小御所会議は主催主導されていたのである。

スケジュールの一駒なのである。大政奉還し、小御所会議の内容も決った、いつ慶喜が京から江戸へ身を移すか、慶喜はその機会を狙っていたのである。慶喜にとっては敗走ではない、政治ビジョンの実行なのであった。

慶喜といっしょに船に乗って江戸へ帰ったのは、会津藩主の松平容保と桑名藩主の松平定敬、それに板倉勝静の三人にすぎなかった。この三人に対しては、慶喜はすでにその政治ビジョンを話してあったが、とくに会津藩主の松平容保にたいしては、船中で波に揺られながら、

「しかし、このまますんなりと天下が納まるとは思えない。これから、いろいろなごたごたや、紛争が起るであろうが、よろしく頼むぞよ」

と、とくに頭を下げた。松平容保は、

「はい、それは覚悟しております。わが藩は全力をあげて徳川宗家をお守りするのが、始祖保科正之以来の会津魂でございます。ご安心下さい」

「うむ、頼んだぞ」

と慶喜は瞼をうるませた。慶喜が心からそのように感謝の念を持って述べたのは、この時の松平容保に対してだけだったのではあるまいか。

慶喜たちが江戸に着いたのは、四日目の慶応四年一月十一日であった。

慶喜は直ちに江戸城に入り、会議を開いた。江戸城の中では当然、小栗上野介、大鳥圭介、榎本武揚などを中心に、

(戦えば絶対に幕府軍が勝つ)

という主戦論が渦巻いていた。事実、幕府にはその力があったのである。しかし慶喜は、

「絶対に戦争をしてはならない」

と説得して、やがて東征してくる官軍(その実体は主として薩長軍)と戦うことを許さなかった。

そして慶喜は慶応四年二月十二日に、江戸城を出て上野寛永寺の大慈院へ入り、謹慎の生活に入った。

その三日後、二月十五日には、有栖川宮熾仁(たるひと)親王が征東大総督となり、東征軍が京都を出発した。官軍は錦の御旗を立てて、

宮さん、宮さん、お馬の前にひらひらするのは
何じゃいな、それは朝敵征伐せよとの錦の御旗
じゃ、知らないか

と、歌に歌われた錦の御旗である。

しかし、これも朝敵征伐でも何でもなく、慶喜と岩倉具視、西郷隆盛たちの間で事前に計画してあった、大政奉還実現のシナリオの一環であった。すでに大政奉還したのであるから、朝敵などもう居ないのである。

だから東征といっても、これは戦争ではない。政権は大政奉還によって幕府から朝廷へ移ったということを、世間に示すデモストレーションだといってよかった。デモストレーションには、何か目につく物理的な目印が必

（七）静岡時代

慶喜が静岡へ移った慶応四年七月に、江戸は東京と改称され、また同年の九月に、年号も慶応から「明治」へと改元された。

もちろん、そうなっても慶喜は静岡で謹慎をつづけていたが、明治二年九月に謹慎を解かれた。慶喜が三十三歳のときである。

晴れて自由の身になった慶喜は、それから約三十年間（正確には明治三十年まで）、六十一歳になるまで静岡で生活した。

そしてその三十年間、慶喜は何をしたかというと、その才能にまかせて、

大弓、打毬、鉄砲、狩猟、放鷹、
自転車、囲碁、フランス語、謡曲、
油絵、写真、書道、刺繍など、など、

その才能と、あり余る時間に任せて、趣味の世界に浸り、優雅な一生を送ったのである。

しかし、なぜ慶喜ほどの才能のある人間が、そのような趣味の世界のみに溺れて、一生を送ったのであろうか。もっと別に、やろうと思えば、儒学でも、洋学でも勉強し、希望すれば海外への留学も出来、また水戸家の出身であるから水戸光圀の後をついで、新しい大日本史を書くとか、あるいは学校を開くとか、やろうと思えば最後

要である。その目印として錦の御旗が用いられたのである。この錦の御旗のアイデアも、おそらく慶喜から出たものであろう。

慶応四年三月十四日には、有名な勝海舟と西郷隆盛の会見によって、江戸城は無血開城と決った。

一般に江戸城無血開城は、江戸町民を戦火から守るために、勝海舟と西郷隆盛による会談によって決ったとされている。しかしその基本的シナリオは慶喜の手によって書かれたものであり、二人の対談はそのシナリオを舞台で演じたパフォーマンスにすぎなかった。

そして翌月（四月）十一日に官軍は江戸城へ入り、同時に慶喜は同じこの日の早朝、上野寛永寺から水戸へ移った。

そして三カ月後の慶応四年七月二十六日には、慶喜はさらに水戸から静岡へと居を移して、謹慎をつづけた。慶喜はまだ三十二歳という若さであった。

もちろんその間、世の中の情勢がすべて平穏に推移したわけでなく、上野の彰義隊戦争や、会津を中心にした戊辰戦争、五稜郭の戦などが起っていた。しかしこれらも慶喜のリモートコントロールによって、松平容保は戦争の拡大を適当に押え、次第に終結の方向へと向わせ、イギリス、フランスなどの外国が、つけこむ隙を与えなかったのである。

慶喜は意識的に、わざと趣味の世界に溺れていたのである。それは慶喜の本当の人生ではない。わざと世間に見せるために作った、偽の人生なのであった。その水面下には、巨大な慶喜の本当の人生があった。趣味に溺れた人生は、その本当の人生を隠すための、演技だったのである。

それはあたかも、忠臣蔵の大石蔵之助の茶屋遊びに似ていたと、言ってよかろうか。大石蔵之助は仇討ちの本懐を隠すために、わざと祇園一力茶屋で、「浮さま、浮さま…」と言われて遊び狂い、

（わたしには仇討の考えなど無いのだ）

と、世間にPRしたのである。

それと同じように慶喜も、趣味の世界に遊び暮すことによって、

（わしはこのように趣味に忙しいのだ。政治のことなどにはまったく関心がない）

と、世間へ偽態をよそおったのである。

冒頭に記したように慶喜の本心は、近代的日本国家を創る政治ビジョンを、一生かけて完成させることである。

その一番目の大仕事として、大政奉還をした。しかし大政奉還しただけでは、新しい政府が出来たわけでもなく、新しい国家が出来たわけではない。それを実現する

の将軍らしい仕事は山ほどあった筈である。しかし慶喜は一切そうした事をしなかった。何故であろうか。

には、巨大なビジョンを描ける人間と、それを実現していける統括者が要る。そして、それを実現できる人間は、慶喜しかいないのである。

しかし大政奉還した以上、表面上、政界の選手は交代したのである。舞台の役者は変ったのである。慶喜がいつまでも舞台に顔を出していることはできない。

新しく登場した西郷隆盛とか、勝海舟とか、岩倉具視などをうまく使って、舞台裏で実質的に政治をコントロールし、政治改革を推進しているのは、慶喜なのであった。

しかし、それが世間にわかっては、まずい。そこで考えたのが大石蔵之助手法なのであった。

（わしは趣味に忙しくて、政治には興味がない。政治などに手を出している暇はない）

と世間にPRし、実態を隠したのである。

それはちょうど二百五十年前に、徳川家康が徳川幕府を開いたとき、短期間で将軍の座を二代目秀忠に譲ると、静岡へ移り、静岡から江戸の幕府をリモートコントロールしていたのに、似ていようか。

このようにして慶喜が静岡に移って以後、慶喜の政治ビジョンは、新政府によって一つづつ確実に実現されていった。明治二年（一八六九）に版籍奉還や、明治四年（一八七一）に廃藩置県が行われたが、これは慶喜の政治ビジョンの、制度疲労に陥っている大名家不要の項目

の実施である。

幕府不要は、将軍であった慶喜自身の決心で出来たが、二百数十もの大名を廃絶するのは、すぐ出来るものではない。時間がかかり、明治に入ってやっと実現したのであるが、これも慶喜と新政府とが強力に連絡しあい、タイミングを読んで実現したものである。

静岡に移ってからの慶喜の生活には、趣味のほかに、もう一つ異常なことがあった。

それはめったに人に会わないことだった。

慶喜ほどの人であるから、知らない人はなく、交流する人間は多い。したがって静岡に移って自由の身になったのだから、千客万来となってもおかしくはない。しかし慶喜は絶対に人と会おうとしないのだった。

（わしは趣味に忙しいのだ。人などに会っている暇はない）

と言わんばかりなのであった。会う人間は、勝海舟、山岡鉄舟、渋沢栄一、関口隆吉（初代静岡県知事）など、ごく小数に限られていた。

これにも深い意図があったのである。慶喜はある目的のために、ことさら人に会うのを避けていたのである。

その頃、明治維新は表面上はうまく進んでいた。廃藩置県から、憲法発布、徴兵制の施行、地租改正、各地での殖産振興など、慶喜が将軍時代から頭に描いていた、日本の統一近代国家の建設が、着々と進んでいた。

しかし反面、それに対する反対、不満も、同時に起っていたのである。幕府や藩がなくなって、職を失った浪人たちや、また新政府による廃刀令や徴兵制、地租改正などの政策に対する不満などから、各地に反乱が起きていた。

有名なものとしては、佐賀の乱、神風連の乱、秋月の乱、そして最後は明治十年の西南の役によって乱は治まるのであったが、そうした中には、

（徳川慶喜をもう一度かつぎ出して、大反乱を起そう）

という空気が濃厚にあるのだった。そんな人々がやってきて、慶喜が反乱にかつぎ出されるようなことがあれば、大変である。関ヶ原合戦の二の舞になってしまう。そして、そうしたチャンスを狙っている外国勢がわっと乱入してきて、日本が占領されてしまう。

（万が一にも、そんなことがあってはならない）

そのためには、一番いいのは慶喜がいっさいの人間と会わないことだった。慶喜は人と会わないことによって反乱を回避し、

（わしは反乱に巻きこまれることはないから、安心して、前向きの政治に邁進せよ）

と、東京の新政府を安心させ、政治革新を推進させたのである。

このようにして慶喜は約三十年間、静岡にとどまり、

その間、新しく出来た明治新政府をリードし、サポートし、コントロールした。これが慶喜の水面下に隠された、氷山の巨像であった。

明治三十年（一八九七）、慶喜は六十一歳のとき、東京へ移住した。だが東京へ移住後もその志は変らず、陰で日本の統一近代国家への道をリードしつつ、大正二年（一九一三）、七十七歳にてこの世を去った。

もし慶喜がどうしても将軍の権力に執着し、将軍の座に居たいと思えば、それは出来たのである。大政奉還などする必要はなかった。しかしその結果、日本の国内外にどのような混乱が起き、日本がどのような国になってしまったか―、それは読者の想像に任せる。

英明で、先見性と大局観にすぐれ、世界情勢にも明かるかった慶喜は、

（日本をそのような国にしてはならない）

と思ったのである。

日本をはやく近代化、国際化しないと、これからの世界の中で日本は生き残れない。そのためには政権を朝廷に一元化する必要がある。それが確実に出来るのは、

（幕府の最高位にいる自分しかない）

と自らの意思で大政を奉還し、あえて自分で自分を朝敵に仕立て、それに徹したのである。明治維新の敗者という虚像を、自分で作ったのである。いわば明治維新は、慶喜が構想を立ててシナリオを書き、自らも舞台に立ちながら、西郷隆盛や勝海舟などを舞台役者として巧妙に使った、慶喜の自作自演の歌舞伎舞台だったともいえようか。

慶喜にこのようなことが出来たのは、慶喜が、権力欲のない人間だったからである。

日本だけでなく、世界の歴史を見ても、有名な君主は大勢いる。しかし彼等はその地位を、武力と権力で握った人達である。しかし、権力欲でその座を握った君主は、権力に執着し、国政を私有化した。政治に必要なのは、

（権力欲のない人間が、権力の座につく）

ことである。

しかし、現実にそのようなことがあり得るであろうか。

それが日本の明治維新には有ったのである。

その名前は徳川慶喜。

明治維新は、徳川慶喜という権力欲のない人間が、最後の将軍の座にいたからこそ、成功したのである。世界の歴史を見ても、このような例は稀有である。

慶喜は、自分の人生が世間からどう評価されるかということよりも、日本の国をどのようにするかという政治使命に、生涯を捧げた、政治の大天才、政界に神わざを発揮した人物なのである。

東京錦絵	42
有院家の人々（4）	43
有院家の人々（5）	44
有院家の人々（6）	45
相聞歌の女流	45
有院家の人々（7）	46
有院家の人々（8）	47
有院家の人々（9）	48
有院家の人々（10）	49
有院家の人々（完）	50
九郎兵衛韜晦	51
侍マラソン始末	52
母の修学旅行	53
ミニ・カツラタロウ伝	54
自作自解　わが作品余話（1）	55
自作自解　わが作品余話（2）	56
自作自解　わが作品余話（3）	57
自作自解　わが作品余話（4）	58
自作自解　わが作品余話（5）	59
丸ビル恋歌	60
ある一〇〇年祭前後	61
人形里子	62
朴の葉ものがたり　城端の女人	63
少年素描　受験戦争	64
続丸ビル恋歌	65
戦後日録「大正っ子」（1）	66
戦後日暦「大正っ子」（2）	67
戦後変転「大正っ子」（5）	68
戦後変転「大正っ子」（4）	69
戦後変転「大正っ子」（5）	70
会者定離　印刷屋さん二人	71
アロー号誕生	72
ひら仮名うさぶろう功名譚	73
北緯四十度の砲台	74
わたしの「父帰る」	75
勲章の亡霊	76
幕末トライアスロン（1）	77
幕末トライアスロン（2）	78
幕末トライアスロン（3）	79
爽やかにハレルヤ	81
孫弟子の忠誠	82
勲章と万博	83
多治見ぶし由来	84
誠涙抄	85

著者：大和禎人	号
母ひで	1
あるフィナーレ	2
呪縛の語り部	3
朱の数珠	4
漬物・兵士・馬のラプソディ	5
勲章ばなし	6
李朝の壷	7
雲南のピエロ	8
七福鑼	9
輝きの御国に	10
子の権現	11
モーニングコール	12
縁日屋の平さん	13
阿多多羅山涅槃	14
午前堂恒石居左文氏還浄図	15
『汽笛一声』今は昔	16
水出書店	17
玉千代の廃業	18
夢芝居	19
逆島記	20
偲び餅	21
作兵衛の槍	22
烏川の畔	23
柳眉抄	24
童子寸描（1）	25
温泉女将（1）	26
温泉女将（2）	27
被爆者健康手帳	28
弥兵衛初夢	29
童子寸描（2）	30
利狂人銭形控	31
桃李庵のアルバム	32
ミニカメレオン伝	33
噴火島に生きる	34
北の門口	35
童子寸描（3）	36
まかり行かむ　神職連合	37
送葬記	38
午後の肖像写真	39
有院家の人々（1）	40
童子寸描（4）	40
有院家の人々（2）	41
少年素描	41
有院家の人々（3）	42

編集後記

『まんじ』は、昭和二七年に創刊された文芸同人誌『作家群』を源流に持ち、昭和五六年スタートしました。年四回、規則正しい発行を三〇年間続けながら、今回一二〇号刊行の運びと成ったものです。

当初は純文芸誌でしたが、現在では現代小説・時代小説・伝記・ノンフィクション・短歌・俳句・漢詩・詩・エッセイ・論文など多方面にわたる綜合誌となっており、この間の寄稿者は五八名を数えます。

話は変ります。最近脳の働きについての学術研究が、認知考古学とか認知政治学と言うように、様々な分野で行われるようになりました。それと並行して左脳が言葉や計算、理論を司る「論理脳」、右脳が直感や感性を司る「創造脳」として、両者の結びつきが重要視されています。

要は日本の古典を大切に考える精神が、原子核物理学の最先端研究に繋がり、心理学・生理学・生物学の知見を踏まえそれを利用しながら現代の科学に関する思索をより深めていく事ができるように、幅広い基本的な教養の礎がないと一定の成果を収めることは出来ないとする考えです。

多様な分野の人材を網羅した我々『まんじ』集団は、合評会という厳しい意見交換の場を通じて、いながらにして他分野の新知見を得る事が出来、それを基にして新たな発想につなげ、又それを本誌を通じて発表することが出来ると言う極めて恵まれた環境にあります。これを各自が自覚し自己研鑽を続けているからこそ、三〇年間、年四回、継続して発行することが出来たのだと愚考します。

日本語の『経営』の『経』は『お経』に由来し『つなげる』という意味があります。『まんじ』という名前も仏教につながります。我々まんじ同人は、この名に恥じないよう和合の精神により更なる前進を続けます。

（T・N）

まんじ第120号

平成23年5月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　中　山　喬　央（なかやま　たかひろ）
事務局長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）

（事務局）　〒223-0056　横浜市港北区新吉田東五丁目76-35　太田善朗方
TEL・FAX 045（544）5947
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　日東印刷株式会社
〒142-0054　東京都品川区西中延2-15-16

表紙の絵について

題名「Cosmos」大いなる力のもとにあっても　私たちは未知を追い続ける

田寺（たでら）怜華（れい）　画

さいたま屋百景	21
老漢の系譜（1）	22
老漢の系譜（2）	23
追録　井中加和寿氏の死	24
小説旧制高等学校（1）	25
大場兼太郎と薄野朗の場合	26
パラノイヤ・エロチカ回想記	27
小説旧制高等学校（2）	28
オオバカタロー君と易占の術	29
夕陽の中の酒屋	30
木枯しの中の酒屋	31
老寿病院の小さな出来事	32
春の名残りをいかにとかせん	33
語りたくない･でも･語らねば（1）	34
語りたくない･でも･語らねば（2）	35

著者：柴田富佐子	号
男運	1
町までの道	2
遅すぎた青春	3
浅草そだち	4
汗をかいた道	5
浅草の子ら	7
毛皮	9
藤木屋酒店の終焉	11
離婚届	16
競馬屋の加代ちゃん	17
結婚	19
ライスカレー	20
ハローニューヨーク	22
訣れ	25
働き手	34
Liquor & food	40
逆立ち	43
カラオケ	52
かまぼこ	54
乾いた道の果てに（1）	55
尻尾の先に繋がるもの	56
ごめんなさい	57
長屋物語（白い裸像）	58
爪	59
「彦太楼」	60

犬小屋賦役	86
まんちょさの銭湯にて	87
藩主脱藩	88
モロッコ幻想	89
虎道吟月居士素描	91
封人の家	92
「かんだ」友情　新天地時代	93
昔の「せんせい」	94
焚き火　―大林和光君のこと	95
許せぬ一言「まだやってんの」	97
ある脱走	98
アインシュタイン・照る日曇る日	99
アッツ草幻想	101
荒川慕情　―小台の流し―	103
鏡の中の革命児	104
木戸屋敷の冒険	105
幽けき大正デモクラシー	106
『ここは文京ではない』	107

著者：山口健二	号
鉄舟の行方	1
もの憂い小島	2
めぐむは走る	3
つまみ食い	4
陽の当らない風景	5
日暮里界隈	6
さいたま屋風土記	7
○町○丁目○番地（1）	8
○町○丁目○番地（2）	9
○町○丁目○番地（3）	10
狐里村センセVS井中センセ	10
○町○丁目○番地（4）	11
○町○丁目○番地（5）	12
さいたま屋歳時記	12
○町○丁目○番地（6）	13
さいたま屋歳時記（2）	13
杖	14
さいたま屋曼荼羅	15
お遍路道中記	16
さいたま屋点鬼簿	17
花粉は路地の風に乗って	18
生命学叙事詩	19
井中加和寿氏の易占死術	20

近藤富蔵の生涯（1）	30
近藤富蔵の生涯（2）	31
近藤富蔵の生涯（3）	32
近藤富蔵の生涯（4）	33
近藤富蔵の生涯（5）	34
近藤富蔵の生涯（6）	35
近藤富蔵の生涯（7）	36
近藤富蔵の生涯（8）	37
近藤富蔵の生涯（9）	38
近藤富蔵の生涯（10）	39
近藤富蔵の生涯（11）	40
近藤富蔵の生涯（12）	41
近藤富蔵の生涯（13）	42
近藤富蔵の生涯（14）	43
近藤富蔵の生涯（15）	44
近藤富蔵の生涯（16）	45
近藤富蔵の生涯（17）	46
近藤富蔵の生涯（18）	47
近藤富蔵の生涯（19）	48
近藤富蔵の生涯（20）	49
近藤富蔵の生涯（21）	50
近藤重蔵・富蔵の生涯（1）	51
近藤重蔵・富蔵の生涯（2）	52
近藤重蔵・富蔵の生涯（3）	53
近藤重蔵・富蔵の生涯（4）	54
近藤重蔵・富蔵の生涯（5）	55
近藤重蔵・富蔵の生涯（6）	56
近藤重蔵・富蔵の生涯（7）	57
近藤重蔵・富蔵の生涯（8）	58
近藤重蔵・富蔵の生涯（9）	59
近藤重蔵・富蔵の生涯（10）	60
近藤重蔵・富蔵の生涯（11）	61
近藤重蔵・富蔵の生涯（12）	62
近藤重蔵・富蔵の生涯（13）	63
近藤重蔵・富蔵の生涯（14）	64
近藤重蔵・富蔵の生涯（15）	65
近藤重蔵・富蔵の生涯（16）	66
近藤重蔵・富蔵の生涯（17）	67
近藤重蔵・富蔵の生涯（18）	68
近藤重蔵・富蔵の生涯（19）	69
近藤重蔵・富蔵の生涯（20）	70
近藤重蔵・富蔵の生涯（21）	71
近藤重蔵・富蔵の生涯（22）	72
近藤重蔵・富蔵の生涯（23）	73

燠火	62
親離れ	63
最後の晩餐	64
香港の波紋（上）	66
沖縄の人々	74
配達	80

著者：岸田幸雄	号
「うん」	1
まり子さんとこどもたち	2
可愛い登美	3
むうさん	4
志功頌	5

著者：金子正義	号
ハイラル挽歌（1）	1
ハイラル挽歌（2）	2
ハイラル挽歌（3）	3
ハイラル挽歌（4）	4
ハイラル挽歌（5）	5
ハイラル挽歌（6）	6
ハイラル挽歌（7）	7
ハイラル挽歌（8）	8
ハイラル挽歌（9）	9
ハイラル挽歌（10）	10
ハイラル挽歌（11）	11
ハイラル挽歌（12）	12
ハイラル挽歌（13）	16
ハイラル挽歌（14）	17
ハイラル挽歌（15）	18
李赤の雲隠の死	19
ハイラル挽歌（16）	20
ハイラル挽歌（17）	21
ハイラル挽歌（18）	22
ハイラル挽歌（19）	23
ハイラル挽歌（20）	24
ハイラル挽歌（21）	25
陛下からの預かり物	25
ハイラル挽歌（22）	26
ハイラル挽歌（23）	27
ハイラル挽歌（24）	28
ハイラル挽歌（完）	29

著者：森本俊正	号
下町風俗資料館	1
筆だより	4
三河島物語	10
遠足	11
秋思	16
天皇誕生日	20

著者：神原拓生	号
忘れられぬリオ	1

著者：三戸岡道夫	号
天明七年	1
両殖人間	2
ソクラテス	3
セールスマンA&B	4
ツッパリ君	5
一日違い	6
別の世界	7
黒いバス	9
夏に狂う	10
鏡花の女（上）	11
鏡花の女（下）	12
絢爛のあわれ	14
男たちの藩（1）	15
男たちの藩（2）	16
男たちの藩（3）	17
男たちの藩（4）	18
コマーシャルタイム	19
老桜	20
男たちの藩（5）	21
男たちの藩（6）	22
男たちの藩（7）	23
男たちの藩（8）	24
男たちの藩（完）	25
派手なネクタイ	25
カラオケ挽歌	26
極楽楽園	27
西日	28
極楽楽園（改稿）	29
こぼれ萩	29
江戸妖草伝	30
柳の怪	31

著者：井上二三男	号
近藤重蔵・富蔵の生涯（24）	74
近藤重蔵・富蔵の生涯（25）	75
近藤重蔵・富蔵の生涯（26）	76
近藤重蔵・富蔵の生涯（27）	77
近藤重蔵・富蔵の生涯（28）	78
近藤重蔵・富蔵の生涯（29）	79
師恩・唐詩の浄書	80
近藤重蔵・富蔵の生涯（30）	81
近藤重蔵・富蔵の生涯（31）	82
近藤重蔵・富蔵の生涯（32）	83
近藤重蔵・富蔵の生涯（33）	85

著者：井上二三男	号
やきとりの夢	1
病室の窓	2
病室の窓（続）	10
電話	19
秋そぞろ	25
浪浪事始	27
浪々好日（1）	28
ほたる	29
白き流の思い出	30
万年筆	32
浪々好日（2）	34
雪の夜	36
浪々好日（3）	38
介護日記	39
介護日記（続）	40
隣の社宅	42
さくらさく	44
病葉の青春賦	50
病葉の青春賦への返歌	52
病葉の青春賦・終章	53
患者輸送	54
梅雨の病室にて（1）	56
梅雨の病室にて（2）	57

老春繚乱・拾い屋さん	76
老春繚乱・幻聴	77
御参府中日記のこと（1）	78
御参府中日記のこと（2）	79
人形師奇譚	80
報徳の人　二宮尊徳（1）	81
報徳の人　二宮尊徳（2）	82
報徳の人　二宮尊徳（3）	83
哀愁武士道（1）	84
哀愁武士道（2）	85
哀愁武士道（3）	86
桜人形（哀愁武士道のうち）	87
桜人形（完）	88
妖星（1）	89
ソクラクレス	90
妖星（2）	91
妖星（3）	92
妖星（4）	93
孔子春秋（1）	94
孔子春秋（2）	95
孔子春秋（3）	96
孔子春秋（4）	97
うどんげの花（1）	98
うどんげの花（2）	99
極楽楽園	100
金原明善の一生（1）	101
金原明善の一生（2）	102
金原明善の一生（3）	103
金原明善の一生（4）	104
金原明善の一生（5）	105
米山梅吉の一生（1）	106
米山梅吉の一生（2）	107
米山梅吉の一生（3）	108
米山梅吉の一生（4）	109
消えた室	110
米山梅吉の一生（5）	111
米山梅吉の一生（6）	112
黒いバス（上）	113
黒いバス（下）	114
走る不動産（1）	115
走る不動産（2）	116
走る不動産（3）	117
走る不動産（4）	118
走る不動産（5）	119

駆ける銀行（1）	32
駆ける銀行（2）	33
支店長の妻たち（1）	34
支店長の妻たち（2）	35
支店長の妻たち（3）	36
青山の土地をめぐって	37
金融山脈（1）	38
金融山脈（2）	39
金融山脈（3）	40
金融山脈（4）	41
金融山脈（5）	42
修羅の銀行（金融山脈）（6）	43
修羅の銀行（7）	44
お母さん会社に行かないで	45
銀線花の蔓	46
黒い影の絵	47
手紙	48
天主台	49
天主台（2）	50
幻妖城異聞（1）	52
幻妖城異聞（2）	53
幻妖城異聞（3）	54
融資赤信号（1）	55
幻妖城異聞（4）	56
幻妖城異聞（5）	57
公園から溢れて	58
幻妖城異聞（6）	59
極楽草異変	60
幻妖城異聞（7）	61
幻妖城異聞（8）	62
幻妖城異聞（9）	63
幻妖城異聞（最終回）	64
ある手紙	65
保科正之（1）	66
保科正之（2）	67
保科正之（3）	68
冀北の人（1）	69
冀北の人（2）	70
冀北の人（3）	71
老春繚乱	72
羽化登仙	73
老春繚乱　百歳のデビュー	74
OB株式会社	75
老春繚乱・ヘブンス・パスポート	75

著者：柴田 保	号
メガルさんの夏休み	3
臨界期	4
扇子	6

著者：山本儀一	号
赤い腕章	4
キツネ火	5
小さな銀色の十字架	6
脳軟化症候群	7
年寄のヒヤミステリー（1）	10
年寄のヒヤミステリー（2）	11
故里の案山子	12
聖マリアの亭主	14

著者：山根三枝子	号
ハイビスカスの島とバイオリン	6
暗黒時代の紅色のプレゼント	7
失われた故郷　台湾	9
フルートのアンダンテ･トリスト	11
うすみどり色の林檎	14
夕映え	19
ゾーリンゲンのかみそり	20
同窓会	25
サルビアの花（詩）	26
灯（詩）	27
Gone are the days（1）	30
Gone are the days（2）	32
Gone are the days（3）	34
Gone are the days（4）	36
Gone are the days（5）	38
Gone are the days（6）	40
Gone are the days（7）	43
Gone are the days（8）	45
Gone are the days（9）	46
Gone are the days	50
赤い煉瓦べいの家	57
今見えているものの奥に	60

著者：八十島 元	号
松尾芭蕉　瓢の艶	14
松尾芭蕉　臨終の蠅	16
松尾芭蕉　貝おほい	19
吉原遊郭	19
松尾芭蕉　坐り胼胝の蚊	20
松尾芭蕉　嵯峨日記	22

著者：佐々木一郎	号
カステリオーネの夜は更けて	36
銀婚旅行は雲に乗って（1）	37
銀婚旅行は雲に乗って（2）	38
ゲートボールの青春	39
三億円事件の犯人を追った男	40
千三百年目の仇討ち（1）	41
千三百年目の仇討ち（2）	42
千三百年目の仇討ち（3）	43
千三百年目の仇討ち（4）	44
千三百年目の仇討ち（完）	45
前橋公園殺人事件（1）	46
前橋公園殺人事件（2）	47
前橋公園殺人事件（3）	48
前橋公園殺人事件（4）	51
前橋公園殺人事件（完）	52
ついていない男	53

著者：有香六月	号
輝かしい夏の日々	37
輝かしい夏の日々（続）	38
夜曲ノクターン	39
青春の日々	40
レクイエム（第一部）	56
レクイエム（第二部）	57
ノクチュルヌ	58
梔子の花　カルディニア	59
「恋人たち」	60
緑の焔	61
百合の花咲く小径	62

著者：小久保勝義	号
陽気な患者	37
山の風山の音	40

著者：青木昭成	号
詩　セントポーリア　ほか	41
詩　蝉と抜け殻　ほか	42
詩　風景断章	43
詩　沖縄からの手紙	44
詩　風のふしぎ	44
詩　やまもも	45
詩　茄子紺	46
詩　火矢嶺	47
詩　記念品	48
詩　都会の海　ほか	49
詩　鎮魂賦　ほか	50
芭蕉のこと	50
詩　デュエット　寡黙　ほか	51
詩　もう久しい　ほか	52
詩　ついばむ	53
詩　「吊り革」をめぐる詩	54
詩　風の眼で　ほか	55
詩　ときどき風の眼で　ほか	56
詩　土いろに　ほか	57
詩　三つの仮想	58
詩　ふかい谷間　ほか	59
詩　果物抄	66
詩　果物抄	67
詩　果物抄	68
詩　この道は	69
詩　この道は	70
詩　この道は　ほか	71
詩　ことのはぐさ	72
詩　ことのはぐさはぐさ	73
詩　果物物語（2）	75
その頃あれはアルマジロ	76
詩　果物物語（4）	77
詩　旅行	78
詩　旅行　フライブルグにて	79
蕪村のこと	80
詩　誤差ゼロの・他	81
詩　あどりぶ	82
詩　この町	84

詩　この町（2）	85
詩　ふたたび私	86
現代詩　点描より　4首	90
芭蕉のこと	90
現代詩　この町・他	100

著者：鯨游海	号
漢詩　潮哨録（1）	52
漢詩　潮哨録（2）	53
漢詩　潮哨録（3）	54
漢詩　潮哨録（4）	55
漢詩　潮哨録（5）	56
漢詩　潮哨録（6）	57
漢詩　潮哨録（7）	58
漢詩　潮哨録（8）	59
漢詩　潮哨録（9）	60
漢詩　潮哨録（10）	61
漢詩　潮哨録（11）	62
漢詩　潮哨録（12）	63
漢詩　潮哨録（13）	64
漢詩　潮哨録（14）	65
漢詩　潮哨録（15）	66
漢詩　潮哨録（16）	67
漢詩　潮哨録（17）	68
漢詩　潮哨録（18）	69
漢詩　潮哨録（19）	70
漢詩　潮哨録（20）	71
漢詩　潮哨録（21）	72
漢詩　潮騒録（22）	73
漢詩　潮騒録（23）	74
漢詩　潮騒録（24）	75
漢詩　潮騒録（25）	76
漢詩　潮騒録（26）	77
漢詩　潮騒録（27）	78
漢詩　潮騒録（28）	79
論語の解釈･二千年の誤りを糾す	80
漢詩　潮騒録（29）	81
漢詩　潮騒録（30）	82
漢詩　潮騒録（31）	83
漢詩　潮騒録（32）	84
漢詩　潮騒録（33）	85
漢詩　潮騒録（34）	86
漢詩　潮騒録（35）	87

鮎（2）	63
鮎（最終回）	64
方解石の出る楠峠（1）	65
方解石の出る楠峠（2）	66
方解石の出る楠峠（3）	67
方解石の出る楠峠（4）	69
方解石の出る楠峠（5）	70
方解石の出る楠峠（6）	71
方解石の出る楠峠（7）	72
方解石の出る楠峠（8）	73
方解石の出る楠峠（9）	74
方解石の出る楠峠（9）	75
方解石の出る楠峠（10）	76
方解石の出る楠峠（11）	78
方解石の出る楠峠（12）	79
方解石の出る楠峠（13）	81
霧の村の新任教師	90

著者：鈴木昭三	号
きもないさん（1）	54
きもないさん（2）	55
唐人館同窓譚（1）	56
唐人館同窓譚（2）	57
唐人館同窓譚（3）	58
唐人館同窓譚（4）	59
唐人館同窓譚（5）	60
ねずみ小僧丸楠（1）	61
ねずみ小僧丸楠（2）	62
ねずみ小僧丸楠（3）	63
ねずみ小僧丸楠（4）	64
ねずみ小僧丸楠（5）	65
ねずみ小僧丸楠（6）	66
ねずみ小僧丸楠（7）	67
ねずみ小僧丸楠（8）	68
ねずみ小僧丸楠（9）	69
ねずみ小僧丸楠（10）	70
ねずみ小僧丸楠（11）	71
ねずみ小僧丸楠（12）	72
ねずみ小僧丸楠（13）	73
ねずみ小僧丸楠（14）	74
ねずみ小僧丸楠（15）	75
ねずみ小僧丸楠（16）	76
ねずみ小僧丸楠（17）	77

漢詩　潮騒録（36）	88
漢詩　潮騒録（37）	89
漢詩　銀行雑詠　6首	90
聖徳銀行秘書室	90
漢詩　潮騒録（38）	91
漢詩　潮騒録（39）	92
漢詩　潮騒録（40）	93
漢詩　潮騒録（41）	94
漢詩　潮騒録（42）	95
漢詩　潮騒録（43）	96
漢詩　潮騒録（44）	97
漢詩　潮騒録（45）	98
漢詩　潮騒録（46）	99
聖徳銀行秘書室	100
漢詩　潮騒録（47）	101
漢詩　潮騒録（48）	102
漢詩　潮騒録（49）	103
漢詩　潮騒録（50）	104
漢詩　潮騒録（51）	105
漢詩　潮騒録（52）	106
漢詩　潮騒録（53）	107
漢詩　潮騒録（54）	108
漢詩　潮騒録（55）	109
聖徳銀行秘書室	110
漢詩　潮騒録（56）	111
漢詩　潮騒録（57）	112
漢詩　潮騒録（58）	113
漢詩　潮騒録（59）	114
漢詩　潮騒録（60）	115
漢詩　潮騒録（61）	116
漢詩　潮騒録（62）	117
漢詩　潮騒録（63）	118
漢詩　潮騒録（64）	119

著者：伊澤敏久	号
流転	54
霧中氷人	56
すずかけの並木道（1）	57
すずかけの並木道（2）	58
すずかけの並木道（3）	59
蔵のある小さな町の中で（1）	60
蔵のある小さな町の中で（2）	61
鮎（1）	62

黒船（5）	87
黒船（6）	88
黒船（完）	89
丙午の女（1）	91
丙午の女（2）	92
丙午の女（3）	93
丙午の女（4）	94
丙午の女（5）	95
もたれ柱	96
おさななじみ	97
八蔵橋	98
丹波栗	99

著者：瀧澤 中	号
五千石の大義	68
十五年目の殉死	70
もうひとつの小山軍議	71
落城二十日	72
ランドセルが泣いた	73
白木屋てんまつ記	74
茜色の翼（1）	75
大山巌外伝　血煙伏見	77
さち	79
空に祈る	80
政治家の条件	82
脱下請の教科書　徳川家康	83
マヨネーズの神様 中島薫一郎	84
「政治ニュース」雑記帳	85
七人の代議士「代議士誕生」	88
さち	90
まんじゅう奉公	100
権兵衛の恋	110

著者：紙透寛夫	号
泰山木（1）紙透小太郎の一生	71
泰山木（2）紙透小太郎の一生	72
泰山木（3）紙透小太郎	73
泰山木（4）紙透小太郎	74
泰山木（5）紙透小太郎	75
泰山木（6）紙透小太郎	76
泰山木（7）紙透小太郎	77
泰山木（8）紙透小太郎	78

ねずみ小僧丸楠（18）	78
ねずみ小僧丸楠（19）	79
睡魔	80
ねずみ小僧丸楠（20）	81
ねずみ小僧丸楠（21）	82
きもないさん	90
インドネシア戦跡をたずねて	92
六十年目の伝言	100

著者：東山高夫	号
世の中おかしなこと雑記帳	57

著者：太田和貞	号
マンション管理人（1）	58
マンション管理人（2）	59
マンション管理人（3）	60
マンション管理人（4）	61
マンション管理人（5）	62
マンション管理人（6）	63
マンション管理人（7）	64
マンション管理人（8）	65
マンション管理人（9）	66
笹ケ崎村（1）	67
笹ケ崎村（2）	68
笹ケ崎村（3）	69
笹ケ崎村（4）	70
笹ケ崎村（5）	71
笹ケ崎村（6）	72
笹ケ崎村（7）	73
笹ケ崎村（8）	74
笹ケ崎村（9）	75
笹ケ崎村（10）	76
笹ケ崎村（11）	77
笹ケ崎村（12）	78
笹ケ崎村（13）	79
おふく	80
笹ケ崎村（最終回）	81
おばば	82
黒船（1）	83
黒船（2）	84
黒船（3）	85
黒船（4）	86

針の穴を通った駱駝（5）	101
針の穴を通った駱駝（6）	103
針の穴を通った駱駝（7）	104
針の穴を通った駱駝（8）	105
広瀬川（1）	108
福祉サービス第三者評価制度	109
ヨーベルの響き	110
AN ABSENCE OF HUMILITY	111
扉を開けた光の鍵	113
パパ　やったね！	114
THE DAY・DREAM（1）	115
THE DAY・DREAM（2）	116
河童の初恋（1）	117
河童の初恋（2）	118
河童の初恋（3）	119

著書：相原精次	号
脚本　横浜豚屋火事顛末	77
演劇台本　渡辺崋山游相日記	78
演劇台本　箱根関所異聞	79
演劇台本　箱根畑宿	80
演劇台本　走馬燈	81
シナリオ龍化妖姫（1）	82
シナリオ龍化妖姫（2）	83
シナリオ龍化妖姫（3）	84
シナリオ龍化妖姫（4）	85
シナリオ龍化妖姫（5）	86
シナリオ龍化妖姫（完）	87
阿育王伝	90
いずれか秋にあはで果つべき	100
抄訳『古本説話集』	110

著者：森実与子	号
月の海辺の人形たち	78
トルチェッロ島	79
可もなく不可もなく	80
六月の雨	81
犬を連れた男	83
お告げ（1）	84
お告げ（2）	86
遠い町	88
シルヴェスターの夜	90

裏切られて（2）	97
是非に及ばぬ（1）	98
是非に及ばぬ（2）	99
大樹を渡り生き抜いた男	100
正義の旗を揚げて（1）	101
正義の旗を揚げて（2）	102
たまごの殻（1）	103
たまごの殻（2）	104
同胞の御楯となりて（1）	105
同胞の御楯となりて（2）	106
木更津の月	107
今川風雲録（1）	108
今川風雲録（2）	109
木更津の月	110
今川風雲録（3）	111
今川風雲録（4）	112
今川風雲録（5）	113
今川風雲録（6）	114
今川風雲録（7）	115
今川風雲録（8）	116
今川風雲録（完）	117
関東管領始末記（1）	118
関東管領始末記（2）	119

著者：鍋屋次郎	号
罠	77
霧に包まれていた光（1）	78
霧に包まれていた光（2）	79
孤独	80
霧に包まれていた光（3）	83
霧に包まれていた光（4）	84
霧に包まれていた光（5）	85
霧に包まれていた光（6）	86
踏み絵（1）	89
あるキリシタンの迫害	90
踏み絵（2）	91
踏み絵（3）	92
ボランティア活動に携わって	93
針の穴を通った駱駝（1）	95
針の穴を通った駱駝（2）	96
針の穴を通った駱駝（3）	97
針の穴を通った駱駝（4）	98
浦上事件	100

地に堕ちた韓国の偶像	99
多率寺にて	100
過激な夫婦と品格	101
奈良大仏の経済学	102
後進国が支配する韓国	103
奇蹟の生還	104
まんじ語録（2）	105
脚気病とかけて	106
狩谷棭斎讃歌（1）	107
狩谷棭斎讃歌（2）	108
狩谷棭斎讃歌（3）	109
墓参	110
狩谷棭斎讃歌（4）	111
狩谷棭斎讃歌（5）	112
狩谷棭斎讃歌（6）	113
狩谷棭斎讃歌（7）	114
狩谷棭斎讃歌（8）	115
狩谷棭斎讃歌（9）	116
狩谷棭斎讃歌（10）	117
八つ当たり語録（1）	118
八つ当たり語録（2）	119

著者：千坂精一	号
体当り戦法を強制された人々（1）	77
体当り戦法を強制された人々（2）	78
体当り戦法を強制された人々（3）	79
虚飾の礎	80
体当り戦法を強制された人々（4）	81
体当り戦法を強制された人々（5）	82
体当り戦法を強制された人々（6）	83
体当り戦法を強制された人々（7）	84
体当り戦法を強制された人々（8）	85
体当り戦法を強制された人々（9）	86
体当り戦法を強制された人々（10）	87
体当り戦法を強制された人々（11）	88
体当り戦法を強制された人々（12）	89
白い鳩	90
体当り戦法を強制された人々（13）	91
体当り戦法を強制された人々（14）	92
体当り戦法を強制された人々（15）	93
体当り戦法を強制された人々（16）	94
体当り戦法を強制された人々（17）	95
裏切られて（1）	96

泰山木（9）紙透小太郎	79
泥めんこ	80
泰山木（10）紙透小太郎	81
泰山木（11）紙透小太郎	82
泰山木（12）紙透小太郎	83
泰山木（13）紙透小太郎	84
紙透家の人々（14）	85
紙透家の人々（15）	86
紙透家の人々（16）	87
紙透家の人々（17）	88
紙透家の人々（18）	89
紙透小太郎の獄中記	90
紙透家の人々（19）	91
紙透家の人々（20）	92
紙透家の人々（21）	93
紙透家の人々（22）	94
紙透家の人々（23）	95

著者：新井 宏	号
日本近代化の恩人シドッチ	75
仮名に着想を得たハングル	76
気になる多産の帝妃たち	77
鎖国と銀産と家光	78
神の手	79
予定調和	80
多率寺にて	81
鉄砲と大砲の戦い	82
灰吹法による戦国バブル	83
シナイ	84
誤解から始まる	85
多重債務貧困	86
ダイドス論	87
崔到遠の碑文	88
晋州城	89
散策中に思う・韓国にて	90
文禄の役の狭間で	91
澤田吾一・ふたつの人生	92
保渡田の古墳群	93
まんじ語録（1）	94
政争の国	95
「卑弥呼の鏡」の焦り	96
虎変する韓国	97
リビング・ウィル	98

著者：中泉聖司	号
破竹の唱（上）	80
破竹の唱（下）	81
悪流修羅（第一部）	82
悪流修羅（第二部）	83
握流修羅（1）リストラの虚構	84
握流修羅（2）リストラの虚構	85
握流修羅（3）リストラの虚構	86
握流修羅（4）リストラの虚構	88
貸しはがし	90

著者：宅見勝弘	号
サラリーマンとしての鴎外	81
下克上と奴隷王朝	82
下克上と奴隷王朝（本編）	83
都市銀行「爆発物処理班」（1）	84
都市銀行「爆発物処理班」（2）	85
都市銀行「爆発物処理班」（3）	86
都市銀行「爆発物処理班」（4）	87
都市銀行「爆発物処理班」（5）	88
都市銀行「爆発物処理班」（6）	89
奴隷王朝	90
都市銀行「爆発物処理班」（7）	100
源平交代思想（1）	101
源平交代思想（2）	102
青の漂流（1）	105
青の漂流（2）	106
青の漂流（3）	107
青の漂流（4）	108
青の漂流（5）	109
源平交代思想	110
青の漂流（6）	111
青の漂流（7）	112
青の漂流（8）	113
青の漂流（9）	114
青の漂流（10・最終回）	115
透明な時間（1）	116
透明な時間（2）	117
透明な時間（3）	118
透明な時間（4）	119

イタリアンレストラン	91
パリーいくつかの情景	92
錯覚	93
三つのコンサート	97
歯医者さん	100
誘惑のアルゼンチン・タンゴ	110

著者：島津隆子	号
北条時宗とその時代（1）	79
北条時宗とその時代（2）	80
北条時宗とその時代（3）	81
北条時宗とその時代（完）	82
城ヶ島異聞（1）	83
城ヶ島異聞（2）	85
和泉式部譚（1）	86
和泉式部譚（2）	87
和泉式部譚（3）	88
和泉式部譚（4）	89
妖花藤原薬子	90
小町散策	91
小野小町物語（1）	92
小野小町物語（2）	93
小野小町物語（3）	94
小野小町物語（4）	95
小野小町物語（5）	96
平家の女・和歌に託した人生	97
暗殺の叙事詩―源実朝―	98
暗殺の叙事詩	99
小町逍遥	100
将軍義政と愛妾	101
将軍義政と愛妾	102
草庵に結ぶ夢　鴨長明	103
ダンスにはまった私（1）	105
ダンスにはまった私（2）	106
ダンスにはまった私（3）	107
後深草院二条の別離譚	108
酔狂な将軍義政と三人の女	110
天智と天武に愛された額田王（1）	113
天智と天武に愛された額田王（2）	114

著者：隆 恵	号
吉備津路歴史ロマン	84
金融システム再建への提言	87
日出る国の落日（1）	88
継体大王の謎を探る	90
敗北者賛美と勝利者誹謗（1）	94
まぼろしの女帝	100
古代大和朝廷の謎解き	105
法隆寺再建の謎（聖徳太子信仰）	112

著者：石黒修身	号
短歌　行雲流水（1）	87
短歌　行雲流水（2）	88
短歌　行雲流水（3）	89
短歌　行雲流水（40首）	90
短歌　行雲流水（4）	91
荘内藩と「海坂藩」	92
短歌　行雲流水（5）	92
短歌　行雲流水（6）	93
短歌　行雲流水（7）	94
短歌　行雲流水（8）	95
短歌　行雲流水（9）	96
短歌　行雲流水（10）	97
短歌　行雲流水（11）	98
短歌　行雲流水（12）	99
韓国の歌人	100
短歌　行雲流水（13）	101
短歌　行雲流水（14）	102
短歌　行雲流水（15）	103
短歌　行雲流水（16）	104
短歌　行雲流水（17）	105
短歌　行雲流水（18）	106
短歌　行雲流水（19）	107
短歌　行雲流水（20）	108
短歌　行雲流水（21）	109
休日譯　三題	110
短歌　行雲流水（22）	111
短歌　行雲流水（23）	112
短歌　行雲流水（24）	113
短歌　行雲流水（25）	114
王朝和歌集とその周辺（1）	115
短歌　行雲流水（26）	115
王朝和歌集とその周辺（2）	116
短歌　行雲流水（27）	116

著者：太田精一	号
宰相の橋（1）	83
宰相の橋（2）	84
宰相の橋（3）	85
宰相の橋（4）	86
霧の彼方に（1）	87
霧の彼方に（2）	88
遥かなるカメルーン（1）	89
遠い処へ	90
遥かなるカメルーン（2）	91
遥かなるカメルーン（3）	92
遥かなるカメルーン（4）	93
遥かなるカメルーン（5）	94
遥かなるカメルーン（6）	95
遥かなるカメルーン（7）	96
遥かなるカメルーン（8）	97
遥かなるカメルーン（9）	98
空風（1）	99
霧の彼方に	100
空風（2）	101
空風（3）	102
空風（4）	103
空風（5）	104
空風（6）	105
空風（7）	106
空風（8）	107
空風（9）	108
自訴した遊女	109
岐路	110
東シナ海の竜王	111
鎌倉の詩　二題	112
誠忠の茶園（1）	113
誠忠の茶園（2）	114
誠忠の茶園（3）	115
誠忠の茶園（4）	116
誠忠の茶園（5）	117
誠忠の茶園（6）	118
誠忠の茶園（7）	119

著者：吉田忠雄	号
国近三吾先生の思い出	92
春のミニ花火ショー	93
北海道一人旅	94
南洲屋のこと	95
志まや	96
花火の町瀏陽をたずねて	97
花火の歴史を楽しむ	98
毛鳳忠さんと私	100
八幡洋次郎氏のこと	101
清水武夫博士の自叙伝	102
ジョングレン、向井千秋……	110
和田良信先生	111
一水	112
小鉄	113
メキシコ花火見物日記	114
私の健康と有難い主治医	115
スイスの山を訪ねて	116
月例会	117
花	118
こころみ学園	119

著者：山田嘉久	号
司馬雑感1　関寛斉のこと	94
司馬雑感2　周作と一堂	95
司馬雑感3　荻生徂徠	96
司馬雑感4　九十九里浜	97
司馬雑感5　三浦半島記	98
司馬雑感6　韓のくに紀行	99
司馬雑感7　南蛮のみち	100
司馬雑感8　本郷界隈	101
司馬雑感9　司馬の紀行文	102
司馬雑感10　司馬の紀行文	103
司馬雑感11　峠・濃尾参州記	104
司馬雑感12　司馬と京都	105
司馬雑感13　東北物語（1）	106
司馬雑感14　東北物語（2）	107
司馬雑感15　赤坂と本所深川	108
司馬雑感16　島原諸道	109
司馬雑感17　あれこれ	110
司馬雑感18　近江路から熊野路	111
司馬雑感19　近江路から熊野路	112
司馬雑感20　近江路から熊野路	113
司馬雑感21　台湾紀行	114

司馬雑感22　秋田県散歩	115
司馬雑感23　秋山好古と習志野	116
司馬雑感24　佐渡のみち	117
司馬雑感25　伊予	118
司馬雑感26　長州	119

著者：松下壽男	号
現代詩　残暑見舞い	94
現代詩　友に寄す	95
ロダンの二宮金次郎	95
現代詩「ろかいゆ」より	96
ハート・トゥ・ハート（1）	96
ハート・トゥ・ハート（2）	97
連詩「記念写真」より	97
ハート・トゥ・ハート（3）	98
連詩「記念写真」より	98
詩集「記念写真」より（1）	99
ハート・トゥ・ハート（4－1）	99
新美先生のこと	100
詩集「ろかいゆ」より（2）	101
ハート・トゥ・ハート（4－2）	101
詩集「ろかいゆ」より（3）	102
ハート・トゥ・ハート（4－3）	102
詩集「ろかいゆ」より（4）	103
ハート・トゥ・ハート（4－4）	103
泉（創作神話）	104
ホメラレモセズクニモサレズ（1～3）	104
詩集「ろかいゆ」より	105
ホメラレモセズクニモサレズ（4～6）	105
恋詩集 しさくのかなしみ（1）	106
ホメラレモセズクニモサレズ（7～9）	106
恋詩集 しさくのかなしみ（2）	107
ホメラレモセズクニモサレズ（10～12）	107
恋詩集 しさくのかなしみ（3）	108
ホメラレモセズクニモサレズ（13～15）	108
恋詩集 しさくのかなしみ（4）	109
ホメラレモセズクニモサレズ（16～19）	109
海舟座談余話（明治28年7月）	110
恋詩集 しさくのかなしみ（5）	111
ホメラレモセズクニモサレズ（20）	111
悲しいアメリカ（1）	112
恋詩集 しさくのかなしみ（6）	112
悲しいアメリカ（2）	113

薬草園「天城杏仁の里」（後）	107
狩野川のトド（1）	108
狩野川のトド（2）	109
報徳人　大原孫三郎の一日	110
狩野川のトド（3）	111
狩野川のトド（4）	112
家康と凧狂いの右近（1）	114
家康と凧狂いの右近（2）	115
家康と凧狂いの右近（3）	116
家康と凧狂いの右近（4）	117
家康と凧狂いの右近（5）	118
関口隆吉こぼれ話	118

著者：忠内正之	号
古い物・遠い夢	91
古い物・遠い夢　御風の短冊	92
古い物・遠い夢　陶工保田君	93
古い物・遠い夢　楽茶碗の怪	94
古い物・遠い夢　茶道具三昧	95
古い物・遠い夢　茶道具三昧	96
古い物・遠い夢	97
古い物・遠い夢　茶会の顛末	98
古い物・遠い夢　茶道具三昧	99
楽茶碗の怪	100
古い物・遠い夢　茶道具三昧	101
古い物・遠い夢　茶道具三昧	102
古い物・遠い夢　茶道具三昧	103
残夢消えつくして	104
古い物・遠い夢　信楽の蹲	105
桐の花影（1）	106
桐の花影（2）	107
骨董趣味から茶会まで	108
桐の花影（1）	109
桐の花影　吉良側の忠臣蔵	110
桐の花影（2）	111
桐の花影（3）	112
古い物・遠い夢　慈雲尊者	113
古い物・遠い夢　唐津茶陶	114
古い物・遠い夢　唐津茶陶	115
古い物・遠い夢　高取茶陶	116
古い物・遠い夢　古陶閑話	117
古い物・遠い夢　古陶閑話	118
古い物・遠い夢　茶会の風景	119

王朝和歌集とその周辺（3）	117
短歌　行雲流水（28）	117
短歌　行雲流水（29）	118
短歌　行雲流水（30）	119

著者：大澤鷹雪	号
俳句　しの笛	89
俳句　橡若葉　百句	90
俳句　秋の蝉	91
俳句　海霧深し	92
俳句　春風	93
俳句　不屈の闘志	100
俳句　鷹の呟き（1）	107
俳句　鷹の呟き（2）	108
俳句　鷹の呟き（3）	109
俳句　鷹の呟き（4）	110
俳句　鷹の呟き（5）	111
俳句　鷹の呟き（6）	112
俳句　鷹の呟き（7）	113

著者：宮城克郎	号
日本犬物語	90

著者：堀内永代	号
風景論	91
義人・伊豆頭七異聞（1）	92
義人・伊豆頭七異聞（2）	93
義人・伊豆頭七異聞（3）	94
義人・伊豆頭七異聞	95
天城の鬼火（1）	96
天城の鬼火（2）	97
天城の鬼火（3）	98
報徳仕法と企業経営（1）	99
天城の鬼火異聞	100
風説・天城の鬼火	101
伊豆の歯科医業の祖（1）	102
伊豆の歯科医業の祖（2）	103
伊豆の歯科医業の祖（完）	104
薬草園「天城杏仁の里」（前）	105
薬草園「天城杏仁の里」（中）	106

著者：松下魏三	号
赤堀四郎博士の一生	98
赤堀四郎博士の一生（1）	99
赤堀四郎博士の一生（2）	100
赤堀四郎博士の一生（3）	101
赤堀四郎博士の一生（4）	102
赤堀四郎博士の一生（5）	103
赤堀四郎博士の一生（6）	104
赤堀四郎博士の一生（7）	105
赤堀四郎博士の一生（8）	106
赤堀四郎博士の一生（9）	107
赤堀四郎博士の一生（10）	108
赤堀四郎博士の一生（11）	109
赤堀四郎博士の試練期	110
赤堀四郎博士の一生（12）	111
赤堀四郎博士の一生（13）	113
赤堀四郎博士の一生（14）	114
赤堀四郎博士の一生（15）	115
赤堀四郎博士の一生（16）	117
赤堀四郎博士の一生（17）	118

著者：亜木陽一	号
掌編小説 1	102
掌編小説 2　新しい友	104
掌編小説 3　ダブル･ハピネス	106
掌編小説 4　論語ドリーム	107
歌詞　千年先の未来まで	108
掌編小説　小さなスポットライト	110
掌編小説 5　体育入門	111
掌編小説 6　ときめきを越えて	113
掌編小説 7　一日ミュージシャン	114
掌編小説 8　無意識の佳人	115
掌編小説 9　何かいい事	116

著者：平山恵敏	号
司馬史観の黒田官兵衛	103
米沢紀行　遠き従兄弟との再会	105
五十年間の一人言	108
「雲」	112
雑感	116

わが愛誦歌（5）戦後歌壇	107
余映を保て　短歌40首	108
ノー・サイド　短歌30首	109
東洋のマタ・ハリ　偶感	110
短歌　30首	111
わが愛誦歌（6）戦後歌壇	111
短歌　30首	112
わが愛誦歌（7）戦後歌壇	112
短歌　30首	113
わが愛誦歌（8）昭和･平成	113
わが愛誦歌（9）昭和･平成	114
短歌　30首	115
短歌　30首	116
わが愛誦歌（10）昭和･平成	116
短歌　30首	117
わが愛誦歌（11）昭和･平成	117
短歌　30首	118
わが愛誦歌（12）	118
短歌　30首	119
河野裕子の日常性を惜む	119

著者：伊治 哲	号
ジローとともに暮らした日々	96
孔孟の教え・日中問題を憂う	97
故小倉昌男氏の足跡を辿る	98
わたくしたちスタインベルグ三姉妹	99
わたくしたちスタインベルグ三姉妹	100
金沢からまたひとつ「昔」が消えた	101
訪中記	102
法は最低の道徳	103
彼岸への道	104
葛飾柴又と老婦人	105
孫への手紙	106
青春彷徨（1）	108
青春彷徨（2）	109
スタインベルグ、後日譚	110
青春彷徨（3）	111
青春彷徨（4）出会い	112
カリカチュア　愛煙・応援歌	113
故花房秀三郎君を偲ぶ	114
二八に帰るすべもなし（1）	116
二八に帰るすべもなし（2）	117
二八に帰るすべもなし（3）	118
二八に帰るすべもなし（4）	119

鏡（3）	106
還暦からの考古学（11）	106
鏡（4）	107
還暦からの考古学（12）	107
鏡（5）	108
還暦からの考古学（13）	108
鏡（6）	109
還暦からの考古学（14）	109
日本列島にも青銅器時代	110
鏡（7）	111
還暦からの考古学（15）	111
鏡（8）	112
還暦からの考古学（16）	112
鏡（9）	113
還暦からの考古学（17）	113
鏡（10）	114
還暦からの考古学（18）	114
鏡（11）	115
還暦からの考古学（19）	115
鏡（12）	116
還暦からの考古学（20）	116
鏡（13）	117
還暦からの考古学（21）	117
鏡（14）	118
還暦からの考古学（22）	118
鏡（15）	119
還暦からの考古学（23）	119

著者：曽根竣作	号
短歌　北よりの使者	96
短歌　流離の渚	97
短歌20首　砂時計	98
短歌20首　アウトサイダー	99
現代詩　湘々南湖南　60首	100
短歌30首　一兵として	101
黒南風（短歌30首）	102
わが愛誦歌（1）	102
雁来紅（短歌30首）	103
わが愛誦歌（2）戦後歌壇	103
わが愛誦歌（3）戦後歌壇	104
霧笛（短歌30首）	106
わが愛誦歌（4）戦後歌壇	106
南溟の秋（詠草20首）	107

恋詩集 しさくのかなしみ（7）	113
悲しいアメリカ（3）	114
恋詩集 しさくのかなしみ（8）	114
悲しいアメリカ（4）	115
恋詩集 しさくのかなしみ（9）	115
恋詩集 しさくのかなしみ（10）	116
日本近代文学点描（1）	116
サウダージより（1）	117
日本近代文学点描（2）	117
サウダージより（2）	118
日本近代文学点描（3）	118
サウダージより（3）	119
日本近代文学点描（4）	119

著者：森下征二	号
茉莉花伝（1）	94
茉莉花伝（2）	95
茉莉花伝（3）	96
茉莉花伝（4）	97
馬琳英（マー・リンイン）	98
断腕太后	100
山妖紀	110

著者：中村一彌	号
「文明の衝突」から	94

著者：中山喬央	号
還暦からの考古学（1）	95
還暦からの考古学（2）	96
還暦からの考古学（3）	97
還暦からの考古学（4）	98
還暦からの考古学（5）	99
考古学で判る社会の動き	100
還暦からの考古学（6）	101
還暦からの考古学（7）	102
還暦からの考古学（8）	103
鏡（1）	104
還暦からの考古学（9）	104
鏡（2）	105
還暦からの考古学（10）	105

著者:：外山 知	号
陰翳の美学 (1)	115
陰翳の美学 (2)	116
陰翳の美学 (3)	117
陰翳の美学 (4)	118
陰翳の美学 (5)	119

著者：山本鎭雄	号
目耕録 (1)	117
目耕録 (2)	118
目耕録 (3)	119

著者：金澤智佐美	号
短歌　はじめまして	117
短歌	118
短歌	119

著者：山本 勉	号
口紅 (1)	119

著者：鈴木守	号
化粧のルーツを訪ねて (1)	107
化粧のルーツを訪ねて (2)	108
化粧のルーツを訪ねて (3)	108
化粧のルーツを訪ねて (4)	109
化粧雑記	110
化粧のルーツを訪ねて (5)	111
化粧のルーツを訪ねて (6)	112
化粧のルーツを訪ねて (7)	113
化粧のルーツを訪ねて(8・9)	114
化粧のルーツを訪ねて (10)	115
化粧のルーツを訪ねて (11)	115
化粧のルーツを訪ねて (12)	116
化粧のルーツを訪ねて (13)	117
化粧のルーツを訪ねて (14)	118
化粧のルーツを訪ねて (15)	119

著者：勝山道子	号
野梅	108
ぼたん	109
姉と慕われて	110
俳句　羽子板　三十首	111
成人式	112
俳句　水仙	113
四十四年目の挨拶	114
俳句　春・夏・秋・冬	115
平和を願って	116
俳句　紅葉	117
私の町　今昔ものがたり	118
俳句　酷暑	119

著者：森 清英	号
一兵卒が見た戦場の裏側	109

著者：幸山周平	号
森田萬右衛門物語	110

まんじ

No.121

2011.8.1

まんじ第百二十一号 目次

「日本太古史」について……三戸岡道夫……4
懐郷記……忠内正之……26
イドと超自我の谷間（一）……鍋屋次郎……34
関東管領始末記③　雌伏の長い隧道……千坂精一……47
誠忠の茶園（八）……太田精一……56
わが愛誦歌（十三）……曽根竣作……65
短歌　四十首　赤き月……曽根竣作……71
短歌　行雲流水（三十一）……石黒修身……76
俳句　春嵐し……勝山道子……84
俳句　朧月……石野茂子……88
詩　窓……石野茂子……91
民話詩　真夏の夜の夢―夜泣石―……石野茂子……94
創作童話　桃……石野茂子……96
漢詩　潮騒錄（六五）《漢詩の流れ54・清その三》……鯨游海……99
マルタ共和国……漆原直子……103

被災のメルヘン……幸山周平……112
旧体制に自ら幕を降ろした権力者たち……新井宏……116
春の館林を満喫する……吉田忠雄……127
二八に帰るすべもなし（五）……伊治哲……129
目耕録（その四）……山本鎭雄……134
透明な時間（五）……宅見勝弘……142
陰翳の美学（その六）……外山知……145
化粧のルーツを訪ねて（補遺）……鈴木守……166
性と化粧（一）……鈴木守……171
房総を旅した漱石と子規……山田嘉久……176
口紅（その三）……池莉原作　山本勉訳……186
ノンキャリで首が長持ちする方法　早稲田・京橋編……中山喬央……207
追伸　―サウダージーより―　その四……松下壽男……219
日本近代文学点描　その五……松下壽男……220
編集後記……編集子……223
表　紙……田寺怜葦……

「日本太古史」について

三戸岡道夫

言ってみれば、日本の古事記、日本書紀と、ギリシャ神話とを対比し、その相似性から、

（日本の古代はギリシャにある）

と結論づけた、日本の古代史なのである。

たとえば、その中の一例をあげれば、天照大神はアフロデテー女神であり、須佐之男命（すさのおのみこと）はヘラクレースであるなどという、驚くべき内容である。

天照大神とアフロデテー女神とは、別の神ではなく、同一の神なのである。一人の神のことを、日本神話では天照大神と記し、ギリシャ神話では、アフロデテー女神と記しているというわけである。

こうして日本神話とギリシャ神話を詳細に比較し、また神話だけでなく、歴史、言語、地理など、広い分野にわたって比較検討し、「日本の古代はギリシャにある」という結論に達したのである。

すなわち、古代の日本は、現在の東洋の島国にあったのではなく、ギリシャにあったのである。古代の日本民族は、東洋の島国に住んでいたのではなく、ギリシャの土地に、ギリシャ人と一緒に住んでいたのである。そして中世に、東洋へ移ってきた。

ギリシャから東洋まで、日本民族は大移動してきた、そんな馬鹿なことがと思うかもしれないが、この地球上の民族の大移動は、日本民族だけでなく、どの民族も大移動した—と、木村鷹太郎の筆は世界史の中へものびていくのである。

ギリシャから日本というと、非常に遠隔に感ずるが、しかし、これを地球の外から眺める、たとえば北極の上空から地球を眺めてみれば、日本とギリシャとは、それほど遠距離でない眼下に、存在しているのである。

このように著者の眼は、地球の表面からだけでなく、地球の外から、地球の民族の移動の歴史を眺めた、と言ったらいいであろうか。

多くの歴史学者は、それぞれの国の歴史を、現在ある固定した国の位置から、過去へと垂直に時間を遡らせて、考えている。だからその範囲の歴史しか、わからない。しかし木村鷹太郎は地球の外から、地球上の民族の歴史を見ているから、わからないことが、わかってくる、というわけなのであろうか。

しかし明治四十四年では、この日本民族ギリシャ起源説は受け入れられなかった。いや、現在でも、そうかもしれない。

だから明治四十四年に上巻を、明治四十五年に下巻を発行した木村鷹太郎の日本太古史は、歴史学界などからは無視され、あるいは手きびしく批判された。そして、そのような圧力によってであろうか、本著は発禁処分にされてしまったのである。

発禁処分になったとき、この貴重な奇本がこの世から消えてしまうのを心配したある人間が、図書館から持ち出し、ひそかにコピーして製本した。それが今回、私が戴いた「日本太古史」なのである。

当時のコピーであるから、現在のような薄手の紙への両面コピーなどではなく、厚めの紙に片面コピーした紙面を、二つ折りにして製本し、皮張りで立派に装丁したものである。したがってボリュームは原本の二倍以上になっている。上巻は三冊、下巻も三冊、合計で六冊になっており、その厚さを合計すると、二十三センチメートルにもなる巨大さである。冒頭で本書を巨大といったのは、その内容のスケールの巨大さもさることながら、このボリュームのことをも言ったのである。

このように本書の内容は巨大にして、偉大、奇異であるので、簡単にその内容を紹介することが出来ないが、幸いにして発行に当って、筆者（木村鷹太郎）の書いた序文が、上巻、下巻、のいずれにも載っている。そこで

この「序文」全部と、本書の「目次」の全体を紹介するので、これによって本書の全体の骨組みが、浮かび上ってくるのではないかと思われる。

なお、本書上巻の発行は明治四十四年、下巻の発行は明治四十五年で、上巻と下巻の発行に一年の間があいている。それはまず上巻を発行して、その後の一年間で下巻の原稿を書いていたわけである。その下巻を執筆している一年間に、上巻に対する歴史学界などからの強い圧迫や、批判があったものと思われ、下巻の序文には、それに対する木村鷹太郎の強い自己主張、学界への反撃が、強く現れている。

なお、本書の文章は明治時代の格調の高い、硬質の、やや難解なものであるので、序文の紹介に当っては、現代の読みやすい文章に書き直し、また若干の省略などをした、いわゆる序文のダイジェスト版である。

第一章　序文（上巻）

日本の歴代の天皇の詔勅や神文を拝読すると、誰でも、日本帝国の規模が雄大で、その抱負が壮大であることを感ずるであろう。

そこには必ず「天業」が語られ、「天下」が語られ、「六合」や、「萬里」、「四夷」、「八方」、「萬国」が語られ、日本は皇大御神の恵みの行き渡っている「四方の国」である。これは日本の神文が明らかにするところで、また厳粛な詔勅にある通りである。神文に書かれた精神と言語文字とは一致していて、少しも文章をわざと飾り立ててあるところがない。詔勅で天下と言えば、眞に天下を意味し、六合といえば六合を意味し、萬国といえば萬国を意味し、決して私意によって曲解しているようなところはない。

したがって私（著者木村鷹太郎）は、太古日本の理想が崇高であり、またその皇化の範囲が宏大なるのを確信して、それを私の論文の根拠に置こうとするのである。

しかし世の中にはこれを曲解する無学の者がいる。それは詔勅などの謹厳な史実を、たんなる文章の虚飾といい、雄大なる日本の歴史を、小さな歴史としか見ず、天下にあまねく行きわたっている皇化を、極東の小島の中にしかないのだと圧縮して、少しも「皇祖皇宗国を肇むること宏遠」なる日本の歴史を研究することをせず、自分の小さな成功に安じて、少しも「知識を世界に求むる」ことを、しない者である。ああ、これが眞に国を愛し、歴史を愛する者の行為というべきであろうか。

しかし私がこのように言うのは、詔勅や神文の名を借りて、他人の言論の自由を圧迫し、反対意見を持つ者の口を封じようとするためではない。詔勅や神文の全体をよく読むと、その萬国といい、天下といい、四方というのは、決して日本国内のことだけを言うのではなくて、世界全体のことを言っているのは明瞭であり、そしてその関係の歴史や地理を研究して証明している者もあり、したがって私の論説の根拠は確固不動だからである。

これまでの国体研究者や歴史家は、世界的知識が欠けているので、世界歴史を比較することによって、自分の狭量なる研究を矯正することを知らないのである。

日本の国体が尊重であると思うことについては、私は決して人後に落つる者ではない。いや、それどころか、私が日本主義者というレッテルの貼られていることは、天下周知の事実である。

そして私は、国体を尊重するために、ますますその立場を強固にしなければならないと思っている。

なぜかといえば、日本民族の太古史は、これまですべての歴史家が想像するよりも、はるかに、はるかに、偉大なものだからである。日本民族は世界に誇るべき大業を成した大民族であるのである。

しかし現代の日本民族は、これを忘れている。日本が雄大な歴史を持つのに、その雄大さを評価せずに弱小といい、天照大御神の神業史や神武天皇の詔勅などは、ほとんど忘れはててしまっている。

歴史学が今日ほど衰退している時はない。日本には歴史家といえる者は、一人もいないのではなかろうか。これは知識を世界に求めないからである。

もし世界に知識を求めて歴史を研究すれば、日本書紀や古事記の内容も、日本語以外の言葉をもって、何千年の昔から西洋に伝わり、また書かれていることがわかるのである。したがって日本歴史に不足しているものを西洋で補ひ、日本歴史では不明になっているところを西洋で明らかにすることが出来、また日本歴史の誤っているところを西洋が正してくれることもあるわけである。

したがって日本の学問には、西洋の学問や言語に大いに光を当てなくては、西洋方面の研究が不完全な日本学になってしまうであろう。これこそが、知識を世界に求める比較研究によって得られる利益であって、その利益たるや、我を利し、他を益し、もって世界の歴史に新紀元を開くことが出来るのである。

比較研究はすでにこのような地点にまで進行し、日本民族史の一部は、すでに何千年以来西洋においても記録保存されているのに、なおもそれに眼を蔽って知らぬふりをしているのは、頑といわなければ、痴と言うべきではなかろうか。いわんや西洋各方面に記録されている日本民族に関する記事の多くが美しいのを知ると、尚更である。孔子は、

「学べば固ならず」

と教えている。

日本のこれまでの比較宗教学者、言語学者や歴史家の多くは、怠惰でなければ、学識が非常に狭小で、浅薄で

あると思われる。またそうでなければ、見識がきわめて下等か、あるいは無能力である。

これに反して西洋人の日本人観は違っている。もちろん、すべてが全部そうだというわけではないが、ある者は日本人をしてアリアン族だといって日本人の優等性を認め、またシナイ半島から東遷してきたのだという者もあり、その組織的研究には評価すべきものがある。それは私の研究と一致する所もある。

またその中には、日本はギリシャ的である、という者もいる。これは日本人をとかく劣等人種と見る一部の日本の歴史学者と、大いに異るものである。したがって、もし西洋人がその慧眼をもって、日本の言語、神話、歴史その他の事象を研究したならば、日本人種起原の真理を、外国人が発見するということになってしまう。そうなると日本人は、日本帝国発生の地、自分の太古の祖先の地のことを、外国人から学ばなければならないという、不名誉なことになるのである。これは国辱である。その責任は何れにあるべきであろうか。

すると幸いにも神は、この大仕事に、日本人である私（木村鷹太郎）を指名したのである。私はこの方面の学問においては、まったく素人である。その門外漢の私を選んだ神意はわからないけれども、私はこれを天命であると受けとめて、粛然とこの大研究に邁進するものである。

私は日本民族はギリシャ・ラテン系であると思っている。すなわち太古の時代に、小アジアの天（あめ）、すなわちアーメニア、すなわち耶蘇教がいうエデンの地に起こり、ギリシャ、エジプトなどに国を造り、世界を打って一丸となした。さらに北は北欧スカンヂナビヤから、東はインド、ローマに至るまで日本の領域であり、それを統括するわが皇室が、世界の中心であったのである。

したがって日本民族は、歴史的に野馬台の詩に「本枝天壌に周く」と書かれている通りであることを私は発見し、これを発表するのである。日本民族はたんに世界の中心であるというだけでなく、日本民族は人類文明における最も旧い民族であり、したがって日本の皇室は世界の最も旧い王家なのである。

今もし、日本史や中国史やギリシャ方面からの資料にしたがって比較研究をすれば、日本歴史の中の日本武尊はギリシャのアポローンの神である。そして中国においては、夏の禹王である。カルダヤにおいてはウル王、あるいはウルク王にあたり、同一人物を方々に伝えて、いろいろな名称をつけていることが判るのである。

その頃の中国の夏とは、ペルシャ西南のエラムの地であり（この時中国はまだ極東に移っていない）、同時にこの地は、日本武尊の祖先である須佐之男の名前の出た、スサ府の地だったのである。これを年代の点から見るならば、西洋歴史のニムロッド王より遠からずといえども、神話時代のことである。

西洋人が研究して定めたる年代は、すべてこれを信用するわけではないが、日本書紀の神功皇后紀の中の拷衾新羅王の名前は、西洋においては伝説的とされているローマ王タルクイヌス家の王名に一致し、それは同一人物であることがわかった。それを西洋の年代によると耶蘇紀元五六百年前であり、それより計算すると神功皇后は、日本紀年の神武天皇の時代に当る。また、神武天皇および皇兄稲氷命と御毛入野命の名は西洋方面にも伝っている。それと比較し、御毛入野命が、エヂプト王すなわち常世国王ミケーリノス王に当るとすれば、西洋の年代は耶蘇紀元前二千七百年頃、すなわち今から四千年もの前になり、日本の皇室は世界史上においても最大の旧家になるのである。

またローマ詩人ビルギリウスのイナイ伝の詩によると、イナイは稲氷（イナイ）命に当る。そしてその子のイウレウスは、日本の磐余彦（イワレヒコ）天皇（神武天皇）に当る。稲氷命が新羅の祖であるという日本の伝記は、西洋においてはローマ帝国創建者であるという伝説に当る。したがって後代ローマの大帝ユリウス・ケーザルは、イワレ家の後裔なのである。

さらに西洋に伝わる系図をさかのぼると、ホメーロスの歌ったトロヤ王家にも関係のあることがわかり、日本の皇室の尊厳偉大さは、実に世界的に堂々とした証拠として記録されているのである。

その紀年の相違については、なお今後の研究にまたなければならないが、日本の稗田阿礼が口述した古事記や、それらを材料とする日本書紀などは、必ずしも完全な記録を残しているとはいい難い。なぜならば、歴史家の立場から言うと、それはただ一つの史料にすぎないからである。世界的比較研究がそのことを教えてくれる。

こうして私は日本史料だけでは不完全であると思うのであるが、しかしその故にかえって、日本民族がいっそう大であることを知り、わが皇室のいっそうの尊厳宏遠なることがわかり、うれしい限りである。

そこで日本民族の言語は、世界文明人種の中でもっとも旧く、かつ又、現在も活用されているものだと、私は思うのである。日本民族の太古史は、実に世界の太古史であり、中心史なのである。西は西ヨーロッパ、北ヨーロッパから、エジプトを中心にし、東は東アジアに至る地域の、歴史や地理を包みこんでいるものである。したがって日本民族の言語や歴史を知らなくては、ヨーロッパはもちろん、世界の言語や歴史も、決して完全に知ることは出来ない。

また中国の太古の歴史や地理も、私の比較研究の方法を応用し、用いなければ、決して真正のものを知ることは出来ない。なんとなれば、中国の民族も大古に西部アジアから極東に移動してきた民族であるからである。か

の太古史の三皇五帝記は、小アジア、エジプトの地のことであり、夏や殷や周の初めは、カルダヤやアッシリヤ地方における歴史であったからである。

またその太古史は、日本の太古史と錯綜して、同じものを別の名前、別の言語でもって、天皇以来の日本民族の祖先の歴史を、彼等の歴史として、その民族史の冠頭を飾っているのである。このように見てくると、我ら日本人の祖先の活動の偉大さと、日本民族の歴史の悠遠なることを知るのである。したがって私は、まだ伝えられていない史料の足らないところを補い、それによって日本民族の歴史を大成しようと思うのである。

穂積八束博士は今年（明治四十四年）一月の御講書において、日本建国の根本は、古代のギリシャや、ローマ人が、祖先を崇拝し、父母に孝行をつくし、国や家を愛することによって、親族や相続の制度などが、まったく日本の制度と同一であることを、天皇陛下の御前で進講されたと聞いた。これは実に私の、神話、言語の比較研究や、地理研究などと、まったく同じ内容のものである。

「知識は世界に求めなくてはならない」という私の比較研究の功績は、このように高いものである。しかし、そもそもこのような研究は、それぞれの学問の専門家の間から起るべきものである。ところが日本には、そのように活眼達識の歴史学者、言語学者、神話学者や地理学者がいないので、なんら発明的研究が出ず、ただ抜粋的、飜訳的、編集的なものしか出ないのである。

日本民族は本当はギリシャ、ローマ人種であり、わが国日本の言語、歴史、宗教、社会組織などは、ほとんどその系統に属するものである。しかし日本の学者にはそのような観点に気付く者がいない。有名大学においても、ギリシャ、ローマの研究については、ほとんど無いと同じである。多少あったとしても、それはわずかに語学程度のものであり、ギリシャ、ローマの、人種、思想、信仰、社会、歴史などの神髄などには、及んでいない。

そこでの比較研究は、日本とは関係のうすいインドを目標とし、簡単なものは中国と比較し、不明のものはインドに求めるに止って、それらの国よりもはるかに根本的で直接的な、ギリシャやローマ、エジプトなどには、思い至らないのである。

このように比較の目標を誤ってしまった日本の学者は、どうして眞正の結果を得ることが出来るであろうか。彼等は西洋の下級の比較言語学者、比較宗教学者などを盲信して、自家独創の研究心や見識がないので、ギリシャ、ローマ学に着眼しなかったのである。

このような日本学の現状を見て、日本学が振興しない理由がわかった。それは彼等の研究が跛だからである。比較研究は跛に出来るものではなく、二つの分野に通じて、はじめて可能になるのである。

これまでの国学者、漢学者の多くは、世界的知識を持

たなければならないのに、外国の知識を知らないでは、知識上の跛と言わざるをえない。したがって私は彼等を問題としない。

それならば新学問を教育し、世界的知識を収得した者はどうかというと、彼等には意思が弱くて実行力のない者が多く、彼等も学識が跛で、比較研究の資格がない。たとえ国学において多少の知識を有し、外国語をよくする者がいたとしても、外国の神話は知らず、歴史も知らず、地理も知らずでは、完全な比較を行うことはできない。たとえ神話は知っていても、語学を知らず、歴史を知っていても、神話も語学も知らずでは、比較研究などが出来るはずがなく、何も結果を得ることができないのである。

そのために比較研究を成功させようとすれば、必ず学問は東西の両方を学び、言語、神話、歴史、地理、社会、国家など、万般のことを学び、あらゆる角度から比較検討し、想像し、仮定し、また自分自身も、自分の想像、仮定をも、批評し得る人間でなくてはならない。しかし専門家を名乗る学者の中で、このような資格を有する人物が、現在の日本に果して何人いるであろうか。多少はいるであろう。しかし残念なことに、私は現実にそのような人に一人も会ったことがないのである。この方面の学術の比較研究が進まないゆえんである。

とくに国学者の老大家と称する人でさえも、歴史、地理に関しては、まったくそのような考えを持っていないのは、彼等の研究会が薄弱であるのを示すものである。もし世界的知識がなく、また歴史地理を学んでも何ら得るところがなかったならば、そのことになにか疑念を持つべきである。それなのに何ら疑念を持たず、ただこれを不明にし、放任して、平気でいるのは、どうしたことであろうか。

また一方、新知識を持っている者たちも、国学について少しも真面目に厳格に勉強することなく、旧来の国学者、漢学者の日本研究の範囲から少しも抜け出しておらず、ただ狭い範囲で、研究するだけである。堂々と疑問を持ち、広く世界にその解釋を求めようともせず、怠惰であるとともに、無学と無見識であることは、憐憫の情をもよおすばかりである。しかし問題はそれだけではない。自分の無知無学を棚に上げて、他人の学問をうれしそうに笑うのである。これはあたかも小鳥が大鵬の飛翔を笑うようなものである。これこそ大笑いすべきことである。世の中でこれより大きな笑いはないであろう。もちろん彼等の笑いなどは問題にするほどのものではないが、ただそれが真理が普及するのを妨害し、自分の無見識を他に強制することを恐れるのである。

しかし、眞理は力である。向ってくる者はこれを破り、敵として来るものは倒さなければならない。

日本民族は長い間、極東の小さな島に閉居して、因習

に染ってしまったので、思想や抱負が次第に卑屈になってしまった。しかしやっと日清戦争と日露戦争の、二つの戦争に勝ったので、いささか自分の力量に目ざめてきた。しかし、いまだそれだけでは十分ではない。幸にも、天は日本人に歴史の新発見をさせ、日本民族の祖先の世界的な功績と雄図とを、自覚させたのである。願くば、日本人の自覚をさらに強固にし、その抱負が遠大になることを祈るばかりである。

このことを純然たる学問の世界について言うならば、私（木村鷹太郎）の今回の発見によって、日本学は今後非常に発展するであろうと、確信するのである。

なぜかというと、これまで日本の神学、言語学、その他の学問研究は、あたかも鉢植えの木のように、狭い場所で生育してきたので、栄養不良であり、あるいは枯死せんばかりである。しかしもう一度これを鉢から出して、母なる大地に植えかえ、ギリシャ、ローマ、その他世界的な知識によって、比較し、補足し、訂正して栽培すれば、これまで萎縮し痩せていた国学の植物は、たちまち生きる力を回復し、根も幹も枝葉も大いに繁茂し、「天を覆い、東を覆い、ひなを覆う」の「ももだる」大王木となることが、必ず出来るのである。

これは単に日本学のためばかりではない。よく東西を連絡し、日本や中国などの材料をもって、西洋から出る材料を補正すれば、太古人類学や人種学をも完成させることができる。日本学がなくては、世界学は決して完成することは出来ず、したがって私の発見はこの方面において、確実に新紀元を開くものである。

しかし私は言語学者でもなく、また歴史学者でもない。少しばかりの言語の才能と、粗大な歴史の知識とをもって、学問の荒海の中をこの港まで、漕ぎ着いたにすぎない者である。したがって研究材料というようなものはほとんど持っておらず、古事記、日本書紀、万葉集、祝詞などを基礎とし、比較用としてわずかに二、三冊の、ギリシャ、ローマの神話書と、ギリシャ語辞書、ローマ辞書、大英百科全書、センチュリー字書などを持っているだけである。また地理に関しては、古事記、日本書紀を研究の基本とし、その他にはわずかに学生時代から持っていた、ブッツゲルの歴史地図、ラバートン地図、フィッシャー万国史、その他、若干の西洋史書があるだけであり、また今回の研究には、これ以上の資料も買い入れたり、また借りたりはしなかった。

資料はこのように貧少である。しかし資料の貧少を憂う必要はない。資料は貧少であっても、頭脳を働かせて大研究が出来れば、もし後日に資料が集ってくれば、必ずさらに至大な研究をすることが出来ると断言できるからである。いたずらに資料ばかりを集めても、何らの研究をも、発見をもしない者に比ぶれば、私は最小の資料をよく活用したというべきであり、かえって誇りに思っ

ている。

しかし研究材料は必ずしも紙に印刷されている書物だけに限るものではない。私は、ム子モシネー文庫を頭の中に持っており、その万巻の資料を自由に使用することが出来た。ミューズの神である、天之御中主神、神漏伎神、神漏美神の神々に、感謝たてまつるものである。

とくに国典地理の研究において、現在の日本の地理と、国典地理とは別物であることを、古事記や日本書紀を精読した者は、必ずこれに気付くはずである。とくに万葉集の地理研究は、このことを私に教えてくれた。したがって私は万葉集に旧国学の「裏切地理書」と名前をつけている。

その他に古代地理を研究するのに見逃すことができないのは、謡曲である。その古いものには、日本古代の地が、今の日本の地ではないことを表しているものがあり、したがってその研究上の価値においては、あるいは万葉集以上といってもよい。これもまた裏切地理書である。しかし従来の歴史学者、地理学者は、このようなことを知らずに、ただ空しく読み去ってしまったのである。彼等の研究力のほどを推して知るべしである。

その他に、これまでの国典学者などが偽作だといって顧りみなかった古風土記なども、非常に価値のあるものである。彼等が風土記を偽作だというのは、現在の日本の実際の地理と合致しないからである。しかし、その「合致しない」が、大いに「合致」するゆえんであって、これを世界的日本の地理として考えるときには、むしろこの方が正しいのである。

かの「倭姫世紀」などを、現在の日本の地理に照し合せて読むときは、ほとんど合致しないと思うであろうが、これをギリシャ、シリア、エジプト、アーメニア、ペルシヤ、インド、アフリカ、アビシニヤなどの地理に照し合せて読むと、むしろ非常に正確で詳細に書かれているのである。しかもアレキサンドル遠征地理よりも、雄大なる旅行地理である。ところが日本の歴史学者、地理学者たちはこのことを知らず、このように雄大な地理書を偽書だといっているのは、ああ、危いことである。私は、いわゆる正史以外にも、民間の伝説や、偽作扱いされているものの中にも、正史以上の真正史があると思っている。

年月が長く過ぎると、いろいろな事情によって、日本は多くの有益で偉大なる資料を失ってしまった。それに加えて、一時の国家の政策によって、世界大資料を政府の力によって破壊したこともあった。また正面から明瞭な文章で史実を発表することが出来ないので、稗史小説の形によって、やっと後世に伝えたという時代もあった。したがって国史の研究家は、「眼光紙背に徹する」の眼をもって、種々の資料を処理しなくてはならないのである。時に、正史は必ずしも正史ではなく、あるいは一時

の政策史であった場合もあるのである。

要するに日本太古史は、世界太古史であるのである。ところがこれを曲解して、広大なる日本をしいて圧縮、小視したために、国典の記事がいろいろな方面で合致せず、不明な点や矛盾を生じてしまっている。

これが今日の日本太古史研究の状態である。非常なる間違いである。

本居宣長や平田篤胤（あつたね）など、多くの国学の大人物を私は尊敬している。しかし尊敬しているのは、その精神である。学問は進歩するものであるから、私は大国学者の考えであっても、狭い旧知識によった解釋には束縛されない。本居宣長や平田篤胤などの大家が、もし現在生きていたとしたら、必ず私の意見に賛成してくれるはずである。私は聖勅に従い、知識を世界に求めて、大いに皇基を振起せんとする者である。

私が今回の研究に着手したのは一昨年の秋であり、着手して二カ月ほどでギリシャ関係を発見し、それから数カ月で、今回発表する構想の大体を研究した。以来、それを中心に研究し、書きつつ研究し、今日に至ったのである。その間はわずかに一年間であり、一般の世間の人のように、十年、二十年の研究を誇るものではない。しかしこの一年間、私は世事を投げうち、世間との交際を断ち、食事をしても味がわからず、夜は夢の中でも研究と思考を続けたのであり、私のこの一年間は、普通の人間の五年、十年に相当するものではないかと思うのである。

本書は、ギリシャ語、ローマ語、その他の外国語も少からず使い、日本の読者は外国語に慣れないので、いちいち発音にふりガナをつけ、出来る限り読みやすく書いた。またその発音も、出来るだけ正確を期した。また、日本語とギリシャ語が同一であることを示すために、なるべく日本語に近い発音を取り、また両者の連絡をつけるために、架橋的発音を少なからず使用したので、便利になったのではないかと思っている。

私は、日本研究は真に世界的なものであり、決して狭い日本に限るものではないと信ずる。したがって本書が全部完成し、出版されたときには、外国語に翻訳して、さらに天下の学界に問わんと思っている。

明治四十四年二月紀元節

東京　木村鷹太郎　識

第三章　序文（下巻）

本書の上巻において私は、神話と言語の方面から、世界的知識による比較研究によって、日本神話や日本言語がギリシャ、ローマ系であること、さらに進みて、日本民族は、ギリシャ、ローマ、エジプト系であると論じた。

しかし私の論文は、たんに神話比較や言語比較だけによるものではなく、歴史や地理の方面にも及んでいるのである。

したがって本書下巻においては、主として歴史、地理を主眼として、日本人がギリシャ方面からエジプトへと国土を拡げていったことを証明する。そしてこれに加えて、日本に伝わる歴史事件と、西洋に伝わる歴史事件で、一致しているものを列挙し、私の地理的論文の傍証となすものである。

日本人はギリシャ、ローマ、エジプト系であり、またその歴史、地理もこの地にあったことを、神話や言語で証明すれば、私の日本人種論は十分の証明を得たことになり、また地理的にも磐石の基礎の上に立ったことになる。

ところが最近の学界の気風ははなはだ軽浮で、私の新研究に対して十分の考察もせず、また私が論文全部をまだ発表していないのに、はやくも悪口を言い、私の立場をどうかしようとする者が、少くないのである。

とくにある学者などは次のように言っている。

「木村君は発狂したのではないか。新研究というが、その新研究は果して儲かるのか。いや、儲からないであろう。もし儲かるのなら、利益のために異説（新研究）を立てることもあるであろう。しかし儲かっていないのなら、新研究だと言っているのは、木村君が発狂したのだと思わざるをえない」

かくも史学家の論理は見事なものである。自分の下劣な心境で他人の心境を忖度し、儲かる儲からぬをもって、狂、不狂の標準とするのである。このような人間が、日本の歴史や地理の学者であるとは、日本の史学界は実に悲しむべき状態にある。いまの日本の史学会には、見識のある者がいない。

とくにギリシャ、ローマの学においては、日本の史学界も言語学界も、また比較宗教学界も、ほとんど無知無学で、私（木村鷹太郎）の論文を理解できる者が、果して何人いるであろうか。彼等は自分の無知無学を標準として、その基準でもって、他人の研究や学業を批評するのである。これこそ「なまいき」と言うべきである。

彼等は十分に私の論文を検討することなく、また私の論文の全体を知らないで、私の論文をああでもない、こうでもないと言い、また否定しようとしている。

しかし彼等が否定しようと、どうしようと、私の「真理の太陽」は刻一刻と上昇しつつあるのである。彼等ははじめは日本とギリシャの、言語、神話などが同一であることに気づかなかったが、今は、私の本書上巻の発表によって、はじめて東西文明の類似に気づき、もはやこれを否定することは出来ない状態になっている。したがって私の起原同一説の全部には賛成しないが、一部の神話や一部の言語については起原が同一のものがあると認

める者も出てきており、一歩一歩譲歩してきている。すなわち、第一に東西の類似に気づき、第二にあるものの同一起原を認めるようになり、彼等は二歩を譲って、私の説を採用するようになったのである。

またもし彼等が今後、私のように世界的該博な比較言語を研究したり、またその「なまいき」な心を捨てるならば、私の論文に三歩を譲るということになるであろう。

また、もし彼等が着眼を一転して国典をよく研究し、太古の日本の地理が現在の日本地理と一致せず、かえって地中海方面やアラビア海、インド洋、アジア大陸の地理こそ、日本太古史の舞台であると感ずるならば、彼等はさらに私の論文に四歩を譲り、また日本人種論において五歩を譲り、ついに全部を譲って、私の足下に降伏するであろう。彼等が今日まで一歩一歩、譲歩してきているのを見ると、それは十分に期待できる。ただ今日の日本の史学界、言語学会、比較宗教学界の人物が、あまり学問がなく、知識が富んでいないのを、憫むばかりである。

日本の歴史家が、日本歴史や東洋歴史を研究するとき、「東洋人種の大移動」があったことに気がつかないのは、史学の根本的な弱点である。彼等はこのことに気がつかないで、東洋太古の歴史は、東洋ははじめから現在の地にあったものとして研究しているので、太古史の研究はなんらの結果ももたらさないのである。中国人はホイニシャ、エジプト方面から東方に移動してきた。シナ（秦＝支那）はシナイ方面より東に移り、日本もまた秦西より極東に移り、その泰西時代の記録も、一緒に東方に持参されたことを知らなくてはならない。

ここにおいて私は研究の結果、

（古事記、日本書紀は、現在の日本国土の歴史ではない）

と決断を下したのである。

もちろん、古事記、日本書紀やその他の書物も、日本民族の歴史であるが、しかし「現在の極東の島にある日本」の歴史ではないのである。歴史、地理の研究が、これを証明してくれる。

それは「天（あめ）」の地から、シリア、ギリシャ、イタリア、アフリカ北岸、エジプト、アラビア、インド、東インド、およびチベット方面の地理を舞台とする、

（大々的日本）

の歴史なのである。現在の小さな島国の、日本の歴史ではないのである。

これは日本史研究者にとって、第一に必要な基礎知識である。現在の島国日本は、以前の世界大の日本地理を圧縮して、現在の島国に移しかえたのにすぎないのである。したがって日本の本地は泰西日本であり、極東日本はその垂跡なのである。すなわち「前大日本」をコンデンスしたものであり、あるいはそのコピーであるといっ

てもいいであろう。

古事記、日本書紀は、現在の日本の国土の歴史ではないが、もちろん厳として日本民族の大歴史であることにはまちがいない。また私の国典観は、すべての古事記、日本書紀の研究者よりも、はるかに優れており、私は日本の国典の威厳を敬重する者である。

私の新研究を一口に言えば、

（日本民族の神話および歴史は、天地に記載してある）

ということである。

なぜならば、私は古典地理を研究するとき、前述した大世界の地図を読むからである。

私は地図を「読む」という。なぜかというと、地図上の国土、山川、都市などの名前には、それぞれ意味があるからである。したがって地図はたんに見るだけのものでなくて、精読すべきものである。

このようにして世界太古地図を読むとき、国土、山川、都市などの名前は、大部分が神話や歴史の中に含まれており、それら簡単な地名の中に、無量の意味がたたみこまれており、系統的に我々祖先の歴史や神話を読むことが出来るのである。これこそ、わが日本民族の大歴史が俯観されて、地球に記載されているといっていいであろう。

大空を観察すると、無数の星が星座を作って、いろいろな形に輝いている。古代の天文学者はその星座の形を定め、あるいは神人、あるいは動物、あるいは器物などの形を与え、これを星座とした。その星座の形は、私が今回研究した範囲においても、日本民族の神話や歴史によるものが多く、これは日本神話や歴史が、上天に掲示されているのと同じではなかろうか。

私が、日本民族史が、上天、下地に、記載されているというのは、決して間違ってはいないのである。私が新しく研究した日本歴史の壮大雄偉さは、かくのごとくである。ユダヤ詩人の言葉を借りて、私の新研究から得た日本太古史を形容すると、

もろもろの天は、神国日本の栄光
をあらわし、穹蒼は日本民族の歴史を
掲ぐ。此日言葉を彼日に伝え、此夜
知識を彼夜に送る。語らず、言わず、
その声聞えざるに、その響は全地に
あまねく、その言葉は地の極にまで及ぶ

ということではなかろうか。日本民族の歴史はこれであり、私の新研究のもたらした結果と同じである。

古来、世界に国を作った民族は多くあるけれども、これが月や日や星にまで掲示され、山や川や都市が記載されている大歴史を持つ民族は、日本民族を除けば、果してどれだけあるであろうか。ひとり日本民族が持つだけである。これは私の国典研究が、私自身に教えたもので

ある。

日本民族は文明世界で、最も古い民族である。日本語はもっとも古い言葉である。古典の研究には、古語を知る必要がある。文献学の中心は言語にある。そのために古事記の高皇産霊神と神皇産霊神は、別名を、神漏伎神、神漏美神と申し、言語すなわちロゴスをもって、神の名前としたのである（ロゴスの複数はロゴイで、それはロギに通ずる）（LOGOI＝LOGI）。なぜならば言語の力は偉大であって、実に神と申してもよいのである。そのためにアレキサンドリアの学者は、ヤソ教の新約書「約翰伝」の首章において、日本の古事記の開闢の章を次のように説明している。

はじめに言語あり（神漏伎、神漏美）。言葉は神（天御中主）とともにあり。言語はすなわち神である。

これ生命（宇麻志阿斯訶備比古遅）なり。生命は人の光明（国常立）なり

私の研究には、この神の力が必要であり、神の援助がなければ、とうてい何事も成功するものではない。

しかし日本の歴史家は無学であって、この神の生命と光明に頼るということを知らない。そのために、より多く知ることが出来る歴史をも知らないのである。また、あまりに頑愚で、知力が劣っているので、先覚者の学問もこれを味うことができず、平然と無言語なる無知に甘んじて、先覚者を笑ったりしている。世の中に、これ以上の笑うべきことがあるであろうか。

彼等は輝かしい日本民族の大歴史を理解することが出来ず、私の新しい研究を笑っているが、それは彼等に能力がないからである。

日本民族の歴史は、従来の歴史家が考えているよりもはるかに遠大で、世界最古のものである。また日本民族の祖先の事業は偉大であって、世界の善美はことごとく日本民族に起源を持っている。世界の諸王侯はみな日本の皇室をスベラノミコトと仰いでいることは、私の新研究ではじめて言うことができる。なぜかと言えば、もしこの遼遠なる歴史と世界的統治がなかったならば、日本はなんら特にスベラ御国（最上至高）と言われる理由はないからである。

私の新研究はまた、シャカは天忍穂耳命の権化であることを教えてくれた。ヤソ教もまた同様であり、ユダヤ教は日本国典からその善美の部分を取って経典を作り、マホメットは垂仁天皇の御子の本牟知別王にその起源を持ち、このようにして世界の諸大教理はことごとく日本民族から出ているわけで、一人の母から生れた兄弟のようなものである。

ところが宗教は、いろいろと自分の派を立て、他を排して、和合しようとしない。これは一人の母から産れた兄弟だという基本を、知らないからである。もし世界の

諸民族や諸宗教が、私のいう日本の大歴史を研究するならば、必ず和合統一を理解し、人類平和の理想にむかって進むはずである。そこで私は、新研究で発見した日本太古史を、

（世界の統一原理であり、人類の新福音である）

と断言するのである。

もちろん、これには根拠がある。私の新研究の日本古典地理は、西はモロッコより、中はギリシャ、イタリア、小アジア、シリア、エジプト、アッシリヤより、東はペルシヤ、インド、チベット、ツルキスタン、ラオス、安南など、欧亜大陸にひろがり、これを舞台とするので、世界人類に関するいっさいのものを包含するからである。

このようにして私の日本太古史の新研究は、言語に、宗教に、また文明に関して、いまだ世界が知らない、あるいは忘れてしまっている無数のものを啓示し、回想し、これまでの世界太古史以上の太古史を、発掘したのである。

だから日本太古史の新研究は、たんに日本人のみならず、実に世界人類の一大事件でもあるのである。今日までの短い時間においてさえ、私は、世界の学者がまだ知らない無数の言語や史実を発見することができた。

今後もし十分な時間があり、眞正篤実な、いろいろな方面の専門家で、多少の天才を持つ者の協力を得て研究していけば、人類の知識に大いに貢献することが出来ると、私は断言することが出来る。

その研究方法の重点は、日本の古典や日本語を縦糸とし、中国やヨーロッパ諸国の古典、言語を横糸として、古今東西の世界的大知識と言語とを、総合比較することである。言いかえれば、ヨーロッパの言語や知識をもって、日本語や日本文化を照らし、また日本文化をもって世界文化説明することである。

日本語は、世界普遍の根本言語である。したがって日本太古史は、世界歴史の源泉である。これからの学者は、この事を決して忘れてはならない。日本語なくて世界を研究しようとするのは、船なくして大海を渡ろうとするのと同じである。

しかし悲しいことに、日本の言語学者の多くは、頭脳が不良で、その研究方法を心得ていない。そして参考になるような広い知識もなく、その学問が狭隘浅露であるので、とても私の言う研究を行うことができない。最近の歴史家も学問が浅く、言語学の力を欠き、研究方法の考え方を知らず、大研究は出来ないであろう。

現在の史学界には、まったく高等批評が欠損している。分析や批判、懐疑というものがなく、また哲学力がないので、知識の大総合をすることが出来ない。そのため、為すことがすべて兒戯に類している。

帝国大学は、学問知識の深淵であるというが、実際は

その反対で、深玄なるものは何もない。頭脳が不良な史学家、言語学者などが、いたずらに教授とか博士などの美名で、無知無学を鉱金し、一般の人をだましているにすぎないのである。ああ、これが学問知識の深淵であろうか。深淵だとすれば、彼等はその深淵に住む魑魅魍魎なのである。

日本の帝国大学には、ギリシャ、ローマについての学問がない。したがって東西文明の正当なる比較研究が出来ないのは、当然である。したがって私が「日本人種はギリシャ、ローマ系である」という理論を出しても、理解できないのは当然である。帝国大学の無知無学は憫むべきである。

次のような話を聞いたことがある。歴史にくわしくない帝国大学のある教授は、日本書紀さえもくわしくなく、また古事記の講座は速成のある教授に任せているという。そのような彼等が、該博なる知識と高等なる方法で、日本太古史を研究することが出来ないのは、当然である。

帝国大学の史学科、言語学科の教授には、天才はいない。平凡なことは言うまでもない。彼等の頭脳は幼稚であり、その研究たるや児戯に類するといえようか。

見よ、民間には、日本民族の太古を研究して、ギリシャ、エジプト系論を展開し、堂々と二千ページにも及ぶ大論文を書いた者がいる（すなわち私、木村鷹太郎）。

それなのに、教授、博士などという虚名を持つ学者が、西洋史何々話とか、ギリシャ話何々の巻などという、子供だましの書物を発行していて、少しも恥かしいとは思わないのか。

またある学者は、二、三百ページばかりの万国史の中等教科書などを作って、出版会社と少しばかりの利益を分けあうのを、たのしみにしているということである。たとえ、よい出版物だといっても、西洋人の書いた歴史書を寄せ集めて、何々西洋史なるものを作る程度のものである。彼等の学問が、忠実、篤厚でないのは、かくの如くである。

彼等は自分の無知無学を悟らず、それを当り前としている。彼等ははなだ尊大で、他人の眞理研究を敬重するという礼儀も知らない。自分の小さな知識で、大きな知識を持っている者を笑い、他人の意見を十分究めずして、学者にあるまじき態度をとり、はなはだ牽強付会である。あるいは突飛な判断を下して、他日それに対する恥辱が自分の頭の上にふりかかってくることも、知らないのである。これらは学問に忠実であるからでもなく、また礼儀を知らないからである。

怠け者は、新しい研究が出ると、必ず、

（新説は安易に信じてはならない）

という。そして、このようなことを言う者は、決してその新説に対して、自分も研究し、思いを致すようなことはせず、一時をごまかすだけである。彼等は「新説を

安易に認めてはいけない」と言って、きわめて安易に軽薄に、他人の新説を否定して平気なのである。これが「怠惰学者の第一態度」である。

比較研究の分野においても、怠惰学者がいる。もし神話や歴史などを比較して、双方が一致する場合、研究もせずに、

（人情二ならず）

と、同一の事が東西で起きることは当然あり得ることだと、そう言うだけなのである。また、

（歴史はくり返す）

であるから、東西で同一の事項がくり返されることは当然ということで、その一致の理由や起源などを、少しも研究しなくて、平気なのである。

要するにこれは愚昧な歴史家が、「人情二ならず」主義と、「歴史はくり返す」主義を楯にとって、同一のものを、二度にも三度にもくり返し使うのみで、研究を進めず、旧態に甘んじているのである。これが「怠惰学者の第二態度」である。

怠惰学者には、まだ他の怠惰がある。それは歴史地理、とくに古典や文学書の中の地理を研究する場合がある。たとえば万葉集の中の地理や、祝詞の中の地理、あるいは古事記の中の地理について、

「それは現在の日本の地理ではない、日本の国土以外のものである」

と私（木村鷹太郎）が証明すると、彼等はすぐ、

「これらは文学書である。地理の書ではない」

と言いすてるだけである。これは怠惰学者にはもっとも都合のいい言葉であって、「文学者はことごとく虚事のものである」という独断が前提にあるのである。これが「怠惰学者の第三の態度」である。

そして彼等は以上三種の怠惰態度によって、私の新研究を邪魔をするのである。

いやしくも学問において新説が出た場合は、それが大学部内から出ようと、民間から出ようと、それを問わず、専門家は必ずこれに対して、検討、考慮、批評を加え、賛成すべきは賛成し、正すべきところを正すのが、当然の仕事である。しかし彼等は問題が起きても不問にし、新説が出ても知らぬ顔で、少しもその職責を果そうとしない。これを怠慢といわなくて、何と言おうぞ。ある人がいみじくも、

「彼等はやらないのではなく、出来ないのだ」

と言ったが、私もまったく同感である。

とくに官学の職にある専門家は、その無知無能を隠すために、

「我々には服務規律があるので、言おうと思っても、言えないのである」

と弁解するのである。ああ、何ということであろうか。

そこで私はロングフェローの次の言葉を彼等に贈ろう

と思う。

世界の廣き戦場に在りて、
人生の陣営にありて、
黙々使役せらるる畜生たることなかれ、
戦闘における英雄となれ

私はかつて万葉集の中の地理について、ある疑問を天下の学界に提出した。またある方面では、名ざしで意見を求めたこともあった。しかし一人として、解答をよこした者はいなかった。これには答える気がないのか、答えることが出来ないのか、あるいは他に理由があるのか、要するに、彼等が学問に対して不誠実であるというそしりを受けるのは免れない。

私はまたかつて、サンスクリット学者が不完全な言葉で、日本の神性を論じたので、これをいさめたことがあった。しかし彼は少しも男性的な態度を示さなかった。

彼等は象牙の塔を金城鉄壁とたのみ、外部から圧迫されると象牙の塔に逃げこんで沈黙を守り、尊大な態度に出るのである。醜くくて、見ていられない。

彼等は私の研究に対して、仲間同志では悪言を言い合っても、すこしも男性的に、学者的に、公明正大に、堂々と、応対することをしないのである。

彼等は自分以下の者には威張り、世間一般の人へはおごり高ぶっている。彼等がもし私の研究に対して沈黙しようと思うのなら、永久に行ってくれて結構である。私は象牙の塔のこの学界を、日本軍が旅順でロシア軍を包囲したように、封鎖してやるだけである。もし殊勝にも彼等の中に、一人でも男性的な態度を示し、私の封鎖を破ろうとする者がいるならば、あわれむべし、彼はマカロフの運命に陥るのである。もし、いつまでも沈黙を守るならば、ステッセルの運命となるであろう。

彼等は好むと好まざるとにかかわらず、はやかれ遅かれ、私、木村鷹太郎の足元に降服するのである。私はあえてこれを断言しておく。

私がこのように帝国大学に攻撃の言葉を向けるのは、大学そのものに何ら恨みがあるわけではない。むしろ私は大学に縁のある者である。それなのに、あえてこのようなことを言うのは、最近の大学の教授たちの頭脳が不良で、学力も低劣で、研究にも不真面目な者が多く、その上不徳義にも、民間の篤実な研究を妨害したり、中傷して、天下に害毒を少なからず流しているのを、心配するからである。もし彼等がその無知無学を自覚し、その生意気な態度を改め、忠実なる研究をするのであれば、私も彼等の味方になるであろう。

このように学問の国家的機関である帝国大学が病にかかっているのに対し、民間には思想健全なる人物が大勢いる。その篤学の士や青年男女の人々は、私の研究に多大の興味を持ち、私の心労をいたわって篤実なる手紙を送ってくれたりする。また直接訪ねてきてくれる者もおり、また面識もない遠方の人が、私の苦労を慰めようと、品物を贈ってくれる者もいる。私はつつしんでこれらの人々に感謝するものである。

本書は上下二巻にまとめ、上巻につづいて下巻も直ちに発行する予定であったが、多少の訂正などのために遅れてしまった。読者の皆様におわびする次第である。

明治四十五年二月十一日紀元節の日
東京淀橋にて　木村鷹太郎　識

第四章　日本太古史目次

本書の目次は次のようになっている。

総論　本書著作の由来と論述の順序
第一編　神話比較
第一章　天地開闢
第二章　おのころ島
第三章　火神迦具土
第四章　伊邪那岐命の黄泉国行き
第五章　伊邪那岐命の禊祓
第六章　天照大御神の御生誕
第七章　尚武護国の天照大御神
第八章　天照大御神の御子
第九章　天照大御神の岩窟隠れ
第十章　須佐之男命の大蛇退治
第十一章　大国主神
第十二章　酒神少名彦名神
第十三章　豊葦原の瑞穂国
第十四章　大国主神は猶太教のヨセフなり
第十五章　国典中の奇蹟とモーゼの奇蹟
第十六章　神典祝詞の世界的価値および猶太関係
第十七章　耶蘇教は酒神ヂオニソス教の変形
第十八章　耶蘇教の美麗なる観念重大なる思想は日本に起原す
第十九章　神話比較結論
第二編　言語の比較
第一章　総論
第二章　神代文字―片假名の起原
第三章　発音および音変化の法則
第四章　言語対照表
第五章　言語比較の例證（一）
第六章　言語比較の例證（二）
第七章　風俗および趣味上の日本とギリシャとの比較
第八章　人種学上宇和島の提供する無類の材料
第九章　言語比較の結論

（以上　上巻）

第三編　歴史および地理（神代地理）

第一章　日本民族太古の歴史地理について
第二章　高天原地理―小アジア
第三章　猶太教および耶蘇教の日本開闢説に有する関係
第四章　国生み地理
第五章　神生み地理
第六章　黄泉国地理
第七章　禊地理―および禊より成りし神々
第八章　宗像三女神の地理
第九章　須佐之男尊に関する歴史地理―および世界二名剣
第十章　大国主神に関する地理
第十一章　少名彦名神と大物主神とトートの神と
第十二章　天孫降臨
第十三章　インドは高天神の垂跡地、釋迦は忍穂耳命の権化
第十四章　神鏡
第十五章　天孫降臨地理―ギリシャ高千穂
第十六章　天孫遊行と鹿葦津姫―三子生誕とギリシャ諸民族
第一七章　彦火々出見命の海神国行―アフリカ北岸東部地理
第一八章　鵜葺草葺不合命―アフリカ北岸西部地理

第四編　歴史および地理（ギリシャ）

第一章　神武天皇の天業恢弘―「ヘラクレーズ族のギリシャ帰来」
第二章　ローマ建国者稲氷命。ピラミッド王御毛入野命
第三章　神武天皇後八代の皇居および皇陵
第四章　崇神天皇の天下結論―宣教使の起原
第五章　エジプトおよびアラビア方面に皇代の延張

第五編　歴史および地理（アラビアおよびエジプト中心）

第一章　崇神天皇アラビアメッカ遷都
第二章　垂仁天皇の纒向―エジプト遷都
第三章　天の日矛および阿利叱智干岐は―天文学者とヒッパーコスおよびアリシタルコスなり
第四章　狭穂姫神話およびその地理―南エジプト
第五章　前鵬程萬里―本牟知別王
第六章　本牟知別王とシェクスピアの「ハムレット」と、バイロンの「海賊」との関係
第七章　景行天皇のギリシャ筑紫の巡狩
第八章　後鵬程萬里―日本武尊東征
第九章　耶蘇紀元は天照大御神のエチオピア伊勢御鎮坐紀年
第十章　経度緯度の起原、およびスダンおよびコンゴーの命名
第十一章　神功皇后の西征―イタリア征伐
第十二章　七曜は日本神名の紀念なること並に日本人と北欧人との関係
第十三章　余論および結論―日本学は世界統一学

（以上　下巻）

以上が目次のすべてで、第一編と第二編が上巻、第三編、第四編、第五編が下巻となっている。それぞれの章には更に多くの小項目が付いているので、全体としては尨大な分量になる。

この項目だけを見ても、本書の内容の大要が推察されるが、このような項目にしたがって日本の太古史が、ギリシャとの関係において、詳細に比較検討され、記述されているのである。それはあたかも、日本列島とギリシャのエーゲ海を重ね合せた壮大な図形の、満天の星座を見る思いであり、読む者を、夢のように日本太古史の恍惚境へと誘いこむのである。

懐郷記

忠内正之

東南海地震と三河地震のW災害

平成二十三年三月十一日、東日本大震災が発生した。三局の震源が一ヶ所に重なり合ってマグニチュード「九」と近来にないスケールとなった。地震のみならず巨大な津波が生じて大きな被害を及ぼした。

剰え原子力発電所の大事故に迄発展して放射線の恐怖にさらされることとなり深刻な事態となっている。

本震より大きな余震は絶体にないと言われるが、その後毎日の様にかなり大きな余震が頻発して、その都度肝を冷やす不味気さに襲われる。

復旧から復興にかけてかなりの年月がかかると思われるが吾々の寿命のある間に片付いて欲しいものである。

私は少年期に郷里で二つの大地震に遭遇した。それは今思い返しても人生初の恐ろしい経験であった。

この二つの地震は戦時真最中の出来事で報道統制下、正確に発表されなかったためあまり知られていない

東海地区の軍需産業や国民生活に与えた影響は甚大であった。この結果敗戦の時期がかなり早まったとも後々言われている。

当時の記憶を辿りながら少年期の思い出と共に述べて見たい。

東南海地震

東南海地震は昭和十九年十二月七日午後に起きた。正確な時刻について同人中山氏に確認をお願いしたところ、午後一時三十五分頃であったと教えて戴いた。

私は旧制中学の二年生、十三才であった。当時は太平洋戦争の山場で極めて緊迫した時代であった。自身も他人に負けない軍国少年だったと自負している。

明日の十二月八日、開戦記念日を期して軍需工場への動員が発令されてをり張り切っていた。

中学では既に戦時体制が敷かれ、土曜日及び日曜日は消されて第一と第三木曜日のみが休日であった。つまり「月月火水木金金」と謳われた世の中の流れに合わせる体制が出来ていた。

その日十二月七日は第一木曜日の貴重な休日であり、明日からの工場動員に備えて休養中であった。

小春日和の日差しの中、昼食を済ませて祖母と親しく中座敷で火鉢を囲んでいた。

突然ガタガタと周辺が揺れ出した。更に揺れが激しくなって来たので、とっさに危険だと判断して火鉢を抱えて急ぎ庭へ出た。そして祖母と二人で庭の眞中にしゃがんだ。白昼であったから、母屋、土蔵、離れがギシギシと大きな音を立てて揺れ動くのをまともに見た。堅固な筈の土蔵までが大きく揺れたので驚ろいた。揺れは横揺れで、かなり長い間揺れ續けた様に思うが実際は短時間であったかも知れない。

これ迄も、小さな地震には度々出合ったがこんなに大きな地震の経験は無かった。一応は治まったものの余震が続いてをり直ちに家の中に戻る気にはなれず暫らく庭に立ち竦んでいた。

まもなくして上手の堤防から「津波だ」という叫び声が聞こえてきた。慌てて飛んで行くと堤防に人だかりがしている。川面を見ると川の水がどんどん退いていく。程なくすっかり干上がって普段は見ることのない眞黒な川底がさらけ出されている。

三十分程たった頃、今度は茶色がかった海水が押し寄せてきた。怒涛の様な勢いの水は4mはあると思われる土手の高さ一杯にまでもり上がった。そして退いたり満ちたりの短期繰り返しが何回も続いたあと漸やく治まった。幸いにして土手の高さを超える迄に至らなかったので事なきを得たが危ないところであった。津波の先端は川の一Km以上先の上流まで逆上ったとの事である。

先刻の揺れの大きい地震はもとより、津波も初めての恐ろしい体験であった。その後更に厳しい局面に逢うことになるが、それは次章に譲らせて戴く。

ここで私の生家の地域環境を説明したい。生家のある吉良町富好新田は、元禄年間に吉良上野介が築いた新田である。矢作川の支流である矢崎川が略二百mの幅で町の中央を流れている。対岸は吉良町吉田である。吉良家断絶後は旗本の相給地となり、後に西尾藩大給松平の支配下となって維新を迎えた。親藩の下にあっておっとりした村落であった。

矢崎川は河川港の役目をなしており三河湾に淡水を注ぎ、上げ潮では海水がたっぷり入る。海運、海苔、漁業、

製塩、観光等の基地として町の発展に寄与していた。

余談となるが、慶応二年（一、八六六年）四月「吉良仁吉」一行は伊勢の荒神山をめがけてこの吉良港から船出したのであった。

私の生家は矢崎川（吉良港）の堤防沿いに立地している。吉良上野介が築いた富好新田（上野介の妻富子が好んだので富好新田と言う）に入殖した一族であった。

矢崎川の流れが注ぐ三河湾は蟹の両手の様な形で知多半島と渥美半島に囲まれた内海であるため、古来より津波の被害は少なかった様である。今回も外海の三重県の尾鷲地区ではかなりの津波被害が生じている。

いずれにせよ、地震及び津波の被害状況は戦時下報道管制がきびしく審かにされなかった。一般国民の戦意喪失を懼れたからと思われる。

後の記録によれば、この東南海地震は、熊野灘の海底を震源とし震源が浅くマグニチュード「八・三」の第一級のものであった。この地震によって発生した津波によって紀伊半島を中心に流出家屋三、〇五九戸の大きな被害が発生した。三重県尾鷲では津波の高さは六米余に達したという。

全体の被害は静岡、愛知、岐阜、三重、大阪など十六府県にまたがり、死者九九八人、住宅全壊は二万六千余に達した。

吉良町では津波の被害は殆んどなかったが、地震によって住宅二七七戸が全壊し、十一名の死者が出た。津波の被害は無かったものの海岸部の塩田ではその時ベカベカと地面が波打ちしてところどころ液状化が生じ海水が噴出する有様はこの世の終わりかと思われる程怖かったという。

私の家の被害は土蔵や離れはかなり揺れたものの健在であった。母屋の方は嘉永年間の建築という古い建物なので（経年約百年ほど）多少傾きが生じ奥座敷の庇が壊われてしまった。なおこの地震による傷みが原因でこの後の余震で倒壊することとなる。

東南海地震が発生した翌日、昭和十九年十二月八日は開戦記念日である。この日が工場動員の初出勤日であった。

動員先は日本ベアリング㈱と言い、芝浦製作所系の中堅企業であった。私が通っていた旧制中学と矢作川を挟んだ対岸近くにあり、東京蒲田から明治村米津（現在の安城市米津）の旧紡績工場を買取って工場疎開をして来た。軍需工場と言っても移転間もないことから生産は未だ軌道に乗っていなかった。

その工場へ百五十名の中学生が入ったことから相当の混乱が生じた様子であった。当時はかなりの軍事補償があったので経営はなんとか保たれていたのであろうが当時の中学生としてはその点迄は考えの及ぶところでは無かった。

確か給料は二十円程度であり、強制貯蓄とされ手許へは全く入らなかった。戦後インフレによって貨幣価値が変ったので、どの様になったか全く記憶がない。尤も入学時の県立中学の月謝は四円七十銭でクラブ費が一円で計五円七十銭であったことから考えると割多く貰った方だとの感がする。

私は班長を命ぜられ級友六名と共に製品検査係を担当することになった。検査係はノギスやマイクロメーターと言った計測器を使っての仕事であり面白かったが、生産が軌道に乗らないため検査する製品が届かず手許無沙汰が続いた。「暇だ」と文句を言ったら中年の課長が大切に保管している模範ゲージを見せてくれた。寸法の原点はここにあるかと大いに参考になった。

やがてその年も暮れて昭和二十年一月の三河地震を迎える日が近づきつつあった。

三河地震

学徒動員で工場勤務となってしばらくは平穏な日々が続いたと思う。工場での作業はそれなりに興味も湧いて面白かった。

その頃は空襲もまだ本格化する迄に至ってなかった。

年も明けた一月の上旬ごろから数度に及ぶ地震が頻発した。前回地震の余震だと思われたが近々のうちに天変地異が起きるのではないかとの流言が伝わって来た。

当地の古刹、正法寺（西三河随一の前方後円墳がある山寺）の住職が言い触らしたと言われる。その内容は「正法寺山から毎日眺める三河湾の島影の位置が地震の前後でズレて見える。これは必ず何か悪い事が続いて起きる前兆に相違ない」と寺の参詣者たちに説教していたらしい。住職は戦時下の治安を紊すものとして警察から厳しく咎められたと聞くが、先の地震のあと、各地で地盤の変化が生じていたと聞くので、住職の眼力の方が正しかったのだと今では認められる。

ところどころで井戸水が涸れたりまた逆に溢れ出したと聞く。

農家の納屋に巣食う鼠は危険に敏感であると言われるが、どちらの家でも鼠の姿は見られなくなった。いち早く避難したのか？

その頃約一ヶ月間に亘って強い北風が吹きまくっていた。所謂伊吹下ろしであるが、例年よりかなり早期の到来であった。

古老によると世の中には雨地震と風地震とがある由。

ふり続く雨の際の地震は地が治まるので心配ないが、風の場合は乾燥して地が陥没し易いので大きな地震になるとか？

この様な内容のことが風評となって広まり人々の不安心を募らせたのである。元来この地区は安政元年（一八五一年）の南海地震の余波を受けて多少の被害があったものの災害の少ない土地である。また気候は温暖で、地味は肥え、物産も豊かで安心して暮らしが出来る地であった筈である。

昭和二十年（敗戦の年）の一月十一日は、月二回の貴重な休日であった。この日朝からドドッという音を伴ってやや大きい地震が数回続いた。三河湾で通例行われている野砲の試射の音かと思ったが、これが次の大地震の前兆であったらしい。

一月十三日早暁、遂に大地震が襲って来た。私は母と一緒に寝ていた。十四才になっていたが、甘えん坊で夜はひとりで寝るのが怖くてここ数日来は母の懐に甘えていた。

夜半に物凄い衝撃があって目が覚めた。これは地震だ、逃げなくてはと飛び起きたとたん足をとられ前にのめりこんで倒れ気を失ってしまったらしい。

母の呼ぶ声に気がついて動こうと思っても身動きが出来ない。何か重い物によって首根っ子を抑えられているのだ。母がしきりに「こちらへ出て来なさい」と呼ぶのだが動けない。ジリジリと首に重力が加わっている様だ。家が潰れてその下敷きになっているのだと悟った。月明かりが差し込んでほの暗い中で少しは周囲が見える。母は無事だったらしい、私のそばに寄って来て私が這い出る隙間を一生懸命に作ってくれている。しかし段々と重圧が増えて出られない。首を抑えているのは天井の鴨居であった。その鴨居を母が持ち上げてくれたのだ。その僅かな隙を潜って漸やく逃れることが出来た。

火事場の馬鹿力というが、母は後でどうしてあの様な力を出すことが出来たかと不思議だと言っていた。

その次は母と二人で天井板その他の障碍物を排除してやっと屋根の上に出ることが出来た。その夜は月夜で明るかった。倒壊した母屋は臥龍の様に大地に横たわっていた。

庭に降り立つと余震がひっきりなしに続いており激しい地面の揺れが素足に響く。ドドッという大音が聞こえる度に東方向の山の端が光る。天と地の極がショートしているのであろうか？この現象はこの後も長く続いて人々の不安を助長した。

当時家に居た家族は四人で、別の部屋で寝ていた父は箪笥の陰で助かり脱出、祖母は倒れなかった離れに寝ていたので無事であった。しかし隣村に嫁いでいた叔母夫婦の家では住居が倒壊し、素早く逃げたが逃げ切れず玄関のところで大きな梁の下敷きとなり夫婦揃って即死するという悲劇となった。

三河地震による被害は、東南海地震同様戦時中のため公表されなかったが、後の吉良町の資料（吉良の歴史、平成四年版）によると次の通りである。

三河地震は東南海地震の三十七日後の昭和二十年一月十三日午前三時半ごろに発生した。震源は三河湾内で震源の深さは約十Kmと浅い直下型の地震で旧幡豆郡（現西尾市）に大被害をもたらした。また三河地震では多くの余震が伴い、本震後三日間で有感地震が一日十回以上も起こり一月中に八十五回も発生した。

このため家を失った人たちは恐怖と寒さにふるえ、しばらくは仮小屋を作って凌いだのである。

三河地震による全体の被害の実情については戦時中のため調査が行き届かず数値がまちまちであるが、大凡、死者二、三〇〇人、家屋の全・半壊二万四千戸と、地震の規模が小さかった割には被害が大きかった。

この理由は東南海地震から僅か三十七日しかたっていなかったため損傷を受けていた家の多くが、三河地震の烈震によって軒を並べて崩壊したためと考えられる。また発生時が未明で人々が就寝中であったため家屋倒壊による圧死者が多かったものと思われる。

吉良町は震源に近かったことに加え河川流域特有の軟かい地盤であったため被害が大きくて町全体で三八一名が死亡し、全半壊した家屋は二四八七戸と全戸の約六〇%に及んだ。震度は「七」で地区の最高をマークした。

また三河地震では著しい地殻変動が見られた。三河湾岸の隆起、沈降とともに地震断層が出現した。三河地震断層は二本からなっており最大二mの高低差が生じた。

近隣の幸田町西深溝地区には延々一Kmに亘って断層の跡が残っている。

戦後になり三河地区に新しい温泉地が出現している。吉良、西浦、形原温泉である。地震による、地殻変動の皮肉な恩恵であろうか？

エピソードを一つ書いておきたい。

その頃吉良町一帯も本土決戦に備え陣地が構築された。昭和十九年十二月鳥取第四部隊が陣地設営のためこの付近一帯の寺院に駐屯していた。そのうちの一個小隊は激震地近くの寺に分駐しており、神戸、明石、赤穂出身の人達が多く居た。吉良の人々は一ヶ月後の三河地震に被災した折、多くの人達が彼等の献身努力によって救助されたのである。戦後このことが美挙として報道され、かつて忠臣蔵で敵対した蟠りを

解消して和解する一因となったのである。

震災直後のことはあまり記憶が定かではない。家が倒壊した時頭を打った故か？また地震のショックが強く影響した故か？打たなければ私の頭脳はもう少し冴えていたかも知れない。

少し落ちついてから工場へ出勤したと思う。工場は後の地震で殆ど全壊してしまい、当分の間は跡片付けが中心であった。仮小屋を急遽造っての操業開始までに数カ月はかかったと思う。

政府は戦意の喪失を恐れてか、東南海地震の時と同様、「地震の被害は軽微、戦意は益々高揚」と発表した。

各地の被害は甚大であったが、復旧は割合と手際よく軍事最優先で極秘のうちに実行されていた。矢作川にかかる旧米津橋は地震で半壊して通行不能となったが、改築中の橋脚を器用に活用し短期間に木製の橋を架橋して幹線道路の軍事物資の輸送に備えた。また深溝断層でストップした名鉄線も短期間で開通した。

このため大きな被害が生じたにも拘らず、人心は安定し落ち着きを取戻した。しかし東海地区の軍需工場の生産力は二度に亘る大地震の影響を受けて大きく阻害され戦局の不利を更に招く結果となった。

私はこの時思った。天佑神助は必らずあると信じ込んでいた。弘安の役では元軍十万が襲来し筑前、長門を侵す時大風雨が起こり、敵軍を一夜にして悉く屠り去ったという、事実があったとして教育されていたのである。

戦況不利な折、また開戦記念日前後の記念すべき時期になぜ天佑神助はマイナスに働くのか？子供心に不信の念をひそかに持ち始めていた。こんな事があってもよいものか？。これでは日本はどうなるのか。負けることは無いであろうが勝つことも出来ないなと思った。

東京大空襲があった翌々日の三月十一日深夜、名古屋市街中心部が焼夷弾による無差別空襲を受けた。燃え上がる名古屋の空が遠くから赤く見え、翌朝の青空には折からの季節風で南東に流れる巾広い煙の帯が見られた。

名古屋から五十Kmは離れている当地にも燃えカスや灰が飛んできた。空襲による火事の凄さを見せつけられた。

その後当地区にも空襲が激しくなり、動員中の工場で、グラマンの機銃掃射を何度も受け恐ろしい経験を重ねることとなったが、幸い級友たちに犠牲者は出なかった。

やがて終戦、中学校へ復帰した時、三年生の夏であった。戦後の混乱や価値観の変化は少年の思考形態を大きく変えた。この時私の少年期は完全に終ったと思う。同時に自由と解放感が怠惰の心を定着化させてしまった様だ。

二年後の春上京することが出来た。以来六十余年になる。以降故郷吉良へは時たま帰省するだけの立場となった。しかし瞬時と雖も懐郷の念を忘れたことは無い。

地震・雷・火事・親父と恐ろしい事柄の代名詞は続く。更に空襲をつけ加えたいと思うがなんと言っても地震の恐ろしさがトップであろう。事前の防備に限界があるからであり、また津波等を伴うエネルギーが莫大であるからと思う。私は改めて母のお陰で救われたことを感謝している。その母は十二年前九十五才で天寿を全うした。

わが故郷吉良町はその後昭和二十八年九月に十三号台風、昭和三十四年九月に伊勢湾台風に襲われ、いずれも台風の上陸地点となり多くの死者と家屋の破壊や流出で大きな被害を生じたのである。

就職して東京で働いていた私は直接の被害に遇わなかったが、連絡を受けて心を痛め、二度とも早速見舞いにかけつけたが、台風による高潮の被害もまた厳しいものであった。

三陸の津波による被害の残酷さは、これ以上だと想像するに難くない。心ばかりの募金に応じた次第である。

時たま帰郷すると未だに地震や風水害の跡が残り整然としていた町並は昔の面影は無い。白砂青松の美しかった海岸線は、鉄筋コンクリートの壁の長城となり風情がすっかり無くなってしまった。

唯、相変らず三河湾の海の色はあく迄も青く美しく澄んでおり、東南部の山並は「青鳥山」の名称の通り昔の侭の優美な姿で緑を装っている。そして疲れた心を和ませてくれるのである。

東京では一、九二三年（大正十二年）九月、関東大震災が発生して大きな被害が生じている。

六十年が地震の周期だといわれるが、以来略九十年が無事に過ぎている。従って貯まりにたまったエネルギーが何時暴発しても可笑しくない。

「天災は忘れた頃にやって来る」とは寺田寅彦の名言である。関東大震災の再来は必らず近々あるものと覚悟し、充分な対応に心掛けなければならない。

イドと超自我の谷間（一）

鍋屋次郎

一　老人ホーム

神奈川県三浦半島先端の丘陵地に建つ有料老人ホーム「聴涛園」の庭からは、左に房総半島、南は静かな海がどこまでも続き、右には霊峰富士山が見える。

庭の中央の四阿に腰を下ろしている三条絢に、看護師の金井千紗が

「三条さん、ここがお好きですね。お天気がよい日はいつもここにいらっしゃる」

と言いながら近づいてきた。

「そう、ここでね、私の九十年の人生を見つめていると、神様が、人生の一駒ひとこまを清めてくれているような感じがして、何か良く分からないけど安心できるの」

「あら、三条さんのような素敵な、私などが憧れてしまうおばあちゃまには、清めるような人生なんてあるわけないでしょ」

と言って、金井千紗は三条絢の肩にそっと手を置いて、

「ほんとにここからの眺めはいいですね」

と言って、二人は暫くの間景色を眺めていた。

翌日午前九時半、絢の部屋の扉がノックされた。

「どなた？」

「はい、事務長の佐々木です」

「どうぞ、お入り下さい」

入ってきた事務長は、一礼してから

「今、M市の市長室から電話があり、『明日の午前十一時に市長がご挨拶にお伺いしたい』とのことですが、いかがいたしましょうか」

「あ、そう。では『お待ちしています』と返事をしておいてください」

「そうですか。有り難うございます。宜しく御願いします」

丁度このとき、ドアのノックとともに事務職員がお茶を持ってきた。

絢は話題を変えてとりとめもない話をして、一段落したとき、市長は

「施設の名前ですが『三条記念ホーム』と名付けたいのですが如何でしょうか」

と切り出した。名前を付けないと、これから進めて行く仕事上呼び名がなくて困るという。絢は

「暫く考えさせてください」

と一週間程度の余裕をもらい、後は雑談の後、市長は帰っていった。

日曜日朝九時半、事務室に連絡して、絢がよく頼んでいる個人タクシーを呼んで貰った。行く先はプロテスタントのMキリスト教会。

この教派は、教義の全てが聖書に基づいていて、ルターやカルバンの教義を信奉している。絢はこの教会の信仰が理屈っぽすぎるのが不満であったが、ここの老人ホームに来てからは、タクシーでもワンメーターで行けるので、その教会に通っていた。

その教会の牧師は

「分かりました。でも、何用なのでしょうね」

「それは私にも分からないわ」

絢には市長の来訪意図は分かっていた。事務長から聴涛園の来客用応接室の使用を奨められたが、だれも同席できないように自室に案内して貰うことを内心決めていた。

翌朝、市長は事務長に案内されて、絢の部屋に訪ねてきた。

「三条さん、いつもお元気で良いですね。お変わりありませんか」

「はい。特に悪いところもなく、このように元気です。神様か仏様か知りませんが、まだこの世にいるように、と言うことなのでしょうね。でも、記憶力が悪くなり直ぐ忘れるのですよ」

「三条さん、健忘症は長生きする、と言われていますからご心配なく」

の市長の一言に二人は声を出して笑った。

やがて市長は

「三条さん、半年前にご寄付頂いた二十億円の使い道ですが、三条さんのご意向に従い、百五十人収容の全室個室型特別養護老人ホーム一棟と、十八人収容の認知症対応型グループホーム三棟を造らせて頂くことに、市議会で決まりましたのでその報告に伺いました」

「死者を拝んではならない。話し掛けてはいけない。死者は神様の許にいるのだから死者のために祈ってはならない。葬式のときに花を献じてはならないが、死者を花で飾ることは許される」

と言う。そして

「罪の赦しは神だけができる」

もので、昔のローマ・カトリックの「免罪符」は人間の奢りと神に対する越権行為で、あってはならないことという。

絢にはどうしても謝るか、聞いて欲しい死者がいた。死後の世界は絢には全く分からない。

日本人の神社へのお参りは、健康・商売繁盛・合格祈願などの自分の現世的御利益を求めている。仏教のことは良く分からないが、あの世での自分自身の成仏を願っているのではなかろうか、と思っている。

教会の礼拝が終わった後、牧師が

「三条さん、お茶でもいかがですか」

と声をかけてきたので、礼拝堂奥の牧師室に入っていった。

絢は

「先生、質問してもいいですか」

と言って、牧師が頷くと

「先生、神様は全ての造物主ですよね。神様の御心がなければ、一羽の雀も落ちることはないですよね。そうすると、三月十一日の東日本大震災も神様の御心なのですか。二万人近い人が津波で苦しんで亡くなり、数えられない人が家族や家も土地も家財も職業も失っているのですよ。先生、私たちは被災した人達が立ち上がることが出来るように祈っていますが、心の中では神様は何故このような酷いことをなさるのですか、と神様を責めたくなります」

「そして、一寸話が変わりますが、先生は死者に声をかけてはいけない、と教えていますが、どうしても死者にお詫びしたいときはどうすれば良いのですか」

牧師は黙って聞いていたが

「三条さん、そのご質問には説明しながら答える時間が必要です。今ここで一言でお答えできる内容ではありません。明後日の火曜日午後、何時でも良いですから教会に来て頂けますか」

と言ったとき、教会の役員が牧師を呼びに来たので、絢との会話はここで終わった。

二　満州で

昭和十五年三月、加賀大造は陸軍の命を受け、妻しげ、娘の京子、女中のアヤと、日本人従業員八名を連れて満州国奉天に渡った。陸軍の軍服、ゲートル、下着など、満州に駐留する日本兵が着る全ての繊維製品を陸軍に納入していた。

日本が民間人を満州開拓団として満州に送り込み、陸軍も支那戦線の拡大に伴い、兵士を大量に支那・満州に送り込む必要から、国内で陸軍に納入している繊維製品専門業者を現地に駐在させる必要があった。

加賀大造は奉天に着いてから陸軍が接収した土地に大きな倉庫を造り、軍が現地人から接収した大きな屋敷に住み、昭和十八年暮れ頃までは納品と在庫調達に忙しかった。しかし、昭和十九年に入り、第二次世界大戦での南・西太平洋での戦局が悪化するとともに、満州国駐留部隊を次々と南・西太平洋諸島に送ったので、満州に駐留する日本兵士は極度に少なくなった。

妻しげは女中のアヤに指図しながら、炊事、洗濯、掃除、湯沸かし、暖房などの家の中のことを現地の若者を使ってやっていた。現地人従業員に対して厳しい規律をもうけていた。例えば命令したことが出来なかった場合はサボタージュの罰として夕食を与えないとか、寒い地域では厳しい罰であった。

ところが昭和十九年一月、風邪を引いたのが原因で肺炎を併発しあっけなく亡くなってしまった。

大造は困ったが、二十一歳になる娘京子が家の中を取り仕切ることとした。京子は若いだけに現地人従業員に対して情け容赦なく厳しく対処していた。

女中アヤは京子と同じ年齢で、昭和十年に小学校卒業と同時に十二歳で加賀家に住み込み女中奉公に入った。家は和服縫製の下職で貧しく、母と妹の三人家族だった。アヤは頭の良い子で、家事を始め大造の頼んだことに関しても飲み込みが早く、本人の希望もあって、大造夫妻は、女学校に通い始めた京子の使い古した教科書で勉強することを許していた。

満州に行くときも、外地で京子の支えになればとの思いで、アヤの母親の了解を得て連れてきた。

アヤは台所の一切を任されていたので、現地人使用人が京子に叱られて夕食を与えられず、空腹と寒さに耐えていたときなど、京子には内緒でそっとおにぎりや温かい饅頭などを与えていた。

中でも周華明は青白い顔をした神経質な青年で、口答えが多かったので、京子に良く叱られていた。大造が

「解雇すると新たに付ける職はない。解雇だけはするな」

と京子に命じていたので、解雇だけは免れていた。

昭和二十年の一月、大造は陸軍の物資調達調査で軍の担当者と朝鮮の京城まで行くこととなった。支那派遣軍

への物資供給方法の検討が本当の目的であったので、出張は機密扱いとなっていた。

大造はこの用向きを内々陸軍当局から知らされていたが、家族に言うわけにも行かない。

それよりもむしろ太平洋上での戦局が思わしくなく、どのようにしてこの戦争を終わらせるのかについて疑念を抱いていた。それと満州での兵員削減から、満州国内の反日運動が顕在化しつつあって治安悪化も懸念していた。

出発を前に京子とアヤに対して

「加賀家の全財産は、旭東銀行本店の貸金庫に入っている。今日はその鍵を京子に預ける。不動産関係の権利書の全てと当座必要なお金を預けた預金通帳、それに金塊が入っている。金塊は戦局が悪くなると貨幣価値が下がり品物はなくなって物価が騰がるので、現金・株券は昨年全て金に替えた。住まいは東京の自宅の他に、軽井沢と鎌倉に別邸がある。その鍵も貸金庫に入っている。予備鍵はここに持っているのでそれを京子に渡しておこう。おそらく東京の本宅はもう空襲で焼失しているだろう。軽井沢と鎌倉は空襲に遭っていない」

ここまで言って

「京子、もしもお父さんが死ぬことがあっても、この書類は絶対になくすことなく、日本に帰ってから弁護士の所に行きなさい。そうだ、アヤ、そのときはお前が一緒に行きなさい」

「今から言うことをアヤは書き留めなさい」

と言って、京子が大造から全財産を相続するための必要書類、つまり大造の相続人は京子しかいないことを証明する文書としての大造の出生から記載した戸籍謄本、大造と京子の印鑑証明書、住民票・実印などを京子に説明して渡した。驚いたことに、大造、京子、アヤの住民票は東京の本宅のままになっている。軍の命令で満州に移動させていなかった。

アヤはそれらの説明を全て書き取って、大造に目を通してもらった。

大造が留守ということは日本人の従業員にも伝えず、まして現地人使用人には伝えてなかった。京子は相変わらず現地人使用人には厳しかった。その陰でアヤは現地人使用人の空腹を助けていたので、彼らはアヤの作業、水汲みや石炭運搬など気持ちよく手伝っていた。

二月五日、陸軍省奉天駐在武官から京子に呼び出しがあった。心配のためアヤも同道した。

少尉の襟章をつけた軍人が

「驚かないでください。お父様は去る一月三十一日夜半、朝鮮京城へ向かう途中、匪賊の襲撃に遭遇し、三台の軍用トラックで戦ったが、三台のトラックは燃えてお父様と軍人六名が戦死しました。お父様は天皇陛下の御為に名誉ある戦死をなさいました」

更に続けて

「ご遺体の収容に向けての対応は関東軍が行います。しかし、匪賊討伐のための兵員準備となりますので、軍全体的な観点から今すぐはできかねています。軍から本籍地へ死亡届は送付しました」

と、冷たい言葉であった。

軍服など納入事務は、番頭格の日本人従業員が大造に代わって行ったが、既に仕事らしい仕事はなく、現地召集兵の需要程度であった。

三　敗戦

昭和二十年八月十五日、終戦の詔勅により敗戦が知らされた。今の今まで酷使していた現地人との関係は一変した。当初八人いた日本人従業員も、仕事が少なくなるとともに順次現地召集を受け、今は三人になっていたが、倉庫と住まいは彼らが警備し、出入り口は厳重に施錠した。

現地人使用人には今月の賃金に少し加算して解雇した。内地への帰還のため陸軍の奉天駐在武官を尋ねたが、武装解除と撤兵の準備で内部は混乱している。民間人の帰国援護まで今すぐ手がまわるかどうかわからない。

加賀商店としは陸軍相手の商いは既にゼロに等しくなっていたので、回収しなければならない売掛金もない。倉庫にある少しばかりの在庫は、放置することとした。

京子とアヤは、日本人従業員と日本に帰る準備を始めたが、先ず鉄道がどうなっているのか分からない。京子が日本に持ち帰りたい荷物もあるので、営業用のトラックに荷物を載せ、トラックと自家用車に五人が分乗して朝鮮の京城まで行くこととした。

八月二十五日、いよいよ日本へ帰る日の朝、嗅覚が鋭いのか周華明がやってきた。青白い顔面から鋭さを感じたアヤは、出発間際のトラブルを避けるため納屋に連れて行き、京子には内緒で余った米と味噌を渡した。周華明は加賀家の動静を全て察知して帰った。

その日の夜遅く、京子とアヤの荷物をトラックに載せて二人の従業員に先行させ、京子とアヤは番頭格の松尾の運転で、自家用車でその後に続いた。京子は父親から渡された重要書類を膝の上にしっかり抱え、道中必要になると思われる現金も持っていた。

砂塵を巻き上げて十里くらい走ったところで、反対車

線から大きなトラックがこちらの車線に斜めに入って来た。松尾は急停車したが軽い接触は免れなかった。

トラックから降りてきたのは五人の現地人。全員拳銃を持っている。暗くて顔は見えない。運転席を降りた松尾が、流暢な支那語で話したが、相手のトラックに連行され姿が見えなくなった。

背の高い男が運転席の後ろに座っていた京子に、窓越しに「降りろ」と手真似で言っている。観念した京子は、膝の上にしっかりと持っていた袋をアヤに渡して車から降りた。

降りるときに、アヤに

「私に何かあっても、この荷物を持って日本に帰っていて。そのうち追いかけてゆくから」

と口早に囁いた。

たまに通りかかるトラックや自家用車はあるが、だれも現地人とのトラブルを避けて、見ないふりをして朝鮮京城方面を目指して走り去ってゆく。

京子が連れ去られて、既に一時間くらい経ったが誰も戻ってこない。不安は高まってゆくが、自動車から降りるわけには行かない。自動車の中でじっとして、暗がりから誰か来ないかと目を凝らしていた。

そのとき拳銃の発射音がした。音から判断すると余り遠くない。

暗闇から、京子を連れて行った背の高い男が現れた。

アヤは

「京子さんは？」

と聞きただすと

「死んだ」

と一言、言った。

「殺したのね」

と詰問すると

「日本に帰すなと頼まれていたからね」

男達が全員戻ってきた。アヤは

「死体はどこにあるの。ひと目お別れを言わして」

と、背の高い男に頼んだ。

男同士で何か相談していたが、

「分かったよ、ついてきな」

と言って、男達全員が暗闇の中に歩きだした。後をついて行くと、男が指差す闇の中の草の上に人間が横たわっている。目を凝らして見ると、着ていた衣類がその上に掛けてある。近づいて京子であることを確認してから衣類をとると、全裸で、陵辱されたことは明らか。陵辱の後こめかみを拳銃で撃たれたのだろう、頭部の下の草が血で黒くなっている。

アヤは見ていることに耐えられず、そこに蹲った。立ち上がることもできない。

背の高い男がアヤの肩をこづき

「行くぞ」

と言ったので気を取り直して立ち上がり

「どうしてこんな酷いことをするの」

と言うと、

「ある男に頼まれたのさ。この女は支那人を動物以下に扱っていたから、日本に帰れないようにしたまでだ。当然の報いだ」

と言って後ろを向いて歩きだした。

アヤは、まだ温もりが残っている京子の死体に衣類を丁寧に掛けながら、ポケットにある物を全て取り出し、髪の毛を一握り切り取って、ハンカチに包んだ。

車に戻ると背の高い男が

「あんたを日本行きの密航船が出るところまで送る。これも頼まれたから俺たちはその約束を果たす。今、朝鮮の釜山まであんた一人で行くことは困難だ。その密航船は日本で解放された支那人を連れに行く舟だ。ただ、その船内では一人の日本人の男が一緒だ。心配ない。その男はあんたと同じように、我々支那人に親切にしてくれたお礼として日本に送るのだ。日本の着くところは島根県の小島だ」

「松尾さんは」

とアヤが聞くと

「心配するな。あんたが行ってから解放するから」

と言って、若い男二人に、アヤが乗ってきた自動車を運転させた。

アヤは抵抗することもできず、男の言葉に黙って従うしかなかった。途中で殺されることも覚悟して黙って乗っていた。朝になり外の景色が見えるようになったが、朝鮮京城へ向かう道から外れているのか、行き交う車は全くない。

昼頃、どこか知らない港に着いた。そう大きくはないが五～六十人は乗れそうな蒸気船がいた。アヤには此処が何という港かは知る由もない。岸壁から少し離れたところに倉庫のような建物と、数軒の人家があるが人影は全くない。

風もなく静かな海が目の前に広がっている。

船に乗ると、船室に一人の日本人男性が座っていた。年の頃は四十台か。お互いに軽く会釈を交わした。

アヤの乗船を待っていたように舟が動き出した。

船室内で男性は「自分はキリスト教の牧師で田中といいます」と名乗った。アヤは「小林アヤ」です、とのみ

答えて後はずっと沈黙、と言うよりも昨夜来の精神的ショックで、背中を壁にもたせて目を閉じているのが精一杯だった。京子のあまりにも無惨な姿が脳裏から離れない。涙は止めどもなく流れてくる。京子は陵辱を覚悟してついていったのかも分からない。だから、大切な書類をアヤに渡すときに「後で帰るから持っていて」と言ったのだ。何を犠牲にしても日本に帰りたかったはずだ。いや、帰るはずだった。被害を受けた一部の支那人の最も厳しい報復は日本に帰らせないことだった。虐殺された民族が、明日は虐殺した民族を虐殺する。敗戦国民の惨めさを痛感していた。空腹の筈が空腹を感じていなかった。

牧師と名乗った男性は、心配そうにアヤを見つめ、袋から饅頭を一つ取り出しアヤに渡した。

四　葛藤（一）

海は静かで、舟は島根県沖の小島に停泊し、そこで小さなボートに乗り移って本土に上陸した。

その小島について本土を目の前にしたとき、懐かしい樹木や山の姿を見て「やっと帰ってきた」という実感と、「たった一人になってしまったことへの不安」が心中で交錯し、何も考えられなかった。

田中と名乗ったキリスト教の牧師とは松江駅で別れた。兎に角東京へ行って、自分の母親と妹を捜し、それから加賀家の家屋敷を確認することとした。

松江駅から東京行夜行列車に乗って、乗り継ぎ乗り継ぎの連続で三日後に漸く軽井沢の別邸に着いた。車窓から見る限り東京は焼け野が原だった。焼け残ったビルはあるが、木造家屋は全く見当たらない。

本所の裏手の小さな借家に住んでいた母と妹を捜すにしても、先ず自分の落ち着き場所を確保しなければならない。

軽井沢の別邸は、地元の人が庭・植木を管理してくれているので、永年人が住んでいなかったとはとても思えないほど庭の清掃は行き届いていた。

裏口の木戸を開け、台所の裏手に母屋から独立して建っている女中部屋に行き、鍵を開けて入り、窓を開けて新鮮な空気をいれると、懐かしい我が家に戻った気がする。

そのあと、母屋と地下室を見回り、異状のないことと、加賀家で常に用意していた非常用の未開封の米・味噌樽・醤油樽などの保存を地下室で確認して、女中部屋に戻り布団の中に体を横たえた。

目を閉じると、京子の最後の姿が目に浮かぶ。きっと恐ろしかったろう。悔しかったろう。京子のことだから立ち向かったかもしれない。アヤが知る限りでは処女の筈だ。アヤは体は疲れ切っているにもかかわらず寝付かれなかった。

朝、起きて最初に思ったことは、この屋敷には主がいないということだった。

京子から渡された袋の中身をすべてを出して部屋に広げた。

加賀大造が説明しながら京子に渡した相続関係の書類と、旭東銀行の貸金庫の鍵、本宅、軽井沢と鎌倉別邸の鍵と、京子が入れたのか百円札の百枚束が三つ入っていた。

アヤの頭の中は、本所にいる筈の母親と妹を探すことが最優先で、京子から預かった加賀家の財産は全くの他人事としか考えていなかった。

その日の午後、格子状の門扉の外から屋敷内を伺っている男性を見つけた。その男性もアヤを見つけ、アヤを手招きした。

門の鍵はかけたまま内側から

「どなた様でしょうか」

と聞くと

「ここは加賀さんのお屋敷ですね。加賀さんはいらっしゃいますか」

との問いに

「私は一足先に満州から引き揚げてきた使用人です。ご主人様とお嬢様の引き揚げはいつになるか分かりません。貴方様はどのような方で？」

と、二人の死亡は咄嗟に伏せて逆に尋ねた。

「私は加賀さんが陸軍省からご用命を受けるにあたって、準備金を半分出資した五代兼義といいます。利益も折半という約束だったので、出資金の返還と利益折半の履行をお願いに来ました」

続けて

「まだご帰国でないのであれば仕方がありません。帰国されたらこの名刺を渡してください。ご返事次第で財産の差押えも行います、とも伝言して下さい」

と格子越しに言って帰って行った。

その夜、アヤは今まで全く知らなかった加賀大造の姿、というか実像に不安を覚え、大造の全財産を一日も早く京子の名義にして資産の安全を図る必要を考えていた。

でも京子はこの世に既に実在しない。どうすればいいのか。このままほっといて、この別邸も荒れ放題にして

しまうか。

明け方近く少しまどろみ、本所へ母と妹を捜しながら、墨田区役所に加賀大造が亡くなっている戸籍上の確認と、加賀京子の住民票や印鑑証明書をとるために、朝早く軽井沢を発った。

本所界隈は焼け跡に小さな物置のようなバラックが点在する程度で、母と住んでいたと思われる場所に行ったが、何もなかった。すれ違う人も殆どなく、たまにすれ違っても見知らない人ばかりだった。区役所の「尋ね人掲示板」も見たが、母が自分を尋ねる記載はなかった。アヤは母を尋ねる記載をしようとしたが、自分の居所が定まっていないので、書くわけには行かなかった。

いつの間にか数人の浮浪児集団がアヤの回りに集まってきていた。持っている鞄に目をつけている様子なので、足早に墨田区役所内に入り、加賀京子本人になりすまして京子の戸籍謄本と住民票・印鑑証明を取った。戸籍謄本には加賀大造は「昭和二十年一月三十一日満州で死亡」と記載されていた。

京子の現住所は、加賀大造が言っていたとおり墨田区本所の旧本宅のままで、満州への転居手続はとられていなかった。

その足で東京駅から鎌倉へ。鎌倉は東京と違って闇屋や浮浪児の姿はなく、静かで落ち着いていた。鎌倉駅から江ノ電で長谷まで行き、前田侯爵別邸を左に見て少し坂を登ってゆくと、門の左右が垣根に囲まれた和風二階建ての、いかにも「別荘」を感じさせる建物についた。長谷駅からはすれ違う人も少なかったが、周囲の垣根と屋敷内の緑、庶民とは縁遠い感じの邸宅などが、どこかよそよそしくお高くとまっている鎌倉には、冷ややかな他人を感じていた。また、アヤが着ている洋服のみすぼらしさからの気後れもあった。

裏口木戸を開けてそっと屋敷内に入り、勝手口から家の中に入って雨戸を一枚開けて座敷内を見たが、満州に出掛けるときの状態のままだった。

その日、軽井沢駅に戻ったのは夜の十時過ぎだった。

アヤの胸中には、加賀大造の共同出資者と名乗る男の言ったことが気にかかり、大造の残した財産を戸籍上生きている京子の名義にしておかないと、という思いがアヤをなかなか眠らさなかった。

翌朝、アヤは京子のタンスの中から和服を取り出し、それを着て東京日本橋の旭東銀行本店に入った。ビルの中は壁も床も大理石で、今までアヤが感じたことのない、

庶民を相手にしないような傲慢な冷やかさを感じた。

意を決して受付の女性に

「お取引いただいている加賀大造の娘の加賀京子と申します。父が亡くなりましたのでその手続きに参りました」

と伝えると、暫くして三階の応接室に案内された。

五十歳くらいの小柄でやせ形の男性が

「総務課長の丸山です。加賀様がお亡くなりになられたとのこと。お悔やみ申し上げます」

と言ってから、持参した戸籍謄本、住民票、印鑑証明書を丹念にチェックした後

「相続人はお嬢様しかいませんね。分かりました。お父様の普通預金口座と貸金庫の名義を変更しましょう」

と言ってから手続きを取ってくれたが、必要なこと以外一切口にしない丸山の態度にほっとしていたが、手続きには二時間近くを要した。

その間、不思議と自分が京子ではないことの後ろめたさや不安は覚えなかった。

普通預金の残高は二万円余りあり、新たに貰った鍵で貸金庫を開けると、本宅、赤坂の事業所、軽井沢・鎌倉の別邸の土地建物の権利書、旭東デパート貴金属売り場の刻印のある一キログラムの金塊二十五個が入っていた。

翌日再び旭東銀行本店に丸山総務課長を訪ね、不動産の相続による名義変更手続きを依頼すると、旭東銀行信託部の担当者を紹介され、一切の手続きをお願いし、半月もかからないうちに、全ての不動産は京子名義になり、それら全ての権利書を京子名義の貸金庫にしまった。

その夜は雷鳴と同時に窓から入る稲妻と、屋根を叩く激しい雨音に怯えながらも、加賀大造に万一負債があっても、既に全財産を京子の名義にして一仕事を済ませた開放感から、東京駅で今日初めて「雷おこし」を買ってきて、夜のおやつに食べた。アヤにとっては初めてのささやかな贅沢だった。

未明、アヤは怯えたように飛び起きた。電気を点けて、布団の上に座った。衣紋掛けに掛けてある昨日旭東銀行に着ていった着物を見ながら

「自分が今までやってきたことは正しかったのだろうか。加賀大造の全財産をただ一人の相続人である加賀京子の名義にした。そして全財産の安全だけを考えて、その方法以外はないと確信して何の疑いもなく手続をしてきた」

「そのために自分が京子になりすまして手続をとった。ただ、ひたすら京子の継ぐべき財産の安全を図るために」

「手続をとった、この世での京子は誰？　私アヤだ！」

「すると、京子名義の全財産を自由にできるのはアヤ一人！」
「そんな目的でやったのではない！　絶対にない！」
「全財産を横取りするつもりでやったのだ！と責められたら、違うと言える証拠はある？」
「ない！」
「アヤ！　貴女は全財産を自分の物にするために京子の着物を着て、京子になりすまして旭東銀行の人を騙したんじゃないの」
「絶対違う！」
アヤの自問自答は、同じ所を何度も繰り返し
「たとえ一部でも自分の物にすると言うような思いは全くなかったし、今後もない」
と自分で自分に言い聞かせて立ち上がった。もう眠れなかった。

今日の未明までは、加賀大造の全財産を守らなければ！という一心で、自分のやっていることを第三者的に考える余裕は全くなかった。
今日未明、突然に、これを客観的に見た場合について気がついた。というより突然ひらめいた。

朝食後、昨夜の強烈な風と雷雨で折れた木の小枝が庭に散乱しているので、それを片付けながらも、アヤのこれからの生き方を考えていた。
京子名義の財産を守るときは、アヤは加賀京子でなければならない。それ以外の時は小林アヤでいる。
東京本所界隈と軽井沢の人達は、女中時代のアヤを知っているからそこでは小林アヤでなければならない。
すると、一人二役？　そんなことはとてもできない。

一切の財産を貸金庫に入れたまま放置したらどうなるか。死んでいた京子が手続きをとっていたことが分かるだろうか？。でも、京子が死んだことは誰も知らない。永久に所在不明となる。貸金庫内の財産の帰属はどうなるのだろうか。

続く

関東管領始末記③

雌伏の長い隧道

千坂精一

一

鎌倉幕府六代将軍宗尊親王が北條一門の名越教時と結託して執権の得宗家を倒そうと企んでいるとの風評が立ち、執権北條政村、連署北條時宗、評定衆金澤實時、安達泰盛の合意によって宗尊将軍が廃位され京へ強制送還されたとき、第一皇子惟康親王は三歳の若宮だった。
ある日、突然父宗尊将軍や母御息所宰子、妹君掄子らと離されて御所から連署時宗邸に移された。なにが起こったのか側役上杉重房はなにも説明してくれなかった。
将軍職を剝奪された宗尊親王は、家族たちとの訣別の対面も許されずに京に送還されてしまったのだった。
上杉重房は、宗尊親王の側近とはいっても飾り物の名目将軍付では幕政への参加もならず、無位無官の退屈な存在であったが、そのぶん傍観者の立場にあったので外部から幕府首脳の動きを凝っと見詰めつづけてきていた。
こんどの、
〈宗尊将軍排除〉
の理由などは、まったくのでっちあげであった。
得宗家打倒を企む名越教時と共同謀議したとはまったくの捏造であり、教時ほどの野心家が非力な傀儡将軍などを当てにして蹶起などするはずはなかった。
得宗家は、名越教時を牽制すると同時に、宗尊将軍も排除しようとする意図があったのであろう。
その思惑とは、いったいなんなのか。
上杉重房は、あれこれ思案をめぐらしてみた。
このとき、次の執権になる時宗は十六歳であった。

（そうか、そうだったのか）

いかに将軍が飾り物にすぎないとはいえ、執権が年下では軽んじられ侮られる虞があった。

執権は傀儡将軍に見縊られるようなことがあってはならないのだ。

時宗が執権になったとき、将軍が九歳年長では、〈長幼の序〉が邪魔になる。

だから幕府は、近々執権に就任する時宗のために宗尊将軍を排除することにしたのだと上杉重房は確信した。

重房の読みどおり、宗尊親王が京に送還されてわずか二十日後に三歳の惟康親王に将軍宣下があって従四位下に叙せられた。ことは計画どおりにすすめられた。

惟康親王は父君同様傀儡の宿命を負って就任した。

二年後に執権の政村が連署に、連署の時宗が執権に交替して、時頼以来二代の中継ぎを経て得宗家に戻った。

惟康親王は、将軍になって四年後に源姓を賜り、従三位左近衛中将に補されると、翌年は尾張権守、さらにその翌年は従二位に叙された。

二年後の八月一日に前将軍宗尊親王が薨去された。

その年文永十一年（一二七四）十月、突然元・高麗連合軍が九百艘の軍船を仕立てて五日に對馬、壹岐、二十日に筑前博多に来襲してきた。不意の外寇に九州を統轄している幕府の出先機関九州探題は慌てた。

ただちに鎮西奉行少貳經資、大友頼康のもとに御家人菊池氏らが郎党を率いて参集し、迎撃態勢を布いた。

だが、いざ戦闘となるとはじめてわかったことなのだが、敵の戦法はまったくちがっているのに途惑った。

こちらはまず古式に則り、鏑矢を射って合戦の合図をしておいてから、一騎ずつ敵前に進み出ておもむろに名告りをあげて一騎打ちにとりかかるのだが、元・高麗連合軍のほうは個人戦ではなく集団戦法であった。

太鼓や銅鑼を打ち鳴らして関をつくるので、こちらの武者の乗馬が驚いて立ち止まってしまうのである。

そこへ矢尻に毒を塗った射程距離の長い短弓や、初めてみる鉄砲とよばれる火器などの兵器で撃ちかけてくるので、この戦法のちがいに幕府軍の士気は空回りしてしまい、ついに敵軍の博多上陸をゆるしてしまった。

幕府軍はじりじりと後退して水城城に追い詰められてしまったが、そこで敵軍は思わぬ行動に出たのである。

上陸戦に成功したのだからそこを拠点にして橋頭堡を確保するはずなのだが、このとき敵軍はどうしたことか全軍を船に引き揚げさせてしまったのである。

このとき、元・高麗連合軍乗船の九百艘は大風によって沈没したのを台風と伝えられているが、陰暦十月下旬は陽暦の十一月中旬であり台風シーズンではない。

このときの軍船は、元が高麗に命じて急造させたというから粗製濫造船であったはずで、そこへ大勢の兵士を

乗せたのだから不安定だったところへ、博多湾外の玄界灘は冬季風波の激しさで有名であるから、台風ならずとも玄界灘の荒波に堪えられずに沈没したのであろう。

実情はどうあれ、鎌倉は外敵撃退の捷報に沸いた。

執権時宗はこの勝利に甘んずることなく、外敵の再来襲に備えて幕府をあげての臨戦態勢を図った。

この非常事態にあっても、惟康将軍の動きはなにもなかったから、傀儡将軍はやはり蚊帳の外であったのだ。

側役の上杉重房は、宗尊親王のときの経験から、たとえ側近といえども距離をおくことにつとめると同時に、何人も近づけぬように気配りを怠らなかった。

執権時宗が危惧したとおり、七年後の弘安四年（一二八一）五月に元・高麗連合軍が再び攻めてきた。

朝鮮半島からの東路軍は〈文永〉のときとおなじ九百艘に四万の兵力だったが、こんどはそれに中国本土からの江南軍、旧南宋兵中心の二千五百艘に兵力十万が加わっていた。いっきに日本国を攻め滅ぼすつもりだった。

〈文永〉の体験から石塁を築くことにして、かなり完成していたのだが、この大軍に攻められてはひとたまりもないはずであった。

ところが、このとき信じられないことが起こった。

大風である。つまり今日でいう台風の襲来であった。

閏七月朔日は、陽暦の八月二十三日にあたる。

いかなる人力をもってしても自然の猛威には勝てない。

このときの台風は、敵にとっては天災であったが、わがほうにとっては天佑、つまり天のたすけであった。

このときの台風を〈神風〉というようになるのはずっとのちのことである。

ともかく、こうしてときの執権北條時宗は天佑神助によって困難を乗り切ることができたのだ。

その強運の時宗も天命には勝てず、三年後の弘安七年（一二八四）三月二十八日に病に倒れ、闘病僅か数日にして四月四日に三十四歳で死去してしまった。

二

八代執権北條時宗の急病死によって、十四歳の嫡男貞時が九代執権になった。幕政を執り仕切れる年齢ではなかった。

このとき惟康親王は二十一歳になっていたので、新執権の貞時より年長になってしまった。側近の上杉重房が懸念する危険状態に陥ってしまったのである。

執権が少年で、補佐の連署北條業時も新任されたばかりで首脳陣が弱体化してしまったので、内管領平左衛門尉頼綱と外戚の秋田城介安達泰盛の二人が実権を握った。

内管領というのは、はじめは得宗家を取り仕切る北條嫡流家の家令にすぎなかったのだが、そのうち得宗領の

政務ばかりではなく執権の手足となって働くようになり、執権政治が得宗家の独占になってからはしだいに勢力を増していって、得宗領の家人を御内人と称し他の家人を外様とよんで区別するようになっていった。

その御内人の代表格が内管領でしかも平頼綱の妻は執権貞時の乳母であったから鬼に金棒であった。

いっぽうの安達泰盛は、叔母が北條時氏の妻松下禅尼、妹が北條時宗の妻潮音院尼で現執権貞時の母であった。

こうした安達氏は、頼朝将軍時代から直参の御家人で、北條氏とも姻戚関係が深く、三浦氏滅亡後は北條氏に次ぐ勢力を保つ鎌倉幕府の双璧であった。

安達泰盛から見れば、得宗家を笠に着る平頼綱などはたかが鎌倉御家人の陪臣にすぎないと見縊っていた。

こうした両者はなにかにつけて睨み合い、少年執権貞時を挟んで激突を繰り返していった。

そして、ついに平頼綱のほうが堪忍袋の緒を切った。

弘安八年（一二八五）十一月八日、この日安達泰盛父子の出仕を知った平頼綱は郎党を殿中に潜ませておいた。

そうとは知らぬ泰盛父子は、出仕したところを討ち取られてしまい、甘縄の屋敷も焼き払われてしまった。

頼綱は、安達氏に心を寄せる御家人たちを容赦なく虱潰しにしてその矛先は遠く九州にまでおよんだという。

安達泰盛父子を粛正し、その勢力を一掃した平頼綱にもはや恐いものはなく、幕府の政治も一手に握った。

執権が将軍を傀儡にして実権を握ったように、こんどは内管領が執権貞時を傀儡にしてしまったのである。

こうして鎌倉幕府は将軍の実権が執権に移り、さらにその家臣である陪臣の内管領の手に移ってしまった。

これを、のちに〈霜月事件〉といった。

その後の頼綱は、実権を握るとその子弟を幕政に参加させて、各機関の奉行人たちの不正を暴き、怠慢を弾劾する恐怖政治をおこなって、専制君主気取りであった。

人はいったん調子に乗ると自制がきかなくなるもので、ついには二男飯沼助宗を将軍の座に就けようとした。

これはさすがに家族騒動が起こり、嫡男宗綱に密告されて失敗に帰し、宗綱をのぞく一族すべてが誅殺された。

二

執権北條得宗家の専制強化で台頭した得宗家被官の内管領平頼綱と、鎌倉幕府創立以来の御家人安達泰盛を中心にした北條一族と外様勢力とが対立した〈霜月事件〉は、つまり北條得宗家内管領が外様勢力の排除を目的として起こされたものであった。

結果として専制強化を達成した内管領平頼綱が自滅してしまったものの、執権北條氏に対抗し得る唯一の安達氏が斃れたことによって北條氏の安泰が保証された。

この大騒動で鎌倉は兵火に焼かれ、惟康将軍邸も焼失したのだが、幕府内の紛争であるのに二十二歳の惟康将軍が影響力を及ぼした形跡はなく、なんで足許に兵火が及んだのかまったくわからず仕舞いであった。

側役上杉重房も事件の経緯を報らせてはいなかった。

この幕府の内紛は惟康将軍に類が及ぶことはなかったが、その後べつのところで不穏な動きが出てきた。

二年後の弘安十年（一二八七）六月、惟康将軍は権中納言兼右近衛大将に任じられ、八月に霜月事件で焼失した御所が新築落成したので新居へ移った。

だが、そのひと月後幕府は佐々木宗綱を使者に立てて上洛させると、関東申次西園寺實兼を通じて惟康将軍の右近衛大将を解任し親王に立てられることを奏請した。

こんなことはまったく異例であってはならないことであったが、朝廷はこの奏請を受諾してしまったのだ。

十月二日、惟康将軍に親王宣下が行われ、二品（位階の第二位）親王となって帯剣を許され、右近衛大将は解任された。これは将軍更迭を暗示するものであった。

上杉重房は惟康親王が宗尊親王の轍を踏まされると覚ったが如何ともし難く、傍観するより仕方なかった。

親王に戻されての将軍職の不安定な日々がつづいた。

正應二年（一二八九）惟康親王は二十六歳になった。

主宰者を自認して執権や内管領の意の儘にならぬ年頃になった惟康親王は、ついに前例に倣って更迭された。

理由が曖昧だから既定方針どおりというよりほかない。

惟康親王は京へ送還されるとき、うしろ向きにすすむ逆様の網代輿車に乗せられて行ったという。

このとき、側役の上杉重房は親王に同行しなかった。

仕える主君の式乾門院和子内親王、猶子の宗尊親王ともすでに身罷っていることが躊躇させたのだが、それよりなにより供する者が内管領平頼綱の二男飯沼判官助宗と七人の名立たる剛の者という護衛集団だったので、重房など入り込める余地などはなかったのだ。

八代将軍には後深草院の第二皇子で十四歳の久明親王が迎えられ、十月二十五日に鎌倉に到着した。

惟康親王の鎌倉出立が九月十四日だからこれはあまりにも早く、すでに準備が整っていたのであろう。

源氏三代のあとの公卿二代、皇族四代は、いずれも北條執権による傀儡将軍の盥回しであった。

それから六年後の永仁三年（一二九五）、幕府は二十歳になった久明将軍の室に惟康親王の王女を迎えた。

このことは、惟康親王に対する罪滅ぼしであったろう。

惟康親王は薙髪して出家したが、その後の人生が長く、嘉暦三年（一三二八）十月三十日に六十二歳で歿した。

四

有力御家人安達泰盛を斃して鎌倉幕府を独占掌握した執権北條得宗家ではあったが、開府初期から付かず離れずにいる源氏一門二家の存在が無気味であった。

上野の新田氏と、下野の足利氏である。

前九年、後三年の役で八幡太郎と称ばれて勇名を轟かせた源義家が、その功により上野新田と下野足利の荘司になったことから、四男義國が足利荘に居を構えた。

その義國の嫡男義重が新田荘を開発して新田太郎と称し、妾腹の義康が足利荘を本拠にして足利氏を称した。

治承四年（一一八〇）八月源頼朝の挙兵のとき、新田義重は召しに応じなかったというが、このころ異族の足利俊綱が上野府中（前橋市）に出没して焼き払っていたので動けなかったのであろう。十二月に参上している。

さらに義重は、二年後の壽永元年七月に頼朝の勘気を蒙ったとあるが、これは頼朝が義重の娘に言い寄ってきたので義重が本妻の政子を憚って他家へ嫁がせてしまったために怒りを買ったのが真相のようである。

女好きの頼朝と嫉妬深い政子を考えればあり得る話だが、迷惑このうえなく、そんなことで疎んじられた義重が気の毒である。

いっぽう、弟の足利義康は頼朝に信頼されていた。

義康が足利荘に入ったときすでに足利を名告る豪族が義康の所領は兄義重の上野新田荘と境を接していた。

俊綱の子又太郎忠綱は豪勇の士で、小山朝政と権勢を争い、平氏方について戦った。

治承四年六月以仁王の平氏追討の令旨で源頼政が挙兵したとき、平重衡に従って宇治川（京都府宇治市）に出陣し、先陣をきっての活躍で勇名を馳せた。

翌養和元年（一一八一）頼朝に叛いて常陸で挙兵した志田義廣に与したりして源氏に抗していたので、平氏滅亡後はやむなく足利荘にもどったのだが所領はすでに源姓足利氏の領有するところとなってしまっていた。

やむなく北方の足尾山地内に逃れたのだが、足利義康の軍に追撃されて皆澤という山中の小さな集落に入ったところで追いつかれてしまい、奮戦むなしく忠綱はついに討ち取られて、藤原姓足利氏は滅亡してしまった。

忠綱を斃した足利義康は、足利荘全域を領有した。

五

おなじ源氏の一門でも兄新田義重は頼朝の旗揚げに応じなかったので鎌倉幕府から疎外されたが、弟の足利義康は頼朝に全幅の信頼を置かれてたのみにされていた。

その証に頼朝は義康に熱田大宮司藤原季範の孫娘を娶せた。季範の娘は頼朝の生母であるから義康は頼朝の母方の従妹の婿になったわけで、義理の従弟になった。

いて旧市街の西方織姫公園の背後にある兩崖山に城を築き、麓の本城一丁目付近に館を構えて蟠踞していた。

この足利氏と混同するとややこしくなるので切り離して、まずは先住の足利氏について説明しておこう。

この足利氏は、天慶の乱（九四〇）で平将門を討伐して首級を上げた田原（俵）藤太こと藤原秀郷の裔である。

嫡流家は陸奥へ行って藤原四代の栄華をつくり上げた。

下野に残った分流のひとつ淵名兼行の子成行が足利大夫を名告って足利氏を興した。その成行が天喜二年（一〇五四）に兩崖山城と館を築いて足利荘に定着した。

この年は陸奥の俘囚安倍頼時の子貞任が陸奥守鎮守府将軍源頼義に抵抗した〈前九年の役〉の最中であるから、頼義の子義家を祖とする足利氏はまだいなかった。

藤原姓足利氏のほうは成行のあと家綱、俊綱、忠綱とつづき、同族からは小山、結城、下川邊氏が出ている。

足利太郎俊綱は、〈保元の乱〉（一一五六）のとき源姓足利氏の祖義康とともに源義朝のもとで活躍した。

その後、この藤原姓足利氏は、同族小山氏や源姓足利氏との対抗上、平氏と深く結びついて行った。

両足利氏は渡瀬川を挟んで、藤原姓は旧足利市を中心にした北岸一帯を、源姓は南岸の梁田御厨（現足利市梁田町から八幡町にかけての一帯）を領有していた。

さらに頼朝は、義康の嫡男二代義兼に妻政子の妹時子を娶せた。これで義兼は頼朝と相婿、義兄弟になった。

この義兼が建久七年（一一九六）持仏堂を建立して剃髪すると鑁阿と号した。鑁阿寺は義兼の居宅跡である。

義兼は頼朝に協力して鎌倉幕府創設に貢献した。

二代執権北條義時はこの源氏一門の足利氏の擡頭を警戒して、対立を避け一族に取り込もうと思案した。

二代義兼に妹を嫁がせた縁を継続して足利氏を北條一族に取り込み、雁字搦めにしておこうと謀った。

北條の娘を嫁がせておけば足利氏の監視にも役立った。

義時は嫡男三代執権泰時の娘を三代義氏に嫁がせた。

こうして足利氏を虜にする義時の知恵は継承された。

足利氏は三代義氏までは源義家の『義』を諱の通字にしていたが、四代泰氏は北條泰時の一字を頂戴した形にして北條得宗家に臣従している体を装ったのであろう。

御家人たちに人気があった泰氏は北條一門名越朝時の娘桔梗を娶っていたが、桔梗の兄光時に不穏の噂が立つと執権時頼は桔梗を離別させて自分の妹を娶せた。

形振り構わぬ時頼の遣り口に泰氏は振り回された。

北條執権は足利三代義氏までは得宗家の娘を嫁がせていたが、源氏の通字をとらず執権の一字をいただく泰氏からは北條傍流の娘を嫁がせるようになっていった。

これは足利氏を飼い馴らしたとみた現れかも知れな

い。

事実五代頼氏、六代家時、七代貞氏と少年の家督がつづき、清和源氏出身の名声に翳りが出てきていた。

ともあれ、執権時頼の一字を戴いて五代当主になった少年頼氏は、その後皇族将軍宗尊親王の御所宿直役を命ぜられた。ここで頼氏は上杉重房と出会うことになる。

頼氏は執権北條時頼から二代執権義時の弟五郎時房の娘を娶されたが、上杉重房は宗尊親王に仕える頼氏に公家の教養を身につけさせようと考えて、京育ちのわが娘を頼氏の家女房に入れて支えさせた。

頼氏と上杉重房の娘とのあいだに誕生した男子は、長じて六代執権赤橋長時の一字を頂戴して家時となると、長時の姪（弟時茂の娘）を娶された。

この六代当主家時は、有力御家人の安達泰盛と誼を通じていたので反北條と極め付けられて遠去けられた。

家時は、遠祖源義家が、

「わが七代の孫にわれ生まれ代わりて天下を取るべし」

と置文（遺書）したその七代目に当たっていたので義家が自分に憑依したと思い込んで源氏再興を夢見たが、北條執権が抑える鎌倉幕府は磐石で揺るぎなかった。

安達泰盛から離反させられ、幕府からも疎んじられたわが身に天下取りは叶わぬと悲観した家時は、

「わが命を縮めて三代のうちにて天下を取らしめ給え」

そう置文すると、僅か三十五歳で自害してしまった。

七代を継いだ少年は九代執権貞時の一字を頂戴して貞氏と名告った。

金澤顯時の娘を娶ったが、家女房になった上杉重房の孫娘清子とのあいだに二人の男子をもうけた。

長子は嘉元三年（一三〇五）に生まれ、二子は徳治二年（一三〇七）に生まれた。のちの尊氏・直義である。

六

長子又太郎が十三歳のとき祖父家時が自害するという衝撃的事件が起こったが、事情は知るよしもなかった。

二年後の元應元年（一三一九）に十五歳で元服した又太郎は十四代執権北條高時の一字を戴き高氏と名告った。

まもなく結婚したが、押し付けられた正室は赤橋久時の娘でのちに十六代執権になる守時の妹であった。

高氏が元服して五年後、後醍醐帝の倒幕計画が露顕したので六波羅探題は土岐頼兼、多治見國長らを斬罪に処すと主謀者の日野俊基、資朝を捕縛して俊基を鎌倉へ送るという〈正中の変〉が起こった。

『太平記』のなかにその行がある。

全四十巻中の〈巻二〉にある〈俊基朝臣再び関東下向の事〉がそれである。

もっともよく知られている道行文で、京から鎌倉への

道中の地名が華麗な掛詞の中に織り込まれている。

「落下の雪に踏み迷ふ片野の春の桜がり、紅葉の錦をきて帰る嵐の山の秋の暮（以下略）」

この七五調の文章は、格調高く音律的で人の心を引き付ける魅力がある。

歌舞伎作者河竹新七（黙阿彌）の書く作品の台詞も七五調なので、声に出して読んでいるといつかその調子に乗せられて知らぬまにすっかり暗誦できてしまう。

この『太平記』の道行文も同様で、七五調の華麗な文章を声に出して繰り返し読んでいると、意味はわからずともいつかしぜんに暗誦できてしまう。

話は逸れたが、それから七年後の元徳三年（一三三一）八月に後醍醐帝は神器を捧持して大和笠置山城（京都府相楽郡笠置町）に行幸すると、そこで兵を挙げた。

その直後の九月五日に父貞氏が五十九歳で死去した。

その服喪中の高氏に執権を退いてなお実権を握っている得宗家の高時から笠置山城攻略の出陣を命ぜられた。

大佛貞直、金澤貞將との連合軍であった。

高氏は、服喪中にもかかわらず出陣を命じた高時の非情な仕打ちに深く傷つけられて、憎悪の念を抱いた。

西上した足利・大佛・金澤の幕府軍は河内赤坂城（大阪府南河内郡千早赤阪村）で挙兵した楠木正成ら小豪族の抵抗に遭って手古摺ったが、どうやら反乱軍を鎮定して九月二十八日に笠置山城を陥とすと翌日後醍醐帝を捕えて神器を奪取した。最後まで抵抗した楠木正成も十月二十一日に城が陥ちるといずこともなくすがたを消した。

いったん京の六波羅へ引き揚げて休息した幕府軍は、隊形を整えると鎌倉へ凱旋した。

神器は幕府が擁立した光嚴帝に渡され、翌年後醍醐帝は隠岐（島根県隠岐郡隠岐の島町）へ配流された。

こうして鎌倉幕府はいちおう蜂起した反幕勢力を鎮圧したものの、高氏はこんどの出陣でその勢力が凄まじいいきおいで擡頭してきていることを目の当たりにして幕府の衰退を実感した。

もはや出先機関の六波羅には反幕軍を抑える権威はなく、それは大勢が変化する兆しなのかも知れなかった。

高氏は、このとき、

（なにかが大きく変わろうとしている気配）

を目敏く感じとったことであろう。

時代が大きく移り変わるときがきつつあるのだった。

巨岩が砕け雪崩を打って深い谷底へ落下してゆく夢を見た高氏は、なにかを感じとったのであろうか。

足利氏と上杉氏の道連れは、いま雌伏の長い隧道を抜け出ようとしていた。

（了）

誠忠の茶園（八）

太田精一

十五．入植幕臣たちの明治維新

（一）栄誉の天覧流鏑馬（やぶさめ）

西南戦争終結後十年が経った。

明治政府による一連の改革が、新時代の到来を告げ、日本は、西欧近代国家への道を歩み始めた。

新政権による統治がようやく定着して来た明治二十年十月三十一日、明治天皇が、千駄ヶ谷の徳川家達（いえさと）邸に行幸され、流鏑馬を天覧されることになった。

騎射には、流鏑馬の宗家である小笠原清務が門人百人余を従えて参加。牧之原からは、大草高重、小島勝直、山名時富の三人が出場した。

実技披露は、東西百五十間、南北二十六間の邸内馬場で行われた。

玄関には、国旗が掲げられている。場内は、紫に白く葵の紋を染め抜いた幔幕が張られ、正面に玉座が、設けられている。

騎射には、十六組が参加。牧之原からの出場は、高重、勝直、時富の三騎立てである。幕末最後の流鏑馬から二十五年が経っている。牧之原の三人は、鍛錬は積んでいるものの、いささか不安であった。

だが、鎌倉時代からの伝統の装束をまとい、騎乗すると、その不安は消えた。きらびやかな装束の武者ぶりは、周囲の賞讃を浴び、どよめきの声が上がった。

牧之原の三人は、互いに健闘を誓い合い、騎射に臨んだ。全員三箭とも見事に的を射た。技倆は、いささかも衰えていない。茶園を造成しながら、武士の誇りを失っていなかった。日頃の鍛錬が見事に功を奏したのである。

高重にとって、この日の快挙は、生涯忘れ得ぬものとなった。

鎌倉以来、騎射は、武士（もののふ）の最も大切な武技であった。いわば武士の表芸であったのだ。だが、実戦のない江戸時代には、狩や儀礼に用いられるだけで、次第に様式化した。

ところが、この日の騎射は違った。高重の実戦さながらに繰り出す矢は、うなりを生じ、的を射抜き倒して行く。それはあたかも幕臣の誇りと意地が、矢に込められているような迫力であった。

明治天皇は、その迫真の演技に感動し、侍従の山岡鉄舟にご下問された。

「春の宮（後の大正天皇）にも見せてやりたい。宮中の馬場で再現してもらえまいか」

「お上からのそのお言葉は、弓箭の道に励む者にとって、この上ない名誉であると心得ます。早速に手配いたします」

鉄舟は、近代化の波に洗われ、ともすれば忘れがちな武士の魂を取り戻す良い機会であると思った。

それだけではない。流鏑馬を通じて、朝敵とされた旧幕臣たちの名誉を回復し、そのことを世間に広く知らしめようとしたのである。

流鏑馬の宮中披露は、十一月五日と決まった。

まず、小笠原宗家が代々受け継いできた「古式の流鏑馬」が披露された。次いで牧之原の高重、勝直、時富の三人衆による模範演技である。

高重は、先日の家達邸での演技をさらに上回る連続五箭の射技「五技壱簾」の技を披露し、見事に五本とも的を射落とした。

後日、出色の出来であった高重には、明治天皇から「重藤弓」の所持が勅許されている。

勅許に当っては、山岡鉄舟、勝海舟の尽力が大きかった。二人は、「重藤弓」が、高重に勅許されることは、天皇及び明治政府が、旧幕臣を朝敵ではなく、朝臣として認めたことを意味すると考えたからである。

「重藤弓」は、本来天皇が、武家の棟梁である将軍家に与え、将軍家が、所持するものである。だが、実際には、将軍家は、その弓を保持するに相応しい直参の旗本に預けるのが、慣わしとなっていた。それには、朝廷の許しを得なければならない。言い換えれば「重藤弓」は、朝廷が、幕府に統治権をゆだねる証として使われていたのである。従って、将軍職継承には、欠かせないものであった。

徳川慶喜が、大政奉還以来、「重藤弓」は、明治天皇のもとに置かれていた。

（征夷大将軍のいなくなったこの時代、「重藤弓」の持つ意味は、変わらなければならない。技倆の最も優れた弓の名人に、直接与えるべきである）

そう考えた明治天皇は、鉄舟や海舟の意向を受け、高重に「重藤弓」を授与することにした。こうして高重は、明治天皇から「重藤弓」の所持を許され、弓術の最高位

を得たのである。

これを契機に、朝廷及び明治政府の徳川家に対するわだかまりは氷解した。慶喜は、翌年の明治二十一年、従一位に昇進、参内を許されるようになったのである。

高重が、天覧流鏑馬に見事な腕前を発揮したという報道は、全国にあまねく知れ渡った。

精鋭隊以来の盟友関口隆吉は、この報に接し、高重に賀状を送っている。隆吉は、当時静岡県知事の職にあった。この時彼は、折悪しく体に腫れ物が出来ていて上京出来ず、この賀状には次のような内容の祝意を託している。

「快方に向かってはいるが、上京の機会を失い残念である。過日家達邸で行われた流鏑馬を新聞紙上で知り、喜ばしい限りである。近日中に祝杯を挙げたく思っている。いずれ、帰郷されると思うが、帰路静岡に一泊ともなれば、大変喜ばしい」と。

山岡鉄舟が、他界した。明治二十一年七月九日、座禅のままの大往生である。享年五十三歳。胃穿孔による腹膜炎併発が直接の死因である。

鉄舟の死は、中條景昭、大草高重を始め牧之原の入植幕臣たちに大きな衝撃を与えた。

ことに、高重は、北辰一刀流千葉道場で鉄舟と知り合って以来、肝胆相照らす仲であった。幕府内の尊王攘夷派として共に手を携え、幕末の動乱を生き抜いて来た。

大政奉還後は、十五代将軍徳川慶喜を護り江戸城無血開城を果たした。慶喜の駿府蟄居後、高重は、牧之原開墾に携わり、鉄舟は、明治天皇の侍従となって、共に徳川家存続を陰で支えてきたのである。

盟友を喪った悲しみで、高重は、しばらくは何もする気が起こらなかった。

(牧之原開墾に当って、山岡さんには、本当にお世話になった。また、開墾費用の捻出については、ずいぶんご苦労をお掛けした)

鉄舟は、高重より年下である。だが、背が高く、筋骨逞しい鉄舟は、冷静沈着で、高重には、いつも頼り甲斐のある存在であった。

(牧之原のことを真剣に考え、親身になって新政府に苦境を訴えてくれるのは、勝さんだけになってしまった)

高重は、鉄舟が、牧之原の開墾を進める上で、精神的にも経済的にも、如何に大きな支えとなっていたかを改めて知った。

近くの蝉が、どこか遠くで鳴いているように聞こえる。その単調な鳴き声が、声明のように耳に響く。空しさがこみ上げて来た。焼け付くような太陽が、茶園を照らし、きらきらと光っている。高重は、ただぼんやりとその茶園を眺め、長い時を過ごした。

(二) 相次ぐ盟友の死

鉄舟を喪って一年もしないうちに高重は、静岡県知事関口隆吉の死と直面しなければならなかった。

明治二十二年四月十一日、高重は、静岡県庁の知事室を訪れた。関口知事は、書類の整理に追われ、落着いて高重と面談する時間がない。陽も傾きかけている。

「これから招魂祭出席のため、名古屋に出張しなければならない。大草さんも一緒にどうですか」

招魂祭とは、明治維新前後に殉難した人々を祀る祭礼のことである。愛知県では、名古屋の招魂社で行う招魂祭に近県の知事を招待していた。隆吉も静岡県知事として招待されていたのだ。招魂祭は、高重にとってもゆかりの深い祭礼であったため、すぐに同行を決意した。

隆吉と高重は、予定の列車に乗り遅れてしまった。そこで二人は、たまたま静岡駅を通る土木工事資材運搬用の臨時貨物列車に乗って名古屋に向かった。

その下り貨物列車が、安倍川の鉄橋を用宗まで来た時、前方から静岡に向かって来る普通列車と正面衝突してしまったのである。ブレーキを掛けたが間に合わなかった。

隆吉は、貨車の後方の壁に寄りかかって座っていた。衝撃は、突然襲った。隆吉は、前に放り出され転倒した。その時、運悪く後方車両の鉄材が荷崩れして、隆吉たちの車両に倒れ掛かった。隆吉は、その下敷きとなり、左の踝に鉄片が刺さって、重傷を負った。

「関口さん大丈夫ですか」

高重は、自分に折り重なるようにして倒れてきた隆吉の上にのしかかっている鉄材を、渾身の力で跳ね除け、血まみれになっている足を鉄材の間から引き出した。助けを呼ぼうとしたが、人里から離れた田圃の中にあるため、救助隊はなかなか来ない。

「大草さん。怪我は」

「関口さんが身をもって鉄材を防いでくれたお陰でたいしたことはありません」

「意識的にそうしたわけではないのです。たまたまこうなっただけです。気にすることはありません」

隆吉は、高重が余分な気を使わないように、痛みをこらえながら明るい声で言った。救助隊が到着したのは、二時間ほど経った後で、すでに陽は沈み、あたりは闇に包まれていた。

隆吉は、担架で私邸に運ばれた。出血多量で重傷である。

列車事故による隆吉の怪我は、全国に報じられ、見舞い客は、引きもきらなかった。

四月十七日には、徳川慶喜が病室を訪れた。慶喜は、徳川家存続に尽くした功績を謝し、牧之原茶園への支援に対する感謝の気持ちを述べ、併せて県知事としての労をねぎらった。見舞金百円を枕元に置いて行ったと伝え

られている。

隆吉は、傷が原因で破傷風に罹っていた。

慶喜が見舞いに来た日の夜、隆吉は、病室に妻の静子、養継嗣の隆正夫妻、次男の出(いずる)を呼んで、後事を託した後、親族たちを入室させている。

明治二十二年五月十七日未明、隆吉の容態は急変した。一ヶ月余の闘病生活で、体はやせ衰え、疲れきっていた。意識も混濁している。幕末から明治にかけての動乱の中で、倒れた人たちの顔が浮かんできたのか、名前を呼んでいる。眼もかすんで見えないようだ。

その日の夜、隆吉は、永い眠りに着いた。享年五十四歳、波乱に富んだ一生であった。

関口隆吉は、天保七年（一八三六）幕府与力関口隆船の次男として本所相生町に生まれた。父の隆船は、御前崎佐倉の池宮神社宮司の子である。長じて関口家の養子となり、養家を継いでいる。

隆吉は、幼少の頃から、武術、儒学、兵法を学び、嘉永三年（一八五〇）十五歳で元服、翌年お持弓与力見習となった。

関口家は、戦国大名今川氏の一族で、徳川家康の正室築山御前は、関口氏広と今川義元の妹との間に生まれている。

慶応三年、隆吉は、中條景昭の下で市中取締りを命じられた。翌四年二月慶喜が、江戸城を去り、上野寛永寺の大慈院に謹慎すると隆吉は、中條景昭、大草高重の率いる一隊と共に慶喜の護衛に当った。後に景昭、高重、萬、成瀬、相原等と共に精鋭隊を結成、高重と共に頭並となり、御奉行支配調役兼務を命じられた。

徳川家駿府移封後、隆吉は、牧之原開拓を推進する一人となった。

ところが、優れた行政官を欠く明治政府は、隆吉を必要とした。隆吉の人格、識見を高く評価し、新政府の要職を歴任させ、静岡県知事としたのである。

高重は、前年の明治二十一年七月に盟友山岡鉄舟と徳川家重臣大久保一翁を喪った。その上、関口隆吉の死である。喪失感にとらわれ、空しい時が流れて行く。

しかし、いつまでも無気力に過ごすわけには行かない。勝海舟から、牧之原に在住する同志の様子や離散した家族の詳細を知らせて欲しいとの書簡が届いたのだ。それに取り掛からなければならない。

高重は、服部一徳にその調査を依頼し、その報告書を海舟に送った。海舟は、幕臣でありながら、薩長と一戦も交えず、ひたすら恭順する慶喜の護衛を務めた徳川の遺臣の牧之原開墾の労苦を後世に伝えたかったに違いない。

後に、この書簡の作成に協力した入植者から、開拓記念碑建立の運動が盛り上がった。

碑文の文案は、文才の誉れ高い服部一徳が担当することになった。

一徳は、禄高百五十俵の小普請役の家に生まれた。高重の呼びかけで、精鋭隊に入り、後に、高重と共に、牧之原に入植している。漢学の素養が高く、筆も立つことから、士族一同の入植の事情や入植後のことなど、数多くの記録を残している。高重の良き相談相手で、高重の長子勝重は、妻に一徳の息女いしを迎えている。勝重は、高重の実家和田家の継嗣となって和田の姓を名乗っている。

また、一徳は、土地争いやさまざまな揉め事を穏便に収めるなど近隣の人たちにも親しまれていた。

碑文は、贊正善や内田忠正の意向を入れ、八百字にも及ぶ文案となった。高重は、長過ぎるとして、大幅に削るように指示した。これを受け、一徳は、高重の校閲のもとに二百字に取りまとめた。

これに海舟が揮毫した。

ところが、何か特別な事情があったのか、高重没後、記念碑建立が中止され、その文案は、長く一徳の机の中に眠っていた。

その碑文は、昭和四十年になってやっと日の目を見ることとなった。牧之原開拓百周年を記念して「牧之原開拓遺功の碑」が建立されることになったのである。海舟の揮毫したものも改めて山口正氏が、石碑に刻んでいる。牧之原開拓の淵源を述べ、開拓の苦労を称えたこの碑文は、牧之原の丘に現存し、開拓の歴史を語っている。

一徳は、明治三十二年十一月二十八日永眠した。墓は、松原山医王子境内の墓地にある。その墓は、高重の娘の嫁ぎ先である和田家の末裔によって再建されたものである。

(二) 茶園の自立

関口隆吉が逝った翌年の明治二十三年には、松岡萬(つもる)がこの世を去った。享年五十二歳であった。

萬は、隆吉と並んで、牧之原開墾と茶園殖産の陰の立役者であった。天保九年（一八三八）江戸小石川日向に生まれた。その生家は、大草高重の実家和田家の隣である。高重は、萬の三歳上で二人は幼馴染であった。

松岡家は、旗本で、鷹匠組頭を務める家柄である。

萬は、幼少の頃から、幕府講武所で中條景昭から剣術と柔術を学び、家督相続後は、「市中見回り組」に属していた。五尺八寸余の長身である。幕府の中では、尊王攘夷派に属し、攘夷十七人組の一人であった。

江戸城明け渡しの際には、精鋭隊に属し、駿府に来てから新番組と名を改めた後も、ずっと景昭、高重と行動を共にして来た。開墾方として牧之原入植が決まった時は、景昭が頭取で、萬は、高重と同格の開墾方頭取並で

あった。

しかし、萬は、静岡藩庁の要請により、開墾方頭取並の資格を持ったまま幸浦（現浜松市南区福田町）の製塩方士族の頭取を務めている。その後、静岡県庁に在籍していたが、明治八年、東京に転居し、警視庁一等大警視となった。

萬は、静岡藩の役人当時、山林の所有権争いと水利権争いの二つの係争を解決したことで、住民から感謝され、生祠として祀られている。その一つは、藤枝市岡部町廻沢の飛龍神社の境内にある松岡神社で、もう一つは、磐田市南部大池の郷社神社の境内にある池主神社である。

藤枝の松岡神社は、岡部宿と廻沢集落村民の山林の所有権を巡る争いを、萬が仲介し、解決した実績を称えて、関係者が建てたものである。一方、磐田の池主神社は、大池の干拓を進める静岡藩庁への住民の訴えを当時水利路程掛であった萬が取り上げ、干拓を中止したことを住民が感謝して、建てたものである。

萬の死によって、高重は、幼き日の江戸の面影が、また一つ消えて行くような思いに駆られた。

（江戸がますます遠のく。人も屋敷も町並みも、すっかり変って行く。最早それがしには、帰る所はない）

高重は、牧之原が、安住の地であり、故郷になったとの思いを強くした。

萬と高重は、精鋭隊では、中條景昭配下の双璧として、参旗本伊佐新左衛門の長子として生まれた。元服後十五歳で幕府勘定奉行配下となり、嘉永七年～安政六年（一八五四～一八五九）の五年間下田奉行所組頭を命じられている。その間ハリス領事と下田条約などの折衝に当った。

その後、江戸に戻り、具足奉行、御幕奉行、講武所組頭、海軍奉行並支配組頭などを歴任している。明治九年、中條景昭の勧めに応じて、谷口原に客分として移り住んだ。その後、東照宮に居を定めて、私塾を開き、旧幕臣の子弟だけでなく、近隣の農民にも漢籍や書を教えていた。

教養人でありながら洒脱な人柄が受け、景昭、高重の良き相談相手となっていたのである。

牧之原茶園を支援してくれていた山岡鉄舟、大久保一翁の相次ぐ逝去に加え、関口隆吉、松岡萬、伊佐新次郎の他界は、中條景昭と大草高重に牧之原茶園存続の危機感を呼び起した。

二人は、開墾方旧幕臣の動揺を抑え、結束を図るため、各入植地の組頭を集めることにした。

「おのおの方もすでにご承知のとおり、この牧之原開墾に当って常に後ろ盾となってくれていた山岡さん、大久保さんが他界され、県知事の関口さんも一昨年の列車事故で不慮の死を遂げられた。その上、昨年は、松岡萬君お互いに競い合い、幕末の動乱を生き抜いてきた。牧之原でも心を合わせてこの荒地を緑の茶畑にしようと誓い合った。だが、萬は、官吏の道を歩むことになった。それでも、高重にとって萬が、最後まで徳川家を護る誠忠の士であることに変りはなかった。

明治二十四年三月、桜の蕾が膨らみかけた頃、伊佐新次郎がこの世を去った。八十二歳の高齢で眠るような最後であった。

伊佐が牧之原にやって来たのは、六十七歳の時である。彼は、高齢のため、開墾の仕事には就かなかった。だが、入植者たちの融和を図り、子弟の教育を援け、牧之原の教養文化向上にはなくてはならない人物となった。

荷美館事件では、「館員の使い込みは、中條景昭頭取の監督不行届きにある」とする岡田原大草組の追及をかわし、一触即発の危機を今井信郎と共に救っている。

伊佐と今井は、上京し、勝海舟と山岡鉄舟に打開策を相談した。海舟と鉄舟は、大久保利通に事情を訴え、天皇の御内帑金の中から二万円を下賜されることになり、その金を出資者に分配し事なきを得たのである。

それだけではない。岡田原の大草家で初めて茶の製品が出来た祝いに茶摘唄を即興で作詞したことも語り草となっている。

伊佐は、文化六年（一八五四）江戸湯島三番町で、直まで喪った。これまで牧之原の茶園形成に尽力下さった方々で、勝さんを除いてことごとく旅立ってしまわれた。開墾を始めてからすでに二十年余になる。これからは、政府や県に支援を頼むわけにも行かない。おのおの方も、支援に頼ることなく、今後は、自力で、茶園を守り育てるようにして頂きたい」

景昭は、開墾方として入植した同志たちの日焼けした顔を前にして言った。

じっと目を閉じて景昭の話を聞いていた高重が、おもむろに口を開いた。

「今日お集まり頂いた方々は、いずれもこの地に骨を埋める覚悟であるとお見受けする。入植以来、苦節二十年、すでにこの牧之原の土となった方々も少なくない。それに、志し半ばにしてこの地を去った同志たちを加えると、今ここに踏み留まって茶園を続けている人より多いことになる。後ろ盾となってくれた方々の大多数がすでに鬼籍に入られた。そうした厳しい状況下にある今こそこの牧之原開墾の真価が問われる時である。それには、残ったわれわれが、結束し、お互いに助け合って、この茶園を育てて行かなければならない。幸いにして同志は去っても立派な茶園は、残してくれている。今一度気を引き締めて茶園を買い取り、引き継いでくれた人たちとも協力して、残りの人生を賭け、茶業の発展に尽くそうではないか」

高重は、盟友を喪った悲しみに押し潰されそうになる自分を鼓舞するように、強い口調で語った。

その約一年後、山名時富がこの世を去った。明治二十五年一月十三日、肌を突き刺すような寒風が牧之原の茶園に吹いていた。時富の死も入植旧幕臣にとって痛手であった。

時富は、天保四年（一八三三）三月、山名時敏の子として生まれた。母は大草高基の娘である。時敏は、流鏑馬の名手として知られていたが、四十九歳で死去。天保十二年（一八四〇）四月、時富は、九歳で跡目を相続した。天保十四年（一八四二）小普請諏訪若狭守支配に入った。文久三年（一八六三）十二月、一橋慶喜が大坂へ出立の折、講武所から同行。そのまま大坂警護となり、元治元年（一八六四）七月江戸に帰っている。

慶応三年（一八六七）大政奉還後、お役御免となる。だが、家達駿府移封後、御用人支配となり、伊佐新次郎や関口隆吉などと江戸城の残務整理に当った。明治元年駿府藩勤番組、その後、相良藩勤番組となるが辞任した。

明治三年二月、開墾方となり、二町五反が与えられた。その後宅地として四反五畝が、大草割地より割譲されている。

明治二十年徳川家達邸にて天覧流鏑馬挙行の際には、大草高重、小島勝直と共に参加した。

時富は、明治三年、入植以来、高重と苦楽を共にし、入植者の多くが経営不振や後継者不足で牧之原を出て行く中で、最後まで踏み止まった。現在もその子孫が茶業を続けている。

互いに流鏑馬の名手として認め合い、入植以来、励まし助け合ってきた時富の死は、高重に計り知れない悲しみをもたらした。

葬儀に参列後、高重は、ぼんやりと庭を眺めていた。裸木が風に揺れている。鵯が一羽飛来し、その裸木に止まった。

高重は、幕末の動乱の中に生きた盟友の顔を思い浮かべ、しばらく瞑想に耽っていた。目を開けると鵯はすでにいない。ふとわれに返った高重は、中條景昭、落合正中、小田信樹、服部一徳など、今もなお、牧之原の地で、共に茶園を開いている同志のことに思い至った。

（せめてこの牧之原が日本一の茶処になるまでは、もう少し同志と共に生きなければなるまい）

気を取り直した高重は、手塩に掛けて育てた茶畑に出てみた。茶の喬木は、寒風の中にじっと耐え、緑を絶やさずに春を待っていた。

（つづく）

わが愛誦歌（十三）

――昭和から平成へ――

曽根竣作

この稿も前回で十二回を数え、採り上げた歌人は延七十一名に及び（重複二名あり）、夫々代表歌並びに著名歌を抽出して来たが、なお心の琴線に触れる幾つかが残っているので、それを選んで追加してゆきたいと思う。今迄の男性三名、女性三名の枠は外さず、出来るだけ簡潔に、また今迄の抄出歌と重ならないようまとめてみよう。

○万丈のはての四国三郎身の力ゆるめて紀伊の水道におつ　　玉井　清弘

『麹塵』（平・5）所収。四国三郎は吉野川の愛称。大河はよく親しみをこめて、太郎、次郎などと男子名をつけて呼ばれる。吉野川は高知と愛媛の県境である石槌山中に源を発し、高知、徳島と二百数十キロメートル余りをゆるゆるうねり流れた後に紀伊水道に注いでいる。この一首は吉野川が最後に海に注ぐところを、川のスケールそのままに、かまえ大きく、ゆったりとした韻律で歌いあげている。

川の歌と言うと、どうしても忘れ得ない歌がある。それは藤沢市民短歌会の会長を勤めて居られた故石川一成の一首である。

●風を従へ坂東太郎に真向へば塩のごとくに降りくる雪か

千葉県佐原市を郷里とし、常に利根川（坂東太郎）に據っていた石川が脈々として詠んだ望郷歌である。骨太の詠風を身上とした石川は、交通事故死であったが惜しい人を喪ったものである。

さて掲出歌であるが、やはりなにより四国三郎という

名がよく生かされている。川が人の名で表現されたことによって、下句でさらに生き物のように擬人化されいることにも異和感がない。とくに「身の力ゆるめて」という身体的な描写は、自然の生命力を生々しく伝えてくる。四国に生まれ住む作者ならではの、風土への思いがこもった息の深い自然詠である。

作者は、歌人としての生き方も、あるいは生活人としても、平穏な、どちらかというと地味な選択を好む。作品にもその意志はあらはれている。風俗や新語、あるいは口語調などに、作者はこころひかれることがあまりない。そしてまた、決して文語定型を崩さない点が特徴でもある。佳詠に次の如きがある。

〈こぼれたる鼻血ひらきて花となるわが青年期終わりゆくかな〉〈非常口青きあかりに招きおりここいでてまたいずこの非常〉〈鶴女房日本の風土にいし時代貧しく生きて人を許しき〉〈プラズマのテレビに見れば外人の中に戦うイチロー孤独〉。

○骨箱の前よりおろし来し酒を厨に使ふ許したまへよ　石川不二子

『ゆきあひの空』(平・20)所収。手触りのある一首で、何も仕組んでいない。事実がそのままに提出されており、技巧に走っていない。この骨箱は、数年前に他界された御主人のものである。その骨箱に供えられた酒の小瓶を料理に使うというちょっとした行為が、逆に、部屋のなかにおける夫の不在感を映し出している。その意味では極めてリアリティに富んだ作品といえる。

石川不二子は、県立熱海高女在学中より作歌、昭和二十五年より直接佐々木信綱の指導を受けるようになり「心の花」に入会している。その後東京農工大卒、岡山の地に共同農場を開拓し、酪農と農業に従事することとなった。大変な苦労を背負うことになったが、その作品は、率直で衒いがなく素朴であり、骨太、かつ時としてユーモアに富んでいる。

昭和二十九年四月、短歌研究社主催の五十首詠が実施されたが、石川不二子は惜しくも次点、この時第一回特選となったのが中城ふみ子の「乳房喪失」であったことは余りにも著名である。(当日の選者は中井英夫)

「穴まどひ」(冬眠前の蛇)と出会って了うし、ナナフシが窓からのぞく、夜に蕨が育っており、川には行々子が棲んでいる。(行々子はヨシキリのこと)

これら多くの動植物は、季語的な存在として扱われているのではない。作者が身近で見聞するものなのだ。四季折々、ともに生活している友人のようなものである。

『ゆきあひの空』は同志のようであった。夫に先立たれた挽歌集でもあるが、その死へも過度な感情移入はせず、木々や草花のように淡々と描写する。それがまた読者にかなしみをさそって来る。

〈穴まどひの黒く細きが二つゐし林とおもふ雪の朝なり〉〈行々子鳴く足守川のほとりなるグループホームに夫置きて来つ〉〈ゆきあひの空の白雲　のど太く鳴く鶯もいつか絶えたり〉〈台風に吹き散らされし白萩のふたたびの花濃きことあはれ〉。

○忽ちに五体は濡れて八月の驟雨に立ちしわが輪郭を撫づ　前川佐重郎

『彗星記』(平・九)所収。やや難解な歌であるが、シャープに事実を切り取っており、そこに余計な気分をさしはさまない。

作者は、昭和初期に自由律や口語短歌など、新興短歌運動が盛んとなったが、その旗手の一人として登場した前川佐美雄を父として持つ。佐美雄は、「日本歌人」を昭和九年に創刊、反逆的でシュールな口語の歌の多い『植物祭』で出発する。ただし、奈良に帰郷し、戦争に傾倒する時代の中で、定型に回帰し、『大和』『大平雲』などで、底知れない虚無的な美を湛えた名歌を残した。

父が偉いとどうしても、斯ういう具合になり勝ちである。作者は、幼少時から訪ねてくる前登志夫や山中智恵子といった多くの歌人を見知っている。あるいは父の友人として、保田与重郎、五味康佑といった文学者たち。さらに幼少期からずっと住んでいた千年を超える時間をもつ奈良という古都に些か嫌気がさし、その後、短歌より離れ、現代詩に身を投じたのも、そういう環境と無関係ではないだろう。父佐美雄の死後、「日本歌人」という歴史あのある結社を引き継ぐことになり、ふたたび短歌の世界に戻ってきた。かなり遅いスタートになってしまったが、そういったハンデをどう克服してゆくのか、作者にとって重い頸木になったにちがいなかろう。

詠風は、ちまちました風景からの脱却と、日常性に埋没しない姿勢が見られ、情緒を突き抜けて、定型を壊し新しい定型を構築したい、そんな意欲を感じさせるものがある。

〈ゆふぐれは背骨、肋もかろくなり街にまぎるるここ ろ遊ばす〉〈百頭の馬の蹄の鳴る夜半のそこより展く麦立つ冬野〉〈引力のかく美しき夜に寝ねて墜死の迅さゆめにたしかむ〉〈花の下にをとこふたりが立ち上り白刃のやうな名刺かはせり〉〈ほとばしる水にうたれてつやめきし脛のやうなる白葱の束〉

○刺す焙る殺す吐かせる削ぐ締める荒業ならで厨のことば　久々湊盈子

『射干』(平・八)所収。射干はアヤメに似た花で漢名胡蝶花ともいう。自分の娘に〆鯖の作り方を教えていて「料理に関する言葉は実におもしろい」と思ったのが、この歌を作った動機だと随筆に書いている。なるほど言はれて見ればそうである。

を結ぶ〉〈ララのミルク余さず飲めばいま少し背が伸びたか生涯矮躯〉ララのミルクとは、昔進駐軍（？）の援助物資。〈人格を造れるごとく消すごとく化粧しおえて女降りゆく〉〈重力という永遠の敵たたむきに頬になによりこの乳ふさに〉〈望むなら食われてやらん鬼龍子の長き孤独にまた会いに来つ〉鬼龍子とは「中国・朝鮮建築の降棟に立てた、龍の子を模した瓦製の怪獣。走獣」とあるが、作者はこれが大変気に入っており、最近の歌集名とした。

○鷗外の口ひげにみる不機嫌な明治の家長われらにとおき　　小高　賢

『家長』（平・二）所収。森鷗外にしろ、夏目漱石にしろ、近代の男たちはなんと風格のある口髭をたくわえていたことか。筆者の父も気が付いた時は、すでに立派なカイゼル髭を生やしていた記憶がある。しかも肖像写真を見ると、彼らはいずれも笑うことなどないような、威厳のある、不機嫌な表情をしている。紛うことなき明治の家長の顔である。ひるがえって現代の家長はどうだろうか？いや、そもそも現代に家長というべき座は残っているのだろうか。作者はこの一首で、家長不在の現代の家族の姿を、そして近代の〝家長〟から現代の〝家庭〟までの時間の奥行きを、「口ひげ」の表象として鮮やかに映し出してみせている。そこには同じ男としての作者

作者は、女性の立場を、あたかも料理の工夫のように工夫して、挑発気味に表現するのが得意である。〈フェミニズムの正しさゆえの空しさが手を汚さないやつにわかるか〉。同じ頃に発表した歌だが、ずいぶん直截にいうものだなあと感心した記憶がある。当時は、まだいまのように介護問題がさわがれていなかったからである。真っ直ぐに、直面する現実に立ち向かう姿勢は、まさに作者そのものであろう。この一首は明快そのものである。フェミニズムがいかに喧伝されようとも、今この時間に介護を待っている老いがいる。そこに責任を感じる自分が居る。フェミニズムの正しさと空しさ。

作者は、余韻とか余剰よりも、自分の体験や事実のつよさにかけている。結句にあえて使う乱暴な口調が、さらにリアルで或る種の説得力を生んでいる。いささかも逡巡しない。一気に上句から結句まで、ストレート勝負というのがその詠風である。家族詠でも、自然詠においても変わらない。

自注において、「少し早口で、断定的に言いきったときに、この一首の主題といったものは全て言いつくされている。これはおそらく私の歌の欠点のひとつであり、また逆に特長であろう」といっている。特長は何も棄てる必要はない。本人がそれを自覚しているならそれで充分である。

〈いつの日か失うために育て来し娘につまだちてリボンの共感とペーソスが色濃く感じられる。

また、次の一首がある。〈夕日から長い腕が伸びてきてわずかに残る柿に触れたり〉「小高賢は、しばしば、『歌のうまさより心が大切だ』というような発言をする。この場合小高はレトリックをあまり信用していない。自分が生きているなかで感じたものを、嘘のない言葉であらわそうとする意識は非常に強いのである。だからこそ『夕日に長い腕の伸びてきて』柿に触れる、といったおもしろくなまなましい表現が生まれてくるのだろう。」と吉川宏志は述べている。

その詠風は、多分に理念的、倫理的な色合いが濃い。とくに近い過去である近代への思いは深く、物や人への懐古を通じて時代の光と影を浮き上がらせる手腕には独自のものがある。また現代短歌への鋭い批評者であると同時に、近代短歌への視線も深い。

作者は、東京都墨田区生れであるが、ふるさと組の代表選手として、「変わらない部分」へのいつくしみが深いように思われる。〈八紘という名の友ありて勝義という同僚のありわが同世代〉〈赤茶けたカタロニアの土ことばなく笑いなき死のあまた染む土〉〈職棄つるすなわち職に棄てられる切刃のごとき風はせめ来ぬ〉〈「欲しいものないか」と子らのメールきて父の日の朝「ない」と応える〉カタロリアは、スペインの北東部、今日も強い自治権を有する。

○今日にして白金のいのちすててゆくさくらさくらの夕べの深さ　　松平　盟子

『プラチナ・ブルース』（平・二）所収。昭和五十二年、二十二歳という当時最年少で角川短歌賞を受賞した作者は、溌剌とした能動的な愛と爽やかな官能性で歌壇に衝撃を与えた。受け身ではなく、自らが愛の主役であるという姿勢は、一見奔放に見えながら、実は王朝和歌に源を持つ。

掲出歌、散る桜を詠んだ歌は数知れないが、この歌は独特の響きにより忘れがたい。「さくらさくら」が歌うようであり、この結句の「夕べの深さ」で深い沈黙の余韻を残している。桜の散りざまに押し殺した哀しみの光が添うようである。しかしながら、作者はこの時、人生のうえで最も大きな転機を迎える。夫や子供と別れ、家族を失うという痛恨時を抱える。

その後、彼女は立ち直り、パリ滞在中の与謝野晶子研究のため平成十年から一年間、国際交流基金フェローシップを受けパリ第七大学へ留学した。一方で彼女は言う。「世界の大きな傷みになすすべもなく佇む疚しさのような感覚と、その反面の厚かましいばかりに悲劇惨劇を眺めてやまない自分の視線の生々しさ、それらが交錯しつつ、ついに短歌の内側へ回収できないことへの、呆然とするばかりの無力感」と。この言葉は、今正に〝東日本大震災〟に当って、われわれが考えるべき実感である。

この処、新聞の歌壇を読むと、その八割は〝東日本大震災〟に財を採った歌ばかりである。それが殆どロクでもない歌であり抜き書きするのもやっと三・四首にとどまると言う有様である。現場に遭遇し生々しさを体験した人ならいざ知らず（それでも歌にするのは早い）、他県、他地方の人らが待ってましたとばかり歌材とすることには賛成できない。

〈口うつされしぬるきワインがひたひたとわれを隈なく発光させゐる〉〈切るナイフえぐるスプーン刺すフォークきらきらしくて燦たり食は〉〈馬の肌ゆびさきに辿るしずけさに秋は終わりぬ尾花ゆれおり〉〈Le Sable 浜辺の砂が受け入れる海の気まぐれ、波の舌先〉〈多摩川に藍の方舟うかびおり茫漠のわれに乗れと囁く〉。作者に大きな変貌が準備されているような気がする。与謝野晶子への沈潜から人間そのものを問題とする転機ともなろう。

参考文献
現代歌人二五〇人（牧羊社）
現代名歌鑑賞事典（桜楓社）
現代百人一首（朝日文芸文庫）
現代短歌の鑑賞事典（東京堂出版）
現代の歌人140（新書館）

短歌　四十首

曽根竣作

赤き月

秋霖の降り止まずけり古書の街いづこも昭和の香りただよふ

読みさしの本を開かう霜降の夜にいちまひ肩に羽おりて

落ちかけて来さうな月が赤く照り谷のはざまに一村しづもる

八重むぐらなすさ庭なりぬきん出てくわりん数果が夕日にかげる

思ひ出づ明治生れの父のひげ機嫌の悪しきは右に弾ねたり

盛るとも奢るともなくくっきり吾木香立つわが足もとに

突然に友の訃はあり　唐突と思ふこころのややにうすれて

未知なればこそうつし世は面白いじっとうつむき爪を切る夜

〈文春〉に小悪魔少し並びゐて大原麗子は孤独死と言ふ

いくつもの誤謬もあれば脱もありいま検証しみる東京裁判

昨日の嘘

金木犀の香りゆたけしわが庭に一所定住の月日かぞへて

勢ひもち潮の干けば泡沫のたちまち消えつ栄枯のごとく

黄色にきらめくトンネル辿りゆくいてふ色づく夕映えと君

遠街の灯りまたたく高架よりうばたまの闇まとひつつ帰る

見上ぐれば北風荒び枝先にざくろ一顆のさびしらなりき

音もなく柘榴口あけやうやくに昨日の嘘をつぶやきている

シリウスの瞬き遠くあふぐかな十二月八日艦橋の上に

戦没者に申しわけなし余りにも弱腰に終始す日本の外交

こつこつと扉を叩く音すなりベーカー街の霧に夜更けに

目のまへを「今」がするりと逃げてゆく黄砂吹きよす風の街かど

なべづる考

颯々と夕日めざして飛翔せよなべづるの群黒き影なす

八代の海を見放くる出水市よひょうとして万の翼を迎へつ

かうと啼き互みに翅を交叉するなべづるの仕ぐさ番ひなるべし

シベリアより幾万里駆け渡り来し鶴の着水見事なるかな

二羽三羽はねを休めて着水すなべづるの動き悠然たるかな

翼長は三メートルにも及びゐてその羽撃きの凄まじきかな

かうかうと北より渡り来し群れが軟着水す細き脚もて

疎ましく不覇の企てを図らんか鳥のすがたと化す雁行の果て

翼つらね北へ帰るは何時の日ぞ輝きてあれ出立のとき

冬空にうろこ雲浮かび北冥の鯤の渡りか悠揚として

晩鴉ひとこゑ

さくら待つ心ほろほろ氷雨来ぬ刃のごとく喉につめたく

償ひの咎ありやなしシクラメン窓に密なる緋のいろ燃やす

けふ一首なにも浮かばず黄落の径もとほれば晩鴉ひとこゑ

文系は曲線を好む振りかへる径にいくたび穴まどひして

もしや「死の商人」なりしか戦中に亡き父いくたびか華北へ赴きぬ

銀の把手ポアロのごとく光らせてちち基隆のタラップ降り来

痩身に髪たくはへしちちのみの父に寄りがたくつひにとき失へり

父の没年超えていくとせ穂高嶺の夏をそばだつ氷壁あふぐ

チョビ髭のグエン・カオ・キ⊙を思ひ出づ昔敗軍の飛行士として

〈ビストロ〉とふ小さき店に対き合ひてひっそり祝ふわが誕生日

行雲流水（三十一）

石黒修身

短歌

近詠五十首

京都の桜

閉塞の日々から遁れ地震（ない）ゆるく桜盛りの京都を訪えり

咲き盛る桜を追いて洛東の名所スポットひと日巡れり

満開の桜慕いて平安宮・南禅寺経て哲学の路

先哲が思索なせるか疏水沿い花弁（はなびら）浴びてそぞろ歩きぬ

京都御所禁裏の庭に桜咲き御殿の階に花弁舞えり

紫宸殿右近の橘対なして左近の桜端然と咲く

「円山」の花見の宴（うたげ）見おろして枝垂れ桜が超然と樹（た）つ

花どきは「まだ続きます」都人（みやこびと）声を耳にし京都を去れり

みちのくの惨

明媚なるみちのくの地は哀れなり地震（ない）と津波に襲われて惨

いち人の命の重さ計れぬに万余の人の死する災禍が

惨状を目の当りにせし人々はまづ息を呑み次いで涙す

いたいけな幼児(おさなご)たちがリュック背負い「地震来たよ」と「津波来るよ」と

放ち来し牛見付からず気掛りと一時帰宅の老いし牧夫は

節電に異は唱えずも暗き駅階段に喘ぐ老人たちは

救いなき原発のニュース流れいて深夜のテレビ火の酒呷(あお)る

無力なる吾が疎まし被災地の苦難のさまを短歌(うた)に詠むとき

文無しになったと嘆く被災者にいくばくの金配る論義が

印象の深きシーンは両陛下礼厚(いや)くして慈悲の面差し

原爆で敗れし国が原発で苦しむというこの皮肉とは

国家とはかくして傷み始めるか自然の脅威と人為の災で

「フクシマ」の影響世界に拡がりて原発論義囂(かしま)しくなる

懇ろな慰霊を早くして欲しい復興の業急ぎ進めて

災害を短歌(うた)に詠むのはもう止める吾の無力が疎ましければ

モナコ・F1グランプリ

グランプリF1(ワン)レースの決勝で曽游のモナコは興奮の坩堝

ホテルから眼下のヘアピンカーブをば凌(しの)ぎて競うレーサーたちは

華麗なるモンテカルロを駆け巡る七十八周可責のレースは
苛酷なるレースを制し五位となる「小林可夢偉（カムイ）」の健斗を称う
追憶のモナコを駆けるF1を深夜のテレビ昂ぶりて視る

故郷・ヨサコイソーラン

故郷は変わりかわれど訪うたびに変らぬものを探し求めり
多彩なるか将（はた）混在か札幌は正体うすき街となりしか
抑揚の少し異なる札幌の人々の輪に戻りて楽し
学び舎の広きキャンパス立て込みて緑の樹間狭まりており

新緑のやゝ深まりし札幌はヨサコイソーラン賑わいの渦
いつの間に名物行事と囃されるヨサコイソーラン汝（なれ）は何者
観光の目玉となして札幌は市内随所に桟敷組みおり
重（おも）おもの名を冠したる「連」組みて大旆もとに男女が跳ねる
「ヨサコイ」と「ソーラン」の調和いくばくか賑わいの中見たきものなり
その演舞おどろおどろの奇を衒うヨサコイソーラン美しいのか

日常・身辺

この国の文化と人を愛しみ「ドナルド・キーン」は帰化すると言う

復興を援けたいから日本に帰化すると言う「ドナルド・キーン」は

ムスリムの反米の魁「ビンラディン」撃たれて果てぬテロリスト哀し

殉教者将(はた)テロリスト「ビンラディン」斃れ評価はいづれに帰すか

妻喪くし悼亡(とうぼう)の短歌(うた)詠みつくす「永田和宏」悲愴なる言

ホームレス歌人の跡追う一冊の本が出されてドラマは終る

朝日新聞歌壇

愛誦は「斉藤史」とて詠む短歌(うた)は昭和ロマンの「曽根竣作氏」

酒酌みてカラオケ好む友逝けば夜の巷に行かずなりけり

老いなれば無理はすまじと遣り掛けの歌稿仕舞いて寝酒はじめぬ

愚直なる吾が詠む短歌(うた)に潜ませる何かが欲しい何があるのか

残生を余白と称しその先を糊代(のりしろ)と呼ぶペシミストおり

身の丈に合いし一生(ひとよ)か顧りみて悔いも誇りもほどほどなれば

俳句

春嵐し

勝山道子

元日や米寿のわれに舞扇

拍手(かしわ)をあわす事なく年始め

年新らたかまぼく厚くほゝの中

正月の雑煮の味はそのまゝに

老の身で祈る年の瀬海ゆかば

北海の切身の鮭やななかまど

寒ぼたん恋しき人にめぐり会ふ

この硯瀧に打たれし寒の那智

春雪のすき間に見ゆる蕗の薹(とう)

曽我の梅富士借景に一人旅

みちのくの名に悲しきや春嵐し

不明とは死につながりし春彼岸

地震(ちよ)津波荒れたがれきの春の海

大地ゆれ津波荒して桜咲く

亡き人へ心痛める春津波(しゅん)

冠雪の富士にむかいて五月風

ブルベリー一つ一つをもぐ甘さ

補聴器にもずさえずりをのかさずに

老先の余生余白の花菖蒲

桜餅わが青春の想ひあり

ほころびる桜は稚児の笑に似る

想ひ出は想ひ出を呼ぶ夏帽子

病む友を見舞いてマスク懐(ふところ)に

八ヶ岳雲かゝり行く稲架かな

山際を走る車道に栗三粒

草紅葉父母の墓前に忍ぶごと

梅干して仕上げよきやと夏の月

久遠寺の年越す桜天を突く

七段の雛を飾りて深呼吸

ちらほらと野梅咲き初む年の暮

俳句

朧月

石野茂子

報徳社日の丸かざし初日の出
初旅は恵方の遠出那智の滝
元旦の開運の月熊野灘
初夢は古道みちずれヤタガラス
年毎に増える出会いの年賀状
春風や羅漢の中に父の顔

倒れたる銀杏にひこばえ数多かな
春愁や旅芸人のあの笑顔
母恋し波間に漂う紙風船
琵琶の音に平家を偲ぶ朧月
朝焼けの雲は如来に変わりけり
結納の膳晴れやかに梅雨に入る
夏の雲仰げば逝きし友の顔
闘病の夏越せぬまま命つき
夏風や応援席に友は無く
二胡の音に手踊り揺れるおわら節

掛け声は踊りやぐらの若い衆
浴衣着て露店にぎわう盆踊り
里山に流れるチャイム赤とんぼ
瓦屋根満月照らす古都の夜
風立ちて蔵の枯れ葉が舞い落ちる
山茶花の花飾りして歌留多取り
ゴンギツネ初冬の宵の影絵かな
いつのまに師走になりぬ今朝の風
夕映えが師走の町に長く伸び
ありがとう祓い清めて除夜の鐘

詩

窓

石野茂子

毎朝開ける　その窓は
淀んだ部屋の空気を一変させ
爽やかな大気を取り込む
遥かに望む波濤の煌めきと
防風林の松林
砂地を覆う野菜の蔓が
夏の匂いを届ける

時折行き交う乾いた車の音と
農婦等の華やかな騒めき
ようやく地上に出られたことを
喜びあうかのような蝉時雨
聖堂の鐘がこの世のすべてを包み込むように
そして開放するかのように荘厳に鳴り響く

窓を開け放した手に
どこからか天道虫が来て止まった
天道虫の赤は

幼い頃　母と見た夕焼けの赤に似て
無性に懐かしい

都会のビルが建ち並ぶ騒音の狭間で
個人病院の個室に窓が一つ

今日はどんな景色を見ようかと
窓を開ける

民話詩

真夏の夜の夢―夜泣石―

石野茂子

地に足が着かず　横揺れの中で　身動きも出来ず
熱気をはらんだ雑草のむせかえるような闇の中
一瞬　スポットライトの中に　今産み落としたばかり
の我が子　手を伸ばそうにも身体が動かない
油汗がうねうねと身体を這ってゆく
何日同じ夢ばかり見るのだろうか
東海道への誘いは　夢からのスタートであった

峠の上まで続く石畳　明治初年　民衆は石畳の普請にかりたてられ、過酷な使役の中　見張りがいる中を逃げることもできず年月を費やして石畳は完成した　一歩一歩踏みしめる石畳の両脇で　高く伸びた孟宗の竹林が大きくざわめき　足元のうつぎは清楚な白い影を落としている　竹林の葉擦れのざわめきの中をやっと峠に抜け出た
　はるか向こうの峠にいたるまで　百米の勾配が続く九十九折りの急な坂道をススキに葛の葉が覆いかぶさるようにして甘い香りを放つ　踏み止まる事も出来ず下る足元を　時折　熱風が吹き上げてくる　この気だるい雑草の匂い　何かの書物にあった人間は生きている事が罪作りだと　さしずめ私は藤丸籠の中に揺られる罪人であろうか　身動き出来ず横揺れの中を罪を嘆き死をおそれる　古来どれほどの人がこの難所を行き来したであろうか　いつ足をとられて　籠ごと放り出されるのか　生きたここちもなく滝のごとく熱風かき分け落下してゆく

少し日も暮れかけて着物姿の女が一人　前を歩いて行く
両方の袂で刀を抱き　臨月のお腹をいたわるように　そろそろと峠をめざしている　生活苦のため　いよいよ家宝をお金に換えようとするのだろうか　見晴らしの良い周りの山々は少しづつ闇に呑まれようとしている　その時　突然　追剥が現れ刀を奪い取るや女を斬りつけた
驚きのあまり　か細い叫び声をあげながら女は草の中に倒れ　子供を産み落としてしまった　何とか我が子に手を差し伸べようとするのだが身体が動かない　夥しい血の海の中　薄れる意識の中で手の先に何か冷たいものをとらえた　大きな石であった　我が子を助けたい母親の強い一念は　石を泣かせ　松風のざわめきの中　峠にある寺で読経中の住職の耳に届いた　住職が駆けつけた時既に女は絶命していた住職は手厚く女を葬ると　赤子を寺で育てた　音八となずけられた赤子は　大阪へ刀磨ぎの奉公へ出て　そこで母の仇と出会った　無事本懐を遂げた音八は母の墓前に報告し　生涯母の霊を弔った

女の絶命した場所で冥福を祈り　あたりに咲きそろう白い花を摘んで手向けた　夢の続きはそれからどうなったのかと考えながら　しばらく急な坂道を登りきると円筒形の歌碑がある峠に出た　古来東海道の要衝として賑わったこの峠で　どれだけの出会いと別れがあったであろうか
人生において峠とは終着点であろうか　それとも通過点として今までの旅を思い起こしながら　これからの旅路を考える所でもあろうか　私は今を切実に生きたいと思った

年たけてまた越ゆべしと思ひきや
　命なりけり小夜の中山

創作童話

桃

石野茂子

伊藤家の食卓は、毎朝食事の時間が決められていてお父さんは前の晩、仕事の接待でどんなに遅くなっても翌朝は、約束の六時に食卓につきました。子供たちも眠い目をこすりながらおはしを並べるお手伝いを日課にしていました。食卓の朝食は、年中旬の果物が用意されていました。しかしある朝おじいちゃんは、いちごをほおばりながら、

「いつも店で買ってくる果物もいいが、たまには庭で育てた果物を食べてみたいなあ」

と言い出しました。それを聞いた嫁の裕子さんとお婆ちゃんの和子さんは、本棚から果物の本を取り出してそれなら何を植えようかと、温暖地方で植栽できる果物のページを開きました。食卓は久しぶりに、にぎやかになりました。ミカン、リンゴ、なし、ぶどうといろいろな意見がありました。みんな自分の好きな果物ばかりを取り上げたり、簡単に食べれるものなど、思い思いの言い分を言い合いました。しばらく、皆の言い分を黙って聞いていたおばあちゃんが、お茶を飲みながら、

「むかしから、桃くり三年、柿八年と言うから、桃はどうかねえ」

という意見に、皆は賛成しました。裕子さんは早速次の日、農協のフルーツガーデンに出掛けて桃の苗木をさがしました。多くの種類の苗木があり、すっかり面食らってしまった裕子さんは、

「おじさん、甘くて大きくて早く実がなる桃の苗木を一本ちょうだい」

裕子さんが買ってきた苗木を、おじいちゃんは庭の日当たりの良い所に植えて水や肥料をいっぱい与えました。孫のヒロくんとユウくんも一生懸命お手伝いをしながら、どんなふうに桃がなるの、大きさはと矢継ぎ早に質問をしながら、おじいちゃんの話を真剣なまなざしで聞いていました。秋から冬にかけて、おじいちゃんは寒さ

避けをしたり、翌年は本を見ながら剪定したり、その次の年も孫達と一緒になって肥料や水の管理をして一生懸命桃の世話をしました。

四年目の春、桃はピンク色の鮮やかな花を枝いっぱいに付けて咲きました。おじいちゃんが

「さて今年は実が成るぞ。楽しみだなあ」

孫たちのランドセルの後ろ姿をみながら、ここ四年間の桃の成長を思い起こしました。それからというもの桃の小さな実を見つけると、成長記録を台所のボードに孫達が書き始めました。ここ数年会社の出張で中国へ行っていたお父さんが帰国しました。お父さんは、家族の話し合いで桃の苗木を購入し、桃の成長を語り合う家族の明るい声を笑顔で聞いていました。お父さんも加わって食卓はいつにも増してにぎわいました。

特にお父さんは、子供の成長ぶりを喜びながら、居間から見える桃の木に小さな幸せを感じていました。

その年、桃は全部で十三個の実をつけました。蜂が来るようになると裕子さんは、おばあちゃんと虫除けの白い袋を作り、おじいちゃんは、孫達と袋掛けをしました。桃の木に白い袋がかかると、初夏の風が吹くたび、カサカサと乾いた音をたてていました。

「これで大丈夫だぞ。あとは桃が熟れるのを待つばかりだなあ」

とおじいちゃんが言うと、孫達は、

「楽しみだなあ」

と二人でバンザイをしました。

ある朝、おじいちゃんは、今日あたりそろそろ食べごろかもしれないと、薄暗い中を庭に下りてみました。おじいちゃんの突然の大声で伊藤家の皆は何事かとパジャマのまま庭に集まりました。あろうことか、桃が五個もぎ取られ袋と桃の皮が無残にも垣根の外に、きれいにむかれて捨ててありました。

「人のお家のものを、勝手に誰かが食べたの？何故、何故なのおじいちゃん」

ヒロくんは、納得がいかないという顔で、おじいちゃんの手を叩いて怒りをあらわにしていました。ユウくんも、眼に涙をいっぱい浮かべていました。

「誰かがフェンス越しに、空き地の方から手を伸ばして食べたのかなあ」

とお父さんが南側のフェンス越しにある、会社の駐車場を覗き込むと、

「でも白い袋がかけてあるんだから、どれが熟れているのか、どうしてわかったのかしら。それも真っ暗な中で」

とお母さん。

「でも普通欲しくて採るなら、こんな暗闇の中で、こんなに綺麗に皮を剥いてたべるかねえ。もっと明るい所で食べるよねえ」

とおばあさんが、きれいに剥かれた桃の皮をつまみ上げ

ました。
「夜中にトイレに起きた時、ガラス越しに庭を見たが誰も見なかったなあ」とおじいちゃんは、すっかり困りはてた顔で食卓につきました。皆あきらめきれず、無言で朝ごはんを食べ始めました。するとヒロくんとユウくんが何を思いついたのか部屋へ入り、しばらく出て来ませんでした。
そのうち二人で出てくると、大きな広告の裏に、
"僕達家族が楽しみにしている桃です。どうか食べないで下さい"
と書いた紙をおじいちゃんに桃の木にはってもらうようにたのみました。
孫の行動に胸を熱くしたおじいちゃんは昼間考えに考えて、桃の木の近くにセンサーを取り付けて、何かを待つことにしました。
それから二日後の夜中、家中にカミナリのイナビカリのようなすごい金属音が鳴り響き、家族は飛び起きました。センサーが何かを捕らえたのです。お父さんはバットを持って廊下から庭に裸足で飛び降りました。おじいちゃんは、木刀のような棒をもち、おばあちゃんと裕子さんは、カラーボールを、ヒロくんとユウくんは、サッカーボールを持って、皆廊下に勢ぞろいしました。月あかりの中で家族が見たものは、桃の枝でたぬきの親子が桃をとっていたのです。
「僕たちのだあー」
ヒロくんとユウくんが大声で叫ぶと、庭へ裸足で走って行きました。たぬきの親子は南側の駐車場の暗がりの方へ、一目散で逃げ出しました。桃は丁度、家族の数だけ残っていました。
翌朝、朝日がいっぱい射し込んだ伊藤家の食卓では朝食の用意の他に、家族全員が待ちこがれた洗い立てのみずみずしい桃を全員が幸せそうに頬張りました。

漢詩

潮騒録（六五）

鯨游海

祝吉田忠雄先生叙勲

平成廿二年十一月

夙夜研精遂結昌
掌中瑞寶菊花章
何人使子驅天命
誰有糟糠妻與觴

押韻・昌　章　觴

〔吉田忠雄先生の叙勲を祝ふ〕
夙夜の研精　遂に結昌す
掌中に瑞宝　菊花の章
何人ぞ子を使て　天命に駆らしめたるは
誰か有る　糟糠の妻と觴と

〔注　解〕
この年の文化の日、同人吉田忠雄先生が瑞宝中授章を受賞された。同人一同欣快に堪えない。
先生は火薬学の世界的な泰斗で東大名誉教授、前足利工業大学長。更に周知の如く滋味溢れるエッセイストでもあられる。ご趣味ご嗜好はカメラとお酒との由。
夙夜＝早朝から深夜まで。研精＝精しく研究すること。孔安國（孔子の12代目の子孫。漢の武帝に仕えた博士）・尚書序「研精覃思　博考軽籍」。簡野道明・字源縁起「研精覃思　夙夜拮据　十数年の久しきに彌る」と記す。
菊花＝天皇家の紋。子＝先生。
糟糠妻＝酒かすと米ぬかの粗食に堪え、長年苦労を共にした妻。十八史略・東漢「貧賤之交不可忘　糟糠之妻不下堂」。觴＝さかずき。愛飲家の像徴として用いた。
結句は反語。口語訳すれば「糟糠の妻と好きな酒を除いて誰が居るというのか、居る訳がない」。即ち「学者という天与の使命に没頭出来たのは妻と酒のお蔭だ」。

☆吉き報せ糟糠の妻に先ず告げん
夜は二人して杯に聴かせん

書・田寺芳山人

處暑偶作

平成廿二年八月

白日紅蓮滑暑時
如泥横臥汗成池
今人罪業盗油罰
偏怖秋風不永吹

押韻・時池吹

〈処暑偶作〉

白日紅蓮にして　滑暑のとき
泥のごとく横臥すれば　汗池と成る
今人の罪業　油を盗みし罰
偏に怖るるは秋風の　永へに吹かざるかと

〔注　解〕

處暑＝二十四節気の一つ。八月二十三～四日頃。
白日＝白昼の太陽。紅蓮＝まっ赤な炎の色の形容。
滑暑＝むしむしとして暑いこと。中唐の詩人、柳宗元の詩・夏昼偶作「南州滑暑酔如酒　隠几熟眠開北牖・・・」
罪業＝(仏)罪悪の所作。業は悪を生む原因となる仕業。
今人＝現代人。盗油＝孔子が名前を忌んで飲むことを拒んだという泉（盗泉）に準らえて引用した。産業革命以降、現代人が原油を採掘し燃やし続けた罪科をいう。

☆奈の科ぞ風吹き給へ汗よ休め
　唯だ怖づ秋の永久に来ざるを

歡喜二十有三人生還

平成廿二年十月

地底磐崩閉鑛夫
貫通千丈一縷途
萬人呑息生還劇
只禱蛛絲破斷無

押韻・夫途無

〈三十三人生還に歓喜す〉

地底の磐崩れ　鉱夫を閉づ
貫通す　千丈一縷の途
万人息を呑む　生還の劇
只ら禱るは　蛛糸の破断すること無きを

〔注　解〕

チリ鉱山の落盤事故の救出ドラマには、世界中の耳目が注視し、幸い成功裡に終り感動を与えた。三十三人の鉱夫が七百メートルの地底に六十九日間も閉ざされ、結果的には一人を欠くこともなく救出されたのは未曾有の快挙であった。然も全世界に映像で同時放送され、歓喜の再会の様子を伝え続けた。
救出に使われた機材や技術、安全への配慮等には主要先進国が協力を惜しまなかった。日本の技術も役立ったという。詩題の「有」は「又、更に、～と」接続詞。
一縷＝一本の細い頼りなげな糸。続通鑑綱目「卒有取民麻一縷以束芻者立斬以徇」。転じて僅かな、かすかな。

蛛絲＝蜘蛛の糸。芥川龍之介の短篇小説の題。「地獄に落ちた男が、やっと掴んだ救いの糸をエゴイズムの為失ってしまう」という物語り。Parel Carus〝The Spider Web〟より。

ここでは三十三人の見事な団結ぶりを暗示した。また、承句の一縷と呼応し、救出現場の緊張感を表現した。

只は只管で「ひたすら」。破斷は造語で正規の熟語にはないが、ここでは単に糸だけではなくプロジェクトの破綻をも兼ねた。

☆鉱夫らが縋りて登る蜘蛛の糸
南無釈迦牟尼仏断ち切るなかれ

《漢詩の流れ54・清その三》　呉偉業②

過呉江有感（呉江を過って感有り）

落日松陵道　落日　松陵の道
堤長欲抱城　堤長くして　城を抱かんと欲す
塔盤湖勢動　塔わだかまって　湖勢動き
橋引月痕生　橋引いて　月痕生ず
市静人逃賦　市静もりて　人は賦を逃れ
江寛客避兵　江寛やかに　客は兵を避く
廿年交舊散　廿年　交旧散じ
把酒歎浮名　酒を把って　浮名を歎ず

（口語訳）

松陵（呉江の別名）への道に日が没した。
堤は長く、市街を抱きかかえるようにして続く。
寺院の塔がどっしりと立っていて湖水がゆり動かそうとしても無駄である。
月が橋に引き寄せられるようにして昇って来た。
街中がひっそりと静まっているが、それは市民が税を逃れて四散したからだ。
江は舟が居ないので広くみえ、旅の私は兵乱を避けて旅ゆく。
二十年来の旧友は何処かへ散ってしまった。
酒杯を挙げて、改めて我が俗世の官にある身を恥じる次第である。

明末清初の歴史を愼重に歌い上げた。少しでも清朝を譏ると解されれば命はない。
この為彼の詩は沈潜する。運命に翻弄され、ゆれ動く人間の哀しみ、儚なさを句にした。為に却って読者の胸をうつ。
――私の詩は後世に伝えるに足らぬが、詩中の寄託に苦心があり、後世の人が読みとって泣いてくれるだろう――と語ったという。
詠史の妙手といわれる所為である。

マルタ共和国

漆原直子

マルタ共和国（以下マルタと記載）をご存じだろうか？地中海に浮かぶ、シチリア島の南にある小さな3つの島々、マルタ島とコミノ島とゴゾ島等からなる国で、総面積は316平方キロメートル、日本の五島列島の福江島（約326平方キロメートル）にほぼ等しい。首都はヴァレッタで、人口は約38万人である。訪れたことのある日本人はまだ少数だと思うが、第1次世界大戦以降、日本とは少なからず関係があり、交流を持っていた。また、訪れる日本人は少ないものの、車等輸入される日本製品はかなり多い。私の初めての海外旅行が、そのマルタであった。

ちょうど今から約20年前、仕事の上で師事していた方からのご紹介で、日本マルタ友好協会の発足準備に関わることになった。地中海文明に興味もあり、地中海に触れる良い機会だと思った。その事初めとして、マルタのジャーナリスト（マルタの新聞社ユニオン・プレスの総支配人であり、マルタ中国友好協会会長）ご夫妻を日本に招き、同友好協会のH女史と2人で京都案内をした。専ら通訳は、イギリスに長期滞在経験のあるH女史で、私はその補佐役であった。京都の主な観光地をタクシーで巡ったが、そのジャーナリストの方は京都の街並みより、走っている車のメーカーを見ることの方に専念していた。が、楽しい旅行であった。

その後、1989年の10月末から11月にかけて、様々な方々と15名位のグループで、第1次親善視察団としてマルタ共和国を訪れた。（その約1カ月後に、マルタ沖にて、ソ連のゴルバチョフとアメリカのブッシュが、冷戦終結に向けて『ヤルタからマルタへ』と銘うった歴史的な首脳会談を行った。）出国の前日、私は風邪で熱発していたが、これが最初で最後の海外旅行かもし

れないと思い、解熱剤で熱を下げ、当日何とか出発することができた。しかし、体調は旅行中ずっとすっきりせず、フラフラしながら、皆の後をついていった。（帰国後、咳が止まらないので受診したら、マイコプラズマ性の気管支炎であったことがわかった。）

マルタにはアラスカのアンカレッジ空港を経てロンドンへ行き、ヒースロー空港からマルタ行きの飛行機に乗り換えた。宿泊先は、首都ヴァレッタにある地中海に面した、国営のドラゴナーラ・パレス・ホテルである。4日間の滞在日数の中で、大統領官邸の訪問や、マルタの〝フレンド・オブ・ジャパン〟（マルタ側の日本友好協会）の方達による歓迎会への参加等、マルタの人々との交流を図った。また、観光として、マルタ島の古代の巨石神殿や聖堂、ヴァレッタ市内、古都イムディーナ、ゴゾ島の各所を見学した。古代から中世にかけての遺跡や現在でも使用されている建築物を見て、その歴史の重み、重厚さに圧倒された。まるで時間が止まっているかのようである。首都ヴァレッタは町全体が要塞のようで、海上から見ると、城壁が海中からそそり立っている。

主な産業は観光地（中世の城を思わせるような豪奢なホテルやカジノがある）、漁業、伝統工芸（レース編みや金銀細工、吹きガラス等）である。その他、オーストラリア・リビア・カナダ・イギリス等への出稼ぎや移民が50万人以上いて、本国へ外貨を送っている。選挙やカーニバル等がある時は、帰国するとのことである。

マルタは地中海性気候で乾燥しており、鉱物資源も無く、樹木もほとんど無い。丘はあっても、山や川は無い。紺碧の海と真っ青な空に挟まれた、緑と土色の空間である。飲み水は海水から精製しているが、実際飲んでみると塩分が残っていて、海水を薄めたような感じである。とても、ゴクゴクとは飲めない。しかし、海水から飲み水を作る技術は、世界で初めてマルタが実現したもので、現在は技術も高まり、塩分の残留はほとんど無いという。

ここで、マルタ共和国の歴史を振り返ってみたい。まさに、地中海の覇権争いの要衝の地であり、東西文明の十字路、イスラム教とキリスト教との攻防の場でもあった。日本の沖縄の歴史との類似性を指摘する見方もある。マルタの公用語は英語とマルタ語で、マルタ語はアラビア語の影響が強いとされる。宗教はローマカトリックである。ちなみに犬のマルチーズ犬は、フェニキア人が中国から小型犬をマルタに持ち込んだことから派生した。

BC

5000年頃

（新石器時代：日本では縄文時代）

シチリア島（紀元前1万年頃の集落跡が発見されている）から人々が移住しスコルバ神殿を築き始める。

3750年頃

移住の第2波が渡来し、タルシーン、ジュガンティーヤ、ハガール・キム等の巨石神殿群が築かれる。（＊これらの遺跡から、妊婦を象った豊穣の女神の石像が出土している。マルタではこれら巨石建造物は一人の女巨人が造ったという伝説がある。）

2400年頃

ハイポジウムの地下神殿が、ハル・サフリエニに建造される。（＊このハル・サフリエニより横臥位の地母神像『眠れる女神像』が出土している。）

2200年頃

これらの文明が突如として消える。気候の変動によるものか、その後、数百年間無人島になる。（＊この頃、今のシリア北東部にあるメソポタミア文明の都市の近くにある火山が噴火して、世界各地に大干ばつをもたらし、シュメール文化を始め、長江の文化やエジプト古王国等の文化が滅んだとされる。）

2000年頃

（クレタ文明が栄える）

銅や青銅器を持つ民族が移住してくるが、巨石神殿を築くことはしなかった。ドルメンを墓地として利用した。

渡来の波は続き、新旧の移住者間の争乱も起きて砦を持つ集落が形成されるようになる。カート・ラッツ（轍のような2本平行の線。イタリアから北アフリカにかけての海底を通っている）が刻まれる。

鉄器時代が始まる。

900～800年

フェニキア人による支配を受ける。

700～550年

カルタゴ（フェニキア人国家）による支配を受ける。

550～218年

第1次ポエニ戦争。

264～241年

第2次ポエニ戦争。ローマ帝国によりマルタが併合される。

221～202年

第3次ポエニ戦争。

150～146年

AD

60年

聖パウロが漂着し、キリスト教が伝えられる。

395年

東ローマ帝国による支配を受ける。

5世紀

ローマの勢力が衰え、ヴァンダル族（系統不明の民族で、カルタゴを占領しヴァンダル王国を築く）が急襲する。

6世紀

ビザンチン帝国のベリサリウス将軍がマルタを占領。

870年

チュニジアのアグラブ朝によりマルタ島侵略される。

1048年

東ローマ人によりマルタ島が奪回さ

1090年　ノルマン人によりマルタ島が侵略を受ける。

1122年　アラブ人の反乱と支配を受ける。

1144年　東ローマ人によるマルタ島の奪回。

1194年　神聖ローマ帝国によるマルタ島とシチリア島の併合。

1282~1412年　アラゴン王国によるマルタ島とシチリア島の支配。

1429年　アラブ人によるマルタ奪取。

1530年　神聖ローマ皇帝カール5世はロードス島の聖ヨハネ騎士団に、マルタ島の所有権を承諾する。（＊聖ヨハネ騎士団は、1023年にイタリア・アマルフィの商人がエルサレムに病院兼巡礼者の宿泊所を設立したことから発展し、1113年に成立。ホスピタル騎士団とも呼ばれた。エルサレムがイスラム教徒の下に陥落した後、キプロスを経て1309年ロードス島に逃れ、ロードス騎士団と呼ばれた。1522年にオスマン・トルコを攻撃して敗退し、マルタ島に移る。以後、マルタ騎士団となる。）

1565年　オスマン・トルコ軍によるマルタ侵攻。『大包囲線（The Great Siege）』

1566年

1571年　ヴァレッタ市の工事始まる。
レパントの海戦（教皇・スペイン・ヴェネチア連合艦隊対オスマン・トルコ艦隊）に参戦し、トルコ軍と戦い勝利。

1798年　ナポレオンI世の攻撃によりマルタ陥落。（＊一発の大砲で騎士団は敗走。この頃は戦力としては弱体化していた。）

1800年　268年間の騎士団の時代が終焉する。
イギリスに占領され、1814年のパリ条約により英国領となる。

1834年~現在　マルタ騎士団は、『ロードス、マルタ及びエルサレム聖ヨハネ軍救護騎士修道会』として本部をローマ市に置き、国際的な医療活動を行う。
（＊これは現代もNGOとして活動しており、（＊マルタ側は、フランス人師団長ジャン・パリ・ゾ・ド・ラ・ヴァレット率いる兵力約9千に対し、オスマン・トルコ側は、ムスタファ・パシャ率いる約4万の軍勢であった。約4カ月間の熾烈な攻防戦の後、マルタ側に1万の援軍が来て、トルコ側を敗退させた。双方とも多大な犠牲者を出していた。が、ヴァレットの功績を讃えて、新しく建設した都市を『ヴァレッタ』と名付けた。）

国土を持たないが国連のオブザーバーとしての主権実体を持つ。独自に郵便局を持ち、その修道院の敷地はイタリアの治外法権下にある。世界各地に診療所を持つが、日本との国交は無い。現在は77代目の団長の下に、約8千人の団員＝医療戦士がいて、中には日本人もおり、アフリカや東南アジア等において、結核やエイズ、ハンセン氏病等の感染症と戦っている。）

1861年　徳川幕府が竹内下野守一行の使節団（最初にマルタを訪れた日本人であったとされる）をヨーロッパに遣わしたがその途上マルタに寄港する。その使節団の中に福沢諭吉も同行していたとされる。

1914~1918年　第1次世界大戦中、『地中海の看護婦』として、傷病者のため2万5千床のベッドを提供する。また、すでに、イギリスによる支配が強化されており、マルタ全土が軍事要塞化され、英地中海艦隊の本拠地となっていた。
日本より派遣の駆逐艦「榊」、ドイツのUボートの攻撃を受け、59名の戦死者が出る。（＊日英同盟により、日本は連合国の輸送船を護衛していた所、Uボートにより撃沈される。マルタ島カルカラのカプチン共同墓地（イギリス軍墓地）には、その戦死者の墓碑がある。1921年には、皇太子だった昭和天皇が訪問。また、1971年には『日本さくらの会』が友好親善の印として、千本の桜の苗木と銅製の五重の塔を寄贈し、サン・アントン・ガーデンに安置されている。桜の木は枯れてしまった。）

1917年

1947年　第2次世界大戦後、英の基地経済に頼っていたが、独立の気運も高まり、新憲法のもと、軍事・外交以外の自治権が認められる。

1955年　総選挙にて労働党が勝利する。党首のミントフ氏が首相となり、以後、英からの独立を指導して行く。

1958年　英、財政合理化として、軍事基地を閉鎖し、基地労働者の大量解雇を行ったり、経済援助の削減を図ったため、抗議の暴動が起きる。英からの独立の動きがさらに強まる。

1964年　国民投票の下、「独立憲法」が可決され、英連邦内においての独立を果たし、同時に国連に加盟する。

1972年　1971年に再選されたミントフ首相は、基地依存からの脱却と平和政策を目指して、マルタにあったNATO地中海本部を閉鎖させる。

1974年　憲法を改正し、英総督府を廃止して共和国制を宣言。アンソニー・マモが初代大統領となる。

1979年　180年間駐屯したイギリス軍が撤退する。

1980年　非同盟中立を宣言する。

1989年　マルタ沖の艦船上にて、ソ連のミハエル・ゴルバチョフと米のジョージ・ブッシュによる首脳会談で、東西の冷戦の終結を迎える。

1997年　『ハル・サフリエニ・ハイポジウム』『ヴァレッタ旧市街』『巨石文化時代の寺院』の3つが、世界遺産に登録される。

2004年　EU加盟

以上、ざっとマルタの歴史を振り返ってみたが、小さな島ながら、実に多様で複雑な歴史を担ってきたことがわかる。現代においてもなお激動の歴史が続いていた。

マルタの歴史で、私が最も魅かれているのは、グロビゲリナ石という石灰岩で築かれた古代の巨石神殿群である。放射性C14.による測定結果で、地中海では最古とされてきたミノア文明よりも古い巨石建造物である。紀元前4千年から紀元前1千年の新石器時代のヨーロッパ各地では、多くの巨石建造物（ドルメンやメンヒル）が作られた。イベリア半島では、紀元前5千年から巨石文化（アルベリータ遺跡）が始まっていたとされる。こうした巨石の表面には、しばしば渦巻き文様・螺旋が彫り込まれている。マルタ島の神殿にも見られる。マルタ島のタルシーン神殿（紀元前約2千8百年頃）にも一面に渦巻き文様が刻まれた基壇がある。アイルランドの紀元前4世紀のニューグレンジの墳墓の石室の入口にある割石の表面には、いくつもの渦巻き文様が刻まれている。これらの渦巻き文様を見ていると、日本の吉備の楯築遺跡（AD3世紀前後の弥生時代最大の墳丘墓）のご神体の『弧帯文石』と似ているように思える。時代と場所の大きな隔たりはあるが、いずれも海洋民族が残した遺跡であり、人が移動を繰り返す中で、神聖視された文様が伝承されていったのではないかと思える。また、ヨーロッパにおける巨石建造物は、墳墓として石室を形作る物もあり、日本の石舞台古墳等、巨大石室をもつ古墳との類似性を感じる。

マルタに最初に渡って来た人々は、シチリア島経由とされているが、なぜこの小さな島に、世界最古とされる巨石神殿を築いたのか？シチリア島を始め、周辺の島には見られない。カート・ラッツが海底にもあるように、もしかしたら海底に沈んでいるのかもしれない。最近はマルタ島が、プラトンが『ティマイオス』や『クリティアス』の中で語っている海底に沈んだ〝アトランティス大陸〟ではないかという説もある。また、ゴゾ島には『カリプソの洞窟』があり、ホメロスの叙事詩の「オデュッセイア」に登場するカリプソとオイディプスの伝説の洞窟とされる。また、巨石神殿は一人の巨人の女が造ったという伝説もあり、それがカリプソか……世界の神話には、日本も含めて、〝巨人〟とされる人々の伝承が残されている。このマルタでも、先に触れたように、一人の巨人の女が神殿を造ったという伝説があり、日本も先住民としての〝ダイダラボッチ〟伝説が各地に残されている。巨人とは誰だったのか？人知を超えた驚異を理解しようとして想像したものか……これらの神殿からは、妊婦を象った地母神像（マルタヴィーナス）が出土している。世界各地でも日本の縄文時代においても地母神像が発見されているが、胸部と腰部を強調した豊満な体型をしているものが多い中、マルタヴィーナスは豊満を通り越して、肥満体を呈している。

私が、マルタに行った時は、ハガール・キム神殿に行き、内部を見学し、巨石の上にも上ることができた。（左図…神殿の上に立つのは筆者）

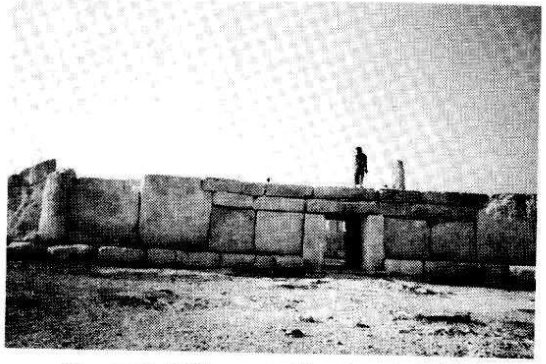


図　マルタ島　ハガール・キム神殿

現在は遺跡保護のため、大きなテントで覆われ、柵を張られて、中には入れなくなったそうである。遺跡保護のためには、必要な措置だが、中に入れないのは遺憾である。

マルタは、紀元前8世紀にフェニキアの支配を受けてから、1964年の主権国家になるまでの間、カルタゴ、ローマ、ビザンチン、アラブ、アラゴン、フランス、イギリスと、次々と異民族による支配を受けてきた。〝マルタ〟という言葉自体が、フェニキア語でMalet（安全な場所）という意味をもつ。概ね十数年から2百年間位で支配者が次々と変わり、1979年にイギリス軍が撤退してようやく真の独立国になった。公用語であるマルタ語がアラビア語に近いのに、文字はアルファベットで表記されるというユニークな言語とされる。こ

ゴゾ　ジュガンティーヤ神殿

のことからしても、複雑に絡み合った歴史的背景を感じさせる。

現在のマルタをマルタたらしめているのは、マルタ騎士団が活躍した十字軍の時代である。「十字軍」は世界史の中では良く知られている事象であるが、歴史を語る時、私達はどの立場に立ち、どういう視点を持つかで、その事象の語られ方はずいぶん違ってくる。「世界史」の場合は、私達日本人は第3者の立場に立つことを基本にして、それぞれの民族、それぞれの国の立場に立って見る。この「十字軍」の場合、イスラム教徒が一方的に侵略してきているかのような印象を与えるが、キリスト教徒も、そもそも聖地エルサレムの奪還という大義名分のために組織された軍事結社なので、かなり侵略的である。捕虜に対する扱い等、イスラム教徒と同じようなことをしており、お互いにお互いの捕虜を奴隷として使役し、海戦時にはガレー船の漕ぎ手としている。または、捕虜として捕えない時は、その場ですぐに斬首している。イスラム側からみた「十字軍」の分析も必要である。(その例として『アラブが見た十字軍』アミン・マアルーフ著がある。)また余談ではあるが、歴史的事象の記述の仕方として、例えば学校の教科書等に「1492年コロンブスによる新大陸の発見」という表現が良く出てくるが、〝インディオ〟(これもヨーロッパ人による命名だが)という先住民が壮大な古代文明を築いていたのに、どこが〝新〟なのか?これはヨーロッパ人にとっての〝新大陸〟であるにすぎない。第3者の立場で語るなら、「コロンブスが(インド到達と誤認して)、サン・サルバドル島(現バハマ領)に上陸する。」となると思う。特に学校現場で習う世界史は、〝世界史=ヨーロッパ史中心史観〟で終始しているように思えてならない。私達は知らないうちに、歴史を常に欧米側からの視点に立って見るように教育されている。

今年の5月に、日本マルタ友好協会の集いがあった。私も久しぶりに参加したが、その時に『地中海地方の医療―マルタ騎士団の歴史と活動―』というテーマで、青梅市立総合病院名誉院長、慈生会ベトレヘムの園病院顧問 星和夫先生の講演を伺った。星先生は、医学史の歴史を研究され、西洋医学の元祖は、紀元前五世紀のギリシャのアスクレピオスに始まるとされる。地中海地方の医療は、ローマ時代には、ギリシャ医学の継承と錬金術に基づくアラビア化学・薬学が導入された。十字軍が始まると、1080年頃エルサレム内に聖ヨハネ病院が設立され、キリスト教徒の他イスラム教徒でも公平に分け隔てなく施療した。聖ヨハネ騎士団として活動し、後のマルタ騎士団は、軍事面のみでなく、エルサレムへの巡礼者の救護、介護を担った。そのため、十字軍との争いが始まっても、最後までエルサレムに残ったが、戦禍が激しくなると、病院内でキリスト側とイスラム側に別れて、戦わざるを得なくなったという。しかし、お互いに石を投げるふりをして、実はパンを投げていたなど、武力的な衝突を回避しようとしていた。十字軍は、聖ヨハネ騎士団以外に、テンプル騎士団、チュートン騎士団等があったが、徐々に廃絶され、聖ヨハネ騎士団だけがマルタ騎士団と名前を変えながら、今日まで存続している。これは1つの組織が、約900年も存続している事になり、驚くべき事である。星先生は、マルタの他、イタリア、ギリシャ、トルコと医学の歴史を辿っておられる。先述した『アラブから見た十字軍』の紹介をされ、キリスト教側からだけの歴史観ではなく、イスラム教側からの歴史観も大事にされていた。

雑駁ではあるが、マルタ共和国について概略をまとめてみた。同じ海に囲まれた島国として、私達はマルタの歴史に学ぶ所があるのではないか。友好協会ではこの20年間で、マルタ側の大統領や大使等の招聘や交流会、5次の視察団等を企画してきた。私はまだ1回しか訪れていないが、またいつか機会があれば再訪したいと思う。今度行く時は、是が非とも地中海マルタ沖でシュノーケリングをして、海底に遺跡が沈んでいないか探索したい。

また、機会があれば、多くの方々に是非一度立ち寄ってみて頂きたいと思う。

《参考文献及びサイト》 琉球新報連載『沖縄とマルタ』(1990年3月付) ／ 『サビッハ マルタ』楽天舎ブックス ／ 『十字軍騎士団』橋口倫介著 講談社学術文庫 ／ 『巨石文化の謎』ジャン・ピエール・モエン著 創元社 ／ 『医学史の旅 イタリア―マルタ』星和夫著 日本病院会出版 ／ 日本マルタ友好協会HP ／ マルタ観光局 HP ／ 中央地中海通信HP

被災のメルヘン

幸山周平

第一話（おばあちゃんの散髪屋）

大きな地震がありました。

その後もっと恐ろしいことが起きました。10mを超える津波が来ました。

港町でおばあちゃんは散髪屋をしていました。

おばあちゃんは、子供の頃から「津波てんでんこ」と教わっていました。津波が来たら、誰彼構わず裏山に逃げろと言うのです。誰かが、窓の外で「にげろ。にげろお。」と叫んでいました。

海が真っ黒になって、壁のように迫っていました。おばあちゃんは、取るものもとりあえず、みんなの後を追って裏山に逃げました。裏山には、たくさんの人が登っていて、何かを言っては、泣き叫んでいました。おばあちゃんも荒い息を吐き出して、後ろを振り向くと、散髪屋の看板と我が家が大きなきしみを上げて流されるのが見えました。あまりのことに声も出ず、その場にへたり込みました。

誰が避難所に連れて行ってくれたのか分かりませんでしたが、避難所には近所の顔見知りもいて、落ち着いてきました。でも、落ち着けば落ち着くほど、一年前になくなったおじいちゃんと50年も続けた散髪屋を失ったことが、おじいちゃんに申し訳なく思えてきて仕方ありませんでした。

水が引いた後の大きな道を時々「クロネコヤマト」の車が走るのを見ました。誰かが、「あの人達は、ただで荷物を運んでくれているんだそうだ」と言っていました。お金より、困っている人に荷物を届けることが今は、大事と思ってくれる人がいるということは、元気になる話でした。コンビニのローソンも開いたよという話も聞こえてきました。隣町では、イオンも屋上で開店して、商品が買えるようになったと言っている人もいました。

散髪屋のおばあちゃんには、帰る家も頼る親戚もありません。おじいちゃんと過ごした楽しい日々を思い出しながら、お客さんの電話番号を書き留めて暮らす避難所生活をおくっていました。

そんなある日、「クロネコヤマト」の人が、避難所のドアを開けて、おばあちゃんの名前を呼んでいました。「はーい。」と、声をかけると、段ボールの箱を持って近づいてきました。差出人は、東京に住む、おいっこでした。箱を開けると、そこには、おばあちゃんが無くした散髪屋の道具が全てはいっていました。おいっこも散髪屋をしていて、送ってくれたのでした。手紙に、「これでまた頑張ってね。」と、書いてありました。

おばあちゃんは、店はなくとも、お客さんの家を尋ねて散髪をしてあげようと思いました。はさみと櫛があれば、みんなに恩返しができるからです。

第二話（お父さんの時計）

三月十一日、卒業式の練習をしているときです。体育館全体が長いこと揺れました。いつもよりちょっぴり大きな地震です。大きな津波が来ると放送がありました。でも、僕は、来ても十cmくらいの津波だと思いました。僕のお父さんとお母さんも仕事を休んで僕の小学校に軽トラで迎えに来ました。お父さんだけ、

「大丈夫だな。」

という言葉を残して、また、仕事に戻っていきました。

その後です。目の前の国道を真っ茶色の水とがれきが流れていきました。ぼくは、お父さんのことが心配でした。車を運転しながら津波にのみこまれませんようにと、そう祈っていました。

津波から一週間経つのにお父さんは帰ってきませんでした。じいやんは、「おまえ達が学校に行けるよう頑張るからな。」といって泣きました。

卒業式の日が来ました。

ぼくは、「ありがとう」の歌を歌っているとき、お父さんに心の中で、「お父さんのお陰で卒業できたよ。ありがとう。」と、言っていました。そしたらなぜか、声が震えて涙が出てきました。その夜、卒業式の会場に作業着で入ってくるお父さんの夢を見ました。

次の日、お母さんの携帯に電話がかかってきました。消防署の方にお父さんらしき人が見つかったというのです。急いでいって見ると、口を開けてお父さんが横たわっていました。ねえちゃんは、泣き叫び、お母さんは声も出ず、弟は、じいやんにくっついていました。

顔を触ってみると、水より冷たくなっていました。

「何で仕事に戻ったんだよ。」

と、何度も何度もお父さんの胸の上で叫んでいました。

お父さんの自慢の胸のチタンの鎖、東京で買ったお守

りも、結婚指輪もそのままでした。
その時です。僕の目に、動いているものが目に入りました。時計です。お父さんが息絶えたときも、津波にのみこまれているときも、ずっとお父さんの側で、お父さんを元気づけていたのです。
今僕は、その時計を付けて中学校の正門をくぐりました。ずっと僕を勇気づけてくれる時計を左腕に付けて。

第三話（じいやんの船）

じいやんは、あの日からずうっと海を眺めては溜息をついています。青く澄んだ海は、今も昔もきれいで豊かな海そのものです。しかし、牡蠣養殖のいかだが湾一杯に広がる景色は、女川から消えてしまいました。
じいやんの船は、あの3月11日の津波で、海の底に引きずられ、姿を確認することもできません。
じいやんの周りには、これを機会に町を捨て、都会に出るものも現れました。じいやんより年老いた漁師の中には、廃業するものも現れました。
こんな怖い海の近くで暮らすのは、二度と嫌だという声も聞きました。
漁業協同組合に勤める息子さんは、このままほっておいたら女川から漁師はいなくなると心配していました。
インターネットで全国に、いらない船があったら譲って欲しいと声をかけました。船一艘は、車より高く、中には家一軒と同じくらいの船もあります。牡蠣養殖には、船外機で一人乗り程度のもので良いのです。
「船板一枚下は地獄」という言葉が漁師の間にはあります。地獄に堕ちないようにいつも漁師の命を守ってくれるのが船なのです。だから、海で働くものには、船は家族のようなものです。たやすく、譲ってくれるとは思えません。そんなある日、漁協の電話に連絡が入りました。電話の主は、舫（もあい）プロジェクトという会の人でした。いくつかの船を確保したのでそちらに送りたいというものでした。舫というのは、船と陸を結ぶ綱のことです。だから、漁師の絆という意味だとその人は言っていました。これからも次々と送るからという元気の良い声が電話の向こうから聞こえました。
船が来る日です。じいやんもトラックを出迎えました。トラックの荷台を開けると2艘の船が乗っていました。
しかも、手書きで大きな横幕に、「東日本大震災に負けるな」と書いてありました。全国の漁師と絆が繋がったような気がしました。じいやんも、一艘の船を譲り受けると子供のように、舫を陸のクイに巻きました。仲間の漁師が「まだ、腕はおちとらんのう。」と、冷やかします。
じいやんは、元の船主に、お礼をしようと携帯電話を取り出してかけました。驚いたことに、電話の主は、女

の人でした。しかも、譲ってくれた理由にもっと驚きました。この船で、夫婦二人で漁をしていたのだが二年前に夫を亡くしたと。思い出の詰まったこの船は手放したく無かったが、東日本大震災のニュースをみて、被災者の復興の手助けのためなら亡くなったお父さんも喜んでくれるに違いないと思い譲ることにしたのです。じいやんは、電話の途中でもう泣いていました。これは恥ずかしいと、「年のせいで涙もろいんじゃ」といつもの口癖をいいかけたのですが、今日ばかりは声にはなりませんでした。気を取り直し、
「私たち漁師は、海で生きていくしかないのです。この豊かな海で。私たち東北の漁師は、絶対に復興して見せます。ありがとうございました。」
じいやんは、電話を切り終えると、前より元気な顔になって船に乗り込み、真っ青な海へと漕ぎ出していきました。

旧体制に自ら幕を降ろした権力者たち

新井　宏

徳川慶喜、ゴルバチョフ、盧泰愚と並べると何を思うであろうか。意外なことに、それは自国民の間で極めて評価が低いと言う共通点である。

一般的に旧体制から新体制に移行する時には、旧体制は最後の力を振り絞って新体制への動きを弾圧したり軍事的に攻撃する。それがたとえ時代への逆行であっても、警察力や軍事力を保持しているからできる。そして大きな犠牲を生み新体制への動きを一時的に止めてしまう。

しかし、決してそのまま留まらないのも歴史である。そして更に悲惨な犠牲を伴って新体制が誕生する。

ところが、その例外ともいうべきものが前述の三人の権力者たちの行動だったのである。

『まんじ』の前号において、三戸岡道夫さんは「独創的な見解」の下で、江戸幕府最後の将軍徳川慶喜の偉大な政治性を描いている。勝者による歴史では意図的に抹殺されてしまった慶喜の行動も、知られた事実を通して三戸岡さんが紙背から補うと、あり得たかも知れない姿が鮮やかに浮かび上がる。

私も漠然とした意識ではあったが徳川慶喜を高く評価していた。

それはソ連最後の大統領ゴルバチョフ、韓国の軍事政権最後の大統領である盧泰愚にも共通して感じていたことであった。三人とも旧体制から新体制への過渡期に、旧体制を見捨てて「逃げた」政治家と見られ、時には優柔不断であり、自国民には人気が低い。しかし政治家の役割はポピュリズムとは正反対の所にある。

国民に人気がなく「待ちの政治」で何もしなかったと言われている佐藤栄作首相が、実は最高の経済成長を達成し、アメリカに核の傘を保証させ、沖縄の返還を勝ち取っている。政治は、ポピュリズムではなく、アンダーテーブルの世界が勝負である。

私は若者にこんな質問をすることがある。

「君は本当に坂本龍馬が明治維新を起こしたとでも思っているのか」と……。

いつの時代でも歴史の原動力は底に流れる経済状況にあり、そこに光を当てなければ正しい評価などできるはずがないのに、ポピュリズムは志士ばかりをもてはやしている。

理念や信念のない政治家は嫌いであるが、現実を無視して理念で動く政治家はもっと嫌いである。政治とは調整であり妥協である。理念が高ければ高いほど、偏りなく状況を正しく認識し、ポピュリズムに害されず調整し妥協しなければなるまい。

その意味で、徳川慶喜は当時の最高の知識人であり国内外の情報を最も豊富に持っていた。そうであればあるほど当時の幕府ではどうにもならないことを熟知していたはずである。

徳川慶喜にも最後のカケとして幕府の権力を甦らす選択枝もあった。精神的には、それの方がはるかに楽であった。それにもかかわらず、幕府の権力を縮減する政策ばかりを採り続けた慶喜に私は偉大な政治家の姿を見るのである。凡人には到底まねができないと……。

今回は、三戸岡さんに触発されて、旧体制に自ら幕を降ろした不人気な権力者たち二人に光をあてて見たい。

一、徳川慶喜

最高の権力者が最高の権威者であるのが、世界の常識である。しかし、日本はいつの時代も形式的ではあれ、最高の権威者は天皇であり、将軍はその下にいた。その将軍でさえも、自ら政治を行うのは例外であり、老中という交代制、合議制の上に乗る権威に過ぎなかった。

しかも、徳川幕府は日本を代表する政権でありながら、直接支配するのは日本のわずか四分の一であり、基本的には中央集権とはほど遠い存在であった。隣の朝鮮でさえ国王が最高の権威と権力を持ち、完全な中央集権国家を形成していたのと比較すると大きな違いである。

いわば、徳川幕府はもともと日本連合の最有力者で、外交権や通貨発行権を持った特殊な大大名に過ぎなかった。したがって天保の頃の勘定奉行扱いの予算を見ても年二百万両程度で驚くほど小規模である。地方政権である各藩の財政は幕府とは完全に独立していたのである。

しかし、幕府と諸藩の財政基盤は異なっていた。

江戸時代後期になると「米遣い経済」から「金遣い経済」への以降によって、どこの大名も経済的には困窮し、豪商などからの借金や藩札の発行で凌いでいた。たとえば、薩摩藩は五百万両の借金を抱え、その金利だけでも藩の収入を上回っていたのを天保六年(一八三五)に「元

金だけの二百五十年分割払い」という凄まじい条件で踏み倒しに成功した。

ところが、幕府は曲がりなりにも健全財政であった。基本的には直轄地の四百万石(他に旗本知行地として約三百万石)から上がる租税米で賄われていたのは同じであるが、参勤交代の負担もなく、大きな出費を要する普請などでは諸大名に割り当てることができたからである。

しかし何よりも大きかったのは通貨発行権を独占していたことである。

天保三年から十三年までの勘定奉行扱いの収入平均は二百十三万両であるが、その内に出目と称する収入が六十九万両もある。出目とは金純分が十五グラムの慶長小判を二枚溶かして金純分十グラムの元禄小判を三枚作るような行為であり、江戸時代を通じて、絶え間なく続いていた。江戸時代最後の小判である万延小判の金純分は実質的に一・四グラムであるから、最初の慶長小判から見れば十分の一まで軽量化していたのである。

しかも幕府は小判だけでなく、天保一分銀とか安政一分銀とか称する銀貨を発行し、これを小判の補助貨幣として流通させていた。金銀比価からみれば、銀としては三分の一程度の重量しかなく、いわば銀で作った紙幣のような銀貨であった。これは幕府が偽札を作っているようなもので、現在米国がドル紙幣を印刷し続けて赤字を補っているのに良く似ている。

もちろん、幕府以外の各藩でも、赤字補填として藩札と称する債券を発行していたが、これは借金であるからいずれは正規の通貨で返さなければならない。しかし、偽金的とは言っても、軽量化した小判や安政一分銀はれっきとした貨幣であるから返済する必要がない。幕府にとってはまことに結構な仕組みであった。

ところがペリーの来航で、永年のツケを一気に払わせられることになる。米国領事のハリスは、表示価値の三分の一の銀しかない紙幣のような安政一分銀に対して、銀純分の等価計算で洋銀(メキシコ銀ドル)と交換しろと幕府を恫喝したのである。

結局これが成立して、洋銀を持ってきて安政一分銀と交換し、これを金の安政小判に替えて持ち帰るだけで三倍になる暴利を生むことになった。そのため如何に幕府が統制しようと金貨の流出は止まらず数百万両の規模に膨れあがってしまった。

対策は安政一分銀の銀重量を三倍にするしかないが、幕府にそんな余力があるはずがない。しかし金の流出をとめなければならない。やむを得ず選んだのが金の量を三分の一に減らした万延小判の発行である。

これによって金銀比価を見かけ上で国際的な標準に合わせることができた。しかも、一時的とは言え、出目による莫大な利益も得た。万延金貨の発行額は五千四百万両ほどあったから、その出目は万延小判で二千五百万両

(安政小判なら一千万両ほど)を超えたであろう。

しかし、結局は平価切り下げであり、物価三倍の超インフレとなって跳ね返ってくるのが経済原理である。事実、万延小判発行から慶応二年までの五年間に米価が五倍に高騰してしまったのである。

そのため、出目による膨大な利益は、海防のためますます困窮した各藩への貸付け金となって消える。明治初の記録では新円単位(万延小判とほぼ同価値)で幕府貸付け金が約四千万円残っていたというから、超インフレ前の安政小判の価値で一千万両以上になるであろうか。

慶喜が将軍となった頃の幕府は、極度のインフレ下にあって、もはや出目という「打出の小槌」もなく「幕府札」も出せない切羽詰まった状況であった。

打開策は「御用金」か「外国からの借款」である。御用金とは幕府の権威によって、豪商から借金と称する上納金を供給させることであり、幕府はこれによって江戸の豪商から六十万両ほど、大阪の豪商からも銀でかなりの資金を得たが、それが限界であった。

それでいて、幕府は日本を代表して外交に当たっていた。薩摩藩の起こした生麦事件の賠償金十万ポンド(安政小判で三十万両相当)も長州藩の下関砲撃事件の賠償金の半額百五十万ドル(万延小判で百二十万両相当)も幕府が支払ったのである。

こんな不条理はないが、それが現実であった。「幕府なんてやっていられない」というのが、当事者の偽らざる気持ちであったろう。大政奉還とは徳川家が幕府の責務から逃れて普通の大名になろうとしたことでもあった。

しかし、歴史は大政奉還で止まることを認めなかった。極度のインフレは徳川家を生贄とすることを要求したのである。それが戊辰戦争であった。

そして慶喜は考えたにちがいない。徳川家を守るための唯一の資金源は外債しかないと。通商権を保持している間であれば、関税収入を担保として外国から借入れすることは十分に可能な選択枝であった。当然、周辺からも働きかけがあったにちがいない。

ここで慶喜の偉大さが発揮される。

いったん戦争のため外国から借款してしまえば日本国内の戦乱は欧米各国の代理戦争の形となる。どちらが勝っても、真の勝者は外国となるに決まっている。

もちろん、当時の薩長の指導者もそんなことは承知していたが、徳川幕府を追いつめる絶好の機会であり「野党」の無責任さもあって、もはや勢いを止めることはできなかった。しかも折からの超インフレは、一億一千万円(両)以上にも及ぶ借金漬けの諸藩にとって自動的な借金棒引きの順風として作用していた。

自業自得とは言え、超インフレの責を負ったのは幕府

だけというのが当時の構図であった。

その上に、将軍とは言え出身の一橋家はまったく兵力を持たない。いや幕府自体でさえも海軍は別として、地上兵力は譜代大名や親藩に頼るしかない状況であった。やはり資金がないということは致命的であった。

慶喜はここで的確な認識の下で偉大な決断をしたのである。身を捨て、幕府を捨て、国を救おうと……。

鳥羽伏見の戦いから率先して逃げて上野寛永寺に謹慎することなど、とても通常の人間のできることではない。

しかし、この決断が明治維新という世界の奇跡を生んだのは間違いないのである。

二、ゴルバチョフ

一九七〇年代に入って、旧ソ連の農業生産が急速に停滞し始めた。それが典型的な形で現れたのが一九七二年に米国から小麦を千八百万トン買い付けたことである。数千万人分の食糧に該当する膨大な量であった。そのため、シカゴの穀物相場がトン六十ドルから二百五十四ドルに高騰したほどである。

農業生産の不振は、非効率的な農業集団化など社会的な要因による面もあったが、基本的には農業に適さない寒冷乾燥地に巨額を投じて水を引き、農地面積拡大によって生産増強を図ってきたことが裏目に出たためである。

たとえば、アムダリア川とシルダリア川を堰き止めて灌漑用水として使ったため、世界四位の湖、アラル海の水位が十五メートルも下がり、面積が半減してしまった。そのことは、水が農地において蒸発してしまったことを意味し、当然のこととして塩分の濃縮すなわち塩害が発生する。そうすると、生産確保のために更に化学肥料や土壌改良剤を多量に使うことになり、これがますます塩害を加速する悪循環をもたらした。

かくして、ソ連では一九八〇年頃から、穀物の輸入は常態化して、年三千万から四千万トンと言う信じがたい水準となってしまったのである。

どこから輸入するか。もちろん、米国とヨーロッパからしかない。そうなると米国は強い。食糧問題を武器として、一九八〇年代にソ連がアフガニスタンに侵攻した際には穀物の輸出停止を行って制裁している。ソ連の弱体化は、軍事力や工業力ではなく、食糧問題から始ったのである。

ゴルバチョフが共産党書記長に就任した一九八五年は、このように、極端な農業不振と大量の穀物輸入、大幅な食管赤字、そして工業生産の成長鈍化、情報化社会化への遅れと言った最中にあり、ソ連が偉大な二流国家へと転落しつつある時期であった。

一九三一年にコルホーズの農民の子として生まれたゴルバチョフは、モスクワ大学法学部を卒業し、同大哲学科のライサと結婚し、コムソモール(党青年組織)に入り順調に共産党活動を開始する。ただ、異色だったのは、スタヴロポリ農業大学の通信課程で学び、科学的農業経済学者の資格を得るなど農業問題に深い関心を寄せていたことである。

そのためスタヴロポリ地方党第一書記を経て四十歳の若さで党中央委員に選出された後、農政分野を歩むことになり、四十七歳で党農業担当書記になり、一九八〇年には、最年少の政治局員となっている。

ゴルバチョフの異例の昇進の裏には、極度な農業不振が彼を必要としていたことを忘れてはならないだろう。

書記長に就任したゴルバチョフは、先ず上から党の改革を始め、腐敗した党幹部の更迭、人心の一新に辣腕を振るう。そして「このままでは生きられない」をキーワードにソ連経済の活性化をめざして、就任の翌年にはペレストロイカ(改革)を提唱し、本格的なソビエト体制の改革、すなわち国営企業法、農地法、協同組合法などの新機軸を次々と打ち出す。

しかし、その度に、党や国家官僚は面従腹背する。そのため国内的には、混乱ばかりが生じてなかなか好転の兆しが見えない。

その一方で、農業生産の不振は、もはや軍事優先の経済や冷戦構造の維持が不可能であるとの現実を為政者に突きつける。

アフガニスタンからの軍事撤退、東欧の自由化や民主化の許容、アメリカとの軍縮の促進、そして米国ブッシュ大統領とのマルタ会談での冷戦の解消に至るまでの外交面の華々しい成果は、ゴルバチョフの業績であることには疑いないが、一面ではソ連としてはそうせざるを得なかったのが実情でもある。

すなわち冷戦の終結は西側陣営の勝利というよりは、ソ連自らが終止符を打たざるを得なかったということなのである。

この点で惜しまれるのは、この時に日本が北方領土問題で手を打てなかったことである。ゴルバチョフは失脚の直前に、海部俊樹首相と首脳会談を行い、二島返還で話を付ける積もりであったが、日本には全くそれを受け入れる雰囲気がなかった。それがゴルバチョフにとっても痛手となったが、日本にとっても、北方領土問題が実質的に固着してしまう結果をもたらしたのである。

ゴルバチョフは主として西側諸国で高い評価を受けているが、それは外交面での評価であり、ペレストロイカがベルリンの壁の崩壊や東西ドイツの再統合のきっかけをもたらしたからである。しかも従来のソ連の政治家と全く異なり、目的と手段の混合は許さず、改革は流血を避け平和裡に遂行すべきとの信念の持ち主であったこと

に就任するのである。徳川慶喜が大政奉還をして将軍職を降り、諸藩連邦上の首班になろうとした構想と良く似ている。

かくしてゴルバチョフは一九九〇年三月には、共産党一党独裁をやめ、初の大統領制を導入、大規模な政治機構の改革を断行し、旧ソ連の安楽死をはかったのである。

こうなると、黙っていないのが軍部の保守派である。九一年八月にゴルバチョフの軍部側近たちがクーデターを起こす。

しかし、ロシア共和国のエリツィンの抵抗によって、あっけなく失敗に帰しゴルバチョフは生還する。これによって、ソ連は急進派のエリツィンに急傾斜することになったが、それを見ながらゴルバチョフは権力保持のために強権を振るうことなく去って行った。

この点がゴルバチョフの偉大な点であり、徳川慶喜と良く似ている。かくしてソ連は完全に解体され、それと同時にゴルバチョフの時代も終わった。

最後に、ゴルバチョフの残した多く名言の中からひとつを選ぶとするなら、次を挙げたい。

確信すべきことは、自分が成功しようとしまいと悠然として自信を失わないこと、家族や友人そして自分を信じて権力や名誉などなくとも立派に生きていけること。

も大きく影響しているであろう。

リトアニアなどバルト三国の独立問題を巡って優柔不断の処置をとり徹底した軍事介入を避けたため、その間にエリツインのロシア共和国などの独立を呼び、ソ連が崩壊してしまったのも彼が平和裡にことを進めようとしたためであった。これがノーベル平和賞に結びつく。

しかし、その一方では、ソ連内部での評価は、一貫して不人気である。

外っ面は良いが、国民の暮らしを苦しくしただけで何もしてくれなかったとか、経済や軍事でアメリカとの国力差を広げてしまい、古き良き時代のソ連を崩壊させ、外国に媚びているとか、アメリカに魂を売ったとか、まったく厳しい意見が多い。

ゴルバチョフ自身は常に共産主義者を自称していて旧体制側にいたが、内容的に見ると、旧体制を否定して大改革を推進しようとしていた。この点がゴルバチョフの偉大な点であるが、ソ連を救うには他に方法がなかったというのも事実であろう。しかし旧体制は強固に根付いていて動かない。

そこでゴルバチョフはグラスノスチ(情報公開)を利用して大衆に直接働きかけ、渋る党幹部を説得、党と国家の分離を図るために、最終的には書記長ではなく大統領

三、盧泰愚

韓国の人に盧泰愚のことを聞くと、ほとんど例外なく、最低の大統領だったという。

「いや、そんなことはないでしょう。軍事政権から流血なく文民政府に移行させたのは、盧泰愚大統領じゃないのですか。彼がいなかったら、今の韓国は、まだまだもたもたしていたはずですよ」と言うと、変なことを言うヤツだとの顔をする。

そもそも、私が盧泰愚に注目したのは一九九〇年に来日した時の演説にある。彼は日本人でも知る人の少ない雨森芳州の「善隣外交」を引いて日韓友好を訴えたのである。雨森芳州は木下順庵の門下で新井白石と共に学んだ江戸中期の対馬藩の外交官であるが、この盧泰愚の演説によって日本での再評価が進んだ。

さて、韓国に朴正熙の軍事政権が誕生したのは一九六一年である。

その頃、韓国の一人当たりの国民所得は年六十ドルに過ぎず、北朝鮮の経済力の方が圧倒的に強く、板門店における南北学生会談に向けてソウルを出発した学生らのデモは十万人に達し、まさに赤化される危機にあった。

しかし時の張勉内閣にはこの動きを抑える力が無く、クーデターは必然的なことであった。

「漢江の奇跡」と呼ばれる一九六〇年代から七〇年代の経済発展(年率十九%)の主役はクーデターに成功した朴正熙であった。それを受け継ぎ八〇年代の経済政策の大転換によって物価安定、国際収支の大幅黒字、高度経済成長(年率十五%)という三兎を一度に捕まえた主役は全斗煥であった。この二人の大統領は政治面では凄まじい批判や非難の対象になったが、確固たる統治哲学をもち一貫性のある経済政策を進めたと評価されている。

それに対して、盧泰愚はビジョンも哲学もなく経済が大きな打撃を受けたと批判されている。果たしてそうなのか。ちなみに盧泰愚の五年間の経済発展は年率十四%であり、経済規模が大きくなっていたことを考慮すればむしろ前よりもはるかに大きな成長であった。

それは次の金泳三がその政権末期に国家破産に瀕し、国際通貨基金の管理状態に陥り、通算してもマイナス成長に終わったことと比較すれば明白であろう。

盧泰愚は軍事政権から文民政府へ流血なく移行させたばかりでなく、開発独裁の強権経済から自由経済に軟着陸させるのに成功したのである。

朴正熙の軍事政権を引き継ぎ、経済面で大躍進を果した全斗煥は、オリンピックの招致に成功する。しかしその強権ぶりに対する不満も頂点に達していた。

任期最終の年、すなわちオリンピック前年の一九八七

年になると、次の大統領選では直接選挙制を実現すべしとの世論が日増しに強くなっていた。それには全斗煥が強権によって大統領に就任した当初から、「長く政権に留まることはない」と公言していたことも影響していた。文民政権への期待が高揚していたのである。

しかし、全斗煥は直接選挙制に対しては、拒否する姿勢を全く崩さず四月には翼賛会的な間接選挙によって次期大統領を選出することを決定し、自らは院政を敷くつもりで、盧泰愚を次期大統領に推したのである。

盧泰愚は全斗煥政権の発足時からナンバー2の地位にあったが、韓国では「ナンバー2はナンバー1になれない」の言葉通り、一九八三年には突然ソウルオリンピックの組織委員長に転出させられてしまった。

しかし盧泰愚は三十一年間の軍隊生活で部下をどなったことがないと言われているほど温和で、一見、全斗煥が院政を敷くにはもってこいの人物であった。それゆえにこそ、ここに、盧泰愚の再登場となったのである。

しかしこれには、急進的な学生や労働者ばかりでなく、一般サラリーマン達も猛反発し「民主憲法争取国民運動」が広範に組織され、ソウル大学生の拷問殺害事件と相まって、六月には延べ百万人にも達するデモが全国的に繰り広げられた。

しかし全斗煥は相変わらず妥協の姿勢を示さない。

ここで、国民運動側にとって大きな武器となったのは、その翌年にソウルオリンピックを控えていたことである。もし事件が起きれば、開催地がロサンゼルスに変更され、韓国としては国家威信の大失墜となってしまう。

状況は切迫していた。何らかの収拾策が必要であった。そこに登場したのが、次期大統領候補の盧泰愚による「六・二九民主化宣言」なのである。

それはオリンピック成功を条件として「大統領直接選挙制の実施、言論の自由、政治犯釈放、金大中の赦免・復権」を認める内容で、民主化勢力さえ驚くほどの譲歩であった。盧泰愚がオリンピック委員長を務めているという特殊事情もあったかもしれない。

しかし当時の状況では軍事政権側の全面降伏であった。直接選挙制になれば軍事政権側が勝てる展望など皆無であった。だからこそ全斗煥が強権を発動してでも直接選挙制を阻止しようとしていたのである。

しかもこの盧泰愚の宣言は全斗煥の事前了解を得ていなかった。翌六月三十日に盧泰愚は全斗煥に会い「閣下、申し訳ありません」と謝ったと伝えられている。

しかし、全斗煥の盟友であり後継者である盧泰愚が大統領直接選挙制を認めた以上、全斗煥としてはもはや追認するしかなかった。

私が盧泰愚を評価するのはこの点である。直接選挙制を受け入れれば、軍事政権後継の盧泰愚が生まれることは、もはや絶望的な状況であった。それにも拘わらず、

全斗煥を裏切ってまで直接選挙制を受け入れたのは、盧泰愚自身が民主化を望んでいたからなのである。

「六・二九民主化宣言」について、野党側が「民主化闘争に対する降伏である」と勝ち誇っても「それが国民の意志であれば、自分は何百回でも降伏するであろう」と当意即妙にかわしているのも本音なのである。

事実、盧泰愚は温和な性格のため優柔不断と見なされやすいが、信念を暖めていて立つべき時には立つ人物であった。たとえば、朴正熙政権の三年目には少佐でありながら、折からの汚職事件に対して「革命の変質」を糾弾する「建白書」を朴正熙に提出して「反革命」と見なされ失脚しそうになったことさえある人物なのである。

だから決して、単なるイエスマンなどではなかったし、深読みのできる政治家として軍事政権の限界も見ていたのである。

さて、もう一度戻るが、「漢江の奇跡」を成し遂げたのは、経済政策とはほど遠いところにいた軍事政権の朴正熙とそれに続く全斗煥であった。とにかく経済発展をしなければ、北朝鮮に対峙することもできず、国の存続さえ危ぶまれる状況であった。

朴正熙が西独の炭鉱を訪れた時、そこには韓国大卒の若者たちが炭鉱夫として働いていて、手を取り合って国の経済発展を誓ったと言う。

だから、経済発展すなわち開発独裁は全てに優先し得る課題であり、経済発展のためには、日韓基本条約で得た個人補償権をほとんど国内投資に使い、ベトナム戦に売血とも非難されながら兵を送り、キーセン外交（売春外貨稼ぎ）を繰り広げて外貨を獲得しても許された。

しかし、オリンピックの招請に成功し、その組織委員長の席に着いた盧泰愚は時代の変化を読み取っていた。

北朝鮮に対応するのは軍事や経済ばかりではない。それにはもはや軍事政権では対応できない。民主勢力に政権をわたすのもやむを得ないと。

いったん次期大統領の席を諦めた盧泰愚であったが、韓国では何が起きるか判らない。第十三代の大統領直接選挙には盧泰愚の他に、金泳三、金大中、金鍾泌と在野の有力者がそろって出馬した。

野党側は、結局、候補者の一本化に失敗して負けてしまったのであるが、逆に言えば、候補の一本化に失敗しても、野党勢力が勝てる展望が存在していたことを意味している。

事実、大統領選挙の直前におきた北朝鮮による大韓航空機爆破事件がなければ、金泳三が大統領になっていたであろう。北朝鮮に対する恐怖感を甦らせた爆破事件によって、かろうじて盧泰愚大統領が誕生したのである。

したがって、盧泰愚の政策の特徴は、もはや開発独裁

の手法ではない。大統領とはなったものの、続く国会議員の選挙では得票数で与党は三分の一しか取れなかった。これでは国政運営ができる訳がない。そこで金泳三と手を握るのである。

個性的な政治家である金泳三と組むことは、盧泰愚にとつて耐え難い忍耐であったろう。軍事政権の開発独裁の頃のように、利害の調整など後回しにして進むことなどできるわけがなかった。それを理由に、ビジョンも哲学もなく経済が大きな打撃を受けたなどと酷評するのは、歴史を見ていないことである。

私が特に盧泰愚に注目したいのは、対北朝鮮問題への深い洞察力である。

在任中の一九八九年にはベルリンの壁が崩壊し、翌年には東西ドイツの再統一が実現する。

朝鮮半島の統一は韓国の悲願ではあるが、現実の問題として、体制の異なる貧しい北朝鮮を統合することなど、韓国に耐えられるはずがない。とにかく国内問題としてではなく、国際問題としてこれに対応するしかない。それが盧泰愚の判断であった。

盧泰愚の北方政策は「遠交近攻」であった。まずソ連との外交を優先しゴルバチョフと直接会って一九九〇年に国交を樹立する。そのため三十億ドルの経済援助をソ連に与えることになったが、当時の韓国にとって決して安くない額であった。しかしそれによってソ連は北朝鮮への安価な石油供給や戦闘機や武器の供給を中断させ、北朝鮮は多大な経済的な打撃を受ける。

しかも、ソ連との国交回復は、韓国・北朝鮮の同時国連加入という大成果をもたらす。それまでは韓国の国連加入にソ連は一貫して拒否権を発動していたからであるが、これによって盧泰愚は北朝鮮との関係も築く。一九九二年には金日成が盧泰愚を北朝鮮に招待する計画もあったほどである。

それに比して次の金泳三政権は北との関係をぶちこわしてしまったというのが盧泰愚の見解である。もっとも、金泳三は民主主義とは関係のなく権力を勝ち取るためにすべてのことをやり尽くした人間だと言うのが盧泰愚の評価であった。かなりバイアスはあるが、金泳三ならさもありなんと思うのである。

さて、最後になるが、かって百メートルを十一秒代で走り、スポーツ万能、趣味の音楽でも一流であった盧泰愚に「一番好きな日本人は」と聞いたインタビューの時のことである。

その答えは二宮金次郎であった。

これは韓国人としての模範解答の中には絶対に探し得ないものである。そこに盧泰愚の素晴らしさを見る。

春の館林を満喫する

吉田忠雄

私は足利の生まれ育ちである。しかし最近の私は館林により縁が深い。昨年は館林に多く足を運び館林の春を満喫した。以下はそのある1日である。

快晴に恵まれた平成22年5月1日、私たち夫婦は新越谷発9時02分の東武伊勢崎線の電車で館林に向かった。館林駅では、今回の行事の主催者の兵頭三郎氏の芳子夫人がわたくしたちを出迎えてくださった。

駅前にはきれいな花壇があり、駅前から延びる歴史の小道にはつつじの花壇が作られていた。駅前には竜の井があり、そばにそのいわれを書いた説明板があった。

間もなく安楽岡一雄館林市長の奥様がお見えになり、兵頭夫人、家内とともに記念の写真を撮らしていただいた。

館林駅前広場で参加者とともに待ち合わせしていると、偶然に向井千秋宇宙飛行士のお母さんが近くにおられ、市長夫人と話を交わされた。私もかつて宇宙開発委員会の安全評価部会長をしていたので、何かの会で向井千秋さんのお母さんとお会いしたことがある。ごあいさつした。皆さんが記念撮影したいといわれるので、みんなで記念撮影をした。

それから両側に花壇を配した館林のメインストリートを皆で歩いて進んだ。途中に皇后陛下のご実家である正田邸があり、その前には皇后陛下が子供のころに通われた小学校があった。

しばらく行くと市役所への取り付き道があり、そこには立派なつつじが咲いていた。市役所の前にはレスリングの記念碑があった。兵頭さんが館林高校3年生の時、館林高校は全日本高校レスリング大会で全国制覇を成し遂げた。その弟子であり当時館林高校1年生であった小幡（旧姓上武）洋次郎さんは、その後2度のオリンピッ

クのおいてレスリングバンタム級で2回優勝している。
参加者は市役所前で記念撮影した。市役所を見学したのち、兵頭さん手配の屋形船に乗り込み、船内で参加者各家庭手製のうまい料理に舌づつみを打った。食後、船を下りてつつじヶ丘公園に上がり、満開のつつじを見物し、記念撮影をした。沼には名物の鯉のぼりが多数空を舞っていた。
その後、席を小幡さん経営のニューミヤコホテルに移し、恒例の2次会を開いた。それから、兵頭さんの息子さんの家を見学した。その先のことは正確には覚えていないが、どこかの座敷で兵頭さんと飲み、最後は安楽岡市長さんのお宅で市長さんやご家族の皆さんと歓談し、そこに泊めていただいたことが写真に残っている。皆さんに大変ご迷惑をかけた事を反省している。

二八に帰るすべもなし（五）

―愛する北国のひとに寄せて―

伊治哲

さすがの修平も冷汗三斗の思いに身がすくんだ。急いで浴衣の裾を整えて、おそるおそる階段を降りた。
「おはよう、よく眠れた？」
奥さまが待っていたように明るい声をかけた。昨夜の突然のなりゆきなど忘れたかのように親しみ深かった。修平はほっとした。
「おはようございます。すっかり寝込んでしまいました。寝坊してしまってすみません」
修平は小さくなって挨拶をかえした。
「子供たちはもう学校へ出かけたわ。さあ、顔を洗って食事にしましょう。貴方の洋服はそこに置いてありますからね」
やはり奥さまは修平が起きてくるのを待っていたのだ。
言われるままに歯を磨きながら

光

一夜が明けた。
修平は目をあけて周りを見まわした。障子越しに白々とした光がさし込み、秋の気配が漂ってくる。
いつもの寝覚めと、周囲の様子がさま変わりしている。もう一度目を瞬いた。まだ夢のつづきをみているような錯覚をおぼえる。自分が今どうしてここにいるのか思い出せない・・・。
咄嗟に昨夜の出来事が蘇えった。見も知らない家に入り込んで、一夜の仮寝にまで及んでしまったのだ。
そのうえ、不覚にも寝過ごしたのだ。
〈それにしても、昨日までの赤の他人が、好意に甘えたとはいえ、初対面の家に上がりこんで図々しくも今まで眠りこけていたとは・・・〉

〈やはり夢ではなかった・・・まるでこの家の住人のように遇されている〉

と、鏡に映る自分の口元がやっとほころんだ。

身支度をした。昨日までの垢っぽい学生服は、汚れを落としてアイロンまでかけてあった。

食卓につくと、奥さまは修平と自分の茶碗にごはんをよそいながら

「さあ、いただきましょう。遠慮しないでどうぞ召し上がれ」

そして

「今日はまた下宿探しに回ってみるの？」

と、修平の顔を覗きこんだ。

「いただきます」

と手を合わせたあと、修平は改めて昨日の礼を言った。

「昨晩は突然にお邪魔をして、ぶしつけの数々、申しわけありませんでした。でも本当にありがとうございました。今日は、午前中、学校の講義に出て、昼からまた下宿を探しに歩きます」

奥さまはクスッと含み笑いを洩らして

「夕方までには帰っていらっしゃいね。うちの主人に、昨日からの貴方のこと、電話で話しておきますからね」

と言った。

修平はちょっと驚いた。奥様の口ぶりが変ってきたように思えたからだ。

昨日は、「ひと晩だけですよ」と念を押したが、今朝は「それでは、これで引き取って」とは言わない。

〈少々厚かましいが、無理にでも願いを重ねれば、あと何日かは受け入れてもらえるかもしれない〉

と、自分勝手な想像を逞しくして、急に明るい希望が湧いてきた。

「それでは、行ってまいります」

数冊の講義のテキストを抱えて、玄関を飛び出した。

昨日重々しかった表門の扉が、今朝はなぜか軽々と開いた。昨日の夕方、リヤカーを引っ張って疲れた足を引きずりながら歩いた同じ道を、今朝は飛び跳ねるような気分で先を急いだ。

一夜のうちに、修平はこの家にすっかり魅入られてしまった。なにもかもが目新しく、物珍しいうえに、これまで味わったことのない家庭の温もりが身に沁みたのだ。とりわけ奥さまのやさしい心遣いが嬉しかった。

修平はなんとしてもこの家に受け入れてもらいたいと思った。一生懸命懇願すれば、奥様はきっと応えてくれる・・・そんな修平の希望が徐々に確信に変わっていった。

しかし心配の種は残っている。まだ会っていないご主人が、一面識もない自分のような者を家に入れることを認めるだろうか、そして二人の幼い姉妹が、こんな闖入者に馴染んでくれるだろうかということだ。昨日玄関に現れた少女が「うちは下宿屋じゃありません！」と冷たく言い放った言葉が修平の胸にひっかかっていた。

なんとかなる・・・修平は自分で自分に言い聞かせた。楽観的というか、大胆というか、いつもの修平の性癖である。

そう思うと、足早に行き交う勤め人の群れも、そして、いつも見慣れた路面電車の往き来さえも、初めて見る新鮮な風景に思えた。当然だ。これまでは構内の学生寮からつっかけ下駄で教室に通っていたのだから、街なかの通学は初めての経験なのだ。

登校してきた学友の面々は、いつもと変らぬ見慣れた顔ばかりであるのに、今日はなぜか新しい顔に見える。教室の中も、いつもと違ってガヤガヤと騒々しいように思えた。その中で修平ひとり、不思議な行きがかりの一夜を過ごしたとは誰も知るまい・・・、修平は、ひそかな秘密を胸にしまい込んだ。

講義は、いつもの調子の平板な中味で、まるで興味を惹かない。修平の頭の中は、昨日からの出来事ばかりを繰り返し反芻していた。

午後になっても、修平は下宿を探す意欲が出なかった。わずかに、二、三の学友に心当たりがないか探ってはみたが、気をつけておく程度の返事しか返ってこなかった。昨日の経験から、それほど簡単なものではないことが痛いほど分っていたし、内心では、むしろこの際、見つからない方が修平にはありがたかった。

やや良心の呵責を感じながら、修平は少し疲れたような顔をして、夕方、〝昨夜の家〟の門をくぐった。

ところが、玄関の手前に立ったとたん、やはり自分には似つかわしくない〝他所の家〟だ、という不安がふたたび頭をもたげてきた。この家と自分との間に遠い隔たりがあることに、改めて気付かされた。

〈無理にでもこの家に居座りたいなどと、勝手に思い描いていたのは妄想にすぎない。いっときの夢だ。夢ならばともかく、偶然に入り込んだ〝他所の家〟にいつまでも逗留するようなことが現実にありえようはずがない〉

そんな思いに駆られながら、修平はおそるおそる玄関の引き戸をあけた。

「学生さん、お帰りなさい。母さんは今お使いに行ってるの。上がって待ってなさいって・・・」

昨夜、冷たく突き放した少女が、今日はなぜか笑顔で修平を迎えた。修平は昨日と同じように軽く頭を下げて居間に入り、かしこまって正座した。

〈少女の様子が少し和らいだのでは・・・？〉

姉妹二人が、いそいそと二階へ上がっていくのをそっと見やりながら、修平は気持を落ち着かせた。

勝手口が慌ただしく開いて、奥さまが帰ってきた。
「あら、お帰りなさい。お早かったのね。そんなに堅苦しくしなくていいのよ。足をくずして楽にしてなさい。いまお茶を入れますからね」
母親のような言葉遣いであった。
火鉢の傍らの卓袱台の上でお茶をいれながら、声を弾ませて
「それで、下宿、見つかった？」
と言った。
「いえ、二、三当ってはみたのですが、適当なところがなかなか見つかりません・・・」
悪いと思いながら、修平は探し歩いたふりをした。
「そうでしょうね。こんな時勢で学生さんのお世話をするのは大変でしょうから・・・」
修平は、言葉の接ぎ穂を失った。今朝から思い描いた願いを一気に打ち明けてしまいたい衝動にかられた。しかし、やはり躊躇した。
言葉が途切れて、長い時が経ったように感じた。
・・・・・・・・・・・・・・
「・・・実はお願いがあるんです」
修平は、思い切って口を開いた。
「こんなことをお願いするのは、本当に図々しいと思うのですが・・・。今しばらくこちらのお宅でお世話になることはできないでしょうか・・・。自分勝手なことを言って、本当に申しわけありませんが・・・」
修平はそこまで言って、目を伏せた。声がうわずっていた。
奥さまは、待っていたかのように応えた。
「舘さん、実はね・・・、昨日の夜、あなたと初めて会ったばかりなんだけど、なにか他人ごとではないように思えて・・・、それで今朝、父さんに電話でいきさつを話したの。そして、たった今、近くに住む年寄り、いや、叔父、叔母にも話をしてきたの」
奥さまは、そこまで一気にしゃべって、ぐっとひと息ついた。
「父さんはね、その舘さんという方が本当にいい人だと思うのだったら、暫くうちに居て貰っていいよ。いつも女三人で無用心だから、以前から心配していたんだ。君さえよければ、そして子供たちも納得するんだったら、うちでお世話してあげたら、って言うの・・・。近くの年寄りも同じように言ってくれたの」
そして
「舘さんさえよければ・・・。悪いけど用心棒代わりによ」
そう言って、奥さまは屈託なく笑った。そして話を続けた。
「主人には、舘さんって、物静かで真面目な人だと思うわ、と言ったわ。そうでしょう・・・？」

そう念を押されて、修平は返事に窮した。
「私はそんなにおっしゃっていただけるほどの人間ではありません。結構大まかなところもあります。ただ、誠実なところだけが取り柄だと思っています」
辛うじてそれだけ言うのが精一杯だった。自分で自分を売り込むなどということは初めてであったが、ここはひと踏ん張りと腹に力を入れた。
奥さまは、修平に構わず言った。
「ただね、条件っていうとなんだけど、約束して欲しいことがあるの」
と、居住まいを正すように続けた。
「うちは、子供が娘二人でしょう。二人ともまだ子供だけど、隣近所に変な目で見られたら困るの。分るでしょう・・・？　それで・・・いろいろ考えたんだけど・・・舘さんは、わたしの甥、娘たちの従兄弟っていうことにしてほしいの。
子供たちにもそのことを話したら、『お兄さんができて嬉しいわ。勉強もみてもらえるし・』っていうの。
それでもいい？　それでもよければ、もっといい下宿が見つかるまで、うちにいてもらっていいことにしましょ」
奥さまの言葉を聞いたとたん、修平は天にも昇る気がした。
青天の霹靂・・・？、いや、干天の慈雨だ。思いもかけない奥さまの言葉に、修平は胸が詰まった。甥でもいい、従兄弟でもいい。このような家庭の甥や従兄弟にしてもらえるのだったら、願ってもないこと。
修平は、すぐ座りなおして
「ありがとうございます。ご好意に甘えさせてください。お世話になりますが、どうかお願いします」
興奮のあまり、声を震わせながら、やっとこれだけ答えた。やや間を置いて
「失礼ですが、おっしゃるとおり、甥、従兄弟として振る舞わせていただきます。用心棒でも力仕事でも、私にできることでしたらなんでもやらせていただきます。おっしゃってください」
修平は、改めて深々と頭を下げた。嬉しさのあまりそれ以上の言葉が見出せなかった。

――つづく

目耕録（その四）

金子勝編『食から立て直す旅―大地発の地域再生―』を読む（岩波書店、二〇〇七年）

目耕：目で紙田を耕す。読書することを譬えて言う（世説新語）。

山本鎭雄

野菜作りにずぶの素人の私は、野菜作りのテキストを畑に持参した。その当初は「撒かぬ種は生えぬ」と考え、種子を撒き、苗を植えた。そのうち、当然のことだが、土作りと草取りが重要だと気づいた。言うまでもなく、それ以外に間引き、土寄せ、追肥という煩瑣な野良作業を経て、適期に収穫する。

東京の小金井で暮らし、ＪＲ中央線に乗り、週一回の野良仕事――農繁期は一泊二日、農閑期は野菜を収穫をするために日帰り――というハンデのため、草取りと水まきには十分に手が回らず、ときに間引きや誘引や追肥も手抜きした。

四年目の昨年は「寒い春」のため、種を撒いた葉菜類は発芽しない。発芽しても十分に成育しなかった。冬越しの果菜類のエンドウと空豆は貧弱な莢と豆を収穫すること出来た。ただ、春に種を撒いた亜熱帯・熱帯原産のナス、カボチャ、ミニトマトは酷暑のため、「生りが良かった」。

だが、夏は酷暑と日照り（水不足）のため、害虫のアブラムシやテントウムシダマシが異常に発生し、葉菜類は虫喰いだらけになった。その後、寒さのために、秋冬野菜の種を撒いても出芽せず、しかも白菜の苗は害虫に食害され、キャベツは結球せず、総じて不作だった。

酷暑の炎天下で、もう少しと欲をかいて野良仕事を続けたところ、めまい、頭痛、吐き気がして、軽い熱中症の症状を感じた。その夜、足がケイレンし、何度も目を覚ました。午前中は起き上がれず、疲れ易く、動作は緩慢となり、倦怠感を感じ、何ごとにも集中できなかった。

腰部の脊柱管に持病のある私は、歩くと腰に痛みと足にしびれを感じた。竹籠を背負い、夜道を一人トボトボと歩く姿は、我が人生の帰り道を物語っているようだ。四年目の気候は野菜作りには最悪だったが、畑の地力を衰弱させ、「畑をダメにする」という村の古老の予言が的中したのかも知れない。

早速、地力を回復するため、妻の提案で隣駅の近くの農協の販売所で米ぬかを大量に購入し、それを撒いて耕耘機でうねった。果たして、地力が回復するかどうか、分からない。私は、これ以上、体力的・精神的に野良仕事を続けられるかどうか、不安になった。五年目の晴耕雨読の生活を諦めるかどうか、深刻に選択を迫られた。

四年目の野菜作り

退職を契機に山梨県の桂川沿いにある妻の実家の七畝の畑で野菜作りを始めて五年を迎えた。それ以前の六年間、老いた義母は私の東京・小金井の自宅、病院や介護施設で過した。その間、妻の実家の近くの古老に義母の畑の耕作を委託した。

その後、畑を返して貰い、私が耕作することにした。

ところが、周囲の畑は雑草が繁茂し、不耕作地や不作付地が目に付くのに、その古老から「あれじゃ、畑をダメにする」と盛んに影口を叩たかれた。それは「素人には委せられないので、その畑をやらせろ」と、畑で耕作したいというのが本音だった。

熱中症後の発心

毎週一回の野良仕事だが、土に親しみ、新鮮な空気を吸い、椋鳥、はくせきれい、キジバトなどの野鳥が畑に飛来し、嘴で土を突っ突く食餌行動を観察したり、姿は見せないが、すぐ近くで鳴くウグイスの声を聞くと、何故か心が和む。野良仕事の合間に四季折々の山々の景色を満喫し、夜は月や満天の星を仰ぎ、桂川のせせらぎの音を聞く機会を失いたくはないと思った。

所詮、野良仕事で腰痛に耐えられなければ、回復するまで休養すれば良い。畑に鍬を数回入れると、息が切れたら、一休みすれば良い。要するに、作業を中断し、小さな丸椅子に座り、清風を体感し、周囲の山々の景観を満喫すれば良いのだと、自らを納得させた。

野良仕事ではその日のノルマを課し、身体を酷使する必要はまったくない。しかも一人で気楽に趣味と健康のためにする野良仕事だから、別に他人とチームワークが求められる共同作業でもない。肉体的・精神的な老化をますます自覚するようになったが、五年目もまたこれまで通りの晴耕雨読の生活を続けることにした。

これまでもそうだったが、迷惑なことは、口やかましい地主の妻が何々の種を撒け、苗を植えろ、雑草を取れ、料理して、食べてこれは肥料が足らないとずぶの素人の作男（作業者）の私にあれこれと注文することである。「それなら、自分でやったら」と言い返そうと思ったが、作男のわが身を考え、口を閉ざすことにした。

野菜に限らず、一般に生物は自然条件のもとで自己保存と種族維持の本能に支配されている。それを巧みに利用するのがプロの耕作者だろう。だが、素人の私は、かえって懸命に生きる野菜の本能に助けられ、何とか自給用に野菜を収穫することが出来た。

もっとも、スーパー・マーケットに陳列されている見栄えの良い野菜と比較すると、私が収穫した野菜はいずれも不揃いだが、旨みと甘みと香りがある。そして露地ものだから、すぐに料理すれば、食卓は甘みと香りのある野菜で季節感に溢れる。この初物を食べ、これで寿命が七十五日生き延びると思うと、何故か嬉しくなる。

自給農家と高齢者の世界

近隣の耕地を観察していると、耕地の規模は耕作者の家系に由来することに気付いた。原野を開拓した草分け百姓の家系の後継者の耕地は広い。私は、遺産相続した妻に頼まれ、境界と道路と地積を測量する国土調査に立ち合ったことがある。そこで推測したことは、草分け百姓数軒が談合し、特徴的な小高い頂きを基準点にして平坦地に向かって境界と地積を確定したのであろう。その境界に植樹して地積を確定した。その後、分家・孫分家や来住定着者が家屋を建て、耕地を購入した結果、草分け百姓の所有地は細分化されたのであろう。

当地は東京の八王子、立川などの多摩地区は優に通勤圏である。家の後継ぎの長男は学校を卒業すると、サラリーマンになる。国鉄、郵便局、消防署などの手堅い職場に就職し、フィジカル・レーバー（肉体労働）をして身体を鍛えた。

今、畑で野良仕事をしている高齢者は子供の頃から親の手伝いをして、厄介な草取りなどの野良仕事のイロハを習得したのであろう。学卒後、サラリーマンになり、土・日か、非番の日に畑に出て、野良仕事を手伝った。現在、年金生活者となり、自給用の野菜作りに専念するようになった。畑はまさに高齢者の世界である。

廃校となった中学校の校舎は久しく放置され、窓ガラスは割れ、廊下や教室も悲惨な状態だった。小雪の降る寒い日、教室を利用して、学園ものの幽霊映画を撮影していた。幽霊映画には格好のロケーションだったのであろう。ところが、国から補助金が交付されると、直ちに校舎、講堂兼体育館、プールをすべて解体し、在学した生徒の思い出深い桜並木の老木もブルドーザーで生木を剥ぐように倒木された。

何故、倒木する必要があったのか。卒業生に限らず、おそらく住民は納得していないであろう。ただ、余所者の私が理解出来ないのは、この旧校庭でゲートボールに興じる村人が、桜の木を植樹する発想と動きはまったくないように見えることである。今、広い跡地に砂が撒かれ、整地されたその一角で高齢者が中心となって晴と曇りの毎日、午前と午後の三時間、数名でゲートボールに打ち興じている。私はそれはそれで大変結構なことだと思う。

だが、私は旧校庭の近くの農道を歩きながら、複雑な気持で眺めている。耕地のある高齢者はもっぱら野良仕事に精を出し、ゲートボールに興じる余裕などさらさらない。跡継ぎに野良仕事を任せ、隠居した高齢者と、耕地のない、年金生活者がゲートボールに興じているのだ。

少子化の結果、小学校は児童の父母のアンケート調査を尊重し、廃校にしたそうだが、自治体は郵便貯金や簡易保険などから融資を受け、村人全員の喧喧諤諤の議論の結果、三十数年前に小学校を新設した。すでに国道沿いの雑貨屋や、子供相手の駄菓子屋も軒並み閉店し、シャッターを下ろしている。さらに国道沿いに櫛の歯が欠けたように、雨戸を閉じた空家も目立つ。

私が畑で野良仕事をしていると、昼休みに小学校の児童がアナウンスする校内放送が聞こえた。さらにチリンチリンと猪か熊除けの鈴を鳴らし、集団で下校する長閑な光景は、もはや記憶の世界となった。

「作柄は人柄」

作柄は農作物の収量を言うが、作柄に限らず、耕作状態を観察すると、耕作者の人柄、つまり生活や性格を如実に反映しているように思われる。几帳面な人の畑は清潔で整然と農作物が植えられ、余計な雑草など生えていない。毎年繰り返すことだが、アバウトな性格の私は春の草取りを適当に切り上げてしまうので、夏の草取りには大いに難儀する。

現職中は建築業の一人親方だった高齢者は、今は基礎年金の受給者だそうだ。草分け百姓の家系の彼は生活の足しにと、白菜、里芋、山芋を農協経営の直売店に出荷する。とくに山芋堀りはスコップ一つで胸のあたりまで土を堀り下げ、折らずに、傷がつかないように慎重に掘り出し、太くてはるかに見栄えの良い山芋を高値で出荷する。

彼の畑のジャガイモの収量は、近くの畑のジャガイモの収量をはるかに圧倒している。毎年、化成肥料を大量に撒く、いわば勝負師の「人柄」のようだ。その結果、畑の地力が低下し、数年前は葉や茎がうどん粉を撒き散らしたように白くなった。畑にうどん粉病が蔓延した結果、平年の三割程度の収量だったので青くなっていた。今年もうどん粉病の予防のために盛大に農薬を散布した

のだろう。

他方、現役の公務員氏は、非番の日に家とそれほど遠くない広い耕地に軽トラを運転して現れる。繁茂した雑草を草払い機でなぎ倒し、中古の農用トラクターを運転し、耕耘と除草の作業を一気呵成に終える。農外収入で各種の農用機械を購入し、省力化することが野菜作りを続ける前提条件のようだが、新たに農用機械を購入し、それを畑で操作することで機械好きの「趣味」を満足させているように見える。

隣の畑の公務員氏が私に「畑は奇麗ですね」と言われ、御世辞にしても驚いた。彼の畑と比較すれば、確かに草取りに苦労した分、雑草は目立たないが、清々しい春が過ぎ、夏には草取りに往生する。雑草を土に埋めたり、枯れ草・枯れ枝を燃やして草木灰にして肥料にする「敵を味方にする」方法も知らないことはないが、所詮、週一回の野良仕事ではそこまで手が回らない。

都市に生れ、都市で暮らした私は、最初は軽い気持で健康と趣味のために野菜作りを始めたが、次第に自然とその不可思議な営みに魅了された。だが、この地の少子高齢化、増加する耕作放棄地と不作付地の農村社会の現状、野良で農村の都市化した多様なライフスタイルの一端を見聞した。そこで、中山間地が当面する問題とそれに対処する農業と耕作者を理解しようと思い、『金子勝の食から立て直す旅――大地発の地域再生――』（岩波書店、二〇〇七年）を書架から取り出し、「雨読」することにした。

食からの出発

慶応義塾大学教授の金子勝は経済・財政の専門家だが、農業経済の専門家ではない。食料自給率や「食」の安全保障が問われる現在、農山村の少子高齢化や過疎化が深刻化し、農山村のコミュニティは確実に崩壊している。金子は、二〇〇六年に毎月一回、都市の「中心」ではなく、農山村の「周辺」、北海道十勝の他、南は宮崎県都農町から、北は秋田市下浜羽川など七ヶ所の中山間地を訪問し、その結果を『週刊金曜日』や『月刊ＪＡ』にルポルタージュを掲載した。それが本書の第二章「大地からの地域再生［ルポ編］」に収録されている。

金子は挙家離村の一例として中国山地の広島県作木村（現在、三次市に合併）を紹介している。私は広島女子大学（公立）に在職中に経済企画庁の作木村を含む、周辺三か村のパイロット計画「集落再編事業」調査委員会のメンバーとして調査に参加したことがある。石油へのエネルギー革命によって、山村で生産された薪炭は不要となった。豪雪地帯の作木村は、僅かな耕地と豊かな薪炭林で暮らしてきた。作木村の過疎対策の目玉は、豪雪に見舞われる奥地の集落から集団移住し、平地の集合住宅に住み、根雪が消えると、山奥の畑に通った。

金子は、作木村の岡三渕という一番奥の集落を訪ねたところ、大きな庄屋の家屋は崩れ落ち、荒れ果てた家屋が散在し、集落は挙家離村、廃村八丁となっていた。ところが、寒暖差の激しい三次盆地の水田は、大規模耕作に不適で、機械使用の効率も悪い。耕作に不利な条件を逆手にとり、水田に自家製の完熟堆肥を撒いた結果、ブランド米の南魚沼産コシヒカリに負けない、美味しい「三次米」の生産に成功している。ただ、その収量は限られているため、限られた地域にのみ知られたブランド米に止まる（一一六頁）。

金子が取材した農山村は、広大な耕地の北海道を別にして、中山間地である。北海道などの大規模農業は、国際的な価格競争に伍して生き残るため、独自の方策を懸命に模索している。ところが、中山間地は耕作規模の拡大、大型機械の使用はなかなか難しい。

都市僻遠の中山間地の農業

都市僻遠の中山間地の農家は、生き残るための知恵と工夫と組織活動によって、不利な立地条件を克服し、有利な条件に変えて、地域の再生が可能になる。厳寒の北海道和寒町では収穫したキャベツを地面に敷き詰め、雪の下に寝かせる。出荷時期の遅い「越冬キャベツ」は甘みが加わり、高値で売れる。

このように、「越冬キャベツ」をはじめ、料理屋で刺身や汁の「つま」（添え物）の紅葉・南天葉・笹葉などをパック詰めして出荷する農協独自の「妻物ビジネス」（徳島県上勝町）で成功し、高齢者の地域を再生した。その鍵は都市消費者の多種多様なニーズのなかで、地域資源に着目し、一般的なニーズの「すきま」に特化した「ニッチな農作物」を組織的に供給したことだろう。

ところが、その成功例を見て、そのモデルを模倣する農協や農業団体が登場するのが通例である。ニッチ産業の盛業は良く知られているが、農業の場合、過酷な競争市場で成功しても、安閑としていられない。それに対応するには、失敗してもへこたれず、農協や農業生産法人の積極的な運営によって、地域資源を「宝の山」として最大限に活用し、「山間から攻め続ける」ことであろう（大分県日田市大山町）。

その他、ブドウ産地の南限に挑戦した「変人たちのワイン作り」（宮崎県都農町）、農薬の空中散布に反対し、有機農業と産地直送によって農家として自立した（山形県高畠町）。営農センターが戸別農家の農地の委託と受託の農地契約を組織化し、農地は流動化したが、その結果、このシステムは委託側の高齢農家と兼業農家の救済策に過ぎなかった。

隣村の現状を反省し、営農センターとは別に、旧村単位の営農組合を組織し、コンピューターで地図情報システムを作成し、農地利用を調整し、農家全員が参加する

独自の地域農業、戸別経営から組織農業のシステムを構築し、農業の「担い手」と若い農業後継者を確保した（長野県飯島町）。

金子は、自明の農山村の荒廃を告発するのではなく、それに抗して現実と格闘しながら、農業を基盤に地域再生の営みを伝えることだった。だが、その成功例は点のような存在に過ぎない。それに反して、全国的に耕作者は高齢化し、耕作放棄地は拡大している。

金子は、農山村では「これからさきに一〇年もたつと、農業や商業の担い手はいなくなり、町や村そのものが消滅する」と予測した（一二八頁）。全国的に都市僻遠の中山間地の一部は「限界集落」に直面し、将来的に集落の消滅が予測されている。だが、都市近郊の中山間地の場合、果たして地域社会が消滅するのであろうか。もっとも、私が野菜作りのために通う一集落の観察であって、都市近郊の中山間地の集落一般について観察したのではない。

東京通勤圏の山狭村の観察

私が通う都市近郊（この都市は中小の地方都市ではなく、東京周辺の通勤圏）の中山間地の場合、すでに触れたように、畑はまったく高齢者の世界である。彼らは年金で生活を支え、多品種少量生産の自給農家である。産地が明記され、見栄えの良いスーパーなどで陳列されている野菜とは異なり、自給農家の野菜は新鮮で甘みがあって最高に旨い。露地栽培の自給用のジャガイモ、里芋、玉ねぎなどは適切に保存し、年間を通して食する。

その一方、夕方、一家の姑か嫁が畑に現れ、春は葉菜類の他、エンドウ、インゲン、空豆などの豆類を収穫して畑を後にする。今夜の夕食か、明日の朝食の食材に使うのであろう。取り立ての新鮮な野菜だから、おそらく都市生活者から見れば、野菜の本当の美味を日常的に満喫出来る贅沢な食生活であろう。だが、欧風化の食生活に影響を受けた団塊以降の世代には、これらの微妙に甘みと香りがする野菜料理に嗜好と味覚が慣れていない。

近隣の葬式組で葬儀があり、私は葬儀会館で裏方の葬式組のメンバーとして、親族や縁者とともに会食した。この葬儀会館は米飯として新潟産のコシヒカリを売り物にしていた。たしかに新潟産のコシヒカリは日本一のブランド米という神話が浸透しているが、食味ランキングでは最上級の「特A」と評価されたことは一度もない。

私の隣席の数少ない米作農家の彼が私に「この米は不味い」とささやいた。日常的に食する飯米がダントツに旨かったのであろう。この自給用の米作り農家は旨い飯米を日常的に食しているのであろう。ただ残念ながら、彼から昨夏の酷暑と日照りの天候の下で作られた新米を貰ったが、ぼそぼそしてあまり旨い飯米ではなかった。

都市住民の自然志向への対応

都市住民の間でベランダ菜園、さらに都市農地の一部をレジャー感覚と健康志向の都市住民に市民農園として貸し出すシステムが好評だ。都市住民は農作業を通して自然回帰をはかり、農民は生産緑地計画の耕作放棄地や不作付地などの遊休地を提供する。

ところで、都市の市民農園では一人辺りの耕地は僅か二、三坪に過ぎない。しかも応募者が多く、土地の供給が追いつかないのが現状だろう。狭い面積の都市農園では満足来ず、都市近郊でより広い農地で野菜作りをしたいというニーズが生じるであろう。

私が通う畑の近くに一区画四十坪ほどの市民農園がある。数名が都市から自家用車で来て、畑で汗を流していた。管理人の話しでは、最後の利用者がフェンスの柵に囲まれた出入口の板戸を締め忘れたために、夜間イノシシにさつまいもの塊根をきれいに平らげられたそうだ。

当地もたしかに耕作放棄地が点在している。それ以上に目立つのは、兼業農家と自給農家の不作付地である。不作付地は耕地を農用トラクターで耕耘と除草を一気に行うが、そこには種を撒かず、苗も植えず、それ以上の手のかかる農作業などは一切しない。

雑草が生えると、再び農用トラクーを運転して作業を終える。農用トラクターは便利だが、ガソリン代は決して馬鹿にならない。当面、先祖代々の耕地を不作付地として維持し、将来は跡継ぎが年金で生活を支え、のんびりと自給農家か、近くの農協直売所に収穫した野菜を持ち込む副業的農家を期待しているのであろうか。

時代は変わり、ビジネスの手法やモデルも変わり、新しい世代の生活感覚も変わった。だが、この村では依然として耕作放棄地や不作付地を有効に活用する発想はまったくない。本誌前号で触れたが、当地の慣例では、耕地の貸借は、都市とはまったく異なり、口答による相対の約束事である（前号、一一七頁）。かっては耕地の受託者は委託者に僅かでも賃料（現物の場合もある）を払い、委託者の意向を尊重した。受託者は委託者から耕地を買い上げる意志はなく、受託者もまた高齢化し、いずれ耕作放棄地になることは必至だろう。

自治体や農協が耕作放棄地と不作付地について農作業の受託や管理代行などの対応策を講じているという話しは聞いたことがない。自治体や農協はビジネスとして事業化しようとしないが、試行錯誤の末、ビジネスとして各地に「貸し農園」を展開している。この都市近郊の中山間地において、私が期待するのは「貸し農園」ビジスである。高齢の戸別農家が耕作放棄地や不作付地を独自に「貸し農園」として経営するのは至難だろう。だが、ニッチなビジネスとして事業化することは不可能ではなかろう。（二〇一一年六月末、擱筆）

透明な時間（五）

宅見勝弘

【前号までのあらすじ】

東西銀行赤坂支店の金庫室の中で竹森は目覚めた。竹森は何者かに殴打され、気絶していたのであった。隣に熊本支店長の撲殺死体が横たわっていた。犯行現場の金庫室は、格子扉がシリンダー錠で、耐火扉がダイアル錠とシリンダー錠で、通用口が数字錠とシリンダー錠で施錠された、五つの鍵による三重の密室であった。しかも、三つのシリンダー錠の鍵は死体の手の中に握られていた。火災報知器が鳴っていることで、沢木雅子・草津史郎・鹿田係長の三名が支店の通用口を開錠して、赤坂支店に入った。鳥居副支店長を含む四名が金庫室を開錠して、支店長の撲殺死体と竹森を発見した。

竹森は退院後、支店長の葬式に出かけた。喪主の代りを務めていたのは、元建設大臣の波戸田衆議院議員であった。

四（続き）

波戸田衆議院議員は選挙演説のように声を張り上げた。

「本来は、故人の妻が喪主として挨拶するところですが、突然のことで最愛の夫を失った心労により話ができません。代りに、喪主の兄で故人の親友である私が、ご挨拶させて頂きます」

波戸田議員は熊本支店長の義兄であった。実質的な喪主を務める間柄なので、義兄弟以上の深い関係が有る様子であった。弔問者も波戸田議員と親しそうな人が居た。

支店長死亡については新聞などで大きく報道されていたので、弔問者は事件の概要は知っているようであった。

竹森は頭に包帯を何重も巻いていたので、自分が支店長の死体と一緒にいた人物と宣伝しているようであった。

「故人は仕事人間でした。休日にもかかわらず職場に行って事件に巻き込まれた訳です」

事件前日の金曜日夜から当日の午前四時まで銀行の取引先との酒席で、波戸田議員と一緒であったこと、その前日の木曜日には日帰りで出張していたことなど話した。

夫人は余計な事を言わないで欲しいような目付きで睨んだ。もともと波戸田は失言の多い大臣として有名であった。

土曜日に支店長と会った時に酒の臭いがしたのを竹森は思い出した。日帰りの出張というのは接待ゴルフであった。旧東城銀行では平日のゴルフは禁止であったが、旧西都銀行では特に規制は無かった。合併して平日ゴルフは自粛する建前であったが、熊本支店長は気にせず行っていた。

「実は故人は糖尿病を患っておりました。病にも関わらず、病身の身に鞭打って銀行の支店長として活躍しておりました。無理を続けると命がなくなると私は言っていました。しかし、銀行と心中するなら本望だと故人は言っていました。病気でなく事件に巻き込まれ、こんな結果になってしまい残念です」

熊本支店長の糖尿病を初めて聞いて、竹森は驚いた。確かに支店長は太っていたが、病気とは縁が無いように思っていたからだ。生前の支店長が頻繁に水を飲み、よくトイレに行くのを竹森は思い出し、糖尿病の症状だったのだなと考えた。

「生きていれば、故人は将来の銀行の頭取として活躍したはずです」

波戸田議員の話は続いていたが、将来の頭取と言う言葉で、式場から失笑が漏れた。

葬式の参列者が規模の割に少なかったが、大阪から駆けつけて泣き崩れるような銀行員も居た。多くの敵や反発する者がいるが、熱心な信者もいるのは、熊本支店長らしいと竹森は思った。

「赤坂支店の銀行員は誰も居ないじゃないか」

弔問者の一人が批難するように毒づいた。

「故人の生前の人柄が現れているのだよ」

別の弔問者は義理で顔を出した感じで嫌味を言った。

葬式に赤坂支店の行員が来ない理由は支店長だけなく、夫人にもあると竹森は思った。

一ヶ月前に支店長夫人が企画して、ホテルで懇親会を催した。行員だけでなく、その家族も招いた大規模なものであった。

会場で支店長夫人が行員の夫人や女性行員に対して召使のように命令するので、評判が悪かった。皆その場では我慢していたが、帰りには支店長夫人に対しての怒りが爆発していた。中には派手な夫婦喧嘩を繰り広げる光景も見られた。

支店長夫人が喪主であれば、銀行員を召使の様に扱き使うことが明らかであった。夫人の存在も皆が葬式に行きたがらない理由の一つと竹森は考えた。

銀行員は義理関係を重視し、特に冠婚葬祭という慶弔については必ず守る人種と竹森は思っている。現役の支店長が支店で死亡した場合は、所属の行員が総動員して受付などをするのが通常である。

それだけに職場のほぼ全員が葬式に来ないのは、寂しいものであった。旧西都出身の二名だけは通夜に来ていたが、葬式には来なかった。

葬式当日は祝賀会と称して飲み会に行った行員が十数名いて、大いに盛り上がったという話を後で竹森は聞いた。

葬式の規模に比べて弔問者が少ないといっても、取引先の社長らしい人物は多く居た。赤坂支店だけでなく支店長が過去に赴任した支店の取引先も来ている様子であった。

参列者の中に持井建設の社長も居た。また、麻生工業の社長の姿が見えた。熊本支店長が朝四時まで飲んでいた相手が麻生工業であった。接待先の店で仮眠を取った後、そのまま支店に休日出勤し、被害に遭ったのであった。

支店長には大学生の一人娘が居た。黒く日焼けして髪は茶色に脱色していた。女性行員が髪の毛を脱色しただけで、銀行の信用を失うから黒く染めて来いと熊本支店長は命令していた。

従わない女性行員は窓口業務から外して、直接に顧客の目に付かない為替係に配置替えをした。

沢木雅子は熊本支店長の赴任前には、少し髪を茶色くしていた。窓口から外されたくないと、不本意ながら黒く染めなおしていた。

そのことを思い出したので、雅子が居ないかと竹森は周囲を見回した。彼女も他の赤坂支店の行員と同様に参列していなかった。

竹森が救出されたとき、自分の服が血で汚れるのに構わず雅子は介抱してくれた。三日の入院中も二回見舞いに来てくれた。土曜日に赤坂支店に来たのも、休日出勤の竹森に食事を差し入れに来たのであった。

事件の前から雅子が自分に好意を抱いているのを竹森は感じていた。竹森自身も雅子を気に入っていた。事件以降、竹森は結婚相手として真剣に雅子のこと考えるようになった。

旧東城銀行も旧西都銀行も銀行員同士の結婚は多かった。旧東城銀行では男女交際において不文律が有った。第一は、結婚したら基本的に女性は結婚退職する、第二は、女性行員が優秀で仕事を続ける場合は、男性行員が転勤になる。

もし、交際後に別れた場合は、男性行員が転勤することになった。『お手つきアウト』と呼ばれていた。

銀行内の不倫が発覚した場合は、男性も女性も転勤するという特別ルールも有った。

陰翳の美学（その六）

外山知

第三章　美を構成する要素

六、美の諸形態

2、美の創造（美への憧れ）

およそ、美への憧れは、私達の生活環境の中から生れ、美に対する憧憬は常に愛を伴う。そして創作、創造の意欲を掻き立てる。

その美への愛は、陰に陽に意識の素材となって、私達の構成意欲を誘った。

土器の縄文から、弥生の壺、甕、高坏の基本形態も古代人の素朴な生活意識から生れた。

1．薄手で硬い。
2．均斉がとれたもの。
3．赤褐色、淡褐色のもの

など、自然との人知を求めきた。それが装飾品として勾玉から、硬玉、碧玉、めのう、などが、装飾、祭祀に使用された。

銅鏡から金銅冠の創造が、古墳時代から生活の信仰対象として、豪族を中心とした埴輪に見える。

男女の服装、大和政権の成立は渡来人の活躍もあって、あらゆる分野で日本文化に貢献した。

その貴重品は、古墳出土の鉄、刀などに漢文使用が、発見された。もちろん、木簡も文化的史料価値が高い。

飛鳥文化に早や建築、彫刻、絵画、工芸の分野にかなり高度の美的なもの、制作過程を見る。貴重な存在だった。

それは同時に世界性を持ち忍冬唐草文様など、スイカズラの葉と蔓を連続文様にしたものが、エジプトにギリシア、ローマ、サザン朝ペルシア、西域に伝わった。

仏教美術と結合して、中国南北朝、朝鮮、日本へと伝

来をたどった。法隆寺の金堂の天蓋などは、その代表といってよい。

また建築様式で当時世界をゆるがした。エンタシスの、柱パルテノン神殿の柱の中央に、ふくらみを持たせる技法は、法隆寺の金堂の中門、回廊の列柱に文化の交流を見た。

それは文化の東西交流が、草原の道ステップロード、絹の道シルクロード、海の道、マリンロードとなった。

中央アジアの遊牧民の貢献が大きかった。飛鳥文化は仏教伽藍の建設に、国家的建造がなされた。

中国からの文化が、やがて国風文化の定着となって、釈迦三尊像、聖徳太子一族や諸臣の発願もあって仏像芸術が多く光彩を放った。

広隆寺半跏思惟像（国宝一号）も優美さが、しなやかな指、表情、体つきなど、全体の柔らかさが強調された。

弥勒菩薩像が特質され、その他に北魏形式、南梁様式の曲型的仏像彫塑など、法隆寺、玉虫厨子（透かし彫り金具の下に二五六三枚の玉虫の翅を伏せた。）小型の仏像を安置した。

その厨子を始めとして、聖徳太子の死後、遺徳をしのんで、中宮寺天寿国刺繍を采女たちに作らせた。

（最古の刺繍）として美的意識は最高調を帯びた。大化の改新を経て、やがて白鳳文化を生むに至った。

建築は薬師寺東塔。彫刻は薬師寺金堂、薬師寺三尊像。絵画は法隆寺金堂壁画、高松塚古墳壁画。律令の官制、司法制度の確立と国家権力が増大した。

天平文化建築は法隆寺伝法堂、夢殿、東大寺法華堂（三月堂、転害門）正倉院宝庫、唐招提寺金堂。彫刻は東大寺盧舎那大仏像、法華堂日光、月光菩薩像、唐招提寺鑑真像など。

絵画は正倉院、烏毛立女屏風、薬師寺、吉祥天像。工芸は、正倉院宝物（碧瑠璃杯、淡胡瓶、白瑠璃瓶等々）、東大寺大仏殿八角灯籠などを見る。

天平文化は記紀の編集、万葉集（天平期の歌人）。律令制国家の再建を経て、平安仏教、真言宗（空海）、天台宗（最澄）いずれも山岳仏教をなした。

教義も空海の大日経、金剛頂経（即身成仏）、最澄の法華経（絶対平等）を解く。更に空海の密教（加持祈祷）、天台東密、に対して、最澄は円仁により、台密と呼んだ。法華経の絶対平等思想が鎌倉仏教を生んだ。

建築では、室生寺金堂、五重塔。彫刻では神護寺薬師如来像、室生寺金堂、釈迦如来像、法華寺十一面観音像。いずれも木像である。

絵画では神護寺両界曼荼羅、教王護国寺、（東寺）、両界曼荼羅など極みをつくした。

書道は、空海の風信帖。（三筆は嵯峨天皇、空海、橘逸勢を呼んだ。）

漢詩文は　凌雲集、文華秀麗集、菅家文草。

史書は　類聚国史（菅原道真編）が見らる。弘仁、貞観文化を代表するものを烈挙してきたが、脚光を浴びるものとして注目をひいた。

藤原氏台頭、摂関政治と地方政治、荘園の発達もあって、国風文化が開化した。

平安朝文化は、詩歌、物語文学、日記、随筆など。特に注意を引くものとして、仮名の発達がある。貴族の束帯と女房装束（十二単）。従者、庶民の普段着、直垂、水干が見らる。

折から浄土教美術は空也によって、念仏を唱えることで、極楽浄土に往生出来えた。また恵心僧都（源信）より、往生要集と末法思想が結びつけられた。

かくて貴族庶民を問はず浄土教が広まった。頼通によって宇治平等院、鳳凰堂を建設し、阿弥陀如来像を安置した。

定朝は寄木造という手法で阿弥陀如来像の、大量生産に成功した。

醍醐寺の五重塔、東三条殿の寝殿造りは、この期を代表するものとして、国風文化の粋を集めた。

もちろん、絵画で、高野山聖衆来迎図、平等院鳳凰堂扉絵など、十六面の来迎図が描かれた。此は浄土、末法の風靡した象徴である。

書の世界でも、三筆の後三蹟和様は、王羲之の書体を基調に字形に丸味を加え、優美な線が特色で小野道風、藤原佐理、藤原行成の書を言っている。

具体的には、佐理の離洛怙、道風の秋萩帖、行成の白氏詩巻、白氏文集の七言絶句、律詩八詩を六一行に書き和様書道の完成された美を書作している。

平安末期の文化も中尊寺金色堂、白水（願成寺）阿弥陀堂、厳島神社絵画、平家納経、源氏物語絵巻等々、と存在している。

これらが最後の輝きとなって、美と綾の織りなす美学を、国風文化となして、華麗さを競わせた。

以後武士の台頭と共に武家社会のもつ雄揮さを、かもし出すことになる。

3、美の創造（美を感ずる意識）

美を感ずる意識は、人類発生と成長に伴なって、発達するものである。もちろん、素朴な古代社会においても、生活様式の中に散見することが出来る。

美しいものが、生活様式の中に取り入れられゝば、生活にも余裕が出来て、価値的な効果を持つ。

そして、選択も可能になる。作業もより改良工夫がされるであろう。効果的なよりよい生活は、人類の英知が編み出したものだった。

結果的には理知による美も経験の中に生かされた。周辺に自生する植物群にも、こうすれば、もっと美しいも

のを開発することが可能かも知れない。
多くの実験の中に、もちろん失敗もあり数多くの実験が、すべて無になることさえあったろう。
この試みは効を奏さなかったが、他の実験を試みたら数種の中で唯一の成功の証を得ることが出来た。
これは一つの奇蹟と信じてよい。それを基調に数多くの品種改良が、試みられ種の保存もなされ、より芳しい物を生み、人間生活に密着したものを作り出した。
これは美的世界構成にも役立ったこと、思はれる。もちろん、一期には生成され来た物ではない。それは周知のことである。
幾世紀にも及ぶ人知の積上げ、文化遺産の継承が、新しいものを生みきたことも事実である。
その陰には多くの無駄の労があったが、これも大きな観点から見れば、功績の翳の力かも知れない。
人知豊かな美的な文化価値も、過去から現在へ、そして未来へと時空を超え生成過程を辿ったことであろう。それが細々なものであっても、あなどってはならない。
輝く日々は、たとえ闇夜の世界が進展しようと、大宇宙の法則通りに、より美しい世界を育くみ形成することが、我々人間の生きとし生ける喜びである。
日々は廻り去りし物が回帰する過程、これは自然の法則である。この自然に挑むのが、新しい挑戦かも知れない。
たゞ美的創造、平和的な美しい物へ、より磨をかけ続けることが必要である。徒らに破壊を想定しての人知は、滅亡を肯定するに等しい。
また有史以来の歴史を懐古するに、栄枯盛衰は世の常か。「猛き者は遂には滅びぬ、ひとえに嵐の前のちりに同じ」とは平家物語の冒頭に記している。
それもまた一説か。とはいえ破壊、崩壊を積重ね、新しい文明発展の為に、大きなマイナスの要因といってよい。
長期展望によれば、これもまた一つの潮流か、とも言えよう。翳の存在要因が余りに大き過ぎるのは、人類英知の積上げに、やはり負と言ってよい。
大きな見知から見れば、これも翳の美学かと、しばし眼をおゝいたくなる。創造はたゆまぬ力と技への挑戦と言ってもよかろう。
あるいは試行錯誤の繰返しかも知れない。場合によっては、その過程において眼を疑うばかりの結果を得ることすらある。と研究者は言う。
自分では取留めのない物かと捨てゝ顧みない物が、何かの思惟手がかりで捨て去った物に、新しいものを見出し、思いもかけないような物を育くむ、切っ掛けとなったと述懐している。
この述懐のように今まで負の論理として、返り見なかった事への愛おしさが、顕現される。いや、そんなもの

かも知れない。
選択するもしないも、その時の状況で開眼の道が大きく啓発される。創造なども一つの手掛りを得る過程が、重要と思われる。
新しい研究開発も、そんな実験過程に思いがけない恩恵をつかむか、見過してしまうことが多かったか、もちろん選択の幅もあったことと思う。
たゞ負の論理として半ばあきらめていた。実験途上に思いもかけない効果を得ることすらあった。
自分では負の論理として一掃しかけていた所、思い掛けない奇跡が蘇がえってきて成功へのプラス試行が、実現した時の驚き歓喜はこの上もない。
世の中には、そんなこともあるのだ。ノーベル化学賞、物理学賞などの領域は、まさにこの繰返しだったのかも知れない。
はかない一本の考える葦がこの上ない思惟世界への糸口ともなり得ることは、美の創造でもある。
私達が意図すると、しないとにかゝわらず人類英知のかぎりない創造と見てよい。
美の創造といっても今の様な形而下学の領域も、一つの大きなステップである。
私達の潜在意識の中に美的なものによする感受性が、心情、情緒をともなう過程として覚醒されることがある。
心理的要因で一つの感情移入として、受けとめられることがある。
私達の脳内細胞が美しいと感ずる働きと、他種の残像現象が比較され、よりAよりはB及びC、D、E、Fの方が美を創造する手掛りとして多彩を感ずる。
この小さな一つ一つの因子は、美の捉え方として、また創造過程の一つとして、より形而上的な、世界の手法と見るべきであろう。
感情多彩な大脳、脳細胞の働きは計り知れない。神秘と人間を生かし働かせている機能でもある。
ルネッサンス期に、レオナルド・ダヴンチは、そのメカニズムにメスを当て細胞を包む骨格の細部にわたる検査が取り行なわれた。
彼の画布に表現した画像のもつ美的な創造性は、今日の絵画に美の本領を投げ掛け、フィレンツェ美学に不朽の貢献をなした。
この創造的な過程こそ美、新しい美学貢献の成果の何ものでもない。
もちろん、古代ギリシャにさかのぼり、形而下学に多少たっちしたアリストテレスの医学的な知識を、不問にするつもりは毛頭ない。
この先駆けの思惟過程が、結果的には、レオナルド、ミケランジェロ、ボッカチオを生んだことになる。
人類先見の先駆けは、新しい美の開発、発見に貢献的役割をになっている。

その観点から美の再発見も、フィレンツェの華を可能な位置にまで高めえたものと見て、感知に価いする。

根底には時めいた、東ローマ帝国に集まった知的インテリジェンスを誇る学者群が、文化、芸術、科学の分野において、ルネッサンスに共有するものを、実戦に向け構築していったのが、フィレンツェに定着し開花したものであった。

その過程は一つの歴史であり時代をかくする文明、文化を生ましめたものとして、高く評価された。

古代ギリシアに立ち帰る再生、復興は、大変なものであったに違いない。

一つの中世世界を支配して来た、ローマ文明が滅亡して、新しい文明、文化の復興は、歴史区分の上からは、一つの潮流として受けとめられる。

そこに生きその時代を築き上げてきた人々にとっては、はかり知れない大きな物、文化、文明であったに違いないと思われる。

先見性に富んだ学者群が個々の才能を如何に発揮し得たかゞ問題となろう。

当時王宮はかゝる学者群に、天分発揮の技能をふるえる機会と援助を惜しみなく提供し、財宝をつぎ込んだことは、歴史の一断面を見れば、容易にうなずける。

かゝる需給の関係が調和をたもって形成のはこびとなったこと等々、論拠に暇ない。

そして新世界を拓いていったことは、精神的な宗教革命に文化発表の場として、印刷技術の開発、地理上の諸発見と、まさにコペルニックス的世界を形成するに足る環境構成も整ってのことであった。

それらは、まぎれもなく実証と論証することが出来る。

いわゆる、近世の曙であり創造でもあったこととして、後世に残る成果をあげえたことは、その底流に美の創造が秘められていたと解してもよい。

もちろん、個々の業績の上に光り輝く共同成果が、実を結ばせたことと思われる。人間の偉大さは、かくの如き大きな力となって、未来永劫に輝くことになる。

思えば、はかない一本の葦がかゝる成果を生む過程に賛辞をなげかけたい。

たゞ誰しもかゝる美の創造は夢みていても、それを現実の物として鑑賞、賛美するまでに成し遂げるには至難の業であった。

しかし、あらゆる可能性が味方し、働いてくれる雰囲気、すなわち歴史上、事誼を得ていたことも、創造への錠となって働いた。

このようにして、美的創造の輝きは一朝一夕には出来得ないことを、付け添えておく。

4、情緒と感性

以上、「美の創造」という論攷を重ねてきたが、今とめどなく美への創造を駆り立てるものとして、私達の心的な内在に近因する情緒と感性とに、意を注いで見たい。

私達にとって美的感情を表面に浮び上がらすもの、すなわち感情をコントロールする素因は、その内奥に情緒的な機能をつかさどっているものを常に思う。

その物に接した時に受ける、しみじみとした特有の情趣、雰囲気など、前記の感情に近い存在、喜怒哀楽などの心の動きを誘い起すような気分にかられる。

それらは、いずれも形而上的な感覚器官によって心的作用が、或いは美的な快感になったり、それを誘発する過程において前述の創造をともなったりする。

さらに前述の美が美を感覚器官を通して、より深い領域にした。

自我意識の上に諸感情を呼び覚ます心の動きを、より複雑な心境に誘い起すような心的な気持、雰囲気が表面にただよう。

たゞその折に心的な情況において、より情感にうったえる。しみじみとした特有の情趣を、私達は情緒と呼んでいる。

そういう意からすれば感情と極めて近い存在だが、そこに何物にも変えがたい情趣、情緒を引き起すことになる。

これは私達が美学を意識する上に極めて重要なエレメントとして、心理学的にも、より深い心奥の判別となる。

たゞそれが美的な感覚となって刺激や印象を受け入れたり、場合によっては反対する能力、感受性が高度な判断対象となると、いわゆる、感性的な認識となる。

すなわち、感性の領域となって鋭い感性に訴えかけることにもなる。

例えば美的な認識においては、自らの純粋な姿を現すことが、人間の生きる姿だとも言われる。

感性によって目覚めたものを、感性でないものから分離することは不可能である。悟性的、理性的なものではなく、人間の生についての感性面の意識であり、情意の世界である。

例えば印象を受け入れる能力、感受性が感性的響きとなって現われる。

私達はおよそ、悟性とか理性の判断で、解し難い人間性の内に、美を美として意識する過程を問題とする。

従ってその感性の度合によって、美的な価値意識も異なってくる。たゞ美しい尺度が人の美的な知識で差位が生ずるかも知れない。

たゞ捉え方によって、多少位置を変えることはやむを得ない。もちろん環境、知性面の働が皆無とは言えない。

様々な物の存在や行動を含み、感性はその美をつゝみ、意識から認識領域まで高まり、感覚が呼びさまされる。

情緒、情動により刺激となって鋭い感性の目ざめをお

ぼえ、美を満すことにもなろう。

意識の最も主観的側面で気持、快、不快などの感情を単的に現す心持の機微は、視覚による反作用の働きで物事に対峙する。

そして直に前記表現の言葉を使用すれば、反作用的に相対する。もちろん脳神経を担当する領域が思慮深い経験的な思惟をめぐらすまでもない。

直接的なものとして感情の発露が、前述の美の創造にも直観的に投影される。ただ経験的な視野の世界かも知れない。

そうかと言って私達は、この感情を軽視するわけではない。いなむしろ第一直観として、この感情は今後の思惟世界の広がりの上で、必要なエレメントではなかろうか。

従ってこの感情こそが、今後を規定するものとも言える。もちろん、今後の思考過程において修正も可能である。

より高次の過程に誘う通路と言ってもよい。通路といえば、感情が情緒化する過程には、視神経を通して脳の前頭前野の細胞への逆の刺激が第二直観を呼び覚す要因となる。

環境が特有の情趣、雰囲気をかもしだす。「源氏物語、夕顔の巻」で、夕顔の素姓判明の、「はかなかりし夕より怪しう心にかゝりて、あながちに見たてまつりしも、かゝるべき契りに、こそは、ものし給ひけめ。と思ふも、あはれになむ。またうちかへしつらうおぼゆる。かう、長かるまじきにてはなど、さしも心に染みて「あはれ」とおぼえ給ひけむ。」と、「あはれ」を短文章の中に二度も使用する。

Aは形動ナリの、しみじみとなつかしく感ずる。Bは可愛いと、あはれの文章を形象する。情緒性を細かく、明らかに現す構成といってもよい。

およそ「あはれ」の感覚は、しみじみとした感慨、情趣風情を誘う言葉として、古語では使用される。

物的な対象に対するどんな情趣を、情的な趣きにさそうか。「もののあはれ」の流れを特質して問題化する。

すなわち、美意識が問題化され、その捉え方を美的手法の中に誘発する風情が、平安美意識の中で、女性的感覚描写としてたゝえられた。

感性の誘発は前述したように事にふれて、自然と心の中にわき出る。しみじみとした感情、情趣、人間らしい情愛をいう。

いわゆる、自然や人生の知慧によって得た優美、繊細な美的理念を近世に入って、本居宣長によって源氏物語から摘出して、広く文芸理念にまで高揚させた。

そして平安文学の美的理念として唱えたことは論をまたない。

同じ平安朝の美意識を現す枕草子の「をかし」は、趣

深い意を表す。

両者は相対的に、「あはれ」は感性的な美的直観に対して、「をかし」の客観的、理知的な興味を賞美した。

すなわち、知性や批判意識が働くため、明るくはなやかな情趣や、こっけいな笑いの意味にも広がった。

美意識と相対する感性か知性か理念を二分した。作風をとらえたことが、美意識の理念の上にも対象化された。

この二大理念はその後、和歌分野にも影響は大きかった。

情緒と感性について論攷は、こゝに来て美への創造過程に、前述の環境因子の捉え方も、その繊細さによって左右されることになる。

ことに女性の繊細な感覚は、美意識に顕著に現われ、美的な感性的把握が中世の源氏物語の貴族社会の中に発見された。

才女の繊細な意識を、今日の科学技術の進化した青色発光ダイオードの光などを、誰れが予感し、知り得たであろうか。

もっともこの科学技術の進化は、知的な美意識のとらえ方かも知れない。とは言え人間の感性的意識は驚くべき情緒によって、光の分野にまで視野拡大をなさしめた。

なお蛍の発する小さな光に感性的美を垣間見ている。繊細な美意識は今日の私達の感覚以上のものを、中世の美学に通わせていた。

鋭さ賞讃にあたいする。人間の感性の響きは脳細胞による響でもある。いやこれなくしては感性描写も、陰翳の美学もありえない。

研ぎ澄まされた感能美も感性、知覚を呼びさます脳内の意識、知覚現象も人知の知る所である。

未開社会から創造過程のプロセスは、環境文化や遺産の継承によって、脳細胞自体も活性、発展、進展して来たと思う。

脳の進化増大は表面には見えない。見ることは不可能であるが、未開社会に生きた人間と二十一世紀に生きる人知とは、明らかに違いがあろう。

レントゲンX線の撮影によっても、断層撮影MRIによっても考察は可能だ。活性化する過程は、もちろん環境因子によって、創造も感知し、反応能力も増大化して来たことは間違いなかろう。

周辺環境は偉大であり、今後も見逃すことの出来ない存在であろう。感性的な認識は古代ギリシアの哲学者達にも、悟性的な認識と共に叫ばれてきた認識の過程である。

ローマの中世スコラ哲学、近世のルネッサンス哲学においても美学を伴なって開花し得た。やがて、カント、ヘーゲルを通して観念論体系の中に感性的な認識も叫ばれた。

現象学的体系、生の哲学にも、また唯物論哲学の中に

あっても唯心論との対決、そして経験論的プラグマチズム、実存哲学など、あちこち時代を画する感性の響きが、新しい美学を育くんできた。

その情緒は感性と呼応して美意識の顕在化を示してきた。激しくもその認識の作用は今日の美学に示唆を示し、新しい感覚のより所となったはずである。

かゝる美の所産は、私達の心象表象に負う所が多かった。かくて意識に浮かんだ姿や像と美について、いささかなりとも触れておきたい。

5、心象と美

およそ意識に浮かんだ風景など、使用される物も、実は心の中に現われる、その人の心の動きや意識のあり方、つまり外界の刺激に対応するもので、人間世界の心理、心理現象など感覚器官を通して知り得る物を言う。

見たり聞いたりしたことが基になって、ある形を取って心の中に現われるものである。

この中には記憶としてまた、想像として心的表象となって残るものもある。

いわゆる、外界から受けた刺激がすでに消え去った後まで、短い間残る感覚、つまり視覚について言われる残像現象も心理的作用として起こり得る。

感覚器官の中に美しい映像が焼きついて美を形成する。これは私達の心を通して美的な感覚が、美しい対象物だと意識することによって、心の響きとなってはっきりと現れた物である。

私達が美しい対象に美的センスを、心象の世界へ直観的に送り込み、心象の世界で知られたものが、美の表層となって表現に生かされることゝなる。

考えて見れば人間のもつ脳細胞が、如何に鋭敏な感覚器官であるかゞ納得されよう。心の働きを知覚する形而上的働きこそ、美的構成の要因として取り上げられる。

心象の表象として特に注意を集めた印象派は、文学、音楽、美術にしても心象芸術として取材する価値は、高く評価される。

特出されるのは美意識の高い、十九世紀後半フランス絵画に起こり、順次、他分野に波及した。

事物から与えられた感覚的印象もまた、事物に対する主観的な印象を作品に表現しようとする一派をさし、モネ、ルノワール、シスレーに代表される。

彼等は自然を一つの色彩現象とし捉え、光と共に変化し行く微妙な色の変化に、自然を描写することにあった。

モネの庭園、水蓮の庭の表現は、光の変化によって、同じ風景もまったく状態を一変する。

光の問題、明るさの追求から色彩の問題、すなわち、うつろいやすい自然の瞬間的な表情の把握に、新技法の発見が功を奏した。

いわゆる対象世界の客観的な描写から、主観的な感覚の表現効果を自由に使いこなす、近代的な感性の樹立で、印象主義導入がこれをなした。他の文学、音楽の分野にもこの傾向が及んだ。

美術上印象派成立のきっかけは、一八六〇年代パリで旧来のアカデミックな作風に、不満をもった青年画家達の結集によって、幾つかのグループが誕生した。

中でも前記のパジール、モネ、ルノアール、シスレーなどが、「アトリエ」で友情を結び合ったことは、他の擁護者ドガ、ゾラなど詩人、評論家達にも影響を与えた。

印象主義思潮がヨーロッパに一大センセーショナルを巻起こした。

マネ「卓上の食事」一八六三、モネ「アルジャンティーユのヨット競技」、一八七二油彩ルノアール「陽をあびる裸婦」。一八七五～六油彩。第二回印象派展シスレー「モールゼーのレガッタ競技」。一八七四油彩など、いずれもルーブル美術館に所蔵された。

印象絵画の代表作として前記の光の変化によって、微妙な色彩の繊細さを感性豊かに表出させた。

、時間の推移が見事に調和を保って印象表現を鮮明にさせた。つまり過去の類型的なアカデミズムに反抗し、自由な観察技法で、光と色彩のコントラストに、印象的手法を試みた。

透明な色彩感覚、流動的変化に富む構図を、日本の浮世絵版画からも技法上の示唆を得た。と告白している点も注目される。

彼等はそれなりに「外光派」とも呼ばれ、終始戸外で制作に当る。その為、自然界のすべての色は、光と大気によって生じ変化する。

それ故、物体固有の色彩はないと考えプリズムの分解による七色に、限定しようとする方向性にむかった。

陰の部分も黒や褐色を使わず、明度の低い色彩、青や紫をたくみに使い。色調の分割、色彩の並置を画布に、すなわち光の輝かしさを、すぐに色によって表わし混色を避けた。

純粋色を小さく短く塗って、視神経を刺激した。いわゆる、印象的手法を感覚、感性に求めようと工夫された陰翳の美に、あざやかさを添えた。

時間によって変化する光と翳の美を、そのまゝ私達の感性に印象ずける、手法をとった。

その後一八八〇年頃から新印象主義派が台頭し、感性的美、スラー（奏法記号）を中心に、かつて印象派が直観的手法によった光輝表現を修正した。

形而下学の科学化、すなわち光学、色彩理論の研究、色調の分割描法また点描法とも呼ぶが、光線の効果をより高度に発揮することに技法をおいた。

かつて印象派の画面構成、形体の秩序を軽視したのを再興させる効果をねらった。それもやがては、後期印象

主義者などによって、個性的方向へと再修正の動きが見られた。

イギリスの美術批評家ロージャーフライ、日本の黒田清輝達によってなされていった。

この間仏では、セザンヌ、ゴッホ、ゴーガンらと、ロートレック、ドガ、ルノアールによる物の実在と空間構成、内的生命、神秘感、原色の総合使用などと、集団としての共通性はなく、あくまでも個性的作風を求めた。

前述した日本における印象主義も仏国から帰国（一八九三）した、黒田清輝、久米桂一郎などによって、洋画界に新風を巻き起こした。

陰の部分に明るい紫色を用い、自由な感覚表現は注目を引いた。印象派黒田の下に集まった青年作家層の伝播は速やかった。

東京美術学校洋画科、初代教授になったことによって、我国では当初から官学支配の画流として、日本洋画の基底をなしていった。

印象をともなった感性の美学は世界的風潮を帯びて画壇を支配した。心象表現も美の創造に一肌抜ぐことになった。

これは美学の世界だけでなく、文学、音楽の世界にも取り入れられた。感性に訴えかける響きが基調をなした。

そして視覚、聴覚をして記憶、想像また印象をともなった表象、あるいは文章に音の響きにと、更に絵画の世界も、外からの刺激に対応して反応し、心的作用（印象）を感じ取った。

直感的な心の働き、すなわち心象が美の原型となる。すなわち形而上的な美意識へと、左右することにもなる。

かくて心象世界の開花が、美的な形式に寄与したことは、論をまたない。

6、非美なるもの

これは光と翳に相当することで、論理学の領域でも度々問題となるものである。

美は非美あって美の本領を発揮するもの、たとえ美が美として独走するにしても、非美なるものがあって可能である。

尚存続の効果も持ちえる。此は前述の感性美と感覚によって捉えられた世界と、認識する働きが若干異なる。

いわば美を美たらしめる根源において、非美なる認識を組立て可能な領域に、論理構成する。これは直観的な感覚認識とは異なる物である。

符号論理を応用すれば、プラスとマイナス、イオンの織りなす綯が、微妙に差異を生む美を形成する。

この非美なるものを常に意識して形成することが、本来の姿と察知出来よう。プラス、マイナスの作用は磁気を帯びれば、相対的に引きあう性質を帯び、結果的に結

びあうことを示す。

大きくは地球自体が大きな磁気を帯び、北極、南極がプラス、マイナスの領域を示している。

磁力計の働きもまた、電磁波の働きもこのような性質が作用するから、それを応用して様々な物象に利用出来る。

事は論をまたない。この事柄から、作用、反作用もまた一つの論理を引出すことが可能だ。

これによって私達は日常生活の様々な分野に、これを応用した工夫が、活用されていることは論拠にいとまがない。

美が美として栄える翳には非美なるものの、後押が如何になされるかゞ、根底に横たわる。

およそ非美なるもの、すなわち非美なる世界それは、言葉を介して表明すれば、明暗の暗に相当するもの、暗はあくまで暗で、その深淵さは、はかり知れない。

暗は極めて奥深いかも知れない。また極めて浅いかも知れない。暗は暗であって、その深淵さに関係なく負の世界を荷う。

その力は果てしなく広く続き、それを断ち切ることは想像さえできない。たゞ対峙する明によって、その判断もそこはかとなく崩れ去るかも知れない。

いや、それによって美をより高次な美へと、いゝかえれば明をより高次の明に引き上げ、独立した個体へと換えて行くかも知れない。

いな人間知の巧な技が不可欠となるかも知れない。輝ける個体は様々に変化して行く。その過程に探検家が人跡未踏の領域にわけいって行く。

そのような血のにじむ域での辛苦もあろう。明暗を分く人智のたゆまぬ努力、これこそ本来の成果の可否を決定することにもなろう。

ヘーゲルの弁証法論理学の、正・反・合、鼎立に見える一つの判断（正）に、矛盾する判断（反）をともなって、一段と高い総合的判断（合）に統合される過程、Aufheben 止揚が美と非美にも求められよう。

では反はどこまでも反であるか。いや、この鼎立の如く、より高次の総合的な判断への止揚の為の足がかりであって、非美の論理に美を美たらしめる要因こそ、本来の美構成のステップと言っても過言ではなかろう。

従って非美なる存在が美的構成にとって、重要な要素となりうることは論をまたない。しかし美的形成の歴史においても非美なる存在を論攷対象としたことは、表面立ってはない。

美を美たらしめる要因として、洋の東西を問わずたゝえられてきた。また意図もされきたった。

前述も対象とした印象派の絵画の中で、翳の部分に黒とか褐色を使用せず、あえて明度の低い青や紫を使用して、感性的な美を綯なした。

それも非美の論理を表面化し明るい色彩印象を表象させた。これは非美なる存在美を止揚させることによって、輝く印象絵画を取りなしたことも、忘れ得ない存在といってよい。

こゝで「美と非美と」を諸形態の中で論攷しようと試みたのも、論理的な思惟がもたらす構成美に、あえてふれ得たかったことを思い取り上げて見た。

後に唯心論、唯物論の思惟世界が台頭するが、絵画の世界にもかゝる論潮が大なり小なり影響しあって、二十世紀から二十一世紀にかけて前衛芸術として、その風潮をあびたことは事実であった。

ピカソの青の時代とか、マチスの構成美にも非美なるものが、より高次の美形成に一役を荷ったことは言及するまでもなかろう。

今哲学の言葉を借りてロゴス的理性とパトス的心情を考えて見よう。前者は根元的には論理学が支配し、後者は心理学による。

いわゆる内容面では経験科学による所が多い。たゞロゴス的思惟にしても、形式面では数理の力を借りた合理論でも、さらに内容面では経験的な認識論である。

すなわちロゴス的な形而上学にして、パトス的な形而上学を取る。同じ形而上学の支配にしても、このように左右する。

美と非美についても観念的な思惟世界では、経験論すなわち経験主義的な感覚から、パトス的な心情、いわゆる心理的な感性作用として響いてくる。

この非美なる世界が美を構成する。パトス的な形而上学に由来することは、ヘーゲル以前にイマヌエル、カントが判断力批判で論述している。

美と非美の存在論は、後に生の哲学、実存哲学として発展を見る。かゝる論攷をもとに、私達はその物象を見る眼識に、ふれる必要を感じる。

7、物象を見る眼識

私達が自然世界に横たわる物象に挑む時、先ずもって視野に飛び込んでくるものは何か。その物象の形、色、臭、感覚的な美をともなった構成要素がどんなであるか。

また存在物が動きを伴うものか。静止する物象か、種々の観点が私達の心的な作用を起動させる。

私達は視聴覚器官を通して光彩を感じえる。これは前述もしたが、光は角膜から前眼房、瞳孔へ、そして水晶体へと直進または屈折して入る。

虹彩とか毛様体、結膜など眼球付属器によって調整して硝子体から内奥の網膜の中心窩に、もちろん網膜の内側に脈絡膜、さらに強膜で包まれ、眼窩脂肪によって中心窩から視神経の束へ導入される。

頭蓋内に入ると左右が一度合さって半分が交差し、再び左右に分かれる。大脳の真中に行き、そこからバラバラの線維となって、後頭部にある大脳皮質の視中枢に治まる。

ここではじめて物象を「見る」という感覚が生まれる。

眼球を支え、目を動かす筋肉（眼筋）上眼瞼挙筋、上直筋、外直筋、下直筋、下斜筋などの動きもあるが割愛する。各器官と共に重要な働きをする。

今、光が眼球を通過して大脳の視神経にて物象を見るまでの機能について、ふれたが、どの器官も複雑で眼瞼（まぶた）も眼球の保護、開閉を無意識に行なう。

またたき、危険物への瞬間的な防御作用、表情の変化などにいたるまで、行きとゞいたものである。

かくて私達に刺激となって、外界の物象を如何に認識するか、感性的響が蘇ってくる。

物象に対する眼識ということで、あえて眼球の構造にも医学書を通して触れたが、人間この不思議なものは身体各所様々な機能をもっている。

実によく出来た諸機能によって眼識を支えもっている。それが視聴覚だけでなく触、味覚、嗅覚の五感が機能して、始めて眼識がより確実なものとなって働く。

この眼識こそ様々なものを視神経を通して、感じとった感性の認識、すなわち前記のパトス的な形而上学と言って過言ではない。

美的拡大はこゝから始まるといってもよい。幾多の辛苦はこの価値認識によって育てられ、純粋さへと個性開拓の美学を歩むことになる。

その第一歩はこのパトス的な形而上学への道を進む。

幾変転し歴史を閲みしきたった。芸道も流派も、この眼識によって、すべてを効果あらしめ、可能な道の探究へと分け入って行く。

その前途は厳しく峻しいが、それにいどむ芸術家は「そこに山があるから登るのだ。」という登山家に似た、峻厳極まりない存在だ。

山頂へもピッケルとザイルによって誘導するその精神と、陶芸家の作っては壊し壊しては作る製作魂は、一脈かよわすものを持っている。

何を為すにも同様な心情は常に走る。輝く美学は、まさにこれであって他にはない。精神的なものすなわち、魂を打込んで仕上げる、その姿には尊い神技が宿るとか言われる。

世の中のあらゆる煩悩を断ち、たゞひたすら芸の道、精進の道、それは仏教修行者にも似て尊い。

およそ人間国宝と呼ばれる人の歩む道は、まさにこれであろう。「前途程遠し思いを雁山の夕べの雲に馳する。」日暮れて道遠しの感がする。

然し緩せることなく諦らめず、たゞ時代のスピードにのって大きく展開すれば、不可能を可能化することも出来よう。自然と道は開けてくる。

輝やく美学の栄光を夢見て、一歩の前進に期待をかけよう。芸術に夢を託し、自信を持って頑張ろう。かくて芸道は凜と光をはなつ。

とは言も、かゝる眼識は今述べたように辛苦に辛苦を重ね、血のにじむ努力のあげく、芸術が芸術たり得る。それは即述の如き過程があればこそ、見事な出来ばえが輝く。その事を常に念頭において心血を注ぐことが肝要と思われる。

およそ一物が天下に名声を博するには、その地の環境と人の作りなす巧の技芸が支配的である。

江戸期近世にいたって各地に、それぞれ伝授する芸道は諸藩が推奨する所であった。もちろん眼識豊かな伝統を受継ぐものを集めた。

特別な幕府おかゝえの技師は、その命の重さに耐えて、命をかけての使命感に、この世の粋を育くむことに専心した。

かゝることは各藩で競争意識をあおり立て、その地の銘を彫むことをしなかった。現在でもその系統は生きて、伝統から伝統へと承継されることゝなり、各地に眼識豊かな傑物を鑑賞することが出来た。

もっとも所藩の事情によって、芸道の火を継承する者が途絶え、曾て花やいだ活気も今は消えうせて、再興が困難を極めた物もあった。

文化遺産の継承の至難さは、今始まったことでもなかった。昔日の燈を今日までも守り続けた流派も、美術、工芸品の領域だけではなかった。

文化輝やく曾ての習慣が、今日そのまゝ生かされて命脈をたもっている。京の冷泉家に伝わる伝統の歌道のならわしなど、幾多の古書本の伝受はまれであるが、今も当主によって受け継がれ光をはなっている。

旧徳川氏の名古屋の蓬左文庫を始め、規模こそ小さいが、佐竹藩の千秋文庫となって保存に意を注いでいる。葵文庫も静岡県立中央図書館にと様変りし、文化財を今日的規模で守り抜いている。

文化庁重要文化保護法の意図は温故知新に見入る情熱といってよい。

我国書壇の最高レベルの代表書家による、新春二十人展が一九五七年（昭和三二年）に端をはっした書展が、半世紀を越え、これほどの伝統展をこゝまで実施して来られた朝日新聞の大展運営委に敬意を表したい。

書壇の人選に心を配られた書家の、心血を注いだ作品の書跡に、気品をもつ雄揮さを、垣間見る思いすら感じ得た。

目習いを書家の心筆で追って究極の美が、かくまで心を打つとは、しばし時の移るを忘れて、その雰囲気にしたった。

初回展から時代を追う毎に、旧き書壇を代表する書家達もやがては消え、新しく輝ける書家の台頭は伝統を継

承する者の重責といってよい。

たゞ燦然と光を放つ一流を誇った。鈴木翠軒先生の青墨の魅力も、万葉集のかな文字も往時を語るよすがとして、先生の心を捉えることに、ためらうことはない。

在りし日の講習会に出席した人の懐古から、先生の風貌を偲ぶ時、往時を思い感懐に胸を打つ。

真の芸道とはこれなのか。今さらのように歴史を懐古し、変遷する美学の奥義を知る手掛りをえ、余韻粛々の一週を感じ、心が躍るを覚えた。

これも一つの物象を見る眼識と解してよい。

8、心的美と実在美

前述の眼識から生れ出る実在する美は、同時に心的な美も創造し得よう。例えば印象派絵画の心象に移る、印象的な表象が、ルノアールにまたモネの水蓮の庭に輝く表象となって変化する。

一瞬の輝きそれは印象の象徴であり、心象すなわち心的な美でもある。

実在美は、現実に匂い咲き誇るあでやかな一輪の花にも、また群舞して咲きたゞよえる梅が香に、人は心の美をよそおう。

自然世界でなくとも、人の手芸品の綾綿、お召し、金錦の文様も、身にまとい着服すれば表情をともなう。

また品格も、そのお召しによって優雅さに奥深い繊細な香さえたゞよう。これは中世の能の世界にも言える。

芸術品は人格を変え、起居動作までが装いを新たにする。

茶道の幽玄の美は、わび・さびの領域まで、その本来の姿を変えさす。すなわち「その器に従えば、おのずと器をなすもの。」すなわち品格は人を成すとも表現しえる。

物象も自ずと心的作用によって、形、品格を作成する。昔「馬子にも衣装」と言われ、ちゃんとした衣装を付ければ立派に見える。すなわち、自然とその品格も整う。現実を包むあでやかな装いは心象表現の形成にも不可欠なものである。

残像現象も現実の美を、あるイメージに置き換え、その映像を心の中に焼付け、脳細胞の中で蘇みがらせれば、心的な美を構成できる。

幾世紀を経た名画、工芸品あるいは建築様式も、いま実在美を再構成しえる。

まして科学技術の発展した今日の社会では、光ファイバーの先端技術をもってすれば、高松塚古墳群の美も蘇がえらすことは容易なことと思う。

その原画にまた色彩に迫る手法は、形而下学の分野かも知れない。感性優位主義をとってきたこの世界にも、新たな手法的な転換が必要かも知れない。

たゞ資料解明の分析に欠くことの出来ない存在として使用される。従って発想転換が、パトス的な形而上学、万能のものではない。

医学手術の領域においても、従来予想も出来なかったことをＩＴで、レーザー治療も可能になり、不可能だった心臓手術、癌手術へ、さらに大脳各部への摘出手術と計り知れない、細部手術まで可能になった。

一方、単純ミスも相伴って、医学界によせる、悲観的声もないではない。

内科的治療面でもＸ線治療、ＭＲＩ、ＣＴ、ＰＥＴ検査導入によって未開発な内臓器にも治療が可能になってきた。

思えば科学治療の最先端は人命の延長を計っている。いわゆる、長寿社会が福祉面でも、恵を迫まられている。

心的美と実在美にふれながら、人間生存にもふれ、医学の世界進展にまた治療にも、ある面からすれば、今まで無かった心的美が、このような分野まで及んでいるとは、考えても見なかった。

生きた生命体は物象の如何を問わず、他面的な角度から論攷することが可能となった。

一方現在美も美的な創造によって変化し、情報社会にのって、婦人の化粧もファンデーションの効果的な使用法によって顔立ちにも立体感覚、アイシャドー、口紅の多彩な色種による、魅力的な効果を育くんだ。

この様な化粧業界の情報効果は加熱気味ではあるが、抜群といえよう。加えて髪のボリューム感なども、美容師の芸術的手法によって鮮やかさを添えている。

パトス的な形而上学から心的美を実在美に、また現実の表象美を心的な美へと高揚させる。美的世界は女性なら感性の意図する所、また医学から人間美に手法を垣間見て来た。

私達が接する対象世界すべてに言えることで、感覚世界のときめきは私達の内的、あるいは心的な美を形成する。

それがまた同時に実在美の表象として、跳ね返ってくる。

芸術家は時に自然世界に意図的に変更を加え、心の息吹を吹き込むことによって、より意志的なものに変化させて行くことも可能である。

いやそのことによって、従前の事象に新風さえ吹き込むことが出来る。また現象世界に魅力を添えることにもなる。

単なる現象世界の事象をそのまゝ写実する領域は、一片の写真と変りない存在だ。

ただその写真にも写真家の意図で修正が加えられたら、また別のものとして実在美も、私達に迫ってくる。

それもまた芸術写真の領域として、高く評価されることになろう。

自然世界に愛着を持ち限られた物象に美意識を注ぐことによって、より高次の段階へと増幅させて行くことも可能だ。

人智の働かせ方パトス的世界に酔っていることなく、それを素材として新しい無限の世界に挑戦することは、千里の歩みの一歩かも知れない。

「人生は短かく芸術は長し。」とは文豪ゲェーテをして語らしめた言葉だ。

たしかに人智の歩みは微々たる物かも知れないが、その積み重ねは凄として越え難きものを持っている。

時に感動し、その重みに耐えぬく気力を持続しなければならない。

「言は安く行うは難し。」　千変万化する現象世界に、心的な美の翳の力は、実在美を照す一片の光かも知れない。

9、群雲隠れの月

徒然草一三七段に、「花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは雨にむかひて月をこひ、たれこめて春の行方知らぬも、なほ哀に情ふかし。」云々、

また萬のことも、始終こそをかしけれ。男女の情もひとへに逢ひ見るをば、いふものかは……

遠き雲井を思ひやり浅茅が宿に昔を偲ぶこそ、色好むとはいはめ。云々

なほ「望月のくまなきを千里の外まで眺めたるよりも、暁ちかくなりて待ち出でたるが、いと心ぶかう青みたるやうにて、

ふかき山の杪に見えたる木の間の影、うちしぐれたる群雲がくれのほど、またなく哀なり。」

右は徒然草抄中で最も注目を引く所で、満月の皎々とした光を千里のかたまで眺めわたす様は、何よりも彼の白氏文集「八月十五日夜禁中に独り直し、月に対して元九を憶ふ。」

「銀台金闕夕沈々、独宿相思翰林に在り　三五夜中新月の色、二千里外故人の心」の心情また時雨を催して、ちょっと群雲に隠れたところと、かの方がこの上なくしみじみとした趣がある。

すなわち「群雲隠れの月」の情趣に、新たな発想を思わせる。翳の美学にこの上なく美学を感ずるのは、中性的な美意識によって、磨かれた感覚のすがすがしさゆえと思う。

この美意識は不調和な物を取り入れることによって、調和の世界をより高尚な風雅の世界へと高める。言わば弁証法的世界観に立論するもので、中世の美意識はそのまゝ現在にも通じるものとして条件付けられる。

鏡の如く澄み渡る地水にも一片のさゞ波の立つ見えて、またこよない哀感により深い美意識を明らかにあら

わしえる。

内的な美学発生の要因として浮ぶ、木の間隠れに見える月のさやけさも、また格別の風情をもちえる。

さらに紅バラについても真紅、純白の花びらに他の不調な色調が、ちょっと介入することによって、そのイメージがこよなく変調する。

千変万化する心象に新たな波動をひき起こし、美のさゞ波が乱舞することにもなりえる。真紅、純白のバラの花その物象は、これほど美しい世界はないとまでも思われ、かぎりない愛着を持つ。

その美の純化は深淵の美に至るも、最高の美に翳の力が加わった時に感ずる。汲めども尽きない美学はそこにあると思う。

近世に入って、レオナルド、ミケランジェロ、ラファエロなど、美の追求が人間に向けられ、美人の画を通して汲めども尽きない美意識が、人間内部に向けられた。

その時に秘められた美学が意識的なものばかりでなく、情的世界にも画筆が及んだ。すなわち、私達の意識を情的世界に導入し、情的世界の解放をなすことによって、今まで表現し得なかった分野への開眼がなされた。

レオナルドの「モナリザ」、ボッティチェリの「ヴィーナスの誕生、聖母子像」などは、人間性の解放として、ルネッサンス期の繊細な美的表象が情的美まで及んだことは、大きな特質であった。

視覚的分野から内面的な分野の見えない骨格の解剖の上に立って、構造的な知性も翳にふまえてなせる技は、まさに画期的諸行と見てよい。

かゝる伝統的芸術も、コペルニクス的転回をなし、洋の東西にも大きく進展し得た。これが伝統的日本美の形成過程の一端となることは言うまでもない。

山水の美、風土に彩どられた四季の移変は、生活の中で作庭となり、また水墨画となって床間を飾った。

すなわち、芸術品として今日に残る。龍安寺の石庭、虎の子渡しの技巧は、どの角度から見ても、一つの虎の子の姿を見ることが出来ない。端的な翳の芸術といってよい。

西本願寺の石庭、組み込まれた芸は南禅寺、他の禅寺にも蘇えって来る。また規模の雄大さでは、借景を利用した修学院離宮の一の庭、二、三の庭に見る芸風は驚嘆に価する。

さらに桂離宮に見る雁行の間の構成など、ドイツのブルノー・タウトをして驚愕させたのも、この雅の芸術に少なからず影響を及ぼしたことは言うまでもなかろう。

禅的な墨彩色は、もちろん時代を反映して、金泥極彩色の巻子本に、また襖絵に自然の美をこよなく愛でる、生活の中に取り入れた手法も究極の美を思わす。

また美術工芸品、陶芸品、中でも目を引く、一縷の細糸を組合せた組紐に、繊細な魅力を感んずるのも巧手を

誘う。

群雲隠れの月のような美学は、私達の日常茶飯事にも横たわる。然し改めて意識の俎上に載せて見ると、何と多いことか。

これも私達の生活の英知が生んだ美学かと思うと、奥深い恩恵に浴していることが解される。それが文化の継承にもつながっていることが察知出来よう。

また松尾芭蕉が俳諧行脚の折、みちのくの松島の景観を讃えて「松島は笑うが如く、対象的に象潟は恨むが如し」と言った。

陽と陰の心象表現の見事さは、まさに未だ見聞したことのない土地の風情を心眼させた。これも見ごたえのある感覚といってよい。

望月のくまなきと、群雲隠れの美とは相対的な美の表象である。私達の物の見方にも深意を蘇みがえらす美の考察の一面、いや不可欠な存在と言えよう。

美を美たらしむ負の論理を付け加えたい。

（つづく）

祝出版

エリザベート

森　実与子著

新人物往来社　1,800円

美と旅に生きた彷徨の皇妃

化粧のルーツを訪ねて（補遺）

泥沼における水浴・泥浴の始まり

鈴木守

『まんじ一一九号』において、『化粧のルーツを訪ねて』の幕を閉じた。その後、化粧行為の発祥を示す水浴と人類初の化粧料・日焼け防止の泥化粧を結ぶ化粧行為として、"泥浴を暗示する資料"が得られたので、その資料を紹介したうえで、『化粧のルーツ』に関する仮説を修正することにした。

先報では、「猿人が直立二足歩行を開始すると、三五〇万年前頃に体温調節のために生理的な水浴を行うようになり、それが契機となって、人類初の化粧行為として、涼を求める水浴を意図的に行うようになった。次いで、二五〇万年前頃の原人が光防御を目的とした泥化粧を施すようになり、これが初の化粧料になった」という仮説を提出した。

なお、先報にて"二五〇万年前頃の原人"と記したが、その後の文献に"アウストラロピテクス・ガルヒ"の名称が登場したので、"原人"を"猿人"に訂正する。

一　泥沼説への執着

化粧行為の水浴が始まり、次いで泥化粧が創始したと設定したが、水浴から泥化粧が分化したとすると、両者の間に泥浴が介在すれば、水浴→泥浴→泥化粧と連続した論理展開が可能になるので、泥浴説は極めて魅力的であった。

しかしながら、水浴についてさえも、古代インダス文明のモヘンジョダロの浴場まで証拠は残されていなかった。ましてや、古代以前の泥浴の跡が残されているとは考えられなかった。

とはいえ、テレビなどでサバンナの映像をみるにつけ、

象の水浴びの側（そば）で鹿や羚羊（カモシカ）などが水を飲んでいる姿が見られるので、「我々のご先祖はこれらの草食動物の行動を学んで、象の水浴びしている傍らで泥水に浸って体を冷やしたに違いない」と想像を逞しくした。

それとは別に、鰐の生態を写した写真や動物図鑑をみても、鰐が泥沼に浸っている姿に接することができなかったため、「泥沼へ水を飲みに来る動物はいないだろう。だったら、鰐が泥沼をニッチとするはずがない。そのうえ、泥沼で泳ぐには多大な労力を必要とする。鰐にしても労多くして益がない生活を選ぶ必要はなかろう。きっと、ご先祖たちは鰐の来ない泥沼で水浴したに違いない」等々と思いを重ねてきたのである。ニッチとは、「ある生物の生活に必要な条件を備えている場所」を指している。

それはそれとして、以前ガリヴァ旅行記のテレビ映画で、フゥイヌム国のヤフーの女たちが泥沼から飛び出してきてガリヴァを襲うシーンがあった。映画制作者のフィクションと知りつつも、このシーンを見ながら、ふと、「現生人類発生以前に泥浴の風習があったのではないか」と思った。この思いが高じて、泥浴を介して水浴から光防御の泥化粧が生じたのではないかと、長い間、想像を逞しくしてきたのである。

このように、泥浴の魅力に取り付かれていたので、先報をまとめるに当たって、週刊朝日に現代ハイチのブードゥー教信者が泥沼に浸って神と交信している写真が乗っているのを目にし、早速その情景を紹介したが、泥浴を示す古い資料が見つかっていなかったので、化粧の発祥に関連している可能性を暗示するに止（とど）めた。

二　鰐は泥沼をニッチとしていなかった

動物事典や図鑑でクロコダイルやアリゲーターの生態を調べたが、鰐が泥沼に住むとか住まないとという記載はなかったが、今回、補遺を設ける理由は、「鰐が泥沼をニッチとしなかった」ことを窺わせる資料をみつけたためである。

目に止まった資料というのは、全身骨格が発掘された前出のツルカナボーイに関する資料である。これまでは、「ボーイが乾燥性熱帯気候のサバンナ地方に適した体型をもち、現代人的な無毛性と発汗による体温調節機能を備えているという形質」に注意が向いていたが、それとは別に、河合信和は『ネアンデルタール人と現代人』文春新書、一九九九』の中で、ボーイが全身骨格の状態のまま残された理由について、「カバに踏まれた跡はあったが、泥沼に嵌まり込んだボーイの遺体はナイルワニやハイエナに食い荒らされることなく、奇跡的な保存の良さを保って一五三万年の眠りに付いたのである」と述べていた。

この記述は、「鰐は河馬と違って泥沼に立ち

入らない」ことを示唆している。だとすると、先の予想通り、「初期人類は鰐の恐怖を抱かずに悠然と泥沼に浸って水浴できた」と推測できる。したがって、「水浴によって身体を冷却し始めた猿人たちは、危険の少ない泥沼での水浴、即ち泥浴をするようになった」と推論したのである。

三　修正ルーツ論

化粧と化粧品の発祥について、今回気付いたことを加えて、先報の仮説を修正する。

人類揺籃の地・アフリカ大地溝帯の疎林化が進み、大型類人猿が樹上からオープンランドに降り立って直立二足歩行を始め、最初の人類、猿人に進化した。疎林化が進むに連れて食料を求めて行動範囲が広がったため、直立二足歩行をより確実なものにさせた。その証拠として、タンザニアのラエトリに三五〇万年前頃のアファール猿人が歩いた足跡の化石が発見され、その足型から現代人的な直立二足歩行を完成させ、サバンナの原野を跋渉したと想定されているので、およそ四〇〇万年前から三〇〇万年前頃に生存したアファール猿人は、エネルギー多消費型の直立二足歩行でサバンナの草原を徘徊したであろう。

しかし、アファール猿人の頃は、汗腺の発達および体毛の退化が不十分だったと思われるので、徘徊、跋渉によって火照った体を、水浴によって体温調整せざるをえなかったと想定される。この水浴は生理的な欲求に基づくものであり、これが始まったのは、三五〇万年前頃以前と推定される。

次に、「体温調節のための生理的な水浴が淵源となって、遅くても三〇〇万年前前後には、水浴によって涼を感じ、虱が駆除され、あるいは肌に潤いを感じるなどの効用を察知したかも知れない。かくして、これらの効用を求めて意図的に水浴を初め、水浴が人類初の化粧行為として登場した」と推察した。

ところで、猿人たちは水浴のメリットを体感したであろうが、水浴の最大の難点は天敵、鰐の存在であり、彼らは水浴中に鰐に襲われたことがあったであろう。だが、鰐は泥沼にほとんど侵入して来ないことを経験的に知ったので、鰐の危険を避けて「泥沼における水浴、即ち泥浴を行うようになった」と想定される。

泥浴は水浴のメリットに加えて、皮膚が泥に覆われると、マラリア蚊やツェツェ蝿の襲来を防ぎ、そのうえ体臭の発散を防ぎ、視覚的に環境に同調するため、ライオンや豹など捕食獣に対するカムフラージュになったかも知れない。しかし、付着した泥は乾燥すると剥落してしまうのが欠陥であった。

人類発祥から二、三〇〇万年経過した頃になると、汗腺の成長や体毛の退化が進行し、"毛のない裸の猿"に

近づき、「熱帯の強い陽射しに暴されて日焼けを起こすようになったであろう。ところが、泥浴によって泥にまみれた皮膚はヒリヒリしない」ことに気付いたはずである。

そして、二五〇万年前頃に至ると、ガルヒ猿人が石器を作り肉食を始めた。ガルヒ猿人は、「肉汁や獣脂が付着すると、泥が落ち難いことに気付き、獣脂を塗り泥を塗って日焼けを防ぎ、ついには獣脂で泥膏を作って、剥落しにくい紫外線防御剤を確保することができた。これが"人類最初の化粧料"となった」と推論したのである。

以上の仮説をまとめると、「淵源となった生理的水浴→意図的な水浴にて化粧行為発祥→安全な泥浴→日焼け防御の泥膏が初の化粧料となった」というステップを踏んで、化粧行為と化粧料が誕生したと考えた。

四　泥浴のその後

化粧と化粧料が発祥した後、「水浴風習は清浄化粧の源泉となり、日焼け防御の泥膏は赭土使用を介してメークアップ化粧料へ、獣脂から基礎化粧料へ進化した」ことは先報で推論した通りである。では、泥浴はその後どのようになったかについて考察する。

泥浴を直接証拠立てる先史時代の資料を入手できなかった。しかし、現代社会には特殊の例であるが、ハイチのブドゥー教徒は泥沼の中で泥にまみれた姿で祈りを捧げ、エチオピアのスルマ族男性は儀式前に泥浴し、泥をストライプ状に削りとり、ボディペイントしている。両例とも、神聖な領域である泥沼で泥浴するのであろう。なお、ブドゥー教徒は、奴隷貿易で新大陸に拉致された黒人の血が流れている人たちであるから、一七、八世紀頃のアフリカには、泥浴風習が行われていたことを示唆している。

それでは、史実は乏しいが、想像を逞しくして、泥浴の歴史を創作することにしよう。

アフリカ大地溝帯で始まった泥浴は、生理的な欲求による体温調節はもとより、清涼感を与え、虱を駆除し、鰐の危険を避けることができた。そのうえ、皮膚を覆う泥土は、捕食獣に対するカムフラージュとなり、蚊や虻、蝿の攻撃から身を守ってくれた。また、体毛の退化が進むと、熱帯の強い陽射しによって皮膚が日焼けするようになったが、泥に覆われた皮膚はヒリヒリしないことに気付いた。このような泥浴のもたらす護身効果は、魔除けの観念を生み出したに相違ない。

では、人類はいつ頃から宗教心とか神聖の概念を抱き始めたのだろうか。古代社会では、キリスト教や仏教などの宗教を確立したが、先報で述べたように、既に前期旧石器時代には、テラアマータ原人は安全と豊猟を祈願して赭土を塗り、イゼルニア遺跡には出入口に赭土を施した石を備えていた。これらの赭土は魔除けの護符と推

定されている。

また、ファッキーニは『人類の起源、同朋社出版、一九九三』に「人類は出現するとすぐに、宗教的行動や神聖な領域を意識し始めた」と著しているので、一五〇万年前頃のエチオピア・ガデブ遺跡に残されていた赭土も、魔除けの呪符だった可能性が窺える。かように考えると、猿人の時代には既に、泥沼は神聖な領域であり、泥土は霊験あらたかな護符と認識したかもしれない。

このような概念形成は、言語能力のなかった時代でも挙動によって伝承され、やがて言語伝承によって神話、伝説となり、伝統的な泥浴風習がアフリカ社会に残された。一七、八世紀に至ると、アフリカ大陸の黒人は、奴隷として新大陸に拉致され、彼ら子孫の一部がブドゥー教の信者になって泥浴しながら神に祈りを捧げ、また、アフリカの現地では、エチオピアのスルマ族男性は儀式前に泥浴する風習を現代まで引き継いでいる。

次に、泥浴そのものではないが、身体を被覆する泥の効用について考えてみよう。現代では、カオリン、酸性白土などで造った泥パックあるいはメリケン粉やパン屑を泥状に練ったパック料で顔面を被覆するパック化粧が行われている。パック化粧の効能効果は、皮膚表面を覆った塗末が汚垢を除去し、塗膜が乾燥する過程で皮膚を適度に刺激し、皮膚吸収を促進したり、皮膚の血行を増加させるとされている。

恐らく、初期人類も付着した泥が乾いていく過程で、泥パック様の効能効果を体感したはずである。彼らは全身泥パックを行っていたのである。そして、古代文明に入るまでには、黒い社会からナイル川を下って、衣服を着用するようになったエジプト人に顔用の泥パックとして伝承され、古代ギリシャ・ローマでは、泥に替えて穀粉などのパック法を分化させ、その流れが現代風泥状パックの始祖となったのではなかろうか。

後記：長い間、初期の化粧に泥浴が関与していたのではないかと拘泥していたが、泥浴を示唆する資料が見つかり、化粧ルーツ論を修正することができた。しかし、この化粧ルーツの仮説は今後、古人類の遺跡が発掘されることにより修正あるいは全面的な変更が必要になることもあろうが、この仮説が後進の道標になれば幸いである。

［完］

性と化粧（二）

鈴木守

はじめに

『化粧のルーツを訪ねて』がやっと完結した。ホッとしながら川辺道を散歩した。

桜並木がほんのりと赤みを差してきた。

雄の真鴨がエクリプス（冬羽）から鮮やかな緑色に変わってきたのが目に付いた。繁殖期には求愛用の鮮明な色になる。夏が過ぎると色が褪せてエクリプスに変わって行く。日食や月食もエクリプスといい、輝きが欠ける意味である。

、鴨が春先に求愛用の美しい羽の色に変わるのと同様にタナゴも繁殖期になると、綺麗な結婚色を呈する。鳥や魚でさえ、求愛用にお色直しをするのである。

そういえば、化粧ルーツ説の一つに男女吸引説がある。この説は、ダーウィンの唱えた雌雄淘汰説を基に「女性が男性の注意を惹くために化粧した」というのである（青木英夫、日本化粧品科学協会報十一、一九九〇）。

では、人類は真鴨やタナゴのように生理現象として、お色直しはしないが、適齢期には格好よく飾り始めるのだから、装飾の遺伝子を引き継いでいるのではないか。

こんな愚にも付かぬことを連想しながら歩いていると、以前、同窓会の講話で喋らされた『性と化粧』の話が思い出された。この話は未だ活字にしてなかったので、この際、以前の話に手を加えてみたらと思い始めた。

ここまで書いているとき、地震がきた。なかなか止まないので表に出た。その後も余震が頻発し、挙句、原発事故による計画停電などで数日間は筆が進まなかった。

では、本題に戻る。災害で犠牲になられた方々に哀悼の意を表し、被災者の皆様方にお見舞いの気持ちを抱きながら話を進めよう。

『週刊朝日』、〇九年一〇月九日版』に石川梵のグラビア写真に男性性器まで泥化粧を施したエチオピア・スルマ族の姿が写されており、性器化粧の実態を初めて拝むことができたので、『性と化粧』に挑戦することを新たに決意した。

ところで、タイトルを決めるに当たって、『セックスと化粧』にするか『性と化粧』にするか迷った。数人の女性に意見を聞くと、片仮名のセックスは、英語のSEXとは異なった淫靡なニュアンスを感じるのか、『セックスと化粧』に対して眉を顰めたが、『性と化粧』では顰めなかった。性に対する微妙な女性心理に戸惑いながら敢えて顰蹙をかう必要はないので、『性と化粧』に決めた。

第一節　性と化粧の実態

長い間、化粧品研究に携わってきたが、性に関係するような化粧品開発を経験したことはないし、わが国の化粧品市場を見てもそのような商品を見たことはないと思っていた。そのうえ、『化粧のルーツを訪ねる旅』でも、性を感じさせるような化粧に触れる機会は少なかったので、性関連の化粧風習や化粧料は念頭になかった。

ところが、前述したように、化粧ルーツ説の一つに男女吸引説があるように、化粧は男女両性が存在すればこそ、今日のような化粧の繁栄がみられたのであるから、化粧行為自体が根源的に性と関連していると言っても、それを否定する人はいないであろう。

それとは別に、現代でもスルマ族の男性のようにペニスの先まで縞模様で飾る風俗が残されていることを知るに及んで、性と化粧の問題に取り組まざるを得なくなった。

したがって、性と化粧に関し、現代の先進国社会を振り返り、次いで現代の原始社会ならびに過去の事跡について実態を調べることにする。

一　先進社会における性と化粧

現代の先進社会にも性に関わる化粧の証拠が認められたので、その事例を示す。

1　デオドラント（消臭剤）

フェミニン・デオドラント・スプレーで秘所に凍傷を負った患者に関する論文がイギリスの医学雑誌に掲載されていた。余りにも近付けてスプレーしたため、凍傷が生じたのである。この論文をみるに及んで、デオドラントは腋臭防止だけでなく、股間の防臭にも使用される製品であることに教えられた。わが国では、デオドラントを使うことが少ないので、局所使用を失念していたが、先進社会においても性器使用を目的とした化粧品の存在

を再認識したのである。

2　浴用製品

安全性試験の一環として、浴用製品の場合、粘膜刺激試験を行っていることを思い出した。

浴用石鹸などは股間の洗浄にも使用し、浴用剤は入浴に際して必ず陰部と接触してしまう製品であるから、粘膜刺激試験を行うのである。これらの製品も『性と化粧』に無関係であるとは言い難い。

3　乳液の意外な使用法

そのほか、常識外であるが、顧客が思わぬ使い方をすることもある。その一例を挙げる。

某皮膚科医から、「粘膜試験をやっているか」と尋ねられた。訳を聞くと、「ムスコを腫れ上がらせた患者が来た。彼は『夜のお勤めで乳液を使っており、初めの頃は具合がよかったが、続けているうちに、こんなに腫れあがってしまった』てことなんだ」というのである。この患者は性行為に際して、乳液を潤滑剤として使用したのである。乳液にこんな使い方があったのかと驚いたのであるが、意外と大勢の人たちが利用しているのではなかろうか。

以上のように、文明社会でも股間に接触する衛生用の化粧品が存在し、化粧品メーカーの意図とは別に顧客の発想で思わぬ使用法があることを知った次第である。

二　現代原始社会の性と化粧

現代の原始社会においては、性を強調する女性の瘢痕化粧とボディペイントの一環として男性が施す陰茎の化粧が認められた。

1　瘢痕化粧

現代原始社会における性と化粧、取り分け、瘢痕化粧については、和田正平の著した『化粧文化、六号、一九八二』に詳しく述べられている。

和田は「一般的に暑い地方では、衣服の実用価値は低いので、宗教、識別、保護などの目的から瘢痕、入墨、塗飾などの装身が衣服着用より古い時代から施されており、後に装飾的な装身化粧となった。そして、全裸の生活をしている部族民でも、身体のどこかに彩りを与えるのが通例である。彼らにとって裸体とは、衣服着用の有無ではなく、瘢痕などの皮膚装飾が一切なされていない身体のことを指す」と述べている。以下、和田の論文から抜粋する。

瘢痕化粧のうち、顔面の瘢痕模様には様々なパターンがあり、部族を識別する紋様であることが多いが、サハラ砂漠の南、ギニア湾に面するトーゴ北部からベニン（旧名ダホメ）にかけての地域では、部族表示だけでな

く、呪術的な目的で施す場合がある。チャドのサラ族は男女とも顔面に瘢痕を施している。

部族間抗争が絶えない地方では、顔面の瘢痕は、敵味方の識別に重要なマークとなっており、スーダン南部のディンカ族の男は、額に長い水平線の瘢痕を数本入れて同士討ちを避け、抗争で敵を殺すと、上腕に輪状に点刻をつけ、輪の数が多いほど戦士として尊敬されている。顔面の瘢痕は概して、男性に多く見られ、男らしさ、強さの象徴である。

顔面を除く身体各所の瘢痕は、どの地方でも男よりか女の間で発達した。ベルギー王立中央博物館に所蔵されているザイール・テラ族女性の瘢痕を模写した絵がある。この絵には、喉や襟足から始まり、両肩、両乳の上、腹部は臍を中心に全面、さらに陰部の上から太腿まで、ぎっしり、入念に施された瘢痕が描かれている。

このテテラ族の瘢痕のように、ザイール中央部には、しばしば、美しい皮膚装飾が見られ、植民地行政官の話によると、「女性が自分の肉体的魅力を増すために、より緻密に皮膚を装飾させる技術を発展させた。黒い裸の皮膚を引き立てるために、最も適した方法の一つが瘢痕だった」そうである。

また、出産を願う信仰に基づいて瘢痕を施す地方もある。トーゴ北部のタンベルマ族では、瘢痕は幼少期から思春期を経て、成女式を迎えるまでの間に施術を行う。結婚までに全ての瘢痕を完成させておかなければ、結婚への道は閉ざされる。

ダンベルマ族の少女たちは成女式の初日、丸裸で式場の家まで歩く。局部が隠しきれないが、右手を前に当てて歩く。このように裸体を晒すことで施術が完了したことを示す。この瘢痕は女性にとって、子供を生んでよい体になった刻印である。

ベニンでも、美的装飾のために瘢痕化粧を行うが、ティブ族女性の臍の上の瘢痕は、思春期になると施され、これは性的な意味があり、女の割礼とも呼ばれ、夫の関心を惹くためである。また、出産を促す信仰でもある。

フォン族の場合、瘢痕目的は単なる装飾ではなく、エロチックな魅力を高め、皮膚表面に盛り上がったケロイドは性戯において、男性に心地好い興奮をもたらし、その感触は性交時にはなくてはならない皮膚感覚であるとして女性の間で伝承されてきた。

フォン族の瘢痕風習を更に詳しく述べると、少女が初潮を迎えると、その直後に最初の切り込みが行われ、その後施術の回数を重ねて完全な瘢痕模様を作り上げる。施術は専門家に依頼され、費用はフィアンセが支払う。

そして、瘢痕模様の一つ一つに夫々、ユニークな名称がついている。例えば、左の頬に刻まれた切傷はアカバと呼ばれ、「私に口づけを」の意味であり、コヂャウという首筋の切傷は「首への楽しい触れ合い」を意味し、

男はここを愛撫する。

性戯において、最も大きな意味をもっている瘢痕は両腿の内側に施されたもので、九ヶの小さい瘢痕が平行して等間隔に九列並んでいる。それはトゥミドゥあるいはズィドゥといい、この二つの言葉の意味は「私を押して」と同義で、この傷痕がなければ男の愛は得られないという。

このように、フォン族女性の瘢痕は、性愛に直接結び付き、愛撫されるために瘢痕が施され、男はそれに触れることによって、快感を味わうことができるのである。かように、顔面以外の瘢痕化粧は部族ごとに意味が異なってはいるが、いずれも性的な意味をもっており、また瘢痕を施した夫々の部位によって夫々の意味を有している。なお、性との関連は別として、瘢痕化粧を示す岩壁壁画がサハラ砂漠に残されており、瘢痕風習は前三五〇〇年頃には始まっていたことを物語っている。

2　ボディペイント

今回、『性と化粧』を纏める直接の契機となった前出石川梵のグラビア写真に触れる。石川は「エチオピア奥地で出会った裸族・スルマ族は、ただ裸でいるだけではなく、儀式の際には顔からペニスの先まで丁寧にペイントを施していた。強さが男の価値の最も重要な要素と考える彼らは、鍛え抜かれた肉体こそが、最高のファッションであり、それを晒すことにむしろ誇りを感じていた」と述べている。

写真に見られる男性四人は体毛や陰毛を剃り、肩や胸から下方に向けてペニスの先端、太腿に向かってストライプ模様の泥化粧を施していた。彼らはハレの日に聖なる泥沼に浸って身を潔めた後に、付着した泥を縦方向に落した泥衣装を纏い男を誇示したのであろう。

（次号に続く）

房総を旅した漱石と子規

山田嘉久

一　漱石と子規

夏目金之助（漱石一八六七―一九一六）は武蔵国江戸に、正岡常規（子規一八六七―一九〇二）は伊予松山に生まれた。両者とも江戸時代最後の元号となった慶応三年生まれの同い年である。そればかりか共に第一高等中学校（入学時は大学予備門）、帝国大学文科大学の同級生であり、終生互いに肝胆相照らす親友であった。

子規は漱石のことを「畏友」「第一等の友」と呼び、漱石は子規のことを「大将」「孤梢な面白き男」と評した。

そもそも両者の交友が始まったのは明治二十二年、共に二十二歳の頃だった。

その前年、第一高等中学に在学中だった子規は夏休みを向島長命寺の門前の桜餅屋（山本屋）の二階に仮寓して、漢文、漢詩、和歌、俳句、謡曲、論文文体、擬古文体の七ジャンルを駆使した文集「七草集」の執筆を始めた。向島は江戸期から文人墨客の愛した地で風雅を好んだ子規は特にこの地を選んだわけである。翌年、これを完成して学友の間に回覧した。学友の一人であった漱石は特に、この「七草集」の漢文、漢詩に注目した。

彼は大学予備門に入学する前は漢文を教える学校（二松学舎）に通っていたこともあって漢文には興味があったからである。早速、「七草集」読後すぐに漢文で絶賛する批評を書き、七言絶句九首を添えて子規に返した。

その巻末評に彼は早くも「漱石」と署名している。

周知のごとく漱石の名は、「枕石漱流」（石を枕し流れに口を漱ぐ）と言うべきを「漱石枕流」（石に漱ぎ流れに枕す）と言い誤ったが、それを改めず強弁したという唐代の「晋書」にある故事（詭弁を弄するへそ曲がりの意）から取ったものだが、元来は子規の数多いペンネームの一つであった。それを漱石が子規から譲り受けたことになっている。

子規はこの頃、喀血したこともあって初めて「子規」

を名乗った。血を吐くまで鳴くというホトトギスになぞらえた。かくて「漱石」と「子規」の同時誕生である。

（なお、漱石の他、同本に批評署名した学友の中に、子規の親友で、すでに海軍兵学校に転じていた秋山真之（司馬遼太郎著「坂の上の雲」で子規と共に主人公）がいる。因みに真之の署名は「江田島守」であった。）

明治二十三年、漱石は創立間もない帝国大学（後に東京帝国大学）英文科に入学、さらに大学院まで進学するが、子規は哲学科から国文科に転科したものの突然の喀血や学年試験に落第の挫折を経験、遂に退学を決意するに至る。

明治二十五年に漱石は東京専門学校（現早稲田大学）の講師となり自らの学費稼ぎをするようになるが、漱石と子規は早稲田の辺を一緒に散歩することもままあったようだ。

同年七月、漱石は夏休みを利用して、松山に帰省する子規と共に初めての関西旅行に出かけた。途中の神戸で子規と別れ岡山の親戚の家に一ケ月あまり滞在したが、その間、松山の子規から学期末試験に落第したので退学すると記した手紙が届く。漱石はすぐに翻意を促す手紙を送り「鳴くならば満月に鳴けほととぎす」の一句を添えた。

その後、松山の子規の元に向かう。当時十五歳になったばかりの高浜虚子に始めて会ったのは子規の家だった。

しかし子規は間もなく大学を中退した。

明治二十八年、日清戦争の従軍記者として中国に渡ったものの大喀血をして帰国を余儀なくされた子規は、当時松山中学の教師をしていた漱石の下宿「愚陀仏庵」に転がり込み、両者の「同じ釜の飯の仲」が始まった。

毎日のように子規のところには俳句仲間が押しかけてくるようになり、自然漱石も加わるようになり、ここに「俳人漱石」が誕生した。

翌年（明治二十九年）、子規は上京、鶯谷に居を移す（子規庵）が此処での句会にも漱石は参加している。漱石のほか鷗外、内藤鳴雪等も参加、盛会を極めた。子規の名声は既に確固たるものとなっていた。そして月並み俳句を脱して近代俳句へ、古今調を脱して近代和歌へ革新の道に突進することになる。

その子規も明治三十五年、わずか三十五歳の若さでこの世を去ったが、漱石は二年間の英国留学中で子規の最期に立ち会うことはできなかった。

しかしその直後帰国した漱石が明治三十八年、処女作「吾輩は猫である」を発表したのは前記松山で会った子規の弟子高浜虚子が主宰した「ホトトギス」誌上であった。翌三十九年には「坊っちゃん」も同誌上に載せた。

以後、漱石は大正五年、四十九歳で死去するまで数々の名作を発表、「文豪」の名をほしいままにするのである。

二　漱石の房総紀行「木屑録」

漱石が子規と交友を深めた動機の一つに漱石の房総旅行がある。

明治二十二年八月、漱石は第一高等中学の学友四名とともに房総を旅行した。

その二十四日間にわたる房総の長旅から帰ると、さっそく紀行漢詩文集「木屑録」を十日ほどで書き上げ、当時松山で病気療養中の子規に示した。

このことは前記子規の「七草集」に啓発された漱石が「木屑録」を書き上げ、今度は逆に子規に批判を求めたのである。

これを読んだ子規は、漱石の漢文漢詩の造詣の深さに内心舌を巻いたという。以後、両者はにわかに親密になってゆく。

漱石は云う。「子規という男は、自分が先生のような積りで居る男であった。俳句を作って見せると、すぐそれを直したり（略）、今度は英文を綴って見せたところが、奴さん之だけは仕方がないものだからVery Goodと返した。」

なにしろ英語の得意な漱石の英文まで、英語劣等生の子規が添削したわけであるから驚く。そんな子規が漱石の書いた「木屑録」を読んで

「余知吾兄長于英文也久、而見吾兄漢文則始于此木屑録也」

（ぼくは貴君が英語がよくできることは前から知っていた。しかし貴君の漢文を見たのはこの木屑録がはじめてだ）と評した。

因みに子規はこの文章では末尾に「獺祭漁夫常規」と署名している。数年後、新聞「日本」に連載した題名も「獺祭書屋俳話」と名付けた。子規は傍らに書物をとりちらすことが多かったので、それを魚を並べる獺の故事になぞらえ「獺祭書屋主人」と号した。この頃、このほか「四国猿」「偏屈」「頑固」「ものぐさ」と自称していた。

なお漱石の自称は「頑夫」「変人」「平凸凹」「愚陀仏」である。「木屑録」の署名は「漱石頑夫」となっている。

子規は木屑録を読んで、最終に総評を書いたが、個別部分に関する批評はそれぞれの箇所の上部に記した。（これを「眉批」と称している。）

評論好きの子規の本領躍如たるものがある。

木屑碌は「余児時誦唐宋数千言、喜作為文章」（自分はこどものころから唐宋の数千言をよみならい、文章をつくることが大好きだった。）から始まる。

そして「八月にはまた海を航して房州に旅し、鋸山にのぼり、二総（上総下総）をへ、刀川（利根川）をさかのぼってかえった」とある。（冒頭の「また」とはこの直

前七月下旬に兄の直矩とともに静岡県興津へ遊びに行っていることを指す。）

以下、内容のみを列記する。（原文は漢文だが、門外漢である私は和文意訳にとどめた。）

第一部

第一章「こどもの頃から文章を作るのが好きだったが、英語の勉強のため放棄した。明治二十年富士山に登り、今年七月興津へ行ったが作品は出来なかった。八月に房総に旅行してこの木屑録ができた。」（高島俊男訳、以下同じ）

第二章 八月七日、東京府霊岸島から気船で安房保田に向かう。

「船で房総にむかう途中、突風が吹いて麦わら帽子を飛ばされた。大方の船客がこれを見ていたが、なかでも房州女三人連れに大笑いされてしまった。恥じ入るばかりだ。」

当時、書生の間でも麦わら帽が流行していたが、以降、漱石は保田で求めた菅笠をかぶって通したらしい

その後、保田の印象を「其頃は非道漁村でした。第一何処も彼処も埃さいのです」と小説「こころ」で語っている。

第三章「余は房総に旅に出てから、毎日海水浴をして日焼けした。」

この章は子規が絶賛した漢文であるのであえて原文で記す。

「余自遊千房、日浴鹹水、少二三次、多至五六次。浴時故跳躍、為児戯之状。浴健食機世。倦則横臥於熱沙上。温気侵腹、意甚適也。如是者数日、毛髪漸赭、面膚漸黄。旬日之後、赭者為赤、黄者為黒、対鏡爽然自失。」

子規は「如是者—爽然自失」の条に対して「白素無罪。鏡豈有心」（肌が色白であることになんの罪もない。鏡は正直に形や色を写しだすものだ）と「眉批」（批評）している。

これからも漱石は元来、色白であったらしいことがわかる。

当時の海水浴は健康増進のために海に浸かる—海で入浴する感覚であった。ピゴー描く「日本人の生活」には千葉稲毛海岸で入浴する男女は手ぬぐいを持って海に浸かっている。なお現在、保田の海岸には「房州海水浴発祥の地」の碑が建っている。勿論、漱石のなせるわざである。（なお日本での最初の海水浴場はそれより四年前の明治十八年に神奈川県藤沢で開かれている。）

第四章「興津の景は温雅であり保田の景は険悪である。」

絶句二首を作ったが、これも子規を感心させた。

第五章「風景画にあこがれていたが、やはり実際の景色のほうがいい。」

第六章「友人四名と一緒だが、やつらはみな俗物だ。風呂から上がればきまって花札、トランプ等に興じている同友四名とは違って、そもそも漱石の旅の目的は違っていた。ひとり孤立し沈思黙考。子規の「七草集」にライバル意識を燃やして、それ以上のものを書いてみせようとの意気込みが感じられる。

第七章「ある夜、数年前家にあって勉強していたときのことを思い出した。」

第八章「旅先で子規からの手紙を受け取った。家に帰ったらまた手紙が来ていた。」

その前に漱石は保田から松山の子規に手紙を出している。前記保田と興津の景色の違いを詩にして送った。この当時、保田、松山間の手紙往復には十日を要したから漱石は保田には十日以上滞在していたことになる。（なおこの年七月に東海道線開通）

第二部

第九章　鋸山と日本寺

「船頭は声高に叫んだ。いわしー。その声とともに鰯は四方に飛び散った」（鰛四散）の文章を子規は次のように「眉批」（批判）した。

「鰛四散、似不穏」（「鰛四散」の一句、穏やかならざるに似たり）

漱石は鋸山にも登った。

「ひるどきに頂上に達して少憩す。群山青々とつらなって、さきほど雲のなかと見えしものいまはすべて脚下にあり。うねりつつ起伏するさまたなごころをさすごとし」

そして廃墟となった日本寺に心を痛め、また数多くの羅漢石仏にも目を見張った。漱石はこの千五百羅漢も詩にした。

第十章　保田のトンネル

当時、トンネルは珍しかった。特に都会育ちの漱石には。漱石の目にはトンネルの中からの展望がとても新鮮だった。

第十一章　友人米山のこと

「木屑録」は鋸山と鯛浦を中心とした紀行文だが、中には旅行には関係のないことも書いている。（第七章も同じ）米山とは漱石、子規の共通の友人米山保三郎のこと。

漱石は子規への手紙の中で「木屑録」のことを「紀行様の妙な書」と書いている。

第十二章　保田のトンネル

トンネルを出るとまたトンネル。そんな経験を初めてした漱石はトンネルをまた話題にした。

第十三章　保田湾の巨石

漱石は保田の砂浜に腹ばっているときに遥か南に巨岩を見つけた。擬宝珠岩である。また山際にもう一つの岩（烏帽子岩）も見つけた。

漱石は「巨人の拳」と名付け、思いは「詩経」の「戦々恐々として深淵に臨むがごとし」に及ぶ。この光景は小説「こころ」にそのまま転写されている。

第十四章　小湊、誕生寺

「鯛の浦の奇観は東京にて、かねてより聞き及ぶところなれば、舟をやとうて沖に出たり」

内房（保田）から外房（小湊）へはどのコースを通ったのか「木屑録」では定かではない。普通では山中の房総東往還道を通って外房に抜けるコースだろうが、或いは房州の鼻、洲の崎をぐるっと回ったのかもしれない。ともかく、小湊の誕生寺、鯛の浦での記述は「木屑録」中の白眉とされている。

波の輝きと鯛の躍動するさまを臨場感あふれる文で活写している。

「濤勢蜿蜒延長而来者、遭礁激怒、欲攫去之而不能、及躍而超之。白沫噴起與碧濤相映、陸離為彩。」

これを読んだ子規も完全に兜を抜き、漱石の文才は生まれつきのものだと驚くのである。子規によれば岩礁の鳥や鯛の描写に擬人法を使った漢文は今まで見た事もなく、さながら中国の歴史書「左伝」を地でゆくようだと絶賛する。

そして「紙上に山躍り、筆端に海湧く」（原漢文）と批評した。

事実、漱石は「左伝」の簡明で歯切れのいい文章が好きだと「吾輩は猫である」の中でも書いている。

また漢学界の泰斗吉川幸次郎も「明治時代の漢文として最も優れたもの一つ」と称賛するのである。

第十五章　詩五首

第三部

第一六章　あとがき

小湊からのコースについては漱石は小説ではこう書いている。

「房州の向ふ側へ出ました。（中略）小湊といふ所で、鯛の浦を見学しました。」（「こころ」下）

「保田から向ふへ突切って、上総の海岸を九十九里伝ひに、銚子迄来たが、そこから思い出した様に東京に帰った。」（「門」四）

「昔し房州を館山から向ふへ突き抜けて、上総から銚子迄濱伝ひに歩行た事がある。」（「草枕」三）

事実、この通り漱石は小湊からは九十九里を北上、銚子に出て、利根川を汽船でさかのぼって関宿に至り、さらに江戸川を下って東京に帰ったようである。

明治二十二年八月三十日だった。かくして二十三泊二十四日にわたる漱石の房州旅行は終わった。

三　子規の房総紀行「かくれみの」

「木屑録」を読んだ子規は、漱石の房総賛歌に大いに魅了された。

そして二年後の明治二十四年、帝国大学文科大学一年生の三月二十五日、房総を縦断する行脚に出発するのである。

東京、市川、成田、千葉、大多喜、小湊、白浜、館山、保田と歩き、保田から汽船で帰京した。八泊九日、一日およそ三十キロ（全行程二五〇キロ、五〇万歩）の行脚であった。

この旅にはいくつかの目的があった。

佐倉宗吾の墓参、成田不動の参拝、愛読書の「南総里見八犬伝」の地に足を印すること、漱石が活写した鯛の浦と鋸山を訪ねることであった。そして何よりも新趣向の紀行文を書いて漱石に読んでもらうことであった。

途上、もっとも印象が深かったのは、上総長南で雨に降られて蓑を求めたことだった。蓑笠の旅姿にその旅心が満たされ足取りも軽かった。

「雨もよしけつく浮世をかくれ蓑」と詠み、その紀行には「かくれみの」と題した。

その前、千葉ではその旅姿を当時では珍しかった写真まで撮った。持参した笠には「同行は笠にたのんで二人かな　三界に家なし　浮世女之介」と記されている。

三月二十五日（東京―船橋―大和田）

冒頭の文章にこう書いた。「明治二十四年三月下旬脳痛烈シ　通学サエデキズ即チ兼テ思イタチシ旅ヲ前取シテ二十五日朝常盤会寄宿舎ヲ発ス（中略）

ふり帰るかほもかすむや柳原

朝飯ハ芋デスマシ午飯ハ市川ニテ喫ス　菅笠モ市川ニテ買フタリ」

この頃、子規は悶々として何事にも手がつかず気が滅入っていた。その一因はブッセ先生の哲学総論の試験に悩まされていたことにもあった。

同日に八幡の社に詣で、藪（藪不知）を見て船橋の大神宮にも参った。それから馬に乗って大和田に到着。此処で「胡散臭い小さな宿」に投宿したが木枕が固くてよく眠れなかった。

三月二十六日（大和田―成田―馬渡）

宗吾霊堂（成田市）の佐倉宗吾の墓前では「梅散りて何をささげん神の前」、成田山新勝寺では「筆にせよ我ものみたき御つるぎ」と詠んだ。

子規は学業成就と「脳痛悶々」としていた根源を断ちたい気持ちをこの句に託した。三時に成田を折り返し馬渡（佐倉市）に向かい、上総屋に投じた。宿屋の布団はせんべい布団一枚。その名のごとく堅かった。

三月二十七日（馬渡―千葉―長柄山）

「二十七日朝七時半馬渡村上総屋ヲ発ス　竹ヲ伐テ杖トス　正午千葉ニ着　撮影ス」

前述のごとく記念の写真を撮った。（当時、千葉に一軒あった豊田尚一写真店と思われる。）

昼飯は鰻屋に入って「鰻飯」と「しゃも」を注文した。

するとすぐに運ばれてきたその手際のよさには感心したが、あまり旨くはなかった。「しゃも」の味付けは甘かった。（明治四年創業の鰻屋「安田」と思われるが、食通であった子規はこの紀行文でも食事の話が頻繁に出てくる。）

浜野（千葉市）から潤井戸（市原市）に向かう。いよいよ房総丘陵に足を踏み入れる。今日の宿は長柄山（長柄町）の大国屋。夕食の采は「せぐろのさしみ」であり、子規にとっては初めて。そのうまさに大茶碗に四杯もおかわりをした。死ぬまで健たん家だった子規の面目躍如だ。

三月二十八日（長柄山―長南―大多喜）

前述長南で求めた蓑を、東京に持ち帰って生涯ずっと大切にした。「病床六尺」にはいつもその蓑があった。

「柱に懸けし古蓑に思わず六年の昔を偲ばれける」

と書いた。その後にも「千葉より小湊に出んと多喜（大多喜）のほとりに春雨に遭いて宿とらんも面白からずとて菅笠一蓋には凌ぎかねて路の辺の小店にて求めたる此蓑―」と随筆「松羅玉液」にも記されている。なお随筆の題名は子規が愛した中国産の墨の名だという。

長南町役場前の道標（右　大田喜（大多喜）左　いちのみや（一宮））脇にはこの時、子規が詠んだ「春雨のわれ蓑着たり　笠着たり」の句碑が立っている。

三月二十九日（大多喜―安房小湊―天津）

大多喜から植野（勝浦市）を経て上総と安房の境にやってきた子規はノートにその展望をスケッチした。「安房上総ノ境ヨリ外海ヲ望ム図」である。眼前に誕生寺が現れた。

「鴬や山をいづれば誕生寺」

誕生寺の前方に広がる鯛の浦は波しぶきを上げて荒れていて見学の舟を出すことはできなかった。数年前、同じように此処を訪ねた漱石はその絶景を「木屑録」に書いているので、子規にとっては残念だったことだろう。

「野村」という宿に草鞋を抜いた子規は内湯がないのですぐ近くの銭湯に出かけたが、男女混浴だった。お互いに肩がすれ腰が触れる（肩摩腰触）といった芋洗いの体だった。そこで詩経をもじった詩を作った。ふくよかな娘と筋骨逞しい漁夫を対比した詩であった。

銭湯から帰り按摩を呼んだ。子規にとっては初めての経験だったであろう。

三月三〇日（天津―和田―平磯）

「野村」の部屋には酒井抱一（江戸後期の画家）の掛け軸があった。子規はこの掛け軸が欲しくなり売ってくれと掛け合ったが主人が留守という理由で断られたので、仕方なくその絵と自賛の句をノートに写した。

和田（和田町）で昼飯にしたが「飯堅ク魚臭ク食ウベカラズ」だった。多分、その臭い魚とは「くさや」の干物ではなかったかと想像される。

朝夷（千倉町）で日が暮れたが、更に歩いて平磯（千倉町）の山口屋に泊った。この地の銭湯も混浴だった。湯は乳首にも届かず閉口した。

三月三十一日（平磯―白浜―館山）

日本で二番目に古い野島崎灯台（明治二年点灯）は修繕中で見学できなかった。滝口（白浜町）では菓子を食べたきりだった。前日来の粗食も重なって疲労も極限に達していた。そのため山中で一時間ほど寝込んでしまった。

ようやく館山に出た。鏡ケ浦はその名のとおり穏やかだったが、見えるはずの対岸の富士山は雲に隠れていた。館山の藤屋についたのは五時前、泊り客は子規一人だった。部屋には大田蜀山人の一幅がかかっていた。

四月一日（館山―市部―保田）

那古の寺崎観音からの眺望はなかなかのものだった。子規は更に足を延ばして崖の観音に行く。更に市部（富山町）には新しく出来たトンネルを通って達した。この頃、まだトンネルは珍しく前記のように漱石も二度もトンネルのことを書いている。

子規の房総旅行の目的の一つが大好きな八犬伝の舞台を見ることだったはずだが、不思議なことに漢文日記にも句日記にも一言も書かれていない。多分、「昨来、英気喪失して喪家の狗のごとし」（原漢文）と書いているように体力気力もなくして保田（鋸南町）に着くのが精一杯だったと思われる。

保田に着くと真正面が鋸山である。多分、漱石の語った「木屑録」の鋸山を反芻しながら宿に入ったはずである。その宿も漱石の泊まった宿屋であったろうと想像される。

四月二日（保田―汽船―東京）

この日には鋸山にも登ったが、遥かに浦賀海峡を見下ろすと外国船が煙を吐いて航海するのが手に取るように望まれた。中腹にある日本寺境内には江戸時代後期の漢詩人梁川星巌の詩碑が建っていたので、それに触発されて七言律詩二首を作った。

鋸山を下山して、はしけ舟で沖に出て東京行きの東京湾汽船で帰京した。

寄宿舎に帰ると仲間から房総の印象を聞かれた。

「山はいがいが海はどんどん。菜の花は黄に、麦青し。すみれ、たんぽぽ、つくづくし」と答えた。

漱石は「木屑録」で房総を「仙境」と書いたが、子規も「仙地」と表現した。そして房総の人は誰もが素直で素朴である。旅人を厚く歓待してくれたと。

早速、この房総旅行の清書にかかった。長南で求めた蓑にちなんで「かくれみの」と題して、「かくれ蓑」（和文序文）、「隠蓑日記」（漢文）「かくれみの句集」の三部作にまとめた。

句集の最後には自作の英文詩まで載せている。いかにも子規らしい。もちろん漱石にも読んでもらった。漱石

は「漢文の日記まことに面白し君が才にあらずんば誰が此思いつきあらん。俳諧はわからないなりに点をつけたりまちがった処が御愛嬌なり」と批判した。

蛇足ながら子規が長南で求めた蓑を大事にしたことについて、司馬遼太郎は「坂の上の雲」の中で次のように書いている。

「子規はこういうもちものを、まるで自分の分身のように愛惜しているのは、やはりいのちがみじかいことを自覚しているところから出た心情らしい」。

その蓑は故郷松山の子規記念博物館に所蔵されている。

その後、明治二十七年の暮れに総武鉄道が佐倉まで完成するとすぐに、佐倉への吟行を楽しんだ。このとき、すでに月並み俳句を脱して近代俳句に変わっていたと専門家は云う。

「常盤木や冬されまさる城の跡」

子規の房総旅行はこの他、明治十六年市川国府台、明治二十九年市川中山法華寺と計四回を数える。それぞれ俳句集（「かくれみの句集」、「寒山落木」「俳句稿以後」等）に載っている。

房総を詠った句は五十三句に及ぶが、いくつかを拾ってみた。

晩年、病床にあっても、子規の脳裏には若き頃、房総の山野を跋渉する姿が浮かんでいたことだろう。

なお千葉県下に子規の句碑は前記長南町のほか佐倉市、四街道市、鴨川市に合わせて五基がある

夕立ちのはずれに青し安房上総（明治二十五年）
海へだつ上総は低し雲の峰（〃　二十六年）
石くぼむ床几の跡や苔の花（〃　国府台）
常盤木や冬されまさる城の跡（明治二十七年　佐倉）
朝霧やいらかにつづく安房の海（〃　船橋駅）
那古寺の縁の下より秋の海（一十八年）
利根川の向ふは遅き田植哉（一十九年）
房州の沖を過行く鯨哉（三十年）
若草の頃習志野を通りけり（三十一年）
深川や木更津舟の年籠（三十二年）
下総の国の低さよ春の水（三十五年）

参考図書
「木屑録」（夏目漱石全集十二　漢詩文）
「七草集」（正岡子規全集九　初期文集）
「かくれ蓑」「隠蓑日記」「かくれみの句集」（正岡子規全集十三　小説紀行）
漱石の夏やすみ　（高島俊男著）
夏目漱石の房総旅行　（斎藤　均著）
漱石の夏休み帳　（関　宏夫著）
かくれみの街道をゆく　（〃）

口紅（その三）

池莉　原作
山本勉訳

〈登場人物〉
趙家の人々
・趙耀根（小説の主人公、江暁歌と結婚）
・趙耀虎（趙耀根の弟）
・趙耀珍（趙耀根の妹）
・趙耀根の母親
江家の人々
・江暁歌（小説の主人公、趙耀根と結婚）
・江暁鴎（江暁歌の弟）
・江暁暢（江暁歌の妹）
・沈鳳宜（江暁歌の母親）
趙耀根と江暁歌の友人
・寧岸
趙耀根の会社の同僚
・張喜
江暁歌の会社の同僚
・羅桂香

第三章　決別

（一）

窓ぎわにたたずむ江暁歌の目から涙が溢れていた。カーテンをまくり遠くを眺めると、汽笛が大空に鳴り響いた。彼女は父親が帰ってくるのを待ち望み、この話を父親自らが語ってくれることを望んだ。しかし、当分の間、父親が帰る訳もなく、この汽笛が、父親が乗船している船の汽笛でないこともわかっていた。彼女は一人、鉛色の空を眺めていた。心の暗さは極限に達し、ついに彼女は、床に倒れて気を失ってしまった。

大きな音は、江暁歌を昏々とした眠りから目覚めさせた。部屋の中に突然まぶしい光が射し、母親と弟、それに妹が、あわてて自分の方に駆けてくるのが見えた。

なんだ、彼らがドアを押し開けた物音だったのか？彼らはなぜドアを押し開けて入ってきたんだろう？

彼女は、皆と話をして、自分は心配ないと伝えたかったが、実際、全身がぐったりして身動き一つできなかった。彼らは、江暁歌を取り囲んで、お茶や水を持ってきて懸命に看病したが、彼女は寝込んでしまった。

江暁歌は高熱が出て喉もしゃがれた。彼女は、体にとりついた病魔を懸命に振り払いながら、

「お母さん、ごめんなさい。何でもないの。私は、ただ頭の中が混乱しているだけなの」

とようやく口を開いた。

「喋らなくていいのよ。ゆっくり休みなさい」

彼女は、

「お母さん・・・・」

と恥ずかしげに言った。

「趙耀根と話をさせてくれませんか？私の今の気持ちを伝えて、彼に辛抱強く待ってもらうようになだめるわ」

沈鳳宜（江暁歌の母親）は少し思案して、

「暁歌、私達はあなたの本当の家族とかわらないわ。私だって他人に家の秘密を知られたくないわ。今、お前はこんな状態なんだから、何も心配しなくていいのよ。お父さんが帰ってくるまでに元気になることが、お前の仕事なのよ。お父さんが帰ってきてから、あらためてお前達のことを話をするわ。いいわね」

と言った。

江暁歌は沈鳳宜の言うことを聞かない訳にもいかず、困り果てて黙り込んでしまった。

江暁鴎（江暁歌の弟）は、

「母さん、姉さんはこんな状態なんだから、もう言わなくたっていいじゃないか」

と言った。沈鳳宜は、

「お前に何がわかるの？私は何も責めていないわ。ただ自分の気持ちを素直に言っただけよ。暁歌にだって責任があるのよ」

と言った。

江暁暢（江暁歌の妹）は、

「暁鴎ったら、お話にならないわね」

と言った。江暁鴎は、

「姉さんほどじゃないよ」

と言った。すると江暁暢は、

「まあ寧岸先生が来たわ」

と嬉しげに言った。

（二）

寧岸が現れると、まるで太陽のように江暁暢の顔を照らし、心までも照らした。

しょげかえっていた彼女は、長い干ばつにあった稲の

苗が十分水を得たように、身体をまっすぐに伸ばした。彼女の顔は瞬く間に明るくなり、歩く姿でさえもしなやかで美しくなった。寧岸への眼差しには、乙女の恋心が溢れていた。江家の姉妹の美しさは、役所の宿舎では評判だった。江暁暢は、すらっとした体つきで、皮膚は雪のように白く、容姿端麗であった。その美しさは、江暁歌でも幾分劣るほどであった。

江暁歌とはまた違い、江暁暢には女性の美しさがにじみ出ていた。江暁歌がうちに秘められた美しさだったのに対して、江暁暢のそれには華があった。

寧岸は、江暁暢が自分に気持ちを寄せていることに気づいていたし、また江暁暢の美しさも十分知っていた。ただ、彼の心の中には江暁歌がいたので、自然と江暁暢を受け入れることができなかった。

寧岸は入口から入ると、

「暁歌はいるか？彼女はどうして出勤しないんだ？」

といきなり尋ねた。江暁暢は、

「いるわ、いるわよ」

「あなたが姉さんの事を心配してるのはよくわかってるよ。姉さんは高熱が出たの」

とやっかんで言った。

「いったいどうしたんだ？」

と言って、真っ直ぐ江暁歌の部屋に入っていった。

寧岸の心の内は、言葉や表情からも読み取れた。江暁暢も後から入っていったが、寧岸に止められた。江暁暢は敢えて、無理に入ろうとはしなかった。入り口が閉まり、寧岸が姉と二人きりになるのを、なすすべもなく見ていた。

江暁歌の顔を見ると寧岸はいたたまれなくなった。できることなら、黙って彼女の涙をぬぐい、そっと抱き寄せ、彼女が安心できる言葉をかけてあげたかった。しかし、そんなことはできる筈もなかった。これから先も、一生、彼女と親しくなることはない。彼女はただ、彼にとっての一つの憧れであり、彼の心のよりどころであった。が、実際どうあがいても、どうにもならなかった。彼は自分の行為を抑えることはできたが、自分のこの想いを抑えることはできなかった。しかし、何としてもこの気持ちを抑え、自分をコントロールしようと努めた。これも、友を裏切らないことであるとわかっていたから。

（二）

途方に暮れていた江暁歌は、自分の今の気持ちを洗いざらい寧岸に打ち明けた。

寧岸は聞き終わると、

「僕は良かったと思うよ」

と驚くようなことを言った。

寧岸が良かったじゃないかと言うのを聞いて、江暁歌

は曇り空から一筋の光が見えたように感じた。彼女はただひたすら泣きはらした目を見開いて、寧岸の言ったことが正しいかどうか確かめたかった。寧岸は、

「とても簡単なことさ。君のお母さんが、生みの母親でないと言ったんだから、君は彼女の意見を聞く必要はないのさ。すべてのことが特殊な状況に陥っていたんだ。今の君がそうで、お父さんに会うこともできないし、おじいさんに会うことも叶わない。でも、母親は絶対、心から君のしあわせを願っているんだ。継母に義理立てする必要はないんだ。君は趙耀根と結婚してこそ、生涯の幸せをつかむことができるんだ。思い切って、趙耀根と結婚すればいいんだ。これが良いことでなくて、何だって言うんだ。そうでなければ、いっそのこと、趙耀根と結婚しなければいい。今、結婚するかしないかをはっきりさせる時期に来ているんだ」

と言った。江暁歌は、

「私は、必ず趙耀根と結婚するわ。結婚できなければ死にます。だって、私はもう・・」

と、思わず口をついて出てしまった。

江暁歌は、慌てて自分の言葉を飲み込んだが、寧岸はすぐに理解し、顔を赤らめた。

江暁歌は、幾分決まりの悪さを隠しながら、

「趙耀根があなたを来させたの？すべて婚礼の手はずは整っているの？」

と尋ねた。寧岸はため息をついて、

「君達は、死ぬの生きるのって、人騒がせだ」

と言った。

寧岸は、趙耀根のことを江暁歌に知らせた。江暁歌は趙耀根が手首を切ったことを聞き、

「あっ」

と声をあげて立ち上がった。涙がハラハラと止めどなく流れた。

趙耀根と江暁歌の結婚は、全て寧岸の肩にかかって来た。寧岸は、江暁歌を慰めて、趙耀根は大事に至っていないことを告げた。しかし、結婚の日取りは、両家の様子を窺いながら決めていく他なかった。彼は趙耀根をなだめることができたので、趙耀根に辛抱強く待たせれば、結婚の日取りは幾らでも見つかる。何故、五四運動青年節でなければならないのか。

これが、江暁歌の親友であり、考え方が綿密で痒いところまで手が届く寧岸だった。肝心なときに、江暁歌の気持ちを察し、彼女のために周到に考えることができた。このような友人がそばにいるので、江暁歌は、冷静に落ち着いてもいられた。

彼女は、無理に笑って、

「わかったわ、寧岸、今となっては、両家のことは、あなたに頼るしかないわ」

と言った。寧岸は、

「わかってくれれば良いんだ。君が笑っていてくれればそれでいいのさ。僕は、君が笑っているのが好きなんだ。君は笑顔が美しいよ。それに、笑うと体にも良いんだ。君は、絶対に養生しなければならないし、結婚するにしても、君らしさを失ってはいけないよ。あれこれとやって、憔悴しきってはダメだ。結婚するときには、花嫁は、何て美しいんだろうと言わせなければダメだ」

と言った。

すると、今度は、江暁歌は、本当に笑った。多少、無理に作り笑いをしていたが、気分は随分と良くなってきていた。江暁歌は、

「お願いだから、趙耀根に知らせてほしいの。もう二度と馬鹿なことはしないようにって」

と寧岸に言った。寧岸は、

「わかったよ。僕は、必ず君の言葉を彼に伝えておくよ」

と言った。

寧岸の真心は、江暁歌の心に響いた。今まで、寧岸に対して密かに抱いていた想いは、ずっと心の奥底にしまってあった。

趙耀根と知り合う前、江暁歌は寧岸が愛を告白してくれるのをずっと待っていたが、何もなかった。趙耀根と愛し合うようになってから、寧岸がどんなに苦しみ、落胆したかわかっていただけに、彼に対して申し訳ない気持ちでいっぱいだった。とりわけ、江暁歌がそう思ったのは、彼が苦しみ落胆しながらも、自分たちのために力を尽くしてくれたからだ。

彼女は、必ず寧岸の真心に応えなければならないと思った。

(四)

趙耀根と寧岸は、荒涼とした堤防に寝そべり、長江の水と大空が遙か彼方で交わる水平線を見渡していた。白と緑のツートンカラーの一艘の客船が川をさかのぼっていく。それは、彼らから次第に離れて遠くへ向かっていき、薄暗い、広々とした果てしない長江と大空の中に吸い込まれていった。

趙耀根は、

「恥知らず！江暁歌を脅迫するなんてあまりにも恥知らずだ」

と叫ぶように言った。寧岸は、

「江暁歌が今度のことで受けた衝撃は大きい。こんな状況では婚期を延期する方がいいだろう」

と言った。

「できない、先に延ばす事はできないんだ。今、彼女にとって一番必要なのは僕なんだ。僕は奪い取ることになってでも、彼女を連れて帰るぞ。さもなければ、あの恥知らずの継母に、彼女はダメにされてしまうんだ」

「趙耀根ちょっと落ち着け。僕達は冷静になって、どう対処すべきか考えないといけない。江暁歌の父親は不在だ。実の母親は遺書を残している。あの継母も確かにこの責任を負うことができない。それに、江暁歌は今、精神的にまいっている。彼女には体を休める時間と、気持ちを落ち着けることが必要だ」

趙耀根は、

「江暁歌が受けた傷が大きいだけに、彼女のそばにいてやりたいんだ。だからできるだけ早く、彼女と結婚したいんだ」

と言った。

寧岸は答える術がなかった。彼は、人々の前で雄弁だが、趙耀根の前ではいつも言葉を飲み込んだ。ある時には、明らかに自分が絶対正しいと思っていても、趙耀根と論争し始めると、筋が通らず、返す言葉も見つからなかった。趙耀根の負けず嫌いの気性は、才能の秀でた者が、突然、敵の軍隊に阻まれたような感覚に寧岸を陥らせた。最後のところは、いつも荒削りの趙耀根が正しいと言うところに落ち着く。これについて、寧岸は感服し、趙耀根を尊敬した。

寧岸の気持ちはふさいでいて、

「誰が自由な生活に憧れないことがあるだろうか。でも運命は、僕達自身が握ることなんてできないんだ」

と思わずため息をついて言った。

趙耀根は、大きくその首を横に振った。

「僕自身が、自分の人生を切り拓いていかなければならない」

彼は立ち上がると、長江に向かって話しかけた。

「もし、自分の一生において、自分の運命をどうすることもできないなら、このまま、長江に飛び込むまでさ」

(五)

黄昏の街角には、酒と料理の香りの漂う屋台が、どこにもかしこにもある。

一群の人達が、屋台を取り巻いて、酒に任せて飲み、大声を張り上げて大騒ぎをしている。

趙耀根は街を一人ぶらついていた。彼は人前では、いつも達観した様子を見せていた。

一人でいれば、気もふさいで、気持ちも晴れない顔つきを、たまにはさらけ出せる。そんな思いが、彼を屋台の酒と料理の香りに引きつけた。彼は、本当は木製の腰掛けに腰掛けて、酔っぱらってしまいたかった。しかし、悩みを抱えたまま、どうして一人で酒を飲むことに耐えられるだろう。彼は、また、酒を飲みたい気持ちを打ち消した。すると、

「趙耀根、趙書記」

と屋台から、思いがけなく声を掛けてきた人がいた。
よくよく見ると、酒にまかせて飲んでいるのは、数人の同僚だった。彼らは臭豆腐（注9）を酒の肴にして飲んでおり、ほろ酔い加減だった。

（注9　豆腐を発酵させて作った臭みのある食べ物）

趙耀根が屋台に入ってくるのを見ると、
「来いよ、俺たちと一緒に飲もうぜ」
と同僚が席を立った。
趙耀根は同僚の手を払いのけた。彼は、普段からこれらの輩と関わりを持たなかったが、同僚達は無理矢理グラスを彼の手に押し込んできた。
「幹部たる者、大衆と交わらなければいけない。我々を馬鹿にしてはいけないぞ」
趙耀根は彼らを驚かせたかった。
「私は君達を見くびったよ。これっぽちの酒しか飲めないくせに、私と酒を飲む勇気があるのかね。やめとこう」
「酒が飲めないっていうのか。毛首席は、私達を教え導いて下さったんだ。酒を飲んでない人間が、とやかく言う権利はないとね。あなたが、先ず酒を飲んだらどうですか」
「おい、君は何ていう名前だ。猿が帽子をかぶっているが、人間のようだ」
そこにいる一人が、
「彼は、張喜だ。来たばかりの新参者の青年労働者だ。仕事を始めて、まだ一ヶ月も経っていないんだ」
と言った。趙耀根は、
「君はどうやら、本当に納得していないようだね。それなら、君にわからせてやろう。酒を持ってこい」
と言った。
みんな喝采を送った。張喜は、首を真っ直ぐにして応戦した。
趙耀根はグラスを受け、張喜と一杯、又一杯と飲み比べた。
趙耀根は、酒を飲みながら次第に当たり散らすようになり、自分から豪胆になっていった。
同僚達は、声を揃えて、いいぞと叫んだ。一人の同僚が、臭豆腐を箸で挟んで趙耀根の口に詰め込んだ。
張喜は、口の中に酒を一口含むと、ついにバタンと倒れた。趙耀根は思わず思いっきり笑った。
酒を飲んだ後、趙耀根は、まっしぐらに江暁歌に会うために江家に向かった。
趙耀根は力を込めて、江家のドアをたたいた。
江暁暢はドアを開けると、酒気を帯びた趙耀根が見えたのを意外に思い、大袈裟に叫んだ。
「驚いたわ。お母さん、趙耀根が来たのよ。姉さん、姉さん、早く出てきて。趙耀根が来たわよ」

沈鳳宜が出てきて、娘を傍らに引っ張って行った。
「あなたは何をわめいているの。世の中が乱れることを願っているの」
そして、沈鳳宜は、声を震わせ趙耀根に、
「あなたは、酔っぱらって私達の家に押し入ってきて、何しに来たの」
と叫んだ。趙耀根が、
「僕はあなたには用はない。江暁歌に会わせてほしいんだ」
と言うと、部屋に向かって、
「江暁歌、江暁歌・・・」
と呼びかけた。
沈鳳宜の怒りは頂点に達した。
「趙耀根、ここは私の家よ」
趙耀根は、少しもたじろかなかった。
「この家は、江暁歌の家でもあるんだ。僕は、江暁歌に用があるんだ」
江暁歌が駆けてきた。
「耀根、あなた、どうしたの？」
沈鳳宜は激怒して、江暁歌と趙耀根の間に割り込んだ。
「暁歌、家に早く入りなさい。彼は酔っているのよ」
趙耀根は、沈鳳宜を相手にしなかった。
「俺は酔っぱらったぞ、暁歌。酔ってなければ、君の家に入っていけないさ。酔った勢いで、お前に会いに来たのさ。俺もお前も、これ以上待つ必要はないんだ。俺達結婚しよう！」
沈鳳宜は、
「聞き捨てならないわ。やり方が荒っぽいし、無礼すぎる」
と言った。江暁歌は、
「お母さん、彼を家に入れさせてください。私が、彼と話をしますから」
と言った。
「ダメダメ。ここは、私の家だわ。飲んだくれのならず者に、勝手な真似をさせることはできないわ。早く、警察を呼んできなさい」
沈鳳宜は、かえって、余分なことを言ってしまった。
江暁歌は、
「彼は、ならず者なんかじゃないわ」
と言った。江暁暢は、
「姉さん、彼は、酔っているわ。彼に出て行ってもらったら。お母さんを怒らせないでよ」
と言った。
「暁歌、俺と行こう。ここは、君の住むところじゃないよ、暁歌」
沈鳳宜は、
「趙耀根、馬鹿をお言い。ここはあなたのいる場所じ

やない。出て行って。このならず者、あなたが、私の娘を奪いたければ、私を踏みつけて行きなさい」

と言った。

折も折、江暁鴎（江暁歌の弟）が帰ってきた。

江暁歌は救いの神に会ったようだった。

「暁鴎、早く、耀根を連れて行ってよ」

江暁鴎は、趙耀根をしっかり抱き留めた。

「耀根兄貴、落ち着いて下さい」

彼は、無理矢理趙耀根を引きずって門を出て行った。

江暁暢（江暁歌の妹）は、大急ぎで玄関を閉めた。

沈鳳宜は、怒りで、全身がブルブル震え、少しも言葉にならなかった。

江暁歌は、心が千々に乱れながら、

「ごめんなさい、お母さん」

と謝った。しかし、沈鳳宜は、怒りを抑えることができなかった。

「ごめんなさいって、謝ってそれで済むと思っているの？趙という男の本性がついにわかったでしょう。彼が、どんな輩かわかったでしょう。今に、お前のお父さんが帰ってくるから、お父さんに今回のことを洗いざらい話してごらん。私は、お前にできる限りのことをしてきたわ。お前の実の親は、おそらく私のようにはできなかったでしょう」

「お母さん、そんな風に言わないで。私はこれまで、お母さんのことを継母だなんて思ったことはないのよ」

「私を継母と思ったことがないですって？それは、ありがたいわ。でもね、私はれっきとした継母なのよ。私は継母だからこそ、一生お前に対して、心を砕き、慎重になり、お前が気づきはしないかと怖れ、お前のお父さんが悲しんでいないかと不安になり、ひとさまが、あれこれと取り沙汰していることを心配したのよ。天の神様が、私が、お前の幸せを願ってしてきたことを、わかってくれることを願っているわ。継母って辛いのよ」

「お母さん、ごめんなさい。私が間違っていたわ」

沈鳳宜は、

「いかにもわざとらしく、ごめんなさいなんて言わないで。口とは裏腹な気持ちで謝ってもらっても、何にも嬉しくないわ」

と顔を横に振って言った。

江暁歌は、母親に責められて弁解したくなったが、これも徒労だとわかっていた。彼女は、母親の怒っている顔を見て、深い絶望に陥った。

（六）

江暁鴎は、趙耀根を大通りの真ん中に作られた公園の石の腰掛けに引っ張っていき、腰を下ろさせた。

彼は、ハアハアと荒々しく息を切らした。酒に酔った趙耀根を相手にしたので、いささか疲れてしまったのだ。

暫くして落ち着くと、趙耀根に話しかけた。

「耀根兄貴、兄貴は、本当に飲み過ぎたよ」

趙耀根は、言葉もなくがっかりしてうなだれていた。

「姉さんの性格はわかっているんだ。姉さんは、兄貴について、家を飛び出すことはできないんだ。こんな風にしたら、かえって姉さんを怖がらせるだけだよ」

趙耀根は、目を上げて江暁鴎を見ると、

「俺達のことは、お前には皆目わからないさ」

と、ひと言冷ややかに言った。江暁鴎は、

「僕にわからないとしても、こうして家に乗り込んできて、いったい何だって言うんだ。略奪結婚でもする気ですか？たとえ姉さんを奪ったとしても、兄貴は、僕の母さんを怒らせてしまった。兄貴は、これから僕の両親と付き合っていくんでしょう？結婚したら、兄貴の義理の両親になるんですよ」

「もう、これ以上言うなよ。酔いは醒めたよ。お前はまだ若いし、今のところ順調だ。どうして人情の機微がわかるんだ。お前の母親は、根っから俺を馬鹿にしている。俺が、たとえ彼らを菩薩と拝んだとしても、彼らが悔い改めなければ、力ずくでやるしかないんだ。俺はその一歩手前だ。俺は捨て身なんだ。俺の可愛い弟分、お前は今回の俺のことで、教訓をくみ取らなければならない。お前は精神を奮い立たせ、早く出世しなければならない。さもなければ、いつかお前が女を好きになったとき、人に馬鹿にされるぞ」

江暁鴎は、心を揺さぶられて、

「耀根兄貴」

と叫んだ。趙耀根は、

「暁鴎」

と呼んだ。

「お前の兄貴である俺は、将来必ず出世する。その日が来ることをお前は信じるか？」

「俺は、信じるよ」

「よしわかった。将来俺にその日が来たら、俺の権力は、すなわち、お前の権力だ。俺の金は、お前の金だ」

「俺は、権力も金も要らない。兄貴が、俺のことを、いつまでも弟と思ってくれれば、それでいいんだ」

「もちろんさ、俺達兄弟は、いつまでも、永遠さ」

彼ら兄弟は、恥も外聞もなく、思いっきり公園の芝生で寝そべった。星空を仰ぎ見ると、空高く、天の川は広々と果てしなく広がっていた。趙耀根は暫く無言になり、酔いも次第に醒めてきた。

江暁鴎は、

「耀根兄貴、姉さんが兄貴に巡り会うことができたことは、姉さんにとって、本当に幸せなことだったと思うよ」

と突然言った。

趙耀根は、親しみを込めて、江暁鴎の髪を撫でた。
「お前のような弟がいることは、俺にとっては幸せなことだ。俺もよく考えたが、乗りかかった船さ。どうしても、暁歌を俺のものにしたいんだ。俺は、彼女と直ぐに結婚しなくてはならない。彼女以外に考えられない」
「耀根兄貴、兄貴は絶対に母さんを傷つけちゃダメだ」
「安心しろ。俺は、思いやりのある最も古典的な方法を使うよ。いかなる人も傷つけないよ。俺が求めているのは、幸せな生活なんだからな」
「わかったよ。俺は、今日の夕方は、家に帰るのはよすよ。兄貴の突入を食い止めなくても済むからね」
「本当に物わかりの早い奴だ。ありがとう」

（七）

深夜、江暁暢（江暁歌の妹）はベットに横になって、指をくわえながら、夕方起こったことを思い返していた。
「趙耀根って何て荒っぽいんでしょう。彼は、私達に謝らなければならないわ。でも、考えてみれば、なかなかできないことだわ。彼は、略奪しようとしているのよ。もし、ある人が、こんな風に私を略奪してくれるのならいいわ。何て幸せなんでしょう」
江暁歌は、
「寝るわよ、寝るわよ。あなたは何をごたごた言っているの」
と言った。
江暁暢はため息をついて、壁に向かって寝返りを打つと、直ぐに寝入ってしまった。
江暁歌は、ほんの少し横になったが、暫く眠りにつくことができなかった。
夜は、静まりかえった。窓越しに外を見ると、月の光が、軽やかにゆれる木の陰で、長江の清らかな波の光の如く、脈打っているのがふと見えた。
真向かいの窓に明かりが灯った。この明かりは、毎晩空が明けるときにやっと消える。江暁歌は、きっとこの灯の下で一人の勤勉な学生が勉強していることを信じていた。ただ、男の子であるのか、女の子であるのかわからなかった。ある時、この灯りを見ていて、心の衝動を抑えることができなくなり、全てを顧みないで、この勤勉な学生がいったいどんな人であるのか会ってみたくなり、ある種の緊張感が生まれた。時間を割いて勉強しないと、新しい時代から取り残される。しかし、彼女は今、結婚さえも自分の意志で決めることができないというのに、しっかり勉強することができるのだろうかと思った。
突然、甲高い歌声が、荒々しく夜の静けさを引き裂いた。
美しい夜の景色は、とても、ひっそりしている

草原には、馬頭琴の音色だけが残っている
遠くにいる少女に手紙を書きたい
でも、僕の気持ちを届けてくれる郵便配達人もいない
僕のところにおいで・・・・
でも、僕の気持ちを届けてくれる郵便配達人もいない

歌声は、とても粗野で、抑揚がなく、何の束縛もなく、雄叫びのように聞こえてくる。
江暁歌は歌声を聞くと起きあがって、その場に座った。彼女は、この声が趙耀根だとわかった。趙耀根でなければ、銅鑼の破れたような声で、平気に歌うことができる人はいない。これは、きっと趙耀根が彼女を呼んでいるんだ。この歌声は、一筋の泉の如く江暁歌の心を潤し、声楽家の詩の詠嘆にも勝っていた。江暁歌は感動して、涙が目の縁一杯に溜まった。
江暁暢は、騒ぎで目が覚めた。
「誰？耳障りな歌い方をするのは？ほとばしる感情に溢れた狂人のようだわ」
江暁歌は、ためらうことなく服を着ると、旅行鞄に彼女の日用品を詰め込んだ。
「姉さん、何してるの？」
「暁暢、私、この家を出て行くわ。お父さんが帰ってくるのを待つことができないの。両親には申し訳ないと思うわ。でも、私は、彼と出て行かなければならないの。彼のやり方がどんなでも、気持ちが引き寄せられたの。これは仕方のないことよ」
「ああ、趙耀根が歌っているのかしら？まったく信じられないわ」
「私は、出て行くわ。暁暢、私に代わってお母さんに伝えて」
「私も姉さんと一緒に外に出て見るわ。趙耀根が歌っているなんて信じられないわ。彼はこんなにもロマンチックだったかしら」
「出て行ってはダメよ。お母さんを驚かせてはいけないわ。それに、お母さんを怒らせることになるわ。私が出て行けば、歌声は止むでしょう。あなたは、ここで待っていて」
江暁歌は、旅行鞄を提げてそっと沈鳳宜の部屋の前まで来ると頭を下げ、黙って短い時間立っていた。その後、そっと出て行った。
趙耀根は電信柱の下に立っていた。
趙耀根のその姿を、真っ暗闇の中でそっと窓越しに覗き見している人がいた。
江暁歌が玄関を出ると、趙耀根は直ぐに歌うのをやめた。
江暁歌は、趙耀根の腕の中に飛び込んでいった。趙耀根も、感情が高ぶり彼女の腕をつかまえて言った。
「行こう、俺と一緒に行こう。俺達は、結婚するんだ」

第四章　埠頭

（一）

趙耀根は、とうとう、五四運動青年節の日に、江暁歌との結婚を勝ち取った。

趙耀根の母親も江暁歌の母親の沈鳳宜も婚礼に出席しなかった。しかし、隠し立てするような結婚式ではなかったので、多くの若者が集まった。

寧岸は、自ら司会を買って出て、趙耀根や江暁歌に気を遣わせないようにいろいろと趣向を凝らした。

この結婚式は、若者達にとっても記念日となった。

この日、江暁歌は、紅い色の春らしい装いをし、長い髪を頭の後ろで結った。嬉しさのあまり彼女の頬は赤く染まり、淡い頬紅を塗ったようだった。両眼は恥ずかしそうにはにかんでいる。みんなはこのような美しい花嫁を見たことがないと思った。沢山の星が月の周りを取り囲んでいるように、みんなが彼女を取り囲み、心から祝福した。彼女はみんなにせがまれて、当時最も流行していた映画の挿入歌「私達の生活は、陽光に満ちている」を歌った。この歌は、愛情を歌った歌だったので、若者に人気があった。

六十年代以降、人々は「愛情」という二文字に触れる勇気がなく、また触れることがひょっとしたら恥ずかし

一瞬江暁歌の心の中をためらいの気持ちがかすめた。彼女は、出て行くことが何を意味するのかよくわかっていた。

しかし、趙耀根の力のある腕から伝わってきた熱い思いが彼女を励ました。彼女は、長い髪を振るうと、趙耀根と肩を並べてその場を去っていった。

その二人の行動を先ほどから沈鳳宜は、パジャマを着て、ずっと窓越しに立って一部始終を見ていた。彼女は、江暁歌が長い髪を振るう仕草をしっかり心に留めた。彼女のいさぎよさ、江暁歌の弱々しい外見の中に、頑なな、ものに動じない心を見て取った。

沈鳳宜は、この時、本当にこの娘を失ったことを知った。二日前、沈鳳宜が彼女の身の上話をした時には、江暁歌がこのように無情であるはずがないと思った。自分の娘が、恋人を見た途端、母親への恩を忘れ、家を捨ててしまうことがあろうか。沈鳳宜は、心の中で涙が溢れてきた。江暁歌は、結局自分がお腹を痛めた娘ではなく、自分と血が繋がっていない、他人の遺伝子が入り込んでいたのだ。沈鳳宜は、江暁歌と自分が産んだ娘のように親密にしたかったが、おそらく無理だろうと思った。

そして、江暁歌が趙耀根のところに行きたければ、行けばいいと諦めた。

かったのかもしれない。ある若者には、「愛情」という二文字は聞き慣れない言葉に感じただろう。しかし、この言葉は消滅することなく、人々の心の奥深くしまわれていて、解き放たれるこの時を待っていたのだった。

「愛情」という言葉は、今、解き放たれた。「愛情」は、人々の歌声の中で向かい風を受けて、高く舞い上がった。趙耀根と江暁歌の結婚式の席上で、若者の偽りのない感情は自由にほとばしり、披露宴は大いに盛り上がった。これも、結婚までの道程にいろいろなことがあった埋め合わせだったのかもしれない。

趙耀根はとても幸せで、へらへら笑ってばかりいた。みんなに酒を飲まされ、羽目を外した。彼は兄貴的な存在だったので、いつもはみんなのけしかけ役だった。しかし、今度ばかりはみんなが彼をそそのかす番だった。

一番輝いていたのは、江暁歌だった。彼女は幸せに満ちていた。

彼女は、声に出さずに心の中で、

「私は幸せです。お母さん、安心してください」

と亡くなった生みの親に語りかけた。

（二）

趙耀根は数日して家に帰って行った。

趙耀根が玄関を入ると、彼の母親は、衣料工場で頼まれた子供服にボタンをかがることに没頭していた。彼女はわざと玄関の方を見ないで、平然と仕事に集中しているふりをした。彼女の目先はあまり良くなかったが、手先は器用だったので、せっせと仕事をこなしていた。

趙耀根が、

「お母さん」

と何度か声をかけると、彼女はやっとわざとらしく頭を上げて、趙耀根の方を見た。

趙耀根は謝りながら、

「僕は数え切れない過ちを犯したが、これは、僕一人の過ちだよ。僕は、結婚を待ち切れなかったんだ。お母さんがののしりたければ、ののしればいいさ。殴りたければ、殴ってくれよ。だから、江暁歌が僕のお嫁さんになることを認めてほしいんだ。僕達は、何時家に帰ってきたらいい？」

と笑って話しかけた。

「ダメに決まっているじゃないか。お母さんはそのつもりはないよ。それに、お前達が住む部屋だってないんだ」

趙耀根は、母親の話を聞いてうなだれていたが、考えてみれば自分は既に結婚して所帯を持ち、大人の仲間入りをしたのだと思った。だから、横暴で分からず屋の母親に全てを任せることはできなかった。

「僕は、この家の長男だ。僕が帰ってくると言ったら、

帰ってくるんだ」

母親は、相手が強く出れば、それに応じて反発する人だった。

「お前が帰ると言えば帰れるのかい？いったいお前は、何様だと思っているんだ」

趙耀根は、

「お母さん、その陰険な態度をやめてください。僕の妻は、僕と同じように親孝行します。約束します」

と怒って言った。

「何の約束を守るって言うんだい。お前は、自分の女房をしつけることができるのかい？」

趙耀根は、

「僕は、もう子供じゃないんだ。この家の主になったんだ。一生懸命話をしたけど、お母さんは聞いてくれないじゃないですか。僕が、これからこの家でどのように過ごすのか、話をします。僕には家のゴタゴタに構っている暇などありません。やらなきゃいけないことが沢山あるんです。三日後に僕達は引っ越してきます。だから、部屋を開けておいてください。僕と江暁歌は、この家に住みます。彼女は嫁としての務めを果たします。だから、お母さんは人生の先輩として、手本を示してください。一日中あれやこれやとくちばしを挟むことはやめてください。口汚くがみがみと罵れば、末代の笑いものになりますよ」

と荒っぽく机を叩いて怒鳴った。母親も、

「そうかい、結婚して数日しか経っていないのに、女ギツネの化け物にそそのかされたんだ。私には手に負えない代物だし、逃げおおせないよ」

と同じように机を叩いて怒鳴った。

母親は、不意に趙耀根目がけて飛びかかると、爪を立てて趙耀根の顔を引っ掻いた。

「お前こそ、お母さんのために出ておいき。趙家には、お前のような子はいらないよ」

趙耀根は、母親の手を持ち上げて、力づくで自分の方に引き寄せた。

趙耀根は、母親の顔をじっと見下ろしていたが、だんだん彼の目は温和になっていき、愛情に満ちた眼差しに変わっていった。

「お母さん、僕たちはどうであれ、とに角結婚式を挙げました。僕はお母さんの子供として、お母さんに良い暮らしをしてもらいたいのです。お母さんは、女手一つで僕達兄弟を育ててくれました。これは、そう簡単なことではなかったと思います。お母さん、お母さんは、僕のために、住みやすい家を提供してくれるだけでいいんです。僕に良い仕事をさせてください。そして、出世させて幹部にさせてください。僕が出世してこそ、趙家は発展するんです。お母さん、わかってくれますね」

母親は、次第に気が弱くなっていった。そして、趙

耀根にもたれ掛かると、泣きながら、

「もし、これから、お前の嫁さんが私を馬鹿にしたら、耀根、助けておくれよ」

と哀願した。趙耀根は、母親の肩をたたいて、

「お母さん、安心してください。僕が馬鹿にされたって、お母さんを馬鹿にするようなことはさせません。お母さんを馬鹿にする勇気のある人なんていやしませんよ」

と言った。

（二）

趙耀根の乗った電動カートが、倉庫の奥まったところから出てきた。彼は車の一番前に立ち、手でハンドルを握って、余裕を持って仕事に当たっていた。電動カートに乗ると、埠頭のいぶきが心にしみ渡たった。

趙耀根は、この仕事が気に入っていた。港埠頭の会社の中では、趙耀根の仕事は良い仕事で、誰もがやりたくてもやれるものではなかった。

彼の前方に突然、黒い影が一瞬ちらりと動いた。彼は、大急ぎでブレーキをかけて、威勢よく言った。

「死にたいのか」

言い捨てた後で、彼は様子がおかしいことに気づいた。十数人の人間が彼の前に立ちはだかって、敵意を抱いて彼を見ている。頭となっているものは、彼が共産党青年団で処分したことがある奴だった。趙耀根が彼を処分したために、会社の幹部は彼を埠頭の仕事に左遷し、運搬工を担当させた。運搬工は最もきつく、耐え難い職種であった。彼はどうしても我慢できなくなり、背水の陣で戦いに挑んできたのだ。

趙耀根は、

「みんな、私は勤務中だ。騒ぎ立てちゃいけない。君達は知るべきだ。共産党青年団は、新しいポストに就く権力はないんだ。私も青年団の処分のために、君達の職種に影響を及ぼしたくないんだ。わかってほしい」

と弁明した。

彼が趙耀根と話し合いができるはずがなかった。彼が手を前後に振ると、この一団は趙耀根と彼の乗っていた電動カートを取り囲んだ。

趙耀根は、とっさに妙案を思いつき、

「本当にケンカをしたいのか。みんな、大の大人だろう。もし、君達がケンカをして勝てなかったらどうするんだ」

と言った。彼は、重い口を開いて、

「ケンカをすりゃ、無実の罪にケリがつくぜ。誰が勝とうが負けようが、終止符が打てるというものだ」

と言った。

趙耀根は、

「わかった。それじゃ、お付き合いさせてもらおうか。

でも、ケンカのルールを言っておく。ケンカするなら、一対一だ」

と応戦した。

「ルールは、趙耀根、お前に教えてもらわなくてもわかっているさ」

趙耀根は、長江のほとりの砂浜を指した。

「約束した以上、反古にするなよ。砂浜へ行こう。ここは、大切な仕事場だからな」

その砂浜は、二つの埠頭の間に広々と横たわっていて、長江が流れ、大型のポンポン船や小舟が行き交い、川面をアジサシが旋回していた。

趙耀根は、その一団を引き連れて、からだを揺れ動かしながら歩いて行った。真っ直ぐに長江のほとりまで歩いてきて、長江の水が、彼の足をなめそうになったところで、やっと降り返ると、しっかり立ち、狂気に満ちた一団に対した。

趙耀根は、さっと手足を動かし、とんぼ返りをし、元の場所に静かに着地した。

「来いよ。お前達二人一緒にかかってきてもいいぞ」

この連中は、趙耀根の離れ技にびっくりして、ポカンとしてしまった。彼らは、一瞬ためらったが、突然おおぎ型の布陣で、趙耀根を取り囲んだ。彼らの中には、袖口から突然、鉄尺を引き抜く者や、スプリングの鞭を取り出す者、それに、左官用のコテを出して見せる者もいた。スプリングの鞭は、趙耀根の前で、毒蛇が舌を出すように伸縮自在に踊った。彼らは、一対一の口約束を別に守るでもなく、武器を高く上げて振り回し、どっと、なだれ込んできた。

趙耀根は、左右に身を翻したが、防戦するだけで切り返す力もなかった。

趙耀根の身に危険が差し迫ったとき、張喜が、数人の青年労働者を連れて、大声で叫びながら突進してきた。彼らは、あらゆる武器を持って彼らに立ち向かって行った。一時間あまりたっただろうか。武器が飛び交い、血が飛び散り、大声で泣き叫び、彼らは、総崩れとなって蜘蛛の子を散らすように逃げていった。

砂浜にひとり横たわっている者がいた。顔中鮮血で誰だか見分けがつかないくらいで、既に気を失っている。自分の仲間を調べると、全員無傷で、砂浜に横たわっている人間は、どうやら相手方に属していた。みんなあっけにとられ顔を見合わせ、どうしてよいかわからなくなった。

趙耀根は、

「こいつを誰が殴ったんだ？」

と訊いた。江暁鴎（江暁歌の弟）は、

「俺さ」

と答えた。彼は、手の中の大きなスパナを左右に振るった。

趙耀根は、びっくりした。

「お前か、お前がどうしてここに駆けつけてきたんだ」

「僕は、兄貴に会いたかったから来たんだ。張喜に待つように言われたので、彼のところで話をしていたんだ」

趙耀根は思案しながら、

「暁鴎、お前は急いで職場に戻って仕事をしろ。張喜は、電動カートを運転して、横たわっている奴を送って病院に行くんだ。そいつが死んでいるか生きているかにかかわらず、俺が殴ったんだ。暁鴎は義理堅かったので、俺を助けるためにあいつに手を出したに過ぎないんだ。お前達はよく覚えておけ。彼らは、仕返しをしに殴ってきた。俺は自衛したんだ。誰も、暁鴎を見ていない。暁鴎は、ここに来ていなかったんだ。暁鴎、お前は行くんだ」

江暁鴎は、

「耀根兄貴」

と叫んだ。

（四）

すべてを適切に処理した後で、趙耀根は自ら派出所に出向き自首した。彼は、状況をしっかり説明すれば、直ぐに、家に帰ってこれるだろうと思っていたが、まさか、銃口が自分に向けられるとは思っても見なかった。

社会では、今、悪事に素早く対応し、厳しく取り締まる運動を展開しているところだった。街では、鼻血を出すくらい傷つけた人を短期間拘留した。各派出所では、犯罪者をつかまえる指標を持っていて、趙耀根は、自らその網に掛かってしまった。

趙耀根は一晩中帰ることもできず江暁歌は眠れぬ夜を過ごした。

江暁歌は、次の日の出勤の時、気がぼうっとして、デスクにうつぶせになって、夫が何処に行ったのか考えていた。彼女は、夫が、姑の家に行ったと思っていた。夫は、孝行息子で、近頃、実家に顔を出していなかったので、母親に会いに行くことも当然と言えば当然事だった。ただ、彼女は、前もって、実家に行くことを知らせてくれなかったことがおもしろくなかった。一晩中帰ってこないのだから、せめてひと言ぐらい言ってほしかった。

彼女の同僚の羅桂香は、大声で、彼女を呼んだ。

「江暁歌、あなたを尋ねてきた人がいるわよ」

江暁歌は、立ち上がると、羅桂香の顔色が変だと思った。江暁歌は、意味ありげな目で、羅桂香に目配せをした。江暁歌は、直ぐに、大きな災難が降りかかって来る予感がした。彼女が、デザイン工房をでると、廊下に思いがけなく、二人の警官が立っているのが見えた。思わず、ポカンとしていると、藪から棒に、何をしているのか尋ねてきた。

「江暁歌か？」
「そうです」
警官は、意味深げに、江暁歌を見た。その疑いを持った眼光は、江暁歌をびくびくさせた。彼女は、おどおどしながら、聞きたくもない話を聞いた。
「何かご用ですか」
「そうだ、用がある」
警官は、私情にとらわれない口調で、
「我々は、今、刑事訴訟事件拘留通知書を読み上げる。あなたのご主人、趙耀根は、ならずものとの殴り合いと、故意の傷害の嫌疑が掛けられ、もう既に、我々によって拘留された」
と言った。
拘留した？拘留したとは、いったいどういうことなのか。趙耀根は、中国共産主義青年団委員会書記だ。江暁歌が、うろたえて、無意識に振り返ると、数人の物好きな輩が、それぞれの事務所からのぞいているのがわかった。
江暁歌は、これで全てが終わりになったことを知った。大橋服飾工場での彼女の良いイメージは、崩れ去ってしまった。趙耀根は、勿論、彼女以上に悲惨であった。それは、趙耀根が、政治的にも彼女に比べて地位が高かったからである。拘留されると犯罪者になるのではないか。ひとりの人間が、前科を持つと、その人が一生どんな良いことをしても、身の潔白を証明することができなくなるのだ。江暁歌の脳裏にぼあんとした音が響いたかと思うと、その場で気を失いそうになったが、幸いにも、そばにいた羅桂香が彼女を支えた。
一人の警官が、
「ここにサインをしてください」
と言った。江暁歌は、
「何のサインをするのですか。私は、サインをしません」
と震えながら答えた。
警官は、強いて江暁歌にサインをすることを求めなかったが、拘留通知書を置くと義務的に江暁歌にこう言った。
「あなたは、彼のために、掛け布団、着替えの服、タオル、歯磨き粉等を届けても構わない。留置所の正確な住所は、書面をもって通知する」
警官は、言い終わると、ゴシゴシと手提げ鞄のファスナーを引っ張り上げ、鞄を脇の下に抱えて帰る支度をした。
江暁歌は、なりふり構わず、警官の腕にしがみついて、絶望の中で叫んだ。
「あなた方は、彼をどうしようと言うの。あなた方は、彼をどうしたいんですか」
羅桂香は、

「あなた方は、何故、趙耀根を拘留するのですか」
と冷静に尋ねた。
江暁歌は、気が動転していて、夫が何故拘留されたのかさえもはっきりわからないことにやっと気づいたが、警官の姿はとっくに見えなくなっていた。

（五）

趙耀根が、拘留された知らせを聞きつけ、寧岸は、直ぐに、長江のほとりにある新居に急いで駆けつけた。江暁鴎（江暁歌の弟）は、寧岸より、ひと足早くここに来ていた。江暁鴎は、事の顛末を説明し、自分を責め、姉に謝罪した。趙耀根は、江暁鴎に代わって罪をかぶったのだ。しかし、江暁鴎が人を殴ったのも、趙耀根を守るためだった。ひとりは、自分の夫であり、もうひとりは自分の弟だったので、江暁歌は何も言えなかった。彼女は、言うべき言葉も見つからず、ただ、頭を抱えるだけでひとり涙を流した。
結婚したばかりなのに、降ってわいたような災難に出会い、自分の哀れな運命に、江暁歌はため息をつくだけだった。寧岸が来たので、江暁歌と江暁鴎はばつが悪そうだったが、寧岸は、
「今、一番大切なのは、趙耀根を救うことだ」
と忠告した。江暁歌は、いぶかりながら、
「どうやって彼を救うの？公安局に、裏から手を回すことができるかしら」
と寧岸に尋ねた。江暁鴎は、
「勿論さ、姉さんはどうしてそう単純なんだ。コネさえありゃ、裏から手を回すことはできるんだ」
と言った。寧岸は、
「そういう意味ではないんだ。大切なことは、耀根の状況が深刻であるか否かを判断することで、道理から考えれば、彼は自衛したんだ。自衛が過失だったかは、重要なことではないはずだ。耀根は、運が悪すぎた。丁度、厳しい取り締まりキャンペーン中だったんだ。人に頼んで、何か方法を考えなければならない」
と言った。江暁歌は、
「じゃ、早くしなければ」
と気をもんで言った。寧岸は、
「このような状況に、僕は初めて出くわした。経験も不足している。僕はできるだけ方法を考えたい。しかし、みんなの叡智を結集して、心を合わせて協力することが一番大切なんだ。暁歌は、今は、やはり趙家に戻るべきだと思うよ」
と意外にも冷静に答えた。
江暁歌は、目に涙をいっぱいためていた。彼女は、彼の実家に行きたくなかったのだ。彼女は、母親が、必ず自分につれなくすることぐらいわかっていたのだ。しか

し、江暁歌は、寧岸の話を理解しようとした。彼女は、普段姑と行き来しなくても良かった。しかし、このような肝心なときには、姑と困難を共に切り抜けなければならなくなった。それに、趙耀根は監獄の中で、当然、母親や弟、妹のことを心配している。こんな時、妻として、彼に代わって、彼の家族を慰め、面倒を見る責任があった。江暁歌は、寧岸の考えが、きめ細やかなことに思わず感心した。そして、決心して応えた。

「わかりました。私は、彼の実家に行きます」

江暁鴎は、

「姉さん、あなたのやろうとしていることは正しいです。そうすれば、寧岸兄貴が、両家をかけずり回らなくて済むし、趙家のお母さんも、きっと、寧岸兄貴が頼りなんだ」

と言った。

江暁歌は、寧岸をじっと見つめた。彼女は、また、自分が、寧岸に深い愛情の借りを作ったと思った。

寧岸は、趙耀根や江暁歌の良き友人であったが、彼らのために何かを犠牲にし、多くを投げ出していることを江暁歌だけが一番わかっていた。しかし今は、寧岸だけが、彼女のために適切な援助ができ、彼女も彼にすがらなければならなかった。

感情のもつれは、奥深いところまで達し、ただ、苦くて渋いだけで、江暁歌は、愛の複雑さと苦しみを身にしみて感じた。

（つづく）

ノンキャリで首が長持ちする方法

早稲田・京橋編

中山喬央

青山南寮時代

目が覚めたら隣にS君が寝ていた。

丁度今から五十年前の事である。

ここ青山南寮は渋谷の宮益坂を登り、青山南五丁目のモダンなスーパー紀之国屋の前を右折して、小原流会館を通り過ぎた直ぐの都電南青山南六丁目駅の左側にあった。

六畳の部屋に二人づつ入居する室で構成され食堂、大浴場付き、収容人員八十名の大型独身寮である。

相部屋の彼は栃木県出身で、古武士のような風格を持ち、とても立派な字を書く渋みのある男で、パートナーとしては最高の人物だった。

私のような、ノンベで我の強い男と一緒で、定めて迷惑をかけたことと思っているが、相変わらず文通は続いている。

寮は、渋谷・銀座共に、地下鉄を利用すればすぐに行くことができる、田舎者が東京に馴れる為には最高の場所にあった。

既に年は二七歳を過ぎ、年長者が殆どおらず、まわりの人達が気を使ってくれるという極めて恵まれた環境であり、結婚するまでの三年五ヶ月間お世話になった。

早稲田支店

勤務する早稲田支店は、今は新目白通りとなった表通りに移っているが、当時は早稲田の都電停留所の所を江戸川橋からくると右に入り、高野という質屋の隣にある、小型の店舗であった。

仕事は支店長席で、たまたま前任者が家業を継ぐため退職したので、その欠員補充としての人事異動だったのである。

先ず業務推進部に毎月提出する営業月報を書く仕事が割り当てられた。

そこで店のお取引先を、山と川これは大口取引先、柳屋ポマードと全音楽譜出版社のことであるが、それと早稲田大学、百万以上の大口融資先、及び一般取引先の五つに分け、特に一般取引先の預金残高がどのような推移を示しているかを算出したところ、大変面白い事が分った。

すなわち当時は池田首相が唱えた所得倍増の時代であり、それを反映して、一般取引先の預金残高が年々確実な増加をしていたのである。そのお得意様層の住いは、神田川にはりついたアパート群の居住者が圧倒的に多く、業績伸展の大きな基盤となっていることを理解した。

要は都心に出る為には神田川にかかっている豊橋（ゆたかばし）を渡らなければならない人達が、その橋の袂にある最も便利な金融機関として、利用してくださっていたのである。

分りやすく言うと、川に魚が泳いでいるが、水流が狭くなったところがあり、そこに網をはれば、間違いなく魚が入ってくれる、そういう場所に店舗が立地していたのである。

だから営業のポイントは一旦普通預金に入金された預金を、外に逃がさないようにする為に、定期預金への振替をいかに勧誘するかと言う事を、先ず考えることが出来た。この振り替え作業は、先輩諸氏も既に行っておられたが、お客様の資金運用の選択肢を狭めることになるので、金利が高いといっても、必ずしもスムースに行われるものではなかった。

しかし取引先層、経済情勢、立地条件等を分析した結果に基く行動は、人に言われたことをただ単に盲従して行なうというのとは違って、自分で樹てた理論で裏付けされたものであるだけに、交渉には迫力が伴いお客様の心を揺り動かすものがあったようで、それなりの実績を挙げ、先輩からも一目おかれるようになった。

先輩が交渉しても定期預金に振り替えてくれなかったお客様のなかから、大口の定期預金に加入してくださる方が出て来たからである。

一方早稲田支店は、新宿・豊島・文京の三区の結節点に位置し、区ごとに特色があった。すなわち南方新宿区側には早稲田大学のキャンパスとか、それに付属する商店街があり、一方北側の豊島区は神田川沿いの低地に立地する工場群、ここは江戸時代には神田川を利用した染色業が栄えた処であったが、それに加えて都心に通勤するサラリーマンのアパート群があった。そこから直ぐに目白通りに向けての急坂を登ると、その途中で文京区目白台に地名が変る。その目白台、隣接する関口台町は、かの有名な目白・田中御殿とか細川侯のお屋敷、鹿島建

設の会長宅、講談社の野間社長宅及び日本女子大等が存在する文字通り高級住宅地と文教地区である。更に道を東に進めば音羽通りを超えて小日向台町となり、此処も音羽御殿を始めとした高級住宅地を形成していた。

早稲田支店の絶対的な地盤は、先にも述べた通り、豊島区高田豊川町という、神田川沿いの低地と、早稲田大学周辺の商店街であって、東方一キロには三菱と富士の江戸川橋支店が存在していたから、これ以外の地域は距離的に近くても、人の流れが都心に向かっており取引していただくには、特別なサービスを提供するより方法がなかった。

そこで店勢一層発展の鍵は顧客取引先層の多様化、すなわち従来弱かった高級住宅地及び中小企業群の取引をいかに拡充させるかということにかかっていると考えた。

そして高級住宅地への飛び込み勧誘と、当時漸く盛んになりつつあった貿易を営む企業のニーズに応える為の、外国為替の知識サービス提供による企業取引開拓とか深耕を思いついた。

外国為替については当時乙種であり、甲種の資格を持っている上位都銀に対抗する為、前にも述べたMさんの親友A氏が当時日比谷支店で外国為替担当代理をしていたので、助言を求めた。同氏の親切なご指導をいただき、甲種の銀行に負けない知的武装をして、積極的な開拓深耕に努めた。そこでニーズのあったM写真工業に対しては、直接担当役員をA代理に紹介し、アドバイスを受けさせたので大変感謝された。これが取引面に反映されたことはいうまでもない。

また具体的案件で、なかにはA代理も判断に迷うような事案もあり、そのさいは、直接日銀本店の担当者を紹介してもらってご指導をいただき、その結果をA代理に報告した。

この監督官庁訪問と直接情報入手の手法は、後の業務渉外部勤務時代にも生かす事ができ、文字通り題名の「ノンキャリで首が長持ちする方法」の根幹に結びつくこととなる。

すなわち最新の情報入手とそれを優良顧客層に伝達することは、監督官庁の担当者にとっても、自分が新しく出した方針が、その意図する通り、業界実務者に理解されているかどうかの判断指針となるものであり、都銀はそのような優良取引先層を持っているとの考えから、いやがらずにとても親切に対応してくれた。当時日銀では、一つの部門の担当者は一人で、その担当者が人事異動する時は一ヶ月程度重複担当させて、前者と後者の間で、変化が起きないように配慮していた。このような情報は全て恩人のA代理に報告した。

又、高額の日銀小切手の預入をして下さるお客様を獲得することもできたが、当時は高金利の時代で、日銀券の金額を経理部資金課に直接連絡し、即日本銀行本店に持ち込んで、一日分の金利を稼ぐということもやった。自分の給料の時間割計算をし、スクーターの燃費をたしても十分採算がとれると踏んだからである。

次につらい思い出に移る。

高級住宅地の開拓資料となったものに、株主票というものがあった。

当行が増資の取り扱い指定を受けた企業の大株主をリストアップして、営業店の担当区域別に仕分けしたものに基き、払い込みの勧誘をするようにという制度である。

前に述べたような高級住宅地が営業エリアにあるので、日本を代表する資産階級の連絡がくる。このうち政治がらみの音羽御殿と目白・田中御殿は敬遠したが、細川侯のお屋敷とか鹿島建設の会長宅を筆頭に、浜松のやらまいか精神を発揮して軒並み個別訪問した。

そのなかで、なんと株主票でくる各社の持株数が綜合三位を占める小日向台町のお屋敷の奥様が取引をしてくださったのである。当時は珍しくなったお手伝いさんもいるお宅である。

それで早速K次長にお願いしてお礼に同行訪問していただき、上がりこんで美味しいお茶を、九谷焼と思われる大変薄手の上品な器でご馳走になった。

何度か株式の払い込みをしていただいた後、奥様から株式払い込み資金融資の相談を受けた。

十分な担保価値のある有価証券を担保に差し入れて下さるとの条件であるから、全く問題のない案件と判断し、帰店してK次長に相談したところ、ゴーサインがでないのである。結局この案件不成立により、少なくとも奥様よりの、いざという時頼りになる銀行という思いは消滅したようである。取引は次第に疎遠となり、自分の転勤と共に消滅することとなる。

此処で思い出したのが、かって前任店で硬骨だったM次長の株式払い込み融資案件を持ち帰った時の対応だった。

それは担当していたT興業が増資をした時のことである。或る日同社を訪問すると、商工会議所の会頭をしている社長が、増資の払い込み資金として、お前の銀行の金を借りてやってもいいぞと話しかけてくれたのである。

すぐさま店に帰り、M次長に報告したところ、即座にY支店長の了解をとり、同社に行って社長だけでなく、全役員の株式払い込み資金融資の話を纏めてきた。

それで今度は交渉をして株主名簿を見せてもらい、大口株主に払い込みを勧誘して回ったのである。

その結果大半の株主の取引行であった静岡銀行を凌駕する取り扱い実績を挙げる事ができ、手数料も多額のものを頂くと共に、失権株も極小数に留まり同社の増資は大成功したのである。

収益面で寄与したのみならず、取引銀行の役割の重要性も認識することができた同社増資の最大効果は、協和は頼りになる銀行だという風評が浜松の、特に夜の街に広がった事である。

何か起業しようという計画があった時とか、大型の設備投資をしようと思った時、取引銀行とか借り入れ銀行をどこにするのかが経営者にとって大きな問題となる。その際経営者は往々にして先ず自分が最も信頼する人物に相談する。その結果が必ずしも従来の取引銀行ではないところに落ち着くことが多い。しばしば既存の取引銀行が全く知らないところで計画が進められるから、特に地方都市の場合、地元経済界よりの信頼感有無がメイン取引行を決定する大きな要因となる。

これは後に勤務した岐阜支店でよく分ったことであるが、銀行にとって最も大切なお取引先層というのは、税金を継続して納めながら、経営者も社員も一丸となって、企業のあるべき姿、すなわち世界に通用する技術力であるとか、特殊分野における絶対的な基盤を形成しながらも、それに甘んずることなく日々革新を行ない発展前進しているところであって、銀行のいいなりになるような安易な経営をしているところとか、ましてや銀行を利用して甘言で多額の融資をひきだそうとしている一発屋、言葉を変えれば虚業家ではない。

それは企業を経営する社長の人格に最も良く現われる。その社長を取り巻く一族・友人や、過去の行いを最も良く知っているのが、地元経済界の眞の実力者であり、その方々の信頼を得る事が出来るか否かが、やがては都市銀行支店の命運を決することになると思う。

早稲田支店K次長の対応は、あまりにも残念であった。間もなく同氏は九州H支店支店長として栄転されるが、次に入ってきた知らせは、自殺したということであった。

暴力団がらみの融資案件に引きずり込まれ、断れなかった為の悲しい結末となったようである。同氏には通学中のお子様もおられ、経済的に大変だということで前任店でもあり、皆で話し合ってお見舞金をご遺族に差し上げる事となった。

このようなことが起こったからであろうか、それから暫くして、行員が不慮の災害等に遭った場合に備えての保険制度が成立した。

話をもとに戻す。小日向台町のI家の奥様は融資不調があったにも拘らず筆者を見捨てなかった。

ある時、学歴を尋ねられた。正直に田舎の高卒ですと答えた。奥様には学歴社会で働く低学歴のものに対するいたわりのようなものが感じられた。「ああそうだったの」とだけおっしゃった。

それから三年後、地方出身の高卒としては、第一選抜で支店長代理に昇格し、ほど遠からぬ本郷支店に勤務していた時、支店長から取引先の証券会社の支店長を、お得意様に紹介するようにと言われ帯同訪問したら、気持ちよく逢ってくださった。

証券会社支店長はこんな豪邸は初めてだといってびびってしまったが、自分としては心の中で、奥様のお陰で、最下級ではあるが、役席に昇進できたことの御礼の報告としたのである。

このI家の奥様との交流は、その後一年二ヶ月という短期間であったが、田園調布・尾山台・等々力・上野毛を営業エリアに持つ等々力支店長を拝命した際、大いに役立つ事となる。

学歴の話が出たので二つほど思い出を述べる。

先ず昇給である。当時入行後初めて、四年後に入って来た大学出と昇給に差ができた。それは高卒同期が逸速く教えてくれた。

次は早稲田大学での出来事である。

在任二年二ヶ月のうち、最初の一年間は中小企業と営業エリアのうち、根幹を形成していない、やや外側の区域を担当したが、先輩が転勤し、早稲田大学・全音楽譜出版社という文字通り店勢を左右する取引先と、金城湯池である高田豊川町も担当することとなった。

早稲田大学は第一銀行をメインバンクとし、以下富士・三菱・協和を主要取引行としていたが、当然他行は全て早稲田大学の卒業生を担当者としている。

だから小生も早稲田の卒業生と先方は考え、貴方誰のゼミだったのと聞いてくるのである。これには困った。勿論当行でも早稲田支店配属行員の出身大学は皆、早稲田大学で、年末恒例のクリスマスパーテー打上げは、早稲田大学校歌を全行員で斉唱して会を閉じるのであるが、その時適齢期の早大卒が貸付係のチーフとなり担当から外れたので、代わりに高卒の小生が担当することになったのである。

ただ協和は早稲田大学を高卒ごときに担当させるのかと思われるのを恐れ、田舎の名も無い大学ですからあえて学歴は申上げられませんといって逃げた。

高卒の学歴がかえって武器になったのは、五十歳を過ぎた頃からで、五五歳を超えた後の五年間は文字通り活用することができた。

何故かと言えば、お客様はすべて大学出であり、そのく違う環境の店であるだけに、まさか実現することはないだろうと思っていた。期待はしたが当てにはしなかった。そのような事例を聞いたことがなかったからである。

ところが本当に異動の辞令が発令されたのである。忘れもしない昭和三八年七月初めの事である。

上京して最初に勤めた早稲田支店の界隈は、その後人生の三分の二を過ごす事になった首都圏での私の故郷になり、特に六五歳以降は十年以上継続訪問している地となるのであるが、この時はそのようになるとは全く思っていなかった。

京橋支店

着任した京橋支店は名門支店として、行員の誰もが一目置く店であった。

しかもY支店長は、小生に富士写真フイルム、鉄興社、日本製粉、日本信号、片倉工業という大企業群と、東邦生命、日産生命の本社を含むエリアの担当を命じた。

これは支店長席六名中、第二位の顧客層で、同時に着任したK大出Yさんのそれを上回るものであった。

直ちに七月十五日の創立十五周年記念日に向けての預金獲得交渉が始まった。

様々な出来事が身のまわりを通り過ぎて行く時、浜松支店当時、大変お世話になったY支店長が京橋支店長に栄転された。

それから間もなく当時の上司から電話が入り、そのY支店長の会の事務局をやれと指示された。

当時の京橋支店は、都心の融資店舗として銀行内で鳴り響いていた店であるから、その支店長の会ということで、遠く大阪から支店長をされていた、かってのM次長が駆けつけたのを始め、心の拠所としているMさんも都内の大井駅前支店の代理であったが参加してくれた。

その席ではMさんに、紹介していただいたAさんから親身になって外国為替のご指導をいただきながら実績を挙げていることを喜んで聞いてもらう事が出来た。

ところがその会合の席上で、雲の上のような存在であったY支店長から直接声をかけられ、今京橋支店で従来主力取引先を担当している有能な行員が複数人事異動時期に入っていて、後任の人物を探している。もうすぐ銀行創立十五周年業績躍進運動を行なうのだが、お前やってみる気はあるか、と聞かれた。

咄嗟に「やる気があります」と答えたが、従来とは全方々に優越感を持たせることが出来たからだと思っている。

自分が担当している先の、店内における融資シェア・預金シェアは分っており、店全体の計画も明示されているから、最低でも自分のシェア以上の実績を挙げなければならない。失敗は許されないのである。

交渉相手も当時は取引銀行からの円滑な資金調達が企業の命運を決する銀行床の間時代であるから、それぞれの企業内で選りすぐりの人材を当てている。

当時はこんな事が言われていた。無茶苦茶な要求をして、それを相手に納得させなければ駄目だ。この男は間違いなく将来協和のなかで立身出世する人材だから、ここは無理をしても相手の言う事を聞いて恩を売っておいたほうが良いと。

いずれにしてもこちらが甘ければ、融資シェアに見合うメリットをとることが出来ず、より適切な対応をした他行の思う壺になってしまう。

何とかそれをクリアできたのは、浜松支店当時、S自動車を初めとした大企業群を担当した経験とか、営業時間終了後に特訓を受けた、業種別の将来性、当行との取引親疎、経営との繋がり等について基本的な訓練を事前に受けていたお蔭だったと思う。

その交渉がどんなに厳しいものであるのかを物語る話を紹介する。

共に二部上場企業であったが、財務の責任者が一社は精神に異常を来たし、一社はストレスからくる煙草の吸い過ぎであろうか、肺癌になったのである。

間もなく人事異動があり、一緒に赴任したK大出のYさんは貸付のチーフとして係り替えとなった。こちらは相変わらず支店長席としての日々が続いたが、若干余裕ができたので、数寄屋橋の野村證券にある有価証券報告書閲覧コーナーとか、前に述べた日本経済新聞・東洋経済新報に加えてエコノミスト等で、主に京橋支店取引先の情報を探り、気がついた点は、それぞれ貸付の担当者に連絡をしていた。

その時、思いもかけなかった事態に遭遇する。

それは京橋支店に同時着任したK大出のYさんが、関西地区の役席となって栄転する際、後任にT大卒のK氏が発令され着任していたのにも拘らず、貸付のチーフを中山にといって直接W支店長に交渉し、支店長もそれを認めて、何とT大卒のK氏が、小生の後任として富士写真フイルム以下を担当する支店長席となり、自分は従来の訪問先に加えて、優良企業群である明治グループをも担当する貸付のチーフに抜擢されたのである。

ここで銀行員として生活した四二年間のうちで、肉体的にも精神的にも最大の試練に出会った。

直ちに五日間で富士写真フイルムの四億円の貸出稟議書を提出しろという課題である。当時協和銀行の総預金残高が三千億円時代の話である。

誰も何も教えてくれないから全て自力作成である。

先ず、前任者の稟議書を読み、自分なりの考えを打ち立てて会社に資料を請求する。これで先方からもどのくらい出来る奴か品定めされる。次いで国内の競争相手である小西六写真の業績推移、世界最大最強のイーストマン・コダック社の動き、ヨーロッパのアグファ・ゲバルト社の動向などの最新情報を集めた。後者は担当していた大沢商会が製品の日本への輸入を取扱っていたので、相互の技術水準とか日本国内での営業力等につき、一応の知識を有していたので助かった。

後は有価証券報告書に基づく、連続貸借対照表と連続損益計算書の作成と検討である。特に連続損益計算書は、企業の業績推移を把握し易い資料であり、時には粉飾を見つけることもできるものであるから、入念なチェックが必要である。

富士写真は、この分野において日本を代表する優良企業であり、取引を強化していきたい先であることは異論がでる余地はないと判断したが、後は一番肝心の融資シェアに見合う取引メリットがとれているかどうかという問題である。

これについては支店長席として担当していた時からの課題であり様々な交渉をしていたが、外国為替は依然として乙種であり、当社は外為取引を東京銀行に集中させているので、簡単に事は運ばない。

そこで考えたのが、協和銀行京橋支店を決済場所とする当社手形の発行を増やしてもらう事であった。特に優良子会社への発行手形に、継続して支払い場所として指定してもらい、その子会社との取引開始を営業エリアにある店に依頼した。これは成果があがり、京橋支店を決済場所とする同社手形の割引も採択されるようになって同社よりの信頼も得る事ができ、稟議書が書きやすくなっていた。

結論をいうと、何とか五日間で書き上げ、金曜日の夜、支店長印をいただいて、審査部宛書類を発送した

どうやらかっこうをつけたのである。当時は新婚直後であったが、幸いにも丁度月二回の土日連休制度が始まっていてそれにぶつかったので二日間の休養をとることができた。体は疲れ果てて土曜日は食事にだけ起きて、後は一日中寝るばかり、翌日曜日の午後になって漸く体調が回復した。

これから後、更にハードなスケジュールを消化する時があったが、一たび試練を乗り越えた体は、それに馴れ

たようで今日迄、体はもっている。丈夫な体に生んでくれた亡き両親と、永年支えてくれた老妻への感謝の念で一杯である。

この店には二年六ヶ月ほど在任したが、後半は事務行員のリーダー的な役割を任されるようになり、組合関係の職場委員及び、当時は珍しかった生バンド入りのクリスマスパーテーとか、支店長を含む役席のみ別行動のゴルフコンペを包含する旅行を企画する等、京橋支店主要行事の幹事役を勤めたりした。職場委員として知己を得たのが、隣の八重洲通支店のFさんであり、彼とはその後、四世帯の家族寮で一緒になるなど縁があり、いまだにご厚誼を頂いている。

話を戻す。

貸付係というのは普通店内で事務をしている所に企業の担当者が説明にくるポストである。

しかし企業側の本音を聞き出すには相手先を訪問する方が、先方も話しやすいし、またこちらは相手企業のオフィス内の雰囲気、社風というものを肌で感じることが出来ると考え、特に明菓・明乳・明商・明糖・日甜等明治グループは支店長席として担当していなかったので、貸付仲間の了解をとって、極力時間をつくっては訪問し、各種情報入手に努めた。

なかでも明菓の課長は、その後、社長になった傑物であるだけに、さしで美味しいコーヒーを飲みながら話す機会を持てたことは幸せだった。この時脳裏をよぎったのは、浜松支店で給付補填備金貸付を担当した際、チーフO氏の御陰で、繊維業界やり手の信友支店長を訪ねて会話をかわしたことであった。

この経験で得る事ができたことは、どんな肩書きを持っている人物でも、どんなに優れた人物でも、都市銀行行員の資格で訪問すれば、真面目に対応してもらえる。そのさい少しでも会って良かったと先方に思わせることが出来れば、必要な際は面会していただけるということで、これも題名の「ノンキャリで首が長持ちする方法」の根幹に結びつく事だと思っている。

このようにして貸付の仕事も半年が過ぎると、稟議書の作成が一巡し、ポイントが絞りやすくなる。業界の内部情報等をお得意様から丁寧に教えられる一方、財務諸表の見方については、企業に出向しているOBから、実務家としてのアドバイスを受けることもあった。糖価安定事業法が新たに制定された時には、日本甜菜製糖、明治製糖の両社からレクチャを受けていたので、調査部の担当者から調査月報作成に当り、問い合わせを受けたが、詳しくその内情を説明することができた。

結果として、小生に都市銀行員として貴重な勉強の場を与えるよう異例の尽力をしてくれたYさんの期待にど

うやら応えることが出来たのである。

何時の間にか昇給とか賞与が大学卒の水準に復活していた。ところがこの頃、三年先輩の高卒だったFさんが、転勤間際に残した言葉を忘れることはできない。

君は一生懸命やって、認められたから良かったが、僕も周辺の店にいた時は、トップを走っていたのだ。それでこの店にきたのだが、お得意様の層も、店を構成する行員の質も全く違い、溶け込むことが出来なかった。その結果、昇給・賞与共に大幅に低下してしまったと。

或る日、中堅行員第二次研修会メンバーとして尚友会館に集合しろという人事部からの指示書が届いた。

早速貸付仲間に見せた。というのは何日間か留守にしなければならないからである。時あたかも年に一回は来るであろうと予測されている本検査の寸前で、その準備に全員で没頭していた時だった。

C大卒のKさんが、それを見て突如いった。「これは高卒の昇格試験ですよ。あんた英語弱いでしょう。勉強しなけりゃ駄目ですよ。」

それはあっという間に店内に広まり、こちらが貸付に入った為、後任の支店長席となったT大出のKさんが、これを読みなさいよといって『信用調査の要領』を貸してくれたり、英語のテストに備えては外為係のMさんから東通のLCコピーをもらったりした。

ただ本検査対策の業務は毎晩十時過ぎまで続き、勉強するのは、東京駅と武蔵小金井駅間の往復乗車時間だけである。

すでに高卒仲間でも役席に昇進する発令は行なわれていたが、この研修会は人事部が試みた最初の本格的行員能力テストだったようで、銀行員としての実務知識である、手形小切手法・財務分析・外国為替に加え、IQを含む一般教養問題のペーパーテスト、グループ討議等多岐にわたるものであった。

その結果、本検査も無事終了した直後、人事部から呼び出しがきた。

直ぐにW支店長と貸付仲間に報告して、床屋にいった。当時は役席への昇格辞令を人事部長から直接受け取る時、整髪をする慣わしがあったからである。

定められた時間に人事部へ出頭、次長のH氏におめでとうといわれ、仲人をしていただいた前任京橋支店長のH部長から直接辞令を交付された。

次長のH氏には、その後、八重洲通支店の支店長として仕え、部長のH氏には名古屋支店長として岐阜支店在任当時に、またお世話になるのである。

京橋支店での仕事仲間との交流はその後も続くのであるが、中でも支店長席として同じ区域を担当した前任のW大出Y氏と後任のK氏、及び着任と同時に共に支店長席として頑張り、貸付に引っ張ってくれたYさんとは、仕事面で様々な出会いがあり、目を掛けていただいた。

この後暫くは、順調に出世街道を歩むのであるが、その後「好事魔多し」の例え通り、二階級特落ちという左遷に遭遇するのである。

社告(内規)

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同士の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二

加入者名　まんじ

追伸 ―サウダージ― より その四

松下壽男

こでまりというのは

「こでまりさんって」いうのは
女房があなたにつけたあだ名です
「今時めずらしいむすめさん」と
不思議な縁を自慢します

「いい娘だろう、そうだろう」
お前より私にとっていい娘だと
ちょっといばって
安心しながら言うのです

「おまえみたいで」「まあ、かわいそう」
私と一緒になる前は
頑なで意地っ張りだったから

女房を花で呼んだりしなかった
でも確かにあなたは見合いの頃の女房に似て
遅咲きの蕾のようです

日本近代文学点描　その五

松下壽男

近代的狐像と疎外

♡お母さん狐は、「まあ！」とあきれました
が、「ほんとうに人間はいいものかしら。ほんとうに人間
はいいものかしら」とつぶやきました。　ごんぎつね

この「手袋を買いに」を含めて、新美南吉は、狐の世界を描いた作品を、私の知る限りで三つ残しています。郷里岩滑で書いた出世作の「権狐」、東京で書いた「手袋を買いに」、そして再び岩滑（現愛知県半田市）で死の三ヶ月前に書き上げた「狐」です。

南吉の描く物語の主人公の多くは、子供であり、村人です。ですから狐はまれなのです。しかし、そのまれな狐の作品が、人生の転機に指標のように現われているのです。

ひょっとすると南吉は、狐の物語を、心の中で大切に温めていたのかもしれません。

十八才で「権狐」を書きあげた南吉が、もし童話を書き続けようとしていたなら、たくさんの狐の物語が登場していたかもしれません。しかし彼は、童話を喜ぶ少年がやがて小説を愉しむ大人に成長するように、童話作家から小説家への転身を目指して習作を書き連ねていきました。しかしその目論見は失敗します。そして彼は、挫折の理由を徐々に自覚していくのでした。

一つは、彼の性格でした。生来の純真さに加えて、四才で実の母を失ったことから始まる複雑な生い立ちや、父親が副業に高利貸を営んでいたことなどが、負い目を秘めた彼の内気な優しさを限りなく研ぎ澄ませていたのです。

その作品を書きながら、南吉は、疎外されても思慕と償いの心をもって村人に寄り添う子狐に、自らを託して

いることを自覚していたことでしょう。こうして宮沢賢治以来の近代的狐像の系譜に連なって、「権狐」という新美南吉ならではの文学作品が誕生したのです。

二つには、戦争でした。病弱な彼が招集される心配はありませんでしたが、戦争前夜の世相や文化は、彼にとっては一層生き難いものでした。まっとうな小説家であるためには、「ペンは剣よりも強し」という気概を必要とした戦前戦中の文士の世界に、彼は、自分の居場所を見出さなければなりませんでした。

小説家になろうという志を秘めて外国語学校の学生として上京した彼は、まるで手袋を買いに町に出た子狐のようでした。しかも彼は、東京でも、岩滑以来の手法から抜け出せず、小説家にはなりきれません。それでも彼は、中央で、新進童話作家の一人として認められることができました。それは小説家を志す彼にとっては成功と同時に挫折を意味するものなのです。

さらに世相は、童話作家からも自由な活躍の場を奪い始めていました。一つ一つ掌を返すようにして自由を認めなくなる人間社会に対する不信感。冒頭の、子狐の手でお金を払っても手袋を売ってもらえたことを訝しむの母狐の呟きもまた、南吉自身の問いだったことでしょう。

挫折の三つ目の理由は、彼の体を蝕む結核でした。学校を卒業して、東京の商社に就職をしたにもかかわらず、彼は療養のために帰郷せざるをえなくなります。そして失意の中で安城高等女学校への奉職が決まります。挫折した彼は、すでに宿痾となった結核と、文筆と、教職の三者と上手に付き合いながら、生き辛い世相をストイックに生きていく道を選びます。すでに彼は、半田や安城の田舎町では知る人ぞ知る文学者であり、教え子や周囲の人々も、彼を温かく支えてくれるのでした。

こうして、挫折が彼に居場所を与えました。戻ってきてしまった生まれ故郷の村が、そして教員として日々接し、本人もどこか抜け出せずにいる少年時代が、彼の物語の舞台になっていきました。そこを視点に定めた彼は、日々住みにくくなる世相を見据える道を拓いたのです。そして自分を貫いたり、譲ったりしながらも、主体性を失うことのない大人の生き方や、それを純真に見守る子供の目が、戦時下の庶民の心や暮らしを、そこに行き着くまでの文明開化の光と陰を、見事に描き出すことに成功していくのです。

彼の成功は、故郷から離れられなかったことと、子供の視点でしかうまく描けなかったことによるのでしょう。ならば、それは皮肉にも、彼の挫折の成果です。しかも失敗作を書き続けてきた努力の成果なのです。彼は小説としては成功しなかった習作を通して、自ら「少年小説」と呼ぶ新たなジャンルの存在を自覚するに至ったのです。それは「久助君のこと」などの作品に結実しますが、それらは見事な子供の文化の自覚なのです。

見えないところで、確かに村人の一部もそこで戦っている戦争。その戦時下の生き辛い大人の暮らし。それを空気のように当たり前に感じながら純真にたくましく生きる子供の生活。このような戦時下の文化の重層構造を、純真な子供の視線で串刺しにするような彼の少年小説は、戦争迎合という大方の声を跳ねのけて、見事な文学だと私は思います。しかも何より、そこに描かれた子供の文化は、時代を超えて普遍的なのです。

昭和十七年、結核の腎臓転移による血尿を見て二十八才で死期を悟った南吉は、命を懸けた賭けに出ます。彼は、童話集を出してくれるという出版社と片っ端から契約を結びます。すでに学校で教え子の文集を刷る更紙にも事欠く時代でした。

彼の創作はまるで戦争でした。結核が彼の息の根を止めるか、それとも作品が間に合うか。彼は「おぢいさんのランプ」では、その戦いに勝ちましたが、「花のき村と盗人たち」と「牛をつないだ椿の木」は、死後出版となりました。

彼の遺した書き下ろしの童話は、少年小説の心理描写とはちがった、新たな境地を開くものでした。物語性を重視した、創作民話とも呼べそうなそれらのお話は、時代や風土を超えて受け継がれてきた日本の村のよさを描き切っているように思われます。そして「村というものは、心のよい人々が住まねばならぬ」という「花のき村と盗人たち」のお話の結びこそは、例の母狐の「ほんとうに人間はいいものかしら」という呟きに託した自らの問いに対する答えだったことでしょう。

しかし、絶筆の「狐」では、寝物語をする母子の想像の世界で、一家は狐になり、雪の中を猟師の犬に追われるのです。

「そしたら、母ちゃんは、びっこをひいてゆっくりいきましょう」「どうして？」「犬は、母ちゃんに噛みつくでしょう。そのうちに猟師が来て、母ちゃんをしばってゆくでしょう。その間に坊やとお父ちゃんは逃げてしまうのだよ」「いやだよ、母ちゃん、そんなこと。そいじゃ、母ちゃんがなしになってしまうじゃないか」「でも、そうするよりしょうがないよ。・・・」

疎外の人・新美南吉は、昭和十八年三月に、二十九才で、母が生き続けている永遠の異界へと旅立ったのです。

編集後記

今年ほど様々な体験をし、考えさせられたことはありません。

こういう時は原点に帰って「生命とは何か」「人間の尊厳とは何か」と言う事を熟慮してみることが肝要だと思います。

ここでゲーテを思い出しました。彼は皆様ご高承の通り、作家であると共に政治家・美術研究家であり動物学者・植物学者でもありました。そして透徹した眼で無心に動物や植物を描き、それから導き出した「生命とは何か」「自分の目に心に響くものは何か」を考えながら叙情詩や戯曲そして小説を書きました。だからその作品は、没後既に180年を経過しているのに未だに新鮮に我々の胸を打つのです。

これは彼が総合的に物事を判断する訓練を積み重ねていたから、珠玉の作品の数々を生み出す事ができたことを意味します。

翻って最近の我国の現状はどうだったのでしょうか。

社会全体が効率や成果を求め、すぐに結果がでることにしか興味を示さなくなっていたのではないでしょうか。

最近の出来事に対するその後の指導者の対応は、それからくる当然の報いではなかったのではないでしょうか。

「自分で考えて自分で答えを出す事」のできる環境の整備、「考える為の教養」を身につけることが出来る様にする、それは「生命」の議論をするための他の生物や地球環境とどう折り合っていくのか、様々な文化をどのようにして許容して生きていくのかということです。

これには歴史と文化全般に亘る幅広い教養と深い知識を持つ事が肝要で、本誌としても引続きその一翼を担って歩み続けます。

（T・N）

まんじ第121号

平成23年8月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　中　山　喬　央（なかやま　たかひろ）
事務局長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）

（事務局）〒223-0056　横浜市港北区新吉田東五丁目76-35　太田善朗方
TEL・FAX 045（544）5947
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　日東印刷株式会社
〒142-0054　東京都品川区西中延2-15-16

表紙の絵について
「豊饒の地は心の中にあり」　　田寺（たでら）怜葦（れい）画

まんじ

No.122

2011.11.1

まんじ第百二十二号　目次

関東管領始末記④　海路の日和……千坂精一……4
「日本太古史」について（その二）……三戸岡道夫……15
誠忠の茶園（九）……太田精一……28
懐郷記（続）……忠内正之……38
八つ当たり語録（三）……新井宏……43
流離の歌人　吉井勇……石黒修身……50
短歌　行雲流水（三十二）……石黒修身……56
短歌　三十首……曽根竣作……59
漢詩　潮騒録（六六）《漢詩の流れ55・清その四》……鯨游海……63
身代り（前篇）……堀内永人……66
目耕録（その五）……山本鎭雄……73
二八に帰るすべもなし（六）……伊治哲……81
イドと超自我の谷間で――ある女のあゆみ――……鍋屋次郎……88
公民館七館建立にかゝわって……勝山道子……100
東北地方太平洋沖地震と東日本大震災考……漆原直子……107
柳田松太郎氏のこと……吉田忠雄……112
（司馬雑感二十七）司馬遼太郎の美術観……山田嘉久……114
性と化粧（二）坊主の坊主頭（一）……鈴木守……122
口紅（その四）……池莉原作　山本勉訳……129
陰翳の美学（その七）……外山知……154
透明な時間（六）……宅見勝弘……174
ノンキャリで首が長持ちする方法　本郷・岐阜編……中山喬央……179
追伸　―サウダージーより―　その五……松下壽男……192
日本近代文学点描　その六……松下壽男……193
編集後記……編集子……195
表紙……田寺怜葦……

関東管領始末記④

海路の日和

千坂精一

一

大佛貞直、金澤貞將の両将と後醍醐帝が挙兵した大和笠置山城を攻略して鎌倉へ凱旋した足利高氏は、大蔵谷の自邸に籠もって得宗高時に出陣を命ぜられて中断してしまっていた父貞氏の喪に服した。

高氏の服喪を知らぬはずはないのに、北條一門の頂点に立つ得宗家総領の高時は、源氏の嫡流高氏を走狗の如く使うことによっておのれの権威を保とうとしたのだ。

高氏は朝廷軍との戦いを憚り、亡父の喪中を理由にして辞退したのだが、高時はきき入れてくれなかった。

高氏の悲嘆を承知で出陣命令を下した高時の非情な仕打ちに高氏は深く傷つくと同時に肚が立った。

高時は得宗家の嫡男に生まれ、十四歳の少年で鎌倉幕府の執権職に就いたが、在位僅か十一年で俄かの病いを理由に武家棟梁の座を放棄して二十四歳で出家した。

武人に向かぬ性格だったのか、高時は隠退すると闘犬と田楽に興じ、その熱中ぶりはまさに病的であった。

得宗邸では十日に上げず闘犬が催されたので、大名たちは血眼になって大金を投じ猛犬集めに狂奔した。

また、田楽についても大名たちはそれぞれに田楽法師を招いて高時の歓心を買おうと競演に夢中になった。

高氏は武人にあるまじき軟弱な高時に嫌気がさしていたので、いつか心はしだいに鎌倉から離れていった。

源頼朝を棟梁にいただいて武家政権の鎌倉幕府を樹立した関東武士たちも、弘安四年（一二八一）元、高麗軍の外寇、同八年（一二八五）北條執権と双璧の安達泰盛父子を斃した霜月騒動以来四十年内憂外患がなかった。

そんな太平つづきのうえに、武家の頂点に立つ得宗高時が武事を忘れて遊興に耽っているので、関東武士たちもいつか有事を忘れて平和惚けしてしまっていた。

そんなところへ、後醍醐帝が北條高時を討って政情を回復しようと企てた〈正中の変〉が起こったのだ。

そのとき、北條一門の大佛貞直、金澤貞將とともに出陣を命ぜられた高氏は、西国で朝廷を支持する新興勢力が凄まじい勢いで擡頭してきているのを思い知った。

数を恃んだ幕府軍がようやく鎮定したものの、その戦意はまったくちがっていて、小豪族の集団にすぎない朝廷軍ではあるが旭日昇天の勢いであるのに驚愕した。

高氏は、幕府の衰勢を感ずるところがあったので凱旋しての服喪中もずっとそのことを考えつづけていた。

亡父の喪が明けてしばらく経ったころ、高氏はこんどは体調を崩して病床に臥してしまった。

呼び寄せた幕府の薬師にも高熱の原因がわからず、

「たぶん遠征のお疲れが出たのでござりましょう」

ぐらいにしか診断してくれなかった。

だが高氏は、親の喪に服さぬは子にあるまじきことと祖霊の怒りを招き、その咎を受けての祟りかと悩んだ。

そして、無理に戦場へ引っ張り出した高時を怨んだ。

源氏の嫡流が三代将軍實朝で途絶えてしまったいまとなっては、つづく足利こそが源氏の嫡流であった。

ただしくは源義家の子義國の嫡男が新田義重で二男が足利義康なのだが、義重は頼朝の再挙に参戦が遅れたことから頼朝は義康のほうを重用して義重を疎外したので、いつか足利のほうが格上になってしまっていた。

代々源氏の再興を希い、六代家時は遠祖源義家が、

「わが七代の孫に生まれ代わりて天下を取るべし」

と置文したその七代目に当たっていたので再興を狙ったが、当時の北條執権は磐石でつけ入る隙がなかった。

おのれの非力を悔み、地団駄踏んだ家時は、

「わが命を縮めて三代のうちに天下を取らしめ給え」

そう置文すると、僅か三十五歳で自害してしまった。

高氏はこの話を母清子からたびたび聴かされていて、

(われこそが祖父家時の三代の孫である)

ことを少年時代から自覚して重荷になっていた。

体調を崩したことで思考のときを与えられた高氏は、あらためて源氏の嫡流であることに思いを馳せた。

すると、北條高時ごときに牛耳られている謂れはないことに思いいたり、高時への憎悪が募っていった。

(足利家は今日でこそ北條執権の膝下に屈しているが、もとをただせば北條の主筋に当たる源氏の流れを汲む名門なのだ。源氏将軍家の御家人であった北條執権がわれを走狗に使うのは不当である)

高氏はあらためて高時にそう反撥した。

そのころ、京では大きな動きがあった。

後醍醐帝の第六皇子で梶井門主の比叡山天台座主尊雲法親王が還俗して護良と改め、吉野で挙兵した。

戦死したと伝えられていた楠木正成が、河内の金剛山千早城に拠ってこれに呼応し、赤坂城を奪回した。

すると、播磨佐用荘（兵庫県佐用郡佐用町）の土豪赤松円心則村も護良親王の令旨に応じて苔縄城（赤穂郡上郡町）に挙兵、出雲の隠岐判官高貞らもこれに応じた。

幕府は楠木正成、赤松則村討伐に懸賞をかけて、河内路に阿曽沼治時、長崎高貞勢、大和路に大仏家時、工藤高景勢、紀伊路に名越元心、安東圓光勢を派兵した。

幕府大軍の猛攻を受けて赤坂城が陥落し、千早城の攻防戦が激化していき、吉野城も陥落した。

このとき大塔宮護良親王は、村上義光が親王の鎧を着て身代わりになり、包囲する幕府軍のまえで割腹して見せているあいだに虎口を脱して無事に高野山へ逃れた。

いっぽう隠岐へ流されていた後醍醐帝は、公家千種忠顕の手引きで配所を出ると烏賊釣り舟に潜んで島を脱出し、伯耆（鳥取県）の土豪名和長年（西伯郡大山町）に迎えられて船上山（東伯郡琴浦町赤碕）に遷座した。

両統迭立の約束を無視し、帝位独占を希んで島脱けまで敢行した後醍醐帝は、在世中に後醍醐と諡号して生涯その称号で通した稀有の帝であるが、そうした理由は摂政、關白をおかずに天皇親政を行ったことで〈延喜の治政〉といわれた醍醐帝のようにやりたいと志したのだ。

両統迭立というのはつまり天皇家内部の紛争なのであるが、戦前の学校では詳しくおしえてくれなかった。

ことは後鳥羽院が執権北條義時追討の宣旨を下したことにはじまるのだが、この倒幕運動は幕府の大軍に潰されて惨敗した。

幕府は後鳥羽院を隠岐へ、第四皇子順徳院を佐渡へ配流したが、このとき倒幕に反対した第一皇子土御門院もみずから土佐へ落ちていったので、三上皇配流という史上稀な結末になった。これが〈承久の乱〉である。

さらに幕府は順徳院の第一皇子仲恭帝に代わって即位歴のない後鳥羽院の兄宮守貞親王を立て、後高倉院として院政を執らせると、仲恭帝に譲位を促して後高倉院の第一皇子茂仁王を即位させて後堀河帝としたのである。

ここのところはまえに詳述してあるが、両統迭立の端緒になるところなので復習をかねてくどくど述べた。

後堀河帝のあとは第一皇子四條帝が僅か二歳で即位したが、十二歳のとき急な事故で崩御されてしまった。

四條帝に子がないところから皇継問題が取り沙汰され、順徳院の皇子岩倉宮忠成王が候補に上がったが、幕府は〈承久の乱〉の主謀者後鳥羽院、順徳院の系統を嫌って倒幕に与せず中立をまもった土御門院の系統から選

ぶよう介入して第一皇子邦仁親王を推すことを強行した。

後嵯峨帝になった邦仁親王は幕府の介入で図らずも皇位に即けたことに感謝して、幕府に好意的であった。

のちに執権北條時頼が皇族将軍を要求してきたとき、後嵯峨院は第一皇子宗尊親王の就任を承認している。

後嵯峨帝は在位四年で第二皇子久仁親王（後深草帝）に譲位すると、さらに十五年後には第三皇子恒仁親王（亀山帝）への譲位を促し、両帝の治世二十年にわたり〈治天の君〉として院政を布き、重要問題はすべて幕府に相談して決めるという穏やかな態度をとりつづけて融和を図った。

この皇位継承に介入したことによって、以後幕府は天皇の廃立にかならず干渉する即位指名権を握った。

〔天皇家略系譜〕

後嵯峨院は後深草より亀山のほうを愛していて、亀山に世仁親王が誕生すると皇太子に立ててしまった。

後深草と亀山の順で皇位を継いできたのだからつぎは後深草の熙仁親王で、そのつぎが亀山の世仁親王になるのが順序であるはずなのだから後深草は不満であった。

もうひとつは、亀山の皇子が即位して後宇多になると後深草を差し置いて亀山が院政を継いだことである。

後嵯峨院が薨去すると、後深草系と亀山系のあいだで皇位継承をめぐっての競い合いが激しくなっていった。

亀山系が亀山帝のあと皇子後宇多帝を即位させたので、正嫡後深草の皇子熙仁親王が継ぐべきと騒動になった。

亀山院は円満に収めようと幕府に収拾策を相談した。

執権北條時宗は妥協策をとって、熙仁親王を亀山院の猶子にして後宇多帝のあと即位させることにした。

こうして、ようやく後深草系が皇位を取り戻した。

後深草系は旧習を守る保守思想の親幕派であったので、亀山系のほうは革新思想の天皇親政派であったが、そのために倒幕王政復古を目指す風聞が絶えなかった。

皇位に即いた後深草系の伏見帝は、その噂を幕府に密告して皇位を独占しようと謀り皇子胤仁親王の後伏見帝即位を実現させたが、亀山系の巻き返しによって後宇多帝の皇子邦治親王に奪い返され後二條帝の即位になった。

そのあとは後深草系の伏見院第六皇子富仁親王が花園帝となって即位したので両系の交代皇位継承に戻った。

調停に手を焼いた幕府は、以後皇太子にすることと皇位を継承させることはともに両系の和議によって決めることとして幕府はいっさい干渉しないことを上奏した。

文保元年（一三一七）四月に提案されたこれを〈文保の和談〉というのだが、しかし拗れに拗れた問題だけに後深草、亀山両系のあいだに和談の余地はなかった。

そこで幕府は、亀山系の要求に沿ってつぎの東宮（皇太子）には後二條帝の第一皇子邦良親王を立て、そのつぎに後深草系伏見院の第一皇子量仁親王（後の北朝初代光厳帝）を立てることを提案して和談の端緒にしようとしたのだが、この案はまず東宮を立てる亀山系に有利ということで結局和議はひらかれなかった。

だが、後深草系の後伏見帝のあとを亀山系の後二條帝、そして再び後深草系の花園帝とかわるがわる即位したのだから〈両統迭立〉はすでに実施されたのだ。

両統というのは、のちに後深草系を〈持明院統〉、亀山系を〈大覚寺統〉と呼称したからいうので、補足すると持明院は京都市上京区上立売町付近にあった寺で、藤原北家中御門家の庶流がその持仏堂持明院に因んで名づけたものという。後深草帝が譲位後御所にしていた。

いっぽうの大覚寺は京都市右京区嵯峨にある古義真言宗の大本山で、もと嵯峨帝の離宮であったが淳名帝の皇后になった嵯峨帝の皇女正子内親王が寺としたあと親王

が入って門跡寺となっていたが、後宇多法皇が仙洞（上皇の御所）にしたあとは大覚寺統の皇統が入寺した。

大覚寺統は亀山法皇の遺詔（遺言）によって関東申次西園寺公衡が法皇の第三皇子恒明親王の立太子を画策したのだが、後宇多法皇は第四皇子尊治親王を持明院統花園帝の皇太子にしてしまった。のちの後醍醐帝である。

二

その後醍醐先帝が隠岐島を脱出して船上山へ遷座したことによって状勢が一変し、先帝の綸旨と親王の令旨が国中を馳せ廻って天下大乱の様相を呈しはじめた。

これらのことは藤原北家勧修寺流出身の上杉の許に京の公家筋から届いていたので、高氏も知っていた。

このとき宮廷の大番役で京にいた新田義貞は、大佛家時軍に取り込まれて大和道から紀伊道を進撃していた。

世が世なら源氏軍団の一方の旗頭として足利軍に勝るとも劣らぬ軍勢を指揮するはずの義貞が、いかに頼朝から疎外されてきたからとはいえ千早城攻めの大軍のなかにあってこの小勢では大佛軍と区別がつかなかった。

義貞は、三十一歳の青年武将であった。

義貞は、この千早城攻めに参加してその幕府軍の戦力の低下、あまりにも拙劣な戦いぶりに首を傾げた。

（この士気の衰退は末期的症状だ）

そう看て取った義貞は、その夜陣営に一族の大館宗氏、堀口貞満、由良國繁、一井政家それに老臣の船田義昌を集めて北條執権を見限る相談をした。

朝廷側に加担するには、先帝の綸旨なり親王の令旨がなければ信用されないので、重臣を船上山へ走らせなければならないのだが、伯耆は遠く、そのあいだに戦局がどう動くかはかり知れなかった。

そこで、吉野山を脱して高野山へ落ち延びたという護良親王の令旨を受けることにして、船田義昌が野伏に身をやつして陣営を脱け出すと、親王のあとを追った。

この策が成功して、船田が令旨を受けて無事に帰ってきたので、義貞は大佛家時に病気と称してその旨を届出ると、早々に兵をまとめて上野新田荘へ帰国した。

その後、播磨で蹶起した赤松円心則村軍を摂津で迎え撃った六波羅軍が破れて、幕府へ救援を要請してきた。

さきに出兵した大佛、名越、長崎、工藤らの軍勢は、千早城を詰の城として上赤坂城を本城、下赤坂城を前衛の城とする構えで再起した楠木正成に翻弄されて、赤坂城は陥としたものの千早城攻めに手を焼いていて、とても六波羅救援の軍は割けなかったのである。

そこで得宗高時は、六波羅防衛の救援軍に一族の名越高家とふたたび高氏を向けようと考えた。

幕府から出仕を命ずる使者が大蔵谷の足利邸に来たとき、すでに六波羅危うしを知っていた高氏は、

（うむ、きたな）

そう肚を括って使者に、

「体調がすぐれず、出仕御免の届を出してあるはず」

そう返答をして帰したが、ほどなく得宗高時から、

「非常事態ゆえいそぎ出仕されよ」

高時らしい有無を言わせぬ強硬な督促であった。

「兄上、わたしが参りましょう」

潔癖性の弟直義が代理出仕を申し出た。

「強引な得宗殿にひけをとらぬよういってまいれ」

「畏まりました」

得宗屋敷は幕府に近接した現寶戒寺の場所にあった。

高時の命令は、予期したとおり、

「名越高家と連合していそぎ六波羅防衛に出陣せよ」

であった。

「兄は心身に変調をきたしており、長途の出陣には耐えられぬ体調ゆえ、こたびはお赦しをいただいて療養につとめ、全快後は得宗殿のご期待に添うべく努めまする」

直義はそう釈明したが、聴き入れられず、

「直義、足利は幕府の藩屏であろうが」

「承知いたしております」

「ならばなにゆえ火急のときに出陣いたさぬ」

直義は返答に窮して、独断で、

「お許しいただければ、兄に代わりそれがしが軍勢の指揮を執って出陣いたしまする」

高時がそうせいと収めると思ったが、案に相違して、

「当主が陣頭に立たねば軍団の士気にかかわる」

そう語気を荒めた。

直義は、憤然として、

（ならば、得宗殿こそ幕府軍の先頭に立たれるべき）

胸を張ってそう叫びたいところを辛うじて抑えて、

「得宗殿のご意志を兄に伝えまする」

そう型通り平伏しておいて屋敷に戻った。

直義から一部始終を聴いた高氏は、

「おのれ高時、足利を見縊りおって」

そう烈火の如く怒った。

先年は父貞氏の服喪を無視しての出陣命令であったし、このたびは体調不良で出仕御免の届を出してあるのにまたも無視された。

高氏は、高時の非情な仕打ちに肚を立てた。

そこへ、出陣の連絡を受けて上杉憲房、憲顕、高師直、畠山直宗が駆け付けてきた。

重臣たちは高氏の怒りに同情を示したあとで、直義を含めた六人が別室に籠もり密議をはじめた。

高氏は出陣に気がすすまなかった。

昨年の笠置山城攻めのとき、手強い朝廷軍の抵抗に遭って、高氏は幕府の屋台骨を支える軍団の士気がすっかり衰えてしまっていることを目の当たりにしていた。

そこへもってきて、昨年は父貞氏の喪中、こんどは高

氏自身の体調不良を知りながら、出陣を命じた高時の血も涙もない非情さに怨み骨髄に徹していた。

そうなると幕府への忠誠心はまったく失せてしまい、むしろ野心が頭を擡げてきた。

（得宗高時打倒）

鎌倉幕府を見限る謀叛である。

藤原北家出身の上杉に公家から京の動静がつぎつぎに入ってくるにつれて、高氏の返り忠に拍車が掛かった。

高氏の思いを聴いた重臣たちに反対者はいなかった。

（京へ到着するまでの状勢によって去就を決める）

ことで一致した。

高氏は幼時から母清子が上杉家所蔵の諸書を与えて育てたために知識詰めになっていて決断が遅い優柔不断な性癖になってしまっていたが、動乱期には即断即決より日和見のほうがいいのかも知れなかった。

こんどの総大将は北條一門の名越高家であった。

官位は高氏よりも低く、年齢も二十歳と若い。

昨年の大佛貞直、金澤貞將はいずれも高氏より地位、年令ともに上位だったが、こんどの編制で高氏は誇りを著しく傷つけられて出発まえから戦意喪失であった。

その心底を察知してか、高時は高氏に、

「得宗家の下知に従い、忠誠を尽くし二心なきを誓う」

旨の『起請文』の提出と、妻登子、嫡男千壽王を鎌倉に留め置くことを要求してきた。謀叛防止策である。

高氏は登子に、万一鎌倉に不穏な動きが起こらば千壽王を連れて足利荘へ脱出するようしかと申し付けた。

こうしておいて高氏は、三月二十七日弟直義、上杉憲顕、重能、高師直、畠山直宗らの重臣、それに一族の宿将ら三千余騎を率いて鎌倉を進発し、京へ向かった。

四

高氏は、遠征の途次ずっと去就について考えつづけた。

このまま得宗高時に面従腹背して幕府の崩壊を待つか、それとも見限って朝廷側につくか二者択一であった。

だが、返り忠したといっても先帝の綸旨か親王の令旨がなければ、朝廷方の武将たちは信用しないであろう。

また先帝も、昨年幕府軍の一翼を担って攻めてきた高氏をはたして信用してくれるかどうかが不安だった。

あれこれ考えを巡らしているうちに、いつか領国の三河へ入り矢矧（岡崎市矢作町）まできてしまった。

途中駿河で今川が、ここで吉良が加わって一族勢揃いしたので、あらためて軍議をひらいた。

高氏は大藏谷の屋敷で吐露した胸中をあらためて述べたところ、今川も吉良も賛成して激励してくれた。

これで鷹揚な高氏も肝が据わった。

あとは後醍醐先帝の綸旨を受けることだけであった。

「どうしたものか」

高氏の吹きにそれぞれ押し黙って思案に耽った。

その静寂を破って、母方の従兄上杉憲顕が口を切った。

「このたび同伴しております重能は、父の養子に入りましたのでわれらと義兄弟になりましたが、実は父の妹加賀局が嫁した勧修寺の別當宮津入道道宏の子でござりますれば、お役に立てることと存じまする」

勧修寺というのは、後醍醐先帝が崇敬している六十代醍醐帝にあやかりたいと希い、生前から諡号を後醍醐と決めて生涯その称号で通そうとしているその醍醐帝が、母后追善のため上杉の遠祖藤原定方に創建させた皇室所縁の寺であるから、別當の子重能を使者に立てれば高氏の意志を信用してもらえるだろうというわけである。

「それはよいところに気がついた」

高氏は帰順を表明した文書を上杉重能に託すと、細川和氏をつけて船上山へ倒幕の綸旨を受けに密行させた。

後醍醐先帝の綸旨を待つ高氏は、京へ入るまえに受けたいものと希って、軍団を悠くりすすめて行った。

そして、近江の鏡宿まですすんだところで上杉重能と出会い、首尾よく綸旨を賜ったことを確認した。

高氏は、従軍の諸将をあつめて後醍醐先帝の綸旨を披瀝し、倒幕軍に参加して源氏を再興する心情を伝えた。

源氏を斃した北條一門の頂点に立つ得宗高時は平氏の系であるから、諸将は高氏を裏切りとは考えなかった。

足利勢は幕府軍のまま四月十六日に京へ到着した。

六波羅は平氏の全盛時代に現存する六波羅密寺を中心に鴨川の東（東山区）五條と七條のあいだに一門衆の居宅六波羅殿があった跡地に鎌倉幕府が政庁をおいて尾張、加賀以西諸国の政務裁判を総轄していたが、承久の乱以後に五條通りを挟んだ南にも探題を常置して朝廷を監視した。

北方探題は十三代執權極楽寺基時の子越前守仲時、南方探題は七代執權北條政村の曽孫左近將監時益であった。

両探題は高氏らの到着を待ち侘びていたらしく縋り付くようにして迎えてくれたが、六波羅全体の士気はこの二年のあいだにすっかり衰えてしまっていた。

三日おくれて名越高家四千余の軍勢が到着した。

高氏は、さっそく両探題、高家と軍議をひらいた。

そして、高家に赤松則村討伐を任せて、高氏は伯耆船上山へ遠征することに決した。

六波羅を出発した名越軍は山陽道を行き、足利軍は山陰道をすすんで老ノ坂峠を越え丹波国桑田郷篠村荘（亀岡市篠町）に入った。ここは足利領のひとつである。

高氏は、平氏が滅亡した文治年間に源爲義の孫義信（延朗上人）が篠村荘を領知したとき、石清水八幡宮を勧請したという篠村八幡宮に向かった。

ここで高氏は、全軍を前にして後醍醐先帝の『倒幕の綸旨』を示して北條一門を見限ることを表明し、高時から壮途を祝して与えられた頼朝から政子へ伝えられた由

緒ある源氏の白旗を境内の柳の木に掲げ、鏑矢一筋を神前に捧げて源氏再興の『願文』を奉納した。

境内にその〈旗立柳〉と〈矢塚〉が保存されているし、『願文』も八幡宮に保管されているという。

戦勝祈願をおえた高氏は各地豪族に檄を飛ばし、船上山の名和長年から早馬が届いているはずの赤松則村と千種忠顕に六波羅攻撃の日を約しておいて引き返した。

老ノ坂峠を越えて京へ入った足利軍は、赤松、千種両軍と示し合わせて五月七日未明に六波羅へ攻め入った。

山陽道をすすんだ名越軍は山城國淀付近の久我畷で赤松軍と交戦し、高家は四月二十七日に敗死していた。

高氏が篠村八幡宮で戦勝祈願した二日まえである。

三方から攻め込まれた六波羅勢は防ぎようがなく、南探題北條時益は自刃し、北探題北條仲時は光厳帝、後伏見、花園院を奉じ夜陰に紛れて遠路鎌倉へ落ち延びていったが、二日後に近江の番場（米原市）で追い付かれ、蓮華寺に籠もった仲時は逃れられぬと諦めて自刃した。

この青年武将に殉じた幕臣は四百三十二名という。

光厳帝と後伏見、花園院は高氏によって京へ帰された。

後醍醐先帝は光厳帝の即位を否定して上皇にし、みずから帝に復帰すると、正慶の年号を元弘に復した。

光厳帝の即位は正当であったが、楠木正成の旗標〈非理法權大〉どおり法は権力に勝てなかったのである。

五

高氏は後醍醐先帝から倒幕の綸旨を受けるとただちに鎌倉へ密使を走らせたので、妻登子は気丈にも機を窺って四歳の嫡男千壽王を伴い本領足利荘へ脱出していた。

いっぽう護良親王から倒幕の令旨を受けていったん上野新田荘へ帰国していた新田義貞は、船上山からの密書が届くと六波羅攻めの翌八日荘内の生品神社で旗揚げして、近国の豪族たちに檄を飛ばし、出陣を要請した。

高氏の倒幕目的は源氏の再興であったが、義貞のそれは開府以来疎外されつづけた北條執權打倒であった。

出陣の当日、足利千壽王を奉じた紀五左衛門が五百余騎を率いて駆けつけてきた。義貞の『起請文』と鎌倉攻めを足利との連合にする高師直の深謀遠慮であった。

とにかく出撃した新田・足利連合軍は十一日に小手指原（所沢市）で幕府軍と激突して翌日久米川（東村山市）でこれを破り、分倍河原（府中市）も突破した。

鎌倉へ近づいた義貞は全軍を三手に分けて巨福呂坂と化粧坂へ進ませ、本隊は腰越から極楽寺坂を目指した。

そして、二十二日早朝鎌倉へ突入した。

幕府軍は留守部隊で支え切れず、得宗高時は兵をまとめて東勝寺に入ると前執權金澤貞顕とともに自害して果てた。殉じた者は八百七十余人と伝えられている。

東勝寺跡から屏風山の山腹に向かったところに〈高時

腹切り矢倉）といわれている洞穴がある。

源頼朝が征夷大将軍となった建久三年（一一九二）以来百四十一年つづいた鎌倉幕府はここに滅亡した。

八月五日、後醍醐帝による論功行賞がはじまった。

足利高氏　武蔵、常陸、下総、
同　直義　遠江、
新田義貞　上野、播磨、
同　義顕　越後、
脇屋義助　駿河、
楠木正成　摂津、河内、
名和長年　因幡、伯耆、

が割り当てられたが、これらの武将たちに勝るとも劣らぬ戦功のあった赤松則村はなぜか現状の播磨佐用荘を安堵されただけで、いちどは与えられた播磨守護職はほどなく取り上げられてしまった。

（了）

「日本太古史」について（その二）

三戸岡道夫

第一章　木村鷹太郎の新史学

日本太古史を書いた木村鷹太郎は、明治三年（一八七〇）に生まれ、昭和六年（一九三一）に、六十二歳で没している。

したがって日本太古史を出版したのは明治四十四年～明治四十五年であるから、木村鷹太郎が四十二歳から四十三歳の時であり、いわばその筆力の最盛期であったといえよう。

その著作日本太古史の内容や、それに対する学界の反応などからわかるように、その生涯は複雑怪異なものであったが、日本歴史人物事典（朝日新聞社編）によると、次のように書かれている

明治大正時代の思想家、翻訳家　号は鳴潮
帝国大学哲学選科修了。井上哲次郎門下で、中国倫理学の研究から出発したが、客観性よりも自己投入するに足る思想を求めて、明治三十年（一八九七）、井上らと共に、雑誌「日本主義」を創刊。仏教などを排撃し、「日本建国の精神」の全面開花を提唱する。

明治三十四年以降は、ロマン派文学とギリシャ古典研究に没頭。熱狂的読者を得た「バイロン文学の大魔王」（一九〇二）「プラトーン全集」（翻訳）は著名である。その日本主義は、この研究を通じて古代日本を世界史の根源とする、怪異な学説へと化した。明治四十四年～四十五年の「世界的研究に基づける日本太古史」は、その観点からの壮大な比較研究である。

このように客観的に木村鷹太郎を紹介している。その「日本主義」と、プラトン全集翻訳を契機とした「ギリシャ研究」とが結びついて、「日本太古史」の著作へと結実したものと思われる

が、木村鷹太郎の特異性と、その名を高からしめたものは、何といってもその巨大にして偉大な奇本「日本太古史」である。以下にその奇才木村鷹太郎の生涯と、その諸活動を、記してみる。

明治三年（一八七〇）に愛媛県宇和島市に生まれた木村鷹太郎は、明治・大正期に活躍した、日本の歴史学者、哲学者、言語学者、思想家、翻訳家である。日本歴史学史上に、独自の歴史学説「新史学」を提唱して、問題となった。

そのパラノイックな歴史観、世界観は、当時の学界に大問題を引き起こし、その後に現れたいろいろな異端歴史学説に、直接、間接に、深い影響を与えた。

明治二十一年（一八八八）、一九歳のとき、上京して明治学院普通学部本科に入学した。島崎藤村や戸川秋骨などと同級生となり、英語弁論大会で一等になった。しかし言動にすこぶる異様なものがあって、ヘボン校長と折があわず、退学処分となった。

明治二十三年（一八九〇）、二十一歳のとき、東京帝国大学の史学科に入学し、のちに哲学科へ移籍した。ここで西田幾多郎と同級生になった。

こうして木村鷹太郎は明治時代の日本の、典型的なエリート学者のコースを歩いてきたのである。

大学を卒業すると、「道徳国家および東亜問題上排仏教」を著して、仏教には現実社会を変革する意欲がないと痛烈に非難した。そしてまた、返す刀で、「キリスト教公認可否問題」で、天皇をいただく日本には、キリスト教は不要であると論じた。

陸軍士官学校の英語教授の職についたが、ここでもあまりに学校との意見が合わず、すぐ辞めてしまった。

その代わり、英語を生かしてバイロンを翻訳し、また英語からの重訳ではあったが、一人で日本ではじめて「プラトン全集」個人完訳に取り組んだりした。

こうした態度は評判がよく、岩野泡鳴と文芸批評に当ったり、与謝野鉄幹・晶子の結婚の媒酌人になったりもした。井上哲次郎（東洋大学の創始者）もそのような木村鷹太郎を支援した。

すなわち、明治三十年（一八九七）、木村鷹太郎が二十八歳のとき、井上哲次郎、高山樗牛たちと一緒に、大日本協会を組織し、機関誌「日本主義」を創刊して、日本主義を提唱した。

明治三十四年（一九〇一）、木村鷹太郎が三十二歳以後は、ロマン派文学とギリシャ古典研究に没頭した。与謝野鉄幹・晶子の結婚の媒酌人をつとめたのも、この明治三十四年である。

明治三十五年（一九〇二）には、熱狂的な読者を得た「バイロン文学の大魔王」を著して、バイロンを日本に紹介した。

そして明治三十六年（一九〇三）から明治四十四年

（一九一一）にかけて、「プラトン全集」の個人完訳を実現した。木村鷹太郎が三十四歳から四十二歳にかけてである（ただし、ギリシャ語からでなく、英文からの重訳である）。

このように木村鷹太郎は幼い頃から才気煥発で、とくに語学に抜群の才能を発揮したが、しかし妥協をまったく知らない性格であり、自分の意見と合わないものは、容赦なく論破した。このため「キムタカ」の異名で論壇からは恐れられ、次第に学界から敬遠されるようになっていくのであった。

プラトン全集の完訳が終ると、その直後に、それまでの名声を一気にかなぐり捨てるような、独善的な行動に出たのである。

すなわち明治四十四年（一九一一）、四十二歳のとき、木村鷹太郎の壮絶な「新史学」の出発点となった「日本太古史」を発表したのである。それは上下二巻から成り、上巻七五四ページ、下巻が九七二ページ、合計一七二六ページに及ぶ巨大な本で、上巻が明治四十四年に発行され、下巻は明治四十五年に発行された。

その内容を一口で言うとすると、

（日本の古代はギリシャにある）

ということであった。この発想はおそらく、十年近くにわたってプラトン全集の翻訳を中心とするギリシャ古典の研究をしている間に、自然に蓄積された古代ギリシャ文明への造詣が「日本主義」と結びついて、そのような形へ一挙に飛躍していったのではないかと思われる。

すなわちギリシャ文明を研究するにしたがって、日本語とギリシャ語・ラテン語、そして日本神話と、ギリシャ・ローマ神話や北欧神話との間には、共通点が多いことに気がついたのである。そこで、

（日本神話は全世界神話の起源である）

そして、さらに、

（日本語は他のすべての言語の起源である）

と確信するのであった。

言葉の発音や、意味が似ていれば、それは同一のものとして、古事記や日本書紀の記述を無理やり、ギリシャ・ローマの神話や歴史にこじつけるのは、語学に抜群の才能のある木村鷹太郎にとっては、いともやさしいことであった。

こうして一般から見れば妄想歴史学とでもいうべきものを、木村鷹太郎は、

（新史学）

と称し、それを認めない学者を「旧史学」と言って、罵倒したのである。

すなわち日本を世界文明の起源と位置づけ、かつては日本民族が世界を支配していたという「新史学」を熱烈に唱え、晩年に至るまでそれを続けたのである。

その新史学の一端をかいま見ると、

○イザナギノミコトは、ギリシヤ神話のゼウスであり、その黄泉行きの神話は、オルフェウスおよびオデュッセウスの黄泉行きと同一である。

○スサノオノミコトは、ギリシヤ神話ではペルセウスとして伝わっている。ペルセウスとはペルシヤの名称と同一である。したがってスサノオノミコトは、ペルシヤ古代（アケメネス朝）の首府スサの名称でもある。スサノオノミコトと、ペルセウスとは、同一神の別伝ともいうべきものである。

したがって、大蛇を斬るのは両方とも同じであり、女子を救うのもまた同じ、宝剣を得るのも同一など、二つの神話はまったく同一で、一点の疑問の余地もない。

○オオクニヌシノミコトはダビデである。

○タケイカヅチはモーゼである。

○高天原はアルメニアにある。

○出雲大社はメコン川流域にある。

○神武天皇の東征は、アフリカ西海岸からスタートした。

そして世界文明の大部分は、日本が起源であるという空想を、一挙に発表したのである。人によってはこれは空想ではなく、妄想だと言った。

木村鷹太郎にとっては、日本人は古代ギリシヤ人であり、古代ローマ人であり、古代エジプト人である。また日本人はユーラシア、アフリカ両大陸のほぼ全域を支配し、その足跡を至るところに残した偉大な民族なのである。

さらに木村鷹太郎はそれだけでなく、みずから「日本民族研究叢書」と銘打ったシリーズで、

「神武帝の来日歌はビルマ歌」

「日本民族東漸史」

「トマスモア『ユウトピア国』は、わが日本津軽」

「天孫降臨史の世界的研究」

などと題して、「日本・世界同根説」を説いたのである。なかにはホメロスの「オデュッセイア」は、平家物語や太平記を下敷きにしたものだなどという、仮説まで混っている状態であった。

すなわち木村鷹太郎の「新史学」とは、日本を世界文明の起源と位置づけ、日本民族がかつては世界を支配していたという主張である。

その他にも「邪馬台国はエジプトである」という説や、仏教やキリスト教批判などの、独創的な主張でも知られている。

そして彼に対して異論を説えた者へは、徹底的に反撃、論破する、過激な言論人であり、論壇においては「キムタカ」と呼ばれて恐れられ、忌避され、したがってその

研究の大部分は、異端学説と見なされたのであった。

木村鷹太郎の時空の観念を超越した、壮絶な妄想を若干例示すると、次のようなものがある。

○邪馬台国は古代エジプトにあった。魏の船団は、古代ケルト地方から出発した。

○ホメロスの「オデュッセイア」は、平家物語や太平記を元に書かれたものである。

○日本神話の本牟知別命（ほむちわけのみこと）は、桃太郎であり、ムハンマドである。またこの伝説がイギリスに伝って、シェークスピアの「ハムレット」になった。

○ソクラテスは日蓮上人、プラトンは日昭（日蓮上人の高弟）である。

○西郷隆盛は自刃せず、ベトナムへ脱出した。サイゴン（現ホーチミン）は、西郷の名前が転訛したものである。

○大阪の「なにわ」は、シャトルアラブ川の河口にある都市、マホメラーと同一の語源である（シャトルアラブ川は、テイグリス川とユーフラテス川が合流し、ペルシア湾に注ぐ川である）

○歌舞伎の助六と、シシリー（シチリア）は同語源である。イタリアのシシリアンは、江戸の町奴だった。

木村鷹太郎の新史学の基本にあるのは、自国中心、自国優越史観である。

そして、その晩年に「世界思想の源泉」という本を著している。

その内容は自国優越史観に貫かれていて、世界史に名だたる西洋の偉大な思想家たちは、実はすべて日本人であり、その名前や思想が西へ伝わって、現在に伝っているというのである。それは疑いようがない。疑う者は我の証明を見よ。日本人よ、自信を持て。世界の中心は日本なのだーという調子で貫かれている。

その有名な名前を左に抜粋する。

アナクシメネース—最澄
ヘラクレイトス—空海
ピタゴラス—円仁
ソークラテース—日蓮
アリストテレース—山鹿素行
ピルロー—兼好法師
……

木村鷹太郎の証明は、基本的にはすべて言語の語呂合わせである。語学に抜群の才能を持っていた、木村鷹太郎らしい発想である。

たとえば、「イエス」は「イヤス」、すなわち「癒（い）やす」、「医やす」、「安す」を意味する日本語同語である。

クリスト（キリスト）とは、「クスリスト」、すなわち「薬者」、医者のことであるから、キリストは人の心身を

医すことである　また飢を医やすの意味で、飲者（メシア）というのである

結論の是非はともかくとして、木村鷹太郎には日本文化、西洋文化の知識がもの凄いことがわかる。たとえ、こじつけだとしても、よく勉強しなくては、ここまで出来ないであろう。

日本が明治末期から大正へという、時代が時代であったから、愛国心と危機感によって、自国優越史観が暴走した感はまぬがれなかったのであろう。

第二章　空想史学

木村鷹太郎は自分の歴史観を「新史学」と名づけて世間にアピールしたが、その内容があまりに奇異なために、学界からは受け入れられなかった。

しかし世の中には、木村鷹太郎だけでなく、奇異な歴史を唱える者が他にも大勢いるのである。キムタカまがいの捏造理論に精魂を傾ける、いわゆるオカルト学者たちである。

そして、そのような奇異でオカルト的な歴史観は、いつしか、

（空想史学）

と呼ばれるようになっていった。

そのような空想史家の一人に、小谷部全一郎という歴史家がいる。彼は、

（ジンギスカンは義経のことであった）

という、義経ジンギスカン説を唱えた人間である。すなわち義経は頼朝に討たれて、東北平泉の地で果てたのではなく、海を渡って中国大陸へ逃れ、ジンギスカンとなって活躍したというのである。ばかばかしい話であるが、あまりに世間で話題になったので、金田一京助、三宅雪嶺、鳥居龍蔵などが必死になって反論したが、そのブームは治まらなかったという。

小谷部全一郎は貧困の中に生まれたが、自力で放浪して北海道に渡り、アイヌのコタンに身を寄せた。さらにアメリカに渡ってエール大学を卒業し、十年におよぶアメリカ滞在をへて、明治三十一年に帰国した。

帰国してからは、横浜紅葉坂教会で教師をつとめた後、北海道洞爺湖近くに移住し、日本ではじめての、アイヌ人のための実業学校を設立した。

昭和に入ってからは、「日本および日本人の起源」を書き、また有名になった「日本人とユダヤ人同祖説」を唱えた。

この点については、さらに酒井勝軍が「ユダヤ民族の大陰謀」を唱え、日本人こそイスラエルの失われた十支族にほかならないという説を打ち出して、日本人ユダヤ人同祖説にいっそうの拍車をかけた。さらに拍車をかけただけでなく、

（日本人とユダヤ人が同祖ならば、正しいシオニズムとは、日本回帰運動である）

という突飛なイデオロギーまで唱えた。

しかし空想史学は、空想、妄想、オカルトと言っても、マンガやアニメなどのように、單に面白ければいいというものではない。そこに一つの主張がこめられているのである。それは、

（日本主義）

という国家観である。世界の中で一番日本がすぐれているという、いわば国粋主義である。

とくに木村鷹太郎の日本太古史の発表された明治四十四年～四十五年は、日清、日露戦争に勝って、日本はその近代国家化に自信を持った時であった。

明治維新がスタートして、一日も早く日本の近代国家化を実現し、はやく日本も世界の列強に伍したいというのが、日本国民の熱望であった。

そこへ日本の優位性を強調した空想史学が出てきたのは、時代の要請でもあったのである。その勢いが強まるあまり、史実の空想化に歯止めがかからなくなり、奇異な歴史が作られていった面もあったのである。

しかし、こうした国粋主義空想史学は、日本だけのものでなく、世界どの国も、強弱の差はあれ、持っているものなのである。

どこの国の国民も、自分の国をいい国だと思っていない国民はいない。自分の国を愛しない国民はいない。だから、どの国も国粋主義空想史観を持っているのである。マルキシズムも、市場自由主義も、マネー・マーケットも、言ってみればその一種である。

そしてその中でのもっとも最たるものが、中華思想ではあるまいか。中華思想こそ、木村鷹太郎の空想史学を上廻る、空想史学である。現在の日本で最大の空想史学は、「自虐史観」である。自虐史観こそ、中華思想という空想史学によって痛めつけられた、あわれなる空想史学ではあるまいか。

そういう意味において、いま日本に必要なのは、「平成のキムタカ」ではあるまいか。

第三章　正史と空想史

正史と空想史とは対立する概念である。

ノンフィクションとフィクションの違いといっても、いいのかもしれない。

しかし、その違いはどこにあるのであろうか。いろいろと規準はあるであろうが、その大きな規準の一つに、資料の有無がある。資料に基づいているものが正史、そうでないものが空想史である。

一見、妥当に思える　しかし、事はそう簡単ではない。

資料というものが、一筋縄にはいかぬものだからである。

資料とは、口に言えば、記録されて残っているものである。しかし、世の中のことはすべて記録されて、残っているであろうか。はっきり言って、それはノーである。

たとえば現代のように、記録装置、マスコミ、映像が発達している世の中でも、地球上に起っているすべての事象（歴史）が、記録されているわけではない。記録されているのはほんの一部分にすぎない。

記録されていないもの（後世に資料として残らないもの）は正史ではなく、空想史であるとするならば、現在の記録されていないものは、後世になって空想史なのであろうか。いや、記録されていなくても、正史なのである。空想史ではない。

このように、ちょっと考えただけでも、資料のない（記録）のない正史は、山ほどあるのである。いや、その方が多いのである。

資料のない正史と、空想史とを、どうして見わけるのか、これは難問である。

「資料のないものはすべて空想史」

と決めつけるのは、誤りであることは明白である。資料のない正史も存在することを、忘れてはならない。

また、資料といっても、かつては本当にあった資料が、後世になって破棄されたり、また修正、偽造されることもある。新しい政権が誕生した時など、それ以前の自分に都合の悪い資料は破棄してしまったり、また新政権に都合のよいように書き替えてしまうことは、よくあることである。そのような修正、偽造資料によった歴史では、いくら資料があるからといって、正史とはいえないであろう。

また、資料といっても、それが何時の時点で書かれたかによっても、事の真否が変ってくる。その時点、時点で記録されたものが残っているものもあるが、後世になって書いたものもある。後世になって書いたものになると、伝え聞きによるものとか、記憶たよりの部分が多くなり、不正確になる。百パーセント事実の歴史、正史とは言い難い。

また、ある人が言ったことを記録したものや、手紙などはどうであろうか。人の言葉や手紙にも裏表のあることがある。表で言ったことが、真実であるとは限らない。本当のことは、その裏に隠れていることがある。

真実の最たるものとして挙げられるのは、日記である。日記はプライベイトなものである。嘘を書くはずがない。

しかし、日記とても百パーセント真実ではない。日記にもフィクションがあるのである。永井荷風などは、死後、その日記が公開され、出版されることを予想して、「なるほど、永井荷風は日記まですばらしいな」と言われるように、フィクションも加えて書いていたという。日記も創作の一種だったのである。

こうして見ると資料にもいろいろあり、たんに資料だからといって、簡単に信用するわけにはいかないのである。

したがって専門家に言わすると、資料にも一級、二級、三級と、少くとも三段階はあるというのである。さてこの資料はどの程度の信用度があるのか、その辺の使い分けも必要になってくるのである。

こうして考えてくると、正史と空想史といっても、その間に、それほど明確な線が引かれているわけではなく、正史と言われている中にも、空想史が入り、空想史の中にも正史があると言えるのではなかろうか。

第四章　文化の同時多発的発生

木村鷹太郎の日本太古史は以上のようないろいろな問題を歴史世界に投げかけたが、さらにもう一つ、重大な問題を提起した。それは、

（文化の同時多発的発生）

ということである。

文明史を広範囲に見ていくと、人種や民族の相違を超えて、同じような文化が同時多発的に発生する、という現象があるのである。

たとえば、世界四大聖人といわれる、釈迦、キリスト、孔子、ソクラテスが現れた時期が、紀元前五百年から紀元前の間という、ほぼ同じ頃であるというのも、その一例である。

ダーウインといえば「種の起源」であるが、その頃、同じような発想を持った科学者は、他にもいたと言われている。

だから木村鷹太郎の日本太古史も、日本とギリシヤを、地理的に無理やり同じ場所だと固定して考えなくても、東西に離れていても、日本とギリシヤに、同じような文化が同時に発生して、少しもおかしくはないのである。

爛熟の時代とでもいうのであろうか、何かを生み出すマグマのようなエネルギーが世界に溜まり、それが、いつ、どのような形で噴出するかは時間の問題である、という構図である。地球の深部で、ある文化がマグマとなって燃え上り、それが地球のあちこちで噴出して、地表へ顔を出したということかもしれない。

目に見えない地球文化の同時多発性―そんな歴史観を木村鷹太郎は、我々に呈示してくれたのである。

第五章　邪馬台国エジプト説

木村鷹太郎は「邪馬台国はエジプトにあった」と説いたが、その内容を紹介する。

中国の歴史書「魏志倭人伝」は、正確には、三国志の中の「魏書」東夷伝倭人条のことである。

最も奇妙な「邪馬台国のエジプト説を展開したのである。

では、そもそも「魏志倭人伝」においては、帯方郡から邪馬台国に至る道順はどのようになっているのであろうか。それは次の如くである。

一、帯方郡（韓国・ソウル付近）→狗邪韓国（韓国・金海付近）海岸に沿って東行、南行。水行七〇〇〇余里。

二、狗邪韓国→対馬国海を渡る。水行一〇〇〇余里。

三、対馬国→一大国（一支国）（壱岐）南へ「瀚海」を渡る。水行一〇〇〇余里。

四、一大国→末盧国（佐賀県東松浦半島付近）海を渡る。水行一〇〇〇余里。

五、末盧国→伊都国（福岡県糸島郡付近）東南へ陸行五〇〇里。

六、伊都国→奴国（福岡市付近？）東南へ陸行一〇〇里。

七、奴国→不弥国（福岡市付近？）東へ陸行一〇〇里。

八、不弥国→投馬国、南へ水行二〇日。

九、投馬国→邪馬壱国（邪馬台国）南へ水行一〇日、陸行一月。

これをこのまま素直に読むと、邪馬台国は九州のはるか南方海上になってしまい、畿内にも、北九州にも、到着しない。

そこで、「畿内説」では、南は東のまちがいだと解釈

そして魏志倭人伝に書かれた邪馬台国がどこにあるかについては、江戸時代以来、学者やアマチュアを交えていろいろな人が、いろいろな説を発表してきた。が、それらの説の大部分は、魏志倭人伝の文章を勝手に修正したり、あるいは不自然な読み方をしたりして、無理やり自説に結びつけたものだった。

すると明治四十三年（一九一〇）に、京都帝国大学の内藤虎次郎（湖南）教授が、「卑弥呼考」を発表して、

（邪馬台国の畿内説）

を主張した。

するとほぼ同時期に、東京帝国大学の白鳥庫吉教授は、「倭女王卑弥呼考」で、

（邪馬台国の北九州説）

を主張した。

この両説の対立が、いわゆる「邪馬台国論争」に火をつけたのであるが、木村鷹太郎がこの両説に、真っ向から反対したのである。それが木村鷹太郎の、

（邪馬台国のエジプト説）

なのである。

すなわち明治四十三年（一九一〇）七月、木村鷹太郎の奇妙な論文が読売新聞に掲載された。題名は、

（東西両大学および修史局の考証を駁す―倭女王卑弥呼地理について）

であり、その中で木村鷹太郎は、邪馬台国についてのして、邪馬台国を畿内に持ってきたのである。

これに対し「北九州説」では、九番目の「一月」を「一日」のまちがいだと解釈して、邪馬台国を九州の中に留めおいたのである。

以上の「原文読みかえ」の両説について、木村鷹太郎は、真っ向から、「歴史を好き放題に改竄」するものだ」と、異議を唱えたのである。

まず、帯方郡狗邪韓国を朝鮮半島内に当てているが、それは根拠がない。たんに対馬国を現在の対馬に当てはめ、そこから推量しているにすぎないのである。

また、伊都国を福岡県糸郡（現糸島郡）に比定しているが、糸郡は松浦の東北で、東南ではない。これは考証上、許すべからざる断定である。

「彼等の考証論理の誤りは、この点から始っているのである。さらに、奴国を福岡市の那津、あるいは那珂に比定しているが、「奴」を「な」と読めるのか。また、福岡市は糸島郡の東で、東南ではない」

などと、いろいろ異議を唱えている。そして、

「卑弥呼地理に関する彼等の考証は、かくのごとく散漫、牽強付会であり、なんら学術的考証といえるものではない。要するに、対馬、伊都、邪馬台などの地名が、日本のそれに似たものがあるので、前記のような牽強付会説を唱えたのである」

と批判しているのである。

すなわち、内藤教授の「邪馬台国畿内説」や、白鳥教授の「邪馬台国北九州説」は、魏志倭人伝の中の地名を、適当に現在の日本の似た地名にこじつけただけの、いい加減な説だというのである。そして木村鷹太郎は、

「もし、これでも考証だというのであれば、ああ、大学の専門史家は、天下の最大愚物というべきである」

とまで言い切っている。

では、木村鷹太郎は魏志倭人伝を、どのように読んだのであろうか。木村鷹太郎は、

「卑弥呼地理は日本について言っているのではあるが、極東にある日本の地理について言っているのではない。他の地理を言っているのである」

と言っている。すなわち邪馬台国は日本ではあるけれども、極東にある島国の日本ではないというのである。

では、それは、どこなのか。木村鷹太郎は次のように説くのである。

それは、イタリア、ギリシヤ、エジプト、それにアラビアなどの古代地図をひろげて、卑弥呼地理の説明は、ここに求めざるを得ないのである。

私が日本古代史の地理は、ギリシヤ、エジプト、アラビアなどの地図によって説明しなければならないように、支那の歴史の中にも、西方地理が混入

していると思わざるを得ないのである。

その両方から移ってきた支那人の中に、西方の歴史地理を持ってきて、東洋において編纂した歴史書の中に、これを混入させたことは、十分に有りうることである。

魏志倭人伝の歴史地理の如きは、まさにこれなのである。

倭人伝の中の倭女王国とは、日本人が太古に欧亜の中央部に居を占め、

イタリア（新羅）、
ギリシヤ（筑紫）、
アラビア（伊勢）、
ペルシヤ（現イラン）、
インド（印度）
シャム（現タイ）

などは、そのわが日本国時代だったものを言うのである。

このように木村鷹太郎によると、魏志倭人伝は、日本が、地中海から東アジアにおよぶ広大な地域を支配していた時代を記録したものだというのである。

そして、このような前提に立って魏志倭人伝を解読すると、次のようになるのである。

○帯方郡―ケルト人の国である。ケルトは、帯を意味するギリシヤ語ケレトが語源である。ケルトは古代のドイツ、フランス一帯をいう。魏志倭人伝の旅行者は、現在のヴェネツィア付近から出発した。

○韓国―ガラ（ガリア）、すなわちイタリア北部の総称である。

○狗邪韓国―イタリア半島の南東部、カラブリア地方である。カラブリアは「化粧」の意味で、そのギリシヤ語名がクジオ、すなわち狗邪である。

○瀚海―アンブラギア湾（ギリシヤ西岸）である。瀚は「ワニ」の意味で、神功皇后が西征のとき出発した、和珥津（ワニツ）＝ワニツアの所在地である。

○壱岐国―アンブラギア湾の南方、リューキ島（レフカス島）である。

○末盧国―ギリシヤ、ペロポネソス島の西北にあった、アハヤ国のオエノエである。オエノエはラテン語で、マツロである。

○伊都国―イツは神を祭り、斎く所のことである。マンチネヤと推定できる。これは末盧の東南にある。

○奴国―ペロポネソス半島東部、アルゴリス国のアルゴス府である。アルゴスは船の意。船はギリシヤ語でナウと言い、これが「ヌ」となった。

○不弥国―アルゴリス国のハーミオネ府である。語尾を略せば「ハーミ」で、これが「フミ」になったのである。

○投馬国―クレタ島である。不弥国の南にある。クレタ島の伝説にある怒牛タウロメノスがタウロマ、タウマと変化した。これがクレタ島の別名となった。

○邪馬台国―エジプト、スエズ付近である。投馬国から南下して、東へ陸行すれば、エジプトに到達する。

○拘奴国（邪馬台国の南）―エジプト南部のクネ（あるいはクメ）。垂仁天皇の行幸があった、東目の高官の所在地である。

以上のように、木村鷹太郎は、とくに方角や距離に、不自然な修正を加えたり、不自然な読み方をしたりせずに、邪馬台国＝エジプトに到着するのである。

木村鷹太郎は、日本人はかつて太古ヨーロッパ、アジアの中央部に居を占め、イタリア（新羅）、ギリシヤ（筑紫）、アラビア（伊勢）、ペルシヤ、インドなどは、その領域であったと主張した人間である。邪馬台国がエジプトにあったことぐらいは、彼にとって、それほどの重大事ではなかったのであろう。

（つづく）

誠忠の茶園（九）

太田精一

高重は、気力を取り直し、体力を回復するための雉狩りを思い立ち、北隣に住む石井兼正に計画を打ち明けた。

兼正の長男石井一松は、高重の末娘まさの夫で、高重にとって石井家は、末娘の嫁ぎ先である。

「兼正殿、どうやら風邪も治ったようだ。快気祝いをかねて、心配してくれた皆と共に、雉狩をしようと思っている。われらの弓の腕も鈍っていないかどうか確かめる良い機会だ。ついては、貴公にその準備を頼みたい」

「分かりました。早速支度に取り掛かりましょう」

兼正は、騎射に自信のある入植士族たちに触れを出し、雉狩の準備を進めた。

石井兼正は、嘉永四年（一八五一）江戸牛込榎町四三番地、旗本山田孝道の嫡子として生まれた。男三人、女三人の六人兄弟である。嫡男であったが、旗本石井家の継嗣として入籍し、石井家を継いだ。

十六、茶園にかけた夢

（一）牧之原の土となれ

幕臣たちが牧之原に入植してから二十三年の歳月が流れた。雑木と雑草で覆われた台地に緑の茶園が広がっている。茶の木には、かすかに新芽が覗いていた。

（今年もまた桜を見ることが出来た）

大草高重は、散り行く桜の花びらを、いとしむように眺めながら呟いた。

明治二十五年四月、彼岸も終わり、柔らかな春の日差しが岡田原に降り注いでいる。

だが、高重の体調は、すぐれなかった。変り易い春の気候の変化に、体がついて行けなくて、一昨日から床に伏せていた。

（風邪を引いたのかもしれない。いや、老いが気力を奪い、体の疲れを感じさせているのだろう）

彼は、大草高重の内弟子として幕末から精鋭隊に加わった。水戸から駿府へと、高重と行動を共にし、明治二年七月、開墾方として牧之原に入植した。当初は、大草家に居候をしていたが、中條景昭、内藤種光の世話で、明治六年春、神谷久三郎の二女きよを娶り、世帯を持った。

嫡男、一松の誕生を期して大草家の北側に家を建て住んでいる。

「ところで、貴公にもう一つ頼みがある。服部一徳殿から、わしの孫の鉄次郎の節句祝いが届いた。その返礼の品を雉狩の知らせのついでに届けてもらいたい」

服部一徳は、高重の長子和田勝重（高重の生家和田家の養子となり、同家を継いだ）の妻いしの父親である。一徳も、精鋭隊以来、高重の同志であり、共に牧之原に入植している。

漢学の素養が高く、入植後も高重の良き相談相手となっていた。

「承知しました。必ずお届けします」

兼正は、高重の意向を受け、一徳の屋敷に向かった。

大井川の流れを眼下に見下ろしながら、雉狩が行われた。五和村の童子沢（わっぱさわ）辺りが猟場となった。

雉を追い始めて数時間後、高重は、右手と右足に痺れを感じた。感覚がなくなり、座り込んだまま、動くことが出来ない　声も出ない状態であった。

異変に気付いた人たちが駆け寄って、高重を抱き起こした。呼び笛を合図に、全員が集まった。

高重は、駕籠に乗せられ、岡田原の自宅に運び込まれた。報せを聞いて、この地方の名医水野良介がすぐ駆けつけた。彼は、高重とは昵懇の間柄であった。

「脳溢血です。完治は困難と思われます。兆候は、見られませんでしたか」

水野医師の問いに家族は、下を向いたままである。が、しばらくして妻のうらが重い口を開いた。

「めったに床に伏せったことのない人が、風邪だと言って四、五日寝込んでいましたので不思議に思い（お疲れのご様子、大事ございませんか。水野先生に見て頂いたら如何ですか）と聞いてみましたところ（何のこれしきのこと。多分風邪であろう。心配には及ばぬ）と申しますので、先生に往診をお頼みしませんでした。でも、私の目には、いつもと違って、体に張りがなく、生気がないように思えました」

高重は、うらに心配を掛けまいとして元気を装っていたのである。

報せを聞いて、中條景昭が、すぐに駆けつけて来た。

「大草さん。しっかりしてくれ。貴公に倒れられたら、牧之原はどうなる。もう少しで、われわれの労苦が報われる。入植者全員が笑って暮らせる時が来ることは、貴公も分かっていように」

景昭は、そう言いながら、高重の手を強く握った。
水野医師は、安静を保つよう指示した　病状は、予断を許さない状況にある　そのことを家族や集まった同志に告げた
「今夜が峠となりましょう。医者としては手を尽くしました。この上は、お集まりの皆さん全員で、快癒を祈ろうでは、ありませんか」
そう言い残して、水野医師は、自宅に戻った。
景昭は、集まった人たちに、呼びかけた。
「さあ、今となっては、大草さんの本復を祈るばかりじゃ。皆、八幡神社に集まり、大草さんのために蝋燭を灯し、お百度を踏んで平癒を祈ろうではないか」
景昭の呼びかけに多くの入植者が、八幡神社に集まった。家族同伴の者もいる。社殿は、蝋燭の灯で明るく、境内には、松明が焚かれている。
入植者全員が、高重の平癒を祈った。その祈りが通じたのであろうか。倒れたまま眠り続けていた高重が、翌朝目を覚ましたのである。言葉は、はっきりしなかったが、意識は、確かであった。
うらが、高重の耳元で、ゆっくり休むよう囁いた。
高重は、頷いて静かに目を閉じ、眠りに就いた。
しばらくした後、再び目を覚まし、枕元で見守る家族の顔を一人一人見詰め、喉の奥から絞り出すような声を発した。
「皆良く聞いてくれ。わが大草家は、未来永劫、たとえ乞食になろうとも、牧之原の土塊となれ、これはわしの遺言じゃ。この遺言を子々孫々に伝えよ」
言葉は、はっきりと聞き取ることが出来ない。だが、高重の意志は、家族に伝わった。その意志は、平成の今日まで、脈々と受け継がれている。大草家の現当主省吾氏もその意志を継ぎ、有力な茶園経営者の一人として牧之原の発展に貢献している。
高重は、近親者に看取られて、永遠の眠りに就いた。明治二十五年四月十日、散り急ぐ桜のような生涯であった。享年五十八歳。
前々年の明治二十三年、明治憲法が制定され、日本は立憲政治の道を歩み始めている。朝鮮における権益を巡って、清国との軋轢が生じ、やがて日清戦争へと突入する二年前の年であった。
高重逝去の翌々日、四月十二日未明。松原山医王寺にて、寛鳳和尚が、導師となって、盛大に葬儀が営まれた。武家の葬儀は、陽のあるうちには、行わないという風習に従った。大草家は、神道の家柄であったため、戒名はない。高重は、岡田原が、一望できる西の高台に葬られた。
参列者は、夜明け前の暗い道を岡田原の西山へと登った。棺を土中に埋め、盛土をかけ葬儀を終えると、陽が

登り始めた。眼下には、高重の造った茶園が、薄闇の中から、次第に姿を現して来た。東方には、真っ赤な富士が、夜明けを告げるように輝いている。
参列者は、思わず感嘆の声を上げ、この台地の素晴らしい景観に包まれて眠る高重の遺徳に、思いを馳せた。
「大草先生は、この岡田原の西山の地からいつまでも牧之原を見守ってくれるに違いない。先生の墓がこの地にある限り、牧之原から茶園が消えることはないであろう」
参列者は、互いにそう語りつつ西山を下った。
景昭は、この牧之原開墾事業での高重の存在が、いかに大きかったか、改めて痛感した。まるで片腕をもぎ取られるような痛手である。この先、茶園をどのように守り育てて行くか思い悩んだ。
盛大な葬儀の後、参列者の間から、高重の遺徳を偲ぶ立派な墓を建てようとの動きが高まった。その墓石に刻む碑文を勝海舟に依頼することになった。石井兼正、速水行秀、和田勝重が使者に立ち、氷川町の海舟邸を訪れた。
依頼を受けた勝海舟は、即座に快諾した。
「惜しい男を喪った。かねてから栄達を望まず牧之原の土になると言っていたが本当にそうなってしまった。本望であったろうよ。ただ、惜しむらくは、もう少し長生きし、牧之原が、さらに発展する姿を見届けてもらいたかった」
《手馴れつる　玉の小琴の緒をたたむ　古りし調は聞く人もなし》
勝は、すらすらと筆を運び、物部安房と署名した。
現在、岡田原の墓地には、高重の墓が、江戸に向けて立っている。その傍らに妻女うらと家族の墓石がある。参道の両側には、高重の子息男女七人とその家族、さらには、近親の開墾士族の墓が、高重を取り囲み並び立っている。墓石群は、木立の中にあって、大草家十四代大草省吾氏によって守られ、牧之原の歴史を刻んでいる。

(二)　分裂の危機回避

大草高重は、弓術、剣術、などの武術の鍛錬の傍ら、書を読み、絵を描くことを好んだ。
絵は、達磨や布袋などの人物像が得意で豪放にして洒脱な画風は、多くの人に好まれ、乞われれば描き与えることもあったという。
書は、とくに晩年によく書いた。最晩年の明治二十五年正月、地元の僧から書画を乞われ、すぐに書き与えている。僧は、大変喜び各地の寺で自慢げに話をした。
高重逝去後は、遺墨を掲げ読経に務め、盂蘭盆会には、その書画を幻燈に写し出して、往時を偲んだという。
高重の外孫和田鉄次郎は、彼の言葉を深く胸に刻んで座右の銘としていた
「われ人に富を施すことあらば、これをすべからく忘れよ　人もしくは、われに恩あれば、必ず忘れべからず」

という言葉である。

高重の他界後、心配された茶園も中條景昭以下、残留開墾方士族が努力を重ね、年を追うごとに拡大した。「牧之原茶」というブランドも全国に浸透し、茶の一大生産地として発展を遂げつつあった。

日清戦争に勝利し、好景気に沸いた明治三十年前後には、牧之原茶園の繁栄と中條、大草を讃える歌が作られている。

木々の若草　燃え立つ頃は
牧之原にも　そよ風吹いて
お茶は芽を吹き　雲雀は歌う
沃野三里は　茶の香り　茶の香り

あかねたすきに　姉さんかぶり
優しい乙女の　手にするお茶は
富士をのぞみて　ここ牧之原
中條、大草茶の香り　茶の香り

塚本昭一著、遺臣の群像一九三頁より

なお、同書に歌詞は、国際ことば学院校長　高木桂蔵氏提供とある。

大草高重の墓碑が完成した。その墓前で中條景昭は、精鋭隊の結成以来、二人三脚で幕末動乱の時期を駆け抜けてきた盟友の死を悼み、手を合わせた。高重を喪った悲しみがこみ上げて来る。

目を閉じると在りし日の高重の強い意志を感じさせる謹厳実直な、それでいて親しみ深い顔が浮かんで来た。

（どんな苦境に立っても互いを信じ、協力し合って生きてきた。とくに荀美館事件では、大草さんにお世話になった）

家禄奉還金を明治政府から受けた牧之原の旧幕臣たちは、その奉還金を基金に、荀美館を設立した。同館は出資者が必要に応じて資金を借り入れ、開墾事業を円滑に進めようとする趣旨から設立された金融機関である。

だが数年後、多額の損金が生じ、経営困難となった。使い込み事件が発生したのである。景昭は、荀美館の頭取であったため、監督責任を問われ苦境に立った。

拙いことに荀美館は、谷口原にあり、岡田原の出資者には相談なく事業が進められていた。そのため、経営の実態を知らされていない岡田原の出資者の不満が爆発、入植士族の分裂を招きかねない危機に直面したのである。

そんな時にあっても、高重と景昭との信頼関係は、揺らぐことはなかった。高重は、激昂する入植者たちを鎮め、関係者との協議を重ね、解決策を図った。その結果、勝海舟と山岡鉄舟に相談することになった。

使者に、今井信郎と伊佐新次郎が選ばれた。二人は、勝と山岡に、牧之原の苦境を率直に語り、場合によっては、分裂しかねない状況にあると訴えた。

それを知った勝と山岡は、大久保利通を通じ明治政府に働きかけた。その結果天皇の御内帑金が下賜され、危機を免れたのである。

ここで使者の一人である今井信郎について、少しく触れてみよう。

今井信郎は、天保十二年（一八四一）十月二日、江戸本郷湯島天神下で生まれた。剣は、直心影流榊原健吉に師事し、免許皆伝の腕前であった。後に、幕府講武所の師範代に取り立てられ、「片手打ち」という独特の剣法を編み出した。

その後、今井は、文久三年（一八六三）横浜の幕府出先機関で密貿易取締役となっている。その時、甲州の豪農天野家の娘いわを娶った。

元治元年、今井は、京都守護職の下に設置された京都見廻組に参加した。見廻組は、新撰組とは異なり、旗本の子弟だけで結成されたもので、隊員は三十人ほどである。

隊長は佐々木唯三郎。今井は、この佐々木とともに四人で、新撰組の前身浪士隊の隊長清河八郎を亡き者としている。

慶応三年十一月十五日、佐々木は、見廻組同志七人と糾合し、京都の醤油屋近江屋にいた坂本龍馬と中岡慎太郎を襲った。その時、龍馬を切ったのは、今井信郎だと取沙汰されている。

この近江屋事件については、誰が暗殺の真犯人であったか、現在でも謎に包まれている。

今井は、見廻組の一員として鳥羽、伏見の戦いに参戦した後、古屋作左衛門と共に「衝鋒隊」を結成。八〇〇人余の反薩長の武士たちを率いて、北越、会津と転戦し敗れた。その後、榎本武揚率いる軍艦に乗り、函館五稜郭に立てこもった。

五稜郭の陥落によって、薩長軍に捕らえられ、戦犯として兵部省の取り調べを受けた。さらに、坂本龍馬暗殺グループの一人として、静岡にて服役している。

だが、明治五年の特赦によって自由の身となった。出所後、駿府城の跡地に学校を創設、藩士の指導に当った。明治九年、静岡県生十等出仕に補され、八丈島に赴任した。島では、戸籍の整備、貯水池の開発、八丈織の奨励、学校の設立に尽力している。

明治十年、西南戦争が始まると静岡県を依願退職し、新政府の西郷軍討伐隊に志願、一等警部心得を拝命、八五〇人を統率する隊長となった。

西郷軍討伐参加の真意は、討伐隊に加わり、現地で西郷軍に合流する意図があったのではないかと子息の今井健彦氏は、後に語っている。だが、八月二十日、浜松まで下ると、西南戦争は終結。八月二十七日に帰京して、習志野で解団。今井は、静岡に帰った。

その後、今井は、中條景昭の勧めで、牧之原坂本村に入植した。その頃に、荷美館事件が起き、その調停に伊佐新次郎とともに尽力した。伊佐については、すでに、その事績と人となりを紹介したのでここでは、割愛する。

今井は、後に自由民権運動の先駆けとして、「三養社」を設立、明治十三年地元の農業振興に尽くし、明治二十八年静岡県榛原郡の農会長、明治二十九年、初倉村村長。大正七年六月二十五日、坂本村二五〇番地で、永眠した。享年七十二歳。その生涯は、実に波乱に富んだ人生であった。

剣を持って幕臣の意地を貫き、薩長に立ち向かった二十代までの今井信郎と三十二歳で出所した後の彼の人生は、大きく変っている。

明治新政府の出現は、武士の時代の終焉を告げた。そのことを冷静に受け止めた今井は、中條景昭、大草高重との交流を通じて、足元を見据えて生きる大切さを学んだのだ。

八丈島でも、初倉村でも農業の振興と特産品の育成に尽力し、その地方の功労者として讃えられる業績を残し、人生の幕を閉じた。

荷美館事件の不祥事は、生涯の痛恨事として景昭の胸に、いつまでも残っていた。だが、入植者たちは、時間とともに、その傷を忘れ去ろうとしている。

(事件の解決に当った伊佐新次郎は、もはやこの世にいない。たが、今井信郎がいる。彼は、今後も牧之原には、なくてはならない人物であり続けるに違いない)

景昭は、高重の命日に、墓前に立ち、牧之原の将来に思いを馳せた。

雨降って地固まる。墓前に集まった入植者の顔には、荷美館事件のわだかまりは、最早感じられなかった。

景昭は、高重の墓の周りに集まった旧幕臣の入植者とともに、牧之原を日本一の茶園に育て上げることを誓うのであった。

(二) 高重と駆け抜けた動乱の時代

爽やかな風が吹く季節となった。新芽が出揃い、茶園は、若草色に染まっている。雲雀が、空高く舞い上がり、牧之原の潅木の茂みの中に消えて行く。

八十八夜も近い。高重が逝って三年目の茶摘の季節が巡ってきた。

中條景昭は、牧之原にとって最も大切なこの素晴らしい季節に、何かが欠けていることを感じていた。爽やかな風さえも、景昭の沈んだ心を癒すことは出来ない。この収穫の喜びを共に分かち合う盟友大草高重が隣にいないのである。

景昭は、新芽の出揃った茶園を見廻りながら、高重との思い出に耽っていた。

拙者が、大草さんと初めて知り合ったのは、幕府講武所が設置された頃であった。彼は、騎射指南役として出仕し、実践用の弓術を教えていた。

当時の講武所は、武芸の達人が、指南役として迎えられ、幕府最強の武術集団であった。教授の中には、夷荻を打ち砕くには、武術の鍛錬しかないと信じて疑わない攘夷論者が多かった。稽古も激しく、実に活気に溢れていた。

槍の高橋精一（泥舟）、剣の榊原健吉、山岡鉄太郎（鉄舟）、関口隆吉、松岡萬、落合正中、柔の成瀬三五郎などそうそうたる連中が、指導に当っていた。その講武所の師範たちが、外圧に屈する幕閣の態度を潔とせず、幕府に攘夷の決断を迫り、「旗本攘夷十七人組」を結成した。

しかし、攘夷組が、幕府内での力を得る前に、時代は大きく変貌した。攘夷論は影を潜め、日本は、挙げて開国へと傾いて行ったのである。

攘夷の急先鋒であった薩長は、薩英戦争、四国連合艦隊下関砲撃事件を通じて、西欧列強の実力を知り、攘夷の旗を降ろした。だが、攘夷で沸き上がったエネルギーは、薩長が手を結ぶことによって、倒幕へと向けられた。

十五代将軍徳川慶喜公は、英明な君主として嘱望されていた。が、英明であるが故に、先を見る目が利き過ぎる。あえて火中の栗を拾うようなことはしない。身体を張って、幕府の倒壊を防ごうとはしなかった。幕府の存続が、日本の将来を危うくすると考えたのかもしれない。

慶喜公の生まれた水戸藩は、尊王思想の牙城であり、彼もその思想の影響を受けて育っている。彼の天皇家に対する尊崇の念は、歴代将軍の中では、群を抜いている。その心だけは、一貫して変わらなかった。

慶喜公は、十五代将軍を引き継いだ。だが、幕府の組織と制度の硬直化は進み、財政破綻や軍事力の弱体化は、目を覆うばかりであった。彼は、幕府が、内憂外患に、最早対応出来ないことを覚った。そこで、新しい政治体制を造るため、朝廷に政権を返上するという驚天動地の措置に出た。

大政奉還である。

拙者も大草さんも山岡さんさえも攘夷は、虚妄に過ぎないことが分かって来た。だが、倒幕は、幕臣として許しがたい。薩長の盟約は、拙者にも大草さんにも寝耳に水であった。大政奉還と討幕軍の編成は、幕府を大混乱に陥れたのだ。

討幕軍の進攻に対し、幕臣としていかに対応すべきか鳩首協議を重ねた。徹底抗戦を主張する者、慶喜公の意向に従う者、幕臣の地位も名誉も捨て、夜逃げ同様に立ち去る者、さまざまであった。

新政府の盟主をもくろむ薩長にしてみれば、徳川家の存続は、邪魔な存在でしかなかった。鳥羽、伏見の戦い

て幕府軍の実力を知った薩長軍は、時代の勢いに便乗し、一挙に倒幕に打って出て、徳川家の息の根を止めようとした。

ところが、肝心の慶喜公は、ひたすら恭順を決め込んで、上野寛永寺大慈院に謹慎した。慶喜公は、薩長との武力闘争を何としても避けたかったようだ。

仮に、幕府方が勝利を納めたとしても、旧態依然とした幕府機構を根底から変えなければならない。そのエネルギーは、新政府を組織し、操るより困難であると慶喜公は、判断したのだろう。幕府が、引き続き政権を担うよりも、新政府のほうが、日本の将来のためになると考えていたのかもしれない。

慶喜公は、新政府にあって、政治の辣腕を振るいたかったに違いない。だが、それは、薩長の策謀により、朝敵にされ、阻まれてしまった。

幕府の中にあっては、薩長の横暴許し難しとして、徹底抗戦を主張するものも少なくなかった。が、勝さん、大久保一翁さんに代表される開明派は、主戦派に対し、恭順こそが、徳川家だけでなく、日本全体を救う道であると訴えた。

拙者や大草さんを始め、山岡鉄舟、関口隆吉など攘夷派の幕臣たちも、この頃には、勝さん、大久保さんなどの開明派との親交を深め、攘夷論は、絵に描いた餅に等しいことが分かって来た。

それどころではない。徳川家の存続さえ危うくなって来たのだ。徳川宗家を守るためには、勝さんの言うように、やはり慶喜公の恭順しかない。そのためには、慶喜公の身の安全を確保することである。そこで、拙者は、大草さん、山岡さん、関口さんなどと図って、慶喜公の護衛を目的とした精鋭隊を組織したのである。

大草さんは、親戚筋の山名時富、小島勝直を始め、友人や門下生を集めて来た。拙者は、弟の加藤光正及び山本七郎、配下の内藤種光などを説き伏せ、参加させた。それに山岡、関口さんなどの講武所の関係者が加わって、精鋭隊は二百人を超える勢いとなった。拙者が頭、大草さんが頭取であった。

思えばあの頃が、人生の華であったような気がする。

慶喜公が、一ヶ月ばかり、水戸に謹慎している間に、徳川家の処遇が決まった。

徳川家は、七十万石に縮小され駿府に移封、田安亀之助が十六代当主となって、廃絶は免れた。

慶喜公は、水戸での穏やかな生活を続けていた。だが、世情は、一段と騒がしくなり、仙台、米沢、会津を中心に奥羽列藩同盟が成立。このままでは、政治的に利用されかねないと、慶喜公は懼れた。

十六代家達様が、駿府に移ったこともあって、慶喜公も駿府で謹慎を続けることになった。

七月の暑い日、水戸から駿府まで旧幕府軍艦「蟠竜」に乗り、清水湊に着いた。拙者は、大草さんと共に精鋭隊を率いて、その護衛に当った。

旧幕臣の中で、選びぬかれた武力集団の精鋭隊は、新政府にとっても脅威であっただろう。それだけにわれわれも新政府に刺激を与えないように気を使った。

そこで慶喜公の護衛から東照宮の護衛に切替え、名称も「新番組」と改めた。一年が経ったが、徳川家からの扶持米では、どうにも暮らしが成り立たない。困窮の度合いは、増すばかりである。そこで、帰農することを決意した。

「このままでは、新番組も生活のために解散せざるを得ない。この際、なりふりなど構ってはいられない。百姓をやりましょう」

大草さんの声が今でも耳に残っている。

徳川家に忠誠を尽くすわれわれ家臣団が、解散を免れるためには、集団で自活するしかない。

それには、まとまって生活が出来、互いに助け合える百姓が相応しい。幸いにして関口隆吉氏が、金谷ヶ原に広大な未開拓の土地があり、その土地は、徳川家のものだという情報をもたらしてくれた。

山岡、大草さんとその土地を見に行った。土地は、荒れていた。だが、東に富士を臨み、眼下に大井川が流れ、駿河湾に注いでいる。景観が素晴らしい。

大草さんと手を携えて、この荒地を開墾することにした。徳川家から無償で、土地の払い下げを受け、しかも藩の金谷開墾方として、扶持米まで頂き、開墾事業に打ち込むことが出来た。

これも勝さん、大久保さん山岡さんなどの口添えがあってのことである。

それから、版籍奉還、廃藩置県、家禄奉還、秩禄処分、廃刀令など相次ぎ、武士の時代は終わり、四民平等の時代へと移って行った。

だが、拙者も大草さんも新時代の制度には馴染めず、旧幕臣であるという誇りも捨てきれなかった。そのため、開墾作業も袴をはき、刀を差したまま行ったものだ。髷を切る者も少なかった。

景昭は、高重と初めて視察に来た地点に到着した。大井川の流れは、二十七年前と変っていない。富士も夕映えを受け、その雄姿を留めていた。

目を転じて、牧之原の台地を見ると、当初とは、すっかり景色が変っている。緑の茶園が広がり、潅木や雑草に覆われた荒地は、片隅にその名残を留め、かつて原野であったことを物語っている。

景昭は、高重の牧之原に懸けた夢の実現が近いことを覚るのであった。

（つづく）

懐郷記（続）

忠内正之

吉良の荘

私の故郷「吉良」の名称は、平安前期に成立した吉良荘園を名残りとするもので、吉良の荘名は西尾市八面山産の雲母に由来するものと言われている。

現在一般的に三州吉良と称せられているこの地区は旧幡豆郡である。平成二十三年四月すべての郡部が西尾市に合併された。西尾市が広域合併をする際、通りの良い吉良市と改称すべきとの声も出た様であるが、結果的に西尾市の侭となった。残念であるが已むを得ない仕儀である。

従って吉良という地名は西尾市吉良町にのみ残存することとなった。

次に吉良荘の歴史を見る。

吉良荘は現在の西尾市（旧幡豆郡）全体を指すと考えてよい。

吉良荘は早くから西条・東条に二分された。鎌倉中期の承久の乱の後、地頭の足利義氏が西条城（のちの西尾城）と東条城（現、西尾市吉良町鮫目）を築き、その子の代に二つの城を拠点に西条・東条の両吉良家が分立した。

東条吉良氏は南北朝期に奥州管領に就任、子孫は武蔵野国（現・東京都）世田谷の領主となった。東条吉良家の跡目は、後に西条家から養子を迎えた。これが上吉良氏と呼ばれ、元禄赤穂事件で敵役とされた義央はその子孫である。本家西条吉良氏と東条吉良氏は時として、血族の争いをするところとなった。

郡雄割拠する戦国時代、両城共に今川方の勢力下に入っていた。当時両城の当主を兼ねていた、吉良義昭は一向一揆に参加、徳川家康と戦って敗れて吉良家は滅亡した。時に永禄七年（一五六四年）であった。

西条は徳川傘下に入り西尾城となった。江戸時代の西尾藩は本多氏ほか二万石から三万五千石のいずれも譜代小藩が続いたが、明和元年（一七六四年）大給松平氏が六万石で入封し幕末に至った。

東条吉良氏は滅亡し、東条も徳川の勢力下にあったが、吉良良昭の異母弟吉良義定は、母俊継尼が家康の伯母に当たる縁故をたよりにして家康と接触を近めていった。

吉良家の家系が新田源氏である点を重視した家康によって旗本に取立てられた。義定は関ヶ原の合戦に参加して功名を立て、旧東条領内で二、二〇〇石に加増された。

その子義弥の時はじめて高家に登用され更に一、〇〇〇石の加増となり、高家二代義冬と続き、高家三代義央の時元禄事件が起きた。

吉良家の再度断絶後その領地は一時天領となり、後に譜代大名や旗本の相給地となった。村ごとに領主が分かれ、夫々に陣屋が設けられて統治された。

徳川三百年の間、吉良を含むこの三河地区は譜代大名や旗本の緩やかな統治下にあって領民にとっても穏やかで恵まれた暮らしが可能であった。

源を岐阜県上矢作町に発し、三河平野のほぼ中央をゆるやかに蛇行しつつ三河湾に注ぐ矢作川。滔々たるその流れは片時も休むことを知らず、悠久の歴史の中にこの川をめぐる壮大なロマンを秘めて今も流れ続けている

矢作川の清流と二つの支流（矢作古川と矢崎川）によって生じた豊かな土壌は、三河人特有の気質と文化をも醸し出したのであろうか。

ここで西尾市吉良町に的を絞って話を進めたい。

私は吉良出身ということに満足している。また誇りにも思っている。

故郷を離れて外に出て、吉良出身と名乗れば、他人様から「あの吉良ですか」とすぐに返事が戴ける心地よさを味わうことが出来る。初対面でも話題に事欠くことはない。

「忠臣蔵」に「荒神山」そして「人生劇場」。即ちそれらの主人公である吉良上野介・吉良の仁吉・そして尾崎士郎等著名な人物が出ているからである。

更に最近では、女流詩人「茨木のり子」の出身地としても知られて来た。茨木女史は私の友人の姉に当たる人で、若い頃面識もあったが二〇〇六年八十歳で物故された。清冽な詩を書く立派な方だったのにと残念に思う。

ここでは著名人の中の一人である荒神山の喧嘩で有名な吉良の仁吉の実像に迫って見たい。

吉良の仁吉（一八二九―一八六六）の実像

吉良の仁吉は吉良町を本拠地とした幕末の博徒であった　土地柄かこういった侠客を生む素地があったのであ

ろうか。話題の荒神山の粗筋は次の通りである。

伊勢の神戸長吉が桑名の穴太徳に縄張りを奪われたことから、長吉とは兄弟分の間柄で義理堅い吉良の仁吉は、長吉を応援するため妻「きく」を離縁して義兄の穴太徳と伊勢の荒神山で喧嘩して落命したという筋書きで知られている。

この物語は「血煙り荒神山」と題してしばしば浪曲・講談のほか映画や芝居で上演され人気を博している。

仁吉は本名を太田仁吉と言い、上横須賀村御坊屋敷（現吉良町上横須賀字寒破地）で天保十年（一八三九）に生まれた。半田（現半田市）の酢屋へ奉公していた十五歳のころから、体格がめきめき大きくなったと伝わっている。

やがて寺津間之助（西尾市寺津の親分で十手取縄を預かっていた）に認められて子分になったが、人を殺めたことから間之助の兄弟分である清水次郎長に修行のため預けられた。

清水で度胸をつけて帰郷後、間之助の代貸となって上横須賀に吉良一家を構えた。この時に新築した二階作りの母屋は、町内の旦那衆矢内嘉蔵より寄贈されたもので、この建物は後に移築され、平成十四年一月まで宝飯郡幸田町に個人住居として残っていたそうである。隠し部屋や刀傷の跡があったという。

仁吉には幡豆郡一色町（現在の西尾市一色町、養鰻で有名）に嫁いだ姉のいちがおり、その息子の記憶では、「仁吉は六尺近い大男で、あばた顔の左アゴに少し傷があって、その上少しドモリであった。ただし評判の孝行者で非常に腕が立った」と述べている。

吉良町出身の作家尾崎士郎は、小説「吉良の男」の中で「十八歳になった仁吉は吉良錦と名乗って初土俵を踏む」と書いているが、巡業番付などの記録は残っていないと言う。しかし当時身長が六尺程の大男なら相撲を取っていたとしても不思議ではない。

慶応二年（一八六六）四月八日、現在の三重県鈴鹿市加佐戸において荒神山の喧嘩が始まった。

顔が馬面の通称神戸の長吉（本名吉五郎）は、四年間の入牢中に兄弟分の穴太徳（後述する天田愚庵の書いた「東海遊侠伝」では安濃徳となっている。この先安濃徳を使用する）に、親譲りの貴重な縄張りを奪われ、困った末に三河の寺津間之助へ助けを求めて来た。

寺津間之助は、神戸の長吉とは兄弟分の杯を交わしていた。体調の故もあってかこの対応を吉良の仁吉に命じた。当時の年齢を見ると次の通りである。

寺津間之助　五十五歳
神戸長吉　五十二歳
吉良仁吉　二十八歳
（参考）清水次郎長　四十七歳

間之助の命を受けた、太田仁吉は、当時わけあって三河に滞在していた清水一家の大政らと相談して長吉を助けることにした。

清水一家の大政、吉良の仁吉、張本人の神戸の長吉、関東綱五郎、米太郎、龍作、越前生まれ法印大五郎、桃太郎、保太郎、上州田中の啓次郎、後の久居の戈次郎、四日市の教次郎、吉五郎、市五郎、勝太郎、駿河船越の幸太郎、丹蔵等、これに寺津一家の竹次郎、金八、藤助、倉太郎、重太郎の五人、更に現地で講釈師の清竜が加わった。総勢は二十三人とも二十八人とも言われるが、夜に紛れて寺津から吉良を経て伊勢湾を渡った。

この時軍資金として寺津の養国寺から千両（一両が十五万円として約一億五千万円）の援助を受けたという。

一行は戦いの二日前の四月六日四日市の港へ上陸し、直ちに加佐登に集まった。

次郎長は以前から甲斐国の博徒黒駒の勝蔵と争っていた。次郎長にとっては天敵とも言うべき因縁のある人物である。安濃徳は黒駒勝蔵、宝飯郡小坂井の雲風亀吉ら百人以上の加勢を得て清水一家を迎え撃つことになった。もともと安濃徳と神戸の長吉は共に日永追分（四日市市日永町）の黒田屋裕蔵（黒田屋一家）の子分であり、共存していたものを神戸の長吉の留守中に強欲を出して長吉の大切な縄張りを奪って争いとなったのである

安濃徳の子分角井門之助は信州松代の浪人崩れで剣の達人であり安濃徳側の指揮をとっていた。

仁吉は清水一家の大政の応援を得て自ら先頭に立った。

一時地元の目明し連中が調停にのりだしたが、安濃徳の強気が災いして不調に終った。

仁吉らは加佐登神社で戦勝祈願の参拝をした後東海道石薬師宿で待機した。角井門之助らは庄野宿で構えた。双方の距離は半里程しか離れてはいなかった。

そのころ、雲風一家が二十人以上を引き連れて漸やく応援にかけつけた。安濃徳側は総勢百三十人とふくらみ引くに引けなくなった。

いよいよ清水一家を率いる仁吉側と、門之助が頭領の安濃徳勢は臨戦体制に入ったのである。

伊勢に上陸してから二日後の四月八日、この日は荒神山の例祭で参詣する人が多かった。博徒同志の戦場はまさに混戦で勝敗の行方はわからなかった。安濃徳側の門之助は「まず大男を狙え」と部下に命じていた。仁吉も大政も大男であった。

二人は奮戦したが、仁吉は相手側の雇われ猟師の銃弾を受けた。大政はこれを見て助けにいったところ石につまづいて倒れた。門之助はそこをすかさず斬りつけたが、大政は倉で応戦し逆に打ち取った　頭領が倒されたので、

安濃徳側は狼狽して総崩れとなり逃げ去った。

安濃徳側の戦死者は五人、仁吉側の戦死者は法印の大五郎、幸太郎の二人で、重傷者は鉄砲でやられた仁吉、関東綱五郎、清次郎、市五郎の四人、その他無疵の者は一人も居なかったという。

大政は講釈師の清竜に命じて、清水次郎長に戦況を報告させた。さらに敵側の残した刀槍を片付けて石薬師に引き上げた。ここで仁吉はついに落命した。大政らの一行は夜を待って四日市港に着いた。遺体をのせて運ぶ船の手配に相当な苦労があったがようやく翌日早暁三河寺津に戻り、間之助に報告した。

荒神山の喧嘩後、次郎長は「兄弟分仁吉の弔い合戦」と称して仝年五月大船二艘で子分五百名近くを引き連れて大量の武器を携え、伊勢へ遠征し安濃徳に再度喧嘩を売った。

安濃徳はあっけなく戦わずして敗北した。この結果次郎長は伊勢をも配下に収めた。また仁吉の後継には清水一家の吉良勘蔵を推薦し相続させた。

吉良勘蔵については、明治四年（一八七一）三月、鷲塚騒動といわれる宗教事件が発生した時、この鎮圧のため管轄する菊間藩大浜出張所の命令で、十手を預かっていた寺津間之助一家と吉良勘蔵一家に、刀槍や鉄砲を持たせて取り締まりに当らせ成果があったとの記録が残っている。

この荒神山の喧嘩の内容は、天田愚庵が次郎長はじめ関係者からの聞き取りをもとに著した「東海遊侠伝」によるもので、他の実録と比較して大きな相違はない。

しかし仁吉の「女房きく」という人物はこの原本に出てこない。講談師である二代目神田伯山の創作によるものと思われる。

次郎長一家の物語りは神田伯山が講談に、広沢荒造が浪曲に脚色して人気を博した。日本人好みの「義理と人情」が受けて、映画やラジオやテレビでも繰り返し取り上げられている。

仁吉の墓所は吉良町上横須賀の源徳寺境内にある。仁吉の一周忌に清水次郎長が建立したとされ、今も参拝客が絶えないという。

源徳寺では古くから仁吉を偲んで命日の四月八日に墓前祭が営まれていたが、参拝客が多いので現在では毎年六月の第一日曜日に「仁吉まつり」が開催されている。

続く

八つ当たり語録（三）

新井宏

狂人の真似とて大路を走らば、即ち狂人なり。悪人の真似とて人を殺さば、悪人なり。驥を学ぶは驥の類ひ、舜を学ぶは舜の徒なり。偽りても賢を学ばんを、賢といふべし（徒然草）。

日本には諦観があり、事前対応は得意でないが、事故がおきてからの対応能力は優れている。大震災への対応も原発への対応もその例となってほしいが、心配なのは、最近の幼稚な正論、すなわち過剰反応である。諦観こそが日本を救う。

駐日ポーランド大使ヘンリック・リプシッツは「日本人は政府や行政がいかに変わっても（たとえ無政府状態になっても）自己規律を失おうとしないので社会構造そのものは壊されることがない」と看破した。

「地震の長期予測や予知は不可能で、東海地震の予知研究はやめるべきだ」と、ロバート・ゲラー東京大教授は、英科学誌ネイチャーで主張した。これが日本人の正常な感覚。彼は日本人か。

津波による死者・不明者は二万人を越えたが、原発の放射能による死者はひとりも出ていない。原子炉爆発まで起しながら、死者ゼロの記録は日本の事故対応力として世界から評価を受けるであろう。

評価しないのは日本だけである。チェルノブイリでは放射線被曝によって原発作業者が五十人亡くなっている。えっ、たったそれだけかって。もちろん、異説はあるが公式発表ではそうなっている。

原発には私も反対である。テロや通常兵器による攻撃に極度に弱いからだ。核兵器による攻撃には核抑止力で対応できるが、原発へのテロや通常兵器の攻撃は防ぎようがない。しかも地震や津波による原発被害よりもはる

かに確率が高いからである。中国や北朝鮮にはぜひ沢山の原発を作ってもらいたい。

その点、ドイツは実に賢い。

ドイツは、原発をやめて、隣の原子力発電の大国フランスやチェコから電力を買うと言う。東電が原発を東京近辺には置かずに、域外の県に置いて供給受けるのと同じ発想である。

東日本大震災をきっかけに、生涯のパートナーを得ようとする人が増えている。結婚相談所への照会が相次ぎ、成婚して退会するケースも急増し、婚約指輪の売れ行きも上々とか。

だから言ったではないか、子供手当などは少子化現象を加速するばかりで何の役にも立たないと。「一人口は食えぬが二人口は食える」。仕事が海外に逃避しないようにこそ税金を使うべきだ。

日本で最も出生率が高いのは沖縄県、最も低いのは東京都である。

民主党の功績。マニフェストとは実現不可能な選挙用の「ウソ」であることを白日の下に晒したことである。

東日本大震災の復興財源確保のため増税すると、日本経済は地盤低下してしまうから当面は国債発行で凌ぐべきとの意見がある。言っていることは正論であるが、いつも「大変な状況になる」と言って、増税を忌避してきたのが日本の政治。この際「増税もやむを得ない」と変化した世論に乗らぬ政治家がどこにいるか。

過去五年間で、ヨーロッパ主要国の物価上昇率は、ほぼ十パーセント、英国だけが十五パーセントで突出している。それに較べて極めて異常なのは日本で、わずかながら物価が下がった。その差分だけ消費税率を上げておけば万々歳であった。実質の物価上昇率が国際的にバランスしていれば国民は納得したはずだから。

小佐古内閣官房参与（東大教授）が「これを容認すれば私の学者生命は終わりになる」と「涙の会見」をして官房参与を辞任した。その時の根拠は「年間二十ミリシーベルトは、子供の発がんリスクを二百人について（多く見れば）一人増加させる」ということである。

ところでご存知であろうか。

日本人は男女平均で二百人につき九十四人が癌に罹かり四十二人が癌で死んでいることを。小佐古教授は原発推進の「御用学者」として知られていたことを。

白血病は放射線を多く浴びると発生しやすくなる一種の癌である。ところで、白血病の最有力治療「骨髄移植法」では、白血病細胞を死滅させるため手術前に数日間にわたり合計一万二千ミリシーベルトを全身に照射する。

放射線による致死量は七千ミリシーベルトとされているから、致死量以上を浴びせるわけだ。まさに毒を以て毒を制す治療法。

ついでにもうひとつ。局部癌を焼くための照射治療では、六万ミリシーベルト、すなわち致死量の十倍ほどの照射を行う。

年間二十ミリシーベルトを軽く見るわけではないが、ヒステリックになるレベルでもない。

一酸化炭素、塩素ガス、硫化水素、亜硫酸ガスなどの有毒ガスでは致死量の十分の一から五十分の一の濃度で症状が発生する。だから環境基準では、致死量の百分の一から五百分の一に規制されている場合が多い。

放射線の場合、症状が発生するのは、致死量の十分の一であり、話題の二十ミリシーベルトは五百分の一に相当する。なんだ有毒ガスと同じか。

いや、異なるのは一般の許容量を一ミリシーベルト以下にしようとする方向で走っていることである。

緑茶の放射能はどれくらい危険か。規制値は一キログラム当たり五百ベクレルなので、仮に年に二キログラム（千杯分）飲んでもその被爆線量は、自然界の六十分の一に過ぎない。しかし、緑茶二キログラム（千杯分）にはカフェインが致死量（十グラム）入っている。

アルコールの致死量は五百グラムであるが、五十グラムで目に見えた症状（酔い）が生ずる。しかし規制値はない。飲酒運転にも許容値はないが、国際的にはグラスワイン二杯（アルコール二十グラム）くらいまで許容する国もある。

大震災の四日後、政府発表の死者と行方不明者の合計は一万名強であったが、一ヶ月後には二万八千五百名となり、三万名に達する勢いであった。

ところが、四月中旬を境にして様相が一変、現在（九月九日）では、ついに合計二万名を切ってしまった。

八月頃までは毎日、平均して八十名ほど「生還」した勘定になり、毎日「大ニュース」のはずなのに、どのマスコミも大きく報道しない。

牛肉の放射性セシウムが大問題である。ところで暫定規制値のキログラム当たり五百ベクレルというのは、毎日牛肉を一キログラムずつ一年間食べ続けても二ミリシ

ーベルト、すなわち職業人に許容される百ミリシーベルトの二十分の一という値である

規制値オーバー分は焼却処分にするというが、牛肉を毎日一キログラムも食する者がどこにいるか。年に一度でさえも牛肉にありつけない世界の貧困層を思うと日本の「おごり」を誠に申し訳なく思う。

最近、NHKで毎日のように関東各地の放射線量率を報道している。それを見ていると北茨城ではその他の地域に較べて三倍（時間当たり〇・一五マイクロシーベルト）ほどあり、いかにも危険そうである。

しかし、もし画面の端に、ロンドン、ローマ、ニューヨーク、モスクワの線量率（〇・一～〇・二五マイクロシーベルト）を一緒に載せてくれれば、誰でも安心する。マスコミは本質的に「愉快犯」なのである。北茨城の人が悩むことなど考慮外。時には、精神安定剤の役割を果して見たまえ。

マニュアル作りの下手な日本人に、生産管理から、品質管理、販売、そして災害対応、時には戦争のやり方まで、マニュアル化することを薦めたのは米国。米国は多民族国家でそれを必要としたからだ。

しかし、日本でそれが定着すると、責任回避の手段となる。学童帰宅時の引き取りまで、事前登録者だけしか認めないほど「官僚化」が進むと、災害時にも、それを守れと言う。教育なんぞというものは、非常時の対応能力を付けることが第一である。

外務省の高官が「北朝鮮は、安否不明の拉致被害者の何人かを殺害していると思う」と発言したとウィキリークスが暴露した。

日本人なら誰でも内心で思っていることなのに、拉致被害者家族会はあくまで生存を前提に「圧力」による解決を求め、「対話も必要」とする元事務局長の蓮池透を除名した。

「圧力」をかけ過ぎて、拉致者被害者が本当に殺害されることなど心配していないのであろうか。あるいはもう殺されてしまっていることを良く承知しているからであろうか。

ウソが公然と語られるのが、外交交渉の発表である。しかし外交交渉は、本音で真摯なものでなければ成立しない。それを見抜けない者は国の利害を論じるべきではない。特にウソを人気取りに利用する政治家は許せない。

日本女性の平均寿命は九十年後には九十五歳になると言う。さあ、どうしたら平均寿命を下げることができるか。大変な研究テーマを突きつけられている。

老人にとって「読む」ことよりも「書く」ことの方が、精神活動として優れていると言う。もっとも「時間つぶし」のためにはとのニュアンスではあったが。

中国のレアアースの輸出規制は、外交戦略によるものではなく、レアアースの乱開発による過当競争を改善するためであると専門家は言う。中国政府は採掘を八万九千トンに規制しているが、乱開発で精製能力は二十万トンにも膨れあがって値崩れしていた。

しかし規制によりレアアースが高騰すれば、どこからか現れるのが常識。現に東大の研究グループは太平洋の海底に、これまで確認されている埋蔵量の約千倍ものレアアースを含む泥土を見付けた。採取も容易と言う。

オサマ・ビンラディンの襲撃は最初から身柄拘束は考慮外であった。

国家による個人の暗殺は国際法の禁ずるところであり、特に政治的な暗殺を厳しく禁じているのが米国である。だから戦争を理由にして公然と暗殺を実行したことに意義がある。

これで気に入らない独裁者は簡単にやっつけられる。金正日が震えあがっている

始末に負えない者。「思い込み」を「事実」として取り扱い、それをもとにして自分の理論や推論が実証されたと主張する者。「思い込み」を実証する方がはるかに困難なのに。

誰が何と言っても、超高層ビルは危ない。

韓国ソウルの五階建の三豊百貨店は、風も吹かない中で突然崩壊して大惨事となった。同じくソウル市内の三十九階建てプライムセンター複合ビルではわずか二十名が集団でエアロビクスをしただけで、共振により縦揺れが発生して数百人が避難する騒ぎになった。

M七級の地震が首都圏で三十年以内に起きる確率は七十パーセントだという。M七級とは今回の東日本大地震M九の千分の一のエネルギーに過ぎないが、それでも首都圏で起きると一万人単位の死者がでるという。

高層ビルは崩壊しなくとも局所変形する危険性はきわめて高い。もしボルト一本でも締め忘れがあれば、隣のボルトに過負荷がかかり、連鎖反応的にボルトが各個撃破されてしまう。特定の階に火災でも発生すれば、鉄梁が高温にさらされ、強度低下や膨張変形を起して歪んでしまう。高速エレベータは垂直度が数ミリ狂っただけでもトラブルという

そんな難しい話よりも、エレベータが止まり、水、電気、ガスの止まったビルにどうやって住むのか。安全のためなら、原発を規制する前に、高層ビルを規制しろ。

小泉政権の規制緩和策で、都心や駅付近には高層ビルが続出している。おかげで、地方に分散していた大学が都心に回帰している。青山学院大学は厚木にキャンパスを作って将来に備えていたが、学生減を恐れて、相模原キャンパスに移転し、今度は青山キャンパスに戻る。

橋本や相模原を散歩していると駅周辺に超高層ビルが乱立、近郊のアパートは空室ばかり。相続税対策などでアパートを建設した地主は詐欺にあったようなものだ。

仮設住宅建設などよりも、即入居可で、場所を選べば、地域ごとの入居も可能。施策の貧困を感じる。

週刊誌を見ていれば、大相撲における八百長など何ら珍しいことではなかった。少しぐらいの八百長ならあっても良いじゃないかというのが世論であったはずだ。

それが成り立たなくなったのは、横綱をはじめ上位陣が外国人によって占められたからである。外国人力士の活躍こそが大相撲の衰微と八百長の改善をもたらした。

中国浙江省の高速鉄道事故では、事故発生からわずか三十八時間で、重要な検証物件の先頭車両を現場に埋めて運転を再開した。百七名亡くなった福知山線事故では運転を再開したのが五十五日後である。中国の技術力はさすがである。見習えたまえ。

米国の破産の瞬間を心待ちにしている。

大変なことになるって……。いや、たいしたことはないさ。歴史上ではうんざりするほど例があったのだから。例えば、スペインの最盛期に、フェリペ二世が即位した時には、税収の五倍の負債があり、第一回目のバンカロータ（デホルト）をせざるを得なかった。その後も四回ほどバンカロータを続け、フッガー家が大被害を受けた。薩摩藩だって、年収の数十倍の借金五百万両を二百五十年の年賦という方法で踏み倒している。

状況は違うって。たしかに、そうではあるが、米国の国債がデホルトとなっても、おそらくアメリカ人がもっと働くようになり、中国に失業者が増えるだけのことであろう。

大変なことになるって……。困るのは「ドル」を商品として売買していた連中と金持ちばかりさ。借金に苦しむ庶民にとってインフレは恵みである。

円高になって困るって……。いや日本人は預金や資産をドルで数えれば内心はウハウハでしょう。

輸出が出来なくなって困るって……。いや「一万円札」をどんどん刷って輸出すれば良いじゃないか。米国が「ドル札」を増刷して海外に垂れ流していたように。

そういえば、バーナンキ米連邦準備理事会議長は学者時代に「不景気になればヘリコプターからドル札をばら撒けばよい」と語り、ヘリコプターベンの異名を取った。日銀に頼んでダメなら北朝鮮にでも頼むか。

そんなことをしたら円安になって困るって……。それなら円高で困るなんて言うな。本当に困るのは、円高で日本に働く場がなくなってしまうことである。

「一万円札」を商品として売買している連中はニコニコしている

米国が破産するとどこが一番困るか。言うまでもなく中国である。米国人の浪費が止まると、最大のお客が無くなり、しかも手持ちの米国の国債に大損害がでて、食糧輸入がままならなくなる。これを人民に転嫁すれば暴動が起きて政権は崩壊する。

中国にとっての致命傷は食糧問題。いまは食糧生産が順調であるが、異常気象の今日、五パーセントでも生産が停滞すれば、かってのソ連と同じように米国から大量に輸入しなければならなくなる。それはソ連共産党が崩壊した道である。

ご破算で願いましては……。いや、ご破産で願いましては……。

円高で困っているって……。

為替介入なんて姑息なことをせずに、節電と同じように、国民に円安を呼びかけ、日本国債は絶対買うなと協力を呼びかければよい。

レンブラントは弟子たちに「知識は実践せよ。さすれば知らぬ事、学ばねばならぬ事が自明になる」と指導していた。

少し知るとすぐにやって見たくなり、失敗しては恥ずかしい思いばかりをしてきた私にとって、勇気を与えてくれる言葉。学んでばかりいて実践しない人は、実は深い理解に達していないのである。

飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時移り、事去り、楽しび、悲しび行きかひて、はなやかなりしあたりも人住まぬ野らとなり、変らぬ住家は人改まりぬ。桃李もの言はねば、誰とともにか昔を語らん（徒然草）

流離（さすらい）の歌人　吉井勇
―その耽美と抒情―

石黒修身

はじめに

吉井勇（一八八六―一九六〇）については、今や歌人か熱心な文芸ファンは別として、知名度はあまり高くはないと思う。

現代短歌の分野では、年代的に旧い方に属し、まして前衛歌や社会詠、更には新しがりの口語短歌が多い現下の短歌界では無理のないことである。

しかし、明治、大正、昭和の三代にわたり正統的な和歌の筋を踏み、難解にわたらず、平易に流れず、気品のある作品を残している。

このことは、筆者にとっては、古典よりも現代短歌よりも、その感性と抒情性を身近かに感じ、強い共感を覚えるものがあった。

本稿では、この歌人の一生を概観し、その詩魂のようなものに聊かでも近づくべく、その作品を列挙しつつ概ね年譜の順に解説を試みたい。

勿論、勇の作品は、詩、戯曲、散文等多岐にわたるが、ここでは短歌についての記述にとどめる。

（一）経歴

一八八六年（明治一九年）東京に生れる。祖父友実は、西郷、大久保らと共に国事に奔走した維新の志士の一人で、のちの枢密顧問官。勇は父幸蔵母静子の次男として生まれる。

父は海軍軍人、退役し貴族院に入る。勇は幼時から鎌倉と東京に住み、府立一中等を経て早稲田大学に入るが中途退学する。

明治四十三年、京都に遊び祇園歌の想を得る。大正十年徳子と結婚し、江ノ島の片瀬に住む。昭和八年徳子と離婚し土佐に隠棲する。

昭和十二年まで土佐に留り、孝子と再婚する。翌昭和十三年京都に移り、以降京都を第二の故郷として晩年を過す。

昭和二十三年、宮中歌会始の儀に参列（選者）、八月日本芸術員会員となる。

昭和三十五年、京大病院で胃癌の手術を受け、小康を得るも再入院十一月十九日に死去する。

（二）幼少期

勇の祖父友実は、戊辰の役で功あった明治の元勲で、勇の名付け親でもあった。勇の幼年の日の追憶には白い頬髭を生やし、いかめしい祖父の面影があったであろう。

●いとけなき日のおもひでの目に浮き来祖父（おおおや）の頬の白き髭はも

●轆轤（ろくろ）と祖父（おおおや）乗らす馬車の音いまも遠（おち）よりひびき来るがに

●何ごとのありし夜ぞも祖母（おばば）も母も灯かげに泣きてましま（ます）

●六歳（むつ）の秋祖父（おおじ）の死と会ひてより無常のおもひ知りしならぬか

●祖父（おおじ）の葬りの列にわれありて赤坂見附過ぎにけるかも

勇は幼時から鎌倉と東京に住み、その頃が彼にとり追憶の中でも名門の家を実感出来た時期であったのか。

●母わかく眉目よくましきわれ小さく府高なりをその日遠しも

●寝ころべば青き芝生ぞ忘られぬいとけなき日の高輪の家

●道ばたの栗を拾へば高輪の家見て八歳（やつ）のわが姿見ゆ

鎌倉の別荘での追憶の歌がある。材木座の別荘から八幡宮の横手にある師範学校の付属小学校までの小一里を、父が中国から連れて来たという驢馬に乗り通ったらしい。

●砂のみち驢馬に乗る子のかなしみを知れるが如く昼顔の咲く

（三）少年期から青年期

六才まで鎌倉の別荘で育つが、秋には高輪の生家に戻り小、中学を経て早稲田大学に入り中退している。

この二十才前後に肋膜炎を病み、再び鎌倉で療養生活を送る。この間に歌書、文学書を耽読し、自からも作歌を始め、歌誌「明星」に作品を発表し、その耽美的な作風が注目され、北原白秋・木下杢太郎らと並ぶ新進歌人として遇された。

●君がため瀟湘湖南の少女（おとめ）らはわれと遊ばずなりにけるかな

●夏はきぬ相模の海にわが時燃ゆわがこころ燃ゆ

（四）青春期

勇は明治四十三年、二十五才の折京都に遊び祇園に係る作歌の想を得た。それは彼が東京を離れ流離の旅に出る契機となったのである。そしてここにおける作歌活動は彼の耽美、情痴派歌人としての名を高めることになった。

●かにかくに祇園はこひし寝るときも枕の下を水のながるる

●先斗町あそびの家に灯のうつる水なつかしや君とながむる

●ゆるやかにだらりの帯のうごく時はれがましやと君の言ふ時

●あかつきの光のなかになまめくは雑魚寝寝起の細帯の人

●伽羅香がむせぶばかりににほひくる祇園の街のゆきずりもよし

●島原の角屋の塵はなつかしや元禄の塵享保の塵

●紅燈の巷にゆきてかえらざる人をまことの我と思ふや

（五）結婚そして没落

大正十年三十六才の折、伯爵柳原義光の次女徳子二十二才と結婚し、新居を江ノ島片瀬に定める。大正十五年家督を相続し爵位を継いだ。父幸蔵は翌昭和二年に死去したが、多額の負債を残し、勇の身近に経済的な問題が生じた。

勇は金策のため、高輪の本邸を売り、移転した先は都心から三里も離れた荒川河畔の別寓であった。

●いまもなお耳に残れる荒川の岸辺の蘆の葉摺かなしも

●荒川の秋の出水に追はれ来し鼠の群におどろきにけり

●電燈もなき家なれば蝋燭の灯を吹き消しさむく眠るも

勇は妻徳子との間に一子滋を設けたが、異例な事件が契機となって昭和八年四十八才で離婚した。

その事件とは、社交好きの徳子が世に言う「不良華族事件」に係り、当時のメディアが大々的に報ずるところとなった。

この事件で宮内庁の処分は、徳子は華族の特権剥奪、勇は監督不行届で戒告処分であったと言う。勇はこの際爵位を返上したとも、戦後爵位廃止までは伯爵であったとも伝えられるが、事実は定かではない。

この間の妻徳子への勇の憤懣は強く、孤独感をつのらせその後放浪の旅を続ける端緒となった。

●願はくばひとりわがゐるうつし世のこの地獄より早く出でしめ

●われは旅に妻は夜戸出に子はひとり婢とあそぶあはれなる家

●妻も子も棄ててか旅に出でなまし苦しき時はかくおもへども

（六）放浪と隠棲

昭和八年妻徳子と離婚し土佐に隠棲する、勇四十八才であった。

五十才の折土佐の猪野々に草庵を造り渓鬼荘と名付けて住む。

この時期に勇は老いの身を蝕むのは酒のせいと考えたのか、酒との別れが始まったらしい。彼にとり歌魂を養う血汐のような酒との別れは痛烈な歎きであったと想像出来る。

●酒飲まずあれどものに酔ふごとしわが世の旅の愁いにか酔ふ

●破廂朽縁古り畳にも昨日の酒のにほひ残りぬ

（七）再婚

昭和十二年、勇は五十二才東京下町出身の国松孝子と結婚、京都北白川に居を定め六年間住む。

この頃から屈折の多かった人生に漸く転機が現われ、歌風も艶から寂びへの転換が明瞭になってくる。

●あはれさはわが侘び住みの破障子さむさむとして妹の貼り替ふ

●をりをりは娑婆の寒さをかこちつつ水洟爺となりてわが居る

●金欲しく鉄斎の絵を売りしこと悔みつつおもふ娑婆のさむさを

（八）終戦と最後の栄誉

終戦は昭和二十年、勇六十才であった。疎開先富山県八尾から京都に戻る。

昭和二十三年、勇六十三才の一月、宮中歌会始の選者となり、六月昭和天皇が関西行幸の砌大宮御所で谷崎潤一郎、新村出、川田順と共に拝謁、八月、日本芸術院会員に列せられた。

（九）歌碑建立と永訣

以降、作品の発表と出版を重ね、古稀を記念して祇園白川の畔に「かにかくに祇園はこいし・・・」の歌碑が建てられた。

昭和三十五年、七十五才胃癌、次いで肝癌を患い京大病院で死去十一月十九日であった。

（十）出自と負い日

勇の人生を通しての生き様の特徴として次のことが言えるだろう。

祖父は明治の元勲、父も貴族院に列し、勇も爵位を継いだ筈だが、伝えられる彼の生活振りは、華族としての栄耀栄華を感じさせるものはない。

勇にとっては、むしろ名門であることが、生得の古傷であり、負目であったのかも知れない。

ことさらに紅燈淪落と頽廃に身を置くことにより、名門という〝紋章〟に迷いつづけ懺悔しきれぬ余情が、流離癖を生み転々漂泊して世を過ごさねばならなかったのか。彼のもった負い目の重さを思うべきかも知れない。

（十一）余聞

① ゴンドラの唄

この唄は大正四年に発表され、巷間吉井勇の作詞、中山晋平の作曲とされているが、筆者は勇の作品の中にこの詩を見付けることはなかった。正確なところを知りたいと思って居る。

② 竹久夢二

勇の歌集のいくつかは、その表紙絵に夢二の描いたものがある。勇と夢二はよく似たところがあり、夢二は勇より七才年上だが年代も近い。若い頃から女性遍歴を繰り返したことも共通している。晩年二人は親しく往き来しており、加賀や伊香保にも一緒に遊んでいる。

夢二は画ばかりではなく「宵待草」をはじめとし、詩や童謡を書き俳句や和歌も詠んだ。

彼の詩画集は「三行分ち書き」を基本としている。彼の歌は啄木の形式と勇の情感を掛け合せたような味わいを持つと言われる。

夢二の詠んだ和歌を挙げる。

●九十九里月見草さく浜づたいものおもふ子はおくれがちにて

●黒髪の匂ほのかに身はうつつシネヤの花ベコニヤの花

●なやましく夜の露台に身をなげて今宵かも待つ夏は来にけり

これらの歌は勇の大正期の歌集のどこに載せられても違和感はない。要するに二人の間には共通の感性、抒情性が流れていたのだろうか。しかも夢二のあの独特な感傷的で哀愁を帯びた美少女の画に潜ませた何かが。

③ 私の履歴書

勇は昭和三十二年四月分の日本経済新聞「私の履歴書」に連載している。このことは勇と筆者の世代の近さを実感させたことでもあるが、筆者自身この頃の日経新聞を購読していたけれど目に触れた記憶はない。

勇はこの中で社会、読者に正面から向い、淡々と自からの人生を回顧している。

短歌のみならず与謝野寛をはじめとする文人らとの交流や戯曲、劇作に関する記述も多い。しかし自からの出自にまつわる家系、結婚等については極めて控え目に記している。

昭和二十三年に昭和天皇に拝謁し、後に芸術院会員に列せられたことについては、「私の起伏の多かった人生行路にもようやく明るい光明が射しはじめてきた」と記している。

しかしその終章では、「実をいうと私は文壇や歌壇の現状に絶望しているので、何を読んでもおもしろくなく、何を書こうという気にもならない。しかしこれからはもし何を書くにしても、長さや時に制限されるようなものでなく。すべて気まかせ、筆まかせ、心のゆくままなものを書くことにしたい。せっかく七十年の歳月をこうして生きてきたのだから、無理をしないで身をいたわり、もうしばらく世のなりゆきを見たいと思っている」と結んでいる

勇はこの三年の後に他界している「私の履歴書」のこのくだりは勇の世間に残した遺言なのかも知れないと筆者は想いを巡らせている。

おわりに

本稿は吉井勇の評伝と称するには余りにも粗略に過ぎ、彼の厖大な著作の一部分、然も短歌についてのみ描き出してみたが、勇の全体像に繋げることはとても無理であった。

筆者は勇の生き様と歌に対する共感と敬愛を何らかの形で記述したかったのである。

簡略と言えば聞こえは良いが、このような中途半端な論考の中に勇の全体像を押しこめようとした、筆者の無謀さ、未熟さの故と受けとめて頂ければ幸いである。

参考とした図書

吉井勇全集　番町書房
現代日本文学大系（25）　筑摩書房
日本の詩歌　中央公論
吉井勇　小高根二郎　沖積舎
私の履歴書（8）　日本経済新聞
短歌研究（月刊）　短歌研究社

行雲流水（三十二）

石黒修身

近詠二十首

桜なべ

浅草で馬肉食わんと旧友ら約して集う提灯の下

「桜」とは馬肉の異称食せしは吉原大門「桜なべ」の老舗（みせ）

「中江」とう桜なべ店創業の明治の風情を濃く留めおり

八十路向く同期の友ら健啖で酒を酌みつつ「コース」平らぐ

馬の肉食す文化は健在で老若男女舗（みせ）に溢れり

天満敦子

六号の台風余波を避けながら「天満」を聴けりＭＭホール

装いは簡にして素独特の清しき風姿十年変らず

今回はピアノとのデュオ「望郷のバラード」はやはり無伴奏が良い

自らは伴侶と称す「ストラデ」を抱きてひたに励みいるらん

「追っかけ」にあらじ「天満」には小さき縁（えにし）のありて楽しも

政局

自からを「どじょう」と称し泥臭く地道に行くと新総理宣す

「ノーサイド」言わねばならぬ対立の宿痾を宿す党を危ぶむ

短歌

国よりも党のまとめを先んずる新総理牽く政権如何に

政治家は言葉がいのち思慮もなく発する言辞危うからずや

国家とはかくして追いつめられるのか外交にみる露骨な圧力

日常

黒き牛耳の黄タグの番号は個体識別肉となりても

もの言わぬ牛こそあわれ放射線屠されてもなお危ぶまれおり

「陸前」の薪焚かざるは風評か「五山送り火」やるせなきかな

閉塞の著るき世情に大いなる希望与えし「なでしこ」称えん

もうひとつの世界一ありこの夏にスカイツリーは634mを決める

短歌　三十首

曽根竣作

流氓の民

蕉葉の葉うらに夕陽かがよひき濁水渓にマントさすらふ

二極なるふるさと杳くみんなみの輝く海に雲奔りゆく

俯瞰する東シナ海波高しサンドミンゴ城の砲架も錆びて

いちめんに泰山木のにほひ初め一葉ぼってり新芽ひらきつ

たをやけくすき羽蜻蛉群れとべる夕べの沼に斜光おだしも

夏更けてしづかに兆すほほゑみか金木犀咲くにほひあらたに

ニット帽ななめに冠るわかものよ何故か異端の放浪者めく

ひゆうと鳴る頭上かすめし虎落笛(もがりぶえ)マルクスはかつて愛読書なりき

帰郷する船たそがれてわが影を流氓の民と蔑(なみ)せんかさて

戦場にナショナリズムは捨て去れどなほ黙ねんと昭和史を読む

濁水渓・・・台湾の一級河川

淡水渓(たんすいけい)

黒あげ羽まがきを超ゆるおそ夏を陽の矢いくすぢ天より垂(た)りつ

乱獲に激減つづくアルバトロスとり島の崖にいまも生き継ぐ

うすら陽にテトラポッドの影蒼く日昏れて波の四囲に砕けつ

望蜀の果てはいづこぞこのページこのひとときに秋惜しみけり

たたなはる峯々しづか七星山くも井に浮かぶ道を登り来

いりあひの観音の峯美しきかな淡水渓をふもとに曳きて

辛夷咲く限界集落谷ふかくゆき交ふ人らみなうつむけり

いく粒かくすりを探り老婆あり影絵のごとき限界集落

噴上げの柱つらぬく空洞のはたて一夏(いちげ)の動かざる白雲(くも)

星涼しき宵を北斗のかげ杳(とほ)く南風(はえ)頬に受け鵝鑾鼻(がらんび)に佇(た)つ

七星山・観音山は台北近郊の名山

一糸乱れず

卓袱台に笠氏(りゅう)と娘対き合ひて寡黙に過ぎつとうきよう物語

汽笛鳴る山下公園のひるさがり鼓笛の隊伍近づきて来る

新緑をきざみて歩む鼓笛隊ハマの往路を一糸みだれず

けふひとり庭のサルビア陽を吸ひてたまきはるわが運命を思ふ

一滴の水に溢るるつくばひのうつの堆積うべなふべしや

ざんざんと大き没り陽の海に落つ周りしづけき無防備のとき

ばさらなる羽根打ち合ひて烏二羽空中交叉す縄ばりのため

白雨しげき浜のなぎさにうす蒼く磯巾着の干からびてをり

昭ちゃんはいい奴だった犬山より訃報とどきぬ彼岸の夕べ

寄せ返す波かぎりなくひと日昏れ自づからなる悔恨もあれ

鯨游海

漢詩

潮騒錄（六六）

泊能登和倉温泉加賀屋

平成廿二年九月

夙聴弾琴風雅調
飛天像壁麝香漂
醉湯睡足醒珈琲
加賀今知絹路要

押韻・調　漂　要

〈能登和倉温泉加賀屋に泊す〉

夙に聴く弾琴　風雅の調べ
飛天像の壁に　麝香漂ふ
湯に醉ひ睡り足りて　珈琲に醒むれば
加賀いま知る　絹路の要なりしを

〔注　解〕

会社の社員旅行で北陸に遊んだ　羽田から小一時間、やはり空の旅は速くて便利だ。加賀屋といえばここ数十年間、フロが選ぶサービスに優れた旅館としてNo.1の評価を得ているという。職場研修の一環として総支配人の講義を聴講し、得る所が多かった。

早朝ラウンジ飛天の間で珈琲を味わう。窓外には波静かな日本海が目路の彼方に広がり、その向うに在るであろう大陸を想像した。そうだ、ここはシルクロードの接点の一つの港街でもあった。加賀の絢爛豪華な熟成した文化はやはり東西文化の融合の結晶でもあろう。

〔口語訳〕

早朝のラウンジで端座した佳人の弾く琴の風雅な調べを静聴した。飛天像の壁画が四囲に描かれ、麝香のエキゾチックな香りが何処からともなく漂よう静謐の空間。

前夜、酒と温泉を堪能し熟睡したので朝の珈琲が美味い。ここ加賀が絹路の要であったことを今始めて知った。

☆奥ゆかし加賀のみやびのエキゾチク
シルクロードのるつぼなりしか

一代梟雄亡國元
須臾政變亦何論
短長過度猶不及
萬事中庸是至言

押韻・元論言

〈独裁国と日本国〉

一代の梟雄は　亡国の元
須臾の政変　また何をか論ぜん
短長度の過ぎたるは　及ばざるが猶し
万事中庸　是れ至言なるかな

〔注　解〕

梟雄＝残忍で勇猛な人物。邪まで勢いある指導者。
須臾＝僅かの時間。しばらく。たちまち。たまゆら。
リビアや中近東諸国、北朝鮮。多くはカダフィー大佐や金正日ら梟雄が長期専制する独裁国。何れも亡国の危機に瀕している。長期権力は必らず腐敗する。
同様に民主々義国家を自任する我が日本は、宰相の人材に恵まれず短期政変により不安定な政治状況にある。
長短何れにも欠陥がある。論語「過猶不及也」

☆過ぎたるはなほ及ばずと古人謂ふ
　万事中庸至言なるかな

天崩地裂濁浪充
街沒船顚家漾沖
鷄犬不鳴燈不點
未看人影月明中

押韻・充沖中

〈東日本大震災〉

天崩れ地裂け　濁浪充つ
街沒し船くつがへり　家沖に漾ふ
鷄犬鳴かず　灯点らず
未だ看ず人の影　月明の中に

〔注　解〕

鷄犬の鳴く声は老子以来「平和な村里のようす」を現わす象徴的辞句となった。太古から人と鷄犬は共存した。
神仙伝「鷄犬相聞」、陶潜・桃花源記「鷄犬之聲相聞」とある。街や村里に夜が来ても灯火が点らない異常。
未曽有の大震災の様子を映像で具に見た。
映像も凄かったが、実際は更に残酷なものであったろう。所詮、映像で見聞出来るのはその一少部分に過ぎない。私の想像力が如何に貧困かを後程思い知った。

☆天地の崩るるときか果てもなく
　おののき堪ふる犬を抱きて

《漢詩の流れ55・清その四》王士禎

王士禎（一六三四～一七一一）。原名は士顒。名を変えさせられたのは雍正帝の諱（胤禛）を避ける為に死後追賜されたもの。漁洋山人とも号す。山東省の人。
進士に合格、官界で順調に昇進、刑部尚書となる。若くして詩名高く、一代の詩宗と仰がれた。

秋柳（しゅうりゅう）

秋來何處最銷魂　秋来何れの処にか最も銷魂なる
殘照西風白下門　残照西風白下の門
他日差池春燕影　他日差池たり春燕の影
祇今憔悴晩煙痕　祇今憔悴す晩煙の痕
愁生陌上黃驄曲　愁ひは生ず陌上黄驄の曲
夢遠江南烏夜村　夢は遠し江南烏夜の村
莫聽臨風三弄笛　聴く莫れ風に臨む三弄の笛
玉關哀怨總難論　玉関の哀怨総て論じ難し

秋が来て最も人の哀愁をそそる柳の名所はどこだろう。
それはいう迄もなく夕映えに秋風吹く白下の門だろう。
春先には燕が上に下にと飛び交い影を落としていたが、今はその柳の糸も衰れ果て跡には夕もやが佗しく漂う。
路上で愛馬の死を悲しむ「黄驄の曲」を聴き愁を生じ、江南の烏夜の村で夜カラスが鳴き騒いだ事も遠い夢だ。
風に向かって三度吹く笛の音を聴くのは止したがいい。
玉門関で吹き鳴らす「折楊柳」の曲などという迄もない。

江上（こうじょう）

呉頭楚尾路如何　呉頭　楚尾　路いかん
烟雨秋深暗白波　煙雨　秋深くして白波暗し
晩趁寒潮渡江去　晩に寒潮を趁うて　江を渡って去る
滿林黃葉雁聲多　満林の黄葉　雁声多し

呉から楚にかけての路はどうであろうか。
霧雨のけむる秋は深く白波は暗い。
夕刻寒々とした潮に乗って江を渡ってゆけば、林には黄葉が満ち満ち雁の声があちこちから聞こえてくる。

泰淮雜詩（しんわいざっし）

年來腸斷秣陵舟　年来腸断す　秣陵の舟
夢繞泰淮水上樓　夢は繞る　泰淮水上の楼
十日雨絲風片裏　十日　雨糸　風片の裏
濃春烟景似殘秋　濃春の煙景は　残秋に似たり

南京は泰淮河のやかた舟や河畔の酒楼それこそ私が多年腸もちぎれんばかりに憧がれ夢にさえ見たものであった。
この十日間はこぬか雨が降りそぼり風が吹きすさび盛りの春の風景は恰も晩秋にそっくりだ。

（秣陵＝南京の古名）

身代り（前篇）

堀内永人

一

平成五年十一月五日金曜日の夜十時過ぎ、日頃、平和でのどかな伊豆の湯ヶ島温泉郷に、火災の発生を知らせるサイレンが鳴り響いた。

半年間で、六回も火災が発生したのである。

最初の火災は、平成五年六月十五日の夜十時過ぎに、湯ヶ島温泉、本谷旅館の仲居、赤池冬子が住むアパート山田荘の付属物置から出火した。さいわい直ぐ近くの湯ヶ島小学校の消火設備が活躍して、アパートの外壁を焦がした程度で、ことなきをえた。

この火災は、火の気のないところが火元と見られ、放火の疑いで捜査が進められた。

美人の仲居、赤池冬子に横恋慕して、山田荘の周辺を徘徊するストーカー、本谷旅館の板前、関戸由三が重要参考人として、警察から事情聴取されたが、証拠不十分で釈放され、未解決のままである。

二回目の火災は、山田荘の火災から一ヶ月後の七月三十一日の夜九時頃、「ぽっくり地蔵尊」で有名な正源寺に隣接する、一戸建て住宅が全焼した。

この火災も、火の気のない所から出火したことと、被災家屋に高額な火災保険が掛けられていたことで、保険金目当ての放火事件ではないかと疑われた。しかし、これも未解決のままである。

三回目は、八月二十八日土曜日の午後八時過ぎに、最初の火災現場の直近の物置小屋から出火した。

この火災も火の気のないところが火元と見られた。

しかも、被災物件が、最初の火災と同じ山田藤吉所有の小屋であった。所有者の長男で、消防団員の山田漣一は、なぜか出火原因の究明に、消極的であった。

住民は、放火魔の仕業ではないかと震え上がった。

犯人は愉快犯か、それとも世間に恨みを持つ者の仕業か、住民はお互いに疑心暗鬼となり、温泉街に気まずい雰囲気がただよい始めた。

その翌日、町当局は事態を重く見て、急遽、町長・助役以下幹部職員が集まって対策を協議し、夜警団を組織することになった。

夜警団は、湯ヶ島消防団の幹部で、温泉旅館青雲荘の専務青山健太郎、同じく田方信用金庫の職員中原修一、同じく会社員の山田漣一らが中心になって組織され、早速その夜から夜間巡回が始まった。

そんなある日、消防団員の夜間巡回時に、誰言うともなく、

（巡回のない夜に、火事は起こる）

という噂が流れ、さらに、

（三回目の火事のときに、警察は火事の様子を撮影しないで、消火作業の消防団員や火事場見物の野次馬の方にカメラを向けていた）

という噂もささやかれた。

秋の彼岸を過ぎた九月二十六日の夜半、四回目の火災が発生した。火災は、湯ヶ島の温泉場から北へ三キロほど下がった、子宝の霊泉で人気がある、吉奈温泉大鳥旅館の従業員寮であった

今回も火の気のない自転車置き場から出火し、バイクと自転車が数台燃えただけで、消し止められた。

この日は日曜日のため、消防団員による夜間巡回が行なわれなかった。

（消防団員の夜間巡回のない夜に、火事が起こる）

という噂が現実となった。

（土地勘があって、消防団の内情に詳しい者が犯人ではないか？）

という話が半ば公然と語られ始めた。

そして、大鳥旅館の従業員から、当日の夜、白っぽい小型車に乗り込む不審な人影を見たという情報が提供された。不審者は、小太りの男で、自動車に乗るときの足取りが少し重そうだったということであった。

また、その夜の十一時頃、湯ヶ島温泉天城会館の地階にあるスナック「白百合」に、本谷旅館の板前、関戸由三があわただしく駆け込んできて、白百合のママに、アリバイ工作を頼んだという噂が立った。

さらに、火災現場付近で、由三の姿を見かけたという情報が警察に寄せられた。警察は、不審な行動の目立つ由三を、捜査本部に呼んで事情聴取したが、由三は、

「知り合いの女性を訪ねただけだ」

と、当日のアリバイを主張して、犯行を否認した。

その後、青山健太郎、中原修一、山田漣一ら消防団員は、消防本部の会議室に集まって、夜間巡回の強化について話し合った。

警察では、白い小型車を持った小太りで、歩き方に特

徴のある男に焦点を絞って、消防団員の一人ひとりについて内偵を始めていた。

それから三日後の土曜日、中原修一と組んで夜間の見回りを終えた山田漣一は、天城会館の地階にあるスナック白百合に姿を見せた。

白百合のママ伊郷真紀子は、知的な美貌と巧みな英会話で、伊豆を訪れる外国人観光客になくてはならない存在であり、白百合の常連客は、いつしか彼女のことを「伊豆のマドンナ」（伊豆の恋人）と呼んでいた。

真紀子は、カウンター席の片隅に腰を下ろして、考え込んでいる漣一を見て、

「漣一さん、どうしたの、今日は元気がないわね。何か会社で嫌なことがあったの、話してごらん。少しは気が晴れるわ・・・」

と優しく漣一を慰めた。漣一は、幼馴染の真紀子に慰められて、いくらか癒された気がした。

その夜、真紀子は、弁護士であるフィアンセの財前光夫に、内気な性格の漣一が気になり相談した。財前は、

「それは難しい問題だな・・・・　漣一君が心を開くのを待つしかないかな」

と真紀子の問いに答えた。

二

それから半月経った十月二十日の薄暮、突然、火災を知らせるサイレンが山間の温泉町に鳴り響いた。

火災現場は、国道一三六号線から少し脇道に入った下船原の自動車部品工場であった。

出火の通報は、付近の住民から一一九番にあった。

遂に五件目の火災が発生したのであった。

それもこんなに早い時間帯に・・・・　住民は恐怖に震えあがったが、さいわいにも誤報であった。

しかし、その日の夜半に本当に火災が発生し、再びサイレンが町中に鳴り響いた。

火災現場は、町のへその部分にあたる青羽根地区の国道一三六号線沿いの製材工場の物置小屋であった。

火災は、製材工場の裏手の狭い町道に沿ったところで、夜間は通行人もなく、火の気もない場所で起こったのである。

火災の第一報は、出火の直後に匿名で一一九番にあったが、この匿名通報とは別に、出火当時、たまたま近くを通りかかった住民が、白っぽいセダンの自動車に乗って南に走りさった不審者を目撃していた。

不審者は、小太りで、外灯に浮かび上がった顔は、人気タレントの「U君」に似ていたという証言であった。

警察は、この目撃証言をもとに、不審者を隠語で「U君」と呼び、ある人物の行動確認を強化した。

住民は、一連の火災を《天城の鬼火》といって恐れた。

消防団員の中原修一は、これらの目撃情報を推理して

いるうちに、毎日一緒に夜間巡回している漣一が、顔も小太りの体型も、目撃証言の「U君」に似ていることに気付いた。そのうえ、彼が通勤に使用している車は、白のセダンだ。しかも、職場で使う油が沁みた安全靴を履いて、右足を引きずるように歩いている。

（そうか、「U君」とは、山田漣一のことか？）

そう思った修一は、勤務先の信用金庫から帰宅すると、友人の青山健太郎に電話して、自分の考えを話した。

次の土曜日、夜間巡回終了後、修一は話したいことがあるからと言って、漣一を自宅に誘った。あらかじめ連絡しておいた健太郎も、すぐにやってきた。

修一は、固くなって正座している漣一に、

「漣一君、今度の青羽根の火事で、不審者の目撃証言があったようだ。その話を君も知っているか」

とおだやかに訊ねると、漣一は、

「うん・・・・」

とわずかに頷いた。すかさず修一は、

「漣一君、今度の火事では、警察は『U君』なる不審者を絞り込んで、尾行しているという噂だ。きみ、心当たりはないか」

と問い詰めると、漣一の顔がゆがみ、喉元がヒクッ、ヒクッと苦しげに動いた。修一と健太郎は、

（やっぱり漣一は怪しい・・・・）

と思った　すると漣一は、突然、

「ワァー・・・・」

と大声をあげて泣き伏し、

「おれは知らない。おれの家は被害者だ。自分の家に火をつける奴がいると思うか。おれの家は二度も火を付けられたんだ。おれはなにもやっていない」

と、喉から絞り出すように叫んだ。

「なに、自分の家に火を付ける奴はいないって？」

修一と健太郎は、唖然としたが、そのすぐ後で、

「ウーン、そうか・・・・」

と、一瞬納得したような気がした。

そのとき、いままで泣きべそをかいていた漣一が、

「おれを馬鹿にしやぁがって、おれは帰る」

そう言うと、右足を引きずるようにして帰っていった。

（漣一は絶対黒だ）

と思った修一と健太郎の二人は、拍子抜けして、

「やっぱり警察に任せるしかないか」

と思った。時計の針は、夜中の十二時を廻っていた。

五回目の火災があってから、半月経った十一月五日金曜日の夜十時過ぎ、修一や健太郎の家から三百メートルほど離れた民家から、六回目の火災が発生した。

出火場所は、猫越川に沿ったヒノキの大木のある一軒家で、その家の周りには生垣があり、道路からは屋敷の中が見えにくかった。

消防団員の中原修一が、火災現場に駆け付けると、山田漣一が既に消火作業をしていたので、一瞬驚いた。間もなく消防車も出動し、川の水を汲み上げて放水した。

修一と漣一は、協力して消火に当ったが、修一が民家の裏側に廻ろうとした時、

「修一さん、そっちにはガスボンベがあるから気をつけて・・・・」

と、漣一が大声で叫んだ。

「なに、ガスボンベがあるのか。そうか・・・・」

修一は、漣一の気配りに感謝した。

火災は、一時間ほどして鎮火し、警察は、火災現場の証拠保存のため、立ち入り禁止の処置を取った。

翌日早朝より、現場検証が始まった。

その結果、ガスボンベ置き場の周辺から、幾つかの足跡が取れ、足跡の中の一つから微量な油の反応が出た。

直ちに鑑識に廻され、油は工場で使われる切削油の一種であることが判明、それと同時に、その足跡が、《日の出製靴》の安全靴のものであることも判明した。

警察の動きは速かった。その日の内に、安全靴の販売店から重要参考人を絞り込んだ。

重要参考人は、修一が予想したとおり漣一であった。

夕方には、漣一に対する逮捕状が出て、大仁警察署に身柄を拘束された。が、漣一は、警察の厳しい取調べに対しても、絶対に口を割らなかった。

（消防団員だ、ガスボンベの近くに行く可能性もある）

警察も攻めあぐねていた時、有力な物証が見付かり、その物証を突き付けられて漣一は遂に自白した。

五回目の火災現場である、青羽根の製材場の焼け跡近くに、普段見かけない半生木の、ヒノキの小枝の燃えカスが落ちていた。それを警察は押収していたのである。

一方、証拠品として押収された、漣一所有の白いセダンのトランクにも、ヒノキの枯れ枝が残っていた。

燃えやすいヒノキの枯れ葉を、火付け木に使ったのだ。

最初は、人の迷惑を考えたのか、自分の家の借家に放火した。それが次第にエスカレートして、無差別に放火を繰り返すようになったのであった。

火付け木に使ったヒノキの葉は、自宅の庭に落ちていたもので、それをビニール袋に入れ、乗用車のトランクに隠し持っていた。このヒノキの枯れ葉が、決め手となったのである。

半年間にわたって伊豆半島の住民を震撼させた連続放火事件も、ようやく終息した。

火災が縁で知り合った青山健太郎と赤池冬子は、華燭の典を挙げ、中原修一も披露宴に招かれた。

伊豆のマドンナ・伊郷真紀子の結婚もそう遠いことではない。平和な伊豆湯ヶ島温泉郷に再び温かな湯煙りが立ちこめた。

三

《天城の鬼火》と怖れられた静岡県伊豆半島の連続放火事件も、平成五年十一月八日、三十二歳の被疑者山田漣一が逮捕されて終焉した。

逮捕された漣一は、その夜、正面と横向きの写真を撮影され、さらに、指紋と掌紋を採られて、そのまま留置場に留置された。その後、警察で用意した遅い夕飯を済ませ、入浴した後就寝した。

警察では、被疑者の自殺など万一の事態に備えて、看守二名のほかに、警察官二名を増員して監視に当った。

留置場で一夜を明かした漣一は、翌日午前六時過ぎに看守から声を掛けられて、寝具を片付け留置場内を清掃した。洗面の後、母親が差しいれた朝食を食べ、しばらく休憩した後、午前八時三十分から取調べが始まった。

取調べは、大仁警察署刑事一課鈴木警部補が主任となり、二人の警察官が当った。まず家庭状況、経歴など簡単な事項から始まり、続いて十一月七日に発生した「猫越川民家放火事件」について、放火の動機、放火の方法など細部にわたって供述させたところ、その内容が警察で捜査収集した証拠とほぼ一致した。

翌日の十一月十日午後一時過ぎ、大仁警察署長は、刑法第一〇八条「現住建造物等放火の罪」で静岡地検沼津支部に送致した。

地検の担当は大杉勇一検事で、被疑者を大仁警察署に留置したまま身柄を受取り、直ちに取調に掛かった。

漣一は、素直に取調べに応じた。検察官の取調べを受け、即日、裁判官の勾留質問を受けるため、静岡地方裁判所沼津支部へ連行された。

裁判所へ着いた漣一は、法廷とは別の部屋で、裁判官から猫越川民家放火事件について犯行事実確認があり、勾留期間は、十一月十一日から二十日までの十日間と決まった。

勾留期間が決まると、直ちに大仁警察署に戻され、残る五つの放火事件について取調べが始まった。

漣一は、七月三十一日の正源寺隣家放火事件以外は、比較的すらすらと話したため、調書をとる取調官をほっとさせた。

動機について漣一は、

（勤務先で上司にたびたび叱られ、それが原因で、鬱憤が溜まり、その憂さを晴らすためだった。赤い焔が燃え上がると、胸がすーっとなった）

と供述した。

警察が、裏付け捜査を終えた六つの放火事件は、

①平成五年六月十五日、山田荘放火事件
②平成五年七月三十一日、正源寺隣家放火事件
③平成五年八月二十八日、湯ヶ島物置小屋放火事件
④平成五年九月二十六日、吉奈温泉大鳥旅館従業員寮放火事件

⑤平成五年十月二十日、青羽根製材工場放火事件
⑥平成五年十一月五日、猫越川民家放火事件
であった。
勾留期間が半ばを過ぎた十一月十六日の昼頃、大仁警察署の受付に、弁護士の財箭光夫が現れ、漣一の私選弁護人になると申し出た。
財箭は、師である高桑正行法学博士の法律事務所で弁護士活動をしている。高桑博士は、著名な刑法学者で、政治家の絡む裁判や、難事件といわれる裁判の弁護団にはほとんど名前を連ねていた。
被疑者と弁護人は、刑事訴訟法第三十九条第一項の規定により、立会人なしで面会できる接見交通権がある。
財箭は、留置場に来て、父親の山田藤吉と、漣一の幼馴染伊郷真紀子の依頼で、私選弁護人を引き受けたことを告げて、漣一に、「弁護人選任届」に署名と指印を押させた。
漣一は連日取調官から厳しく追及されたが、第二の正源寺隣家放火事件は頑強に否認し続けた。
検察官は、二回目の勾留後、第二の事件を除く五つの事件について、静岡地方裁判所沼津支部へ起訴した。
漣一は起訴された後も、第二の事件について取調べを受けるため、引き続き大仁警察署に留置されていた。
漣一の家庭は、連一と、五十八歳の父山田藤吉、五十五歳の母梅子、高校生の弟秀二の四人家族であった。
父親の藤吉は、地元の森林組合に勤め、僅かであるが農地と山林を所有し、勤めの余暇に田畑を耕していた。
一方、母親の梅子は、次男秀二の教育費の足しにするため、パートで温泉旅館の調理場で働いていた。
弟の秀二は、県下有数の進学校である静岡県立韮山中央高等学校の三年生である。
秀二は、小学校五年生の時に、知能テストで、知能指数（ＩＱ）一三六と、驚異的な高さを示して周囲を驚かせ、小学一年から今日まで、学業成績は常にトップクラス。親からも、学校からも大いに期待されていた。
弁護人の財箭は、漣一と警察署で面会を重ねているうちに、事件については口を閉ざすが、雑談の中で、弟秀二の大学受験の話になると、
「先生、その後、秀二の成績はどうでしょうか」
と、しきりに弟秀二のことを気にしていた。
そんなとき財箭は、真紀子がふっと洩らした、
「漣一さんは、弟の秀二さんが欲しがる物は、参考書でも何でも、よく買ってやるようよ。お父さんが違っても、歳が離れた弟は可愛いのね・・・」
という何気ない話を、思い出した。
（漣一は、母親の愛情まで弟に奪われ、弟を恨んでいる）
というのが世間の見方であったが、財箭の見方は、少し違った。
つづく

目耕録（その五）

――深沢七郎著『百姓志願』を読む（『毎日新聞社』、一九六八年）――

目耕：目で紙田を耕す。読書することを譬えて言う（世説新語）。

山本鎭雄

その後、七郎が発表した戯曲「楢山節考」（一九五八年）では、場所は「信州の山村」、時代と時期は「江戸末期、夏」（第一幕）である。ところが、そのモデルは信州の山村ではなく、七郎がしばしば訪れた石和から八キロ南の山村、いとこが嫁入りした東八代郡境川村大黒坂である。しかも会話の文章は信州弁ではなく、七郎が子供の頃から話し馴れた甲州弁である。
信州の貧しい山村では口減らしのため、乳児は間引きされたり、七十歳になると「楢山まいり」という厳しい棄老の掟があった。年末、老婆のおりんは心の優しい息子の辰平が担ぐ「しょこ」（背板）に乗り、部落から「七つの谷と七つの池を越えて行く遠い所にある山」、そ

文壇への衝撃的なデビュー

山梨県石和出身で日劇ミュージック・ホール（ストリップ劇場）でギター演奏者の深沢七郎は、同ホールの構成演出者の丸尾長顕から小説創作の指導を受け、『楢山節考』を執筆した。彼のすすめで《中央公論》新人賞に応募し、第一回新人賞を受賞し、異色の作家として文壇に颯爽とデビューした（一九五六年十月）。
信州の姥捨山の棄老伝説をテーマにした『楢山節考』は、次のような文章ではじまる。
山と山が連なって、どこまでも山ばかりである。
この信州の山々の間にある村――向う村のはずれにおりんの家はあった

こは人骨が四方に散乱し、大群のカラスが舞い、神が住むと言い伝えられた楢山である。

辰平はおりんを背板から降ろし、おりんが薦を被って岩かげに座ると、こんこんと雪が降り出した。辰平は部落の掟を破り、「おっ母あ、雪が降ったなあ、雪が降ってふんとによかったなあ」と大声で叫んで、おりんのもとに戻った。おりんは辰平に手ぶりで下山を促し、「楢山まいり」を終えた。

『楢山節考』は、残酷な棄老物語として描かれたのではなく、七郎が石和で介護し、病死した母さとじの愛情と行為をもとに構成され、母を極限まで理想化した哀悼歌であり、鎮魂歌だった。次に触れる二作品でもこのモチーフが通底している。

庶民の「歴史もの」

七郎は『楢山節考』で作家として衝撃的にデビューした後、石和を舞台に代表作『笛吹川』（一九五八年）、『甲州子守歌』（一九六五年）などを発表している。

『笛吹川』は甲州の「お屋形様」の信虎、信玄、勝頼の武田家三代の歴史を背景にしている。主要な登場人物は笛吹川のほとりのギッチョン籠と呼ばれた家に住むどん百姓六代六十五年間に一族が滅亡する「歴史もの」である。

信虎、信玄や勝頼という歴史上の人物や事件の盛衰をその背景としているが、戦国時代の史実を踏まえ、歴史上の権力者の波瀾万丈、栄枯盛衰を描いた「歴史もの」でもなければ、髷物（まげもの）、つまりチャンバラを振り回す大衆好みの「剣劇小説」でもない。

もっとも、ギッチョン籠一家のなかには武田軍の合戦に雑兵として手柄を上げ、武田軍団の有力者となった。武田勝頼軍の敗色が決定的になっても、「先祖代々お屋形様のお世話になった」という信条から滅亡の天目山まで従い、一人のほかギッチョン籠一家は壮絶な死を遂げる。

『笛吹川』の現代版と言われる『甲州子守歌』は、大正末期から総力戦期（日中戦争、アジア・太平洋戦争）を経て、戦後初期という現代の歴史を背景に、笛吹川のほとりの小さな家に住む、いわば水呑百姓一家三代の三十数年間の貧しい農民の生活を描いた。だが、この小説には野良仕事についての記述はほとんどない。

オカアの子守唄（ララバイ）

『甲州子守唄』（一九六五年）は石和や甲府を舞台にした甲州の農民一家の「歴史もの」で、いつも「他人のことでも、自分のことと思う」オカアは、息子の徳次郎や里帰りした娘のギンにブツブツと「仕方がねえ、仕方がねえ」と言い聞かせる。典型的な甲州人オカアのララバイ（子守唄）を中心に創作された。

明治維新後に徴兵令が公布され、満州事変の拡大によって日中戦争が本格化し、さらにアジア・太平洋戦争に突入すると、山梨でも「天皇の赤子」として「赤紙」一枚で甲府連隊に徴兵された。しかも国家総動員法により生活必需物資は切符制・配給制となったが、生活物資が不足し、闇商売が横行した。

オカアは笛吹川の袂で石鹸などの廉価な日用品を商う「万年橋のトコの百貨店」を開業した。次第に商才を身につけ、闇で米、砂糖の代用品のサッカリンも売るようになった。

貧しい一家の息子の徳次郎は二十歳からアメリカに出稼ぎに行き、帰国後は夫婦で東京に出稼ぎに出かけた。石和に戻った徳次郎は、甲府に新設された軍需品工場で働いた。甲府大空襲を経て、敗戦を迎えたが、オカア一家は闇商売を続けた。

敗戦後、工場勤務を止めた徳次郎は、オカアに代わって、食料の担ぎ屋や買い出し人を相手に本格的に闇商売を始めた。サッカリンに小麦粉を混ぜて売り、担ぎ屋や買い出し人には売り惜しみをして、買い手に恩義を売る商才を身に付けた。

七郎は戦争末期から戦後初期にかけて山梨県石和の実家で肺結核のために療養しながら、商売を手伝い、しかも煙草や砂糖の闇商売をした経験と知識をもとに創作した。

放浪の旅

七郎は、わずかの時間に「夢」を見たとして、それを笑劇風に「風流夢譚」を描いた（一九六〇年十月、『中央公論』）。ところが、その一部が皇室を侮辱した作品と受け取られ、その翌年、中央公論社の社長宅で右翼少年によって殺傷事件（「嶋中事件」）が起きた。

七郎の作品にたいして文壇やメディアは、一斉に七郎を攻撃し、孤立無援に追い込んだ。そこで、七郎は刑事の監視つきで「放浪の旅」に出て、京都、大阪、尾道、広島の他、北海道の札幌、稚内、釧路、根室まで逃亡した。

七郎は事件のほとぼりが冷めると、東京に舞い戻り、すでに触れた『甲州子守唄』の執筆を始めた。ギタリストや作家として名声を博した七郎だが、自らは「作家と言っても毎日毎日小説を書いていたのでもなく、ギタリストだと言ってもそれで生活していた」のでもない。この「まとまりのない生活」をそれなりにたのしく暮らしたが、「どれも私の職業ではなかった」と自覚するようになった（「生態を変える記」、一九六六年）。

七郎は若い頃から農業をしたい夢を抱いていたが、都会の生活と放浪の旅を切り上げ、百姓を志願し、関東平野のど真ん中で静かな平坦地の埼玉県南埼玉郡菖蒲町の田んぼの中の畑地三反五畝を購入した。七郎は得意になってラブミー農場と命名したが、農地の規模は、今日流に言えば、たしかに「家庭菜園」よりもはるかに広大だ

が、「農場」というよりも、むしろただの「畑」に過ぎない。しかも「農」を生業とするほどの規模ではない。

「くらがえ」（鞍替え）――百姓志願――

五十一歳の七郎は夏六月に耕地を購入すると、居ても立ってもいられず、十一月に付け人のミスター・ヒグマと一緒に建設中のプレハブへ引っ越し、ドシャ降りの一夜を急造のビニール屋根の下で過ごした。

その夜、七郎は太鼓のような雨音や地上に落ちる雨水を聞きながら、猥雑な都会から逃げ出せたこと、農業に「くらがえ」出来たことで安気した。とは言え、「私自身は全然変化していないことである。ひとりだけの世界に生きていた者は生態がどんなに変わっても変化しないのである」（「生態を変える記」）。

七郎は、農業へ「くらがえし」に成功した。引っ越し早々の、季節はずれの冬でも土を耕し、野菜の種を撒き、果物の苗木も植えた。当然、野菜はえんどう以外は、皆枯れてしまった。百姓を志願し、三年間の野良仕事の経験と見聞をもとに、早くも「都会を離れた自由人の日記」という副題を付け、エッセイ集『百姓志願』（毎日新聞社、一九六八年）を刊行した。

七郎は隣組七軒の挨拶廻りを済ませ、正式に村入りした。作付けには村人からアドバイスを受けたり、種や苗を分けて貰った。七郎は畑で立鎌でザクザクと青草の根元を刈ると、その音に気持ちが楽になるらしい。「草刈は直接収穫とはつながらない。……だが種まきよりも収穫よりもちがう美しさがある。草を刈ったあとの整理された気持はなんとさわやな気分だろう」と書いている。

土に親しむ野良仕事

私自身は夏の草刈りには往生する。草刈りはしゃがんで草刈り鎌で根っこまで刈り取る、まさに徹底的に「根絶」することである。草を「根絶」した積もりでも、雨が降ると、草は確実にはびこり、再び草刈りに励むことになる。一番面倒なのは、おそらく多年草の杉菜の除草だろう。立鎌で草の根元を刈っただけでは、すぐに新芽を出す。私はシャベルで掘り起こし、根っこを注意して引き抜くことにしているが、残念ながら、今後も杉菜の除草との葛藤は続くだろう。

メタボの私はしゃがみこむ姿勢が苦手で、小さな丸椅子に座って、草刈りをすることにしている。当然、作業は緩慢だが、健康と趣味のために草刈りをしていると考えれば、スポーツと同じように、気分は爽快だ。それに飽きたら、四季折々に変化する周囲の山々の光景を満喫すれば、それもまた気分は爽快になる。

種を撒き、苗を植え、灌水し、間引きしたり、追肥をすれば、収穫という自然の恵みに与ることが出来る。所詮、ずぶの素人がダメ元で始めた野菜作りだから、「失

敗は成功の基（もと）」と考えれば、失敗しても大して苦にならない。しかも、週一回の一泊二日の野良仕事だから、十分に手間を掛けることが出来ない。そのため、種蒔きの時期を逸したり、間引きや追肥を省いたりするため、満足できる野菜ではないが、それもやむを得ない。

七郎は三反五畝の畑で鍬で耕す旧式の慣行農法にこだわったが、効率的で均質に耕作出来る「豆トラ」と称する原動機付き耕耘機で耕作するようになった。さらに肥料は堆肥や糞尿などの自給肥料に変って、油かすや化学肥料などの販売肥料に変わっていた。

だが、七郎は農業ですでに定着したビニールハウス栽培にたいして疑問を呈した。それぞれの野菜は「旬」の時期こそ最も味の良いのだが、ハウス栽培では、時期はずれの野菜はそれを堪能することが出来ない。そこで、七郎は「ビニールや薬が農業を変えたのは、進歩だとばかりはいえない。悪魔に魅入られた農作物だ」と見なしたのである。

野まわりと晴耕雨音

土と共に生きる七郎は、朝起きて畑の作物を観察しながら、野良仕事の段取りを決める農民の「野まわり」に共感した。「一のこやしは、あるじの足あと」という格言がある。それは畑にせっせと「こやし」（肥料）を撒くよりも、あるじ（主人）が畑を見てまわり、適切に対処すれば作物は良く育つという意味である。早朝の「野まわり」を好む七郎も、「土と共に生きるほどの農業精神」に感動したのである。

雨の日、近所の村人が立ち寄り、書架の本を見て、七郎は「晴耕雨読」かと聞かれ、「晴読雨音（うおん）」だと答えたという。雨の日や農閑期にはギターを弾き、「雨読」ではなく「雨音」なのだ。戦死した七郎の兄弟子が遺したギター曲「紡ぎ唄」を繰り返し練習し、譜面の片隅に彼の遺した日記の一部を書き留めている。のちに述べるように、自給用の「コマギレ栽培」ではラブミー農場の生活は成り立たない。そのため、雨の日や農閑期には原稿を書き、原稿料や印税収入を稼ぎ、ギター・リサイタルを開催した。

ところが、七郎が『読売新聞』夕刊に連載した「ラブミー農場繁盛記」その他のエッセーを読んだヒッピーかぶれの若者が農場を訪ね、「住み込んで農業をしたい」と言うそうだ。そこで、七郎は若者に立鎌を持たせ、畑の草刈りをさせた。草刈りは種を撒き、収穫する野良仕事のうちで、実に面倒な作業なのだ。

農村や農業に憧れる若者にいきなり厄介な草刈りをさせたら、単なる憧れは腰砕けとなり、二、三日でラブミー農場を退散するだろう。良くあることだが、農家の主人（家長）は、妻、息子、娘、さらに婿、嫁を田畑の単なる作業者と見なし、やっかいな草刈りを一方的にさせ、

かえって野良仕事を疎ましくさせて、離農・離村を促すことになるに違いない。

七郎は、生業として百姓を始めたのではなく、自給用の野菜作りにくらがえして野良仕事を続けた。土に親しみ、農村や農業の現状に一定の理解をしたが、野良仕事に不慣れで、農業に憧れるだけの若者に立鍬で草刈りをさせる神経はおよそ理解が出来ない。従来の農家の「農場主」の慣習と感覚を踏襲したのであろうか。

私自身について言えば、年末の冬休みに義母から草払い機を持たせられ、広い栗林の草刈りを指示された。草刈り機を担ぐ私に農道で部落の古老から「良く稼ぐじゃ」と声をかけられた。その時は気分が良かったが、栗林で草払い機を操作し、草を刈った。すでに草は部分的に枯れていた。そこで、何で義母からこんな作業をさせられるのか、その意味を了解しかねた。それ以来、私はただの作男に過ぎないと考え、野良仕事に関心も魅力も失い、敬遠することにして、私の専業に専心することにした。

野良仕事は一種のスポーツだ

七郎は日本の高度成長の最中に、関東平野のど真ん中で野良仕事を始めた。言うまでもなく、高度成長で跡継ぎを始め、農家労働力は農外へ流出し、兼業化と高齢化が急速に進み、「三チャン」農業となっただけではない。七郎がたびたび指摘したのは、農家の跡取りの「嫁ぎきん」である。

七郎は土に親しみ、自然を愛し、野良仕事を礼賛し、草刈りも種まきも考え方次第で、「一種のスポーツ」だと実感した。「私などはいろいろな仕事をやったが、最後には農業が一番たのしい仕事だったと思った。……実際にやって楽しい仕事だと思う考えかたには変わらない」と言う。

だから、「農業が楽しくないという農家の人があったら、その人は農業をやっているのではなく強制的にやらされているのではないだろうか」とも言う。農家の娘が跡継ぎの「農家へお嫁に行くのはイヤ」と決め、嫁になりたがらない「嫁ぎきん」という現象は、七郎にはなかなか理解しがたい社会問題だったのであろう。

ラブミー農場には「農場に就職したい」と言う都市の若者が訪ねてきたり、村には二十歳前後の娘数名が農家に嫁になりたいと応募したという。七郎は、若い世代が農業の担い手として過重な労働から解放され、定時の労働時間、農休日、月給制などの方策も具体的に提言している。だが、不思議なことに畑仕事は働けば働くほど、土作り、種まき、苗の植えつけ、収穫で忙しくなる。

七郎の場合は、原稿料や印税などの農外収入によって生活を維持し、畑仕事では立鍬でカリカリと草を刈り、自給用の多品種少量生産の野菜作る。だから、「のんびりやる」ことが出来たのだろう。

高度成長期のコマギレ栽培と文筆への執念

七郎のラブミー農場の方針は、自給用にキャベツ、小松菜、イチゴ、大根、牛蒡など三十種類の野菜を作付ける多品種少量生産である。「一種類の野菜を大量に作って出荷し、その収益で必要な野菜を買う」という周囲の生産農家とは発想がまったく異なる。地元の新聞で野良仕事をする七郎の写真の横に「いろんなものを作ってあるコマギレ栽培」とキャプションがつけられ、七郎自身もそれに納得した。農村でこのような暮らしを可能にしたのは、言うまでもなく、原稿料や印税という農外収入があったからであろう。

すでにふれたが、七郎は高度成長期の離農傾向の最中に、都会を離れた自由人として百姓を志願し、三反五畝の関東平野のど真ん中の畑で野良仕事をした。それは周囲の専・兼業の農家とはまったく異なる、新しいタイプの百姓生活である。

今日、定年退職後に田舎で暮らすことがブームの一つになっているが、定年退職とは無関係に印税や原稿料で暮らすことが出来る七郎は、自給用の多品種少量生産の野菜作りに励み、土の匂いを全身全霊で堪能し、ギターを弾く繊細な手は「ワニ皮」のように頑強になった。

七郎は百姓を志願し、関東平野の真ったた中の埼玉県の農村に定住し、土に親しむ野良仕事を最大限に享受した。七郎は『百姓志願』（毎日新聞社、一九六八年）を出版した際、近隣の親しくなった農民とのインタビューの記録も収録した。

最初、七郎は「考え方によっては、農業は高利貸し的な仕事である」と理解した。なぜなら、わずかな種を撒き、肥料をやれば、大量に収穫可能だからである。たしかに、農外収入によって生活を維持し、自給用の多品種少量生産の野菜作りであれば、そのように理解することは当然だろう。

その後、七郎は近隣の農民から話しを聞いたり、自ら調査・検討した結果、専業農家として生活するには、最低一町五反の田畑を所有する大規模農家だそうである。だが、一町五反の田畑を購入し、新規に農業を開始しても、投資にたいしてまったく採算が取れない。だから、農業はスポーツの一種で、「男子が一生をやるには採算がとれない事業だ」と思うようになった。しかし、村人が農業を続けるのは、太古の時代から土に根をおろし、「土の上に生きている動物だ」と考えるようになった。

同書の出版後、七郎は狭心症の発作をおこし、悪化して心臓喘息を併発した。退院すると、ラブミー農場はついに雑草園になった。それでも、七郎は草取りをして、倦怠感と疲労困憊すると、万年布団にもぐり込み、休息して再び畑へ出る。その間、体調が許せば、寸暇を惜しんで執筆に精を出している。循環器系の大病を病み、発作の苦痛に襲われ、死を予感しながらもなお、書くこと

に執着した。

七郎は七三歳で急性心不全で静かに急逝した。入退院を繰り返し、自らの臨死に納得し、死の恐怖をいだきながら、ギターの演奏と小説やエッセーの執筆に自らのエネルギーを燃焼させた。七郎の執念には、私はただただ驚異を覚えた。七郎が創作のテーマとした「庶民」を自ら演じ尽く、執筆し、自らの生をまっとうしたのであろう。私もまた野良仕事をしながら、エッセーと論文の著述に自らの生をまっとうしたいものだ。だが、年金暮しとは言え、悠々自適の晴耕雨読の生活ではない。

□文献　『百姓志願』は『深沢七郎集第九巻　エッセー3』（筑摩書房、一九九七年）に収録されている（本稿は第九巻によった）。

（二〇一一年九月末、擱筆）

深沢七郎著
『生きているのはひまつぶし』（二〇〇五年、光文社）
左・見沼代用水のほとり　右・ラブミー農場

二八に帰るすべもなし（六）

―愛する北国のひとに寄せて―

伊治哲

行

「舘さん、お話はこれで決まったわ。父さんもきっと喜ぶわ。そう思ったら急にお腹が空いたわねえ。さあ、みんなでごはんにしましょう」

奥さまははしゃぐようにそう言って、お手伝いさんに夕食の準備を急がせた。二階の部屋に引っ込んでいた娘たち二人にも声をかけて、初めて四人揃って食卓を囲んだ。

二人の姉妹はそれとなく雰囲気を察してか、ちょっと親しげな表情を見せたが、修平はまだぎこちなく固くなって正座した。

奥さまは、娘たち二人と修平を前にして、急に改まった口を開いた。

「こちらはね、『舘修平さん』っておっしゃるの　今日からあなたたちの従兄妹として、私たち家族の一員になってもらいます。急なお話でびっくりするかもしれないけど、舘さんのたっての希望もあって、今日父さんとよく相談してそのように決めたの。父さんが帰ったら家族五人ということになるわね。みんなで仲よく賑やかに暮らしていくのよ。いいわね。舘さんは四高生だから、勉強で分らないことはなんでも教えてもらいなさい。舘さん、娘たちの勉強をみてやってくださいね」

姉妹は

「お願いします」

と明るく言って、ピョコンと頭を下げた。

修平は困りきって

「いや、こちらこそ、オ、オ、お世話になります。舘修平といいます・・・」

と、思わず口ごもってしまった

奥さまは続けて家族の紹介を始めた

（ご主人は「康」、奥さまは「澄恵」という。そして姉は「千恵」で高校一年生、妹は「多恵」で中学一年生であることが初めて分った。「おじさん」「おばさん」そして「チエちゃん」「タエちゃん」と呼ぶことになった。修平自身は名前よりも苗字の方が呼びやすいと姉妹がいうので、「タテさん」と呼ばれることになった）

修平は面映ゆい思いが募ってきて、顔を赤らめながら母と娘のやりとりに耳を傾けていたが、それでも少しずつ本当の家族同士、従兄妹同士のような親しみが湧いてくるのを感じ取っていた。

「母さん、もうごはんを食べていいでしょう。お腹がすいちゃった」

「お待ちなさい。舘さんがお箸をつけてから…。父さんがいたらそうするでしょう。父さんがいないときは、舘さんが父さん役なのよ。

さっ、舘さん、一緒にいただきましょう」

「へーッ、舘さんが父さん・・・？」

中学一年生が、素っ頓狂な声をあげたので、四人がドッと笑った。そしていっぺんに笑顔がもどって、「いただきます」と一斉に手を合わせ、それぞれの箸をとった。

つい先ほどまでよそよそしく距離をおいていたチエちゃんもタエちゃんも、

「あなたたちの従兄妹ができたのよ」というおばさんの一言と、「舘さんが父さん役？」の笑いにすっかり打ち解け合って、互いに目と目を交わすようになった。

とうとう、夢にも見なかった華やかで優雅で、平和な生活に入り込むことができたのだ。修平は、女性三人を前にして気恥ずかしさに身を縮めながらも、降って湧いた幸運の喜びを大声で叫びたい衝動に駆られた。

あくる日は、土曜日。おじさんが一週間の勤めを終えて帰宅する日である。

「土曜日は、いつも家族で父さんを金沢駅へ迎えにいくことにしてるの。舘さんは、父さんには初めてだから、時間の都合がついたらわたしたちと一緒に迎えにいかない？　夕方五時に駅で落ち合いましょうよ」

修平はおばさんの心遣いが嬉しかった。もちろん喜んでお供することにした。

学校での講義もそこそこに、夕方の人の流れを押し分けるように、駅前の待ち合わせ場所に向かった。

昨晩おばさんに、綻びを繕ってもらった学生帽をかぶり、汚れを落としてもらった学生服にマントを纏っていた。さすがに腰にひっかける手拭だけは、おばさんが新調したものに取り替えた。それでも、おばさんや娘たちは不潔とか汚いとかいう言葉は口にしなかった。当時の学生の蛮カラな習俗をよく知り尽くしていたのであろう。

金沢駅はごった返していた。その中に、母娘たち三人

が、いささか緊張気味の修平に手を振って合図しているのを見つけた。そのしぐさは、もうすっかり家族に対するのと同じ親しみを体一杯に現わしていた。

五時を少しまわった頃、改札口から押し出される人波の中から、シャキッとしたスーツ姿の紳士が手を上げながら家族に近づいてきた。それが初めて会う

「おじさん」だった。

「父さん、お帰り」「父さんお帰りなさい」

娘たちは口々にそう言って、抱きつくばかりにおじさんの手をとった。

「父さん、舘さんよ」

おばさんが、主人のカバンを胸に抱え込みながら修平を紹介した。おばさんの口ぶりから想像していたとおりの、みるからに穏かで人柄のよさそうな好々爺だった。

「初めてお目にかかります。舘修平といいます。大変厚かましいお願いを聞き入れていただき、ありがとうございます。しばらくお世話になることになりました。これからどうか宜しくお願いします」

修平は緊張の面持ちで、道々考えてきた挨拶の言葉を口に出した。

「ああ、私が澤村です。これから一つ屋根の下で仲良く暮らしていきましょう。わが家はご覧のとおりの女所帯で、少々やんちゃなところがあるけど、辛抱してくださいよ　ねえ、母さん」

おじさんは、おばさんの同意を求めるようにそう言って、びっくりするほど大きな声を出して笑った。

ここ二日ばかり、おばさんの余りにも親切な心配りに甘えてしまっていただけに、おじさんの目にはひょっとして、厄介ものを抱え込んだと思われているのではないかと、内心かすかな不安を隠せなかった修平であった。しかし、おじさんの屈託のない大きな笑い声を聞いたとたん、その心配はいっぺんにどこかへ吹き飛んでしまった。

修平は、もう家族と一体になった気持でおじさんの後を追った。

「今日は舘さんの歓迎をかねて、なにかおいしいものを食べにいきましょうか」

おばさんが、浮き立つような足取りで市電の乗り場にみんなを導いた。修平はワクワクしながらも、娘たちと肩を並べるのがなんとなく気が引けて、自然におじさんの側について歩いた。

金沢の市電（といっても、市営ではなく私鉄なのだが）はすべて金沢駅が発着点になっている。家族は、家路を急ぐ人波を掻き分けて、市の中心街、香林坊方面への乗り場に向かった。

金沢の市電は小さい。城下町のせいで街路が狭く、曲がりくねっているためである。夕方のラッシュ時ということもあって、車内は立錐の余地もないほど混みあっていた。おじさんと肩を擦りあうようにして車内に入りこ

んだ

電車は、寮生活の頃栄養補給と称してイワシの買出しに通った近江市場を通る。ここで線路が二つに分かれて、電車が香林坊方面へ折れる。電車が大きく揺れて、体の小さな姉妹が修平のマントにしがみついてきた。修平が吊り革を握り、足を踏ん張って漸く二人を支えたが、その時の思わぬ触れ合いが、兄と妹の感触を深めるきっかけになったようだ。香林坊で電車を降りる時も、姉妹は修平のマントを離さなかった。

大勢の人が降り、大勢の人が乗り込む香林坊は、百貨店や映画館、劇場、飲食店などが軒を連ねる金沢最大の繁華街である。県庁や市庁、それに金沢城、兼六園にも近い市の中心部にあたる。

不思議なことに、四高はこの香林坊に隣接しており、広坂通りに面した正門から望む赤レンガ造りの本館は、周囲を圧してひときわ威容を誇っている。その背後にはゴシック式建築の大講堂、柔剣道場の無声堂、論理学哲学の階段教室、一般教室や実験室等の学舎が控える。その間に、広大な運動場を囲んで、松、杉、桜、楓などの老木が鬱蒼と繁り、構外の喧騒とは全く隔絶した一画を形成していた。修平が住み慣れた時習寮も、北中南寮のやや古びた姿をその北辺に曝していた。

もともとは、城下の武家屋敷が謂集していた閑静の地に、行政や学問の中心が置かれたが、時代の変遷にともない、交通の便もよかったことから、その周囲に市民の遊楽の地が集約されていったのではなかろうか。

香林坊の交差点に円陣を張って、寮歌やストームで気勢を挙げたのはついこの間のことだ。停電のおりの試験勉強は、その一角にある「明菓」に籠もり、コーヒー一杯で何時間もねばったものだ。

そんなことなどが、なぜか遠い日の思い出のように修平の頭をかすめた。

市電を降りたった五人家族（？）は、申し合わせたように片町へ向かうくだり坂の途中、北国書林の角の細い道を右に折れた。その奥にそれほど広くはなさそうな中華料理店がある。おじさんは手を大きく挙げて家族に合図した。そこが今日の修平の歓迎会場であった。家族は何度かきたことがあるらしい。修平はもちろん初めて入る店であった。

冷え込んだ外の空気から一気に店内の温もりが体を包み、家族は一斉にコートを脱ぎ、修平も帽子とマントを外した。

「今日は舘さんが真ん中に座りなさい。さあ、どうぞ」

おじさんとおばさんはそう言って、修平を囲むようにそれぞれが座を占めた。修平は初めて家族四人を前にして、面映ゆさのあまりすっかり上気してしまった。

二、三日前までは全くの赤の他人。縁あって今夕ともに食事をするにしても、自分は四人家族とは少し間を置いて、テーブルの端に小さくなっていなければならないのに・・・。修平は、この家族の全く分け隔てない親しみ深さに、ひたすら当惑するばかりであった。

おじさんは、

「舘さん、そんなにかしこまらなくていいですよ。今日から舘さんを迎えて五人家族になったんだから・・・。チエちゃんもタエちゃんもお兄さんと仲よくしてあげるんだよ」

「さあ、今日はなにを食べようか。みんなそれぞれ好きな料理を選んで・・・。舘さんはなにが好き？」

おじさんは、浮き立つようにそう言って、修平の気持をほぐそうとしている。

「なんでもいただきます。私はこのようなところ、初めてなんです」

みんなそれぞれに自分の好みの品をオーダーした。修平にも、品書きを見せてなにがいいかを聞いたが、中華料理など初めての修平には、漢字を並べたメニューから料理の内容を想像することさえできなかった。すべておじさんに任せた。

おばさんが

「舘さん、お酒は召し上がるんでしょう」

と促した。

「そうだ、今日はビールで乾杯しよう。子供たちはジュースがいいね」

とおじさんが応じた。

酒といえば金沢へ来てから学生割引の密造酒くらいしか飲んだことはない。当り前のことだ。まだ未成年なのだから。正規の日本酒は、たまに成人寮生への配給があった折におこぼれにあずかったくらいであった。それでも寮では、近江市場で買い入れたイワシを肴によくコンパをやって騒いでいたから、誰かがどこからかアルコールを調達してきたと思われる。

そういえば、修平が初めて酒を口にした時のことを思い出した。それは、金沢への門出を祝って郷里の家族がささやかな送別の宴をもってくれたときのことだ。その時、修平の祖母がこんなことを口にした。

「タバコと酒はええじゃ。度を越せへんかったらのお・・・。じゃが、オンナはいかん！オンナは魔物じゃ！」

若くして亡くなった祖父の女遊びにさんざん苦労した祖母の本心であったのだろう。オンナの祖母が言うくらいだから間違いなかろうと思ったが、酒の味だけは実に美味かった。

寮に入ってすぐに酒とタバコは覚えた。なんとなく一人前の大人になったような気がしたものだ。

そんなことを思い出しながら、おばさんの誘いには暖昧な返事でお茶をにごしてしまった。

しかし、おじさんの音頭で、五人が一斉に杯を挙げた時に初めて口をつけたビールは、これまでに味わったことのない奇妙な味がした。戦後間もないこの頃のビールは、占領軍のおこぼれに預かっていた。そして修平自身も、まだ、ほろ苦い大人の味が分らなかったのだ。一方、中華料理は初めてのこともあって実においしかった。

それにしても、このような料理を味わいながら団欒を楽しめる、この家族の幸福の女神はどこから舞い降りてきたのだろうか。

対照的に、最近、なんとなく暗い気配に包まれていた郷里のことが修平の胸をよぎった。そのうえ、この家族が修平に気をつかえばつかうほど、その代価をどのように工面できるか、心配事が修平の胸をふさいだ。

そんな修平の顔色を察してか、話題はもっぱら娘たちの学校や友達の話に花が咲いた。実に天真爛漫、一点の曇りもない和やかな空気に、修平もすっかり呑みこまれていった。修平は、つい先日までの奔放な寮生活のありさまを面白おかしく話して、みんなの笑いを誘った。

楽しい団欒のひとときが過ぎて、帰宅の途についたのはもう夜八時をかなりまわっていた。

おじさんは居間の卓袱台の前に修平を招いて、改めて修平を迎える挨拶を交わした。おばさんも傍らでお茶を点てながら、昨日話した家庭の事情を繰り返し、娘たちの従兄妹として振る舞ってくれるよう重ねて念をおした。修平にはもちろん異存のありようもなかった。おじさんは

「母さんの言うとおり、今日一日でもう兄妹のようなつもりになっているよ。ねえ、母さん」

そう言って、もうすっかり家族の一員として修平を遇した。

修平は、しこりのように胸につかえていた下宿代について、この場ではっきりお願いをしておきたいと、思い切って切り出した。

「実は申し上げにくいのですが・・・、私の生家の事情もあって、十分な下宿代金をお支払いすることができないかもしれません・・・、どのくらいのことを考えたらよいのでしょうか。今ごろになってこんなことを申し上げるのは順序が逆で、誠に非常識なんですが・・・」

そう言ったとたん、思いもかけず、おばさんがキッとなって言い放った。

「だから何度も念を押したじゃありませんか。舘さん、あなたは私たちの甥、娘たちの従兄妹なんですよ。家族の一員として貴方を迎えたのですよ。家族の一員から下宿代をもらうつもりはありません！」

おじさんも大きく頷いて続けた。

「舘さん、母さんの言うとおりだよ。心配無用だから気にしないで・・・。

それより、用心棒と家庭教師をしっかり頼みますよ」

その場をとりなすようにそう言って、おじさんは大きな笑い声をあげた。

修平は、このような話の展開に名状しがたい驚きと気恥ずかしさを隠すことができなかった。しかも、一方でかすかな安堵感を抱いたのは一体どういうことであったろうか。

修平は、自分の気持の揺れを戒めながら答えた。

「ご好意になんと感謝申し上げたらいいか、言葉が見つかりません。父とよく相談いたします」

「ご両親には、とりあえずの下宿がみつかった、元気に通学している、とだけ連絡しておきなさい。余計なことは言わなくていいことよ。ご両親が心配されるから・・・」

と、おばさんは言葉を和らげて念をおした。そして、

「明日は日曜日だから、舘さん、寝坊してもいいわよ。ゆっくりお休みなさい」

修平は、もはや自分の息子のように扱ってくれるおじさんとおばさんの温情に、心の中でそっと手を合わせながら床に就いた

なぜか目から涙が止まらなかった

……つづく

祝出版

危機の時代の「政治力」

瀧澤　中著

日本文芸社　780円

いま、望むべき政治家の資質とは何か？

イドと超自我の谷間で

・・・ある女のあゆみ・・・

鍋屋次郎

気の光が漏れないようにした。

二十二歳のアヤが解決するのには重すぎる課題だった。一歩も部屋から出ることなく一週間が経過した。解決の方向は見いだせない。

しかし、その問題とは別に、母と妹の所在確認はアヤにとって、どうしても行わなければならない緊急の課題であった。アヤは今日も墨田区役所に行き調べたが全く分からない。母と妹の住民票記載事項は、以前の住所のままで、死亡届も移転届けも出されていない。その足で、もしやと思い小学校四年生当時行ったことがある、埼玉県浦和市の母の実家を訪ねたが、ここも戦災で焼かれ、家は見つからず、市役所で調べたが行き先は分からなかった。

東京駅に戻り、表通りだけは焼け跡の整理がついた日

アヤは加賀大造の全財産を相続手続により加賀京子名義にした結果、自分自身に降りかかる事の重大さと、アヤには別荘等の資産管理ができないことから、これら財産をこれからどうして良いのか、見当もつかなかった。

そして、過日訪ねて来た五代兼義の「財産を差し押さえることもある」という冷酷な言葉と表情を思い出し、全てを自分が行ったことが分かったら・・・と思うと、それだけでも恐ろしくなった。

五代がいつ来るかと思うと、日中の外出は勿論のこと、夜間も女中部屋に電気を灯しておくことも恐ろしく、雨戸の内側に戦時中使用した黒色カーテンを閉めて外に電

本橋界隈を歩くと、旭東銀行本店際の旭東物産本社掲示板に

「戦災で建物が焼失した土地の管理または売却手続きをお受けします。詳しくは信託部までお問い合わせ下さい」

と書かれた文字が目に入った。

そのときアヤの目の前を、アメリカ兵と日本女性のカップル・・・アメリカ兵は女性の腰に手を回し、女性はアメリカ兵の腕にぶら下がるようにして・・・が歩いていた。

始めてみる光景に、一変した世相に驚き、それがこれからどのように移り変わってゆくのか想像もできなかった。

その日、夜遅く軽井沢に戻った。

郵便受けには、アヤが照会していた群馬県T製糸から、会社寮入寮を条件とした製糸女工採用案内と五代兼義の名刺が一枚入っていた。

アヤはこれからどう生きるか。当面生きてゆくに当たって住まいと生活費が一度に解決する、寮生活の製糸女工の道も一時は考えたが、自分の将来をそれだけで終らせたくなかった。何とかして自分の手に生きてゆくことができる技術を身につけなければならない　そのために

自分なりに選択した道を歩んでゆくためには、京子名義の不動産はこのままでは管理ができず、誰かに管理を依頼するにしても管理料の出所もない。

売却を旭東物産本社信託部に依頼に行くにしても、その前に解決しておかなければならないのがアヤ自身の住居だった。その住居こそアヤのこれからどのように生きて行くかに掛かっている。

それから二年後、昭和二十二年十二月、アヤは藤沢市鵠沼の別荘地の入口で江ノ電の駅に近いこぢんまりした家に住み、横浜の美容学校に通っていた。

京子名義の全ての不動産を売却する前に、金塊の幾つかを売却してこの家を購入して移り住んだ。この場所を選んだのは、京子のこともアヤのことも知っている人はなく、近隣の交流も殆どないが、鎌倉に比べれば多少は庶民的な感じがしたことから選んだ。

この家と土地の登記名義はアヤにするほかなかったが、表札は「伊集院」として、アヤの美容学校届出の住所は「伊集院方」としていた。

二年間の美容学校の学費と生活費は京子名義の預金通帳から借りた。

アヤは美容学校在学中、戦後漸く出始めたファッショ

ン雑誌を学校の図書室で眺めて、また借りて家に持ち帰り、髪型を思い巡らしながら鉛筆で立体図を書いていた。そして、丸い顔、長細い顔、髪が豊な人、髪が少ない人、額が広い人、額が狭い人などなど、自分で様々な幾通りかのモデルを描き、それぞれに似合った個性的な髪型を自己流で想像し、紙に描いては眺めていた。

また、休みには藤沢駅や鎌倉駅に立ち、一見上流夫人と思われる女性の洋髪を注意して眺めたり、大船松竹撮影所のある「キネマ通り」で、たまたま行き交う映画女優の洋髪スタイルを食い入るように眺めていた。

美容技術と共に独学ながら洋髪ファッションセンスを身に付けたアヤは、学校の卒業記念美容コンテストで優勝し、その技術とセンスを地元新聞が写真入りで報道したことから、アヤには多くの美容院から誘いがあった。しかし、アヤは自宅からも近く、世相と共に変遷するであろう洋髪を間近に見ることを期待して、鎌倉文士夫人たちが利用していると評判の、鎌倉F通りにある「すずらん美容院」に就職した。

男の執念

就職して間もない昭和二十三年五月、満州（注1）で別れたままの松尾が美容院へ訪ねてきた。アヤの写真入りの地元新聞を見て、学校に問い合わせて「すずらん美容院」が分かったと言っていた。

（注1　現在の中華人民共和国東北地区及び内モンゴル自治区北東部）

夕方勤務が終わってから、江ノ電で藤沢に出て、駅前の喫茶店で話した。喫茶店に着くまでの間、アヤの胸中は松尾への懐かしさの反面、自分が加賀家の財産の全てを売却したことは絶対に話してはならない、と心に秘めていた。

松尾は

「所持金も殆どない状態で放り出されたが、何とか釜山（現韓国釜山）までたどり着いて、引き揚げ船で帰国した。京子さんを探し歩いて、ラジオの尋ね人にも何度も放送を依頼したが、どこからも連絡がない。そこへたまたまアヤの新聞記事を見たのでやってきた」

といってコップの水を飲み、聴いているアヤに構わず続けて

「お前、京子さんを知らないか。退職金も貰っていないし。今は闇屋をしながら何とか生活しているが、京子さんに会って、多少なりともまとまったお金を出して貰いたい」

アヤは加賀商店の番頭格でお店を取り仕切っていた頃の松尾と、目の前にいる松尾の、人間としての品格も、

言葉遣いも、全く変わった有様に驚きながら

「私もお嬢様が日本へ帰っているのか、どこにいるのか知りたい。お嬢様はトラックでこちらの乗用車に衝突してきた現地人と何処かに行き、私は乗ってきた車でどこか知らない港に連れて行かれ、そこから蒸気船で日本に送り返されたの。だからあそこで別れたきりなの。いまどうしているか会いたくて・・」

「この前軽井沢の別邸に行ってみたが、鍵がかかっていて開かない。表札も出ていない。まだ、京子さんが持っているのかな」

二人の間に暫く沈黙が続いた。

やがて松尾は

「ところで、アヤは今どこに住んでいるんだ？」

「藤沢の伊集院さんというお家に間借りしているの。三畳一室で、土間で自炊よ」

「今晩、俺泊めてくれないか」

「ダメに決まっているでしょ。松尾さんを泊める部屋なんてあるわけないでしょ。大家さんは女性の友だちでも、昼間部屋に上げることは前もって了解をとることになっているの」

「アヤ、お前二年間の美容学校の学費と生活費はどこから出したんだ」

と、思っても見ない質問が飛び出した。

「何？　学資と生活費のこと？」

と聞きながら少し間を取って

「自分でも良くできたと思うくらいいろいろやったの。途中、疲れて止めようと思ったことが何度もあったわ。美容学校が終わってから美容院でお掃除・お片づけのアルバイトと、学校がお休みの日曜日は映画館の切符売り。朝昼晩と安物のジャムをつけただけのコッペパン一つで辛抱したこともあったわ。体を壊さなくて良かった」

暫くして松尾は帰っていった。両手をズボンのポケットに入れて、肩を落として背中を丸めた後ろ姿は、以前アヤが尊敬していた松尾ではなかった。

それから一ヶ月くらい後の夕方、松尾と五代が揃ってやってきた。

仕事が終わってから以前松尾と行った藤沢駅近くの喫茶店で会うことにした。今日は五代が来ていることで、相当に突っ込んだ質問も覚悟して出掛けた。

喫茶店には他のお客はなく、従業員の視線が気になった。

五代が

「今日は本当のことを言ってくれなければ困る」

とアヤを睨み付けるように凄んでから

「あんたはこの前嘘を言ったな。加賀大造が死んでいたのに、いつ帰るかわからない。私は一足先に帰ってきたと。加賀大造の死を隠さなければならなかった理由は何

なのだ」
アヤは一呼吸おいてから
「満州（注前掲）から帰るとき、お嬢様は『アヤが先に日本に帰ったときは父の死は伏せておいて。葬儀から事業清算まで全て私がやるから』と仰ったのでそれを守ったまでです」
「それでは京子のことだが、軽井沢も鎌倉も、墨田区の元加賀商店本社用地も、全て売却されている。弁護士に買主の旭東物産で契約書を調べて貰ったら、加賀京子が売り主になっている。登記簿を調べたら、終戦の年の九月初めには京子が相続登記も行っている。今、京子は何処にいるのだ！　隠すなよ。あんたは終戦の年の九月初めには、軽井沢にいたのだから、相続登記の日から考えても京子とは会っている筈だ。俺が軽井沢を訪ねたとき、お前は嘘を言ったな！」
今度は松尾が
「アヤ、この前は京子のことは全く知らない、といったのは嘘か！」
と語気を強めて言った。更に五代は
「弁護士が旭東物産から聞き出した売り主の和服姿の女の容姿・年齢は京子に間違いない」

暫くの沈黙の後、アヤは
「五代さんが訪ねてきた二日後、朝早くから墨田区役所に私の母と妹の消息を調べに行ったあと、埼玉の母の実家を訪ねました。夜遅く軽井沢に戻って通用口を開けようとしましたが鍵が入りません。家の中に入ることができず、その夜は軽井沢駅待合室で過ごしました。暗くて誰もいないし、とても怖かった。朝、明るくなってからもう一度別荘に行って通用口の鍵を見ると、鍵はいつの間にか取り替えられていました。家の中は人の気配はありません。多少の私物も持ち出すことができません。今、五代さんのお話で、それがお嬢様だったのか、と分かった次第です」
そこまでいうと、松尾が
「それでアヤはその後どうしたんだ」
「母と妹の消息が分からないので、行くところは母の実家しかありません。母の自家で、『手に職をつけなさい』と言われて、昭和二十一年四月から美容学校に入学する準備を始めたのです」
「今の住まいの間借りはどうしてできたのか」
「保証人もなく、断られましたが、大家さん夫妻が高齢のため、部屋やお風呂のお掃除などをお手伝いすることを約束して借りることができたのです」
少しの沈黙の後、五代が疑いの眼で
「あんたも京子探しはやったのか」
と睨むように言った。
「お嬢様の住民票の移動調査、墨田区役所での尋ね人、

私のできるだけのことはやりましたが、軽井沢、鎌倉、墨田区など交通費はかかるし、最初だけでやめました。お金がかかりすぎて出来ませんでした」
五代が松尾を見ながら
「アヤは京子のことは知らないらしいな。京子の住民票は墨田区本所のまま。行方知らずだ。とすると、実状を知っている誰かが京子になりすまして、相続から資産処分までを行ったかも知れないな。加賀家の親しい親戚で京子と同じくらいの娘がいる所はないか。松尾さん、知らないか」
「知りませんね。アヤは知っているか」
とアヤに聴いた。アヤは五代の「なりすまし」の言葉に内心凍り付くような恐怖を感じたが、感情を殺して
「聴いたことはありませんね。亡くなった奥様のご実家やご兄弟のことも分かりません」
五代は
「松尾さん、今のアヤの言葉にヒントがあるかも知れない。亡くなった奥様の実家とかその家族を調べて見よう。案外そこに京子がいるかも知れない」
そのとき、喫茶店店員が
「もう閉店時間です」
と言ってきたので喫茶店を出た。

江ノ電を降りたアヤは、自宅までの道には外灯もなく、道の両側に並ぶ垣根の不気味な静けさにも、今日は怖さを感じなかった。アヤの頭の中は先ほどまでの話で一杯で、家に着いても五代の「京子探索の執念」に恐ろしさを感じていた。
そして五代や松尾に対して今日の自分の言ったことを思い出しながら、自分の咄嗟の作り話に矛盾することがなかったかどうか心配だった。アヤの心の中では後ろめたさを超えた罪悪感を感じていたが、しかし、「それしか仕方がないのだ」と罪悪感をうち消して、自分で自分の行為を肯定していた。

翌朝「すずらん美容院」で朝の準備が終わった頃、従業員から先生と呼ばれている経営者の牧　洋子から
「貴女のところへ時々男の人が訪ねて来るけど、何の用事？」
と尋ねられた。アヤは
「ご心配掛けて申し訳ありません。私が満州（注1）の加賀商店社長宅で女中をしていたことは先生にも申し上げてありましたが、その加賀さんのご家族の消息につい て、知っていることがあれば教えて欲しい、と言うことでした」
「誰が消息不明なの」
「はい、一人娘のお嬢様のことです。日本に帰国したら

しいのですが消息がつかめなくて」
「そうなの。貴女の所へ来る男達が、変な男達でなければいいの」
と言ってから
「貴女ね、お客さんから評判がいいわよ。貴女がいつも微笑みを湛えながら、先輩のお手伝いをしていて感じがいいねって言ってたわよ。これからも頑張ってね」
と言って、アヤの肩にそっと手を置いて、入口の方に歩いて行った。

「すずらん美容院」は、鎌倉文士夫人達の憩いの場として、また交流の場として利用され、美容院入口の壁際には、夫人達から寄贈された新刊本が並べられ、来客に紹介していた。アヤは時折借りて読んでいた。

それから三ヶ月後、すずらん美容院に採用になって六ヶ月経過したとき、初めてアヤは、補助から脱却してお客様の担当をさせて貰った。
初めは緊張して、じっと見ている牧　洋子の視線が気になったが、夢中でやっているうちに自分のペースを掴み、お客様との会話もでき、全て終わって前後左右を鏡に映して説明し終わったとき、牧　洋子がお客様に
「いかがでしたでしょうか」
と挨拶に来た。お客は
「お願いした通りの髪型で、出来映えも満足です」
と答えながらアヤを見て
「貴女、またお願いね」
と言ってくれたので、アヤは真っ赤な顔になり無言で頭を下げた。その様子を見た牧　洋子は
「長谷川様、有り難う御座います。また宜しく御願いします」
と丁重に挨拶した。
お客が帰った後、牧　洋子はアヤを手招きして
「アヤさん、初登板は合格ね。良かった！　あのお方は有名作家の長谷川先生の奥様よ」
と教えられ、アヤは驚きで言葉がなかった。

その夜、アヤは新しいルーズリーフの手帳を取り出し、その最初の一頁に日付を書いた後、長谷川様と書き、行を変えて、注文の髪型、特に気にしていた箇所、会話の中で「お孫さんの来年小学校入学を喜び、ランドセルと洋服をプレゼントすると言っていた」などを書いた。

そのような「お客様メモ」が数枚たまったある日、帰り際に五代から電話があり、今度は少し時間を掛けて会いたい、と言うので、美容院の休日である来週火曜日の午後会うことにした。
その日、先日自分が語ったことを反芻しながら、矛盾のなかったことを確認していつもの喫茶店に行った。一緒に来ていた松尾は幾分緊張しているように見えた。
やがて五代は弁護士と打合せの結果、と前置きし
「加賀大造の相続人は、加賀大造の債務を差し引いた分、つまり専門用語を使えば限定相続をしなければならない。それでないと、加賀大造への債権者は何も取れなくなる。相続人が加賀大造の債務を知らなかった場合でも、証明をすれば債権者は救済される。つまり相続をした財産からその債権の額を返して貰うことができる」
ここまで言って、松尾とアヤの理解度を確かめるように見渡し、更に続けて
「それで加賀京子を相手に債権額の返還請求訴訟を起こすこととした。並行して警察に加賀京子の捜索願いを出す。そうすれば裁判所は相続と売却の実行手続の関係書類を証拠書類として押収することになるだろう。今日はこのことを二人に伝えておく」
と言って、コップの水を口にした。

アヤはそれを聴いて、内心「契約書類関係が押収されて筆跡鑑定が行われれば万事窮すか」と思ったが、ここは平然としていなければならないと思い返し、五代と目を合わせないように、喫茶店壁面に掲げてある江ノ島の古びた風景画を眺めていた
やがて松尾は
「五代さん、それをやるしかないですね」
と言ったとき、五代は
「そうそう、思い出した。釜山（現韓国釜山）からの引揚げ船乗船名簿には、加賀京子の名前は見つからなかった、と報告があった。あのごたごたの状況から洩れたのかも知れないし、別ルートで入国したかも知れない」
松尾が
「日本に帰っているのでしょうね」
と言うと、五代は
「松尾さん、弁護士の調査では、京子が持参した相続手続書類は、余分な書類は一つもなく、必要なもののみで、専門家が揃えたとしか思えないほど完璧な状態だったそうだ。売却のときも同じだったそうだ」
「京子にそのような知識があったのでしょうか」
の松尾の問に、五代は
「松尾さん、そこなんだよ。いくら高等女学校を出ていると言っても、登記関係・権利関係を移動する必要文書が分かるはずがない。揃えることは不可能だ。一度はアヤも疑ったことがあったが、そのような専門的な手続は京子にもアヤにもできないことだ。と言うことは京子の背後に弁護士か司法書士がついていて、京子に相続と売却の全てを行わせた後、一切の金を巻き上げて、京子を殺してしまったことも考えられる」
驚いた表情の松尾を見ながら

「松尾さん、アヤ、弁護士から用意するように言われたことだが、加賀京子の筆跡を証明するものがありますか」と言ったので松尾はアヤを見ながら
「加賀商店の帳簿は満州（注前掲）でトラックごと行方不明。東京の本社も自宅も戦災で全焼。京子も見つからない。手紙も貰ったことはない。アヤにはなにかあるか。別れたときに渡されたものとか」
の問にアヤは
「あのとき、言葉を交わす事もできないまま別々に連れて行かれたので、私も何も持っていない。軽井沢の鍵だけは家を出る前からお互いに持っていよう、と言って、予備鍵を私が持っていた。ただそれだけです」
と言うと、五代は
「その鍵はどうした」
「私も別荘に入れなくなったので、母の実家に行く途中捨てました。多少頭にも来ていたので」
とアヤが答えると、五代は
「筆跡もなし、指紋もなしでは、京子の確認はできない。松尾さんでもアヤでも、当時の給料袋みたいなものはとってないよね」
松尾とアヤの
「そんなの、今あるわけないでしょ」
の返事に五代は頷いていた。
それから暫く誰も発言しなかった。やがて五代は

「多少お金はかかるが、弁護士にお願いしてやるだけはやってみよう」
と言ってからアヤに向かって
「アヤさん、大分女として成長したね。美容院に勤めている職業柄、表情が豊かになって、魅力的になったよ。胸や腰回りも豊かになったし」
と、はじめてアヤをさん付けでそこまで言うと、アヤは真っ赤になって
「嫌らしい！」
と言いながら両手で顔を覆った。
「このところ三人で会ったとき、松尾さんの視線はいつもアヤさんに注がれていることは気がついていたよ」
と言って松尾をみて、ニヤニヤしていた。

帰宅してからアヤは疲れを感じて横になった。今日の話し合いを思い出しながら、五代のいう書類準備段階での能力問題でアヤは対象外の人間と扱われることで少し安心したが、「契約書類の押収と指紋、筆跡鑑定」には、内心凍りつく思いがした。今も不安は消えていない。
それと、五代の加賀大造に対する債権が本当だとしたら、アヤは五代の回収を不可能にしてしまったことに対して申し訳なさを感じていた。しかし今更どうにもならない。罪滅ぼしではないができるだけ五代に優しく、表向きの

協力は惜しまないようにしなければと思っていた。

警察が動かない限り京子のことで自分がこれ以上疑われることはない、と言う安心感から、アヤの美容院での動きは自信に溢れ、牧　洋子も注目するほど明るく働いていた。

ある日、長谷川夫人から
「明日伺います。お願いはアヤさんにやって貰いたいの。何時に伺えばいいかしら」
の電話を受けた牧　洋子は
「はい、有り難う御座います。長谷川様の御都合に合わせます。何時が宜しいでしょうか」
の応答の結果、午前十時と決まった。

翌日、アヤは美容椅子に座った長谷川夫人に緊張して挨拶した後
「先月と同じ髪型で宜しいでしょうか。特に全体的なふくらみで奥様に似合った髪型になるように一生懸命させて頂きます」
と言うと、長谷川夫人は
「貴女、私が気にしていたことをよく覚えていてくれたわね　お任せします」
終わって前後左右の状態を鏡で見て

「良かったわ、貴女にお願いして。満足よ」
と言ったので、アヤは
「有り難う御座います」
と、丁重に頭を下げた後
「ところで、来年小学校に進まれるお孫さん、お元気ですか」
と言うと、長谷川夫人は満面に笑みを浮かべて
「入学式には私も行くの。可愛いわよ。時々電話してくれるの。でも、貴女よく覚えていてくれたわね」
と喜びながら帰っていった。

アヤの「お客様メモ」は既に三十枚を超え、その殆どのお客は次回もアヤを指名してくれていた。

運命の出会い

いつのまにか、美容院内では顧客の信頼と、内部的には牧　洋子の信頼を得て、自他共に認める美容院のナンバー2になっていた。ある日、洋子から
「今晩あいてる？　実はね、今評判の霊能者『海保　純』と食事をするの。一緒に来ない？」
と誘われた。思ってもいないことで
「嬉しい！　有り難う御座います。喜んでお供させて頂きます。

「そうそう、海保さんはね、初対面を凄く大切にする方なの。大切と言うより彼女が初対面で感ずるインスピレーションとでも言うのかな。それを大切にする人なの。だから、高級なものではなくセンスのある服装がいいわね。そう、貴女が持っている白のブラウスに、黒っぽい紫の長めのスカートなんかどうかしら」

「アドバイスを有り難う御座います。では終わってから着替えてお供します」

と言って仕事に戻った。

海保　純は公共交通機関や一般のレストランを使うと大衆の視線と、話しかけられることが煩わしいので、移動はタクシー、会食は旅館やホテルの個室と決めていた。

窓外には、大磯辺りまでの静かな海と、小さな波が寄せている海岸線が一望できる江ノ島の旅館の一室。挨拶に来たおかみは昼であれば右奥に富士山もよく見えると云っていた。

床の間を背にして海保　純、その右手前に洋子、その左にアヤが座って、海鮮中心の食事も終わった頃、海保　純は

「牧さん、この方小林アヤさんでしたね。貴女良い方と巡り会っていますね。小林さんにと言う固定客が付いているのではないの」

「そうです。先生お見通しですね。いずれ私の椅子を取られるのではないかと心配しています」

と、洋子は笑いながら答えてアヤの顔を見た。アヤは

「いやですよ、先生。取られるなんて。私は牧先生の忠実な弟子ですから」

と言って、海保　純に「信じてください」と言わんばかりの笑顔を見せた。

牧　洋子がお手洗いに立ったとき、海保　純は

「小林さん、貴女、誰にも言えない心配事を持っているでしょ。牧さんには内緒にするから、今度のお休みの日、そう、来週火曜日、朝早めに私の所にいらっしゃい。相談料は出世払いでいいから」

これを聞いたアヤは一瞬驚いたが

「有り難うございます。お言葉に甘えさせて頂きます。本当に宜しいのでしょうか」

とお礼を言ったところへ牧　洋子が戻ってきた。

翌週の火曜日の午前十時、大磯海岸近くの瀟洒な洋風建築の海保邸の二階には仏間風の和室があり、床の間にはかなり年代物と思われる仏像が安置され、その前にはやはり年代を思わせる香炉が置かれて、部屋には落ち着きと、何ともいえない心をなごませる香が漂っていた。

アヤは海保　純と向き合って座った。

指示された通り、加賀京子と自分の母親小林サミ、それに自分の名前と三人のそれぞれの生年月日を書いたメモを渡した。

海保　純は

「小林さん、どうして今日貴女を招いたかというと、江ノ島の旅館で初めて貴女と会ったとき、私の耳に二人の女の人の声が聞こえたの。何を言っているのか分からなかったけど、貴女についての霊界からの信号と受け取ったの。今までそのような時は霊界から「初対面の人の危険を守っているから、その旨伝えて欲しい」という信号が多くて、今回は貴女のことね、今までの例では大変危険にさらされていることを霊界から教えられ、守られたケースが多かったの」

体を固くして真剣な表情で聞き入っているアヤを見つめてから目を閉じた海保　純は

「あー貴女の姿が消えて、丁度同じくらいの年齢の女の人が見える。この人が加賀京子さんね。あー何か言っている。小林さん、静かにしていてね」

と言ってから、海保　純は目を閉じたまま、時折「はい」「はい」と頷いていた。

続く

公民館七館建立にかゝわって

勝山道子

昭和二十三年四月　千葉県大和田町から　結婚により稲城村の住民になった。田畑の続く農村で　婚家でも二反近く　梨畑　田畑を姑と耕作し　夫は近くの会社に勤めている所謂兼業農家で他の田は小作に頼んでいた　五月になったところ　まだ一ヶ月も経たぬ私に婦人会員四・五人で　会員募集と云うことで来られた。姑に話して　その場で会員になった　まだ知人もないところだったので誘われたことが嬉しかった。

昭和十二年頃稲城村には陸軍が東京第二造兵廠を設置され　六十万坪からの中で　軍人軍属　女子挺身隊　徴用工　学徒動員等を含め相当数（一万人近くの人達）が働いていたと云う　敗戦により米軍のレジャーセンターとして現在は出入出来ない　当時は軍事色の濃い村でもあった様だ

●稲城村婦人会設立の動き

この村にも戦前から婦人会があった

日本の婦人団体は

一、日本婦人連合会（文部省所管）

一、愛国婦人会（内務省厚生省）

一、大日本国防婦人会（陸海軍省指導）

等が存在していた　昭和十七年にこの三団体が大政翼賛会の傘下におかれ

○大日本婦人会として全国組織が出来上った　然し敗戦と共に米国の占領政策は文部省に於ける婦人教育行政を容認しなかった　それは戦前の軍国主義復活を懸念し厳しく規制し男女教育機会の平等に反すると云う視点から婦人教育の推進することを許さず厳しく監視した　この例にならい稲城村にあった　大日本婦人会を解散させ新らたな婦人会設立に役場がのり出した

昭和二十二年婦人会設立の動きに稲城までＣＩＦの力も及ばなかった。かつての婦人会員の中で部落の中心的な人に依頼し　会員募集を行い新らしい稲城村婦人会として誕生した

●稲城村婦人会

婦人会が設立されたものの会場が一つもなく、集会をするのに約三百人は集まる為　小学校の教室を二部屋借りて　間仕切りを取り　講堂代りにした。学校の教室が使用出来ない時はお寺の本堂を使わせてもらい　部落単位の会合は　個人の家　公会堂　梨の出荷場を使用したそれ程会場に恵まれなかった

婦人会の事業の大きいのは敬老会で　近くの温泉に案内したり記念品を出したりした

その費用を捻出する為　バザーを行い　その時の会場も学校の体育館　自治会館で冬の寒いので座ぶとんを各人で持参して出席した　稲城村の人口一万人　会員は軒並に入会したので八百人からいた。

会費は月一〇円　三ヶ月ごとに払った

昭和三十四年　社会教育法が施行されて　青少年　婦人団体その他社会教育団体育成に重点がおかれ　婦人会も色々指導を受けられる様になった　私も馴れぬ農業　内職に追われなかなか月一回の会合にも出られなかった

農業の労働は大変であったが定着したくらし　婦人会の仲間が私にとって何より話し相手であった。殊に婦人会長に恵まれ、次々の会長は熱心に会員の育成に力をそそいでくれた。戦後第一回の婦人週間が設立された時に婦人会長はこの趣旨　そして日本憲法の意義　男女平等の原則をされた。昭和二五年　私は長女が生まれる前「妊娠と育児について」と話があるので梨の寄場へ出かけた。この町ではたった一人の女医で当時婦人会長でもあり開口一番

「まだまだ乳児、妊婦の死亡率は多いバングラディッシュ国の統計と同じで乳児にとっても　妊婦にとっても良質の蛋白質は摂取しなければならない　つまり牛乳卵は欠かせない」

養鶏のさかんな処だが　財布をもたない嫁の口にはとても食べられない　鶏小屋へ入って卵を集めるのは嫁の仕事だから鶏小屋へ入ったら「毎日一つづつ食べなさい　殻は敷わらの下にかくすのよ」私はびっくりした。

あなたの体のために　健康な赤ちゃんを生むために　かんでふくめる様に　現実的な学びの婦人会へ私も心がけて出席した

婦人会手帳は　婦人会歌　日本国憲法の抜粋が記載されてあった

冨永ヨシ子会長が女性の地位向上を願った配慮と思う

東京第二陸軍造兵廠があった為　陸軍の官舎や寮が何ケ所もあり　それが戦後は外地からの引揚者又東京で空襲にあった為家を失った人　インドネシア　アジア諸国から引揚げた方々も婦人会結成当時　この方々も婦人会員役員も引受け所謂よそ者ではなかった。稲城村役場もた

った一つしかない　婦人団体と云うことで重要視し　農

林省が指導する　農村改良問題　文部省は婦人教育の指針を出したがそれの受皿として婦人会を利用した

●婦人学級と婦人会

昭和三十一年　婦人会は　婦人学級を五学級委託された
文部省は同年全国に委託学級を二三学級指定した
昭和三十二年に二七〇学級を実施した
東京都はその内稲城町（町制）婦人会に
昭和三一年　五学級
昭和三二年　二〇学級
昭和三三年　三七学級を委託開校した

然し稲城町教育委員会社会教育課には社会教育主事の専門職員がいなかったのでこれでは婦人学級を開校出来ないと云って若い職員に資格をとる様働きかけをしたのも婦人会であった　そして専門職員が生れた　稲城町は七つの部落がある（矢ノ口、東長根、大丸、押立、平尾、坂浜、百村）婦人会はこの七つの支部を持ち　その中でも五校は受けられてもその時三七学級にふえたので婦人会　ＰＴＡ　自治会までも婦人学級を受けることになった
会場は足りなく夜間に中学校の教室を借り　裸電球のもとで勉強した事が想ひ出される　学級の世話人　助言者は役場の職員丈では足りず　校長　先生　ＰＴＡの役員婦人会長役員も動員し私もすすんで役を引き受けた　婦人学級の学習内容は　子供の問題　母と子新らしい家庭家計簿　法律等巾広く学習が展開され憲法学習も取り入れた。多く話す書く　これ等の基本的な学習は私にとってもよく学び欠席することもなく学んだ
その折私が所属していた栄養改善普及会のメインである栄養学の基本である栄養三色運動に　農家の主婦に生活改善の一環として指導してほしいと頼まれた　私は講座に一年間受講することになり　東京日本橋の福祉会館に月二回通って　栄養三色の講座を受講し　それをそのまま婦人学級のグループに月一回（一〇人～一五人）一〇グループを担当し乍ら私も家庭の主婦として　家計簿は勿論　畠で取れた野菜　米等別に栄養家計簿更に栄養診断も学び乍ら実行し指導した　その効もあって学校給食問題にもかかわり　昭和五十年に新設の学校給食運営委員も勤められた
ところが栄養三色の指導の中で何を　赤（蛋白質類）黄（含水炭素類）緑（緑黄野菜類）果物と食品摂取の分類どれ丈　食事の摂取の量等は説明で納得させてもどうしてと云う事は調理の方法となると机と椅子丈ではなく水・火を使う調理室が借りられなく学校以外全くなく排水がない　石油コンロが調子悪かったり受講生も私も泣かされた　水の便の悪い処は各人一升びんに水を入れて来てもらった事もあり衛生上の問題がなかったかと今にして思う　然しこの調理実習は人気があってどのグループも休むことなく楽しく育った

●婦人国内研修に参加して

東京都教育委員会で第一〇回のリーダー管外研修の募集があった。稲城町教育長の推せんで私はこれに応募した　東京二十三区と三多摩から選ばれ　稲城から　愛知県　勝山　兵庫県　高橋　狩集と二名が選ばれた
昭和四十四年十月一週間の研修期間で各々二十名づつ
私も未だ子育の時であったが　農業のかたわら　婦人会生活学校　社会教育委員　学校給食の関係等地域をかけめぐる日々だったので地域以外を見るのもよい機会と思った
東京都は十年目の国内研修は今までと違い　一人一人が地域で困っているテーマを持ちよって自治体と共に考へて行くと云う管外研修であった　事前研修五回行い　東京都社会教育課　立教大学室教授　研究室の助手まで参加して一人一人に対応した。私の事前に提出した原稿の内容は「農村の生活改善　新生活をすすめる上で食品公害等どの様にすすめられているか　比較したり　参考になれば」と云う事を書いて提出してあった。助言者は私に
「一〇年も続けている活動を名古屋まで行って研修する事はない。自分の理解しぬくいもの　自分が視察することによって　自分がどの様に変り得るかと云うことを考へたのか？」
と指摘された　そう云われれば　事前研修中度々　自治とか行政　民主主義憲法と云う言葉かが出て来る果して私と自治との関係はどうなのか　かつて歴史講座の中で敗戦により　旧帝国憲法が日本国憲法になった時　旧憲法と新憲法がどの様に変ったか比較した事もあった　早速資料を出して見たら

第一章　天皇から始まり
第二章　戦争の放棄
第三章　国民の権利及び義務
　ことに第三章は一寧に学習した事を思ひ出した
第二五条　すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する　国は、すべての生活部面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない。
第二六条　すべて国民は、法律の定めることにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する。
すべて国民は、法律の定めるところにより、その保護する子女に普通教育を受けさせる義務を負ふ。義務教育、はこれを無償とする。
昭和二二年五月三日施行
私は今最も困っている事は、会場のないの事か愛知県へ行く目的のテーマを「公民館」と変更した。一体どうしたら建つのかと云うことて担当教授・助言者・都の職

員の方から公民館条例や　施設利用の話を聞き取組の方法として

一公民館を建てる運動を起す

一公民館を建てた時の運営はどの様にするのがよいか

一公民館と地域住民とはどの様にしてつながっているのか

と云う問題を三つに絞り私は愛知県へむかった　名古屋に到着後すぐ県庁に寄った。出迎への愛知県婦人連合会会長はじめ六人の役員の方々が迎えて下さり中には県会議員の方もおられた

会長の挨拶で会員は一三万人その方々から六千万円集め愛知県の補助金三億二千万円を受け名古屋城の美観を損なわない様に配慮した婦人会館が建つと聞かされびっくりした

それまで婦人会館がないので名古屋市内の教育会館（教師の研修の場）の上に婦人団体連絡事務所を置き三七団体の連絡の場にもなっていた　婦人団体は事務局があり拠点がなくては駄目ですとはっきり云われた

公民館一つない稲城を考へた　婦人の活動の場所が中学校や小学校自治会館を使用する事しか出来ない　その事が当然の様では駄目だと思った　名古屋へ伺った一日目から私の見る目がすっかり変った　そして施設を多く丁寧に見公民館を中心とした

名古屋でも昭和三十年に建てたM公民館は結婚式場もあり建て十年位は利用者も多かったがまわりに立派な結婚式場が出来た事もあり結婚式場としての改修も間に合わず使へる状態でなく専門職員もいない貸館的な状態で公民館とは名ばかりで活気がなかった

青年館も見学した　隣接の新しい春日井市高蔵寺ニュータウンは　保育所　殊に〇才からの保育　ＰＴＡは是か非かとの問題広く研修を終え帰るや兵庫に行かれた方々共に事後研修五回　私の考へは行く前とすっかり変りこれを自己変容と云うか　学ぶ事によって変り得るのだと云うことがわかった

兵庫県へ行かれた二人の報告で特に西宮市では一校区一公民館をめざし昭和三十年には一つしかなかった公民館が昭和三十八年には十四館になった話を聞くにつけ不可能なことではないと思った　公民館設立には老人から青少年は勿論のこと皆が力を併せて急ぎたい。研修の時三人が話しあい公民館設立の決心を新たにした。　そして社会教育主事の指導を受け　先ず教育基本法から勉強始めた

教育基本法第二条

教育の目的は、あらゆる機会に、あらゆる場合に於て実現されなければならない

地方公共団体は社会教育契働義務を示した公的保障の方法として施設の設置　学校施設の利用が強調された中で住民の自主活動を支える上で豊富な資料費用のかからな

い施設の存在することによっていつでも自由な学習の展開が可能となり公民館　図書館　博物館などは社会教育施設と呼ばれ　施設の意義は学校教育以上に大きい

●公民館設立運動

昭和四十五年　第一手段として発起人会を作り　チラシを作った　原紙が何度も切れる手作りの印刷　費用がないので皆でいたるところに行って手渡した

昭和四十六年統一地方選挙にむけて立候補者全員に公民館設立運動に協力する公約を入れてもらうことにした

私が社会教育委員長であったので　教育委員会に答申を出した。更に急を要することは、議会へ公民館設立促進に関する請願を出さねばならず　紹介議員二名　狩集サチ氏を代表として署名一五〇〇名と云われた

而しその間の運動は決して順調ではなかった。共に協力すると云っていた青年団が　小さいがプレハブの青年館があるので協力しないと云って来た　そして発起人から抜けた

公民館を建てようと重要な団体で私も狩集高橋も会員であったのでチラシに名前を入れたが問題になり婦人会長が同意出来ない一万枚のチラシから婦人会の名前を消して呉れ　署名は会員は勿論家族も一切しないと連絡が来た　私は呆然とした　一万枚のチラシから名前を消すのも大変な作業であった　賛成してもらえるものと思った我々にも落度があった婦人会員と家族を入れて千人はまとまりこれは私の責任で引受けた丈暗礁にのりあげてしまった　ところがその夜私宅に電話で　学識経験者といわれる方から「あなたは公民館を建てる運動をおこさうとしているが全国にペンペン草の生えて使われない公民館がある　こんな時に何故そんなものを」説教のつもりか　あるいは取りやめたいのか　この時は目の前が眞暗になり立っていられない程だった

翌日近所の若い「子供文庫」のお母さんに話したら「大丈夫図書館も併用した公民館と云う事ですから頑張ります。ＰＴＡも動いています」挫折した私を心から励ましてくれた　私の署名の範囲も全部まとめてくれた　だれかが建てるだろうと思っている内は建たない　私はこの警告を忘れないで頑張ろう　かつての婦人会長であってその時議員であった富永ヨシ子女史の力強い協力を忘れない

昭和四十六年　一三九二名の署名を議会へ提出することが出来た　行政は公民館を建てる事と併せて市の庁舎消防署も建てる目的で用地買収が行われた

第一に公民館に着手し　設計にあたっては　社会教育委員が中心になり理想に近く　眞四角な建物であることを避けた　入口はスロープをつけ車椅子も入れるエレベーターを付け　障害者の利用を考慮に入れた

公民館法の成立から住民には　自由公開無料の原則に基づいて開放されなければならない　つまり憲法　教育基

本法　社会教育法にのっとっていることであった
昭和四十五年五月設計業者が決定し　八月工事着工となった
職員は館長以下五名　公民館運営審議員一〇名が委嘱された
昭和四十八年六月一三日　待望の落成式が盛大に行われた　稲城市で公民館が始めて開始した　市役所より先に建った　梨畑の近く美しい建物であった
出来上がって見ると署名に反対した人達も公民館へ出入りされている　私は安心した
昭和四十八年　中央公民館
昭和五十年　第二公民館
昭和五十四年　第三公民館
昭和五十八年　第四公民館
平成四年　城山公民館
平成二〇年　稲城iプラザ
以上の様な経緯で　当初の七館構想まであと一歩と云う処まで来た

●公民館設立後の私

公民館設立運動が原動力となって私自身の考へ方が変った　女だから　もう年だからと思わない　様々の発想を考へ出し行動する　誰かが何処かでなく　自分自身がやらなくてはと思う
戦前の教育を受けた私は　戦後の民主主義社会に於て会議のすすめ方　議事法の精神やルールが一層必要であると共に共同学習を大事にして行く様にしたい。

終り

東北地方太平洋沖地震と東日本大震災考

漆原直子

今年三月十一日の東北地方太平洋沖地震は、東日本大震災として東日本の各地に多くの被害をもたらした。私はその日は職場にいた。大きな揺れが長い時間続き、19階建ての建物がかなり揺れて、キャビネットが倒れたり、壁にひびが入るなどしたが、幸い怪我人や大きな破損は無かった。エレベーターは全面ストップしたので、階段を使うしかなかった。気がかりだったのは、家族がどうしているかがすぐわからなかったので、やきもきしてしたが、長女とメールが繋がったので安心することができた。その日は、緊急事態に備えて夜9時過ぎまで職場に待機した。帰りは、鉄道が全線ストップしたため、日光街道を歩いて帰った。他にも多くの人が歩いており、すでに6時間は歩いていると話している人がいた。私は、この非常事態で皆よく歩いているなと、感心してしまった。現代人も必要に迫られれば、江戸時代の人々のように歩けるではないか…。家にたどり着いたのは、夜中の十二時半であった。幸い我が家に被害は無かった。夫の方は、職場が浦安で、ビルの十四階にオフィスがある。建物が振り子のように揺れて、パソコンやらプリンターやらが飛び交ったそうである。また、近くの公園に避難したものの、液状化現象が起き、地面から砂が噴出したので、また別の場所へ避難したという。私は翌日は土曜日であったが、緊急事態のため可能な人は出勤となり、自転車で約一時間半かけて職場へ行った。兎にも角にも初めての体験であった。

そうした一方で、東北の沿岸では地震と津波による甚大な被害が発生していた。この7月、私は仕事で被災地支援のために気仙沼へ派遣された。気仙沼市は、死者約千名の犠牲者が出ており、未だ約五百名の行方不明者がいる。震災後3月半位が経ち、瓦礫の撤去作業が進んで、

寸断されていた国道など開通した所もあったが、気仙沼線はズタズタで、一部開通した箇所もあるが、全線再開は不可と危ぶまれている。まだ、津波で破壊された建物の骨組みなどが残っており、ねじ曲がった鉄筋や木造家屋の二階部分のみがひっくり返った状態の所などがあった。津波の力の強さをまざまざと見せつけられた。テレビでは、どす黒い色をした津波とその後の海上火災の映像が映し出されたが、それらの被害を実際に目の当たりにすると、言葉を失ってしまう。相当な破壊力であったとしか言いようがない。地区によっては、山間部で海は見えないのに、川から津波が上がって来て、かなりの被害を受けた所もある。水害時のハザードマップに従って、避難所とされていた場所に逃げたのに、津波にのまれた人達もいたという。本当に人知を超える想定外の事態で、被害を受けた人々は無念としか言いようがない。

津波による被害は、さらに鉱毒被害も起こした。気仙沼市には奈良時代から金が採掘されていたとされる大谷鉱山があり、宮城県のホームページによると、一一〇五年に藤原清衡が建立した中尊寺金色堂の金は、ここから採掘されたものとされる(*)。本格的稼働は明治三十八年(一九〇五年)で、昭和五十一年(一九七一年)資源の枯渇により閉山となっていた。気仙沼市にはその他、鹿折金山があり、世界最大の金塊が発見されている。その大谷鉱山においては、今回の地震と津波で、土砂崩れと津波によって鉱滓が流失し、砒素が下流域に流れ出てしまった。一応四月に新聞等のマスコミでも報道されたが、福島原発の事故で、かき消されてしまったかのようで、あまり知られていないかもしれない。周辺の井戸水や沢の水を調査した所、環境基準値(〇.一mg/ℓ以下)の最大二四倍を超える数値が出た所があったという。人が五~五〇mg摂取すると中毒症状が出るとされる。その鉱山跡を管理している会社が、汚染された土砂を回収するそうだが、今年の田植えはできなくなってしまった。

*中尊寺の金色堂は、一九六二年から7年がかりで解体修理が行われた。その際、金箔を忠実に復元するために大蔵省造幣局に成分分析を依頼した所、金九六%、銀三.五%、銅〇.二%、鉄・ケイ素等微量、という結果であった。奥州産の金は、銀が一五%前後含まれ、銅はほとんど含まない。これは、江戸時代中期に志賀島で発見されたとされる『漢倭奴国王』の金印の成分に極似しているという。ちなみにその金印の成分は、一九八四年に蛍光X線分析によると、金九五.一%、銀四.五%、銅〇.五%、その他不純物として水銀などが含まれ、中国産の金と推定されている。よって、金色堂の金は中国大陸から金ばくという製品の形で渡来したのではないかとも言われている。

9月初め、宮城県の多賀城市において、「えみし学会」が開催された。多賀城は陸奥国の国府・鎮守府で、出土した木簡によると養老5年(721年)から造営が始まり、神亀元年に完成したらしい。日本三古碑の一つである『多賀城碑』(現在国の重要文化財であるが、明治から大正期にかけて真贋論争が起きている)には、〝神亀元年(七二四年)に、按察使兼鎮守将軍の大野東人が置いたものである〟と記される所のもので、十世紀末まで陸奥国の国府として、畿内政権の対蝦夷政策の重要な拠点であった。今回の地震で、多賀城市もかなりの被害を受けたが、今からおよそ千年前の貞観にも大きな地震と津波が起きて、多賀城は倒壊し、多くの犠牲者を出した。その時の様子は『日本三代実録』(宇多天皇から醍醐天皇の時代にかけて編纂し、九〇一年に成立)に次のように書かれている。

貞観十一年五月廿六日条

陸奥国の地、大いに震動す。流光、昼の如く隠映す。このころ、人民叫呼して、伏して起きることあたわず。あるいは屋たおれて、圧死し、あるいは地裂けて埋死す。馬牛は駭奔(驚き走る)し、あるいは互いに昇踏す。城郭・倉庫、門櫓・墻壁など頽落して顛覆すること、その数を知らず、海口は哮吼し、その聲、雷霆に似る。驚濤は涌潮し、沂(さかのぼる)し、漲長す。たちまちに城下にいたり、海を去ること数十百里、浩々としてその涯を弁ぜず。原野道路、すべて滄溟となり、船に乗るいとまあらず、山に登るも及びがたし、溺死するもの千ばかり、資産苗稼、ほとんどひとつとして遺ることなし。

今回の被害の状況と重なるような描写である。ただ一つ大きく違う所は、放射能汚染の有無である。建物等無傷であっても、高濃度の放射能があれば、人は住めない。セシウム137は半減期が約三十年とされ、人体に無害となるまでには、何十年、いや何百年かかることか…。未来に、〝負の遺産〟を残してしまったことになる。

今回の講師は、宮城県地名研究会会長の太宰幸子氏であるが、地名の中には過去の災害地を教えてくれているとして、『災害・崩壊地名　地名にこめた祖からの伝言』という著書を書かれている。要約して例をあげてみる。

・あくと(あくた)、こうづ→阿久戸・阿久津・赤生津
川沿いの低湿地で、大雨や洪水により肥沃な土が運ばれてくる地。また、大雨や豪雨の水が抜けにくい地に多い。

・あら→荒沢、荒砥沢、荒川
アラは、荒れる、暴れる等を意味する。

・いかり→碇、猪狩、五十嵐、五十里等
川のそばに多く見られる地名。「イカル＝怒る・溢

れる」という意味で、洪水等により度々被害を受ける地、水はけの悪い地をいう。また、「イカ・オル」というアイヌ語由来とも解釈でき、「(川が)氾濫する所」という意味がある。(『エミシの国のアイヌ語地名解』菅原進著)

・さる・ざる→猿田、猿鼻、猿跳、笊川

「サル・ザル」は古語の「ザレ(礫)」の転訛で、山の崩れて欠け落ちた所や岩の崩れることをいう。(『民俗地名語辞典』)

他にも色々な地名が挙げられている。

宿泊先は、七ヶ浜町の松が浜にある伊達政宗の避暑地としての仮御殿跡に建つ、『御殿場』という旅館に泊まった。御殿崎の崖の上にあるが、東北地方太平洋沖地震の時は、津波が建物のすぐそばまで来たという。そこより低い位置にある家は津波の被害を受け、七ヶ浜町では約一〇〇人近くの犠牲者が出たという。

日本列島付近は四つのプレートが衝突している。東日本が北アメリカプレートの上に、西日本がユーラシアプレートの上にあり、伊豆半島と伊豆諸島、小笠原諸島がフィリピン海プレートの上にある。太平洋プレートが日本海溝で北アメリカプレートの下にもぐりこみ、伊豆・小笠原海溝でフィリピン海プレートの下にもぐり込んでいる。今回の東北地方太平洋沖地震は、太平洋プレートが北米プレートにもぐりこんでいる日本海溝付近で起きた。なお、フィリピン海プレートは南海トラフで、ユーラシアプレートの下にもぐりこんでおり、近い将来東海・東南海・南海地震を引き起こすことが懸念されている。巨大地震はこれら海溝付近で起こることが多いという。また、海底に地形の変化が起きれば、津波となる。

一九八八年に日本で『地震考古学』が発足し、一九九五年の阪神・淡路大震災等を経て急速に普及している。遺跡から過去の災害の様子を探ろうとしていて、「古代へのロマン」だけではなく、現代の私達の生活を守ることに役立つ「実用的な側面」も持つとされる。

大きな地震が起きると、激しい地震動により地下の砂や礫のすき間が小さくなって地層が縮んだり、〝液状化現象〟により〝噴砂〟が起きて、地下の砂の層が薄くなる。このため、地盤の沈降が起きる。〝液状化現象〟は激しい震動により、地下水が砂礫層と混ざり、液体状になる現象で、地面が裂け、地下水と一緒に細かい砂が流れ出すのが〝噴砂〟である。沖積低地にある遺跡の発掘調査において、地中の砂が上昇し、地面に広がった痕跡がたくさん見つかっている。そこには、〝砂脈〟という噴砂の通り道となった割れ目が見られることがある。この〝砂脈〟があるということは、大きな地震があったということになり、地層が堆積した年代から地震が起きた時期が絞り込めるとされる。遺跡としては、弥生時代中

期の琵琶湖湖底の針江浜遺跡、静岡県袋井市の坂尻遺跡と磐田市の御殿二之宮遺跡(前者は六八四年頃、後者は一八五四年の東海地震によるもの)、京都府八幡市の木津川河床遺跡(一五九六年の伏見地震によるもの)等がある。

日本列島に住む限り、私達は地震からは逃れられない。しかし、地震による災害は、過去の歴史からの教訓や現代の被災者の体験、行政と住民一人一人の防災対策で、最小限に食い止めることはできるのではないか。私達はつい日常性に安穏としてしまうが、常日頃から意識化して、対策を講じておくことが大切であると思う。〝天災は忘れたころにやってくる。〟

【参考文献:サイト】

・『平成二十三年三陸大津波　被災地からのレポート』　名村栄治　著

・『災害・崩壊地名　地名にこめた祖からの伝言』　宮城県地名研究会　太宰幸子　編著

・『地震　なまずの活動史』　寒川旭　著

・『日本の地形　特質と由来』　貝塚爽平　著

・サイト『保立道久の研究雑記　歴史家の研究室の日常』

祝出版

ソクラクレス

三戸岡 道夫 著

栄光出版社　1,500円

ビジネス短編小説集

柳田松太郎氏のこと

吉田忠雄

私がこどものころ毎朝私の家の前を東武足利市駅に向かう小柄な老人がいた。たまたま父とあうと挨拶をかわした。あとでこの人は梁田村村長で柳田松太郎という人であることを知った。父は梁田村の生まれなので知り合ったのであろう。

その後私は東大に入学し、応用化学科に進学した。卒業生名簿を見ると柳田松太郎氏の名があり、明治44年卒とあった。私が昭和31年卒であるので、柳田さんは東大応用化学科の46年先輩であることが分かった。

柳田松太郎氏は最初大阪瓦斯株式会社に勤務し、退職後梁田村の村長を務められた。そのころ毎日通勤のために私の家の前を通った。少しびっこを引いておられたが、健康そうであった。自宅から約2キロメートル歩いて私の家の前を通って東武足利市まで行き、東武線に乗って二つ先の福居駅で降り、そこから約2キロメートル歩いて、梁田村まで行く。そこで執務してまた同じ道を帰ってくる。

柳田松太郎氏は、学校の設備や施設の充実に貢献された市町村長の一人として、また梁田村第15代村長として記録されている。

梁田村の村長を辞めた後、足利ガスの社長を務められた。足利ガスは足利市内にあり、柳田さんの自宅からは、梁田村役場よりずっと近い。柳田さんは足利に転勤されてから間もなく亡くなられた。90歳台であった。現足利ガス社長の石川尚志さんは足利における私の親しい友人の一人であるが、「私の会社の社長に柳田さんを招いたのは悪かったかな」と冗談ともつかず言われた。ちなみに、足利ガスの創業にあたっては柳田さんが技術的な指導をされたそうである。

私は結婚に際して家内を連れて柳田さんのお宅に挨拶に伺った。大変よろこんでくださった。

柳田松太郎氏のご子息にもお会いした。当時勤務していた足利工業大学に来てくださった。父上の松太郎氏に面影、とくに口元がよく似ておられた。大正8年のお生まれのそうで、東京ガスに勤務され、現在は悠々自適の暮らしをしておられる。

柳田松太郎氏と私は同郷であり、また共に東大工学部の応用化学科を卒業している。わたしは柳田松太郎氏を郷里の、また東大応用化学科の先輩に持ったことを誇りに思っている。

（司馬雑感　二十七）

司馬遼太郎の美術観

山田嘉久

一「微光のなかの宇宙―私の美術観」

司馬遼太郎は作家として一本立ちする前に、四年間ほど美術担当の記者をしていたことがある。その当時、自ら「暗闇に立つ一本の孤峭な樹」と題する印象派ばりの絵も描いている。

それだけに一流の美術眼を備えていて、作家として大成した後年にも「微光のなかの宇宙」なる題名の美術論集まで出している。昭和四十年後半から一〇年ほどの間に書かれた彼の美術論九編を集めたもので昭和五十九年、中央公論社から限定出版された。（その後、昭和六十三年普通版）

私が読んだのは平成二年版の文庫本だったが、今まで数多くの司馬作品を読んできた私にとってこの本ほど難解なものはなかった。

乏しい文学的素養以上に全くの美術オンチである私は、まず司馬がこの本の出版のために書き下ろした冒頭の一文「裸眼にて」で早くもつまずいた。

前記の美術記者時代に司馬は「セザンヌ理論」を徹底的に頭に詰め込んだと書いてあるが、私にはまずこの「セザンヌ理論」とはなにものなのかが理解できなかった。

モネやルノアール等の印象派の画家たちと同時代の人物であるセザンヌだが、むしろポスト印象派の画家として紹介されることが多く、キュビズムなど二十世紀の美術に多大な影響を与えたことぐらいは知っていても、それ以上の知識は全く持ち合わせていないからだ。

司馬は、セザンヌについて画家である以上に「造形理論」の論客として偉大だと認めてはいるが、

〈後世に害を与えた罪の方も少くない〉と指摘して、そのためにか〈この四年ほどのあいだ、一度も絵を見て楽しんだこともなければ、感動したこともなかった〉そうだし、その後仕事を替わってから始めて〈自分だけの裸眼で〉絵を見てから自由に絵を楽しむようになったとの述懐は生身の司馬を見ているようで興味があった。

〈一九世紀以降の美術は理論の虚喝が多すぎた。私自身、あやうく魔法にからめとられかけ、やっと逃げ出した。〉

司馬が再び絵筆を握ったのは、初めての中国旅行記「長安から北京へ」（昭和五十一年）の装禎画のためだった。

結局、私にはセザンヌ理論は理解できなかったが、この「裸眼にて」は単なる司馬の美術論ではなく、司馬の創作の原点―物事を「色眼鏡」（イデオロギー）で見ないこと―ではないかと私流に解釈した。

この本で扱われているのは、画家ではセザンヌのほかに、ゴッホ、八大山人、須田国太郎、三岸好太郎、三岸節子、須田剋太、鴨居玲、陶芸家では八木一夫、それに日本密教美術の在り方を定めた空海と多岐にわたっている。

○「密教の誕生と密教美術」と「わが空海」の二編は司馬お得意の「空海論」である。前者は昭和五十八年、後者は昭和四十五年に書かれたが、この間の昭和五十年に名作「空海の風景」を上梓している。

前者では密教を体系化した空海の思想、その思想表現である密教美術を解説している。不動明王の剣、薬師如来の薬瓶、他の諸仏、諸菩薩の印などは誓いのあらわれである小道具（三昧耶形）であり、密教作法の約束事であるという。

そして後者では真言密教は〈空海一代において終わり〉であり、ライバル最澄に比し〈この空おそろしいばかりの存在〉と空海を評している。

本稿執筆中に東京国立博物館で開催中の「空海と密教美術展」を見学した。金剛峯寺や教王護国寺（東寺）ほかの密教寺院から仏像や曼荼羅、法具、空海自筆の書が展示されていたが、そのさまは圧倒的で、別世界に誘い込まれたような感覚に襲われた。

数年前、東寺講堂で見た数々の国宝（梵天坐像、帝釈天騎象像、持国天立像など）を見たときの感動が再度、甦った。

特に須弥壇の上から声を荒げ、いままさに剣を振り降ろそうとする持国天の迫力は満点。薄暗い展示室のなかで一層、凄みを帯びていた。

注　今回の展示は東寺にある二十一尊のうち七尊。主尊大日如来座像は金剛峯寺からの出品（国重文）だった。

○「激しさと悲しさ」―八大山人の生涯と画業（昭和五十二年）

昭和三十年代のはじめころ、中国明末の画家八大山人の「安晩帖」を見たときの感激を綴っているが、恥ずかしいことながら私は山人についての知識を全く持ち合わせていない。

○「ゴッホの天才性」（昭和四十七年）
晩年のゴッホがアルルに移り住んだときに、彼は「日本に近くなった」と喜んだとは興味深かった。
そして彼は生前、弟のデオをもふくめて身辺の者にすら評価されなかったが、その死の翌年に開かれた回顧展によって世間の注目を得るようになった。ゴッホの生涯は〈人間の社会に入れてもらうことにことごとく失敗した〉と書く。
司馬が前記、近代絵画の「造形性」を「理論の虚喝」と一蹴したのはゴッホの「宝くじを買う人々」を目にしたからだという。
司馬は、このゴッホ論を書いてから約三十年後の「街道をゆく三十五（オランダ紀行）」でも百ページ近い長い枚数を使って再びゴッホ論を展開している。
ゴッホの精神は生涯飢えたものだったが、彼の想造力が彼の肉体を従順なものにしたと司馬は分析する。
また、「わだは、ゴッホになる」と叫んだという棟方志功についても、彼の故郷を訪ねた「街道をゆく四十一（北のまほろば）」では二章に亘って志功の芸術を追っている。
（前記「ゴッホの天才性」は「激しさと悲しさ」と共に、司馬の死後に編纂された「歴史からの邂逅4」にも所収されている。）
なお「オランダ紀行」ではレンブラントの〈力学的な構成力、微かな光を捉える描写力、人間への関心、注意力〉に感心して、レンブラントこそ〈人類史上最大の画家〉だと絶賛するのである。
その「オランダ紀行」では同行の須田克太画伯が体調を崩したため、司馬自身が装画を手掛けているほどである。
ついでながら彼の最後の小説「韃靼疾風録」（昭和六十二年）では、挿図を担当したのは彼自身である。
また、その数年前に書いた小説「菜の花の沖」に関連して「菜の花と辰悦丸」という二枚の絵を残している。
更に最初の訪米記「アメリカ素描」（昭和六十一年）のカバー画まで手掛けている。
○「微光のなかの宇宙」（昭和五十一年）
この本の題名はこの小論から採ったもの。
司馬が若い頃から好きな画家須田国太郎の画風を「微光のなかの宇宙」と表現した。
〈微光のもとで堆積された色彩群を表現しようとした点で、かれ（注、須田のこと）は明るさというものの本質的な追及者であった。〉と須田の「窪八幡」に出くわしてしまった衝撃を語っている。
しかしここでも私は須田国太郎という画家をあまり知らなかった。
○「八木一夫雑感」（昭和五十五年）
司馬の若い頃から付き合いのあった陶芸家八木一夫についての随筆だが、その数年前にも「八木一夫と黒陶」という随筆を書いている。（司馬遼太郎全集五十巻に所収）
〈二十代の感性を千年ももちつづける勢いを示しつづけ、にわかに死んだ〉天才作家を記している。
○「三岸節子の芸術」（昭和五十六年）
三岸節子の画風は水蒸気の多い日本よりも乾燥した欧州にあっているとは、司馬の三岸観である。そして〈われわれは、三岸節子のような画家をもうひとり持つことができるだろうか〉とも書いている。
なお節子の夫が夭折の天才画家三岸好太郎であるが、彼は「街道をゆく一五（北海道の諸道）」にも登場する。三岸の異父兄が司馬の尊敬する作家子母沢寛であるとは、この本によって初めて知った。好太郎の代表作の一つといわれる「兄および彼の長女」のモデルが子母沢親子であるそうだ。
その子母沢が「嫁も絵描きなんですってね」と司馬にいったのには、司馬もそのユーモア精神に感心してしまったと書いている。
司馬は好太郎が気になるらしく「街道をゆく三十八（オホーツク街道）」にも登場する。
〈好太郎は、典型的な都会派でもあった。（中略）どの作品にも筆触に田舎臭い躊躇がない〉と評しているが、このときの司馬番だった若い村井記者も私のように好太郎の名を知らなかったようで、彼の書いた「司馬さんの思い出」によると「君の学校（旧制札幌一中）の先輩でもある高名な画家を知らないのか」と司馬から説教されたという。（また、最近出版された村井氏の「街道をついてゆく」にも、このことに触れている。）
○鴨居　玲
鴨居は闇の中に「人間の根源的な恐怖として老醜」を描くのを得意としたが、司馬自身も少年期より西洋の老人の「苦渋に満ちた顔」を無意識に描く癖があったと告白しているが、このあたりが鴨居に共鳴する点であろう。
○「出離といえるような」（昭和五十六年）
仏教用語に「出離生死（しゅつりしょうじ）」という言葉があるそうだ。辞書をひくと（煩悩または苦界から抜け離れること）とある。本題はそんなに大げさなものではなくとも画家須田剋太の人生は、これに近いと司馬は考えているのだろう。
冒頭の文章に〈須田剋太氏は浮世の人なのかどうか〉とある。「街道をゆく」シリーズで司馬と須田は切っても切れない間柄となる。本エッセイは「街道をゆく」が始ってから十年後に書かれたものだが、「街道をゆく」で、具象画から抽象画に「出離」した須田に会うのが何よりも楽しみだったと書いている。その上、須田のグワッシュ作品に出会える二重の楽しみがあったと、もらしている。
この五年前に書かれたエッセイ「須田剋太氏の芸術と

人間」では〈私はゴッホを好み、八大山人を好み、さらに我が友では須田剋太を好む〉とも書かれている。

さらに昭和六二年には、須田について「善財童子」なる随筆も書いている。善財童子とは司馬と親しかった東大寺別当の上司海雲管長が須田画伯につけたあだ名である。

そして平成二年七月、司馬が須田の死を知ったのは偶然にもかって二人で旅したことのあるモンゴルの地だった。

このときは須田なしの「草原の記」取材中だった。

さっそく司馬は旅先で須田の思い出を「二十年を共にして一須田剋太画伯のことども」を書いた。そして共にモンゴルを旅した須田の当時の感動について「天性、光に敏感なこの人の詩心のしわざ」と評した。

二　司馬作品にみる芸術家たち

①長沢蘆雪（一七五四―九九）

司馬の初期の短編「蘆雪を殺す」の主人公は円山派の始祖円山応挙（一七三三―九五）の高弟である長沢蘆雪である。

蘆雪は応挙門下の俊英でありながら、師の穏やかな作風に反して大胆な筆法と奇抜な構想で知られている。その描く絵は花鳥、動物、人物画にしろいずれも異彩を放っている。

今、南紀の無量寺に保管されている「虎図」「龍図」（いずれも国重要文化財）は蘆雪の代表作として名高い。

こんなアクの強い芸術家の肖像を、司馬は丹波亀山候の家臣やその末子とのやりとりを通じて、ユーモアたっぷりに描いている。

亀山候の家臣米田外記は主命により蘆雪に玄徳劉備の絵を依頼する。ところが蘆雪は画布いっぱいに大山岳を描き、肝心の劉備は傍らに米粒のように小さく描いた。これに不満をもった事大主義者の米田は勝手に礼金を値切ろうとした。腹を立てた蘆雪はこの絵を絵画会に持ってゆくと予想外の高値で売れたため、米田は責任を取らされて切腹の羽目になる。

その後、米田の息子が応挙門下の孫弟子になったと聞いた蘆雪は復讐を恐れるという物語だが、「熱気」を持って生まれた人間の宿命的な悲劇を見事に描いている。

師応挙から「無用の奇想癖」を叱正された蘆雪の心には豪胆と臆病が同居していたと司馬は見るのである。

②松村呉春（一七五二―一八一一）

同じく短編「天明の絵師」の主人公松村呉春は蘆雪と同様に応挙の弟子で円山四条派の祖となった画家だが、司馬は両者を対照的に描いている。

1　蘆雪は個性のかたまりだが、呉春は模倣の天才

2　従ってその人生も蘆雪は豪快な悲哀感漂う生涯に対

して、呉春は寂しげだが栄華に包まれた人生

3　師応挙に対しても、一方は応挙的な規範や常識に反発したのに対して、片方は師に従順なためにその才能を認められる。

こんな対照的な絵師二人を司馬はあくまでも相対的に描いているが、この短編で中心で扱っているのは蕪村の内弟子であった頃の呉春で、「あの男こそ天才だ」と賞賛する師蕪村の賞賛と、「師に似て非なる俗絵師」とする上田秋成の酷評を対置させている。

③田崎早雲（一八一五―一八九八）

司馬は「天明の絵師」「蘆雪を殺す」の前後には、幕末明治の勤皇画家田崎早雲を取り上げた「喧嘩早雲」を発表している。絵師もの三部作と云われているが、これらはすべて前記「微光のなかの宇宙」で書いているように「絵を見て感想を書くこと」が仕事であった司馬の経験が、その背景にあるのだろうと思われる。

足利藩の国詰の足軽の子に生まれた早雲は、武芸や兵学を学んで人に抜きんでて十九才で免許皆伝、二十才になると家中一番の剣士となった。一方、画は谷文晁に師事して卓抜した技を示した。この男の癖は画が行き詰まると武者修行と称して各地を流浪することであったが、ある時、宮本武蔵（二天）の画を見て烈しい衝撃をうけた。武蔵の気魂の表現にうたれ、深く自戒する。そして「明治の二天」と言われるまでになる。

戊申戦争では誠心隊を組織して活躍した。絵師と武芸者を兼ねた早雲という変わった人物に託して、明治維新を描いた異色作となっている。

（以上三部作はいずれも司馬遼太郎全集三十一所収）

④古田織部（一五四四―一六一五）

前記三部作の直前に書かれた短編「割って、城を」には茶人大名として知られる古田織部を描いている。

織部は千利休の高弟で信長に仕え、秀吉からも鑑定上手ということで武功もないのにお伽という役目で三千石にまで累進した。更に慶長五年の関ヶ原ノ役では東軍につき、家康から伊勢松坂で一万石の大名にもなった。

この短編の主人公は関が原の戦いで主家を失い、織部に抱えられた善十という武士。織部はその善十が知らずに持っていた宋胡録という名品の茶碗を差し出させ、褒めちぎったあと指で割った。これを金や漆で接いで創作のよろこびを味わうのだという。

〈割って継げば、名も実も茶碗は織部の作品となる。〉

その作品はおそらく一国一城にも替え難いものになるであろうとの織部の茶道に善十は魔道を感じる。

しかし、風貌が織部とそっくりだったことから織部が幕府への謀反が露見した際、織部の身代わりとなり切腹。そして当の織部は薩摩に逃れる

織部の美意識は豪放とも自由ともいわれるが、彼好みの陶器はひずんだ形（非対称）の中にこそ、美しさがあるという。

（司馬遼太郎全集二十九所収）

なお吉田健一は当時の文芸評論家としては珍しく大衆文学としての司馬作品をよく取り上げたが、この「割って、城を」も時評している。

〈茶が少なくとも当時は、単に美の追求などという綺麗事ではなしに、物理学的な力が働くかとさえ思われる実体を備えたものだったことを伝えて、この小説は面白い〉と。

織部の二面性（怪物性と芸術家魂）を見事に描いたものとして高く評価している。

司馬はこの短編を書いた直後に「織部のこと」という随筆も書いている。（「司馬遼太郎が考えたこと」②所収）

〈おそらく世界の造形史のなかで、こんにちでいう前衛精神を持った最初の人物ではないかとおもう〉

〈ピカソが若い頃に感じたのと同じものを、四百年前に感じた〉と織部を評価している。

⑤蒼洋（司馬の創作上の螺鈿作家）

「福田定一」の本名名で、昭和三五年に書いた短編「わが生涯は夜光貝の光と共に」の主人公蒼洋は、師匠である田村月樵（明治時代の画家　一八四六―一九一八）の下で洋画家を目指すが、なかなか芽が出ず、絵を諦めかけていた。

そんなある日、街の古道具屋で見つけた光琳作の螺鈿が彼の人生を変えた。螺鈿とは、夜光貝などを素材に漆器や木地の表面にはめ込み装飾する工芸技法だが、奈良時代に中国から伝えられた。平安時代には蒔絵にも併用されたが、蒼洋の時代には之を専門とする制作者は少なかった。

師である月樵は蒼洋の肩をたたき送り出す。

「お前は一体何をしてきたんだと尋ねられて満足に答えられる者はそう多くない。そう思えば、お前はお前の人生で身を打ちこんでやれる仕事を一つ持ったんだ。」

中国に渡り艱難辛苦を乗り越え、螺鈿制作で名声をなした蒼洋は、七十歳を過ぎて彼自身と芸とが混然一体という境地まで達した。

司馬の得意とする人物描写の第一歩の作品であるが、早くも、既に登場人物に対する愛情が紙背に滲み出ていることに気づく。（司馬遼太郎短編全集①所収）

「アメリカ素描」カバー絵（著者自身による）

性と化粧（二）

鈴木守

第二節　歴史的にみた性と化粧（一）

先報で述べた現代社会における性と化粧について概括すると、先進社会の人たちは、意識しているかどうかは別として、浴用剤、洗浄料、デオドラントなどの衛生用トイレタリーを性器に直接触れさせている。これらの衛生用品とは別に、房事の潤滑剤として乳液を密かに使用する例もあった。

一方、裸で暮らす原始社会では、性を強調する女性の瘢痕化粧と男性らしさを示す身体彩色と陰部剃毛が見られた。本報では、過去の人たちが行った性と化粧について述べる。

一　わが国における性と化粧の文化

現代の化粧品技術書には、性関連の化粧について一切記載されていない。過去に遡っても、江戸時代の『都風俗化粧伝』や『浮世風呂』、平安時代の『倭名類聚集』などに様々な化粧が収録されているが、性と化粧に関してはなかった。また、『世界美術全集一～三〇巻、平凡社、一九五六～五七（以下・美術全集）』収載の絵画、彫刻、埴輪にも裸体像は登場しなかった。

ところが、『川柳のエロティシズム、下山弘、新潮社、一九九五』および『浮世絵に見る江戸の暮らし、橋本澄子、高橋雅夫編、河出書房新社、一九八八』には、江戸時代の性風俗が赤裸々に示されていた。

前者は〝ばれ句〟を集めた『末摘花、一七七六～一八〇一』を引用し、ポルノ川柳のオンパレードだった。この中から化粧に関係する句を拾うと、「女房の毛は十六で生えたまま」、「毛切れ以後お妾へ斗りいらっしゃり」、「あの嬶　開へ毛抜きを当てた奴」、「おのが手を温和でくじるのは腰湯」があった。

最初の句は女性の十三歳は初潮、十六歳は初毛の年齢である。即ち女房殿は下草刈りをしたことがないのである。第二句は殿様が房事の最中に大切なお道具を奥方の恥毛で傷つけてしまった。殿はそれに懲りて妾通いに専念したというのである。奥方はヘアのお手入れなどはしたないことをしなかったが、お妾さんは殿のお手当て大事で毛繕いしていたことを窺わせる句である。第三句の〝開〟は女陰であり、当時、毛抜きを使ってヘアを整えるのは遊女の嗜みであった。この嬶殿は水商売上がりであろう。最後の句は腰湯で谷間を洗っているうちに気分がよくなり手淫し始めたという句であるが、その句には垣根越しに覗き込んでいる出歯亀の絵が添えられていた。出歯亀の足の間に亀の頭が佇立していた。

後者の書には、三代歌川豊国が廓の明け暮れを描いた珍しい浮世絵が掲載されていた。この絵は妓楼の内輪の姿を描写したものである。郭の内湯に四人の遊女が描かれ、彼女たちの谷間に草が生え、一人は股間を手拭いで拭っていた。厠の図では手水鉢を前にして手を洗い、一人は床板の間に設けられた溝を跨いで局部を洗っていた。

かように川柳のばれ句や浮世絵から女性の性風俗をみると、玄人筋では毛抜きや鋏で陰毛の手入れを行っており、素人玄人の区別なく局所の洗浄と清拭を行っていたことを知ることができた。

二　中国における性と化粧の文化

『十八史略』、『西遊記』、『三国史演義』、『水滸伝』ならびに『金瓶梅』に目を通したが、性に関する化粧としては『水滸伝』と『金瓶梅』に纏足が見られるのみであった。また、『美術全集』収載の美術品の中には、性に関わるような、例えば裸体像さえ見られなかったが、『中国歴代婦女妝飾、周汛、高春明、三聯書店、上海學林聯合出版、一九八八』には纏足の実像と宋、明代の纏足用の靴が掲載されていた。

既に述べたように、纏足は広義の化粧に属し、この風習は一昔前の中国で行われていた。纏足について日下翠（金瓶梅、中公新書、一九九六）は、「纏足を施すと、女性の立ち居振る舞いが洗練され、盆栽のような人工美を作り出す。取り分け、性的な快楽に都合がよいとの説もあり、男性にとって、よほどのメリットがあったことは疑いない。纏足は、不健康な人工美、人工的な性器をもった女性を生み出す化粧風習」と述べていた。纏足の発祥は、後宮の女性たちの逃亡を防ぐために行われ、一〇世紀五代南唐の李公主の頃に始まったとされている。

三　南アジアにおける性と化粧の文化

南アジアは熱帯から亜熱帯地域に入り、このような気

象環境で生活する人たちは身体を露出しているので、絵画彫刻にも裸身像だけでなく、性器崇拝によるリンガ（男根）やヨーニ（女陰）の像が多数見られる。しかし、『美術全集』を見る限りでは、性と化粧の関連を示す作品には出会わなかった。

浴用剤や洗浄料の基本は水浴にある故、水浴について記す。インドでは一般的にもよく知られているように、ヒンズー教徒は聖なる川ガンガーで沐浴しており、水浴の風習はモヘンジョダロの公衆浴場（前二五〇〇前後）まで遡ることができる。

一方、性関連の化粧文化としては、『メークアップの歴史、コーソン著、石山彰監、ポーラ文化研究所、一九八六』に古代インド・マウルヤ朝期（前三二六～前一八七）の若い男性が顎鬚を整えるだけでなく、股間を剃毛し、更に胸部の体毛を紋様状に剃ったという記録が残されていた。剃毛風習を支える剃刀はモヘンジョダロの浴場跡で発見されている。

ほかに『インド人の身香、松山俊太郎、化粧文化二一号、一九八九』には、「インドに侵入したアーリア人は匂いに敏感であり、カーマ・シャーストラなどの性愛の経典に女性を性器の大きさによって牝鹿女、牝馬女、雌象女に分類し、それぞれの愛液臭と体臭が一覧されている」と記されていたので、匂いと性の関係に興味が湧いてきた。

というのは、性愛の経典の一文に目を通していると、既報、『まんじ一一四号』の『古代インドの化粧文化』に「古代インド人は香樹香草をふんだんに用いる」と記載したことに気付いたため、具体的な証拠はないが、「古代インドにおいては、性愛の表現に香り化粧を施した」という考えが彷彿と沸き出してきたのである。

（次号に続く）

坊主の坊主頭（一）

鈴木守

「嘆けとて月やはものを思はするかこち顔なるわが涙かな」と西行法師は謳っている。左衛門尉佐藤義清が出家する際に自ら髻を落とし、戒師に頭を剃らせている図が『西行物語絵巻、一三世紀中期』に描かれている。

現在でも僧侶は坊主頭である。だから坊主の坊主頭は「僧侶を表示する無髪の髪化粧」ということができる。

坊主というのは、本来は寺院の宿坊の主・住職であったが、広く僧侶全般を坊主と呼ぶようになった。僧侶は皆頭を丸めていたので、丸めた頭を坊主頭とか丸坊主というようになり、やがて頭を丸めた男の子を小僧とか坊主と呼ぶようになった。罵り言葉としては餓鬼、悪餓鬼もあるが、なぜ子供を餓鬼というのか、その理由は知らない。

一　現在の坊主頭

「はんにゃーはらみーたー」と読経の声が響いている昨年、法事で田舎の寺へ行った時のことである。坊さんは国民学校、現在の小学校の時の一年後輩であり、息子の坊さんと一緒に法事を勤めてくれた。法事が済んで精進落としになった。その席で有り難い法話を拝聴しながら二人の坊さんの頭を眺めた。息子の頭は艶もよく青光りを発していた。親父の方は艶も青みも萎えていた。

和尚さんたちは般若湯、私はお神酒を飲み調子がよくなった。親父和尚は悪餓鬼の頃からの仲である。ざっくばらんに感想をいうと、「俺も年でなぁ、俺の頭は坊主頭じゃなくて禿げ頭なんだよね」と宣わった。息子殿は笑っていた。だが、その彼も去年の暮れに冥途へ旅立ってしまった。寂しい限りである。

坊主の坊主頭はしょっちゅう見掛けるが、今まで気にもしていなかったが、尼さんは坊主頭だろうか、気掛かりになってきた。幸い家の近くに『葷酒山門に入らず』と掲げた尼寺がある。山門の前を通ると、偶々頭を丸め

た尼さんが庭の掃除をしていた。そういえば、瀬戸内寂聴尼も落飾していることを思い出した　したがって、現代の尼さんは坊主頭であることは確実だ。

話は変わる。私たち昭和一桁生れのものは、小学校の頃皆毬栗頭だった。前出の和尚さんも毬栗頭の悪たれ小僧だった。赤紙が来ると、若い衆も床屋で坊主頭にした。

だが、昨今では幼稚園児や小学生でも坊主頭の児はいない。僧職者以外に坊主頭はいるだろうか。「いるいる」テレビでしか見ていないが、スポーツ選手の中に坊主頭がいる。彼らは髪の毛の空気抵抗を減らすために頭を剃毛し、格好をつけてスキンヘッドと称している。スキンヘッドはコンサイスは勿論、英和大辞典にも載っていない。だが、スキンヘッドは慣用語になりつつある。

それはそれとして、坊主頭と似通った意味でクリクリ坊主と毬栗頭が使われている。これらの言葉を辞書でみると少し違う。坊主頭とクリクリ坊主は「髪を剃った頭」とあり、毬栗頭は「髪を短く刈った頭」と解説してあった。剃ると刈るは明らかに異なる。

除毛法、要するに毛を落とす方法にはいろいろある。その方法を紹介する前に、毛の名称について述べておく。われわれが目で把握できる毛の部分を毛幹と呼び、その先端を毛尖という。毛が皮膚の中に埋もれている部分が毛根であり、毛根の根っこは白く膨らみ、この部分を毛球といい、毛の細胞を作り毛成長の役割を果たしている。

床屋さんの除毛法は、鋏で断毛し、バリカンにて剪毛、剃刀を当てて剃毛し、仕上げする。その他の除毛法を挙げると、チオグリコール酸などの化学物質で処理する脱毛、毛抜きによる抜毛がある。古くは二枚貝の貝殻を併せて毛抜きに使用し、また、一昔前の頃は、熔かしたパラフィンで腋窩を塗り固め、冷えた後パラフィンを引き剥がして腋毛を除去していた。

二　過去の坊主頭

大正初期の子供は毬栗頭であった。丁度今、往年の名画・高峰秀子、三船敏郎共演の『無法松の一生』の放映中である。見ていると、松五郎に帽子をとって挨拶しているお坊っちゃんの毬栗頭が現われた。

江戸時代に入ると、川柳に「元服も二タ剃刀は女なり」と詠まれている。眉毛を落とすには二タ剃刀が必要だが、男の元服は前髪を一ト剃刀で落とすため、男性の元服は一ト剃刀が前提の句である。だから、当時、元服を祝うような階層の子息は前髪を整えていたのである。

前髪を剃り落とした跡を月代といい、絵具を塗った訳でもないのに「青々とした月代」と表現される。若い和尚だけでなく小坊主の頭も青いが、普通の子供たちの毬栗頭は黒く見える。例えば、テレビ漫画の一休さんの頭は青いが、サザエさんの弟カツオ君の頭は黒い。かように、子供の坊主頭と毬栗頭を青と黒で描き分けているのを見ると、両者の違いが理解できる。

では、刈ると剃るの違いで頭が黒かったり、青かったりするのは何故か。黒く見えるのは皮表に毛幹が残っている証拠である。剃毛して毛幹が剃り落とされれば青く見える。入墨で黒い顔料を刺入すると青く見えるのと同じである。これはチンダル現象に基づき、チンダル現象というのは、コロイドの分散系に光を当てたとき、光の通路にある微粒子が光を散乱させて、視覚的に青みを感じさせるのである。剃毛した場合、黒い毛根が皮内に残っているので、これが微粒子の役割を果たし、青々とした頭を導くのである。だが、老僧の頭を見れば分かるように白髪頭の場合、剃毛しても青々とした輝きはない。

子供たちの髪形に稚児輪がある。稚児輪は上代の男子の髪形の一つ・みずら（角髪・角子）の遺風で元服前の童子の髪形だったが、近世になると少女の髪形となったといわれているので、古代から中世の上流社会では、元服前の男児は毬栗頭でなかったのだが、平安末の庶民の子供が毬栗頭だったことは、前出『西行物語絵巻』に髪を刈った子供が描かれていたことから知ることができた。

尼さんの髪形の跡を追うと、尼姿の北政所（高台寺蔵）や大政所（大阪城天守閣蔵）の像は頭巾を被り、頭を露にしていなかったが、鎌倉東慶寺の天秀尼画像の落飾した姿が描かれていた。彼女は秀吉血筋の最後の女性で千姫を養母とし、正保二年（一六四五）没である。

中世以前には、『掃墨物語絵巻』に尼になるため、断髪する娘が描かれていた。また、鎌倉時代の書『とりかへばや物語』には「尼の髪程度にふさふさと肩にまでかかって」と著されているので、当時の尼さんは坊主頭ではなかったようである。『掃墨物語絵巻』の原典は『堤中納言物語』とされているので、平安時代の頃には、尼御前もお河童頭程度に髪を下ろしていたのではなかろうか。平安時代以前の尼さんの記録は見たことがない。

前出の田舎の住職は「俺の頭は坊主頭ではなく、禿げ頭だ」と言っていた。坊主頭で入道と名乗った人たちに胡散臭さを感じる。武田晴信は信玄入道と言い、平清盛は浄海入道と称していたが、彼らは頭が禿げてきて髷が結えなくなり、やむなく入道を名乗ったのだろう。司馬遼太郎は『街道をゆく、佐渡の道、一九八三』の中で、「佐渡奉行の伊丹播磨守康勝は頭髪が薄かった。彼は六十九歳の時、髷が結えなくなったため入道し、順斎と称した」と述べているので、入道を称した人たちの坊主頭は老人性脱毛症の結果であり、化粧の範囲には入らない。

法皇という名乗りも同じ穴の狢に思える。『天皇摂関御影（絵巻、徳川美術館、一九九三）』では、後白河院が法体で画かれている。後白河院は天皇退位後上皇を称し、次いで、清盛に対抗するため仏門に入り法皇を名乗った　法皇による院政は政教の最高責任者による統治を

意味し、藤原氏に対抗するため白河院が始めた制度である。

後白河院は清盛に対抗するため、白河院の前例を踏襲したのであろう。一方、清盛は老人性脱毛症になったのを機会に入道を名乗り、政教に睨みを利かせて法皇に抵抗しようとしたのではあるまいか。まさに狐と狸の化かし合いの観がある。

男児や尼、更に法皇、入道の坊主頭について縷々述べてきたが、本題の坊主の坊主頭に戻る。

私の記憶の中の坊さんたちは、前出の西行を始め、江戸時代の沢庵、室町時代の一休、鎌倉時代の日蓮、平安前期の最澄と空海であるが、彼らは例外なく頭を丸めていた。平安以前には、七五四年に唐から来日した鑑真、持統天皇に鉛白粉を献上した高句麗僧・観成、遣隋使に随行した僧旻、紙墨彩色をもたらした高句麗僧・曇徴、更に、仏教公伝（五三八）の時、渡日した僧侶なども坊主頭だったに違いないが、美術全集などの僧侶像を追って坊主頭を探し、最も古い資料は鑑真和上像であった。

ところで、最澄や空海、道元、日蓮はそれぞれ天台、真言、曹洞、日蓮の各宗の開祖とされる坊さんであるが、彼らのようなエリートでさえも頭を丸めていた。ところが、仏教界の超エリートのお釈迦様や観音様は有髪であるが、お地蔵様は菩薩様なのに頭を丸めて路傍にひっそりと佇んでいる。だが、地蔵尊の坊主頭の理由は分らなかった。

（次号に続く）

口紅（その四）

池莉　原作
山本勉訳

〈登場人物〉

趙家の人々
・趙耀根（小説の主人公、江暁歌と結婚）
・趙耀虎（趙耀根の弟）
・趙耀珍（趙耀根の妹）
・趙耀根の母親

江家の人々
・江暁歌（小説の主人公、趙耀根と結婚）
・江暁鴎（江暁歌の弟）
・江暁暢（江暁歌の妹）
・沈鳳宜（江暁歌の母親）
・江暁歌の父親
・田曼（江暁歌の実母）

趙耀根と江暁歌の友人
・寧岸
趙耀根の会社の同僚
・張喜
趙耀根の会社の上司
・李主任
・張書紀
江暁歌の会社の同僚
・羅桂香

第五章　寧岸

（一）

趙家は、この頃、大変なことになっていた。趙耀虎（趙耀根の弟）や趙耀珍（趙耀根の妹）の友人達がこの狭い家に集まって、監獄に入れられてしまった趙耀根を救い出す手だてをあれこれ考えていた。彼らの母親は、

はっきり方針が決まらない若者達を見て、落ち着き払った様子を装っていたものの、実は心中気が動転し不安になっていた。

この家の主は、亡き夫であり、今は、長男の趙耀根にとって代わっていた。だから趙耀根に事が起こって、後ろ盾がなくなってしまったので、眼を見交わすばかりで思案がつかなかった。

母親は、さっぱり訳がわからない状態だったが、ふとひらめいて、趙耀珍に、

「早く、寧岸に会いに行きなさい」

と言った。

この一言で正気に戻り、みんな何だか目の前の霧が晴れたようだった。

趙耀珍は、寧岸の名前を聞くとニコニコして、兄がもう既に救われたようなものだと跳び上がった。彼女は慌てて蛇口をひねって、さっと顔を洗い、衣服を引っ張って整え、外に出る支度をした。するとドアが突然押し開けられ、寧岸が天から舞い降りたようにみんなの前に立っていた。

趙耀珍は、

「噂をすれば影ね」

と言った。母親は太ももを叩いて、

「寧岸」

と言って大声を上げて泣いた。母親は、

「寧岸、あなたにやっと会えたわ。あなたは、耀根の良き兄弟です。彼を救い出してください。耀虎、耀珍、寧岸兄さんの前に早くぬかずきなさい」

と言った。

趙耀珍は寧岸の前に出てすぐに跪こうとしたが、寧岸はそれを制止した。

「耀珍、君は何をしているんだ。耀虎達は、何をしているんだ。君達のお母さんが言ったじゃないか。僕と耀根は実の兄弟で、僕達は親友で、耀根のことは僕のことだ。僕は君達の実の兄弟でもある。実の兄が家のためにやろうとしているんだから、僕を師と仰ぎ礼を尽くす必要なんてないんだ」

寧岸がこう言ったので、趙家の兄妹は、跪くことができなくなってしまった。側にいる友人達は、寧岸の男気に感動し身震いした。趙耀根のためならどんな危険を冒しても助けてやりたいという表情が一人一人の顔に現れていた。

寧岸はだめだと左右に手を振って、

「みんな、落ち着くんだ。こういう時こそ、冷静になることが必要なんだ。みんなが心を一つにして協力することが大切なんだ。お母さん、僕はお母さんに相談する時間がなかったので、僕の一存で決めさせてもらいました」

と言った。そして、後ろを振り返って叫んだ。

「暁歌、どうして入ってこないんだ」

みんなは、やっと彼の後ろに立っている江暁歌に目がいった。

趙耀珍は喜び勇んで、

「姉さん」

と言って近づいていき、親しげに江暁歌の腕をぎゅっと引っ張った。

だが、母親は直ぐさま顔を曇らせた。

「耀珍、暁歌に入ってもらって、話をしてもらいなさい」

そして、江暁歌に向かって言った。

「この家の敷居はそんなに高くないよ」

夫の災難が、新婚家庭のスタートだった。

(二)

江暁歌は、初対面で、冷ややかな表情の姑に出会った。しかし、彼女のやりきれない心中を言い出すことはできなかった。もし、寧岸に再三諭されなかったら、そして、夫を救うためでなかったら、江暁歌はこの家に留まることはできなかっただろう。

寧岸は、母親の話に合わせながら、

「お母さんが入っておいでと言っているのに、何をボカンとしているの。さあ入って」

と江暁歌に気持ちを込めて言った。

江暁歌は入るより他なく、母親の前で、

「お母さん」

とそっと一声掛け、手に提げていた二箱の烘糕(注10)を手渡した。

(注10 安徽省合肥の銘菓 油で揚げた歯触りの良い甘いお菓子)

母親はお菓子を受け取らず、うつむいて話した。

「お前が来たのは間違っていないよ。お前が、何が大切かをしっかりわきまえてくれさえすれば、私達趙家の人間はそれだけで歓迎だよ。お前は、耀根と共に苦難を乗り超えなければならない。そして、寧岸の言うことをしっかり聞くんだよ。この家の中で、彼だけが頼りになるんだからね」

母親の話は、文句のつけようもなかったが、一言一言に棘があった。江暁歌は、このような目に出会ったことがなかったので、泣きたくても涙が出てこなかった。

江暁歌は、こうして正式に趙家の嫁として受け入られることになった。

寧岸は、話をしてみんなを和ませた。

「僕にはわかっていることがあります。趙耀根は自衛をしたといえます。だから、大きな問題に発展しないと思うんです」

しかし、母親の見解は違っていた。

「私は、人に頼んで聞いてもらったんだが、事は重大だと言っていたよ。もし、そうでなければ、どうして耀根

を監獄なんかに放り込むんだい。どうも、人の脳みそが飛び散るくらい殴打して、赤い血や白い脳みそが、辺り一面に散らばったって言うじゃないか。その人は一命を取り留めたらしいが、本当に死んだなら、殺人の罪を自らの命で償わなければならないんだ。耀根のちっぽけな命はもうお終いだよ」

母親は、言い終わるとすすり泣いた。

趙耀虎は、

「お母さん、お母さんたら、縁起でもないこと言わないでくれよ。兄貴は、きっと無事さ」

ときっぱり言った。母親は、

「私だって、無事であってほしいよ。だけど、一旦人が違法なことをしてしまえば、一生を棒に振ってしまうことだってわかっているんだ。暁歌、私は、あなたを責めているんじゃないんだよ。自分の旦那が事件を起こしているのに、あなたは少しも慌てていないじゃないか。争いに加担したのは、趙耀根だけじゃないよ。脳みそを砕いたのは、あなたの弟の暁鴎だっていうじゃないか。それなのに、あなたは、どうして自分の弟を逃げ隠れさせたんだい。お前達江家の人間は、わたしの息子が義理堅いことを良いことに、濡れ衣を着せたんだろう。これも、お前の継母のつまらない入れ知恵だろうけどね。お前は、継母に言ってやったかい。江家は、こんなに恥知らずだとね」

と言った。

江暁歌はうなだれて、姑が落ち度を一つ一つ責め立てるのを聞きながら、自分の唇を噛みしめぶるぶる震えていた。

姑の話は、益々聞きづらくなり、彼女の顔も次第に蒼白くなっていった。

寧岸は、慌ててこの場を取り繕って、

「お母さん、趙耀根が機転を利かせて、暁鴎を守ったのです。我々がとやかく言うべきじゃありません。今はとに角、暁鴎に自首させないと、耀根は罪が一層重くなり、偽装罪という罪をかぶってしまいます。そんなことになれば厄介です。ここは時間を無駄にしないで、みんなでどうしたら耀根を救えるか相談しましょう」

と言った。

寧岸は、趙耀珍にあるアイディアを授けた。趙耀珍は、直ぐにピンときて、

「お母さん、お母さんは、こんな話ばかりして、いったいどうなるっていうの。ここは、寧岸兄さんの言うとおりにしましょうよ」

と言った。

母親は腹立たしかったが、口を閉じるしかなかった。

寧岸は暫く黙っていたが、ある考えを示した。

「肝心なのは、耀根のために、どのように犯罪や過失の軽重を決めるかです。今回、公安が決めた判決は、ごろつきとの殴り合いです。趙耀根の自衛のための行き過ぎた行為であったとすれば、ただ単に彼を説教すれば済むことです」

母親は、その提案に飛びつき、

「それじゃ、手を打って、今回の件は行き過ぎだったと、公安にわかってもらいに行きましょう」

と言った。趙耀珍は、

「そんな簡単な事じゃないわ。公安は、お母さんのものじゃあるまいし」

と言った。

寧岸は、明解な問題解決の方法を三つ示した。

一つ目は、殴られた人とその家族との和解であり、趙耀根に有利になるように要求しないことです。少なくとも、公安局に行って、彼らに騒がれ、訴訟事件のために圧力を掛けられないようにすることです。

二つ目は、手を尽くして公安関係の人脈をよく知っている人を捜すことです。そして、直ぐに耀根の置かれた状況をわかってもらえるように努めることです。

三つ目は、これが一番重要なことですが、耀根の職場に出向き、彼の行為が行き過ぎでなかったことの、裏付けをとらなければなりません。その上で、彼の職場での仕事ぶりを組織としても認めてくれるならば、一個人が話をするのに比べて重みが増します。

寧岸の話を聞いて、江暁歌は心が落ち着いてきた　彼女は、これで、やっと、道筋を探り当てたような気がした。

みんな、寧岸の考えに心服した。寧岸は、しっかりした見解を持っていて、策略にもたけ、彼への比類のない信頼で満ちあふれていた。今まで、寧岸の輝きは、趙耀根によってかき消されていた。誰もが、何をするにも先ず、趙耀根の顔色を伺い、趙耀根の命令を聞かなければならなかった。しかし、今、趙耀根は監獄に入れられ、このため寧岸の知恵と才能が発揮されていた。

母親は太ももを叩いて、

「そうだね、寧岸の言った方法でやろう」

と言った。

趙耀珍は、大きな湯飲みに入ったリンゴ茶を寧岸に手渡し、心服して寧岸を見つめながら、

「寧岸兄さん、あなたは聡明だわ。私の兄は救われるわ。あなたは、私達趙家の救世主よ」

と言った。

寧岸は、謙虚に手を振り、ゴクンと大きな音を立てて、リンゴ茶を飲み、落ち着き払って、重い物を軽々持ち上げるように、早速行動に移した。

寧岸は、

「先ず、殴られた人と、彼の家族に納得させることです。暁歌、この件は、君、自らやらなければならない」

と言った。

江暁歌は目を大きく見張って、
「私が？」
と言った。寧岸は、
「そうた、君がやらなければいけない。君が出向いて行ってこそ、こちらの誠意を示すことができるんだ。今回は、おそらく、君にいやな思いをさせることになるに違いない」
と言った。母親は、また太ももを叩いて、
「いやな思いを、させるのさせないのって、これは暁歌がやらなければならないことだよ。自分の夫を救うんじゃないか。もし私が行って役に立つなら、相手の前にひざまずいてもいいよ」
と言った。江暁歌は、
「行くわ、私が行きます」
と言った。趙耀珍は、
「わたしも義姉について行きます」
と言った。
寧岸は、趙耀珍をたたいて褒めた。
「よし、耀珍、君は、本当に善良で優しくて賢い娘だ」
趙耀珍は、ますます嬉しくなった。彼女は、兄がしでかしたことが、寧岸と自分との関係をより親密にさせたと思った。悪いことも良いことを引き寄せることになると思った。勿論、こんなたわけた話を口に出す勇気もなかったが、彼女は、喜んで寧岸と歩調を合わせた。

（二）

江暁歌は、十数元、すなわち半月分の給料をはたいて買った、布製の手提げ袋いっぱいの見舞いの品の数々を、テーブルの上に置いた。そして、ベッドで休んでいるあの負傷者に、
「申し訳ありませんでした」
とにっこり笑って詫びた。
負傷者の母親の中年太りの女は、荒々しい鼻息で、彼女に向かって口からつばを吐き出しながら、
「こんな僅かな見舞いの品を持ってきて、それでことを片付けようとでも考えているのかい。ごめんなさいと謝りゃいいってもんじゃないよ。あなたは、私達を乞食だと思っているんだろう。適当にあしらえばそれでいいとでも思っているのかい」
と大声で怒鳴った。
江暁歌はあえて口答えをしなかったし、いつもなら心に思ったことを直ぐに口に出して言う趙耀珍も口答えしなかった。彼女達は、いたずらをした小学生のようにうつむいて、太った女に怒られていた。
江暁歌は捨て身になって、夫を監獄から救い出すために、相手の母親とできるだけ和解をしたかった。太った女は、

「お前達が申し訳ないと思うなら、私達の言い分を受け入れないと、筋道が立たないというものだよ。私達は、お前達に一つのチャンスを与えてあげるわ。お前達が誠意を示すのに丁度いいからね。私は、息子の飲み食いから大小便の世話まで、お前達に頼むわ。お前達が息子の身の回りの世話を全部してくれれば、すべて帳消しにしてもいいわ。あんたは、趙耀根の奥さんだろう。それなら、病人の世話もできるね。丸太のようにそこに突っ立って何しているのさ」
と江暁歌に言った。
太った女は、つま先でベッドの下のおまるを蹴って、
「先ず、これを捨ててくるんだね」
と言った。
趙耀珍が、急いでおまるを持って行こうとすると、太った女に制止された。彼女は、何が何でも白い肌の新妻の江暁歌にやらせたかった。負傷した男は、彼女達が、母親にからかわれているのを見て大笑いした。
江暁歌は、趙耀珍を押しのけて、弓状に腰をかがめておまるを持ち上げた。
おまるはまだ暖かくて、つんとした匂いが江暁歌の肺腑をつき、彼女は吐き気を催した。江暁歌は必死に堪えたが堪えきれなくなり、やっとの思いて持ちこたえると、便所に駆け込み胃の中のものをはき出した
江暁歌はゲボッと嘔吐し、頭を上げることができなくなった。鼻水と涙が一緒に流れてきて、顔中をべったり濡らした。
江暁歌のひどい嘔吐を見て、趙耀珍は慌てて江暁歌の背中を叩いたりさすったりしたが、どうすれば姉さんを休ませることができるのかわからなかった。趙耀珍は、
「私にはわかるの。これは、姉さんの生涯で、今まで受けたことのない屈辱よ。兄さんの巻き添えにされたのよ。いつか、兄さんにあいつらを懲らしめてもらうわ」
と言った。江暁歌は頭を上げて、
「ダメよ」
と言った。
「耀珍、ここで起きたことは、絶対に誰にも言っちゃダメよ。特に、あなたの兄さんにはね。生涯言わないでね。彼はもう二度と犯罪を起こすことはできないわ。あなたはまだ子供だから何もわかっていないわ。夫婦間で、どちらが巻き添えになったなんていうことはないわ。夫婦であれば、助け合うのは当然なのよ。わかる？」
趙耀珍は、
「姉さんっていい人だわ。わかったわ」
と言って、頷いた。
今回の突然の江暁歌の嘔吐は、その後も続いた。何か臭いを刺激として受けると、直ぐに吐いた。彼女は、五臓六腑も吐き出してしまいそうなほど吐き、食べ物を吐き終えると水だけを吐いた。何も食べ物の混じっていな

い水を吐き、何も吐くものがなくなっても吐き続けた。

その頃の江暁歌は、新婚夫婦の新居で寝起きをしていて、母親の助けも得られず、姑に面倒を見てもらうこともなかった。

江暁歌に身近な羅桂香（趙耀根の会社の同僚）も、趙耀珍も、彼女に比べて物事をよく理解していないし、彼女が嘔吐するのを見て度肝を抜かれたが、どうして吐くのかよくわからなかった。十分な知恵と計略に富んだ寧岸も、こればかりは、手の施しようがなかった。何度も江暁歌に医者に診てもらうよう催促したが、江暁歌は病院に行こうともしなかった。それは、負傷した男の面倒を見た病院に彼女が嫌悪感を抱いているからであった。病院という二文字に話が及ぶと、吐き気を催してしまうほどだった。

いつも自分の置かれている立場をわきまえ、仕事の面でも勉強の面でも順調な江暁歌だったが、結婚してから彼女の人生の中で初めて苦難に満ちた日々を迎えた。

趙耀根の職場での将来は順風満帆であり、このため多くの政敵がいたが、彼が今回起こした事件を彼らは皆手を叩いて喜んだ。彼らは、人の危急につけ込んで、容赦なく打撃を加えた。江暁歌は、自分で一軒一軒夫の職場の上司を訪ねるより他なく、上司を菩薩の如く崇めぬかずいた。

彼女は、更に公安局や検察院に出向かなければならなかった。事件を処理する人と交渉し、彼らに泣きながら訴え、夫がどんなに濡れ衣を着せられているかをわからせ、夫の正義感を伝え、無実の罪を拭おうとした。

趙耀根の給料は、あの事件以来止められていたので、彼は拘置場から人に言い付けて、江暁歌に、家族を養うために江暁歌の給料を送らせていた。

彼の家は食い扶持が多かった。しかし、母親が手押し車を押して街でアイスキャンデーやジュースを売って、なにがしかのお金を稼ぐことを除けば、頼れるのは趙耀根の給料だけだった。彼の給料が止まると、家庭は直ぐにその日の食事にも事欠く状態に陥いってしまう。これは、趙耀根に言われなくても当然わかっていたことだった。彼女は、結婚前に貯めてきた百元あまりのお金を月々不足分として趙家のために少しも残さず使った。また、病院に入院している男にもいつも気を遣って見舞いの品を贈り、自らの行動で誠意を示し、彼らに、公安局検察院で趙耀根のために弁護してもらうように願った。これらのことをするために数日休暇を取ったが、まるまる給料をもらうために時間通り出勤しなければばらず、勤務時間外に残業もした。

江暁歌の喉はしゃがれてしまい、彼女のふくよかで艶やかな顔には細い皺が現れ、身体も日一日とやつれていった。彼女は、毎日大きなショルダーバッグを背中に背負ってあちこち奔走し、ビクビクした喪中の家の犬のよ

うだった。彼女は正常な生理の周期すら忘れて、長い間生理が来なかったことも全然気づかなかった。たまに思い出しても自分が日にちを記憶違いしていたかと思ったし、別段何かおかしいとも感じなかった。

江暁歌は、この世には苦難を伴う暮らしがあることをとても不思議に思っていたが、決していかなる人にも、自分がなめた辛酸を言うことはなかった。なぜなら、彼女自身が趙耀根と結婚したかったからだった。彼女は、自分の苦しみは自分で受けるということを少なくともわかっていた。

(四)

ある日突然極度の疲労から、江暁歌は身体がだるく、下っ腹にもかすかな痛みを覚えたような気がした。彼女は眠れば治るだろうと思っていたが、横になると腹部はかえって激しく痛み始め、陰部から湿り気のあるものが流れてきた。彼女は手で下半身に触れて、灯りの下で見ると、手が血だらけになっていた。彼女は、血を見てかえってホッとし、ようやく生理が来たと思った。しかし、どう見ても少し変だと思った。今回の生理の感覚は、過去のものと様子が違っていた。彼女は、歯を食いしばってベッドに横たわると、しばらく堪え忍んでいたが、気持ちは落ち着かなかった。仕方なく無理にベッドから這い上がって、行きたくもない病院へ行った。

江暁歌は、妊娠していたのだ。

神様が、彼らの子供を守ってくださったのである。こうして彼女は、ちょっとした思いから病院に行き、それが彼らの子供の命を取り留めた。

江暁歌はかつて、何度も、甘くて恥ずかしい自分の妊娠した様子を想像したことがあった。だがこの悲惨な状況の中では、夢にも想像できなかったことだった。

江暁歌は、初めて長い間心地よくベッドに横たわり、皇女のようにみんなに囲まれて、心のこもった世話を受けた。あなたは、動いてはだめ、絶対起きちゃだめ。あなたは、どんな軽いものも持ってはいけないよ。あなたは私達のために、おとなしく横になっていなさい。あなたがすべきことは、全て私達が、あなたに代わってやります。あなたの今しなければならない仕事はただひとつ、あなたのお腹の子供を守ることだよ。趙家の母親は自ら出向いて、自分で台所に立ち、肉付き脇バラ肉のレンコン入りスープをとろ火で煮込んで、江暁歌の前まで運び、彼女のそばに付き添って彼女にスープを飲ませた。

姑は嫁に満面の笑いを浮かべて、話も小声でするなど、絶えず江暁歌の生活に気を配り、嫁である江暁歌が、彼女の本当の愛し子のようだった。趙耀珍の言葉を借りれば、これこそ前例のない大事件だった。

沈鳳官（江暁歌の母親）もやってきた。

母親同士が玄関で出くわして、お互いに目を見張ったが、最後は沈鳳宜が身体を横にして道を譲った。彼女は、教養のない小市民である趙家の母親と、争う気持ちはなかった。むしろ、道を譲ることが最大の軽蔑だと思った。沈鳳宜の後ろには、胸を張って脇目もふらない江暁暢（江暁歌の妹）が付き従っていた。江暁暢は、自分が趙家の小市民と違うことをはっきり示すために、冷たい素振りを装った。

江暁暢は、ベッドで休んでいる姉に、

「お母さんが、姉さんに会いに来たわよ」

と言った。

沈鳳宜は江暁歌の婚礼に参列しなかったので、今回江暁歌の新居を初めて訪ねたことになる。もし江暁歌が妊娠しなければ、沈鳳宜は新居を訪ねなかったろう。

沈鳳宜は、

「暁歌」

と、江暁歌のベッドの傍らに腰掛けて、親しげに尋ねた。

「暁歌、具合はどうだい？様態は安定したかい？」

江暁歌は沈鳳宜の手を握りしめて、感激の涙を流した。江暁歌は、やはり沈鳳宜のことを気に掛けていた。江暁歌は沈鳳宜が自分を育ててくれた恩義を終生忘れることができず、実の母親と思っている。二人の間のわだかまりが初めて解け出したのだ。沈鳳宜が、ついに、会いに来てくれたのだ。

沈鳳宜は親しみを込めて、

「私は、あなたを迎えに来たのよ。ここの生活は極めて悪く、お腹の赤ちゃんの生育に良くないわ。あなたの実家の条件は、まあまあだわ。あなたの家は昔のままだし、あなたのベッドもそのままにしてあるわ。あなたは何も持たなくていいから、身体ひとつで直ぐに帰ってくればいいのよ。帰りましょう、暁歌。子供を育てることに関しては、あなたより経験豊富よ。将来、子供が生まれたら、あなたを助けることもできるわ」

と娘に言った。

すると趙家の母親は、沈鳳宜に比べてもっと気持ちをこめて直ぐに切り返し、

「暁歌は、私の家の嫁です。子供は、私達趙家の孫です。私達の家はとても貧しくて狭いけど、命がけで嫁と孫を育てます。お母さん、どうぞご安心くださいな。私がこうして暁歌の面倒を見ているじゃないですか。彼女の様態が落ち着いて、つわりの心配がなくなったら家に帰りましょう」

と言った。

江暁歌は、両脇にいる二人の母親に微笑んだ。彼女達にすっかり恩を感じて感動し、姑の言葉がうわべだけだとわかっていたが、姑に対してかつてないほどの親しみを現した。江暁歌は、自分の子供に対して感激の気持ちに満ちていたのだ。

この時から、江暁歌は粘り強く、二人の人を待っていた。一人は夫であり、一人はお腹の赤ちゃんだった。彼女は、直ぐにでも子供のことを夫に話したかった。そして、この大きな喜びを二人で分かち合いたかったのだ。彼女は、夫が彼女と同様に子供の誕生を待ち望んでいることを信じ、夫が自分たちの子供を可愛がってくれることを信じていた。

彼女は、男としての夫に、荒れ狂う風雨のような激しい愛を知った。そして早い時期にこの愛を奪い去る人（子供）が現れるだろうと考えていた。

しかし、彼女は少しも嫉妬しなかった。彼女は、喜んで親子の情の深さを知ることになると思ったからだ。

江暁歌は新居から趙家へ引っ越しをした。彼女には、彼女のことをわかってくれる趙耀珍がいた。彼女にとっては、多くの親戚や友人の中で、弟の江暁鴎を除いて趙耀珍が一番親しかった。

江暁歌は、この腹のない趙耀珍が、心から兄のことを愛し尊敬しているのがよくわかった。だから、趙耀珍が兄に関係のある全ての人を愛するように、自分（江暁歌）のことを愛してくれている、こう思うことで十分だった。江暁歌は敢えて更に多くのことを望まなかった。

しかしほどなく、趙家の母親の江暁歌に対する愛情が、まがい物だったことがわかった。

彼女の江暁歌への寛大さは、全て子供のためだったのだ。彼女は子供が欲しかった。彼女は、趙家の祖先のための後継ぎが欲しかったのだ。江暁歌は、そのことがようやくわかってきた。姑が言い張ってきた子供とは、決して女の子ではなく、男の子だったのだ。

江暁歌は、突然、恐れとまどう生活へ落ちていった。もし、彼女が将来産んだ子供が男の子でなかったら？

男尊女卑の封建意識に対して、江暁歌は非常に強い反感を覚えていた。彼女は、時代は二十世紀、七十年代末なのに、このような男尊女卑の考えを持っている人がいることが理解できなかった。江暁歌は、姑の話を聞き入れることができなかったし、絶えず反抗して自分の考えを表明したかった。それは、将来娘のためにもである。

もし娘なら、良い環境を作ってあげたかった。

一方、趙耀根はまだ監獄から救出されず、一方では、この世に生まれてきていない子供の将来の生活も予測し難かった。江暁歌の苦難は日を追うごとに重くなり、ほとんど微笑むことができないくらい憔悴し、やつれてしまった。

第六章　母の手紙

（一）

あちこち奔走していた寧岸が、遙か遠くまで航海して

も、近頃寧岸から受けた恩があまりにも大きかったからだ。

寧岸の社会経験と豊富な社会知識は、すべてに渡って江暁歌に勝っていた。江暁歌の生活の中で寧岸だけが唯一の支えであり、彼女の心の拠り所であり、素直に自分の気持ちを伝えることができる人であった。

江暁歌は全幅の信頼の眼差しを黙って寧岸の方に向けただけだった。しかし、寧岸は彼女と視線があっただけで、江暁歌の思いがすべて理解できた。彼はいつも、心温まるやさしい微笑みで彼女に応えた。この時間は、寧岸の人生にとって、最も光彩を放った時であった。彼はみんなの参謀で、しかも大黒柱となった。江暁歌は彼に対して、以前持っていなかった畏敬の念や崇拝の気持ちを現した。しかし考えてみれば、趙耀根は男らしさを武器に江暁歌を奪ったである。

今、寧岸と江暁歌の関係は、まるで蔓と木のように、片時も離れられなくなっていた。

もし、江暁歌が一日たりとも寧岸に会うことができなければ、心配そうな表情を浮かべ、気が動転してしまうだろう。寧岸自身も、自分が彼女と同じ気持ちであることに気づいた。

彼らには、相談したいことが山のようにあった。江暁歌には、寧岸に援助してもらって解決してほしいことが山ほどあった。勿論助けてほしいという純粋な気持ちか

いた江暁歌の父親がまもなく帰って来る、という知らせをもってやって来た。

この良い知らせは、江暁歌を呆然とさせた。お父さんがもうすぐ帰ってくる。とうとう帰ってくるのだ。

江暁歌は父親がとても恋しかったが、父親にどのように相対すればよいのか正直わからなかった。父親が航海に出かけたとき、彼女は天真爛漫な少女だったが、今は既に嫁いで人の妻となっている。今、彼女は子供を身籠もっており、顔には妊婦の斑点が見え、苦難な世の転変も刻み込まれていた。彼女は、(父親が帰ってくるのを待って結婚する)という、母親の忠告を聞かなかった。また生みの母親の遺志である、事前に母方の祖父や祖母の意見を求めることにも従わなかった。彼女は、一切を顧みないで一人の男についていき、未知の世界にまっしぐらに突き進んだのだ。その結果失敗し、惨めな境遇に置かれていた。今の彼女の状況を鑑みれば、とても父親に会わせる顔などなかった。

寧岸は江暁歌の心を見抜き、彼女を慰めた。

「君がお腹の子供を慈しむように、君の両親は君のことを可愛く思い、片時も忘れていないんだよ」

と諭した。江暁歌は、

「わかったわ」

と感謝の気持ちをこめて言った。

江暁歌は、感謝の言葉が見つからなかった。というのらであり、男女の関係ではなかった。

しかし、寧岸は江暁歌への気持ちをはっきりと自覚していた。彼は内心彼女と付き合うことができなくて無念さを感じていたが、だからといって、恋愛感情を起こすことができなかった。なぜなら、趙耀根は彼の親友であり、いま監獄に入っている。寧岸は、兄弟の契りを交わした趙耀根のためにも、江暁歌を助けなければならなかった。友人の妻に戯れるべきではなかった。寧岸には江暁歌を奪う機会もあり、趙耀根と愛を競い合う条件もあったかもしれない。しかし、寧岸には、そのような侠気のない、恥知らずなまねはできなかった。寧岸は江暁歌と目が合うと、それはまるでやさしく温厚な兄弟のような微笑みを向けた。

江暁歌のホッとしている表情を見て、自分の行っていることが正しいことを知った。彼は聖人君子だった。しかし、寧岸の心の中の葛藤は、以前にも増して激しくなっていった。

ある時寧岸はある行動に出た。これは言うまでもなく、江暁暢(江暁歌の妹)の心に火をつけた。彼は江暁暢を誘って映画を見に行き、帰りに食事をした。彼は大通を渡るときに、彼女の細い腰に手を回した。そんな彼らを見て、誰もが恋愛をしていると思った。このような光景は、趙耀珍(趙耀根の妹)に激しい怒りを起こさせた。しかし寧岸だけが、江暁暢と恋愛をしていないことをわかっていた。

(二)

江暁歌の父親が帰ってきた。父と娘が、ついに再会を果たしたのだ。

父親は帰ってくると、直ぐに江暁歌に会いに行った。父親は、彼女のために沢山の土産を抱えてやってきた。その中には、結婚記念品として九インチの日立のテレビがあった。父親は、彼女に恨みを言わなかった。むしろ、彼女を連れて美味しい食事に出かけた。その後二人は、長江まで散歩した。江暁歌は、黙って父親の愛を受け入れ、父親が話しかけるのを待っていた。

父親の身体から漂ってくる塩辛い香りは、江暁歌の懐かしい記憶を蘇らせた。江暁歌は、これまで海を見たことがなかった。しかし、これがおそらく海の香りだろうと思った。父親は遠洋航路の汽船の船長で、一年中海で暮らしていた。江暁歌は、小さい頃から父親の塩辛く生臭い香りに慣れていて、父親が、海風によって黒々とした顔立ちになっていることを見慣れていた。父親は出かけるとき、その香りを持ち去ってしまうが、海の香りを忘れかけた頃に、やっと帰ってきた。

父親は無口で、彼の寡黙さはいつも母親の怒りを買った。以前、江暁歌は、何故母親が怒っているのかわから

なかった。だが、今になってようやく、母親が心から父親に疑いを抱いていることがわかった。父親が寡黙なのは、死んでしまった昔の妻を忘れることができないからだった。

江暁歌は、生みの母親にいったいどんなことがあったのか、父親が話してくれることを期待した。

江暁歌は父親の身体から漂っている海の香りを嗅いで、涙を流した。随分と長い間孤独だった彼女の心は、とうとう肉親の愛情と慰めを受けた。

夜の長江の水は墨のようで、街の灯りは数万の金色の小さな蛇のように、真っ黒な長江の水の中で、くねくねと揺れ動いていた。空をかすめていった鳥が、「くー」と一声鳴いた。江暁歌は、寄り添うように、自分の顔をそっと父親の肩にうずめた。

父親は、ついに、重い口を開いて話を始めた。

「暁歌、お前のお母さんのことを、何故今までお前達三人の子供に隠さなければならなかったのか。それはただ、お前達に幸せになってもらいたかったからだけなのだよ。他の理由なんてないんだ。お前のお母さんが死んだとき、お前は幼すぎたので、記憶はなかったと思うよ。お前には、その後今のお母さんができたんだよ。それに妹も弟もできた。お前達の生活がうまくいっていたので、お父さんはお前達が本当の家族になってくれることを望んだんだ。もしお前の結婚のためにこのような騒ぎにならなかったら、引き続きお前達にこのことを隠しただろう。お前も、人の妻となり、人の母となれば、両親のしてきた苦労もわかるだろうし、お父さんも、お前に知らせることができるかもしれない。お前は私を恨むだろう。私は、大切なときにお前のお母さんと離婚すべきではなかったと思う。今思い返してみると、私達が、どうして考えも幼稚で意思もしっかりしていなかったのか、狼狽して度を失ってしまったのかと思うんだ。お前の母親は、一人の女性であり、音楽家でもあった。彼女は、長い間単科大学や総合大学で仕事をしていたから、彼女の純粋さは理解できたんだ。しかし、私が幼すぎて、彼女を許すことができなかったんだ。当時私達は、お前の人生に汚点が残ることを恐れた。そこで、私達は、偽装離婚の方法を考えついたんだ。しかしお前のお母さんは、偽装離婚をもう二度と会うことのできない永遠の別れに変えてしまったんだ。お父さんは、お前の母親が芸術家の気質を備えた女性であり、学究肌でロマンチックで、完璧と純潔を尊ぶ人であることを知るべきだった。彼女が、どうして社会が彼女に与えた衝撃を堪え忍ぶことができただろうか。いや、できるわけがなかったのだ」

江暁歌は、突然すすり泣いた。なぜなら、彼女は自分と母親がこんなにも似通っていると思ったからだ。元来、彼女の悲劇的な性格の神秘は、遺伝因子にあったのだ。

汽船は、長江をゆっくりと走り過ぎ、船いっぱいに灯った灯りは、揺れ動く建物のようで、船首がすいた波は、一波一波岸に向かって突き進んでいき、ざわざわという音を巻き起こした。

江暁歌は小さいときから、父に教えられ、泳ぎを学んだ。彼女は、長江で泳ぐのが一番好きだった。とりわけ、男の子達のように汽船がかいた波を追いかけて、沈んだり浮いたりしていた。彼女の持ち合わせた天性の泳ぎのスピードとスタミナは、多くの男の子も圧倒した。少なくとも、趙耀根は、彼女にかなわなかった。江暁歌は、妊娠していなければ、いきなり長江に飛び込んで思う存分泳いだだろう。

彼女は、蕩々と流れる長江の水で、自分の苦しみを洗い清めたかった。

父親は、何となく、娘が悲しみの声を上げる原因が何処にあるのかわかっていた。

父親は、既に妻を亡くしていたので、この上、娘を失いたくなかった。彼は、精一杯、娘のために妻への過ちや心残りを埋めたかったし、幸せな生活を勝ち取りたかった。だから、父親は江暁歌を恨むことができなかった。

彼は、当然娘と趙耀根の結婚に賛成ではなかった。彼は、文化水準の面から、自分の娘と不釣り合いだと思った。彼が、香港にいる祖父母に意見を求めたならば、この結婚に同意しないことはわかっていた。同じ生活レベルで結婚することは、夫婦が一生幸せに暮らしていくベースだった。しかし、娘は生みの母親に似ていて、単純でロマンチストだった。彼女は、軽率にも、趙耀根と暮らし、自分の結婚を既成事実に変えてしまった。

彼がやれることは、娘の選択を尊重し、娘の夫を救い出し、姑の暗い影から、できるだけ早く逃がしてやり、健康で楽しく生活し、子供を産み育てられるよう、助けることであるとわかっていた。

江暁歌は、父親の懐に飛び込み、うれし涙を流した。父親と娘は互いに寄り添い、江暁歌は、かつてないほどの嬉しさと落ち着きと心地よさを感じた。父親が帰ってきたら、彼女をしかるにちがいないと思っていた。しかし、充分父親としての責任を果たし、良い父親であり夫であった。

父親が帰ってくると、沈鳳宜も満面に笑みをたたえた。江暁歌は、比類のない無念さと感傷的さを感じた。もし、彼女の生みの母親が、暗黒の日々を辛抱して過ごし、父親と今まで生活することができたならば、生みの母親は、きっと自分が世界で一番幸せ者であると思ったに違いない。彼女自身は、母親に似過ぎていたので、母親の脆くて弱い、しかも、剛直で気骨がある性格を避けるように注意しなければならなかった。それに健康に気遣い、自分と子供のために素晴らしい未来を想像しなければならないと思った。

（三）

この頃、江暁歌のお腹の胎児には、かすかな動きがあった。これは初めての胎動で、最も嬉しい時間に感じた。江暁歌はこの素晴らしい知らせを恥ずかしそうに父親に知らせた。父親は朗らかに笑った。父親の祝福は、長江のように広大で、長く続いた。

夜が更けて人が寝静まる頃、家の門が閉まり、自分の小さな部屋で、江暁歌はそそくさと小さな包みを開いた。これは、父親が彼女に手渡したものだった。この包みは、彼女の生みの母親の田曼が娘に残した遺書と形見だった。

包みの中には、オルゴールと一本の口紅が入っていた。これは、父親が外国から持ち帰って、母親に贈ったものだった。

そして田曼は、娘に手紙を残していた。

私の最愛の娘、暁歌、私の最愛の夫、あなた方の未来のために、そして私自身の弁解のために、私はあなた方と別れなければならないのです。

暁歌、私は音楽家です。でも、成功者ではありません。お母さんが、自分の音楽と夢と共にこの世からいなくなっても、あなたのお父さんを責めたくないのです。

私の愛する暁歌、お母さんにはあなたに残すことができる財産も栄誉も何一つありません。あなたに残せるのは、音楽の象徴であるオルゴールと、お母さんのお気に入りの口紅だけです。お母さんは、口紅が好きでした。なぜなら口紅は美しく、それは女性の華麗な生活への期待と探求を表現しているからです。

お母さんは、あなたが口紅を使うことで、一人の女性として、素晴らしい光り輝く人生を送ってくれることを祈っています。

それに、オルゴールと口紅は、あなたのお父さんが私にプレゼントしてくれたものだからです。そして、オルゴールと口紅は、いつまでもなくなることのない、私達夫婦の愛そのものです。

暁歌、お父さんの言うことをよく聞くのよ。お父さんの面倒を見て大切にしてください。

あなた、あなたも暁歌をいつまでも大切にしてやってください。娘の人生の節目ごとにしっかり見守り、私のように子供っぽく扱わないでくださいね。

私達の娘の将来の結婚はあなたがしっかり舵を取り、私の両親に意見を求めてください。彼らは、教養も見識もある人達です。人を見る目は確かです。

私はいつまでも、彼らが私のためにあなたを選んで

くれたことを感謝しています。

あなた達は、必ず粘り強く生き抜いてください。

幸せは、あなた達のものです。

田曼　一九五九年　暮れ

江暁歌は生みの親の遺書を読んで、涙がとめどもなく溢れてきた。涙で顔を濡らし、今生すべての涙が、まとまって流れ出てきたと思った。彼女は、今日の境遇の中で、生みの母親の苦労を理解することができた。江暁歌は、遺書に自分の顔を押しつけて約束した。絶対に母親の言うことを守り、自分の幸せのために努力しなければならない。

江暁歌は、口紅を開けて自分で塗ってみた。しかし、口紅は、とっくに干からびていた。

江暁歌は、口紅を気に入った自分に気がついた。ただ、残念なことに、今ではこの銘柄の口紅は売っていなかった。

（四）

寧岸は、江家の家族を引き連れて、趙家の母親を訪ねた。江暁鴎（江暁歌の弟）は、運転する三輪自動車に江暁歌の嫁入り道具のテレビ、ポット、痰壺、ほろうびきの洗面器などを、うずたかく積み上げてきた。

寧岸は、
「耀珍、耀虎、早く出てきてお客さんを迎えてくれよ。江おじさんが君たちに会いに来たよ」
と玄関で大きな声で呼んだ。

隣近所はびっくりした。趙家の母親は、鼻高々だった。江暁歌の父親は、まだ玄関に入っていなかったが、
「お母さん、ご挨拶に参りました」
と大きな声で叫んだ。

趙耀根の母親は、思いがけなく大喜びで、持っていた菜っ葉を放り出して、迎えに出てきた。趙耀珍はお客さんに丁寧にお茶を運んできて淹れ、暁鴎は家を飛び出し、お客さんのために料理屋から料理を運び、酒も買ってきた。

趙耀根の母親は、得意になって江一家に自慢して、
「ご覧いただけましたか。私は、家の唯一の奥の間を空けて暁歌に提供し、暁鴎は、隣部屋に仮住まいしています。私は、屋根裏部屋に上がり、耀珍とぎゅうぎゅう詰めになって住んでいます。姑である私は、嫁の好きなようにさせています。まだ、至らないことがあれば、どうか大目に見てくださいな」
と言った。江暁歌の父親が続いて、
「わかりました。わかりました。本当に、よく行き届いています」
と言った

趙耀根の母親が一番気をもんでいたのは、長男のことだったので、お茶を濁すような挨拶もできず、

「暁歌のお父さん、あなたは幹部です。あなたの名誉は絶大です。どうか息子を救い出してください。時が経つのは早いものです。暁歌には、まもなく子供が生まれます。子供が生まれて、父親に会うことができないなんていけません。それに、公安に真相もわきまえず、人をいい加減に捕まえてはならないと伝えてください」

となりふり構わず哀願した。

趙耀根の母親は、やたらペコペコ頭を下げて、沈鳳宜に、

「お母さん、私のようなじゃじゃ馬女と争わないでくださいな。大人は、つまらない人間の過ちを咎めはしないでしょう。大目に見てくださいな。暁歌のためにも、夫を救い出しましょう」

と頼んだ。江暁暢は、

「どういたしまして。でも、趙耀根を救い出したら、私の姉をいじめないで頂戴ね」

と得意になって言った。

沈鳳宜はすぐさま、江暁暢に平手打ちを食らわした。

趙耀珍は、江暁暢に負けずに言い返した。

「年下のあなたが姉さんを馬鹿にしなければ、誰も、姉さんをいじめる人はいないわ」

趙耀根の母親は、わざと聞こえないふりを装った。

寧岸は、趙耀珍を制止した。

江暁歌の父親は、良識ある答え方をした。

「お母さん、安心してください。私は既に、ある人に頼んであります。耀根がしたことが自衛行為であれば、最後にはきっと、正義が報われるでしょう」

趙家の母親は、

「よかった。よかった。正式に、矢面に立ってくれる人がいれば、私達は安心です」

と言った。寧岸は、

「皆さんに良い知らせをしましょう。暁歌は、たいしたものですよ。ついに、あの殴られ傷ついた人が感動したんです。彼らはもう二度と、公安局に行ってわめき立てないでしょう」

と言った。

寧岸と暁歌の弛まない奔走と努力の甲斐あり、そして更に江暁歌の父親の支援もあって、暮らし向きも少し明るさを取り戻した。

趙耀根の問題で一番肝心な点は、彼の職場である。職場で公印を管理している幹部は、あくまでも、趙耀根の日頃の勤務態度と今回のいざこざが自己防衛的であったことを認めようとしないのである。

また、そればかりでない。公安局はかえって、趙耀根の態度を一貫して非難していた。

江暁鴎（江暁歌の弟）は、激しい怒りが収まらず、命がけで彼らと勝負しようとしていた。

趙耀虎も、命知らずの輩で、趙耀根の上司の李主任と、張書紀を、懲らしめてやろうと思っていた。

寧岸は繰り返し彼らを諫めて、

「落ち着け、暴力は絶対だめだ」

と言った。

江暁鴎は、寧岸の意見に頷向かった。

「目には目を、歯には歯をだ。僕は、船団の仕事の経験を積んでいるんだ。僕は、世の中の仕組みがわかっているよ。ある者は弱い人間をいじめ、権力者にはペコペコしているんだ。浅薄な考えしかない彼らと、道理でもって話をしても、かえって相手にされないよ。職場にこういう話がある。極悪残忍な者が恐れているのは、責任や罪をなすりつける人であり、責任や罪を人になすりつける人が恐れているのは、命知らずの人だ。僕達は、捨て身になって、李主任と張書紀の二人が、恐れているかどうかを見てやろうじゃないか」

江暁歌の心は、弟の話を聞いて思わず考え込んでしまった。

（『窮鼠猫をかむ』という諺があるが、肝心なときに、何故、捨て身になって、彼らに一撃を加えられないのか。）

「わかったわ、私がやるわ。本当にだめだったら、考えるわ」

江暁歌は、最初は礼を尽くして交渉しようと思っていたが、もしうまくいかなければ、力に訴えることも辞さなかった。

（五）

埠頭会社の倉庫の事務所は、陰気ぼったくてジメジメした小さな部屋で、倉庫を管理している幹部の張書紀と李主任は、労働者の臭いで満ちていた。江暁歌はドアを開けて入っていくと、うやうやしく二人の幹部に挨拶した。

張書紀は、江暁歌を気にも留めなかった。張書紀は、趙耀根を普段からひどく恨んでいて、彼の栄誉を横取りしたのである。李主任と趙耀根の関係はまだましだったが、労働者達は、李主任は表向きは優しそうな顔をしているが、実は恐ろしい人だと言っていた。

李主任は、湯飲み茶碗を持ちながら、高飛車に役人口調で、

「あなたは、どうしてここに来たのですか。仕事の邪魔なんですが」

と言った。

江暁歌は、無理矢理作り笑いを浮かべて、声を低くしてうやうやしくへりくだると、

「申し訳ございません。私もあなたの仕事の邪魔をしたくないのです。ただ、公安局は、まだあなた方の調査

資料を手に入れていないと言っています」
と言った。張書紀は激しく机を叩いて、
「あなたは、何故再三にわたって、我々に公安局のために調査資料を書かせるのか。国には国法があり、家には家の掟があり、国家部門には国家部門の組織や規律がある。趙耀根のことは、公安局自身が公正な結論を用意している。あなたはいつも私達を訪ねてきて、何をするというのかね。私は、あなたは教養のある女性同志だと思って遠慮してきたが、ちょっといい気になっているんじゃないかね。また私達に詰問しに来たのか、全く、大胆不敵じゃないか」
と言った。
李主任は、ゆっくりお茶を飲みながら、自分の考えをおくびにも出さない様子だった。
江暁歌は、何度も自分に忍耐強くするよう言い聞かせて、
「張喜達現場に居合わせた労働者は、証明書を書いたんですよ。もし、職場で意見書を書かず、捺印してくれなければ、公安局の人達はそれを認めないのです。公安局の人達は、事件を処理するのに末端組織である職場に頼っているのです。そうでなければ、私は、何回も足を運ぶことはないでしょう。私は、事実に即して公安局に情況を報告することができるよう、職場に要求するだけなんです」

と言った。張書紀は、
「あなたは、どうして私達がいい加減な対応をしているとわかるのですか？あなたはおそらく、私達に趙耀根を弁護する意見書を書かせたいのではありませんか？私は再三言ったじゃないですか。それはできない話だと」
と言った。
江暁歌は、堪えてその場に座り込んだ。
「私は帰りません。あなた方が、労働者達の証人資料に公印を押してくれることを願っています。私は、職場の皆さんに趙耀根のために公正な話をしてもらいたいのです。彼の政治生命を絶たないでください」
と言った。張書紀は、
「あなたは無礼千万だ」
と激しい口調で言った。
張書紀はぶりぶりしながら席を蹴って、出て行った。
李主任は頭を横に振って、二度と江暁歌を相手にせず、襟を正すとかしこまって仕事に没頭した。
江暁歌は、黙って壁にもたれて座り、話をする機会を探っていたが、その隙がなかった。彼女は、ひっきりなしに書類を持って李主任に署名捺印をしてもらいに入ってくる人達を見ていた。公印は李主任の手元にあり、李主任が捺印する時の慎重な様子と公印の鮮やかで美しい赤色は、印象を深くさせた。江暁歌は、李主任が仕事を終える頃まで座って待っていると、やっと、公印を引き出しにしまい、注意深く引き出しの鍵をかけた。この時、彼はあたかも江暁歌を思い出したように、顔を江暁歌の方に向き、彼女の心中を見透かしたような口調で答えた。
「江暁歌同志、この権力は党と人民が、私達に与えたものだ。私達は、勝手に使うことができない」
江暁歌は、
「李主任」
と仕方なく相手に頼み込むように言った。
「あなたは自制心の強い、道理をわきまえた、情理にかなった指導者です」
李主任は、時計をチラッと見ると、もう既に退勤の時間を過ぎていたので、歩いていって事務室の扉を閉めた。そして振り返って江暁歌に一杯の白湯を入れると、彼女の肩を叩いて、
「私は、一人の人間として、あなたを理解し同情しているんだ。でも、張書紀は元来性格が強情なので、趙耀根に対して極めて高い要求をしている。しかし、あなたは焦ってはいけない。私にじっくりこの件を任せてください」
と言った。
李主任の目の中によこしまな光が放たれ、彼の手が江暁歌の身体に泳いだので、江暁歌は、できるだけ失礼のならないように身をかわした。

「有り難うございます、李主任。でも、機会を逃さずに急いでやらなければなりません。あなたは、ただ、私のために公印を押してくれるだけでいいのではありませんか？」
李主任の手は、欲望に満ちていた。
「公印を押すことは、そんなに簡単じゃないですよ」
彼の手は触れてはいけないところに及んだ。
江暁歌は、手を払いのけるより他なかった。
李主任は、
「理解できないことだ」
と言った。
「李主任、あなたが張喜達が書いた資料に、事実通りに意見を書き込み、公印を捺印してくれさえすれば、私と耀根は生涯ご恩は忘れません」
「何を一生涯だと言うんだ。感謝するんなら、今感謝したらどうなんだ」
江暁歌は、やむなく彼女の腕時計をはずして、李主任の事務所の机に置いた。
李主任は驚いた。
「君は何をしているんだ。早く持って帰れ。こういっても、私はれっきとした共産党幹部だ。君は、私に過ちを犯させたいのか」
「これは、私の李主任へのほんの感謝の気持ちです。私は、絶対に他言しません」

江暁歌は、行動を起こす前に羅桂香（江暁歌の会社の同僚）と話をした。羅桂香は検査員で、作業現場を走り回る時間が多かったので、自ずと労働者と付き合う機会が多かった。羅桂香も彼女に教えた。

「工場の仕事は比較的単純で、最も始末が悪い奴については命がけでやっつければいい。羅桂香も工場の流行語を知っていた。弱い者は強い者を恐れ、強い者はごろつき行為をする者を恐れる。ごろつき行為をする者は、命知らずの者を恐れる。あなたが捨て身で命知らずになったら、あなたの目的を達成することができる」

この話を聞いて、江暁歌は命を捨てる決意をした。

この危険な行動は、寧岸を含めていかなる人にも公言しなかった。今回は、単独行動を取るつもりだ。彼女は江暁暢を訪ね、彼女の幼稚園で使っているおまるを洗う濃硫酸をもらい、細心の注意を払ってガラスのコップにしまい入れた。そして、李主任に電話を入れて、仕事帰りに彼と単独で話をする約束を取り付けた。

江暁歌の電話を受けた李主任は嬉しくなり、事務所で待っていることを告げた。

今にも沈もうとしている太陽が、鮮血のように真っ赤な黄昏時に、江暁歌は、激しい悲壮感を抱いて、涙と鮮血に染まった事務所にやって来た。李主任は、居ても立

「もし、感謝しているなら、態度で表したらどうなんだ」

江暁歌の弱々しい力のない様子は、李主任に錯覚を起こさせ、江暁歌につけいる隙があると思い、激しく背後から抱きついた。

江暁歌は、激しく抵抗し、二人は声もなくもみ合いを始めた。李主任は、次第に優位になった。江暁歌は、激しく自分の握り拳で窓ガラスを叩いた。ガラスの砕けた音は李主任を冷静にさせた。彼は、大急ぎで江暁歌から離れ、自分の身を繕い、事務所のドアを開けて机の後ろに立った。江暁歌は、目を怒らせて彼をにらんだ。彼女の手はガラスで切れて、鮮血が流れ出た。

李主任は、低い声で怒りを抑えて言った。

「早く出て行け。君のような道理をわきまえない奴は、もう二度と私のところに来るな。趙耀根のことは、絶対にかばいきれなくなった」

江暁歌は、発狂しそうだった。

（わかったわ。李さんには申し訳ないけど、もう手加減はしないわ）

江暁歌は窮地に追い込まれ、瀬戸際に瀕し、捨て身になって李主任と最後の闘争をする決意をした。

ってもいられず、江暁歌を見るとうれしさのあまり立ち上がり、ぐいと彼女の手を引っ張った。

江暁歌は手を抜いて、身を翻して事務所の扉を閉めた。

江暁歌は、李主任と向かい合って立っていた。彼女の心音がドキドキ高鳴っていた。倉庫の労働者は、既に仕事を終えて帰宅していて、周囲はぞっとするほど静まりかえっていた。李主任の色気違いで恥知らずの顔を見て、江暁歌は、緊張のあまり今にも窒息しそうになった。

彼女は深く一息つくと、李主任に、

「李主任、あの件です。私はあなたに、事実に基づいてありのまま、張喜達の証拠資料に意見書を書き加え、捺印することを望みます。そして、その資料を私に渡してくだされば、私が、公安局に届けます」

李主任はニコニコして、

「ことを処理するには、先ず取引が必要だ。決してあなたが損をするものではない。これは実際些細なことで、たいした問題ではないのだ」

と言った。江暁歌は後ずさりした。

「李主任、あなたは私をだましてはいけません。先ず、あなたが、資料に署名捺印するのを確認したいのです」

「私が、どうしてあなたをだませましょうか。趙耀根の当時の状況は、そこに記載されていて、彼は自衛したのですから。私も彼を助けたいと思っているのですよ。あなたとも友達になりたいのです。私は、ようやく張書紀を納得させたんですから」

彼は、引き出しの中から署名捺印した資料を取り出して、江暁歌の目の前に高く持ち上げると、直ぐに鍵を掛けて、その資料を引き出しの中にしまい、

「ほらご覧、私はやるべきことはもうやってあるんだ。だから、私達も腹を割ってよく話をしよう」

と言った。

李主任は江暁歌に歩み寄ってきた。江暁歌は、黙って、顔色一つ変えず、じりじり後ずさりして出入り口まで下がると、注意深く出入り口を閉めた。

李主任は、笑い出した。

「君は本当に慎重なんだね。私は、君のような女性が好きだよ。それに、君はとりわけ美しくて教養もあるしね」

彼は、一歩一歩江暁歌に近づいた。彼は、激しい欲情丸出しの醜態ぶりだった。彼は、脂ぎった顔を江暁歌の目の前に近づけた。

江暁歌は、突然、包みの中から、準備していたガラスのコップを取り出し、口を覆っていたビニール袋を剥がして、ぎゅっと、李主任の襟をつかんで、硫酸のコップを彼の顔に押しつけていった。

「動くな、絶対に動くな。よく聞きなさい。私が持っているものは何だと思って。濃硫酸よ。あなたがそれに触れたら、直ぐに皮膚や肉が焼けただれるわよ」

李主任は、驚きのあまり取り乱した。
「お前は、お前という女は、いったい何をしたいんだ」
「私は、あなたが引き出しを開けるよう要求するわ。資料を取り出したら、私のポケットに入れてほしいの」
李主任は、見かけとは違い、弱々しく言った。
「私は男だ。私はお前より腕力がある。お前の顔がやけただれるぞ」
江暁歌は、軽蔑して嘲笑した。
「まさか、あなたは見分けがつかないことはないでしょうね。私はもう捨て身よ。私の夫は、ひどい目に遭っているわ。私は、死ぬことなんか怖くないわ。この場に及んでどうするって言うの。あなたが、もし、この濃硫酸を奪い取ろうというなら、私達は一緒に焼けただれるわよ。私はどうなってもいいわ。私には、昇進も私を待っている素晴らしい前途もないわ。どっちみち、私の夫は監獄にぶち込まれているのよ」
李主任は、江暁歌の激しい攻撃にびっくりさせられた。
「君は先ずこの硫酸を置くんだ。わかったか」
「ダメよ！あなたが私に資料をよこすのが先だわ。でなければ、あなたと運命を共にして滅びるしかないわね」
李主任は、戦々恐々としていたが、そう易々と江暁歌の言うことを聞こうとしなかった。
江暁歌は、ガラスのコップをゆらゆらと揺り動かしながら言った。
「私が三つ数えるわ。あなたがもし、私の言う通りにしないなら、硫酸をぶっかけるわ」
「やめてくれ。私が資料を取りに行くから。別に、君に資料を渡さないと言っていないぞ。それに、君に何も強要していないじゃないか」
「無駄口叩かないでよ。一、二、三・・」
江暁歌が死にもの狂いで襟を引っ張ったので、濃硫酸の入ったコップが、ピッタリ李主任の顔にくっつき、どうすることもできなかった。彼は臆病になり、硫酸をかけられるのが恐ろしくなって、引き出しを開けて資料を取り出すと、江暁歌のポケットに突っ込んだ。
江暁歌は、息せき切らず、がむしゃらに、長江岸に沿って七、八百メートル走り、とうとう動けなくなった。
彼女は、膝の力が抜けて、全身力がなくなり、膝まで沈む草むらの中に動けなくなって倒れ込んだ。
江暁歌が青空を見上げると、まばゆいばかりの太陽が目に入った。後になって思い返すと、全身身震いがした。
彼女は身体の奥深くから身震いが起ってきて、口もひどく渇いた。
彼女は今、自分がしてきた行為を振り返り、自分はとうとうこんな人間になってしまったのかと後悔の念に駆られた。凶悪で残忍、残酷、卑劣、恥知らず、意外にも、最も卑劣な手段で、他人をゆすり、自分の必要とするものを手に入れることを学んだ。

江暁歌は、しっかりと目を見開いて、自分を見る勇気がなかった。彼女は、自分のやった手口を恥じた。
しかし同時に、もし、これによって夫を救い出すことができれば、それはそれでよいと思った。
江暁歌は、このような行為を二度とやるまいと深く心に誓った。

（つづく）

陰翳の美学（その七）

外山知

第三章　美を構成する要素

六、美の諸形態

9、破格の美

破格の美は美の深遠と言ってよい。この美展開以前に、ヨーロッパ十七、八世紀及び十九世紀の文化は、すでに破格の論理を予想し、美の革進へと迫っていた。

すなわち、十七、八世紀のヨーロッパで、哲学、政治、啓蒙、経済思想、さらに自然科学、文学、芸術の三分野等々、いずれをとっても宮廷を中心とした絶対君主制に裏付けられ、学として展開されていた。

フランシス・ベーコン（英）、ロック（英）、ヒューム（英）、（仏）のデカルト、パスカル、スピノザ、（蘭）のライプニッツ、（独）のカントが、ドイツ観念論の集大成をなした。

政治、啓蒙、経済面も絶対王政、確立をめざし、王権神授説、啓蒙主義（仏）を中心に、重商主義から重農主義へと展開された。

そして、モンテスキュー（仏）の「法の精神」、ヴォルテール（仏）の「哲学書簡」、ルソー（仏）の「社会契約論」、ディドロ（仏）等を踏え、フランス革命への引鉄となる。

自然科学分野も、科学革命が進行し、市民階級の成長にともなって、実用的な産業に結びついた分野が急速に発達した。

伝統的な考え方を否定し、理性と観察を重視する科学の基礎が確立した。

ガリレオ・ガリレイ、ハーヴェーの血液循環立証、ホイヘンス（蘭）の振り子時計の発見、ボイル・シャールの法則等は、ニュートン（英）の万有引力の法則となり

開花した。

さらに、フランクリン（米）の避雷針の発明、リンネ（スウェーデン）の植物分類学、ラヴォワジェ（仏）の質量不変の法則、ヴォルタ（伊）の電池の発明、キュヴィエ（仏）の比較解剖学、ジェンナー（英）の種痘法の発明、などが積み上った。

また文学に於ても、フランス古典劇の確立者コルネイユ（仏）英雄悲劇「ル・シッド」等、モリエール（仏）「人間嫌い」。

アンドロマク、ピューリタン文学――ミルトン（英）失楽園。バンヤン（英）天然歴程。デフォー（英）、ロビンソン・クルーソー。スウィフト（英）ガリヴァー等百花繚乱を競う。

美術・音楽は、ルネサンス式（比例と調和を重んじる。）バロック式（ゆがんだ真珠の意）ロココ式（人造石や貝殻装飾の意で、ロカイユが語源。）古典主義（古代ギリシアを語源として、均整を重じた。）へと進展した。

美術はエル・グレコ（西）の聖母昇天、ベラスケス（西）の官女たち、ムリリョ（西）の宗教画、レンブラント（蘭）の毛織物商組合員たち、ルーベンス（フランドル）の宮廷画、ファンダイク（フランドル）の肖像画、プーシェ（仏）の宮廷画、ワトー（仏）の田園、（宮廷画家）等一世を風靡した。

音楽はバッハ（独）のマタイ受難曲、ベートーベンの第九交響曲、ヘンデル（独）の水上の音楽、ハイドン（墺）の豪華なバロック音楽。モーツァルト（墺）等、楽曲豊かな作風が甦（よみがえ）る。ドイツ古典主義を中心に表記した。

芸術的風土を支えるヨーロッパは、十七世紀絶対主義の王権を背景に、華麗豪華なバロックから十八世紀になって、絶対主義衰退と共に、繊細優美なロココ様式へ流行発展した。

フランスを中心に精妙な曲線から家具装飾まで、華やかな貴族文化を形成していった。

十九世紀フランス革命後ナポレオン時代へ。

思想史の上でも、古典主義からロマン主義へと、その上に写実主義から自然主義へと、大きな転換期に、ドイツ観念論の体系も、新カント学派（ヘーゲル達）により集大成されていった。

注目を引くのは唯物論者カール・マルクス、経済学、J・Sミル（英）の経済学原理などが特記される。法学、歴史学なども個々の推進母体も数多きにまたがった。

たゞ十九世紀ヨーロッパを代表するフランス絵画の主流のみかゝげ、二十世紀の「破格の美へとつないで行きたい。

ロマン主義は、十九世紀前半ウィーン体制からの逃避と、啓蒙思想に対する反動として、台頭した。

ドラクロワ（仏）の「瀕死のギリシア」は、自由主義

運動、国民運動の高まりの中で、ソロンギの廃墟に立つ若い乙女の姿に共感し、絵筆を揮った。

十九世紀半ばになると、ロマン主義の反動として、写実主義が提唱された。すなわち、クールベ（仏）の「石割り」で、自らリアリズムを唱え、社会の真の姿を追究しようとした。

また印象派を前に自然主義を主派とした、ミレー作「晩鐘」は科学の隆盛と資本主義の進む社会の中で農民生活を描いた。労働の尊さを十分理解し、比類ない崇高さの表現を追究し、印象派美術の粋を集めた。

この期の後半色調の分割によって光と翳の色彩を、主観的感覚によって追究した。その後表現を自己の感覚の上で構成する立場を、総称する後期印象派へ発展する。

モネ作「印象、日の出」は、朝日に映える風景が刻々と変化する一瞬をとらえた作品で、この風景画から印象派と呼ぶようになった。「水蓮の庭」の描写にも時間的変移によって、表情が変化する妙は、この派の特徴である。

スーラ作「グランドジャット島の日曜日の午後」も濁りのない単色の点を集合させる「点描」という画法を確立した。

またルノワール作「ムーラン＝ド＝ラ＝ギャレット」は、フランス印象派の巨匠がモンマルトルの酒場で、ダンスに興じる若者たちの姿を描いた作品である。

十九世紀末の社交は、貴族や政治家のものではなくなってきた。毎夜ガス燈の下に普通の若い男女が集まって華やいでいた。初夏のさわやかな夜風と人々のざわめきが、感じられる作品である。

マネの「エミール＝ゾラの肖像」は従来の常識を逸脱した、進歩的な画風背景の屏風など、ジャポニズムの影響がしのばれる。

このように十九世紀後半は印象派絵画が主流を構成するが、光の表現など、当時日本の浮世絵や屏風絵などの、大胆な色調や構図などが強い影響を与えている。

強く激しい色彩で「タヒチの女たち」を描いた、ゴーギャンなど非ヨーロッパ的なものへの嗜好が、印象派の中にも散見した。

二十世紀は印象派への反動として、表現派や超現実派などが起こり、動きが活発化した。

これは美術部門だけでなく、他の思想、歴史、音楽、文学他にも従来の殻を打ち破って、そこから抜け出すことによって、新たな領域に活路を見い出そうと破格なものが求められた。

そうした流れの中で、破格な美が絵画の面で花開くことになった。すなわち完成されたものを乗り越えることによって、自己表現する。

野獣派、立体派、表現派、超現実派などと呼ばれる作風である。いずれも従来の完成されたものを打破って、

新奇なものに活路を求めた。

中でも立体派のピカソの代表作「ゲルニカ」は、スペイン内乱（一九三七、四）の折、独軍の空爆による破壊と、多数の住民の犠牲を描いている。

戦争への憎悪をこめて、その怒りを大作に表現した。物象を分解し、それを再構成するには、空爆による破壊は彼にとって必要な材料であったのである。

大画布に分解された物を寄せ集めたように、その怒を再構成する手法は、斬新な構成表現であったかもしれない。彼は破壊から再構成にその妙をふるい、当画壇を風靡した。

同じく超現実派の代表、ダリの「内乱の予感」も、またスペイン内乱直前に描いた。フロイトの精神分析の手法を内部意識に向け、挑発的な画風で一世を風靡した。

また野獣派（仏）で、マティス、ルオー。ルオー作「ヴェロニカ」は黒太の線で、キリストの顔をぬぐう聖女ヴェロニカを描いた。

いかにも野獣派の大胆な線描にひかれる。また大衆娯楽として映画、機械化によって、人間そのものも機械の一部として押しつぶされる様子を風刺的に描いた。

その後現代では、テレビ会議、技術、革新、衛星通信回線の利用で、遠隔地の国際会議も可能となり、情報をたやすく共有することも出来るようになった。

そしてインターネット、パソコン通信網の利用と、情報通信の世界にも破格的な美をもたらしている。光ファイバー通信は、世界を益々短縮させている。

もはやピカソ的破格の美は、インターネット、携帯電話まで、いながらにして世界の情報を手中に治める時代へと、その美の論理を展開していった。

七、美意識と美学の間に

1、美意識の主体化

私達は常に美なるものを求め、ある時は壮大な山野を徘徊し、またある時は渓谷に岩をも朽ち轟かす激流に、竿さすことを通してその真相を解明しようとする。

勇猛さも自からの意志によって築きあげて来た。然しその壁は厚く私達の前に立ちはだかった。

過去から幾度かその辛酸をなめて来た私達は、失敗を乗り越えては、はるかに成功を夢みてたたかった。その意志力は偉大で果てしない。

遠く峻厳な巌であっても踏入る気力、自己同一、アイデンティティーの織なす主体性は、底知れない物を秘めている。

これが人間の人間である本性に根ずく主体であって、私を私であらしめる所以でもある。人間この未知なもの

も、激しい意志力の前には頓挫することもある。然しそれはつかの間の挫折である。

その気力の喪失は、また復活の道でもある。時にその頓挫が大きければ大きい程、復調もまた高次の段階を示唆することも可能であろう。

およそ自滅のまゝで終ることはない。生きている限り、立上がろうとする気力、意志力は、主体である人を動かす。それは精神力といってもよい。

個を培かう主体が客体にいどむ姿も、また美意識の現れであろう。その時まことにうまく切磋琢磨する形をとらえる場合もあり得る。

個体の集合体である社会基盤も、相互の支え合いによって、想像もしない力を発揮することも可能である。

それがまたより高次の新しい力となって形成過程に加わって来る。美の創造においても同様な主体のエネルギーが発散することに、新たな美を形成して行くことは限りない。

美の形成過程に言及することは割愛するが、主体の働きが如何に大きいかは想像に固くない。美意識覚醒において主体の示める役割は大きく響いて来る。

およそ美意識が表面化するのは、主体の介在なくして燃えない。主体の意識があって、美の顕現もまた飛躍もなされる。

主体の働きは人間活動の機能の上で、あらゆる意識活動の根源をなすものである。主体が深く没頭出来れば、精神世界の活動も集中化する。

すなわち美意識の働きかけも比例して大きくなる。もちろん精神活動の基本構造も、拡大し、多面化する。

意識の作用も、例えば自分が今何をしているか、どういう状況に置かれているのかが、自分ではっきり解る心の状態で美を感ずる。

感覚が目をさましていれば、美を意識する働きが、多面的に脳細胞に蘇って、はっきりとした美を捉える。

この働きは人間活動の基本的作用であって、それが深浅さは環境や教養によっても異なる。従って美意識の現われ方にも濃度があって、いちじるしい場合もあれば、淡い場合もある。

私達の心の働きは、このような感情の動きをともなって、より高度な主体の取らえ方をする。

いわゆる満たされた感情、心理主義的な美学で言う感情移入（対象や他人のうちに自己の感情を投射し、それを対象固有のものとみなす。）する事により、人は対象を生かし、対象において、価値的な感情を受け入れる。

美意識の深まりにとって、満たされた感情が如何に必備な感情かは、主体化する過程によって捉えられる。

主体化の完成の度合が、格調ある美意識を明らかに現わしていると言ってもよい。

こうして完成された美意識も、イメージとしては、永

遠に残り満たされた情緒をたゞよわせる。

たゞ快感や情緒の満足だけで美の機能を知るのは、余りにはかない束の間の存在で、うつろいやすい翳の美を予測することすら出来ない。結局理念の虚しい現象の享受でしかあり得ないと思う。

およそ生あるものは必ず滅するもの、それゆえに立体化された美意識も、時を待たずして如何に充実した体験であっても、暗い虚脱感に悩まなければならない。

生ある物の共有する宿命論といっても過言ではない。盛者必衰の理（ことわり）の宿命論、あるいは運命論も、美意識と美学の間に介入するものとして、私達は甘受しなければならない。

2、美意識の客体化

およそ客体は主体に対峙すべきもので、自分の外にあって自分がそれを冷静に観察することが出来る、すべてのものをさす。

もっと端的に言えば、主観に対する客観の知識についても言える。物事を考える私達の心の働き、自分本位の思惟か、他者を含むより広い知識の過程か。

物事の判断の仕方についても、自分の直観や推論の傾向が根強いか、広く自分以外の他者を含む客観的な判断傾向によるか。

判然と区別される思惟の過程をもって、客観、客体を論攷する。

実は美の識別においても言われることで、はてしなく主体化と客体化の判別は判断の知識の両極を現すもので、物事を知る働きの過程においても主体化の裏がえしが、客体化を意味する。

そうであるならば、物事を知る働において、勢い他からの行動的な考察も、また一つと言えよう。

美の客体化は作者にとっては得がたい知識を知る判断といってもよい。自分本位な行動による作品を、他者に鑑賞してもらうことによって、判断材料が多ければ多いほど、自分のエネルギーを燃やすよい示唆ともなりうる。

構成から色調に至るまで、あらゆる判断材料は主体に向けての、ひとすじの光線といってもよい。

輝やける存在として、自分のものに価する、判断材料が深ければ深いほど、自分を生かす活力ともなりえる。

たゞ「言うは安く行うは難し」中々真価にせまる論評は無に等しい。それにしても作品によせる愛着は、かぎりない事を忘れてはならない。

美術部門にしぼって見ているが、他からの行動、客観的な判断材料として個々の作品に横たわっている。

およそ完全なもの、絶対なものなどあり得ないところから、知る作用の第一歩に迫まって行けば、必ずや客体世界の持つ意味も含まれることを知り、解しえることも

出来よう。

いやむしろ美的鑑賞も創作に当って、この客体なくして、作品の持つ意義は解されようか。主客合一の境は相方にとって、新鮮味を育くみえる前ぶれともなろう。

かゝる意味から美の客体化も、また一つの新しい視点を想い起すことも可能と言える。

美の客体化が進化すればするほど、より高次の知る働きも生まれ、新しい手法も育くまれることは間違いない。

科学技術も美を客観し、客体的に鑑賞することになれば、主体化の含みをもつ以外に、客体化の形成に力点が移入しても不自然ではない。

いやむしろ飽くまでも主体を固持し続ける方が、その物の本質に狭さを感じ、感覚、目覚めにとどまることから、抜け出しえないものになる。

これでは客体化の把握、鑑賞もとだえがちになる。美意識再現に当って、美観の作り成す度合は、主体か客体かによって変化する。

しかし我々が意識すると、しないとに限らず、この両者はあきらかに現れ存在し、我々の鑑賞にひとすじの意図を、それとなく気づかせる。

相対的な物として美形式に不可欠な要因である。時には主体的な把握が強く美意識に介入する。

またある時には人間が作りなした科学技術を媒介させることによって、より客体化が美を決定する。

両者の把握は美的な形成に不可欠なもので、大芸術家も意図的には主体化が潜在する。客体的なエネルギー無くして、美的な形成がより完成の域に達し得ない事は自覚している。

人の作った科学技術も時として、美意識をより自分のものにする時もあり得る。即ち形而下学が美意識に及ぼす客体的な世界は、光と炎の芸術で知られる。

東京ディズニーシーの夜景に浮ぶ水鳥のはばたく美的な饗宴は、まさに技術陣の粋を盡した十五分の輝きで、六〇人のスタッフ仕掛人の根性が、夜を徹しての専門的な技術作業の生む科学の美である。

すなわち客体化が織なす綾で、あらゆる芸術美に先行する人間的な美の創造といってもよい。まさにすばらしいものだ。

3、美的センスの捉え方

客体化に映ゆる美もさることながら、今美的センスの捉え方について、思惟を廻らせたい。私達は日常感覚的な世界に起居動作をくり返している。

そんな日常茶飯事に喜怒哀楽の感情が芽え、時あって物事の微妙な感じ（好み）を知る心の働き、いわゆるセンスに遭遇することがある。

これは意図的な思惟でなくても、何となく、そのような意識を取らえることがある。

あるいは偶然にも私達の意識の中に蘇がえってくる事が、目的のようなセンスとして、思いがけない価値を誘発する。

それは一つの発見であり、開示でもあろう。美的センスの捉え方も時には、その方向に意識が働くことによって、想像以上の世界観が開け行くことがある。

それを我々はセンスのよさと言って身近に捉え入れ、環境美化の一端に利用することが出来る。

私達の生活はこれら生活環境の中に、生活即美なものを育くみ、日常性を豊かに潤し、精神的な充足感、ゆとりが感じられる。

同時に人間的な情趣を味うことも可能になる。従って少しでもプラス志向があればセンスを求め、輝く世界を創造するのが常である。

センスなき生活は時めきを感ずることがなく、日々の繰返しの中に埋没するしかない。

人生は時にはわずかながらも時めきを感ず。力強く生きることが、生活に張りを持ち生きる意欲を顕現し得る。

たゞセンスがあって、介在しても、それを磨かなくては、光を発せない。

自然世界の物象もさることながら、センスのよさ、すなわち心の働き、精神状況を磨くには、環境的な刺激も不可欠だ。それを包む世界観、人生観も、環境の構成に必備である。

このような環境論は、すべてを支配するものとして先取りする事が、より活力に満ちた生活設計にもつながる。

従ってある意味からすれば積極性は、センス取得の鍵たり得る、と言っても過言ではない。

美的（芸術的）センスのあるなしは、日常生活の環境によって差位もあろう。

また日頃の日常経験や体験において、気持の持ちようによって、随分違うと思われる。

つとめてセンス探求までいかないにしても、生活に支障のない限り意識を傾むけたなら、その程度でも美的センスは、増大すること、まちがいない。

私達が日常経験に於いて蓄えたセンスは、生活習慣の増大と共に磨かれ、それが美的冴を構築する。それは豊かな美的快感、感性となって蘇がえってくる。

従ってセンスは生活の支えとなり、新しい生活のエネルギーともなりえる。

また情緒的な感性美は生活源となって、潤を感じさせる。同時に心の糧ともなりえる。人生をよりよく生きるための、根源たりえる。

そのように大切なセンスを磨いていかなくては、より価値的に生きることは出来ない。

生きることは磨くことにも連なって、生活に光をはなつ。勿論センスを磨くことは経験の積重ねであって、そ

の過程は思考錯誤の連続であっても、少しずつ新しみが滲み出てくる。

よく人間国宝と叫ばれるが、簡単には到達出来ない。一つ一つの積重ねが大きく功を奏する。その磨きこそ一つのセンスともいえる。

私達が名画に接する時、おのずと感性的な快感、美意識がよみがえってくる。それはセンスの働きによるもので、日頃たくわえているセンスが一片の芸術品と呼応して、生れる響きといってよい。

日常感性の中にあって如何にして、センスを獲得すべきかは、生活即美、美即生活の胸中に響くものを捉らえ積上げて行く過程を大切にして行くことである。

私達が意識する、しないとにかゝわらず、センスは自然に身につくものである。それは同時に愛でもあろう。

心的な働き、感情、情緒など、精神作用は複雑多岐にまたがるが、そのような状況を統括する意識の働きも、またセンスの方向性を示すものとして意図してよい。

よく生活経験で「目を肥やす」と言われるが、常々優れた作品を、実際に多く見たり聞いたりして、鑑賞力、鑑定眼を養うことが、センス志向への鍵となる。

書でよく「目ならい、手習い」と言われるが、手の技法はもちろん必須であるが、目習い鑑賞力も欠くことの出来ない重要な要素として、古来から書家が心掛けていることである。

4、美化する働き

センスの働きも美化創造の手掛りであるが、環境的な因子の捉え方、知識する作用、意識の開示等、美化する働きの要因と言える。

美意識は私達の生活環境に内在するが、生活内における内的な環境と、外的な環境想定が叫ばれる。

内的な環境は内在的な環境とも呼んで、環境を構成するについても、主体のおよぶ範囲、すなわち脳細胞の知識を含めて、主観の働く範囲を示めして機能する。

その働きは美的な意識を呼びさまし、美化する働きを増大させていく。美意識の拡大にともなって働きに開眼され、知識化されて行く。

一方、外的な環境は私達の前に広がる自然界すべてに、美化の環境をにじませる。そして自然界は美化を促す。

私達は自然環境を美化する働きを、内的に持ち、外に働きかけると共に、内にも美化しようとする意識が重複して、美化が大きく働くことにもなる。

たとえば四季の変化を感ずる働きは、同時に私達の意識の内外に構築されてくる。古代から美をめぐって、幾多の感覚的な表象も現れた。

万葉集や、また中世の枕草子の感覚的な冴え、そして紫式部の源氏物語の各巻々に見る艶やかさ。色彩感覚に裏打された、心のうつろい。ときめき、雅の感情表現、

宮廷女房の物の見方などの、感覚が見られる。

中世の詩歌、古今、新古今の詞華集に、物語文学に見る感覚の才、徒然草、方丈記など四季の美を愛でる執筆が色濃く現われている。

それらは、その時代の背景も環境論を作りなす表象といってよい。

また道元禅師（一二〇〇―五三）の「本来ノ面目」に「春は花、夏ほととぎす、秋は月、冬雪さえて涼しかりけり」

さらに明恵上人（一一七三―一二三二）の「雲を出でて我にともなふ冬の月、風や身にしむ雪や冷たき」。

この歌の詞書が、歌物語的な長さを持ち、歌の心を明らかにしている。まさに環境論といえる。

古来からかように環境美化する働きを、その折に付して描き美意識をはっきりと現していることを思うと、美化する働きが異常なまでに、風趣をさそっている。

たゞ今日の風趣とかつての情趣とは、環境論によっても異相をうがっている。風趣をそっと見る視覚には、それぞれ意識されたものが蘇ってくるのがわかる。

明恵上人の歌の調書の一部に「冬の月」を愛でる下りに「月雲間より出でて、光り雪にかがやく。狼の谷に吼ゆるも月を友として、いと恐ろしからず」とある。

群雲隠れの月、雪に映えてかゞやく、狼などを引き出して、冬の月の風趣を美化する働きを繊細に捉えている

など、感覚のさえを知る。

古来日本人の自然観は主体を通して発生する。感覚をその場に映じた判断力や知る働きの冴えによって、客体の世界を導入する。

自然界と和合しながら愛着を持ち、或時は自分流に変格することによって、より高度な内容に変えて融和させて行く。

愚痴を持ち、その連続線上に生きがいを感ずる芸術の美も、科学することも、また社会形成も、すべて個の人間観を生かし得ることだと思う。

パスカルのパンセに、「はかない一本の葦が考える力を持つことによって、全世界を統一するような偉大な力を持つ。」とある。

我々にそんな大きな力量がひそんでいることなど想像もつかない。自然の変革を生かすのは、より美化する働きとも言える。

小柴先生のカミオカンデの理法も、これに由来する類型と言ってよい。

医学治療面にしても、脳死段階で内臓器移植手術に成功（二〇一一・四・一三）。我国で改正臓器移植法によって十五歳未満の少年の脳死提供により、心臓（阪大）、肺（東北大）、肝臓（北大）、膵臓と片方の腎臓（藤田保健衛生大）、もう一方の腎臓（新潟大）に提供手術され、いずれも成功した。

それには、ICとかMRI、レーザー手法、光ファイバー利用の胃カメラ、胃癌の手術、心臓バイパス手術、大腸手術など、画期的な治療方法に英知の広がりが見える。

これは美化する働きの延長上のものと解して過言ではなかろう。

もちろんリスクはあって先端技術に、とまどいを感ずることもある。これも医学発展の過程において犠牲者無きを信んずるが、それによって挫折してしまっては、人類貢献にも影響を与えることになりかねない。

様々な領域で様々に展開されている科学技術も、その源は個の人間主体にある。今問題としている美化する働きも、このように積極的な使命感が、新しい造詣を生む根源である。

実に美化する働きこそすべてであろうと思う。歴史的に見れば、もちろん栄枯盛衰もまた世の理法なるも、それに停滞することなく、今を生き抜く力、エネルギーあっての美であり愛でもある。また文化でもあり得ると思う。

限りない力、それは、すべてを開発にむけ進展させる源泉であると思う。美化する働きは、美的存在過程の中に介在しえるものとして次に考えを述べることとする。

5、美的存在の認識

およそ美的な存在を知る働きとは、私達を包む森羅万象すべてに、美的な存在を見聞することが可能である。

これは前述の個すなわち主体が捉え得る物には、美的な個物をたよりとすることによって生活が成立する。

美的なものも、その知識も互に頼りあって、より高い生活を示すことになる。感覚や感能の適用も、美的な存在の基礎であるものと言える。

私達の感覚はある物象に相対することによって激しく心をゆさぶられ、今までにない大きな刺激となって向きあっている。

そこに生まれる個々の感覚こそ、一つの美の存在なのである。

もっとも基礎的な要因の一つ一つは美的な要因で、その集合体が個の存在である。

限られた美的な存在の一つ一つは、その意識を呼びさまし、集合体の物象となって私達に迫ってくる。

感覚や知覚を支配する脳内の機能は、表面に現れず、ひそみかくれた意識に新しい集合体がプラスされて、新しい感覚や知覚を育くみ、より高次の美的な存在を形成する。

次々に新しい美的な存在が生まれ、私達の意識の中にまとめられる。そして知識もより確実化される。

美的な存在は私達の生活の中から育くまれ、芸術的な価値にまで高められる。美である存在は私達の意識の中

に磨かれつゝ、感覚を高めて行く。

美化する働きも、実にこの過程にあって磨かれる存在である。磨き磨かれる関係を通して、知識の深まりも形成されて行く。

主体的な知識はもちろんのこと客体的な知識の深まりも、知の働きの過程に美的な存在を誘う。効果的な働きがあって美は開眼させられ、花は咲きそめる。

私達の感覚には、常に陰翳の美がともなう。日常生活にあって美的な存在が、ある時には、ときめき光る存在を構築する。私達はその場合を思い見る。

時には翳の偶が支配的で、いわゆる翳の論理に追い払われそうな環境になりかねない。

「たゞ日はまた昇る」明暗は表裏一体をなす。また美的な存在においても刻まれる。個々の美は全体の美と呼応して成立する。

美的な捉え方もまた現実の存在、実存する美への知識の作用も、かゝる理法をふまえ浮上する。生活に実存する幾多の美は、その存在を生活の中に見出し存在する。

美的な知識を一つまた一つ積上げて行く所に、芸術的なセンスも生まれ、知の働き段階において、さらに新しい角度も生まれ育くまれる。

限りなき知覚や情覚また情念も、知識の一端となって生起する。

この輝きも感性的な知識があってこそ働きえるもの

で、その作用は私達のもつ感情的な世界が、意識の発動する過程において知識まで高まって行く。

そこに美的な形成もより確かなものになって行く。新鮮なもの、うつろうもの、情的なもの、非情的なものを包み込み、美的存在の知識へとかけ昇って行く。

すなわち個体は同時に、社会的な特質をもつ、美的感情でもある。個人的な生命体は、より大きな普遍的な生活と融合し拡大化する。

こゝに美的な極彩色は、大輪の花を咲き競うことになる。

限られた時、空に存在する美学は、盛衰こそあれ、そのものゝの本性をにじませ、精一杯生きようとする美に愛着をよせ、共感を誘うことになろう。

美的な存在、これは誰しも望み求むる所である。たゞ私達の生活に美なる存在を発見し捉えることが、これを可能にする。

美ある生活をしきりに望み、詠嘆的にかくありたいとの願望に終始していては、美ある存在は得られない。

日常の中に、美的な存在をつかみ捉る態度が必要である。もちろんそれを求めて積極的に動き活動しなければ、つかみ得ない。

絵にかいた餅に終ることのないよう、私達の感性を豊かに、五感のひらめきをめぐらすことが必要だ。

それには情報資料を多く知る領域にまで、育くみ形成

させる　それは同時に新たに付け加えた価値となって、はっきりと現れる

この知る働きは美を美たらしめる、高次の美的な知識と解してよい。たゞそのきっかけとなる一つの小さなステップこそ大事だ。これを発掘する探査こそ、生活の中に見落としてはならない存在である。

その存在は小さく価値的に乏しいものと思われても、練磨すれば変質して尊いものにもなりかねない。

日常生活の中に、私達はかゝる貴重な物を取り逃しているのではなかろうか。たしかにちょっとした手ちがいで、あたら価値的なものを闇にほうむっているのかも知れない。

美、それは泥沼の中から求め発見される。瓦礫の中にこそあるかも知れない。また新しい発見の糸口は、極めて微小な物に宿るかも知れない。

私達は日々の生活の中に、新しい物の切っ掛けになるものを、見落すことのないように、絶え間なく考える葦を、巡らすべきであろう。

この忍耐こそ発見の布石となろう。美的な存在の知識について、日常生活経験の中から様々な事例も発見され、数多きにまたがると思う。

この経験こそ新たな美の発見をうながすエネルギーと解してよい。

このような美意識は感性的な知識であり、もとより自然科学に組みする形而下学的な知識によるものであるが、昨今の美学形成にかくことの出来ない存在である。

6、科学する心は美学か

以上、論攷を重ねて来た自然科学的な知識は、新たな傾向になって来たことは論をまたない。科学する心、知識は、現代美学を解するに無くてはならないものである。

特に通信技術系の光ファイバーは、現代科学の最先端を行くものである。この領域が科学貢献に革命をもたらした事は事実である。

さきに論じたいわゆる、形而下学的な知識によるものとして分類わけしている。こゝには感性的な知識に対して、形而下学的な知識が主動をなしている。

すなわち美学形成に科学のメスを当てる事によって、人の心を形づくる認識論の立場に於て、猶も感性的な知識を実証し得なかった。これは自然科学の反能を利用して人の心に実証的な実験をなしたと同様である。

それとＩＴの世界で論じようとする。また多くの資料に裏付けされた資料と共に、美の織なす綾を、私達の経験的な知識過程に組み込む。

このような実験に裏付けられたものは、パトス的な過程ではおよそ考えられない。だが現代科学はこれを可能にした。

その成果を、美的知識の世界に創造する。それは美学を知る働きでもあり、光と翳の織りなす美学でもある。

それにしてもＩＴの世界は、現代科学に不可欠な回線回路の微小な部門まで縮小化した。携帯可能な領域でまたその普及も、日をまたず拡大化した。

そんな通信資料をもとに、美的な価値観までも変貌せしめている。かつて人間を取りまく環境も、科学・工学機械で、人間の手先となりロボット化も、たえまなく開発された。

かつて未来志向の中で夢見たものが、現実的なものとなり人間に変って、その代役をはたすことになった。

これは光センサーの働きで、ロボットをあやつることの出来るまでに至った。輝やかしい成果の中にあって時には、坐折もあったこと、思う。

経験的積上げが、こゝまで発展するとは考えられないことであった。限りない未来社会の中にあって、かつて前衛派芸術の台頭に一喜一憂していた。

十九世紀後半から二十世紀にかけての、私達の思惟を一変させたのは、他ならない科学する心、知識過程と言ってよい。

科学的な知識はあらゆる物の分析、解明において、先ずそのきっかけを作りなした。すなわち、従来ハトスの世界に酔いしれていた。

心理の精神的な捉らえ方も、この実証的な世界に美を求め形而下学的な知識こそ、美の支えといってよい。

しかし感情的なパトス的感性の知識が、まったく途絶えてしまったわけではない。私達の先を見とうす美意識、これは美的な直観に心象表現を加え、不分離な物であることを忘れてはならない。

その領域に形而下学的な思惟、知識が可能であれば、輝く芸術共に、また新たな世界観が開かれること、思う。いや現に新しい美の発見に奔走している。

「主・客合一」の領域にあって、客体世界の持つ意味付けは極めて大きく、秘められた可能性に向けて、まっしぐらに進んでいる。

その成果は大きく、限られた特殊部門といえども、それがなすミクロの世界は果てしなく続く。科学する心は、こゝに存在すると思う。

特殊な世界の知識は、それを基調として、私達にかけがえのない存在を投げかけてくれる。私達はそれを享受し、また新しい世界に向けて専進する。

そこにゆるぎない価値意識を見、燃やすことが出来る。かくして、とめどなく探究の歩みは、新しい価値意識を夢見て連続し、新技術の開発にまた発見に、使命観をもって当ってくれる。

若きエネルギッシュな技術者に、深甚な謝意を投げかけたい。これが科学を愛し科学する心の出発点であれば、光を放つ成果を生むことが期待される。

私達は常にこの科学する心の存在に、畏敬の念を捧げる。また同時にその成果の恩恵に俗し、日常生活に新しい支えを得る喜びを、かみしめたい。

かくて新しい美意識開眼に向けて、美学の瀑化に精進する気概に燃えることが、次の発見にもつながる事を信じて、歩まなければならない。

一つの命題に向け科学する心は、美学であると、言って過言ではなかろう。道に咲き競う桜花に感じながら、その交配に命を捧げる科学者に深甚のエールを贈りたい。

種の保存に命をかける科学者にも……。

7、感性的喜びは科学への逆行か

およそ物事は相対的に考えがちである。パトスとロゴス的世界は相反するもの、知識世界にあっても二元的な世界に所属する。

美学発見の手がかりは、この二つの相対的世界が美学形成に役立つとは不可思議に思われる。

たしかに知識過程も相反するものである。知識の両極的存在だ。論証の過程にあって知識こそ異なれ、美的探究の目的の働きは、弁証法的な止揚あって、融合統一化の方向をたどる。

したがってパトス的傾向が科学への逆行か、とは論じ難い。いやむしろ融合統一の働きは、まさに反作用を作用化する働きである。

この「する論理の明快さを必備とする。感性的喜びは科学への逆行か。これこそ論議の対象となりえる。

不可能を可能化する思惟過程は、電極に例示すれば、プラス極とマイナス極は、互いに引合う性質を示しえる。同様な理法で感性的な喜びは、必ずしも科学への逆行とは言いえない。たしかに常識的には知識過程の相反する作用の中にある。

前述した科学する心を育くむ作用の如く、より深い高次の段階追求には、止揚の効果を果たしえる。

相反する二極の作用は、逆にプラス志向を示す場合すらある。形而下学的な知識こそ実験科学の織りなす綾と、経験的な実証による判断が、素材となって美を呼ぶ。

輝かしい光の芸術は、現代科学の生んだ動く芸術に多用されている。人間に代行されるロボットの世界も、工芸材質として生かされている。

ガラスの工芸美など加熱により接着技術をはぐくみ、材質以上の効果を示している。また角度による陰翳の美学形成に、大きな成果を育くんでいる。

論理の二極化は、たしかに相反する二元的なものである。従って常識的にはパトス的なものは、科学への逆行ということも言えないことはない。

しかし美、非美も、光と翳は一見相反するように見える。けれども実は物象の表の面と裏の面、これは確に相反する対象世界なるも、放ちがたい存在物体でもある。

この場合表裏一体説も、思惟過程として可能である。たゞ探究の二方面化と言うことになれば、パトス的、心理的な捉え方と、ロゴス的、形而下学的捉え方では、方向性が異なる。

前述のような方法論としては、二極が分立化し二元論的な方向を示す。弁証法的な論理の統一として捉えた方が、同一の美の追求にあっては、なおのこと止揚を評価してよい。

たゞ科学の窮極は、そこに美の顕現があるということを常に念頭にかゝげたい。形而下学的な知識が、少なからず美意識の発掘に貢献している。

それは作り作られる過程にあって、人間の知的な英知が先端部分で光を感じ、美学を感ずる働きを生む。

すなわち感ずる意識作用は、根源的には感性即ちパトス的な領域をも考えてよい。事物の本質をとらえる思考の形式の手本にあっては、前程の論に終始する。

思考の形式を越えた世界が、蘇みがえってくる。

トランペットを曲目に従って演奏するロボット、またそれを包むオーケストラの雄姿は、いずれも美しい美的な光と翳の世界をもつ。

科学を作る技術の世界が、このような思惟をもつとは信じ難い。しかし現実にそれをこなしている。方法論的な探究において発想を異にする。

形成物を見る限りにおいて、心理的な作用も働くことは、自明のことと言わざるを得ない。今後如何に科学技術が進歩し捉え方が変わろうとも、人の見る働きは感性的な知覚による。

技術を技術たらしめる所を見落してはならない。

先験的な知識アプリオリーが、後天的な知識アポステリオリーに影響を及ぼすといえども、先行する知識は意識の世界で、すでにアポステリオリーを育む意志力を持つ。

これは古来からの究明において明らかであり、これを覆すことは、歴史的な知識の否定につながる。

私達が科学する心を忘れない限りにおいて、この知識的な過程は世代を越えて受け継がれ、発展継承されて行くことは、まちがいない。

幼い頃から科学する心を磨くことは、英知開発の伏線ともなりえる。したがって若き世代に託すことは甚大であり、研究への素材ともなり得ることと信ずる。

磨くということは、探究の第一歩である。経験の過程において、反復練習というか磨く作業は、尊い成果達成につらなる。

科学する心は美への創造過程とも言える。科学する意慾は創造へのステップでもある。およそ意慾、心の働き、

これは心理的な知識で多分にパトス的領域でもあろう。
確かに感覚も心象現象の現われで、心象の表象は感性的美である。その先験的な美意識は種々の場において現れる。
科学技術に一歩踏入れば、実証的な美意識へとつらなっていく。かくして私達の所に実証的な世界は口を開け、メスの入り来るのを待ってでもいるようである。
花咲く過程は違えども、感性的な美は同時に、科学技術にとぎすまされた光のしずくを必要として、新しい前衛芸術、ロボットに象徴される。
人間代行の技術もまた新傾向の花であると思われる。そこに止揚の論理が作用される。
従って再びテーマに戻るが感性的な喜びは科学への逆行であろうか。いや、新しい作用形態からは逆行ではなく進化、止揚の論理と特記してよいではないか。
たしかに論理を超越する世界がテーマを否定的な導入えと結合させる。新しい知識の過程を必要とする領域と解してよい。

8、美意識と美学の間に

およそ論理は、美意識発生の心的な過程には、不要な段階かも知れない。ただ美を知る作用の働きにおいては、限りなく論理に接近する。
美的な直観は科学的な知識の介入を、疎外するかに見える。感覚発生時の心的な捉え方として、先験的な感覚にたよることが多い。
間接的な知識導入となると、他の経験内の追体験も、かなり介入してこよう。経験を経験することによって、美的意識は高まって来る。
いわゆる体験をともなって美意識発生の要因をなす。美が美であるためには、非美の論理が頭をもたげてくる。私達が意識内で美と感ずるのは、非美あって、より感覚的な美をはっきりと現すことが可能だ。
すなわち非美の論理が美学への掛橋かも知れない。これは前述の対象になった論でもある。
美の存在は美的な麗わしさに秘む、翳の美を知る作用の過程にあって、体系的な美を学と解してよい。
組織立てられた体系的な美意識、これこそ美を捉える幽玄な情緒かも知れない。私達が日頃、意識すると、しないとに限らず、美しいものが突如現われ私の意識を誘発する。
これは感覚的な知覚作用で、感性的な感情が目をさます。美を美と感ずる働きは脳内細胞の知識が働き、美意識を喚起させる。
視覚によって捉えられるもの、嗅覚、聴覚、味覚によって感知されるもの、様々であるが、美意識が美意識として定着化されるには、ある何か切っ掛けを与えて呼び

起す過程に、脳細胞の働きが呼応する。
これは美しい物象だと知識された時、美意識の存在を知る。
たゞ潜在的に美意識が脳細胞内に蓄積されていて、その蓄積の上に新たな美が蓄積される。これは類型的な知識ともふまえて、より豊富なものへと重ねられて行く。
この過程は意識的にも、かなり高度なものへと積み重ねられていく。こゝに教養豊かなものと非教養の相違は、当然見られるだろう。
従って私達は日頃から物を見る目、感覚的捉え方へ、生活経験の場の豊かさを、心得ていなければならない。
一つの物象の見方にしても、多種多様な心的な経験が蘇えってくる。
千変万化する自然界にあっても、私達は美しい愛くるしい眺めだと思うだけではない。一木一草に至る物象までが、美を創造していることを再び認める。
すなわち新たな美意識形成の場を共有することが可能である。もっとも美意識形成の場は、美的環境に依存することは勿論である。
美意識発掘の手掛りは、環境形成によってなされる。美的環境を育くむ素因は、美の心理的な作用が自然世界の中に発見出来る。
サイクルを大切に、その場その場の要素に応じて、磨きをかけ、美であるものゝ発見に役立てる。そのことが美意識形成の作用となることは明らかだ。
従ってその環境にあって、環境から育くまれる意識は、選択されたものを捉り上げる。すなわち意識として心理的な美化を加え、美意識の形成まで昂揚させていく。
その過程に組織立てられ、体系化された学の知識すなわち美学が育くまれ、新しい知る作用となって誕生する。
美学形成は美意識発見の知る作用過程になされる。組織立てられた体系的な学は、カントの判断力批判となり、ヘーゲルの精神現象学となった。
またニーチェと共に狭義の「生の哲学」の立役者として登場した。ディルタイ。Wilnolm-Dithey。(1833—1911) にも、芸術の典型的な創造に「人間的な生の本質」を認めている。
指向と共に、芸術を「生の理解の器官」として重要視している。
生体験の表現、また追体験による表現の理解を解釈学に求め、芸術的な想像力（構想力）に定着させた。
こうして美学が一人哲学の下、成熟していった。それは美学確立の基盤といってよい。美意識確立の要因は、環境論に左右された。
その意識の集積作用によって、美的感覚が群舞する。それを意識的に取り入れるか、否かは別として差位はあっても、華やかな物を見れば、明るい感覚を催す。
逆に寒く冷たい物を見せれば、そのような感覚を持つ。

これは人間心理の内奥で、極めて感覚、知覚の低い者に対して試みた調査結果による。

すなわち環境的な構造の変化が私達を誘発する。かりに感覚的に極めて鋭敏な者であって見れば、この反応は直ちに高い領域にまで進み得るものと思う。

それどころか甲斐々々しく未開拓の分野まで掘進め、新しい領域に分け入って、現感覚以上の物を育くみ求める。

また多種多様なものから類推によって、出てくる感覚的なものまで、究め尽くすことも可能かも知れない。

私達人間の繊細さは留まる所を知らない。美意識と美学の間には、このように複雑多岐な物から対象世界に及ぶものまで、その範囲は広く且つ深い。

物象から視、聴、味、臭、触覚まで、私達の捉え得る物を、すべてにまたがって意識する。その知る作用の過程を支配し、統合、分配、再統合と、個体の意識が知る作用へと定着し、組織的また体系的に発展過程をたどる。すなわち美学の領域へと踏込める所に、この分野が存立する。

思えばなんと偉大な仕業かと改めて知る作用の糸をたぐり、奥深い私達人類の英知に驚嘆させられる。

果てしなく続くこの世界にも、愛と知識があって、存在が可能視される。

およそ美を美と意識する背景に、愛、愛する心、エロスにともなう意識が、美的形成に作用していることを知る。

美にともなう愛も類型的には同じ心的作用にあって、心理的な感覚の知る作用も、パトス的な方向を示す。情緒、情感が伴なう感覚現象であっても、美は視覚的な心理作用として受取められる。

愛は同じ人間動作の捉え方であるが、感情移入によって心理的、感情的、精神作用として、人間の内面に迫る精神作用と見てよい。

美意識も愛の作用があって、より鮮明に蘇がえってくる。愛のもつ構想も美的な場合と同様に、精神作用の一つである。内奥に秘める人間感情、情緒性に通ずる物として把握出来る。

芸術的に解すればエロス、エロチカとして表現される。人が美しい物を見て私の物にしたい意識は、愛・愛情表現においても変わりはない。

このような心理を知る作用は、パトス的な形而上学、すなわちパトス的な心情として形式面でなく内容面で、心理学的な思惟に依存する。

愛ありて、本来の美意識も存在感を示す。従って美は愛であり、愛は美でもありえる。

美的感情は視覚的に捉え得るが、愛は精神的な内面の美である。すなわち私達の意識に残る内奥の心的働きでもある。

美意識には様々な意識表象がある。今述べた如く、美術工芸、彫塑と芸術的表象もあれば、愛の如くより精神的な内面作用をともなうものもある。

能、狂言、文楽、人形浄瑠璃、文芸、音楽、古典芸能など、現れ方は異なる。

パトス的な形而上面、心理、心情の吐露においては同類のものとして、体系的、組織的な学の周辺に介在することを、認めることが出来る。

これぞ美の創造であり、美学を知る作用のステップと言ってよい。

（つづく）

透明な時間（六）

宅見勝弘

【前号までのあらすじ】

東西銀行赤坂支店の金庫室の中で竹森は目覚めた。竹森は何者かに殴打され、気絶していたのであった。隣に熊本支店長の撲殺死体が横たわっていた。犯行現場の金庫室は、格子扉がシリンダー錠で、耐火扉がダイアル錠とシリンダー錠で、通用口が数字錠とシリンダー錠で施錠された、五つの鍵による二重の密室であった。しかも、二つのシリンダー錠の鍵は死体の手の中に握られていた。火災報知器が鳴っていることで、沢木雅子・草津史郎・鹿田係長の三名が支店の通用口を開錠して、赤坂支店に入った。鳥居副支店長を含む四名が金庫室を開錠して、支店長の撲殺死体と竹森を発見した。

竹森は退院後、支店長の葬式に出かけた。支店長の義兄の波戸田元建設大臣が喪主の代りを務めていた。

（東西銀行は、草食系の東城銀行と肉食系の西都銀行が合併して、誕生した銀行である。熊本支店長は旧西都銀行から旧東城銀行の赤坂支店に赴任していた。）

四（続き）

支店長の娘は悲しむ様子も無く、ただ不機嫌そうに突っ立っていた。

先日の懇親会でも「早くデザートを持ってきてよ。パパの新しい職場は気が利かないわね」と言って、同じテーブルに居た竹森たちを二重顎で扱き使っていた。

娘の我儘な命令に部下を従わせることで、支店長は自らの偉さを家族に誇示しているようであった。

だぶついた腹と焼けた顔から、赤坂支店の行員の間では、娘を『チャーシュー』と呼んでいた。ラーメンの具のチャーシューである。ハワイ出身の力士に似ていると、『どすこい』と呼ぶ者も居た。

赤坂支店の竹森の同期がチャーシューに一目惚れされた。彼は支店長から娘の恋心を伝えられて、「罰ゲームですか」と答えた。結局、彼は断固拒絶したため、地方の

支店へ飛ばされた。

波戸田議員は話を終えると、妹の喪主に発言を促した。

「葬式の香典は、故人がお世話になった団体に寄付させていただきます」

夫人はそう言って団体の名前を挙げた。その団体が波戸田議員の政治団体だということは竹森も予想ができた。

「相変わらず、やり口が汚ねえな」

周りから舌打ちとともに独り言のような声がした。

香典返しをして余った金が有れば、どこに寄付しようが遺族の勝手である。しかし、香典返しをしないで、香典を全て身内の懐に入れるのは、道徳的に問題が在るのでないかと竹森は思った。

竹森自身は香典返しをされる金額を払っていない。義理で来た人にとっては、不愉快だろうと思った。

居心地が悪く早々と焼香を済ませて、竹森は斎場から立ち去った。葬式からの帰途、竹森は雅子のことを考えていた。

雅子は竹森と同い年といっても、高校を卒業して銀行に就職している。一浪して大学を卒業した竹森よりも五年先輩になる　女性行員の間ではリーダー的な存在で、パート勤務の人や後輩の指導を任されている。

雅子が頭の回転が速く、行動力が有ることは支店の中でも定評がある。思い切った行動をし過ぎ、失敗も有る。

草食動物と揶揄される東城銀行であったが、女性は肉食動物的な、男性より積極的な銀行員が多かった。雅子も男性に臆せず主張する性格である。

恋愛に関しても、草食系男子の竹森を肉食系女子の雅子が積極的に好意を表現して、リードしている。

雅子は赤坂支店で欠かせない人材であり、本人も結婚後も仕事を続ける意志を持っている。もし、竹森と雅子が婚約したら、竹森が転勤することは明らかであった。

旧東城銀行の支店であれば良いが、旧西都銀行の支店の可能性がある。旧東城銀行は首都圏に店舗が集中しているが、旧西都銀行の支店は関西中心である。

竹森自身は上司からの評価が悪いのを自覚していたから、旧西都銀行の大阪の支店に飛ばされるかもしれなかった。新婚から単身赴任になるのでないか、と竹森の妄想は膨らんでいった。

雅子の支店での悩みを竹森はよく聞いていた。例えば、銀行での人間関係の相談が多かった。

入社二年目の女性行員が振込入力のミスをした。現在はパートだが、二十年の経験のあるベテランの女性が「あんた、高給取りなんだから、しっかりしてよ」と言ったそうである。その翌日から、二年目の女性行員は鬱病と診断され、出勤できなくなった。

そのような相談を受けた竹森は、雅子に具体的な助言はできなかった　しかし、耳を傾けて話を聴くだけでも雅子は心が落ち着くということであった

五

熊本支店長の辞令が発表されたとき、赤坂支店の一部の行員は恐怖で顔が引きつったという。西都銀行で『将軍』と渾名された熊本支店長は、旧東城銀行の間でも有名で恐れられた存在であった。

竹森の先輩行員は「草食動物の檻に獰猛な肉食動物を放つようなものだ」と言った。

合併前の銀行の象徴的な支店に、合併前の象徴的な支店長をお互いに赴任させるという荒療治が行われた。経営陣の首脳が決定したものであるが、西都銀行側の要求が通ったものと言われた。支店の現場の多数意見を無視する形で強行されたものであった。

熊本支店長は西都銀行の中でも肉食系の代表的人物と言われていた。外見も、学生時代に相撲部で鍛えたという優れた体格を持っていた。死後に糖尿病と知らされたが、太っているだけに貫禄も充分に備わっていた。

相撲部での稽古の痕と思われる潰れた鼻や耳も、相手を圧倒する威圧感を与えた。

熊本支店長は『千億越えの支店長』という異名も持っていた。過去に歴任した四つの支店の内の初支店長の店舗を除き、在任中に三つの支店の融資残高を一千億円以上にした実績があった。

熊本支店長が赴任する支店は、旧西都銀行では常に全国的にも上位十位の成績を挙げていた。批判的に言えば、非常に高い営業成績を挙げていながら、転勤の度に規模の小さい支店に転勤になったことになる。

それには色々な事情が在ったようである。営業成績の悪い部下に暴力を振ったこともあり、部下の定着率の悪さが全国一と言われていた。

また、顧客からの苦情も全国一という噂であった。ただし、苦情の多くが財務内容の悪化した企業に対する貸し剥しであったので、西都銀行の中では逆に評価されている。

もっとも熊本支店長が突出していただけで、似たような性格の支店長は西都銀行に多かった。旧西都銀行の支店長から過剰な部下指導や過剰な営業推進をしていて、合併後に表面化して辞職を強いられる者が出てきた。

その中で熊本支店長は残り、人事異動で旧東城銀行の中でも規模の大きい赤坂支店に栄転したのであった。

赤坂支店は融資金額が二千億円に近く、旧東城銀行の中では本店営業部と同様な扱いをされていた。金額だけで比較すると、旧西都銀行の子会社である地方銀行の総融資額とほぼ同額である。

取引先が上場企業や官庁・自治体などが多く、他の支店と異なる金融取引があることから、全国的なノルマの対象から外されていた特殊店舗であった。

赤坂支店は高度な金融知識を要求される支店であったが、働き甲斐の有る支店と言われていた

赤坂支店は十数年間、融資残高が千六百億円から千九百億円までの前後で推移していた。過去にも二千億円を超えそうになったが、支店の取引先が特殊なので、無理な融資をして伸ばそうとしなかった。

過去の支店長も保守的な東城銀行の中でも、特に保守的な傾向の強い人が歴任している。

前任の守屋支店長も旧東城銀行の性格を代表的に象徴している存在で、熊本支店長と全く対照的であった。

守屋前支店長は江戸時代の藩主の子孫ということで、『殿様』と陰で呼ばれていた。皇族とも縁があり、皇位継承順位で百数十番目という話を竹森は聞いたことがある。いかにも家柄の良さを思わせる鷹揚で温厚な性格と顔つきをしていた。

守屋支店長は本部と海外勤務がほとんどで、国内の支店経験は入行した店舗と赤坂支店だけである。

酒も飲まずゴルフもしないので、取引先との接待も最小限のものであった。営業時間中も取引先に出向くことがほとんど無かった。

取引先が支店長と会いたい、というと大騒動になった。融資の要請か、あるいはトラブルでもあるかと考えて、支店長と会う真の理由が判明しない限り、支店長は取引先と会うことは無かった。

決裁権限の有る支店長が直接に一人で交渉することは会社組織として機能していないという持論を守屋支店長は持っていた。

実は、支店での経験の乏しい守屋支店長は、過去に安易な口約束をして取引先と問題になったことが有った。それで一人で取引先と交渉することはしないようになったのである。

実際に訪問する際には、営業担当者と営業課長、融資課長、副支店長を引き連れて行くので、『大名行列』と言われた。しかも、『露払い』として、支店長の訪問前に融資担当者は、どのような話をするか聞き出し、訪問日の前日までに報告する必要があった。

その守屋支店長は旧西都銀行の大阪の支店に転勤することになった。

大阪市西部に治安の悪い支店が正三角形に点在していることから、『魔の三角地帯』と呼ばれている、その最大の一角である。来店客が窓口まで自転車に乗ったまま来るという話を西都出身者から竹森も聞いた。

他の全ての都市銀行の支店が既に撤退した後で、周辺に都市銀行が無くなるからと財務省から店舗の廃止を許してもらえないという話であった。

「可哀想に。お殿様にはバミューダ海域での舵取りは勤まらないだろう」

赤坂支店の行員から同情の声もあった。もともと旧東城銀行でもトラブルが多かったことから、遭難の多いバミューダ海域と例えて、撤退して空白地帯となっていた。

守屋支店長は順境には能力を発揮するが、逆境に弱い支店長という一定の評価があった　その守屋支店長にとって試練の異動で、本人も左遷と言っていた。

慎重な方針に徹した支店管理は、不良債権の発生を抑えていたのは事実であった。しかし、融資金額全体が減少して、一千五百億円まで減少したのであった。

熊本支店長は赴任した当日に、「半年以内に二千億円は突破する」と宣言した。

赴任して引き継ぎの合間に、熊本支店長は自ら新規開拓を進め、一ヶ月で新規融資先三社と融資契約を結んできた。その内の一社が持井建設である。

前支店長の三年間の在任中で一億円以上の新規融資取引は全く無かった。

熊本支店長は既存の取引先にも精力的に融資を拡大していった。融資係が取引先と電話をしているのを、横で聞いて、途中で受話器を支店長が奪い取ったことがあった。その場で今から行くと言って一人で訪問し、三十億円の融資案件をまとめて帰ってきた。

「殿様だと三ヶ月かかった案件を、将軍はたった三時間で決める」

取引先には支店長の交代で喜ばれることも増えたが、銀行内では悲惨な情況に変わった。熊本支店長が赴任してから、支店の雰囲気が異様な緊張感に包まれるようになった。

以前の営業会議では時折は笑いも溢れる、お互いに助言を与えるような雰囲気であった。

守屋前支店長は部下の挙げた貸出の案件などを頭ごなしに否決することは無かった。案件に問題が在っても、質問を投げかけて本人に気付かせるという態度であった。

営業会議は営業不振者を吊るし上げにするための罵詈雑言を浴びせる場に一変し、『公開処刑場』と化した。

支店長が自ら営業成績を挙げているので、誰も反論できなかった。旧西都は支店長の他に二人だけだったが、営業会議で二十名以上いる旧東城の行員は沈黙していた。

熊本支店長本人が直接に人選した二人の西都出身の行員は、旧東城の行員よりも営業成績が上回っていた。

しかし、決算内容の悪い企業への無担保の融資案件が多かった。石橋を叩いても渡らない東城の行員では、以前は決裁することの無い案件である。

竹森の他の融資係も承認しないと支店長に殴られるので、嫌々ながら承認していたのである。

熊本支店長ら西都出身者は、回収不能見込み分を金利に上乗せして貸せばよい、という発想であった。

本部承認の不要な支店長決裁の案件の割合が多くなった。そのため、融資金額も過去の融資残高と合わせると、九千数百万円や二億九千数百万円、九億九千数百万円というような歪な金額が目立っていた。

ノンキャリで首が長持ちする方法

本郷・岐阜編

中山喬央（たかひろ）

本郷支店

新米代理のスタートは「本郷も〝かねやす〟までは江戸の内」という諺が人口に膾炙している、そのかねやす商店のある本郷三丁目交差点から、本郷通りを二百メートルほど神田・御茶ノ水方面にくだったところにある本郷支店だった。

大正九年十二月に安田貯蓄銀行本郷支店として開設された当店は、そのまま日本貯蓄銀行・協和銀行となり、昭和三七年四月新築開店して面目を一新、業績が伸展過程に入っている将来性豊な店舗であった。

前に勤めた早稲田支店が神田川沿いの低地に立地していたのに対し、この店は白山方面から神田・御茶ノ水へと伸びる舌状台地の中心部にあり、東側には湯島の坂、西側には春日町・後楽園に下る坂がある。医療器械・出版等で日本を代表する優良企業群の他、技術面で抜群の優秀さを秘める中堅企業も存在、加えて東京大学関連の各種取引も期待しうる銀行店舗としては遣り甲斐のある場所にあった。

ちなみに昭和三七年当時早稲田大学は学生数四万人で、年間予算規模24億円であるのに対し、昭和四一年の東京大学は、学生数一万三千人、お金の動きは一日五千万円、年間では180億円に達するといわれ、文字通り日本の頭脳の中心であったから、本郷の地は将来性が豊で多様な経済活動が期待できるところであった。

支店長代理として、初めてしなければならない仕事に金庫の鍵番があった。当番になったら、この鍵は肌身離さず所有し、銀行の営業開始時間は法律で午前九時からと決まっているので、どんなことがあってもその時間前には本金庫を開扉し、営業が出来るようにしなければな

らないのである

当然出勤時間は、通勤途上での事故による電車の停車時間を計算しなければならない。筆者が利用していた中央線は今も昔も人身事故が多発する有名な路線であるから尚更である。当然人身事故発生時の電車停車時間四十分以上の余裕をみて、出勤する必要がある。

このため出勤は一時間前の午前8時を心がけた。これで助かったことが一度ある。それは人身事故ではなく、中野駅でタンクローリー車が爆発事故を起こし中央線が停まってしまった時のことであった。咄嗟に車中で荻窪から地下鉄丸ノ内線を利用すれば、時間に間に合う。まだラッシュがおきていない時間帯だから、十輌編成二分間隔運転の中央線からでも、三分間隔八輌編成の地下鉄丸ノ内線始発電車への乗り換えは即出来るだろうと判断し実行した。

車内は同じ思いの通勤者が殺到し大変な混雑となったが、あまり遅れることなく店に出勤し金庫を開けてほっとした。気がついたらYシャツにべったりと口紅がついていて、女子行員に注意されたのである。

昭和四一年一月着任した本郷支店は、I支店長、Y次長が上司としておられ、先輩代理諸氏を含め、皆から役席としての様々なご指導を頂くのであるが、なかでもY次長は前任が京橋支店外部担当代理で、直接仕えた間柄であり、結婚式の司会までしていただいた方であった。仕事は当初、預金・為替等内部事務担当代理の補佐役としてスタートした。

間もなく新入行員が配属され、そのなかにM君という東北地方の大学を卒業した異色の人材が、普通預金係として仕事を始めた。

時を同じくしてY次長は東北H支店支店長として栄転され、後任にT大卒のM次長が着任した。

新入行員のM君には傍若無人なところがあり、これでは先輩代理からいじめられるのではないかと怖れ、あたら有為な人材を逃がすようなことがあってはならないと、聡明なM次長に相談し、どの程度できる奴か試してみることにした。

そして丁度普通預金新規口座開設数が、前年同月を下回っていたので、その原因調査を命じた。

その分析結果は見事なものであった。彼は結論として前年同月は特定分野の口座数の開設が多かったが、店の将来の基盤となるような顧客層の口座開設数は順調な増加傾向を示しており、懸念材料はないとするものであった。

この報告内容をみてびっくりした。顔に似合わずとても綺麗な字で理路整然と書いてある。出来る奴だと思った。そして先輩代理にもそれとなく彼の優秀さを説明し、態度は大きいが、我慢して有為の人材を失う事のないよう、指導して欲しいとお願いした。

又、内部役席は役席同士で、互いに助け合わないと事務がスムースに処理できないことから、暗号電報の再鑑、振替違算の検出等、積極的に事にあたり、先輩代理の事務負担軽減に努め彼等との交友に努めた。

内部役席を六ヶ月勤めた後、外部役席に担当替えとなった。

その時、若手の行員でA・Iの両氏が同じく支店長席として外部活動に従事してくれる事となった。

そして業務推進部がモデル店舗に指定した協和銀行発足あしかけ二十周年記念預金増強運動に取り組む事となる。店の基盤は如何にして純預金者層の安定的な預金を増強するかにかかっていると考え、支店長席と相談のうえ、定期預金残高を減らさない運動をしようということになり、日々全員が一致して努力を継続した。気がついたら、個人預金の年間増加額順位が、全店舗中で100番以上順位が向上していた。

これには新に配属されたA・I両氏が大変優秀で、新規の顧客層を拡大してくれた事も大きかった。

前述の新入行員M君からは、支店全行員打ち合せ会の際「新任外部役席は頭は悪いが一度言ったことの遂行力はあるようだ」との発言を受けたが、言いえて妙だと不思議に彼に対する悪感情がわかなかった。

この直後、新米代理としての最初の試練に遭遇する。

部下行員の公金使い込み事件である。

直前の人事異動で一年後輩のA氏が、支店長代理に原店昇格し貸付担当代理となっていた。

彼が或る日、「中山さんおかしいですよ」といってS支店長席が、集金していた先が当日預金担保借り入れに差し入れた預金通帳と元票をみせた。残高は合せてあるが、入金の日が違う。かって浜松支店在任当時取扱った外務員による公金横領事件と同じ手口である。

即、M次長に報告、Sが帰店するやいなや、支店長室に閉じ込めて詰問した。彼は頑強に否定したが、I支店長の指示により、彼のロッカー・机の鍵をすべて預かった上で一旦帰宅させることにした。

あとは徹夜で彼の担当顧客の元帳による入出金状態チェックである。不審なものはすべて調査票に書き写し、始発電車が動き出したのでYシャツを着替える為に一旦帰宅し、午前七時半頃から彼の顧客層を回って、何件かの元票、通帳の残高不一致を見つけ、支店長・次長が出勤すると同時に報告した。

それから支店長次長同席のもと事件全様の解明に努めるのであるが、決め手は、彼の定期券入れから発見された一枚のメモであった。二年間で総額〇百万に達する金額である。彼の家庭環境は、父はいなかったが、ご母堂は大手船会社副社長秘書を永年勤めるキャリアウーマン

てあり、弟さんもW大学の最高学年て名門企業への就職か内定している、みるからに実直そうな学生だった。

結果としては、身許保証人か、金利を含む全額を弁済してくれて、銀行は実損を出さず、退職金がでない依願退職という形で事は収まった。

お客様には、Sは胸の病が再発したので退職したという事で説明して回り大事に至らずにすんだ。

監督責任の譴責処分は、前任のK支店長を含む関係者全員が、賞与一割カットという軽いものであった。

しかし自分としては彼を担当してからの六ヶ月、何故気がつかなかったのか、或いはこの代理はごまかしが出来ないから使い込みはやめようとどうして彼に思わせることができなかったのかという自責の念にかられた。

そして家庭環境に関係なく、金銭の誘惑に弱い奴はいる。そこに恣意に動かす事の出来る金があれば、それを一時流用して自分の欲望を満たす事に対しての罪悪感が根本的に欠如している奴がいるものだ。彼等を見破るのは調子のいい発言に惑わされることなく、彼等の眼つきが濁っていないかどうかで人物を判断するより方法がないとの思いにいたった。

それからは公金費消事故が起こった時は、極力監督責任に問われた人物に、どういう奴がやったのか、どうしてそれを見つける事ができたのかと言う事を聞いて、自分自身の備えを固めるようになっていった。

またこの事件の御陰で、一高・東大卒で経営陣の信頼が極めて厚かった前任K支店長の知遇を得る事ができた。緊急事態に対応する能力が認められたのである。本件が大事に至らずにすんだのは、適切な指導をして頂き、更に本部・保証人等との折衝をしてくださったI支店長とM次長の御陰であるが、顧客との直接交渉については担当代理として全て筆者があたり、全様を逸早く把握して事態を解決したのを評価されたようである。

同氏のご夫人とお嬢さんは共に皇后陛下の母校である日学園出身であり、その後、同学園の近隣に市ヶ谷支店が開設され、同学園トップがお祝に来店された際は、同支店にてホスト役を喜んで務めていただいた。

この店で外部役席として実行したことに、入出金伝票の内容チェックがある。文字通り毎日のお金の動きがすべて記されたものである。

どういうお客様がどのようにお金を動かしているか把握することができる。

そしてこれは店勢の将来を予測するだけでなく、銀行が望まない取引先を摘出し事故を未然に防止することにもつながった。

或る日、23,000万円の小切手入金伝票を見つけた。

口座は殆ど残高がなく、しかも動きもない先である。即、小切手の決済金融機関に当該小切手決済の見込みを

電話照会した。関西地区にあったその金融機関担当役席の返事は、決済見込みは無い、という回答であった。

その地域は手形交換所が無い場所であるから、即決済が出来ない場合は、入金待ちとする、みなし扱いにせず直ちに預金残高不足の不渡り処分にして、当該小切手を返送して欲しいと連絡した。

小切手が返送されてくるやいなや、届け出し住所を訪問、取引印鑑を不渡り小切手受領書に捺印してもらって返還すると同時に、普通預金通帳を回収、入金取り消し記帳をして処理は終了した。

それから暫くして池袋方面の金融機関で、同様手口による金銭詐取事件が発生したという風の便りを聞いた。

当時は普通預金口座開設は原則として無条件で受け付ける商習慣があり、これを利用してこのような詐欺師グループのみならず裏金融、暴力団がらみの口座開設も行なわれており、本郷支店もその例外ではなかったのである。

ここで店舗周辺で開業し、結果として不良先となった取引先への当座預金口座を認め、あまつさえ手形まで渡した失敗談と、どうしてそれが大事にいたらなかったのかを述べる

店舗周辺に居住する方々の人気、あの銀行はよく面倒をみてくれる銀行だという風評維持は店勢の発展を図る上での必須要件である。

特に商業地、住宅地では、そのウエイトが高まる。

当時でも当座預金は普通預金と異なり、銀行側に口座開設の発言権があった。危ないと思われる先は開設を断ることが出来たのである。

しかし営業エリアで新規に商売を始める先は出てくる。本郷支店のような地域では、しばしば発生する。そういう場合、こちらが外訪活動で見つけ、取引を依頼し開設する場合もあるが、中には先方が関係書類を整え来店して当座預金の口座を開設するよう申し出てくる場合もある。その場合は一旦お引取りを願って、こちらから先方の事務所を訪問、取引開始についての是非の判断をすることになる。

この時も先方に訪問し開設事務所内の雰囲気等を観察、特に問題はないとは思ったが、出入する人物の中に、心の片隅にひっかかる男がおり、普通は行なわないのだが、休日に代表取締役が提出した印鑑証明書に基き、彼の自宅調査を行った　その住まいを確認、周辺住人の聞き込みを行なう事によって、代表者個人の信用状態の裏付けを取り、まともな人物だとの思いに達した。

そして商売が成功すれば、その取引メリットに加え、

事務所を貸している大家との取引開拓にも資すると判断し、一部始終を当座預金の担当者I君に話して了解を得、口座を開設、約束手形まで手交した。

ところが筆者が岐阜支店転勤後、商売は失敗し、不渡りが発生したので口座は解約された。ただ手交した約束手形は後任K代理が代表取締役の自宅を訪問、乱発されることなく返してもらうことが出来た。彼は悪人ではなかったのである。後日談ではあるが、とりまきの詐欺師に騙され倒産に追い込まれたということが判明した。

伝票チェックで今ひとつ気がついたことがあった。それは出納印のダブりである。事前に伝票に印刷しておけば、一つ手間が省ける。当時は事務全般について行員よりの提案制度があり、それに従って、総務部提案委員会に提案した。

ところが委員会よりの回答内容を見て驚いた。同様の事務改善をしようと、すでに伝票の開刷手続きに入っており、提案の内容がそれと酷似しているから、貴方はその内容を知った上で提案してきたのでしょう、というものである。憤然と抗議しようと考えた際、思い出したのが前述Mさんより A氏と共に紹介されていた七高同期で当時本部に在籍しておられたK氏である。K氏に事情を説明した所、それはけしからん話だといって、即責任者に申し入れをしてくれた。

それから暫くして、今度は筆者に提案委員会の委員になるよう総務部長より支店長宛、指示書が届いた。

この提案委員は、その後、岐阜支店への転勤が発令されるまで約一年間続く事となり、はじめて新丸ビルの本部機構に出入する経験を積むことができた。

このK氏との交流はその後も長く続く。特に市川支店長をしておられた時、店の営業エリアに優良学校法人が数多あるので、同行訪問による取引開拓交渉をお願いしたところ、快く引き受けていただき、幾つかの優良学校法人の取引を開始することができた。

この市川支店はその後も歴代出色の支店長が赴任され、引続き学校法人の取引に尽力していただいたので、見事な花を咲かせることができたのである。

岐阜支店

岐阜支店に着任したのは雪が降り積もる、まるで北国のような風景の下であった。

電車で30分足らずの名古屋とは、全く天候が異なることがある。新幹線が関ヶ原の雪で冬期はしばしば遅れるのであるが、地元では関ヶ原で1mの雪が積もったら、垂井では50cm、岐阜では10cm、しかし木曽川を渡った一宮は曇りで名古屋は晴といわれている。

時は昭和四三年一月末、本郷支店で丸二年間勤務した後だった。

最初の担当は貸付で、優秀な男女の行員が配属されていて事務については心配ないと思ったから、早速お得意様の内容把握とか地域の経済情勢等、情報入手の為の外訪活動に専念することができた。

特に融資先を訪問して先方で話を聞くという事は、店で交渉すると違って、お得意様優位の場所であるから、この方がその後の取引が円滑に進むと考えた。これは京橋支店貸付係としても一定の成果を収めることが出来たと考えていた手法である。その一方で浜松支店での経験から、地方独立店舗では、それなりにしっかりした経営をしている企業数は限られており、先方が無理な要求だと思えば、ひそかに地元金融機関とか他行に融資肩代わりを打診され、全面的に取引を解消される恐れがあるとも思ったからである。

また東京風を吹かすと総スカンを喰うところだとも教えられて来た。

「考えておきましょう」といわれたら、東京では「やってくれる」と思ってよいのだが、此処では違う。喧嘩別れをしたくないから、表面は穏やかに、こちらの要求が無理だといっているのである。

また地元の人からみれば、我々転勤族はどうせ美味い事をいって業績があがれば、それを踏み台にして、はいさよなら、ということになるとも考えられていると思っていた。

その一方で融資先が倒産した事もあった。早速債権の保全を図る為、様々な法的処置をとらなければならない。その時良き相談相手になってくれたのが、母店である一宮支店の、同じく融資役席をしていたS代理である。31大の彼とは、不思議な縁があって、先ず小生が入行した浜松支店で独身時代を共にし、その後こちらが京橋支店に勤務していた際、隣の八重洲通支店に配属され、富士写真フイルムを担当していた時、S写真用品の融資担当としてフイルム業界の情報を色々教えてもらい、これを富士写真の財務担当スタッフとの交渉時にも大いに活用させてもらった事がある間柄であった。

そしてほぼ同時期に一宮・岐阜という又隣接店の代理として発令され貸付を担当していたのである。

S代理には不良債権発生の件は、一宮支店F母店長には、何れ時期がきたら岐阜支店K支店長が話をするからそれまではご内分と依頼し了承された。

彼はこの約束を忠実に履行してくれた。

更に筆者が業務渉外部で学校法人を担当している際、宗教法人を担当する等、不思議な縁が続く。

その後も永年に亘りご厚誼をいただき、先日も50年振りの浜松支店の集いを企画した所、遠方から馳せ参じて

くださり、会の雰囲気を大いに盛り上げていただいた頭の上がらない存在である

岐阜支店の勤務は昭和46年10月までの三年八ヶ月に及ぶのであるが、特に女子行員には世話になった。内部の事務処理がきちんとしていなければ、外に撃って出て新たな顧客を獲得することなどできはしない。

協和・岐阜会は永年にわたり女子行員が自主的に年度別に幹事を定め、年一回、会食若しくは一泊旅行を実施している。今年の6月は越前までの一泊旅行で、翌日はパターゴルフまで企画されており、大いに若返る事が出来た。

また当時預金総合オンラインへの移行をスムースに進める為の、国内為替業務全店テレタイプは設置が完了しており、その事務手続きコンテストにおいて、岐阜支店の女子行員MさんとHさんが、それぞれ全国一位と二位に入り、その卓越した事務処理能力は行内に鳴り響いていたので付記する。

尚その旅行に参加した際、家族寮として利用していた一宮馬寄の、今は「ナビハイツ今伊勢」となっている建物を懐かしく見てきた。場所は名鉄石刀駅で下車、193号線を東に進み、190号線との馬寄交差点を入った直ぐの処である。

貸付担当を約半年勤めたところで、K支店長から外部をやれと命ぜられた。

昭和43年6月のことで、7月に迎える協和銀行発足二十周年運動で、業績を飛躍的に向上させろという指示である。

幸いにも当時の岐阜支店には大変なフォローウィンドが吹いていた。

S頭取、I副頭取をはじめとする経営陣が相次いで訪れて下さっていたのである。

S頭取には来訪時に、岐阜相互銀行の経営陣の接待をしていただき、先方から深謝された。これがその後の業務提携交渉に大きく反映されたことは言うまでも無い。

また営業時間終了後の岐阜支店全行員の打ち合せ会にも参加していただき、行員と同じ食事をしながら、女子行員を含む、様々な分野の行員と懇談され、その士気高揚に努めてくださった。

I副頭取は、N銀名古屋支店長時代、岐阜の金融界・財界より、厚い信望が寄せられていたのに加え、なんとH岐阜県知事とは、小学校の同級生で、碁仇という間柄であったから、それを手掛かりとして岐阜県庁、岐阜市役所をはじめとする、官公庁出先機関との取引開拓深耕に役立てることができた。

また外部役席となって間もなく、岐阜県のトップ企業、S運輸の開拓をK支店長から命ぜられたが、これはK支店長がI副頭取と同社T社長との親密な間柄を知ったうえでの指示だった。

同社への訪問を開始してから間もなくI副頭取が来岐された際は、夜は岐阜県H知事の接待、翌日は十六銀行をはじめとする地元金融機関及び商工会議所のトップを軒並み訪問され、最後にS運輸にも行っていただいたが、その時は案内役としてK支店長と共に同行した。勿論事前に先方に日時は連絡しておいたので、実質的財務面最高責任者である社長の弟さんT副社長がT経理部長と共に応対され、その席上T副社長から、同氏の令嬢がD印刷K社長の令息との結婚が決まったところであり、式に是非T家側来賓代表として出席して戴きたいとの依頼がなされ、I副頭取も快諾された。

この場所には実務者T経理部長も同席していたから、間違いなく協和銀行を経常取引行に参入させる社内稟議を提出すれば、経営陣は喜んでこれを認めるという判断をしただろうと思った。同社は将来性豊な優良企業であり十六銀行本店営業部をメイン取引行としていたが、富士銀行は名古屋支店で、住友銀行も取引店を尾頭橋支店から名古屋支店に移管して取引強化に狂奔していた。

しかしこれだけトップ同士の信頼感が醸成されているのだから、従来通り継続訪問すれば新事業を企画し新規の銀行融資を必要とする際、間違いなく当行に声がかかり、経常取引行に参入できると判断した。ローマは一日にして成らず、大事を成し遂げるには天の時、地の利、人の和の三つが必要であるが、これで、地の利と人の和ができた、後は天の時を待つだけだと思った。麻雀でいえばリーチをかけることが出来たのである。

これから約二年後にS運輸と協和銀行との取引は実現し、それは「りそな」と行名を改めた現在でも名古屋支店で継続されている。

これが自分にとって二番目となる大口新規取引先獲得となった。

話は変るが岐阜支店で最初に仕えたK支店長は、その後業務推進部次長として栄転され、後任として和歌山支店長だったH氏が赴任された。

相も変らず外訪活動に飛び回っていたが、新支店長はじっと見守っていてくださった。

この頃突然顔見知りの関西系都銀の外部役席だった人物が異動の挨拶に見えた。

話を聞いて驚いた。四十代の彼が早くも関係会社に出向を命ぜられたというのである。その理由が、JCBカードの取り扱い加盟店に関することだというのである。

話をもとに戻す。協和銀行は昭和43年6月JCBに資

本参加をし、カードの取扱を開始した　その通達が本部から来たのが丁度筆者が外部役席になった時であった。早速店舗周辺にある柳ヶ瀬の商店街を回ったが、加盟料がネックとなって、全く交渉は進展しなかった。

そこで発想を転換し、国際観光都市を標榜する岐阜にふさわしいデパート、一流ホテル群に的を絞り、新規開拓の武器として軒並み訪問を実施した。そして目途がついた先から、地域担当の支店長席と同行訪問し、結果的には、岐阜・大垣両地区にある主要な先は全てＪＣＢの取扱店に加盟させ、その口座開設に成功したのである。

筆者にとってはこの活動により、年長者も複数いる支店長席からの信頼を獲得し、優良企業取引先の基盤拡充につなげることができたのであるが、反面立ち遅れた為に手も足もでなくなり、その責任をとらされた人物を生じさせていたのを知ることになったのである。

またこんな事もあった。ある金曜日、連休を前にして外回り全員での飲み会が急に催されることになり、その後が麻雀会となった。とうとう名鉄の終電時間はすぎた。しかし所帯持ちを含め誰も痩せ我慢をして自宅に連絡をとらないのである。こうなれば小生も一蓮托生である。

明朝帰ったら、幼子二人をかかえた家内は身支度をして待っていた。来訪していた家内の母共々、小生の評価は暴落、益々頭が上がらなくなった。

そして転勤後二年目を迎えた秋、思い立って高山へ家族旅行した。紅葉のシーズンであり、家内もこれには喜んで、「何時転勤してもいいわよ」といってくれた。

原店昇格

ところが突然予想だにしない人事が発令された。

なんと岐阜支店次長を拝命したのである。

時は昭和四五年一月、転勤してから二年たっていた。

直ぐに試練に出会った。支店長席が交通事故を惹き起こしたのである。加害者側に銀行が立たされたのである。折悪しくＨ支店長は役員と共にお客様の接待にあたっておられたので、全て自分の判断で、年長者を含む役席全員に対応を指示しなければならない。

この時思い出したのが、かって前任店で、行員の金銭横領事件が発覚した際のＭ次長の冷静な対応と指示だった。咄嗟に彼ならばどのような判断をするだろうかと考え、事務行員には通常事務が終ったところで、全員帰宅してもらい、役席にはそれぞれ役割分担を与えて活動してもらった。

筆者は最も肝要と思われた、名古屋近郊の被害者宅へのお見舞いを手土産持参で行い、深夜一部始終を支店長に電話連絡をし、了承を得た。

又銀行本部の担当部署にも即連絡したが、そのポスト

の責任者が、早稲田支店で早稲田大学担当を引き継いだＹ氏で親身になって相談にのってくれ、適切なアドバイスをいただき、営業店として一切責任をとらされるようなことはなかった。また事故を起こした行員に対する警察の処置も軽いもので済み、すべては大事にならずにすんだ。

これは本部担当者が旧知の間柄であったという運の良さもあったが〝運も実力のうち〟の諺通り、この事件発生による新米年少者上司の初動対応を見て、年長者役席からの反感はかなり鎮静化したようであった。

次長になって何が変ったかというと、お客様の対応である。次長は銀行協会の会員であるから、経営者の一員であることを主要企業の経営者全員が認めてくれる。それだけに一挙手一投足に対し厳しい眼が注がれることになる。

Ｈ支店長は未熟な小生にやりたいようにやらせてくれたから、益々責任を感じ、日頃本など読んだ事もなかった筆者も、よく本屋に行くようになった。

そこでしばしば御目にかかった方は、自治省から岐阜県へ出向されている人物であった。目と目で挨拶するだけであったが、以後県庁でお話させていただく時は、より親近感を以って対応していただいたような気がする。

勉強の内容は当時金融マンとして最も必要だと考えた、外国為替の知識、あるいは事務の電算処理等に関するものであった。

これに先立つ昭和四四年九月、協和銀行は永年の宿願であった外国為替甲種銀行に昇格し、その一方で昭和四五年八月に完成する預金総合オンラインシステムに向かって全行員を対象とした様々な教育訓練を実施していたが、これらについては、地元経済界・金融界からも注目されており、経営者と会って話す話題として最も適したものだと考えたからである。

要は先方がニーズのある知的サービスをしながら、親しくなり、やがてはそれを取引に結びつけようとするものであった。

昭和四六年五月に協和銀行は篠原頭取が会長に就任され、色部副頭取が頭取に就任する。

そして従来のピープルズバンクに加え国際商業銀行として歩むことになる。

これと合呼応するかのように、昭和四六年八月十五日、ニクソン大統領はドル防衛策を発表、八月二七日、日本政府は変動為替相場制に移行を決定し、翌二八日実施する。

そして昭和四六年十二月スミソニアン博物館にて行なわれた一〇カ国蔵相会議により、多国間通貨調整は決着

し一ドル二八円、金一オンス三八ドルで合意したのである

このような経済金融情勢激変の最中、岐阜支店の次長として成すべき事は、浜松支店同様、地元経済界からの信頼感醸成による、地元優良企業群との取引拡充すなわち、経営者個人の取引開拓深耕と優良企業の取引拡充にあると考えた。そしてこれを成し遂げる為には、要塞を攻めるのと同様、いきなり歩兵である支店長席を突撃させても無理で、肩書きを持つ、いわば戦車とか飛行機の役割を持つ次長自らが事に当り、一応の目安をつけてから彼等に協力してもらい事に当たるしか方法が無い事に気がついた。

これは、後の業務渉外部時代に、営業店とタイアップして学校法人の取引を開拓する際の、筆者行動の根幹を成すものとなった。

当時は幸いな事に事前申請により、支店が増やした預金の一定割合につき、優良先について申請すれば融資枠を認めるという制度があった。

これを利用して数社以上の多額継続納税企業をリストアップし、その中から財務資料が入手できた先の申請を行い、かなりの先に付き融資枠の内承認をとり、アタックした。

幸いにも外部担当代理と次長を通じ、三年間に亘り、開拓交渉を継続実施した先もあり、新規取引の実績が挙がるようになってきた。

永年の懸案だったS運輸からも遂に話が来て、当時バランスシート外部非公開の同社であったが、T経理部長自ら内稟議書の作成に手を貸してくれて本部承認をとることが出来た。そしてH支店長の判断により名古屋支店での取引と言う事となり、全て円満に取引開始の運びと成った。

一方経営者の個人取引についても、外部役席となって間もなく、自動車の運転免許を取得するようK支店長から指示され、それまでの原付125cc免許が、普通自動車と7半自動二輪のそれと変り、休日にはK支店長を軽四輪に乗せて、経営者宅を訪問していたので、企業より役員賞与・配当が支払われる時期に支店長席に指示して勧誘させ、場合によっては同行訪問して効率よく預金を獲得することができた。

この事によって、厳しい対応に反感を持っていた支店長席からも、幾分見直されたようである。

行員の人事管理というのは難しい。基本的に弱い人には、例えば10点満点として、3の能力しかない人には、彼が4の仕事をすれば誉めなければならず、8の能力を持っていると思われる人物が7しか仕事をしなかったとすれば叱らなければならないと考えていた。

しかし7と4では大きな差がある。何故7の仕事をして叱られたのか、それを良く理解してもらえないと、反感を持たれてしまうのである。

このような試行錯誤はあったが、JCBの取扱加盟店手数料が無料になったとの報が入った時は、即店周柳ヶ瀬商店街を訪問し、かって断られた先を廻ったところ、気持ちよく全店で即、JCBに加盟し、口座を開設してくれた。これはいけるという事で、後は支店長席が帰店するやいなや、全員に分担区域を定めて勧誘してもらった。成果は上々で全員で喜びを分かち合い、名古屋から業務推進部の最高責任者が、急遽来店し、支店長席全員を誉めて下さった。

まだまだこれからだと思っていた時、知り合いの名古屋支店次長から突然電話が入った。その声がはずんでいる。用件を聞いたら、晴天の霹靂、筆者が八重洲通支店の次長に発令されたというものであった。

この本郷・岐阜両店では、概ね三人の支店長に仕えたが、お二方とも交流が長く続いた　そして陰に陽に未熟な小生を支えて頂いたのである

社　告（内規）

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同士の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共行の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二

加入者名　まんじ

追伸 ―サウダージ― より その五

松下壽男

「きつねのおきゃくさま」

私はくろくもやまのおおかみを
迎え撃とうと息巻いていた
あなたは私の無理な注文にも
いつもの笑顔で応えてくれた

あなたは人に私のことを
監督のようだと話していた
私はあなたがダバディに
なって欲しいと願っていた

実は例のお話に、あなたは登場してこない
あなたはきつねにとってみて、うさぎでも
あひるでも、ましてひよこでもないのです

私が勝手に夢想した筋書きを
あなたはどんな思いで演じていたのか
くろくもやまの女神様

日本近代文学点描 その六

松下壽男

自棄の自覚

♡新宿の歩道の上で、こぶしほどの石塊が
のろのろ這つて歩いてゐるのを見たのだ。石が這つて歩
いているな。たださう思うてゐた。しかし、その石塊は
彼のまへを歩いてゐる薄汚い子供が、糸で結んで引摺っ
てゐるのだといふことが直ぐに判つた。
子供に欺かれたのが淋しいのではない。そんな天變地
異をも平氣で受け入れ得た彼自身の自棄が淋しかつたの
だ。

昭和十一年に出版された太宰治の最初の小説集の題名は「晩年」でした。その時彼は二十七才の青年でしたが、すでに二度の自殺を試みていました。余生という言葉が同義語に当たるのでしょうか、晩年とは、彼にとって年齢ではなく心理の表現だったことでしょう。

太宰治の青春と宮沢賢治の青春との間には類型的な共通点が潜んでいます。今以上に格差が激しい東北地方の生まれであったこと。地方で有数の資産家の子供であったこと。病弱であったこと。勉強がよくできたこと。治安維持法下で非合法の政治運動に関わり取り調べを受けていたこと。そして何よりそれら全てのことを自らの問題と受け止めてそれを言葉で表現し尽くそうとしたこと、すなわち文化の自覚を試みた文学者であったことです。

「晩年」の冒頭は「葉」と題された断片集です。しかもそれは、太宰治自身の説明によれば、未完成の作品の断片ではなく、完成した小説からの抜粋を集めたものだというのです。となると何と様々な実験を試みたことでしょう。しかもその実験は、宮沢賢治同様の疎外状況に置かれた不

安定な居心地の悪い文化の中で、賢治とは違って自棄になって行われていたものでした。

冒頭の「石塊がのろのろと這って歩いているのを見たのだ」という表現は、賢治の童話のようなファンタジーの入り口になる可能性ももっています。もし作者が石塊を引摺る子供の文化に同化する道を選んでいたら、天変地異をも平気で受け入れ得た彼の感性は空想の翼を広げて羽ばたいていたのかもしれません。

実際「晩年」の中にも、民話のような「雀こ」や夢物語の「尼」（「陰火」中）などの作品群が、ほのぼのとした光を放っています。そして何より太宰治が「走れメロス」の作者であったことを忘れてはなりません。彼は、現実を見る時も夢を見る時も、新美南吉がそうであったように、子供のような誠実な眼差の持ち主でした。

太宰治の実験は、誠実な眼差を研ぎ澄まし、文体に体現させていきます。しかし挫折のあと本格的な作家活動に入った彼が描こうとしたものは、自棄の余生でした。

太宰治の師である井伏鱒二が不登校大学生の彼に当てた手紙が、「晩年」の表紙の帯に残っています。

「・・・書くことに疲れないために毎日登校すること。登校することに疲れないため書き続けてゆくこと。この二つは息を吸ふことと息を吐き出すことの二つの行為にさも似たり。将来の大成を確信し、御自重、御勉學、しかるべしと存じ上げます」

しかし太宰治は、学生生活でも人生においても、師の忠告を守ることはできませんでした。彼は疎外と挫折を自覚し、そこに文化を見出そうとしていたかのようです。その自棄の文化は、師の忠告に反して、人が呼吸にすらいたたまれなくなる文化でした。そして淋しくて淋しくてたまらない文化でした。それゆえ彼の遺著「人間失格」のなんと人間臭いことでしょう。

さて、太宰治は、「晩年」中の「思ひ出」に、次のような、重要な述懐を残しています。

「私は、すべてに就いて満足し切れなかつたから、いつも空虚なあがきをしてゐた。私には十重二十重の假面がへばりついてゐたので、どれがどんなに悲しいのか、見極めをつけることができなかつたのである。そしてたうたう私は或るわびしいはけ口を見つけたのだ。創作であつた。」

彼の仮面の自覚は、仮面性を演じることを喜びはしませんでした。妥協を許さない誠実な自覚は、十重二十重の仮面を一つ一つ暴きにかかりました。しかしながら文化とは脱げない衣、剥がすことのできない仮面なのです。

彼は、ちょうど膝小僧の瘡蓋を剥がしては膿ませ剥がしては膿ませを繰り返す子供のように、自棄になって創作を続けるのでした。その作品は人間臭い喜劇性を持ち得ますが、その人生は悲劇的なのです。

太宰治は、どうすれば、井伏鱒二の忠告のような人生を送ることができたのでしょう。それは師の井伏鱒二のように自分にとって居心地の良い仮面を堂々と被り、それに磨きをかけることだったのではないでしょうか。

編集後記

三戸岡さんから永田俊一氏著『信託のすすめ』を送っていただいた。

早速拝読したが、近来稀に見る良書であると愚考したので紹介方々拙論を述べさせていただく。

昨今の金融世界ではリーマン・ショックに始まる証券化商品とか、ギリシャの財政状態に端を発したEUの負債危機回避問題等、金融商品にあるべき誠実さを裏打ちしている「信託の精神」の重要性がますます問われ、理解されなければならない現状にある。

先ず信託はヨーロッパで起こり、中世ゲルマン法では、相続人不在の場合、遺産は国王に帰属してしまうので、遺産をいったん第三者（ザルマン）に移した後、ザルマン指定の者（宗教団体、慈善事業）に土地を寄進する形をとり、これが発展してザルマンに譲渡した土地を直接教会等に寄付をせず、ザルマンが土地を管理して、その収益を教会が受け取るユースという仕組が普及するようになった。これがアメリカに移り、1912年、米国銀行協会信託部長に就任したフリースが「信託会社は他人のために行動するものではありません。信託会社は受益者のために行動するものです。信託会社は受益者のために奉仕し、提供したサービスに対して報酬を得るものであります」と述べ、この精神が実践指導された。これが百年前の明治人・大正人に影響を与え、我国に導入されることとなったのである。

本の末尾には三戸岡さんを含む20人の方々との対談が掲載され、様々な分野を代表する諸賢の信託に関する意見が述べられている。其の方々の考えは何れも、ご自身の見識が率直に述べられたものであり、編集子としては、そこに「まんじ」執筆者との共通性を感じる事ができ、深く共感することが出来たのである。（T・N）

まんじ第122号

平成23年11月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　中　山　喬　央（なかやま　たかひろ）
事務局長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）

（事務局）　〒223-0056　横浜市港北区新吉田東五丁目76-35　太田善朗方
TEL・FAX 045（544）5947
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　日東印刷株式会社
〒142-0054　東京都品川区西中延2-15-16

表紙の絵について
「豊饒の地は心の中にあり」　　田寺怜葦画